
グリーンオイルストーリー ～空の少年たち～

久川智子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グリーンオイルストーリー ～空の少年たち～

【Nコード】

N3748I

【作者名】

久川智子

【あらすじ】

グリーンオイルというエネルギー資源をもつ世界。

グリーンオイルをめぐる暗躍した欲望に翻弄された時代の流れのなかに、少年たちは希望や信念を育てて、空をゆく。

第一部 第一章～第十二章

レインとジリアンは、空艇に対するエネルギー補給と修理をするドックを営む兄・ロブや仲間たちと生活している。

少年たちはいつか自分たちだけで空を飛ぶ事を夢見て、技術を学び

訓練を受ける。

第二部 第十三章～第二十四章

レインとジリアンは、救命急助のスカイエンジェルフィッシュ号通称S A Fで技術士や航空士としてクルーとなり、希望や信念を育て、空をゆく。

第三部 第二十五章

クレアとS A Fを失いメンバーは離れ離れに。グリーンオイルをめぐる暗躍した欲望が少年たちに襲い掛かる。自分たちの身を守るべく、体制を整え、戦いの準備を始めていく。

<第三十六章黒い森>

相手を知らないばかりに情報を手に入れようと闇雲に突っ込んだ手。痛い思いをすることは覚悟の上。それぞれが思惑をかかえて、あともどりはできなくなった。なすがまま言われるがままで意思の無いレインに忍び寄る魔の手が闇から飛び出してくる……。

序章 グリーンオイルとスタンドフィールド

序章

グリーンオイルとは、燃焼させると水蒸気を出すエネルギー資源で、酸素と水素が排出されるので、公害にはならない代物。澄んだ水と太陽の光で繁殖し、水分を多く含む生きたバクテリア。

二酸化炭素を排出しないエネルギー資源を。

それは、喘息をもち足の不自由な妻がいた、生物学者のデ・ミスト博士の願いだっただ。

秀才と言われて、工学研究の学者になることを望まれた若き日、一人の女性と出会い、恋に落ちたことで生物学者に転向した。新たなエネルギー資源を求めて、バクテリアから開発しようとして、生物学を研究することにしたからだっただ。博士が、グリーンオイルを開発に成功したときには、妻は故人となっていた。妻に先立たれて、研究を断念しようとしたとき、夫婦をかげながら尊敬した隣人の娘が志を強く持つて勉学に励み博士の助手となり、博士を支えた。博士は、開発の成功をした後、その助手と結婚をして、家族を増やした。それは、グリーンオイルを不幸な事象に影響させないために、監視と責任を可能な限り永遠に請け負うために。

その世界には、コン・ラ・ジェンタ皇国という国があり、グリーンオイルという資源を大量に増やすことができる水、その水をはぐくむ山や森林を保有する自然豊かな国。しかし、エネルギー資源を大量に保有することで、他国からの摩擦や侵略、他民族により内乱が絶えず、国民は疲弊するとともに環境破壊をすることもしばしばあった。環境改善を指導する者が現れ、カリスマ的な存在でもって、国民を魅了し、救世主のように振る舞い産業革命・自給自足革命・

教育革命をし、国を国民の心を豊かにした。

そのことによつて、他国からの脅威にさらされず矜持きやうじをもち、他民族との和解ができるようになった。

その人物は、老齡には、野に隠れ、余生を静かに過ごしたことになる。本当のところ、どうなったのかは知られていない。国民はそう願つてやまないからだつた。

他民族との和解をしたものの、ある民族だけが和解の約束をまもろうとせず、テロ工作を図り、グリーンオイルが全滅寸前にまでにした。

そのとき、救世主の子孫ではないかと言われる人物が大量のグリーンオイルの生産を請け負ひ、国を救つた。

それが、アレックス・スタンドフィールドだつた。アレックス・スタンドフィールドは、大量のグリーンオイルを生産できるタンクを制作し、新鮮な水を確保し、太陽光を吸収できる施設を建設していた。

後にこの功績がたたえられて、時の皇帝から、最新式のエンジンを搭載した空挺・アレキサンドリア号が譲与された。

この物語は、そのアレックス・スタンドフィールドの子孫である少年たちのお話である。

第一章 スタンドフィールド・ドック 1 (前書き)

登場人物

レイン＝スタンドフィールド (主人公)

ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の弟)

ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)

カスター＝ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士)

第一章 スタンドフィールド・ドック 1

濃霧から、大きな音が響き渡る。

毎分数十万トンが約300Mの高さから落ちる音。

濃霧のおくには、崖に生い茂る木々があり、崖から突き出してるようにみえるエアプレーンがある。

さび付いたその機体の上に、少年が立っていた。両手を広げ、深呼吸している。

少年が上を見上げて、太陽の光が濃霧を切り開こうとしているさまをみつめていると、風が吹きつけ濃霧が岩肌にもかってかき消される。

目を閉じて、耳を澄ましていると、少年にしか聞こえない音を聞き取ったようだ。

少年は、後ろを向くと、機体の上を走った。エアプレーンは崖にくられた建物に固定されている。

少年は建物の中に消えていった。

10キロという川幅で膨大な水流を誇るヴェンディシオン川にあるヴィエントフレスコ滝。

分流するオホス川があつて、それを隔てたラズラルナ島がある。

生い茂る森につきの形をした岩山があり、滝つぼに突き出す崖もある。

崖の上には木々があり、飛びぬけて高い木が一本だけあつた。

その木の天辺には、小枝が傘のように生え、天辺から2Mくらいしたからは、枝が切り落とされていて梯子が取り付けられていた。

傘のような小枝の下には藤で出来たいすが取り付けられていて、先ほどとは別の少年が座っていて、岩山を背に、遠くを見ていた。

先ほどの濃霧は風に消え、空は晴れ渡っていて、地平線に多少の雲がかかっているぐらいになっていた。

少年の目が何かをとらえた様子で、いすから器用に降りて、階段を降り始めた。5、6M下に降りると階段がなくなり、周りの木々に埋もれる。

そこからは枝をつたって、降りていく。

地上5M付近に木々をつたや縄で作られた橋が木々の間を縫うようにずっと続いていて、少年は小走りで進んでいった。

木々を抜けて岩山に到達すると、建物があり、そのなかに少年は消えていった。

エアプレインの機体の上には少年は、暗がりの通路に鉄板でできた廊下を走りぬけ、明るい場所にでてきた。

そこは、直径20Mはあるタンクがあつて、吹き抜けの穴から太陽の光が差し込んでいた。

タンクの中身は、緑の液体が波を打っていた。

それはグリーンオイルという燃焼させると水蒸気を出すエネルギー資源で、酸素と水素が排出されるので、公害にはならない代物だ。

澄んだ水と太陽の光で繁殖し、水分を多く含む生きたバクテリア。

よどんだ水が混入すると異臭を吐き出し死滅する。死滅するときは固形物になって、周囲にへばりついてなかなかとれなくなる。

少年は、タンクに近づき、おいをかぐ。

それは青々とした草を刈り取ったときに出る青臭い匂い。その二オイで、品質の良いグリーンオイルだと確認する。

タンクの下の方に、目をやると、もうひとりの少年がそこにいた。

「ジル、どこにいたんだよ。操縦の練習時間だろう。」

「パラグアスの木にいた。霧が晴れないのに練習できないじゃないか。」

「霧が晴れる時間はわかっていたんだ。準備していれば、すぐにはじめられるだろう。」

タンク下の少年は、タンクに取り付けられたレバーの前でためいきをついた。

「レイニーは練習しないのに、準備する必要ないじゃないか。」
小声でばやいた。

通称レイニーことレイン・スタンドフィールドは13歳の栗毛で大きくて青い目をした少年で、通称ジルことジリアン・スタンドフィールドは11歳の金髪でえらの張ったあごに小さなどんぐり目をした少年である。

ジリアンのところからつながるタンクのホースが建物の壁をつたつて上に伸びていて、そばにある梯子をレインは上り始めた。ホースは建物なかに埋まっていき梯子の横にドアがあつて、レインはなかに入つていったが、ドアをあけたままにした。

ホースの先には、大きな留め金具がついていて、上が塩化ビニールでできたついたてのしたに取り付けられていた。
サイレンの音が鳴り響いた。

つきの形をした岩山に沿うように立てられた建物の天辺には、周囲を見渡せるガラス張りになった展望台のようなものがあつた。

なかには、男がいて、無線機片手に、話をしていた。

展望台のようなものしたには、いくつかの鉄筋が前面に左右そろつて突き出している。そこは工場のような場所。

その工場は、スタンドフィールドドックという空挺修理工場兼燃料補給場だ。

その工場に、金魚のような赤い空挺が近づいていた。

展望台にいている男は、金髪で目がきりりと少し釣りあがつた男前で、ところどころ緑色が薄汚れた作業着を着ていた。

男は、ロブ・スタンドフィールドという28歳という若さでこのスタンド・フィールド・ドックの長だ。

無線で、赤い空挺と交信をし、値段交渉しているようだ。

ついたての手前にレイニーがホースの金具に取り付けられたレバー

に手をかけると、ついたての向こう側に男が現れた。
カスター・ペドロという男で、セミロングの黒髪に黒ぶちめがねに
三白眼。

レイニーに目配せすると、ついたてから先に伸びる蛇腹のようなホ
ースの先を左脇にかかえて、デッキの方へ向かっていった。

赤い空挺がドックにドッキングすると、カスターが立っていた位置
にちょうど空挺の燃料口があった。

どうやら、この赤い空挺は常連さんのようだ。

蛇腹のホースを燃料口に取り付けると、カスターは右手を上げた。

レインはレバーをまわして固定し、外れてないか確認すると、右手
を挙げた。

レインの右手が上がったのを確認すると、ジリアンはタンクのレバ
ーを体重をかけて下におろした。

大きなホースにグリーンオイルが注ぎ込まれて、波を打つ。ついた
てを通り抜けると、蛇腹で上下にはねた。

タンクレバーの横にデジタルで吐出量が表示されるのをジリアンは
確認していた。

赤い空挺から、タラップがあり、中から、起き上がりこぼしの人形
のような赤いつなぎをきた女が降りてきた。

女がドックのデッキに進み、歩き始めると、体全体が左右に揺れる
と、デッキは上下に揺れていた。

電動昇降棒でロブが降りてきた。

「ハンサム坊や、わたしに挨拶のキスをしにきてくれたのかしら。」
女はロブに向かって両手を広げた。

「相変わらず、ガキ扱いか、レディ・ロマーノ」

「顔に傷をつくったぐらいで、オトコをあげたつもりなの？」

女は、モナ・ロマーノという3人の部下を従えた郵便船の船長であ
る。

デッキに下りたロブは後ろ手にカスターを呼び寄せた。

首をかしげてカスターが近づくと、ロブはカスターの左腕を握って引っぱり、前に突き出した。

「あゝら、わたしはロブがタイプなのよ。でも、黒髪の坊やもいい感じ。」

カスターは突き出された勢いでモナの胸元に顔をうずめてしまうと、モナはカスターを抱きしめた。

「うぐう、うぐう」

モナがカスターを離すと、ロブは、赤い空挺の機体に近づいた。

「ずいぶんと、機体に傷がいつてるじゃないか。」

「黒衣の民族カラスにやられたわ。郵便船ってわかってても人質にしようと捕縛するのよ。見境が無いわ。」

「そっちも相変わらずか。」

「命あってのお仕事。わたし、引退して若いツバメでもはべらせて暮らそうかしら。」

「引退して余生を楽しむにはまだ、早いんじゃないのか。」

「あら、そうね、ロブにこのもちもち肌を愛撫してもらってから引退しなくちゃね。」

モナは芋虫のようなむくんだ手を胸の谷間がみえるまで開けた首元においた。

ロブとカスターはふたりして、嘔吐するしぐさをしてみせた。

「あら、ご挨拶ね。」

モナはふっくれつらをする、タラップにのり、機体に戻ろうとした。

振り返って言った。

「うでの良い板金工と塗装工がいたわよね。修理もお願いしていいかしら。」

「早急にやらせてもらいますよ。レディ・ロマーノ」

「あせらなくてもいいわよ。奇襲を受けて修理をしているって局には連絡するから。」

そういうと、モナは中に消えていった。

ロブは、一部始終をビニール越しのついたてでみていたレインにむかって、手首を折り曲げて振ってみせた。

レインは、外のドア越しにいつて、下を除いた。

「ジル」

ジルが顔を上げるのを確認すると、手首を折り曲げて振って見せた。

ジルは、レバーをおろし、吐出量を確認して、伝票に書き込んだ。それをもって階段をあがりはじめた。

ロブはまた、電動昇降棒にのぼった。

「キヤス、デイゴとジェイにデッキへ来てもらってくれ。」

「アイアイサー」

カスターは敬礼をすると、ホースの取り外しを行い、締めなおして、ついたての奥にいった。

机があり、マイクがあつて、スイッチを押した。

「業務連絡、業務連絡。パテとメイクの注文がはりました〜ん。」

第一章 スタンドフィールド・ドック 1 (後書き)

BGM:「FLIGHT」はじめての飛行

第一章 スタンドフィールド・ドック 2 (前書き)

登場人物

レイン＝スタンドフィールド (主人公)

ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の弟)

ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)

カスター＝ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士)

ラゴネ＝コンチネータ (レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者)

デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)

ジェイ (スタンドフィールド・ドックのクルーで塗装工)

テス (スタンドフィールド・ドックのクルーで溶接工)

モナ＝ロマーノ (郵便船の船長)

第一章 スタンドフィールド・ドック 2

ドックには、食堂があつて、そこに汚れた作業着をきた、マッチョな男やら、ビン底めがねをした痩身な男やら、たくさんの男たちがたまつていて、食事をしたり、本を読んだりして休憩するものがあった。

業務連絡のアナウンスが響いて、ストレッチをしていた屈強な男が食堂から出て行った。

道具がいっぱい置かれた部屋にその男が入ると、塗料缶を抱えて部屋の窓から外をのぞく男がいた。

作業着の上に分厚いいろんな色がまじったエプロンをしていた。

「ジェイ、なにが来ている。」

「伝書鳩が来てる。派手にやられてるな。カラスにやられたかな。」

「出目金の伝書鳩か、だったら、どんくさいから、目をつけられたんだろう。逃げ切れたってことは、腕は確かだったことか。」

「デイゴ、俺たちに仕事があるのは、ロボの甘いマスクのおかげなんじゃないのか。」

「あいつは色目使える性質たちじゃない。あいつの外見で餌がつれるなんて、ロクなもんじゃないだろう。」

ジェイは、色を調合していて、空缶に色をいれて、棒で混ぜていた。デイゴは、作業着に着替えてて、分厚い手袋はめていた。

自分の腕の太さぐらいのハンマーと鉄の棒をもつと部屋を出て行った。

ドックの展望台に、ロボが電動昇降棒からあがってくると、シリアンが伝票を持ってあらわれた。

「ジル、お前、練習サボっただろう。」

「濃霧で練習できないと思つたからだよ。レイニーが操縦したがっているんだから、レイニーが練習すればいいんだよ。」

「何度も、言っただろ。お前に度胸があつて、レインには度胸が無い。弱虫にアクロバット飛行は向かないんだ。」

「ジリアンは11歳で操縦するには体力が追いついていなかった。ジリアン自身は、練習するのも嫌いなら、体を鍛えるために運動するのも嫌いな少年だった。」

息を切らせたカスターが現れた。

「レイニーが練習すれば、度胸だつてつくようになるだろう。」

「一瞬の判断間違いが命取りになる。軽量飛行を目的とするアクロバット飛行は一人乗りと決まっている。空を飛ぶだけを楽しむために二人乗りのアクロバット飛行なんてないんだよ。」

「ここでのアクロバット飛行には一人乗りと二人乗りがあるが、二人乗りとは一人が操縦席から離れ、機体に体を固定させて作業をする危険な状態で、その必要性は飛行したままの空挺修理や人命救助などがある。」

「アレキサンドリアを飛行させれば、黒衣の民族カラスに付きまとわれるのは必須。アクロバット飛行のエアプレーンを配備するのは条件だ。」

「ロブ、まだ、あきらめてないのか。アクロバット飛行の操縦をジルにやらせて、攻撃要員はだれがするんだよ。」

「俺がするさ。」

「アレキサンドリアが撃沈された時、顔に傷つくつて、体をぼろぼろしたつて言う話じゃないか。今度は命落とすぞ。」

「死んでもおかしくなったが、幼い二人だけ残すわけに行かなかった。俺が生かされたことはこいつらを一人前にすることだろう。」

「お前が生かされたのは、遣り残したことがあるからだろ。」

「白髪の老人がレインとともにあらわれた。」

「チビたちを一人前にすることだけじゃないさ。」

老人は、ラゴネ・コンチネータというロブたちにとって、叔父にあたるが、ドックではグリーンオイルの生産責任者である。

「じいさま、僕たちをチビっていうの、やめようよ。」

レインは拗ねて言うと、片手に持っていたビンをカスターに渡した。
「じいさま、いつもありがとう。愛してますよん。」
カスターは、持った瓶にほおずりした。

「ロブ、お前さんが13歳のときには、アクロバット飛行の試合勝
利者の常連だった。ジリアンにあってレインに才能がないわけはな
かるう。試してやってくれないか。」

「ラゴネ、レインに泣きつかれたのか。」

「泣きついてなんかないよ、兄さん。」

ロブは右手の人差し指でレインの顔を指した。

「こいつは、度胸なし、根性なし、弱虫で泣き虫のヘタレなんだ。

乗せて下手に死なれたら、親父に顔向けできないんだよ。」

レインは目を見開いて、唇をかんだ。

「ロブ、顔向けできないのは、親父さんじゃないだろう。」

ロブは、それ以上何もいえなくなつて、カスターが持っていた瓶を
取り上げて、展望台から出て行つた。

「ロブ、逃げるのか。返事はなしか。」

続けざまにラゴネがロブに言葉をなげた。

「返事はノーだ。レインは整備士と航空士の技術を身につけさせる。」

ロブは床を強く踏みつけて、音が鳴り響くように、その場から立ち
去つた。

「ああ、僕のナイトキャップ。じいさまが作ってくれたものしか、
飲めないのに。」

カスターは親指を口で噛むと、レインの顔をみた。

涙をこらえてるレインだったが、大きな目から大粒がこぼれ落ちた。
カスターはレインを抱き寄せた。

「ロブの屈折した愛情表現なのよ。理解してあげて。」

カスターは時々、女言葉を使う。

それは、母親代わりのののために使っていた。

カスターの抱きしめから離れようと両手で押さえつけるが、カスター

「はレインを離そうとしなかった。
あきらめたレインは、カスターの胸にうずくまって、泣きじゃくっ
た。」

ラゴネはやれやれと思いつながら、展望台を出て行くとした。

「キヤス、地下水のレバー開けておいてくれないか。第三タンクを
空にした。培養にはいるよ。」

「ラジャー」

まだ、他に言おうとしたそぶりを見せて、ラゴネは出て行った。

ジルは、展望台のフロントから、外を眺めていた。

「さっきまで晴天だったのに、曇ってきたよ。やっぱり雨が降るの
かな。」

レインが泣くのをやめた。

「おいおい、こらこら、ジル。」

カスターはジルが何をいいたいのかわかっていた。

レインは、カスターに抱きしめられながら、幼いころの記憶を思い
出そうとした。

第一章 スタンドフィールド・ドック 2 (後書き)

元氣ロケッツ、メレンゲなど、聴きながら、書いてます。

第一章 スタンドフィールド・ドック 3

郵便船があるデッキでは、溶接をする男がいた。

デイゴが現れると、作業をいったん止めて、片手をあげて挨拶をした。

「テスの出番ありとは、派手にやられたな。」

「底もやられてるよ。積乱雲を押し付けられて、下からの奇襲攻撃を受けたんじゃないか。焦げ目の線が走ってる。」

「雷か。下から現れて横ぎられる際、アクロバット飛行の攻撃でやられたのか。」

「チエーンソーでやられてるよ。こりゃ、脅しだな。派手に傷つけるのが目的みたいだ。」

「チエーンソーなら、タンクをやったら仕舞いだな。落とさなかったのは、見せしめか。」

溶接工のテスは、作業を再開し、デイゴは作業場で道具を取り出し始めた。

テスが、チエーンソーで引き裂かれたところを部分的に溶接で取り外すと、それをもって、溶鉱炉に入れた。

ロブがデッキにあらわれると、デイゴは外をながめた。

「おやおや、雨が降りそうだな。また、やらかしたのか。」
ロブは眉をひそめた。

「スタンドフィールド・ドックは国家認定修理工場だって、知ってたか。デイゴ」

「そんなお堅いところだって、知らなかったな。闇の運び屋をしていたお前がいるんだが。」

「余計な情報は漏らすなよ。」

そういうと、ロブは手にしていたピンを台の上に置いた。

「ここは、黒衣の民族^{カラス}の領空飛行禁止区域だぜ。やりあったぐらいで脅されたら、たままないな。」

テスが溶接を始めようとしたら、機体が揺れた。
中から、モナがあらわれた。

「指定居住区に不満があるのよ。あそこには豊富な水が流れてこないからね。」

手にしていた紙袋をロボにむかって放り投げた。

「見張り役が転寝うたたねして、接近されているのを見落としたのよ。それは隠し財産を没収したの。」

ロボが紙袋の中身を見ると、燻製の魚とチーズが入っていた。

「あてがあると、やる気もでるな、デイゴ」

「荷物を整理したら、速達便が多数合ったわ。前言撤回で、明日の朝までに頼むわ。」

「ハイハイ。やらせてもらいますよ。」

デイゴは溶鉱炉から真つ赤になった鉄板を出すと、めくれた場所をめぐらしてハンマーを打ちはじめた。

「ロボ、弟を泣かせるのは卒業したんじゃないの。塗装の濁きが悪くなるじゃない。」

「レディ・ロマーノ、ごもつとも。ご執心のロボから、レインに鞍替えしますか。」

「ジェイ、仕上げはきれいにしようだね。レインはまだ幼いし、女の子みたいだからちょっとね。」

「時期にロボみたいな男になりますよ。」

「肌もきれい過ぎるのよ、あの子。ワイルドな感じなのがタイプなの。」

モナがロボにウィンクすると、ロボは逃げるようにデッキから去っていった。

たたみかけるように、モナが言った。

「ほら、雨が降ったきたわ。泣き虫レインちゃんが泣いているのね。」

食堂の台所には、デイゴの妻・ジゼルが忙しく料理をしていた。

そのそばで、ジリアンは洗いものの手伝いをしに台所にあらわれた。

「雨がふってきたみたいね。レイニーはどうしているの。」

「降ってきたら、いつものところだよ。キャスが慰めてたけどね。」
スタンドフィールド・ドックには、女性がほとんどいない。

ジゼルはデイゴの幼馴染で幼い息子がひとりいている。

食堂のきりもりはジゼル一人ではできないので、レイン、ジリアン、カスターがいつも手伝っていた。

カスターが食堂にあらわれると、ジゼルは料理がのったプレートを差し出した。

「お昼がまだだったみたいね。」

「ああ、ありがとう、ジゼル。」

「レイニーは、トレーニング室へ？」

「ああ、いつものことだから、気が済んだら、プロテインをもらいにくるだろう。」

「どうして、いつもあなのかしら。」

「できの悪い子ほど、かわいいんじゃないのかな。」

「レインが小さいころは、ほんと、犬のように舐めるようにしてかわいがっていたのに。」

「うんぐ。あはは。それ、ほんとなの？ジゼル」

「ええ、そうよ。一歩あるいただけで、うれしがっちゃって。ほっぺを舐めてたんだから。」

「だからかなあ。デイゴさ。」

「デイゴがどうしたの。」

「僕がロボに連れられて、はじめてスタンドフィールド・ドック（ここ）にきたとき。」

「ああ、お墓参りにいったらって話ね。クス」

「デイゴが言ったのさ。『犬でも拾ってきたか。』」

「うっふふふ。だって、ロボが笑顔で帰ってきたんだから。なにかいいものを見つけたって感じだったわ。」

「僕が いいものだなんて、そっちの趣味ないし。」

「そりゃそうね。いい遊び相手が出来たってそんな感じよ。」

「ま、確かに、面白い奴だなんてのは散々言われたけどね。・・・」

犬ね、レイニーをなめるようにかわいがるか。」

「目をまるくして、そりゃもう、かわいかったんだから。ほんと、子犬みたいね。」

「そんな子犬がいま、猟犬にでもなろうとして、必死に筋トレしてるよ。」

「ジル、あなたも鍛えたほうがいいんじゃないの。レイニーには体力で負けちゃうわよ。」

「いいんだ。僕は、ココではまけないから。」

ジルは自分の頭に指をさした。

「ジルは、口で負かすタイプだもんな。」

「女の子みみたいな顔で体鍛えちゃったら、なんだかバランス悪くなりそうね。」

「兄さんになじられて、泣いているうちは、女の子みみたいな顔から変わることはないよ。」

「言うわね、ジル。」

「僕は、レイニーに体力で負けても、泣いたりしないよ。悔しくなんかないもの。」

「フレッドもそう言ってたわ。ロブに負けても悔しくないって。」

「フレッドって、ロブのお兄さんで、長兄だったっけ。」

「そう。ゴメスのおじさんに、フレッド、ジリアン。ほんと3人は家族ってすぐわかる、すごく似てるもの。」

「似てるって、よく言われるけど、あまりうれしくない。」

「そうねえ、口の悪いところは、ロブに似ているけど、沈着冷静なのは、フレッドに似てる。頑固なところは似てなくて良かったわよ。」

「頑固なところは、レイニーが似てるんじゃないの。」

「フレッドが生きていてくれたら、ロブも無茶なことしたりぶっきらぼうになったりしないのに。」

ジゼルは、料理の作業の手を止めて、みつめていた。
「どうして、あんなふうになっちゃったかな。」

スタンドフィールド・ドックの崖のしたには、雑草の生えた滑走路があった。

崖の下に穴があり、滑走路は、そこへのびていた。

穴の置くには、格納庫があり、使われていないその倉庫には、空挺の残骸があった。

そこに、ひとりの男が立っていた。ロブだった。

ロブは、空挺の錆びれた機体に手をやり、愛しそうに撫でると、額を機体にたたきつけた。

第二章 レインとジリアン 1 (前書き)

登場人物

レイン＝スタンドフィールド (主人公)

ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の弟)

ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)

カスター＝ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士)

コリン (レインのクラスメイト)

プラーナ (ジリアンのクラスメイト)

第二章 レインとジリアン 1

太陽が二重に見えて、まぶしいくらい、近い。

目を細めて眺めていた幼いレインは、興奮していて、誰かの腕を小さな手で握り締めた。

その腕は筋肉質だったが、白くて艶やかですべすべしていた。

レインと同じ栗色の長い髪がその腕に絡みついていた。

幼いレインは誰かの膝の上に座っていた。

その誰かの顔を見ようと顔を上に向けると、一変した。

強烈な光とともに、バリバリバリッと雷鳴が轟く。

幼いレインは泣き叫ぶことしかできなかった。

ふたりが乗っている機体は激しくゆれ、今にも引き裂かれそうにきしんでいた。

誰かは、幼いレインを力強く片手で抱きしめながら、もう片方で縦のハンドルを握りしめていた。

場面は変わる。ドックのデッキだった。

鳴り止まない雷鳴とともに、幼いレインは誰かにしがみついていた。それは先ほどの誰かではない。

「こわいよ、こわいよ。」

雷光で、先ほど乗っていたであろう機体の姿がみえた。

黒い機体に、黒と黄色のクマンバチをセクシーな女性の擬人化したマーキングが見えた。

見えたと同時にロボの怒号が聞こえた。

「忘れる！忘れるんだ！忘れたほうがいいんだ！」

レインが目を覚まして、起き上がると、そこはベッドの上。

上半身を起こして、しばらく、下を向いて、思いをはせていた。

右を向くと、壁にいくつかの写真が貼られていた。

そのうちのひとつに、幼いレインを後ろから抱きしめるようにして

いる女性がレインと同じ栗色の髪をしている。
肌の色は、白いとはいえないし、腕や顔にいくつかの皺をみつけることができる。

一緒に、幼いジリアンとジリアンを抱きかかえる女性が写っていた。その女性は金髪の巻き毛に眼鏡をし、ふっくらとした顔はやわやかさそうで、優しい人柄がにじみでていそうな感じだった。

いつも見る夢のなかの女性は、この二人ではないことをレインは知っているが、誰なのかは知らなかった。
知らなかったというより、思い出せなかった。

レインのそばにいてる女性は、マーサでレインとジリアンの母親。
3年前に病気で亡くなっている。

ジリアンを抱きかかえている女性は、セシリアという女性だが、マーサが亡くなった後、ドックを去っていた。

レインが身支度をしていると、ジリアンがノックをした。

「レイニー、朝ごはん食べてる時間ないよ。大丈夫？」

「今すぐ、出るよ。朝ごはんは途中で食べる。」

ベッドの下に机、ユニットタイプ。部屋は狭く、楕円形の窓があるだけ。

それはまるで船の個室のようだった。

食堂を二人がかけぬけると、エプロンをつけて、朝食の用意をするキャスが二人をみつけて声をかけた。

「だめだめだめだよ。ちゃんと朝食たべてちょうだい。」

ジリアンが食堂のキッチンに入り、袋を手に、朝食と思われるサンドイッチを詰め合わせる。

レインは、ジューサーを手に取ると、ジュースをボトルに入れる。手っ取り早く二人は朝食をつめると、キャスは二人に抱きついた。

「ママに、朝の挨拶してくれないのかしら。」

「気持ち悪いから、やめてくれよ、キャス。」

そついいながらキャスにほつぺを寄せるレインと、何事にも動じないでやってのけるジリアンだった。

「行って来ます。」

そついつて、二人は元気よく、食堂を出て行った。

スタンドフィールド・ドックの第一デッキに、リュックを背負うレインとジリアンがあらわれると、二人はそこに置かれたパラグライダーを左右からつかんだ。

パラグライダーの取っ手を掴み、デッキを走りこみ、デッキの先端で勢いよくけて、飛び込んだ。

岩山の上部から、パラグライダーでヴィエントフレスコ滝壺の脇まで降り立つ。

そこから、地下部にある建物からジリアンはエアバイクを出してきた。

ジリアンがバイクを出す間に、レインは朝食を食べてしまい、エアバイクを運転する。

後ろにのったジリアンが、バイクの移動の間に朝食を食べる。

ヴェンディシオン川から分流するオホス川の水面を渡る。

彼らが向かっているのは、週3日に通う学校。

ヴィエントフレスコ滝の反対側がリゾート地で都市部ではあるものの、レインたちが住む居住区は農業と工業地帯が広がっていて、自営業をする世帯が多い。

家業を手伝う子供たちが多くいるため、週3日の登校ということだが、高校や大学に進学を希望するものは、初等科から全寮制の学校に行くのが一般的だった。

学校に到着すると、エアバイクを指定の場所に止めて、ジリアンは初等科へ、レインは中等科の棟へ向かう。

レインが棟の入り口を抜けると、後ろから抱きつく少年がいた。

「レインちゃん、おはよう。今日もなんだかきれいだね。」

「やめろって、コリン。僕は女の子じゃないんだから。」
「俺にとっては、女の子だよ。こんな白いむっちりした肌しちやっ
て。」

赤い髪色のそばかすだらけのクラスメイトコリンは、レインをから
かうより、密着することによって、自分の欲求不満を解消している
かのようで、それはレインもわかってはいてたが、嫌でしょうがな
かった。

彼らは自分のロッカーに荷物を置き、教科書を取り出した。

「相変わらず、ラブラブカップルなのね。お暑いですこと。」

二人のそばを通ったのは、クラスメイトの女の子たち。

初等科の時は、レインをお人形さんのように扱って、べたべたして
いた彼女たちだが、中等科になる際、コリンがべたべたするように
なったので、彼女たちはレインに近づけなくなっていた。

やきもちを焼いているのは、レインにもわかっていたが、女の子た
ちにおもちやにされるより、コリンにおもちやにされるほうがまし
だと今は理解していた。

授業が早く始まってほしいといつも願うレイン。休憩時間はコリン
にべたべたされるがままになっていた。

昼食時間が終わると、ダッシュして逃げ出す。コリンに追いつかれ
ないようにして、向かった先は、図書館だった。

ジリアンは、初等科で優等生だった。担当教師には、全寮制の学校
へ進学したほうがよいと薦められていた。

ジリアンには、目的がなかった。スタンドフィールド・ドックで航
海士になることが当たり前のように思われているのに嫌気をさして
いてはいるが、他に何がしたいのかはわからなかった。

ただ、反発するだけでは意味が無いことを、ロブとレインのやり取
りで理解していたが、言われるがままにおとなしく用意された器に
収まるつもりもなかった。

そんな彼に同情する女の子がいて、図書館でジリアンとふたり机に

すわり向かい合っていて、なにかにつけて、お互いの不平不満を話し合っていた。

そんなところに、レインがあらわれたが、ジリアンがいているのをきづかず、本棚にむかっていた。

ジリアンはレインが通り過ぎるのをみていた。

「ジル、どうかしたの？」

「いや、なんでもないよ。それより、プラーナは中等科で全寮制の学校に進学するんだろう。」

「初等科から進学している子達ばかりの学校しかないのよ。そんなところへいってもいじめられるだけだもの。」

「プラーナには、やりたいことがあるだろう。生物学の研究がしたいっていう。」

「ジルも全寮制の学校に進学するっていうのなら、行きたいわ。いえ、そうでないよ、わたしの勉強は進まないわ。」

「僕は全寮制なんて、いけないよ。プラーナなら、大丈夫。理系が得意なんだから、中等科から、専制で勉強すればいいじゃないか。」

「ジルがいないなんて、つまんない。全寮制って、ドックから離れちゃえばいいのに。思う存分、理系の勉強ができて、将来は博士になれるとおもっただけだな、ジルなら。」

「博士になるなんて、ドックにいてるのと一緒だよ。研究室にとじこもったままでさ。空が飛べるだけ、ドックのほうがましかな。」
ふたりは机のうえで顔を近づけてひそひそと会話をしていた。

レインは、ある本棚をみつけると、立ち止まり、隅から、目当てのものを探し始めた。

見つけて取り出した本をその場でぱらぱらとめくり始めた。

目に留まったページには、黒い機体の小型機。

ホーネットクルーという、皇帝専属偵察機部隊。

国の第一研究機関で仕上げられた小型機を導入する部隊で、最新鋭の機体が操縦できるところである。

しかしながら、この部隊は、5年前に解散になっていた。

第二章 レインとジリアン 1 (後書き)

BGM:「二つの雨」メレンゲ

第二章 レインとジリアン 2

授業を終えると、レインは駐車場でエアバイクのタンクに水を注いでいた。

相変わらず、コリンにはへばりつかれていた。

燃料用のタンクと培養用のタンクがあつて、培養用のタンクに水を注ぎ、グリーンオイルの増量をはかる。

空を見上げて、曇っている様子を見ていた。

「太陽光が足りないのかなあ。」

「レイニー、このまま、どこかへ遊びに行かないか。俺の家に来るとかさ。」

「いやだ。」

「即答か。」

「ジルをおいていくつもりはないよ。」

「ジルが一緒なら、いいわけ？」

レインはジルがコリンを嫌っていることを知っていた。

露骨にジルを邪魔者扱いするからだった。

「コリン、いいわけないだろう。コリンはジルに冷たいじゃないか、一緒に行かないよ。」

「だよなあ。」

コリンは時計をみて、思い出したかのように、用事があると言つて去つていった。

レインはコリンからようやく開放されたと同時に、手をとめて、地面に座りこんだ。

座ると尻のポケットに硬いものを感じ、ポケットからそれを取り出した。

方位磁針だった。

それを手にとって、思い出していた。

スタンドフィールド・ドックの岩山の頂上に、レインとジリアンのまんなかにもロブがいて、三人は夜空を見上げながら寝そべっていた。「あれが北極星だ。北はあれを目印に。太陽が昇る方向が西で、夜なら月もそつだ。」

指をさしながら、方位を知る術を教えてくれた。

星座の話などは、物語を聞かせてくれて、覚えやすくしてくれた。

「地上でも空でも道に迷ったら、方角を確認するんだ。」

夜空にキラキラと輝く星たちに、目を輝かせてみていたレインとジリアンはこころを奪われていた。

両手で二人の肩を抱き寄せたロブは、この二人がいつれ家族をもつようになってもこうやって自分たちの子供たちに教え伝えていく姿を思い描いていた。

3人は、夜空を見上げて、思い描く未来を重ねてみていた。

ジリアンは、校庭のまんなかでうつぶせに寝そべっていて、ラジオを聴きながら、手元の紙に書き込んで空を見ていた。ラジオから流れているのは気象情報だった。

紙に天気図を書き込み、空の具合をみて確認していた。

校庭に風が強く吹きこむと、足元においてたリュックが転がり始めた。

チャックが開いていたので、中から皮手袋がでてきた。

ジリアンは天気図を飛ばされないうつつかんで、皮手袋をつかんだ。それは、フレッドの遺品だった。

ロブがジゼルに頼んで、ジリアンの手の大きさに作り直してもらったものだ。

ジリアンはそれを手にとって、思い出していた。

スタンドフィールド・ドックの岩山の頂上に、レインとジリアンを膝の上に乗せて、空にある雲を指差しながら話をするフレッド。

「雲粒ひとつひとつに働く力や下にむかっていく気流による力と、

雲粒ひとつひとつを支える上にむかつていく流による力がつりあうことで、雲は空に浮かぶんだ。」
積雲や積乱雲が形成されること、大気が安定しているときに層雲や高層雲などが均一に広がることなど、あらゆる雲の形のときがどういう常態かを話していた。

二人は操縦桿を握り、空を飛び、雲を突き抜けるさまを想像していた。

大きな体でふたりを包み込むように抱きしめるフレッド。

どんな冷たい風が吹きつきようとも、二人は寒く感じることはない
とさえ思えた。

われに返ったジリアンは皮手袋を握り締めて、もうフレッドに抱き
しめられることがないと思った。

校庭にクラクションが鳴り響いた。

レインがジリアンを呼んでいたのだ。

レインが運転をして、ジリアンが後ろに乗って、エアバイクは走り
出し、学校を後にした。

街中を抜けると、しばらく、砂埃の道が続く。

オホス川の手前には川沿いの町並みが広がる。

その道に入ると、レインはバックミラーに物陰から人が出てて合図
をする姿が目に入った。

レインが前をみると、両側に二人ずつ、十代後半の男たちが立って
いるのが見えた。

その男たちは、そろって道に出てきて、レインたちのエアバイクの
前に立ちはだかった。

第二章 レインとジリアン 2 (後書き)

BGM: 「星の屑」メレンゲ

第二章 レインとジリアン 3

レインは止まるわけには行かないと思い、ハンドルを切って右に行こうとしたが、男たちの一人がジリアンに飛びつき、ジリアンはエアバイクから振り落とされた。

レインは、右に行かず、Uターンした。

振り落とされたジリアンは、飛びついてきた男を振り払い、起き上がって川沿いとは反対側に走り出した。

飛びついた男ともうひとり、ジリアンの後を追った。

ジリアンは細い路地へ行き、路地を抜けところで右に隠れてリュックを手にもち、追っかけてきた男の足めがけて振り回した。

ひとりは、足元から崩れ倒れ、もうひとりがその男に重なるように倒れた。

ジリアンはその男の背中に乗り、立ち上がれないようにジャンプを繰り返して、元来た場所へと走りだした。

レインは、Uターンをしたと同時にハンドルの下のボタンを押し、左足を後ろに踏ん張り、右足を前に折り曲げしゃがむ姿勢をとる。

エアバイクの底の前半部分からジェット蒸気が出ると、バイクは前のめりになり、レインは、男たち二人ほどに向かった。

男たちはバイクになぎ倒された。

起き上がるうとするところへ、エアバイクが回転し、後ろの部分が顔面に殴打し、男たちは気を失った。

さきに、物陰から出てきて合図を送っていた男があらわれて、レインに飛びついた。

そして、エアバイクは右に倒れこみ、二人とも、同時に地面に体をたたきつけた。

レインはハンドルから手を離すことが出来なかったため、右腕を強く打し、うめき声を上げた。

レインに飛びついた男は地面にたたきつけられて手を離したため、

転がっていったが、その場所にはジリアンがいた。

ジリアンは転がってきた男の顔面めがけてリュックを振り下ろした。

ジリアンは、襲ってきた男たちが動けないことを確認した後、バイクをおこし、ハンドルを握ってエンジンをかけ、レインは右腕をかばいながら、バイクの後ろに乗った。

二人は、川沿いに向かって走りだした。

男たちは追いかけてこない。

川のそばに來ると、川の流れば速い。

川の流れにハンドルをとられないようにしないと、横転して川に落ちてしまう。

ジリアンには力がなく、レインは右腕が利かない。

ジリアンが悩んでいると、レインは「代わろう。」とジリアンの右肩を握った。

「大丈夫なの？腕痛めたんでしょ。」

「両足で踏ん張れば、左腕だけでもハンドルをとられないでいけるよ。」

ジリアンはしびしび交代したが、レインの右腕はハンドルが握れなかった。

川沿い間際になると、ハンドルの下のボタンを押し、エアバイクの底からジェット蒸気が噴射し、川面に乗り上げる。

レインは立ち上がって両足を前後に踏ん張り、ジリアンはレインの背中にしがみついた。

左手でハンドルをとられないようにして、レインは歯を食いしばった。

荒い波がエアバイクを襲うと、レインはボタン操作で底からジェット蒸気を出し、バイクを回転させて横転しないようにした。

なんとか、オホス川を渡りきったが、勢いで、地面に滑り込み横転した。

そのとき、レインはハンドルを放したので、ふたりはバイクからほ

うりだされた。

二人は受身をとったので怪我はしなかったが、レインは痛めた腕をさらに地面に打ちつけた様子に叫び声をあげた。

「うああ。」

ジリアンは泣きながら、起き上がって、バイクを起こし、レインを抱きかかえるようにして、乗せて、ハンドルを握ってバイクを走らせた。

「うっ、うっ、うっ。」

「くう〜う。」

レインは痛みを堪えるのに必死だった。

ジリアンは泣きながら、ハンドルを握り締め、自分を見失っていた。

二人はドックの崖の下入り口にたどりつき、バイクとレインを置いて、ジリアンは中に向かって走りだした。

「キャス！キャス！」

走りながら、叫んだ。

ジリアンがたどり着いたのは、住居スペースで、吹き抜けになった場所だった。

「キャス！キャス！どこにいるのぉ！」

ジリアンは泣き叫ぶと、その声は反響した。

何事かと、カスターは食堂から、飛び出し、吹き抜けのフロアに出た。

カスターの姿を目にしたジリアンは、後ろを指差した。

「レインが、レインが大変なことに」

カスターは、いつになく取り乱したジリアンをみて、ただ事ではないことを感じた。

ジリアンの叫び声を聞きつけたロブは地下の作業場からあがってきた。

レインがジリアンを心配して、駆け足でその場所にやってきた。

「キヤス、テントウムシを出してくれ。レインをタイデイン診療所に連れて行く。」

「わかった。で、レインはこのままか。」

ロブはジリアンの顔を自分の胸にうずくませると、振り返って、ジゼルに言った。

「ジゼル、すまない。レインの右腕をなにかで固定してやってくれないか。」

「わかったわ、ロブ。レイン、いらっしやい。」

ジゼルはレインを手招きして、食堂へ連れて行った。

過呼吸が止まったジリアンだったが、泣くのは止まらなかった。

ジリアンには、精神的ダメージをうけたトラウマがあったのだった。

第二章 レインとジリアン 3 (後書き)

BGM:「アフターダーク」ASIAN KUNG-FU
GENERATION

第二章 レインとジリアン 4

ロブは、ジリアンの両肩を強く握って自分から引き離れた。

「ジリアン、俺の目を見るんだ。何があつたか、話せるか。」
泣き止んだジリアンは、深くうなづいた。

冷静になったジリアンはつぶさに詳細を話した。

ロブは内容の把握をした。

ジリアンの話を聴いたのはロブだけでなかった。

ジリアンの泣き叫ぶ声でドックのクルーたちが何事かと数人集まっていた。

「つまり、あれだな。最近、あつちのリゾート地で騙されて働かされてる連中がそこを抜け出して、こつちの方で窃盗を働いている話を耳にしたが、そういう連中が襲つたつていうわけだな。」

「こつちでの顔見知り、レインたちを狙つたりしないからな。」

「ドックの連中が黙ってないつていうのはわかってるからな。」

「自警団がもめてて、見回りができてないつて話は本当だったんだな。」

口々に言いたいことを話す連中を背中越しに、ロブはジリアンに言った。

「ジリアン、お前に怪我ないよな。」

「うん、大丈夫。」

ジリアンから両手を離し、腕組みをしてロブはジリアンを見下ろして言った。

「流れの早い川を渡れないのは、体を鍛えていないからだ。ジリアン。」

ジリアンは深くうなづいた。

「常日頃から、練習してたら、体を鍛えないといけないつて理解できるだろつて思つてた。」

ロブはジリアンの頭の上に右手を載せた。

「ジリアン、これからは練習をサボるな。体も鍛えるんだ。」
「うん」

「なにも俺は、お前たちに強制とかさせるつもりはないんだ。ジリアンにできること、レインにできることを、その力を伸ばし、お互いを助け合って、このドックを守れる人間になってほしいだけなんだ。」

「わかってるよ、兄さん。」

「レインは遊び半分で作ってるみたいだが、お前を守ることができたことは体を鍛えてきた効果が出ている。」

カスターが吹き抜けのフロアにできて、叫んだ。

「ロブ、テントウムシの用意が出来たよ。第二デッキだ。」

ロブは、キヤスに合図を送った。

「キヤス、ジリアンのことを頼む。」

「ラジャー」

集まった男たちは、元いた場所にもどりはじめた。

ジリアンは、その場から離れようとするロブの腕を取った。

「兄さん、レイニーは遊んでるつもりはないんだ。一緒に練習をやっちゃいけないの？」

「レインが整備できるようにならないと、二人だけで空を飛んだときにトラブルを起こしたらどうするんだ。」

困った顔をするジリアンに、戻ってきたカスターが後ろにたち、両手を肩に添えた。

「分担して、持ち場を守る。これが鉄則だ。クルーっていうのはチームワークだ。」

「僕が整備できるようになったらだめなのかな。」

「言っただろ。お前には度胸がある。咄嗟の判断は冷静だ。レインにはできない、いや、できていないだな。出来るようになるまでには時間がかかるし、その前に整備できるように技術を身につけるほうが先だ。」

「そうだね。」

残念そうに言うジリアンはリュックを手に取り、自分の部屋に行くとする。

「ジリアン、お前は航空術がある程度身につけているが、それ以上に技術を頭に入れ込むのは今、しないほうがいいだろう。」

「うん、わかったよ。役割分担なんだね。これから、練習をこなしていくよ。」

カスターはジリアンの肩を抱いて、連れて行った。

その後姿をしばらく見つめて、ロブはつぶやいた。

「やけに、ものわかりがいいな。」

テントウムシとは、エアバイクのデカイ機体という感じで、半円形上の姿形で空を飛ぶ様子から、「テントウムシ」と呼ばれていた。手当てを受けたレインは、テントウムシの助手席に乗るのをジゼルに手伝ってもらっていた。

「無茶するところ、マネしなくてもいいのに。」

「マネするつもりはなかったよ。ジリアンをつれて逃げるのが精一杯だったんだ。」

「無理してオホス川を渡らなくても、街にもどればいいのよ。」

「そこまで考えることができなかったんだ。戻れば、あいつらが追いかけてくると思ったんだ。」

「川を渡るのが無茶することなのよ。いくら、逃げ切るためでも。」

ヘルメットをかぶりながらロブは、二人の会話を聞いていた。

「咄嗟の判断が冷静にできないところは、マネじゃないよな。」

「ロブ、いつからいたの?」

レインがふてくされているのをみながら、ジゼルはレインにヘルメットをかぶらせた。

「ジリアンに怪我がなかったのは、レインがちゃんと守ったからでしょ。」

「ジリアンより体ができているというか成長しているレインだから、守ることができた。」

「ロブ。そういうことじゃなくて。」

「ジリアンに、約束させた。これから練習はサボらないことをね。レインが兄としてジリアンを守るのは当然だ。そうだろう。」

「それは、そうだけど。」

「いいよ。ありがとう、ジゼル。もう遅いから、部屋にもどってて。」

「そういうと、レインはヘルメットにあるジゼルの手に手を触れた。ジゼルは、ふたりのことが心配だったが、自分が心配しても仕方が無いのは理解していた。」

「ロブは、運転席に乗り込むと、計器類を確認した。」

「その姿をレインは横目で見ていた。」

「じゃ、気をつけてね。」

「面倒かけてすまない。もどって、休んでてくれ。」

「ジゼルは二人に手を振った。」

「ロブはジゼルに手を上げて挨拶をした。」

「レインは小さく左手で手を振った。」

「コックピットのドアが閉まり始めた。」

「丸い月の明かりをうけた三日月の形の岩山からテントウムシがジエツト噴射で飛び出した。」

第二章 レインとジリアン 4 (後書き)

BGM: 「月を盗む」元ちとせ

第二章 レインとジリアン 5

自分の部屋で食事を済ませ、ひとり、部屋で自失茫然としていたジリアン。

バイク窃盗の男たちに襲われたくらいで、取り乱し自分を見失うはずもない。

そんな弱いものなら、襲われたら逃げ切れない。

咄嗟の判断で男たちをリュックで気を失わせることができたのだから。

ジリアンは両手で顔を覆った。

自分自身がどうしてそうなったのか、過去を振り返るため、目を閉じた。

ジリアンは、ものごころついたところに、自分の体に痣ができていたことを知った。

その原因を理解できるまでに時間がかかった。

なぜなら、痣ができるほど、強くつねられていることを感じていなかったからだ。

つねっていたのは、セシリアだった。

セシリアはマーサの知り合いということでスタンドフィールド・ドックに来ていて10年ほどドックにいてた。

レインとロブが犬のようにじゃれ合って仲良くしている姿をジリアンが見ていると、セシリアがそっとそばによってきて背中をつねるのだ。

ジリアンは誰にもそのことを話さなかった。

そのうち、その痣ができていることをマーサが知り、セシリアの作業だと気づいて、ふたりが言い争う姿を見かけるようになった。

しかし、セシリアはやめなかった。

ジリアンはマーサにセシリアを責めないように言った。

レインはセシリアが好きだった。
ジリアンはそのことを知っていたので、レインを悲しませたくなかった。

マーサが病気で亡くなると、ジリアンへの虐待はエスカレートしていった。

まだデイゴと結婚していなかったジゼルがマーサの代わりに食堂に出入りするようになっていたが、ジリアンはセシリアとジゼルを避けるようになった。

ジリアンがジゼルを避ける理由は、大人の女性だったから。ジゼルに原因があるわけではないのに、避けるまでに追い込まれていた。その様子に不振に思っていたロブだったが、ジリアンに理由を聞いても話してはくれなかったので、心配してジリアンに目をかけるようになった。

それは、ロブが闇の配達をするため、ドックを留守にしていたときに起きた。

ロブがいないことをいいことに、セシリアはジリアンを、岩山から外れた穀物小屋に連れて行き、そこで虐待を繰り返していた。

叫べないように、口にタオルで塞いでいた。

「おまえはどうしてそんなに醜いの！おまえはどうして生意気な口を利いて、わたしを困らせるの！言っても聞かないようなら、こうするしかないでしょう！」

地べたにうずくまって、背中を棒でたたきつけられるジリアン。

何度となく繰り返されるうちに、不振に思ったレインがその小屋に現れた。

レインがみたのは、裸で背中を打ち付けられるジリアンの姿と、顔を真っ赤にして髪を振り乱し怒り狂い棒を振り下ろすセシリアの姿だった。

セシリアの姿にショックを隠せなかったレインだったが、ジリアンの酷い姿を目の当たりにして、セシリアに抱きついてやめさせよう

とした。

「何をしているの、セシル！どうしてジルに酷いことをするの。やめてよ！」

「放しなさい！レイン。あなたには関係ないことなのよ！わたしはジリアンが許せないのよ！わからせるためにするの！」

いつも優しく接していたレインに暴言を吐くほど、セシリアは自分を見失っていた。

「レイン、離れないなら、あなたもぶつわよ！」

セシリアは、ジリアンに向けて振り下ろしていた棒をレインにむかってたたきつけようとした。

いままで、泣くこともなく耐えていたジリアンだったが、そこで初めて泣き叫んだ。

セシリアは小屋の事件でドックを去った。

ジリアンは我に返った。

天井を仰いで、思った。

自分のことで、泣くことができないと。

今、虐待されて受けた傷を心の傷を感じる時でさえ、泣くことはできなかった。

ジリアンは、いつでもどこでも、レインと一緒にだった。

風邪を引いて寝込んでいたときには、ロブやレインがいつもそばについて看病してくれた。

虐待されていることをロブやレインに言わなかったのは、みんなと一緒にいられる幸せが壊れてしまうのではないかと感じていたからだ。

みんなと一緒にいられる幸せを失うのではないかという恐怖に自分を見失ってしまったことをジリアンは深く考えていた。

ジリアンがベッドに入ると左の壁に、写真が貼ってあった。

マーサの写真がそれだけしかなくて貼っているのだが、そこには幼いジルを抱いているセシリアも写っている。
そして、そのセシリアの顔は黒く塗りつぶされていた。

第二章 レインとジリアン 5 (後書き)

BGM:「君は笑う、そして静かに眠る。」
「 f r a - f o a

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 1（前書き）

登場人物

レイン＝スタンドフィールド（主人公）

ジリアン＝スタンドフィールド（主人公の弟）

ロブ＝スタンドフィールド（主人公の兄）

カスター＝ペドロ（スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士）

マーク＝テレンス（タイデイン診療所の医者）

ミランダ＝テレンス（マークの妻・診療所の看護師と医療事務員）

ダン＝ポーター（前タイデイン診療所の医者）

クレア＝ポーター（ダンの養女・医者）

フレッド＝スタンドフィールド（主人公の長兄）

デイゴ（スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工）

ジゼル（スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻）

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 1

タイデイン診療所は小高い丘の上にぽつんとある。テントウムシを着地させるに十分な広場はある。

前方のライトを照らし、診療所をぐるりと回ってみせたあと、着地した。

ロブは先に運転席から出て、レインの方にまわって、シートベルトをはずしてやった。

建物から、中年の男性が出てきた。

「よう、ロブ、待ってたぜ。」

「こんばんわ、テレンス先生、夜分にすみません。」

「こんばんわ、先生。」

「連絡もらって心配したぞ。暴漢にでも襲われたってな、レイニー。」

「

「ええ、まあ。」

「中に入ってから診察するよ。まだ、夜間診療時間内だ。」

タイデイン診療所はマーク＝テレンスが医者として、妻のミランダが看護師と医療事務を兼ねて夫婦でなりたっていた。

レントゲンをとって、骨の様子を所見されると、治療をされ、レインは右腕を石膏で固められた。

「2、3日、様子をみよう。レインはここで預かるということなので、入院してもらおう。」

「え。僕、ドックに帰れないんですか。」

「石膏が固まるまで、ここにいたほうがいいってことだ。」

ロブはそういつて立ち上がった。

「下手に動いて、石膏が砕けてしまったら、骨がまたおかしくなるだろう。」

マークは、ミランダを手招きして、入院の準備をさせた。

ミランダはレインを診察室から連れ出した。

「ロブ、お前に話があるんだがな。」

マークにそういわれて、ロブはいすに座りなおした。

「何ですか、先生。」

「お前、クレアがどこにいてるか知らないか。」

「唐突に何ですか。俺は知らないですよ。」

「お前たち、そういう仲だっただろうよ。」

「え?! 違いますよ。そんなわけがない。全然違いますよ、テレンス先生。」

ロブは赤い顔して、膝の上にある両手を握り締めて下を向いて、首を振った。

「クレア・ポーターがお前とふたり、エア・ジェットを乗り回してあっちこっちと医療行為しているって話は有名だったろう。」

「それは、頼まれて運び屋をしていたまでで、クレア先生を運んでいたというか。」

「命がけの飛行で、そこまでやるかって話で、うわさはもちきりだったらしいぞ。」

「誰がそんな話をするんですか。」

ロブは眉間にしわをよせて、ドックのクルーたちだと予想した。

「医療行為を目撃した人間だな。」

「いっぱい、いてわかりません!」

「口々にいう人間は不特定多数だ。」

「先生、話を本題にもどしましょう。クレア先生がどうかしたんですか。」

ロブをからかってしまっていることに気がついたマークは少し考えて、話を始めた。

「お前さんは、ダン・ポーターが悲惨な死をしたのを知っているな。」

「ええ、この診療所で、そのお、みせしめのように荒らされようで、人の恨みを買うような人ではないのに……。」

ロブは目を泳がせてしどろもどろに答えた。

マークは、ロブの様子を察してそれとなくわからない風に話していた。

「ダンの話をききたいと、わけのわからない連中がきてな。根掘り葉掘りと質問してきた。」

胡散臭いんで、知らないわからないと、にべもなく答えて、とつと帰ってもらった。

そいつらは、話のなかで『クレアのほかに養子がいないか。』と聞いてきたんだ。」

ロブは、眉をひそめた。こころあたりがあるのだろうとマークは深読みした。

「ダン先生には、奥さんがいたという話は聞いたことはあったけど、それもクレア先生を養子にする前に別れたという話だし。俺は知りませんよ、その話。」

「そうか。ダンの別れた嫁さんはうちのミランダと今も交流があるので、聞いてみたが、クレアの話すら知らなかったくらいだからな。それに、その嫁さんにもその連中が尋ねてきたらしいから。」

二人は腕組みをして考え込むように話をしていた。

「それから、数日後に、また変な連中がきたなとおもったら、今度は『クレア先生の連絡方法を知りませんか。』とたずねてきたんだ。」

「見当もつかないと言った感じで、話をきくロブ。」

「数日前の連中といい、気になったから、どういう用件か問い詰めたら、そいつらは自分たちの素性を明かしたんだ。」

ロブは腕組みをとり、話を聴く姿勢をあらためた。

「グリーンオイル財団と名乗ったんだ。」

ロブが診療室から出ると、受付で病院着のレインが立っていた。

「兄さん、ごめんなさい。」

「なんだよ、いきなり。」

「僕、冷静な判断が出来なくて、川を渡ってしまった。」

「自分のことがわかるようになったのなら、それでいいさ。お前たちは無事だったんだから。」

「でも、考えたら、僕がエアバイクを転倒させて、川に落ちたら、僕たちふたりとも……。」

「終われ良ければ全て良しとしよう。」

そういつて、ロブはレインの頭を撫でた。

「治ったら、喧嘩の練習しようか。昔よくフレッドやデイゴに相手してもらって、組み手とかしたんだ。」

「ジリアンは筋力がついてきてからで、キヤスと3人でやろう。」

「え、キヤスと？」

「ああ、あいつは退役軍人だから、護身用は訓練受けてるはずだ。組み手ぐらいは出来るだろう。」

「ああ、そうか、キヤスは軍人だったんだ。」

レインはホーネットクルーのことを考えていた。キヤスに聞けばなにかわかるかもしれないと。

「俺は、レインが兄らしくジリアンが無傷で守ったことに安心したよ。」

その言葉にレインの目から涙がこぼれた。

「一人にされるのが嫌で泣いてる子供みたいだぞ。」

マークが言うと、ミランダがレインの後ろに立っていて、小刻みに首を振った。

レインが涙を拭くと、顔の傷に当たった。

「痛い。」

「綺麗な顔が台無しだな。」

「女じゃないから、大丈夫ですよ、先生。」

「お前の顔も、台無しだな。顔に傷で作ったら、モテなくなるとか。」

「あなた、そこまでにしてちょうだい。」

気が気でないミランダは怒った顔でマークをたしなめた。

「レイン、おとなくして早く治るようにするんだ。」
「うん。」

「ミランダさん、お世話かけますが、よろしくお願いします。」

「ええ、責任をもって、レイニーを預からせもらっわ。」

「先生、明日、キャスを様子みに来させますから。」

「お前の女房みたいだな、キャスは。」

「あはは、やめてくださいよ。」

「あなた。」

ミランダはマークのそばに行つて、肩をたたいた。

「これで失礼しますよ。」

ロブがそういうと、レインが声をかけた。

「兄さん。ジゼルが、兄さんの晩御飯を持っていくようにって、シ

ートボックスに入ってるから。」

「ああ、わかつたよ。」

月明かりを浴びて、ロブが乗るテントウムシが飛んでいく。

右手で操縦桿をにぎり、左手でハンバーガーを持って食べていた。

「やっぱり、口で言ってもきかないよな。痛い目に合わないとだめなんだな。」

ロブはそうつぶやいた。

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 1 (後書き)

BGM:「ひとりごと」BUMP OF CHICKEN

注記:

テントウムシとは、エアバイクのデカイ機体という感じで、半円形上の姿形で空を飛ぶ様子から、「テントウムシ」と呼ばれている。

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 2 (前書き)

登場人物

レイン＝スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の弟・愛称ジル)

ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)

カスター＝ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

コリン (レインのクラスメイト)

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 2

カスターがエアバイクでジリアンを学校まで送っていった。

レインが来ていないことに気づいたコリンがジリアンに近づいた。

「ねえねえ、ジリアン、レイニーはどうしたの？」

「今日は、おやすみ。寝込んでいるんだよ。」

ジリアンはコリンの顔も見ず、そう答えた。

目をあわせようとしないジリアンの行動は理解できていたが、コリンはレイニーのことには納得がいかなかった。

「昨日さ、自警団の集会があつて、強盗が人を襲つたつて話をしていたらしいんだけど、レインたちじゃないよね。」

「僕たちだよ。だから、当分、レイニーは登校出来ないから。」

そういうと、ジリアンは足早に初等科の棟にむかっていった。

「そんな、レイニーは大丈夫なのか、お見舞いに行かなくちゃ。」

ジリアンは意地悪に言った。

「オホス川を自力で渡ることができたらいいね。兄さんはお見舞いなんて望んでないから。」

そして、ジリアンは棟の中に消えていった。

コリンは苦みばしった顔をした。

カスターはエアバイクでタイデイン診療所に向かっていた。

昨夜レインとジリアンの様子をロブと話していたが、カスターの中で納得できない引っかけがあった。

（どうして、レインをパイロットにさせないことにこだわるのだろうか。）

カスターが診療所に着いて、中に入ると、老女たちに囲まれているレインがそこにいた。

「キヤス、来てくれたんだ。」

目を輝かせて、助けを求めるレイン。

「あらあ、レイニーのお兄さんはこんなひとだったかね。」

「もつと、男前だったよ。」

「そうだったかね。」

「心配してみに来たのかい。」

カスターはあつけにとられていて、状況がよくつかめなかったが、ロブと間違えられていることだけは理解できた。

「いえいえ、僕はレインのお兄さんじゃないですよ。ロブほど、男前じゃないですがね。」

「ほう、お兄さんはロブって名前だったかね。」

「そうだよねえ、もつと男前だったはずさ。こつ、鼻が高くて、目が大きくて綺麗でさ。」

「ははは、その鼻の高さで顔に傷を作った人ですから。僕は男前でなくてよかったなつて。」

その会話を聞いて、レインは開けた口が閉じられなかった。

「あ、キャス、話があるんだよ、こつち来て。」

レインは老女たちを置き去りにしてカスターの腕をとって、病室に向かおうとした。

「みなさま、ご機嫌麗しゅう、また。」

そういつて、カスターは老女たちに手を振った。

病室に入ると、ジリアンはベッドに座り、カスターはいすに座った。

「話ってなんだい。」

「あのさ、キャスつて、軍人だったんだよね。」

「ああ、そうだよ。それがどうかしたの。」

レインは天井を見上げ、何から話そうかと考えていた。その様子を不思議そうにみていたカスターだった。

「養成所に1年間いて、そのあと、通信部に配属になって、1度だけ貨物搬送空挺で任務に就いたぐらいだよ。」

「キャスつて、軍隊の部隊、小隊とかつて詳しい？」

「そんなに詳しくないけど、把握していないと、交信での内容が理

解できなくなるからね。」

「あのさ、ホーネットクルーって知ってる？」

「知らないわけじゃないけど、その小隊は僕が入隊したときには解散してるよ。」

レインはしばらく考えた後、ためいきをついて言った。

「解散しているのは知ってるんだけど……。ねえ、キャス、ホーネットクルーについて、調べてほしいんだけどさ。」

「なにを？」

「ええっと、これは兄さんには内緒でお願い。」

「どうしてさ。」

「ああ、なんか、知られたら、怒られそうな感じがするんだよ。当時、最新鋭の小型機を搭乗していた部隊でしょ。」

「ああ、確かに皇帝専属偵察機部隊だから、特別部隊だったからねだからって、ロボが怒るとは……。。」

「ね、お願い。兄さんには内緒で。」

手を合わせてお願いするレインの姿をみて、カスターはニヤツと笑みをうかべた。

「いいよ。僕たち二人の内緒ごとだね。」

「ああ、うん。」

「何を調べてほしいのかな。」

「ホーネットクルーの機体あるでしょ、マーキングでその、熊蜂の女の人の絵。あれが夢に出てくるんだよ。」

「ほう。レイニーは見たことがあるっていうわけか。」

「覚えていないんだけど、搭乗したことがあるかもしれないんだ。」

「え？そんなこと、いくら、スタンドフィールドドックのメンバーでも、ありえないと思うんだけど。」

「やっぱり、そうかな。」

「それで、誰に乗せてもらったかってことを調べるのかな。」

「ああ、うん、女の人に乗せてもらったみたいなんだけど、顔も名前もわからないんだ。」

「え？女の人つてわかつているんだ。」

「うん、長い髪の毛が腕にまとわりついているのが印象的で、僕はその人の膝上について、搭乗してみたいな。」

「はあ。想像できないな。最新鋭の機体に子供を乗せるパイロットなんて。」

「ぼ、ぼくの願望なのかな。夢にでてくるまで、ホーネットクルーのことなんかは知らなかったんだけど。」

「僕の知人でスカイロード上官育成学校を卒業して空挺部隊に詳しい人間がいるから聞いてみるよ。」

「ほんと？誰かわかったら詳しく教えてほしい。なにかこう、頭のなかでものすごくモヤモヤするんだ。」

「そうかそうか、そんなにモヤモヤしていたのか。だったら、早く聞いてくれればよかったのに。いいよ、詳しく調べてあげるさ。」

うれしそうに話すカスターをみると、レインはなにか一抹の不安を覚えた。

「レインはその夢をみていて、パイロットになりたいって思ったのかな。」

「ううん。兄さんたちが雲ひとつない青い空を飛ぶ様子を見て、僕もあななりたいて。気持ちいいだろうなあって。」

両手を広げてうれしそうに話をするレインは自分が病室にいることを忘れていたようだった。

「いつもさ、操縦しているのは兄さんたちで、僕はいつもものってるだけだから、自分で操縦桿にぎって思うとおりに空を飛びたいって思ってた。」

「そうか、そうだろうなあ。『スタンドフィールドの人間はみんな空を飛ぶのが好きだから』が口癖だもんな。」

「早く腕を治して、ドックにもどりたい。いつも空を飛んでいられるようになりたいから、やらなくちゃいけないことがいっぱいある。」

「今は、あせらず、完治できるようにおとなしくしていたほうがい

い。」

「了解です。キャス。」

レインはカスターに笑顔でそう答えると、座っている場所から、部屋の開けられた窓を眺めた。

「僕は間違いに気づいたんだ。欠点を直すことばかり考えていたよ。がんばれば、欠点なんてなくなるって思ってた。」

キャスの笑顔をみてうれしさを隠せないカスターを横目にみながら、レインは話す。

「治せなくて悔しいっておもってたけど、そうじゃないんだね。僕にできることを誰にも負けないように努力すればいいんだって。」

「そうだよ、レイニー。ジルにはそつなくこなせる力が元からあったかもしれないけど、できないこともあるんだよ。」

「うん、そうだね。出来ること出来ないことをお互い持ち合わせて僕たち二人で一人前のパイロットに航空士になっっていくよ。」

窓からは、二人に心地よい風が入り込んできた。

ロブはレインとジリアンが登校日には地下の格納庫で作業しているのだが、キャスを診療所へ様子を見に行かせたので、岩山から離れてオホス川の分流付近目指して、雑木林を進んでいった。

岩山の反対側と違って、ここの樹木の高さは5Mくらいしかない。

ロブが上を見上げると、木々の間から光が差し混んでいるがみえた。光と一緒に風が抜けて、木々が揺れる。

モヤモヤした想いがロブのこころを侵食するとき、ロブはある場所に行く。

たどりつくには、自分の勘を頼りに行くしかない。

まるで誰かが手引きするかのようには、導かれて、そこへたどりつく。鉄の柵があるのだが、それは蔦や雑草にまみれていて、見分けがつかない。

ロブが蔦で出来たような壁に手を差し込むと、施錠された鍵が現れ、胸ポケットから鍵を取り出し、開錠した。

鉄柵のドアにからまった蔦を引きちぎるように、ロブはドアを開いて中に入っていった。

少し進んでいくと、林から開けた場所に出て、そこにはテラスがあった。

そのテラスは大理石で出来ていて、その場所も蔦や雑草にまみれていた。

テラスの屋根の下部分には、彫刻の像があり、それは見事な裸体の女性像だった。

長い髪を両手でかき上げて、腰をくねらせた裸体像。

ロブはその像の前に膝まづき、大理石の台の上に両ひじをついた。

その台は、ちょうど両手のひじがめりこむくらいに磨り減っていた。

ロブは頭をたれて、両手をにぎりしめて祈り始めた。

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 2 (後書き)

BGM: 『Blue sky』 押尾コータロー

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 3 (前書き)

登場人物

レイン＝スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)

カスター＝ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

ゴメス＝スタンドフィールド (主人公の父)

ロザリア＝スタンドフィールド (フレッドとロブの実母。ゴメスの前妻)

アレックス＝スタンドフィールド (主人公の祖先)

マーク＝テレンス (タイデイン診療所の医者)

クレア＝ポーター (前タイデイン診療所の医者ダンの養女・医者)

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 3

ヴェンディシオン川は何度となく、災害を起こした。

分流するオホス川との間に三角州のようにできた土地はあっという間に洪水で埋もれてしまう。

アレックス＝スタンドフィールドが存命のとき、ヴェンディシオン川に治水として、地下水を分流させるなど大掛かりな工事を手がけたりした。

それでも間に合わず、ヴェンディシオン川やオホス川に接する土地の住民は災害にあい、命を落とすことがしばしばあった。

この苦難を治めるために、建立されたのが、テラスのある大理石像、それはレジーナ像と呼ばれた。

アレックスに空挺・アレキサンドリア号を譲与した皇帝・レジーナ女帝は早世し、その若さゆえにアレックスへの想いが深く、悲しみの願いが災害という形であらわれたと人々に思われたところから、像を建立したのだという。

アレックスの死後、そのテラスはどんなに除草しても、雑草が生い茂り、テラスを覆い隠してしまうため、スタンドフィールドの人々は、レジーナがアレックスへの想いを恥ずかしくて、隠したがっているのではないかと考えた。

たびたび、災害に見舞われ汚泥にまみれようが、そのテラスは枯れ枝や木々に覆われ、姿を隠し通した。

たびたび、災害に見舞われて雑木林が一掃されるのだが、そのたびに蘇生し、また雑木林にもどることを繰り返し、その一帯は5M以上の高さの雑木林にはならなかった。

それは木々が生長し、雑草が生い茂ることがなくなると、テラスの姿があらわになるのを恐れているかのようにだった。

スタンドフィールド家は、そのテラスを秘密の花園として、一族以

外の者には足を踏み入れないようにしていた。

熱心に祈りを捧げたのは、ロブの実母であるロザリアで、幼い頃のロブは、ただその後姿だけを眺めていた。

ロブが熱心に祈りを捧げるようになったのは、フレッドを失ってからだった。

（祈れば何とかなるとか、おもっちゃいないが、俺にできることがあれば祈ることでもしていたい。）

自分の無力さと弱さを自覚して、母親を想った。母親にしかできなかったことを今の自分がすべきだと悟った。

ロブは、テラスを去ったあと、墓地に向かった。

そこは、岩山の小高い丘にあり、墓地からテラスが見下ろせる位置にある。

ロブが、墓地に足を踏み入れると、マーサの墓にだけ花が供えられていた。

（たびたび、墓地に来るとみかけるが、誰がおいているのだろう。墓地のいちばんうえに、アレックスの墓があり、そこへ一礼すると、

ロブは父親の墓にきて座り込んだ。

（俺は親父のように、口出しするときはする、しないときは一切しないとタイミングよく振舞えないな。）

口やかましいだけの兄を演じているという違和感があつて、甘い対応をしまつていて一人になつてみて反省してみた。

日が暮れはじめたころ、父親の墓に長い影が差し掛かった。

ロブが後ろを振り向くと、カスターが立っていた。

「昼過ぎには墓参りに行ったみたいだつていうけど、帰りが遅いものでね。迎えに来たよ。」

立ち上がって、ロブは服についたほこりを払った。

「ふふ。後ろから見ていると、怒られてしょげかえっている子供みたいだつたよ。ロブ」

「レインが怪我をしたから、俺がしょげてもいいいたいのか。」
「なんだあ、自覚しているのか。ふふ。」

「俺はレインにくらべれば、怪我なんていくらでもしたんだ。怪我ぐらいでしょげるか。」

「クレア先生から暗号通信が入ったよ。」

昨日の今日、マーク・テレンスからクレアの話聞いたばかりで、ロブはタイミングよすぎるなと思った。

「『近日中に、そちらに何うので、話がしたい。』ということですよ。話ってなに？」

「知らないよ。もう荷物を運べとは言わないさ。」

「クレア先生とロブって、あ・うんの呼吸で空をエア・ジェットで行き来してたんだろ。浮いた話のひとつでも・・・」

「お前か、キヤス。テレンス先生にいらぬうわさを耳にいれたのは？」

「違うよお。二人をよく知る人物っていっぱいいるじゃないか。いらぬうわさってどんなうわさなんでしょうか。」

あきれた顔で、ロブはカスターを見ていた。

「やれやれ」

ロブは目を閉じて考え込んで、父・ゴメスⅡスタンドフィールドと一緒に墓参りに来たことを思い出した。

岩山を背にして、ロブは左を指差して言った。

「俺が11歳で親父とふたりで墓参りに来た時、今みたいに太陽が沈みかけていた。」

何を突然話し出すのかと、興味深深で話を聴くカスター。

「岩山から突然エアジェットがあらわれたかと思うと、それは左右の翼を回転させて、まるで風車を風に押し当てたかのように、スクリュー飛行してきたんだ。」

ロブは左を指ししめした腕を、そこにエアジェットが飛んでそれを追いかけて指差しているかのように動かした。

「俺は一瞬で心が奪われたよ。」

その言葉がなにを意味しているのか、カスターには最初わからなかった。

「すごいことをする奴がいる。俺もあんなふうに飛んでみたいって。」
どこかで聞いたような言葉だ。カスターは思っただけで聞き入った。

「その機体は、また岩山から現れたかと思うと、今度は背面飛行して、俺たちの真上を飛行していったんだ。度肝を抜いたよ。」

ロブはまるでそこにその機体がいるかのように上を見上げて言った。カスターは驚きの表情で、その状況を思い浮かべ、ロブと一緒に上を見上げた。

「真上を通過するとき、その機体の操縦席で手を振る女の子が見えたんだ。」

「え、女の子?!」

「ああ、それが俺の初恋なんだ。」

「はあ。へえ。」

カスターはすつとんきような声を出して驚いていたが、少し考えてロブの考えていることを理解した。

「ああ、そう、わかったよ。つまり、あれだよ、クレア先生は初恋の女性じゃないって言いたいんだ、ロブ。」

照れくさそうにしながらも、口をゆがませて、カスターから目をそらした。

「親父もお前みたいに、あっけにとられた変な顔をしてたさ。そんな親父の顔を見たのは初めてだったよ。」

笑みを浮かべて、ロブは歩き出した。

「そのとき、親父はこう言ったんだ。『あの馬鹿、お調子者のじゃじゃ馬娘を連れてきやがった。』ってね。」

「あ、それで、その後、進展あったわけ?」

「お調子者のじゃじゃ馬娘は翌年、スカイロード上官育成学校に入隊した。」

「ああ、そう。11歳のロブに、ええつとお、14歳かな、その女

の子つて。すると今は31歳。」

残念そうに言ったカスターだったが、その先のネタをひねりだそうとしてロブの後ろについて歩き出した。

「なにが言いたいんだよ、キャス。」

「今でも、その女性のことを思い続けているとかじゃないよね。」

「なにを、言うんだ。」

「クレア先生に手も出さないなんて、男としておかしいでしょう、ロブ。」

「おかしくはない。クレア・ポーター先生は、命がけで医療行為をしている女性で俺は敬意をあらわして接している。」

「クレア先生つたら、ロブにモーションかけているのに、ロブつたら目もかけてやらないんだから。」

「気持ち悪いから、やめろよ。」

「ね、その女性は美人だったんでしょ。」

「そのうち、会うだろう。相変わらず、空を飛び回っているっていうことらしいから。」

「え、その女性のこと、ちゃんと把握しているんだ、やっぱり……」

「やっぱり、じゃない。飛行気乗りに命をかけた人間は、それがやめられないんだよ。」

ロブは自分に言い聞かせるように、その言葉を吐いた。

「さっさと、帰ろう。暗くなる。」

「はいはい。」

カスターは、ロブが言った言葉になにか引つかかりの答えを感じていたが、その言葉の意味を今は理解できないでいた。

第三章 ロブ＝スタンドフィールド 3 (後書き)

BGM:「初恋サンセット」メレンゲ

第四章 それぞれの受難 1 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キャス)

プラーナ(ジリアンのクラスメイト)
キャシー(レインのクラスメイト)
ポーリア(レインのクラスメイト)
ケイト(レインのクラスメイト・プラーナの隣人)
コリン(レインのクラスメイト)
ミランダ(マークの妻で診療所の看護師兼医療事務員)

カイン(山岳警備隊パイロット・カスター⇨ペドロの軍隊時の元同僚)
レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー・グリーンエメラルダ号のクルー)
クレア⇨ポーター(診療所前医者ダン⇨ポーターの養女・医者)

第四章 それぞれの受難 1

登校日ではないのに、カスターはエアバイクにジリアンを乗せてオホス川を渡った。

ジリアンを街角で降ろす。

「キャス、ありがとう。」

「ジル、レインをドックに連れ帰ったら、また迎えに来るよ。」

「うん。ひとりでエアバイクに乗れるようにならないとだめだね。

兄さんがいなくちゃ、僕、どこへもいけないんだ。」

ジルはそう言っつて、苦笑いをした。

カスターはジルの頭をなでてから、エアバイクのエンジンを入れた。

「ジル、プラーナの誕生日会を楽しんでおいで。」

レインのいない寂しさを隠しきれないジリアンはカスターにむかって微笑んだ。

診療所の受付の前でうろろする女の子がいた。

ミランダは気になって、声をかけようとした。

すると、玄関のドアに入ってきた女の子が大声をだした。

「どうして、キャシーがいるのよ!」

受付の前においてた女の子は振り返って、声が出たほうをみた。

「ポーリアこそ、なにしにきたのよ!」

「わたしはおばあちゃんの薬を取りに来たのよ。」

ポーリアは考え込んでから、答えた。

「あら、ポーリア。あなたのおばあさんなら、朝一番にお薬取りにきたわよ。」

ミランダにそういわれると、ポーリアは舌を出して、開き直った。

「ああ、そうだったわ。ほんとうはおばあちゃんから、聞いたのよ。レインが診療所に入院しているって。」

「何なの、それ。わたしもおばあちゃんから、聞いてきたのよ。」
ミランダは察しがついたが、目を丸くして、女の子たちをみていた。
そこへ勢いよく、ドアがひらいて、女の子があらわれた。
ポーリアがドアの前にいたので強く背中を押された。

「痛い。」

「え、何なの。え、キャシーにポーリアじゃない。どうしてここに
いるの。」

「え、ケイトったら、プラーナの誕生会に行ってたんじゃないの？」
「プラーナったら、レインが診療所にいるっていうじゃない。で
も、コリンは知らないみたいだから、わたし……。」

「おやおや、レイン目当てに女の子たちが押しかけてきたのか。」

マークが診察室から、にぎやかな声が聞こえるなと思って出てきた。
「先生、レインはどこの部屋にいてるの？」

「ああ、レインならここに……。」

レインがいてる病室のドアノブに手をかけて開けようとしても、開
けられなかった。

すると、中から奇妙な音とともにレインの叫び声が聞こえた。

ガッシャーン。

「うあー！」

ドスン。

エアバイクを走らせていたカスターは、学校が見下ろせる場所にポ
ツンと立つ電話ボックスの前で止まった。

中に入って、ポケットからメモを出して、それを見ながら電話をか
ける。

「ああ、もしもし、カスター＝ペドロといいますが、カインさんは
いらっしやいますか。」

「ああ、カインだけど、キャスカあ、ひさしぶりになったな、生き
てたか。」

「あはは、ご挨拶だな、カイン。」

「お互い連絡取るのとはわかる感じだろ。生きているのも不思議な感じだな。」

「ああ、そうだね。」

「はめられて除隊されたっていう意見には合意したものの、冷静になつてみて、もやもやをスッキリさせるより、自分の身を案じたほうがいいなつて思っただろ。」

「まあ、確かにそうだけど。あの時は、直後だったし憤慨していたのもあつたしな。連絡しあおうつて言つて、今まで連絡しなかつたんだものな。」

「今、何しているんだよ、キャス。俺は妻子もちになつたよ。山岳警備隊でパイロットやつてるよ。」

「へえ、早速妻子もちですかい。うらやましいなあ。僕は何故か、スタンドフィールド・ドックにいてるよ。」

「おいおい、マジかよ。アレックスの聖地を拝みにいったのか。」

「いやあ、ドックのクルーになつてしまつてるんだ。」

「それはそれは、ご愁傷さま。あはは。命ないな。そういうところだつて聞いたぞ。」

「まあ、確かにいろいろあるみたいだね。それより、聞きたい事があつてさ。」

「なんだよ、聞きたい事つて。」

「カインは、ホーネットクルーのことをよく知ってるかな。」

「ああ、知らないわけじゃないな。優秀なパイロット集団の部隊で、俺には入れないぐらいのレベルだな。」

「あのさ、ホーネットクルーで女性パイロットつていたのかな。」

「おお、いたさ。レシアー・ハートランドだ。スカイロード上官育成学校に鳴り物入りで入隊した上で野郎にとつちゃ、マドンナの存在だった。」

「つていうのは、美人だったつてこと。」

「まあな、手足が長くてセクシーでさ、目が丸くて唇はウエットないや、実にいいオンナだったな。」

スカイロード上官育成学校に鳴り物入り？その言葉がカスターの頭の中で反響してきて、ピンと来た。

「ええっと、もしかしてさ、もしかしてさ、スクリュー飛行とか背面飛行とか、得意だったとか。」

「ああ、そうそう、アクロバット飛行が得意でさ、ホーネットクルーを除隊したあと、アクロバットシヨールに出ててスターのマイク・コールドマンとペアを組んでいたこともあったな。」

「ええ、アクロバットシヨールにでてたの？」

「うん、一時だけかな。あ、そういえば、ホーネットクルーのメンバーでクラスメイトがいてさ、当時小耳に挟んだ話だけど、スタンドフィールドの若い男と恋仲だったはず。」

「え、そうなの。え、ロブのことかな。」

「名前までは知らないけどな。」

レテシア「ハートランドかあ。懐かしいなあ。俺たちにほんと気持ち良い風を与えてくれたオンナだったな。」

「今も空を飛んでるのかな。」

「そうだなあ。アプローチしてくる野郎たちに肩すかしして、天然ボケをくらわしてたんだ。」

彼女のほんとうの恋人は空だろうって話さ。

でも、彼女は、確か、グリーンエメラルダ号艦長のニック「ハートランド」の姪っ子かなんかだったはず。

あの艦は現役バリバリで空飛んでるから、グリーンエメラルダに乗ってるんじゃないかな。」

「ほう、あのグリーンオイル補給艦か。いつか会えるかもしれないな。でも、ロブの恋人だったなんて、初耳だな。」

「ホーネットクルーの連中ならどの程度の付き合いだったかよく知ってるだろうがな。まあ、そんな長い付き合いじゃないんじゃないか。」

「ありがとう。これでなんか、僕のもやもやが晴れそうな気がするよ。」

「どんな話でそうなったか知らないけど。深入りするなよ。」

「そういうものじゃないよ。あはは。」

「レテシアを知るものは、ある意味恋に落ちたと同時に失望を味わうんだ。」

「空が恋人だから？」

「いいや、ケタケタケタと大声で笑う仕草であっけにとられて失望するのさ。」

「ゲラなのか。」

「金髪でないのも残念だが、美貌にこころを奪われたただだと、失望するのさ。ふふ。」

「ははあん。そうですか。別れた理由がそれだとは思えないけどね。」

「ま、もし、寄ることがあれば、キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地の山岳警備隊を尋ねてくれよ。期待しないで待ってるよ。」

「それまで、命があったらって話だね。あは。」

「はっはは。そんな縁起でもない話するなよ。」

「ありがとう、じゃ、寄ることがあれば、遠慮なく尋ねるよ。」

受話器を元の位置に戻すと、カスターは、下を向いて、ほくそ微笑んだ。
(ふふふふ、そういうことか。レインに、ちゃんと報告できるな。)

そして顔をあげてつぶやいた。
「ああああ、いいなあ。男前だと、美人と恋人になれるのかあ。ク

レア先生に言われたみたいに整形してみようかな。」
カスターは電話ボックスから出ると、エアバイクを走らせ、診療所に向かった。

第四章 それぞれの受難 1 (後書き)

BGM:「MY Generation」Yui

第四章 それぞれの受難 2 (前書き)

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
ジゼル(スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)

コリン(レインのクラスメイト)
プラーナ(ジリアンのクラスメイト)
キャシー(レインのクラスメイト)
ポーリア(レインのクラスメイト)
ケイト(レインのクラスメイト・プラーナの隣人)

マーク⇨テレンス(タイデイン診療所の医者)
ミランダ⇨テレンス(マークの妻・診療所の看護師と医療事務員)
クレア⇨ポーター(ダンの養女・医者)
レイシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)

第四章 それぞれの受難 2

カスターが診療所に着いたとき、キャシー、ポーリア、ケイトという女の子たちが診療所を出ていた。

エアバイクにまたがるカスターをみて女の子たちは口々に言った。

「ねえ、あれ、レインのお兄さんなの？」

「まさか。レインのお兄さんは美男子だって聞いてるわよ。」

「絶対違うわよね。」

その会話が聞こえなかったわけではないが、聞こえない振りをしてカスターは女の子たちに声をかけた。

「こんにちわ、お嬢さんたち。」

カスターは笑顔でそういったのだが、女の子たちはうす気味悪がつて、挨拶もそこそこにその場を足早に去った。

カスターは首をかしげて、診療所の中に入ると、ミランダが忙しく歩き回っていた。

「キャス、レイニーを迎えに来たのかしら。」

「ええ、そうです。今日つれて帰ってもいいって聞いたから。」

「それがね……。」

ミランダが話そうとすると、部屋からマークが出てきた。

「おお、キャス来たか。レインが女難に見舞われてな。」

「あなた、そんな言い方しないでちょうだい。」

「は、女難？」

カスターが部屋の中をのぞくと、そこには泣きじゃくったレインがいた。

レインはカスターのほうへ向かって言った。

「ごめんなさい、キャス。僕、今日、ドックに帰れない。」

「え、どうかしたのかい？」

カスターには部屋の奥にある窓のガラスが破られているのが見えた。泣いているレインの頬に青痣ができているのも確認できた。

しかし、カスターにはなにがなんだかわからなかった。

「あのね、キヤス、女の子たちがレインをたずねてきてね。」

レインが女の子たちを嫌がって窓から逃げようとしてね、こうなちやったの。」

ミランダが事の顛末を話した。

診療上の前で会った女の子たちのことだとカスターは考えた。

「な、女難だろ。モテる男はつらいな。」

「そんなの。ぐっすん。」

「はあ、怪我が増えてしまったわけなんだ。右腕の具合はどうなんでしょうか、先生。」

「ああ、石膏が割れてしまったので、作り直したとこだよ。レントゲンの結果待ちだが。足も捻挫したみたいだし。」

「ううっ、今日帰れないよ、キヤス。」

レインのそばに寄ってきてカスターはベッドに座った。

「気にしないでいいよ。今ね、プラーナのところへジルを連れて行ったんだ。だから2回往復することになってね。」

「プラーナのお誕生日会があったのね。さっき女の子たちも話してたわ。」

「ジルは行くつもりなくてプラーナにはそう伝えていたらいいんだが。」

「僕が怪我をしたからでしょ。」

「うん、でも、落ち込んでるプラーナをみかねてお母さんから連絡があったんだ。最後の誕生日会になるかもしれないからぜひ来てほしいと。」

「あら、どうして最後なの？」

「プラーナは寄宿舎学校へ入学するかもしれないからだよ。」

「でも、行くことにしたのね。」

「ええ、ロブと僕とで説得したんです。行かなかったと知ったらレイニーが悲しむだろうって。」

「うん。」

「ジルは、プラーナの大事なお友達なのね。」

「初等科にいてるときは、いつもふたり一緒なんだ。」

「レイン、おまえにはいないのか。」

「先生、その話は僕には関係ないでしょ。」

「いないってことか。あの女の子たちのひとりを選んだらいいじゃないか。そうすればまるくおさまる。」

「あなたはもう、そんな言い方をする。ごめんなさいね、レイン。」

「いや、大丈夫です。」

「すみません、先生、ミランダさん。僕たちふたりで話をしたいことがあって。」

そういうとカスターは、すまなさそうにし、二人は気をきかせて病室から離れた。

カスターは部屋のドアを閉めた。

「話ってなに？キヤス。」

「ホーネットクルーの女性の話だよ。」

「え、もう調べてくれたの？」

「まあ、調べたというより、軍のパイロットだったひとに話を聴いたんだよ。」

なにか話そうかなと楽しそうに笑顔でレインを見るカスターに対して、なにかしら不安を感じたレインだった。

「レインの言っている女性は、レテシア＝ハートランドという人で、昔、ロブの恋人だったらしいんだ。」

「ええ！兄さんに恋人がいたの？そんなの初耳だよ。誰もその話してくれなかったよ、キヤスは聞いたの？」

「直接的にはロブから聞いてないけどね。聞いた人の話しじゃ、ホーネットクルーに入隊していたときのレテシアさんはスタンドフィールドドックの若い男と交際していたという話をしていたんだ。」

「ああ、だから僕はホーネットの機体に乗せてもらえたわけなの？」

「まあ、恋人の弟を同乗させることは認められないだろうから、別の機体に乗せてもらった記憶じゃないかな。」

「ああ、そうか、そういうのもあるよね。へえ、兄さんの恋人かあ。」

「すごい、美人らしい。会ってみたいよなあ。」

「ドックの若い男っていつても、フレッド兄さんもいてるよ。」

「ああ、ロブより3歳上の女性だから、フレッドだと2つ上になる。若い男っていうことは年下男っていう意味だよ。」

「ああ、そうなんだ。ええ、想像できないなあ、兄さんの恋人だなんて。」

「だあな。レイニー、この話は内緒にしてくれないかな。」

「なになに？」

「ロブから聞いた話なんだけど、発端はクレア先生のこと深い仲じゃないかと勘ぐって言ったときのことなんだ。」

「ええ、兄さんとクレアさんが？」

「ああ、そうしたら、ロブは初恋の話をしたんだ。」

「へえ、どんな？」

「11歳のとき、エア・ジェットでスクリーン飛行に背面飛行する女の子の話さ。」

「ええ、すごい。そんな女の子って、まさか。」

「そう、レテシアさんだ。ロブは名前を言わなかったけどね。」

軍のパイロットだった人に聞いた話だとレテシアさんはそれが得意だったみたいだ。

それに、スカイロード上官育成学校に入隊していたからね。」

「へえ、エリートパイロットだったんだ。すごいね。」

「だろ、ロブが恋をした女性ってのは、エリートパイロットだったんだよ。クレア先生じゃないって言いたかったんだよ、ロブは。」

「はあ、そうなんだ。なんか、心のもやもやが少しずつ晴れていくようだよ。ありがとう。キャス。」

「いえいえ、どういたしまして。この話はロブに内緒な。」

「うん。」

「じいさまやディゴ、ジゼルは知っているはずなのに、そんな話せ

んぜんしないもんな。きつと、ひどい別れ方したんだよ、ふたりは。」
その言葉を聴いて、レインはロブに「忘れる！」と夢の中で怒鳴られたことを思い出した。

「そうなんだねえ。だからかな、レテシアさんの顔を覚えてもらえないんだ。」

「レテシアさんは国家指定補給空挺グリーンエメラルダ号に搭乗しているらしいから、いつか会えるかもしれないね。」

「そんな時って来るのかな。」

「来るさ。昔はグリーンエメラルダ号がドックに入港した事が記録に残っていたし、そのうち来るさ。会えるのを楽しみにしていよう。」

「そだね。」

苦笑いしながらレインはこたえた。

「ロブには、退院が延びたことを伝えておくよ。」

そういつて、カスターはベッドから立ち上がった。

「うん」

レインは悲しそうにそうこたえた。

「あ、クレア先生の話がでてたけど、近々来るの？」

「お、ビンゴだ。通信がきてたよ。ドックに行くって。」

「はあ、そうなんだ。」

「ロブに頼まれてたんだ、テレンス先生が心配しているだろうから、クレア先生のことを伝えてくれって。」

「ああ、そうだね。」

「じゃ、これで僕は帰るね。ジルを迎えに行くよ。」

「うん、ジルにも伝えてね。心配しないように言っただね。」

「ああ、わかったよ。」

病室を出たカスターはマークのところへクレアの話をするために、診療室をのぞいた。

バシツ、ガツシャー

大勢の子供たちがプラーナの誕生会にやってきて、お祝いをするなか、招待されていないコリンが乱入し、おもむろにジリアンをなくりつけた。

「キヤーツ」

「いきなり何をするの、コリン」

プラーナがジリアンをかばい、コリンの前にたちはだかった。

「こいつは、兄貴が暴漢に襲われて寝込んでいるっていうのに、パーティーにでてなにを楽しんでるんだ。」

「コリン、それは違うわ。わたしが来てほしいって頼んだのよ。」

そういつて、プラーナの母親は割り込んだ。

それでも、プラーナを押しつけて、ジリアンの胸倉をつかもうとするコリン。

「殴りたければ、殴ればいいじゃないか。僕は殴られたって痛みなんか感じないんだから。」

「何を強がって、言ってるんだ。おまえはなにもわかつちやいないんだ。レインは弟思いの奴なのに、お前ときたら……。」

「やめるんだ、コリン。」

そこへプラーナの父親が出てきてコリンを後ろからはがいじめにした。

「子供の喧嘩に大人が口をはさむようなことはしたくないのだが、今日はプラーナの最後の誕生日会になるんだ。悲しい思い出ししたくない。」

コリンはプラーナの父親に押さえ込まれながらも、ニヤリと笑った。コリンの笑った顔を見て、ゾクツとし、ジリアンは少しおびえた。

「わかつたよ、終わりにするよ。帰るよ。おじさん、迷惑かけちゃったね、ごめん。」

コリンは下を向いて、そういつと、子供たちをかき分けて、部屋を出て行った。

プラーナが涙を流してジリアンをみていた。

ジリアンはその姿をみて、呼吸が荒くなりはじめた。

「すーはあ、すーはあ。プラーナ、ごめん。こんなことになって。

すーはあ、すーはあ。」

「ううん、いいよ、ジリアン、大丈夫？」

「すーはあ、すーはあ、おじさん、おばさん、本当にごめんなさい。

すーはあ、すーはあ。」

「ジリアン、しっかりして、どこか怪我をしていない、大丈夫なの？」

プラーナの母親は、ジリアンの様子をみながら、怪我をしていないか確認をした。

ジリアンは怪我をしていないことをうなづくことで伝えた。

「ジリアン、落ち着いて、ゆっくり呼吸をするんだ。なにも気にしなくていいんだよ。」

プラーナの父親はジリアンの背中をさすった。

状況を見守っていた子供たちが心配そうにしているので、プラーナの母親は気遣って子供たちを帰らせようとした。

「みんな、ごめんなさいね。楽しんでいたところ。プラーナは来年、寄宿舎学校に入学するから、今回がお誕生会最後になったの。

一緒には中等科にいけないけど、それまではプラーナと仲良くしてあげてね。これでお開きにしましょう。」

そういわれて、子供たちはそれぞれ身支度をして部屋から出て行き始めた。

子供たちがいなくなったあと、ジリアンとプラーナを気遣って、プラーナの両親は二人を残して部屋を出た。

荒くなった呼吸が落ち着き始めたころ、プラーナはジリアンに抱きついた。

「ジル、今日、来てくれてほんとうにうれしかった。だから・・・。」

「プラーナ。寄宿舎学校へ行っても、勉強に差し支えなかったら、手紙をくれるかな。」

「うん。手紙を書くわ。」
「大好きな植物の勉強をがんばってね。」
「うん。がんばるね。ありがとう、ジル。」
そのとき、はじめて、ジリアンは、自分のために、涙を流した。二人は強く抱きしめあった。

カスターが迎えに来たとき、ジリアンの左の頬に見て驚いた。

「どうしたんだよ、ジルまで、そんな青痣つくって。」

「僕までって、そんなつもりはなかったけど。キャス早かったね。」

「ああ、レイニーも青痣が顔に増えていて、石膏がくだけて退院が延びたよ。」

「え、レイニーも誰かに殴られたの？」

「え、違うけど、ジルは誰かに殴られたのか。」

「ああ、うん。大丈夫だよ。いつものことだから。そのプラーナに迷惑かけちゃったなって思って。」

「誰に殴られたんだよ、ちゃんと言うんだ。」

いつになく、怒った口調でいうカスターに驚いてジルは答えた。

「パン屋のコリンだよ。レイニーとはクラスメイトでいつもべたべたしている奴で、僕には意地悪をいつも言うんだ。」

「どうしてまた、そんなことになったんだ。」

「レイニーが寝込んでいるのに、弟がパーティーにでてるのはどうしてだって。」

「コリンは、レイニーの気持ちを知らないんだな。」

「コリンは両親がいてるけど、兄弟がいないから。」

僕も悪いんだ。コリンにいじわるして、診療所に行かないようにドックにいてるって言って、見舞いにこさせないようにしたから。」

「そうか。それにしても、ひどすぎるな。プラーナの誕生日会が台無しになっちゃっただろ。」

「うん、僕もそんなことになって、つらいんだけど、プラーナは僕が来てくれたことがうれいって言うてくれたんだ。」

「そうか。来てよかったんだね。」

「うん。」

「じゃ、帰ろうか。ロブも心配するだろうから。」

カスターとジリアンはエアバイクにまたがり、エンジンをいれると、颯爽とその場所から走り去った。

第四章 それぞれの受難 2 (後書き)

B G M : 「 B O Y S D O N ' t C R Y 」 K E L U N

次回からは大人な展開が・・・。
W

第四章 それぞれの受難 3

サイレンが鳴り響き、小型空挺がスタンドフィールド・ドックに入ってきた。

タラップが降りてきて、中から、白衣を着た黒髪の女性が出てきた。その後ろから、長身の白い制服を着た女性が続いて降りてきた。

作業服のロボと、キャスターがバケツとほうき、ゴミ袋を持ってあらわれた。

「ロボ、おはよう。」

「おはようございます。クレアさん。」

白衣を着た黒髪の女・クレア「ポーターはロボに手を上げて挨拶をした。」

セミロングの黒髪を後ろに束ねて、顔は面長に目はキリリツとつりあがって整っている感じで、胸はさほど無くてもスレンダーな均整のとれたスタイルだ。

「おはようございます、クレア先生。」

カスターにそう言われるとクレアは、カスターの左頬を親指と人差し指でつまんで引つ張ったまま言った。

「このブオトコ。あたしのことを『先生』っていうなって言ってるだろうが。」

「ふあい、すみません。いだいです。ぐれあさん。」

クレアはカスターの頬から手を離れた。

「ロボ、ブオトコの調教がちゃんとされてない。」

「はいはい、すみません。」

「調教って、ひどいです。ブオトコもひどいです。」

「おまえはブオトコで十分だ。言っただろう、整形しろって。」

「はあ、そりゃ、ロボに比べれば、見劣りするでしょうが、整形って。」

「おまえが悪いんだぞ、初めて会ったときにいった言葉があれだも

んな。」

ロブはクレアに聞こえないように言った。

カスターもクレアに聞こえないように言う。

「僕の始めてのオンナになつてくだされったかな……。」

ロブは、クレアの後ろにいてる見慣れない女性に目がいった。

その女性はロブたちより背が高く、図体がでかいと言った感じで太っているようには見えない。

顔も普通で目立つ要素はない。髪は薄茶色で癖毛があるようだ。

ロブの目線に気がついたクレアがその長身の女性を紹介した。

「ああ、ロブ、紹介するよ。わたしの新しい相棒のコーディ＝ヴェツキアだ。」

「はじめまして、よろしく。ロブ＝スタンドフィールドです。」

ロブが手を差し出すと、コーディは黒い筒を右手で抱えていたので、持ち替えて右手を差し出した。

「はじめまして、よろしくです。コーディです。スタンドフィールドさん。」

「ロブでいいよ。ここはスタンドフィールド・ドックだから。」

そういつて、笑顔のロブだったが、握手は大きく振られて、妙な感じだった。

「では、ロブさんで。」

コーディにそういわれて、ロブは拍子抜けした。

「そして、こっちのブオトコの……。」

「クレアさん、酷いです。ブオトコつて紹介するなんて。僕の名前は、カスター・ペドロです。キャスつて呼んでください。」

「ああ、よろしくです。キャスさん。」

「……、なんか硬いですね。」

カスターは苦笑いをして答えた。

「ああ、コーディつてこういう子なんだ。前にお金持ちの弁護士をしていたから、ちょっとお堅いかな。ま、気にするなよ、ロブ。」

「ああ、はい。」

コーデイはロブをまじまじと見つめると、不適な笑顔を浮かべて、会釈をしてその場から立ち去ろうとした。

そのしぐさに、違和感を感じたロブだった。

「食堂へ行つて、ジゼルにコーヒーでも入れてもらうから、そのあと上で話をしよう、ロブ。」

「はい、わかりました。用事を済ませたら、すぐに行きます。」

二人が食堂に向かっていく姿を眺めていたカスターは言った。

「相変わらず冷たい。その冷たさが快感になるんだよねえ。」

「馬鹿なこと言ってるなよ、仕事するぞ。」

「はあい。」

眉間にしわを寄せながらも、ロブは空挺に乗り込んだ。

クレアとコーデイが食堂に入ると、ジリアンとジゼルがいてるだけで、他の誰もいなかった。

クレアがジリアンの顔を見て、驚いていった。

「ジル、久しぶりだが、どうしたんだい、その顔。」

「あ、おはようございます。クレアさん。おひさしぶりです。あ、

これ、ちよつとお。」

「おいおい、喧嘩の勲章かい。ジルが売られた喧嘩をうつような子だとおもわなかったけどね。」

「クレアさん、おはようございます。ご無沙汰してます。」

「ジゼル、おはようさん。ご無沙汰だったね。チビは元気かい。」

「あはは、はい、おかげさまでとっても元気です。コーヒー、ええつと、二つですか。」

「ああ、頼むよ。」

ジリアンはそのとき初めて、クレアの後ろに女性がいることに気がついた。

長身の男性がいると思っていたが、クレアがテーブルの席について、その人が女性であることを認識できたのだ。

ジリアンがコーヒーをもってきて、テーブルに置いた。

「紹介するよ、コーディ。この子が先ほどのロボの弟でジリアンって言うんだ。」

「ジリアン、この人はあたしの新しい相棒でコーディって言うんだよ。」
「はじめましてよろしくです。ジリアンです。ジルってみんなには呼ばれてます。」

「はじめましてよろしくです。コーディです。ジルさん。」
年齢の低い人に対してさんづけするコーディをみて、ジリアンは少々驚いた。

「気にするな、こついう女性だから。それよりレインはどうしたんだ。」

「ああ、ちよつと。街で暴漢におそわれちゃって、右腕を骨折してしまつて。」

「ええ、それは物騒だな。レインはドックにいないのか。」

「そうなんです。診療所にいるんです。」

「マークのどこか。ジルもそのとき、その痣ができたのか。」

「いえ、これは違つんです。そのお。」

「言いたくなければ無理して言わなくていいよ。」

その時はじめて、クレアがコーヒーに口をつけると、それを確認してからコーディはカップに手を伸ばした。

「コーヒーいただきます。」

「遠慮なく、飲んでてよ、コーディ。」

しばらくして、食堂に、ラゴネが入ってきた。

「よう、クレア、ひさしぶりじゃな。」

「ああ、じいさま。ご無沙汰してます。」

笑顔でクレアは挨拶をした。

「ほれ、これで体を休めるといい。」

ラゴネは、酒の瓶をクレアに渡した。

「ちよつといいな。いただきます。じいさま、紹介します。こちら
はあたしのあたらしい相棒でコーディ=ヴェッキア。」

「コーデイ、こちらは、スタンドフィールド・ドックのグリーンオイル製造責任者のラゴネ＝コンチネータさんでみんなからはじいさまと呼ばれている。」

「コーデイは椅子を引き、立ち上がって、会釈した。」

「はじめまして、よろしくおねがいします。コーデイです。」

「おお、よろしくな。」

「クレアは立ち上がった。」

「じいさま、ここに座ってください。」

「そういうと、クレアは、瓶をコーデイにわたし、コーデイのそばにおいてあつた黒い筒を持った。」

「コーデイ、じいさまに、アレックスの話を聞かせてもらいなさいな。楽しいよ。」

「はい。」

「アレックスの話が、いいぞ、してやるぞ。」

「クレアは、自分の飲んだコップを手にもち、洗い場に持っていった。」

「ジゼル、ごちそうさま。」

「いえいえ、あとで、うちによつてくださいね。チビの成長ぶりを見に来てください。」

「ああ、覗かせてもらつよ。」

「ジリアンがラゴネの飲み物を用意して持っていこうとしていた。」

「クレアさん、展望台に行くんですか？」

「ああ、そうだよ。ロブと話があつてね。」

「では、あとで兄さんの分と飲み物を持っていきますね。」

「ああ、ありがとう。」

「そういうと、クレアは、食堂を出て行った。」

「空挺内の掃除を終えて、ロブとカスターは出てきた。」

「思った以上に汚れていなかったな。コーデイがいたからかな。」

「前の相棒って、男だったかな。」

「ああ、酒飲み友達って感じだったな。」

「男女の仲って感じじゃなかったね。」

「お前はすぐそういう話に持っていくだろう。」

ロブは大きな布袋をひとつ手にしていた。

それをみて、カスターは片手にゴミ袋をたくさん持って、空いた片手で手を出した。

「展望台に行くんだろ。それも片付けておくから。」

「冗談だろう。これはクリアさんたちの洗濯物が入ってるんだ。ジゼル用の洗濯籠に直接入れに行く。」

「げ、なんですか、その物言い。まるで変態あつかいじゃないですか。」

「どうしてそこだけ、敬語なんだよ。クリアさんは、お前に洗濯物をいじられたくないんだよ。」

「前回も何もしてないんだけどな。」

「やりそうで怖いって、言われてるんだよ。」

「よく覚えてるね、ロブ。」

「調教してないって、言われてて、それぐらい覚えてないと何を言われるかわからないさ。あとのことは頼んだぞ。」

「ラジャー」

ロブは洗濯室にむかった。

カスターはその後姿をみて、ニヤニヤと笑った。

展望台にロブが入ると、クリアが景色を見渡して立っていた。

「遅くなつてすみません、クリアさん。」

「ああ、別にいいよ。ここは全然変わらないよなあ。景色も良い。空気もいい。風が気持ちいい。」

ロブはヘアのドアを閉めた。

「話って何でしょうか。」

「マークから何か聞かなかったかい。」

「ああ、なにかわけのわからない連中がきて、ダンさんやクリアさんの話を聞いてきたとか。」

「ひとつは、グリーンオイル財団の連中。もうひとつは……。」
「黒衣の民族ですか。」

「みたいだな。連中はあのことを調べているらしい。」

クレアは白衣のポケットから、イヤフォンを出し、左耳にだけ入れた。

ポケットにはなにやら機械がはいっているらしい。

ロブはその様子を見て、なにかを疑っていることに気がついた。

「クレアさん、まだ、人集めには時間がかかりそうです。」

「10人くらいいたら、いいさ。ロブとコーディ、デイゴと……ブオトコって信用できるのか？ 除隊した奴だろ。」

「裏はちゃんと取ってますよ。嘘は言ってます。なにかを調べるために、ここに来たのかもしれませんが、目的はあのことではないでしょう。」

「なぜ、そう言い切れる。」

「セシリアのことを俺が話すまで知らなかったんです。演技をするなら、セシリアの話を聞いて泣いたりしないと思います。」

クレアは、ロブの話を聴きながら、その場をうろつろと歩き始めた。
「カスターの養子先の家庭は里親をやっている、たくさんの子を預かっていました。その経歴に嘘はありません。」

「それで？」

「その里子のなかには、虐待されて苦しんだ子供もいたそうです。その子供のことを思い出して涙が出たということです。」

「ふん。演技じゃないってなあ。」

クレアは立ち止まったとたん、左手で、計器類の横を強くたたきつけた。

バーン

すると、部屋から離れたところで、うめき声がした。

「ウギヤーツ」

ロブはしかめっ面をした。

クレアはあきれた顔をした。

ロブは部屋を出て行くと、しばらくして、カスターの腕を引っ張って、展望台につれてきて、クレアの前に突き出した。

クレアは、両手でカスターのほっぺをつまんで引っ張った。

「おまえ、何をしてたんだ。」

「ぶあい、すみません。ずばいとかではありません。いだいでもくれあざん。」

両手でおもいつきりひっぱったあと、手を離した。

「ぐあぁっ」

ロブはあきれてものが言えなかった。

両手をほっぺで抑えてカスターは言った。

「ごめんなさい。つい出来心で、ふたりのラブラブな会話を聞いてみたいと思って。」

「馬鹿か、おまえは！」

とロブが言ったが。

「馬鹿はお前も一緒だ、ロブ。」

クレアは、怒ってはいなかったが、何でもお見通しといった風だった。

「調教しろって言っただろ。仲間にするなら、調教しろって言っただろ。」

「はい、すみません。」

ロブは素直に謝った。

カスターは目に涙をためていた。

「ロブ、おまえに仲間を巻き込む勇気が無いのなら、あたしの手助けをするって言うてくれたことは無かったことにしてくれ。」

そういつて、クレアはロブに背中を向けた。

ロブは真剣な面持ちでクレアの後姿を見ていた。

「こんな僕でも、クレアさんの仲間にしていただけるのなら、なんでもします。変態行為は改めます。」

「キヤス、変態って……おまえ。」

ロブは脱力感を味わった。

「まあ、いい。今までの会話を聞いたんだな、カスター」

「あ、はい。」

赤いほっぺをしてカスターは直立不動になった。

「スパイじゃないって、言い切れるのか。」

「もちろんです。」

「ロブの言っていた、何かを調べようとしているっていうのはどういうことだ。」

「いや、僕は何も調べるつもりは……、ただ、ロブが隠し事をしているのなら、僕も知られたくないことを隠しておきたいっていうか。」

「隠し事？」

「えええとお、スパイとか、そんなことは全然、関係ない話です。」

「信じてやってください、クレアさん。」

「ロブ、こころあたりがあるのか。」

「うーん、その辺はわかりませんが。」

「はあん、探られたくない腹ってやつか。」

「察しのよい方ですね、クレアさんは。」

「お前に言われたくない！」

クレアはまた、カスターのほっぺを両手で引っ張った。

「ぐあゝ」

第四章 それぞれの受難 3 (後書き)

BGM:「LADY MADONNA」華麗なるスパイダー」LO
VE PSYCHEDELICO

第四章 それぞれの受難 4 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド (主人公の弟・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド (主人公の兄)

ジゼル (スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)

ラゴネ⇨コンチネータ (レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者)

コリン (レインのクラスメイト)

プラーナ (ジリアンのクラスメイト)

ミランダ⇨テレンス (マークの妻・診療所の看護師と医療事務員)

クレア⇨ポーター (ダンの養女・医者)

コーディ⇨ヴェッキア (クレアの相棒・元介護士)

第四章 それぞれの受難 4

タイデイン診療所にむかって、一台のエアバスが向かっていった。診療所の前で止まり、老女が何人が降りると、その後少年が降りてきた。

老女たちは、その少年のことが気になっていたが、バスの中で話しかけても、挨拶もしてくれなかった。同じところで降車しても話しかけなかった。

老女たちが診療所の中に入ると、ミランダが挨拶をした。

「おはようございます。」

「おはよう、ミランダ。」

「今日も、よろしくね。」

「ええ、こちらこそ。さあ、どうぞ」

ミランダが老女たちの受付を始めると、玄関のドアが静かに開いた。外から、うつむいたまま少年が入ってきた。

ミランダは少年を気にしたまま、老女たちの受付を済ませた。

少年はただ、うつむいたまま、玄関に立ち尽くしていた。

ミランダが気になって、少年に近づいていこうとしたとき、うつむいたままの少年から言葉が出た。

「レイン・スタンドフィールドの病室はどこですか。」

食堂では、ラゴネが熱心にアレックス・スタンドフィールドの話をしていた。

ジゼルは昼食の支度をしていて、ジリアンはそれを手伝っていた。

「ねえ、ジル。レイニーは今日、戻ってこれるのね。」

「うん、ロブ兄さんが迎えに行くって言ってくれた。」

「ロブがレイニーを連れ出してから、ジルは会ってないんじゃないの?」

「うん。なんか、やっぱり、レイニーがいないとさびしいね。」

「いつも一緒だったからね。」

「うーん、ドックにいてるときとか、学校では教室が違うし、いつも一緒じゃないけど……。」

「歳が近いし、あとは大人の人ばかりだもの、何かというと、一緒にいてるほうが安心だったんでしょ。」

「そう、そうなんだよ、ジゼル。いてないことで、こんなに不安になるなんて、思ってもみなかったよ。」

「それが家族なのよね。いずれは巣立って離れ離れになることもあるけど、まだ、そんなことも考えられない年齢なんだもの。」

しみじみと、ふたりで会話していると、コーデイがいつのまにか、キッチンにやってきた。

「ジルさん、クレアさんに飲み物を持っていくって言ってませんでした？」

「ああ、そうでした。今から持って行きます。……あの、じいさまの話……。」

「あ、いえ、そういうつもりで言ったのじゃないですよ。わたしはこのまま、ラゴネさんの話を聴いています。」

「あ、はい、じゃ、持って行きます。」

ジリアンは苦笑いそうだった。

コーデイはラゴネのいるテーブルに戻った。

ジリアンは用事を済ませると、二人分の飲み物を用意して、キッチンを出た。

レインが病室の窓際に立って、外を眺めていた。

病室のドアが開く音がしたので、レインは振り返った。

「コリン、……どうしたのその顔？」

コリンの左頬には大きな青痣が出来ていた。

「レイニー、お前こそ、顔に痣があるじゃないか。」

コリンはレイニーのおもいもよらない怪我の具合をみて、驚いて近づいた。

「そのかわいい顔に、痛々しい。」

いつもの様子に、レイニーはたじろいだ。

「ああ、わかったから、それ以上近づかないでね。」

「そんな、つれないな。」

「誰に、僕がここにいること聞いたの？」

しばらく黙ってていたコリンだったが、突然、頭を下げて、下げたまま言った。

「ごめん。僕、ジリアンをなぐってしまったんだ。」

「え！ジリアンを！どうして？」

頭を下げたまま、あげようとしないうコリンをみていたレインは、ジリアンがコリンには何も言わなかったことに腹を立てて殴ったのだと考えていた。

「どうして？って聞くまでもないよね。ジリアンの態度がきにいらなかったんだろ。」

そういわれて、コリンは頭をあげた。

「プラーナから、聞いたんだ。ジリアンを殴ったのは、プラーナの誕生日会で。」

「ええ！！なんて、酷いことを。プラーナのせつかくの・・・。」

「わかってる。悪いと思ってる。でも、我慢できなかったんだ。」

「我慢できなかったって・・・。」

「レイニー、君が怪我して寝込んでるのに、ジリアンがパーティーを楽しんでるなんて・・・。」

「そんな、僕は、僕のことを気にして、プラーナとの思い出が作れないなんて、そんなことジルにしてほしくない。」

コリンはしばらく黙り込んだ。

レイニーはコリンの痣はジリアンが殴ったことでできたのだろうかと考えていた。

「プラーナのお父さんには謝った。でも、家に帰って、父さんにはれて、殴られた。」

父さんに、プラーナの家に連れて行かれて、再度、謝った。

そのとき、プラーナに、レイニーがここにいることを話してくれたんだ。」

レインはジリアンが殴ったのかと疑った自分を少し恥ずかしく思った。

「プラーナは、ジリアンが自分で言うことができないだろうからって言うてくれた。」

僕は、ジリアンに直接謝ることができないから、レイニーに謝っておく。

それでいいだろう。」

「うん、わかった。仕方ないね。」

安心した表情をして、コリンは、笑い始めた。

「しかし、お互い、顔に痣を作っているなんて、おっかしいな。あはは」

「笑えないよ。本当なら、昨日、ドックに帰っているはずだったのに。」

「なんだよ、なにかあったのかよ。」

レインはコリンに、昨日あった出来事を話した。

「僕がいたなら、あんなやつから守ってやるのに。」

いつも、思ってたさ。あいつらに囲まれて嫌がっているレイニーをなんとかしてやるうって。」

「そうなんだ。」

「なんだよ、いまさら。知ってると思ってた。」

「あはは、ごめん。そんなに困っていたように見えたんだ。」

「なんだよ、それ。しかし、なんとかしてやりたくても、小学生のときは、こっちが体が小さかったからさ。」

「そうだね。僕たちのほうが女の子たちより、小さかったね。喧嘩しても確かに負けた。」

レインが笑ってそう話すと、コリンは笑顔でその様子をみていた。

いままで、溜め込んでいたものを吐き出したという開放感に包まれた。

「プラーナとジリアンはあと半年しか一緒にいられないんだな。」
「僕たちは、ずっと一緒だろ。」

レインはしばらく黙り込んだ。

コリンはレインの様子をみて不安に思った。

「いつかは、空艇に乗り込んで、旅をしたいって思ってるんだ。いつまでも、ドックにはいない。」

父さんや兄さんたちのように、あっちこっち行ってみたい。知らない土地へ行ってみたい。」

コリンは愕然とその話を聴いていた。そこに、自分の居場所がないということが理解できていたからだ。

「僕は、パン屋の父さんの後をつぐことになっている。」

それはレイニーがドックのトップになるという、後をつぐことになることと同じだと思ってた。」

「そりゃ、ドックを守っていく立場になるのに、かわりはないけど。ずっと、夢だったんだ。自分たちだけで、空を飛ぶことを。」

目を閉じて、空を飛んでいる自分の姿を思い描き、話すレイン。

その姿を見ながらコリンは、プラーナとジリアンのように、レインとの別れをいつかはしなければならぬことを理解した。

「じゃ、レイニーの夢がかなうその日まで、僕とは仲良くしてくれよな。」

「わかってるよ、こちらこそ、仲良くしてくれよ。」

レインは左手の拳をだし、コリンも拳を出して、軽くぶつけあった。

第四章 それぞれの受難 4 (後書き)

BGM:「ワンダーフォーゲル」くるり

第四章 それぞれの受難 5 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)

カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信部・愛称キャス)

ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者)

ジゼル(スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)

セシリア(前にスタンドフィールド・ドックにいたマールサの知人・愛称セシル)

マーク⇨テレンス(タイディン診療所の医者)

ミランダ⇨テレンス(マークの妻・診療所の看護師と医療事務員)

ダン⇨ポーター(前タイディン診療所の医者)

クレア⇨ポーター(ダンの養女・医者)

コーディ⇨ヴェッキア(クレアの相棒)

第四章 それぞれの受難 5

展望台の部屋に、大きな凶面が広げられていた。バーン。

その凶面の上にクレアは両手をたたきつけた。

「これが、スカイエンジェルフィッシュ号だ。」

「えっ、なんですか、これ。」

「空挺でしょ、何の空挺ですか、クレアさん。」

両手を凶面にたたきつけたまま、クレアは下を向いた。

「ふふふふ、これは嫌がらせだよ、ロブ。」

「誰のですか。」

「セシリア」デミストの復習なんだよ!」

クレアは顔を上げて、笑顔でロブに言った。

「セシリアさんって……。」

カスターは聞き覚えがあつて、思い出すように口にした。

「セシリアをグリーンオイル財団が引き取ったのは知っているだろう。」

クレアは腕を組み、後ろを向いてふたりを背にして話し出す。

「ええ。それで、まさか……。」

「そのまさかだよ。セシリアは、デミスト家の坊ちゃんと結婚したんだよ。知らなかったか。」

「知りませんよ、そんなの。」

「デミスト家の坊ちゃんはセシリアと幼馴染で、将来お嫁さんにしたかったんだってさあ。」

「はあ、そうですか。で、嫌がらせて……。」

「グリーンオイル財団の理事長が去年交代した。前理事がなくなられたとのことだね。」

前理事長の甥である、デューク・ジュニア「デミストは、理事長就任にあわせて、慈善事業を展開することを決めたそうだ。」

その一端が人名救助隊だそうだ。」

クレアは振り返って、凶面を指差して言った。

「クレアさんに白羽の矢があたったんですね。」

カスターは、褒美欲しさの犬のように言った。

「嫌がらせだと言っただろうが。ブオトコ。」

「はあく、ごめんなさい。どうして嫌がらせなんですか。」

「あたしたちを表舞台に引きずり出す。人命救助とか大義名分、事あらば始末すること。」

クレアはカスターをにらみ、口をゆがませて、驚かせた。

「ひいい、そんなあ。」

「クレアさん、俺たち目当てとは思いませんが。」

「もちろんだ。セシリアはあの話は知らない。だから、金を使ってあたしたちを見世物にして、苦しむ姿を拝みたいのだろうよ。」

「人命救助で苦しむんですか。」

「カスター、お前、軍隊にいたんだろう。」

「はい、除隊になりましたけど。」

カスターは直立不動になっていった。

「人が死んでいく様を見なかつたか。」

クレアは軍隊の上官のようにカスターに質問をする。

「いえ、そんな経験はありません。」

「あたしたちは、いくつも経験した。人命救助とかつて職を与えられても、必ず助かるとは限らない。」

ロブはその話を聞いてあきれていた。

「あいつらが、わざと助けられない指令とか、下されないでしょう。」

「さあな。あのオトコがなに考えてるかわからないんだ。」

「あのオトコって誰ですか。」

「デュークだよ。狐目をした、人をさげすむような目で見るオトコだ。」

「会ったことはありませんが、かなりやり手だって聞いてます。」

「表の財団と、裏の財団がある。デュークは裏の財団だったが、表の財団だった前理事長に跡継ぎがいなかったことでデュークが表に出てくるように計画されていたらしい。」

「そういう話をどこで手に入れるのですか。」

「キャス、お前が除隊になった理由は、窃盗だろう。」

「ロブ、な、なんてことを言うんですか。僕が窃盗なんてしていません。」

「どうして、敬語になるんだよ。」

「濡れ衣で無理やり書かされたけど、えっとお、始末書。でも、それは処分してやるから依頼除隊しろって。」

「それで病気を理由に除隊したって話だろ。でも、裏では窃盗を犯したという情報が流れている。」

「ひい、冗談だろう。物品がなくなったのは、僕たちのせいではないんですからね。」

「さっきの話を聞いていたのなら、わかるだろ。裏をとるにはその手の情報屋とのつながりがある。」

「そんな情報網が、このドックに必要な。」

「必要だ。そうでなくても、いまだに黒衣の民族に命を狙われている。」

「ドックに必要なくても、あたしには必要だ。いろいろと、足を伸ばせば、いろんな人間とのつながりはできる。」

「で、話を元に戻していいでしょうか。」

「脱線させたのは、お前だろうが。カスター」

「はい。嫌がらせて……。」
クレアは深呼吸して、力を込めて言った。

「しかも、この空挺の塗装色は、オレンジと黒なんだよ！セシリアのたつてのお願いだつてさ！」

「そ、そんな……。」

「狙ってやってくださいっていうことか。オレンジと黒って、的じゃないんだから。」

ロブは自分の体から力が抜けていくように感じた。

「わざわざ、お話してくださるんだよ、そのセシリアのご主人はさ
！」

とそこで、二人には聞こえない物音が聞こえたロブが耳を澄まして
言った。

「しっ！黙って。」

ふたりは神妙な面持ちでロブの顔を見た。

「ジリアンがこっちに来る。」

コリンが安心して、診療所から出て行った。

老女にまみれてバスに乗り込むコリンを、レインは見送っていた。

病室からは見えないが、診療所前の道からは、ドックがある岩山が
見える。

レインはさびしそくに岩山を眺めていた。

「レイニー、お昼にしましょう。中に入って。」

ミランダが玄関からレインに声をかけた。

「あ、すみません。」

レインは足早に中に入っていった。

午前の診察を終えて、マークは診察室から、居住スペースに入っ
ていこうとした。

レインは診療所に入院中、食事をマーク夫妻の居住スペースでとっ
ていた。

「三人の食事は今回で終わりだな。」

「まあ、あなた、そんなことをわざわざ言わなくても。」

「ご迷惑をかけしまって、ごめんなさい。」

「謝らなくてもいいの、レイニー。これはお仕事でもあるし。子供
のいないわたしたちにとって・・・。」

「おいおい、そんな話をするなよ、ミランダ。」

「ああ、ほんと、ごめんなさい。昼食をいただきます。」

三人は、黙々と食事を始めたが、辛気臭い話をしなくなかったので、

マークが思い出したように話をしだした。

「そういや、クレアがドックに来るらしいな。」

「ああ、朝には到着したみたいですよ。サイレンが風に乗って聞こえてきました。」

「あら、わたしたちはサイレンなんて、聞こえないのに。」

「耳慣れた音ですからね。微かなポリウムでもわかりますよ。」

「カスターには言っておいたが、クレアがきたのなら、ここに顔を出すようになって。」

「そうねえ、クレアには2年ぐらいあってないわね。」

「そうなんですか。ドックには半年に一度くらいは来られていますけど。」

「やっぱり、診療所に足を運ぶのは抵抗あるのかしら。」

「ダンの第一発見者だったからな、クレアは。」

結局、辛気臭い話につながってしまった原因をつくったことに気づいたマークは、罰が悪そうにもくもくと食べ始めた。

「ダンのことで、危険な目に合っていないことを祈るばかりなの。」

レイニーたちもロブのことが気がかりなのと一緒よね。」

「クレアさんが、医学生時代に下宿していたのが、マーク先生のお家だったんですね。」

辛気臭い話をそらすような話題に切り替わり、マークはため息をついた。

「そうだ。あのときは、まだ素直でおとなしい女の子だったかな。」

「まあ、あなた、そんなこと。大人になっても素直なよい女性ですよ、クレアは。」

それから、クレアの下宿時代の話に花が咲いて、苦笑いしながら、レインは二人の話を聞き入った。

「うわあ、すごい。この設計図は空挺ですか。」

ジリアンは目を丸くして図面を見渡した。

「そうだよ、今は思索段階で、製作には着工していない。いろいろ

と専門家の意見を聞いて、使い勝手も加えないとね。」

「クレアさんが搭乗する空挺ですか。」

「ああ、そつだよ。この空挺を飛ばしまくって、人命救助に当たるの。」

「すごいですねえ。」

ジリアンは目を輝かせて図面を見ていた。

天気図を見ることができるとは、図面では概観図ぐらい理解できていたジリアンだった。

「兄さんも搭乗するの？」

「ああ、そのつもりだけど。」

クレアはロブに目をやりながら、ニヤリと笑った。

その様子に不安を覚えたロブだった。

「ジリアン、お前ものるんだよ、この空挺に。」

「え、ほんとですか。」

「何を言ってるんですか、クレアさん。乗せませんよ。」

「なあに、言ってるんだあ、ロブ。乗組員を集めるっていつて、ちつとも集めてないだろ。」

「それと、ジリアンをのせるのとは、話が違います。まだ、いろいろと教え込まなきゃいけないことがあるのに……。」

「仲間を巻き込みたくないって悩んでいる男に覚悟をきめさせてあげるよ。レインとジリアンをクルーにいれることだ。」

クレアはロブをにらめつけた。

ロブもクレアににらみ返した。

「危険なことはさせたくないっていうのは親心だが、かわいい子ほど、旅をさせろという。」

成長できなくなるんだよ。そんなの過保護なんだよ！」

カスターはいつになく真剣にふたりの話を聴いていた。

ジリアンは罰が悪そうにじっとしていた。

「もうひとつ、提案しておく。レインとジリアンには、母親が必要だ。」

母親代わりがいたほうがいいだろう。」

「まさか、ジゼルを。」

「まさか、ジゼルには、わたしが取り上げたチビがまだ2歳にもなっていないじゃないのか。」

連れて行くわけ無いだろう。」

「じゃ、誰を。」

「コーディだよ。あの子は、わたしなんかより、よっぽど母性本能がある。」

「はあ、そうなんですか。」

「クレアさん、彼女は、信用できるのですか。」

「そうだねえ。グリーンオイル財団からのお目付け役としてあてがわれたからなあ。」

今夜話をつけるさ。」

クレアは片手でコップを持っている振りをして、口につけるしぐさをした。

「お目付け役ってわかってて、彼女を連れてきたんですか。」

「ああ、コーディが介護していた金持ちってというのは、前グリーンオイル財団理事長ダグラスJrデミストなんだ。」

第四章 それぞれの受難 5 (後書き)

BGM: 「獅子の種」ジン

第四章 それぞれの受難 6 (前書き)

登場人物

レイン＝スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)
ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の弟・愛称ジル)
ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)
カスター＝ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信部・愛称キャス)

コリン (レインのクラスメイト)

マーク＝テレンス (タイデイン診療所の医者)
ミランダ＝テレンス (マークの妻。診療所の看護師と医療事務員)
ダン＝ポーター (前タイデイン診療所の医者)
クレア＝ポーター (ダンの養女。医者)
コーディ＝ヴェッキア (スカイエンジェルフィッシュのクルー。前グリーンオイル財団理事長ダグラス・Jr・デミストの介護士)

デューク＝ジュニア＝デミスト (現グリーンオイル財団理事長)
ダグラス＝Jr＝デミスト (前グリーンオイル財団理事長)
セシリア＝デミスト (グリーンオイル財団理事長の妻。前にスタンドフィールド・ドックにいたマーサの知人。愛称セシル)

第四章 それぞれの受難 6

ロブはエアバイクにまたがったまま、街角にいた。

目線の先は、パン屋のガラス越しの向こう、家業の手伝いをするコリンの姿だった。

コリンの頬に青痣が出来ているのが見えた。だいたいの想像はつく。ロブは、エアバイクのエンジンを入れて走り出した。

ロブはバイクを走らせながら、考え込んでいた。

繰り返し響く、クレアに言われたこと。

「ロブ、よく聞きな！お前の心の弱さがあの子達を苦しめているんだ。」

あたしがお前の命をつなぎとめたのは、苦しめたまま、自分でけりをつけないで命を落とすことをさせないためだ。

そんなことしたら、お前の魂はちゃんと昇天できなくなる。」

クレアの言いたいことは理解しているロブだが、思うようにいかないことをいつも齒がゆく思っていた。

（だから、クレアさん、俺はあなたと一緒に行動したいって思っているんだ。）

ロブは自分に言い聞かせるよう、こころにつぶやいた。

診療所の受付の前には、退院の用意をすっかり済ませたレインが首を長くして待っていた。

夕方の診療時間前なので、診療所は閑散として、物音もしない。

微かに聞こえてきたバイクの音に、レインは立ち上がった。

エンジンを切る音がしたと同時にレインは荷物を持って、玄関のドアを開いた。

「遅くなって悪いが、俺はテレンス先生と話があるんだ。それまで待っていてくれないか。」

待ち焦がれたお迎えに笑顔だったレインの顔は不機嫌になれず、戸

惑った顔をした。

レインをよそに、ロブは、診療所の居住スペースに入っていった。レインはまた、受付の前に立ち尽くした。

ソファでくつろいでいたマークはロブの姿が目に入った。

「よう、迎えに来たか、ロブ」

「先生、お世話になりありがとうございます。話があるのですが、よろしいですか。」

「なんだ。診察室に行こうか。」

「はい、お願いします。」

二人が診察室に入っていく姿をみたレインは、落胆して、その場に座り込んだ。

「話って、なんだ。」

「クレアさんのことです。」

「ああ、ドックに来てるんだってな。こっちに顔を出してくれるのかな。」

「ええ、明日には何うと話していましたが。実はまた、俺たち一緒に仕事をすることになるんです。」

「また、危ないことか。」

「ええ、名目は人命救助なのですが、グリーンオイル財団がバツクなのです。」

「なんと。クレアを探していた理由は、それか。」

「そうみたいです。先にきた怪しい連中はおそらく、黒衣の民族カラスだと思えます。」

「ダンが、なにかやらかしたらしいんだが、詳しくはなにも聞かせてくれなかったからな。」

「何もしゃべらなかつたのは、先生を守るためでしょう。ミランダさんもいらっしゃることだし。」

「クレアにはしゃべってたのか。」

「いえ、その様子はありません。だから、危険な道のみを選んでま
で、あそこへ。」

「それで、なにかをつかんできたのか。」

「そうみたいです。あえて、グリーンオイル財団がバックの人名救助隊を利用してまで、探ろうという感じです。」

「軍がだまっちゃんいないだろう。あそこの物の件なら。」

「ええだから、その救助隊のメンバーにジリアンを入れ込むことになりました。」

「なんだと、チビたちをつれていくのか。」

「あ、はい。」

「ロブ、お前、それを承知したのか。」

「ええ、最初は、冗談じゃないって思ったのですが。」

俺のいない間になにかあるより、そばにおいていたほうがいいかと思いなおしました。」

「うーん。お前も15歳で境界線をアレキサンダー号にのって行き来していたくらいだが。」

チビたちをつれていくのとは、また危険の度合いが違うからな。」

「でも、軍自体、手出しはおろか、保護や護衛することくらいの姿勢をもつでしょうから。」

「しかし、俺はクレアのすることに歯止めはかけられないぞ。あいつは自分の命はダンがくれたもので、ダンのためなら惜しくないと言ったくらいだからな。」

「そうですね。先生に止めていただこうとは思っていません。」

ただ、かならず、生きて帰ってほしいと言ってほしいのです。」

「お前が守ればいいじゃないか。」

「俺は、クレアさんに命を救われた身ですから。」

「下宿時代に娘のようにかわいがったとはいえ、ダンの養女で遠慮してたところはあったからな。ミランダとは仲良くしてて心配かけたくないという思いはあるみたいだな。」

「先日、そういう仲じゃないかって、言われましたね。」

「ああ、あれは……。」

「俺にはその気持ちがありました。でも、クレアさんには拒まれま

した。」

「やっぱりそうか。」

「拒まれたというか、見透かされたというか。俺の弱さをつかみとって、見せ付けてくれた感じですよ。」

「すまん、からかって悪かったよ。」

「いえ、そんなつもりでは。ただ、俺と一緒にいて、生き急いでほしくないだけなんです。」

「俺もお前と同じ気持ちだ。クレアにはダンの分まで幸せになってほしい。」

「話はそれだけです。くつろいでいるところ時間をとってしまつて、すみません。」

「ああ、いや、いいよ。ロブがクレアとつるんでいてくれてたら、安心だよ。あはは」

「つるむつて。ははっは。」

二人は煮え切れない思いを笑つてごまかすことでしか、今は出来なかった。

ロブは立ち上がり、診察室からでた。

そこへ、洗濯物を抱きかかえたミランダがレインと話をしていた。

「ミランダさん、お世話になりありがとうございます。」

「いえいえ、こちらこそ、レイニーがいてくれたおかげで、楽しく食事させてもらったわ。」

「兄さん、先生との話は終わったの？」

「ああ。もう、身支度はできているんだな。」

「うん。」

「ロブ。クレアがドックに来てるって確かかしら。」

「ええ、マーク先生にもお話しましたが、明日、伺いに来られると思います。」

「そう、元気になっているのね。」

「心配されないようにって言っても、心配されるのでしょっけど。それには及ばない感じですよ。」

「わたしたちには、子供がないから、クレアのことを娘のようにおもっているのよ。」

お嫁に行かないばかりか、命を危険にさらすような男の人みたいに行動しちゃうって。」

「大丈夫ですよ、ミランダさん。クレアさんは強い女性ですから。」

「そうね。弱音をはかない、男性には喧嘩を売っちゃう向こう見ずなひとですものね。ふふ。」

「では、レインをつれて帰ります。ありがとうございました。」

「ええ、お大事にね。」

「ありがとうございます。ミランダさん。では失礼します。」

レインは頭を下げると荷物を抱えて玄関のドアを開いた。

夜、展望台に月明かりが差し込むと、室内に明かりがいらぬ。

そこに、クレアとコーデイ、ロブとカスターがテーブルの椅子に腰掛けて外を眺めていた。

テーブルの上には、お酒が何本か並んで、酒がつがえたコップが4つあった。

「さあ、今晚は、お互いの腹具合を見せ合いっこしよう。」

「もう酔ってるのですか、クレアさん。」

コーデイはお酒に口をつけていなかった。

「コーデイ、飲んでないじゃないか。飲みなよ。じい様の手作りの酒は、飲みがなくておいしい。」

コーデイは思い切って、コップに注がれた量の半分を一気に口に注ぎ込んだ。

その様子を遠目で眺めていたロブをコーデイはじーっと見始めた。違和感を感じたロブはコーデイから目をそらした。

「あたしから、腹のうちを披露しよう。」

「なんでしょうか、クレアさん。どんなお腹ですか。」

「ブオトコはだまってな。」

「はあ〜ん。また、そんな言い方。」

「あたしは、スワン村にたどりついた。ロブとエアジェットで向かったが、失敗に終わったのでね。」

荷物もちと登山したら、たどりついた。そこに半年間いたよ。」

「スワン村ってなんですかあゝ、クレアさん」

酔っ払ってきているカスターがクレアに絡むように言った。

「境界線にちかい、山奥の奥。湖のそばに白い建物があつて、その様子がスワンの姿に似ているからスワン村と言われている。」

その白い建物は、本を保管しているいわば図書館なのだが、みんなそれを本屋といっている。

本は売ってない。本を預かっている建物だ。」

「どんなく、本を預かっているのですか。」

「発禁本だ。」

「え!!」

「はあ!!」

カスターとコーデイが驚いた。

「国で発行してはいけないと禁止されている代物。研究書物やら、さまざまな民族の詳しい資料やら、皇族の暴露本、グリーンオイル財団の裏帳簿とか。」

「裏帳簿って。そんなものは価値が無いでしょう。」

「それがあるんだな。グリーンオイル財団を陥れるための手段としてね。」

「クレアさんは、それを見つけたんですか。」

「いや、残念ながら、それは鍵つきの保管棚にあるから、拝見することはできない。」

「そんなこと、コーデイに話していいんですか、クレアさん。」
黙って聞いていたロブは、口を出し始めた。

「コーデイは、グリーンオイル財団のお目付け役でしょう。」

それを聞いてコーデイはコップに残ったお酒を飲み干して、テーブルにたたきつけた。

バン!

その様子に3人は驚いて、コーデイの方をみた。

「ロブさん。あなた、女性を幸せにできないオトコだと思い込んでいるでしょう！」

クレアは、顔を下に向けて、笑いをこらえ始めた。

カスターはコーデイの言葉を理解できないでいた。

「突然、なにを言い出すんだ。」

目を丸くして、コーデイをみたロブは言った。

「わたしの初恋の人に、目つきが似ています！」

きつぱりと、胸を張って、コーデイは言い切った。

「あはははは、コーデイ、君はすごい。たしかにそうだ。」

クレアは笑いをこらえきれずに大声で笑い始めた。

「みなさん、聞いてください。わたしがお腹に溜め込んだ話を。」

クレアは笑いを止めた。

「わたしの初恋の人は、グリーンオイル財団理事長ダグラス・Jr・デミスト氏の執事をしていた方でした。」

その方は、デミスト氏が亡くなった後、拳銃自殺されました。」

一気に酔いが覚めるように、3人は顔色が変わった。

「旦那様のデミスト氏がなくなられたことも納得していません。誰かに殺されたと思っています。」

また、執事をされた初恋の人は、自殺するような方ではありません。」

コーデイの目から、涙が零れ落ちると、カスターはあわててポケットからティッシュをさし出した。

「グスツ。旦那様は良いお方でした。殺されたのなら、なぜなのか、理由を知りたいです。」

執事をされた初恋の人は気にかけてないように言われましたが、その後、拳銃自殺という死に方をされて……。うつつうつつ」

カスターはコーデイの背中をなでて、椅子に座るように促した。

コーデイはテーブルに両手を組んで、それを見つめて話した。

「復習するつもりはありません。なぜ死ななければいけなかったの

か、どうしてわたしにはなにも言ってくださらなかったのか、知りたいと思いました。

そんな時、デューク・ジュニア・デミスト氏が声をかけてくださり、人命救助のメンバーにならないかと言われました。

グリーンオイル財団にかかわっていたら、いつか、わたしの知りたいうちにたどり着くような気がしたのでです。」

神妙な面持ちで4人は顔を見合わせていた。

「わたしはグリーンオイル財団のスパイではありません。デューク・ジュニア・デミスト氏からは何も支持されていません。

そして、あなた方がなにをしようとも、医療行為以外のことで報告することはありません。」

「ありがとう。そう言ってくれたら、命を危険にさらす話し甲斐がある。」

クレアはそういって、立ち上がった。

「その前に、カスターが絡んでいることを話しておくよ。」

「え、僕が？どうしてなの、ロブ。」

おどろく、たじろぐカスター。

「お前が除隊になったほんとうの理由は、品物がなくなったことだろう。」

「ああ、そうだけど。輸送機で、グリーンオイル研究所から預かった物件で、補給を兼ねて、停泊した境界線近くのドックでいつの間にか品物が1件紛失してて、見張りをしていたはずの隊員が行方不明になっていた。」

「その品物は黒衣の民族が盗んだことになっているが、本当はそうじゃない。」

「そこまで知っているのなら、なにも……。」

「その品物を黒衣の民族に渡さないために、先になくしたことで、あるところへ持ち込んだのさ。」

「あるところとは？」

「スワン村だ。」

クレアは真顔で答えた。

「本屋は発禁本を保管するところ。スワン村事態は禁止されている研究をするいわくつきの研究者たちや科学者が住んでいる村なんだ。」

「そこへ、持ち込んだってことは、軍は……。」

「表向きにできない裏事情で、スワン村に持ち込んだ。研究所だとかやばい内容の形跡を残すわけに行かないからな。」

それにスワン村は表向きから追放された連中が流れてくる村でもあるんだ。」

「僕は、最初から、軍に利用されて……。ロブはいつからそのことを知っていたんだ！」

「まあ、そんなに怒るなよ。うすうす、そうおもっていただけで、つながっていくとは思わなかったんだよ。」

さつきから、黙り込んでいたコーデイが口にした。

「ここに顔をあわせた4人は、軍隊やグリーオイル財団が裏でうごいている状況に何らかの形で巻き込まれているのですね。」

「ああ、そうだよ。コーデイ。」

今、話を聴いたみたいに、コーデイは前理事長や執事の死を、カスターは自分が除隊になったことを。

あたしはあたしの養い親の死を。ロブは……。」

カスターとコーデイはクレアを見ていたが、その視線をロブに変えた。

「俺は、セシリアIIデミストの話をしなといけない。」

第四章 それぞれの受難 6 (後書き)

BGM:「リトルダンス」高鈴

第五章 セシリア 1 (前書き)

登場人物

ロブ＝スタンフィールド (主人公の兄)

フレッド＝スタンフィールド (主人公の長兄)

ゴメス＝スタンフィールド (主人公の父)

デイゴ (スタンフィールド・ドックのクルーで板金工)

ダン＝ポーター (前タイデイン診療所の医者)

クレア＝ポーター (ダンの養女。医者)

セシリア＝デミスト (グリーンオイル財団理事長の妻。マーサの知人。愛称セシル)

第五章 セシリア 1

「諸悪の根源はセシリア。」
ロブがセシリアのことを語る前に言った言葉だった。

遡ること13年前、ロブが15歳のときのこと。

アレキサンダー号はひところの賑わいを見せた空挺輸送時代のなかで花形だったが、そのころは引退したほうがいいといわれるまでになっていた。

いくら、手入れを施しても、衰えるものは数限りない。装甲や内装を取り替えて、だましまし空を飛んでいた。

艦長は、ゴマス・スタンドフィールド。フレッド、ロブ、ディゴなどの若い者や数名を乗せての航空だった。

仕事の内容は主に運搬で、そのときは境界線付近の山間から多量の鹿をさばいて売りに出される鹿肉を運ぶことだった。

積荷をして、その際スワン村に滞在して出てきたダン・ポーターを搭乗させ、スタンドフィールド・ドックの近場にあるリゾート地に向かう航路だった。

出発したあと、やけに濃霧が濃くなり、計器類も反応が鈍い状態に陥り、アレキサンダー号は強風にあおられて、境界線危険地帯に入ってしまった。

「父さん、大丈夫ですか。近すぎると黒衣の民族に攻撃されてしまいますよ。」

20歳のフレッドが心配そうに、計器で位置を確認しながら、父のゴマスに声をかけた。

「ああ、わかっている。」

甲板で、外を確認していたロブが操縦室に報告を入れてきた。

「左方向に、光るものが見えます。光っては消えを繰り返しています。」

フレッドやロブには、空挺に搭乗している以上、父親に対しても、敬語を使うよう徹底されていた。

「戦闘かもしれないな。境界線ちかくだから、威嚇射撃しているかもしれない。」

デイゴ、近づけないように、操縦できるか。」

「はい、やってみます。右方向からの横風がつよいですね。」

操縦室は、操縦しているデイゴを前に、後方にゴメスが計器類を前にした場所に座り、デイゴの横をフレッドが計器類と通信器をまかされて座っていた。

ロブは甲板で、耳を澄まして、微かに聞こえる発射される音と、それが当たった音を聞き取っていた。

霧の模様、流れが速くなってくる様をみて、あたりの様子が見えるのを予測した。

アレキサンダー号の姿が、交戦している側に見つかるのは避けたいと思い、ゴメスにロブは報告した。

「交戦はまだ続いている模様ですが、こちらの霧が晴れてくるかもしれない。」

その報告を聞いて、ゴメスは即座にフレッドに指示をした。

「レーダーの様子はどうか。あちら側の状態が把握できるか。」

「はい、エアジェットのような空挺が何機かいます。前方に1機と後方に2機あります。」

「レーダーでは、軍か、黒衣の民族かどうかわからないな。」

「エアジェットでは攻撃できません。迎撃機なら、軍でしょう。」
デイゴが口を挟んだ。

ロブが甲板から交戦しているほうへ向かって目を凝らしていると、追われている機体が弾が当たり火を噴く様子が見えた。

アレキサンダー号の機体が、交戦している側にも見えたはずだが、機体に命中したことでこちらの様子を把握している状態ではないだろうと憶測できた。

「機体に弾が命中した模様です。火を噴いて下降していると思いま

す。」

ロボの報告を聞いて、ゴメスはデイゴに命令を下した。

「上昇しよう。こちらの様子に気づかれないうようにするのだ。」

ゴメスは、マイクを手にとってスイッチを押した。

「乗員に告ぐ、急上昇を開始する。各自、体を固定するなり、なにかにつかまったりしてくれ。」

デイゴは操縦桿を強く握り引っぱりあげた。

「ロボ、セーブロープをしっかり握っている！急上昇する！」

急上昇でアレキサンダー号は濃霧を切り裂く。

ロボがセーブロープを強く握り締めると、機体が傾き、ロボの体は宙に浮いた。

アレキサンダー号は、勢いよく、濃霧をつきぬけ、雲海を抜けた。

抜けた場所は、太陽の日差しがきつく、ロボは片手でセーブロープを握り、もう片手で首にかけていたゴーグルをかけなおした。

遠めにみて、黒衣の民族の本拠地がある赤山が雲海から姿をあらわしているのを確認し、アレキサンダー号との距離を見計らった。

「境界線区域から、安全区域に戻れた様子です。」

キツキイー、キツキイー、キツキイー。

撃墜された機体が岩肌を舐めるようにこすり付けているのか、金属音が鳴り響いていた。

火花は消え去り、音だけが反響する。

ロボが甲板から、身を乗り出して、雲海の方をのぞくと、アレキサンダー号が飛行している下を撃墜された機体が墜落した様に思えた。しばらくすると、操縦席に、ダン・ポーターがあらわれた。

「いったい、どうしたんだ。ゴメス。」

「ダン、すまないな。急上昇してしまって。」

そのとき、フレッドがヘッドフォンから通信が入ったのを確認した。

「父さん、あ、船長。SOSの信号が出てます。」

「なんだと。墜落した機体からか。」

「はい。」

「いったいどうしたというんだ。墜落した機体って。」

「いや、その、追撃されていたみたいなんだ。」

「じゃ、助けに行こう。」

「待ってください。ポーター先生。相手は黒衣の民族カラスかもしれないですよ。」

デイゴは操縦桿を握りながら、マークに忠告した。

「黒衣の民族だろうが、なんだろうが、SOSを発信して助けを求めてきたのなら、応じないといけない。

わたしがいこう。」

「待ちなさい。ダン。ロブをつれていきなさい。」

ゴメスが言うと、ダンはうなづいて、操縦室を出た。

ブルーボードと呼ばれるエアジェットが谷山を飛んでいた。

左右の翼が一枚の板のようになり、操縦席はグライダーのようにつぶせになる姿勢で乗るタイプである。

ロブが操縦し、ダンは救急医療セットを抱えていた。

撃墜された機体は、谷底まで落ちずに、緩やかな崖に右翼をもぎとられた状態で不時着した様子だった。

ブルーボードは機体からロープを出し、尖った岩にひっかけて固定させた。

ダンは機体からおりると、撃墜された機体の操縦席を覗き込んだ。手前に白い民族衣装を来た女性が見えた。

中を開けると、その女性は明らかに黒衣の民族ではなかった。

操縦席には、黒い民族衣装をきた男性が顔面から血をながしい、椅子と操縦桿にはさまれて圧迫しているのが確認できた。

ダンが女性の首に手をやり、脈を確認した。

女性は白い肌に頬をりんごのように真っ赤に染めている。

ダンは女性がつつぶせになっているので、左肩をおしあげた。女性の胸から下の部分を見てダンは驚いた。

「おお、これは……。」

ロブは、ブルーボードをしっかりと固定し、撃墜された機体のエンジンが爆発しないかどうか確認していた。

機体のエンジンは、岩肌にこすりつけて右翼をもぎ取られたとき、エンジンの延焼も一緒に消化させてしまったようだった。

ロブが操縦席の方に向かっていくと、ダンが白い民族衣装を着た女性を抱きかかえていた。

その女性は妊婦だった。

「ポーター先生、その女性は大丈夫なのですか。」

ロブ自身、その女性をみて、民族衣装を着ているものの、黒衣の民族ではないことは理解できていた。

「ああ、生きている。腹部の大きさから言っても、臨月かもしれない。」

「先生、操縦していたのは……。」

「男は死んでいる。あきらかに黒衣の民族だ。」

ロブは、ダンを前に進ませて、操縦席の方へ行き、操縦桿にうつぶせになっている男の奥に手をやり、SOSを発信させているスイッチをきった。

境界線区域から安全区域に入ったとしても、SOS発信を受信して黒衣の民族がやってくるかもしれないからだ。

ダンは、平坦な岩を見つけてそこに女性を仰向けに寝かせ、医療キットから聴診器を出し、おなかに当てた。

「胎児の心臓の音は聞こえる。無事だな。」

しかし、寝かした女性の足元をみると、血が流れているのが見えた。

「だめだ、破水している。」

ダンは急いで女性を抱きかかえると、ブルーボードに乗せようとした。

「ロブ、すまない。君はここに残って、迎えが来るのを待っててくれないか。」

「あ、どちらにしろ、そうなると思ってましたが、どうかしたのですか。」

「お腹の赤ん坊は無事だが、この女性は破水している。赤ん坊を取り出さないと、母体も赤ん坊も危ない。」

「わかりました。」

ロブは二人が乗り込んだのを確認してから、ブルーボードに固定していたロープをはずした。

ダンがエンジンを入れるのを確認すると、ロブは後ろから崖に向かって押し込んだ。

ブルーボードは、崖に落下せず、弧を描いて、機体が上に向くと、ロケットエンジンが火を噴き、急上昇していった。

ダンは操縦桿を握りながら、考えていた。

境界線区域付近を居住している村民には誘拐が多発していた。

黒衣の民族により拉致だと思われ、拉致された者たちは奴隷にされていることが書かれた書物をダンはスワン村で読んだばかりだった。撃墜された機体についた男女は上質な衣装だったので女性自身がふくよかで肌も荒れていないので奴隷扱いはされていないとダンは思った。

陵辱による出産で生まれてきた子供たちが奴隷にされる可能性や、命を軽んじられて戦士として育てられる可能性など、ダンはさまざまに考えをめぐらしていた。

（生まれてきても、母親にとっても赤ん坊にとっても良いことなどあるまいが。）

混血は見た目にはわからないが、思考や行動に異端がみられるので血液検査で判明することがあった。

疑いをかけられて検査されることはまれだが、世間の目がかなりきつくなるのは目に見えるようだった。

（そついや、クレアが異端児だったので、疑いの目で見られていたな。キツイな。）

ブルーボードが雲海を抜け、アレキサンダー号を前方に確認できると、ダンは不安な考えをよぎらせた。

（死んだ男の衣装が上質だと、貴族かもしれないな。もし、そうなら、見つかったらロボの命が危ないな。）

第五章 セシリア 1 (後書き)

BGM:「眠れない悲しい夜なら」 paris match

第五章 セシリア 2 (前書き)

登場人物

ロブ＝スタンフィールド (主人公の兄)

フレッド＝スタンフィールド (主人公の長兄)

ゴメス＝スタンフィールド (主人公の父)

ディゴ (スタンフィールド・ドックのクルーで板金工)

ダン＝ポーター (前タイデイン診療所の医者)

セシリア＝デミスト (グリーンオイル財団理事長の妻。マーサの知人。愛称セシル)

第五章 セシリア 2

ロブは、撃墜された機体の様子を見ていた。

あきらかに、盗んだ機体を黒衣の民族が改造しているのがわかったところどころに、無理やり改造されて、溶接やら塗装やらがまだらになっている。

死んだ男の衣装が上質な布地だとわかり、スイッチを切った際に触れた体の筋肉が引き締まっているのを感じたので、ロブは戦士かと考えていた。

父ゴメスからは、黒衣の民族で戦士に会うと有無を言わず攻撃されるから、ひとめで判断するように忠告されていた。

それを思い出した途端、ロブは自分の身の危険を感じ、辺りを見回しておおきな岩をみつけ、そこへ身を隠した。

ダンはアレキサンダー号に帰還した後、フレッドにブルーボードでロブを迎えに行かせた。

救出した女性をベッドに寝かせ、気付け薬を嗅がせた。

しばらくすると、女性は意識を取り戻したが、激痛を感じ、叫んだ。

「うあああ。」

眉間にしわを寄せ、痛みをこらえた。

「陣痛が始まっているのだな。」

デイゴが様子を見に来た。

「ポーター先生、無線で女性を救出したと聞きましたが。」

「ああ、臨月の妊婦だ。お前は男だから、部屋のなかにはいるな。

悪いが、お湯をわかしてくれ。沸いたら呼んでくれ。」

「お湯をわかすって、何を始めるんですか。」

「出産だよ！」

デイゴは驚き、急いでその場から離れて厨房に向かった。

ブルーボードに乗ったフレッドは谷底に向かって降下していった。リーダーを見ていると、後方からなにかの機体が向かってくるのが見えた。

それらは、谷間を縫うように飛んでいた。

一方、岩に隠れていたロブは、耳を澄ましていた。

風をきる音と、その奥で何かに接触する音が聞こえた。

（手前は兄さんだな、後方は谷山に不慣れなエアジェットか。）
体がでかく二人分の体重のフレッドがブルーボードにのっていると機体の先が大きく上下に揺れる。

翼を谷間に吹く風にあてて飛んでいるので、機体の先を上向きにするように操縦しなければならず、風を切る音が上下に振幅していた。ロブは岩から顔を少しだし、ブルーボードが向かってくるのを確認すると、飛び出した。

フレッドがロブの姿を確認すると、ブルーボードの飛行の位置がロブより上なので、さらに降下した。

降下するのを確認して、ロブは谷底ぎりぎりの崖に足をかけ、飛び出す用意をした。

ブルーボードがロブの真下にきたとき、ロブは飛んで、ブルーボードの翼に着地した。

着地と同時に、ブルーボード上に取り付けてあるセーブローブに両手を固定させた。

そして、手で2回ほど機体をたたいてフレッドに合図をした。

フレッドは操縦でブルーボードの機体の先を下に向け、弧を描くように上向きに風を当てると、ロケット噴射をして上空にむかって飛んだ。

ロブはブルーボードから弾き飛ばされないようにしていた。

ブルーボードは雲つきぬけて、アレキサンダー号の姿が見える位置まで上昇していった。

ロブたちがアレキサンダー号に帰還したときには、出産は終わって

いた。

救出された女性は、出産で力尽きて、気を失っていた。

ダンは、良い機会だと思い、赤ん坊を毛布にくるんで、帰還したばかりのフレッドに手渡した。

「赤ん坊を抱いていてくれ。お前の体で暖めてやってくれ。俺がいというまでだ。」

「え、先生。そんな困りますよ。こんな生まれたばかりの赤ん坊。フレッドが困っている様子を見て、ロブは笑っていた。

「ロブ、ちよつと来い。」

唐突に言われて、笑顔から真顔になったロブは言った。

「はい、先生、なんででしょうか。」

「まだ、世間知らずなお前には気の毒だが、お前に頼みたいことがある。」

「ダン、ロブをつれて、気を失った女性の部屋に連れて行った。」

「お前は理解しているだろう。死んだ男が黒衣の民族だつてことを。」

「あ、はい。」

「救出された女性が生んだ赤ん坊は混血の可能性が高い。」

「……。」

「これは、賭けみたいなものだが。赤ん坊は死んだことにする。」

「ええ！」

「女性は出産後すぐに気を失って、生んだ赤ん坊を抱いてはいない。だから、一時的に赤ん坊を空挺から降ろす。」

「え、どうするんですか。」

「フレッドとテントウムシで近場の教会へ行く。孤児をあずかってくれるめぼしいところがあるから、行って来る。」

この話はゴメスにしておくから、お前は、この女性が目覚めたら、悲しい顔をして、赤ん坊は死産だったというんだ。」

「ええ！俺にそんなことを！」

大きな声でロブがいうので、ダンはロブの口を押さえながら、言っ

た。

「だから、世間知らずなお前に気の毒だがと言ったんだ。悪いが頼まれてくれ。」

ダンはロボの口をふさいでいた手をすぐに離し、気を失っている女性の両手をベッドに拘束するため縛った。

「万が一、ほんとうのことがわかってしまつて、体を動かしたら、大量に出血するかもしれない。」

拘束しておくから、女性が起きてもここから出ないようにちゃんとみていてくれ。いいな、ロボ」

納得できなかったロボだったが、承知せざるを得なくて、うなづいて見せた。

「もし、混血でないとわかつたら、女性に赤ん坊をもどしてやるつもりだ。」

そういつて、ダンはロボを部屋において、出て行った。

ゴメスはダンの話を聞いて承知した。

混血の子供の可能性が高いことと、混血の子の扱いの悲惨さを知っているからだつた。

ダンがフレッドの所へもどると赤ん坊をうけとり、わけを説明し、これからのことを話をして、テントウムシの準備をするように言った。

準備を整えている間、フレッドは不安な考えをダンに話した。

「ロボを迎えに行く途中、後方にエアジェットが飛行しているのがわかつたんですが、追撃した奴らが確認しにきたかもしれないですよ。」

「フレッド、それは本当か。」

「ええ。ロケット噴射で抜けてきたので、エンジン音は反響したと思います。」

「見つかっている可能性が高いか。」

そのころ、操縦室では、デイゴがレーダーで周囲を確認していた。

アレキサンダー号は、先ほどの救出の時に停泊気味に飛行していたので、距離は離れていなかったが、ロブたちが戻ってきたのを機に一気にスピードを上げていた。

リーダーにはうつすらと空挺の影が出ていたものの、すぐに消えた。しばらくすると、アレキサンダー号は谷山を抜けた。

ロブは浮かない顔で女性をみていて、立ち尽くしていた。寝息が聞こえてきそうなくらい穏やかに眠る女性。

しばらくすると、目を瞑ったまま女性は大きな声を出して叫んだ。

「わたしは皇女なのよ！汚らわしい手で触らないで！」

その声の大きさと、ベッドが浮きそうなくらい力強く起き上がるうとする勢いに、驚いてロブはのけぞりひっくりかえり、しりもちをついてしまった。

そして、また、女性は大きな声で叫んだ。

「わたしは皇帝マルティンの妹、セシリア・デ・ドレイファス！汚らわしい民族の手に落ちる身ではないわ！」

女性が発した言葉の意味をロブは理解できずにいた。

女性の目は閉じているのだが、ロブには白目をむいているように見えて、恐怖を覚えた。

第五章 セシリア 2 (後書き)

BGM:「光」MONDO GROSSO feat. UA

注記: テントウムシとは、エアバイクのデカイ機体という感じで、半円形上の姿形で空を飛ぶ様子から、「テントウムシ」と呼ばれていた。

第五章 セシリア 3 (前書き)

登場人物

ロブ＝スタンフィールド(主人公の兄)

フレッド＝スタンフィールド(主人公の長兄)

ゴメス＝スタンフィールド(主人公の父)

デイゴ (スタンフィールド・ドックのクルーで板金工)

ダン＝ポーター(前タイデイン診療所の医者)

セシリア＝デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。前にスタン
ドフィールド・ドックにいたマールサの知人。愛称セシル)

レティシア＝ハートランド(元ホーネットクルー・グリーンエメラ
ルダ号のクルー)

第五章 セシリア 3

「ロブ大丈夫か、叫び声が聞こえたのだが。」

ロブは我に返り、立ち上がって、ドアを開けた。

「あんまり大きな声で叫ぶから、驚いてしまったよ。」

ゴメスをみて、そのあと振り返ると、ベッドの上の女性は、何事もなかったように眠っていた。

「なにを叫んでいたんだ。」

「よく、わからない。自分のことをセシリアだと叫んでいたのだけはわかったよ。」

「セシリアというのか。」

ゴメスは、ダンの話を聞いていて15歳のロブに混血児の悲惨さを理解するのはまだ早いだろうと思っていた。

「操縦をデイゴと交代したの？」

「ああ、そうだ。気の毒な話をお前にさせるのはちょっと酷だな。」

ダンの奴は、思い立ったら即行動だからな。

俺が代わろう。ロブ、お前はデイゴの助手をしていなさい。」

「はい。」

ロブは胸をなでおろすように、ゴメスの言うことをきいて、その部屋から出て行った。

ロブが操縦室にはいると、デイゴは自動操縦に切り替えていて、くつろいでいた。

「デイゴ、出産に立ち会ったって本当かい。」

「もう、驚いたぜ。ポーター先生はいきなりだもんな。湯を沸かして呼びにいったら、頭がでかかっているといわれてさ。」

デイゴはあきれたもの言いをして、ロブは苦笑いするしかできなかった。

「ロブ、黒衣の民族の男は死んでいたのは事実か。」

「ああ、目を見開いていたけど、目の前で通信をきるのに手を伸ばしても、ビクともしなかったよ。」

「追撃してきたのが、軍か黒衣の民族か、どっちかによるなあ。」

「どっちもだと思う。」

「はあ、どういことだ。」

「追撃してきたのが、軍だとして、墜落した後、様子を見に来たのが黒衣の民族だカラスと思うんだ。」

「駆け落ちしようとして、境界線を越えたら、軍に追撃されて、撃墜されたってことかな。」

「駆け落ちってなんだよ。」

デイゴはロブに言われて、開いた口がふさげなかった。

説明しようにもニュアンス的なものしか知らなかったからだ。

「あ、あれだよ、男と女の愛情のもつれみたいなもの。」

「はあ、なんだよ、それ。それで死にそうな目にあつて、境界線を越えるというのか。」

デイゴは半ばあきらめた。

「まあ、お前には理解できないような話かもな。」

「デイゴ、俺を子ども扱いするのかよ。」

「ああ、悪い。もう、お前は子供じゃなかったなあ。なにせ……」

レーダーが何かを捉えて、赤いランプがついた。

「何かが急接近しているみたいだ。」

「なんだ。」

デイゴは、自動操縦から手動に切り替えた。

「俺、甲板言ってくる。」

「ああ、頼む。」

アレキサンダー号は山間部を抜けたあと平野に入っていた。

ダンたちを地上に降下させるために、高度を下げていた。

あたりは濃霧から開放されたものの、上空に厚い雲が多い、あたり

はうす暗かった。

ロブが目を凝らして後方を見ていると、赤に黒いボーダー模様のエアジェットが向かってくるのが見えた。

ものすごいスピードで近づいてくるので、アレキサンダー号に接近するのに、時間がかからないと思えた。

ロブは通信でそのことをデイゴに伝えると、中にもどり、ブルーボードを出す用意をした。

操縦が自動から手動に切り替わったことを察知してゴメスが操縦室に通信で様子を聞きだそうとした。

「なにがあつたんだ、デイゴ。」

「ロブが甲板へ様子をみに行きました。赤と黒のエアジェットがこちらに向かっています。」

「ロブはまだ、甲板にいてるのか。」

「偵察するだけといって、ブルーボードを出しに行ってます。」

「馬鹿な。無茶なことをさせるな！デイゴ。」

「申し訳ありません！」

ロブはブルーボードの上ののり、翼の真ん中を押し上げると、操縦桿がでてきて、セーブローブを体に巻きつけると、低い天井のレバーを引いた。

床の部分が開いたので、ブルバードはそのまま、斜めにむかって降下した。

ロブはブルーボードの機体外から操縦して、飛行した。

風を機体にあて、機体の先を上向きにすると、ジェット噴射をして、アレキサンダー号の上にててきた。

旋回して、赤と黒の機体と平行にすれ違った。

ロブはすれ違いざまに相手の機体を確認した。

赤と黒のエアジェットの上には、白い長髪の間人が、足を翼に固定して、刀のようなものを握ってたっていた。

操縦席には人がいるのをロブが確認していると、そのエアジェット

は背面飛行をした。

アクロバット飛行に、逆さぶり状態になったその白髪の人間は、刀を振り回し、アレキサンダー号の通信アンテナの先を切り落とした。そのあと、片手だけで刀をもち、もう片方でポケットから丸いものを出して、アレキサンダー号の甲板めがけてそれを投げ込んだ。

赤と黒のエアジェットと距離を置いて、旋回しているロブはその様子を見ていて驚愕していた。

（黒衣の民族の戦士は命知らずだと聞いていたけど、むちゃくちゃな飛行乗りをするんだ。）

ただ見ていることしか出来なかったロブは、旋回しながら、赤と黒のエアジェットが去るのを見届けると、アレキサンダー号の下にむかって降下した。

アレキサンダー号にもどったロブは、機体から降りると、即座にゴメスがやってきて、ロブを殴りつけた。

「俺の指示が無いとブルバードを出すなと、言っただろう！」

「はい、ごめんなさい。」

「『ごめんなさい。』ではない、『申し訳ありませんでした。』だ。命の危険を冒すようなことを平気にしでかすな。」

お前の体は、お前だけのものではなくなるのだぞ。わかっているのか。」

「はい。」

「お前が命を落としたら、レテシアが悲しむことをいつも頭の中において置くのだ。わかったな。」

「はい。わかりました。」

ロブは殴られた方の頬を手で押さえた。

ロブの口から血が出ているのをみて、ゴメスがいった。

「ダンが戻ったら、口を診てもらおうんだ。切れている。」

ロブがうなづいたのを見ると、ゴメスは女性がいてる部屋に戻った。

ロブは、甲板に行き、先ほど、投げ込まれたものを確認した。

それは石を紙で包んだものだった。
紙を広げると文字が書かれていた。
(跡継ぎを返せ)

第五章 セシリア 3 (後書き)

BGM:「Over The Sky」Hitomi (黒石ひとみ)

第五章 セシリア 4 (前書き)

登場人物

ロブ＝スタンフィールド(主人公の兄)

ゴメス＝スタンフィールド(主人公の父)

ダン＝ポーター(前タイデイン診療所の医者)

クレア＝ポーター(ダンの養女。医者)

セシリア＝デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。前にスタン
ドフィールド・ドックにいてたマーサの知人。愛称セシル)

第五章 セシリア 4

「ゴメスは有無を言わずだな。」

「悪いのは俺ですから。」

ロブはダンの部屋で手当てを受けていた。

女性は寝息をたてて穏やかに眠っていた。

「ゴメスに聞いたのだが、急に叫び声をあげていたとか。なにか言ったか。」

「何か言った気がするんですけど、セシリアとしか聞き取れなかったのです。あまりの大きな声で叫ぶ様子に驚いてしまって、それ以外は思い出せないんです。」

「そう、セシリアという名前の女性か。」

ダンは何かひっかかるようで、その名を繰り返し唱えるように頭の中でつながりを探していた。

「あの、先生。死んでいた男は、黒衣の民族のなかで戦士ですよね。」

「戦士か。ロブはそう思ったのはどうしてなんだ。」

「筋肉質な気がしたんです。腹筋が腕に当たったので。」

「そうか、戦士の子なら、戦士にするべく、麻薬を使う可能性があるな。」

「麻薬って何ですか。」

「うっ、ん、理性を失わせる悪い薬といえば、わかるかな。」

「悪い薬なんてあるのですか。」

「ああ、あるよ。酒は体に悪い作用と良い作用をもたらすのはわかるだろう。」

「ええ、わかります。」

「悪い薬のなかには、痛みを感じさせないモルヒネという薬もあって、鎮痛剤という薬として使われる。」

麻薬は完全に悪い薬だな。理性を失わせるだけでなく、副作用とし

て常習性が強い。モルヒネもそうだな。」

「やめられないというわけですか。」

「そうだ。」

「その麻薬が使われるって……。」

「つまり、恐怖を取り除くために、理性を失わせるのだ。」

スワン村で読んだ本には、戦士は生まれる前から麻薬を使われて、生まれてからも麻薬を使われて薬漬けにされているという文章があった。」

「では、この女性は麻薬を使用されているということですか。」

「そうだな。その可能性がある。穏やかに眠っているのに、急に叫び声をあげるのだから、理性を失って普段出ない人格がでたのだろう。」

ロブには、理解しにくい内容に、ダンの話を聞いてうなづくことしかできなかつた。

「ロブ、このことは、誰にも言わないように。」

「あ、はい。わかりました。」

それから、先ほど、黒衣の民族の襲撃にあつて、こんなものを。」

ロブは、甲板に投げ込まれたものをダンに手渡した。

「こ、これは……。」

そういつて、ダンは黙り込んだ。

「跡継ぎつて、あの赤ん坊のことでしょうか。」

ロブは不安そうにさういつと、ダンは、女性が起きていないかどうか確かめてから話した。

「ロブ、このことも内緒だ。決して誰にも話してはいけないよ。わけは、診療所にもどつてから話そう。」

「はい、わかりました。」

ダンはさういつと、ロブに手渡されたものを医療セットの箱に仕舞いこんだ。

そして、思い出したように、ロブに言った。

「ロブ、君は命を粗末にするような行動はしてはいけない。」

「はい、父からも言われました。」

「我々や、君を取り巻く連中みんなは、君やレテシアが幸せな様子を、暖かく見守ってきたしこれからもそうしていくだろう。」

レテシアが悲しむ姿は出来たら見たくない。それは君にもわかってることだとは思う。」

「肝に銘じておきます。手当てしてください、ありがとうございます。」

ロブは神妙な面持ちで頭を下げると、部屋から出て行った。

ダンは大きなため息をつき、寝ている女性の顔を見ながら、自分がしでかしてしまったことの重大さに不安を覚えた。

女性はその後、意識を回復したが、死産であったことを告げられると、「混血の子ですから。」と一言だけ言うと、後は何も言葉を口にしなかった。

その言葉にダンもゴメスも、赤ん坊を母親から引き離したことは良いことではないが苦悩や困難を避けるための判断だと認識できた。

アレキサンダー号は、その後、何事もなく、航路を飛行し、3日後に積荷を降ろして、スタンドフィールド・ドックに帰還した。

ダンはタイデイン診療所へ救出した女性を連れて行き、そこで治療を続けていくことにした。

その後、ロブが診療所をたずねて行った。

診療所の玄関が「休診」と張り紙がされていたので、ロブは裏口から中に入るうとした。

裏口は不用意にも、鍵がかかけられず、ロブは勝手にはいつていった。足音に気がついたのか、部屋の中から、クレアが出てきた。

「ロブ、何しに来たんだ。」

クレアは小声で言葉をかけた。

「なにかあったんですか。」

「いま、大事なところで……。」

ロブに静止しているように手で合図をすると、クレアは部屋の中に

もどった。

クレアは部屋から少し顔を出してきて、ロブに部屋へ入るように手招きした。

ロブが中にはいると、ダンが紐に玉のようなものをぶら下げていてそれを女性の目の前で振っていた。

「セシリア、君はいま何歳でどこにいるのかな。」

「13歳で、宮殿にいます。」

ロブはその様子を見て、クレアに小声で言った。

「先生は何をしているのですか。」

「退行催眠というものだ。心理治療で使われるものだよ。」

クレアも小声でさういうと、唇の前に人差し指を立てた。

「どうして、宮殿にいてるのかな。」

「どうしてって、わたしは第一皇女ですもの。皇帝ジョアンの皇女ですもの。」

（やはり、そうか）

ダンは言葉を口にせず、こころのなかでつぶやいた。

「では、セシリア、君は黒衣の民族にどのようにして、連れ去られたのかい。」

「連れ去られたのではないわ。わたしは宮殿にいてるのが退屈で、自ら連れていってとお願いしたの。」

その言葉に3人とも愕然とした。

第五章 セシリア 4 (後書き)

BGM:「SORANO LION」
「H・L・ラッシュ」

第五章 セシリア 5 (前書き)

登場人物

ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)

ゴメス＝スタンドフィールド (主人公の父)

ダン＝ポーター (前タイデイン診療所の医者)

クレア＝ポーター (ダンの養女。医者)

セシリア＝デッドレイファス (皇帝マルティンの妹。愛称セシル)

第五章 セシリア 5

セシリアが13歳の頃、皇帝ジョアンの時代。

コン・ラ・ジエンタ皇国のラ・ベレッツィア宮殿に、脅しとして黒衣の民族が襲撃をした。

黒衣の民族は花火や火薬やらで騒ぎを起こしたただだったが、その様子に怯えることなくセシリアは黒衣の民族の一人を捕まえて、連れて行ってほしいとお願いをしたのだ。

捕まえられたのは、白い長髪の人間でセシリアをみて面白そうだからと連れ帰った。

宮殿ではセシリアを拉致されたと思われたが、国の防衛の脆さを露呈されるだけでなく、失望と恐怖を国民に与えかねないと、攻撃の際に皇帝ジョアンの皇女は犠牲のもと亡くなったことになった。

セシリアは宮殿を空挺で運び出され、知らぬ土地へ着た事に、興奮していた。

セシリアは国の防衛にかけて助けに来てもらえると安易に思っていたが、連れ去った白長髪の間人はセシリアに皇国が死亡したと国民に報せた事実を伝えた。

セシリア死亡と報せの後に、皇帝ジョアンは持病により、崩御し、セシリアの兄・マルティンが即位した。

セシリアいわく、白長髪の間人は黒衣の民族の中で、魔術師という特殊な役割をもった人物で名前をタカシ蔵といい、特徴的にオツドアイだと。

連れ去られた後、奴隷のように扱われて絶望していたセシリアは毎晩泣きはらしたが、蔵が族長の息子・一男カスオに取り入ることができれば奴隷ではなくなると言われ、自らそうした。

族長の息子・一男は皇国の皇女に好かれても嬉しくなかったが、民族の女たち比べて、肌が柔らかく物腰が魅力的だったため、セシリ

アを次第に魅了されてしまった。

セシリアは妊娠したのを期に、一男を黒衣の民族を見捨てて逃避行するようにとそそのかした。

その結果、追撃してきたのは境界線を警備する皇国の軍で、墜落した後、一男を追って黒衣の民族が追跡にきていたのが白長髪の爺だった。

ダンにはセシリアを退行催眠から開放し、しばらく眠りにつくようにした。

セシリアを病室に残し、3人は、診察室に向かった。

「生まれた赤子の父親は、族長の息子だったか。」

「跡継ぎを返せというのは、族長の息子のことではなくて、赤子のことでしょっか。」

ロブは、ダンが秘密にしておくように言われた内容を確認した。

「たぶんそうだろう。魔術師が関わっていることはお腹の子の性別がわかっているのではないかと思う。」

「先生、魔術師ってどんな役割なのですか。俺がみたアクロバット飛行の戦死がその魔術師・爺だと思っただけです。」

「そうだなあ。魔術師という役割は、幻術をつかってあたかも不思議な力を持っていると思わせて威厳を持つ人物のことらしい。」

「威厳ですか。」

「神に仕える司祭みたいな役割だと思う。戦士ともなれば、手下を連れて、細かい作戦を専攻することぐらいはするかもしれない。」

「ダンには、スワン村で読んだ内容を思い出さすように言った。」

「オッドアイとなれば、神がかり的に信望する人間もいたのだろうか。」

クレアは、自分が知る限りのものを口にしようとした。

「白い長髪、オッドアイって目立ちますね。戦士なら、空挺でも見分けがつく。」

「黒衣の民族は、瞳は茶色か黒で、髪の色も黒が多い。」

敵は年寄りではないな。セシリアの話から若くて端正な顔立ちらしいから、見た目でやばい戦士だとわかるが、性格が良いと親しみを持ってしまうかもしれない。」

ダンはそのういつて、次に魔術師の怖さを二人に話した。

幻術は、アヘンという麻薬で幻想を見させている。言葉巧みにありえないものを見せつけられれば、魔術を使ったように思わせることが出来る。

だが、黒衣の民族の魔術師は、心理戦術を得意として、仕掛けてやることは精神的にやられてしまうことをする。

また、アヘンを使い幻想をみさせて人間の内面に入り込んで人格破壊をするといったことを語った。

そのことを二人に語ったのは、クレアには医術の面で必要となるだろうということと、ロブには危険な行動をとらせない為だった。

「ロブ、重ねて注意しておく。黒衣の民族に捕まるようなことにならないように。」

「はい。しかし、赤子を返せとしつこく追われてしまった場合はどうすれば……。」

「だから、お前たちには赤子がどうなったとは言わない。知らないとなれば、殺す必要はないだろうから。」

フレッドには、待ち合わせの教会まできてもらっただけで、その後は、一緒に行かなかったから、知らないはずなのだ。」

「そうですね。本当に知らないことではないのでしょうか。」

「跡継ぎといわれても、子供はそのことを望んでいるとは思えないましてや、皇族の血を引く身だぞ。そのことが世間に知られるようなことはなんとも避けなければいけないだろう。」

「それは国の立場ですね。父さん。」

「黒衣の民族が、その子供をどう扱うかは目に見えるようじゃないか。」

「そうですね。」

クレアは、そう言いながら、別のことを考えていた。

「これから、彼女をどうするのですか。」

ロブがこう切り出すと、クレアは言った。

「皇族に連絡するのは危険ですよ。事情を知ってしまっている我々だけでなくて、ドックの人間にも。」

「ゴメスとセシリアのことを話したが、当分はドックで預かることになると思う。」

「え、ドックですか。」

「ああ、マーサには面倒をかけるかもしれないが、女手が足りないからという話だ。」

「父さん、彼女はわがままな皇女だった人ですよ。」

「生きていくためには、やらなければならぬことを学ばなければならぬ。」

もう死んだことになっていることは知ってるのだからね。」

クレアは別のことを考えていたことに、思いついてつながりつけて言った。

「父さん、その魔術師は、わざと族長の息子と彼女を結び付けようとしたのではないですか。」

ダンは少し考えてから、口にした。

「そうかもしれないな。だったら、なおさら、赤子の生死は隠し通さねばならない。皇族に対してもだ。」

セシリアは麻薬中毒の治療を診療所で続けて、完治とまでは言わない程度でドックでみんなと生活するようになった。

セシリアの事情を知っているのは、ダン、クレア、ゴメス、マーサ、フレッド、ロブの6人だけで、そのほかのものは知らされていないかった。

第五章 セシリア 5（後書き）

BGM：「溺れる青い鳥」高鈴

第五章の登場人物の年齢

ロブ⇨スタンドフィールド（15歳）

フレッド⇨スタンドフィールド（20歳）

デイゴ（20歳）

ゴメス⇨スタンドフィールド（62歳）

ダン⇨ポーター（42歳）

クレア⇨ポーター（20歳）

セシリア⇨デッドレイファス（18歳）

一男（21歳）

庵（22歳）

第六章 胸中模索 1 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信部・愛称キャス)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- ジゼル(スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)
- コリン⇨ボイド(レインのクラスメイト)
- ジョイス⇨ボイド(コリンの父親)
- プラーナ(ジリアンのクラスメイト)
- マーク⇨テレンス(タイデイン診療所の医者)
- ミランダ⇨テレンス(マークの妻。診療所の看護師と医療事務員)
- ダン⇨ポーター(前タイデイン診療所の医者)
- クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
- コーデイ⇨ヴェッキア(クレアの相棒。看護兼介護士)

朝早く、街中をエアバイクが駆けていた。

クレアはロブに乗せてもらって、街角でおろして貰った。

向かった先は、コリンのパン屋だった。

店の中に入ると、コリンの父親がレジにいた。

クレアの姿が目に入ると、いぶかしい顔になった。

「ひさしぶりですね。ボイドさん。」

「ご無沙汰してます。クレアさん。お元気そうで。」

「ええ、元気です。」

クレアは店内を見渡し、トレイを手に取り、パンを選んでいった。

コリンの父親ジョイス・ボイドは浮かない顔になり、そわそわし始めた。

後方にパンの工房があり、なかでせわしく働く妻の姿を振り返りながらレジに立っていた。

「テレンス先生が診療所に着任されてから、すっかり姿をみかけなくなつたと街の人々は心配してましたよ。」

「そうですねえ。長い間、用事に没頭してしまつたから、街に寄り付かなくなつてしまつて。」

「ポーター先生のことはお気の毒なことに。みんな、あんな良い先生は滅多にいないと残念がつております。」

「そう、父のことなんですけど。生前、父はあなたに何か預けなかつたかなと思ひまして。」

虚を付かれたようになり、あせるジョイスは目を天井で泳がせながら言った。

「いやあ、そんな預かりものはありませんよ。パン屋に預けるものなんて。」

クレアはクロワッサンなど、パンをいくつか、トレイに乗せると、レジに向かった。

そして、ジョイスに顔を近づけて言った。

「あなたがスワン村にいたことをわたしは知っていますよ。それでもおとぼけになりますか。」

驚きの顔でクレアを見ると、開き直って言った。

「さあ、何のことをおっしゃってるのか、わかりませんが。」

クレアは、ジョイスから顔を遠ざけると、トレイをレジのところに着いた。

ジョイスはあわてて、清算をはじめた。

「わたしはいま、ドックにいてましてね。ジリアンがこちらのコリンに殴られたという話を聞きました。」

「ええ、知ってます。コリンを叱り付けてプラーナの両親には一緒に謝りに行きました。」

「そういうことは、よくあることなのですか。」

ジョイスはギョツとして、手を止めた。

「いいえ、ありませんよ。いたずらをしたりして手こずらせて叱ることはよくありますけど、喧嘩くらいは男の子にはよくあることでしょう。」

クレアはジョイスの様子を伺いながら、コリンがいないかどうか工房をのぞこうとした。

「あのお、クレアさん。妻は忙しいので。」

清算を終了したジョイスはクレアの右腕を引いて、小声で耳打ちした。

「妻は知らないんですよ。あなたの知りたいことは命が関わることなんです。察してください。」

クレアはニヤリと笑った。その姿をみて、怒りを覚えたジョイスはクレアの腕を放した。

「わたしは父から何も聞いていなかったのです。でも、勘が働いたもので、調べたんです。」

誰にも話すつもりはありませんよ。あなたは何に気をつけなければいいのかご存知のはずですから。」

そういつて、クレアは店を出た。

乗り合いバスが診療所につき、クレアが降車した。

今日は休診日なので、クレア以外の人は降車しなかった。

クレアは玄関の休診の札を確認すると、勝手口を求めて裏に回った。リビングのソファでくつろいでいたマークは部屋の戸口に立ったクレアをみて言った。

「やらく老け込んだな。べっぴんさん。」

「三十路を過ぎたら、老け込むのは早いね。マーク、あんた相変わらずだな。」

「おまえさんもな。まあ、座れ。」

「いや、遠慮しとくよ。」

「相変わらず、人と話をするときは面と向かわないな。」

「いいや、マークとミランダだけだよ。」

「そうかい。ミランダは買い物に出かけていったよ。お前さんが来るなら、ご馳走を作りたいってな。」

「タイミングが良かった。昼食までいるつもりは無いよ。できたら・・・。」

「ミランダとは顔をあわせたくないっていうことか。」

「そうだね。あの人は苦手。」

マークはため息をつくと、手にとっていた新聞をテーブルに置いた。「ミランダは今もあの時のことを思うと、悔しくてしょうがないと言っんだ。」

オンナである自分がどうして気遣ってあげることができなかったかということをおね。

クレアはうつむいた状態で、自分の過去を、下宿していたころを思い出していた。

「それは口に出して言わなくても、わかってくれるでしょう。」

心配かけたくなくて、何も言わないことや態度で示せなかったということ。「」

「今もそのことに変わりはないだろう。ダンのことで何か調べているのは察しがつく。」

しかし、それはお前が調べて判明したとしてもどうにかなることではないことぐらいわかるだろう。」

「止めても無駄だからね。一度決めたら、遣り通す。やられたらやり返す……。」

「だからと言って、クレア、女のお前が戦うっていうのは、道理が通らないくらい無茶なことなんだ。」

「女だから、無茶なことだから、何もせずに、だまって男でも作って子供でも生んで家庭に収まっていろっていうのかい。」

冗談じゃない。父さんが死んだことの意味を知りもしないで、あたしは幸せになんかなれないんだよ。」

「忠告を聞かない奴だったな、お前は。」

「おとなしくしていればいいってもんじゃないことを学校で教わったよ。」

「周囲はお前を放っておかないのだろう。」

「お説教を聴きに来たんじゃない。」

「俺もそのつもりじゃなかったがな。」

お互い怒りの感情がぶつけられず、二人はしばらく黙っていた。意を決して、クレアが口を開いた。

「スワン村にたどり着いたよ。ダンが何をしていたのかも知ることができた。」

「おまえ、まさか打って出るんじゃないだろうな。」

「しばらくは様子を見るよ。ダンが隠していたことを見つけ出すことができたから、まだ触れずにいようと思う。」

「これだけは、言っておきたいのだが、おまえはわかっていると思う。命は粗末にするなよ。」

「使うときは、ここぞって時にするよ。」

ダンは大きなため息をついた。

ロブに言われたことを思い出して、自分には無理だと悟った。

外で大きな急ブレーキをかける音がした。

車のドアが大きく閉じる音が聞こえると家が揺れるほど、勝手口のドアが開く音がした。

バタバタと走る音が家に響くと、ミランダがクレアの目の前に現れた。

「パン屋にいるクレアの姿をみたという話を聞いて、あわてて帰ってきたわ。」

息を切らしてミランダはクレアを見ていた。

意外と早くもどってきてがっかりなクレアが挨拶をしようとしたが、ミランダはクレアを抱きしめた。

「昼食まではいて頂戴ね。ご馳走作るから。なによ、こんなにやせちゃって、ちゃんと栄養とってないでしょ。」

「いや、ミランダ、今日中にドックを去りたいんだが。」

「だめよ。昼食を食べてからにきなさい。」

「いや、だから……。」

「わたしに心配かけさせた罰よ。」

「……。」

マークは二人の姿をみて、安心して立ち上がって言った。

「やれやれ、ミランダには適わないな。なあ、クレア。」

クレアは困った顔から、笑顔になった。

ミランダはクレアを強く抱きしめた。

「今度もかならず生きて帰ってくると約束して頂戴。」

「はいはい。」

クレアはめんどくさそうに口にしたが、ミランダを抱きしめ返した。

ロブがドックに戻って、食堂に入ると、二日酔いで弱ってテーブルにうつ伏せているカスターがいた。

ロブはそばによって、小声で話しかけた。

「後で展望台に来てくれないか。話したいことがある。」

「うええ、仕事。」

「チガウ。昨日の話の続きだ。」

カスターは澀んでいた目を見開こうとした。

ロボのスッキリした顔を見て、二日酔いしない奴をうらやましいと思った。

ロボの後ろにレインが立った。

「大丈夫？キヤス。」

その声にロボは振り返った。

「兄さん、お帰り。」

「ああ、ただいま。コーデイはどこにいてるかな。」

「ジゼルに洗濯機の使い方を教えてもらって洗濯してるよ。自分で洗濯したいからって。」

その話を聞いて、カスターはあきれた顔をして言った。

「だよねえ。クレアさんの洗濯物をロボが回収してジゼルに洗濯させるなんてなんかおかしいよ。」

「お前はわかっちゃいない。切迫流産しかけたジゼルがクレアさんのことなら、何でもしたいって思ってることなんだよ。」

「へえ、じゃ、救助隊の仕事はじめたら、クレアさんの洗濯物はロボが洗うのかい。」

ロボは、カスターのほうに振り返って睨み返した。

「え、兄さんまた、クレアさんとお仕事出るの？」

「まあな。まだ、先の話だな。」

そういうと、カスターの口を押さえた。

「また、危険なお仕事するのかな。心配してもしょうがいなのはわかってるけど。」

「お前に心配されても、どうしようもないな。」

困った顔をしてレインはロボを見ていた。

「一人前にもなれない僕が心配してもしょうがないし、逆に兄さんに心配かけちゃうよね。」

「腕が完治したら、鍛えてやるから、覚悟しておけよ。」

ロボは笑顔でレインにそういうと、カスターの口にふさいだ手を離

した。

レインはその様子に安心してうなづく、食堂の厨房に行った。

「キヤス、ジゼルに二日酔いの薬をもらったのか。」

「もちろんだよ。僕はアレルギー体質で、じいさまの作ったワインじゃないと……。」

バンバンとロブはカスターの背中をたたいた。

ゲホツゲホツとカスターが咳き込んだ。

「何するんだよ！」

「レインには連れて行くことを黙ってほしい。俺が話すまで。ジリアンには口止めしている。」

カスターはロブをまじまじと見つめた。

「あとで、展望台に会い。コーデイを呼んで来る。」

「クレアさんは？」

「クレアさんは昼過ぎまで戻ってこないと思う。それまでに話を付けておきたい。」

「クレアさんに内緒の話なのか。」

「チガウ。」

ロブはしつこいといわんばかりの顔でカスターを睨み返した。

カスターはテーブルにまたうつぶせになった。

その様子を見て、ロブは食堂から出て行った。

ジゼルは心配そうにコーデイに話をしていた。

「ロブはまた、クレアさんと仕事をするっていうことかしら。」

「ロブさんが話しない限りでは、私のほうからは何も申し上げられないです。」

「そうねえ。ロブは肝心なことはあまり話さないから心配で。」

「気にかけていらっしやるのは、ご主人のことですか。」

「気にかけても仕方が無いのはわかってるのだけれどね。」

このスタンドフィールド・ドックで仕事をしている以上、ロブたちと関わらないようにするわけにいかないし。」

「そうやって、ドックを去った方がたくさんいらっしやるのでしょ
う。」

「そうなのよね。でも、わたしたちは生まれる前から、このドック
にいてるから。」

ジゼルは笑顔でそう答えたが、こころの内をコーデイに見透かされ
て、聞きたいことが聞けずじまつた。

ロブはその話を聞かずに、二人に近づいていた。

「あのジゼルさん。」

コーデイがロブの姿を見かけて、言おうとしていたことをロブもら
せた。

その様子に、気配を感じジゼルは後ろを振り返った。

「やあ、ジゼル。手間をかけさせてしまって悪い。」

「いいのよ。これくらい。ドッククルーっていう家族なんだから。」

「家族なら、心配ぐらいかけてもいいのでしょうか、限度があり
ますよね、ジゼルさん。」

コーデイはそう言って、ジゼルが言わないとしていることを察して、
ロブに釘を刺した。

ロブは気に留めながらも、自分の用件を言った。

「努力はするよ、ジゼル。」

コーデイ、悪いが、用事が済んだら、展望台に来てくれないか、し
ておきたい話があるんだ。」

ジゼルはうなづいて、洗濯室から出て行った。

「わかりました。」

コーデイの返事を聞いて、ロブも洗濯室から出て行った。

ロブはジゼルの後姿をみながら、立ち止まって考えていた。

(デイゴを連れて行くわけにいかないな。)

展望台にロブは凶面を広げて考え込んでいた。

カスターが氷が入った袋を片手にもってあらわれた。

「話ってなんだい。」

カスターの姿をちらりと横にみて、また図面に目線をもどしたロブは言った。

「コーデイが来てからだ。」

カスターは氷袋をおでこに乗せて椅子に腰掛けた。

半時過ぎて、コーデイがようやく展望台にやってきた。

「遅くなつてすみません。」

「いや、かまわないよ。」

ロブは図面をたたみはじめた。

カスターは氷袋の氷が解けてしまったのを確認して、テーブルの上に置いた。

「二人に話しておきたいことがあるんだ。」

直立不動でカスターは話を聞こうとしていた。

「何でしょうか。隊長！」

言いにくいそうな表情で、ロブは二人の目線をそらすように話した。

「レインやジリアンには、まだ、話をしないでほしいんだ。空挺救助隊の話。」

コーデイが口を挟んで言った。

「お気持ちはわかりますが、この機会を逃すと、あの子達の成長を見届けることができなくなりますよ。」

カスターはコーデイの言葉に興味を示した。

「3ヶ月待つてほしい。その間に鍛え上げてみて、駄目だったら、搭乗させない方向で行きたいんだ。」

「クレアさんは納得ですか。」

「ああ、昨日、お開きの後、少し話させてもらったから、大丈夫だ。」

「しかし、ロブ、あの二人をドックに残しておくのは心配じゃないか。」

「ディゴを連れて行くつもりが無いから、後のことはディゴにまかせようと思っているんだ。」

クレアさんとスワン村を目指して旅していたときもそうだったし。」

コーディは、ロブの話する様子をじつとみていて、本題に入ることが躊躇していることに気がついてた。

「2,3日中にドックを出る身として、そういう話は私に関係ないですよ、ロブさん。」

胸中を見抜かれて、しどろもどろになりながら、レインたちの話をした後、こう切り出した。

「クリアさんにこれだけは、俺の口から二人に話して置くように言われたんだ。」

ふたりは、神妙に聞く姿勢でロブの次の言葉を待った。

「レインとジリアンは、俺の弟たちではないんだ。」

「どうということなんだよ、ロブ。何が言いたいんだ。」

カスターに突っ込まれて、さらに言いにくそうな顔をしていたロブだが、意を決して言った。

「レインは俺の子供で、ジリアンはフレッドの子供なんだよ。」

無論、カスターは叫んだ。

「なんだって!!!!!!」

第六章 胸中模索 1 (後書き)

BGM:「Last Smile」
LOVE PSYCHEDEL
ICO

第一章、第四章、第六章 登場人物の年齢

レイン⇨スタンドフィールド(13歳)
ジリアン⇨スタンドフィールド(11歳)
ロブ⇨スタンドフィールド(28歳)
カスター⇨ペドロ(24歳)
ラゴネ⇨コンチネータ(76歳)
デイゴ (33歳)
ジェイ(40歳)
テス(38歳)
ジゼル(28歳)
モナ⇨ロマーノ(41歳)
コリン⇨ボイド(13歳)
ジョイス⇨ボイド(40歳)
プラーナ(11歳)
キャシー(13歳)
ポーリア(13歳)
ケイト(13歳)
マーク⇨テレンス(53歳)
ミランダ⇨テレンス(49歳)
クレア⇨ポーター(33歳)
カイン(33歳)
レテイシア⇨ハートランド(31歳)
コーデイ⇨ヴェッキア(24歳)

セシリア 〓 デミスト (31歳)

デューク 〓 ジュニア 〓 デミスト (35歳)

第六章 胸中模索 2 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド (主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド (主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
- ジゼル (スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。ディゴの妻)
- コリン⇨ボイド (レインの友達)
- ブラーナ (ジリアンのクラスメイト)
- マーク⇨テレンス (タイデイン診療所の医者)
- ミランダ⇨テレンス (マークの妻。診療所の看護師と医療事務員)
- ダン⇨ポーター (前タイデイン診療所の医者)
- クレア⇨ポーター (ダンの養女。医者)
- コーディ⇨ヴェッキア (クレアの相棒。看護兼介護士)
- レティシア⇨ハートランド (元ホーネットクルー・グリーンエメラルダ号のクルー)
- セシリア⇨デミスト (グリーンオイル財団理事長の妻。前にスタンドフィールド・ドックにいたマールサの知人。愛称セシル)
- ゴメス⇨スタンドフィールド (主人公の祖父)

第六章 胸中模索 2

「十五歳で父親になったって、はあ、美男子ってほんと得だな。」
「若気の至りですね。」

コーデイは冷静に言葉を口にし、ロブの擁護に回った。

「母親は誰、ま、まさか、初恋の人？」

ロブは顔を覆いたくなるような気持ちで手のひらを見つめていた。

「レインの母親は……、レテシア・ハートランド。初恋の人だ。」

「ああ、そうなんだ、やつぱり、初恋の人なんだ。」

カスターはわめきたおしていた。

コーデイは大人気ない人だなと冷ややかな目でカスターを見ていたが、名前に聞き覚えがあったので、ロブに聞いてみた。

「レテシア・ハートランドさんって、一時期、アクロバット飛行シヨでアイドルしていませんでしたか。」

「ああ、キース・ロックフォードのファミリーでパイロットしていた時期があったみたいだが、それは……。」

「8年くらい前の話ですから、すでにレインさんは生まれてますね。」

コーデイは、ロブの胸中を察し、話をある程度脱線させようとした。

「わたしは8年位前に、医療学園都市で看護学校に通っていました。その時に聞いた話があるのです。レテシアさんがスカイロード上官育成学校で事故に会い、医療学園都市病院に入院されていました。その入院中に、マルティン陛下がレテシアさんを見舞いに来られて、病院中大騒ぎになったということです。」

「ええ、それって、ロブの恋敵は皇帝ってことなの？」

コーデイの話にカスターは水を挿した。

「チガウ」

「違います。陛下にはすでに皇后おられて、皇女殿下がお生まれに

なっているはずです。」

二人とも、カスターのくだらない物言いにうんざりしていた。

「レテシアは皇帝のお気に入りだったのは確かだ。それは生まれたばかりの皇女を護衛する意味での優秀なパイロット、女性パイロットを所望していたからだ。」

「腕がいい、美人ときたら、そりゃ、ホーネットクルーに加えることも簡単にやってのけるよね。」

カスターは口を滑らせた。

ロブはカスターを睨んだ。

「レテシアがホーネットクルーのメンバーだったということなぞ、知ってるんだ。」

「あ、それは、僕にだって、情報通の友達くらいいてるよ。あは。」「興味をそそられて調べるなんて、カスターさんって、本当に大丈夫ですか。」

「あはは、大丈夫だよ。女っ気がないロブから女の話聞いて嬉しくなってる・・・あはは。」

「2度と話すものか。お前は馬鹿か。」

「しかし、どうして、レテシアさんと別れることになったんだよ、ロブ。」

「それは、ロブさんの問題で、カスターさんに関係のない話ですよ。」

「コーディに制止されて、しばらく考え込んだカスターだったが、クレアの言ったことを思い出した。」

「クレアさんが言っていた、ロブの弱さがあの子達を苦しめているって言うのは、レテシアさんと別れたことと関係しているんじゃないのか。」

その言葉に、胸中を見抜かれた思いだが、ロブは言葉を発しなかった。

コーディは話題を変えようとした。

「ロブさん、シリアンさんの母親のことをお聞きしてもよろしいで

すか。」

「ああ、ジリアンの母親はセシリアだ。」

「ええ!!!」

セシリアって人は、自分の子供を虐待したっていうのか!」

カスターはまた、興奮したというか激昂した。

コーデイは、そのことをジリアンが気づいているのではないかと思
った。

「セシリアが、ジリアンを虐待していた背景には、混血の子の死産
も誘因しているし、死産を受け入れてからすぐにレインが生まれた
ことも誘因している。」

「つまり、ジリアンの苦しみはロブにもつながっていることだよな。
それで、よく、事実を隠し通して、あの子達と生活できてたな!

僕はそんなことしてるなんて、信じられないよ!ロブ。」

カスターはロブを殴ろうとしていた。

しかし、コーデイがカスターを後ろから羽交い絞めにした。

「カスターさん、だから、これはロブさんたちの問題なのですから。」

「

カスターより背の高いコーデイに抑えられて身動きが出来なかった。

「僕は、あの子達と一緒に生活できて、本当に幸せだった。

僕には、養い親が里親をやっていることで多くの里子と一緒に暮ら
していた。

大人になって、一緒に暮らすことも出来ないから、軍隊に入った。

軍隊を除隊になって、家にもどることもできなくて、ここにきた。

レインたちと暮らしていて、あの子達がほんとうに自分の弟たちだ
ったらって思ってた……。」

カスターの目から涙がとめどなく出てきた。

カスターの言葉にロブはひっかかりを感じた。

(自分の弟たち……)

コーデイには、何を話そうとしているのか理解できなかった。

マークとミランダが向かい合って、その間にクレアが座ってテーブルについていた。

テーブルの上にはミランダが腕によりをかけて作った料理が並んでいた。

最初はお互いに無口で会話がなかった。

クレアはコリンのことを考えながら、自分の医学生時代の話題を持ち出した。

「デイゴたちと一緒にいると、『お姫様気取り』と女子生徒にいじめられて。」

医学生ときには、義父さんの同期生だった教授に気に入られているといわれていじめれた。

おとなしくしてても、誰かがなにかの形でわたしに関わってこようとしていた。」

「それはお前が美人だからじゃないか。」

「あたしのどこが美人なんだよ、マーク。」

眼鏡をかけて冷徹な眼をしているとよく言われたね。

初めてあった子供が泣くことなんて、ほとんどだったよ。」

「あら、そんなことないでしょ。ここ、タイディン診療所にくる子供たちに泣く子はいなかったわ。」

「見知らぬ土地へ行けば、不安を隠すことができずに、顔にでまうんだな、クレアは。」

「クレア、あなたは笑顔が素敵な女性よ。」

(だから、苦手なんだよ、このひと。)

クレアは、話の進め方を見失って、いらだち始めた。

「クレアは、オーラが出ているんだよ。人を寄せ付けたくないオーラがね。」

それぞれに反応の仕方が違っていただけなんだよ。」

「そんな子ども扱いみたいな話……。」

クレアは、あきれた顔をしながらも、目はマークを睨んでいた。

ミランダはこの機会にクレアの胸中を探ろうとした。

「クレア。ここに来られる患者さんたちで、あなたとロボが恋人同士だっという話をする人もいるのよ。どうなのかしら。」

クレアは、あきれた顔をミランダに向けたが、ミランダは笑顔でクレアの言葉を待っていた。

クレアはため息をついた。

「恋人同士……、そういうのは一生ないね。ロボを男としてみることなんてないよ、ミランダ。」

「ロボはまんざらでもなさそうだったかな。」

「あら、そうなの。どうということなの、マーク。」

マークはミランダに問い詰められて咳き込んだ。

「ロボがあたしのオンナという部分を求めていたのなら、レテシアを忘れるためさ。」

レテシアの方が一枚上手だった。ロボを忘れるためにキース「ロツクフォード」を利用した。」

「生々しい話だな。言うんじゃないよ。」

「あたしが好きだったロボは、レテシアの気を惹くために、一生懸命アクロバット飛行をしていたときに輝いていた姿さ。」

命がけで訓練をしていた。ロボたちの親父さんはそうとも知らずにロボの成長振りを楽しみに加勢していた。」

「ロボたちの親父さんもびっくりしただろうなあ。子供ができたといわれたときには。」

クレアは微笑んで見せた。

「生前、父さんが悔しがつっていたよ。ロボたちの親父さんがレテシアにロボの子供が出来たと聞かされて、腰を抜かした姿が見たかったってね。」

「そりゃ、見ものだっただろうなあ。頑固親父だっという話だったもんな。」

「その頑固さが、ロボや、レインたちを苦しめることになったのでしよう。」

ジゼルから聞いたわ。」

ミランダのひとことで、笑いが起こった食卓が一気に冷え切った。

ジリアンはブラシで底をこすっていた。

レインは右腕が使えないので、左腕でホースをもち、水をかけていた。

グリーンオイルを作り出すタンクを空にして、固形化したグリーンオイルがタンクにこびりつき、洗い流したものを湯釜で煮沸して死滅させる。

死滅したグリーンオイルは、固形の繊維状になり、湯釜からこそぎとって、肥料にする。

レインたちは、その湯釜から死滅したグリーンオイルを取り除く作業をしていた。

「ロブ兄さん、また、クレアさんとお仕事でドックを出るんだってさ。」

その話を聞いたジリアンは、クレアが言った空挺に搭乗する話をレインにしないようにロブから口止めされていたことを思い出した。

「また、危ないお仕事をするのかなあ。」

「心配しても仕方ないでしょ。」

「それはもう、兄さんにも言われたし、僕もわかっていることだけどね。」

僕は早く空挺を操縦して、自由に空を飛びたいなあ。」

ジリアンはまた、レインの空想が始まったと思った。

レインはホースを底において、両手を広げるようにして、回り始めた。

「空の中をこうやって、くるくる回って飛びたい。鳥のように。」

いつもなら、レインがブラシを持って底をこすっている役目なのだが、腕を怪我しているのかわりにジリアンがやっているが一向にこそぎ取れないでいた。

「レイニー、ちゃんと水をかけてよ、硬くてとれないよ。」

つまらなさそうに、レイニーはホースを掴んで、ブラシめがけて水

を注いだ。

「塊に水を含ませるようにブラシで叩き込んでから、こするんだよ。力いれてやればできるよ。」

運動するのが嫌いなジリアンは、自分に腕力とか力がないことを思い知らされていた。

「ロブ兄さんが、許してくれないよ。そんな危険な飛行を操縦させるなんてさ。」

「させてもらえなかったら、ドックを出るまでだよ。」
その言葉にジリアンは驚いた。

「え、レイニー、スタンドフィールド・ドックを出るつもりなの？」「うん。ロブ兄さんの言いなりになんかならないつもり。」

レインが平然と言つてのけるさまをみて、ジリアンはさらに驚いた。「レイニーが、ドックを出て、誰がドックを守るんだよ。」

「ジルがすればいいじゃん。ゆくゆくは、プラーナにお嫁さんになつてもらつて、跡を継げばいいじゃん。」

「プラーナは、生物学の博士になるんだよ。僕のお嫁さんなんて・・・。」

ジルは顔を真っ赤にしてブラシでこすり始めた。

（いきなり何を言い出すんだよ、レイニーは。まったく、自分勝手な話だな。）

しばらくして、ジリアンはいやみっぽく、レイニーに言った。

「レイニーが後継げばいいじゃないか。女の子にはよくモテるんだし、すぐにお嫁さんみつかるよ。」

「嫌だね。僕にべたべたする女の子なんてさ。」
ジリアンは、ブラシの柄を強く握り締めた。

（キヤスが聞いたら、怒るだろうな。）

「僕は、自由に空を飛びたい。何もかも操縦に身をまかせて、それだけでなんか幸せになれるような気がするんだ。」

ジリアンはあきれてものが言えなかった。

ブラシを強くこすり、この仕事を早く終わらせようと思った。

「太陽が近すぎてまぶしいくらいに、いつも夢にでてくる、あの空を現実でみてみたい。」

レイニーの言葉を耳にして、ジリアンは手を止めた。

「夢？」

レイニーは口を滑らせたと思った。

でも、秘密だと約束したけど、ジリアンには言っていないだろうと、カスターとの話をジリアンにした。

第六章 胸中模索 2 (後書き)

BGM: 「秘密基地」 高田梢枝

第六章 胸中模索 3 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者)
- ジゼル(スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)
- マーサ(レインとジリアンの母親。ゴメス・スタンドフィールドの後妻)
- セシリア⇨デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。前にスタンドフィールド・ドックにいたマーサの知人。愛称セシル)
- クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
- レティシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー・グリーンエメラルダ号のクルー)

第六章 胸中模索 3

「キヤス、お前、まさか、マーサの息子なのか。」

コーデイはカスターを放した。

カスターは涙ながらに言葉を口にした。

「実母が生きてるなんて、聞かされてなかった。

軍隊に入ってから、養父母から危篤で会いに行くよう言われた。

僕は納得ができなかった。いまさら、実母が生きていて死にそうだから顔を会わずだなんてさ。

除隊してから、スタンドフィールド・ドック《ここ》に来る前に、墓があることを知って……。」

「アレックスの墓を見に来たと言って、オホス川を渡って、マーサの墓に来てたんだな。」

コーデイ、飲み込めない話をして悪いな。マーサは俺の継母なんだ。父さんから子供がいた話を聞かせてはいたんだけどな。」

「つまり、レインさんとジリアンさんは、表向きマーサさんがお母さんということだったんですね。」

「そうなんだ。」

カスターはうなだれていて、座り込み、立ち上がれない感じだった。「キヤス、納得がいかないというのなら、話すよ。」

レシアと別れたのは、あいつが航空士として生きていくためには俺たちが邪魔だろうっておもったからさ。

それが、別れた後、軍隊を除隊していて、レインを引き取りたいと言ってきた。

俺はレインを手放したくないと、父さんに言うと、条件を出されたんだ。

父ゴメス、母マーサの子供、つまり俺の弟にするということ。」

「レイニーはものごころつく年頃だったんじゃないのか。」

「ああ、5歳だった。強迫観念で俺が忘れさせた。」

嫌なことは忘れる性質でね。毎晩泣き続けて、とうとうレテシアを忘れてしまった。」

ロブの言葉にカスターは握りこぶしを作って、怒りを抑えた。

(忘れていない。母親を忘れるはずがない。)

カスターにはしゃべらないという約束をした以上、ロブにレインとのことを話すわけにいなかった。

「ジリアンは、生まれる前から、そういう条件だった。

セシリアの子として育てるわけにいかなかったからな。」

「それでセシリアさんは納得したのですか。」

「納得したね。子供を生みたかっただけって言うていたから。」

「その言葉をみんな信じたのか。それで、セシリアはジリアンを・

・。」

「過ぎてしまったことを今ここで、話をするつもりはない。」

「そうですね。セシリアさんは今、理事長の奥さんになられて、4歳になる娘さんがいらっしやいます。

いろいろとあつたとは思いますが、今は幸せだと思えます。」

「誰かが来る。」

ロブがロブにしか聞こえない音を聞き取って、二人に静かにするよいう口の上に人差し指をたてた。

「ジゼルだ。」

ドアをノックする音がして、外からジゼルがドアを開いた。

「みなさん、昼食ができましたよ。レイニーとジルはじいさまが呼びにいつて、後の人はみんな済ませたの。」

「わかったよ。」

「それから、ロブにはクレアさんから連絡があつて、お昼過ぎ診療所に迎えに来てほしいと。」

「了解した。ジゼル。」

ロブは右手を上げて合図をした。

コーディは今日の予定のことを考えていた。

「ロブさん、クレアさんは今日中にドックを立つとおっしゃってま

したけど、準備できそうですか。」

「嫌、もう今日は無理だな。」

ロブはコーデイに対して、右手で振ってみせた。

「わかりました。」

ジゼルはカスターが泣いている様子を見て、驚いた。

「どうしたの、キャス？」

カスターは涙をぬぐい立ち上がった。

「いや、なんでもないよ。ジゼル。」

ジゼルは、心の奥底で不安に思った。

ロブはそれを察した。

「ジゼル、今、二人にレインたちの話をしたところなんだよ。」

「そう。私たちにもつらい話なのよね。でも、これはロブが責任を取る問題だから。」

「レインさんやジリアンさんも、もう受け入れることができる年頃でしょう。」

「そうだよ、ロブ。もう、事実を打ち明けても。」

「いや、まだだ。レテシアのことは、まだ話せない。」

俺は、レインをレテシアと同じようにさせたくはないんだ。」

「しかし、それは親であろうと本人の意思なら止めることが出来ない問題でしょう。」

一児の母親であるジゼルは、ロブに諭した。

「守るべきものがあるからこそ、飛行士になれる。そのことを理解させてからと思っているんだ。」

「失礼ながら、ジリアンさんはそのことがわかっていらっしやいますね。」

「ああ、そうとも、コーデイ。だから、あいつは判断力に迷いが無い。」

しかし、心の傷にスイッチが入ってしまうと発作を起してしまうのが難点だ。」

その場にいた者たちが全員ためいきをついた。

「時間がほしい。3ヶ月。その間に二人が成長できるように鍛えるし、俺も覚悟を決める。」

「そんなの嫌だ！」

「ジリアンは叫んだ。」

もっていたブラシの柄を床にたたきつけた。

レインはジリアンの叫び声に驚いた。

レインはジリアンに、夢の中に出てくる女性・レテシアの話をした。現在はグリーンエメラルダ号で飛行士をしているから、ドックを出たら、搭乗させてもらうように頼むと話をしたのだ。

「まあ、この話はドックを出ることになったときのことだから、なるべくしないようにと……。」

「ジリアンの息が荒くなった。」

「スーハー、スーハー、レイニーがいないドックなんて、考えられない。」

いつも一緒だと思っていた。スーハー、スーハー。」

レインはコリンと同じ言葉を聴いて、心が痛くなった。

レインはジリアンを抱きしめた。

「ジル、ごめん。本当にごめん。本気で言ったわけじゃないんだ。僕がいくつになっても、空を飛べなかつたら、ドックを出たいって思っただけなんだ。」

「ジルが空を飛ぶようになって、僕も一緒に飛べたら、それでもいい。」

レインはジリアンを抱きながら、背中をさすった。

「スーハー、僕は努力するから。スーハー、体も鍛えるようにするから。スーハー、発作も起さないようにするから。」

「スーハー、お願いだから、僕を、スーハー、僕を、スーハー、僕を、スーハー、一人にしないで。」

二人が抱き合っている湯釜の底に影が差し込んで、コツンと音がした。

「おお〜い、叫び声がしたけど、大丈夫かあ〜。」

ラゴネが湯釜の淵に梯子を外から掛けていて、湯釜をのぞいていた。レインはジリアンを放した。

「じいさまあ。大丈夫だよ。掃除は終わったから、排泄口を開いてちょうだい。」

「OKだあ。ジゼルが昼食を食べなさいって言ってたぞあ。」

「はあ〜い、わかりました。」

ジリアンはまだ息が荒かったが、必死に呼吸を整えようとした。

ガチンと音が響きわかり、底の一部が開いて、ジリアンがこそぎ落としたグリーンオイルの残骸が落ちていった。

「レテシアさんの話は内緒だよ、ジリアン。」

「うん。」

ジリアンは下を向いたまま、返事をした。

ロブに言われていたクレアの話をいま、レインに話をしたら、ドックが出る話は無しになるだろうかとジリアンは考えていた。

しかし、ジリアンはふたりがお互いに隠し事をしていることに嫉妬を覚えた。

（教えないほうがいいかもしれない。）

第六章 胸中模索 3 (後書き)

BGM:「ループ&ループ」ASIAN KUNG-FU
GENERATION

第六章 胸中模索 4 (前書き)

登場人物

- レイン＝スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)
- ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄)
- カスター＝ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キャス)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- ジゼル (スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)
- クレア＝ポーター (ダンの養女。医者)
- コーデイ＝ヴェッキア (クレアの相棒。看護兼介護士)
- マーク＝テレンス (タイデイン診療所の医者)
- ミランダ＝テレンス (マークの妻。診療所の看護師と医療事務員)
- セシリア＝デミスト (グリーンオイル財団理事長の妻。前にスタンドフィールド・ドックにいたマールサの知人。愛称セシル)
- レティシア＝ハートランド (元ホーネットクルー・グリーンエメラルダ号のクルー)

診療所の外で、エアバイクのエンジン音が聞こえてきた。

リビングでくつろいでいた3人だが、クレアは迎えにきたと思って立ち上がった。

立ち上がると、ミランダがクレアの左手を取って、握り、放そうとしなかった。

「お願い。今度も生きて戻ってくるって約束してちょうだい。」

「約束を守ったら、ミランダの食事を食べなくて済むかな。」

「いじわるね、クレア。わたしの料理がまずいみたいじゃないの。」

「まずいわけじゃないよ。食卓の会話が苦手なんだよ。」

「まいったな。まったく。クレア。」

マークが立ち上がって、ミランダとクレアを両手で寄せると抱きかかえた。

「クレア。俺たちはお前を本当の娘のように思っていた。その気持ちには、伝わらなかったのかな。」

「それは……。」

「心配かけたくないから、話をしたくないって気持ちはわかるけど、本当の家族でもそうするのかしら。」

「おそらく、そうするよ、ミランダ。」

クレアは泣きなくなる気持ちでグッと抑えて、唇を強くかんだ。

「お前が下宿してくれた5年間、娘をもつことの喜びを味合わせてくれた。親のように、怒った、叱った、泣いた、悲しんだ、喜びもした。」

クレア、お前が俺たちにしてくれたことに感謝する。俺たちがお前のしたことで犠牲になることがあったとしても、喜んで受け入れよう。

だから、気に病むな。何があってもだ。お前の信念をまげることなくやっつてのける。」

マークの最後のほうの言葉は涙声になっていた。

ミランダも目に涙を貯めていた。

そして、クレアは、マークとミランダの頬にキスをした。

二人の頬につたわる涙が落ちないように。

「感動的な場面に、恐縮なのですが・・・。」

その言葉に3人が声のするほうを向くと、青白い顔をしたカスターが立っていた。

「すみません。クレアさんを迎えに来たんですけど、テレンス先生に二日酔いの薬をもらえないかと思ひまして。」

カスターは深々と頭を下げた。

3人はあつげにとられていた。

ロブは上半身裸で鏡の前にたち、シャドーボクシングをしていた。

それはまるで、ロブが嫌なもう一人の自分を叩きのめそうとしているように見えた。

「フレッドが亡くなった時も、そうやって、シャドーボクシングをしていたな。」

鏡の写る自分の後ろに、デイゴが立っているのをロブはみた。

「フレッドがいつも、ミット打ちを相手してくれたけど。」

「頼めば、俺がしてやるぞ。」

「いや、今はいい。そのうち、レインやジリアンを鍛えるそのときに頼むよ。」

「そうか、わかった。」

デイゴは、そういうと、その場から去った。

ジゼルはその様子を厨房から見ている。

ジゼルが見ている姿を食器を片付けながらコーデイは見ている。

コーデイは、ジゼルの目線の先ロブを見た。

（覚悟を決めると言っていたけど、果たしてどこまで話をしてあげられるのでしょうか。）

ジリアンは厨房で後片付けをしていたが、レインは右腕が使えない

ので、片手でテーブルを拭いていた。

コーデイはふたりをみながら、自分がどのようにして、二人に接しているのか考えていた。

本当の母親にはなれないのだけれど、ふたりには母親が必要なのはあきらまなかった。

コーデイが描く親のイメージが、ロブが父親で自分が母親というのではなく、どうしても、クレアが父親で自分が母親というものを描いてしまっていた。

（ロブさんが父親というのは、どうもイメージがわからない。ここでは父親がロブさんで母親がカスターさんだったのね。

それでは、レインさんやジリアンさんが、母親を知らないまま成長してしまい、将来家族を持つときに困るということになるのね。）
コーデイはクレアが考えていることがわかったような気がした。

カスターがクレアを後ろに、エアバイクを走らせていた。

オホス川を渡りきったあと、クレアはカスターに合図を送ってエアバイクを止めさせた。

「どうかしたんですか、クレアさん。」

「カスター、ヘルメットと、めがねもはずすんだ。」

カスターはクレアが何をしようとしているのわからなかったが、言われるがままにした。

めがねをはずしたカスターの両目の下まぶたをクレアは指で下げた。

「眼球は充血していないのに、まぶたが充血しているじゃないか。」

カスターお前泣いていたのか。」

心中を見抜かれた想いがしたカスターは緊張が走って硬直した。

指を離して、クレアはカスターの表情みて、口にした言葉どおりだと思った。

カスターは目線を上にむけ、ロブから聞いた話をした。

「コーデイの言うとおり、レインたちのことはロブの問題だ。あたしたちがとやかく言う必要はない。」

苦しんでいる二人を見てみぬ振りができないのは、お前だけじゃない、ドックにいてる知っている連中だってそうだ。」

「それはわかっているのですが、レインが母親を忘れていていうロブの言葉に納得がいかなくて。」

「レインはある種、母親に似て天然だからな。自分ではわかっていないんだよ。何が原因でそうなっているのかも。」

「ロブには、忘れてるように見えるんですか。」

「ああ、事実そうでなくても、振舞っている姿がそう思わせるのだろう。ジリアンはレインがセシリアがほんとうの母親じゃないかって口走っているのを知っている。」

「それは、レインがってことですか。」

「それだけセシリアの本性を知ったときのショックが大きかったわけだけど、ジリアンが苦しんでいる姿をみて、冷静にうけとめたんじゃないかな。」

「そういや、レインはやけに能天気な感じが……。」

「ここだけの話にしてくれないかな。」

カスターは驚いた。本来なら、クレアの秘密ごとを話してもらえないのは嬉しいはずだが、話のながれからして嫌な感じがした。

「レテシアの叔父であるグリーン・エメラルダ号の艦長から、頼まれたんだが。」

「何をですか。」

「二人がよりを戻すことだよ。」

「へ？」

クレアとロブ、どちらかが好意をよせていて、それを片方がわかっていて、というような仲だと思っていたカスターは驚いた。

「じゃ、ふたりをくっつけさせることを頼まれたのですか。」

「ああ、そうなんだ。万が一とはいわず、その可能性は高いと思う。」

「つまり、レテシアさんの方もロブのことを……。」

「艦長が頼んでいるんだから、そういうことだろうな。」

クレアは腕を組んで考え込んでいた。

「二人が分かれた理由って、ロボの一方的な想いですか。」

「レテシアがホーネットにレインを乗せたことに腹を立てて殴ったのが原因だけだね。」

(やっぱり、乗せたんだ。)

カスターは心の中で言葉にした。

「な、殴ったんですか。」

「平手打ちだったらしいが。」

「女性に手を上げるなんて。しかも……。」

「別れを覚悟してやった行動だろうが、やりすぎて二人とも避けてしまつて、レインに忘れさせることまでやってしまった。」

「それは僕も酷いと思うのです。そこまでしなくても。」

「いつも、怖がっていることがあつて、レインがレテシアに似て同じくさをすると思ひ出すらしい。」

「それで罰を受けているつもりなんですかね。」

「ここだけの話っていったのは、艦長から頼まれているのはより返すことが前提じゃないんだ。」

レテシアを飛行機乗りから引退させることなんだ。」

「つまり、より返させて、飛ばせないためですか。」

「まあ、そういうこと。今でも現役でスクリーン飛行しているくらいだからね。」

「それが出来るのは、ロボだけですか。」

「レインだと、飛ぶことを教育しそうだからな。」

クレアは空を見上げた。

太陽は傾いていたが、やけにまぶしかった。

上空高くとんだら、もっと太陽がちかくに感じるだろうと考えた。

「ロボに直接その話しないということですね。」

「そう。コーディは察してくれるだろう。お前の振る舞いで邪魔されたくはない。」

「そんなつもりはないですよ。茶化さなければいいのでしよう。」

僕はどちらかというと、レインにお母さんがいたほうがいいっていう感じですよ。」

「そうということだな。」

クレアはヘルメットをかぶってバイクにまたがった。

それをみて、カスターはあわててヘルメットをかぶりバイクにまたがり、エンジンを入れた。

夕食後、コーディは明日に発つ準備をした後、クレアと二人で話すことがあったのを思い出した。

コーディが食堂にいくと、ジリアンが一人で洗いものをしてレインが後片付けをしていた。

「レインさん、クレアさんがどこにいてるか知らないでしょうか。」
少し敬語を使われていることに違和感を感じながら、レインは答えた。

「多分、展望台だと思う。」

「ありがとう。」

食堂をでるコーディの姿をみて、レインはぼやいた。

「コーディさんって、なんだか、打ち解けてくれない感じがするんだ。そう、思わない？ジル」

「うん、そうだね。でも、そのうち、慣れてくれるんじゃないかな。」

「
そういった後、次に出る言葉で口を滑らせてしまつことに気がついた。」

（危ない危ない）

「え、そんなにドックに来ることないでしょう。それとも、長居することになるのかな。」

「ロブ兄さんと仕事することになるっていうのはそういうことじゃないのかな。」

「そだね。明日には発つって言ってたしね。」

ジリアンは胸をなでおろした。

コーデイがドアをノックして展望台に入ったら、ロブとカスターが足を机に置いて寝そべるようにその場から外を眺めていた。

「あのお、クレアさんはどこにいらっしやるか知りませんか。」

「上にいてるよ。」

ロブがコーデイのほうに向いて、上を指差して言った。

「そのこのドアを出て階段があるから上っていつてくれ。」

ロブは左端にある外に出るドアを指差した。

「わかりました。ありがとうございます。」

コーデイがドアを開けると、風が吹き込んだ。

外には階段へのステップがあるが狭く下を除くと暗闇の底がみえた。手すりを握りしめ、一步一步上っていった。

岩山の天辺、岩肌に沿うように階段がつながっていた。

上りきったところに、寝そべって夜空を眺めるクレアがいた。

コーデイがそこに座るスペースすらない。

クレアは階段を誰か上がる音がしたので、見下ろしていた。

「クレアさん、実はみんなのいるところで出来なかった話があるのです。」

「なんだい、コーデイ」

「実は、クレアさんがドックにいない間、設計主任のバトラーさんから連絡がありました、メンバーに加えてほしい人物がいるのとのことです。」

「へえ、なぜ、また。」

「18歳の男性らしいのですが、罪を犯して保護観察の身らしくて。」

「そりゃ、また、難のあるキャラクターだな。」

「バトラーさんの話ではご自分が保護観察者で面倒まではみなくていいらしいのですが、混血児なので誰も面倒を見たらならないということだから、お願いしたいとのこと。」

「また、痛い話だな。」

クレアはまるで他人事のように話を聞いていた。

「理事長のさしがねじゃないだろうなあ。主任はそんな感じの人じやなかったものね。」

「そうですね。とても困った様子で話をされるので、クレアさんには伝えておきますとだけ言いました。」

「オーケーだ。布石になるだろう。」

「布石ですか。」

「ああ、混血児が身近にいと変に差別感を持たなくていいだろう。」

「そうですが、保護観察っていうのは未成年だからでしょう。殺人でも犯したとかではないと思うのですけど。」

「まあ、心配はいらぬよ。どうせ、隠していて、ばれてしまったから、罪を犯してしまったということだと思うよ。」

主任が黒衣の民族関係者カラスだとは思えないからね。」

コーデイは梯子に体重をかけるようにして両腕を組み、梯子の上に乗せて、クレアに耳打ちするように話しかけた。

「ロブさんって、クレアさんに気がありますよね。」

「あんたまで、なにを言ってるんだか。」

「ということは、クレアさんの性癖に気づかれていないんですね。」
クレアは空に顔を向けて、目を横に寄せてクレアのほうを見ようと
した。

「いちいち、教える必要なんかないでしょう。」

「教えるとかではないですよ、気づかないんですかねってことですよ。」

「カスターだってそうだろう、気づいてないよ。」

「ロブさんとカスターさんじゃ、クレアさんとの付き合い期間が違
うでしょ。」

「まあ、そうだけど。一生知らなくていいじゃないの。あいつの驚
く顔が見ものだが。」

「はあ、そうですね。傷つくと思いますけどね。」

「コーデイ、ロブに惚れるなよ。」

「いや、そういうことはしないとします。大丈夫です。思いを寄せている方がいらっしやる男性に興味はありません。」

「あ、そう。だったら、いいんだけど。」

二人は夜空を眺めていた。

「こうしていると、自分がちっぽけな人間に思えちゃう。」

「世界にはわたしたちがしらないことがいっぱいあるのでしょうね。」

「あるね。いっぱい。そして、私たちの知らないところでいろんなものがうごめいている。無数の星の輝きを奪い取ってしまうかのよ。」

第六章 胸中模索 4 (後書き)

BGM：「満天の星を見上げながら」はじめにきよし

第七章 青い果実 ? (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キャス)
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- ジゼル(スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)
- セシリア⇨デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。愛称セシル)
- ヴァン(ロブの同級生)
- コーネリアス⇨アンコーナ(農園オーナーの娘)
- ピエトロ(コーネリアス付の執事)

第七章 青い果実？

テントウムシの荷台にグリーンオイルでできた堆肥を積み、ロブが操縦してその隣にレインを乗せて、発進した。

ロブがレインを乗せたのは、右腕を怪我していてなかなか技術的な勉強できない状態に、気晴らしさせようとしたからだ。

行き先は、ラゴネに葡萄を分けてくれるワイナリーの農園。

オホス川とは反対側のヴェンディシオン川の方へ向かっていくと広陵が続き、ブドウ畑が延々と続く土地がある。

ヴェンディシオン川のそばにはリゾート地があつて、別荘が点在しているのだが、北に向かうと、ワイナリー所有の農園が広がっている。

その一部に、堆肥と交換で葡萄を分けてくれる農園があつて、テントウムシはそのブドウ畑から外れた丘に着陸した。

前もって、連絡をしていたので、農園で働く者が荷車を用意して待っていた。

「よう、男前。生きていたか。」

「いつも、ご挨拶だな。ヴァン。運がいいのか、生きながらえてるよ。」

農園で働くヴァンはロブと同級生だった。ロブがエアバイクでヴァンを迎えにきて、学校に登校していた仲だった。

「そっちは、弟か。女の子みてえだな。」

レインはふくれっ面をしながら、ヴァンに挨拶をした。

荷車に乗せている葡萄が入った籠を下ろし、テントウムシの荷台に積んでいた堆肥を荷車に載せた。

「今日は、一人なのか。奥さんはどうしたんだい。」

「突然、オーナーのお嬢さんが尋ねてきて、相手しているんだ。俺の両親に頼むわけに行かないからな。」

丘の下にブドウ畑が広がっていたが、そこから叫び声が聞こえた。

「きゃ〜、誰かとめてくださ〜い。」

「止めなくていいわよお。楽しいい〜」

「お嬢様〜。」

3人は丘の下のほうを見た。

「話をしていたら、ほら、お嬢さんが向こうからやってきた。」

スピードを上げているエアバイクにのり、ハンドルを握る女の子がオーナーの娘のようだ。

その後を、作業服の女性と蝶ネクタイに黒のスーツを着た男性が走ってついてきていた。

丘の中腹あたりでこぶのように盛り上がった場所があり、そこにエアバイクが乗り上げると、宙に浮いた。

その様子を周りの人間は啞然とみていた。

しかし、ロブは高すぎると思って叫んだ。

「ハンドルを放すんだ。」

女の子がハンドルを放したのを確認すると、ロブはエアバイクの着地点を予測した。

エアバイクが荷車の近くに落ちそうだったので、ロブはヴァンを突き飛ばすようにタックルした。

エアバイクはコントロールを失い、宙に待った後、下に落ちるときは、後方から落ちた。

落ちた場所は荷車のそばに置いた葡萄が入った籠だった。ガツシャ〜ン。

籠は大破し、葡萄が四方に散乱した。

女の子は、レインに向かって落ちていた。

「きゃ〜っ」

「うわあ〜」

女の子は両手を広げてレインの左側に上半身をぶつけた。

レインは支えきれず、地面にそのまま倒れた。

「お嬢様あ〜、大丈夫ですかあ。」

息を切らして、ついてきた男性がロブたちのいるところに到着した。

「あなた、大丈夫？」

作業服を着た女性は、ヴァンの妻だった。

「ああ、なんとか大丈夫だ。ロブ、ありがとう。」

「いや、礼には及ばないが、怪我がなかったか、ヴァン。」

大人たちが、レインたちに視線を向けていた。

「びつくりしたわ。どうなったのかしら。」

「いたたたあ。」

ロブは、レインの方へむかって歩いていった。

「お嬢さん、失礼するよ。」

ロブは女の子のウエストを両手で掴むと持ち上げた。

「えっ。」

人形のように女の子を抱えてると、足が地面につくようにして、女の子がしっかりと両足で立ったのを見てロブは無事であることを確認した。

「痛いところはないかな。」

女の子は後ろを振り向いて、ロブをまじまじと見た。

「痛いところはないわ。びつくりしただけ。」

女の子はロブに笑顔で返事をした。

その様子にロブは呆気にとられた。

「お嬢様。心配しましたよ。無茶をしてはいけませんよ。レディたるもの……。」

蝶ネクタイのスーツを着た男性は女の子が無事かどうか心配していた。

「待って、農園にきたら、わたしにおとなしくしないといけませんって言うのはやめてって言うてるでしょ。」

毅然とした態度で女の子は男性に言ってみせた。

「レイン、大丈夫か。」

レインは自失茫然としていた。

「はう。」

なにが起こったか理解できてなくて、生返事しかできなかった。

「おい！右腕に痛みが走らなかつたか！」

ロブの強い言葉に目が覚めて、レインは自分の右腕を動かしてみた。
「大丈夫みたい。痛みは走ってないよ。」

ロブは左手を差し出し、レインが左手を差し出すと、手を取り、立ち上がった。

「ヴァン、こちらはあなたのお知り合いかしら。」

女の子はロブに指をそろえた手で指して、ヴァンに向かって話しかけた。

「あ、はい、お嬢様。」

「わたしに紹介してくださるかしら。」

「はい、お嬢様。こちらは、スタンドフィールド・ドックのロブ・スタンドフィールドさんです。」

あせりながらヴァンはロブに向かって、女の子を紹介した。

「こちらは、オーナーのお嬢様でコーネリアス・アンコーナさまです。」

コーネリアスは右手をロブに差し出したが、ロブは右手を出して握手をした。

「はじめましてよろしく。」

コーネリアスはちよつと戸惑ったが、挨拶を返した。

「こちらこそよろしく。そして、ご迷惑をかけてしまいました。」

コーネリアスは、あたりを見渡し、大破した籠に散乱した葡萄を眺めていた。

ロブは、お高くとまった女の子という認識はあったものの、礼儀はきちんとしていると思った。

「あちらにいらっしゃる方が、お嬢様のつきの執事で、ピエトロさんです。」

蝶ネクタイ黒スーツのピエトロがお辞儀をして挨拶をした。

「弁償はどのようにしたら、よろしいのかしら。」

「お嬢様、弁償など。わたしがもう少し気を配っていたら、あのような危険な目には……。」

ヴァンの妻があわてふためいて、取り繕うとした。

「わたしは楽しかったけど……。場所を考えなかったわたしが悪いのでしょうか。」

「お嬢様、こちらのスタンドフィールドさんから肥料をいただく代わりにお渡しする葡萄がだめになってしまいました。」

しかし、それはまた、同じ分だけ後日お渡しするということにしますから、弁償はされなくても大丈夫ですよ。」

ヴァンはコーネリアスに説明して納得してもらおうとした。

「それで、よろしいのかしら、スタンドフィールドさん。」

「ああ、かまわないよ。」

ロブは、感心していたが、その考えを覆す行動にコーネリアスは出た。

「あの機体はなにかしら？ さっき飛んでいなかったかしら。」

コーネリアスはテントウムシを指して言った。

「あれは、スタンドフィールドさんが乗って来たものです。」

ヴァンが答えたが、ロブは嫌な予感がした。

「乗せていただきたいわ。」

「だめだ。」

ロブは即答した。

「お金なら、いくらでも払います。」

「金の問題じゃない。君のようなお嬢さんを乗せるような高価な乗り物じゃない。」

乗り心地が悪いし、高所感を強く感じてしまう。」

「怖くはないわ。いつも乗っている空挺って窓が小さくておもしろくないんですの。」

「お嬢様、いけません。お嬢様にこれ以上危険な目にあわせるわけにいきません。」

ピエトロはコーネリアスを制止しようとしたが、手で払いのけた。

「黙っていて頂戴。わたし一度、この農園を上空から見ても見たかったの。」

「それならば、お父様をお願いして、小型機など借りまして、後日、飛行していただくことができます。」

「いいのです。今見てみたいのです。お父様をお願いをしていたら、何年後になるかわからないんですもの。」

「そのようなこと……。」

コーネリアスはロボの前に出て、深く頭を下げた。

「お願いですから、わたしを乗せて空を飛んでください。」

「お嬢様、そのような……。」

ロボやレインはその様子に驚いていた。

コーネリアスは頭をあげて、まっすぐなまなざしでロボを見つめて言った。

「亡くなった母が大事にしていた農園をじっくり隅々まで空から眺めてみたいです。」

ジリアンは、練習用エアプレーンで操縦の練習をしていた。

計器類を順番通りに確認して、スイッチを順番どおりに入れていく。指導をしているのは、カスターだった。

レバーを引くタイミングや、右翼を下げると回転する動きを体で覚えていく練習をこなしていた。

「よおし、今日の練習はここまで。休憩して、あとはジゼルのお手伝いをしよう。」

「了解です。カスター軍曹殿。」

ジリアンは食堂で休憩すると、テーブルにうつぶせて寝てしまった。

カスターはその様子をみて、自分の上着をジリアンの肩にかけた。

（気を張って、疲れたんだな。）

カスターはジリアンの分もジゼルの手伝いをしようと厨房に入った。

「ジゼル、ジリアンは疲れているみたいだから、僕が手伝うよ。」

「あら、そうなの。ここのところ、レインに代わって力仕事していたからね。それは疲れてしまうわね。」

しばらくの沈黙の後、カスターが口を開いた。

「ジゼルは、ロブと同じ年だね。学校とかも、一緒だったんでしょ。」

「ええ、そうよ。」

「女の子にはもてたんだろうね、ロブは。」

「そうねえ、もてたんだろうけど、近寄り難い感じだったからね。」

「え、ロブって、女の子と仲良くしたりって・・・なかったの？」

「ないわよお。わたしとだって、家族みたいな感じだったし。」

「ああ、そっか。ジゼルとは幼馴染みたいなものだもんね。」

「クレアさんのおかげで、女の子に近づけなくなっただんじやないかな。」

「え、クレアさんのおかげって？」

「クレアさんって、結構腕に力がある人だね。ロブのこと生意気って、喧嘩をふっかけておいて、ロブが殴ろうとすると、頭を手で押さえて殴らせないようにしていたわ。」

「へえ〜。小さいころの話だね。」

「もちろんですよ。あの時はダン・ポーター先生の養女になって、集団生活させたほうがいって半年ほど、このドックにいたのよね。」

「クレアさんが14歳のときだったから、わたしたち9歳だったわ。」

「そのころから、ロブはクレアさんに頭が上がらないんだ。あはは。」

「ねえ、キャス。レテシアさんのこと聞いたんでしょ。」

「ああ、うん。ロブは今でもレテシアさんのことを思っているのかな。」

「どうかしらね。クレアさんにすっかり尻に引かれてるって言われているけど。」

「レテシアさんはどんな女性だったの？」

「そうね、一言で言えば、太陽のような人だったわ。輝いていて、周りを明るくしてくれてくれる様な、陽気な女性だったわ。」

「ロブがあこがれる女性っていうことかな。」

「憧れていたのは確かだったけど、レテシアさんは弟のように可愛がっていたから。二人がくつつくなんて、思いもしなかったわ。」

「なにかきっかけはあったでしょ。」

「事故ね。」

「事故？」

「レテシアさんがエアジェットで事故にあって、入院していたとき、もう乗れないかもしれないって絶望していたそうよ。」

そのころ、ロブが頻繁にアクロバット飛行の試合に出て、彼女を勇気付けたって話があって、そのころから急接近したのかな。」

「はっはあ〜ん。ロブはがんばったんだ、レテシアさんを喜ばせるために。」

「でも、まさか、子供が生まれるなんてこと……」

ジゼルが厨房から食堂に目をやると、ジリアンが起きているのが見えた。

その様子にカスターは気づき、ジリアンの方に視線を向けた。

「ねえ、ジゼル。ロブがせまったと思う？」

「わたしはそう思わないけど。」

小声で、カスターが問うとジゼルも小声で答えた。

「フレッドの話を聞いたことがあって、レテシアさんはよくロブにべたべたしてたのよね。ロブはそれを嫌がっていたんだけど、余計に嬉しがってしてたからって。」

「やっぱり、レテシアさんがせまったのかな。」

「でも、クレアさんの話だけど、レテシアさんって天然だから、男に持てる割に、男ごころがわかってないっていう女だって。」

「はあ〜ん、わかる気がする。」

二人して小声で口をそろえた。

「ロブが迫ったのかな。」

葡萄農園の丘の上、レインは空を見上げて立っていた。

そばにはピエトロとヴァンがレインと同じく空を見あげて立ってい

た。

ヴァンの妻はエアバイクに乗ってその場を去っていた。

「僕、知りませんでした。兄さんが女性にこんなに弱い人だなんて。」

「

「俺も知らなかったな。ロブとは中等科からしか知らないけど、女にもてるくせに、近寄らせなかったからな。」

「兄さんって、女性にもてたんですか。」

「ああ、あいつは知らないかもしれないけど、女の子の間じゃ、あいつの話題をしない子なんていなかったらしい。」

「そんな話はあまり聞かないから。」

「ジゼルはデイゴに夢中だったからな。」

「へえ、そんなころから、あの二人は仲が良かったんですか。」

「ああ。俺には妹がいたからな。その手の話はよく聞かされていたよ。」

ゆっくりと旋回していくテントウムシをみていて、レインはおねだりしていたコーネリアスの姿を思い返した。

「あのお、お嬢さんの年齢って・・・。」

「11歳だよ。お前さんはいくつだい。」

「ええ、11歳で、あんな話し方されるんですか。ぼ、僕は、13歳ですけど。」

ヴァンはレインの顔をまじまじと見ていた。

「お嬢さんはお母さんを亡くされて、気丈にふるまってるんだよ。自分がしつかりしないといけないと思ってるてね。」

この農園は天候にやられて全滅寸前だったときに、オーナーに買われて、ここまで豊富な実をつける木々たちを増やすことができた。

みんな、オーナーの奥さんのおかげだ。奥さんも気丈な方だったが、お嬢さんもその血を受け継いでいる。」

テントウムシに乗っているコーネリアスは、地上での気丈な素振りとは別人のように大人しく、外を眺めていた。

ロブは乗り物酔いでもしているのかと心配していた。

「気分でも悪くなったのか。」

「いいえ、大丈夫です。お気遣いなく。」

その声は泣いている様に聞こえた。

コーネリアスは、心配を掛けてしまっていると思って、ロブに話しかけた。

「学校ではいつもいじめられていて、この農園に来るとつらいことも忘れることができます。」

わたしを生んでくれた母に、ありがとうっていつも言ってるのですよ。」

その言葉に、ロブは内心、ドキツとした。

小娘が生意気なことを言っているが、何歳だろうと思いつながら、風で機体が揺れないように飛行していた。

「スタンドフィールドさん、一緒にいてた人って、弟さんですか。」

「ああ、そうだ。レインっていうんだ。」

「何歳なのかしら。」

「13歳だ。」

「まあ、わたしより年上なのね。同じ年齢かと思いましたわ。」

「もう、そろそろ、地上に降りてもいいかな。」

「ええ、満足しましたわ。お手数をおかけしました。」

ロブは、機体を急降下させないように、着地点を考えて、着陸態勢を整えた。

テントウムシが地上に着陸すると、ピエトロが心配そうに近寄ってコーネリアスを見ていた。

「お嬢様、大丈夫ですか。」

「心配いらないわ、大丈夫よ。」

先ほど、泣きそうなくらいに暗かった表情とは想像もできないような、気丈な態度のコーネリアスだった。

ロブはその様子を不憫に思った。

ロブは、コーネリアスのほうへ回って、ヘルメットをとってあげて、コーネリアスを抱きかかえて、降ろした。

コーネリアスはレインが近づいてくる様子を見ていた。

そして、ロブの右腕を取り、グツと下にさげて、自分の顔にロブの顔を近づけた。

「お願いをきいてくれて、ありがとう。安全運転の乗り心地の良い飛行でしたわ。」

そう言って、コーネリアスはロブの頬にキスをした。

その様子にレインは驚き、顔を赤らめた。

コーネリアスはキスをしながら、視線をレインの方に向けた。

レインはコーネリアスと視線が合うと、なにか異様な気持ちがよぎった。

ロブはませている女の子だなと思っていた。

「礼には及ばない。お付の人を困らせたりしないように心がけたほうが良いと思うね。」

「ご忠告を承りますわ。日が暮れてしまえますから、お暇しますわ。失礼。」

コーネリアスはくるりと振り返るとサツサツと歩いて、丘を降りていった。

あわてて執事のピエトロもついていった。ヴァンはお辞儀をしていた。

レインは口を半開きにして、呆然としていた。

そのレインの姿をみたロブは目を細めた。

（なに、馬鹿な面しているんだ、こいつは。）

ヴァンがそれを察して口を挟んだ。

「ロブ、お前の弟はなにやら顔を赤らめているぞ。兄貴がキスをされる姿をみて興奮しているのか。」

レインはさらに真っ赤な顔をして否定した。

「ち、違います。興奮なんかしていません。ただ、ただ、びっくりしてただけですから。」

「ヴァン、からかうのは勘弁してくれよ。相手は11歳の女の子じゃないか。」

「しかし、すっかりしたお嬢さんだろ。」

「ああ、そうだな。気丈な素振りが痛々しい感じだがな。」

「やっぱり、そう見えるか。張り詰めて壊れなきやいいんだが。」

「心配してもしようがないな。」

ヴァンは、大破した籠を指さした。

「ラゴネのじいさまには、悪いがまた、次回に足りない分を用意するよ。」

「いいよ。話は通しておくから。また、今度るときに。」

レインと二人でテントウムシの荷台に無事だった籠に入れた葡萄を積んだ。

ロブは、籠からふたつほどの葡萄を取り出して、荷台に締めた。

葡萄を席に置いて、乗り込んだ。

「ありがとう、ロブ。お嬢さんのわがままをきいてくれてほつとしたよ。手間掛けさせたな。」

「いや、気にするなよ。農園には世話になっているんだ。では、またな。」

ロブは飛行の準備をはじめ、運転席のドアを閉めた。

ヴァンはドアを手でたたいて合図をすると、テントウムシから離れていった。

ロブは計器類を確認してから、ヴァンに手を振った。

レインはロブの後ろから、ヴァンに見えるように頭を下げた。

テントウムシはホバリングして、前に進み、丘をジャンプ台にして飛ぶと、ジェットエンジンを噴射して、高く飛行した。

ロブがレインに葡萄をひと房差し出した。

「ありがとうございます。」

そっけない返事にロブはレインの横顔を見た。

「どうかしたか。」

「いやべつに。ただ……。」

「なんだ？」

「あの女の子の目線が、なんか怖いって思っ、何でかな。」
「怖い？」

「うん、兄さんの頬にキスをしただけなのに、ドキドキしたら、目が合っちゃって、怖いって……。」

ロブはその状況を思い返していた。

コーネリアスがレインに気があるということかと。

「あの感じ……、嫌な感じがするんだ。なんだろう、あれ。」

「ロブはただ、レインがおかしなことを言うんだなってことしか思っ
ていなかった。」

「えっと、思いました。セシルがジリアンを抱きしめていて、僕を
見ていた目にもすごく似ていた。あの時も怖いって思ったんだ。」

レインの言葉に、ハツとしたロブだったが、それが高貴な振りする
女の手口だと、わかったように口にするのは思いとどまった。

（まだ、13歳じゃないか。いや、もう13歳か。）

「オンナってというのは怖い存在だと思ったほうが、まだ、かわい
いとか、そのほうがいいなと思う、俺はな。」

レインのなかで、ロブとレテシアのことを考えてみた。

（レテシアさんて、怖いオンナの人だったのかな。）

それとは違う方向性でレインは口にした。

「クレアさんのことかな？」

察しの良さに、ちょっと頭にきたロブは、レインのヘルメットをコ
ツンとたたいた。

「お前は、割りに生意気だな。」

レインは舌を出してみせた。

太陽は沈みかけていて、空は赤くなっていた。

レインは青い葡萄の実をひとつとって口に入れた。

甘酸っぱさが口の中に広がった。

第七章 青い果実 ? (後書き)

BGM:「ウルトラマリンブルー」ポリバケツメガホン

第八章 パジエロブルー 1 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
ジェイ(スタンドフィールド・ドックのクルーで塗装工)
テス(スタンドフィールド・ドックのクルーで溶接工)
セシリア⇨デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。愛称セシル)
クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
アルバート⇨バトラー(グリーンオイル財団パルスバレイ研究所の空挺開発局設計主任)

「ロブ、無線とつてくれないかな。レッドビジョンから通信が入っているんだ。」

カスターからアナウンスが入った。

ロブとデイゴ、完治したレインの3人が組み手をしていた。3人とも上半身裸で汗を流していた。

ロブは食堂にむかっていって、無線機を取った。

「どうしたんだ、キャス。」

「レッドビジョンが荷物を配達しに来たと言って、着岸許可を求めてきているんだ。」

荷物はクレアさんあてのもの。ところが……。」

「なんだよ、キャス。」

「送り主はグリーンオイル財団パルスバレイ研究所の空挺開発局設計主任アルバート・バトラー氏だよ。」

ロブはしばらく考えた。人命救助の空挺の設計図の責任者はアルバート・バトラーだということを感じ起こした。

「クレアさんからはなにも聞いてないが、拒否しても仕方ないだろう。」

危険物じゃない。レッドビジョンで送りつけてるし、送り主がはっきりしているのだから、許可してくれ。」

「了解。」

ロブは無線機を置くと、何が送られて来たのだろうと考えた。

「まさか、機体そのものの部品を送って来たんじゃないだろうなあ。」

ロブは振り返り、デイゴたちのところへもどった。

「デイゴ、悪い。レインのことを頼みたい。俺はデッキに行ってくる。」

「レッドビジョンなら、荷物だろ。やばいものなのか。」

「いや、クレアさん宛だから。」

「ふつ。だったら、なおさら、やばいものだろ。気をつけるよ。」
ロブは笑いながら、右手でデイゴの肩をたたいた。

「あはは。まあ、できたら、巻き添えにしないようにするよ。」
レインが真っ赤な顔で汗をかき、息を切らしている姿をロブはみている。
目線を感じたレインはロブを見ていった。

「大丈夫だよ。僕は兄さんの心配されないようにがんばるから。」

ロブはうなづいて、レインの頭を軽くたたいて、その場を去った。
ロブが去ったのを見計らって、デイゴはレインにタオルを投げた。

「レイニー。休憩だ。シャワー浴びて来い。」

「え、でも、兄さんが。」

「俺がいいと言ったら、それでいいんだ。」

ロブはなにか焦っている。俺はなにも聞いちゃいない。

焦ったところで、お前の成長が早くなるわけじゃない。」

「僕もなにも聞いてないんだ。でも、できるだけのことはしておかないと。」

ジリアンを不安にさせたくないから。」

「そうだな。だが、いつだってなんだって、俺たちにはロブはなにも言ってくれない。」

言わない以上、問い詰めても話してくれるわけじゃないからな。

俺はレイニーたちの成長を急がせるつもりはないさ。

だから、今は休憩しておくんだ。」

「わかったよ、デイゴ。」

レインはタオルを首にかけると、デイゴに背中を向け、手を振って出て行った。

ロブは作業着の上着を着ながら、デッキに向かっていた。

第三デッキにむかって、階段を下りると、赤い空挺が後ろ向きに入ってきていた。

着岸すると、後方の扉がはしごをかけるように上から落ちてきた。中から、コンテナのようなジェラルミンケースを積んだリフトが出てきた。

リフトはケースをデッキの置くと、そのままバックをして空挺に入っていた。

リフトとは別に作業服を着た人物が伝票と封筒を持ってあらわれた。ロブがその人物に挨拶をした。

「ロブ、スタンドフィールドです。クレアさんはいらっしやらないので代理で受け取りします。」

「レッドビジョンのクレバーといいますが、お世話になります。」

クレア「ポーターさん宛の荷物なのですが、この封筒が添付されていて渡すように言われたのです。」

「了解しました。サインをすればいいのでしょうか。」

「ここをお願いします。」

クレバーは伝票を差し出して、サインする場所を指差した。

「ご苦労様です。確かに受け取りました。」

「ありがとうございます。」

クレバーは頭をさげると、振り返り、空挺に乗り込んだ。

乗り込むとレバーを引き、デッキに降りていた扉があがっていった。扉が閉まっていくなかでも、クレバーはお辞儀を再度した。

その様子にロブは手を振った。

荷物は、ジェラルミンケースが二つだった。

しつかりと、施錠されていた。

電動昇降棒でカスターとジリアンが降りてきた。

伝票の内容をロブは確認していた。

確かに、送り主はバトラーで、あて先がクレアになっていた。

荷物の内容を確認しようと伝票をめくったが、記号らしきものしかなかった。

「ロブ、なにが送られてきたんだ。」

「わからない。」

ロブは、添付された分厚い封筒を開けた。中からは図面と書類が
出ていた。

ロブは、指先でつまむように、図面のはしだけをめくってみた。

図面の名称だけを見て、口にした。

「パジエロブルー。」

荷物の中身が、空挺の部品でないことが理解できた。

しかし、図面があることは、なにかの部品であることに間違いな
いと思った。

二人に見せることはしないほうがいいだろうと考えた。

「図面が入っている。確認してくるから、中身を開けるなよ。」

「了解。」

「開ける準備をしてもいいでしょ。」

ジリアンは奥にあった、手動のリフト機械を出してきた。

「ああ、そうだな。」

気もそぞろで、ロブは電動昇降棒に手をかけ、スイッチを入れると
登っていった。

ロブは展望台につくと、何枚もある書類のうちの全体図の図面を
広げた。

それはエアジェットだった。

他の書類を取り出し、つぎつぎと、広げていった。

書類の内容から、荷物の内容はエアジェットの部品で、組み立ての
説明書があることから、部品を組み立ててつくるエアジェットだと
理解した。

（やっかいだな。こういうことだ。しかもこれは……軽量型戦
闘用じゃないか。）

ロブの頭によぎったのは、クレアをスワン村に連れて行くとした
時、ブルーボードが大破したことだった。

（俺が戦闘するためにまたがったとしても、操縦桿を握るのにキャ
スじゃまともに飛行できないし、ジリアンじゃ体が小さいうえまだ

間に合わない。)

ロブはレインのことを考えたが、この空挺のデザインを考えると、操縦席が防弾ガラスで囲われた状態のもので、攻撃の際、まともに操縦できるかどうかと。

ロブは興奮しながらも冷静に考えようとしていた。

フレッドを失って、3年たつ。そのあと、クレアとスワン村に向かおうとして、ブルーボードを失った。

クレアが考えていることを自分なりに理解しようとした。

(敵は、黒衣の民族だけでなく、グリーンオイル財団だと。軍隊は敵ではないにしろ、味方でもない。

俺たちが立ち向かっていくのはどこなんだ。グリーンオイル財団の目くらましの奉仕活動に手を貸して、手の内を覗こうという手口に賛成はしたものの。

レインたちを盾にするの作戦のうちだとすると、俺はどうしたら・・・)

ロブの中で、まだ先のことだと思っていたレインたちの旅立ちが目前に迫っていることを実感してきた。

空を飛ぶことに夢中になって、命の危険性など気にせず楽しんでいたあの頃、自分に大切なものが何であるかを思い知らされる日が来るとは思いもしなかった。

レインたちには、危険性を前もって自覚して空を飛んでほしかった。(家族の絆を深める前に、本当のことを話すべきなのだろうか。)

クレアからの課題を考えて、唇を強く噛んでいた。

レインはシャワーを浴びて、髪を濡らしたまま、第三デッキに出てきた。

そこでは、ジリアンとカスターでコンテナサイズのジェラルミンケースを横にして、施錠を解く準備をしていた。

「すっごい、でかい荷物だね。」

「うん、なんだかよくわからないんだって。」

「パジエロブルーって、ロブは言っていたな。」

「なんだろう、それって。」

そこへデイゴがあらわれた。

「エアジェットだな。」

「エアジェット?」

3人は声をそろえて口にした。

「意味は翼だから。ブルーボードの代わりだな。」

「デイゴ。じゃ、これ、兄さんのものなの。」

「これはクレアさん宛のものなんだ。」

カスターは伝票の控えを手にして言った。

「クレアがこれを扱えるわけがない。いくらクレアが男相手に喧嘩ができると言ってもな。」

デイゴは施錠を解こうとした。

「兄さんが開けない様に言ってたんだよ。」

「エアジェットの部品かどうか確かめることぐらいなら、いいだろう。」

クレアの荷物なら、怒ったりしないさ。」

デイゴはそういうと、でかい工具を取り出してきて、施錠を解くというより壊した。

ロブは展望台で頭を抱えていた。

書類の中には、日程表があつて、スカイエンジンジェルフィッシュ号の出發式とあつた。

それはグリーンオイル財団の奉仕事業の一環として、お披露目の式典の意味づけがあつた。

そのことは、レインとジリアンを空挺の搭乗させることになること、必然、ジリアンはセシリアと顔をあわせなければいけないことになる。

(ジリアンとセシリアを会わせるわけにはいかない。) 　　そして、出生の秘密を明かすことが必然だと理解した。

いまさら、怖がっても仕方がないとロブは思っていた。
レインとジリアンが、自分からこころが離れていくことを。
何かが吹っ切れたように、ロブは決心をし、図面を広げたまま、昇
降棒に手をかけ、下に降りていった。

ロブが第3デッキに降りると、ジェラルミンケースは開けられてい
た。

「おい、開けるなと言っただろう。」
近寄ると、デイゴが工具を持っていたのを見て、デイゴが開けたこ
とを知った。

「ロブ、悪いが、勝手にあけさせてもらった。」

「デイゴ。レインを頼むと……。」
レインもそばにいて、ロブは髪がぬれているのも見て、シャワー
を浴びたのがわかった。

「兄さん、これすごいね。デザインが斬新なエアジェットだよ。」
「ああ、そうだ。」

目を輝かせて見ているレインをみて、見せなくなかったとロブは思
っていた。

「兄さん、これどうするの？クレアさんの荷物でしょ。」
ジリアンは心配そうにロブに話しかけた。

「そうだな。とりあえずは説明書があるから、組み立てる。」

デイゴ、テスと組んで、組み立てを頼めるかな。」

「ああ、わかった。操縦席は、ロブ、お前がつないでくれよ。」

「わかってる。細かいことはするよ。」

キヤス、通信機取り付けは頼むよ。」

「了解です。」

カスターはすでに通信機らしきものを手にして、確認をしてい
た。

そこへ、塗装工のジエイがあらわれた。

「おい、これはたいしたものだな。」

翼の部分に近寄り、手で撫でた。

「ダイヤモンドをちりばめてコーティングしているじゃないか。しかもクロムメッキ。重装備だな。」

拳骨でたたき、音を確認してみた。

コツンと軽い音がした。

「しかし、軽量型か。薄いな」

レインはジェイに近づいて、話しかけた。

「ジェイ、ダイヤモンドのコーティングって、どういうこと？」

「ああ、まあ、あれだな。」

ジェイはロボのほうをみて、返答にとまどった。

戦闘のためだということを知っているからだっただ。

「ダイヤモンドが一番固いんだ。傷がつきにくいってことだよ。」

「ふう〜ん、そうなんだ。」

ジェイは罰が悪そうに、その場から去っていった。

ロボは部品を確認しながら、レインに話しかけた。

「レイン。」

「はい。」

「お前、テスとデイゴが組んでいるところちゃんと見ておけ。」

「え、どうして？」

「機体の仕組みを理解しておくんだ。」

「あ、はい。」

「今日は部品確認の作業で終わりにしよう。」

組立作業は明日からだ。」

「どんな機体になるんだろう。なんだかわくわくする。」

レインは自分が乗ることとは思っていなかったが、翼のラインをみて斬新だと理解すると完成品を想像して興奮していた。

レインの嬉しそうな姿をみて、内心ほっとしたのは、ジリアンだった。

（これで、ドックを去るなんて考えはなくなったかな。）

第八章 パジエロブルー 1 (後書き)

BGM:「SPIRIT」スガシカオ

第八章 パジエロブルー 2 (前書き)

登場人物

レインⅡスタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ジリアンⅡスタンドフィールド (主人公の弟・愛称ジル)

ロブⅡスタンドフィールド (主人公の兄)

カスターⅡペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)

マーサ (ロブの父親ゴメスⅡスタンドフィールドの後妻。カスターの実母)

レティシアⅡハートランド (元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)

第八章 パジェロブルー 2

ロブは、フレッドの部屋で探しものをしていた。

レインはその部屋の前をとおり、ロブがいるのを見て、中に入ってきた。

「兄さん、何をしているの？」

ロブは、本棚の一番上にあるものに取り出そうと手をかけていたが、レインの声に驚いて、手を滑らせてしまい、本棚のものが崩れていった。

「ああ。」

一番上にあった本が、足元に全部落ちてしまった。

と同時に、本がばらけてしまい、そのなかから、一枚写真がひらひらと舞って、レインの足元に落ちた。

「急に声をかけるなよ、レイン」

「ごめんなさい。」

レインは足元に落ちてきた写真を拾いあげた。

ロブはその様子が目に入っていないくて、自分の足元の本を拾い上げて、もとの位置に戻した。

レインはその写真に見入っていた。

写っているのは、ひとりの女性。栗色、ウェーブ、ロングな髪が腕にまわりついて、首元にはスカイブルーのスカーフ、目は大きく色白で、微笑んでいる姿の女性。

（かわいらしい女性だな。）

ロブは、本棚にあったものうち、ぺらぺらとめくって、一枚取り出した。

それは一人で写っている横顔のマーサの写真だった。

その写真をレインに見られないように、ジーンズのポケットにしまいきこんだ。

そのとき、ロブはレインが写真を見ているのに気がついた。

その視線を感じたレインは、ロブにその写真を差し出した。

「フレッド兄さんの大事な写真なのかな。」

ロブがレインから受け取った写真を見たとき、ハッと驚いた。写っていた女性の写真は、レテシア・ハートランドだった。

（完全に忘れてしまっているのか。）

「どうかな。」

「兄さんの知らない人なの？」

「いや、知っている人だよ。」

「かわいらしい人だね。フレッド兄さんの好きな女性なのかな。」
レインの言葉に、ロブは答えられなかった。

その様子に、レインは言っではいけないことを口にしてしまったのだと思った。

「あ、生意気なこと言ってしまったてごめんなさい。」

「いや、気にするな。」

そういつて、ロブは、レテシアの写真を先ほどの写真と一緒に、ジーンズのポケットにしまいこんだ。

「レイン、お前は何しに来たんだ。」

「えっと、デイゴが、パジェロブルーの機体を確認してほしいって。」

「わかった。ここを片付けてから、すぐ行く。」

レインは罰が悪そうに、その部屋から出て行った。

ロブは、レインが部屋から出て行くのを確認してから、再度ポケットから、レテシアの写真を取り出した。

（今見ると、より一層、よく似ているじゃないか。）

レインはデイゴたちの作業場にもどって、ロブの言葉を伝えた。

そこから、デッキに入り、昇降棒に手を掛け、上にのぼっていった。展望台にあがると、カスターが通信機が動くかどうか調べていた。

「あのね、キャス。」

「なんだい、レイニー。」

「僕、何か悪いことしちゃったみたい。」

レインの言葉にカスターは通信機を置いて、レインの方に体を向けた。

「何かあったのか。」

「うん。デイゴに言われて、兄さん呼びに行ったら、フレッド兄さんの部屋にいてて。」

「それで？」

「僕が声をかけたら、本棚のものが落ちちゃって。中から、写真が一枚出てきちゃったんだ。」

「ほう。」

「その写真には、かわいらしい女性がひとり写っていたんだけど、僕、『フレッド兄さんの好きな女性なのかな。』って言っちゃった。」

「女性の写真？」

「うん、よく考えたら、その女性って、僕の夢に出てきた女性の感じがしてきて……。」

カスターは、ピンと来た。そして、そのロブとレインとのやり取りを想像した。

「レテシアさんの写真だったんじゃないかって、後で思ったんだ。」

兄さんが分かれた恋人の写真をフレッド兄さんが持つてるのって何か変だけど。」

「ロブは何か言ったか。」

「わからない振りされた。」

「そうか。」

「僕……。」

「気にしなくていいと思うよ、レイニー。」

ロブは、レイニーが知らないと思ったからわからない振りをしたんだと思う。」

「そうかな。」

カスターは言葉を口にしながらも、レインのことを不憫に思った。

(写真を見ても、母親だつていうことを思い出せないのか。)

「だったら、いいんだ。なんか、兄さんに悪いことしちゃったんだと思つたから、気にしないことにするよ。」

「ああ、それでいいよ。」

「でも、すごくかわいらしい女性だった。どこかで見たことあるなら、すぐにピンと来たんだけどな。わからなかった。」

「ロブにはもつたいたない女性だったのかもな。」

レインは苦笑いをして、その場から立ち去った。

カスターは、ロブのことを考えていた。

(酷い話なんだけど、ロブもロブで、つらいかもしれないな。)

操縦席と翼を取り付けられた機体は第二デッキにセッティングされた。た。

青い翼は微粒子のダイヤモンドのコーティングで光が当たると、パールのように輝きを放った。

その機体をデッキ上部から手すりに手を掛けてカスターは見ていた。そこへロブがやってきた。

カスターのそばに来ると、ロブは一枚の写真を差し出した。

「なに?」

「マーサの写真。一枚も持っていないんじゃないかと思って。」

差し出された写真を見て、カスターは驚いた。そして、レインが話していたロブがフレッドの部屋で探しものをしていたことを思い出していた。

「どうして、こんな写真が。」

「マーサが危篤のとき家族に連絡したけど誰も来なくて、亡くなった後にもし息子があらわれたら、写真をわたしてあげようとフレッドが残したものだ。」

カスターは写真を手にとって、じっくりと見ていた。マーサは笑顔で幸せそうだった。

カスターは母親の顔を知らなかった。

「よく考えたら、キャスつて、マーサに似てるよ。」

カスターは笑みを浮かべた。

「レインから聞いたんだけど、もうひとりの女性の写真がでてきたでしょ。」

ロブはしばらくだまっていたが、ポケットから、もう一枚だして、カスターに見せた。

「これだ。」

カスターは写真の女性の顔を見て、驚いた。

「うりふたつじゃないか。」

「そうだなあ、今見たら、そっくりだな。レテシアは童顔だったし、あまり顔は変わらなかったしな。」

レテシアの写真をカスターは食い入るように見ていた。

「アイドルになってもおかしくないし、皇帝がご執心っていうのもわかる気がする。」

こんなにかわいいのに、スクリュー飛行に背面飛行するなんて、ギヤップがすごいな。」

ロブはその写真をひっこめて、ポケットにしまいこんだ。

「あ、もう、見せてくれないわけ。」

「そんなに眺めてみても、若いころの写真だし。」

「今じゃ、31歳。かわつちやつてるかな。」

「さあな。」

「レテシアさんのハートを射止めたのなら、さぞ、鼻が高かっただろうな。」

「そうだな。連れ添ってあるけば、誰もが振り返ったな。」

ふと、カスターはレインのことが気になった。

「レインは、写真をもても思い出したりしなかったんだね。」

「ああ。すっかり忘れてしまっている。」

ロブは悲しげに頭をたれて、手すりに手を掛けてその手を見つめていた。

「こころが痛んだりしないのか。」

「いまさらだな。つらい思いをさせてしまうのはわかっていたことだ。」

「ロブもつらいとは思うが、打ち明けることは……。」
「あいつらの成長振りを確認してからと思ったが、ちかぢか、打ち明けることにする。」

思っても見ない返答にカスターは驚いた。

「打ち明けるつもりがなかったのだが、レインをドックから旅立たせるなら、レテシアのことは知っておく必要があると思ったからだ。」

「旅立たせる？」

「ああ、俺は、あの二人を、二人だけで、旅に出すつもりでいた。」

ドックでは得られない、他の土地へ行き、見聞録してくることを望んでいたんだ。」

「可愛い子には旅をさせるか。」

「ふつ。そんないいもんじゃないが。俺自身が育てる自信をなくしたというのもある。」

「はあ〜ん。それはクレアさんがお見通しなんだ。」

「……そうかもしれないな。だから、二人を搭乗させる意味があるのかもしれない。」

「クレアさんは何を考えて行動しているのかわからない人だけど、ついていくしかないのか、いやついていくことを信じていいのか。」

「信じていいが、命に保証はない。」

ロブはカスターの方を見て、真剣なまなざしを向けた。

「命を無駄にはしないように使ってくれてくれるってことだろう、ロブ。カスターは笑みを浮かべて、ロブにこたえた。」

「ああ。」

「レテシアさんのことを知っておく必要があるって、会うかもしれないことかな。」

「そうだ。軍御用達のオイル輸送艦であるエメラルダグリーン号のクルーだから、いずれ出会うことになるだろう。」

そのとき、覚えてさえいないレインに会ったら、レテシアがどんなに悲しむかと思うと……。」

そのロブの様子にカスターはこころのなかでぼやいた。

（未練たらたらか。）

そして、暗くうつむくロブにカスターは気分を変えてやろうとした。

「ロブさ、聞きたいことがあるんだけどさ。」

「何だよ。」

ロブはなにか嫌な感じがした。

「どっちが、迫ったんだ？」

「……ばかげたことを聞くなよ。」

ロブはカスターの顔をにらんだ。

「だってさあ、レテシアさんって3歳年上なんですよ。いくら童顔だって言っても、スカイロード上官育成学校の紅一点だったんだろ。恋のいるはをしないわけじゃないでしょう。」

「おまえ……。」

目を好奇心で輝かせたカスターをみて、ロブはあきれて言った。

「俺が迫られて喜ぶ男に見えるのか。」

「はあ、そうですね。わかりました。」

カスターはニタニタしながら、マーサの写真を上着の胸ポケットにしまいこんだ。

ロブは、気を取り直して、語り始めた。

「俺がよく乗っていたエアジェットのパネルは、クレアさんをスワン村に連れて行くこととしたときに大破してしまった。」

ブルーボードは元々、白色だったんだが、当時の塗装工にねだつて、スカイブルーにしてもらった。」

カスターはきよんとして、ロブの話聞いていた。

「レテシアが好きな色がスカイブルーで、首に巻いたスカーフは絶対スカイブルーだったんだ。」

カスターは写真のレテシアの首元にスカイブルーのスカーフを巻いていたのを思い出していた。

「クレアさんはそのことを知っているんだ。」

「じゃ、クレアさんがブルーを指定してきたってこと?」

カスターの質問に笑みを浮かべて答えたロブは、その場から去っていった。

第八章 パジエロブルー 2 (後書き)

BGM:「思い出の場所へ」はじめにきよし

第八章 パジエロブルー 3 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父。グリーンオイル生産責任者)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- レティシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)
- ゴメス⇨スタンドフィールド(ロブの父)

第八章 パジエロブルー 3

エアジェット・パジエロブルーの組み立てが完成した。

第二デッキに着岸状態になっていたが、透明な機体にパールのような輝きのスカイブルーの翼がのびていて、ドックの岩で休憩をしている昆虫のようにみえた。

完成品を前に、ドックのクルーたちが集まって、眺めていた。

誰がこの期待を試乗するのか、クルーたちはやきもきしていたが、デイゴが口火を切った。

「エアジェットを運転できる人間がロブ以外特にはいないだろう。」
ジリアンが練習しているとはいえ、ろくに乗っていないというのが実情だった。

「ロブ、試運転してみよよ。」
グリーンオイルを機体に注入したばかりで、油まみれの作業着に汗をかいていたロブは手を振って言った。

「いまからすぐってというのは、勘弁してくれよ。シャワー浴びて用意する。」

ロブはそういうと、後ろにむき、手を振りながら、去っていった。
レインは完成品のパジエロブルーの翼に手でなでながら、自分が乗って飛行する姿を妄想していた。

ジリアンは操縦席を覗き込んで、計器類を確認していた。

そこへ、カスターが来て、ジリアンに向かって、通信機的位置などを教えた。

その二人の姿をラゴネは見ていた。

「対照的だな」

その言葉に、デイゴは反応した。

「おなじように成長するとは限らないでしょ、じいさま。」

「ま、たしかにな。いつかのフレッドとロブをみているようだよ。」

「そうですね。」

シャワーを浴びながら、ロブは考えていた。

（ジリアンの航空士としての成長が著しい。レインはまだまだ、機械にうとい。）

護身術を身につけさせただけ、成果はあったと思うが。 ）
ジリアンには才能があったということだろう。

レインはただ単に、体を動かすことができるものには素直に反応するが、頭で考えることにはまだ、素直に行動できない。

護身術は無意識的に動作できるように、練習を重ねて、体で覚えさせた。

ジリアンも、護身術とまではいかないにして、体を鍛えるトレーニングを積んで、背が急激に伸びてきた。

体が出来上がれば、飛行の際の耐性が可能になってくる。

ロブは、自分の顔を鏡で見てみた。

レインの今は、レテシアに似ている。そのうち、ロブに似てくるのだろうか。

性格もレテシアに似ているところはあるものの、自分の好きなことに夢中になる性格はレテシアにもロブにもあった。

ロブのこころのなかで揺れているのは、レインに明かすことで、いままでのように接することが出来なくなること。

自分の不甲斐なさに、強気で接することができなくなるのではと思いついてしまった。

ゴメスを父親として尊敬していた自分を思い起こし、兄としてレインたちに尊敬されているかどうかと問いかけていた。

冷たいシャワーを顔に浴びて、自分自身を奮い立たせようとした。
（悩んで迷っていても仕方ない。誰にでもある通らなければいけない大事なものを確かめる機会なんだ。）

儀式だと思えばいい。）

ロブは、シャワー室から出て、体を拭き、洗濯したての分厚いつなぎを着た。

鏡を再度みたととき、自分の顔をみて、鼻の上にある傷を指でなぞった。

それはクレアをスワン村に連れて行こうとしたときに、黒衣の民族の敵がつけた傷だった。

（生きているわけがないよな。一緒に谷底に落ちたんだ。）

一緒に谷底に落ちたものの、クレアもロブも命を永らえた。

黒衣の民族の敵と相棒も一緒に落ちたが、さらに谷底に落ちていく姿をふたりはみていたからだだった。

ロブはシャワーを浴び終わって、飛行の準備をしてデッキに戻ってきた。

レインは目を輝かせて、ロブを見ていた。

パジェロブルーの操縦席は二人用だった。自分が乗せてもらえると思い込んでいた。

しかし、ロブはジリアンに声をかけた。

「ジリアン、ヘルメットを用意するんだ。」

「え、僕が？」

「そうだ。俺が後部席に乗る。ジリアンは前に乗るんだ。」

レインはがっかりした顔をした。

ロブはレインの顔を見ず、横をとおりすぎて、言った。

「試乗訓練だ。遊びじゃないんだ。」

ジリアンにも聞こえるように言った。

ロブは手にセーブローブを持っていた。

ディゴはその様子に突っ込んで聞いた。

「おい、アクロバット飛行するつもりか。」

「ジリアンの運転のできにもよるが。俺もひさしぶりだから、体慣らしをしてみたい。」

ロブはヘルメットをかぶらずに、後部座席に乗り込んだ。

ジリアンが準備をして、前に乗り込むのを見計らって、通信機が正常に動くか確認した。

「ジリアン、聞こえるか。」

「はい、聞こえるよ。」

「最初は、俺が操縦する。安定したら、切り替えるから、俺の支持に従うように。」

「了解です。」

ジリアンは緊張しながらも、不安はなかった。

ただ、レインが恨めしそうに見ている姿が気になって仕方がなかった。

機体が透明の防弾ガラスになっていて、座席があっても、下をみると宙に浮いているような感じになっている。

ジリアンは怖いなと思ったものの、高さには慣れていたので気にはならなかった。

ロブの後ろにはエンジンやタンクが付いてあるが、座席が高い位置についてるので、後方は振り向けば確認できた。

「準備はできたか、ジリアン。」

「はい。」

ロブは操縦席のドアを閉めると、エンジンにスイッチを入れるとターボファンが回った。

声を出し、順番に計器類を確認すると、ジリアンも同時に確認して返事をした。

カスターがパジエロブルーを離岸させるレバーを押す準備をしていたので、ロブは合図を送った。

カスターがレバーを下ろすと、デッキに取り付けられた機械がパジエロブルーを強く前に押し出した。

その勢いとともに、ジェットエンジンがうなって、機体は飛び出した。

ドックのクルーたちはその様子を見て、歓声をあげた。

レインは、デッキの先端まで走った。

パジエロブルーが飛行する様子を目に焼き付けようとしていた。

カスターはレインの後ろに立ち、両手を大きく広げて振った。

パジェロブルーはまっすぐに飛行すると左に旋回した。

ジリアンは操縦桿をにぎっているものの、動かしていない。

足元をみれば、森の真上のを飛んでいるのがわかる。

ドックのほうをみると、レインのそばにいてるカスターが手を振っているのが見えた。

幼いころは、ロブやフレッドに乗せてもらって、飛んだことはあった。

フレッドを失い、ロブがブルーボードを失ってからには TENTUM シぐらいでしか飛んだことがなかった。

ジリアンは、自分が鳥になったような気持ちになった。

デッキで飛んでいる様子を見入っていたレインにディゴが近づいてきた。

「乗り心地はよさそうだな。」

レインはディゴの声がするほうに後ろを振り返った。

「ディゴ、兄さんがアクロバット飛行するってどういうことなの？」

「あ、そうか、お前たちは見たことがないんだな。機体から身を乗り出すことだよ。」

その様子をレインは想像した。

「え？どうして、そんなことする必要があるの？」

「ブルーボードは軽量型で操縦席らしきものがなかったら。」

「うん。」

「それはアクロバット飛行用に製作されたものだったからさ。」

一人が操縦し、もうひとりが、機体から身を乗り出し、偵察したり、作業したりするのが目的だった。」

「だったって？」

「黒衣の民族が、アクロバット飛行で戦闘するようになったんだ。」

武器を持って、エアジェットよりデカイ空挺に接近して傷をつけたり、エンジンを壊したりして落とすんだ。」

「兄さんって、そんな危ないことをしていたんだ。そんなことした

ら、命がいくつあっても足りないよ。」

カスターがレインの肩を抱いて、言った。

「そうやって、アレキサンダー号やクレアさんを守ってきたんだ。

これからもそうなんだよ。」

レインたちはデッキから、パジエロブルーが青く晴れた空を悠々と旋回していく姿を眺めていた。

第八章 パジエロブルー 3 (後書き)

BGM:「サラウンド」クラムボン

第八章 パジエロブルー 4 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父。グリーンオイル生産責任者)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- レティシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)
- セシリア⇨デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。愛称セシル)

第八章 パジエロブルー 4

パジエロブルーは岩山を旋回する。

レインは、目で追っていた。パジエロブルーの姿が見えなくなると、デッキの奥へ走り出した。

カスターもレインの後を追った。

二人は電動昇降棒に手をかけ上に向かった。展望台に行くと、左端の扉を開けて上に登っていった。

レインが岩山の天辺にたどりつくと、カスターは階段越しでパジエロブルーを目で追いかけた。

パジエロブルーは後方のロブが操縦していた。ロブの指示を通り、ジリアンは操縦桿を握っていた。

エアジェットの操縦方法は実地訓練として、空を飛びながら、体で覚えていくしかなかった。

ジリアンは景色を見る余裕がない。しかし、冷静に操作をこなし、体が覚えていく感覚を感じていた。

ロブはジリアンの緊張をすこし緩ませてあげようと、操縦桿から手を離すように言った。

「ジリアン、体が覚えてきたら、周囲の様子を良くみて観察できるようにするんだ。」

地上でこなしてきた天気図を頭の中に描きながら、飛行するんだ。「了解です。」

ロブは岩山の天辺にレインとカスターがいてることに気がついていてたが、ジリアンは気がついていなかった。

岩山を半周すると、旋回せずに機体の先をあげ、高度を上げていった。

急に方向を変えたので、ジリアンは少々驚いたが、岩山に向かっていく様子に、何をしようとしているかが理解できた。

パジエロブルーは、岩山をなめるように垂直に上がっていくと、天

辺を通り過ぎた。

その時、ロブは、ジリアンに言った。

「ジリアン、足元を見るよ。」

ロブに言われて、足元をみたジリアンは、階段にへばりつくカスターの姿と目を輝かせてこちらをみているレインが見えた。

パジェロブルーはロケットのように高く空へと突き進んでいく。そしてエンジンがいったん止まり、急降下していった。

岩山にぶつからない程度に高度が下がると、ロブは操縦桿を思いっきり引いて、方向転換した。

ジリアンは一瞬恐怖したが、ロブの腕前を信じていたので、降下していく感覚を体で覚えようとした。

パジェロブルーは岩山の天辺の高度で旋回をして、また、レインたちの上に飛行ていった。

その際、ジリアンは、下をみて、レインたちに手を振った。

レインやカスターもジリアンが手を振った様子が見えた。

レインは手を振り返そうとした、その瞬間、パジェロブルーの翼に太陽の光が反射して、レインの目に光が差しこんだ。

そして、レインは強烈な閃光が目に入るような感覚に襲われ、周囲が真っ白になり、気を失ってカスターのほうへ倒れこんだ。

若いレインはフレッドに肩車してもらって岩山の天辺にいた。

目で追いかけているのはブルーボードだった。

操縦しているのはレテシアで、ブルーボードの上にセーブロープをつけて乗っているのはロブだった。

ブルーボードは半周して岩山の上に直進してくる際、背面飛行をした。

ロブは怒鳴って怒っていたが、レテシアは笑っぱなしだった。

逆さづりになったロブは、両手を広げていた。

レインの両足をフレッドが抱きかかえていて、興奮していたレインも両手を広げていた。

ロブがレインの手を触れるように、レテシアは背面飛行で、レインたちの頭上を飛行していった。

そのとき、レインは何か叫んだ。

レインの幼い手にロブの手が触れた。

ブルーボードが通り過ぎていった後も、レインは何か叫んだ。

レインが気を取り戻したら、カスターの腕に支えられていた。

レインの記憶の中で、幼かったあのころ、何かを叫んだのに、何を叫んだのか思い出せなかった。

「大丈夫か。レイン。」

「ああ、うん。ごめん。」

二人は岩山の階段にいた。

レインが倒れこんだときは、カスターもろとも、岩山をすべるようにして滑落するところだった。

カスターがなんとか階段にしがみついて、レインを抱きかかえていた。

「なんかさ、パジエロブルーの翼に太陽光が反射してまぶしくて、まわりが真っ白になっちゃった。」

レインは言い終わると、自分の口を両手で塞いだ。

「気分が悪いのか。」

無言でうなづくレインは、片手で階段の手すりを握り、自分で階段を降り始めた。

パジエロブルーが岩山の天辺で旋回している。

二人の様子がおかしいことに気が付いたらしい。

カスターはその様子が目にはいったので、レインが自分の腕から離れると、片手を大きく振って、無事であることを報せた。

レインは展望台にはいると、走り去り、洗面所に向かった。

カスターが展望台に入ると、レインの姿がなかったので、そこを出た。

レインは洗面所で胃液を吐いた。

頭の中がキンキンと痛む感じと胸焼けがした。

こんなに体調が悪くなるのなんて、レインは初めてだと思っていた。しかし、これは幼いころ、何度も経験していて、レイン自身が忘れていたことだった。

レインは頭痛がしながらも、幼かったあのころ、何かを叫んだ、その何かを無意識に言葉にした。

「ママ、パパ……」

そして、レインの頭の中で、誰がママで誰がパパなんだという問答がリフレインしていた。

「どうしたんだろうね。レイニーをキヤスが抱きかかえているように見えたけど。」

「そうだな。キヤスが手を振っていたら、大丈夫なんだと思う。」

今日はこれまでにして、帰還する。」

「了解です。」

パジェロブルーは岩山から遠くはなれ、高度を下げて、ドックの第二デッキに帰還した。

第二デッキには、デイゴとラゴネがいた。

ラゴネのほうに、ジリアンが向かって行った。

デイゴがロブに声をかけた。

「早い帰還だな。」

「ああ、レインの様子がおかしかったんだが。」

「頂上でなにかあったのか。」

「よくわからない。二人はまだ、上かな。」

「だと思っが。」

ロブがジリアンの方に目をやると、ジリアンは興奮気味にラゴネに操縦桿を握った様子を話していた。

ロブが電動昇降棒に手をかけ、あがると展望台には誰もいなかった。

「レイン、キヤス。どこだあ。」

展望台の部屋を出て吹き抜けの廊下に出て、ロブが叫ぶと、キヤスが返事をした。

「はいはい。」

「キヤス、レインは？」

「なんかよくわからないけど、パジェロブルーの翼で反射光が目に入って、気分が悪くなっただって。」

「今は、どうしているんだ。」

「部屋で休むって言ってた。」

「大丈夫なのか。」

「うん。周りが真っ白になったとあって、先ほど洗面所で胃液はいてただけ。」

「おい、それは大丈夫じゃないだろう。」

ロブがカスターの前を通り過ぎてレインの部屋にいこうとすると、カスターはロブを制止した。

「様子は変だった。けど、しばらく一人にしてほしいって言ってた。」

ロブは少し笑顔のカスターを見ていた。

（パジェロブルーに乗せてもらったことをごねてるわけじゃ無さそうだな。）

ロブは片手でカスターの肩をたたき、無言でその場を去った。

レインはベッドの上で毛布をかぶってうずくまっていた。

自分が無意識に口にした言葉をリフレインしていた。

その言葉を口にしていたことでさえ、恐怖を覚え、自分の身になにが起こったのかと不安に感じていた。

記憶の中にある人たち、レテシアとロブ、フレッド。

確かに「ママ、パパ」と口で言った感覚があった。

写真のレテシアそのままの姿でブルーボードを操縦していた。

目に焼きついてた。たしかに「ママ」と言ったと自分に言い、意識しようとした。

そして、もしかしたら、パパというのは、ロブかもしれないと思った。

しかし、フレッドの部屋にレテシアの写真があったということは、フレッドがパパということかもしれないとも思った。

レインに確信がなくて、ただただ不安に思うだけだった。

ゴメスとマーサが両親だという感じがしなかった。

自分の思い込みだけで、もしかしたら、セシリアが母親かもしれないとさえ思っていた。

写真をみたそのときまで、レテシアの顔は覚えていないと思っていた。

記憶を確認した時、たしかに、レインは自分で思った。

（僕は確かにレテシアさんを知っている。そして、ママと呼んでいた。）

今までなかった記憶がそこにあって、なぜいままで記憶がなかったのだろうと不安に思った。

レインはそれ以上自分の記憶の中から、答えを引き出そうとしても出てこない恐怖に怯え始めた。

カスターは第二デッキに行って第二デッキの上部から、パジェロブルーを眺めていた。

ジリアンが心配そうにカスターに声を掛けた。

「レイニーはどうしちゃったの？」

「パジェロブルーの翼で反射光が目にし込んで、気分が悪くなっちゃったんだって。」

「ふうん。レインらしくないね。雨は降ってきそうにないけど。」

ジリアンはデッキの向こう側に見える景色を見ていた。

「泣いてはないよ。一人にしてほしいとは言ってたけど、気分が悪くなるまで興奮しっぱなしだったんだから。」

「すねていたわけじゃないんだね。」

「ああ、そうだよ。」

「どうしちゃったのかなあ。乗りたがってたのに。」

「そうだね。」

太陽が沈み始め、夕日をあびてスタンドフィールドドックは赤く染まり始めた。

パジェロブルーは光の輝きを失い、翼は赤と青の色が混合した紫色へと変化した。

第八章 パジエロブル― 4 (後書き)

BGM:「うしろまえ公園」 空気公団

第九章 絆 1 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド (主人公の弟・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド (主人公の兄)

カスター⇨ペドロ (スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

マーサ (ロブの父親ゴメス⇨スタンドフィールドの後妻。カスターの実母)

ゴメス⇨スタンドフィールド (ロブの父)

クレア⇨ポーター (ダンの養女。医者)

レテシア⇨ハートランド (元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)

第九章 絆 1

遅い食事を取っていたレインに、ロブが声を掛けた。

「レイン、体調は元にもどったのか。」

「あ、うん。もう大丈夫だよ。」

「食事が終わったら、展望台に来てほしい。話しておきたいことがあるんだ。」

しばらくだまって食事をしていたレインだったが、いつものように好奇心をむき出しにてロブに何の話をするのかとたずねたりしなかった。

「うん。わかったよ。後で行くね。」

レインの素直な様子に不安を覚えつつ、ロブは、その場から去った。展望台にはジリアンがすでにいた。

日々つけている天気図をみながら、立体的な雲の様子をイメージしていた。

空を飛んでいく鳥の視点で雲をかき分けていく。

等圧線を指でなぞりながら雲の谷間をイメージしていき、下を見下ろすと地図上の山脈が見えて来る感じをとらえていた。

（まだ、1回しか飛行していないけど、足元をみたら、地上が全部みえちゃうんだな、パジェロブルーって。）

ドアが開く音がして、ジリアンが振り向くと、展望台にロブが入ってきた。

「話って、何なの？」

「レインが来てからだよ。食事をしていたから、終わってから来るように言ったから。」

「あのパジェロブルーってというのは、クレアさんが言った話で飛行することになるの？」

「ああ、そうだ。」

「戦闘用って言ってたけど、どうやって戦うの？武器とか装備して

なかったと思うんだけど。」

「それは……。ジリアンがうまく操縦できるようになってから、パフォーマンスしてやるよ。」

「パフォーマンス？」

「どうやって、戦うかってことだ。口で説明するより、わかりやすいと思う。」

ジリアンの頭の中で、パジェローブルーがどうやって武器を使わずに戦うかと考えてみたが、どれもうまく連想できなかった。

レインは、食事を残してしまい、考え込んでいた。考えれば考えるほど、認めたくない答えになった。

気分が悪くなって、顔を上げ、天井を見ていた。

レインのそんな様子をカスターは厨房で見えていたが、言葉はかけようとしなかった。

ロブが出生の秘密を明かすつもりであることを知っているカスターは、これからレインがどんな気持ちになるのかと考えると胸が締め付けられる思いがしていた。

いずれは知らなければいけないことだとして、それはあまりにつらくないかと。

レインは天井を眺めていると蛍光灯がまぶしく感じた。

胸焼けしそうな感じがしたので、顔を上げるのをやめて、椅子をひいてたち、食器を持って、厨房に向かった。

「キヤス、ごめん。あんまり食欲がなくて。」

「いいよ。まだ、調子もどっていないだろう。今日は早く休むようにすればいい。」

「うん、でも、これから展望台について、兄さんの話を聞かなくちゃ。」

「そうか。」

レインの元気がない様子に心配だったカスターだったが、それをレインに悟られないように笑顔で食器を受け取った。

レインは食堂を後にして、展望台に向かった。

レインが展望台に入ると、ロブとジリアンは天気図を見ながら航空図を作っていた。

「遅くなつてごめん。」

ロブは、ため息をついた。

レインは不思議そうにロブの様子を見ていた。

「どうかしたの？」

「いや、その。まず、何から話そうかと思って。」

ジリアンはロブの服を引っ張った。

「クレアさんの話は？」

「そうだな。」

ロブは書棚の上から、筒をとり、中から図面を取り出した。

図面を机に広げた。

「空挺のスカイエンジェルフィッシュ号だ。」

レインは目を見開いて、その図面を見た。図面を見ただけでは想像できなかったが、大きさだけは理解できた。

「クレアさんが、スカイエンジェルフィッシュ号で人命救助を行う。」

これはグリーンオイル財団の慈善事業が展開するものだ。」

「兄さんがクレアさんのお手伝いをするって言う話なの？」

「ああ。お前たちもだ。」

「え？」

レインは一瞬理解できなかった。

ジリアンの顔を見ていると驚いていないので、ジリアンは知っているのかとレインは思った。

「僕たちもこの空挺に乗せてもらえるの？」

「そうだ。クレアさんが乗せるように言ってきたんだ。」

正直言つて、俺はあまり気が進まなかったんだが、いろいろ面倒なことがあつて……。」

「面倒なことつて？」

「そのことで、大事な話をしておかないといけないんだ。」

「ジリアンはそのことを知らないのです、真剣な顔でロブを見ていた。」

「ふたりとも、俺の話を最後までしっかりと聞いてくれ。」

ロブは深呼吸を小さくすると、今までになく真剣な面持ちで話し始めた。

「お前たちふたりは、オレの弟じゃない。ゴメスとマーサの子供じゃないんだ。」

レインは驚いたが、ジリアンは驚いていなかった。そればかりしかめっ面をした。

「レインは……。」

「聞きたくない!!!!!!」

ロブが言いかけたそばから、ジリアンは怒鳴った。

「僕がロブ兄さんの弟じゃないとか、レイニーの弟じゃないとか、聞きたくない！」

ロブはジリアンを気の毒に思った。ジリアンが真実を言葉にしなくても知っているということを理解した。

レインはその状態がなんだか、わからなかったけど、気を失ってから頭の中で押し問答しづけていることを思い起こしていた。

「僕のお父さんはゴメスで、お母さんはマーサなんだ。それ以外の人なんて、僕は知りたくもないんだ！」

ジリアンはそういうと、呼吸が荒くなった。

ロブは透かさず、ジリアンを抱きしめた。

「お願いだ、聞いてくれ。とても大事なことなんだ。」

「スーハー、スーハー。嫌だ！スーハー、スーハー。嫌だよ。」

レインは何かに取り付かれたように、言葉を発した。

「ママ、パパ。ママ、パパ。ママ、パパ。ママ、パパ。ママ、パパ。」

「ロブはレインのほうに目をやった。」

レインは魂が抜けた状態で、目が逝ってしまっている感じだった。

ジリアンもレインを見ていて、様子が変なのを理解すると、冷静に

なるうとしていた。

ロブはジリアンの呼吸が普通になったのを確認できると、レインの方に近づいた。

「おい、大丈夫か、レイン。」

ロブに声を掛けられて、レインの目から涙がこぼれた。

「ママはどこへ行ったの？もう戻ってこないの？」

その言葉を耳にしたロブは、啞然とした。

ロブはレインを抱きしめて言った。

「すまない、レイン。オレが悪いんだ。レテシアからお前を引き離したのはオレのせいなんだ。」

「ママ〜。」

レインがそう叫ぶと、ロブを突き飛ばした。

ロブは机に背中をたたきつけられた状態になって、跳ね返った。

「うっ」

ジリアンはその様子をただただ、見ていだけでどうすることもできなかった。

レインは正気になっていた。

「僕は兄さんの子供なんだ。どうして、僕は本当の父親のことを兄さんって思ってるんだよ！」

ロブは背中に手をやって、やっと息が出来る状態だった。

しばらくして、やっと、言葉を口にした。

「言い訳をするつもりはない。ほんとうに聞いて欲しい話をまずは聞いてほしい。」

「聞きたくない。」

「頼むから、聞いてくれ。命に関わることなんだ。」

「嫌だ。」

「ジリアンを失いたくなければ、話を聞いてくれ！」

その言葉にレインやジリアンも冷静になった。

第九章 絆 1 (後書き)

BGM:「小さなひかり。」
「f r a - f o a

第九章 絆 2 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
コリン⇨ボイド(レインのクラスメイト)
マーサ(ロブの父親ゴメス⇨スタンドフィールドの後妻。カスターの実母)
ダン⇨ポーター(前タイデイン診療所の医者)
セシリア⇨デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。愛称セシル)
レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)

第九章 絆 2

ジリアンはいつものように、朝起きて、身支度を済ませると、レインの部屋に行った。

ドアの前で、声をかけると返事がなかった。

「レイニー、起きてないの？」

ドアを叩いても、返事がしないので、ジリアンはレインの部屋のドアを開けた。

ベッドを覗き込むといないので、レインが部屋にいないことに気がついた。

ドックのどこかにいるのかなと思ったが、昨日聞きたくない話を聞かされたのでもしかして、家出をしたのではとジリアンは思った。

食堂へ行くと、そこにロブはいなかった。厨房へいくと、欠伸ばかりしているカスターがいてた。

「キャス、おはよう。」

「おはよう。ジル。レイニーはまだ？」

「それが、お越しにいったんだけど、部屋にいないんだ。こっちにはまだ来てないんだね。」

カスターもジリアンと同じことを考えた。

「どこかにいてると思えない。今日は学校登校日なのに。」

「まあ、今日さぼるぐらいはいいんじゃないか。そつとしおいてあげよう。ジルはこつちへおいで。」

カスターはジリアンを近くに呼び寄せると、両手でジリアンの頬を押さえて顔をあげて見た。

「ジルは大丈夫か。」

「大丈夫じゃない。」

ジルにそういわれて、カスターは両手を離した。

「僕は分かっていたことだから、シヨックなことじゃない。でも、事実を言われるとなんだか赤の他人になった気分になっちゃう。」

「そういうことじゃないってロブは言ってただろう。」

「うん。キヤスはいつから知っていたの？」

「3ヶ月前くらいかな。兄弟じゃないなあって思ってたけど、教えて言っただけで教えてもらえとは思ってなかったからな。」

「クレアさんに言われたんだって。言われなきゃ、知らないままだったのかな。」

「どうかなあ。」

カスターは用意していた朝食を袋につめ始めた。そして、一人分だけジリアンに渡した。

「ほら。もう学校へ行く時間。」

「ああ、うん。」

「レイニーのことは心配しなくて大丈夫だよ。」

「うん。」

「それに、いままでどおりでいいんだよ。ロブやレイニーのことを兄さんだと思っていればいいんだよ。」

「うん、それはわかっているつもりなんだけど。」

ジリアンはそう言って、厨房を後にした。

ジリアンがいつもより早かったので、階段で下まで降りた。

エアバイクのあるところまでくると、レインのヘルメットがなかったのに気がついた。

いつものエアバイクはあったので、きよろきよろしていると、一人乗り用のエアバイクがないことに気がついた。

ジリアンはそこから無線でカスターに連絡をした。

「キヤス、レイニーは一人用エアバイクで出ちゃってるよ。連絡しておくね。行ってきます。」

「了解。気をつけて学校行っておいで。」

幼いレインはロブにしがみついて泣いていた。

「ママはどこに行ったの？もう戻ってこないの？」

ロブがレインを引き離そうとしても離れない。

後ろからやさしく声をかけてレインを抱きしめるマーサ。

「レイニー。これからはわたしがあなたのママよ。」

「嫌だ。嫌だ。お空を飛んでくれるママがいい。」

レインがロブの顔を覗き込むと、ロブは疲れきった顔をしていた。

ロブはレインの目つきが突き刺ささってところが痛み、両手でレインの顔を覆った。

その様子にレインは泣きじゃくり、しがみついていた両手を離れた。

「ママがいい〜、ママがいいのお〜」

幼いレインは声を絞り出すように叫んでいた。

ロブが目を覚ましたら、自分の両手が天井に向けて差し出しているのが見えた。

夢の様子と現実の様子がシンクロした瞬間を感じた。

（疲れているな。）

仰向けになつていたのを横向きにして、目を閉じたが眠れなかった。昨日の晩に話したことを思い返してみた。

ジリアンがセシリアの子供であるとともに、セシリアが皇帝の妹であることを話した。

実存しないはずの妹ではあるが、その息子となれば、皇帝の後継者として養子なり何なりして据えることができる。

命を狙われる理由は、セシリアの息子であること。

黒衣の民族の後継者を殺してしまったのも同然のことをセシリアはしてしまっていること。

逆恨みではあるが、ダン・ポーターからセシリアが生きていることとその息子が生まれていることを黒衣の民族が聞き出されている可能性があったからだ。

ジリアンをドックにおいて、ロブは旅立つことができない理由を述べた。

レインの母親がレテシアハートランドで、父親が自分であることも話した。

理由は、レテシアがホーンテッドで一流の飛行士として任務に就いている様子を、家族がいては邪魔になるのではないかという懸念を抱いていたからだ。

そこにハートランド家からレインを養子にしたいという話が舞い込んできたのだという。

レテシアがホーンテッドの機体にレインを乗せた事件をきっかけに、別離したのだ。

ロブはそれが許せなかった。自分がいない間にレインを連れ出そうという魂胆かという考えでレテシアからこころが離れてしまったのだった。

それはあとで真実を知ったとしても、取り返しのつかない状態になり、ハートランドはスタンドフィールドと決別し、グリーンエメラルダ号はドックに着岸することがなくなった。

レインがレテシアを探し求めて泣き叫ぶ姿にロブは何度こころを痛めただろう。

泣きつかれて安らかに眠るレインの寝顔をみて、ロブは安心して眠りについたものの、朝になってもレインがなかなか目が覚めないことがあった。

その度ごとに、心臓がつぶれる思いがした。

ライトを照らし起すことを繰り返すことによって、目が覚めるたびにマーサが抱きしめていくうちに、レインは自分のママがマーサだという認識ができてしまった。

ロブは、自分に言い聞かせてきた。いつかは真実を伝えるときがあるだろうとわかっていたはずだと。

そして、レテシアが成長したレインと会ったとき、母親を忘れてしまっている息子の姿を目の当たりにさせるわけにいかない。

レインはコリンの家に行った。

昨晩遅くに、コリンの家に来てきて、コリンやコリンの両親に、兄と喧嘩になって家出てきたと伝えた。

コリンはこころのなかで大喜びしていたが、困った顔をして両親に
レインを家においてもらおうよう頼んだ。
両親は快く引き受けた。

コリン自身幼いころからよく家出をして両親を困らせたことがあつ
たからだが、それは無理やり家族の下に返してあげても解決しない
ことを知っているからだ。

昨夜はコリンのベッドにレインと一緒に寝て眠りについた。

朝は、いつもなら、コリンは両親のパン作りの手伝いをするのだが、
レインが一緒なので、学校へいく時間まで二人は寝ていた。

コリンの母親に起されて、ふたりは目が覚めた。

「レイン、少しは眠れたかしら。」

「ええ、ご迷惑をかけてすみません。」

「いいのよ。気が済むまでここにいてて。」

「良かったら、ずっとここにいていいよ。」

コリンはそういって、レインの後ろから抱きついた。

「そういうわけにはいかないけど、今はお互いのことが許せる時間
が必要だからね。」

「ありがとうございます。おばさん。」

コリンの母親は笑顔でレインをみた。

そしてレインは母親の存在が自分になかったことを実感してしまっ
た。

「学校へ行く用意をしてね。」

「ええ、行きたくない。」

「何を言ってるの。ちゃんと勉強してきてちょうだい。」

「レインは行きたくないよね。」

「ごめん、コリン。僕は学校へ行く用意はしてきているんだ。」

「ええ。じゃ、ジリアンにばれちゃうじゃん。」

「ジリアンには心配かけたくないんだ。学校で理由を話すつもりだ
よ。」

「レイン。あなたは弟思いね。不本意なできごとはこれからもたく

さん遭遇するかもしれないけど、ジリアンにはちゃんと話す姿勢ができていれば、理解してもらえるわ。」

「そうですね。」

「朝食は用意してるから、ちゃんと食べて行ってね。コリン、お母さんは仕事があるから。」

そういつて、コリンの母親は部屋を出て行った。

二人は身支度を始めた。

レインとコリンが学校に登校すると、ジリアンが中等科の校舎で待っていた。

「レイニー、おはよう。コリンのところへ行ってたんだよね。」

「おはよう、ジル。心配掛けてごめんよ。」

「ううん。大丈夫。無事だったらいいんだ。キヤスがレイニーのこととは心配しなくていいよって言ってたし。」

「おまえって、兄がいなくなっても、冷静なのかよ。」

「コリン、黙っててよ。」

コリンはふてくされて、レインをおいて中等科の校舎へ行ってしまった。

「兄さんはまだ起きてきてなくて、知らないと思うけど。」

「キヤスが話をするよね。僕はしばらく、コリンの家にお世話になるよ。」

「帰ってこないつもりじゃないよね。」

「わからない。」

「そんな。」

学校のチャイムがなりはじめると、レインは唇をかんだ。

「いまは、悔しくて、悲しくて、兄さんの……顔も見たくないんだ。」

コリンのお母さんが言うてくれた、時間が解決してくれるかどうかはわからないけど。

ジリアンに悲しい思いをさせないようにするよ。

僕たちは、兄弟として育ったんだ。それ以外の何者でもないよ。」
レインの目は涙で潤んでいた。

ジリアンは笑顔で深くうなづくと、その場を去った。

レインはジリアンが初等科の校舎に入っていく姿を見つめていた。

第九章 絆 2 (後書き)

BGM: 「現象」 岡北有由

第九章 絆 3 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キャス)
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父。グリーンオイル生産責任者・愛称じいさま)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- ジゼル(スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)
- コリン⇨ボイド(レインのクラスメイト)
- ジョイス⇨ボイド(コリンの父親)
- レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)

第九章 絆 3

ロブは昼前に起きてきて食堂から厨房を覗いた。

当たりを見回し、カスターがないことを確かめた。

「ジゼル、悪い。コーヒーくれないか。」

「はあい。ちよっと、待っててね。」

ジゼルは昼食の準備をしていたが、コーヒー豆を取り出してコーヒーマーカーにセットしてお湯を注いだ。

本当なら、カスターが手伝いをしているのだが、厨房にいなかった。

「はい、どうぞ。」

ジゼルは厨房の窓口から、コーヒーを出した。

「ありがとう。」

暖かいコーヒーをありがたくいただくロブ。

「ジゼル、キャスと顔をあわせなかったかな。」

「ええ、そうね。いつものとおり、食材がちゃんと厨房に届けられていたから、寝坊とかしてないと思うわよ。」

しばらくだまり込んでいたロブだったが、ジゼルに昨日の話をした。

「そう、真実を話したのね。」

レイニーとジルには会ってないから、どんな様子か知らないけど、ジルはわかっていたみたいだし。

問題はレイニーよね。」

「ああ、反抗期ってところもあるから。手に負えなくなったら、どうしようかと思ってしまっな。」

「ああ、変に弱気ね、ロブ。レイニーに嫌われたくないからかしら。」

ロブは沈黙していた。

「凶星なの？笑っちゃっわね。まだ、13歳かもしれないけど、もう13歳なのよお。」

嫌われちゃっても、仕方ないでしょ。そうやって、自立するんもの

なんだからって、おばさんくさいけど。クス」

「フフツ。そうだな。」

そこへカスターの無線が入ってきた。

「ロブ、起きてるかあ。タンクに水を放流するのを手伝ってくれよあ。」

ロブはコーヒーを飲み干して、厨房の入り口に置いた。

「ごちそうさま、ジゼル。」

「あ、ロブ、朝食はコーヒーだけにするの？これ、持って行きなさいよ。」

ジゼルはロブに紙で包んだホットドックを渡した。

「サンキュー」

ロブは無線をとった。

「起きてるぞ、キャス。今から向かう。」

日が暮れて、ジリアンは二人乗りのエアバイクでドックに帰り着いた。

もどつてみると、そこにロブが立っていた。

「レインは？一緒じゃないのか。」

「あ、うん。コリンのところ泊まるって言ってたよ。」

「何も聞いてないが。」

「言っわけないでしょ。家出だもん。」

「家出？」

ジリアンは何食わぬ顔で、ロブの目の前を通り過ぎようとした。

ロブはジリアンの腕を捕まえた。

「おい、ジリアン。家出ってなんだ。一人用バイクがないのは、レインが乗っていったっていうことか。」

「そうだよ。僕が朝起きたら、レインーはもういなかった。学校へ行ったらコリンと一緒に登校してきた。」

しばらく、ドックに帰らないって言ってたよ。」

「しばらくって……。」

ジリアンはロブにつかまれた腕をぐいと引き寄せてロブから離れた。「顔を見たくないって言った。そつとおいてあげてよ。」
ロブは啞然としていた。

ジルはそのまま、階段を上にあがっていった。

（そうか、ジリアンも反抗期か。というか、昨日の今日だからな。）
ロブは頭をかいて、ため息をついた。

コリンの家では閉店する準備をしていた。

コリンの母親は夕食の準備を、父親のジョイスは明日の準備のために材料を厨房に持ちこんでいた。

レインとコリンは店の掃除をしていて、コリンはずっと嬉しさのあまりニタついていて、動作が小躍りしていた。

コリンがレインになついている理由は、初めて会ったとき、レインがコリンと目を合わせてもそらさなかったことだった。

コリンが人と目を合わせるとかならず、相手が目をそらしてコリンを避けたがった。

その態度にコリンはいつも憤りを感じていて、幼少から他人となじめずに問題児な行動をとっていた。

レインと初等科4年生のことだったが、レインはコリンと普通に接していただけで、物怖じしなかったし、コリンの異質な行動のことは気にならなかった。

当時のレインはクラスメイトの女子に囲まれていたから、コリンはレインに近づけずにいた。

コリンはずっとレインとは友達になれると思っていて、機会を待っていた。中等科でその機会を手に入れ、思い通りになった。

店内の掃除が終わると、二人は住居スペースのキッチンに行った。

「母さん、掃除終わったよ。」

「ふたりともご苦労様。お風呂の用意をして、先に入りなさい。そのころには夕食できてると思うから。」

「はい。」

コリンは素直に返事をして、レインについてくるように指で合図を送った。

お風呂の用意ができたなら、コリンは先に入るようレインにいった。レインは一緒に入っても恥ずかしくないと言ったが、そのときはコリンが嫌がった。

二人は風呂を済ませると、ダイニングルームに行った。

「お風呂を先に入らせました。」

「さ、お腹すいたでしょ。食事にしましょう。」

四人が席につき、食事が出来ることへの感謝の気持ちを言葉にしてから、食事をはじめた。

「ボイド家はもともと農家だったのよ。食事に対しては感謝の言葉を述べて食事をするので、また食事できることに希望を持つのでよ。」

「母さんは若いころにパンの作り方を勉強して、パン作りができるようになった、父さんと店を持つ夢を叶えたんだよ。」

「コリンは店を継ぐんだよね。」

「別に無理して継がなくても、コリンのしたいことをすればいいさ。」

「うん。でも、今はパン作りが好きかな。」

レインはボイド家の和やかなやりとりをうらやましいと思いつながら食事をしていった。

時々突然切れたように暴力的になったりするコリンを知っているレインは、幸せなそうなコリンを見てるとそういう性質だということとを忘れてしまえるほど和やかな雰囲気だった。

「レイニーは、ドックでどんなことをしているのかな。」

「今は体を鍛えることと、整備の勉強をしています。あとはドックでのお手伝いですね。」

「お手伝いとはなにかしら。」

「グリーンオイルをつくりだすのに、水を放流したり、オイルをタンクからなくなったら、タンクを掃除したり、いらなくなったらオイル

ルを処理したりするんです。」

「そう、たいへんそうね。」

「でも、ドックにはたくさんの人たちが働いているから、その人たちにまじってちょこまかと見よう見まねでやっている感じですよ。」

「コリンも母さんの見よう見まねでパン作りをしているよな。」

「うん。発酵の仕方はまだまだ出来ないけど、形つくって焼く作業は母さんがいなくてもできるようになったよ。」

「父さん、早いものね。小麦粉を砂遊びのようにぶちまけていたずらばかりしていたコリンが人様に食べられるようなパンがくれるようになるんですから。」

「そうだな。レイニーのお兄さんもレイニーやジルが成長していく姿を実感しているんだろっね。」

レイニーはロブの話をされると、黙り込んだ。

ジョイスは少し気まずい事になったかと思っただが、透かさずコリンがフオーローした。

「僕たちはいつもまでも子供じゃないよねえ、レイニー。」

「う、うん。ドックじゃ、いつも子ども扱いだけだね。」

「心配かけさせてくれるのも子供であることの証しだから、ほんとは嬉しいものかもしれないわね。」

「おいおい。そういうと、コリンが調子にのるぞ。」

「あはは、そうだねえ、父さん。でも、母さんに心配かけないように努力するよ。泣いて欲しくないからね。」

「コリンったら。」

コリンやコリンの両親は、レイニーの家出の本当の理由を知らない。

レイニーは親子の和やかなムードに心が痛む思いがした。

レイニーにとって、親子の和やかなムードはなかった。

その親子じゃないにしても、ドックでは家族のような人たちがいっぱいいて、日常的に孤独を感じることはなかった。

いつもジリアンがそばにいて、それが当たり前のような日常だった。コリンの家に来て、レイニーはよりいっそう自分自身が惨めなような

気がしてきた。

食事を終わると、レインとコリンは食器の後片付けを手伝い、その後二人は部屋にもどった。

部屋に戻ると、コリンは食事中的レインの様子が気になっていたの
で、そのことをレインに聞いた。

「なんだか、元気なくなっていたけど、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。」

「ドックに帰りたくなっただの？」

「そうだなあ。ちょっと寂しくなったかな。物心ついたときには僕
に父さんがなくなつて母さんが病気で亡くなつてしまつて親と生活
したつていう感じがしなかったかな。親の代わりになつてくれる人
は兄さんをはじめ、たくさんいたから。」

コリンは神妙な面持ちでレインに顔を近づけた。

「ど、どうしたの、コリン。」

「これから言うこと、誰にも話さないつて約束してくれるかな。」

「う、うん。急にどうしたんだよ。」

「僕さ、養子なんだよ。」

「え?!」

「父さんと母さんの本当の子供じゃないんだ。」

レインは言葉が出なかった。

「本当は、僕の髪の毛、赤色じゃないんだ。黒なんだよ。」

「え、で、僕と一緒に風呂はいらなかったのは……。」

「赤い髪じゃないつて知られてしまつたかもしれないと思つたから。」

「え、でも、どうして、それを……。」

「誰にも話してはいけないつて言われたんだけど、レインには知っ
ていて欲しいつて思つたんだ。」

「誰にも話さないよ。」

「命に関わることなんだつて。理由は教えてもらえない。」

命に関わることという言葉に、レインはジリアンを思った。

ドックの食堂では、ジゼルがロブの顔の傷を手当てしていた。夕食前に、ロブはシャドウボクシングをしていると、ディゴに声を掛けられ、二人でボクシングを始めた。

最初二人は同等の力量で攻撃や防御を繰り返していたが、ロブがそのうち乱れ始め、ディゴに打たれ続けてしまった。

ディゴは容赦なく、ロブの顔を殴り続け、それをジゼルが見るに見かねて止めた。

ディゴは怒って、その場から去っていった。

「もう、ロブはだめだめになったら、そうやって自分を痛めつけることするでしょ。」

ロブは口の中を切っていたので、しゃべれなかった。

「レテシアと別れた時もそう。クレアさんに散々殴られて、抵抗しなかった。」

カスターが二人のそばに寄ってきた。

「クレアさんを殴り返したりできないでしょう、ジゼル。」

「ああ、キヤス。ロブが殴られて当然って思ってるんですよ。」

「そうでもないよ。でも、殴られて気がすむっていうこともあるからさ。」

「そんな自虐的な性質、ちっとも、男らしくないわよ。」

「ああ、ディゴは男らしいからね。」

「キヤス、怒るわよ。」

「ああ、ごめん。ジゼルを怒らせるつもりはないよ。」

ジゼルも話すことができないロブにかわいそうに思っ、しばらく黙ったが、耐え兼ねて、言葉を口にした。

「ロブ。ディゴを連れて行かないってつもりなわけ。」

「何の話だよ」

ロブが話せない代わりにカスターが話をしていた。

「クレアさんの仕事の話、ディゴには何も話してないでしょ。」

連れて行かないつもりなわけ？ 私たちに子供がうまれて、その子がまだ小さいから？ わたしがディゴがいなくなって悲しむとも思っ

ているわけ？」

「矢継ぎ早だな。」

「わたしたち、ドックのクルーなのよ。このスタンドフィールド・ドックのためなら、命だって……。」

ロブはそれ以上ジゼルから言葉を話せないように、右手でジゼルの口を押さえた。

「ジゼル、そんなつもりはないけど。デイゴがこのドックに残ってくれたら、じいさまだけじゃ、こころもとないだろう。という話をロブとしたんだよね。」

ジゼルは、ロブの手を両手で押さえつけた。

「ね、聞いて。デイゴは何も言わないけど、わたしにはわかるわ。

連れて行ってほしいの。デイゴがフレッドに約束したことがあるのよ。」

「なにを？」

「フレッドに何かあったらロブのことを頼むといわれていたの。フレッドには、ジルのことを頼まれたんじゃないかって、ロブのことを頼まれたんだって。」

ロブはうつむいた。

「フレッドがデイゴにとって、とても大切な親友だって、あなただつて知っているでしょう。約束をやぶるわけにはいかないのよ。」

ロブは手当てが終わったことにジゼルに感謝しつつ、うなづく動作をして、ジゼルの肩を右手で握った。

左手でジゼルの頬に触れた。

カスターはロブの代弁をした。

「わかったよ、ジゼル。考えておくよ。」

ジゼルは本当かしらという気持ちでカスターの顔をみた。

ロブはジゼルの頬を寄せて、自分の目を合わせるようにして、目を閉じて、返事を返した。

「ジゼル、あと片付けは僕がするから、もう帰っていいよ。」

デイゴには何も言わなくていいから。ちゃんとロブから話すからさ。

「そう、わかったわ。」

ジゼルはエプロンをはずし、折りたたんで、手に持ったまま、後ろを振り返り、ロブをみた。

ロブはジゼルに手を振った。

「おやすみなさい。」

ジゼルはそういうと、食堂を後にした。

第九章 絆 3 (後書き)

BGM:「やさしさ」チャットモンチー

第九章 絆 4 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キャス)
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父。グリーンオイル生産責任者・愛称じいさま)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- ジゼル(スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻)
- コリン⇨ボイド(レインのクラスメイト)
- ジョイス⇨ボイド(コリンの父親)
- レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)

第九章 絆 4

レインがドックにもどらなくなって、1週間がたった。

その間には、ロブがボイド家に電話で「面倒をかけて申し訳ない」と連絡していた。

レインはコリンの家で、居づらいなながらも、コリンの嬉しそうな様子になかなかドックにもどると言い出せなくなっていた。

その様子を察していたコリンの両親は戻れるようにと促してはコリンに邪魔されていた。

コリンが母親からパンの発酵具合について食い入るように説明を聞いているときに、コリンの父ジョイスはレインをつれて勝手口に向かった。

二人に聞こえないようにジョイスはレインに話した。

「レイニー、コリンは君に私たちの子供ではないということ話したらしいね。」

「あ、はい。でも、誰にも言いません。」

「君を疑っているわけではないんだよ。クレアさんはこのことを知ってるんだ。」

「え、クレアさんが？」

「ああ、ダン＝ポーター先生はわたしの古い知り合いだね。クレアさんもコリンのことを知っているんだ。」

レインはダンが殺されたことを思い起こして、寒気がした。

「君になにかあった場合、もうしわけないからね。クレアさんにコリンが私たちの子供でないということを知っていると話してほしいんだ。」

クレアさんなら、君のことをちゃんと守ってくれるだろうから。」

レインは眉をよせて怪訝そうな顔をした。周囲の大人は子ども扱いをしている。自分の身は自分で守れると言いたかった。

「コリンは君が親友だから、知っていて欲しかったと言っていたが、

中身はそう簡単な話ではなく複雑なんだ。

君に迷惑がかかっては、ポーター先生に申し訳ない。君の事をポーター先生は将来が楽しみだと話してくれてたからね。」

「はい、わかりました。おじさんの言うとおりにします。」

「コリンは、わたしたちが全身全霊で守る。それは子供を育てる喜びを与えてくれた恩返しだ。

君にはまだ実感できないかもしれないけど、家族の大切さはわかっているだろう。」

「はい。」

「喧嘩したぐらいで大切なものを失うことなんて夢にもおもわないかもしれないけど、どんなことが起きるかわからない。

後悔しないうちに、仲直りするんだ。いいね。」

「は、はい。」

ジョイスは笑顔でそう話すと、レインの背中に手を回して、この場からいかせるように促した。

パジェロブルーを乗りこなそうと、ジリアンは必死だった。

自分の命が狙われているかもしれないというのは、自分の身は自分で守ることができれば、何も恐れる必要がないという考えに達していた。

ロブやレインの足手まといになりたくないその思いは、やらなくてはいけないことを嫌々やっていたジリアンにとって、心機一転の機会になった。

ロブと同乗しても、一人で操縦桿を操作できるようになったジリアンは、夢中になりすぎて、天候を確認できていなかった。

「ジリアン、雲行きが怪しくなった。今日はここまでにしよう。」

「了解です。」

ジリアンはドック周辺を旋回して高度を下げ、ドックに着岸準備を始めた。

パジェロブルーが着岸準備を始めたので、カスターは展望台から、

第二デッキに向かった。

ロブがパジェロブルーから出てくると、カスターは透かさず、言った。

「雨が降りそうだね。レイニーが寂しがってるんじゃないのかな。」

ロブは眉間にしわを寄せて、ロブをにらんだ。

「そんな怖い顔しないでよ。迎えにいかないのは、帰ってくるのを待っているのかい。」

「どっちも意地っ張りだから、レイニーがもどってこれないんじゃないの。」

ジリアンはヘルメットをはずしながら、ロブの前を横切って言った。

「オレのことを意地っ張りって言ったか、ジリアン。」

「そうだよ。レイニーも意地っ張りじゃないか。そっくりじゃないか。親子でしょ。」

「おいおい、ジル。ロブに喧嘩を売る気が。」

「生意気な口を言葉にするのは誰に似たとか言わないでよね。」

ロブは遇の根も言えなかった。

カスターは呆れていた。

「やれやれ。これは兄弟喧嘩大歓迎状態だな。」

ジリアンは振り返りもせず、そのまま、第二デッキを去った。

「どうするんだよ、ロブ。」

「迎えに行つて戻つてくるとも思えないし。」

「僕は迎えにいかないからね。余計怒らせるだけだろ。」

「そうだな。」

ロブは途方に暮れていた。

「レイニーは、レテシアさんに会いたいって思っているんだろうか。」

「いきなり、なんだ。」

「どうなんだよ、ロブ。あわせてあげる事って出来ないのかよ。」

「会いたいっていうのに、会わせないつもりはないさ。」

「レテシアさんの写真をレインは……。」

「わかった。迎えに行く。それ以上言わないでくれ。」

「ロブ。」

「なんだよ。」

「レテシアさんにレインを合わせたくないとかじゃなくて、ロブがレテシアさんに会いたくないからだろ。」

「言うなって。キャス。休憩したら、迎えに行く。」

「シャワー浴びないのか。」

「どうせ、雨で濡れる。」

「雨は降りそうだけど、振らないかもしれない。」

「そのときは、川で水浴びでもするさ。」

「意地っ張りだな。こんな寒い季節に川で水浴びかよ。」

ロブはカスターに拳を振り目の前で止めた。

「おやおや。失いたくない気持ちにはわかないわけじゃないが、子供ってというのは巢立っていくものだろう。」

ロブは何も言わずに第二デッキを出て行った。

カスターはパジェロブルーの点検し始めた。

レインとコリンは昼間に店番をしていた。

コリンの両親は朝からパン作りで働いているので昼食後は昼寝をする。

昼からは客があまり来ないが、コリンが学校へ行かない日は店じまいをせずに開けていることにしていた。

「こんにちわ、コリン。おやつを買いに来たわ。シュークリームはあるかしら。」

「ええ、ありますよ。」

「外は今にも雨が降りそうよ。今日は豪雨になるかもしれないって予報では言ってたわね。」

「じゃ、おばさんを最後に今日は店じまいするよ。」

「そうね、お客さんも来ないかもしれないわね。孫たちのおやつを買い忘れるところだったの。いつもありがとね。」

「いえいえ、こちらこそ。ありがとうございます。」

コリンは客を店の入り口で見送ると店じまいの準備をしようとした。そこへ、エアバイクが店の前にとまった。エアバイクはロブで店の中に入るうとした。

「こんにちわ。ロブさん。」

「こんにちわ。レインが世話になってすまない、コリン。レインはいるかな。」

コリンは一瞬嫌な顔をして、にこやかな顔にもどり、後ろを振り返った。

ちょうどレインは店の奥から出てきたところだった。

「レイニー、お兄さんが来られたよ。」

レインはロブの姿をみて、一瞬怪訝そうな顔をした。

「レイン、話があるんだ。外で話さないか。」

レインはジョイスの言われたことを思い返して、素直に応じた。

レインがコリンの前を通り過ぎようとした。

「レイニー。」

「コリン。ごめん。」

レインは店を出て、扉をわざと閉めた。

ロブはエアバイクのところに来ると、振り返った。

レインはロブの前に立った。

「レイン、この前、フレッドの部屋で俺が探していたのは、マーサの写真なんだ。」

「母さんの？」

「何故かというところ……。マーサには父さんと再婚する前に、子供がいたんだ。」

事情があつて手放したんだが、その子供にマーサが危篤になったときに連絡したんだが、ついに来なかった。」

ロブは空を見上げて雨が降らないかと思ひながら話をした。

「フレッドはマーサが亡くなった時に、マーサの子供が尋ねてきたら、その写真をあげようと言っていたんだ。」

レインは誰がマーサの子供なのか理解した。

「ま、まさか、キヤスが？」

「キヤスがマーサの子供だった。キヤスにフレッドの思いを伝えて写真を渡した。キヤスは母親の面影すら覚えていなかったんだ。」
そして、ロブはフレッドの部屋で出てきたレテシアの写真をレインに差し出した。

「フレッドはこの写真をお前に渡したかったに違いない。ただ、あの時は動揺してしまって、俺は自分のポケットにしまいこんでしまった。」

レインはうつむいて写真を見ていた。雨は降り出した。

レテシアの写真に雨粒とも、レインの涙とも、判断付かないものが落ちてきた。

「この写真を受け取ってくれ。フレッドの遺品だと思って。」

レインは写真の端を握り締めた。

「この写真の・・・ママはいくつなの？」

震えながら声を搾り出すようにレインは言った。

「15歳くらいだと思う。スカイロード上官育成学校へ入学する前のレテシアだ。」

しばらくは会えないかもしれないと、ドックにタイミングよくいたカメラマンにフレッドがお願いして内緒でとってもらったものなんだ。

レインは不思議な顔でロブを見ていた。その目には涙がこぼれていた。

「ママに会いたい！」

力いっぱいレインは叫んだ。

ロブは泣きたい気持ちを振りはらって、レインを抱きしめた。

「すまない。」

「ママには会えないの？」

「努力はする。自分の子供に会いたくない母親はいないだろう。ただ・・・」

「ただ？」

「レテシアは知っているんだ。お前が忘れてしまっていたことを。」
「そうなんだ。」

「人づてに伝わってしまったっている。ほんとうに目の前でそんなつらい思いはさせたくなかったから、いつかは本当のことを話さなければいけないと思っていたんだ。」

「もう、いいよ。」

ロブはレインを引き離した。

「僕は、兄さんとは違うはず。家族を失ったりしない。」

僕はスタンドフィールドの人間なんだ。それ以外の何者でもないんだ、きつと。」

「レイン。」

「ジリアンだつてそうさ。誰かの血が流れていても。僕たちはスタンドフィールドドックで育つたんだ。」

いまさら、それ以外の人間なんてなれないよ。たとえば、ドックがなくなつたとしても。」

雨は次第に強く振り、二人の頭上に容赦なく降り続いた。

「じいさまが、言つてた。アレックスがなぜ、女帝と結ばれなかったのかつて、それは自分が築き上げたスタンドフィールドを手放すことになるからだつて。」

僕はドックを去ることも考えていたけど、それはしていけないことだと思つた。」

二人はずぶぬれになりながら、涙を流しながらも笑顔になつた。

「じいさまがアレックスの話をいつもしていたのか、わかつたよ。アレックスの想いを胸刻みつけるためだね。」

「ああ、そうだ。俺たちだけじゃない、ドックにいてる連中みんなだ。俺たちはアレックスの子孫だ、家族なんだ。」

ロブはレインの後ろのほうへ指を刺した。

レインが振り返ると、コリンが傘をもつて、店からでてきた。

雨が上がって、夕日が沈むころ、レインとロブはドックに戻ってきた。

ジリアンやカスター、そのほかドックの人たちが、二人の姿をみて、安堵した。

食事を済ませると、ロブはデイゴにクレアの仕事について話をした。

「ジゼルが何を言ったか知らないが、俺はおまえがついてきて欲しいといえば、着いていく。お前と違って、俺は命を粗末にしたりしない。」

「ああ、そういうと思ったよ。」

ロブは苦悩していたことからの開放された感覚で胸をなでおろしたが、その一方でデイゴに言いたいことを言われてふてくされる思いがした。

「俺は、レイニーやジルの面倒を頼まれたわけじゃない。お前の面倒を頼まれた。」

命を粗末にするようなことはできたら、させたくない。そう言っても、お前は気にも留めないだろうがな。」

「そうでもないよ、デイゴ。」

ロブは目を閉じて、微笑んだ。

「レインやジリアンが、俺を乗り越えていく姿をみるまでは命を粗末にするつもりはないさ。」

そして、あいつらのために、命を燃やし尽くす。それが俺の責任と
いうか罪科なんだろう。」

「そうだな。スタンドフィールドの人間がどんな人間か、命を張ってあいつらに教えてやればいい。」

ロブは拳をつくって、デイゴの胸にパンチを打ち込むしぐさをした。

レインがシャワーを浴び終えて、シャワールームから出てくると、
ジリアンが立っていた。

「兄さんのことを許せるようになったの?」

「うん。兄さんのように、大切な家族を失うわけにはいかないなっ

て思った。」

「そうだね。」

「僕たち、今までどおり兄弟だよ。たとえば、離れ離れになっても。」

「離れ離れになっちゃうの?」

「どんなことが起きるか予想もつかないからさ。」

「それは僕が狙われるかもしれないってことなの?」

「ううん。ドックを出るって言うことは、知らない世界へ飛び出すってことだよ。」

知らない人たちに出会っし、騙されちゃうかもしれないし、道に迷っっちゃうかもしれない。

離れ離れになったとしても、どこにいてようとも、兄弟には変わりがない。それが言いたいだけ。」

「うん、わかったよ。」

「ちよつと見ない間に背が伸びたかな、ジル。」

「そうかな。あ、でも、一人でパジェロブルーに乗れそうだよ。もうすこしでなれる。」

「そうかあ、いいなあ。僕もがんばって操縦桿が握りれるようになりたい。」

シャワールームで、レインとジリアンはふざけあって、笑い声が響いた。

展望台には、カスターが星を見ながら、酒を飲んでいた。

そこへロブがやってきて、カスターの酒を瓶ごと呑みだした。

「デイゴと話がついたよ。」

「そうなんだ。」

「気のない言葉だな。」

「ああ、ごめん。ジゼルが強がっているように思ってたね。」

「デイゴと結婚したんだ、覚悟は出来ているだろうがな。」

ロブが酒の瓶をテーブルに置くと、カスターはそれを取り上げると抱きかかえた。

「そうだ。クレアさんから、連絡があつたんだよ。」

「何を言ってきたんだ？」

「クルーに男性二人を確保したと。」

「はあく、そうか。これで9人になったか。」

「えつとお、クレアさん、コーディ、ロブ、僕、レイニーとジル、デイゴに、男性二人。つと、9人だね。」

「だいたい十人って言ってたからな。ドックから、人を出すことはできない。じいさまだけでがんばってもらうしかないか。」

「雨降つて地固まるだな。」

「なにが？」

「僕たち、クルーのことさ。」

「そうだな。」

ロブは微笑んで、開放感を味わつてた。

第九章 絆 4 (後書き)

I BGM:「Last Love Letter」
「チャットモンチ

第十章 始動 1 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
テス(スタンドフィールド・ドックのクルーで溶接工)
クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)

第十章 始動 1

ジリアンとロブはパジエロブルーで飛行練習をした

展望台で、パジエロブルーから通信のやりとりをしていたカスターはクレアからの電話を受けとった。

「クレアだけど、ロブは？」

通信を中断するとカスターは外の方をみて、パジエロブルーが飛んでいるのを念のために確認した。

「クレアさん。ロブはいま、パジエロブルーでジリアンと飛行練習してますよ。」

クレアはカスターのいうことがいまいち理解できなかった。

「パジエロブルー？何のことだよ。」

「え、クレアさん宛の荷物でグリーンオイル財団研究所から届いたものですよ。」

「エアジェットのこと？」

カスターはクレア宛の荷物だからと、パジエロブルーの存在は周知の上だと思っていた。

「ええそうです。図面にパジエロブルーって明記されてましたよ。クレアさんがつけた名前じゃないんですか。」

「違うね。どうしてわたしが名前をつけなきゃいけないんだか。」

（ロブの思い込みか。）

ようやくここで、ロブが話していたことで思い違いをしていることにカスターは気がついた。

「バトラー設計主任にやかいかいごとを頼まれて、代わりにエアジェットを所望したんだよ。」

それを二人で乗り回しているっていうことなんだな、カスター」

「乗り回すなんて、遊んでいるわけじゃないですよ。」

「言い方が悪かったよ。それより、ロブが戻ってきたら、こっちに連絡するように言って欲しい。」

「こつちつて今どこですか。」

「医療学園都市カテリーナ病院。」

「病院ですか？」

「ああ、世話になった教授がここで院長しているんだ。調べたいことがあってね。あたし宛で電話くれたらいい。」

「わかりましたあ。」

電話を切ると、カスターは通信に戻った。

レインはテスから溶接の仕方を指導されていた。

レインは手持ち遮光面を顔にあて、小型の溶接機を肩に下げて、皮手袋で作業をしていた。

「お面を避けるときは、完全にスイッチを切ってからでないが目が焼けてしまう。いいね。」

テスも遮光面を顔にあてて、皮手袋でレインに支持をしていた。

「はい。わかりました。」

「空で作業する場合、お面を当てて作業は出来ないからね、ゴーグルをつける必要がある。」

一刻を争う修復作業は、アクロバットの必要なようになってくるからさ。」

「え、そうなの？」

レインは溶接したまま、遮光面を顔から話した。

「おい、スイッチ切ってからだと言っただろ。」

「あ、ごめん・・・いえ、すみませんでした。」

あわててそれからスイッチを切った。

「手持ち遮光面はレイニーには不向きだな。ま、慣れたらうまく使えるようになると思うけどな。」

溶接の扱い方をきちんと身につけておかないと、危険だということ。レインは認識できているが、自覚している部分で落ち着きがないので、なれないことを身に着けるのに時間がかかるという具合だった。

「空挺で作業するときにはゴーグルでするといい。溶接の仕方に問題はないよ。レイニー。」

テスはレインの背中を軽く叩いた。

「休憩しよう。」

「はい。」

レインは返事をしつつ、ため息もついた。瞬きを繰り返して、目の調子を確認した。

お面を置いて、肩からかけていた溶接機を下ろし、皮手袋を外した。レインはデッキの方へ向かった。

第二デッキには、ちょうど、パジエローブルーが着岸していた。

パジエローブルーが戻ってくると、カスターは展望台からデッキに降りてきた。

第二デッキの踊り場の手すりに手をかけて下を除くと、ロブがヘルメットを脱いでいるところだった。

第二デッキから先に降りてきたジリアンが踊り場が上がってきた。

「お疲れ、ジル。今度は一人で操縦できるね。」

「うん。やっとだね。」

カスターが下を覗こうとしたとき、下から声がした。

「兄さん！僕はいつになったら、操縦の練習が出来るようになるの？」

ロブは、レインの作業着が溶接用だとわかって、レインの目をみていた。

「レイン、お前、目が焼けているぞ。」

レインは瞬きを繰り返して、痛みを感じていることに気がついた。

「目をこするな。目薬を差して来い。」

レインはポケットから目薬を出してその場で指した。

「話をそらさないでよ。ちゃんと持つてるんだから。」

踊り場からカスターとジリアンはレインとロブの様子を眺めていた。ロブは話をそらそうとしたことを見抜かれて、どうしようかと考え

あぐねていた。

レインはロボをにらみつけていた。

「僕は兄さんの言うとおりに、ジェイから塗装の仕方、ディゴから板金の仕方や機械の取り付け、テスから溶接の仕方と学んできたよ。」

ロボはレインの話にうなづいて見せた。

「ジリアンはもうひとりで操縦できる状態になっているし、今度は僕が操縦の仕方を教えてもらう番だと思う。」

ロボは頭をかきながら、いやいやながら、うなづいた。

「スカイロード上官育成学校って優秀なパイロットの学校で、その学生だったママでしょ。じいさまがよく言ってた兄さんがコンテストの常連だったというパイロットなんですよ。」

「何がいいんだ。」

「僕に、パイロットの才能がないっていうことじゃないでしょ。」

「お前には度胸がないんだよ。」
レインはふてくされた。前々から、ジリアンと比べられてよく言われたことだった。

「それに、飛行を遊びだと思っている。トラブルに見舞われたとき、パニック起して、だめだめになるのが目に見えるようだ。」

「そんなことない！」

「ああ、そうか。だったら、明日、パジェロブルーに乗せてやる。パニック起して、泣いたりしたら、容赦しないぞ！」

売り言葉に買い言葉だった。レインはカッとなってロボに喧嘩を売った状態になったことに気がついた。

青い顔になっているレインの顔を見て、ロボはお灸を吸えるつもりで言った。

「どうした、返事は？」

「・・・わかったよ。泣いたりしなきゃいいんですよ。」

「言っておくことがある。」

「なにを？」

神妙な顔をしてロブは言った。

「レテシアが空を飛ぶ理由は……。」

「え、理由？」

「スリルを味わう為だ。」

「え?!」

「空を飛ぶのが好きというより、スリルを味わうのが好きというオ
ンナだった。」

レインは、幼いころの記憶で、フレッドに抱かれ、手を伸ばし、背
面飛行するブルーボードでロブと手が触れたことを思い出した。

そのとき、ロブは怒っていてレテシアは笑っていた。

「ま、まさか、それが別れた理由じゃないよね。」

「ちがう。」

ロブはばつの悪い顔をした。

「別れた理由は俺の弱さだ。子供が子供の親になったという状態だ
つたからな。」

「ママに会わせてくれんでしょ。会ったら、わかるんだよね。ママ
がどんなひとなのか。」

「そうだな。約束しよう。お前が度肝を抜くくらい、とんでもない
オンナだったことを。泣きたくなくなるくらい思い知らされる。」

据わった目つきでロブはレインをみた。レインは怪訝そうな顔で口
ブをみていた。

「意味わからないよ。泣きたくなくなるくらい思い知らされるなんて。」

「俺も何がいたいのかわからなくなってきた。これ以上はこの話
なしな。明日のこと考えて置けよ、レイン。」

レインは呆れた顔になった。

踊り場にいたカスターとジリアンも呆れていた。

「兄さんっておかしなことを言うんだな。」

「オンナの話なんて、ここ最近のことだからな。よっぼどうぶなオ
トコかと思うよ。」

「え?」

「ああ、ジルにはまだわからないか。あはは。」

「ジリアンはためいきをついた。」

「なんだか、ホツとした。」

「なにが？」

「僕は、あの二人の仲の良さに嫉妬していたんだ。」

「ああ、なるほど。」

「親子だって知らなかったけど、なんとなくわかっていたかな。それでいて、不安だったんだ。」

「きっとそれはあの二人の間に入れない自分がいつかは見捨てられるって言う感じがしたかだと思う。」

「そんなことは絶対無いさ。」

「うん、そうだね。だから、ホツとした。安心した。親子だから、僕が入り込む余地なんてないんだ。」

「そういうことでもないけど。ほら、あいつも変わらず、レイニーはロブのこと兄さんと呼んでる。」

「いきなり、父さんって呼べないでしょ。僕なら出来ないな。」

「まあ、そうかな。レテシアさんのことはママって呼んでいるみたいだがな。」

「兄さんって、気にしているの？レイニーのこと。」

「まあな。でも、時間が解決してくれるでしょ。」

「そういうもんかな。」

「シャワー浴びておいで。疲れているだろ。」

「うん。」

「ジリアンは踊り場から出て行った。」

「カスターは踊り場からデツキへと降りていった。」

「レインはロブと話をした後、デツキから去っていった。」

「ロブはパジェロブルーの点検を始めた。」

「そこへカスターがやってきて、点検の手伝いを始めた。」

「何の話をしていたんだか。変な親子の会話だったな。」

「キヤス、聞いていたのか。」

「ジリアンと二人でね。」

「ロブはため息をついた。」

「自分でもよくわからなくなってきた。レインを操縦させたくないという気持ちが強い。」

「どうしてまた？」

「俺自身がエアジェットに魅せられて、飛行士になったが、危険な飛行をやったのけて、親父たちをよく困らせた。」

「レインも同じことをするとでも？」

「レテシアの影響もあるからな。」

「いまさら、あわせたくないって言い出すなよ。」

「そういつつもりはないが。」

「明日、どうするつもりなんだよ。」

「とりあえず、怖がらせてみる。」

「はあ〜？」

「試しにな。アクロバット飛行を見ている分には面白いかもしれないが、操縦桿を握って飛行する分には楽しいかどうか。」

「ああ、そういうことか。」

「レテシアはそれを楽しんでいた。」

「だったら、レインも楽しむんじゃないの？」

「どうか。」

不敵な笑みをうかべてロブはパジェロブルーのオイル口を開いて作業を始めた。

第十章 始動 1 (後書き)

BGM:「VACANCY」Kyle

第十章 始動 2 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の実父)
カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父。グリーンオイル生産責任者・愛称じいさま)
デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー。レインの実母)
コーディ⇨ヴェツキア(スカイエンジェルフィッシュのクルー。前グリーンオイル財団理事長ダグラス⇨Jr⇨デミストの介護士)
セシリア⇨デミスト(現グリーンオイル財団理事長の妻。ジリアンの実母。)

第十章 始動 2

医療学園都市はクレアにとって、良い思い出のない場所だった。

クレアは15歳から20歳まで、医療技術を身につけるべく、テレ
ンス夫妻のところで下宿をしながら、医療学校に通学していた。

クレアの養父ダン・ポーターと医療学校で同級生だったという医師
ニコラ・ランバートに目をかけてもらい、クレアはトラブルを起し
ながらも医療学校を卒業した。

ニコラが院長をしている病院がカテリーナ病院だ。

その病院に、クレアとコーデイとクルーに加えられた男性一人が世
話になっていた。

夕方、クレアにロブから電話が入った。

「電話するように言われたので。」

「ああ、悪いな。日程にあるグリーンオイル財団研究所へ行く前に、
医療学園都市に来てもらえないかと思ってね。」

「どういうことですか。」

「ジリアン、レイン、ロブ、三人の血液検査をしたいんだ。」

「血液検査って……。」

「コーデイに頼んで、セシルの髪の毛を採取したんだ。薬物の反応
が出たよ。」

「薬物?!」

「精神が安定できないみたいだ。コーデイが直感的にそれらしいこ
と言うから、ために髪の毛を採取したんだ。」

「それは相手の許可をとってないことですよね。」

「もちろんさ。」

ロブは受話器を持ちながら、片手で頭を抱えた。

「セシルは乱交の噂があるんだよ。」

「乱交?!」

「ああ、夫の財団理事長との仲が冷えているという話がある。」

セシルを診療所で薬を抜くのに預かったときは、あたしの目をはばからず、ダンに色仕掛けで迫っていたからね。」

セシリアから迫られる話はロブにも覚えがあった。

「薬がないと乱交してしまうんですか……ってジリアンがフレッドの子じゃないって考えてるんじゃないでしょうね。」

「まあ、まちがいはなくフレッドの子だろうけど、念のために調べておきたいんだ。」

「……保険ってやつもあるでしょう。」

「そうだな。」

ロブはためいきをついた。

「わかりました。」

「財団からお迎えが来ることになってきているのだが、設計主任に頼んで、身体検査をしたいから、クルーを医療学園都市に運んで欲しいと云っている。」

「そういうことですか。準備を早めないといけないということですね。」

「エアジェットはもう乗りこなしているのだろう。カスターから聞いたよ。」

「ええ、ジリアンの操縦で完璧にいきますよ。」

「それから、誰がパジェロブルーの名づけたのがあたしだって言うんだよ。」

「え、俺ですが。クレアさんじゃないんですか。」

「あたしじゃないね。」

「カスターから聞いたんですか。」

「他に誰から聞いたんだよ。」

「そ、そうですね。」

このとき、ようやく、ロブは自分の思い込みに気がついて、恥ずかしくなった。

「そういう思い込み、昔から変わらないな。」

「……」

「レテシアがらみだろ。」

「!?!」

真意をつかれて、ロブは何もいえなかった。

何も言つてこない様子に凶星だとクレアは感じた。

「わかりやすい男だな、ほんと。」

「す、すみません。」

「それより、レテシアの話をちゃんとしたんだろうね。」

「ああ、しましたよ。レインはレテシアに会いたがってます。」

「そ、そうか。」

「グリーンエメラルダ号が、スカイエンジェルフィッシュの出発式に現れることつてないですよね。」

「あれは軍の関係だろ。こっちはグリーンオイル財団の関係だからな。」

ロブは間をおいた。

「招待状を送ることつてできないですかね。」

「レテシアにか?」

「ええ。俺からとはちょっとまずいかと思うんですけど。」

「弱気だな。」

「あれから9年になりますからね。」

「いいよ、あたしから、招待状を出しておくよ。」

「ホントですか!」

(えらく力はいつているじゃないか)

クレアはそう思うと、ロブもまんざらじゃないなと思った。

「ああ、ハートランド艦長にそれとなく追つて書きしておくよ。」

「ありがとうございます。」

「これは極秘だけど。」

「え、何ですか。」

「出発式には、お忍びで皇帝が来るらしい。」

「え?!どうして。」

「何でも、スカイロード上官育成学校の学生が財団研究所に外部訓

練で駐屯するらしくて、出発式を派手に送り出すためらしい。

その学生のなかに皇女殿下がいてるからということだとさ。」

「はあく。お忍びですか。」

「公ではないが、お前のことが気になって会いに来るとも思えるが。」

「

「何ですか、それ。」

「あたしは知っているよ。」

「セシリアのことで、謁見していますが、レテシアのことでは関係ないですよ、俺は。」

「そうかな。」

「だいたい……、レインのことは皇帝に話を通っているわけじゃないでしょ。」

「ああ、そうだな。どうして?」

「いや、……セシリアのことで……謁見したときに……レインに会ってみたくていわれたから……。」

「歯切れ悪いな。皇帝はレテシアがらみだろう。」

「……。」

「気にしても仕方がないが、こころの準備はしたほうがいいだろうと思っただけ。」

「こころの準備ですか。レテシアのことはセシリアのときに、酷く嫌味を言われましたから。」

「どんなことを言われたんだよ。」

「いまさら、言っても……。」

「ああ、わかった。こっちに着たときに聞くよ。」

「え?!」

「じゃ、電話切るよ。」

「あ、あの……。あれ。切れたか。」

ロブは大きなため息をついた。

(俺、なに言ってるんだか。)

レテシアに対して未練があるとか、まだ、ロブには意識できていな

かった。

天気は晴れ。太陽が岩山を照らし、すがすがしい空気が漂って、朝を迎える。

パジエロブルーの点検をギリアンとカスターがしていると、興奮気味のレインがヘルメットをかぶってやってきた。

「いよいよだよ。」

「楽しそうだね。レイニー。」

「もちろんだよ、キャス。待ちに待ったパジエロブルーの搭乗だよ。」

「シートにさえ座らせてもらえなかったもんね。レイニーなら大丈夫だよと思うよ、僕。」

「いくら、この機体の操縦席が足元が透けている仕様になっていようとも、僕は高所恐怖症じゃないんだから。」

「パジエロブルーの操縦の仕方くらいは、ふたりでいつも話していただろう。」

「うん。でも、実際乗ってみないとわからないでしょ。」

「兄さんはいじわるだからな。どんなことでレイニーを恐怖させるんだか。」

「ばればれだな。デイゴが知っている感じだったよ。」

「じいさまに聞いても教えてくれないんだよ！」

「レテシアさんはスクリュー飛行が得意だったけど、ロブは苦手だったみたいだよ。」

「スクリュー飛行って、その原理がわかりにくいよ。そんなことできるのかな。」

「できるんじゃないのかな。僕は見たことないけどさ。軍にいたパイロットでスカイロード上官育成学校の卒業生だった人が知り合いでいてそのことは知っていると言ってたよ。」

「本当なんだね。」

「背面飛行していたのは覚えているんだけどな。」

「それもすごすぎ。」

「何を話しているんだ。」

後ろにロブが立っていることに気がつかなかったレインは勢い良く後ろを振り返り、ヘルメットがロブの鼻に当たりそうになったが、ロブは避けた。

「危ないな。」

「あ、ごめんなさい。びつくりしたんだから。」

「用意はできた。点検はまだか。」

「OK。僕のほうは大丈夫。ジルは？」

「僕のほうもOKだよ。」

レインはロブに促されて、後方のシートに乗り込んだ。

カスターはレインが座ったのを確認して、シートベルトを締めた。

そして、通信機の使い方を説明し、ジリアンは操縦桿の説明をした。ロブが前方のシートに乗り込むと、コックピットのドアが閉められた。

パジェロブルーはデッキから勢い良く飛び出し、岩山を旋回した。

ジリアンとカスターが展望台にあがっていくと、そこにはデイゴがいた。

「やあ、デイゴ。見物かい。」

「ああ、ロブがレインを脅かすと言ってたからな。」

「デイゴは、兄さんが何をしてくれるのかわかっているんでしょ。」

「ああ、おそらく、ツバメ返しだろう。」

「ツバメ返し?!」

「地面が岩山にぶつかる前に、切り替えして旋回するんだ。」

ジリアンとカスターはお互いを見た。そして、窓のほうへ身を乗り出すように外をみた。

ロブは操縦桿を握っていて、準備運動なみに、岩山を旋回していた。レインは、こころが踊るように感動していた。

足元をみれば下がまるみえで、上空もガラスで出来ているので、鳥

とおなじような感覚でいられることに興奮しっぱなしだった。

「どうだあ、レイニー。気分は最高か。」
展望台からカスターの通信が入ってきた。

「最高だよ。鳥になった感じだ。」

ロブは不適な笑みを浮かべていた。
旋回をやめて、上空めがけて、ジェットエンジンをふかし、高度を上げた。

レインは急な上空飛行に操縦桿を握り締めて体制を整えた。

太陽がまだ、上空に上がりきっていないとき、下にみえそうなほど、上空にパジェロブルーはいた。

そこから、ロブは降下する。

「レイン、急降下するぞ。」

「あ、はい。」

レインはこころがまえをしていた。

急降下は、加速していく。風を切るというよりは、切り裂くように落ちていく。

自分の体を安定できないままに、体が浮いてしまう感覚に襲われた。

(こんなことくらいで)

急降下はジリアンを載せたときにもやっていた。ジリアンは少々怖がってみせたものの、パニックにはなっていないかった。

レインは体を鍛えていたこともあって、筋肉が緊張することなく、体を支えていた。

ロブは、岩山あたりまで降下した程度で、切り替えした。

レインは、これぐらいなんともないと言った具合だった。

そのとき、ぐらりと機体は傾き、岩山にぶつかりそうになった。レインは恐怖した。

しかし、機体は傾いたまま、飛行した。岩山に沿うようにして。

ロブはレインがパニックになっていないか、確かめようと後ろを振り返ると、レインは青い顔になった。

(どうして振り向くんだよ、前を見てよ)

その様子をちらりとみて、前に向きなおし、微笑んだ。いや、笑いをこらえた。

傾いたまま、飛行し、岩山をぐるりとすると、展望台に操縦席がみえるような位置にきた。

「わお。」

ジリアンとカスターは感激していた。

レインはその様子が理解できていなかった。

ロブは操縦席から上を見上げて、展望台の方をみた。

（デイゴがいるな。珍しいな）

デイゴは腕組をして立っていた。

パジェロブルーは傾きを水平にもどして、高度を下げ、岩山から離れていった。

展望台から豆粒くらいに距離が離れたところから、パジェロブルーはジェットエンジンをふかして、勢い良く岩山に向かっていく。

その様子に、レインは度肝を抜かれていて、パニック寸前だった。

（ま、まさか！？）

ロケットエンジンをふかしているので、機体はかなり揺れている。

レインの体も揺れているし、こころも動揺していた。

パジェロブルーは展望台めがけて突っ込みそうになっていた。

「うわあ！うそだろう。やめてよ！」

ロブは高笑いをしながら、操縦桿を動かした。

パジェロブルーは展望台直前で切り返し、上空にむかって行った。

展望台では、カスターが度肝を抜かれて尻餅をついていた。

ジリアンは目を輝かせていたが、そのうち、ため息をついた。

「雨が降るかな。」

「レイニーが泣くのかよ。」

「泣かないだろ。」

デイゴは腕組みしながら、展望台から出て行った。

パジェロブルーがデッキに着岸すると、操縦席からロブは笑いながら降りてきた。

レインはそのまま動きこうとしなかった。

レインの様子をみて、笑うのをやめたロブだったが、カスターが現れたのを見ると、肩をぼんとたたいて、その場を去った。

カスターはレインの座席のほうを覗き込んだ。

「大丈夫か、レイニー」

レイニーは無言だった。

カスターは仕方なく、レイニーのシートベルトをはずしてやった。

右手を差し出して、シートから下ろしてやると、レイニーはヘルメットをぬいで、それを床にたたきつけた。

カスターは驚いた。

(やりすぎじゃないか、ロブ)

第十章 始動 2 (後書き)

BGM: 「転がる岩 君に朝が降る」
ASIAN KUNG-FU
GENERATION

第十章 始動 3 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父。グリーンオイル生産責任者・愛称じいさま)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- コリン⇨ボイド(レインのクラスメイト)
- プラーナ(ジリアンのクラスメイト)
- レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー。グリーンエメラルダ号のクルー)
- クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
- コーデイ⇨ヴェツキア(スカイエンジェルフィッシュのクルー。前グリーンオイル財団理事長ダグラス⇨Jr⇨デミストの介護士)
- ジヨナサン(スカイエンジェルフィッシュのクルー。エンジン技師)
- アルバート(スカイエンジェルフィッシュのクルー。)
- フレッド⇨スタンドフィールド(ロブの兄)

第十章 始動 3

レインは自分の部屋に閉じこもっていた。

ジリアンは心配して部屋にやってきて声をかけたが、返事がなかった。

そこへカスターに促されてロブがやってきた。

「ジリアン。レインは部屋にいるのか。」

ジリアンはロブに対して怒りをあらわにした。

「兄さん、ひどいよ。僕に対してあんなことしなかったのに。」

「急降下はしただろう。」

「脅すこと前提って、意味わからないよ。喧嘩でなにもあそこまでしなくてもいいと思う。」

「喧嘩じゃない。怖さを知る必要があるんだよ。」

ジルはロブに何を言っても無駄だと思って、その場から立ち去ろうとした。

ところがロブはジルの腕を掴んで足止めした。

「俺が用事あるのは、お前だ、ジリアン。」

「何の用事があるの?」

ジリアンはロブを睨み返した。

「予定より1週間早くここを立つことになった。」

「え、どうして?」

「医療学園都市で身体検査するようになった。まあ、精密検査なんだから。」

「じゃ、明日で学校終わりってことになるの?」

「そうだ。」

ジリアンは、プラーナのことを考えていた。

初等科を卒業したら、会えなくなるので、別れの挨拶は済ませていたが。

「お前に話しておきたい事があるんだ。」

「僕に？」

「ああ。先に謝っておく。すまない。ジリアン。」

「え？なに、急に。」

「今まで黙ってすまなかった。」

「まだ、何かあるの？」

ジリアンは不安そうにロボの顔を見ていた。

ロボはジリアンに頭を下げて、悲しそうな顔つきでいた。

「フレッドが医療学園都市にいてるんだ。」

「え？！死んでしまったんじゃないの？」

「生きているとは言えない状態なんだ。」

「生きてないけどって、どういうこと？わからないよお。」

「植物人間状態で、延命処置をされているんだ。」

「じゃ、生きているけど、会ってもわからないんじゃない？」

「ああ、そうだ。」

「どうして……。」

「すまない。言えなかった。できたら、本当のことを話せるようになって……。」

「会えないよ。そんなの。怖いよ。まるで……。」

「俺に勇気がなくてすまない。延命処置をすることしか選べなかった。」

「勇気があるなしの問題じゃないよね。」

「ああ、そうだ。」

しばらくのあいだ、二人は沈黙していた。

ジリアンは考えていた。

（兄さんの事情って、いつも、僕たちをつらい目に合わせている気がする。）

言葉にしてはいけなそうと思いつつ、言葉にできない苛立ちをジリアンは感じていた。

「医療学園都市には行かなくちゃいけないんですよ。会うかどうかはそれまでに考える。」

「そうか。わかった。」

「僕、自分の部屋に帰るよ。仲直り、ちゃんとしてね。」

「ああ、努力はする。」

ジリアンは弱気なロブに呆れた。

(努力はするって……。)

ジリアンが去っていったのを確認して、ロブはレインのドアをたたいた。

「レイン、聞いているか。おまえに、アクロバットの飛行の怖さを知って欲しかったんだ。」

レインは無言だった。

「お前に操縦桿を握らせないつもりはない。ただ、日程が早まってしまったんだ。」

ドアの鍵が開く音がした。

レインは少しだけドアを開いて顔を覗かせた。

「早まったって、どれくらい?」

「明日で学校は終わりだ。」

「え?!明日でお別れのあいさつ?」

「そうだ。」

「そんな。」

(行きたくないって言うなよ。)

ロブはこころの中でつぶやいた。

「ジリアンは?」

「話したよ。了解してくれたみたいだ。ただ……。」

「ただ、なに?」

「レイン、ジリアンの力になってやってくれないか?」

「何の話?」

展望台に、カスターとティゴ、ラゴネを呼び出して、ロブは話を始めた。

「日程が、1週間早くなった。」

「ロブ以外の人間は驚いた。」

「どうしてだ、ロブ。」

「デイゴが腕組みしながら、たずねた。」

「クレアさんが、クルーの身体測定というか、精密検査をしたいと言われてね。」

「その方がいいね。」

「デイゴとカスターは深くうなずいた。」

「それで、わしがここに呼ばれたわけか。」

「そうだ。じいさま。すまないが、このドックを仕切って欲しい。」

「寂しくなるのお。」

「ここ三ヶ月で、修理や点検の依頼はできないと伝えてはある。」

「仕事無しで、ここやっていけるの?」

「カスターは伝票を片手にもって、振ってみせた。」

「しばらくはオイル補給で食いつないでいくしかない。」

「慈善事業と言っても、給料はでるんだろ?」

「ああ、そうだな。デイゴ。」

「ラゴネは、ロブの前を通り過ぎて言った。」

「了解じゃ、旅の無事を祈っているぞ。」

「え、それだけで、いいの?」

「カスターは動揺していた。」

「いつものことだからな。」

「デイゴは平然と言ったのけた。」

「医療学園都市で、クレアさんがクルーに加えたという男性二人とも合流する。」

「了解。明日までに、準備をすればいいんだな。」

「よろしく頼むよ、デイゴ。」

「はあ、急な話になったな。ここらの準備は出来ていたといっても。」

「キヤス、覚悟しておけよ。クレアさんのしごきはきついぞ。」

「ええ?!」

「からかってもしようがないだろ。今までどおりだよ」

「今までどおりなら、なおさらじゃないか、ロブ」

「それで、レインとはもう……」

「ああ、話をついた。俺もどうかしてたけど、いまさらじたばたしても仕方がないし。」

「で、医療学園都市といえば、フレッドのことも。」

「フレッドの話もした。ジリアンは考えさせてくれと言っていた。」

「そうか。」

「フレッドって?」

「フレッドは生きてるんだ。」

「生きてる?!」

「俺はうまくあいつらに話せる自信がなくて、死んだことにした。」

「生きている状態とは程遠いからな。」

「って、まさか。」

「延命処置をされた植物人間状態。」

「ジリアンにあわせる気なのかよ。」

二人は無言だった。

「信じられないな。立て続けに嫌な話を聞かされたばかりだろ。」

「医療学園都市に行く機会がこれからもあるとは思えないし、これもなにかのチャンスかと思ってね。」

「ま、いずれは話をしなくちゃいけないことだ。」

「デイゴはそういうと、展望台から出て行った。」

「ジリアンを慰める気持ちになんてなれないよ。」

「大丈夫。レインに頼んだ。」

「はあ、レインに頼んだ?……話をついたってそういうことか。」

レインとジリアンは展望台の上、岩山の天辺にいた。

太陽が沈みかけていた。冷たい風が二人に吹き付けていた。

ふたりは寄りそうに座っていた。

「僕たち、ふたりでここに座ることって、もうできなくなりそうだね。」

「そうだね。」

ジリアンは気のない返事をした。

「ジリアン、明日はプラーナとお別れの挨拶をしなくちゃいけないよ。」

「うん、わかってる。」

「兄さんから、フレッド兄さんの話を聞いたよ。僕からは何もいえないけど……。」

「レイニーは、レテシアさんに会いたいんだよね。」

「うん。」

罰が悪そうにレインは返事をした。

「ほんとうは、僕、フレッド兄さんに会うつもりでいてるけど、ロブ兄さんの前で素直にうんとはいえなかった。」

泣きそうな声で話すジリアンに、レインは自分の肩にジリアンの頭を傾けさせた。

「わかるよ。でも、僕に気を使ってくれてるんだね。」

「レイニーにはレテシアさんに会って欲しいから。」

岩山の下の方は暗くなりつつあるが、二人を赤い日差しが照らしていた。

レインとジリアンは職業訓練という手続きをすると、学校を休学する形をとる。

休学といっても、復学するときには試験を受けてパスすれば、ちゃんと進級できる。

レインはコリンに別れを告げた。ドックにもどってきて、お互い中等科を卒業する時期になるからだ。

コリンは中等科を卒業したら、家業のパン屋を継ぐために働く。町にいれば会えないということではない。

ふたりはまた、再会する約束をした。

ジリアンはプラーナとはもう別れの挨拶は済ませていたので、手紙をやりとりをする約束をした。

ジリアンはプラーナが私立学園の寮に入るので寮あてに手紙を出し、プラーナはドック宛に出してジゼルが通信で手紙を読み上げてくれる段取りになっていた。

ジリアンは自分の素性をプラーナには言わなかった。手紙でも書くつもりはなかった。

プラーナに辛い事を打ち明けるわけにいかないと思っていたからだ。そして、ジリアンは密かに思っていた。プラーナとは二度と会わないつもりだと。

ロブ、カスター、デイゴ、レイン、ジリアンの5人は、グリーンオイル財団研究所からの迎えが来て、ドックを旅立った。

5人は、医療学園都市に着き、財団から用意されたホテルに入った。カテリーナ病院に行く前に、ロブとデイゴの部屋にクレアたちが尋ねてきた。

「お疲れさん。無事にこちらに到着したみたいで。」

「もちろん、無事にここまで来れるでしょう。」

「コーデイすまないけど、隣の部屋へ行って、3人を呼んできてくれないか。」

「はい。」

クレアと一緒に男性二人がいた。

ひとりには中年の中肉中背で特徴も特になく、もうひとりは上着のパーカーのフードを目深にかぶっていて表情がわからず痩身な感じだった。

3人がコーデイに連れられて部屋に入ってきた。

「クレアさん、久しぶりです。」

「クレアさん、こんにちわ。」

「元気そうだな、ふたりとも。」

「ぼくも元気ですよ、クレアさん。」

「ブサイクはどうでも良いよ。」

「え、そ、そんな。」

クレアはかしこまって言った。

「これで全員だな。これがスカイエンジェルフィッシュ号のクルー9人だ。」

全員のひとりは除いて、引き締まった状態になっていた。

「紹介するよ。まず、リーダーのロブ、技師のデイゴ、通信士のカスター、レインとジリアン。」

クレアはそれぞれ、指を指しながら、男性二人に紹介した。それぞれが頭を下げたりして挨拶をした。

「そして、こっちは、財団研究所から引き抜いたエンジン技師のジヨナサンと、アルバートだ。」

ジヨナサンは頭を下げたが、アルバートは何もしなかった。

「アル！フードをとりなさい。」

アルバートはクレアに怒鳴られて、渋々、フードをとった。

アルバートは青白いが目鼻立ちの整った美形で、年のころは18歳だった。

ロブは怪訝な顔をしていた。

「最初に言っておく。アルバートは保護観察の身で、設計主任のバトラーさんが保護観察官で、面倒を見て欲しいと頼まれてね。」

ロブやデイゴたちは、啞然としていた。

クレアはその反応が最初からわかっていたとばかりににやけた。

「黒衣の民族の混血児だ。」

第十章 始動 3 (後書き)

BGM:「BACK ON MY FEET」BOOM BOOM
SATELLITES

第十一章 震える気持ち 1 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>)
カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
コーデイ⇨ヴェッキア(スカイエンジェルフィッシュのクルー。前グリーンオイル財団理事長ダグラス⇨Jr⇨デミストの介護士)
ジョナサン(スカイエンジェルフィッシュのクルー。エンジン技師)
アルバート(スカイエンジェルフィッシュのクルー。愛称アル)
コリン⇨ボイド(レインのクラスメイト)
ジョイス⇨ボイド(コリンの父親)

レインがクレアにだけ話をしたいと言ったのはクルーの自己紹介の後だった。

その様子を横目でみながら、ロブは気にしていた。

クレアはレインの言うことを了承し、ロブのそばに寄って小声で耳元にささやいた。

「招待状を出す前にハートランド艦長から連絡があつてレインがクルーに加わることを知ったのだが、出発式の招待が皇帝からあつたため断つたらしい。」

「え、そうなんですか。というか、皇帝って……。」

ロブは思ったことを口にしてしまい、周囲に聞こえたかどうか確認した。

コーデイが気を利かせて、ジョナサンとアルバートにスタンドフィールドドックの話題を元に談笑していたので、周囲は聞こえていなかった。

「レインにはあたしから話しておくよ。」

クレアはロブにそうささやくとロブの肩をたたいた。

「あ、ありがとうございます。」

レインはふたりが小声で会話している様子を不思議そうに見ていた。クレアは後のことをコーデイに頼のむと言って、レインをつれて、レインたちの部屋に向かった。

「あたしにだけ、話をしたいってなんだい。」

クレアは開口一番にそういった。レインは、コリンの話を後にしようと考えていた。

「クレアさんは、そのお、知っていたんですよね。」

何を話したらいいかわからず、言葉を口にしていった。

「ロブが父親つてことかい。もちろんだよ。」

「ジゼルも、ディゴも、じいさまも、みんな知っていて、僕たちに

内緒にしてたんですよね。」

「内緒にしていたつもりはないよ。これはロブの問題であって、あたしたちが口出す理由なんてないからね。」

そして、誰が悪いかなんて、誰にも判断できないよ。」

クレアの言うことを理解しようと、言葉にするまえに一度考えてからと間を取りながら、レインは話していった。

「兄さんが悪いとかは決め付け出来ないのはわかるんですけど、なんだか、許せなくて。」

「家族との間のわだかまりは、人間関係でこじれたものとは違って、一筋縄ではいかないこともあるだろう。」

時間が解決してくれると、周りは思っているかもしれない。でも、大切なのは、レインもわかっているだろう。」

レインが描いていたのは、グリーンやレテシアのこと、そしてロブ。必然と大切なものの意味を意識した。

「この世の中で、肉親は他にいないということですか。」

「そうだ。もちろん、わたしやカスターのように、養父母に育てられて肉親の代わりになっている場合もあるだろうが。」

生を受けたのは、偶然じゃないと思う。レインにはロブが必要で、ロブにはレインが必要だったんだよ。

今はわからないかもしれないけど、今は許せないかもしれないけど、レインが成長していくことに理解して受け入れ出来ることがあると思うからさ。」

「理屈ではわかっているつもりなんですけど。」

「まあ、いつペンには受け入れできなくても、少しずつやっていけばいいさ。悩んで苦しんでるのはレインだけじゃないだろう。」

「はい。」

「あたしのほうから、レインに話しておきたいことがあるんだが。」

「え、なんですか。」

「レテシアのことなんだが、ロブから聞いている。レインは会いたいのじゃ。」

「会いたいです。」

「ロブから頼まれてね。出発式に招待しようとしたんだが、向こうから連絡があつて、出発式には来られないんだ。」

「そ、そうなんですか。」

「まあ、大人の事情つてやつでね。ロブが悪いわけじゃないんだ。いろいろ組織つていうのはやつかないことがあつて。」

レインは困った顔でクレアをみていた。

理解できないわけでもないだろうが、話を余計にややこしくしてしまふことになりかねない。

クレアはどこまで話をしていいものやらと思つていた。

「あのお、クレアさん、僕は話したいことがまだあつて……。」

「なんだい。」

「コリンのことなんです。そのお、コリンのお父さんボイドさんから言われて、コリンがボイドさんの本当の子供じゃないことを僕が知っているつてクレアさんに話しておくようにと。」

「なんだつて?!」

クレアは予想もしなかったので、声を荒げてしまった。レインは驚いていた。

クレアはボイドにそれとなく知つた振りをして聞き出すつもりだったが、核心に触れることができないでいた。

ボイド自身がコリンの母親が誰であるかは知らないはずで、そのことでレインを巻き込みたくは無い。

ボイドがレインに対してどうしてほしいかを理解すべきだと思い、クレアはコリンが黒衣の民族の混血児であることを話した。

レインは驚いたものの、さきほど、アルバートが混血児と聞いたばかりだったので、不安には思わなかった。

そして、クレアはアルバートをこれまでの過程とメンバーに加わりたいきさつをレインに話した。

一方、コーディもアルバートのことを話さなくてはいけないと思っ

ていた。

ジヨナサンにアルバートを連れて、ホテルのロビーで待機してもらうように頼んだ。

二人が部屋を出て行ったのを確認して、コーデイは話を始めた。

アルバートの母親は黒衣の民族で、民族の間での差別に耐えかねて、居住区から抜け出した人だった。

アルバートの父はコンラジェッタの民だったが、アルバートが黒髪で生まれてきて目立つ為、髪を染め周囲に知られないように育てられた。

アルバートは混血児と周囲に知られることなく、育ったが、15歳のとき、職業訓練の一貫で集団生活したことでばれてしまい、周囲から虐待された。

アルバートは逃げるようにして、親元に返ったが、親元と一緒に暮らせないと思い、施設に預けることにした。

その施設は、グリーンオイル財団の慈善事業で混血児を収容して保護するというのが表向きの目的で、中身は人体実験が目的の施設だった。

アルバートは薬物中毒にされてしまい、人体実験を繰り返された拳銃、目的の仕様に合わないとは判断されると、施設は破棄するようにアルバートを犯罪者に仕立て追い出し、刑務所に収容させた。

2ヶ月の服役でアルバートは設計主任のバトラーを保護監察官として出所できたが、あくまで財団の保護下にあった。

薬を抜いての服役だったが、刑務所内で酷い虐待を受けたために多重人格者となり、心療の意味合いを含めて医者の治療が必要だった。タイミングよく医療行為を目的とした航空飛行隊・スカイエンジニアリングの計画があったので、アルバートはメンバーに加えられた。

クレアはレインにコリンの素性が周囲に知られる危険性を述べた。

「それに、レイン。コリンは普通の混血児と違ふところがあるのよ。まず、アルバートの母親は居住区から抜けていたので薬物は施設に入ってから摂取していた。」

しかし、コリンは生まれてから薬物の摂取はないけど、生まれる前の胎児のとき、薬物摂取の可能性が高い。」

レインは絶句した。薬物の危険性については、中等科で学習しているので理解していたが、身近にいて人間がその薬物に犯されている可能性があることが信じられないでいた。

「黒衣の民族は薬物を常用しているのだけど、民族の長の血を引くものには、胎児のときから薬物を摂取しているという話がある。」

黒衣の民族はその跡継ぎを搜索しているのよ。コリンはその可能性がある。ボイドさんは知っている。」

「コリンが民族の跡継ぎって?!」

「ボイドさんは発覚されるのを恐れている。レインがその事情を知っているとして、レインの命も危ないということ。」

「.....」

ことの重大さを知ったレインだった。コリンがだまっていられなかった気持ちを理解しようと考え込んでいた。

「ボイドさんは全身全霊でコリンを守ると言ってた。僕もジリアンを守る。僕に出来る、コリンを守るとは誰にもしゃべらないことだよ。」

「そうだ。レイン。」

「コリンのところが少しでも軽くなってくれるなら、秘密を打ち明けてもらったことを誇りに思うようにするよ。」

怖がらなければ、危険だと思わない。」

「いい子だ。」

クレアはレインに微笑んだ。

第十一章 震える気持ち 1 (後書き)

BGM: 「手紙」 下川みくに

第十一章 震える気持ち 2 (前書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル)
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>)
- カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)
- デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)
- クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)
- コーディ⇨ヴェッキア(スカイエンジェルフィッシュのクルー。)
- ジヨナサン(スカイエンジェルフィッシュのクルー。エンジン技師)
- アルバート(スカイエンジェルフィッシュのクルー。愛称アル)
- フレッド⇨スタンドフィールド(主人公の長兄<叔父>)

第十一章 震える気持ち 2

スカイエンジェルフィッシュ号のクルーたちは、カテリナ病院で身体検査をしていた。

検査が午前中に終わると、ロブとレイン、ジリアンの三人は遺伝子検査のために、検査施設に向かった。

ジョナサンが朝食抜きの血液検査を受けなければならなくて、他のメンバーとは別行動になった。

カスターが昼食の際、クレアにジョナサンのことを聞いた。

「クレアさん、ジョナサンは大丈夫なんですか。」

「なにがあ。」

「や、あの、なにがって。」

答える気のない返事のクレアに気を配り、コーデイが答えた。

「ジョナサンは大丈夫ですよ。エンジンの職人さんですから。」

「はあ、そんなものかな。」

クレアが、カスターにジョナサンが加わったいきさつを話した。

ジョナサンはもともと、空軍のエンジン技師だったが、財団研究所に引き抜かれた。

危険な仕事をするより安定した仕事を望んだのは両親のためだったが、その両親が他界したため、バトラー設計主任にスカイエンジェルフィッシュ号のクルーに加えて欲しいと頼み込んだということだった。

「このクルーでスパイになりそうなのは……。」

「アルなら、大丈夫だよ。あたしが手なづけてるからね。」

「手なづけてるって……。」

「なにかあつたら、コーデイでも大丈夫だから。」

「え?!」

「カスターさん、アルバートさんは多重人格ですが、基本、こころ根のやさしい男性なのです。」

スイッチが入らなければちゃんとコミュニケーションできるのですよ。」

カスターはアルバートを見た。アルバートはこの三人とは距離を置いた場所で、上着のフードを目深にかぶって、食事をしていた。

（あの様子でちゃんとコミュニケーションできるとは思えないけどな。）

そのカスターの様子をみて、クレアは言った。

「お前も、多重人格だろ、カスター。」

「僕がですか。とんでもない。僕はロボの良き相棒です。」

「自分で言つてたら、世話ないな。」

「カスターさん、あなたのその明るく振舞っている姿が気になるんですよ。」

「ぼ、僕が？無理に明るくなんかしてないよお。」

「まあ、コーディ、こいつがそう言ってるんだから、そういうことにしておけば。」

「でも。アルバートさんは優等生だったんです。だから、なおさら優等生を嫌う人格のアルバートさんがスイッチ入ったら出てくるんですよ。」

「ふうん。そうなんだ。わかったよ。気にかけておくよ。」

カスターが再度アルバートの方を見てみると、目が合った。そしてアルバートはニヤリと不適な笑みを浮かべた。その様子にカスターは寒気がした。

もくもくと食事をしていたデイゴが、口を開いた。

「クレア、ロボたちの検査が終わったら、どうするんだ。」

「ああ、軍部の病院に向かうことになっている。デイゴもいくんだろ。」

「フレッドに会えるなら、会いに行きたい。」

「僕も一緒に。」

「カスターは一緒に行かないほうがいい。会ったことがないだろ。」
「でも、僕がいたほうが、保護者だし。」

「俺もそう思う。行かないほうがいいだろう。」
カスターは拗ねた顔をした。

カスターが昼食後、トイレに向かった。トイレで用を足して手洗いを済ませると、アルバートがやってきた。

カスターは嫌な予感がした。アルバートは目深にかぶっていたフードを両手で下ろして、顔を出すと、不適な笑みを浮かべてカスターをみていた。

（なんだよ、こいつ。喧嘩でも売るつもりか。）

カスターはクレアたちと仲良く談笑している姿をアルバートがやきもちを焼いているように思えて仕方がなかった。

カスターがアルバートを避けて、横を通り過ぎようとしたとき、アルバートは右手でカスターの手首を取り、背中に回して自分の体で壁に押し付けた。

「なにするんだよ、アル。」

「アルって、気安く呼ぶなよ。」

「やめろって、アルバート！」

足元をみて、足をひっかければ、アルバートくらい倒せるとカスターは考えていた。

アルバートは左手で、カスターの尻をつかんだ。

「?!」

カスターは声も出せれないくらい驚いた。

「お前、処女じゃないだろ。」

カスターはその言葉に怯えた。アルバートはカスターの手首を離し、カスターから離れた。

カスターはその場からよるめきながら、去っていった。

デイゴは、検査を終えたロブたちと合流した。

そして、軍部の病院に向かった。

フレッドはアレキサンダー号が黒衣の民族の襲撃にあい谷底に墜落した時、操縦桿を握ったままで、倒れていた。

心臓が動いていたので、救急処置を施されたが、脳の損傷が激しく植物状態になった。軍部の病院で延命処置を受けて、呼吸器をつけたままの状態で行き続けていた。

ジリアンはフレッドの皮手袋を両手で握り締めていて、病室に入る前につばを飲んだ。その様子をレインはみていて動揺しないようにと自分に言い聞かせた。ロブは気丈な振る舞いをしながらも、自分を責め続けていた。

病室のドアをロブはノックして、中に入った。

年老いた看護師が椅子にすわって、フレッドの手を握っていた。

「どなたですか。」

「患者の家族です。前もって連絡していたのですが。」

「ええ、聞いております。どうぞ。」

看護師はフレッドの手をおいて、椅子から立ち、その場から離れた。ロブに促されてジリアンは恐る恐る、近寄った。

フレッドは呼吸器をつけていて、機械によつて、生かされていた。呼吸にあわせて、機械が音をたてているのようだった。

ジリアンはフレッドの顔をまじまじとみていた。たしかにその顔は、いつもジリアンに微笑みかけていたフレッドの顔だった。

いまにも目を開けて話しかけてくれそうなくらい血色が良く、元気にそうに見えたが、自分では呼吸できない状態だと聞かされてショックを隠せないでいた。

「フレッド兄さん、会いたかったよ、僕。僕、兄さんの皮手袋大事にするからね。」

ジリアンはフレッドの体にしがみつくように皮手袋を握った両手を置いた。そして、泣きじゃくった。

その様子に、ロブが涙してしまい、壁の方に向かっていて、フレッドを見ようとしなかった。

レインは泣かないように努力していたが、ジリアンが泣く姿をみて、耐えられず涙をこぼした。

デイゴが、フレッドのベッドに近寄った。

「ずいぶんとまたせてしまったな。やっと連れて来られたよ。お前も会いたかっただろ。」

ジリアンは、泣くのをやめたかと思うと突然、ロボのほうへ振り向いた。

「ロボ兄さん。フレッド兄さんをもう、これ以上、機械で生かしてあげなくてもいいでしょ。もう、開放してあげてほしい。」

ジリアンのその言葉にロボは驚いた。

「ジリアン、お前。」

デイゴがジリアンの肩に手を置いて言った。

「よく言った。俺もそう思っていた。」

その様子にレインはとまどった。

「そんなことって、目が覚めることって、もうないの?」

ロボは自分の頭を壁にぶつけた。

「ジリアンがそうしたいのなら、そうしよう。俺には延命治療を拒否する決意がでなかった。」

ロボはそういうと泣き崩れた。

看護師はロボに寄り添い、肩を抱いて、椅子に座らせようとしたが、ロボは拒否した。

「僕はフレッド兄さんを楽にしてあげたい。ベッドに寝たままですら自分で呼吸もできないなんて。もう、これ以上苦しませたくない。」

「その通りだな、シル。ロボはこんな奴だが、お前に真実を打ち明けないまま、フレッドを逝かせるわけにいかないと思っていたんだ。そのことだけはわかっていてくれ。」

ジリアンは返事を口にしなかったが大きくうなづいた。

第十一章 震える気持ち 2 (後書き)

BGM: 「思い出我爛道」 空気公団

第十一章 震える気持ち 3 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>)

カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)

クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)

コーデイ⇨ヴェッキア(スカイエンジェルフィッシュのクルー。)

ジヨナサン(スカイエンジェルフィッシュのクルー。エンジン技師)

アルバート(スカイエンジェルフィッシュのクルー。愛称アル)

レインとジリアンがホテルにもどると、カスターがベッドで寝込んでいて、起きようとしなかった。

夕食を食べに行こうと話しかけたが、掛け布団を頭からすっぽりかぶってしまったって、返事もない。

仕方なく、レインとジリアンはロブたちの部屋に向かった。

カスターの様子をロブに話すと、「放っておけばいい。」と言った。デイゴは心配そうにしていたが、「子供ではないので気にしないように。」とレインたちに言った。

カスターはアルバートに言われ尻を握られたことで自分を責め続けていた。

カスターが十代のとき、親の愛情を感じることができず里親に預けられた同年代の者たちがいて、愛情を求め合い確かめ合うためにお互いを傷つけあった。

カスターは巻き込まれた被害者でもあった。

表向きは養父母に心配かけまいと明るく振舞っていたが、裏では里子たちに性的虐待を受けていた。

カスターには痛いほど誰かに愛し愛されたいと求めあつ里子たちの気持ちを理解していただけに耐えるしかなかった。

ジリアンの児童虐待に苦痛もカスターにとって、古い傷を思い起こすような一端であり、またその痛さを知るがゆえに、レインたちを保護したい気持ちが強かった。

自分を責め続ける理由は、気にしてしまつてアルバートを避けてしまつと周囲にわかつてしまうことの恐怖、自分だけが被害者ではなくアルバートもその被害者であることを理解できずにいることだった。

カスターはベッドから出て、洗面所に向かい、自分の顔を眺めてから、顔を洗った。

目は真っ赤になり、泣いて鼻が真っ赤になっていたからだ。
（せっかく手に入れた僕の居場所だ。もう失いたくない。）
カスターは自分にそう言い聞かせると、鏡の前で笑って見せた。
（僕が二重人格なんてありえない。僕は周囲を笑わせるだけのオトコで、悲しみを背負う被害者ではない。）

レストランで夕食を終えようとする時、カスターがみんなのところにやってきた。

「大丈夫か、キャス。」

カスターはロブの隣に座った。

「え、僕のこと心配してくれてるの？嬉しいなあ。」

カスターがレインとジリアンの顔を見ると、二人は呆れた顔をしていた。それはロブがカスターのことを心配していないことを表現していたのだ。

「そうでもないか。」

デイゴはカスターの元気がない様子を気にかけていたが、触れないことにした。

ウェイターがカスターの注文を聞きに来ると、カスターは軽食なものを頼んだ。

「どうも、検査ってやつがだめでね。ほら、僕デリケートだから。」

「はいはい。」

カスターのおとぼけにジリアンが返事をした。

「みんな、明日はグリーンオイル財団研究所に向けて出発する。いよいよ、スカイエンジェルフィッシュ号を拝める。」

ロブは嬉しそうに言ったが、デイゴは浮かない顔だった。

「拝めるって、図面見たが、そんなたいそうなものじゃなさそうだぞ。」

「デザインは悪いかもれないが、機能は充実しているそうだ。」
レインはパジェロブルーのことでロブを恨んでいるので触れないようにしていた。

「兄さん、パジェロブルーはもう研究所に届けられているんだよね。」
「ジリアンはパジェロブルーを乗りこなしているが、本格的にひとりで操縦したことがないので、研究所で練習できることを楽しみにしていた。」

「そうだな。輸送専門のパイロットが研究所から派遣されてたからパジェロブルーをドックから現地へ到着していると思う。」

「レインがふてくされている様子をみて、ロブは自分の考えを口にした。」

「レイン、研究所にいたら、ジリアンと二人でパジェロブルーに乗って練習するんだ。」

「え、僕が？操縦するわけじゃないんでしょ。」

「操縦の練習は徐々にしていこう。研究所なら訓練施設があるから室内で操縦練習する機械があると話を聞いている。」

「室内で練習？」

「レインはふてくされていてなお、ロブの話に聞き入れできないでいた。」

「デイゴ、研究所でも格闘技の訓練をするから、よろしく頼む。」

「了解だ。」

「それとクレアさんから、アルバートも訓練させてやってくれといわれている。」

「アルバートをか。」

「アルバートという名にカスターは敏感に反応してしまい、そんな自分に対して嫌になりそうになるのを感じていた。」

「みんなはカスターが食事を終えるのを待っていた。食事を終えるとレストランをあとにした。」

「部屋にもどるときに、デイゴはカスターにさりげなく声をかけた。」

「なにかあったみたいだな。」

「カスターはデイゴに見抜かれたのではとドキツとした。」

「別にないよ。」

「だといいんだが、レインたちと一緒に部屋がだめなら、替わってやってもいいぞ。」

「あは、いや、ロブと二人きりのほうがだめだな。」

カスターは笑いながら、デイゴの言葉に返事をした。

「そうか。ならいいんだが。」

（油断も隙もないな。コーディとデイゴには、気が置けないな。）
カスターは自分の嫌な部分を見破られてしまうのではないかと怯えてしまっていた。

その一方で、ロブが無頓着なんだと理解した。

翌朝、ロブたちはクリアたちと合流して、財団が用意した空挺に乗り込み、グリーンオイル財団研究所に向かった。

第十一章 震える気持ち 3 (後書き)

BGM:「深呼吸」SUPER BEAVER

第十二章 旅立ちのとき 1 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>)

カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)

クレア⇨ポーター(ダンの養女。医者)

フィリップ⇨バトラー(グリーンオイル財団研究所スカイエンジニア
ルフィッシュ号空挺設計主任)

セリーヌ⇨マルキナ(デューク⇨ジュニア⇨デミスト理事長の第六
秘書)

第十二章 旅立ちのとき 1

レインたちを乗せた空挺は、まもなく、研究所に到達しようとしていた。

グリーンオイル財団研究所は、財団の土地と言われるほどのエバーグリーンと呼ばれる州の南部にあり、グリーンオイル財団が出資し、空挺・エネルギー・生物・医療や薬品などを開発する研究所である。約300km²の土地に、人口約10万人をかかえ、ひとつの街として、研究所が成り立っているところだった。

研究所はオイルを研究する施設ではあるが、オイルの熱量で電気を発生させることに成功し、それを利用して、発展を遂げていった。研究所は科学技術の最先端で設備はテクノロジーを施された都市そのものだった。

そびえたつビル郡と居住区の高層マンションがくつきりと分かれていて、その合間を縫うように空挺研究部の施設があり、レインたちを乗せた空挺はその飛行場に降り立った。

レインやジリアンはドック以外では医療学園都市がはじめての土地だったが、それを上回る広大な土地に近代都市があつて、目をまるくして驚いていた。

レインとジリアンは、まるで異世界に来たかのように、見るものがすべて不思議に思えた。

ふたりは、空挺から降りると、走りまわった。

「まるで田舎者だな。」

ロブがつぶやくと、クレアはロブの頭を軽くたたいた。

「お前もだろう。」

「クレアさん、何を言ってますか。」

「油まみれの機械いじりは得意かもしれんが、科学技術はうとくて、おのぼりさんの癖に。」

ロブはクレアのように、新しいものを取り入れるのが苦にならない

性格と違って、なかなか受け入れできない性質だった。

ロブはクレアに子共扱いをされたようで、釈然としない様子だった。フィリップ・バトラー設計主任がみんなを出迎えに着た。

「ようこそ、グリーンオイル財団研究所へお越しくございました。お待ちしておりますよ。」

クレアが、フィリップを紹介すると、クルーたちをフィリップに紹介した。

そして、フィリップは、そばにいたショートヘアで黒のパンツスーツ姿の女性をみんなに紹介した。

「こちらは財団理事長の第六秘書のセリーヌ・マルキナです。あなた方がスカイエンジェルフィッシュ号で出発されるまでお世話いたします。」

「ご紹介に預かりましたセリーヌ・マルキナです。よろしくお願います。セリーヌとお呼びください。」

一通り紹介が済んだ後、一向は研究所の居住区にあるホテルに向かった。

ホテルに向かう道すがら、クレアは考え込んでいた。

いつも難しい顔をしていたロブが時々笑顔になっている様子にクレアは疑問を持っていた。

ロブたちは軍部病院にいつて、フレッドに会って来た。ジリアンの申し出ということで、フレッドの延命治療をやめることに決まった。クレアに相談が持ちかけられて、クレアは出発前にすることではないだろうと事に及ばないように助言した。話し合いをした結果、いづれ延命治療はしない方向性で現状維持になった。

（ジリアンにあわせたことで肩の荷が下りたんだろうが、それにしては変だな。）

クレアは研究所へ行けば、セシリアや皇帝とのご対面が待っているかもしれないのに、ロブに能天気な感じがして仕方がなかった。

それとなくデイゴにロボの様子を聞いたが、変わらない様子だった。

クレアは、ジリアンのそばに行き、それとなくフレッドのことを聞いた。

興奮していたジリアンだったが、クレアの話に現実引きもどされた感覚で何も言おうとしなかったが、しばらくしてロボのことを話し始めた。

「兄さん、なんだか変なんだ。言ってることとやってることがなんか違う気がする。」

「どついう意味なんだ、ジル。」

「僕たちに申し訳ないって謝るかと思うと、つらい話ばかり。レイニーに理解してもらいたいって気持ちがあるみたいだけど、反対のことばかりしているように思う。」

「特訓のことかな。」

「うーん、なんか、兄としての立場と、父親としての立場って変わらないと思うんだよね。兄としての立場だって父親の代わりって感じだったし。」

「そうだなあ、自分の責任で両親のいない環境にしてしまった面があると思うているのかもしれない。」

「打ち明けられるそのまえは、強情な兄という感じで、言うこと聞くしかないかって思ってた。」

でも、今は違うかな。可哀相な感じで言うこと聞くしかないっていうか・・・それは言いすぎかな。」

クレアはジルに聞いて正解だと思った。

「理解したよ、ジル。ロボが変だなんていうのは私も気がついてた。デイゴに聞いても変わらないっていうからさ。」

「デイゴはそう思うよ。でも、キャスは兄さんのこと怒ってるから、なんか距離置いてる感じる。」

「そうか。そこまでわからなかったよ。そのせいもあるかな。」

「そうなの？」

「まあ、案外、優しくかった友達が冷たくしてくると、気が置けなくなるし、どう振舞っていいのかわからないかもな。」

「それじゃ、まるで子供じゃん。」

「あは。まだまだ、子供だよ、ロブは。」

「クレアさんから見たら、兄さんも子供のように思えるかもしれないけど。」

「まあ、温かく見守ってやってほしいかな。」

「うーん、レイニーのこともあるし、あまり「ごちゃごちゃ言いつつも」りはないけどね。」

「いい子だ。」

クレアはジリアンの頭を撫でた。

（できるだけ、この子には嫌な思いをさせたくない。）

クレアは、ジリアンの身にこれから起きる出来事を想像するとそう願わざるを得なかった。

第十二章 旅立ちのとき 1 (後書き)

BGM: 「爪と太陽」はじめにきよし

第十二章 旅立ちのとき 2 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>)

カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)

クレア⇨ポーター(医者)

コーディ⇨ヴェッキア(看護師)

ジヨナサン(エンジン技師)

アルバート(愛称アル)

セリーヌ⇨マルキナ(デューク⇨ジュニア⇨デミスト理事長の第六秘書)

第十二章 旅立ちのとき 2

スカイエンジェルフィッシュ号クルーたちは、ホテルに一泊した後、空挺研究部の棟に併設されている宿泊施設へ移動になった。

ワンフロアがクルーたちの宿泊にあてがわれていた。

秘書のセリーヌが宿泊所の説明を行った。

クレアがあたりを見回して、質問した。

「セリーヌ、こちらが希望していたトレーニングの件だけど。」

「はい、ご用意しております。レクレーションルームがありますので、そちらを使用してください。」

器具は取り揃えております。」

「ありがとうございます。」

クルーたちは、自分たちの部屋に荷物を置き、食堂に向かい、昼食をとった。

昼食後、日程等のミーティングを取った。

日程説明はセリーヌが行った。

「4月1日が出発日となります。これから10日間、訓練や出発の準備期間となります。」

スカイエンジェルフィッシュ号は、まだ完成しておりませんが、試運転を含めまして1週間以内の完成させるように作業進行しております。

パジェロブルーにつきましては、明日、研究所に到着予定でございます。点検が終わりましたら、訓練飛行ができることとなります。」
クレアの方からは、エンジン技師のジョナサンや看護師のコーディ、ジリアンを除いたメンバーでトレーニングをすることを言った。

目的は体を鍛えることだけではなく、護身のためだった。

ミーティングのあと、ジョナサン以外のクルーたちはレクレーションルームに集まった。

コーディとジリアンは見学していた。

準備運動を一通りした後、クレアは、まず、個々の力量を確認するために、格闘の対人戦をやらせてみた。

相手が参ったというか、クレアが止めるかがルールだった。

クレアは思いつきで、言った。

「まずはディゴとアルでやってみてほしい。」

「俺が、アルとか。」

「体の大きさはディゴじゃ誰とでも格差があるでしょ。」

アルバートはいつものフードを目深にかぶっていたが、クレアの言うことに応じるようにフードつきの上着を脱いだ。

やる気のアルバートに、その気のないディゴは構えをせず、アルバートに対して、斜めにたったままだった。

アルバートは両手の拳を顔の前に持ってきて構えた。

「レイン、よく見ておくんだよ。」

「あ、はい。」

みんながいてる前で、ふたりは格闘を始めた。

アルバートが攻撃しても、ディゴはかわすばかり、アルバートのパンチがディゴの胸に当たっても、ディゴはびくともしなかった。

アルバートは足蹴りでディゴの顔を攻撃しようとしたが、ディゴは交わした。

「おっと、あぶねええ。」

「ちっ」

ディゴは体がデカイだけではなく、鍛えられていて柔軟に動作が可能で、背後に回れても、腰をひねって、アルバートの攻撃をかわすことができた。

「アル！パワーバランスを考慮って言っただろ。」

クレアがセコンドよろしく、声をかけたが、アルバートは聞き入れないで、ディゴに攻撃をしかけていた。

ディゴは、アルバートに攻撃をしはじめた。左手を相手の右手首をとると、右の平手で相手の肩を押さえ込もうとしたが、アルバート

はきびすをかえし、攻撃をかわした。

それらが繰り返されていて、アルバートは息を切らし始めた。デイゴがアルバートの手首を取り、アルバートは交わそうとしたが、力が出なかった。

デイゴはアルバートの手首と腕を押さえ、力いっぱい下に押し下げ、アルバートを軽く投げ飛ばした。

「おおおお。」

驚きの喚声をあげた。

「アル、お前の体が軽いから、投げ飛ばされたんだよ。体重増やしなさいって言ったでしょ。」

アルバートは床にうつぶせになったまま、起き上がらなかった。

コーデイが近づいて、手を差し出すと、アルバートは顔を上げてコーデイだと確認すると、コーデイの手を掴み起き上がった。

「あたしと、カスター。」

「えええええええ、僕とクレアさんですか。できませんよ。」

「やれと、言ったらやるんだ。」

クレアは容赦なく、カスターの首を捕まえて、みんなのまえに出した。

「かまえる、カスター」

「あ、はい。」

カスターは仕方なく、構えた。

クレアは、足蹴りで攻撃してきた。カスターは両手で防いだが、当たった部分がジーンと骨まで響いた。

（本気を出さないとやられるのか。）

クレアは両手を顔に構えて、防ぎ、足で攻撃していた。

カスターは片手でクレアの足を防御し、片手でクレアの顔を攻撃しようとしたがうまくいかなかった。

手首をとられた際には、ねじり、体をひねって交わそうとしたが、クレアの握力は相当なもので逃れられなかった。

とられた手首をひっぱり、クレアを引き寄せると、空いてる片手を

クレアの首にまわし、自分の体重をかけながら、床に落とし込んだ。
「参った。」

クレアがそういうと、罰が悪そうにカスターはクレアから離れ、クレアに片手を差し出し、起き上がらせた。

「次、ロブとレイン。」

クレアがそういうと、ロブはみんなの前にでたが、レインはでたがらなかった。

「レイン、出て来い。」

仕方なく、嫌そうにレインはみんなの前にでた。

ロブが構えると、レインは悲しそうな目つきでロブをみた。

「レイン、来い。来なければこっちからいくぞ。」

そういわれて、レインはロブに殴りかかった。

ロブはレインを交わしながら、下からみぞおちを狙ったが、レインはパンチを出した右手ではない左手でロブの拳を防いだ。

ふたりは絶えず、攻撃と防御を繰り返して、ラリーを続けていた。クレアはその様子をみて、普段から対戦で訓練していることを悟った。

しかし、体力の持続力の差があつて、レインは消耗し始めて、防衛しきれず、ロブの攻撃が当たり始めた。

息を切らして逃げてばかりいるレインにロブのパンチが当たろうとしたとき、デイゴがいきなり現れていてロブの手首をとった。

「そこまでにしておけ。」

「クレアさんが止めるか、レインが参ったというまでだ。」

ロブはデイゴを睨み返したが、デイゴはクレアの方をみた。

「いいでしょう。そこまでしておくわ。」

休憩をした後、対戦組み換えで再度はじめた。

「カスターとアル。」

クレアが二人の前に出るように指示をした。

カスターは嫌そうな顔をした。

アルバートはニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

第十二章 旅立ちのとき 2 (後書き)

BGM:「Broken Youth」
「Nico Touches
the Walls」

第十二章 旅立ちのとき 3 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>)

カスター⇨ペドロ(スタンドフィールド・ドックのクルーでメインは通信士・愛称キヤス)

デイゴ (スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工)

クレア⇨ポーター(医者)

コーディ⇨ヴェッキア(看護師)

アルバート(愛称アル)

エミリア⇨サンジョベゼ(スカイロード上官育成学校1回生。皇女殿下のルームメイト)

第十二章 旅立ちのとき 3

スカイロード上官育成学校、校長室にて、学生がひとり入室した。

「一回生のエミリア」サンジョベーゼ上等兵です。」

ダークブランの毛先に丸みが帯びたショートヘアーの色白の女性がそこには立っていた。

校長はエミリアへソファに座るように支持をした。

「サンジョベーゼ上等兵、いや、エミリア君と呼ばせてもらおう。

君には先日、グリーンオイル財団慈善事業人命救助隊出発式の誘導空挺部隊のメンバーであることは聞いていると思う。」

「はい。」

「同時に手渡していた資料に記載できない事項をここで述べておくので、口外しないようにしてもらいたい。」

校長から直々に話をされることについて、エミリアは神妙な面持ちで聞いていた。

誘導空挺部隊とは、スカイロード上官育成学校の学生が力量を発揮させる場として設けられたものだった。

しかし、今回は、式典に皇女殿下が参加することで皇女殿下のルームメイトであるエミリアが選ばれた。

校長の話す内容は、この皇女殿下の身の危険をエミリアが防御してもらおう目的があったからだというものだった。

エミリアは幼いころに母親をなくし、父と兄が軍人で、自立するために航空士を希望して、スカイロード上官育成学校に入隊した。

入隊直後に、兄は殉職したが、物心ついたときから、一緒に暮らしていないので兄への思いはあまりなく、兄を失った実感がなかった。

エミリアの成績は特別良いというものではなかったが、冷静さが特徴的で、順応性に優れている点で、教師である上官から覚えが良かった。

「君は、皇女殿下との親交が深く、信頼も厚いと聞いている。」

女性らしい細やかな気遣いのできる人物だと私は認識をしている。」

「校長からそのような言葉をいただき、光栄に思います。」

「皇女殿下の身に危険が生じれば、誘導空挺部隊の任務は遂行せず、皇女殿下の安全確保を重視してくれたまえ。」

「了解しました。」

「そして、常々申していることだが、皇女殿下に関するプライベートな事柄は一切口外しないように、そして、口を挟まないように。」

「心得ております。」

校長は物思いをふけるように、間を置いた。そして口を開いた。

「君の父上は、残された娘を危険な目にあわせるのはこころが痛い思いがするだろうね。」

「そのようなことは、仕方ないことであります。」

エミリアは困った様子で言葉を返した。

「皇帝は皇女殿下に強くなってもらいたい一心でこの学校へ入隊させられたと聞いて、不憫に思ってたね。」

「皇女殿下は入隊時に比べて変わられました。皇帝の思いを受けてお強くなられたと思います。」

「君の支えもあつただろうね。わたしは君のそういう心根の優しいところもすばらしいと思ってるよ。」

「身に余る光栄であります。」

「優秀な兄を亡くした女生徒が前にもいたんだが。」

校長は、天井を見上げ、物思いにふけるように言った。

「なにか。」

「嫌、なんでもない。」

エミリアの反応に、我に返り校長は言いかけた話をやめた。

「話は以上だ。これからも、皇女殿下のことを支えてもらいたい。」

「皇女殿下をお守りすることは、国を守ることもあります。当然のこととし、これからも良き友人として皇女殿下とともに訓練を受けていく所存です。」

エミリアは立ち上がり、校長に礼をした。

「ありがとうございました。」

エミリアはその場から立ち去ろうとしたが、校長室の書棚に飾られているトロフィのなかに、女性の写真が飾られているのが見えた。エミリアは写真を一瞬みただけで、目をそらし、室内から出ようとした。

「失礼いたします。」

校長は深くうなづいて微笑んだ。

「うわあ〜っ。」

カスターが叫んだ。

カスターは対人格闘の際、攻撃して受け止められた腕をアルバートに舌で舐められた。

油断に乗じて、アルバートがカスターの顔にめがけて拳を出すと、カスターは反り返って避けた。

「ああ、危ない。」

「ちっ」

（油断も好きもない。体舐めるって、どんな戦法だよ。）

カスターはパンチを出しては、交わされるとかがんで足を出して相手の足に攻撃をしかけていた。

アルバートは攻撃を受けて倒れ掛かるも、体をひねって、床を回転していつて、カスターから離れた。

両手について、その反動で立ち上がった。

立ち上がった途端、カスターが攻撃してきたが、バック転をして、避けた。

「おお。」

周囲から喚声が上がった。

カスターはアルバートに対して、血の気があがってきて、何としても倒さないとだめだと考えていた。

（僕自身を舐めてる。ちくしょう。）

アルバートも、デイゴに投げ飛ばされて、いい気持ちがない。カ

スターに勝たなければと思っていた。

カスターがアルバートの腕を取り、背中に回すと、肘で背中を突いた。

アルバートは床に倒れこんで、カスターはアルバートをつつぶせにしたまま、十字になって自分の体を押し付けた。

アルバートはカスターに乗られて、足と肩で起き上がろうとしたが、それ以上にカスターはのしかかるように体重をかけていて身動きがつかなかった。

「はい、アルバートの負け。」

クレアは言った。

「うつつ。」

海老のように反り返って、カスターに反撃したアルバートだったが、カスターはクレアの言葉ですぐにアルバートから離れた。

「次は、あたしとレインね。」

「え、僕、クレアさんと対戦するんですか。」

レインがさういうとロブはレインの背中を押し出した。

「いつて来い。」

困った顔で、レインは前に出た。

「レイン、構える。」

クレアに言われて、仕方なく構えた。

レインは、先ほどカスターとの対戦をみている、クレアが足で攻撃してくると思っ、両肘をつけて、すぐに顔の前にもってこれるように身構えた。

クレアは、右足をあげて、レインの顔めがけて攻撃を仕掛けた。

レインは両肘をつきまげてクレアの足蹴りを受け止めた。骨までジンと痛みを感じた。

しかし、クレアは攻撃した右足をすぐにもどし、左足をまげてレインに背中を向けしゃがみこむようにして左足をレインのみぞおちにたたきつけた。

「ぐあぁ。」

レインは声をだして、後ろに倒れこんだ。

「ぐえ、」ほっ

レインは倒れこみ咳き込みながらも、立ち上がって身構えた。

クレアはその様子を見て、ロブに打たれ強さを叩き込まれたなと考
えていた。

クレアが攻撃しようとする、ロブが待ったをかけた。

ロブはレインのそばによって、耳打ちをした。

「クレアさんの握力は強い。投げ飛ばされるかもしれないから気を
つける。」

レインはクレアの本気のびびっていたが、ロブの言葉になおさら恐
怖感がつのった。

そして、レインはつばを飲み込んだ。

（クレアさんの隙をねらうにはどうしたらいいんだろう。負けた振
りをしたほうがいいのかな。）

レインはクレアの足蹴りがかみこんで交わし続けたが、自分でも
攻撃仕掛けないといけないと思い、パンチをだすと、手首をとられ
た。

手首をとられたとレインが思った瞬間、クレアのもう片方の手がレ
インの上腕をつかみ、レインは投げ飛ばされた。

レインは投げ飛ばされたが、振り返り、両足が床について、振り返
った反動で起き上がった。

「レイン！」

ロブが叫んだ瞬間、すばやくやってきたクレアは片肘をレインにむ
かって振り下ろそうとしていた。

レインはしゃがみこんで両腕でその肘を受け止めようとした。

が、しかし、クレアは寸前で止めた。

「反射神経はいいようだな、レイン。」

レインはやられると思って冷や汗をかいていた。

クレアが攻撃を止めたにもかかわらず、レインは身動きがつかなか
った。

クレアの攻撃は隙がなく、速さもあって、レインには恐怖感がより一層つよく感じていた。

「どうしたレイン。」

クレアは息切れしているレインに手を差し伸べた。

レインは我に返って、クレアの手をとり、立ち上がった。

クレアはレインの肩に手を回し、レインの耳にささやくように言った。

「怖かったか。」

レインはうなづいた。

「今のままでは自分の身を守るので精一杯だろう。しっかり体を鍛えるんだ。敵は待ったをかけさせてくれないし、子供だからといって容赦はしない。」

レインはクレアの本気は自分のためだと実感した。

「ロブがレインにエアジェットで脅しをかけたのは、やりたくてやったんじゃない。」

エアジェットの恐怖をおぼえさせて、知り尽くす必要性があったんだよ。」

レインはクレアに笑顔で返事をした。

「わかりました。」

クレアはレインの頭を撫でた。

コーディとデイゴはクレアの様子に大人気ないのではと思った。

シリアンは驚愕していて、空いた口がふさがらない状態だった。

第十二章 旅立ちのとき 3 (後書き)

BGM:「パンドラ」ジン

第十二章 旅立ちのとき 4 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)
ジリアン⇨スタンドフィールド (主人公の弟<従弟>・愛称ジル)
ロブ⇨スタンドフィールド (主人公の兄<実父>)
カスター⇨ペドロ (クルー。通信士。愛称キャス)
デイゴ (クルー。操縦士)
クレア⇨ポーター (クルー。医者)
コーディ⇨ヴェツキア (クルー。看護士)
ジヨナサン (クルー。エンジン技師)
アルバート (クルー。副操縦士。愛称アル)

第十二章 旅立ちのとき 4

パジエロブルーが研究所に到着すると、早速、ジリアンは一人で飛行練習を始めた。

カスターと通信で支持を受けて、練習をこなす。

一方、レインは室内練習場にて、飛行訓練をロブから指導を受けていた。

デイゴとアルバートは、筋肉トレーニングをしていた。

クレアとジョナサンはスカイエンジェルフィッシュ号の完成にむけての調整に立ち会っていた。

コーディは、備品など必要なものを準備していた。

出発に向けて、それぞれ、自分たちのやるべきことを日々こなしていた。

スカイエンジェルフィッシュ号が完成し、試運転を始めるころ、パジエロブルーにはジリアンとレイン二人で飛行練習をしていた。

レインは最初にドックでのロブの脅しがトラウマになりそうに恐怖が襲ってきたが、慣れるとすぐに忘れてしまっていた。

ジリアンはレインの様子をみて、安心した。次第に現実味をおびてくる感じが二人を高揚させて希望に胸を膨らませて飛行練習していた。

ロブがクレアにパジエロブルーを二人で飛行したいと頼み込んだ。

「どうしてだ？」

「いや、エアジェットで攻撃の仕方を見せておきたいんですよ。

黒衣の民族がどんな攻撃をしてくるか知る必要があると思うのです。」

「じゃ、あたしじゃなくてもいいだろう。アルならできる。」

「アルバートができるんですか。」

「もちろんだ。航空士の資格を持っているよ。」

アルバートはクレアからの通信支持で飛行するように言われて、パジエロブルーに乗りこんだ。

ロブは気が気でなかったが、クルーである以上、信頼するしかなかった。

ジリアンから操縦席の説明を聞いて、アルバートは無言でうなづいていた。

準備ができ、パジエロブルーは発進し、地上をたち、上空へ飛んだ。ロブは操縦席から天井のガラスの扉を空け、両足首を座席上部にある固定輪にはめた。

アルバートはクレアの指示通り、パジエロブルーを回転させた。

ロブは両手を広げて、バランスを図った。頭上が下になっても微動させなかった。

その様子をレインとジリアンは驚きのまなざしでみていた。

パジエロブルーの上部でロブは体をねじってみたり上半身を激しく動かしていた。

アルバートは操縦桿前にある計器類に鏡が設置されていてそれをみて、ロブの様子をみていた。

クレアの通信からは、ロブと同じことが出来るかという質問があったからだ。

「もちろん出来るよ。」

アルバートはにやけながら、わざと操縦桿の操作を間違え、不安定な飛行をした。

ロブはバランスを崩したが、すぐに体制を整えた。

そして、操縦席外の動向を終わらせた。

ロブがアルバートの操縦席にある鏡をみると、アルバートの顔がにやけているのを見て、故意だとわかった。

しかし、ロブは何も言わなかった。

パジエロブルーが帰還して、ロブたちが操縦席から、出てくると、クレアはアルバートを平手打ちした。

パーン

「なにするんだよ！」

アルバートはクレアに食って掛かった。

「馬鹿野郎！あたしの支持にしたがえとிட்டただろう。」

アルバートはにやけて、あやまるうとしなかった。

「逆らったら、承知しないとிட்டただろう。」

「どう承知しないんだよ。」

クレアはアルバートに切れて、足蹴りをした。

アルバートが立ち上がらないうちに、みぞおちめがけて蹴りを再度いれた。

「ぐほつ。」

アルバートは倒れこんで立ち上がれなくなった。

「容赦しないとிட்டただろう。アル。」

「うつつ。痛いよ。クレア。」

「甘えるな。」

クレアとアルバートの様子を見て、カスターは思った。

（どう手なづけたっていうんだろう。）

ロブがアルバートに近づいて、背中に手をやり、もう片方の手を差し出した。

アルバートはロブの顔を見て、手をみると、その手を取り、よろめきながら立ち上がった。

ロブはクレアに対して口出ししないと決めていた。

カスターはロブがアルバートに接している姿を見ていた。

（こういうことか。）

「アルバート、クレアさんに謝るんだ。」

アルバートはロブをにらんだが、すぐに、にやけた。

「すみませんでした。クレアさん。これからは気をつけます。」

「支持を無視することはチームワークを乱すことだ。それが命取りになる。」

クレアはそういうと、その場から立ち去った。

アルバートはロブの手を握ったままだった。ロブはその手を離そう

としたが、アルバートが離さなかった。

怪訝そうにロブはアルバートの顔を見た。

「クレアには逆らえないんだ。僕と一緒にだね。フフツ。」

ロブは何も言わずに、自分の手を強くひっぱって、アルバートから離れた。

そして、アルバートはカスターの方をみて、片目をウインクして投げキッスをした。

カスターはその様子を見て、悪寒が走った。

そして、青い顔をしてその場を離れた。

レインとジリアンはそのころに、パジェロブルーに近寄った。

レインは操縦席にある、固定輪を確認した。

ロブがやっていたことを思い返して、自分にできるかどうか、思考していた。

ジリアンはその様子を見て、不安になった。

「レイニー、無理して兄さんのようなことしなくていいと思うよ。」

「何言ってるんだよ、兄さんが言ってただろう。黒衣の民族の攻撃の仕方を。ああやって、座席外に出て、交戦するんだよ。」

「まだ、危ないよ。あんなことできないよ。」

「敵は僕たちに攻撃してこないってことはないんだからさ。」

レインが座席に前のめりになっているところへ、アルバートがやってきて、レインの背中に覆いかぶさった。

「なにやってるんだよ。」

「うわあ。」

レインが驚いて後ろを振り返るとアルバートはにやけていて、気持ちが悪いとさえ、レインは思った。

「確認しているだけだよ。」

アルバートはレインから離れた。

「先ほど、ちよつと操縦がみだれてたけど、わざとやったの?」

ジリアンがアルバートに言った。

「そうだなあ。それはクレアに怒られたところなんだ。」

アルバートは首をかしげ悪ふざけしながら、答えた。

「ジリアンはアルバートをにらんだが、すぐにその場から立ち去ろうとした。」

「レインはその様子を見て、ジリアンの後を追うようにしたが、アルバートに手首を取られた。」

「レイン、待ってよ。」

「何なんだよ、アルバート。」

「僕と一緒に寝てくれないかな。」

その言葉にレインはギョツとして、露骨に嫌な顔をした。

「僕一人で寝るのは怖いんだ。」

レインはアルバートに取られた手を振り払った。

「嫌だよ。一人で寝てよ。」

レインはジリアンに追いつくように、その場から走り去った。

「なんだあ。つまんない。レインは優しくしてくれると思ったのに。」

アルバートはつぶやいた。

その後、スカイエンジェルフィッシュ号の試運転をはじめた。

エンジン技師のジョナサンはエンジン室でエンジンの具合を確認していた。

操縦はデイゴがしていた。操縦席のトップはロブがいて、通信席にはカスターが副操縦席にはジョナサンがいた。

レーダー計器類にはジリアンが席につき、船外で確認作業を行う甲板にはレインが待機していた。

何度かの飛行を繰り返して、試運転を終了させた。

その後、コーディの指図で、空挺に備品など必需品が運び込まれた。夕食後、日程確認などミーティングが行われた。

終了後に、コーディがレインのそばに寄り、棒のようなものを手渡した。

「コーディ、何なの、これ？」

「これは護身用でスタンガンよ。ここのスイッチを入れると電気が走るの。」

コーディは棒の先をレインに握らせて、スイッチを入れた。

「うわあ、痛い。」

レインはすぐに手を離し、手を何度も大きく振り払った。

「こういうものを持っていないとだめなの？」

「そうね。嫌でも持っていて欲しいわ。拳銃を持つよりはましだと思いますのだけど。」

レインはスタンガンの棒を見つめて、考えた。

たしかに、拳銃を扱うより、スタンガンの方がよっぽどいいと思った。

「たしかにそうだね。」

ベルト用のホルスターがついていたので、それを取り付けて、棒を出したり戻したりした。

「いよいよなんだね。」

「そうよ。」

「今まで以上に気を引き締めて自分の身は自分で、そしてできるだけジリアンをまもっていけるようになっていかなくちゃいけないんだ。」

コーディはレインを不憫そうに思いながらも、レインの肩を抱いた。

「あなたにしかできないことをするだけよ。なんにも気負いしなくていいのよ。私たち大人を信用して身を任せてくれてたらいいから。」

「ありがとう。コーディ。そういつてくれると、安心できるよ。」

レインは笑顔でコーディを見て言った。

レインが目を閉じるとミーンティングのクレアの言葉がレインの耳元に響いた。

「スカイエンジェルフィッシュ号は明後日に出発の時を迎える。」

第十二章 旅立ちのとき 4 (後書き)

BGM:「SCATTERIN' MONKEY」BOOM BOO
M SATELLITES

第十二章 旅立ちのとき 5 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド (主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド (主人公の兄<実父>)

カスター⇨ペドロ (クルー。通信士。愛称キヤス)

デイゴ (クルー。操縦士)

クレア⇨ポーター (クルー。医者)

コーディ⇨ヴェツキア (クルー。看護師)

ジヨナサン (クルー。エンジン技師)

アルバート (クルー。副操縦士。愛称アル)

フィリップ⇨バトラー (グリーンオイル財団研究所スカイエンジニア
ルフィツシュ号空挺設計主任)

セリーヌ⇨マルキナ (デューク⇨ジュニア⇨デミスト理事長の第六
秘書)

エミリア⇨サンジョベーゼ (スカイロード上官育成学校1回生。皇
女殿下のルームメイト。上等兵)

ビル⇨ポルスキー (スカイロード上官育成学校・教官。准曹)

朝食で、レインとジリアンとコーデイがテーブルについていた。レインとジリアンは眠そうにしていた。

「二人とも眠れなかったのかしら。」

コーデイが二人に声をかけた。

「昨夜、遅くにアルが大きな声で叫んでいるのが聞こえてさ、目が覚めちゃった。」

レインはもてあまし気味に食べ物にフォークを突き刺していた。

「アルって、クレアさんところでなにかあったんでしょ。」

レインがコーデイに聞いた。

コーデイの話すところ、昨夜遅くにアルバートが眠れないから一緒に寝て欲しいとクレアのところに来たらしい。

クレアはもちろん断った。その後、カスターの部屋が空いていたのでアルバートが入ったらしいのだが、カスターは即座にアルバートを追い出した。

「昨日さ、アルバートと一緒に寝て欲しいって言われてさ、嫌だっ
て言っ
て逃げたんだ。」

なんか嫌な予感したから、ジリアンにも鍵をしておくように言ったんだ。」

ジリアンは昨夜なにがあったのか、熟睡していたのでわからなかった様子だった。

「僕のところに来て、ドアを開けようとしてさ、何か言っただけ
けど無視したんだ。」

そしたら、ジリアンの部屋に行ったみたいで、そこでもドアを開けようとしていたよ。」

コーデイはアルバートが最終的にロブの部屋に行ったことを二人に伝えた。

二人は驚いたが、コーデイはクレアさんが仕向けたことだと言った。

アルバートは多重人格で、4人の人格がいてた。普段でているアルバートは無関心を装っていて、凶暴なアルバートと、ほんとうのアルバートと、女の子の人格との4人がいてた。

クレアがアルバートのなかの女の子のことをアリーと呼んでいた。アリーは暴力を振るわれたりした時に出てくる人格で、クレアはわざとアルバートを痛めつけて、アリーを出させたのだ。

それはロブに懐かせるためだった。ロブ自身はそのことを知らない。レインとジリアンはクレアのことを怖いと思っただし、より一層に逆らってはいけないと思っただ。

「あのお、カスターが何か変なんだ。アルに対して、避けてる感じがする。」

レインはおもむろにコーデイにそういった。

コーデイは少し考えてから、言った。

「カスターさんは過去に何かありそうな感じがするのだけど、こちらから聞き出すのも失礼なので、今はそっとしておきましょう。」

なにかあったら、私のほうから声をかけておくから、二人は心配しなくていいわよ。」

二人はコーデイにそういわれて、安心した顔をした。

「ロブ兄さんって、クレアさんの手のひらで転がされているんだね。」

ジリアンが言うと、レインは少し固まり気味に強張った。

「クレアさんはみんなが思うほど、怖い人でも強い人でもないわ。」

みんなを守るために、ちゃんと考えて手を打っているだけよ。」

コーデイは微笑みながら、そう語った。

レインは安堵した。ジリアンから時々でてくる毒舌に冷や汗をかくことがあるから、気が気でなかった。

3人が朝食を終えたころ、ロブとカスターとデイゴが食堂にあらわれた。

お互い挨拶を済ませて、レインたちと入れ替わるように、ロブたちはテーブルについた。

「コーデイ、クレアさんはまだ起きてないのかな。」

「ええ、まだです。ロブさん、クレアさんには伝えてますけど、この後、第三大会議室で総合ミーティングがありますから、遅れないようにしてくださいね。」

「了解。」

ロブは手をあげて、コーデイに合図をした。

カスターは3人が去っていくのを待っていたかのように、話し始めた。

「ロブ、深夜、アルバートが来なかったか。」

「ああ、きたよ。アルバートはまだ、俺の部屋で寝ている。」

「ええ！！アルバートはロブと一緒に寝たのか。」

「大きな声をだすなよ、キャス。仕方ないだろ、眠れないって言うんだから。」

「もしかして、同じベッドに寝たとか。」

「しょうがないだろう、部屋にはベッドが一つしかないんだから。」

カスターは露骨に変な顔でロブの顔を見ていた。

隣でデイゴは我関せずとばかりに食事をしていた。

「レインと一緒に寝ているとおもえば、たいしたことはないさ。」

「何もされなかったのか。」

「何をするんだよ。誰かさんと違ってベッドに入るとすぐに安心したのか寝息をたててたよ。」

ロブは横目でカスターをみていた。

「ぼ、僕のことかい。まるでロブと一緒に寝たみたいに言わないでくれよ。」

カスターはロブのほうへ顔を近づけて、周りに聞こえないように言った。

「ああ、あれはタンクの掃除を終えて、疲れていたキャスが立ったままねてて、いびきをかいていたんだったな。」

ロブがそう言うと、デイゴは吹いた。

「ぶっ。あはは。」

「あれは慣れていなかったから、体力的にも精神的にも疲れてたんだよ。」

そこへ、クレアとアルバートが腕を組み連れ立って食堂に入ってきた。

「おはよう」

「おはようございます。みなさん。」

クレアにつづいて、組んでいた腕をはずしアルバートは恥ずかしそうに挨拶をした。

ロブたちは、その様子に驚いていて空いた口がふさがらなかった。

クレアは三人の馬鹿な面をみて、呆れながら、テーブルについた。

「こいつ、本人以外に3人の人格があるんだが、今は女の子なんだ。」

「

平然としてクレアは言ったが、3人は納得が行かない様子だった。

「女の子って、どのタイミングでそうなるんですか。」

クレアはロブに理由をいうと、怒るだろうから言わなかった。

「ロブと一緒に寝たから、女の子になっちゃったんですか。」

カスターは思ったことを口にしたが、ロブはカスターをにらんだ。

クレアは思惑通りになったと心の中で微笑んだ。

そこへ、バトラー設計主任が現れた。

「みなさん、おはようございます。今日はここで、食事を取らせてください。」

「一緒にさせてもらってよろしいですか。」

みんながバトラーと挨拶を済ませて、食事を取りながら、雑談をはじめた。

バトラーは、アルバートがクルーたちとなじんでいるように見えて安心していた。

そこで、ロブは、アルバートに聞きたいことがあると言いだした。

「バトラーさん、パジェロブルーの設計者の名前がなかったように思うのですが、誰でしょうか。」

「実はわたしも知らないんです。」

バトラーはパジェロブルーの製作にいたった過程を話した。

パジェロブルーはデューク・ジュニア・デミスト財団理事長の支持で作られたが、それは軍部からの依頼だった。

皇帝陛下が所望していて、今は無きホーネット隊の最新機としてデビューさせるものだったという。

「では、皇帝陛下か、軍部関係者が設計者を知っているということですか。」

クレアがバトラーの物言いに心当たりがあったので、聞いた。

「そうですね。その可能性があるでしょう。理事長は今回の件、皇帝陛下への信頼回復をしようと慈善事業を展開しているとのことです。」

「つまりは、皇帝陛下の機嫌を取る意味があるということですか。」
クレアがなにかを思っ言葉で口にしてしていると、ロブは思っていた。
ロブがクレアを見たとき、クレアはニヤリと笑ってロブをみた。

皇帝陛下のご機嫌取りにパジェロブルーを製作させて、スカイエンジェルフィッシュ号に与えたということは、レシアの息子であるレインへの贈り物になることだった。

ロブは真実を知ったと同時にクレアの考えていることがいやらしく感じた。

食事を終え、一向は食堂を出た。

「では、後ほど、第三会議室でお会いしましょう。」

バトラーはそういって、その場から去っていった。

ロブは眉間にしわを寄せていた。

「そう怖い顔をするなよ、ロブ。あの子達を成長させるにはアイテムが必要なんだよ。」

それが母親のにおいがするエアジェットなら、なおさらいいじゃないか。なにか意味のあることだよ。」

クレアは満足げにそう言った。

「あのエアジェットはアルの面倒を見る代わりにもらったものなんだ。」

だから、アルの面倒を頼むよ、ロブ。」

クレアの言葉に、ロブはようやく自分がクレアの思い通りに動かされていることを知った。

両手で顔を覆い、落胆した。

デイゴはいつものことだとロブに干渉しなかったが、カスターはロブのことをすこしだけ不憫に思った。

カスターはロブと同様に自分がクレアの思惑で翻弄されていることに気がついていなかった。

財団研究所の空挺製造部門の棟に第三大会議室はあった。

明日のスカイエンジェルフィッシュ号出発式に備えての全体ミーティングが行われる。

その日の朝に、スカイロード上官育成学校から六名と教官一名がエアジェットで到着していた。

出発式でスカイエンジェルフィッシュ号を誘導する役目があったからだった。

始まる前に、第六秘書のセリーヌ・マルキナから、クルーたちに紹介があった。

准曹で教官のビル・ポルスキー、以下上等兵の3回生二人、2回生二人、1回生二人の6名だった。

ビル・ポルスキーはロブに挨拶をすると、ロブが10代のころ、アクロバット飛行コンテストでの数々の優勝をしていたことを話した。

「さすがは、アレックス・スタンドフィールドを受け継ぐ者だと思いましたよ。」

ロブはコンテストの際にはことあるごとにアレックスのことを言われていていまさらまたと思っていた。

学生たちは、ジリアンとレインに話しかけていた。

「初等科のものが、操縦できるとは思えないんだが。」

一人が言うと、ジリアンは自慢げな態度をとっていた。

「ロブ兄さんは11歳でコンテストに出場していたんですよ。」

そして、言われる言葉がいつも同じだった。

「さすが、アレックス」スタンドフィールドを受け継ぐ者だ。」
二人はすこし、呆れていた。

六名のうちの紅一点のエミリア「サンジヨベーゼだけは、レインの顔をまじまじと見ていた。

レインはエミリアと目があって、恥ずかしそうに照れていた。

「僕になにか変なところがありますか。」

レインはエミリアに声をかけた。

「じろじろみたりしてごめんなさい。何でもないので。ただ、どこかで見かけたような気がして思い出そうとして思い出せないのです。」

会ったことは一度もないはずと思いながらも、レインは少し嬉しく思った。

第十二章 旅立ちのとき 5 (後書き)

BGM:「Aqua Times」

第十二章 旅立ちのとき 6 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド (主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド (主人公の兄<実父>)

カスター⇨ペドロ (クルー。通信士。愛称キヤス)

クレア⇨ポーター (クルー。医者)

コーディ⇨ヴェツキア (クルー。看護士)

デューク⇨ジュニア⇨デミスト (現グリーンオイル財団理事長)

マルティン・デ・ドレイファス (コン・ラ・ジエンタ皇国の皇帝。

セシリアの実兄。)

フェリシア⇨デッドレイファス (皇帝の第一皇女。スカイロード上官育成学校・一回生。)

第十二章 旅立ちのとき 6

ミーティングが始まる前に、デューク・ジュニア・デミスト財団理事長が入室し、総合ミーティングが始まった。

ロブがクレアに耳打ちした。

「あの男が、理事長ですか。」

「そうだ、あの狐目の男がデュークだ。」

グリーンオイル財団の慈善事業の一環である、人命救助空挺・スカイエンジェルフィッシュ号の出発式は、仰々しく派手に行われる。

招待客である、皇女殿下は前日の今日の午後から、研究所に到着する予定で、式に参加。

壇上より皇女殿下から祝いの言葉をいただき、クルーたちは出発の準備に入る。

パジェロブルーはスカイエンジェルフィッシュとは先取飛行の役目で別飛行する。

パジェロブルーを先導するかのように、飛行するのがスカイロード上官育成学校の誘導部隊である。

3 回生のエアジェットを先頭に、パジェロブルーが続き、その左右を2 回生と1 回生のエアジェットが飛行する体勢になっている。

その後方をスカイエンジェルフィッシュ号が飛行する予定だ。

準備に余念がないよう、整備士責任者からの説明があり、管制官からの当日の天気概況の説明があった。

スカイエンジェルフィッシュ号の監督責任者のクレアが意思表明をし、最後に財団理事長が挨拶をした。

「今回の出発式は、国民に対する財団の使命責任を果たすものであります。」

ただ無造作にグリーンオイルを作成し、空挺をつくりつづけて、国民の安全を脅かすものであってはいけないという想いからきております。

わたしたちのこの考えに賛同してくださったクレア「ポーター医師に感謝しつつ、医療活動の成功を祈りつつ、送り出したいと思っております。」

挨拶が終わると、全員が立ち上がり、拍手を送って総合ミーティングは終了した。

ミーティングが終了後、理事長のデュークはまっすぐ、クレアのほうへ向かってきた。

「クレア先生、ご挨拶が後になってしまって申し訳ありません。」

「いえ、挨拶ぐらいはいつでも。」

クレアはよそよそしくデュークに接していた。

「初めましてですね。ロブ「スタンドフィールドさん。わたしはオイル財団理事長のデューク「ジュニア」デミストです。デュークと呼んでいただければ。」

「こちらこそ、初めましてよろしくお願ひします。」

ロブはそつなく挨拶を済ませて、この場から立ち去りたい気分だった。

「妻からはあなたの話をよく聞いております。」

「ご婦人はお元気ですか。こちらでは厄介者を引き取って下さりありがとうございます。」

ロブは嫌味をぶつけたが、デュークは気にしない素振りをした。

「妻は元気ですよ。こちらには午後から到着する予定です。みなさんに会えることを楽しみにしておりますよ。」

「それはそれは。こちらとしては、できるだけ会わせたくない者がおりますので、気を使っていただけでしたら幸いなのですが。」

デュークの口角が引きつった。デューク自身、その会わせたくないものが誰であるか知っているのだ。

以前、ロブが皇帝にセシリアを引き取って欲しいと懇願した際、シリアンの存在を問われた。

皇帝自身は後継者にするつもりがなく、手元に置いておきたい主旨を伝えたが、ロブは手放す気持がなかった。

コーデイからの情報は、デュークがジリアンを手元に置いておき、皇帝とのつながりを強くしていきたい様子があったのだという。ジリアンをめぐって、皇帝と財団理事長デュークとロブとの攻防戦が密かに展開していたのだ。

クレアは蚊帳の外よろしく、その会話に介入していかなかったが、何を意図して会話が成り立っているか理解していた。

（宿業というのは、なんともおかしくも悲しいものだな。）

クレアはこころのなかでそうつぶやいた。

午後からは重厚な黒の航空機が到着した。

山と鷹をイメージした金色のマークがあり、それは、皇族専用機であることを表していた。

その航空機には、お忍びということで参加する皇帝と皇女が搭乗していた。

クルーたちは食堂から到着した飛行場を眺めていた。

「お忍びといいながら、派手に到着だな。」

クレアはつぶやいたが、カスターは首をかしげた。

「皇女殿下が搭乗しているのなら、皇族専用機できてもおかしくないでしょう。」

「馬鹿だな、キャス。皇女殿下といえども、スカイロード上官育成学校の生徒だよ。皇族専用機で来る必要なんてないんだよ。」

クレアは、皇族専用機を指差して、言った。

ロブがカスターの後ろにたっていた。

「誘導部隊にスカイロード上官育成学校の生徒が任務についたのは、皇女殿下のためだ。」

女性が一人加わっているが、おそらく皇女殿下の護衛感覚で任命された者だろう。」

ロブがそう言うと、カスターはニヤリと笑った。

「そういえば、ミーティング前に紹介してもらったけど、その生徒とレインは親しげに会話してたね。」

誰かさんに似て、やっぱり年上好みなのかなあ、レインは。」
カスターはにやけて横目でロブをみていた。ロブはカスターをにらんでいた。

「レインはもう14歳だったな。そのころのロブはもう、レテシアと……。」

「それ以上言わなくてもいいでしょう、クレアさん！」
クレアの言葉をロブはさえぎった。

楽しげに会話を展開している大人たちと違って、レインとジリアンは葬式のようにテンションが低かった。

コーデイから、財団理事長のデュークがセシリアの夫であることを聞かされたからだ。

そして、午後から、セシリアがこの研究所に到着するという話も聞かされた。

ジリアンは寒気がするほど、その言葉を受け入れできなかった。

セシリアが生きている限り、会わないようにすることは願っていても、ジリアンは叶わないかもしれないと思ってはいた。

会ったとき、どんな風になってしまっただろうと考えると、つらくなるばかりだった。

コーデイはそんな二人の様子をみながら、言葉にした。

「ふたりとも、そんな落胆しなくてもいいわよ。あの方はもうふたりに危害を加えたり出来ない人なのだから。」

レインはコーデイに言った。

「そうじゃないんだ、コーデイ。セシルは美しい顔をして怖いことをする人なんだ。」

レインがいうと、ジリアンはこわばって、持っていたスプーンを落としてしまった。

レインは言っではいけないことをしてしまったと思った。

「ごめん、ジル。」

レインの謝る言葉にジルは我に返って、落としたスプーンを拾った。
「謝ることなんてないよ、レイニー。ほんとうのことだもの。いつ

までも気にしている僕が悪いんだ。」

「そんなことない、ジルは悪くないよ。」

コーデイは二人の様子にほほえましく思い、笑顔で二人をみていた。「大丈夫。ふたりにはわたしがついていくし、空挺に搭乗するまで二人のそばを離れたりしないから、心配しないで。」

わたしはあの方と何度も会って会話しているし、ふたりの面倒を見るように言われているから、あの方から二人を守ってあげることができるわ。」

レインとジリアンは無言でコーデイの言葉にうなづいた。

コーデイは話題を変えて、二人のテンションを上げようとした。

「理事長からお聞きしたのだけど、皇女殿下は二人の会えることを楽しみにしているそうよ。」

「え、どうして？」

「わが国の英雄アレックスの血を受け継ぐ少年たちですもの。」

二人は少し拍子抜けした顔をした。

「先ほど、紹介していただいたスカイロード上官育成学校の生徒さんと皇女殿下と一緒に勉強に励んでいらっしやる方だから、エアジエットを操縦する少年たちのことは好奇心をそえられることだとも思うわ。」

「なんだあ、お嬢様学校で学ばれているのだと思ってた。」

「厳しい訓練受けているんだね。怖い人かな。」

「とても綺麗な方だとお聞きしているわ。楽しみね。」

レインはエミリアのことを思い出して、頬を赤くした。

ジリアンは、皇女殿下が自分とは従姉弟同士であることを考えて、相手は知っているのだろうかと思っていた。

皇帝マルティン・デ・ドレイファスの一人娘フェリシア＝デ＝ドレイファス第一皇女は、幼くして母親の皇后を失くし、厳しく育てられた。

父の皇帝自身は厳しく育てることを望んでいたわけではなかったが、

それが皇女のためだと思っていた。

将来は皇帝となって国を背負う身になるには、幼いうちから厳しさに苦悩にあい成長し、国民から愛され尊敬される身にならなければならぬからだ。

時折、甘い父親の顔を覗かせながら、厳しい態度を取ってきた皇帝は、いつでも、娘の護衛には気を使ってきた。

訓練先の空軍であるスカイロード上官育成学校を選んだのも、グリーンオイル財団にいいように扱われないために、知識と見識、人脈を得るためのものだった。

とりわけ、女生徒が少ない部門だったが、入学する前から、女子生徒が受験する情報を得ていたので、気兼ねなく預けることができた。グリーンオイル財団は皇帝にとっては、国政を脅かす存在で、裏側で黒衣の民族を利用してテロ行為を誘導していることを知っていた。確たる証拠がつかめない中で、理事長のデュークには煮え湯を飲まされる思いがして、毅然とした態度で示してきた。

毅然とした態度には、実の妹セシリアを妻とすることで、皇帝自身に憂慮するところはないと言いつている。

セシリアは皇族の一人に引き取られて、貴族の養女となって、デミスト家に嫁いだ。

皇帝にとっては、財団は目の上のたんこぶではあるが、国民には有益な大企業である。

慈善事業のお披露目式であるスカイエンジェルフィッシュ号の出発式には、国民に財団の存在を理解してもらおう必要性に皇族が加わって、賛成しているという態度を示すことになる。

表向きには、皇女が招待されて参加するものではあるが、財団と皇族とのつながりを強くする意味合いがそこにはあった。

皇帝の思惑には、皇女がこういう形で政策参加していくことに意味のあることだとある。

皇女のフェリシアにはまだ、理解できないできごとではあった。

そして、そのフェリシアは、母親を知らないので、身近な存在であ

る叔母に会えることを楽しみしていたし、アレックスの血を受け継ぐ少年たちに会えることも楽しみにしていた。

彼女にとって、アレックスは憧れの英雄だった。悲恋だったレジーナ女帝の思いを重ね合わせて、ジリアンの存在をまるでアレックスとレジーナの思いが実ったかのようなものだとなぎあわせていた。

明日に出発式を控えて、クルーたちや出発式に関わるものたちは、眠れぬ夜を過ごしていた。

皇族、財団関係者、スタンドフィールドの者たち、それぞれが一同に介してあつまるイベント、この機会を待ち望んでいた者がいた。その者たちが、暗躍し闇夜にまぎれて行動を開始していた。希望を胸に膨らませて夢に向かって羽ばたくものたちを失望の谷底に突き落とすために。

第十二章 旅立ちのとき 6 (後書き)

BGM:「ワールズエンド・スーパーノヴァ」くるり

第十二章 旅立ちのとき 7 (前書き)

登場人物

レイン＝スタンドフィールド（主人公・愛称レイニー）

ジリアン＝スタンドフィールド（主人公の弟<従弟>・愛称ジル）

エミリア＝サンジョベーゼ（スカイロード上官育成学校1回生。皇女殿下のルームメイト）

フェリシア＝デ＝ドレイファス（皇帝の第一皇女。スカイロード上官育成学校・1回生。）

セイラ

第十二章 旅立ちのとき 7

出発式の当日の朝、眠れない夜を過ごしたレインとジリアンは朝食を終え、リラックスをするため、施設内の庭に出ていた。

コーデイは朝食後に、財団理事長に来るように言われて、二人から離れた。

施設内の庭というか雑木林があつてそこを二人で散歩していたのだが、ジリアンが綺麗な花に見とれている間に、レインは気づかず先に行つてしまった。

「プラーナに見せたら喜ぶだろうなあ。こんな綺麗な花は学校周辺じゃ見かけないもの。ねえ、レイニー。」

ジリアンが振り返つたところ、そこにはレインがいなかった。探し回つてもみつからないので、施設にある建物の方へもどつていった。建物の近くに80センチほどのコデマリが白い小さな花をつけていてそれが風もないのに揺れていた。

ジリアンが不思議に思つて近づくと、小さな女の子が出てきた。短い金髪でつぶらな瞳、ピンクのワンピースを着て赤い靴を履いた女の子は体中に黄色い花粉とくさつぱにまみれていた。

どうしてこんなところにこんな小さい子がいるのだろうとジリアンは思つていた。すると上空で航空機がとび立ち轟音を響かせた。

ゴォーン。

女の子はびっくりしてジリアンに飛びついた。

「怖いよお。」

ジリアンは女の子を抱き寄せた。

「大丈夫だよ。大きな飛行機がお空に飛んで、大きな音をたてただけだから。」

小さな潤んだ目で見つめる女の子をみて、ジリアンは言った。

「ねえ、どうしてこんなところにいるの？どこから来たの？」

「蝶々を追いかけていたの。どっかいつちゃったの。」

女の子は無邪気にそういった。

ジリアンは抱いていた女の子を地面に下ろした。

「お名前はなんていうのかな。」

「セイラ。」

女の子は元気良く答えた。

「セイラちゃんていうんだね。年はいくつかいえるかな。」

「みっちゅだよ。」

セイラは右手で三本の指を出して見せた。

ジリアンは困った顔をして、あたりを見回した。女の子を捜している人は見当たらなかつた。

ジリアン自身はレインを探したいのだが、セイラの親を探すほうが先だろうと思つた。

ジリアンはまた、セイラを抱きかかえ、歩き出した。

「ママを探しに行こうか。」

「待つて、お花を取りたい。」

ジリアンはセイラをコデマリの花に近づけさせて、花を摘ませた。

セイラは喜び、ジリアンに抱かれながらはしゃいだ。

一方、レインは、雑木林奥まで行って、ようやくジリアンがいないことに気がついた。

しかし、後戻りしても、見当たらなかつた。なぜなら、来た道を間違つてもどつていたからだつた。

仕方なく、建物が見えるほうへ行き、たどり着くと、来た事もない場所だつた。

途方に暮れているレインの前に、エミリアが現れた。

「おはようございます。」

「あら、おはよう。レイン君だつたかしら。」

「そうです。」

エミリアに名前を覚えてくれたと思うとレインは嬉しく思った。

「どうしてこんなところにいるの。ここは関係者以外に入つてはいけないところなのよ。」

「え、そうなんですか。ごめんなさい。その散歩していたら、道に迷ってしまつて。」

「仕方がないわね。」

そこへ、皇女フェリシアがあわてた様子で現れた。

「エミリア、ちょうど良いときに出会えてよかつたわ。」

「フェリシア、どうしたの。なにかあつたの？護衛の人はどうしたの？」

「ええ、ちょっと、都合が悪くて、はずしてもらつたの。」

「だめじゃないの。あなたは護衛についてもらわないといけない身なのだから。」

「そんなことを言つてる場合じゃなくて。あら、この少年は誰なのかしら。」

エミリアはレインがいたことを忘れていた。レインに対して左手を差し出してフェリシアに紹介した。

「フェリシア、こちらはスカイエンジェルフィッシュ号のクルーで、レイン＝スタンドフィールドさんよ。」

フェリシアはエミリアに紹介されて、この少年が父である皇帝からうわさを聞いていた女性パイロット・レテシアの息子だということを思い出していた。

「レイン、こちらはフェリシア皇女殿下であられます。」

レインは驚いたと同時に緊張した。

フェリシアは軍服姿で、金髪セミロングの色白、華奢な体格だった。

「はじめまして、わたくしがエミリア上等兵に紹介された皇女フェリシアです。エミリアとはスカイロード上官育成学校の同級生でルームメイトでもありますのよ。」

フェリシアは右手をレインに差し出した。

レインはあわてて、右手を後ろで持つて行き服にこすり付けてから、手を差し出した。

「はじめまして、皇女殿下。お目にかかれて光栄です。」

レインは礼儀を知らずでフェリシアの手を握ろうとしたが、フェリ

シアは手の甲を上に向けていたので、下から握ろうとした。

エミリアはその様子をみて、咳払いをした。

レインが握らないうちに、エミリアはフェリシアに話しかけた。

「フェリシア、なにか問題がおきたのでしょうか。」

「ええ、3歳くらいの女の子を探して欲しいの。」

「女の子？」

フェリシアは、女の子に会ってから可愛くて仕方がなくて散歩に連れていったのだという。

少し目を離れた際に女の子を見失ってしまったのだ。レインはその話をきいて、自分と同じことがフェリシアにも起きたことを不思議に思った。

その小さな女の子を3人で探すことになった。

しばらくしてレインがジリアンを見つけたと同時にジリアンが女の子を抱きかかえているのを発見した。

「ジル、その女の子はどうしたの？」

「迷子になったらいいんだ。親御さんを見つけてあげようと思って。」

ジリアンは女の子を抱いたまま歩き回っていたので、つかれきっていた。その場で女の子を地面に下ろした。

「名前はセイラっていうんだ。」

「実は、皇女殿下が3歳くらいの女の子を探していて、僕も一緒にさがしていたところなんだ。」

「皇女殿下が？」

レインがセイラを抱きかかえて、ジリアンとともに、先ほどの場所にもどった。

フェリシアとエミリアを探していると、雑木林のほうから返事がして、ふたりとも現れた。

「セイラ、探していたのよ。」

レインがセイラを下ろすと、フェリシアがセイラを抱きかかえた。

ライラは蝶々を追いかけて迷子になった話をした。

「あら、もしかして、この少年がジリアンなの？」

フェリシアはレインに声をかけた。

「ええ、ご存知ですか。」

「ジリアン、はじめまして。皇女フェリシアよ。あなたのことはセシルから聞いてるわ。」

ジリアンはセシリアの名を聞いて硬直した。

フェリシアは左手でライラを抱きかかえ、右手を差し出した。

ジリアンは、自分の手を添えてフェリシアの手の甲にキスをした。

レインはその様子をみて驚き、自分の礼儀知らずに恥ずかしさを覚えた。

「ジリアンはセイラのことを知らないのかしら。」

ライラを見つけたのはジリアンだということを聞いたので、フェリシアは不思議に思っただけ聞いてみた。

「知らないのですが……まさか。」

フェリシアはエミリアの方をみた。それは口外しないで欲しいという目配せだった。エミリアは両目のまぶたを閉じて返事をした。

「知らなかったのね。セイラはセシルと理事長の娘なのよ。」

その言葉にジリアンの体が震えた。

(ジリアンの妹。)

レインは心の中でつぶやいた。

「ママが心配しているわね。セイラもう、もどりましょうね。」

「はあい。」

セイラは元気良く返事をした。

「セイラ、お兄さんたちにお礼を言って、さようならしましょう。」

フェリシアはセイラの顔をつきあわせて、話し掛けた。

「ありがとう。バイバイ。」

セイラは右手を上げて小さく手を振った。

「エミリア、二人をよろしくね。」

「ええ、無事に見送りをさせてもらっわ。」

「では、あなたがたふたりの晴れの舞台を見守らせてもらっわ。セ

イラのことではありがとう。」

フェリシアはそういうと、建物の中に入っていった。

レインは頭を下げていた。

エミリアが二人の方を見ると、ジリアンが涙を流して直立不動になっていた。

（なにがあるのか知らないけど、つらいことなのね。）

エミリアはジリアンにハンカチを差し出した。

「す、すみません。」

「いいのよ。さあ、関係者立ち入り禁止区域から出て行きましょうか。わたしが案内するわ。」

エミリアは二人を移動するように促した。

「ジル、大丈夫？」

「うん、大丈夫。なんだか……。」

ジリアンは涙をハンカチでぬぐったものの、とめどなくでてきて、涙がこぼれないように上を向いた。

レインはジリアンの肩を抱いて、引き寄せ、くっつきながら、歩いていった。

上を見上げたままのジリアンは、風で吹き飛ばされていく花びらが散っていく様をみていた。

第十二章 旅立ちのとき 7 (後書き)

BGM:「君に春を思う」メレンゲ

第十二章 旅立ちのとき 8 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>)

コーデイ⇨ヴェツキア(クルー。看護士)

デューク⇨ジュニア⇨デミスト(現グリーンオイル財団理事長)

セリーヌ⇨マルキナ(デューク⇨ジュニア⇨デミスト理事長の第六秘書)

エミリア⇨サンジョベーゼ(スカイロード上官育成学校1回生。皇女殿下のルームメイト)

スカイロード上官育成学校2回生

黒衣の民族

白髪の男(黒衣の民族)

第十二章 旅立ちのとき 8

第六秘書のセリーヌ・マルキナに案内されて、コーディは理事長デュークの部屋を訪ねた。

「失礼します。」

「入りなさい。」

デュークは応接セットのソファにすわり、向かいのソファに向かって、手を差し出し、コーディに座るように促した。

コーディは最初遠慮したのだが、秘書のセリーヌに促されて座った。

「クルーとしてやっていけそうかな。」

「ええ、もちろんです。」

「娘のセイラはいたく君を気に入っていたのだがね。」

「そうですね。でも、実の母親にはかありませんよ。代わりにはなれません。」

コーディは前理事長亡き後、デュークの屋敷で雇われたのだが、セイラがなついてしまい、母親のセシリアを嫌がるようになったので、コーディをクルーのメンバーに加えるよう言い出したのがセシリアだった。

コーディはこの話を承諾したのは、デュークの屋敷で雇われても、前理事長の死の真相をつかめることができないうと直感的におもったからで、その手段としてスカイエンジェルフィッシュ号のクルーになれば何かわかることがあるかもしれないと思ったからだ。

「ところで、コーディ。クレア先生とは信頼関係を持っているのかな。」

「もちろんです。信頼なくして医療に従事できません。」

「クレア先生は君に、スワン村へ言った話はしなかったかな。」

コーディは自分がここへ呼ばれた理由がスパイの役目をさせようということだとうすうすわわわっていた。

「いえ、聞いておりませんが。スワン村とはどういう村ですか。」
「コーデイは探りをいれるため、知らない振りしてデュークから聞き出そうとした。」

「いや、聞いてないのならいいんだよ。たいした村じゃない。都市伝説みたいなものなんだよ。」

「都市伝説？」

「医者や研究者がいきたがっている虜気楼みたいな神出鬼没な村だそう。そこにあるのにたどり着けない。」

「はあ、そんな村があるのですか。」

「ときに、そんな話がでてきたら、わたしに報せてほしいのだが。」

「コーデイはしばらく考え込んでいた。そして、拒否した。」

「先ほど、申し上げましたが、信頼なくして医療に従事できません。わたしにスパイするように言われるのでしたら、お断りします。」

「クレア先生に疑われるようなことをしたくないからです。あの方は鋭い方です。あの人をごまかして秘密の情報を手に入れようなんてできません。」

「コーデイに言われて、デュークはためいきをついた。」

「まあ、そういうことを言うだろうと予測はしていたよ。」

「口元で両手を握り締め、肘をテーブルにつき、視線をコーデイに向けた。」

「クレア先生は行動力の有る方だ。危険なことと承知の上で今回のことも引き受けてくれた。」

「もしかしてスワン村に行ったことがあるのではないかと思ってね。」

「できれば、スワン村の情報を得たいと思っているんだよ。」

「では直接お伺いされればよろしいのに。」

「そう簡単には話してはくれないだろう。」

「お役に立てなくて申し訳ないのですが、お話はそれで終わりでしょうか。」

「コーデイはソファから立ち上がるうとした。」

「そうだね。わたしからは特に、シリアン君のことをよろしく頼む。」

よ。」

「心得ました。」

「ジリアン君はスタンドフィールドファミリーとして自覚していて、反発はしていないようだね。」

「ええそうです。決して、自らファミリーから抜けるといようなことはないですね。」

「わかったよ。ありがとう。時間をとらせてすまないね。」

「いえ。」

コーデイは立ち上がると、そのまま、ドアに向かっていった。

「この慈善事業がひと段落したら、また、わたしの屋敷にもどってきてほしいね。」

「そのときがきましたら、お返事いたします。それでは、失礼させてもらいます。」

「無事を祈っているよ。」

デュークに言われて、コーデイはお辞儀をして、部屋を出て行った。

クレアとアルバートはスカイエンジェルフィッシュ号に荷物を入れる段取りをしていた。

デイゴとジョナサンは燃料や装備品を点検していた。

ロブとカスターは管制室で天気の間隔を確認しながら、航路を組んでいた。

レインとジリアンは搭乗服をきていて、パジエロブルーの点検をしていた。

ジリアンが操縦席に乗り込んで、点検をつづけ、レインは外部を点検し終わり、操縦席に整備されているものを確認していた。

研究所の作業員は一通り点検が終わっていたので、休憩に入っていた。

パジエロブルーのそばには、スカイロード上官育成学校の誘導部隊のエアジェットがあり、エミリアと学生たちが装備点検を繰り返していた。

学生の一人がパジェロブルーに好奇心をお持ち、近づいて、眺めていた。

「これ、すごいなあ。翼がダイヤモンドコーティング仕様じゃないか。」

エミリアはその言葉が気になって、パジェロブルーに近づいた。

そして、その学生とこっそり話をした。

「先輩、ダイヤモンドコーティングって、攻撃されても傷がつかない仕様ということですよね。」

医療目的の慈善事業の空挺がこのような仕様のエアジェットが必要とは思えないのですが。」

「整備技師から、聞いたんだが、このエアジェットは試供品みたいなものだという話さ。」

そついわれても、半信半疑だったエミリアはレインのいるところまで近づいた。

「なかなかいい装備をしたエアジェットね。デザインも斬新だし。」

「そうですね。試作品だという話ですが、僕たちはエアジェットに乗れるだけでも夢のような感じなのです。」

「飛行訓練はこなしているでしょう。」

「ええ、でもこのパジェロブルーで飛行訓練するのが始めてでしかも、僕はここにきて、乗れるようになったんです。」

僕より倍以上飛行訓練しているジリアンがメインで操縦します。」

「短期間の飛行訓練なのね。パジェロブルーって言う名前がついているなんて、名前にふさわしいエアジェットね。」

レインはエミリアと会話ができて、嬉しかった。

エミリアはレインに話しかけながら、操縦席を覗き込み、装備されているものをチェックしていた。

操縦席の後ろ上についてある輪に見覚えがあった。

一回生ではアクロバット飛行についての訓練がないのだが、黒衣の民族が得意とする攻撃がアクロバット飛行なので2回生から訓練しエアジェットがその仕様になっていた。

（黒衣の民族からの攻撃されることが前提のエアジェットじゃないの。どうしてそんな危惧するような装備しているのかしら。しかも少年二人が乗りこなすのに。）

エミリアは不思議に思っていた。

もうひとりの学生はジリアンと会話をしていた。

整備工場に響き渡り声がした。

「ジリアンというガキはどこだあ。」

声がかかるほうへみんなが顔を向けると、そこには、黒ずくめの男がふたり、エアジェットのほうへ向かって歩いてきていた。

様子がおかしいので、ジリアンと話をしていた学生はジリアンに隠れているように言った。

すると銃声が鳴り響いた。

男が上に向かって銃を放ったからだ。

その場にいたものは、一斉にしゃがんで身を隠した。

「ジリアンというガキがいるだろう、出て来い。」

レインはスタンガンの入ったホルスターを尻の方へ移動させて立ち上がり、男たちの方へ向かっていった。

「レイン君、出ちゃだめ。」

エミリアがレインに声をかけたが、レインは聞き入れなかった。

男たちはレインのほうを向いた。

「僕がジリアンだ。」

男たちの一人がレインに近づいたうえに、レインの前髪を掴んだ。

「お前はジリアンじゃない。」

レインが男を睨み返すと、男は掴んだ髪の毛を後ろにひっぱった。

「ジリアンというガキは金髪なんだよ。」

それをわかって、どうして探しているんだろうとおもいながら、レインは手を後ろに回しスタンガンを手にとって、スイッチをいれ、

男の腹めがけてついた。

「うわあ。」

男はスタンガンの攻撃を受けて、倒れこみ失神した。

もう一人の男が銃を構えて、レインを狙ったが、エミリアがパジェロブルーを盾にして、銃をはなち、腕を狙いうちしたので、男は銃を落とした。

レインはその男めがけて頭でつつこんでいった。

「わあゝ。」

打たれた男はレインに突進されて倒れこんだ。

レインは尽かさず、自分のおでこで相手のおでこに頭突きをして、男は失神した。

失神した男の髪に血がついているのをみて、自分の頭を触って手を見たら、血がついているのに気がついた。

頭突きをしたときについたのではなくて、男が首から提げているペングントがナイフのような飾りだったため、突進したときレインの頭に傷がついた様子だった。

「レイン君、無茶はしないで。」

エミリアは大きな声でレインに言って近づこうとした。

そのとき、銃声が轟いた。

「おいおい。役立たず野郎共だな。」

白髪ロングの黒ずくめの男が銃を持って現れた。

男はエミリアめがけて銃を向けた。

「そこから動くなよ。お嬢ちゃん。」

学生のひとりが銃を持って現れ、その男に向けて撃ったが、命中しなかった。

男はその学生を狙い撃ちし、学生は右肩を打たれて倒れこんだ。

「うわあ。」

「先輩。」

「動くなといたただろう。後ろを見るよ。」

男が銃で後ろをさすと、男の後方には、皇女フェリシアが毛布にくるまれたライラを抱いて立っていて、そのそばには黒ずくめの男が銃をフェリシアに向けていた。

「お疲れで眠っている赤ん坊と皇女を撃ち殺すつもりはないが、お

前たちが言うこと聞かなかったら、怪我させることぐらいはするぞ。」
白髪の男は、レインのそばまでやってきた。レインはその男をにらめつけていた。

「オンナみてえな顔してるな。油断したんだろうな、この馬鹿は。」
男は倒れこんだ黒ずくめの男の体を蹴りこんだ。

そして、その足で、レインの顔めがけて蹴りをいれた。

「ぐはぁ。」

レインはその男の蹴りを食らうと倒れ、頭部を打ち付けた様子で気をうしなつた。

「レイン君！」

エミリアはレインに駆け寄ろうとしたが、男に制止された。

「ジリアンはどこだ。」

エミリアは無言だった。男はレインに銃を向けた。

「言わないとこいつを殺すぞ。」

「脅しには屈しないわ。」

エミリアは男を睨み返した。

「お〜い。ジリアン。どこかにいるんだろう。こいつを殺されたくなかつた、出て来いよ。」

恐怖に震えていたジリアンだったが、レインが撃たれると聞いて、操縦席から立ち上がった。

「僕はここだよ。」

震える声で返事をした。

「ちょうどいいところにいるじゃないか。」

その様子を見ていて、フェリシアは憤っていた。

「あなたたちの目的は何なの！」

男は笑い出した。

「あはははは。このときを待っていたのさ。ロブって言う男を絶望のどんぞりに突き落とすことが俺の目的だ。」
ジリアンは背筋に寒気を感じた。

「ジリアン君をどうするつもりなの。」
エミリアは言った。

「どうするかをここで話したら、おもしろくないだろ。ま、あえていうなら、俺の苦しみと同じ苦しみを味わってもらおうかなと。」
その言葉を聴いて、エミリアには理解できなかった。

男は、エミリアに銃を話すよう指示をし、エミリアは銃を置いた。

「ジリアン、そのエアジェットの発進準備をするんだ。勝手に飛んだりなんかしたら、このガキとか皇女がどうなるかわかるな。」
ジリアンは恐る恐るうなづき、席に座りこんで準備を始めた。

エミリアはレインのほうへ、近づいた。

「動くなといったらう。」

「この子の血止めだけさせてちょうだい。」

どうせ殺すつもりだと思いながらも、男は好きにさせた。

エミリアはレインに近づき、首筋の脈を手にとり、確認し、自分の膝にレインの頭を乗せた。

首に巻いていたスカイブルーのスカーフをはずし、それをレインの頭をもちあげてきつく巻きつけた。

そのきつさに、レインは意識をもどした。

「うう。」

「気がついた？レイン君。」

「あ、エミリアさん。」

はつきりと目が見えるとレインはエミリアの顔が至近距離にあることに驚いたと同時に自分がどうなっているか理解できていなかった。男にけられた顔はあかくふくれあがっていて、口の中が切れているのがわかった。

「手当てが終わったら、立ち上がるんだ。お嬢ちゃん。」

レインは蹴りをいれてきた男の顔が見えて、何があつたかを思い出した。

エミリアはレインをそっと起すと、その場で立ち上がった。

男はエミリアの首筋に銃をむけた。

「ジリアンのエアジェットに向かって歩け。」

「わかったわ。レイン君。無茶なことはしないでね。」

エミリアは首を皇女フェリシアにむけてレインに合図を送った。

レインはその様子を見て、フェリシアが銃を向けられていることを理解して、茫然としていた。

男はエミリアを前にして、パジエロブルーの方へ移動した。

エミリアをジリアンの後ろの操縦席に乗せて、男はその上に馬乗りするようにエミリアをまたぎ、銃をむけて操縦席のドアを閉めずにした。

ジリアンに向かって、発進するように支持をした。

ジリアンは仕方なく、発進させた。

パジエロブルーは前進していった。

そこへ、パジエロブルーの様子をみに、管制室から移動していたロブとカスターが現れ、状況を把握すると、皇女フェリシアに銃を向けている男を倒した。

「レイン、大丈夫か。」

パジエロブルーの様子をみていたレインはロブの声で後ろを振り返り、フェリシアが無事であることを確認すると、パジエロブルーめがけて走り出した。

「レイン、どうするつもりだ。」

ロブの叫びにレインは返事をしなかった。

エミリアに銃をむけた男はジリアンの方へ向いていて、レインがおいかけて走っているのが見えていなかった。

パジエロブルーはジェットエンジンをふかし、離陸し始めた。

レインはパジエロブルーの真下まで、近づくことができず車輪を掴むことができた。

それと同時にパジエロブルーのロケットエンジンが吹き、スピードが上がった。

レインは車輪をつかみ、自分の身をパジエロブルーの腹にしっかりとみっちやくさせた。

操縦席は防弾ガラスでできているので、下を覗けばレインが丸見えなのだが、エミリアの体で男はレインを確認できていなかった。パジェロブルーは、ジリアン、白髪の男、エミリア、車輪にしがみついたレインを乗せて、飛び立った。

第十二章 旅立ちのとき 8 (後書き)

BGM:「Vuelta Vista」
ジグ

第十二章 旅立ちのとき 9 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド（主人公・愛称レイニー）

ジリアン⇨スタンドフィールド（主人公の弟<従弟>・愛称ジル）

ロブ⇨スタンドフィールド（主人公の兄<実父>）

カスター⇨ペドロ（クルー。通信士。愛称キヤス）

クレア⇨ポーター（クルー。医者）

エミリア⇨サンジョベゼ（スカイロード上官育成学校1回生。皇女殿下のルームメイト）

フェリシア⇨デッドレイファス（皇帝の第一皇女。スカイロード上官育成学校・一回生。）

白髪の男（黒衣の民族）

第十二章 旅立ちのとき 9

カスターは通信機をつけたままだったので、管制室から通信が入った。

「SAF（スカイエンジェルフィッシュ号）クルーに告ぐ。軍部から通信あり。」

未確認のエアジェット機が研究所に向かって猛スピードで飛行中。軍の空挺が追尾しているものの追いつけない状況。

機体の特徴は赤い塗装の翼。」

カスターが管制室からの通信内容を読んだと、言った。

「レッドボード。黒衣の民族だ。」

「どうして、黒衣の民族がジリアンを酷い目にあわせるの！」
フェリシアが叫んだ。

ロボが声のするほうを向いて、そのとき、ようやく、人質にとられたのが皇女フェリシアであることを知った。

フェリシアから黒衣の民族の目的がジリアンであることを告げられて、ロボは思った。

（まさか。あいつが生きてるんじゃないだろうな。）

スカイエンジェルフィッシュ号で荷物の整理をしていたクリアは情報を聞きつけ管制室に向かっていった。

管制室にたどり着いたとき、パジエロブルーが黒衣の民族によってジリアンが人質にとられて飛行していることをクリアは知って驚愕した。

サイレンが鳴り、研究所全体に響き渡った。

エミリアは銃口を向けられて、そのことでジリアンが言いなりになっていることを何とかしなければいけないと考えていた。

「ジリアン君、わたしはどうなってもいいから、自分のことだけ考えて。」

ジリアンは後部操縦席がみえる鏡をちらりと見ながら、必死に操縦桿を握っていた。

「うるさいだまりな。お嬢ちゃん！」

白髪の男は、右足でエミリアの胸めがけてたたきつけた。

「げほっ」

エミリアは咳き込んだと同時に気を失った。

レインは、白髪の男の死角になるよう背中越しの方へ回り込んだ。操縦席は防弾ガラスにできているのだが、そのところどころに取っ手のようなものがついていていた。

その取っ手にしがみついて、移動していった。

レインは後ろに手を回し、スタンガンを取って、握りながら、白髪の男の背後からはがいじめにした。

「ぐう、なんだ。」

重心が右に傾き、白髪の男はのけぞった。

レインはスタンガンのスイッチが押せないまま、そのスタンガンで白髪の男の首にひっかけて、両側を両手で握り、それにぶらさがるように足が宙にういてしまった。

さらに重心が右に傾きそれが急激だったため、エミリアの体が動き、頭を操縦席の淵に打ち付けて、意識を取り戻した。

「うう。」

白髪の男はレインの体重で首をきつく絞められた状態で、パジエロブルーから落ちないように操縦席のガラスの淵を握っていた。

ジリアンは必死に操縦桿を握って左右のバランスを図っていた。

ジリアンの操縦で右に傾いていたのが水平にもどる感じがしたが、反動で左に傾いた。

宙に浮いてしまったレインの足はガラスの側面についたと同時に、レインはスタンガンのスイッチを入れることが出来た。

「ぐああ。」

白髪の男はもがいて、スタンガンの電気ショックに耐えていたが、ジリアンの方へ目をやったときに、赤いものがこちらに向かっ

るのが一瞬見えた。

白髪の男はレッドボードであることが直感的にわかった。

ジリアンは操縦桿を操作するのに必死だったので、レッドボードが近づいているのがわからなかった。

エミリアはようやくレインがいることに気がついた。

（無茶をしないでって言ったのに。）

エミリアがレインを助ける方法はないかと考えていたとき、白髪の男の口元がにやけているのが見えた。

白髪の男は、足をふんばり腰を操縦席の淵にもたれかけて、自分の両手を話スタンガンを持つレインの両手を掴んだ。

そして、白髪の男はレインの手を掴んだまま、反り返り、パジェロブルーの外へと上体を落とし込んだ。

「え！」

レインは思いも寄らない白髪の男の行動に驚き、男の重心が自分にかかってきて支えないと自分が落ちてしまうので必死にささえた。

男は両手に重心をかけて、足で操縦席をけり、回転してパジェロブルーから落下した。

必然的にレインも白髪の男と一緒に落下した。

「レイン！！！」

エミリアが操縦席から身を乗り出し、レインの足を掴もうとしたが、間に合わなかった。

レインと白髪の男はを上空で落下していった。

レインは驚きスタンガンを放してしまった。すると、白髪の男からも離れていった。

白髪の男はレッドボードが近づいているのを確認して、レインの体めがけて、けりこんだ。

突き放すためだった。

レインは風圧と蹴りで、白髪の男からさらに離れていった。

そして、その風圧のせいでレインの体は回転しつづけて、頭をきつく巻いていたはずのスクーフが取れてしまい、飛んでいってしまっ

た。

白髪の男を確認したレッドボードのパイロットは白髪の男が着地しやすいように旋回していた。

白髪の男はタイミングよくレッドボードの翼に着地した。

（金髪じゃないガキはたしかロボの息子だったはずだな。ジリアンはだめだったが、これであのガキはペシャンコだ。ロボが絶望するだろう。）

エミリアは操縦席から身を乗り出して、レインの様子をみていたが、即座に自分の足を操縦席の固定させた。

ジリアンにむかって、立てた親指を下に向けて合図をした。

エミリアはアクロバットをしたことはなかったが、レインをたすけるためには、どんなことでもしなくてはいけないと思った。

ジリアンはエミリアが何をしようとしているかわからないわけではなかったが、思い通りにできるかどうか不安に思いながら操縦桿をにぎりしめた。

パジェロブルーは先端を下に向けて急速降下した。

エミリアはその速度と風圧が強くて両手を操縦席の淵にしがみつくのに必死だった。

一方レインは上空でパラシュートもつけずに落下していく様子に絶望していた。

（無茶をしてはいけないって言われたのに、何だよ、このざまは。

ジリアンを助けたとしても、何の策もなく自分があっさりと死んでしまったら、もう守ることもできないじゃないか。）

地上に背をむけて、大の字になり、できるだけ、落下の速度を遅くしようとしていた。

すると、そばを猛スピードでパジェロブルーが降下するのが見えて、風圧で自分の体がゆりかごのように揺らされた。

パジェロブルーはレインの下まで降下すると水平に体勢を整え、旋回していた。

エミリアは両手を操縦席の淵から離し、ゆっくりと立ち上がり、両

手を上に向かつて広げた。

ジリアンはレインのそばにパジェロブルーを寄せて、ゆっくりと、右のほうへ傾けた。

エミリアは傾いたタイミングでレインの手を掴み、腕を掴みかえ、引き寄せた。

ジリアンはミラー越しにその様子を確認しながら、右に傾けたものを水平にもどした。

パジェロブルーの傾きで、エミリアはレインを操縦席に引き込んだ。引き込んだ反動で、レインは頭を操縦席のドアに打ち付けて、気を失った。

「ああ！」

エミリアは叫んだが、レインはもう意識を失っていてわからなくなっていた。

ジリアンは安心すると涙がとまらなかった。涙で前方が見えなくなっていて、パジェロブルーを水平に飛行するだけで精一杯だった。

エミリアは足に固定させたものをはずし、レインを抱えたまま操縦席に座り込んだ。

レインをしっかりと抱きかかえて、エミリアも安心すると涙が止まらなかった。

「良かった。無事でよかった。ほんと良かった。」

エミリアは手をレインの頭に持つていき、頭を固定させようとした。しかし、手にぬるっとした感触があったので、レインの頭から手を離し目で確かめるとそれは血だった。

巻いていたスカーフが取れてしまい、操縦席に引き込む際に頭を打ち付けたので、傷口がまた開いてしまったのだ。

エミリアは自分のポケットからナイフを取り出し、胸元を開いて、白いものを少し引っ張り出すと、それをナイフで切り裂き、さらに引っ張り出した。

白い布を胸元から出すと、それをレインの頭に巻きつけた。

ジリアンはエミリアが何かしているのが見えていたけど、なにをし

ているのかがわからなかった。

エミリアは操縦席にあるレーダーを見ると、飛行物体が近づいているのがみえた。

肉眼で確認すると、それは軍部の空挺だった。

パジェロブルー上空を飛行していった。

ジリアンのヘッドセットの通信機にその軍部の空挺から通信が入った。

ジリアンは涙をぬぐって、涙を止めた。

第十二章 旅立ちのとき 9 (後書き)

BGM:「瞳の翼」access

第十二章 旅立ちのとき 10 (前書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー)

ジリアン⇨スタンドフィールド (主人公の弟<従弟>・愛称ジル)

クレア⇨ポーター (クルー。医者)

コーディ⇨ヴェツキア (クルー。看護師)

エミリア⇨サンジョベーゼ (スカイロード上官育成学校1回生。皇女殿下のルームメイト)

レインが目を覚ますと、そこはベッドの上だった。

「お、レイニー、目が覚めたかい。」

クレアがかけた言葉に、反応を示したものの、意識をはっきりとさせることができなかった。

しばらく、目を開けたり、閉じたりして、そして言葉を発することができなかった。

「まだ、無理かな。」

クレアの言葉もはつきりと聞こえなかった。眉間にしわを寄せて、自分がどうなったのか思い出そうとしたが、なかなか思いだせなかった。

目のはつきりと開くことができたとき、クレアを凝視し、近くに誰かいるのだが、誰なのかと考えていた。

クレアのそばにいたのは、コーディだったのだが、レインが思い出すのに時間がかかった。

思い出すことを諦めて、レインは目を閉じた。そして、眠りについた。

レインは再度目が覚めて、天井を眺めていた。ベッドがかすかに揺れているのを感じていたし、なにか振動するものとシンクロした音が聞こえていた。

横を向くと、白衣姿のクレアが後ろ向きに立っているのが見えた。そのそばに白い制服姿のコーディが横向きに立っていた。

コーディがレインの方に目が行き、レインが目覚めているのを知った。

そして、コーディがレインの方へ顔を向けると、クレアがその様子に気がついて、後ろを振り返った。

「お、レイニー、調子はどうだい。」

レインはようやく、自分になにが起きたのか思い出した様子で、頭

を触ろうとして手を動かそうとしたが、手はベッドの手すりに縛り付けられていた。

「ああ、ごめんごめん。今はずしてあげるよ。」

「わたしがします。」

コーデイがレインの腕に巻かれたものをほどいてやった。

「僕、どうなったんですか。あまりよく覚えてなくて。」

レインは上半身を起そうとしたが、コーデイが制止した。

「すぐにはよくならないので、寝てください。」

クレアは、レインのベッドのそばにあった椅子にすわった。

「レイニー、あんたはこのスカイエンジェルフィットシュ号の最初の患者だ。」

「え、ここはスカイエンジェルフィットシュ号ですか。」

「ああ、もう、研究所を出発してしまっただ。」

「そ、そんな。」

クレアはレインにことの顛末を話した。

パジェロブルーで帰還した後、レインは頭の傷の出血が激しく、止血を施す前に呼吸困難を起してしまい、緊急手術に入った。

呼吸困難になってしまった原因は背中の肋骨が折れていて肺に刺さってしまったからだ。

手術は成功したが、日程を遅らせるわけには行かず、そのまま、スカイエンジェルフィットシュ号に乗せて、回復させることになった。

その間、レインは麻酔でずっと眠らされていたのだ。

麻酔で眠らされていたのは呼吸器をつけていたからで、うまく言葉を発することができなかったのは呼吸器をはずして間がなかったからだだった。

エミリアは白髪の男に胸を蹴られてしまい、肋骨を折ってしまったていた。研究所の病院に入院して治るまでいることとなった。

派手な出発式を催すはできなかったなくなり、お忍びで着ていた皇帝と招待されて参加する予定だった皇女フェリシアはレインの手術を心配しながらも手術が終わる前に研究所を皇族専用機で発った。

セシリアはクルーに会うこともなく、セイラをつれて、研究所を去った。

理事長のデュークは後始末や結果報告に追われて、研究所に残った。「エミリアさんの様態はどうなのでしようか。」
レインはエミリアのことが気になって仕方なかった。

その様子にクレアは不憫に思ってた。
「全治3ヶ月かな。1ヶ月で退院した後、通院しながら学校に復帰するらしい。」

その後、コーデイが皇女フェリシアからの伝言を伝えた。
フェリシアがスカイロード上官育成学校に入学したのは、レテシアに憧れていたからだと言う話で、レテシアの息子であるレインの活躍を楽しみにしているということ。一刻も早い回復を祈っているとのことだった。

クレアは白衣のポケットから何を取り出し、レインに渡した。

「戦利品だ。」

レインが受け取った物を手にして見ると、それは赤茶けた布だった。「これは何ですか。」

「レイニーの頭に巻きつけられていたものなんだ。捨てようと思ったんだが、ジリアンから話を聞いて取っておいたんだ。」

クレアにそういわれても、何のことを言ってるかわからなかった。

「ジリアンが言うには、その布はエミリア上等兵が胸元に手を突っ込んで取り出したものらしい。」

ナイフで切り刻んでいたらしいがね。これ以上言わなくてもわかるだろう。」

レインはその様子を創造した。下着にしては、ぺらぺらな布なのだ。レイン自身、搭乗服を着たとき、下にTシャツを着たのを思い出していた。

「戦利品だろ。エミリア上等兵の肌に密着させていたものなんだからさ。」

クレアの言葉にレインは興奮気味に言った。

「僕は変態じゃありませんよ。」

コーデイはクレアに忠言した。

「戦利品って言い方は変ですよ、クレアさん。」

クレアは笑って言った。

「でもさ、エミリア上等兵との思い出の品なんだよ。」

そして、笑いを止めて、真面目な言い方をして言った。

「好きなんだろう、レイン。エミリア上等兵のことが。」

レインはその布を見つめて、躊躇したが、しばらく間をあけて言った。

「はい。好きです。」

クレアとコーデイは、微笑んだ。

「いい子だ。レイニー。その気持ちを大切にするんだ。」

クレアはレインがロブと同じじゃなくて良かったと心底そう思った。

「好きな異性がいることで、レイニー自身が命を大切にすることを自覚するんだ。」

いいかい、よくお聞き。またエミリア上等兵に会いたいという気持ちをもって、命を落としたりしないことなんだ。」

クレアの言葉にレインは大きくうなづいた。

「そうすることによって、僕はエミリアさんに答えていくんですね。僕、注意されていたんだ。無茶をしてはいけないって。こころにきざみつけておきます。」

レインは目を閉じた。まぶたにはエミリアの笑顔が映っていた。

一カ月後。

スカイロード上官育成学校、校長室にて、学生がひとり入室した。

「二回生のエミリア」サンジヨベーゼ上等兵です。」

校長はエミリアへソファに座るように支持をした。

エミリアはソファに歩み寄ろうとしたとき、校長室の書棚に飾られているトロフィのなかに、女性の写真が飾られているのが見えた。その写真をみて、エミリアはハツとして立ち止まった。

「どうかしたかね。」

「あ、いえ。失礼しました。」

「いや、かまわないが。君には任務を遂行したとはいえ大変な目に会わせてしまった。」

「学業も訓練もまだ間に合わない状態だというのに。」

「エミリアはソファに腰をかけた。」

「お父上も大変心配されている様子だった。申し訳なく思っている。」

「

「そのようなことは気になさらなくても、任務なのですから。」

「時に、君には婚約者がいるらしいね。」

「はい。親同士が決めた婚約ですが。」

「お父上も君の事を案じて、決めたことだろう。嫁入り前の娘に傷をつけてしまうのはこころが痛んで仕方ないがね。」

「わたくしは、国家のために自分ができることはないかとそのことを求めてこの学校に入学しました。」

「そのことは父も快く思っていたはずです。」

「しかし、それは兄君が健在だということが前提だろう。」

「親子の話から別の話しに切り替えようと、エミリアは自身で得たこの任務の意味を校長に語った。」

「エミリア自身が知らない軍部の情勢や研究所の必然性、スタンドフイールドックの存在、国家の安全の状態など、いろんな意味で勉強になったことを語った。」

「学年を進級したのですから、一刻も早く病状を完治させて、勉学や訓練に追従したく思っております。」

「まあ、あまり、事を急いで、仕損じることもあるまい。気に病まないように。」

「温かい言葉をいただきありがとうございます。」

「エミリアは立ち上がって、深く礼をした。」

「つかぬことをお伺いしますが。」

「何だね。」

「あの写真の女性はどいう方でしょうか。」

エミリアは書棚の女性の写真を指差して校長に尋ねた。

「レテシア・ハートランド少尉だね。」

エミリアはその名に覚えがあった。皇女フェリシアが憧れているパイロットの名だった。

「その写真は我が校を卒業したときのもので、優秀な生徒だったが、事故が起きて怪我をしましてね。」

その後いろいろあったが、復学してきちんと卒業をしたんだ。事故がおきてしまった戒めに写真を飾ったあるんだよ。

優秀な生徒を事故で怪我をさせないためにね。」

満面の笑顔で映った写真を見て、エミリアはレインの笑顔思い出していた。

エミリアは校長に皇女フェリシアが憧れているパイロットがレテシアである事を話した。

「わたしもそのような女性パイロットになりたいと思います。」

人の心に笑顔を残し、勇気を与えられるような。」

校長は微笑んで大きくうなづいた。

「君の活躍を楽しみにしているよ。」

エミリアは深くお辞儀をして、校長室を退室した。

レインはベッドでの寝たきり状態から回復したとはいえ、以前のようには動き回るほど回復はしていなかった。

コーデイに指示を仰ぎ、筋肉トレーニングをしながら、リハビリしていた。

パジェロブルーではジリアンが操縦して出勤する場合とアルバートやロブが操縦して出勤する場合があった。

出勤しないときのジリアンは、空挺の眺望台にいた。

そして、手にした写真を眺めていた。

その写真はコーデイとセイラが写っていた。

コーデイはジリアンに言った。

「隠しておくつもりはなかったのですが、会うまで実感がわかないものだろうと思っていたので敢えていわなかったのですよ。」
セイラの存在をジリアンに言わなかったことをコーデイは謝った。
ジリアンは気にしないしてほしいと言ったが、コーデイは一枚の写真を差し出した。

「良かったら、差し上げます。わたしが映っているものですが。」
ジリアンは躊躇したが、内心嬉しかった。

セイラが満面の笑みでコーデイに抱かれていたからだった。

ジリアンはコーデイの言葉に甘えて、その写真を受け取った。

その写真をジリアンは肌身離さず持って、いつかはセシリアのことを許せる時が来るのだろうかと考えた。

ジリアンには、白髪の男がロブを憎んでいる事情を知らないが、理解するときがくるのだろうかとも考えていた。

そして、憎しみは悲しみを生み出すだけで、幸せや笑顔を生み出さないことをジリアンは思っていた。

（だから、僕は、レイニーは、ロブ兄さんや、みんなは旅をするの
だろう。）

そして、スカイエンジェルフィッシュ号はクルーたちの思いを乗せて、空をゆく。

第十二章 旅立ちのとき 10 (後書き)

BGM:「human」サカナクション

第十三章 手紙と贈り物 1

レテシア・ママへ

ママが心配していると思うから、手紙を書くよ。

僕は肋骨が折れて肺に刺さってしまい、呼吸困難を起し、手術をうけたんだ。

手術はクレアさんのおかげで成功したし、順調に回復して、今は元気にしているよ。

まだ、パジェロブルーには乗れないけど、ジリアンと二人で空を飛べるように早くなりたい。

書きたいこと、伝えたいことはたくさんあるはずなのに、思うように書けないんだ。

書いているこれはもう何度も書き直したものだ。

ママの事をすべては思い出せない。僕がまだ幼かったからだと思うけど。

僕が覚えているママのことは、ホーネットの機体に乗せてもらったこと。

ものすごく太陽に近いところでいて、僕はものすごく興奮していた。僕の小さな手がママの腕を強く握っていた。

僕はずっと自分で空を飛びたいって思っていたんだ。

そのことで、なんか焦っていたんだ。なぜだろうなんて考えたこともなかった。

今ならわかるよ。僕はママに会いたいと思っていたんだって。

いつか会えるって僕は思っている。

レインより

「やっと、書けた。」

レインが小さなテーブルにかがみこんでいた姿勢から体を起し、振り返って背中を伸ばした。

そばにはジリアンがいて、手には手紙を1通握っていた。

短い文章だとジリアンにはなじられてしまったが、レインは何度も書き直したのもうこれ以上書くことはできないと言った。

レインはレテシアを思い出そうとしても思い出せないし、どんなママなのか想像もつかなかったからだ。

それだけに手紙を書くのはこれが精一杯だった。

レインの手術中に皇帝が皇女フェリシアとともにロブに会いに来た。フェリシアが自分の責任でレインが命の危険を冒すことになったと嘆いていたからだ。

慰めるには、手術中とはいえ、様子を伺いに行くしかないと思い、皇帝は連れてきた。

ロブは不憫に思い、フェリシアに声をかけた。

「あなたの責任ではありません。未熟者で任務につけられるような状態ではなかったのに、こういうことが想定できなかった、わたしの責任です。」

ロブはやりきれない気持ちを押しさえ込み、自分の考えの甘さを痛感していた。

やつれて覇気のないロブをみて、皇帝は思惑がうまくいかなかったことを残念に思った。

「ロブ、わたしは君たちの門出を祝いたくて、隠密でここに来たのだ。」

こんなことになって非常に残念だ。君たちの晴れの舞台に祝いの品を用意していて、わたしの思いが通じたかどうか確かめたい気持ちがあったのだよ。」

皇帝の言いたかったことが理解できないわけではなかったが、ロブは返答できなかった。

ロブの状態を察して、皇帝はフェリシアの手を引き、その場を去ろうとした。

フェリシアは、レインに伝えてほしいと、レテシアのことを述べ、一刻も早い回復を祈っていると言葉を続け、ロブの手を握って泣き

崩れた。

皇帝はフェリシアの両肩を抱いて、立ち去ることを促した。

ロブに背中を見せながらも、振り返り、フェリシアは皇帝に肩を抱かれて歩みを進めた。

ロブはその様子を見送ってから、壁に向かって頭を打ち付けた。そばにはコーデイが立っていて、その時にようやく気がついた。

「皇女殿下のお言葉は私から伝えておきますね。レインさんは大丈夫ですよ、不死身のロブさんの息子さんじゃないですか。」
コーデイは笑顔でロブに話しかけた。

「ありがとう。クレアさんのほかにコーデイがいてくれたことに感謝するよ。」

ロブは2度命を落としかけていた。

黒衣の民族に襲撃されてアレキサンダー号が墜落した時、クレアとスワン村にブルボードで向かい黒衣の民族と接触してしまい交戦し谷底に落ちそうになった時。

その度ごとに大怪我をしたが、命をとりとめ回復し、今に至る。

昔から、アレックスの加護があるといわれていて、レインの手術の際はそれを願った。

これから先、レインだけじゃなくジリアンも、命の危険にさらされ、大怪我するような事態になることがあるのだから、そのたびごとにハラハラして気を揉んでも仕方ない。

ロブの思いは、レインが回復したときに褒めてあげようと、そしてレテシアに会うまで無事でいてほしいと伝えたいということだった。手術は成功し、クレアが手術室から出て、ロブに声をかけた。

「レテシアが丈夫な子に産んでくれたことに感謝しなさいね。」
手術に取り掛かった頃にはレインの容態は芳しくなかった。
クレアはレインの生命力の強さに賭けた。

このまま死ぬような奴じゃないだろうと願いを込めて執刀に当たったが、幾度となく心臓が止まることがあった。
最終的に持ちこたえてくれたことに安堵した。

ロブには手術の仔細を話し、これから先の事をどうするか話し合った。

理事長の第六秘書・セリーヌ・マルキが様子を伺いに来た。

日程的な調整に、クレアはロブに提案をした。

レインをこのままSAF（スカイエンジェルフィッシュ号）に乗せて、術後の回復を空挺内で診るということだった。

レインに麻酔薬を投与し、目覚めさせないようにして、体力温存するかたちでSAFに搬入させた。

その間、ジリアンはエミリア上等兵の容態を心配して伺いに行っていた。

エミリアは手術をしなかったものの、絶対安静の状態だったので、麻酔でしばらく眠らされていた。

ジリアンはエミリアと会話することなく、その場から立ち去った。

ジリアンは自分の無力さを実感したと同時に無責任な行動しないことを決意した。

非力さゆえに、防御する方法は自分の身を案じ、他の人に迷惑や心配かけないようにすることだと。

そして、レインにできないことを自分がしようと考えた。

レインが思いつきもしないこと、それがレテシアに手紙を書くことだと。

ジリアンはプラナーナに手紙を書いていたが、レインは誰にも手紙を書こうとしていなかった。

書くきっかけになったのは、とある給油所のできごとだった。

SAFは空挺内でグリーンオイルを精製することができる設備が整っていたが、電気供給も兼ねていたので、あっという間に底がついた飛行中の近辺で給油することになり、レインはパジエロブルーに乗れない代わりにグリーンオイルの精製する担当をされていて、責任者となつて行動していた。

「あれ、レテシア少尉じゃないよね。」

知らない土地で会う人物はもちろん知らない人である。

その知らない人がレインをみてこう言ってレテシアと勘違いした。

「レテシア少尉に娘さんがいるって言ってたかなあ。」

その言葉にレインは怒りを覚えた。

「ぼ、僕は男です。女の子じゃありません。」

「お、そりゃ残念。」

あつげらかんと給油所の担当者に言われてしまい、レインは返す言葉がでなかった。

「レテシア少尉がここにいるわけないか。グリーンエメラルダ号だもんな。」

「あのお、グリーンエメラルダ号はここによく来るのですか。」

「ああ、つい先日も着てたよ。」

「いつごろですか。」

「10日前かな。」

レインは、レテシアに会える日がまじかにあるかもしれないと考えていた。

その様子をそばで見ていたジリアンが、レインに提案をしたのだ。

「レイニー、レテシアさんに手紙を書いてみない？」

「え、どうして、そんな、よく覚えてないのに……。」

そこへクレアが援護してくれた。

「SAFの出発式のこととは知っていたわけだし、襲撃されてレインが傷を負ったことくらいの記事は届いているはずだから、心配していると思うから、書いてみれば？」

「そつだよ、とりあえず書いてみようよ。」

レインはクレアとジリアンに促されて、手紙を書くことにしたのだ。

第十三章 手紙と贈り物 2

「あ~~~~~」

カスターが妙な声を発した。

「クツクツクウク、レレレレレレ、アアアアア~~~~~、さん」

ロブが壊れたスピーカーのように叫んだ。

驚きのあまり口をあけたままの二人を横目に、クレアの姿は膝下まで丈のある白衣のなかには白いパンティしかはいておらず、胸は乳輪が見えない程度にはだけている。

（良い物を見させてもらった。これがSAFのクルーの役得か。）
カスターは見えている目を疑いながらもこころに思った。

ロブはあたりに布かなにかないか探して、無いのに気がついて上着を脱ごうとした。

しかし、ロブの後ろからコーデイがバスタオルを持って、やってきた。

「クレアさん。年頃の男の子がいるのですから、節度つてものをわきまえてくださいってお願いしたじゃないですか。」

コーデイは持ってきたバスタオルをクレアの肩にかけ、上半身をくるんだ。

「悪い、いつもの通りにしていて、寝起きは意識がはっきりしてなくてわかんないんだよ。」

クレアの寝起きが悪いのは、ロブも知っていた。

しかし、半裸で動き回ることもなくて、見たこともなかった。

「か、勘弁してください、クレアさん。」

「はあ、オンナの裸なんて、見慣れているんじゃないのか、ロブ。」

「馬鹿なことを言わないでください。」

カスターは鼻の下を伸ばし、二人の会話をニヤつきながら、聞いていた。

そしてカスターは、手を合わせて拝むようにして、言った。

「こんな日がたびたび続きますように。」

ロブは憤慨して、クレアに嘔み付いて言った。

「クレアさん、寝起きが悪いからって半裸になるっていうのはおかしいでしょう。」

「そうかなあ。」

「はあ。どうして、半裸になってるんですか。」

「さあな。」

クレアはロブを疎ましく思って、その場から立ち去ろうとしていた。その様子にコーデイが仕方なく理由を話した。

昨日、アルバートをパジエロブルーに乗せて、クレアは山村の救命救助に向かった。

その際、いつものアルバートだとうだつがあがらなかったため、クレアはアルバートを殴り倒して、危ないアルバートの人格を呼び出した。

危険を顧みないアルバートの人格が出てきて、岩肌が迫る山間を抜けパジエロブルーを操縦した。

無事救命救助をして帰還したものの、危ないままのアルバートがレインとジリアンにちよっかいをかけてくるので、診療室にアルバートとクレアはふたりつきりになってこもった。

クレアが半裸になってアルバートを抱きしめ、人肌のぬくもりを与えることで、女性の人格であるアリが出てくる。

アリの人格で睡眠をとることではらくして普段出てくるアルバートになるという。こうやって、クレアはアルバートの人格入れ替えスイッチを使いこなしていた。

その話を聞いてロブとカスターは驚愕した。

（怖すぎるよ、クレアさん）

ロブはこころでつぶやいた。

（なんか、酷すぎる。）

カスターは自分の身におなじことが起きるのではないかと恐怖を感じ

じた。

ジリアンは操縦室でリーダーを覗きこみながら、天気図を描いていた。その天気図は1時間後の天気予想だった。

進行方向の気圧や風圧を予測して、航路をシュミレーションしていた。

デイゴは同じく操縦室にいて、自動操縦にしていた。操縦桿を視界に入れておいて、ジリアンの様子を見ていた。

ジリアンは手元に日程表・行程表などを並べて、距離・オイル消費など、計算していた。

デイゴはその様子を、フレッドの姿で重ねてみていた。

（いまのジリアンの姿がみられなくて残念だろうが、ロブはがんばってお前の代わりをしているぞ。）

レインは、空挺の眺望台にいた。

ポケットから、クレアに手渡されたエミリアの思い出の品を取り出した。

自分の血でにじんだ布の切れ端。

必死になって、レインの頭に巻きつけるエミリアの様子を想像していた。

布を手でギュッとにぎって、目を閉じた。

「会いたい。」

レインはレテシアに手紙を書いたが、エミリアに手紙を書かなかったことをちよつと後悔した。

手紙を書いたところで返事がもらえなかったら、どうしようと思いながらも悦に浸っていた。

エミリアは回復して空挺実地訓練の実習に加わっていた。

皇女フェリシアは生徒でありながらも皇族であるがゆえに、一人で実習に参加することができなかった。

エミリアが実習に復帰することでフェリシアも実習することができ

るのだが、その間、他の生徒より体力が劣っていたので筋肉トレーニングをリハビリ目的のトレーニングをしていたエミリアと一緒にやってきた。

「エミリアがもどってくれたことでやっと実習ができるわ。他の人より遅れた分をとりもどしましょうね。」

「ええ、そうね。フェリシアには操縦をメインに訓練していかなくちゃいけないわね。がんばるわ。」

ふたりは実習に入る前に機体の整備をしていた。

フェリシアはエミリアのいない時期に徹底して機体の整備に勉強をした。

それはレインがスタンドフィールドドックの一員だということを知って、整備の勉強も必要だと思い始めたからだった。

「フェリシア、わたしのいない間にずいぶんと物知りになっているわね。どのような心境の変化があったのかしら。知りたいわ。」

「たいしたことではないわ。父にはスカイロードで学べるものはきちんと身につけておきなさいって言われてて、よくレテシアさんの話を聞かされたのだけれど、万全の準備を施してこそ安心して空を飛び自分の安全を守ることにつながるって言うことをね。」

整備をしながらエミリアはレインのことをふと思い出した。

レインの体は回復したのかしらと。

「ねえ、エミリア。」

「なあに。」

「レテシア少尉の息子さんがレインだって知っていたかしら?」

「そうなのね。そっくりだと思っただけだ。」

「レテシア少尉を知っていたの?」

「フェリシアから話を聞いていたから、ひよっと思っただけ。校長室に写真が飾られていたのがレインにそっくりだったから。」

「あら、そうなのね。そういう写真があったのね。気がつかなかったわ。」

「とても素敵な笑顔で少女のような女性だったわ。」

「今も変わらない様子なのよ。年を取らない女性って感じなの。」
「素敵なことね。でも、命かけて航空士として任務についでいるの
でしょう。どうしたら、そのような女性になれるのかしら。」
「わたしも知りたいわ。」
「そうだわ、父から聞いたのだけれど、レインの傷は回復していて、
SAFに元気でがんばっているそうよ。」
「そう、良かったわ。心配していたの。命に別状はないって知って
から、早期回復を祈ってはいたのだけど。」
「あのときの出来事は一生忘れられない体験だったわ。」
「そうね。ねえ、レインに手紙を書いてみない？回復したお祝いに
贈り物をしたいと思っていたの。」
「いいわね。そうしましょう。」
「なにがいいかしら。」
ふたりは機体の整備で顔や作業服を汚して黒々とさせながら、笑顔
で会話していた。

グリーンエメラルダ号の眺望台に一人の女性がいた。
ウェーブがかかった栗色の髪は肩に届かない程度の長さで、太陽の
光をあびて時々金色のきらめきを放っていた。
白い肌を高潮させて、大きな丸い目で遠くを見つめていた。
首にはスカイブルー色のスカーフが巻かれており、そのスカーフの
端を指でいじって考え事をしていた。
（いつか会えるかしら。どのくらい大きくなったかしら。写真くら
いくれてもいいのに。）
彼女のパンツの後ろのポケットには手紙が差し込んであった。
その女性はレインの母親であるレテシア・ハートランドだ。
レインからの手紙をもらい、読んで、ところが暖かくなっていた。
グリーンエメラルダ号は雲海の上を飛行していた。
レテシアは今すぐにでもエアジェットに乗り込んでレインに会いに
行きたいと思っていた。

いままで、会おうとしなかったのは、レインがレテシアを覚えていないということを知っていたからだだった。

会えば忘れ去られていることを目の当たりにして、分かれてしまった事を後悔するばかりではなく、それまで努力してきたことも悔いてしまうだろうと辛くなってしまうからだ。

レテシアはレテシアで、レインの事を、ロブの事を、思い続けて、自分にできることはして行こうと努力してきた。

それはグリーンエメラルダ号で航空士として搭乗する任務だけではないことだった。

レテシアの胸に秘めた思いは、一人を除いて誰も知る由もない。

レインとジリアンは、SAF（スカイエンジンジェルフィッシュ号）のエンジンルームにいた。

エンジン技師のジョナサンと一緒にいて、エンジンの様子をみていた。

ジョナサンはグリーンオイルのタンクをのぞきこんで、ポケットから、黄色い液体が入った瓶を取り出した。

そして、またポケットからスポイトを取り出して、瓶のふたを開け、スポイトをいれて液体を吸い取った。

その様子をレインとジリアンは無言で見ていた。

「この液体は、グリーンオイルを活性化させるもので、研究所での試験段階だが、効能に確証があるんだ。」

レインとジリアンのふたりは「へえ」と興味していた。

「ふたりともおいで、垂らすところを見ると一目瞭然だよ。」

ふたりは脚立を持ち出してきて、タンクにかけて、あがった。

覗き込むと、グリーンオイルのさわやかなツンとしたニオイがした。ジョナサンが黄色い液体をグリーンオイルに垂らすと、落ちた地点が黄色になって波紋していくと、グリーンオイルが光を放って輝いているように見えた。

「うわあ、ほんとだ。」

感嘆をあげるふたりを横目に、ジョナサンはさらに数的液体を垂らした。

「活性化させることによって、グリーンオイルはパワーアップするの？」

ジリアンがジョナサンに質問をした。

「いや、違うよ。長持ちするんだ。液体自体はタンクの中で成長を止められて、燃烧するのを待つ状態だから、その時間を利用して踏ん張らせて持続させる粘りを作らせるんだ。」

黄色い液体を垂らされてグリーンオイルは黄緑に変化したものの、しばらくすると緑色に戻った。

そして、何かしら水っぽいニオイがしてきた。

「なんか、ニオイが変わった感じがするよ。」

レインは目を輝かせながら、言葉を口にした。

「グリーンオイルが生きている証拠だ。息を吹き返しているように思えないか。」

「うん。」

ふたりは笑顔で返事をした。

ジヨナサンは、タンクから降りると、黄色い液体とスポイトを箱に閉まった。

「研究所では、グリーンオイル以外にいろんな研究をしているんですよ。」

レインは脚立から降りて、あたりを見回した。

「そうだ。グリーンオイルの利用を模索して研究している。電力もそのひとつだし、薬にも利用しようとしている。」

ジヨナサンは、ふたりに、研究所でしていた仕事の内容を話した。

ふたりは目を輝かせて、聞き入った。

ひととおり、口にした後、ジヨナサンはレインに言った。

「クレアさんから、聞いたけど、レインはレテシア「ハートランド」の息子なんだな。」

急に話したので、虚をつかれたレインだったが、「そうです。」と答えた。

続けて、「知っているんですか。」と言った。

「知っているも、なにも、俺は軍から研究所に引き抜かれたエンジン技師だからな。」

ホーネット・クルーは、俺にとっても、大事な逸材の集団で、彼らが自慢の機体を操縦して飛行するところを楽しみにしていたんだ。」

「俺にとってもって……。」

「ホーネット・クルーは皇族専用機を操縦するパイロット集団だけ」

らね。皇帝自身がお気に入りで集めた逸材なんだよ。」

ジリアンは、ジヨナサンの言葉をこころにひっつけた。

「皇帝自身がお気に入りで……。」

ジヨナサンは話を続けた。

ホーネット・クルーは有能な航空士の集団だったのが、現皇帝によって、お気に入りで集められた逸材になった。

そのなかで特徴的だったのが、レテシア「ハートランド」だった。

スカイロード上官育成学校ですでに優秀な生徒だと軍の間でも話題にのぼったが、事故があつて入隊が見送られ、レテシアの存在は伝説と化していた。

何年か後に、ホーネットクルーへ入隊になって、話題にのぼったものの、レテシアが除隊してしまい、皇帝がいちばん落胆したとの噂がひろまった。

その後、ホーネットクルーは解散してしまつたが、軍管轄だったエメラルドグリーン号がハートランド艦長の私物化していたので、レテシアは復職に至つたという。

「俺のレテシアとの関わり合いは、パジエロブルーだな。」

「パジエロブルー？」

レインとジリアンのふたりの言葉が合つてしまつた。

「ああ、パジエロブルーはレテシアの原案によるものなんだ。」

「ええ!!！」

レインは驚いた。思いもよらなかつたからだ。

ジヨナサンが軍にいたとき、機体のデザインをホーネットクルーに書かせたとき、設計士がレテシアのデザインを「こんなもの、絶対無理だ。」と破棄しようとした。

ジヨナサンはそれを見て、面白いと思い、保管しておいた。

その後、皇帝がレテシアのデザインした話を聞きつけて、拝見したいと命じてきた。

うるたえた設計士はあわてて、自分で書いたものを出そうとしたが、ジヨナサンが保管していたものを差し出して、事なきを得た。

その後、グリーンオイル財団研究所で、その原案を元に起した設計図を見るまで忘れていたのだが、つけられた機体の名前が「パジエロブルー」だったので、レテシアの原案であることを思い出したのだという。

「じゃあ、パジエロブルーはレテシアママが考えた機体で、それを作らせたのは皇帝っていうことなの？」

「そうだね。皇帝が財団理事長に要請して作らせた可能性が大きいと思う。」

後からコーデイから聞いたんだけど、出発式にはお忍びで皇帝がいらしていたんだろ。

俺は知らなかったからなあ。パジエロブルーを見たかったんだと思うな。」

ジリアンは複雑な思いで聞いていた。

皇女殿下は皇帝の亡くなられた皇后の娘で、レインより先に生まれているから、皇后が亡くなられてから、皇帝はレテシアの事を・・・

レインも複雑な思いで聞いていた。

（ええ？レテシアママとロブ兄さんが別れたのって、皇帝が原因なわけ？）

二人のいぶかしげな顔を見て、ジヨナサンはまずい話をしたのかと勘ぐった。

「いやあ、しかし、ホーネットクルーにいたるとき、レテシアがスタンドフィールドの若い男と交際している噂があつたんだが、本当の話だつたんだな。」

「ジヨナサン、聞いていい？」

レインは真面目な顔をして言った。

「皇帝が一般の人と結婚できることってあるの？」

「はあ?!」

ジヨナサンは最初レインの言った言葉の意味がわからなかったが、しばらくして、意図がつかめた。

「いやいや、それはないよ。えっと、レテシアが皇帝と結婚つてこ
とだろ。」

ふたりはジヨナサンの顔をまじまじと見つめてうなづいた。

「ホーネットクルーを除隊した後、しばらくして、キース〓ロック
フォードと噂になってな。」

皇帝は失恋したんだという話してもちきりだったよ。」

「キース〓ロックフォードって？」

「知らないか。ロックフォード・ファミリーってアクロバット飛行
のショーをする有名なスタントマンだ。」

レテシアがファミリーとしてパイロットをしていたんだよ。アイド
ルとしてモテはやされたんだ。」

「へえ〜」

ふたりはそう言ったものの、なにか腑に落ちなかった。

（え、レテシアママって、男にモテモテで、危ない女性だったのか
な。）

レインは次第に暗い顔になった。

それをみたジヨナサンはあわてて、否定する話をしだした。

「いやあ、キース〓ロックフォードがメディアにむけて、レテシア
との交際を全面で否定していたんだけどね。」

ほら、世間というか、人の口には戸をたてられないっていうか、勝
手にさ、噂は広まってしまいうから。」

ジヨナサンは話をうまくまとめられないばかりか、してはいけない
話をしてしまったと後悔しはじめた。

「でも、すごいね。レイニー。パジェロブルーは、レテシアさんの
原案で僕たちがそれに搭乗しているんだよ。」

ジリアンは察して、レインののテンションを持ち上げようとした。

「ああ、そうだね。ママの存在で守られているような感じがするよ。
」

レインのテンションはすぐに持ち上げられる、簡単だった。

ジヨナサンは胸をなでおろした。

「パジェロブルーは皇帝からの贈り物なんだね。」

「シリアンはつぶやいた。」

「皇帝は、才能ある未来を託せる人材には惜しみなく愛情を注ぐ人物だと俺はそう思ってるんだ。」

「ジョナサンは、そういって、この話を締めくくろうとした。」

第十三章 手紙と贈り物 4

レインがパジェロブルーの翼を撫でていた。

ところどころ、傷があるが、深くまでいつてない。

アルバートがパジェロブルーを操縦していて、クレアに無茶を言われて、飛行している様子が目に浮かんでいた。

そんなレインの姿をロブはみていた。

「もう少しの我慢だ。」

レインはロブの声がするほうを向いた。

「今度停泊するレイクオンクラウドで、レントゲン撮影したら、操縦できるかどうか判断するって言ってただろう。」

レインはだまっただままで、うなづいた。

ロブは黙っているレインの様子に考えていることが何なのかかわからないと思った。

「このパジェロブルーは皇帝がつくらせたものなんだったね。」

レインの言葉にロブは思った。

(ジョナサンが余計な事を言ったか。)

「レテシアママが考えたものだって、聞いたよ。」

「だから？」

「だからって……。ママがどんな想いで描いたのだろうって、思いながら、撫でてていた。」

そういうことかとロブは心の中でつぶやいた。

「レテシアは、スカイブルーが好きだった。どんな時でも、首にはスカイブルーのスカーフを巻いていた。」

ロブがそういうと、レインはエミリアが首に巻いていたスカイブルーのスカーフを思い出した。

「あの時の、レテシアはこの翼のように、青くキラキラと輝いていた。」

「あの時？」

レインが聞き返すと、ロブは顔が真っ赤になった。

その様子をみて、レインは驚いた。

そして、ロブにいじわるな言葉をかけてみた。

「兄さん、レテシアママが分かれた後、どうしたか知っているの？」
うつむいて目を伏せて、低い声でレインは言った。

ロブは最初何を言おうとしているのかわからなかったが、考えていくうちに思い至った。

「アクロバット飛行のショーのことか。」

「うん。」

「知ってるさ。」

「ママは苦しんでいたのでしょうか。アクロバット飛行のショーって、命の危険と隣あわせじゃないか。」

「そうだな。だが、俺にはもう何もしてあげられなかった。」

ロブに対して他人行儀な言葉にレインは失望した。

「キース、ロックフォードさんのことは……。」

「そんなことを信じるんじゃない。」

「そう、仕向けたのは兄さんじゃないか。」

レインの目に涙が滲んできて、手で押さえた。

「あれは噂でしかない。真実は当人たちだけしかわからないことなんだ。」

レテシアを追い詰めてしまって、そういうことになったというのなら、確かに俺が仕向けたことだ。

お前には、まだ理解できないと思う。それを言い訳にするつもりはない。

だが、お前はレテシアの息子だから、レテシアを悪いようには考えないでいてほしい。」

ロブはレインの両肩を抱いて言った。

「頼む。」

レインは、顔を赤らめたロブと今「頼む。」と言ったロブの気持ちと同じ気持ちでいると感じた。

レインの中で、今、目の当たりにしている、ロブがレテシアを愛していたあの時の様子に対して、自分はどうしたらいいのかわからなかった。

ただ思った事を口にした。

「あの時があったからこそ、僕は生まれてきたんだね。」

レインはロブの目を見つめて言った。

ロブは次第に顔が赤くなってきて、両手で抱いていたレインの両肩を放した。

レインの目から逸らして、レインに背を向けたロブは言った。

「そうやって、恥ずかしい事を平気でいうところは、レテシアに似ているよ。まったく、参るよ。」

山深いところに、湖があり、湖のそばに街があった。

S A Fはそこへ停泊した。

クレアは街から湖を眺めて思った。

(スワン村に似ているな。)

スワン村はコン・ラ・ジエンタ皇国の北にあり、いまあるレイクオンクラウドは南にあった。

標高約5,000Mの山脈に囲まれて、標高約2,000Mにある湖は氷河の水溶けが集まったものだった。

スワン村と違って、晴れていることが多いのが特徴で、霧に包まれることがあっても、ほとんどが湖のしたにあっただからだ。

天候が良いため、農作物も豊富に獲れ、人の流れも充実していて街は繁栄していた。標高が高いという難点を覗いてはとても良い街だった。

他国から狙われることもあったが停戦している状態で、軍が駐留していて平安が保たれていた。

軍の施設にS A Fは停泊して、補給をした。

カスターは軍の通信部と交信していた。

「S A Fに荷物があるので。そちらに向かっている補給部隊があ

るので、到着するまで滞在してもらえませんか。」

カスターは軍の要請に返答するのをしばらく待つよう言った。

クレアがレインをつれて、S A Fを出ようとしているところを捕まえて、判断を仰いだ。

「別に何日か滞在してもかまわないさ。ロボとデイゴに話を通しておいてよ。」

「了解しました。」

カスターは、今後の行程を考慮しないとイケないので、ロボとデイゴに軍の要請をつたえ、軍に対して快諾と返答した。

「荷物つて、何でしょうね、クレアさん。」

クレアたちはS A Fを出た後、軍が用意してくれたエアバイクに乗った。

「さあな。おおかた、手紙の返事だろ。デイゴとジリアンが頻繁に手紙出しているけど、こちらに届く当てがなかったからなあ。」

「ああ、そうですね。」
レインはレテシアに手紙を書いたから、返事が来るかなと考えてみた。

ふたりはレイクオンクラウドの街中にむかって走り去った。

ジリアンとアルバートは水を補給する作業をしていた。

ジリアンはアルバートと口を聞こうとしなかったが、アルバートはことあるごとにジリアンにちよっかいをだしていた。

ちよっかいを出されて、反応すると調子に乗ると思って、相手にしていなかったが、作業がはかどらないので、ジリアンは怒った。

「真面目に作業しないと、クレアさんに言いつけるよ!」

「うわあ、怖い、ジリアン。言いつけるだなんていわないでくれよ。」

「僕だって、怒りたくないよ。ちゃんとやってよね。」

「僕だって、仲良くやりたいよ。ジルが口聞いてくれないからさ。」
ジリアンはふてくされた顔で作業を続けていた。

その様子を遠くからコーデイは眺めていた。

(アルバートさんはクレアさんに言われて、ジリアンさんを怒らせているのでしようが。)

クレアの意図を読んでいて、コーディはジリアンが背負っているものを軽くさせようとしてしているのだと考えていた。

ジリアンが知らない、セシリアのもう一人の子供と対峙するときのために。

レインのレントゲン撮影が終わり、仕上がったものをクレアは見入っていた。

蛍光灯に写真を当てて、レインに話しかけた。

「いいか、レイニー、よく見るんだ。この真ん中の肋骨にひびが入っているだろう。」

これが肺に刺さっていたんだ。」

外科手術で刺さった肋骨を元に位置にもどるように固定させた。

その時はあきらかに骨と骨との間に空間があつた状態だった。

「ひびが入っているだけだと思いがちだが、これを甘く見ていると、またずれてしまう。」

クレアの言葉でレインに不安がよぎった。

「パジエロブルーに乗るにはまだ、時間がかかるな。」

「そんな。これぐらいで……。」

「さっきも言っただろう。甘く見るなつて。」

レインは肩を落としたものの、思った事を口にした。

「いままでだつて、早く回復できるように、がんばってきた。みんなの足手まといにならないようにつて。」

これからも、まだ、みんなに迷惑かけちゃうなんて、嫌なんだ。」

クレアはレインの目をみて、ため息をついた。

「レイニー。あたしとロブとでよく話し合つて決めたんだ。S A Fで治療続ける事をさ。」

レインは少しふてくされながら話しを聞いていた。

「お前を研究所の病院に完治するまで置いてもらつて、後で合流す

る手もあつたんだ。」

「そんな・・・。」

「どつちが良かったなんて、聞くまでもないよな。」
レインは黙ってうなづいた。

「みんなに置いてけぼりされて、僕だけ病院で治療なんて、つらいです。」

「よおし、いい子だ。わかればいいんだよ。みんな、お前が以前みたいに動けないからって迷惑だなんて思っただろ。」

「いらん気遣いなんてしてないだろう。まあ、アルバートにはちょっとかいださないようにと言いつけてあるけどね。」

クレアはクスツと笑った。レインは苦笑いしていた。

アルバートにとって、本調子がでないレインは格好の良い虐め相手になるからだった。

クレアとレインがS A Fにもどると、予定より早く軍からの荷物が届いた。

カスターが受け取り、個々に配って回っていた。

レインには封をされた紙袋が手渡された。中に何が入っているのかわからないようになっていた。

カスターは中身が何であるのか、知りたがっていた。

「レイニー、やけに多い荷物みたいだね。何個か中に入っているみたいだ。」

手渡されたものを受け取ったレインだが、紙袋には何も書かれていなかった。誰からなのかわからなかった。

「ここで開けてみない？」

カスターの顔がにやけているので、レインはにらんで言った。

「いいよ。部屋のなかで空ける。」

「チツ。」

カスターが即座にふてくされた顔をしたので、レインはかみついた。

「今、チツって言った？チツってどういうことなんだよ、キャス。」
カスターはあわててその場を取り繕った。

「わわ、なんでもないよ。そう聞こえた？そんなことしたつもりはないよ。」

レインはカスターを一瞥して、その場を去った。

レインの後姿をみて、カスターは思った。

(怖い怖い。最近、ロブに似てきたな。)

レインは自分の部屋に入ると、中身を開けた。

薄っぺらな手先から肘までの長さの箱が二つと、ずっしりと重たいような手のひらサイズの箱が入っていた。

薄い箱には手紙が張り付いていて、ひとつはレテシア「ハートランド、もうひとつはエミリア「サンジヨベーゼとあった。

手のひらサイズの箱とは別に手紙があつて、それには、皇女フェリシアと書かれていた。

「え？どうして？」

レテシアからの手紙は、レインが手紙を書いたのでその返事だといふのがわかるが、エミリアとフェリシアの手紙の意味がわからなかった。

エミリアの手紙はレインにとって思っても見なかったことで嬉しくてしようがなかったが、フェリシアから手紙をもらう理由が不思議だった。

「そういえば、コーディが手術中に様子を伺いに来ていたとかつて言ってたかなあ。」

レインはこころを躍らせながら、最初にエミリアの手紙にはさみを入れて、封を切った。

第十三章 手紙と贈り物 5

レインが開けたエミリアの手紙にはこう書かれていた。

「早期回復の知らせをフェリシア皇女殿下から聞きました。

訓練中の身であるわたしにとって、研究所のできごとは貴重な体験です。

そして、あなたが命の危険から脱れ、手術を乗り越え、体力を回復されたことをこころのそこから嬉しいと感じます。

術後の経過が良くなるように祈っていましたが、また、いつの日か、お互い元気な姿で会える事を望み楽しみにしたいと思います。

あまり、無茶はしないようにと忠告してもためなのでしょうが、S AFのクルーやお母さんのレテシア少尉のためにも、無事でいてください。」

他愛もない、ありふれた文章なのだが、レインにとっては、天にも昇るような気持ちになった。

箱の中身は贈り物で、中身はスカイブルーのスカーフで、端にレインの名で緑色の刺繍が施されていた。

スカーフを手に取り、両手でにぎりしめた。レインは嬉しくてたまらなかった。

時間を得て、満足しきったところで、レインはレテシアの手紙があった薄い箱を先に開けた。

中身はエミリアと同じスカイブルーのスカーフで、端にレインの名が青色の刺繍が施されていた。

エミリアと同じものがレテシアから送られてきたことに不思議な思いがレインにはした。

そして、レテシアの手紙の封を切った。

愛する息子レインへ

わたしもあなたに会いたい。

何もかも投げ出してあなたに会いたいわ。

でも、そんな事してもあなたは喜ばないでしょう。

あなたは空を飛ぶことが楽しくてしょうがないママが好きだったのだから。

あなたが生まれた時は激しい雨が降っていて、レインと名前をつけたの。

どんな天候になってもめげない気持ちで空を飛んでいてほしいって思ったから。

私もあなたと同じで何度も手紙を書き直したわ。

あなたの気持ちが良くわかるの。

書こうとしても書けないこと、それを繰り返したのでしょ。

あなたがわたしの思ったとおりの息子になってくれていると確信しているわ。

わたしの代わりにロブのそばにいてほしい。

わたしの分まで、ロブを愛していてほしい。

母として、あなたの無事を祈っているわ。

あなたがわたしの想像以上に成長していることを会えるその日まで楽しみにしているわ。

青い空の下、飛行している事が何より楽しいママより

読み終えるまでに、レインの手が震えた。

読み終わると、手で口を押さえて、咽び泣いた。

しかし、苦しくなって、口を押さえていた手で胸を押さえて、号泣した。

レインの声は隣の部屋のジリアンに聞こえていた。

(レテシアさんの手紙を読んでいたのだろうか。)

ジリアンの手にはプラーナの手紙が握られていた。

「あなたの手紙にかかれていたように、わたしは学校でたくさん

友達ができたよ。

あなたには他の誰にも出来ないようなことができる。わたしは思っているの。

わたしにかけてくれた言葉の数々があなたのところから生まれてきているから、あなたの言葉であなたが大事にしてあげたい人々を守ることが出来ると思うの。

あなたのこのころの強さがわたしを守ってくれたように、あなたのこのころがレイニーのこのころを守ってあげることが出来ると思うの。

いつも、感謝しているわ。どこにいても、どんな時でも、あなたの無事を祈っている。」

ジリアンはプラーナとはこのころが通じ合っているから、言葉をかけてあげられると思っている。

はたして、レイニーとは、ロボとは、通じ合えているのか。できないとか考えるのはやめようと思った。

せっかく、プラーナが励ましてくれていたのにと。いつ、声をかけようかと考えて、手を胸にあてて、祈った。

（フレッド兄さん、僕に力を貸してほしい。レインが苦しまないように、僕がしてあげられることに。）

S A Fはレイクオンクラウドを離れて飛行していた。

軍からの荷物には個人的な物資から研究所からの提供品などが入っていた。

個人的なものは、デイゴ、ジリアン、レインの3人だけだったが、研究所の提供品にはジョナサンあてに届いた。

クリアはジョナサン宛のものが、取り扱い危険物と注意書きされていたので、問い正した。

「取り扱いに注意してもらわないといけない代物なんです。爆発物とかじゃないですから、安心してください。」

何でしたら、中身を確認しますか。」

クレアの目の前でジョナサンは荷物を開封した。

中身は発泡スチロールで保護されて瓶詰めになった液体だった。一瓶手にとつて、瓶に張られている注意書きを読んで、クレアは瓶のふたを開けた。

ニオイをかいで確認した。

「グリーンオイルの種がなぜ取り扱い危険物なんだ。」

クレアは瓶の注意書きを信用していなかったが、においをかいで、それがグリーンオイルの種だと理解したのだ。

「さすがだね。それは研究段階の種だね。少量の水で成長が早い品質改良ものなのですよ。」

「違う種類は、種じゃないね。事前に持ち込んでいた栄養剤かな。」

「そうです。あと、説明書をちゃんと読んでおかないと使用方法を間違つたら大変なことになるのは提供品の痛いところだね。」

エンジンが傷んでしまうようなことがあつてはいけなから、注意して使用していますよ。」

クレアはジョナサンを疑っていた。軍から研究所にヘッドハンティングされたのは両親のためだという理由だったが、軍部で手に入れた情報にはジョナサンの親孝行している様子がなかったからだ。ジョナサンには、疑っているという態度を示して、揺さぶつておいて、様子をみようかとクレアは考えていた。

「OKだ。疑つて悪かったよ。研究所の荷物つていうのがうさくさくてね。」

「わかつてますよ。クレアさんが理事長のことを快く思っていないことぐらい。」

いくらなんでも、わたしをつかつてクレアさんを陥れようなんて思つてないでしょう。」

クレアは手をおでこにあてて、頭痛でもするしぐさをした。

「そんなこと考えてもないよ。そんなこと考えていたら、身がもたない。」

これでもか弱いんだから。クスッ。」

不敵な笑みを浮かべるクレアの様子をみて、ジョナサンは寒気がした。

（ヤバイ。相手のペースに飲み込まれるなよ。）

ポーカーフェースを決め込んだつもりだったが、内面においては激しく攻防をしているようだった。

クレアはジョナサンに背を向けて手を振って去っていった。

（ジョナサンはパジエロブルーのことといい、食えない奴だな。わざとおしゃべりなオトコになってる。）

クレアがパジエロブルーが収納されている場所にいくと、ロブが立っているのが見えた。

その後に、パジエロブルーの整備をするために下に潜り込んでいるレインの姿が見えた。

クレアは声をかけようかと思ったが、そのまま、ふたりの様子を見ていた。

「レイン。届け物の中身はいったいなんだったんだ。」

「特に何も無いよ。」

「何も無いわけじゃないだろ。カスターが少し重たいものが入っていたって。」

「いったい、何が気になるの？」

「気になるって……。」

二人の会話には冷たい空気が流れているようだった。

レインの一方的な冷たい態度だったが、ロブにとってはレテシアの手紙だという確信はあるものの、中身が知りたい一心だった。

「レテシアママの手紙が入っていたかどうかでことなら、入っていたよ。」

「手紙には何と書かれていたんだ。」

「特に何も。」

二人の会話を聞いていたクレアは、こころのなかで「オイオイ」とつぶやいた。

二人は後方にクレアがいてることには気がついていないらしい。

「怒っているのはなぜなんだ。」

「怒ってなんかいないよ。」

「怒っているだろう。なぜだか、言ってやろう。レテシアがお前と一緒にいたいと言っているからだ。」

その言葉にレインは血が上った。

バコッ

「痛い。」

その場から立ち上がるうとして、頭を機体にぶつけた。

ロブは咄嗟に、レインが乗っているキヤスターの板をひっぱりだした。

レインはおでこに手をやり、痛がっていた。

「大丈夫か。」

ロブはレインに手を差し出したが、レインはそれを払いのけた。

「この分からず屋！」

レインは叫んで、自分で立ち上がった。

「レテシアママの気持ちなんて、全然わかってない。

分かれて当然だよ。いままで、兄さんに会わなかった気持ちがあるよ。」

レインはロブをにらんで怒鳴ったが、その後、目を伏せて思った。

（そばにいれば、つらいだけなんだ。）

ロブは自分が言ったこととは違う内容だったのかと啞然としていた。パチパチパチパチ

音がするほうに二人が振り向いたら、クレアが拍手をしていた。

「レイン、よく言った。」

レインはクレアの言葉に釈然としなかった。

「僕を馬鹿にしているんですか、クレアさん。」

「そうじゃないよ。同じ言葉をあたしがロブにいったのさ。『分からず屋』ってね。」

ロブは、「あ、痛い」と心の中でつぶやいた。

レインの顔は真っ赤になった。

クレアさんに言われた言葉を自分の口から言わせたロボのことに腹を立てたのだ。

歯をぐいと食いしばっていたレインをみていたクレアは指をさした。

「レイニー、鼻から血が出ている。」

ロボが振り返ってレインをみると、確かにレインの鼻から血がたれていた。

レインは鼻の下に手をやってふきとり、目で確かめた。

「あ、どうしたんだろう。」

クレアはレインの顔が赤くなっているのを知っていたので、血圧が上がったのだろうと思った。

「顔を上に上げてみな。」

クレアはレインのそばにより、鼻を覗き込んだ。

「たいしたことはないと思うけど、診療室に行こうか。」

クレアは白衣のポケットからティッシュをとるだし、レインの鼻にあてた。

レインはクレアに促されて、その場を立ち去った。

ロボは二人の後姿をだまってみていた。

ガタンッ

音のするほうへロボが振り返ると、パジェロブルーの操縦席にいたジリアンがドアをあけて中から出てきたところだった。

「ずっと、いたのか。」

「うん。僕が聞いても、レイニーはなににも言ってくれなかったんだ。」

「そうか。」

「レイニーは確かに苦しくて辛いつて思っている。でも、それは今言ったことじゃないんだと思う。」

「そうだな。」

「まるで、他人事だね。」

「あ、いや。そんなつもりはなくて、もう、俺自身がどうしていい

のかわからなくて。」

ロブは頭に手をやって、疲れた顔をした。

レインの届け物が届いた昨日から、よく眠れていないのだろうか
とジリアンは思った。

ジリアンがロブのそばにいくと、ロブはジリアンの肩を抱いて言っ
た。

「俺の代わりに、そばにいて声をかけてやってくれ。俺にできない
ことはジリアンならできだろう。」

「うん。家族だから、できるだけのことにはするよ。でも、兄さんの
代わりにはなれない。」

「すまない、そういうことを言いたかったわけじゃないんだが。」
「僕にできることは、ふたりのことを見守ってあげることだと思う。」

フレッド兄さんだって、同じ事をするだろうって思う。」

「そうだな。」

ロブはジリアンの言葉に思った。

（まいったなあ。ふたりともいつのまに成長したんだ。ドックを出
てそんなに月日がたってないというのに。）

第十三章 手紙と贈り物 6

レインは頭を高くして診療室のベッドに寝かされていた。

「しばらくはそうやって寝ているといい。」

クレアはそういうと、椅子に腰掛けた。

「なにも話したくないっていうのなら、それでもいいけど。腹の中に溜め込んだままだと病気になるってしまうよ。

肋骨が治りにくくなるかもしれないし。」

レインはクレアのほうをみないで、天井を見つめていた。

「愛し合っていても、離れていないといけないうのは、お互いに事情がある場合でしょ。」

クレアは右顎に手をおき、椅子の背もたれに肘をついて、レインの話聞いていた。

「お互いのためについて思ってた離れていないといけないうのは、なにかちがう気がする。」

レインは言い終えると目を閉じた。

「ロブが話そうとしないことを話すわけにはいかないが。」

クレアは間をおいて、話し始めた。

「あたしが好きなロブは、レテシアのことで頭がいっぱいだっていう姿だった。」

あいつの、あの頃は、夢中だった。何をしても、どこにいても、レテシアのことしか考えていない感じだった。

そんな様子に、周囲のみんなは微笑ましくおもっていたのかもしれないし、幸せな気分になれたのかもしれない。

レテシアのことを好きでいるロブは、素直ないい男だった。レテシアさえいれば、何でもできるっていう気持ちさえ持っていて、輝いていた。」

レインはクレアの話聞いていくうちに、涙が出そうになって、目の上に腕をあげてのせた。

「誰もが、二人の幸せが永遠に続いてほしいって思ってたんだが、ひとりだけ例外がいた。」

「例外？」

「そう、二人の間にレインが生まれて、最高の幸せを噛締めている姿を妬んでいた一人がね。」

「・・・セシルのこと？」

「そうだ。」

レインは涙が出ないと確信して、目開いてクレアをみた。

「嫉妬？」

「ああ。セシリアは二人に嫉妬していた。」

「分かれた理由はセシルのせいじゃないでしょう。」

「そうだよ。セシリアがなぜ嫉妬したか、わかるかい？」

質問されたレインは少し考えてみた。

「自分が幸せじゃないから？」

「そうだよ。本来なら、最初に生まれた子を抱いて育てているはずだった。」

そういうことになってしまったのは、義父さんの判断だった。間違っていたのかな？」

レインはクレアのほうから向きなおして天井を見つめた。

「間違っていないと思う。それはジリアンのことがあって、それを知っているからだけだ。」

「そう、それ。時間がたてば、わかることがある。もちろん、わからないこともある。」

レインはジリアンがセシリアに酷い虐待を受けている姿をみていた。たとえば、セシリアの最初の子を育てることができたとしても、レインが生まれれば、嫉妬したに違いない。

「表面上じゃわからないことがある。中身を知ったところでわかるものでもない。」

今、レインが考えていること思っている事を否定するつもりはない。そういうことを感じて考えたりすることが大切だと思う。

でも、ロボを非難するのはまた、違うよ。ロボ自身は時間がたてば理解してもらえると思っているのかもしれない。」

「では、どうして、クリアさんは兄さんに『分からず屋』って言ったんですか。」

「レインが悲しむ姿が目には浮かんだからさ。」

その言葉を聞いて、レインは泣きそうになった。

「また、それもレインにとって大切なことなのかもしれないって、今は思えるよ。」

クリアは椅子から腰を浮かし、立ち上がってベッドから離れていった。

「人間、完璧っていうのはない。未完成だから、人としてつながっていけるんだ。」

レインの目から大粒の涙がこぼれてきた。

クリアはレインに背を向けていたので、その様子を知らない。

「ロボはレインに理解してほしいと思っているが、時間がかかるということもわかっていていると思う。」

だから、焦らなくていい。すこしずつでいいから、ロボの事を理解してやってほしい。

レインの父親なんだから。」

クリアはそういうと、診療室から出ようとした。

「しばらく休むといい。」

クリアが診療室を出ると、レインは声を出して泣いた。

（ロボを理解しないと、レインに子供が生まれた時、父親になれないんじゃないかって思うんだ。）

クリアはこころのなかで思った。

晴れ渡る空の下、スカイロード上官育成学校の訓練場で、エミリアとフェリシアは飛行訓練をしていた。

ふたりは必ずペアとなって、訓練をする。

エミリアは訓練では得られない貴重な体験をしたので、何事も冷静

に判断していけると自信があった。

フェリシアは必死になって、操縦桿を握っていて、空をみている余裕がなかった。

その様子をエミリアは反射鏡で確認して、リラックスできるような言葉をかけた。

「わたしがいるから、緊張して操縦しなくても大丈夫よ、フェリシア。」

景色をみて、空がとっても青いから。」

「そんなこといわれてもできないわ。」

泣きそうになりながら、フェリシアは操縦桿を握ったまま、上を見上げた。

光が差し込んでいてまぶしくて、目が開けられなかった。

エミリアは機体を旋回させて、光をさえぎった。

フェリシアは旋回した様子に驚いたが、視界がひろがって、青い空が目飛び込んできた。

「ああ。青いわ。」

初めて空を見たといった感じで、フェリシアは感動していた。

自分で操縦して、ふたりつきりでエアジェットにのって、飛行するのが初めてだったからだ。

その後、ふたりは帰還して、飛行訓練を終えた。

シャワーを浴び終わると、フェリシアはエミリアに声をかけた。

「今日はありがとう。あなたがいないと何も訓練できないわ。」

「気遣いしなくていいわよ。ひとりで訓練するより、断然いいわ。」

わたしたちだけに与えられた特権だけど、有効活用しなくちゃ。」

「そうね。あ、今日もありがとうだったわ。クスッ」

二人は笑いあいながら、シャワー室を出た。

「そうだわ、レイニーからお礼の手紙が届いてたわ。エミリアにはどんな手紙だったのかしら。」

エミリアはすこし考え込んだ。そして、正直に手紙の内容を話さないほうが良いと思った。

「スカイブルーのスカーフを贈り物にしたら、レテシア少尉からも同じものが届いていたということが書かれていたわ。」

「え、そうなの？すごい偶然ね。」

「で、フェリシアのほうはどうだったの？」

「贈り物が気に入らなかつたのかしら。他愛もない手紙だったわ。」

「そう。何を贈ったの？」

「時計よ。気圧も計測できるものなの。」

「高価そうね。気がひけたのじゃないかしら。」

「そうなのね。」

フェリシアはつまらなそうな顔をしたので、エミリアは気遣った。

「片方だけ時計をつけていると、バランスがわからなくなるからかもしれない。」

今はわからなくても、その時計の価値がわかるようになるわよ。時計が大事なものだって知るようになると思うわ。」

「そうね。」

二人は更衣室を出て、自室にもどった。

エミリアは机の引き出しから、手紙を取り出した。

レインからの手紙だ。

エミリアさんへ

手紙と贈り物をいただき、ありがとうございます。

ほんとうは僕のほうから報告の手紙を書かないといけなかったのに、気が利かなくてごめんなさい。

僕は早く回復したくて、周囲の人たちに助けてもらいリハビリをしながら、治療を続けました。

まだ、肋骨にひびがある状態なので、エアジェットには乗れないのですが、早く乗れるようになりたいです。

僕はエミリアさんのように完璧な訓練を受けて、SAFのクルーになっっているわけではないので、危険とは隣り合わせですが、軍では

受けれない訓練を受けていけるような気がします。

僕自身がSAFの最初の患者になったことで、怪我をした人の気持ちかわかるというか、そんな経験を得ています。

僕はまだまだ未熟で、学ばなければいけないことがたくさんあって、それでもがんばっていけるのは、みんながいてるからです。

僕一人じゃないということが強みです。

僕にはよくわからないことがあって、それは僕一人で解決しないといけないみたいです。

離れ離れにならないと愛しているということが実感できないということです。

人を愛するということは、そばに居たいという気持ちが強くなっていくはずだと思っていました。

ごめんなさい、こんなことをエミリアさんに聞くのはおかしいですよね。

僕一人で解決していく自信がなくて、つい書いてしまいました。

エミリアさんからいただいたスカーフと同じものが、レテシアママからも届きました。

エミリアさんからいただいたものは大事にとっておきます。

僕も元気な姿で会える事を楽しみにしています。

それまで無茶な事をしないように、無事でいたいと思います。

レインより

エミリアは手紙を再度読み返していた。

そして、レインが両親のことで悩んでいるのだと考えていた。

スカイブルーのスカーフが首に巻かれていたレテシアの写真のことを思い返した。

エミリアは、レインのこころのスキマに贈ったスカーフの想いが届いたと確信した。

レインがパジエロブルーの整備をしようとする、ロブが声をかけた。

「レイン。左腕につけている時計はどうしたんだ。」

レインは指すような目でロブを見た後、左腕につけてある革バンドの大きな腕時計をみた。

「もらったんだよ。」

「誰にだよ。」

「誰だつていいでしょ。レテシアママじゃないよ！」

ジリアンはパジエロブルーの操縦席にいて、二人の会話が聞こえていた。

（また、始まったよ。）

レインの指すような目にたじろぎながら、ロブは続けざまに話しかけた。

「わかっている。そのスカーフはレテシアからのものだろう。だってらら……。」

「違うもの。」

レインは襟元に隠れたスカーフの端をとりだした。そこには緑色の刺繍でレインの名が縫われているのが見えた。

ロブはそれを見て、ハツとした。

「クレアさんから聞いたんだ。レテシアママが兄さんに送ったスカーフは青色の刺繍だつて。」

レインはスカーフの端をまた襟元に入れなおした。

「これはエミリアさんからいただいたものなんだ。レテシアママがスカイブルーのスカーフを気に入っていたことを知ったんだつて。」

「だったら、その、その、高級そうな時計はいつたい誰から。」

「フェリシア皇女殿下からだよ。」

操縦席から、立ち上がって、ジリアンが言った。

「皇女殿下?!」

ジリアンは操縦席から身を乗り出して振り返った。

「だから、レイニー。そんな重いものを腕につけたら、バランス感覚がくるっちゃやうからつけないほうがいいって言ったじゃないか。」

「これさ、気圧や温度計もついているんだよ。高機能時計なんだから、つけていたら役にたつじゃないか。」

二人の会話が聞こえていない状態になり、ロブはしばらく考えていた。

「操縦席に計器類はついているんだし、パジェロブルーから落っこちることになったら、それが命取りになるかもしれないよ。」

「落っこちるなんて、あの時みたいなのは今後ないよ。っていうか、起さない。」

「ねえ、ロブ兄さん、なんか言つてよ。」

ジリアンがロブに話の矛先を向けようとしたが、ロブは二人の話を聞いていない様子であさつての方向を見ていた。

ジリアンは少し呆れていた。

レインはロブをみたが、干渉されたくないと思いつき取り掛かろうとしたが、ロブに左腕を掴まれた。

「何するんだよ。」

「いいから、この時計をはずせ。」

「どうしてだよ。」

「親子で金のかかった贈り物を贈るのが好きにもほどがある。」

ジリアンがにやりと笑った。

「親子つて、皇帝は別に……、パジェロブルーのこと言ってるの?」

「そうだ。」

「ジョナサンが言つてたけど、才能ある未来を託せる人材には惜しみなく愛情を注ぐ人物だつて。」

「気を惹くためなんだ。皇女殿下もお前の気をひくために高価な時計を贈り物にしたんだ。」

「皇女殿下が僕のことを?! 3歳も年上じゃないか。僕なんか、なんと……。」

「だったら、お前は誰に恋してるんだ。」

ロブの言葉にレインは顔が赤くなった。恥ずかしくてではなく、腹を立てて。

ジリアンは操縦席の背もたれに肘をつき顎をささえ、二人の様子をみていた。

「僕に恋をしちゃいけないっていうんだ!」

「ちがう。」

ロブは手で頭をかきながら、レインに言った。

「お前、初等科で、同級生の女の子たちにちやほやされて嫌がっていただろう。」

女の子たちはお前の気をひきたくて、なにかにつけ、べたべたしていたはずだ。」

「えええ、だからって、皇女殿下がそんな。」

「皇女殿下から送られたものを見せびらかすようなことはするな。」

レインは、ハツとした。

初等科のとき、一人の女の子にお菓子をもらったことで、他の女の子がその子をいじめたりとトラブルになったことを思い出した。

レインはロブが見ている前で、腕時計をはずした。

「僕はどうしたらいいの。」

「しょぼくれて、レインはロブにいった。」

「いままでどおりでいい。お前が誰に恋しようが、お前の自由で、皇女殿下の知るところじゃない。」

もし、殿下を傷つけることになってもそれは仕方がないこと。

アレックスとレジーナ女帝の話をしていさまから散々聞かされてきただろう。」

レインは深くうなづいた。

ロブはレインの頭を撫でた。

「お前がそのスカーフをつけていると、レテシアの面影が目には浮か

ぶ。」

レインがロブを見つめていると、ロブがレインじゃないレテシアをみているのがわかった。

「スカーフはつけてほしくないの？」

「エミリア少尉からいただいたものだろう。大切にするといい。」

「実は、レテシアママからも同じものをもらったんだ。青い刺繍のもの。」

「そうか。」

ウィーンファンファンファンファン。

空挺内でサイレンが鳴った。

カスターが全挺内放送をかけた。

「軍からの要請あり。リゾート地パラディーゾデラモンテグナ都市で大規模な地すべりによる災害が発生したとのこと。」

至急、救援に協力してほしいとのこと。」

ジリアンはすぐさま、操縦席に座りなおし、計器類を確認した。

ロブはレインの肩をたたき、言った。

「クレアさんに確認してくるが、先にパジェロブルーで、お前とジ

リアンとアルとで、現地に急行できるように準備をするんだ。」

「え、僕、行っていいの？」

「災害救助は人数が多いほうがいい。お前たち3人だとまずはグリーンオイル確保になるだろう。救助はできる状態にないからな。」

レインの顔から笑みがこぼれて、ガッツポーズをした。

「ただし、クレアさんの許可をもらってからだ。いいな。」

「はい。」

そのふたりの会話を聞いて、ジリアンは思った。

（なんか、甘いな。）

リゾート地パラディーゾデラモンテグナ都市は標高1,000Mの山間にある都市で、病気や怪我、疲労回復に効果のあるミネラルを豊富に含んだ温泉があり、避暑地を求めた富豪が開発をして、湯治

場であるとともに社交場として発展した。

しかし、乱開発が進み、山自体を爆破して、土地を開墾しようとしていた。

地すべりの災害は、計画性のない土地開発のために山を爆破してとつともない地すべりを起し、リゾート施設を含んだ都市部中心が災害に見舞われた。

クレアの許可をもらい、レインはジリアンとパジェロブルーの操縦席に乗った。アルバートはパジェロブルーの取っ手にしがみつき、いわばアクロバット飛行で、現地に向かうこととなった。

S A F からパジェロブルーはパラディーゾデラモンテグナ都市に向けて発進した。

現地に近づくと、多くの軍関係の空挺が上空を飛んでいた。

空挺からエアジェットが次から次へと地上に着陸する。

空挺事態からも、人海戦術で降り立つのも見えていた。

通信で、着陸の許可をもらったパジェロブルーはホテルの施設で緑地の木々を伐採してつくった広場に降り立った。

アルバートはエンジンが切られるのを確認して、パジェロブルーから降りた。

レインとジリアンはドアを開けて、地面に降りた。

ひとりの軍人が近づいてくるのが見えた。

その軍人がレインの間近にきた。

「お、レテシア少尉かと思っただぞ。」

レインは明らかに見間違えられたが、違うことを認識されたんだということに違和感を感じた。

「え？」

きょとんとしているレインの肩をバンバンとたたいて豪快に笑ったその軍人はデイゴのようにからだはでかくないが、屈強な感じだった。

「レテシアの息子だろう。よく来たな。災害救助協力に感謝する。

私は空挺第五部隊隊長、テオ・アラゴン少佐だ。」

テオは大きなごつい右手をレインに差し出した。

「あ、イタタ。レイン」スタンドフィールドです。よろしくお願ひします。」

レインは左手で肩をなで、右手を差し出して握手をした。

「すまない、痛かったか。」

テオはジリアンの方をみた。

「これまた、フレッドにそっくりだな。」

あきらかに自分のことを言われたことに、ジリアンはすこしふてくされた。

テオが右手を差し出すとジリアンは右手を差し出した。

「ジリアンです。お世話になります。少佐。」

「ああ、よろしくな。」

テオは握手した手を大きく振った。その様子にジリアンは体ごと揺さぶられた。

レインはジリアンがいった言葉にちよつと引つかかかって落胆した。

(お世話になりますっていわなきゃいけないんだ……)

レインがきよろきよろしている、パジェロブルーの機体の下からアルバートが出てきた。

ジリアンがアルバートをテオに紹介した。

「こちらが、もうひとりのクルーでアルバートです。アル、こちらがアラゴン少佐。」

ジリアンはそつなく、紹介した。

レインは面目なく、肩を落としていた。

「よろしくな、アル。」

テオはアルバートと握手をした。

「あ、はい。」

アルバートは人見知りをしていて、テオと目を合わせないようにした。

「エメラルダグリーン号には通信が行き届かなかったみたいで、こちらに来れないみたいだな。レテシアには会ったのか。」

レインはテオを見上げて、首を振った。

「いいえ。ママを知っているのですか。」

「ああ。わたしはレテシア少尉が所属していたホーネットの隊長をしていたんだ。」

ちなみに、別離した後、ロブを蛸殴りにした。」

テオはそう言うと豪快に笑った。

レインとジリアンは啞然としていた。

「とりあえず、ホテルのなかに入れてくれ。そこに対策本部が置かれている。そこで指示を仰いでくれ。」

「了解しました。」

ジリアンはつかさず返事をした。

テオはその場を立ち去った。

レインはジリアンにいろんな意味で遅れをとっている気がした。

テオの姿が見えなくなつて、アルバートがつぶやいた。

「俺、あの人苦手だな。」

その言葉に、レインはちよつと安心した。

第十四章 まさか 女難 2

ウウウウウウイーン、ファンファンファン
都市部に大きなサイレンが鳴り響いた。

山間に響き渡るので、反響して、サイレンが鳴り止まないように聞こえた。

上空のいくつかの空挺が上昇していく。ところどころで、「退避！」という叫び声が聞こえてくる。

レインたちは、何が起きたのかわからなかった。

ゴゴゴゴゴオーツ

地響きがしていた。

空を見上げると、戦闘機が飛んでいるのが見えた。

戦闘機はミサイルを発射した。ミサイルが飛んだ先を追いかけるところが出来なかったが、何かを爆破させた。

上空で煙雲がたちこめて、そこから何かが降り注いでくる。

空を見上げて何が起こるか理解できたアルバートはレインとジリアンの服を掴んで、パジェロブルーの下に押し込めた。

アルバート自身は自分の体を張って、二人を覆った。

レインがうつ伏せで下になり、ジリアンが仰向けで上になった。

ジリアンはすべて防弾ガラスの操縦席の下からアルバートの顔を見上げていた。

アルバートの背中越しに見えた太陽があっという間に雲に覆われ、周囲は真っ暗になった。

そして、バチバチバチと音がして、空から霰のようなものが降ってきた。

それは霰ではなくて小石だった。それらはアルバートに容赦なく降り注いだ。

アルバートは小石が背中に降り注いで痛みに耐えかねて、顔をゆがませた。

ジリアンが見ているのを知っていて、我慢したかったのだが。小石が降り注ぐ、アルバートのゆがんだ顔を見て、ジリアンは思った。

（普段のアルじゃない。これが本当のアルなのか。）
レインは何か降り注ぐ音と地面しか見えてなかった。

何が起きているかわからない状況に、自分が見えているものしか理解できない自分自身にいらだちを感じた。

（これが僕の現状。なにかが起きているのに、僕に見えているものでしか判断できないし、理解できない。）

地面しか見ていない顔を横に向こうと動けば、ジリアンの体を動かすことになる。

この狭い空間のなかで、恐怖に怯えていた。

小石が降り注ぐ音とともに、爆音がして、人の叫び声が聞こえた。

そして、ようやく音がやんだ。

アルバートはパジェロブルーのガラスにしがみついていた力を抜いて、横に倒れこんだ。

「アルー！」

ジリアンが叫んで、パジェロブルーの下から出てきた。

レインはジリアンの叫び声で恐怖から現実に戻された感があった。その場からすぐに動けなかった。

ジリアンがアルバートを抱き起こすと、アルバートは含み笑いをした。

一瞬気持ち悪いと思ったが、アルバートが痛みをごまかそうとしているのがわかった。

「おおーい、無事か。」

テオがレインたちのところへ戻ってきた。

「僕たちは大丈夫ですが、アルが怪我を。」

ジリアンはアルバートのうつぶせにして、自分に寄りかからせた。アルバートの背中には小石が切り裂いた無数の傷があった。

レインはようやく、パジェロブルーの下から這い出た。

「何があつたんですか。少佐。」

「ジリアンは周囲を見渡して、何が起こったか想像も出来なかったの
で、質問した。」

「山頂で大きな落石があつてな。それが都市部めがけて転がって来
たんだ。」

「テオはアルバートの体に手を伸ばし、抱きかかえた。」

「かなり大きなバウンドをして、上空からここめがけて落ちるとこ
だったから……。」

「戦闘機で爆破したのですか。」

「レインは空で見た様子を口にした。」

「そうだ。」

「テオはアルバートをうつぶせにして肩にかついだ。」

「アルバートはされるがままになっていた。」

「アルは救護部へ連れて行く。君たちはわたしの後についてくるん
だ。どこも怪我はないんだな。」

「はい。」

「はい。」

「レインとジリアンは元気良く返事をした。」

「パジェロブルーの操縦席からジジーツという機械音が聞こえた。」

「ジリアンは思い出したというようなくさで、操縦席のドアをあけ、
ヘッドセットを獲った。」

「テオの後を追って、歩きながら、頭に装着しスイッチを押した。」

「こちら、パジェロブルー、応答願います。」

「レインはジリアンのほうを見ながら、テオの後を追った。」

「こちら、スカイエンジェルフィッシュ号、カスターだ。ジルか、
無事か？」

「こちら、ジリアンです。レインとジリアンは無事ですが、アルバ
ートが負傷しました。救護部に向かうところです。」

「緊急事態発令の信号を受けたんだ。アルバートの容態は？」

「無数の切り傷で、命に別状はありません。空挺第五部隊隊長アラ

ゴン少佐の指示に従い救護部に向かいます。」
バン

ジリアンの返信に、カスターの後ろで通信を聞いていたロブは足を踏み鳴らした。

マイクに手で覆い、カスターはその様子に振りかえって言った。

「どうしたの？ロブ。」

「いや、なんでもない。」

ロブは親指を噛んだ。

「なんか、歯がゆいのか。アラゴン少佐のことか。」

「しょうもないことを考えるなよ、キャス。」

「へえへえ。」

マイクを覆っていた手を話し、カスターは通信した。

「ジル、30分後には、現地に到着する。少佐の指示に従って、ア
ルに付き添ってくれ。」

救護部から出るんじゃないぞ。」

「了解しました。」

「通信終了。」

カスターはスイッチを切った。

振り返ったカスターはロブが後ろにいないことに驚いた。
きよろきよろしていると、デイゴが指を指していった。

「ウォータータンクを見に行った。」

「あ、そう。」

S A Fのクルーはそれぞれ、自分たちの役割を果たしていた。

クレアは、不眠不休の救護を予測して、診療室で仮眠をとっていた。
コーデイは薬品や消耗品などの数量を確認していた。

ジヨナサンはエンジンルームからグリーンオイルの量を計算してい
た。

デイゴは、現地に向かうべく、航路を確認し、計器類を確認してい
た。

そして、現地の付近で煙雲が風で散っていく様子が見えていた。

カスターは引き続き軍の通信をして、状況を把握しようとしていた。ロブはウォータールームにいつて、水の量を確認していた。

「レイクオンクラウドでだいぶ補給したらかな。たつぷりあるな。」
ロブはテオに殴られたことを思い出していた。

レテシアと分かれて数カ月後のことだった。

アレキサンドリア号で荷物を運んでいて、停泊した場所が軍の駐留地に近かった。

アレキサンドリア号が停泊していると聞きつけて、テオがエアジエツトでそこへ乗り込んできた。

誰もが怒りに満ちたテオを止めることが出来ないういた。

拳を握りまっしぐらにロブに向かってくるとすぐさま殴りつけた。

ロブはテオだと気づくと、あとはもう抵抗しなかった。

殴られるがままに抵抗しないロブをみて、自尊心が痛まないわけがなかったが、それでも自分で止めることがテオにはできなかった。

「お前は俺に誓ったはずだ！レテシアを幸せにしてやるとな！」

口から血を吐き、ロブはうつろな目でテオを見た。

テオはロブの胸倉を掴んで、にらみつけていた。

「子供を生ませて、あいつのこころをもてあそんで、捨ててしまおうよな、やさくれた男だったか、お前はよ。」

フレッドがテオの後ろに立った。

「すまない。アラゴン大尉。勘弁してやってくれないか。」

テオは無言でちらりと後ろをみて、フレッドだと確認すると、また、ロブのほうに向きなおした。

「レテシアの幸せは周囲が決めるものじゃない。彼女がやりたいことを理解してやるのが周囲の人間がしてやれることじゃないのか。」

フレッドはそういうと、その場からいなくなった。

テオはつづけて、ロブの腹を殴り続けた。

ロブがそうして欲しいと言うような目つきをしていたからだだった。

ロブが気を失う寸前、見物の大衆のなかに、白髪の人物をみた。

蔽かと思っただが、ロングドレスを着ていたのでオンナとわかり、蔽
じゃないとわかって目を閉じた。

ホテルのロビーは、今の緊急事態で起きたことで、けが人が増え、人がごった返していた。

車椅子の老婦人が開いていた目をゆっくり閉じていた。

老婦人の首筋に右手をやる白髪のオンナがいて、つばの広い帽子を左手に持ち、ロングドレスを身にまとっていた。

老婦人の目が閉じたのを確認すると、耳元でなにかを囁いた。

そして、オンナは何事もなかったように、その場から立ち去った。

テオ少佐はアルバートを担いで、ロビーの空いた長いすを見つけて、そこにアルバートをうつぶせに寝かせた。

看護師を捕まえて、手当てを頼んだ。

レインは周りの様子を見回し、キョロキョロしていた。

ジリアンはアルバートの耳元に近づいて、「もうすぐ診て貰えるからね」と囁いていた。

アルバートはジリアンの手を掴んだ。

「そばにいて。」

「わかったよ。」

ジリアンは本当のアルバートの姿を知って、彼を嫌がらなくなった。もう、怖がらなくていいんだと自分に言い聞かせていた。

キョロキョロしていたレインを先ほどの老婦人がすこし離れていたところからじつとみつめていた。

レインは、もしかしたら、エミリア上等兵がいるのではないかと思つて探していた。

訓練生だからもちろんいるはずもない。

アルバートのところへ看護師がつれてきた医者がやってきた。

アルバートの着ていた服をはさみで切り、患部をあらわにさせた。

青いあざがところどころにあり、切り傷自体はたいしたことが無いと医者は言った。

看護師に手当てを言いつけると、医者はまたどこかへ行ってしまった。

看護師が消毒液を綿棒にひたすと、傷口に塗り始めた。

「ウウツ」

アルバートは痛みに耐えて、ジリアンの手を強く握り締めた。

レインがアルバートの様子に振り返ると、レインをじっと見ていた老婦人と目が合った。

「坊や！」

老婦人は大きな声で叫んだので、レインは後ろを振り返って、誰かいないか確認した。

叫んだ相手が自分じゃないかと前を向きなおすと、また、老婦人は叫んだ。

「坊や！危ないからこっちに来なさい。」

老婦人はレインの目をみて、右手で手招きをした。

レインは見知らぬ老婦人が誰かと勘違いしていると思って、首を振った。

「お義母さん、どうかなさったの。」

車椅子の老婦人に中年の女性が声を掛けた。

「誰が、あなたのおかあさんなの？私には息子しかいないのよ。娘はいないのだから。」

「また、始まったのね。なにもこんな時に。」

「何を言ってるの、あそこに、一人息子のルチアーノがいるわ。呼んできて頂戴。」

「あなたの息子のルチアーノは……。」

最後まで言葉を口にできないままに、その女性は老婦人の指差す方向を見た。

そこには、栗色の巻き毛の色白の少年が立っていた。

その女性が知っているルチアーノには似ても似つかなかった。

「あの少年はルチアーノではありませんよ。ルチアーノはあのような汚い作業着なんて着てませんもの。」

「そうかもしれないけど、あの子はルチアーノよ。友達に騙されてあのような格好をしているのよ。早く呼んできて頂戴。」

女性は仕方なく、老婦人から離れて、少年の所へ向かった。栗色の巻き毛の色白の少年レインは、車椅子の老婦人のそばにいた女性がこつちに向かってくるのがわかった。

なにがどうなっているのかわからないながら、人違いだからって言おうとレインは考えていた。

「ごめんなさい。見ず知らずの人から、お願い事を頼まれたら、聞いてもらえるかしら。御礼ならいくらでもするわ。」

女性にそういわれて、何を言おうとしているのかレインには理解できなかった。

「あのぉ、僕、人違いされていると思うのですが。」

「そうなの、人違いもなにも、思いこんでいるの。」

車椅子の老婦人を振り返り、女性は言った。

「あの車椅子の女性は、5年ほど前に一人息子を事故で亡くして以来、痴呆症がひどく進行してしまったの。」

今、あなたのことを一人息子のルチアーノだと思っているのよ。わたしはそのルチアーノの妻なの。」

レインはわかるようでわからないながら、状況が飲み込めた。

「お願い事って何でしょうか。」

「聞いてくださるかしら。」

「出来ることでしたら。」

「私たち、これから、実家があるコロンバ自治区に向かうの。一緒に来てもらえないかしら。」

「ええ!!!」

大きな声が出たので、ジリアンがアルバートの手を離して、立ち上がった。

「どうしたの？レニー。」

女性はジリアンの方をみやると、また、レインの方へ向き直った。

「あなた、レニーって言うのね。申しおくれていたわ。わたしは

エレーナ＝ヴェネクト。あちらの車椅子の女性がわたしの義母でカミラ＝ヴェネクト。」

「あ、あの。一緒には行けません。ここには着たばかりで、これから災害救助に協力しないといけないんです。」

「あなたのような少年が協力するの？ 邪魔になるだけじゃないのかしら。」

レインはむっとした。そんなあからさまに言うことないのにと思った。その様子にエレーナは、すこし言い過ぎたと気づいた。

「僕にだって、役立つことはできます。スタンドフィールドドックでグリーンオイル生産に携わっていたのですから。」

「失礼なことを口にしてしまったみたいね、謝るわ。ごめんなさい。でも、どうしても、一緒に来てほしいの。」

これでもう、5度目のよ。違う人を捕まえては、息子のルチアーノだと言つて聞かないの。」

あなたのような少年は初めてなのだけけど。」

レインが車椅子の老婦人を見てみると、老婦人の後ろにいつの間にか、つばの広い帽子をかぶったロングドレスの女性が立っていた。

「実家にもどるまで一緒についてきてくれればいいの。実家にもどれば調子がよくなって、人間違いしたと理解できるようになると思うの。」

コロナバ自治区はここからさほど遠くないし、自家用ジェットでいくから、半日で戻つてくれるわよ。どうかしら。」

「兄さんに相談しないと、ここから離れちゃいけないですよ。」

「お兄さんはここにいらっしやるのかしら。私のほうから説明させてもらうわ。」

「30分後には、ここに到着する予定なのです。」

「そう、とりあえず、義母に挨拶だけでもしてくれるかしら。息子のように振舞ってくればありがたいのだけけど。」

レインは、無言で頷くと、エレーナに手を引かれて、老婦人に向かっていった。

ジリアンは心配そうにレインを見ていたが、レインは心配しないようにと言ってと手を振った。

「あら、ミセス・ロックフォード、もう御立ちになるのかしら。」
エレーナはロングドレスの中年女性に声を掛けた。

「ええ、そうなの。せつかく、お近づきになれたのに、寂しい限りだわ。」

でも、離陸許可が下りないのよ。いたし方ないわね。この状況ですもの。」

レインが老婦人に近づくと、老婦人はレインの手を握った。

「まあ、どうして、このような姿をしているの。手もこんなに汚れて。誰かにいじめられているの？」

レインが困惑している様子に、ロングドレスの女性は腕を組んでいった。

「エレーナ、また、始まってしまったのね。」

「ええ、そうなの。少年は初めてなのだけど、無理を承知でコロナ自治区まで一緒に言ってもらえないかとお願いしてたところなの。」

「あら、ご実家はコロナ自治区なの？近いんじゃないわ。素敵なおところよね。」

「ええ、あそこには古びているけど手入れが行き届いた屋敷があるのよ。主人が幼少のころ育った場所だから、義母も落ち着くと思うの。」

「そうねえ、その方がいいわ。少年にはいきなりな話して迷惑でしょうけど。」

そういって、ミセス・ロックフォードはレインにウインクをした。
レインはたじろいだ。

「ねえ、ルチアーノに着替えをさせてあげて。このような格好させたままにできないわ。」

「そうですね。」

エレーナは周りをキョロキョロと見始めた。メイドがいるはずなの

だが、見あたらなかつた。

「エレーナ。わたし、お手伝いできると思うの。少年を預からせてもらえるかしら。」

「お願いしたいのはやまやまのだけど、まだ、了解を得ていない話なものだから。」

「とりあえずは、少年の格好を何とかしなければ、婦人がかわいそうだわ。」

エレーナはレインに向かって、ミセス・ロックフォードを紹介した。「こちらは、ミセス・ロックフォードとおっしゃって、ご主人が宝石商の方で、ご自身は作家でいらっしゃる方なの。」

滞在していたこのホテルで部屋がお隣同士のお近づきになって、親しくさせてもらっていたの。」

エレーナに紹介されてミセス・ロックフォードはつばの広い帽子を脱いで見せた。

セミロング白髪が帽子からこぼれるように、滑らかに揺れた。

「はじめまして、よろしく。」

手袋をしていた右手を出されて、レインはキスをすればいいのかどうか、悩んでいたが、ミセスロックフォードはレインの手をとって手を合わせた。

「あ、よろしくお願いします。」

ミセス・ロックフォードはレインの手を握った。

「着替えをしてきてもらえないかしら、ミセス・ロックフォードがお手伝いしてくださると言うから。」

エレーナがそういうと、ミセス・ロックフォードはレインの手を引いて連れ出そうとした。

「え、でも、僕、兄さんに……。」

「あなたに兄さんなんていないのよ。何を言っているの。ちゃんと着替えてらっしゃい。」

老婦人にそういわれて、仕方なくレインはミセス・ロックフォードについていった。

レインを連れ去っていく様をみていたジリアンは驚いて止めようとしたが、アルバートがジリアンの腕を取って放さないでいた。

そのころにヴェネクト家のメイドが現われ、エレーナはメイドに老婦人を任せて、ジリアンのところへ言っつて、レインを連れ去った理由を述べた。

レインは、このホテルのブティックフロアにミセス・ロックフォードに連れていかれた。

紳士服店に入ると、身長と肩幅、足のサイズなどを測られた。ミセス・ロックフォードが店員に言付けると、レインをつれて、店を出た。

「どこへ連れて行かれるのですか。」

「わたしの部屋よ。」

「え？」

「そんな汚れた体で紳士の服を着せるわけにいかないわ。シャワーを浴びてもらおうわ。」

エレベーターに乗ると、最上階に行き、ペントハウスと書かれたドアをノックした。

中からボーイが出てきて、ミセスロックフォードとレインを中に通した。

ミセス・ロックフォードがボーイに言付けると、レインはそのボーイにシャワー室に連れて行かれた。

ボーイが服を脱がそうとするので、自分で出来るからとボーイをシャワー室のすりガラスの向こうへと追いやった。

（なんか、大変なことになったような気がする。兄さんに怒られるんじゃないのかな。）

老婦人に人間違いされて、何もかもが用意されたように話しが進んできた様子に、違和感を感じながらも、夢でもみているような、別世界にいきなり来た状態にレインは感じていた。

シャワーを浴び終わると、ボーイが下着とバスタオルを持っていて、レインに手渡しした。

レインは恥ずかしくてたまらなくて、たじろいでいると、ボーイはレインに背を向けた。

レインが下着を身につけると、ボーイはそばにあった紙袋から、カツトソーとパンツを取り出し、レインに着替えをさせた。

レインの髪をボーイは整えて、顔に化粧水を塗って、香水を振り掛けた。

ボーイはレインの指先に汚れが残っているのを洗面台で洗ったが落ちなくて、レインをシャワー室から連れ出した。

ある部屋に通されて、ドアが開くと、そこには、全面ガラス張りの部屋だった。

あられもない災害の状態を目の当たりにできる部屋だった。

「うわあ〜。」

ガラス越しまで近づいてレインはただ、驚くばかりだったが、ミセス・ロックフォードは飲み物を手にし、ガラス越しに下を覗きこんでいた。

「自然災害のまえでは人間って無力ね。」

ミセス・ロックフォードはそういって、レインの方へ振り返った。

「まあ、綺麗な顔立ちに似合わないような筋肉質なのね。」

レインは自分の格好を改めて見直してみた。

上に来ているカツトソーは肌に密着していて、胸がすこし盛り上がっているのがわかり、胸の下の腹筋が割れている様子に自分の手でさわったりした。

「そうだわ。あなたの本名を聞いてなかったわね。」

「あ、すみません。僕、レイン＝スタンドフィールドといいます。」

「え、スタンドフィールド？」

「ええ。」

「アレックスの子孫なの？」

「ええ、まあ、そうです。」

ミセス・ロックフォードは飲み物をサイドテーブルに置くと、腕組みをした。

「まあ、それはすばらしいわ。私、アレックスの本を書こうかとおもっていたところなの。」

「アレックスのですか。」

「そうよ。彼の輝かしい功績を称えるのではなくて、人間らしさや男らしさなど彼は神ではないっていう意味合いのものを書きたいの。」

「はあ。」

レインは想像にもできない様子で、ミセス・ロックフォードを見ていた。

ミセス・ロックフォードはレインの肩越しを指差した。

「あれがスカイエンジェルフィッシュ号かしら。」

レインが振り返ってみると、オレンジ色に黒の縞模様の空挺が飛んでいた。

「そうです。クルーが到着したんだ。まだ、着陸許可がもらえないのかな。」

ミセス・ロックフォードはレインの背後から手を回して、レインの手を取り、指先を見ていた。

「指先の汚れは落ちなかったのね。」

ポニーは、申し訳ありませんと謝った。

レインの背中にミセス・ロックフォードの胸が当たり、首筋に吐息がかかる。

全身が紅潮していくのを感じてレインはつばを飲み込んで、冷静になろうとした。

「クルーって、あなたの家族がいらして？」

「ええ。どうしてですか？」

レインはしばらく間を置いて答えた。

「知っているわ。黒衣の民族に襲撃されてアレキサンダー号が破壊された話しを。」

そして、クルーのひとりでスタンドフィールドの人間が亡くなったことも。」

レインはこころのなかで、フレッドのことだとつぶやいた。

「もうひとり、いらしたわね。美青年だって聞いているわ。あなたはその方に似ているのかしら。」

「さあ。僕は母親に良く似ているって言われます。」

目を節目がちにレインは答えた。

「あなたのお母さんは幸せかしら。」

そう言われて、ただ驚いていてレインは何も言わずにいた。

「思ったとおりね。レジーナの呪いね。」

「レジーナの呪い？川の氾濫とか、災害に見舞われたりしたけど・・・。」

「女難なのよ。オンナを不幸にするって言われてるの。知らなかった？」

レインはまた、黙り込んだ。

「女性問題に常時巻き込まれ、愛した女を幸せにできないというレジーナの呪い。」

アレックスの幸せをねたんで、子孫の男子は女難になるという呪いをかけたのよ。」

「そんなこと、ありません。母は不幸ではありません。僕たちの仕事は命の危険と隣りあわせで、黒衣の民族とはたまたま交戦したのをきっかけに狙われるようになったって。」

ミセス・ロックフォードはレインの様子を含み笑いで眺めていた。

レインはその様子に苛立ちを感じた。

コンコン

部屋のドアのノックが聞こえた。

「ロックフォード様。ご注文の品が用意できましたので、お持ちし

ました。」

「中に入って頂戴。」

ボーイがドアを開ける音がして、先ほどの店員が中に入ってきた。紙袋の中から、紳士服を取り出し、ソファアの上に掛けた。

ミセス・ロックフォードはボーイを手招きした。

「彼に着替えさせて頂戴。」

「かしこまりました。」

ボーイは服を腕にかけて紙袋と取り、レインに別の部屋へ行くよう手招きした。

レインがいぶかしげに見ていると、ミセス・ロックフォードは瞬きをして部屋へ行くよう促した。

部屋に入って、ボーイはレインの着替えを手伝った。

店員は支払いのサインをもらうと、お辞儀をして部屋を出た。

ミセスロックフォードがガラス越しをまた覗くと、SAFは着陸態勢に入っていた。

レインが着替えを済ませて部屋を出てくると、ミセスロックフォードは電話をしてて会話を終えたところだった。

「素敵だわ。間違えるようよ。わたしのお手伝いはここまでね。離陸許可が下りて、出発の準備ができたみたいだから、わたしはホテルをチェックアウトするわ。」

ロビーまではボーイに案内させるわ。エレーナには私から連絡しておくわ。」

「あ、ありがとうございます。」

「お礼はいいのよ。まだ、あなたがミセスヴェネクトと一緒にここを発つと決まったわけじゃないのだから。」

「え、でも。」

「あなたが紳士服を着た姿をみたかっただけなの。とても、素敵な紳士になれそうね。作業員なんて、もったいないわ。」

「社交界にデビューさせたいくらいよ。」

レインは社交界という耳慣れない言葉に戸惑った。それは皇族とか

がいてるパーティなのだろうかとか考えた。

質問すれば、子ども扱いを受けるに違いないと、言葉を口にしなかった。

「今後も無事のフライトできるように、祈っているわ。」

そういつて、ミセス・ロックフォードは部屋を出て行った。

レインは振り返って、ガラス越しに下を覗きこんだ。

SAFは着陸していた。中からクルーが出てくるのが見えた。

ロブは救護部のなかを治療をうけているはずのアルバートを探した。見つけると、そばにはジリアンしかいなかった。

ロブがジリアンに話しかけようとしたときに、女性に話しかけられた。

「あなたが、レインさんのお兄さんですか。」

ロブは見知らぬ女性に声を掛けられてしばらく、何もいえなかった。その女性はエレーナ「ヴェネクトでロブにレインを連れ出す話をお願いがてら説明をした。

「それで、レインは？」

「今、知り合いのミセスロックフォードにお願いして着替えをしてもらって、もうすぐこちらに。」

エレーナがあたりを見回していると、レインがボーイに連れられて現われた。

老婦人とエレーナは驚嘆の声をあげ、ロブはレインの姿に啞然とし、ジリアンも驚いていた。

そこへ、着任の手続きを終えたクレアとコーディが現われた。

「おいおい、これはいったい。君はもしかして、レインかい。」

紳士服をきたレインをみたクレアはそういつて、驚きもしなかった。

「レインです。クレアさん。まぎれもなく。」

「まいったな。どういうことだ。」

レインは、事情を説明した。そして、ミセス・ロックフォードの話もした。

「いま、何て言ったの？」

「え、白髪の女性。」

クレアの問いにレインが答えると、ロブが口を挟んだ。

「ロングドレスにつばの広い帽子じゃないのか。」

「ええ、そうだけど、知り合いなの？」

クレアとロブはふたりで見合わせた。お互い考えてることが同じである事を確認しているかのようだ。

（廠の縁者か。）

ロブはこころにつぶやき。

（ひっかかかってきたか。）

クレアは思った。

「じゃ、俺も一緒に行く。」

ロブが言うとかレアが制止した。

「待て、お前がいったら親子喧嘩して収集つかなくなる。」

「え？そんなことなりませんよ。」

「まあ、いいから。コロンバ自治区なら、理事長が滞在しているはず。第六秘書に連絡してサポートしてもらおう。」

「ジリアンも一緒に行くといい。」

「もう、この時間だと今日中には戻ってこられない。保護者も連れて行かないと。」

「なら、キヤスがいけばいい。」

「キヤス？」

「コーディ、第六秘書に連絡とってほしい。後のことは頼むわ。」
そういつて、コーディを手招きして、そばに近寄らせると、コーディの耳にそつと囁いた。

「スタンガンスティックをレインにもたせて、ジリアンのポケットにメモをいれてあげてほしい。」

クレアはそういつて、メモの内容をコーディの耳に囁いて伝えた。

「了解しました。」

そして、クレアはエレーナに笑顔で言った。

「スカイエンジェルフィッシュ号のクルーであるレインがあなた方のお役に立てられるのなら、お連れして結構です。」

あと、ジリアンとカスター・ペドロも一緒に連れて行ってもらいたいです。」

コロナバ自治区では、私どもを管轄しておりますグリーンオイル財団研究所のものが手はずをしますので、後のことはその者にお任せください。」

エレーナは安堵した顔で、お礼を述べた。

ロブは事の運び具合に違和感を感じていたが、この雑多な状況下でパニックに陥ってもおかしくない災害救援活動に未熟な二人を、置いておくよりまだと思うようにした。

「ロブはアルバートに付いていなさい。」

「え、でも俺も。」

「デイゴがテオ少佐に借り出されることになったから。」

「はあ。」

「わたしは診療任務につくから、あとはコーデイにまかせる。連絡もコーデイにしてくれ。」

「了解。」

ロブは腑に落ちない顔をして、クレアが去っていくのを見ていた。そして、呆れた顔でレインを見ていた。

レインは老婦人に抱きつかれてしまい、身動きがつかない状態になった。

カスターがSAFから降りてきて、やっとみんなのところへやってきた。

「ああ、遅くなってしまった。いろいろ手続きとか大変で……。」

「キャス、悪いが、ジリアンと着替えをしてきてくれ。」

ロブはジリアンを手招きして呼び寄せながら、カスターに言った。

「え、どうして?」

「事情はジリアンが説明してくれる。できるだけ、汚れていないものを着てくれ。」

ロブはジリアンに目配せをした。ジリアンはめんどくさそうに、レインの方へ指をさした。

カスターはジリアンの指差す方向をみて、レインの姿をみて、驚いて言った。

「おや、まあ、どちらの貴公子かと思いましたよ。」

コロンバ自治区に到着したレインたちは、空港のロビーでヴェネクト夫人と第六秘書が来るのを待っていた。

レインが周囲をうろついている姿をカスターは気になっていた。

「落ち着かないのか、レイニー。」

「いや、なんでもないよ。」

落ち着きがないのは、エミリアがどこかにいるんじゃないかと探し、てしまうのを止められないからだ。

そして、落ち着こうとした時、外を悲しそうに見つめる少女がレインの目に入ってきた。

少女はブレザーとプリーツのスカートとという学生服を着ていた。

レインはその少女の横顔を見て、どこかで見たような気がした。

「ルチアーノ。待たせたわね。」

レインが、その言葉に振り向くと、車椅子の老婦人がいた。

そこへ、理事長の第六秘書セリーヌ＝マルキナが現われた。

「こちらにいらしたのですね。お迎えにあがりました。」

事情はコーデイさんからお聞きしました。」

セリーヌは車椅子を手に掛けているエレーナに挨拶をし、名刺を渡した。

そして、ホテルのカードを手渡した。

「こちらのホテルにてお部屋を用意しておりますので、万万事務がお済みになりましたら、こちらにレインさんをお連れしてください。」

「心得ました。お気遣いありがとうございます。レインさんを拝借させていただきます。」

エレーナは軽くお辞儀をして、車椅子を押し、前に進んでいた。

レインは外を眺める少女を見ながら、エレーナの後を歩き始めた。

外を眺めていた少女はゆっくりと振り返り、エレーナの進む方向へ

歩き始めた。

その少女がエレーナと顔をあわせると、エレーナは立ち止まった。

「あら、どちらのお嬢様かと思えば、ミス・アンコーナではないですか。」

車椅子の老婦人はその少女に声を掛けた。

「こんにちわ。ヴェネクト夫人。」

レインはアンコーナという名を聞いて思い出しそうになっていた。

「御機嫌よう、コーネリアス嬢。浮かない顔をなさっているのね。」

エレーナが気を使って話しかけた。

「ええ、今日は学園のチャリティ観劇会がありました、父と鑑賞する予定でしたが、父が先ほど来れなくなつたと連絡がありましたの。空港まで迎えにきましたのに、残念ですわ。いまさら、エスコートしてくださる紳士を探すわけにいかず、途方にくれていましたの。」

「まあ、それはお可愛そうに。」

そういつて、エレーナは少し考えてレインの方へ振り返つた。

「ルチアーノ、よろしかったら、こちらのお嬢さんと観劇会に一緒にいってくださらないかしら。」

「え？」

レインはどういう状態なのか、わけがわからなかった。

「コーネリアス嬢。その観劇会は夜に行われるのでしよう。」

「ええ、そうです。」

コーネリアスは紳士服を着た少年の姿を見て、少し顔を赤らめた。

エレーナはレインの腕を取り、引き寄せて耳打ちした。

「夕食を私どもの屋敷で、その後、このお嬢さんと観劇に行ってくださいな。」

夕食をやり過ぎせば、義母を寝かしつけますので、もうそれで、あなたを解放させることができます。」

観劇は義母への口実です。」

「はあ。」

レインはコーネリアスの方をちらりと見た。

すると、コーネリアスの背後から蝶ネクタイの男性が現われた。
「お嬢様、こちらにいらしたのですか。そろそろお戻りなりませんか。」

ヴェネクト夫人、ご無沙汰しております。」

その男性は老婦人やエレーナに向かってお辞儀をした。
老婦人は会釈程度に、エレーナは手をあげて挨拶した。

「ピエトロ、エレーナさんが、こちらの男性の方にエスコートをお願いしたらとおっしゃってくださっているの。」

ピエトロは、コーネリアスの執事で、レインの方をみて言った。

「これはこれは、見違えるようですね。あなたはワイナリーでお会いした少年ではありませんか。」

確か、スタンドフィールドの……。」

ピエトロが言い終わらないうちにエレーナが口を挟んだ。

「ルチアーノ、このお嬢さんをお願いを引き受けてくださるわね。」
エレーナはレインを肘で突いた。

「え、あ、はい。」

ピエトロはその様子に、老婦人の病気が出てしまっていることに気がついた。

「ああ、思い出した。あの時のじゃじゃ馬娘！」

言った瞬間、レインは口に白い手袋をつけた手で押さえた。

ピエトロは咳払いをして、エレーナに感謝して、打ち合わせをした。
夕食後にヴェネクト家に迎えに行き、劇場へ二人を送迎する手はずになった。

顔を紅潮させていたコーネリアスは次第にレインの事を思い出して、
普段の顔色になった。

レインのそばに寄り、顔を覗き込んだ。

「まあ、ほんとと見違えたわ。あの時、腕を骨折していた方ね。失礼
だわ、じゃじゃ馬娘だなんて。」

ふくれつつらしたコーネリアスにレインは謝った。

口ブが散々、コーネリアスの事をじゃじゃ馬娘だって言っていたか

らだった。

「わたしをエスコートしてくだされば、それでよろしくてよ。」

コーネリアスは笑顔で首をかしげて愛らしいしぐさを見ると、レインは頭をかきながら、困惑した顔をした。

（パラディーゾデラモンテグナ都市へ来てから、変なこと続きだな。）

第六秘書セリーヌ・マルキナはカスターとジリアンをつれて、車に乗り込み、ホテルに向かった。

車の中で、今後のスケジュールを打ち合わせていた。

「ジリアンさんは理事長とお食事をしてもらいます。」

「え、僕は？」

「カスターさんは、申し訳ありませんが、お一人で食事をしていただきます。」

「え、そんなあ。・・・あ、セリーヌさんと一緒に食事をするっていうのはどう？」

「申し訳ありませんが、そういったことはご遠慮させていただいております。」

カスターは身を乗り出していたが、しよげて、シートにもたれた。

「セリーヌさん、僕が理事長同席の食事を断ることってできるので、すか。」

「断られるような事をおっしゃられましたら、セイラ様が悲しまれることでしょう。ジリアンさんに会える事を楽しみにされているのですから。」

「セイラが？」

「そうです。」

ジリアンは意外だったが、セイラに会えるならと、嬉しくなった。

カスターは少しふてくされながらも、ジリアンとセイラが一緒にいられるなら、仕方ないかと車の窓から外を眺めた。

コロンバ自治区は、レンガ造りの館が建ち並ぶ閑静な住宅街が点在

している都市で、古くから財力を持ちあせた上流階級の人々が居住していた。

ジリアンはふと、思い出したことを口にした。

「セリー又さん、理事長の……。」

「奥様でしたら、夕食はご一緒しません。ご病気だとうかがっております。」

「そ、そうですか。」

ジリアンにすれば、セイラには会いたいが、セシリアには会いたくなかった。

二人がホテルに着くと、ロビーでセイラが待っていた。

ジリアンをみつけたセイラは駆け出して、ジリアンに飛びついた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。」

「わあ、ちよつと見ない間に大きくなつたね、セイラ。」

カスターは二人のすがたを微笑ましく眺めていた。

セイラが駆け出したところにメイド服を着た女性が立っていて、ジリアンたちのところへ寄ってきた。

「ジリアンさんですか、わたくし、セイラ様付きのメイドでカミーユと申します。」

カミーユはお辞儀をした。

セリー又はホテルの受付で鍵を受け取ると、カスターに手渡した。

「ホテルの部屋には、お二人の着替えを用意させてありますので、着替えてください。」

カスターは、わかりましたと言って、鍵を受け取った。

「ジリアンさんは、時間になりましたら、呼びにいかせてもらいます。夕食後は、理事長がジリアンさんとお話したいとのことです。」

セイラと一緒になのに、嫌な感じがする理事長と話をすること、はあまり気にしないようにしようとジリアンは考えた。

セリー又は続けざまに話した。

「ホテルにミセス・ヴェネクトから連絡がありまして、カスターさんはよろしければ、レインさんが観劇されるということですので、

劇場へ行かれませんか？」

「え？僕が？」

「そうです。劇場へは用意した服装では入れませんから、また、こちらで用意させてもらいます。」

カスターは少し考えた。レインのような格好をさせられるのか、それもいいかなと思った。

勘ぐってジリアンはいじわるなもの言いをした。

「まさか、執事の格好をさせるんじゃないでしょうね。」

「まあ、そのようなこと。普通にスーツ姿ですよ。チケットはありませんから観劇はできませんが、チャリテイ参加として寄付をすれば劇場内へ入ることができます。」

「寄付って……。」

「財団の代理として、寄付していただきますよ。」

「まあ、それなら。だとすると、レインのお目付け役ってことで、ジリアンは？」

「私どもが責任をもって、保護させていただきます。」

「では、そうさせてもらおうよ。」

「それから、カスターさんは、ホテル内のレストランにてルームナンバーでのお支払いにお食事を済ましてください。夕方にはタクシ一の運転手を迎えに来させます。」

セリーヌは言い終わると、その場をすぐに去っていった。

「ねえ、お兄ちゃん。セイラとまた、遊んでくれる？」

「お嬢様、ジリアンさんはこれから着替えをされに行くのです。それからにしましょう。」

カミーユはセイラを宥めた。

ジリアンはセイラの手の小ささを確認するかのように、握られた手を握り返した。

「セイラ、僕は君にまた会えて嬉しいよ。あとでまたね。」

「うん。」

セイラは嬉しそうにうなづいて、ジリアンの手を離した。

ヴェネクト家では夕食の準備があわただしく、されていた。

屋敷に着いて、すぐ、エレーナはレインをつれて、化粧室へ行き、自分のドレッサーから瓶をもつてくると、手袋をはずさせてレインの手を洗ってから、ファンデーションを指先につけた。

「お仕事の関係でしょうが、指先の苔のような汚れを目立たなくしておかないと。手袋のまま、食事をさせるわけにはいかないから。」

「あ、はい。」

「ほんと、ごめんなさいね。こんなことになって。いままでは中年の男性から徐々に、退化が激しいのか年齢が低下して来ていたの。」
「僕は、こういったお屋敷なんて、入ったことも無くて、なんていうか、世界が違っつて感じて、戸惑ってしまっつて。」

「あら、そうなの。でも、コーネリアス嬢とはお知り合いなのでしよう。」

「顔見知り程度ですよ。」

「でも、おかげで口実ができて、助かったわ。どうやって、あなたを解放しようかしらと思っていたの。」

「義母はあなたをベッドまで連れて行くかもしれないんですもの。」

「ええ！？それは……。」

「嫌でしょう。だから、もう、コーネリアス嬢は助け舟みたいな感じですが、り付いちちゃったわ。」

エレーナはメイドを呼びつけると、レインの爪を手入れするように言った。

レインの指先はあらかた汚れが見えなくなっていた。

ヴェネクト家で夕食を済ませると、老婦人はあっさりレインに「おやすみ」と挨拶をした。

もうレインに会うことがないのを知らないからだ。

エレーナが車椅子を押す後ろ姿を、レインは名残惜しそうに見つめていた。

「なんか、夢のような感じだな。まだ、続くのかな。」

レインはメイドに部屋を通され、そこで着替えをさせられた。

蝶ネクタイの礼服装に、レインはたじろいだ。メイドにはスタンガンステイックを取り上げられたが、取り返して、ベストの内側に落ちないようにたすき掛けのベルトで固定した。

手を洗うと、エレーナに手入れされた指先がまた蒼色になっていて、それを白い手袋で隠すしかなかった。

シルクハットをかぶせられて、メイドは「仕度ができあがりました。」と言った。

ヴェネクト家の玄関にはアンコーナ家の執事ピエトロが迎えに来ていた。

「これはこれは、お似合いです。素晴らしい。」

レインの姿を目にしたピエトロが言った。

エレーナが老婦人を寝かしつけて、玄関にあらわれた。

「レインさん、ほんとご迷惑を掛けてしまって、なんとお礼を言っていたいのやら。」

「いえ、別に、迷惑など。喜んでもらえたらそれで。お世話になりました。」

節目がちにレインはエレーナにお辞儀をした。

「こちらこそ、ありがとうございます。今後の活動のご無事や活躍を祈っているわ。」

エレーナは目を潤ませながら、レインを見送った。

黒い車にレインが乗り込むと、そこには髪をアップに結って、パフ・スリーヴのピンクドレス姿のコーネリアスが乗っていた。

彼女の姿に驚きながら、隣にレインは座った。

コーネリアスはちらりとレインを見ると、前に向きなおした。

今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「素敵な装いだね。見違えたよ。」

「レインさんこそ、またさらにとっても素敵な紳士に見えましてよ。」

涙声だったコーネリアスに、レインはそっとハンカチを差し出した。

そして、それから何も言わず、車の窓から外を眺めていた。

グリーンオイル財団の理事長が泊まっているペントハウス、そのダイニングルーム。

セイラはメイドのカミューに食べさせてもらって、夕食を摂っていた。

隣にはジリアンがいて、セイラがにこやかに大人しくしていたのはジリアンがお絵かきに付き合ってくれたからだだった。

セイラの嬉しそうな様子に、理事長のデューク「ジュニア」デミストは顔を緩ませながら食事を摂っていた。

「時に、ジリアン君。君は先ほどから、セシルのことを聞いたりしないね。気に掛けたりしないのかな。」

ジリアンはそのころの暗闇に引き連れ込まれる感覚がして、青くなって硬直した。

引きちぎれそうになるくらい腕を引っ張られて、小屋に連れて行くとするセシリアの姿が脳裏に浮かんでいた。

「君にとっては、実の母親なんだよ。そして、その同じ母親をもつセイラがそこにいてる。」

幼い娘がここにいるというのに、母親はそばにいないんだよ。おかしいと思わないかい。」

セイラは父親のダグラスが何を言っているのかわからないので、口のおぼった食べ物をよく噛んで食べることに集中していた。

「マルキナさんから、病気だと聞きました。」

脂汗がでてきそうに、体がだるくなるのを必死に意識にしないようにして、搾り出すように言葉を口にした。

「確かに、病気なんだ。でも、もう、治らない病気なのかもしれない。何度も手を尽くしたが、どうにもならないんだよ。」

ジリアンはどんな病気かと尋ねることはしなかった。セシリアがどんな病気になるうとも、関係ないと思っていたからだ。

セイラは悲しむのだろうか、それだけが脳裏に浮かんだ。

「この話の続きは夕食後にしよう。」
「この話は浮かない顔をした。セイラとこのまま、ずっと一緒にいられたらいいのと思っっているのに。」

カスターはひとりホテルのレストランで、食事をしていた。

なにか、視線を感じるので、振り向くと、白髪の女性がカスターをみているのに気が付いた。

目が会うと、首をかしげてニコリと笑顔になるので、ドキツとした。その女性が席を立って、カスターに向かってくるので、何か声を掛けられるのかと待っていたが、その女性はカスターの横を通り過ぎていった。

カスターは自分の妄想の思い違いにガツカリした。

（期待通り展開しなくても、声をかけてもらうだけでもいいのに。）
ないか、と思いつながら、カスターは天井を見上げた。

アルバートに付き添っていたロブだが、周りがあわただしくしているのに、じっとしていられない気持ちでいた。

アルバートは鎮静剤と睡眠剤で、気持ちよくうつ伏せで寝ていた。

コーディに声を掛けられて交代し、夕食を食べに行つた。

夕食は配給になっていて、器とフォークを手に持ち、鍋を横に置いた係りの者に渡すと、スープを入れてくれる。

硬い棒状のパンを手渡されて、ロブは食した。

ホテルのロビーは吹き抜けでそこから外が見渡せる。

日が暮れて夜になっていたが、ホテルの玄関には庭園が広がり、街灯があたりを美しく照らしていた。

巨大な岩盤落石の粉碎爆破により、庭園も荒れて破壊されたところもあったが、ところどころ街灯が点いていなかったのを見苦しくはなかった。

一息ついたところへ、庭園に出てみると、虫の鳴き声が聞こえ、涼

しい風が吹いていた。

リラックスできそうな状態に、相反するものがロブのそばに現われた。

むさくるしい男がふたり、テオとデイゴが汗をかき、その汗に土埃がまとわりついていて、より一層むさくるしさをかきたてていた。

「ひさしぶりだな、ロブ。」

「ご無沙汰ですね。アラゴン少佐。」

少佐の分も食事もらってくるよとデイゴはそのまま、中に入っていた。

首に巻いていたタオルで顔の汚れや汗をふき取り、テオはそのまま、そこへ座り込んだ。

庭園には他にも人が何人かいて、疲れを癒し涼んでいた。

「レインに会ったが、レテシアと間違いそうになるな。」

「髪は短かくしてましたか。」

「ああ。」

ロブが知っているレテシアはロングヘアであって、短髪でなければ、見間違うことはないだろうと思っていた。

「ところどころで会う軍人には、よく間違えられて、レインはふてくされるんですよ。」

ロブはそう言い草をしながら、目は遠くを見ていた。

「女の子みたいだからなあ。まあ、でも、たくましく見えないことも無いな。体がしつかりと引き締まっているように見えた。」

デイゴが両手に器を持って、現われると、立ち上がってテオは器を受け取った。

「人気の無いところで話をしたいんだが。」

テオの言葉にただならぬ雰囲気を感じ、ロブは身まがえしながら、うなづいて、デイゴとともにテオについていった。

「人に聞かれたらまずい話か。」

デイゴがそういうと、テオは「そうだ。」と言った。

テオが話す内容は、軍部の内情だった。

軍部は今、皇帝崇拜派と、皇帝廃嫡派に分かれていた。

次期皇帝に、皇女殿下フェリシアを望まないものが軍部で派閥を作り、徒党を組んでいるというのだった。

皇帝崇拜派といっても、皇帝を亡き後、力なき皇女殿下を擁して摂政を狙う者がいるかもしれないという。

「ホーネットクルーは、その廃嫡派によって、解散させられたと思われるが、事実は皇帝が下した命令であつたからな。」

「皇帝を守護する軍隊でも作れば、表沙汰での恐怖政治でも始まるとでもいうのか。」

「そこまですることにはならないだろうが、廃嫡派は宮殿に近寄れないように、遠ざけられているところはあるさ。」

「それで、アラゴン少佐は、このような災害救助の任務に就かれていて、廃嫡派には煙たがれているのではないですか。」

テオは、スープをすすり、パンをかじり、しばらくだんまりを決め込んだ。

「クレアが首を突っ込んでいるのはグリーンオイル財団で、義父のダンが亡くなった事件にまちがいに全く関わっているからだが。」

食べ終わったデイゴは、器をその場において、座り込んだ。

「グリーンオイル財団がどちらについているかだな。表面上は皇帝についているように見えるが、一方では廃嫡派についているんじゃないのか。」

デイゴがしゃべり続けていて、ロブとテオの双方は話をしようとしなかった。

テオが言いたい事を口にした。

「グリーンエメラルダ号が、どっちについてるか気になるんだ。ハートランド艦長による私物化が軍の内部では問題にならないわけじゃない。」

皇帝が容認しているとの話もあるが、帝位に就く前からの話しだというのを知っているものがあるからなあ。」

テオが言わないとしていることを、考えないわけでもない」とロブは

思っていた。

皇帝についていると思われても仕方ないし、命を狙われるなら、それは承知の上で、自分の身は自分で守らなければならないことぐらいいはするだろう。

「ロブ、お前は知っているのか。」

「何ですか、急に。」

「レテシアが空中アクロバットをしているのさ。あいつ三十路だぞ。」

「はあ!？」

「エアジェットで空を飛んでいるのではなくて、身ひとつで空を飛んでいると見た者は言うんだ。」

ロブは額に手を当てて下を向いた。

(あいつ、何を考えているんだ。)

「お前に対するパフォーマンスじゃないだろうなあ。」

開けっぴろげにデイゴは言ったが、だったら痛い話じゃないかと言葉を口にしないままに、ロブはいたたまれない気持ちになった。

下を向いた顔を上げると、青白いくすんだ空に真ん丸い月が明るく照らしていた。

レインが劇場に着いて、車から降りると、大理石で出来た玄関に彫刻の造形物がレインを迎えてくれた。

おのぼりさんよろしく、周囲を見回して、立ち止まっているレインに、コーネリアスが後ろから腕を差し込んだ。

あっエスコートしなきゃとこころでつぶやくと、レインは背筋を伸ばして、コーネリアスの腕を引き寄せた。

二人が玄関を通ると、紳士淑女が多くいて、受付の前で混雑していた。

ロビーは4階吹き抜けで天井からいくつかシャンデリアが下がっていて、より一層チカチカときらめいていてまぶしかった。

受付では、執事のピエトロに言われたとおりに、小切手帳を出し、

すでに書かれて捺印されたものをその場で切り取り係りのものに手渡した。

受付を済ませると、3階に席があるからとロビー脇の階段に進み、3階に着くと、10代の女性が連れ立って固まっている人ばかりがあり、そのうちの一人がレインとコーネリアスを見つけると隣に口伝えし、そして、一斉に二人の方へ視線がいった。

「あらあまあ、うそつきお嬢様がいらしたわ。ペテン師をお供に連れて。」

一団のなかから、高慢そうな女が前に進んできて、二人を一瞥した。そして、周囲は口々に言いたい事を言う。

「アレックスの子孫って大嘘ね。なにあれ、アレックスは金髪なのに、あの子はブラウンよ。」

「凛々しいお姿が生き写しにならない、女の子みたいだわ。」

「アンコーナ家って成り上がりじゃなかったかしら。」

「嘘をつくのも平気なのねえ。」

コーネリアスの耳に侮蔑ぶへつな言葉が聞こえても、聞こえない振りを決め込んでいた。

レインは動揺していたが、コーネリアスの毅然とした態度に、気を引き締めた。

人だかりを避けて、客席へ向かおうとドアに足を進めていると、人だかりの奥から聞き覚えのある声が出てきた。

「青臭いあおくさ、田舎者のおいがするわ。」

レインは立ち止まって、振り返った。

人を分けて前に進む婦人があらわれて、羽付きの扇子を口元に当てて言葉を発した。

「臭い、臭い、臭い、ほんと臭いわ。においが鼻につくわ。どなたかしら、このような青臭いお子様を観劇に連れてこられる方は？」

レインは驚きのあまり、開いた口がふさがらなかった。

その婦人がセシリアだったからだ。

レインを軽蔑する様子のセシリアは、レインが好きだった淡い石鹼

の香りが漂う笑顔が素敵なセシリアではなかった。

今にも、手に持った扇子でぶたれるのではないかと思うような勢いで、にらみつけられた思いがした。

セシリアの後ろから、紳士があらわれた。

「どうかなさいましたか、デミスト婦人。声を荒げて、あなたらしくもない。」

赤茶色のベルベットの着を着こなし、宝飾品を身につけていて、見劣りしない容姿の紳士はコーネリアスが通学するお嬢様学校の理事長だった。

こげ茶色の巻き毛を指でいじりながら、笑顔でレインたちを見ていた。

「アンコーナ嬢ですね。あなたの話題が上つていたところなのですよ。お連れの方が噂のスタンドフィールド家の方ですか。」

嫌味のない笑顔に、レインは少しホツとした。セシリアは相変わらず、蔑んだ目みけすをしていた。

「ブライアン。その少年を中に入らせないで頂戴。臭くてたまらないわ。」

「そのようなこと。アンコーナ嬢がお連れした方に対して失礼ですよ。」

理事長はセシリアの肩を抱いて、客席に向かおうと促した。

「アンコーナ嬢、気を悪くしないでくださいね。わたしがお連れした婦人は気分が上下する方なのです。わたしからお詫びします。ごめんなさい。」

「いえ、そんな、わたし、気にしていませんわ。理事長。」

「ミスター、馴れない場所での不愉快な出来事に気落ちしないでくださいね。今日の観劇をぜひ、楽しんでいただきたい。」

理事長は笑顔でレインに話しかけた。そして、彼を置いて、先にいったセシリアを追いかけるように、その場を去った。

その場にいた人ばかりは蜘蛛の子を散らすようにいなくなっていた。

「車の中で泣いていたのは……。」

とレインが口にする、うつむいてコーネリアスは言った。

「前もってエスコートしてくださる紳士の名を明かさなければいけなかったの。」

レインはコーネリアスの手を引くと、コーネリアスは首を振った。

「あのご婦人はあなたのお知り合いなの？」

「いや、なんていったらいいの。」

「言いたくなければいいわ。客席に行くのはやめましょう。あなたに臭いがするわけじゃないわ。」

観劇を楽しむ気分になれないの。それに……。」

「それに？」

「今日のお芝居は、女帝レジーナの悲恋物語なの。」

レインはじいさまから散々聞かされた話が脳裏にかすめ、「ああ。」とつぶやいた。

場内放送があり、劇場で上演が始まった様子。それぞれのフロアには、飲み物を提供する場があった。レインとコーネリアスはフレッシュジュースを手に取り、ソファに座った。

腰を落ち着けた二人は、不愉快な出来事を思い出さないように、別の話をした。

コーネリアスがロブの事を聞きたがるので、ロブに興味があるのだろうと思っていた。

レインはジリアンやSAFの話はしても、レテシアやエミリアの話はしなかった。

そして、お互い打ち解けたところで、友達になろうという話になり、手紙のやりとりの約束をした。

劇場にカスターが到着した。レインと同じく、おのぼりさんのようにあたりを見回して立ち止まった。

係りのものに促されて、受付を済ませた。第六秘書のセリーヌに言われたとおり。

念のため、受付で、レインの連れが来ているかどうか確かめた。席が3階だと聞いて、3階のフロアに行こうとした。

すると、レストランで見かけた白髪の女性がいて、カスターに歩み寄ると、話しかけた。

「グリーンオイル財団の方ですか。このような観劇に出向かれるなんて、珍しいですこと。」

「あ、いえ、僕は代理できた者なのです。知人とここで落ち合う予定でした。」

「そうですね。知人はお見えになっていないのかしら。」

「あ、いや、もう受付を済ませて、客席にいてると思います。フロアで待たせてもらおうかと。」

「でしたら、それまでの間、わたくしとおしゃべりにお付き合いく

「ださいませんか。」

レストランで妄想した内容に偶然にもはまっていきそうな展開を感じ、カスターの鼻の下は長く伸びた。

「いやあ、願っても無いことです。あなたのようなお美しい婦人と一緒にできるなんて。喜んでお付き合いますよ。」

話がうまくはずまず素性がばれて、嫌われるようなことになりませんようにと願った。

二人は一階の軽食コーナーで、お茶をすることにした。

白髪の女性は、宝石商の夫を持つ身で名をカオル・ロックフォードと言った。カスターは正直に本名を名乗った。

上演が始まって時間が経って受付に犬を連れた婦人がやってきて、観劇させるよう係りのものに食い下がっていた。

「嫌ですわ。あのような小動物を劇場に連れ込むなんて非常識な人がいるのね。」

カスターはミセス・ロックフォードの言葉に受付のほうへと振り向いた。

カスターが振り向いている隙に、ミセス・ロックフォードは羽付きの扇子で口を隠した。ジュースをすすったストローの先を扇子の羽にまぎれこませて、息を吹き込んだ。

ストローの中から何か飛び出して、受け付けで揉めている婦人が抱いた犬に突き刺さった。

犬はキャンと鳴きさげぶと、飼い主の首筋をひつかき、その場から飛び跳ねた。

「ぎゃあ〜〜つ。」

犬は痛みを感じて狂ったように走りまわり、階段を上っていった。劇場のロビーやフロアに残った客が少なからずいて、叫び声のするほうへ、寄っていった。

レインとコーネリアスも、驚いて、ソファを立ち、吹き抜けの方へ駆け寄り、3階の手すりから下を覗きこんだ。

犬は1階から2階へ、さらに3階に上がってきた。4階へいたる階

段は別の場所にあるため、犬は3階のフロアを走り回った。

振り返ったレインめがけて、犬が突進してきた。身構えたレインに飛び乗ったかと思うと、レインを踏み台にして、犬はジャンプした。レインは咄嗟に身を乗り出して、犬の尻尾を掴んだために、手すりから落ちていった。

「キヤーツ。」

コーネリアスは叫んで、目を閉じた。

レインは3階から落ちたが、右手で犬の尻尾をつかんでいて、左手でシャンデリアの吊ったワイヤーを掴んだ。

レインが掴んだシャンデリアは大きく揺れて、チャリンチャリンとガラスが擦れる音をたてた。

犬は尻尾をつかまれたので、余計に興奮しレインの手を噛んだが、痛みをこらえてレインは犬を引き寄せて抱きかかえた。

シャンデリアの照明部分まで降り、体重でバランスを崩さないように足をのせた。

コーネリアスは、大きな物音がしないので、目を開けて、手すりに身を乗り出し、下を覗いた。

レインが上を見上げると、コーネリアスが驚いた顔を覗かせていたのが見えた。

レインは下への距離、周囲の間合いを目で測った。犬を両手で抱きかかえると、ジャンプして、宙を舞うように前転をして、一階のロビーに着地した。

犬は相変わらず、吠え続けていたが、レインは犬を放すと走り回ると思っ、きつく抱いていた。

コーネリアスは、レインの所業に驚いて腰を抜かし、手すりを両手で握り締めて、その場でしゃがみ込んだ。

レインに劇場の係り者が近づいた。

「大丈夫ですか。」

「ええ、大丈夫です。」

「犬はこちらで預かります。あなたにお怪我が無ければ良いのです。」

が。」

犬を手渡した。

「たぶん、大丈夫だと思います。」

シャンデリアは大きく揺れていて、ガラスが擦れ合うチャリンチャリンと、ワイヤーのギギーツという音を立てていた。

カスターは1階のフロアーでその様子を見ていたので、若い紳士が上からジャンプしてきたようにしか見えなかった。

その場で立ち上がって、若い紳士を凝視すると、レインだと気づいた。

カスターはミセス・ロックフォードを振り返ることなく、レインのほうへ駆けつけた。

「レイン、いったい何があったんだ。」

レインは黒いスーツ姿の男性に話しかけられて、見覚えが無いのに自分の名前を言ったのを変に思った。訝いぶかしげな顔をした。

レインが自分のことを誰かわからないのかと思って、カスターだよと言った。

「ああ、キヤス。間違えたよ。スーツを着こなすと、そんな風になっちゃうんだ。」

「それで、お連れのお嬢さんは？」

「あ！」

レインはまた、上をみて、手すりを握り締めて、座り込んでいるコーナーアスを見た。

「キヤス、ここで、待ってて。」

レインは階段に向かい、3階へあがっていった。

カスターがミセス・ロックフォードを置き去りにしたことを思い出し、振り返ると、彼女は少しはなれたところで、つばの広い帽子をかぶってたっていた。

カスターが近づくと、彼女は、カスターの右手を手に取り、紙を手渡した。

「今の若い紳士はあなたのお連れさんかしら。曲芸師かと思ってし

まいましたわ。

今晚、よろしかったら、わたしの部屋にいらっしやらないかしら。一人だと寂しくて眠れないの。」

「はぁ！」

カスターは渡された紙をあわてて、スーツのポケットに仕舞い込んだ。

ミス・ロックフォードは、カスターの横を通り、そのまま、玄関へ向かって、劇場を後にした。

小さな手がジリアンの服を掴んだまま、放さなかった。

セイラは掴んでいないほうの手で目をこすった。

「お嬢様、そのようなことをされては、ジリアンさんがお困りになりますよ。」

メイドのカミーユはセイラを諭した。

「嫌よ。お兄ちゃんと一緒に眠るの。明日にはお別れしなくちゃいけないでしょう。」

「また、会えるよ。明日の朝、会おう。セイラ。」

セイラの目の高さにはやがみこんで、優しく言った。

「ぜったいだよ。ぜったい、明日の朝ね。」

ようやく、掴んでいたジリアンの服を手放した。

カミーユに促されて、セイラはダイニングルームを出た。

食事を済ませて、理事長と話をしなければならなかった。

席に着いて、食後の飲み物が出された。ボーイが部屋を出てドアが

閉まったのを確認して、理事長は話を始めた。

「ジリアン君。セイラのことをどう思っているのか聞きたい。」

「え、かわいいと思いますけど、なぜですか。」

「妹として大事にしてくれるかい。」

「ええ、もちろんです。」

「では、話をしよう。大事なことなんだ。」

ジリアンはつばを飲み込んだ。

「セシリアとわたしの間にセイラという娘しかいない。グリーンオイル財団の理事長として、後継者がいない場合、排除されるんだ。皇族と違っていてね、我々の場合、男子しか後継者として認められないのだよ。」

理事長は、セシリアとの間に男子が生まれるようにと努力したのだという。

しかし、麻薬に犯されてしまったセシリアはもう子供を生むことができないでいる。

跡継ぎがない場合、排除されるというのは、殺される事を意味すると言った。

「ま、まさか。」

ジリアンはその話を信じようとしなかった。しかし、現に、前理事長が跡継ぎがなくて、殺されてしまったのだと。

「ジリアン君は、君にお兄さんかお姉さんがいた話を聞かなかったかな。」

「はい、でも、亡くなったと聞いてます。」

「しかし、亡くなっていないのだよ。クレア先生の養父ダン先生が亡くなられた時、そういう情報があるのを知ったのだよ。」

ジリアンは理事長をにらみつけた。話がダンの死に絡んでいるというのが受け入れられなかったからだ。

「誤解されては困るが、我々がダン先生の死を導いたわけではないのだよ。」

君にとって、お兄さんかお姉さんになるその人物がいれば、わたしの養子にするのだが、生きているとわかっていてもどこにいてるか。」

理事長の言わないとしている事を理解したジリアンは、椅子から立ち上がって、言った。

「僕にあなたの養子になれというのはですか!」

カスターはホテルに向かうタクシーの中でポケットの押しこんだ紙を取り出し、見た。

紙には、ホテル名とルームナンバーが書いてあった。

同じホテルだし、レインたちが寝たら、こっそり、行ってみようとカスターは考えていた。

「なにしてるの？キヤス。」

「いや、何も無いよ。」

「へ？」

カスターは、あわてて、また、紙をポケットにしまいこんだ。

「しかし、レインはすごいなあ。あんな素敵なお嬢さんに好かれちゃうんだなあ。」

「好かれてなんか、ないよ。」

「え？だって、手紙のやり取りをしようって約束してたでしょう。」

タクシーに乗る前に、レインはコーネリアスから、学園通学のための寮の住所を手紙のあて先に添えて、紙を渡したのだ。

レインは口頭で、グリーンオイル財団研究所第六秘書セリーヌ＝マルキナ気付けで手紙を出してほしいと言った。

「コーネリアスは、兄さんのような男性が好みのタイプなんだ。金髪の碧眼っていう眉目秀麗な男性だってさ。」

「なんか、差別的な感じだな。お金持ちってそういう人種かもしれないが。ロブが父親だって、知ってるの？」

「知らないよ。ペンフレンドになるんだから、べつにいろいろとあからさまに話をしなくてもいいでしょう。」

「エミリアさんは？」

「関係ないよ。」

「どうして？」

「弱音を吐いてしまいそうになるから。」

レインはうつむいて、歯を食いしばった。

「そんな意地張らなくても、相手は年上だし、ちょっとぐらいいいと思うけど。僕が口出しすることじゃないよね。」

レインは車の窓から外を眺めた。

カスターは、ロブとレテシアさんのことが複雑に絡んできちゃったのかなと考えた。

二人がホテルに着くと、ロビーで秘書のセリーヌが待っていた。

「お二人の帰りが遅くなると思ひまして、ジリアンさんとは別の部屋に寝泊りしてもらいます。」

「ジリアンはもう?」

「ええ、お休みになりました。」

セリーヌから、鍵を受け取り、二人は部屋に入った。

ジリアンはベッドに入っていた。

枕元には、コーデイが手渡したクレアの伝言メモがあった。

(部屋でひとりになっても、誰も入れないように。なにかあっても、夜に一人で部屋をでないように。)

ドアをノックする音がしたので、ドアのそばまで行くと、ドアのしたの隙間から、紙が入ってきた。

紙に書かれた内容は、命を狙われる理由が知りたければ、ドアを開けるようにというメモだったが、ドアを開けなかった。

そのまま、ベッドに戻った。

理事長の話を思い返していた。

ジリアンはきつぱりと、養子になるつもりはないと言った。

理事長は時間がかかると思っていると言ひ、今すぐには言わないと食い下がった。

そして、黒衣の民族との混血児の居所がわかって男子だった場合、その子を養子にするのだと言った。

セイラのことは、思いがけなくて嬉しかったが、混血児の兄か姉のことを考えると憂鬱になった。

両手で目頭を押さえて、考えないで寝てしまおうと思った。そして、スタンドフィールドを離れることなんて、これからさきも考えることはないと思うと強くこころに誓った。

災害救助で助け出された人が人の外科手術にずっと、こなししてきたクレアは、短時間の仮眠をとってから食事を摂っていた。

コーデイがクレアに近づいて、話しかけた。

「マルキナさんから、伝言です。魚が餌に食いつきましたということです。」

「そうか。そういうことなら、あの子たちは無事なんだな。」

「そうです。」

「ありがとう。」

コーデイは伝言を伝えると、その場から去った。

クレアは、コーヒーと硬いパンを持って、ロビーに出た。

月明かりがまぶしくて、目を細めていると、ロブが近づいてきた。

「お疲れ様です。これから、休憩ですか。」

「いや、さきに仮眠をとったよ。これからは見回り。経過確認だよ。」

「そうですか。外科手術が一段落したんですね。」

「まあ、これから救出されても、外科手術が必要にはならないからね。」

「あいつらをここから、遠ざけたのは、邪魔になるからですか。」

「まあ、それもあるし。理事長がジリアンと話したがっているということがあったのですね。」

「何の話ですか。」

「養子縁組だよ。」

「え?!」

クレアは、ロブに、コーデイが仕えていた前理事長の話をした。

グリーンオイル財団の理事長の後継者は男子と決まっっていて、後継者がいない場合、排除される。

つまり、前理事長は息子がいなかったために、殺されたということなのだ。

前理事長には娘さんがいたが、奥さんとともに事故に会い亡くなっていた。それは事故なのか殺されたのかは不明だった。

たとえば、ジリアンが理事長の実際の息子でなくても、セイラと血のつながりがあれば、養子として後継者にできる。

セイラに息子ができれば、後継者として養子になった者と交代すればいいという話だった。

「ジリアンを養子になんて。」

「ジリアンが養子に行くわけないだろ。そんな子じゃないよ。ジリアンの口からはつきりと断られることが必要なんだよ。

養子問題のために、混血児の情報を手に入れるようと躍起になっているみたいだからな。」

「しかし、クレアさん。それはあかさずにダン先生が亡くなったことで、知る術がないということでしょう。」

「義父さんは、あかささないことで、あたしや周囲の人間を守ったつもりなんだろうけどねえ。」

「スワン村でなにか情報手に入れたのですか。」

「話す気はないよ。」

「そ、そうですね。」

ロブはクレアから聞き出そうとしても、肝心なことは言わないのを良く知っていた。

「アルはもう大丈夫だから、あしたからはロブも力仕事をしてもらうことになるから、今のうちに睡眠をとっておきな。」

「力仕事ですか。」

「ああ、死体運びだよ。」

クレアはさりげなく、えぐい話をし、ロブは眉間にしわを寄せ、嫌そうにした。

カスターはレインが寝付いたのを確認して、部屋を出た。

ミセス・ロックフォードの部屋に行き、ドアをノックした。

「あら、もういらつしやらないのかと思ってましたわ。」

彼女はバスローブを羽織っただけの姿でカスターを迎え入れた。

カスターは鼻の穴を膨らませた。

「お話をするだけでしょか。」

「あら、わたくし、早合点したのかしら。眠りを誘うのに童話でも聞かせてくれるのかしら。あなたはあの少年の子守なの？」

「いえ、違いますよ。」

「だったら、わたくしと裸で会話しましょうよ。」

「え、いいんですか。」

妄想どおりでの早い展開、カスターの胸が高鳴る。

彼女はカスターの肩に腕を回した。

「バスローブの紐をといてくださるかしら。」

カスターが彼女のバスローブの紐を解くと、襟元からはだけて、胸があらわになり、カスターは我慢できずに彼女をベッドに押し倒した。

激しくドアをノックする音が聞こえた。

レインは寝ぼけ眼で周囲を見渡し、カスターがいないことに気がついた。

（部屋から閉め出しになっちゃったのかな。）

レインがドアに近づいて、カスターなの？と声を掛けると、ドアの下から、紙が出てきた。

紙に書かれた内容は、命を狙われる理由が知りたければ、ドアを開けるようにというメモだった。

レインはドアを開けてしまった。

レインがドアを開けると、そこにはホテルのベルボーイが立っていた。

レインがドアノブをしっかり握っているのに対して、ベルボーイはドアの端を手で押し開けた。

レインを押しのけて、部屋の奥へ行くと、窓際に立ち、カーテンを引いた。

窓から満月の明かりが部屋のなかに差し込んだ。

レインがドアを閉めて、奥へと足を運び、月明かりに照らされたベルボーイの姿をみた。

ベルボーイはレインのほうに向いていたのに、目はレインを見てなかった。焦点があつていなかった。

「だめだなあ、きみはほんとに。」

レインがしかめっ面でベルボーイをみていると、ベルボーイはポケットに手を入れて、すぐに出して銃を持ったように見せかけた。

「バーンツ。ハイ、君、死んでるね。僕が銃を持っていたらね。」
ベルボーイはレインに近づいて、胸倉を掴み、窓際にひきずつてきた。

「な、なにをするんだ。」

レインの顔に自分の顔を近づけ、目がどこを見てるかわからないのがはつきりとわかるようにした。

「ジリアンと、君を、殺すように言われてるんだ。ジリアンは殺せなかった。ドアを開けてくれなかったからね。」

また、自分が馬鹿なことをしてしまったと、レインは屈辱的なものを感じた。

「でも、僕は、君を殺したくはないんだ。君を殺すと、悲しむ人がいて、その人が悲しむ姿を僕はみたくないから。」

レインは何を言おうとしているのか考えてもわからないから、殺そ

うとする理由を知らないままでは抵抗できないとじっとしていた。

「君は無防備すぎるんだ。自分自身に対して、周囲の人に対して、ものすごく、甘く考えでいて、そして、なんでも受け入れてしまおうとする。」

「いったい、あなたは何ものなのです。」

それが精一杯に、出た言葉だった。

「これだけは、言いたい。忠告だよ。あの方はとても、憎んでいる。君の存在そのものを。そして、齒がゆく思っている。君を殺したくてしょうがないことを。」

ベルボーイはそういうと、掴んでいた手を放した。

「ジリアンも、君も、命を狙われている。あの方が殺したいって思っているから。僕が殺さなくても、誰かが殺す。」

そして、僕は、あの方がもうひとり殺したがっついていて、その人の命を守るために、君たちを殺そうと思っっていたんだ。

僕の目的は、その人の命を守るため。間違いに気がついたから、君に忠告するんだ。」

ベルボーイはレインの両肩を抱き、顔をまた近づけて、食べてしまいたいような勢いで口を大きくあけて、口を閉じると、言葉を発した。

「君のまわりに裏切り者がいる。いつ、殺されてもおかしくない。人を信用するな、疑え、疑ってかかれ。いまみたいに、メモ書きひとつでドアをあけるようなことがあったら、もう君の命はないよ。いいね。」

そういうと、ベルボーイはレインの肩を抱いていた手を放し、急ぎ足で、ドアに向かい、部屋を出ようとした。

レインは咄嗟にベルボーイに声をかけた。

「キャスをどうしたの？」

ベルボーイは立ち止まって言った。

「今、お楽しみ中だよ。邪魔しちゃだめなんだ。時期にもどってくるよ。大人しく待ってなさい。」

ベルボーイはドアを開けて、レインに手を振り、去っていった。

朝食をペントハウスでとり、お別れの挨拶をしたジリアンは、また会おうとセイラに約束をした。

セイラの顔は真っ赤になって涙で頬が濡れていた。

セイラはジリアンの事を実の兄だと知らない。でも、ジリアンの想いがセイラに通じてしまっているかのようになってしまった。

カスターが部屋にもどると、レインはまだ寝ていた。

なにこともなかったように、カスターはベッドに入り、寝たふりをした。

レインとカスターはチェックアウトを済ませ、レストランで朝食をとっていた。

レインはカスターが部屋を出て、何をしていたかは聞きだそうとはしなかった。

レストランを出ると、ロビーでは人だかりができていて慌しかった。ホテルマンが客を引き止めている様子で、指図しているようだった。ジリアンはセイラと別れをつけて、ようやく第六秘書のセリーヌに連れられてロビーに出てきた。

メモ書きが部屋に入れられたことで、レインにも同じことが起きているんじゃないかと心配していた。

ロビーの様子をセリーヌがホテルマンに情報を聞いて、ジリアンに何が起きているか話した。

「非常階段でベルボーイが死んでいるのが見つかったそうよ。これで足止めになるかもしれないわ。」

「レインたちは無事かな。」

「先ほど、レストランで朝食をとっている様子でしたので、無事のはずです。」

ジリアンは少し安心したが、気が気でなかった。

ジリアンはレインとカスターを見つけると、すぐさま、騒ぎの様子を話した。

レインは、ベルボーイの死に青ざめた。

レインの様子に気がついたジリアンは、レインに何か起こったのだと悟った。

「カスター、昨日の晩は部屋から出ていないよね!」

カスターは言葉を濁しながら、すこし、部屋をでたようなことを言った。

「レイニー、部屋に誰か入れたんでしよう。」

レインをにらみつけて、怒って言った。

ジリアンが部屋のドアを開けなかったことを知っていたレインは、ジリアンがなにか起きていると知っていることにはうろたえた。

「レイニー、ちゃんと話さないと大変なことになるよ。」

昨晚あったことをその場で話をする、カスターが青ざめた。

しばらくして、カスターが昨晚フロアを歩いているところを従業員に見られていて、警察に告げられたので、事情聴取を受けた。

アリバイ証明できるカオール、ロックフォードはすでにチエックアウトを済ませ、ホテルを出ていたが、警察が連絡をとり、アリバイが証明されたので、開放された。

レイン、ジリアン、カスターの三人が、パラディーゾデラモンテグナ都市にもどってきたのは、夜になってからだだった。

事件があつて足止めになつていたことは、すでに知られており、カスターがロブに会うと、速攻殴られた。

「お前は、何のために、ふたりについていったんだ!」

レインが止めに入ったが、ロブはレインも殴った。

「お前も無防備すぎるんだ。どうやったら、ドアを開けて、知らない人間を部屋に入れることをするんだ。」

ロブはカスターを引きずって、SAFの中に入っていった。

ロブの後に入つていこうとしたレインをジリアンは止めた。

「だめだよ。カスターが悪いんだから。」

「なんだよ、ジル。カスターだけが悪いわけじゃない。」

「レイニーだつて、殴られたでしょ。」

ジルを振り払って、SAFに入ろうとすると、クレアがレインを止

めた。

「レイニー、話がある。こっちに来なさい。」

クレアの顔は怒っていなかったが、怒られると思うと、レインは背筋が凍る思いがした。

「はい。」

大人しく、クレアについていった。

ジリアンがクレアについていこうとしたが、来ないように言われた。不安そうな顔をしているジリアンに、コーデイが肩を抱いた。

「クレアさんはレインさんを怒ったりしないわよ。カスターさんのことはわたしが後で見えてあげるから、大丈夫よ。」

「僕はどうしたらいいの？」

「アルバートさんが寂しがっていたから、話し相手になってあげて。」

ジリアンはうなづいて、アルバートのところへ行った。

クレアは人気の無いホテルの庭園にレインを連れて来た。

うつむいていまにも泣きそうなレインをみて、クレアは呆れたように言った。

「おまえさんは、ほんと、どうしようもないね。無防備なのは、母親譲りなのかなあ。そう思えば、諦めつくかもね。」

クレアの顔をみて、何もいえない状態に、涙がこぼれてきた。

「ご、ごめんなさい。」

「質問したいんだけど、いいかな。」

「あ、はい。」

レインはつばを飲み込んだ。

「部屋に誰を入れたんだ。」

「たぶん、非常階段で死んだベルボーイだと思います。」

「ベルボーイだけ？」

「ええ。」

レインは昨晚の出来事を全部、クレアに話した。

「昨日は満月だったからなあ。そういうことか。」

クレアは疲れきった目でレインを見ていた。

「観劇を見に行ったんだって。楽しかったかい。」

「あ、いえ。レジーナの悲恋物語で、観劇するのはやめようって。」

「そうか。」

劇場でセシリアに会った話をする、クレアはセシリアが麻薬に犯されている話をした。

「関係あるかもしれないから、学園の理事長っていう男も調べておこう。」

クレアは涙がこぼれおちたレインの頬に手を当て、すこし音がする程度に叩いた。

「レテシアに会うまでは無事であるんだ。無茶なこととして死に掛けたことを忘れるなよ。」

「はい。すみませんでした。」

「ジルにはメモを書いて渡してあったんだ。部屋を出るなど、入れるなどということをね。」

「え、そうなんですか。」

「ジルのことだから、メモを渡さなくても、人を入れることはしないとは思うが、万が一を考えてね。」

レイニーは自力で相手を倒せるかもしれないが、ジルはまだ無理だからな。」

非力ゆえの防御が身についているのだろう。体を鍛えていることで無防備になっているといわれているようだった。

「最後にさ、聞きたいんだけど。」

「あ、何ですか。」

「カオル〓ロックフォードって、どんな女性だったの?」

「エレーナさんと同じぐらいの年齢かな。白髪で、綺麗な人でした。」

「胸は?」

「え?」

レインは思わず赤くなった。指先の汚れを指摘される時、後ろから

抱きつくようにされたことを思い出した。

「胸って、そのお、後ろから抱きつかれるように手をまわされて、そのお、やわらかいものが背中に当たった感じはあったけどお。」

「恥ずかしくて、それ以上詳しくいえなかった。」

「胸は大きいんだな。」

「あ、は、はい。」

「わかった。もう、遅いから、ジルと一緒に、S A Fで寝てなさい。」

「

はい。わかりました。」

レインはクレアが何を知らなかったのかわからなかった。

カオル「ロックフォードから言われた「女難」の話をしよつとした。しかし、クレアが言った言葉がすこし気になった。」

「満月かあ。オンナが満ちる時だな。」

レインは何もいえなくなつて、その場から立ち去つた。

第十五章 白い魚 1

まるで、倦怠期の夫婦のようだった。

それまで、あうんの呼吸で仲が良かったロブとカスターが目も合わさないように接し、お互い仕事に必要な会話以外はしなくなった。こころを許しあったパートナーだった相手を別の相手に替えていった。

ロブはディゴを、カスターはレインとジリアンを、一緒にいる相手をそれぞれに替えて日常的には過ごしていた。

周囲の人間は、いずれ、時が経てば、仲直りをするだろうと思っていた。

チームワークの乱れにならないかと、心配していたのはジリアンだけだった。

レインは空気が読めない感じで二人の険悪なムードを気にしていなかった。

コーデイとアルバートはクレアに思惑があることを知っているので、敢えて干渉しなかった。

ディゴは、クレアになにか策があるだろうと思っていて、ドックにいてる時と変わらない状況で接していた。

ジヨナサンは、いつものように、クルーになにがあっても、我関せずだった。

クレアの思惑は、二人を仲たがいさせるということだけではなかった。

カスターはクルーたちが干渉してこないことに、みんながロブに味方していると思った。見捨てられたと思い、自分を追い込み始めた。

パラディーゾデラモンテグナ都市で、災害救助活動は1ヶ月弱に及んでいた。

クレアが治療に従事し、クルーたちは瓦礫の撤去、配給の手伝い、

グリーンオイルの精製、死体処理など日々活動に追われていた。日々の精神的な疲れに、クルーたちは理性を失いかけていた。

暴発したのはロブだった。他の者たちが危惧していたカスターとのことだった。

ことあるごとに不平不満を口にするカスターにロブは切れて殴りかかった。

「お前がこんなに根性が足りないオトコだと思わなかった。根性をたたきなおしてやってもいいぞ！」

一発殴って、気が治まらないので、殴ろうとした時、デイゴに腕を取られて、止められた。

「いい加減にしろよ。根性が足りないのはお前も同じだ。理性を失って、カスターをなぶりものにするな。」

ロブはデイゴに取られた腕を引きちぎるように引っ張ると、その場を足で踏み鳴らすように去った。

「キャス、お前は不平不満を口にする前に、ロブやクルーたちの信頼を回復するための努力をしようと思わないのか。」

デイゴの言葉に、冷たく突き放されるような感じがして、反抗的な態度をとった。

「そうか、みんなは俺を信用していないのか。いいよ、信用されなくて。」

デイゴは、カスターの後ろ向きな態度に、少し腹をたて、カスターの胸倉を掴んで言った。

「開き直るな。チームワークの乱れは命取りになる。お前以外の誰かが命を落とすようなことになってはいけないんだ。」

掴んだ胸倉を突き放し、デイゴはその場から足し去った。

「まるで、子供の喧嘩だな。」
その様子を見ていたアルバートはそうつぶやくと、同じように様子を見ていたジョナサンの顔が異様だったので寒気がした。ニヤ着いていたからだ。

アルバートはジョナサンに近づいて言った。

「ジョナサン、あんたいつも、エンジンタンクの給油口を掃除しないよね。」

「え、そうでもないけど。いつも綺麗じゃないか。」

「僕が掃除しているからだけど。わざと汚したりしてないよね。」

「まさか。」

「エンジン技師が給油口を綺麗に保てないなんて、致命傷だよな。無知ってわけじゃないよね。」

「あはは。無知だったら、技師なんてやってないし、返上しないとだめだね。アルは俺を疑っているわけ？」

「そうでもないよ。ただ、釘を刺しておくよ。僕は空を飛べるだけじゃなくて、グリーンオイルにもエンジンにも知識があるから。」

「はいはい。覚えておくよ。クレアさんに言いつけるわけじゃないだろう。」

勘弁してくれよ。女性に殴られたくはないからさ。」

いつまでも、ニヤ着いているジョナサンをアルバートは睨み付けていた。

カスターはより一層暗い顔でふらふらと歩みを進めて、SAFの自分の部屋に行った。

夜になると、食事もとらないカスターを心配して、コーデイが声をかけたが、返事はなかった。

そして、アルバートがカスターの部屋に無理やり入室した。

「アル、勝手に僕の部屋に入るなよ！」

アルバートは無言でカスターを抱きしめると、ベッドに押し倒した。カスターは度肝を抜かれてあわてて、アルバートを押しのけようとしたが、力が強くて出来なかった。

「やめるよ！」

カスターはアルバートの肩を殴ったり、足で足を蹴ったりしたが、カスターを放したりしなかった。

さらに強く抱きしめた。

身動きつかなくなったカスターは叫んだ。

「やめるよ。アルバート！」

アルバートはカスターの耳元に口を持っていき、囁いた。

「泣きたい時は泣いたほうがいいよ。僕が受け止めてあげるよ。」
カスターは泣き始めた。アルバートは強く抱きしめた腕を解き、カスターの顔を自分の胸にうずめ、カスターの頭を包み込むようにした。

カスターは引きつりながら、泣き続けた。ふたりはベッドの上でただ、抱き合って寄り添うだけで、小一時間を過ごした。

S A Fは災害救助活動の任務を解かれて、パラディーゾデラモンテグナ都市を離れることになった。

S A Fが都市を発った後、カスターがいないことに気がついた。

ロブはなにかを足で蹴って怒りをあらわにした。

「あいつ！」

クレアは知らぬ振りを決め込んでいたが、ディゴがなにか言いたそうだったのを横目でみていた。

ジリアンが心配してうるたえていた。

「ロブ、心配しなくても、大丈夫だよ。僕がカスターを慰めたから、気が済んだら、もどってくるよ。」

僕が優しくリードしたので、もうすっかり……。キヤスって初めてじゃないよね。」

「アル、お前……。」

アルバートの言葉にロブが爆発寸前になっていた。

「ロブ、アルの言うことを真に受けるなよ。」

クレアに言われて、その爆発の矛先をロブはクレアに向けようと睨んでいた。

「アル、こういうときに、ロブをからかうのはやめなさい。」

ロブがクレアに言葉を投げかけようとした時、ディゴがクレアに言った。

「キヤスに何をさせようとしているんだ。」

その言葉に、ロブは我に返った。

開けた口がふさがらない間抜けなロブの顔をみながら、クレアは口元に笑みを浮かべて言った。

「白い魚を釣るんだよ。」

第十五章 白い魚 2

白い魚とは魔術師を意味し、白髪なので、白い魚と言われていた。それは黒衣の民族の隠語だった。村長が通語として、使っていて民族そのものはこの言葉の意味を知らない。

クレアがスワン村で見つけたなかに、白い魚というタイトルの書物があつて、中身を拝読した。

手に入れた情報に、スワン村に白髪の少女がいたという。スワン村で黒衣の民族が受け入れられるのは珍しく、ましてや魔術師は受け入れられないものと思われた。

魔術師がスワン村にきているんな書物を盗むようなことがあつてはいけないからだ。

しかし、白い魚という書物は白髪の少女の母親が書いたものと思われ、彼女を身ごもった状態でスワン村に来たことが書かれていた。魔術師は、黒衣の民族にとって、神がかり的な能力をもった者だったが、ほとんど者がその能力を持っていなかった。

しかし、白髪の者だけは、博識や思量に長け、特殊な能力でもつて、魔術師以下民族を制してきた。

白い魚の恐ろしいところは常に男女一対で、たかし かおる 庵と薫という名をもち、女が白い魚の男女一人ずつ生み分け、死んだ時、予備として生まれてきたものの人格を破壊して自我を無くし、体を器として魂をのつとることを生業にしてきた。

クレアがロブとスワン村に向かおうとしたとき、接触し墜落して死んだものと思われていた庵は、予備として生まれていた白い魚の男に乗り移ったということで生きていたことになる。

そして、スワン村に行くことに失敗して死んだ庵というのは、村長の一族でセシリアが最初に生んだ子よりも先に、混血児を妊娠させていたのだった。

庵の子を身ごもった女性がスワン村に入り、産んで育てながら、白

い魚という書物を書き綴ったことになる。

白髪の男は元来種無しであることが多かったのだが、村長の一族として血を引く敵が子を得たということかもしれないと書物には書かれていた。

敵にしてみれば、子が生まれたことなど知る由も無かったが、白髪の少女はクレアがスワン村に入った時にはすでに出ていったので、その後はふたりが接触した可能性があったと思われる。

同じ遺伝子を持つもの同士が、共有という能力で、以心伝心することができるといふことが書かれていた。

レインに接触したベルボーイは、人格破壊でのつとられ、白髪の少女に動かされていた可能性をクレアは考えていた。

「では、レインとジルの命を狙っている人物というのは、黒衣の民族ということですか。」

前置きの長い話を聞いて痺れを切らしたロブは尋ねた。

「さあ、わからない。レインを殺すことをためらい、あの人があの方とか、代名詞で語る相手が誰なのかは特定できない。

むしろ、黒衣の民族の可能性が薄いと思っている。」

煮え切らないような言葉に、ロブはいらついた。

クレアの話の聞きかされていたのは、ロブとアルバート、コーディだけだった。

デイゴはクレアの策略を把握するつもりがなかったから、その場からいなくなっていた。

「クレアさん、キャスを餌にその薰っている白い魚を生け捕るといふことはいったいどういうつもりで……。」

「ロブに説明していたら、計画は失敗する。仲間を巻き込む覚悟が出来ない奴に、打ち明けられないんだよ。」

クレアに信用されていないみたいで悔しくて、ロブは唇を噛んだ。

「いつから、計画は実行されていたんですか。」

「最初から決まっているだろう。」

「うっ。」

ロブは額に手を当て、唸った。

「カスターの気を引くことも計画のうちですか。」

「そうだよ。」

「では、アルバートを劣りに使うことは考えてなかったんですか。」

「アルは、最初から壊れているんだよ。餌にならないんだよ。人格が壊れている器はさ。」

クレアは、SAFのクルーで、白い魚の餌食になりそうな人物をカスターと決めていた。

餌食になりそうなのは、人格を破壊され自我をはがされ、乗っ取りができそうな人物に限られてくる。

乗っ取ることによってスパイ活動をさせる目的を、あらかじめ理解し計画していることだった。

アルバートは、研究所の実験で麻薬によって人格破壊をされ、多重人格になってしまっていた。

多重人格者は、自我をはがそうとしても、別の人格が自我としてへばりつく可能性があり、乗っ取ることが困難であるからだ。

他にクルーで、人格が破壊されそうな人物は、レインかジリアンに限られ、彼らを餌にすることは最初から想定されていなかった。

「キヤスが思い通りにできると思わせることも肝要なんだよ。あたしの言いなりになるのも、相手のいいなりになる条件なんだ。」

「人格が破壊されて、正気がもどらなかつたら、どうするんですか。」

「切って捨てる。」

「クレアさん！」

「心配するなよ。最初から、捨てる気で取り扱ったりしないよ。」

「どういうことですか。」

「ちゃんと、見張りをつけてるよ。」

「え？」

パラディーズデラモンテグナ都市で姿を消したカスターには、テオ少佐の部下がクレアの依頼で見張りとして尾行していた。

「なにか、あったら、連絡があるし、その時は、パジエロブルーで助けに向かう。」

「だったら、最初からそう言ったださいよ。」

「だから、ロブに……。」

「はいはい、わかりました。私が悪うございました。」

「開き直るなよ。」

クレアは、説明をひとおりし終わったところで、不眠不休で災害救助での治療任務に疲れが取れておらず、睡眠をとりたいと、自分の部屋に向かった。

「僕も、キヤスの助けに一緒に向かうから、よろしくね。」

アルバートはそう言って、ロブにウインクをして、通信席に向かった。

ロブは疲れきった顔に安堵の顔色が指し、やれやれとつぶやいた。

コーデイが黙っていたのが気になって、ロブは胸に秘めていた問いを言葉にした。

「コーデイは知っているのかな。クレアさんに、恋人がいることを。」

「

「ご存知だったのですか。」

「やっぱりな。」

コーデイはロブの鎌掛けにひっかかってしまったことに、過失を嘆いた。

「あ、ごめんなさい。」

「いや、いいんだ。そうじゃないかなって思っていたんだが、直接聞くのもなんだか。」

「直接聞かれてもクレアさんなら、答えてくれると思うのですが。」

「いや、あの人は答ええないよ。俺の気持ちを利用して感じる。」

「わたしが教えていただいたのは、ロブさんがクレアさんを利用しようとしていることです。」

「俺がクレアさん？」

「ええ。レテシアさんを忘れるために。」

ロブは首をかしげて、苦笑した。

「はつきりとものを言うんだな、コーデイは。」

「すみませんでした。」

ため息をついて、ロブは言った。

「クレアさんとは、子供の頃から拳で慣れ合ってきた仲だった。痛みも悲しみも喜びもわかちあえるもの同士だと思っていた。

慰めてもらおうとか、思っただけはなかった。お互いがお互いを求めていると思いをしていたのかもしれない。」

第十五章 白い魚 3

カスターはパラディーゾデラモンテグナ都市から瓦礫を廃棄するダンプ車にヒッチハイク目的で助手席に乗せてもらっていた。

目撃情報を得て、テオは除隊した元部下を目的地に張り込ませた。クレアからの依頼は、交換条件だった。

スワン村で手に入れた情報を差し出す代わりに、カスター「ペドロ」を尾行し、危機に面した時は連絡がほしいとの依頼だった。

「スワン村で手に入れた情報は、少佐にメリットのあるものだし、カスター「ペドロ」がその有益な承認になる人物なんだ。

本人には内密にして計画を立てている。SAFから離れることが計画の実行であるから、本人に気づかれないように尾行してほしい。」

「おまえさんの脳みそは俺には理解できないところで働いているのだろうな。信用していないわけじゃないが、命狙われてまですることかどうか。」

「解散したホーネットクルーについてとだけ言っておこう。信じるか信じないかは、少佐次第。」

釈然としない依頼ではあったが、スワン村の情報というのは、得難いものがあった。

テオは話しに乗った。

ダンプ車が向かったのは、豪雨に見舞われて、川が氾濫した地域だった。

川岸を護岸するために瓦礫を運搬してきたのだ。

至るところから、ダンプ車が集まってきて、そこに街ができていた。労働者の街で、夜にはネオンが輝いく安価な宿やモータールが立ち並び、また呑み屋が点在していた。

深夜になると、自然と街角に胸をはだけさせ短いスカートにハイヒールの女たちが立ち始める。

カスターは当ても無くたどりついた場所で、SAFから逃げ出して

求めていた場所がここなのかと落胆しながら、モーターを探していた。

ようやく、空き部屋を見つけて、沈むようにベッドに倒れこんだ。災害救助活動中のカーテンで締め切ったようなロブとの関係性に、開き直る余地もなく、自分が消えてなくなることしか思いつかなかったことに苛立ちを感じていた。

そして、自分の過去を振り返った。

カスターがまだ赤子だったころ、父親が母親に暴力を振るい、母親は暴力に耐えかねて、父親を殺した。

情状酌量につき減輕されたが、刑に服するため、カスターは養子に出された。

実母マーサが危篤になるまで、実母が生きていることは聞かされていなかった。

母方の親戚の養子となったが、養父母は子供ができず、懇願していた養子縁組だった。

子供好きだった養父母は多くの里子を預かっていて、カスターが養子に来た時にもすでに4人の里子がいた。

里子は親が育てられない状況であるがために他人の家に預けられる制度。国からの補助ももらえるが、里親になるために資格がないとだめだった。

養父母にとって戸籍上の子供はカスターだけで、里子ともども分け隔てなく育てた。カスターにとっては優しい養父母であり、申し分の無い生活をさせてもらえた。

しかし、カスターには愛情の飢えた里子たちとの関係性は安易なものではなかった。

妹のように可愛がっていた子が次第に、オンナになっていく。子供だとはかり思っていたのは、カスター自身が未熟だったからかもしれない。

その子が他の里子から性的虐待を受けるようになった。養父母に心

配掛けたくない一心で、事実を覆い隠そうとした。

そうすることによって、虐待を受けた子、虐待をした里子も、カスターを愛欲の犠牲者に仕立て上げ、自分たちのこの隙間を埋めようとした。

その心の隙間を感じ取っていたので、カスターは助けを求める事をしいでいた。

ただ、この場所から逃げ出したいという考えしか思い浮かばなかった。

逃げ出す口実を見つけたのは、軍の入隊だった。

その後、里子たちは自立していったが、消息はつかめないままとなり、養父母は気につけ、至らないところがあつたのかもしれないと嘆いた。

日々、軍の訓練を受けていたカスターはもう過去をひきずる根暗なおトコではなくなった。

すこしたくましくなつた自分に自信を持ち、女性にアプローチすることが多くなつた。

軟派に成功しなくても、同年代の男たちと一緒に馴れ合い、普通の生活をしているように感じて満足できた。

女性が多い部署として、通信部に配属願いをし、望みどおりになつて、カスターは手当たり次第にアプローチしたが、結局気持ち悪がられてしまい、最終的にその部署全体から嫌われてしまった。

訓練中に目を掛けてもらった上層部に声を掛けてもらい、輸送部隊に配属になつた。

そして、理由ありの物件を輸送し、トラブルが起き、品物を物色した罪を着せられるところで、除隊した。

輸送部隊に配属になる前に、実母の危篤の知らせが来ていたが、受け入れることができず、居場所を見失ってしまうことを恐れて、実母のところへかけつけることができないでいた。

除隊になった後、実母マーサの墓を訪ねて、ロブに誘われて、スタンドフィールドドックのクルーになつた。

アレックスの子孫であるロブの気性に惹かれていたのだが、中身を知ると、何故か安心してしまった。

そして、実母の子であると紹介されたレインとジリアンを一目見て、自分の弟たちではないなと思った。

しかし、そのことを確かめると、自分自身の素性がばれてしまうことを恐れて聞けずにいた。

カスターは素性を隠しながらも、敢えて追求しないロブにある意味感謝しつつ、自分の居場所を得た気持ちで満足する日々を過ごしていた。

カスターは、自問自答した。

愛に飢えていたのか。

女性にモテないことを開き直って、男たちばかりの生活に慣れ親しんで満足していたはずなのに。

ロブにレシアという恋人がいる事を知り、レインの恋心に自身も気持ちを高ぶらせて同調しようとした。クレアの無防備な振る舞いに興奮して、愛を求めようとしたのかもしれない。

求めているものが欲しいと素直にいえないう気持ちを隠して、まるでそれを引きずりだされているような感覚で、お互いを求め合ったようなあの夜のこと。

そこには、純粋な愛情はないと理解しながら、求め合い愛撫し欲情をぶつけた。

果たして、こころは満たされなかった。空いた穴が大きく広がり、強く痛みを感じた。

カオルロックフォードが別れ際に囁いた言葉が耳について離れない。そこへ逃げたいと思っているからか。

「わたしの体が必要としているのなら、いつでも、連絡を頂戴。」
ポケットからメモ書きを取り出した。

そこに電話すれば、カオルロックフォードがいる場所に伝言が届くという。

メモ書きを握り締めて、腕で目頭を押さえた。
こころが千切れてしまいそうだ。つなぎとめておくには、彼女の体
が必要なのか。

第十五章 白い魚 4

「負のエネルギー？」

ジリアンはカスターが心配で仕方なく、診療室でクレアと話をしていた。

「負のエネルギーは、静電気みたいなもので、体にまとわりついていて、放電しないとその電気で痛みを感じたり、何かに点火してしまい燃えてしまう。」

眉をひそめて考えあぐねているジリアンを横に、クレアは診療書類を作成していた。

「放電するために、S A Fからいなくなったのですか。」

「まあ、そういうことだな。」

「点火するって、人間関係がこじれるってことですか。」

「そうだな。いまは、格闘技の練習して、ストレスを発散する余裕がないからね。」

ストレスを発散させるために格闘技の練習をするのかと、ジリアンは改めて認識した。

「体を動かすことでストレスを発散させるのですか。」

「そうだね。一人で体を鍛えるだけでは、得られないものを対人関係で得るんだよ。」

「はあ、そうなんですか。」

クレアは書きはしらせていたペンを止めて、ジリアンの方に向いた。

「ジル、ちよつと嫌な事を思い出させる話をするよ。」

「はい。」

ジルは腹を据えた。

「ダンは、皇族が黒衣の民族の子を生んだ事を表ざたにしないうえにも、セシリアの最初の子を死んだことにした。」

ジルの顔を伺いながら話を進めた。

「ダンのしたことが正しいとは言わない。そうすることによって、

セシリアはある意味、負のエネルギーを持ってしまった。」

ジルはクレアを睨むような目で見た。

「そして、僕は生まれたのですか。」

「誘因は、レインが生まれたことだろうとは思う。でも、負のエネルギーでジルが生まれたわけじゃない。ここは間違えないようにね。」

「はい。」

「ジルを生んだのは、セシリアのなかに出来た穴を埋めるためだろうと思う。こころの隙間みたいなものかな。」

「うーん、よくわかりません。」

「そうだなあ、無理かな。寂しかったから、自分の分身が欲しかったって感じかな。自分を愛してくれる子供を欲しかった。仮定の話しになるけどね。」

クレアの言うセシリアの気持ちがあまり理解できなかった。

「しかしながら、セシリアの子として生まれてくるわけにはいかなかった。だから、ゴメスとマーサの子として育ったんだ。」

「それはよくわかります。」

クレアは笑顔になって、ジルはハツとした。

「自分の子供として育てることができなかったので、負のエネルギーを持ったのですか。」

「そうだよ。」

セシリアの悲しみを知ることによって、ジリアンは違和感を感じ始めていた。

それはセシリアを理解することを拒んでいるかのようだった。

「でも、ジルは心の底ではセシリアを愛していたと思うよ。虐待されても耐えていたから。」

ジルは発作を起さずに、目から涙をこぼした。

「ジルは、セシリアの負のエネルギーを放電させていたのだと思うよ。」

その言葉を聞いて、クレアを見つめていた。

「気負いはしないでほしい。セイラのことも、兄か姉ともわからない子のことも。」

ジル、君は受け入れできるよ。セシリアのことを愛していたのだから。」
とめどなく出てくる涙をぬぐうことなく、まっすぐクレアを見つめていた。

「カスターは必ず、もどってくる。信じて待つてあげてほしい。戻ってきたら、暖かく迎えてあげてほしい。」

「はい。クレアさん。」

ジルは大きな声で返事をした。

クレアは、スワン村での出来事を思い返した。

スワン村には登山で入村した。出入りしている荷物持ちをまかなくて。

荷物持ちに言われていたように、男らしい格好をしていった。

スワン村で、一人身の女性は危険だからだ。

真っ先に図書館に向かったが、表示も整理もされていないので、どこにどんな書物があるのかわからない。

館内には清掃員しかおらず、書物に詳しい人間はいない。入館した者は自分たちで目的のものを探し当てなければならない。

目的の書物を探し出す手っ取り早い方法は、その図書館を熟知している人間を探し出し、情報を得ることだった。

クレアは情報を得ることに掛けては心得ていた。

ダンを知る者を見つけ、ダンの情報を得た。ダンが読んでいた書物を特定して、そこから目的の書物を探し出そうとした。

ダンを知る者に、ハリーという曲者がいた。ダンの養女である事を告げて、クレアは体を張った。

クレアはハリーの前で、下半身を露出し、壁に両手を付いて、腰を上げて、尻を出した。

「オイオイ、入れるだけの行為なんて、そんな安物情報じゃないん

だぜ。ベッドでマツタリ楽しませてくれよ。」

「ハリー、だったら、1週間以上、水浴びもしていないような体で、求めに応じるとか言わないで欲しいね。」

「なに、お高くとまっているんだ。生娘じゃあるまいし。」

「生娘だったら、股を開くこともしないんだよ。水浴びしてこないのなら、交渉には応じない。水浴びしないの？するの？どっち！」

「ヤレヤレ。」

クレアがハリーの求めに応じて得た情報は、黒衣の民族についての書物がある本棚だった。

「清掃員に言わせて見れば、その棚だけ綺麗に拭いても、すぐ真っ黒になるんだってさ。」

さすが、結界張ってるスワン村の図書館だな。曰く付きの本棚ってことさ。」

図書館のほとんどが手書きの書物で、スワン村での製作されたものがほとんどだった。あとは発禁本として持ち込まれたものになる。クレアが情報を元に、探し当てた本棚にいくと、その手の書物だけだったが、そのなかに「白い魚」というタイトルに惹かれて書物を手にした。

その書物はダンがスワン村を後にして書かれた書物であることがわかった。

食い入るように読んでいると、背にしている本棚の向こう側から名を呼ばれた。

「クレアさんですね。ご無沙汰しています。」

その声に聞き覚えがあった。その人物はクレアにとって意外な人物だった。

スワン村に受け入れられて、図書館に出入りするとは思えない人物だった。

第十五章 白い魚 5

スワン村にいてに似つかわしくないレテシアの声だった。振り返ろうとするクレアにレテシアは言った。

「そのまま、本を読んでいる振りをしていてください。」

クレアの頭によぎったのは、一人身の女性が危険だということだった。

「一人で来たのか。」

「そうです。」

「本を読みに来たのではないだろう。何が目的なんだ。」

「あのお、クレアさんを追ってきたのではないですよ。」

拍子抜けするような会話には慣れていたつもりだが、久しぶりに出くわすと、笑いが止まらなくなるが、こらえた。

「あたしがレテシアに追われるようなことをしているとは思えないが。」

「そうですね。追えば、なにかわかることもあるでしょうけど。」

クレアさんがスワン村にいてることを知らないで来ました。」

ページをめくりながら、横目で周囲を見渡したが、視界に人らしきものは見当たらなかった。

「わたしのできることをしていこうと思って、動いています。」

「何を目的に？」

「聞かないでください。」

クレアはためいきをついた。いつも、こうだ。レテシアとは会話のキャッチボールがなかなかできない。

それでも、素っ頓狂すつとんきやうな声をだし、愛嬌のある笑顔を向けられると、許してしまえる。

「はいはい、なにも聞かなかったことにするよ。」

「ありがとうございます。」

どうして声をかけてきたんだかと思いつながら、レテシアがひとりで

動くはずないと背後にあるものは何だろうと考え始めた。

「クレアさんと話ができてうれしかったです。」

「あたしに聞きたいことはないのか。」

「知りたい情報は得ていますから。」

「そうか。」

「本当はもつとお話したいのですが。クレアさんはいつまでここにいらつしやるのですか。」

「どうしてかなあ。まだ、来たばかりなんだけど。」

本を読む振りをしているというより、思考を働かせているので、レテシアの話を半分しか聞いていない素振りをしていた。

「ちかくに、エメラルダグリーン号を待機させているのです。お時間があつたら、じっくりお話したかったのですが。」

「残念だな。来たばかりなので、すぐに出るつもりはないよ。」

「お時間をとらせてしまつて、ごめんなさい。」

「いいよ。いつものことだろ。なににも変わっちゃいないね。安心したよ。ある意味ね。」

「そ、そうですか。変わつてませんか。では、また、会えたときに。」

「そうだね。お疲れさん。」

レテシアは足音もたてずに、その場からいなくなった。

そういえば、ロブが言つてたなあとクレアは思った。

「レテシアは足音も立てずに、近寄ってくる。」

道理で気づかなかつたはずだ、耳は良いつもりだったんだけどなと思つた。

パジエロブルーの操縦席でレインはひとり、寒きこんでいた。ベルボーイに言われた事を振り返っていた。

それまでは周囲に気づかれずに過ごしてきたつもりだったが。

コッコッ。

シリアンが操縦席のドアをたたいた。

レインがドアを開けると、ジリアンは縁に肘を着いた。

「あの夜のこと、全部の話を聞いてなかったね。何を言われたのかわからないけど。つまらないことを言われたのでしょ。」

「命を狙われる理由だよ、知りたいって思うだろ。」

「思わないよ。ただの脅しだよ。それより、誰かを疑えって言われた？」

レインの顔色が変わった。

「凶星なんだ。そんなの、考えても無駄だよ。誰を疑っても仕方ないよ。どこの誰かもわからないような奴を信じるなんておかしいよ。」

「そんな、誰かがスパイかもしれないんだよ。」

「誰がスパイなんだよ。アルかい？コーデイさん？ジヨナサン？僕たちが良く知っている人を疑ったりしてないよね。」

レインは愚の音も出なかった。

「無意味だよ。誰かを疑うなんて。」

「キヤスのことは心配していないのか。」

ボソツとつぶやいた。

「レイニーは心配していないんですよ。」

「さつきから、うるたえてない感じだから。」

「クレアさんが心配しなくていいよって。必ず戻ってくるから、戻ってきたら暖かく迎えて欲しいって。」

「キヤスがもどってきたら、兄さんまた殴るのかな。」

「殴らないでしょ。大丈夫だよ。そこまで理不尽じゃないと思う。」

クレアのところにてオから連絡が入った。

「餌が動きだした。」

川岸の街で2、3日停泊した後、深夜にエアジェットの迎えが来たのだという。

クレアは見当をつけていた。

理事長の秘書セリーヌにミセス・ロックフォードの別荘を調べさせ

て、川岸の街からエアジェットで飛べる範囲を特定し、1件を絞り込んだ。

S A F がいてる場所からパジエロブルーで迎える距離だった。

クレアとロブは用意をして、パジエロブルーに乗り込んだ。

クレアはジョナサンにも聞こえるように、「カスターを迎えに行く」と言った。

（もし、向こうで罫でも仕掛けられたら、ジョナサンはスパイだ。）

第十五章 白い魚 6

月は、細長く弧を描いていた。

カオルはロックフォードは、不動産王ロックフォードを色仕掛けで落とし、結婚して財産をほしのままに使いたい放題してきた。

数ある別荘のうちのひとつは、野生動物が保護管理の下生息している地区にリゾートホテルや別荘が点在している場所にあった。

パジェロブルーはその地区から少し離れた場所に着陸し、クレアたちは秘書のセリーヌが手配した車に乗り込んで、野生動物保護地区リゾートに入り込んだ。

一方、カスターの方は、泥酔させられた状態で、ベッドに寝かされて、数時間後、麻薬を注射されたうえに、その部屋にはアヘンが焚かれた。

人格破壊の施術が始まっていた。

クレアたちは、別荘に到着すると、マスクにヘルメットで侵入し、警備に当たっていたものを倒していった。

ロブは素手でなぐり、クレアはサイレンサー付きの空砲銃で相手を打ち、交わされた時は足技で倒していった。

カスターは彷徨っていた。

どこまでもつづく、白い状態。

突如、妹のように可愛がっていた子が現われて、レイプされていた。犯している男を捕まえて殴りかかろうとすると、それはロブだった。驚いて後ずさりすると、助けようとした子が写真だけしか見たことのない実母のマーサに変わった。

「うわあーっ。」

カスターは叫び声をあげたが声にならなかった。

喉の奥からちからいっぱい張り上げたが、声がでなかった。

顔を真っ赤にしながら、叫んでみたが、出なかった。

目から涙が出て、両手で頭をかきむしった。

喉の奥に違和感を感じて、嘔吐すると、白い物体が出てきた。

その物体は、変形を繰り返し、カスターと等身大に大きくなったかと思うと、カスター自身になった。

もう一人のカスターはカスターの首を絞め始めた。

「死んでしまえ。」

喉の奥から出てくる低い声だった。

「消えてなくなれ。」

カスターは息も絶え絶えになり、意識が朦朧してくる感覚を感じていた。

（俺は死ぬのか。死んでしまったら、楽になれるのか。）

「死なないで。」

どこからともなく、女性の声が聞こえてきた。

薄目からはカスター自身しか見えない。

思い切って、目を見開くと、カスター自身が首を絞めるのをやめて、後ろに下がっていく。そして、カオル「ロックフォードが現われた。

「もう、大丈夫。わたしがいるから。」

そういって、カスターを抱きしめた。

カスターはカオルの腕に抱かれて、安心して目を閉じようとした。

ところが、後ろに下がったはずのカスター自身がカオルとカスターの間に両腕を入れて、二人を引き離した。

そして、カスターを殴り続けた。

「だめーっ。」

カオルは叫んだ。

ベッドに横たわるカスターのそばでカオルは左手をカスターの目の上におき、右手を自分の目を抑えていた。

その両手をそれぞれの目から離れた。

「だめだわ。なぜなの。」

カオルはため息をつく、注射器を手に取り、カスターの腕に打つ

た。

ドアが動く音がしたので、振り返った。

「施術中は、部屋に入って来ないように。」

カオルが振り返ると、そこには、ヘルメットをはずしていたがマスクをつけたクレアとロボが立っていた。

（警護に当たっていた者たちが倒されたっていつの？冗談じゃないわ。）

カオルが立ち上がると、クレアは足を上げて、カオルの顔をめがけて蹴りこんだ。

カオルは顔面に足蹴りが決まり、床に倒れると気絶した。

ロボは、カスターのそばに寄っていて、上半身を起した。腕を見ると、注射後がいくつかあった。

部屋はアヘンの煙で充満していた。

「キヤス！」

息をしないようにマスクをはずしながら、ロボが呼びかけたが、カスターの反応は無かった。

「呼びかけても無駄だ。変に意識を取り戻させないようにしないとだめ。」

マスクをはずしたクレアはアヘンが効かない訓練をうけていた。

ロボはマスクをつけた。

クレアはカオルを仰向けにして、足でまたぐと、カオルの右目にポケットから目薬を出して指した。

左手でカオルの左目を押さえ、右手の人差し指でカオルの眉間を押さえた。

右目にさした目薬は、まぶたがなかなか閉じられない薬だった。

「オイ！聞こえるか。敵。わたしだ、クレアだ。」

クレアのその様子にロボは、愕然としていた。

「こっやって、離れた場所で交信するのが白い魚のやり方なんだよ。」

薫の反応がないのを見ながら、クレアは話を続けた。

「白い魚って、この世に3人しかいないんだ。敵、薫、そして、もうひとり。」

薫の右目が2度ほど、瞬きをした。すると、低い声で返事をした。

「お前はダンとかいう医者の子供で奴か。」

「よく、ご存知で。はじめましてじゃないよね。あんた、あの時、死んだだろ。」

「そうだなあ、スワン村の手前で谷底に落ちてな。」

「替えの体があつて、良かったなあ。」

「なあ、そこまで知ってるってのは、どういうわけかな。」

「さあな。」

「スワン村に、白い魚の書物でもあつたのかあ。」

「じゃ、何しにスワン村に向かつたんだよ、あんた。」

ただただ、啞然とその様子を見ているロブに、この部屋を出るようにクレアは顎で指図した。

ロブは、カスターを抱えて、部屋から出て行った。

「さあな、教える理由なんてないだろう。」

「だったら、こつちもそうだろう。」

クレアは後ろを振り返った。ロブが出て行ったあと、ドアが開いたままで、アヘンの煙がドアから流れていったからだ。

「こいつを、殺しておいたら、もうスペアはないだろう。」

「もうひとり、いるじゃないか。」

「たしか、女だったはず。」

「ふっ。どうかなあ。」

敵は、もうひとりが男か女かも知らないはずで、自分の子が生まれたことは知らないはずだが。

存在していること事態は知っていてもおかしくない。

「交信は終わりにしよう。今度はお前の番だ。」

「さあ、どうかな。俺がやられる前に、お前たちをやってやる。お前たちをだ！」

薫が低い声で怒鳴ると、クレアは両手を離し、薫の頭を両手で押さえつけると、自分の額で頭突きをした。

クレアは即座にポケットから、黒い玉を取り出し、指でつまんで、薫の口の中に掘り込んだ。

薫の口を右手で押さえ、左手で後頭部したの首を押さえ込んで、薫の頭上を下げた。

そして、黒い玉を飲み込ませた。

すると、薫は白目を向き、咽ると体を反り返った後、動きが止まった。

クレアが後頭部を床に置き、口を押さえていた右手を離すと、薫の口から血が流れた。

第十五章 白い魚 7

ロックフォードの別荘で警護にあたったものはすべて外に出されて眠らせていた。

クレアは、プラスチック爆弾を仕掛けて、保護地区から遠ざかった頃にスイッチを入れて別荘を爆破させた。証拠を失くすために。

ロブはパジェロブルーでSAFに帰還し、クレアはカスターを車にのせて、SAFの飛んでいる場所を目指した。

カスターをSAFに乗せると、コーデイに任せて、クレアはSAFに乗らなかつた。

ロブがその理由を尋ねると、クレアは車を返してくると言った。

「また、ひと仕事してくるみたいな感じですね。俺に内緒ですか。」
ロブはクレアの腕を掴んで言った。

「話を聞きたいのか。だったら、聞かせてやるよ。セリーヌを抱いてくるのさ。」

驚いたロブが掴んだクレアの腕を離すと、ニヤリと笑ってクレアは車に乗り込んだ。

車がその場を走り去るまで、ロブは棒立ちしていた。

ロブは診療室を覗いた。

コーデイがせわしく動き回り、カスターの治療を施す準備をしていた。

コーデイはロブがドア際に経っているのに気が付いて、声をかけた。
「クレアさんが気になりますか。」

「ああ。セリーヌが恋人じゃないだろう。」

「見返りですよ。」

「見返り？」

「ええ。いろいろと、手配してくれたりしたこの見返りです。」

S A Fのメンバーだから、何でも言うことを聞いてくれたと思いましたが。」

「理事長がそんなことまで、気を利かせてくれるとは思っていません。」「

カスターの顔を覗き込み、コーデイのそばまで寄っていった。

「コーデイ。君は心配しないのか。クレアさんが自らの肉体を酷使するようなことをして。」

「それだけ、決意が固いのでしょうか。」

言葉が返せなくなったロボの様子に、コーデイは手を止めた。

「セリー又さんが最初にクレアさんに近づいて、情報を聞き出すとしたのです。」

ミイラ取りがミイラになって、セリー又さんはクレアさんの言いなりになりました。

セリー又さんから情報を得る代わりに、こちらからもそれなりに情報を流したり・・・。」

「ジリアンを理事長に合わせるように仕向けたりか。」

「そうです。」

ロボはしばらく黙って、考え込んだ。

「もしかして、少佐にも？」

「そうかもしれないね。でも、少佐のことはわたしにはわかりません。」

頭を掻いて苛立ちを隠せないロボに、コーデイはロボの腕を取った。「ロボさん、しっかりしてくださいね。クレアさんを信じてあげてくださいね。」

「君に言われなくても・・・。」

コーデイの大きな手がロボの腕をしっかりと掴んでいて、心まで掴まれたかのようにうろたえた。

「少佐が同性愛者だって、ご存知でしたか。」

「ええ!!!!!!!!!!!!!!」

「クレアさんがおっしゃってました。少佐の思い人は皇帝だそうで

すよ。」

コーディはロブの腕を放すと、ロブは両手を口に当てた。

(うそだろう。)

愕然としていたロブは、冷静になろうとした。

「クレアさんの体を求めないのはわかった。で、見返りに何を。」

「さあ。ただ、少佐がスワン村の事を知りたがっているみたいだとおっしゃってたので。」

「そういうことか。」

ロブは胸をなで下ろした。

クレアはセリー又と、ホテルで待ち合わせした。

セリー又は同性愛者ではなかったが、クレアの指使いに身も心も奪われてしまっていた。

クレアは、セリー又から得た情報の見返りに、白い魚の情報を流した。

ホテルを後にすると、テオに電話をした。

「スワン村ではレッドオイルが製作されている。」

「レッドオイル？」

「強力な爆弾みたいなものだ。」

「それを軍で輸送しようとしながら、黒衣の民族が略奪したかのようにみせかけて、スワン村に持ち込んだというのか。」

「そうだ。」

「目的は？」

「それは内部事情に詳しい少佐をご存知でしょう。」

「え？皇帝排除派が？」

「そっちは黒衣の民族が動いているのだと思うけどね。」

「なに！皇帝派だというのか。」

「さあね。」

含み笑いをした後、クレアは低い声で言った。

「ホーネットクルーは実質、解散していない。その証拠にレテシア

がスワン村に来ていた。」

「なんだとお！」

ため息をついてから、次の言葉を言って、電話を切った。

「皇帝に知られないように、調べておいてほしいね。皇帝が秘密組織を結成していて、誰がメンバーになっているか調べておいてね。」

カスターは回復に向かい、麻薬を抜く治療はうまくいっていた。しばらくは、悪夢に唸らせられて、夢か現かをさまよっていた。

カスターのそばで書類を作成していたクレアが、カスターが苦しんでいる様子に、顔を覗き込ませると、腕を掴まれた。

カスターの目は閉じていた。

クレアがカスターの頬に手を触れると、カスターの目が開き、掴んでいないほうの腕でクレアの頭の後ろを押さえ込んだ。

クレアの顔がカスターの間じかまで来た時、クレアは頬を触れた手でカスターの口を封じた。

「意識が戻っていたのか。」

カスターは両手を離し、クレアはカスターの口から手を離れた。

「夢を見ていたんですよ。誰か知らない女性の腕を掴んでいて、それから抱擁していた。」

クレアは手放した書類を手に取り、ベッドから離れた。

「その人の左腕がなかったんですよ。僕自身も、別人だった。ただ、ものすごくせつなくて強く抱きしめていたんです。」

「すまなかつたな。嫌な思いをさせてしまった。」

クレアが言葉を口にすると、カスターは唇を噛んだ。

「クレアさん、僕の命はあなたに捧げたって良いって思ってます。でも、その責任をとってほしいです。」

「責任？そんなもの。取れないよ。」

「見返りが欲しいとか、そんなことじゃないですよ。ただ、そばにいさせてくれるだけでもいいです。ロボのように。」

「はあ〜ん。お前勘違いしてるな。あたしは別に……。」

「わかってます。ロブのことを想っているとかじゃないことは。ただ、安心していたいただけなんです。」

「あたしのことを信じられないってことだから、安心できないのか。」

「信じてますよ。でも、クリアさん自身がどうなってもいいってわけじゃなくて……。ああ、何て言ったらいいんだろう。」

「責任はとってやるよ。今世は無理だから、来世でな。」

「来世？」

「ああ、今のあたしは汚れている。お前の責任を取れるほど、綺麗な体じゃないんだ。」

「いや、だから、体が欲しいとかって言ってるわけじゃ。」

「魂も汚れている。キヤス、人を殺したことがあるか。」

「ないです。」

「あたしはこの右手でメスを持ち、人の命を永らえてきた。しかし、この左手で人を殺してきた。」

カスターはつばを飲み込んだ。

「それはお義父さんのためでしょう。だったら……。。」

「違う。この世の中の理不尽さを無くす為さ。全部は無理だ、できる事をするしかない。」

「だからって、来世だなんて。」

「悪いな。来世じゃ、ちゃんと責任とってやるよ。」

「どうやって、責任取るんですか。」

「死ぬ前に誓ってやるよ。来世でまた、会えることを。」

クリアはカスターに背を向けていた。

カスターはその背に切ないものを感じていた。

夢に出てきた左腕の無い女性に姿を重ねてみていた。抱きしめたい衝動にかられていたが、出来ない自分がいることに歯がゆく思った。

黒々とした空に、少し欠けた状態の月が輝いていた。

その月を見上げる少女がいた。

白い髪のおかっぱで、膝下のブーツ、短パン、上着は防寒着、皮手袋をはめていた。

「薫が死んで、次は巖か。あのオンナは知っているんだと思う。でも、しゃべらないと思う。」

見せしめに誰かを殺さないかね。」

ヘッドセットのマイクに話しかけていた。

月の光をさえぎる物体があった。

「白い魚は空を飛びます。通信終わり。」

少女は崖の上に立っていて、そこから、下に向かって飛び込んだ。

そして、エアジェットの上に着地した。

少女はエアジェットの取っ手を掴むと、操縦席に合図をした。

エアジェットは弧を描いて、先を上に向けると、ロケット噴射を

し、上空へと消えていった。

第十六章 赤い山脈 1

カスターはしばらくの間、療養を続けなければいけなかったが、落ち着かないと行って、通信士の席に着いていた。

相変わらず、ロブとの仲は冷却期間中の夫婦のようで、さらにそれはロブとクレアの仲にもできていた。

クルーは氷のカーテンと呼称していた。

レインとジリアンは変わらず、カスターと接していたが、思いのほか、冗談を言わなくなったカスターを痛々しく思っていた。

「無理をするなよ、キヤス。」

クレアがそう言葉をかけると、カスターは口元に笑みを浮かべてうなづくだけだった。

そして、そばにいたロブにオーラがみなぎる。

(俺に声をかけるなよ。)

妙な空気が漂っても、なんとも思わないディゴが、言葉を口にする。「何が気に入らないのか、わからないが、ロブはクレアに声をかけなくなったよな。」

ロブが無口なのを、いいことにクレアは笑みを浮かべながら言った。「蚊帳の外にされるのが気に入らないのだろう。ガキじゃないんだから、要領よく振舞って欲しいね。」

ディゴは腕組みをして唸った。

「うーん。要領よく振舞うロブなんて、想像できないな。」

カスターは二人の会話の様子に、ただただ笑みを浮かべるだけだった。

ロブは聞いているだけでもいらだつてしょうがないのを我慢するしかなかった。

「ま、たしかにディゴの言うとおりだな。要領よく振舞っていたら、レインもすこしは無茶をしない子になっただろうね。」

「子は親の背中をみて育つというからなあ。」

ロブは握りこぶしを震わせて絶えていた。

その様子をカスターはみていて、ニヤニヤしているだけだった。通信機のランプが点いた。カスターはヘッドフォンに手をかけてスイッチを入れると、交信を始めた。

その様子を、ロブたちは見ていた。

「財団研究所から指令です。山岳警備隊キャティナ・マウント・サ・ロツソ駐屯地にて駐留してくださいとのことです。」

この言葉に、クレアの頭によぎったことは、グリーンエメラルダ号を追いかけてきたが、また距離をあけられてしまっただった。

キャティナ・マウント・サ・ロツソ駐屯地という場所に覚えがあったロブは露骨に嫌な顔をした。

「ロブ、嫌な奴でも思い出したか。」

「いや、なんでもない。」

そのやり取りでクレアは思い出した。

「ああ、キャティナ・マウント・サ・ロツソ駐屯地といえば、レテシアの同級生ジェフがいてたなあ。」

ロブは手を額にあてて下を向いた。

ジェフとは、スカイロード上官育成学校でのレテシアの同級生で、3回生の時にレテシアとエアジェットで衝突事故を起してしまい、レテシアは手術に入院という重症を負ったが、ジェフは軽症で済んでいた。

レテシアの見舞いに幾度と無く足を運んでいたのも、同じくまだ医学生だったクレアも見舞いにいったのでジェフとは知り合いという関係であった。

ここで、好奇心よろしくカスターが根掘り葉掘りと聞きたがるのだが、それが今は無い。

このまま、前のように戻らなければ、自分の責任だなどとクレアは思っていたが、良心の呵責として心が痛んだりはしなかった。

カスターに気を使ってしまっただけはかえって気が滅入ってしまうだろうと。

そう、考えながら、クレアは、昔のことに思いを馳せた。

(せっかく来たのだから、墓参りに行かないと。)

「山岳警備隊なら、レインたちのとって、良い訓練になるんじゃないか。」

デイゴがいうと、ロブはそうだなと返事をした。

「山間の距離のとり方とか、風圧、気圧、体感しないとわからないこととか、いい勉強になるだろう。」

「訓練の予定表でも考えておくよ。」

ロブはそういうと、操縦室から、出て行った。

「ジェフの話なら、ロブから聞いたことがある。今じゃ、いろいろと情報をくれる人物だと聞いていたが。」

「ああ、そうだね。スカイロード出身なら、パイロット関係者には詳しいからな。」

カスターは、軍にいたところの知り合いのパイロットのことを考えていた。

(たしか、カイトは山岳警備隊に所属しているって言ってたなあ。)

クレアはカスターのそばに行き、船内マイクをとった。

「アル、食事が終わったら、キャスト交代してくれないか。」

「キャス、山岳警備隊キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地のことをレイン、ジリアン、ジヨナサンに伝えてほしい。」

カスターはクレアの顔を見上げた。

「はい。」

覇気の無い声で返事をして、物音を立てずにカスターは席を立ち、操縦室から出た。

レインとジリアンはパジェロブルーを整備していた。

レイン自身は本調子になっていたので、カスターの話聞いて、浮き足立った。

(よおし、これでパジェロブルーを思う存分乗りこなせる。)

こころのなかでガッツポーズをした。

「頭で思い描いたのとはちがって、気圧や風圧、間合いの取り方とか、体感しないとほんとわからないよね。」

ジリアンは自分の体力の無さを強調したくなかったが、経験こそ成長につながることは理解しているので、自分で口にしながらも苦勞しそうだなど考えていた。

「あまり危険なこととはしなないと思うけど、山岳警備隊ってどんなところなの？」

何気ないレインの言葉に、カスターは考え込んでから、答えた。

「僕自身もよくわからないけど、キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地は軍隊の訓練の場所としては有名なんだ。」

黒衣の民族が居住する地域とは反対側にある山脈は鉄鉱石を多く含む地層を持ち、赤い色をしていた。

ディアナ火山を背にサドレ川の浸食により山岳地帯を形成している。断崖は平均の深さ約1000m、長約300km、幅6km〜29kmに及ぶ。

キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地は、今でこそ平穏な場所だが、以前は鉄鉱石を求めて他国が攻めてきたりしたが、山岳警備隊を配備して護衛し攻撃を鎮圧した。

山岳警備隊はエアジェットや空挺部隊のほかに、山岳に適応し人海戦術に適した陸上部隊があった。

森林がなく作物が育たない環境の山脈事態が居住するのに適していないため、人が住み着いていないという土地柄を利用して、軍隊の訓練としてはうってつけだった。

駐屯地に到着する前に、現地から知らせが入った。

その内容をクレアはレインたちに伝えた。

「喜べ、レイン。スカイロード上官育成学校が駐屯地で訓練を行うそうだ。」

そう言われて、レインは満面の笑みを浮かべたものの、察したジリアンが言った。

「皇女殿下もスカイロード上官育成学校の学生で、エミリアさんとペアを組んでいるとかって話してしたよね。」

すぐにレインの笑顔が消えた。その様子にクレアは訝しげに聞いた。「どうした？嬉しくないのか。」

レインはロブから口止めされていた高給腕時計のことをクレアには話していなかった。

だんまりを決め込んでいるレインに対して、クレアは残念そうにしていた。

「なにかあるんだね。言いたくなければそれでいい。いずれわかることだろうし。」

ジリアンは言わずとも知れるとレインに話をしていたので、クレアの言葉に深くうなづいた。

「まあ、確実に、エミリア上等兵と顔をあわせることになると思うから、元気になった姿をみせてあげればいいじゃないか。

安心するだろう。」

「そうですね。」

そういって、レインは自分の首元に巻いてあるスカイブルーのスカーフを撫でた。

第十六章 赤い山脈 2

断崖絶壁にキャティナ・マウンターサ・ロッソ駐屯地という要塞がある。

デッキゾーンが横に1キロに渡りあり、それらが崖の頂上から10ほどある。

スタンドフィールド・ドックの百倍はありそうなその要塞は、数百台のエアジェットに二十数台の空挺が格納および着岸している。

キャティナ・マウンターサ・ロッソ駐屯地にスカイエンジェルフィッシュ号通称SAFが着岸すると、山岳警備隊の隊長が出迎えてくれた。

「山岳警備隊・隊長で大佐のシエツ・エストリラです。わが駐屯地に来られた事を歓迎いたします。

研究所での襲撃の報告はこちらにも届いております。出発式を執り行なうことができず、残念な結果になったことは我々も遺憾に思っています。」

隊長の出迎えに対応したのは、クレアだったが、話半分にししか聞いておらず、こころは上の空だった。

まだ医学生だった頃にこの駐屯地に足を運んだことがあったが、その時とは比べものにならないくらいに巨大化していることを不思議に思っていた。

「合同練習を希望しているのですが、こちらはまだ、戦闘になれていないクルーばかりで、目的が医療行為ですから致し方ないのですが。」

「せひとも、こちらで訓練をし、腕をあげて、一人でも多くの命が救えるように成長していただけることを望んでいます。」

心にも無いことを口にしたクレアは、背中が痒くなってきたそうなのを堪えていた。

「謙虚な心構えですね。破天荒な方だとお聞きしておりますが。」

クレアは立ち止まって、天井を仰いだ。

「あ、いや、失礼な事を申し上げたのでしたら、申し訳ない。悪意はありません。」

「もちろん、そうでしょう。」

しばらく、間をおいた後、強調するように言った。

「医療行為が目的のスカイエンジェルフィッシュ号です。破天荒では決して成立できるものではありません。」

それぞれの持ち場を生かしチームワークを重視してこそ、目的を果たすことができると思うのですが、違いますか。」

「いや、まったくそのとおりです。私の言い方が悪かったと思います。あなたのことを忌憚きたんの無い行動的な女性という認識があるので。」

それは、自己中心的なものとは違い、確信あつての行動でしょう。

直感で行動しない、きちんと裏づけされた行動で人を惹き付ける要素をお持ちだということですよ。」

「買いかぶっておられる。どなたのご意見でしょうか。」

「以前、この駐屯地を制しておられた司令官でサンジヨベーゼ将軍です。」

クレアは少し耳を疑った。エミリア上等兵の父親が軍人である事を聞いていたが、将軍であるということまで知り得てなかったからだ。

「この要塞を完成させたという司令官ですか。」

「ええそうです。完成させたといえますと……。」

「学生時分、夏季研修と称して山岳警備隊で医療研修をしていましたから。その頃にはまだ、小さくて。今は驚くばかりで。」

「そうですね。クレア先生が学生の頃と申されますと、小さい駐屯地だったことでしょう。」

「その司令官は以前と申されますと、こちらにはいらっしやらないということですか。」

「そうです。中央司令部で事務方をされておられます。3年ほど前に優秀な人材でおられた息子さんをこの駐屯地で命を落とされたの

です。」

「それはまた、なぜゆえに。」

「大規模な鉄鉱石窃盗団がしまして、捕獲にむかったところ返り討ちにあい、数十機が打ち落とされてそのうちの一機に息子さんがおられたのです。」

まだ、スカイロード上官育成学校を卒業されたばかりで、将来を有望されたパイロットでした。」

「もしや、司令官のご息女はその学校の学生ではありませんか。」

「そうですね。明日、この駐屯地で訓練をする予定の学生です。ご存知でしたか。」

「ええ、まあ。」

「そういえば、襲撃事件で先導パイロットに選ばれていて怪我を負ったと報告書にはありましたね。」

「お兄さんを失くしたこの地で訓練とはさぞ辛いことでしょう。」

「気丈なお嬢さんだとお聞きしたことがあります。軍人としての誇りが高いとも聞いておりますから、悲嘆にくれて物怖じしたりはしないでしょう。」

心配は無用かとおもわれます。」

「そうですね。」

クレアは、デッキの端から外に広がる、断崖絶壁の赤い山脈の光景をすこし恐怖に感じていた。

なんとも業の深い縁だなと思いつつ、デッキに吹き込む風を感じていた。

クレアの頭によぎったのは、レテシアの兄のことだった。

レテシアが上官育成学校に入学する前に戦死していた。

エミリアにも同じことが起きていたことは偶然ではないように思えてしかたなかった。

その思いを読んでいたのか、エストリラ大佐は後方を振り返って言った。

「あちらの少年は、レテシア少尉に瓜二つですね。最近までグリーン

ンエメラルダ号が滞在してありましたから、なお一層そう思えます。そういえば、レテシア少尉にも兄君がおられて、戦死したと聞いております。鬼艦長と字あやされているハートランド艦長が号泣されたという話は有名でした。」

クレアは、大佐の事をおしゃべりだなと考えていた。言わないとしたことを口にすることが少し耳障りに思えた。

もしかして、様子を伺っているのか、そうだなあ、軍が分割しているとなれば、この駐屯地はどっちの側なのだろうと。

「瓜二つというより、そのままですよ。レテシアの息子のレイン・スタンドフィールドです。」

「スタンドフィールドといえば、アレックスのですか。」

「そうです。あちらの金髪の男性が父親のロブですよ。」

大佐とクレアが視線を向けている様子に、ロブは違和感を感じながらも、気づかない振りをしていた。

レインは軍の駐屯地や関係部署に滞在すると必ずされる歓迎のされ方にうんざりしていた。

ロブの後をジリアンとともに歩いているだけで、好奇心目で見られていることを敏感に感じていた。

デッキにいた軍人たちは、レインの姿をみると目を疑うからだ。

先日まで、レテシア少尉がいてここを出発したというのに。

S A Fのクルーがいてるデッキに、一機のエアジェットが突っ込んできた。

「ジェフ＝マックファット少尉、指令を無視して、第三ゾーンに侵入しないでください！」

通信士のアナウンスがデッキ中に響いた。

ロブは露骨に嫌な顔をした。その様子をみたディゴは、レテシアの同級生だったというジェフだとわかった。

そのエアジェットはデッキの端に着岸すると、スライド式にロックがかかると、翼を折りたたんでコンパクトに収納された。

操縦席から、一人の男性が降り立つと、まっすぐクルーに向かって

やってきた。

「レテシアの息子が来てるって聞いて、急いで帰還してきたんですよ。大佐。」

「少尉、命令を無視して良いなどと、もはや思っていないだろうな。」

「もちろん、始末書なら、ちゃんと書きますよ。」

「書いたらいっていうものじゃないよ。」

ジェフはクレアの方をちらりとみて、目で合図をした。

ジェフが向かった先はレインたちのほうだった。ヘルメットや通信機をはずしながら足を進めた。

「ロブ、久しぶりだな。相変わらず、嫌そうな顔をするなよ。」

開口一番に嫌味をぶつけてジェフは笑顔で挨拶をすると、ロブは口元をゆがませて、手を上げて挨拶をした。

「はじめましてだね。レイン。僕はジェフ＝マックファットとして、君のお母さんの同級生だったんだ。」

ジェフはレインに右手を差し出し、握手を求めた。

「あ、はじめまして、よろしくお願いします。」

控えめな声で挨拶をすると、ジェフはレインの手を握りると大きく振った、テオ少佐のように。

「うわあ、噂どおりの瓜二つだな。驚きだよ。男の子なのに、こんなにレテシアにそっくりだなんて。」

ロブが育てたように思えないなあ。」

レインの肩から二の腕にかけて手をあてて、ジェフは筋肉がついていることを確認していた。

「きみがジリアン君だね。話しはレテシアから聞いていたよ。レインの良きパートナーって感じだね。」

ジリアンに向けてジェフは右手を差し出し、ジリアンはしっかりとジェフの手を握って大きく振らないようにした。

その様子に、すこしたじろぎながら、ジェフは自己中心的に、その場から立ち去ろうとした。

「帰還したばかりなので、退散します。お騒がせしました。」
ジェフはロブたちを背に、クレアの方に向かって合図をした。
右手を広げて5本指を強調し、くるりと手首を回すと三本指にした。
その右手の三本指を左手に持っていつてあわせ、8という数字にした。

大佐はそれが視界に入っていたが見てみぬ振りをした。

クレアは左手で額を掻いて、返答をした。

「相変わらず、自己中心的な男だな。」

ロブがつぶやくと、デイゴが言った。

「さすが、レテシアの旧友だな。」

その言葉に、ロブとレインは眉をひそめた。

第十六章 赤い山脈 3

要塞の頂上付近は、居住区と施設がある。

到着したのが夕方だったので、S A Fのクルーは食事を取っていた。レインは相変わらず、隊員や軍人にじろじろと見られていた。

「山岳警備隊では、レテシアは有名人らしいな。」

デイゴが言葉にすると、ロブが睨んでいた。

「グリーンエメラルダ号が先日までいてたのでしょ。」

ジリアンは知り得ていたことを口にした。

「それもあるだろうが、エアジェット無しに飛んでいる姿を披露したらしいぞ。」

周囲にいてる人間が一齐に食事の手を止めた。

「テオ少佐が言ってた情報は要塞からみたいだな。」

「少佐が言ってたの？どうして飛べるわけ？」

レインがデイゴに身を乗り出して問い詰めた。

「普通、エアジェット無しで飛べるわけが無いだろう。アクロバットだよ。」

ロブは手にしたフォークを皿に突き刺してギリギリと音を立てていた。

その様子にジリアンは怯えていた。

デイゴの一言で手を止めてたものの、アルバートは食べ始めていた。

「レテシアに相棒がいるっていうことかな。」

クレアは考えていた事を口にした。

「そういうことだろうなあ。レテシアの相棒になれる人物がロブ意外にいるとはな。」

周囲の人間が一齐にロブの方へ視線を送った。

ロブはフォークを置いて、席を立った。

「ご馳走様だ。シャワーを浴びてくる。」

ロブが立ち去るのを待って、食べ物をおぼりながら、アルバート

が言った。

「三十歳過ぎている女性が、アクロバット飛行って、さすがだね。」
「エアジェットで人には出来ない飛行をするのが、得意な女性ひとだったからね。」

ロブがやっていることをまねしたがっていたんだよ。」

ジョナサンが遠い目をしながら、話し始めた。

「ああ、この話は、わたしが軍のエンジニアしていた時の話だよ。レテシアとはよく話をしていたんだ。」

ホーネットクルーの時ね。」

クレアは細い目でジョナサンを見ていた。

「兄さんの真似をしたいつて、よっぽどだね。」

ジリアンの言葉にレインが噛み付いた。

「どういうことだよ。」

「いや、特に意味は無いよ。」

クレアが援護した。

「レテシアは負けず嫌いだったからな。風車飛行を教えたのがレテシアなのに、すぐにできるようになったロブに嫉妬していた時期もあつたんだ。」

それが愛情に変わったなんてはなしは、二人にしないほうがいいな
と思っていた。

「ご馳走様でした。僕は周囲を散策させてもらうよ。知人がここに
いるのでね。」

カスターはそういつて、席を立った。

「知人ってどんな人？」

レインが問いかけると、カスターは輸送隊に所属していたときのパ
イロットだと言った。

以前のカスターに戻らない様子に、レインやジリアンも寂しさを隠
せずにいて、去っていくカスターの後姿を見ていた。

「大丈夫ですよ。そのうち、以前のカスターさんに戻りますよ。」
コーデイが声をかけた。

「あたしや、用事があるから、これで食事を終えるよ。」
クレアがそういって、席を立ち、いなくなった。
残った者たちの何人かは、早々と食事を終え、次々と席を立った。
コーデイだけは、マイペースに食事を取り、食堂から景色を眺めていた。

夜の要塞は、デッキゾーンの電灯がネオンのようにきらめいていた。
夜間飛行する空挺やエアジェットが飛び立ったり着岸する様は、蛍光する虫のように見えた。

デッキの幅が下へ行くほど広がっていて、段々になっていた。
上から見れば、下のデッキゾーンが見える。

各階には警備が配置されて、確認呼称の音が響いていた。

午後8時、第五デッキゾーンの3エリアが、ジェフとの待ち合わせだった。

そこに、テラスのようなりラックスゾーンが配備されていた。
椅子に腰掛けて、待っているとジェフが現れた。

「暗号の意味がわかっていただけただけわけですね。」

「理解したくも無いけど。昔からの山岳警備隊の暗号だろう。」

「やはり、忘れてないものですか。」

「忘れてたくても忘れられないかな。」

ジェフのサインはクレアが医学生の際に受けた夏季医療研修で、山岳警備隊に従属したときに知り得たものだった。

「座らせてもらいますね。」

クレアの横にジェフは腰をかけた。

二人が知り合いになったのは、スカイロード上官育成学校のときの事故でレテシアが入院している時だった。

卒業後のふたりはホーネットに所属希望していたが、事故が原因でジェフは山岳警備隊に配属希望し、レテシアは休学した。

クレアの義父ダンが亡くなった後、身を寄せていたのが、別の駐屯地で任務就いていた山岳警備隊の陸上部隊長で夏季研修で男女の仲

になった人物だった。

その後、エミリアの兄同様、大規模な鉄鉱石窃盗団の捕獲作戦で命を落としていた。

その人物は、ジエフにとっても頼りがいのある人物であった。

「あの方は陸上部隊だったので接点はあまりなかったんですけど、クレアさんのおかげでよく可愛がってもらいましたよ。」

「墓参りに行こうかと思っっているんだが、付き合ってもらえないかな。徒歩ではいけないところだからなあ。」

「ええ、いいですよ。非番がありますから、合同訓練終了後ですね。」

「できたら、恒例のお祭りの間にこっそりに抜け出して行きたいね。」

ジエフは含み笑いをして、「了解」と返事をした。

「ときに、この隊長さんはあたしを買いかぶっているんだが、情報はどうやら、サンジョベーゼ將軍らしいんだが、どういうわけかな。」

「ああ、將軍は鬼艦長と懇意していたからですよ。將軍とはよくお話しさせてもらったのも、ハートランド家になまじ縁があったからなんですけどね。」

「へえ、そうなんだ。」

「將軍は上を目指したけど、鬼艦長は船に籠ったというのが、口癖でしたよ。」

「ふうん、そんなつながりがあったんだ。」

「鬼艦長はクレアさんのことを気に入ってましたからね。」

「忌憚きたんのない行動的な女性とは、鬼艦長の言葉じゃないだろうなあ。」

ジエフはクレアに擦り寄った。

「ところで、鬼艦長から、なにか頼まれませんでしたか。」

クレアはジエフの顔を横目で見た。

「ロブとの復縁か？」

「レテシアに未練があるとか。」

「未練というか、世の中にロブしかオトコがいないって思っているオンナだからなあ。」

「で、どうなんです。ロブのほうは？」

「そんなこと聞いてもな。手ごたえが感じられない。というか、あいつ、閉じこもっているから。」

ジエフはクレアから少し離れて、下をみながら言葉を口にした。

「レテシアは、クレアさんに焼きもちを焼いていますよ。」

「そう、思ってたさ。だから、あまり、ドックにいないようにしてたんだがな。」

「僕からは、クレアさんがロブを相手にするわけがないって言うておいたんですがね。」

「耳を貸さないだろう。レテシアは分からず屋だからな。あいつら、似たもの夫婦なんだよ。」

「そうですねえ、ロブも分からず屋だ。レテシアに謝る事を条件で情報を流してやってるのに。」

「何の情報？もしかして、カスターか？」

「ええ。カイン少尉から手に入れた話ですよ。」

「そうかあ、だから、露骨に嫌な顔をしていたのか。」

下のほうからサイレンが鳴ると、前方から空挺が一機向かってきた。下のほうのデツキゾーンに着岸する様子だった。

「こんな時間に到着する空挺か。」

「皇女殿下に従属する部隊でしょう。スカイロードとの合同訓練で、今回は特別訓練だと支持がありましたよ。」

「親ばかもいいところだな。」

「そうですね。親ばかといえば、どうなんですか、レインのほうは？親ばかぶりは何故か聞き及んでいるんですよ。」

ジエフはニヤ着きながら、クレアをみて、言った。

「外見は両親のいいところをしたのだが、中身がなあ。」

「クレアは天井を見上げて呆れ顔だった。」

「優柔不断で、無鉄砲で思量が足りない。その分、ジリアンが良いってどうか、頭の回転が早くて機転が利く。危機感もちゃんと持っているし。」

「あははは、無鉄砲で思量が足りないって、二人の悪いところでしよう。」

ジェフは笑いながら、手をたたいた。

「レインとジリアンと二人で足して二で割るくらいがちょうど良いかな。」

「鬼艦長が、レインを引き取りたい気持ちとそうでない気持ちとがあつて、親権が取れなかったことは悔しいと思っていなくて言つてたけど。」

「ふ、負け惜しみじゃないな。」

「でしょ。きつと、こう言いたかつたんですよ。引き取っても自分で育てる自信がなかつたつて。」

第十六章 赤い山脈 4

要塞の朝、訓練のための朝礼が始まる前に、準備運動が行われていた。

岸壁の地上で朝日を浴びながら、隊を組んで走っていた。

そのなかに、スカイエンジンファイツシュ号通称SAFのクルーたちがいいた。

体力をつけるための運動なら、苦にもならなかったが、屈強な男たちに混じったの軍演習の運動はきつかった。

先にジリアンがばててしまった。もともと、基礎体力がついていなかったからだ。

疲労して午前の訓練をやつてのけるか不安に思っていた。

準備運動を終えて、朝食を取った。

そこで初めて、ロブはカスターがいないことに気がついた。

「レイン、カスターはどうしたんだ。」

「診療部にいてるよ。要塞ユツにいてる時は、ずっとそこにいてもらうってクレアさんが言ってたよ。」

ジリアンが、二人の会話に余計な一言を言おうとしたとき、デイゴに制止させられた。

「ロブ、お前はクレアさんと会話したからないからだな、カスターのことも知りえてないのだろうが。」

アルが部屋にもどらなかつたのを知らないんだろうな。」

ロブはデイゴの言葉に不機嫌になった。アルバートはそ知らぬ顔で食事をしていた。

「アル？アルがどうかしたのか。ジョナサンと一緒にだろう。」

ジョナサンは、すこし顔色を青くして、言った。

「アルは、部屋に戻ってこなかつたんだ。クレアさんここにいったのだと思っただ。」

「ロブ、お前に責任感がないのなら、仕方が無い。クレアは医者だ。」

S A Fのリーダーをしているほど頭は暇じゃない。

お前がクルーのことを把握しないで誰がするんだ。部屋は二人部屋で、ルームメイトが戻ってこなかったら、おかしいと気がついて連絡すべきなんだ。」

「悪かったよ、デイゴ。チームワークを乱すようなことがないようにする。」

ロブはふて腐れて言った。

デイゴは頼むぞと一言言うと、朝食を終えて、テーブルから立ち去った

デイゴがいなくなったのを待つて、ジリアンがジョナサンに言った。

「ジョナサンは部屋で一人何かしようとしていたわけ？」

ジョナサンはジリアンをにらんだ。

「ははは、何を言うんだか、ジル。アルがクレアさんのところへいくのは、よくあることじゃないか。おかしいとは思わないだろ。」

「昨日は、隊長さんの秘書・アップルメイト大尉が要塞を甘く見ないようにつて、忠言していたじゃないですか。」

アルはすごく怯えてましたよ。夜は出歩かないようにしようつて言つてたんですから。」

「そうは言つても……。」

「言い訳が下手だな、ジョナサン。アルは夜寝る時、一人じゃ寂しがるんだ。アルを一人にして、いなくなったのを見計らつて部屋にもどつたんじゃないだろうな。」

ロブは、疑いの言葉をジョナサンに投げかけた。

「ロブ、今、チームワークを乱すようなことが無いようにつて言つたばかりじゃないか。僕を疑つてどうするんだ。」

「勝手な行動を戒めるのがチームワークを乱さないことだと思つんだが。」

「はは、そうだね。悪かったよ。いやあ、実は、レテシアと連絡を取つていてね。ふたりのことを知らせていたんだ。」

「ええ!!!」

レインは大きな声で叫んだ。ロブは頭を抱えた。

「どうしてそんなことを。」

ロブは小声でジョナサンに聞いた。だした。

「いやあ、レテシアとはよく連絡を取っていたのでね。内緒にしてくれって言われてたんだが。」

ふたりのことをつぶさに話したら、とても喜んでいたよ。内緒にしていて、済まなかった。察してくれ。」

魂が抜かれた状態になったレイン、あきれた顔のロブ、複雑な心境になったジリアン、彼らを横目に、罰が悪そうに食事を早々と済ませて、ジョナサンは退散した。

訓練のための朝礼は、隊長の秘書・メアリー「アップルメイト大尉が説明した。

訓練には、SAFからロブ、レイン、ジリアン、アルバートが参加。山岳警備隊から、パイロットのカイン「シユタット少尉、ジェフ「マックファット少尉、陸上部隊のエディ「コークスロー中尉が参加。まずは、ディアナ火山の山岳地帯の説明から始まった。

山岳地帯は、サドレ川の分岐した川が浸食した断崖絶壁が何層にも連なっていて迷路のようになっている。

深さが約1,000mの底には、川は流れておらず、砂地になっているが、断崖絶壁に住み着く小動物を食べて生息する砂虫がいた。その砂虫は巨大なものは人間をも食べてしまうので、谷底には落下できない。

絶壁には、地層がいくつも出来ていて、やわらかい地層に草が根付いて派生し、蔦のようになってるので、縄代わりになると説明があった。

落ちた場合はその草を掴むように努力するよう言われたのだ。

午前の訓練は、陸上部隊のコークスロー中尉を中心に、断崖絶壁での対処法を身につけること、要塞での常備品の使い方の指導を受ける。

ハーケン、ロックハンマー、発炎筒、フラッシュライトなどが、常備されたベストを身につけ、使い方から教わった。

ハーケンやロックハンマーは岩場に使うためだが、発炎筒は要塞igaでも必要とされていたので使ったことがなかった。実演してもらった。

山岳地帯での発炎筒の使い方は、明かりを嫌う砂虫除けだったが、フラッシュライトは発炎筒を切らした時のためのもので、一瞬の発光で砂虫を一時的に動かなくさせるものだった。

訓練のための朝礼を終え、みんなは現場に向かった。

クレアは、診療部で、コーディからマツサージを受けていた。

隣で、カスターは点滴を打たれていた。

「キヤス、少しは眠れたかい。」

「ええ。空挺じゃないところは、落ち着かないんですけど、昨日はぐっすり眠れました。」

昔話に花が咲いたので。」

「それは良かった。どうかなあ、そのお、カオルの気に当てられた、例の感じは？」

「そうですねえ、なんか、薄らいだ感じがします。」

カスターは、人格破壊をカオルから受けて、魂が離れかけていた。

ロブたちに救出されてから、麻薬中毒のために、夢うつつをさまよったが、カスター自身、妙な感覚に囚われていた。

クレアに触れるとクレアの左腕がない感じがしてしようがなく、コーディやアルバートに触れると幼い手を握っているような感覚がしていた。

3人以外の人間だと何も感じないのだという。

魔術師に能力があるとは、クレア自身は信じていなかったが、なにか気に当てられて、妙な力を植えつけられたのかと考えていた。

「ところが弱くなっている時、その代わりに普通の人間には有り得ない力というのが出てくるのだと医療の世界で言われてはいるのだ

けどね。」

そう言いながらも、クレアはカスターに対して気休めしか言えてないことは自覚していた。

「クレアさんの左腕が未来でなくなっていることなんてことがあっても、アルやコーデイの手が幼くなるなんてことはないでしょう。

未来を感じているとは思えないですよ。ただ……。」

「ただ？」

「クレアさんが、来世の話しなんかするから、来世の話しかもしれないですね。」

コーデイは二人の会話を聞きながらも、マツサージを淡々と続けていて、聞こえない振りをしていた。

「来世か。そうかもしれないね。」

「そうかもしれないねって、シヨックじゃないんですか。」

「そうだなあ、左腕をカスターにくれてやるんだった、それも仕方ないかなと。」

「ふっ、クレアさん。僕は左腕、要らないですよ。来世の僕自身がどんなものなのかわからないんですし。」

「まあ、なにか理由があつてのことだろう。必要性があるんじゃないかなあ。」

「何のですか。」

「こころが弱くなっていることで感じることだから、来世を知る必要性。」

まあ、こころが強くなれば、その感覚はなくなるってことだな。安心したよ。」

「こころ、強くなりますか。」

「なるよ。あたしの周りには弱い男なんていないんだから。」

ここでマツサージをしてから始めて、コーデイの口から言葉が出た。

「こころ強いですね。クレアさんに縁のある男性はこころが強いひとなんですよ。」

カスターさんはいまだけですから、いづれ強くなれますよ。」

コーデイの笑顔にカスターも笑顔を返した。

「絶対いらないとは限らないが。少なくとも、味方として戦っていき
るオトコたちには、ってことだねえ。」

コーデイがマツサージの力を強くしていったので、クレアはうめき
声を上げながらも気持ちいいと言った。

第十六章 赤い山脈 5

現場とは、断崖絶壁の高さが低くて、底が広い場所だった。

そこは、ロッククライミング用の練習場で、谷底の砂地には砂虫除けの柵があった。

日差しが底まできちんと届くため、柵がなくても、砂虫は寄って来ないのだが。

コークスロー中尉の指導のもと、ハーケンとロックハンマーで、壁に打ち込む練習をした。

アップルメイト大尉は、訓練指揮官として、練習風景を監督していた。

アルバートは次第に弱音を吐いて、ダダをこね始めたが、大尉に酷く怒鳴られた。

それはクレアの指示だった。アルバートは怠惰なところがあるが、女性が叱ってやると素直に聞くという話からだ。

縄はパイロットの装備品としては質量的かさが増すので、強度のある細いワイヤー仕様。

ハーケンをトップに打ち込み式の銃の使い方も教わった。

午前の部を終え、メンバーは現場で昼食をとった。

ロブは、カインと軍の輸送部隊で一緒だったというカイン少尉と話していた。

「カイン少尉、キャスと一緒にだったというけど、軍ではどんな感じの男だったかな。」

レインやジリアン、アルバートは興味深深と聞き耳を立てながら食べていた。

「いやあ、特に変わった特徴は無かったよ。落ち着きのない男だなとは思っていたけどね。」

「輸送部隊の前は、司令部の通信部にいてたと聞いていたんだが。」

「ああ、確かに。噂には聞いていたよ。軟派なら野郎だってね。で

も、実際あったら、大人しい男でどうやら無理して女をひっかけたみたいだ。」

「そうかあ。昨日の夜は、一緒に話をしたらしいが、特に変わった様子もなかったんだな。」

「そうだね。昔と変わらない。悪ふざけは多少したけど、さし当たって迷惑かけたほどでもない。よくあることだろう、若い男なら。」

間があつて、カインのほうから話しかけた。
「アレックスの子孫で男前の若い男がレテシアのハートを射止めたつて聞いていたが、ロブ、君の事なんだね。」

ブホッ！ゲホゲホッ

レインは口にはおぼつた食べ物を噴出した。

「ああ、悪い。レイン、君の両親だったね。あからさまな話してしまつたな。」

ジリアンがレインの背中を撫でて、ほくしてあげようとした。

「どこ行つても、その話したな。珍しいか、レテシアが。」
ロブは無関係のように話した。

「ああ、珍しいな。あんなオンナは滅多にいない。」

ジエフは、昔の事を振り返るように話を始めた。

それはスカイロードでの事故のことだった。

3回生の時、1回生の歓迎レセプションで、披露するはずの飛行シヨードで、レテシアが背面飛行をして背中合わせに重なって飛行するのがジエフだった。

お互い向かい合つて、すれ違いの際重なって飛行するところを、ジエフが直前で怖気づいて、機体を接触させてしまった。

接触した反動で、ジエフの機体が地面に叩きつけられる事を避けるために、レテシアは翼をわざと当てて向きを変えさせた。

ジエフの機体を上空に押し上げ、レテシア自身は地面に激突を避けたものの、重症を負った。

「あんな芸当ができるのは、レテシアしかない。しかも突発事故で最小限の犠牲にとどめる判断力を持っていた。」

ロブはだんまりを決め込んだ。

レインは顔を青ざめていた。レインの様子をみてジリアンは心配していた。

そして、アルバートが口を開いた。

「午後から、飛行訓練なのですよ、マックファット少尉。いまからそんな怖い話をしないでくださいよ。」

「無謀な行動で命を落としかけるのは、お家芸だなんて、思わせないでほしいね。」

ジェフの言葉にロブは断言した。

「わかっている。俺たちは無駄死にするつもりは無い。」

「そうか、生き急いでいるように思えるがな。フレッドの後を追うようなことはするなよ、ロブ。」

「そこまで、ふたりとも、熱く語らないで頂戴。」

大尉がロブとマックファイト少尉の会話を制止した。

レインは難しい顔をして、小声でジリアンに言った。

「いき急いでいるってどういうこと？」

その言葉に、答えていいものかどうかと、ジリアンは一瞬悩んだ。

「死にたがっているってことだよ。」

「え?!」

レインはロブを見ていた。ロブが死にたがっているって、なぜ?と自問自答していた。

何かを考えているレインの顔を見て、察しがついた。

「レイニー、考えても答えは見つからないから、考えないほうが良いよ。」

レインはふて腐れたが、ジリアンの言うとおりかもしれないと思った。

メンバーが食べ終わって、次の準備を始めようとした。

パイロットのシュタット少尉、マックファット少尉、ジリアンたちは要塞に戻って機体に乗って、現場に戻ってくる。

ロブ、レイン、アルバートが現場で装備の準備などをして、大尉と

中尉は地上に駐留して現場を指揮する。

シユタット少尉はアルバートと組むため、現場を離れる時に言った。

「アルバート、君は黒衣の民族のハーフらしいな。」

「ええ、それがどうかしましたか。少尉のこころを痛めるようなことでも。」

「そうだなあ。俺自身にはなにもないが、身内が殺されている。」

「じゃ、僕に恨みでも晴らしますか。クスッ」

「そうだなあ、どさくさにまぎれて殺すつてももありかもな。」

「少尉！挑発するのはやめなさい。ペアを組むもの同士でけん制しあつてどうするんです。」

大尉が静止したが、二人は耳を貸さない様子だった。

カインはジェフに引つ張られて、連れて行かれた。

アルバートはレインが引つ張った。

地上で待機のメンバー3人は、ヘッドセットにパラシュートを装備した。

断崖絶壁の頂上部分で谷底に向かって飛び出している場所があり、そこに立って風に乗って微妙な機械音がするのを聞いたロブは、大部隊がこつちに到着だなとつぶやいた。

ジェフの機体が谷底からあらわれて、ロブの前で上空に向かって上昇していった。

「了解。ロブはスタンドフィールドが一番手で機体に飛び込みます。」

ヘッドセットに手をかけた後、ロブは右手を上げて合図をした。

ジェフの機体は、谷底に向かって降下した。

5mほど、後ずさりすると、ヘッドセットに耳を傾け、カウントを自分で数えて、走りこんだ。

断崖絶壁の端から飛び込んで、ジェフの機体の上に飛び移った。

レインとアルバートはその様子をお手本として見て、機体が谷底に落下していくのを確認すると、二人は谷底を除き込んだ。

機体は絶壁に平行して背面飛行をし、ロブは、壁に生えている蔦に

つかまり、機体から飛び移った。

ロボの様子を、ジリアンとカインは機体から見ていた。

ロボは掴んだ鳶を腰に絡ませ、両足で勢い良く壁を衝くと、左手でハーケンの銃を撃ち、目先5mほど上に打ち込んだ。

ハーケンをロックハンマーで打ち込んで、足掛けにし、上ってはハーケンをワイヤーで引き寄せを繰り返し、頂上に上り詰めた。

レインとアルバートのふたりはロボと同じ事をしなければならなかった。

意を決して、レインは準備をした。

後ずさりをして、ヘッドセットから、指示があるのを待っていた。

指示が出て、カウントし、走りこむと、その下にはパジェロブルーがいた。

何度も、SAFで練習をこなしてきたから、問題ないと思っていたが、着地は不安定なもので、片足は滑りかけたが、両手でしっかりと機体の取っ手を握り締めた。

重心が傾き、機体が傾いたが、ジリアンの操縦桿を水平にもどして、機体は傾きを修整された。

レインがパジェロブルーにつかまって飛行している間、ゴォーッと
いう轟音とともに、空挺の団体が要塞に近づいてきた。

ジリアンは大尉の指示により、絶壁に背面飛行するのは待機という
通信が入り、地上から上空に向かって上昇していった。

パジェロブルーの翼は太陽光を反射させて、キラキラ光っていた。
その様子が空挺にも見えていた。

スカイロード上官育成学校の生徒が搭乗している空挺で、エミリア
は偶然にも窓からパジェロブルーを眺めていた。

レインは大尉から、スカイロード一行が到着したから、今は待機と
通信が入っていたので、要塞に近づいている団体の空挺を見つめて
いた。

「エミリアさんが見ているかな。」

その言葉をつぶやきながらも、もうひとりの存在を思い出さずには

いらなくなって、複雑な気持ちになった。

第十六章 赤い山脈 6

団体の空挺とは、学生のアジエットを積んだ輸送機が5機、2回生と3回生を合わせて50名と教官や講師を乗せた空挺が1機で、要塞に着岸した。

スカイロードと要塞の隊長との挨拶が済み、山岳警備隊・隊長で大佐のシエツ・エストリラは紅一点のエミリア・サンジヨベエを捜し当てた。

「サンジヨベエ上等兵、あなたのお父上は、サンジヨベエ将軍ですね。我が要塞の司令官をされていて、とてもお世話になりました。」

声を掛けられて、エミリアはたじろいだが、敬礼をした。

「わたくしは、父の事をあまり存じておりません。不屈者の娘です。父の名誉を自慢できるような立場にはありません。」

「ご謙遜を。」

「いえ、出来の悪い娘です。優秀な亡き兄と違って、わたしなど。教官のビル＝ポルスキー准曹が近づいてきた。」

「まあ、そう自己卑下せずとも。皇女殿下のルームメイトとして手を掛けて心を傾けながら勉学に励んでいるのだから。」

「皇女殿下のルームメイトとしての立場は光栄に思っております。」

お役に立てることがせめてもの、わたしのできることだと自覚しております。」

エストリラ大佐はポルスキー准曹に目配せをした。

「まあ、そう卑屈にならなくてもいいでしょう。ここではのびのびと訓練を受けられればよろしい。」

「優しいお言葉に感謝し、訓練に邁進まいしんしていきます。」

エミリアは敬礼をした。

「時に、お聞きしたいことがあります。」

「何なりと。」

「到着前のことです。空挺から要塞を眺めておりますと、要塞の先にパジェロブルーというエアジェットが飛行しているのを確認したのですが。」

スカイエンジェルフィッシュ号が駐留しているのででしょうか。」

「ええ、そうです。スタンドフィールドドックの人たちでも、軍の訓練を受けていないところもあるので、ぜひ山岳警備隊の要塞で訓練を受けたいということでした。」

エストリラ大佐の言葉を受けて、ポルスキー准曹は合同訓練を考えていると口にした。

黒衣の民族襲撃事件で、アクロバット飛行の必要性が重視され、山岳警備隊での研修程度ではなく、大々的に訓練をすることとなった。その訓練現場に、パジェロブルーの機体を披露させたい意図がグリーンオイル財団の腹にあり、裏では皇帝が指示していた。

そのことを知るのは上層部だけではあるが、エミリアは少し胸騒ぎがした。

スカイロードの空挺部隊が着岸したのを確認したところで、訓練が再開された。

パジェロブルーではまだ、したことが無かった背面飛行。地上に対して背面飛行するのは違って、壁に向かっての垂直ではあったが、バランスを崩すと壁に激突してしまう危険性が高い。

しかし、ジリアンは難なくやってのけて、レインはロブがしたように鳶をつかみ、パジェロブルーから飛び移った。皮手袋をしていたが、うまく握れず、2mほど滑ってしまったが、なんとかつかまることができた。

腰に巻くほど、鳶が伸びておらず、通信にしたがって、違う鳶に慎重に飛び移った。

ハーケンが付いた銃はうまく撃てず、不発に終わり、ロックハンマーでちまちまと上に上っていった。

レインが上り詰めるまで時間がかかるので、アルバートに指示が出

た。

カインがもし、命令違反をしたのなら、それはそれで仕方ないとアルバートは他人事のように思って、自虐的に絶壁から飛び込んだ。先のふたりと同じように、カインの機体は待機していて、アルバートが飛び乗ったのを確認すると、降下し、取っ手を掴んでいるのを目視確認して、背面飛行した。

レインがいてる先の蔦を掴み、アルバートは銃の打ち込みを卒なくやってのけた。

息を切らしてレインが頂上に上り詰めた時には、待っていたアルバートがレインに手を差し伸べていた。

一通り、訓練をやり終えると、3機にそれぞれ、飛び乗ったまま、ジエフを先頭にして、谷底に降下し、暗闇に突入した。

ロブは耳慣れない鳴き声を聞き取ると、ジエフから指示があり、発炎筒を発火して投げた。

暗闇に一筋の光が弧を描いて落下していく。鉄骨を引っかく耳障りな鳴き声が響き渡った。

3機は発炎筒が落ちていった場所まで、降下していく、慎重に。

ジエフは、絶壁に背面飛行し、絶壁にへばりつく小動物を捕まえるように指示をした。

ロブは鼠のようなものを発見し即座に捕獲し、ナイフで切り裂くと谷底に投げた。

ジエフは水平飛行にもどし、轟音のような鳴き声がすると即座にライトをつけた。

そこには、砂虫が大きな口をあけて、小動物を喰らう姿が光に晒された。

その様子を、レイン・ジリアン・アルバートが見ている、驚愕していた。

「あれにやられたら、ひとたまりもないな。」
アルバートはつぶやいた。

砂虫の大きな口に尖った歯がびっしりと二重に並んでいるのが見え

た。

実物の砂虫を確認して、3機は要塞に帰還するために、谷底から上に向かつて上昇した。

要塞に帰還すると、訓練を受けたメンバーは整列をし、報告をしあつて、アップルメイト大尉の号令で解散となった。

帰還と同時に、落ち着きをなくしていたレインは、デッキの端に向かい、下を覗いた。

ロブとジリアンはレインが何をしたいのか、知っていた。

アルバートはレインに抱きついた。

「危ないよ、そんなに覗き込んだら。」

「こらあ、怖いじゃないか。一緒に落ちてしまおうでしょ、アル。」

「悪ふざけはいつものことじゃないか。フッフ。何か探しているの？」

何かじゃなくて、誰かを？だろうと、ロブとジリアンが思っていると、それを口にしたのがジェフだった。

「誰かを探しているのなら、まだ、到着していないよ。」

「え?!到着していないって・・・?」

ジェフが何を知っているのだろうと思っていた。

「皇女殿下のことだろう。」

レインは内心ホツとした。エミリアさんと別なんだと。

安堵しているレインにジリアンが突っ込みを入れた。

「まだ、到着していないって、いづれ、到着されるんですよね。」

ジェフはレインの表情に皇女殿下のことじゃないのかと、思い違いをしたと思った。

「夜じゃないかな。昨日は皇族警備隊が到着しているから、訓練に参加しないということはないよ。」

「過保護すぎる。」

ロブが口になると、ジェフは、ロブに言われたら皇帝が怒るでしょうと詰なった。

レインはいたたまれなく、その場から走って下のデッキに向かった。ロブはジリアンに目配せをした。ジリアンは面倒くさそうに、レインの後を負った。

アルバートがつまらなさそうにしていると、デイゴが現れて、アルバートに話があるからと連れて行った。

罰がわるくなつたのは、ロブだった。ジェフと二人きりにされたからだ。

カインはとすでにいなくなっていた。

レインはデッキ下を下りて、エミリアがいないか探した。

空挺を収容したデッキは奥に広く、輸送機からエアジェットが引き出されていた。

エミリアの機体はすでに出されていて、装備を点検していた。

その姿をレインは確認して、どう声をかけようかと悩んでいた。

追いついたジリアンは悟られずにレインの後ろに立ち、その様子をしばらく眺めていた。

ぶつぶつと声に出して、予行練習するレイン。

下手な言葉が羅列しているようにしか思えなかったジリアンは、哀れに思い、レインに声を掛けて、アドバイスした。

レインはジリアンのアドバイスを素直に聞き、自信が湧いて来て、エミリアに近づいていった。

装備を終えて、軍手はずしたエミリアはレインに声を掛けられて、振り返った。

「ご無沙汰してます。先日は、本当にありがとうございました。このとおり回復して元気にしてます。」

レインは満面の笑みでエミリアに挨拶をした。

「それは良かったわ。自分の体を大事にしてね。命を粗末にしないようにとは、わたしの口から言わなくてもわかっているでしょうけど。」

「はい、心得てます。」

少しハニカんだレインはエミリアの首元に巻かれているスカーフが緑色なのが目に付いた。

「あの、スカーフの色グリーンなのですね。」

エミリアは自分の首に巻いたスカーフに視線を落とす。

「1回生はスカイブルーで、2回生になったのでグリーンなの。3回生はレッドなのよ。」

レインは自分の首に巻いたスカーフに手をやった。

「あ、これはママが・・・いや、母が僕にプレゼントしたもののなのですが。」

「ええ、手紙に書いてあったわね。お母様はスカイロードの学生時代、スカイブルーが好きだという理由で2回生でも3回生でもスカイブルーにスカーフを通したそうよ。」

「え?! そうなんですか。」

「校長先生がお話してくださいましたの。」

「レインはこころのなかでつぶやいた。

(さすが、有名人。)

「エミリアさん、ご無沙汰してます。その節はお世話になりました。」

「レインはレインの後ろから前に出て、声をかけた。

「いえいえ、こちらこそ、エアジェットに関してとても勉強になったわ。要塞コリスで合同訓練があるかもしれないという話を聞いたの。」

「レインとレインは、かもしれないという仮定の言葉に首をかしげた。」

「どうかしたの?」

「いえ、かもしれないって、合同訓練をするって断定的に聞いたものだから。」

「あら、そうなのね。教官からはかもしれないと聞いたわ。」

「レインの頭によぎったものがあつた。」

「皇女殿下はご一緒じゃないのですね。」

「ええ、夜に到着する予定なの。」

「皇女殿下の様子次第で合同訓練かもしれませんね。」

「ジリアンの言葉に、エミリアは納得した。襲撃事件でS A Fが標的にされたことを倦厭していたからだだった。」

「そうね、皇女殿下に危険が及ばないと確認されないことには訓練はないかもしれないわね。」

「レインは思った事を口にした。」

「大変ですね。」

「何のこと？」

「え、皇女殿下のルームメイトなのでしょう。気を使われると思つて。」

「エミリアの表情が一変した。」

「皇女殿下をお守りすることが出来る立場になって、光栄だと思つているわ。気を使うのは当然のことよ。」

「皇女殿下と勉強や訓練に励み、ともに成長できる事を誇りに思っているわ。」

「それが私の使命なのだとは自覚しているからよ。大変などとこれっぽちも思つてないわ。」

「レインはエミリアを怒らせたと思ひ、動揺した。」

「ジリアンは余計な事をレインが言ったと思つたが、フォローのしようがないと考へていた。」

「とにかく、合同練習をするかしないかは上が決めることで、現実にはそうなるかはわからないけど、そうなつた時はよろしくね。」

「楽しみにしているわ。」

「エミリアはすぐに態度をあらため、笑顔を二人に向けた。」

「二人はよろしくお願ひしますと、ただたどしく口にして、ジリアンはレインの服を引っ張つて、デッキから去るよう促した。」

「お邪魔して申し訳なかつたです。では、また。」

「ジリアンがそういつて、レインの腕を引いて、足を進めた。」

「レインは罰が悪そうに会釈をした。」

「エミリアは笑顔で手を振り、またねと言つた。」

第十六章 赤い山脈 7

夕食後、トレーニングルームで、クレアとアップルメイト大尉が対人格闘をしていた。

二人とも手にはミットをはめていて、保護しているようだった。

主に足技を使うクレアに対して、大尉が素手で防御すると手を痛めてしまうからだった。

大尉自身、クレアの足技で足で受けて、骨に痛みを感じるので、交すように努力していたが、攻撃がおろそかになってくるのを自覚していた。

二人とも、同じ位の身長だが、クレアの方が痩身、大尉は体格がコ―デイよりは劣るものの、筋肉が引き締まっていて女性には見えなような体つきだった。

大尉は、攻撃を仕掛けられて交しながら、クレアの間を狙って攻撃するのが精一杯だった。

汗が飛び散りマットを濡らし滑りやすくなったのを感じたクレアは、休憩を申し出た。

大尉も自分の汗が目に入り、痛みを感じていた。

二人が休憩を取っている間に、エミリアがトレーニングルームに入ってきた。

「スカイロード2回生のエミリア・サンジヨベーゼです。

クレア先生がこちらにいらっしやると聞いて来たのです。

今、お時間いただけますでしょうか。」

大尉はエミリアの言葉に首を振った。

クレアは、タオルで顔を拭いたあと、めがねを取って掛けて言った。

「あんた、いま、あたしのことを何て言ったかなあ。」

悪態をついたクレアの態度に、引いたエミリアは、自分が口にした言葉に失礼なことがあったのだらうかと思いついて、すぐには返答できなかった。

「出直してきな。あたしがここにいて、聞いて、注意されたことはなかったか。」

エミリアは、クレアを探して医療部に行って、コーデイに言われたことがあった。

先生ではなく、さん付けで声をかけること。

エミリアは深く頭を下げた。

「申し訳ございません。わたしは……。」

「人の話がきちんと理解できない奴と、話しはしたくないんだよ。帰りなさい。」

クレアが、エミリアの言い訳も聞きたくないとはかりに言葉が出ないうちから、妨げた。

大尉は大人気ないと思ってエミリアを擁護した。

「クレアさん、ここは私に免じて、サンジョベーゼ上等兵の話聞いてあげてはもらえませんかね。」

お父上のサンジョベーゼ將軍には、大変お世話になりましたので。クレアは内心、エミリアと話がしたかったのだ。大尉の助け舟に乗ることにした。

エミリアの方は、父親の名前が出されて、良い気持ちはしなかった。「いいでしょう、大尉に免じて。あたしに会いにはどういふことかしら。」

「ありがとうございます。」
しばらく、間があつて、呼吸を整えていたエミリアだった。

「質問したいことがあります。失礼なことでしたら、お許しください。」

「いいでしょう。質問を受けましょう。」
「クレアさんは、どうして医者になろうと思ったのですか。」

ありきたりな質問に、クレアは少しがっかりしたが、質問されて始めて、人に話せるようなものではないことに気が付いた。

天井を仰いで、考えあぐねた。

「養い親が医者だったじゃ、だめかな。あたしは孤児で、養子にし

てくれた親に恩返しというか役に立つのならと医者を目指したよ。」「ではなぜ、スカイエンジェルフィッシュ号で医療活動しているのですか。」「

大尉は、タオルで汗をぬぐい、座椅子に腰掛けて、二人の会話を聞いていた。

クレアは、エミリアの質問の真意を測っていた。

「医療学生の時に山岳警備隊の研修を選択したことがあってね。養い親が診療所を開いていたのだが、あたしは同じところに留まっていられない性格だと悟ったんだよ。」

医療にもいろいろあるからね。」「

「医療に従事してから、方向性を見つけたということでもよろしいでしょうか。」「

含み笑いをしながら、クレアは「そうだね。」「と返事をした。

「生意気なことを言ってしまった、失礼しました。」「

クレアは汗をぬぐったタオルを座椅子に投げた。

エミリアの服装がスウェットであることを口にしてから、対人格闘をしないかと言った。

エミリアは即答でハイと返事をし、軽い準備運動をした。

大尉に促されて、手と足首を包帯で保護し、ミットをつけた。

構えて向き合つと、大尉が合図を出した。

「はじめ!」「

クレアがすばやく足蹴りをしてきた。エミリアは交したものの、蹴り込んだ利き足が床に着いたと同時に、利き足じゃない方で蹴りがはいる。

エミリアは防げずに、上腕をけりこまれて、倒れた。

すぐに立ち上がったが、クレアに蹴られた上腕の骨が痛いと感じていた。

エミリアはクレアがまた、利き足で蹴りを入れてくるのを交して、上体を低くしたと同時に利き足を軸に利き足じゃないほうをクレアの足首めがけて引つ掛けた。

クレアは足を取られて倒れるものの、片手で床に着き、エミリアが反撃してくるのを予測してもう片手で受身をとった。

エミリアは肘をクレアめがけて突こうとしていた。

柔軟な足の運びに、エミリアがクレアより身長が低いのを利用して攻撃を交す、相手の体制を崩してその隙を突くことを繰り返し返していた。

大尉は、その様子を見て、エミリアは着眼点が違っていると判断した。

エミリアはクレアの足捌きに合わせて、防御し攻撃していた。

クレアは勝負に出た。パンチをエミリアのわき腹を当てようとし、

エミリアはクレアが手で攻撃するとは予測してなかったが、脇と腕でクレアの腕を押さえ込んだ。

しかし、クレアは押さえ込まれて腕を引っ張られるのを予測していたかのように、エミリアに背を向け、しゃがみこみ押さえ込まれていない腕で、エミリアの後頭部を押さええた。

エミリアの上半身を自分の背中に押し当てると、背負い投げをした。エミリアは床に倒れこんだ。自分に何が起きたのか、最初理解できなかった。

「経験が少ないから、やられたんだと思うけど。スカイロードじゃ、対人格闘は皇女殿下とかしかやらないのかしら。」

エミリアは仰向けになった状態から、ゆっくりと立ち上がった。

「いいえ、違います。他の男子学生とも訓練します。」

「では、相手もあなたに遠慮して、きちんと攻撃できないのかしら。」

「そんなことはありません。わたしはやられてばかりいています。経験不足より、練習不足より、才能がないのだと思います。」

「着眼点は悪くないわ。きちんと判断できている。強いて言うなら、優等生すぎて柔軟性がないのかもしれないわね。」

実践はマニュアル道理には行かないわ。」

大尉が口を挟んだ。

エミリアは二人に背を向けていった。

「わたしは、皇女殿下と同じく、父親に言われて、スカイロードに入隊しました。」

クレアはエミリアの質問の真意はこれかと思った。

「卒業したら、将来有望な男性と結婚しか待っていないお嬢様の学校に初等科から入っていました。」

スカイロードの入隊は願ってもないことでした。」

間があつて、エミリアは声を震わせて言った。

「兄が亡くなったことで、自分には会わないところへいくのだと気が付きました。」

そのときにはもう、後戻りができない状態でした。」

エミリアはそのとき、背中を向けていたのを振り返った。

「皇女殿下にお会いし、ルームメイトとなつて、同じ境遇であることを知り、気持ちを切り替えました。」

自分で将来を決められない以上、せめて自分自身がなにかを成し遂げた誇りを持ちたいと思いました。」

大尉は、エミリアが父親を恨んでいることを察し、なにか言葉をかけてあげられないかと考えていた。

クレアがその思いを打ち消した。

「レールを敷かれた人生なんて面白くないかもしれないが、反発したところで辛い思いをするだけ。」

エミリア上等兵がしたいようにすればいい。それがレールにしかれた上でのことでもだ。

君は意思が強い女性むすめだと思うよ。貫いたらいい。後悔のないように生きていれば、自然と結果として答えが出てくる。

自分自身の存在価値をね。」

クレアがそういうと、エミリアはお辞儀をして、礼を言った。

「礼には及ばない。こちらこそ、君のような熱い思いをもった女性むすめと対人格闘できて嬉しかったよ。」

クレアは大尉にトレーニングは終わりにしようといい、その場から立ち去ろうとした。

「父に。」

エミリアの言葉にクレアは立ち止まった。

「父に、『意思が強くて歯に衣を着せぬものを言いする女医がいた。』という話を聞かされました。クレアさんのことではないでしょうか。」

忌憚きたんの無い行動的な女性という言葉を脳にめぐらせて、クレアはしばらく考え込んでいった。

「そのような女医にはころあたりがあるよ。わたしに山岳警備隊の研修を薦めてくれた人でね、自身も山岳警備隊で研修を受けたのだと言っていたよ。」

「そうだな、將軍と変わらない年齢じゃないかな。」

クレアは笑みを浮かべて、エミリアに背を向け、手を振って去った。

第十六章 赤い山脈 8

夜に、空挺が2機、要塞に到着した。

皇女殿下のフェリシアを乗せた1機と、護衛の1機だった。

到着すると、隊長からの挨拶があり、教官から、S A Fとの合同練習の話が聞かされ、フェリシアは即答した。

「合同練習しましょう。」

フェリシアには考える必要がなかった。

レインの元気な姿が見られると同時に、スカイロードで辛い訓練を受けてきてその成長してきたことを誇りの思つて、レインにみせることができると思つたからだつた。

皇族の従者がなにかと反対意見を述べたが、取り合わなかった。

フェリシアは自室に入つて着替えを済ませると、従者の目を盗んで、ひとりで出歩いた。

行き先は、レインのいるところだった。

レインは、フェリシアにとって、体を張って黒衣の民族と戦つた勇敢であり笑顔の素敵な少年であつた。

こころあたりのある場所は、S A Fがある場所だつた。

スカイロードの制服である軍服を来たフェリシアを皇女殿下だと知らずに、要塞の警備隊は、S A Fのある場所を教えた。

格納庫の奥にS A Fがあり、その手前にパジエロブルーが配備されていて、レインが整備をしていた。

フェリシアは、レインの姿を見つけると、他に誰かいないかを確認したが、誰もいなかった。

喜び勇んで、声を掛けようとした。

「皇女殿下、どうしてここにいらっしゃるのですか。」

フェリシアの後ろでジリアンが声を掛けた。

その声にレインは整備していた手を止めて、フェリシアをみて驚いていた。

フェリシアが振り返ると、ジリアンがいたが、その後ろにクレアがいた。

レインは、嫌な感じがして仕方なかった。

「どうしてって、レインの元気な姿を見たくて。わたくし、心配しておりますの。」

フェリシアはそう言うのとレインの方へ向きなおし、レインは深々と頭を下げた。

「ご心配をおかけしました。このとおり元気です。」

クレアは怪訝な顔をした。

レインはジリアンに目配せをした。

ジリアンはその目配せの意味が理解できていなかった。

「クレアさんが、レインと話がしたいって言うのでここに連れてきたんだけど。」

レインはあからさまに嫌な顔をした。

ジリアンは思い違いをしたのを理解した。

クレアはフェリシアに歩み寄って、挨拶をした。

「お目にかかれて光栄です。クレア「ポーターと申しまして、S A Fの医療に従事するものです。」

「こちらこそ、光栄に思います。レインの大変な手術をされた外科医の方ですね。」

レインは苦みばしった顔をしながら、胸をなでおろしたが、それは一瞬のことではなかった。

「時に、レイン、わたしの贈り物は気に入らなかったのかしら。」

レインとジリアンは凍りついた。ロブに口止めされていたのに、クレアの前で言われたからだ。

「ああ、いえ、とても気に入ってますよ。つけるとバランスが崩れてしまって、日常使えないものですから。」

クレアが怪訝な顔をして、フェリシアに言った。

「贈り物をレインにしてくださいだったのですか。」

「ええ、気圧や高度が表示される時計ですの。気に入ってくれると

ばかり思っていたのですけど。」

「それはそれは、相当高価な時計でしょうね。」

クレアは細長い目をより一層細くしてレインをみた。

レインは下を向いたが、ジリアンが加勢した。

「高機能なものをたくさん備えた時計は重たくて、バランスを悪くしてしまうのですよ。つけないほうがいいって僕が言ったのです。」

クレアはレインの様子には理由があつて、ジリアンが知っているのだと思つた。

「レインがつけているスカーフは、母親からの贈り物だと聞いたのだけどね。殿下が巻かれているスカーフと色違いの様ね。」

レインが答えようとすると、フェリシアが口をついだ。

「エミリアがスカイブルーのスカーフを送つたのだと聞いたし、レテシア少尉が同じものを送つていたことも聞いていたわ。」

「ほお、サンジョベーゼ上等兵も同じものを。」

フェリシアは唇を噛んだ。歯がゆい思いがしたからだが、その気持ち自分が自身でもよく理解できていなくて、暴走しはじめた。

「エミリアつたら、自分の婚約者にも贈り物をしたことがないというのに。」

その言葉に、レインは青ざめた。下を向いたままなので、周囲にはわからないはずだったが、肩を小刻みに震わえていたので、クレアとジリアンにはレインの様子を察した。

「エミリア上等兵に婚約者ですか。お父上の將軍閣下はさぞや、娘さんの将来を案じて婚約を決められたことでしょう。」

そういうことは皇帝でも同じことでしょう。殿下にも婚約者が居られますね。」

罰の悪い思いがしたフェリシアだったが、毅然とした態度で「そこです。」と返事をした。

ところが痛い思いがして、フェリシアはこの場からいなくなりたくなつた。

「殿下、もう時間が遅いことですし、戻られた方がよろしいではな

いですか。」

シリアンが言葉をかけた。

「そうですね。明日から早朝訓練がありますし。それから、合同訓練をすることになってますのよ。楽しみにしてますわ。」

フェリシアはハツとして答えたが、内心は尋常でいられず、顔がこわばっていた。

レインはようやく、顔を上げられたが、今にも泣き出しそうな顔だった。

フェリシアは心が痛んだが、「失礼。」と声を掛けて、足早にその場を去った。

「おやすみなさい。皇女殿下。」

クレアは会釈をして言った。

続けて、レインもシリアンも「おやすみなさい。」と言った。

皇女殿下の姿が見えなくなつて、クレアは言った。

「逃げるようにして行つたな。自分にも婚約者がいるのに、わざわざ言うとは。」

レインの目にはとめどなく、涙がこぼれていた。

そして、その涙を汚れた手でぬぐった。

レインの顔は深緑色に染まった。

「レイン、整備を終わりにして、顔を洗ってきなさい。汚れた手で顔を触るから汚れてしまつてるよ。」

か細い声で、ハイと返事をする、とぼとぼとレインは歩き始めた。

クレアはパジエロブルーに歩み寄った。

ダイヤモンドが散りばめられたブルーの翼を撫で回した。

「いずれ、わかると思っていたけどな、こんな展開とは、また、びつくりだな。」

クレアは考えを張り巡らせていた。

「クレアさん、エミリアさんは大丈夫でしょうか。」

「大丈夫だよ。殿下よりずいぶんと大人の女性だ。」

シリアンは深くうなづいて納得した。

「心配なのはレイニーのほうだな。嫉妬っていうのは、人間にとんでもないことを考えさせて行動させてしまうからな。」

「え、殿下がレイニーに何かするのですか。」

「レイニーじゃないけど、誰かに仕掛けて来る可能性……。ま、ジルは心配しなくていいよ。レイニーを頼むよ。支えになってあげて。」

クレアが言いかけて言わなかったことはジリアンに話してはまずいと思っただけでなかった。

「はい、わかりました。」

ジリアンはレインがやりかけた整備を終わらせるために、準備を始めた。

クレアはまだ翼を撫で回していた。

「嫉妬かあ。そういうことか。親子だからなあ。」

クレアは独り言をつぶやいた。

ロブはジェフと二人きりにされたことで多少覚悟をしたが、ジェフはただ一言だけ言った。

「過保護なもの、いい加減にしるよ。ひとり立ちできなくなっていたら、ロブの責任だ。」

「どういう意味だ。」

ロブはジェフに噛み付いたが、ジェフは相手にせず、立ち去った。

ジェフの言葉に苛立ちを感じていたロブに、クレアはジョナサンを足止めするように言った。

理由は、デイゴがSAFのエンジンタンクを調査するためだという。ジョナサンに立ち合わせないためだった。

ロブはジョナサンを捕まえて、レテシアのことを聞こうとした。が、ジョナサンもさほど話しはしなかった。内容的にはホーネットのことはかりだった。

一方、デイゴはクレアに言われて、アルバートとエンジンタンクを調査した。

給油口はアルバートが清掃したのに、汚れていた。

エンジンタンクをジェット水流で洗い流すと、固形のグリーンオイルがたくさん出てきた。

その様子に、デイゴは、「^{ハイパー}超過製グリーンオイル」の使いすぎだと言った。

「アルの言うとおりに、放っておくと爆発をしかねないのは確かだ。こまめに清掃することを注意されるはずなんだがな。」

デイゴは首をかしげた。

「わざと清掃しないという感じでしょ。何のメリットがあるんだ。」

「なんともいえないが、試供品を使用するのに危険性があるとなると話しは別だが、我々は財団をパトロンにして飛行しているからなあ。」

デイゴはアルバートと話し合って、クレアに駐留する期間を長めに取ってエンジンタンク清掃をこまめに行う事を提案することにした。

エミリアが要塞のあてがわれた部屋に入ると、フェリシアの従者がいた。

「ご無沙汰しております。サンジョベーゼ上等兵。殿下の良き友人として接していただき感謝しております。」

独特の衣装を身にまとった従者はエミリアにそういうと、フェリシアが一時行方をくらましたかと思うと、戻ってきて部屋に閉じこもり泣き続けていると言った。

すぐに、来て欲しいということだった。

エミリアは即座に従者とともに、フェリシアのところへ行った。

フェリシアは要塞の特別ゲストルームに宿泊していた。

いくつもある部屋のうちの一つに閉じ籠ったフェリシアは、中にはエミリア意外は入れないと言いついていた。

エミリアがドア越しに声を掛けると、涙声でフェリシアは確認をして、ドアを開けてエミリアを中に入れた。

エミリアが中に入ると、フェリシアは抱きついた。

「わたし、醜いことをしてしまつて。」

「どうしたというの、フェリシア。」

ことの次第をつぶさに話すと、エミリアは抱きしめ返した。

「フェリシアは、10代の女の子。今しか出来ないことをすればいいわ。後悔しないように。」

「何を？」

「人を好きになるという事を。」

「わたしが？」

「そうよ。」

フェリシアは最初信じられないとばかりに、啞然としていた。

「10代のあなたは今のあなたでしかない。数年経てば、違うあなたになるわ。20代になれば、もう、したいように出来なくなるのはわかつているでしょう。」

あなたは国民の宝なのよ。」

フェリシアのところに不安がよぎつた。

「でも、いまのあなたはあなたにしか出来ないことをする、その時間が与えられているのだと思うの。誰を好きになってもいいの。誰を好きになってもいい権利がいまのあなたにあるのよ。いまなら、

大丈夫なの。」

エミリアは強くフェリシアを抱きしめた。

「レインを好きになるのは罪じゃないのね。」

「そうよ。あなたが誰を好きになろうとも自由なの。あなたのこころはあなたのものなの。」

「レインがわたしのことを思ってくれなくても・・・。」

フェリシアが涙ぐんで言葉にすると、エミリアは即座に答えた。

「その気持ちはレインのものだから、他の誰にもどうこうできないわ。レインのこころを惹き付けようとすれば、かえって思うとおりにはならないと思うわ。」

「そうね。」

「人を好きになる気持ちを大事にしてほしいの、フェリシア。あな

たが国民に愛されるためにも。」

フェリシアはとめどなく出る涙を脱ぐ切れなかった。嗚咽するも、エミリアが背中をさすった。

フェリシアは、レインがエミリアの事を好きでいることについてうすうす感じていたが、そのことをエミリアには言わなかった。

言わずとも、知っているだろうと思った。友情を確認するみたいで、嫌な感じがすると思った。

「目を閉じて、フェリシア。」

泣き止むことができないながらも、エミリアの言葉に従った。

「レインを思い浮かべて、彼はどんな顔をしているの？」

泣き止むことができ、口元をゆるませた。

「笑顔だわ。とっても素敵な笑顔。」

エミリアはフェリシアの顔を確認すると、自身も笑顔になった。

「その笑顔を忘れないでね。あなたのこころの支えになってくれるわ。」

第十六章 赤い山脈 9

早朝より、キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地の要塞から、約40機ほどのエアジェットが飛び立った。

スカイロード3回生は2回生の時に訓練を受けているのだが、エアジェットパイロット全員において、山脈での飛行訓練をしていた。アクロバットを目的としたメンバーは陸上部隊と地上で基礎訓練をしていた。

基礎体力ウオーミングアップをした後、ロツククライミングをこなして、崖の上からの飛び込みの訓練を繰り返した。

女学生はエミリアとフェリシアしかおらず、2名は飛行訓練を優先させるため、ペアを解除させられた。

フェリシアはレインと訓練を受けられないことを残念に思った。

レインは、体格の良い陸上部隊と体が一回り大きいスカイロードの学生にまみれて、訓練をこなしていた。

アルバートは痩身ながらも筋肉質で、青白かった肌も日に焼けてたくましく見え、黒髪のために周囲の目を引いた。

外見上は目鼻立ちの整った美形なので、腕力に長けた人物にはみられなかったが、ロツククライミングの際は群を抜いて、すばやく上りきった。

馴れないことには不器用なレインは、腕力があってもスカイロードの2回生には追いつけなかった。

昨日と同じく、上りきろうとしたら、アルバートが手を差し伸べて待っていた。

レインはムツとして、手を取らなかったが、アルバートは予想していたので、含み笑いをした。

ロブはジェフに言われた「過保護」に敏感に反応してしまい、レインのそばに近寄ろうとしなかった。

飛行訓練では、前日より迷路のような山脈を地図で把握して訓練に

望むよう指導されていたが、上空からポイント確認や地形を把握し、飛行しながら頭の中で地図を描くよう指導された。

エアジェットは10機ほどの隊列を組んで飛んでいたが、分散し断崖絶壁の谷底に10機単位で飛行訓練を始めた。

降下、垂直飛行、上昇、狭い谷底で飛行訓練を繰り返す。

エアジェット部隊は要塞にもどらず、山脈の平地で着地し、朝食を摂った。

陸上部隊との訓練を終え、要塞で朝食を摂っていると、アルバートに喧嘩を売ってくる陸上部隊がいた。

アップルメイト大尉が止めに入ったが、防ぎきれず、大乱闘になった。

ロブがアルバートを押さえ込んだが、黒衣の民族のハーフだと知ると、寄つてたかつて殴りかかろうとする。

レインは大乱闘に巻き込まれて、顔や手足などを殴られてしまった。ズキーン

陸上部隊のエディ・コークスロー中尉が銃を天井に向けて打った。

大乱闘は、一旦静まり返った。

「お前たち全員懲罰ものだ。誰だ、はじめに殴った奴とはじめに言い放った奴は！独房入りにしてやる！」

そして、罪のなすりあいのように、お前だ、誰だ、と言いが始まり、騒ぎにもどった。

「陸上部隊、全員、谷底独房入りだ！お前ら覚悟しろ！砂虫に食われてしまえ！」

叫んだのは、大乱闘からようやく抜け出せたアップルメイト大尉だった。

一斉に静まり返り、陸上部隊はテンションを低くして、その場から立ち去った。

いまだ、興奮状態のアルバートを必死に押さえ込んでいるロブだったが、そばでレインがうずくまっているのに、ようやく気が付いた。アルバートを押さえていた腕を離し、レインのそばにしゃがみこん

だ。

「おい、大丈夫か、レイン。」

「お腹を蹴られて・・・胃が痛くて吐きそう。」
朝食を食べたばかりで、みぞおちに蹴りを喰らって胃液が逆流した様子だった。

アルバートは血気盛んで、茫然とそれまでの様子をみていたスカイロードの学生を殴ろうとしていた。

しかし、アップルメイト大尉に制止させられた。

アルバートはクレアと大尉を思い違いして抱きついたが、大尉は気が動転して、アルバートの腕を取って、床に倒しこんだ。

丁度そのころ、騒ぎを聞きつけて、クレアとコーデイが食堂にやってきた。

クレアが大尉に事の詳細を聞いた。

「常日頃から、黒髪だからと言って、黒衣の民族だとは限らないと言っているのだが、どうしてもアルバートを黒衣の民族だと決め付けて喧嘩をしかけてしまっていて。」

「まあ、山岳警備隊は血気盛んな成長できないオスのようなものだからなあ。」

「どういう意味ですか、クレアさん。」

豪快に笑った後、クレアは、大尉にアルバートの事情を説明した。要塞に到着した際には、ハーフであることは説明していたが、多重人格者であることは説明していなかった。

説明を聞いて、大尉はようやくアルバートの腕を離した。

「クレアさん、こちら側も落ち度がありました。」

説明するほどでもないと思ってましたが、大規模な鉄鉱石窃盗団の捕獲作戦の際、黒衣の民族が絡んでいて、いまだにその事を恨んでいる連中もいるのです。」

「ほお。恨みを持ち合わせていたら、団結も何もありません。」

「そうです。それはもうこちらの落ち度としか申しようがないです。」

「

「良い機会になったでしょう。こちらはいろいろと予測はしていましたが、アルバートのことはもう。」

ただし、このような事態を招いた以上、アルバートをここで訓練させることはさせません。他のものは・・・。」

クレアが言い終わらないうちに、コーデイが口を挟んだ。

「クレアさん、レインさんが負傷したようです。」

クレアがレインのほうへ体を向けると、仰向けに寝ている姿が目に入った。

「おやおや。」

スカイロードの教官が寄ってきて、訓練の中止を申し出たが、クレアはスカイロードの訓練を中止させるわけにはいかないと続行を望んだ。

ただし、今日はもう、S A Fのクルーとの訓練は中止にしてほしいと願い出た。

アップルメイト大尉と教官とで、話し合い、クレアの申し出どおりになった。

エアジェット部隊に通信が入り、S A Fは訓練から抜ける旨が伝えられた。

ロブとアルバートとペアを組むはずだったジェフとカイン、それにジリアンは、要塞に戻ることとなった。

機内で食事を摂って上空を飛んでいる最中だったので、ジリアンはエミリアやフェリシアが乗っている機体に向かって、ライトで合図を送って、その場から去った。

レインは医療部に運ばれて、毎日点滴を受けているカスターの隣に寝かされた。

胃が痛いながらも、何日も経っていないのに、ずいぶんと会ってないようにカスターを眺めていた。

心配そうにしていたカスターの様子を、レインの目からはだいぶ落ち着いて穏やかになっていると感じていた。

「レイニー、痣がたくさん出来ているよ。そんな姿を見ることになるなんて思いもしなかったな。」

「キヤス、大丈夫だよ。痣ぐらいすぐ治る。ただ、ゲホツ胃が……」

「レインさん、しゃべらないほうがいいですよ。寝てて安静にしてください。みぞおちあたりの痣は内出血しています。以前の肋骨が折れていないかどうか検査するかもしれません。」

「コーデイがレインを寝かしつけて、薄い掛け布団を掛けた。」

一方、アルバートはクレアに言われて、SAFで寝泊りするようになり、デイゴが付き添うことになった。

クレアは医療部にもどらずに、地上に出た。

そこへジェフがやってきた。

「ひどい騒ぎが起きたそうぞ。」

「誰かが仕組んだみたいだな。」

「カインかもな。」

「山岳警備隊は一枚岩じゃないのか。」

「一枚岩ですよ。恨んでいたら、みんな恨んじやう。」

「そんな感染する病気みたいになよ。」

地上は、砂と岩だらけの何も無い平地だった。

少しはなれたところに建物があるが、以前の駐屯地のものだった。

太陽が頂点にのぼりつめないうちの午前。暑さが増すばかりの地上で太陽を仰いで目がくらみそうになるのを感じていた。

大きな岩を指して、座りませんかとジェフは促した。

二人して、大きな岩にもたれて座り込むと、目線の先にはディアナ火山があった。

「ディアナ火山の伝説って知っているか。」

「さあ。」

「ディアナという娘が意にそぐわない結婚を拒んで炎で身を包んで死んでいった話がこの土地に残っていて、30年ほど前に噴火した時に名付けられたらしい。」

「皇女殿下のことですか。」

「まあね。もうひとり。」

「もうひとり？誰です？」

「將軍閣下の娘さん。」

「ああ。聞いたことありますよ。息子さん、つまりお兄さんの学友と婚約したとかって。」

「兄の学友なのか。」

「ええ、成り上がり野郎ですよ。スカイロードでお兄さんと学友となり、卒業後は、士官学校へ入学したのですから。」

「ほお。」

士官学校は優秀な士官を育てる学校だが、軍に入隊する貴族や皇族、軍の上官の子息が占める割合が多い。

スカイロードの出世は空軍部隊隊長の大佐までで、それ以上昇格することがない。

士官学校は卒業後少佐から始まるが、將軍を目指す者が多く、入学試験も審査も厳しい。

後ろ盾としてサンジョベーゼ將軍の娘と婚約し、いずれ婿になることを前提に審査を通過した可能性をジエフはほのめかした。

「將軍も人の親だしな。」

「しかし、ここだけの話ですが……。」

前置きして、ジエフは話を小声で始めた。

内容は、鉄鋼窃盗団の話で、返り討ちにあつて名誉の殉職をしたかのようになったエミリアの兄は、実はそうでないことを告げた。

返り討ちにあつたのは、情報が事前に漏れて、漏らしたのがエミリアの兄だった。

ジエフは情報を流したのがエミリアの兄だということを知つたままで、なぜそうしたのかを知らなかった。

窃盗団の一部を捕獲することで、情報が事前に漏れた事を聞きだし、犯人がエミリアの兄であることがわかつたのだった。

エミリアの兄は自決することを迫られて、自ら命を絶ち、責任をと

つて、將軍は司令部に配置転換となり、隠居の身になった。

「なぜ、漏らしたのかを知らずして、よくそんなことが……。待てよ、黒衣の民族が絡んでるって話を聞いたな。」

「この件については、黒衣の民族の仕業にされているんですよ。將軍のご息がそんな失態をするなんて想像もできないんですけどね。」

しばらく考え込んで、クレアは考え込むのをやめようと思った。

「誰かが仕掛けた罠なら、考えても時間の無駄だな。いずれわかるようになるだろう。」

「待つしかないですか。」

やけに明るく言うジェフの顔をにらんだ。

「ジェフ、すごい情報通だな。どこかで仕込まれたか。」

「いやあ、とんでもない。要塞で世渡り^{ニヤリ}上手になろうと思ったら、情報は仕入れておかないとね。」

「そうだ、聞きたいことがあったんだ。」

「何です？」

「レテシアから、誘われなかったか。」

しばらく考え込んで、ニヤリと笑った。

「いやあ、そこまで察しがついているのなら、はっきりと行ってくださいよ。」

「ホーネットに誘われなかったか。」

「誘われましたよ。でも、断りました。命知らずじゃないんで。俺、こう見えても、妻子持ちですから。」

「い、いつの間に。」

「レテシアと組んでいたら、命がいくつあっても足りないですよ。ひやひやものです。」

「そうだなあ。」

「いやあ、よくそこまで調べましたね。というか、考えてたどり着きましたか。」

「まあねえ。こちらから、探りを入れるより、なんていうか、感情

の流れを読み取ったら、たどり着いたって感じで。」

「感情の流れねえ。テオ少佐は知らなかったでしょ。」

「ジェフの読みどおりだな。少佐を手ごまにできるとは思ってもいなかったよ。」

「皇帝の情報を餌につければ、食いつく。」

太陽を見ていたクレアは昼時を見計らって立ち上がった。

「この山脈は、ディアナの身を焼いた炎のように赤いな。」

「恨みですか。」

「恨みだな。だから、山岳警備隊のころから、恨みが消えないんだ。」

「そういえば、ディアナは高潔という意味があるそうですね。」

「ああ、他の男の者にならなかった故もあったかも。」

「クレアさんにぴったりじゃないですか。」

「なぜだ。」

「こころはどの男のものでもないでしょう。」

クレアは無言でいた。

「あの方はそういつてましたよ。」

胃痛が治ったレインは、クレアの誘いで遠出することになった。

ジエフのエアジェットにクレアが乗り、パジエロブルーでレインとジリアンがジエフの引率で向かうことになった。

ロブとアップルメイト大尉から飛行許可をもらって、一行は飛び立った。

向かった先は、ディアナ火山を軸に要塞の反対側にあるカルデラ地の湖だった。

湖岸にエアジェットを着陸し、高台に上ると、墓地があった。

クレアは一行の先頭に立っていたが、振り返って言った。

「見てごらん、あれがディアナ火山。」

赤い岩肌が頂点から裾野まであって、ずっしりとそして気高くそびえたつ山の姿がそこにはあった。

「30年ほど前に、あの火山が爆発し、周辺で暮らす民族がこの地を追われた。」

レインとジリアンは振り返り、火山をみた。

クレアは、山岳地帯に起きた出来事を語り始めた。

山岳地帯に住む民族が豪雨と風雨で土砂崩れに遭い、四方八方へ散り散りになった。

クレアが山岳警備隊の研修を受けた際、土砂崩れによる事故で多くの人たちが犠牲になったことを語った。

キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地はその地に住んできた民族が横穴式に作った住居が崩れてしまい、廃墟になった場所を改造し建設したものだだった。

墓地は、その民族が犠牲になった人々を葬った場所であり、山岳警備隊の殉職者の墓地でもあった。

クレアの話が終わると、ジリアンは本でしか見たことがない、カルデラ地のことを興奮気味にレインに話し始めた。

ジエフは、エミリアの兄の墓を探したが、見つからなかった。

クレアは、それとなく、目的の墓に行つて、酒を置いた。

「クレアさんの知人の方ですか。」

レインの問いに、笑顔でうなづくだけ、何も言おうとしなかった。

ジリアンはレインの服をひっぱり、余計な事を聞かないようにと促した。

「昔の男だ。」

クレアの答えに、レインは思いつきでものを言った。

「クレアさんの恋人ですか。」

「さあね。」

「さあねって。」

レインがすこし憤っているのに対して、ジリアンは、「大人つてこれだから。」とつぶやいた。

駐屯地での砂が太陽の暑い日ざしをうけて霏もやを出すのに対して、ここは湖のそばとあつて木立が生い茂り湿気を帯びた風が吹いていて、対象的だった。

高台のしたから、髭を蓄えた男が上つてきて、クレアたちに言った。

「湖岸に止めてあるエアジェットはあんたたちのかい。」

男の問いに、クレアがそうだと言った。

「エアジェット一機は山岳警備隊のだな。もう一機は見たこともない機体なんだが、ありやいったいなんだ。」

男は、ジエフが軍服を着ているので、軍隊のエアジェットはこの男が操縦してきたのだと考えていた。

あとは女ひとり、少年が二人だが、あの機体を操縦しているのはいったい誰なんだと思つていた。

「あなたはいったい何者ですか。わたしは山岳警備隊、少尉のジエフ。マックファットです。」

「すみません、気が急いで。俺はカメラマンの、チャベック・ドロイドという、エアジェットを専門にカメラに収めている者なんです。少尉、あの朱色のエアジェットは、あなたが操縦した機体ですね。」

スカイブルーの機体は……。」

話しながらチャベックはクレアのほうを見ていたが、クレアは首を振った。

ジェフはレインとジリアンを指差した。

「こちらの少年たちが操縦していたんですよ。」

「ほう。」

チャベックは改めて、二人を見ていた。

「どこかで見たことがあるような気がするんだがね、坊やたちの名前は何？」

レインは子ども扱いされたので少しムツとしていたが、名乗った。

「僕はレイン。スタンドフィールドです。」

「僕は、ジリアン。スタンドフィールドです。」

スタンドフィールドと名乗ると必ず言われるのが、「アレックスの子孫か。」だった。

案の定、チャベックの口から出てきたが、しばらくしてから、両手を叩いて、言った。

「レテシア。ハートランドだ。」

「正解。」

ジェフが言ったのだが、レインはふて腐れた。

「ロックフォード・ファミリーってアクロバット飛行のショーで一時期いてたからさ。レテシアにそっくりだよ、君。」

「確かにこの少年は、レテシア。ハートランドの息子だ。」

ジェフがレインの頭を撫でて言った。

「ホーネットでスタンドフィールドの若い男と恋仲だった話があったと聞いたが、息子がいたのか。」

チャベックは感心して、カメラの枠取りを指でレインの顔に向けてやってみせた。

「エアジェットの申し子だな。君もアクロバット飛行をするのかい。」

「いえ、操縦は普通です。というか、僕は……。」

クレアがレインの言いにくい事を言つてのけた。

「両親はこの子が5歳の時に別れてね。レテシアとはそれ以来あつてないんですよ。」

カメラマンさん、わたしたちに何か用事があつたのでは？」

チャベツクは思い出したように、パジェロブルーを指差し、写真を撮らせて欲しいと言つた。

「私は、グリーンオイル財団の人命救助隊スカイエンジェルフィッシュ号の医者で、クレア」ポーターといいます。」

あのエアジェットはパジェロブルーと言つて、財団研究所から提供していただいたものなので、許可が必要ですね。」

「許可なら、大丈夫だな。研究所のエアジェットをカメラに収めたことが何度もあつて、懇意しているものだから。」

それに理事長の娘さんの写真を撮つたことがある。」

「セイラの？」

「ああ、そうだ。会つたことがあるかい。」

「あります。」

ジリアンはコーデイにもらつた写真を思い浮かべていた。

あの写真はこの人が撮つたものなのかと考えていた。

チャベツクはおもむろに背負つていたかばんを下ろし、中からカメラを出した。

高台の奥に見える山のふもとを指差した。

「あの村に明日、山岳警備隊の要塞から輸送部隊が来るって聞いてね。なんでも食材を積み込むらしい。」

俺の目的は山岳警備隊でエアジェットをカメラに収めることなんだ。」

「責任者に許可は取つてないんだろ。」

ジェフの言葉に、口ひげから銀歯をちらりと見せると、「許可は取れてないが、大佐とは連絡を取つてある。」と言つた。

「だったら、明日パジェロブルーを撮ればいい。」

クレアが言つと、チャベツクは首を振つた。

「ディアナ火山を背景に撮りたいなあ。飛んでるところをさ。」
クレアは、ヤレヤレと両手を広げると、ジェフはレインとジリアンの尻を叩いた。

「さあ、ふたりとも、パジエロブルーを飛ばしておいで。」

「ジリアンだけ、行っておいで。ひとりでも操縦できるだろう。」
「はい。」

ジリアンが素直に返事をして、湖岸のほうへ降りていった。

「悪いが、カメラマンさん。レイン一人だけカメラに収めてくれな
いかな。特別料金を明日要塞で支払うから。」

クレアが言ったことにレインは驚いていた。

「別にかまわないが、この坊やだけかい。」

「ああ、母親に写真の一枚くらいよこしてやりたいのさ。」
レインは納得をした。

そして、レインはその場にいた人たちに、「ジリアンには内緒で。」
と言った。

ジリアンがパジエロブルーで飛び立つ前に、レイン一人だけカメラ
に収まった。

パジエロブルーをチャベックが写真を撮っている間、三人は時間を
もてあましていた。

「クレアさん、ここに来た理由は、知り合いの方のお墓参りですか。」

「ああ、医療研修でお世話になったのでね。あと、ダンが亡くなっ
たときもここに身を寄せた。」

「ほんとうは、合同練習のお楽しみイベント中に行く話があった
んだけどね。」

「少尉、イベントって何ですか。」

「合法麻薬パーティーとか、ダンスパーティーとか、いろいろ。山岳警
備隊とスカイロードの学生がはめはずすイベントさ。」

「麻薬ですか？」

「麻薬と言っても、軍公認の恐怖心を和らげる薬だが、パーティーで

使うのはこのイベントのみなのさ。」

「クレアさんはご存知なのですか。」

「ああ、参加したことはあるさ。経験のためにね。まあ、でも、軍人でしか認められないっていうものだけのことさ。」

「一般人には適用されないで正解。また、軍人になくってはならないものだとも思う。」

「命を危険にさらすお仕事なんだよ、レイン君。」

「うん、もう、少尉。僕はそんなお子様じゃないです。」

「怒った顔もレテシアにそっくりだな。あはっはは。」

「ジリアンは、パジエロブルーを操縦しながら、みんながいてる場所を見ていた。」

「レインがジェフにからかわれている様子が操縦席からも見える。」

「しきりにカメラを手にチャベックが親指を立てている姿もみえて、ちゃんと撮れていることがわかった。」

「要塞の方向からすこし、火山よりの位置に、八工の群のように点在する飛行物体が見えた。」

「機体のレーダーを確認すると、それがエアジェット部隊だとわかり、飛んでいる様子から合同訓練のエアジェットだと思った。」

「太陽が中心からやや下に傾き、空は雲ひとつない青い空だった。」

スカイロードの合同訓練は、山岳警備隊のお手本なしに、三回生が二回生を教えるという訓練でアクロバット飛行を終えた。

エアジェットが飛び立つ直前、エミリア「サンジヨベーゼ上等兵の機体のエンジン音がおかしいことに気づき、教官のビル「ポルスキー準曹が付き添いで残ることとなった。

フェリシアが操縦する機体とともに、他の学生のエアジェットは一斉に飛び立ち、要塞に向かっていった。

フェリシアとペアを組んだ三回生の学生は、次第に操縦が怪しくなり、隊列の後方へと下がると、隊列から抜け出し、断崖絶壁の谷底へと降下していった。

その様子が隊列を組んでいた他の学生にはわからず、指示していた教官もフェリシアの様子に気が付かないでいた。

そして、とうとう、フェリシアの機体は行方をくまらしました。

谷底に向かうと、日差しが届かず、暗闇の中を飛行する。ライトを照らし、さらに下へ下へと降下する。

最初、気が付かなかったフェリシアだったが、次第に周囲が暗くなり、周囲にエアジェットがないことに気が付いた。

「先輩、どういうことですか。」

帰還する際は三回生に操縦を任せることとなっていたので、フェリシアはあわてて問いかけ、返事がないので助けを求めようと通信を試みたが応答がなかった。

「どうして?」

頭の中でパニックが起き始めた。

エミリアがいたなら、こんなことにはならなかっただろうと考えもした。

三回生にいったい何が起きたというのだろうかと思った。

暗闇の絶壁に突き出した岩があった。

そこにエアジェットは着岸した。

エンジンが止まったのを確認して、上級生の肩に手を掛けようとする時、いきなり後ろを振り返った。

その目はフェリシアを見ていない。

「まったく、あなたも危機感のない人だなあ。こんなことじゃ、すぐ敵にやられてしまうよ。」

フェリシアは青ざめた。視点が泳いでいて定まっていな。離陸するまえの三回生の様子と全然違うことを理解した。

「あなたはいったい何者なの？」

「さあね。どうでもいいことじゃないか。」

「そんな、わたくしをどうするつもりなの。」

「どうもしないさ。これは脅し。」

「脅し？」

「そうだよ。あなたを脅して、揺さぶりを掛けるのさ。あの人にさ。」

「あの人って誰なの？」

震える手を押さえて、自分の命の危険性を考えていた。

「そんなこと、あなたが考えなくてもいいんだよ。」

「わたくしを脅して、何のメリットがあるのでしょうか。」

「命は取ったりしない。怯えて大人しくしてもらおう。それだけ。」

こちらのやりたいようにやらせてもらおう。そう主張するだけなんだよ。」

「意味がわからないわ。」

「わからなくていいって言ってるじゃないか。しばらく、ここで大人しくしてもらおう。」

騒ぎになってもらわないと困るからね。」

三回生はヘッドセットをずっとつけたままだった。

フェリシアはヘッドセットに手を掛けようとしたが、手を払われた。

「大人しくしているよ。ここから落ちてもかまわないのか。砂虫に食われちゃうんだぞ。」

「食われるのはあなたも同じことでしょう。」

上級生の視点は相変わらずあちこちと動き回り、会話が続いていて、気分が悪くなったフェリシアは凝視できない様子で、相手の顔を見ないようにしていた。

「ふあはは。そうでもないんだなあ。」

「どうということなの？」

「これは操り人形。代わりはいくらでもいるしね。」

「命をとったりしないって、言ったわね。」

「ああ、そう。でも、砂虫に食われても死ぬとは限らないし、体の一部がなくなるかもしれないけど、山岳警備隊の威厳に掛けても命を落とすようなことはしない。」

つまりは、体の一部がなくなっても救い出されるんだよ。」

「操り人形ってどういうことなの？催眠術にでも掛かっているわけ？」

「さあね。」

唇を噛んで、しばらく考え込んでいた。

「いいわ。大人しくするわ。騒ぎが起きて、救出されるのを待てばいいのね。」

「そういうこと。ものわかりが良くなったねえ。その調子。」

「わたくしを馬鹿にしているのね。」

「そうでもないさ。親の言う事を聞いて良い子になろうとしているあなたは馬鹿じゃないって思うね。」

「どういう意味なの？」

「そういう生き方のほうが、楽でいいだろう。辛いなんて一時のことさ。」

「なにが言いたいのかしら。」

「そのうちにわかるよ。」

フェリシアは腹を据えて救助が来るのを待つことにした。

どちらにしろ、ヘッドセットで操られているのなら、犯人が判明する可能性が高いし、この上級生を調べれば誰が操っているかわかる

だろうと考えていた。

一方、エミリアのほうでは、操縦席の基盤で回路が焼かれているのが判明し、その場で教官が修理することによって、調子を取り戻した。

そして、すぐさま離陸の準備がされ、要塞に向かったエアジェット部隊に追いつこうとしていた。

部隊に追いついたのはいいが、フェリシアの機体が見当たらないのを不思議に思った。

通信で隊列の教官に問い合わせたが取り合ってもらえなかった。

要塞に到着し、点呼が済むと、フェリシアとペアを組んだ3回生が乗ったエアジェットが不明になっていることが判明した。

エミリアは驚愕し、教官命令を無視して、エアジェットに乗り込んだ。

アップルメイト大尉がその様子を察して、ロブを呼び出した。

そして、パジエロブルーがいないため、カイン・シュタット少尉を呼び出し、フェリシア救助に向かうためエアジェットを操縦しロブを連れて行く事を指示した。

エミリアはアップルメイト大尉に懇願した。

「わたしにも行かせてください。お願いです。足手まといにはなりません。わたしには殿下をお守りする使命があるのです。」

教官は校長からエミリアのことを特別扱いするように言われていたのを思い出し、許可を出した。

大尉も同意して、救出には、ロブ、シュタット少尉、エミリアが向かうこととなった。

大尉は要塞の通信士に、念のため、マックファット少尉にもフェリシア救出の件を連絡するように命令した。

三回生は、操縦席のドアを開けた。

「騒ぎが起こって、救出にこちらへ向かってるらしいよ。ライトつけているけど、通信機は壊れているし、この居場所が判明するのがいつになるかわからないけどさ。」

フェリシアは自分の耳を疑った。

(通信機が壊れている?)

確かに、通信機で助けを呼んでも応答がない。しかし、この三回生はヘッドセットの通信で操られているのではないのか。

三回生はヘッドセットを頭からはずし、首に掛けると、立ち上がった。

「お役目終了になったよ。助けが来るまで、あなたはひとりでここにいると良い。いろんなことを反省するんだね。」

そういうと、三回生は、身を乗り出して、谷底に落ちていった。

「キャーッ。」

フェリシアは思わず叫び声を上げた。

ヘッドセットの線の先は、つながっておらず、三回生とともに、落ちていった。

途中、なにか当たる音がしたとともに、男の叫び声が聞こえ、金属を引き裂く鳴き声が谷底に轟いた。

フェリシアは驚愕して、体の震えを止められなかった。そのうち、目から涙が幾度となくこぼれた。

恐怖に怯え、声も出なくなった。

そして、こころのなかで祈った。

(レイン、助けに来て)

湖岸に着陸したパジエロブルーは、一度カメラマンのチャベックに言われて、レインとジリアンふたりで機体の前で写真を撮った。

ジエフが自分の機体の操縦席に手を掛けた時、通信が入っているのがわかり、内容を聞き返した。

「クレアさん、大変だ。」

「どうした？」

ジエフはトラブルが起きた事を伝えようとしたが、チャベックが視界に入り、躊躇した。

「要塞でトラブルが起きたらしい。急いで戻らないといけない。」

ジエフはチャベックにわからないようにクレアに目配せをした。

クレアは内容がチャベックに知られたらまずいのだと察して、ここから立ち去るように言った。

「心配しなくても、耳にしたことは他に言ったりしないよ。明日要塞に行くのに、それじゃ出入り禁止になってしまう。そうだろ。」

チャベックはそう言っつて、荷物をまとめて、その場から離れた。

「明日、会おう。要塞でな。」

手を大きく振って、離陸する様子を眺めていた。

ジエフは、クレアたちに、通信で内容を告げた。

「皇女殿下が訓練終了後に、要塞に帰還せずに行方不明になっている。ロブとカイン、エミリアで捜索に出たということだ。」

「こちらに連絡が入ったということは、一緒に捜索に当たってくれということだな。」

クレアは、誰かに謀られて事件が起きたという感じがして仕方がなかった。

訓練には従者がついてきている。訓練にまで付いていけないにしても、山岳警備隊との合同訓練だから危険性が少ないものと思われるが、アルバートとの騒ぎがあつて陸上部隊が訓練に参加できないことになった。

考えられることは、遠隔操作による人格のつとり。

薫を葬つて、あと動くとしたら、白髪の少女なのか。

月夜でもない限り、無理じゃないのかとクレアは考えていたが、側面だけ考えて別の方法があつたのだとしたらと考えを巡らしていた。

白髪の少女が黒衣の民族の手に渡っているのか、それとも、あちら側なのか。あちら側なら、フェリシアを狙ったりしないだろうと考えていたのだが。

フェリシアの機体は岩に乗っかっている状態だった。三回生が落ちていったことで、すこし傾いた。

震える体をどうにかして、冷静になろうと、努力をしていた。まずは、エンジンが掛かるかどうか試しが、かからなかった。

何か電源が付かないかと、いくつものスイッチをONにしたが、作動しなかった。

先ほどまで、なにも音がしなかったのに、対して、風が吹き込む音がしてきた。

フェリシアはつばを飲み込み、その音が近づいてくるのに期待した。

音がする方向が前方であることがわかり、光がちらついているのがわかった。

思わず立ち上がろうとすると、機体が軋んだので、あわてて座り込んだ。

ライトは次第に大きくなり、エンジン音が響いてくる。

安堵感が出てきた。

機体は垂直飛行でこちらに向かっていた。

最初ライトでまぶしかったが、その機体がフェリシアを通り過ぎすと、山岳警備隊のエアジェットだとわかった。

フェリシアは振り返り、その機体を目で負った。

機体は垂直飛行のまま、上昇していく。

フェリシアは座り込んだまま、精一杯に手を振った。

すると、上から小石が落ちてきた。

上を見上げると、ロープをつたって、誰かが降りてくる。ロープの先はフェリシアの機体まで届かなかった。

絶壁に生えている蔦を手繰り寄せて、ロープに結び、ロープを伸ば

してまた、降りてくる。

「フェリシア、そこから動かないで。」

その声はエミリアだった。

フェリシアは嬉しさのあまり泣き出した。

「ああ、エミリア、助けに来てくれたのね。」

両手で顔を覆い、小刻みに震えだした。

蔦を結んでも、まだ、機体には届かない。

エミリアは恨めしそうに上を見つめた。

頂上からは、さきほどの山岳警備隊のエアジェットが着陸し、カインとロブが覗き込んでいた。

ヘッドセットで通信をし、ロープが伸びないかどうか、連絡をした。エミリアはカインと通信をしていたが、そばでロブが誰かと通信しているのが聞こえた。

上を仰ぐと、谷の隙間からきらりと光るものが見えた。

「パジエロブルーだわ。」

エミリアが言葉を口にすると、フェリシアの顔が紅潮し、上を見上げた。

フェリシアの視界には、パジエロブルーが入らなかった。

エミリアのロープが波を打って揺れていると、上から人が降りてきた。

レインがロープを持って降りてきたのだった。

「エミリアさん、ロープです。」

レインはロープの端を手に持ち、ロープを下に垂らした。

レインの声に、フェリシアは歓喜の声をあげるのは抑えるのがやっとという感じで喜び勇んだ。

（レインが助けに来てくれたわ。）

エミリアがロープを掴むと、それを確認してから、レインはロープの端を手放した。

エミリアは蔦を結んだロープを、レインから渡されたロープにと結びなおした。

そして、フェリシアの機体まで降りていくことができた。

レインはその場で待機を命じられ、機体までは降りなかった。

エミリアは機体に足を掛けたが、軋む音がするので、足は掛けなかった。

ロープを肩に巻いて軸のように張って、壁に対して垂直に足を伸ばし、ロープの先をフェリシアに投げた。

フェリシアはロープを受け取った。

「体に巻いて。」

エミリアの言われたとおり体に巻いた。

フェリシアがロープに体を巻いて結び目をつくり固定すると、すぐさま立ち上がろうとした。

「だめ、立ち上がらないで。」

エミリアの言うのが遅くて、機体が傾き、少しずつ落ちていった。

フェリシアは操縦席のシートベルトに足がひっかかり、機体とともに引きずられていった。

「いやああ、落ちてしまうー！」

ロープがフェリシアと機体の重みを受けてエミリアの肩を絞っていきく。

エミリアは痛みには耐えかね、巻いていたロープを解いてく。

エミリアはロープをちゃんと掴んでいたが、フェリシアの足元が気になり、すこしずつフェリシアに近づき、シートベルトをベストに装備していたナイフで切り離れた。

機体を蹴り落とすとともに、バランスを崩してしまい、エミリアはロープから手が離れて、落ちていった。

その様子を見ていたレインは、なにも躊躇することなく自分の掴んでいたロープを放し、まっさかさまにエミリアめがけて落ちていった。

エミリアはすぐに崖に飛び出した岩を掴み、レインはフェリシアの機体が引っかかっていた岩の先を掴んでいた。

ヘルメットのライトを点灯し、当りを見回して蔦を探した。

フェリシアは体をロープに固定していたので、宙ぶらりんになったまま、振り子のように揺れていた。そして、揺れを利用して、先ほどの岩を掴み、レインのところまで歩み寄ろうとしたが、届かなかった。

レインは、生えている蔦をつかみとり、腕に巻きつけて、岩を掴んだ手を離した。

蔦の先はエミリアに届かず、レインは必死にエミリアに手を伸ばした。

エミリアは岩を掴んだといっても、手でつかめる程度で、自分の重みで掴んでいられなくなった。

指がかじかんで掴んでいられなくなり、手を離すと、レインが腕を掴んだ。

「エミリアさん！」

エミリアは助かったと思ったと同時に、レインを見上げてその先でフェリシアが体に巻きつけたロープを解こうしている姿が見えた。

「フェリシア！何をしているの！」

「助けに行くわ。このロープを解けばなんとか。」

「やめて、やめなさい！」

「どうして！」

エミリアはしばらく考えた後、レインをにらみつけていった。

「レイン、手を離しなさい。」

レインは驚いたが、「嫌です。」と言った。

「何を言っているの、エミリア。手を離すだなんて、谷底に落ちてしまっわ。」

「いいの。フェリシア、あなたが助かれば、それでいいのよ。」

「嫌だ、離さない。」

エミリアはベスト装備から銃を取り出した。

レインの手を撃とうとしたが、足を壁に着け、屈伸をして、レインを揺らした。

「何をするんですか、エミリアさん。」

レインが掴んでいる蔦めがけて、ハーケンを打ち込んだ。

レインが掴んでいた蔦はハーケンで切れてしまい、レインとエミリアは谷底に落ちていった。

「きゃあゝ、やめてえゝ。」

フェリシアの絶叫が谷底に響いた。

レインは落下しながらも、皮手袋をした手で突き出た岩を掴もうと壁に滑らせていた。

エミリアが岩に足をひっかけ滑り、レインがその岩を掴んだ。

暗闇の中、レインのヘルメットについたライトがエミリアを照らしていた。

ライトの先には、谷底の地面が見えていた。

土とも草とも区別のつかないものが底にはあり、そこに足を踏み入れると、呑まれるのではないかと思うほど柔らかい土壌にみえた。

「レイン、上を照らして。」

エミリアを照らしていたライトを上に向けた。

約2メートル先の左の方向に大きく出っ張った岩が見えた。

ハーケンの銃を装備しなおし、エミリアは岩めがけて打ち込んだ。

そのハーケンのワイヤーを腕に固定させた。

「レイン、腕を離して。」

強く握り締めたエミリアの腕を、躊躇しながら離れた。

ワイヤーを引いて、エミリアはその岩の上に乗った。

ベスト装備から発炎筒を着火し、レインの後方へ向かって投げた。

もうひとつ、発炎筒を取り出そうとすると、鉄を引っかくような鳴

き声が出て、レインがそちらの方向へライトを向けると、黒くうご

めくものがいた。

エミリアは咄嗟に発炎筒よりフラッシュライトを手にした。

閃光を放つフラッシュライトに砂虫が口を大きく開けて、エミリア

を飲み込もうとした。

砂虫が開けた口の奥から、フェリシアとペアを組んだ三回生が血だらけで手を伸ばしていた。

エミリアは声が出ないままに、あまりの恐怖に身動きが付かなかった。

エミリアを飲み込もうとする寸前、後方で銃声がして、砂虫はのけぞり、あけた口を上に向けたまま、下に向かって落ちていった。レインも砂虫の口の奥に人がいているのを見てしまった。

あまりの恐怖に掴んでいた岩を離してしまうのを必死にこらえた。鉄を切り裂くような鳴き声が谷底に響いた。

レインが上を向くと、フェリシアを抱きかかえたクレアが銃を手にしてこちらを見下ろしていた。

「大丈夫かあ、今、エアジェットでロブが救出に向かってている。」

レインはヘルメットに取り付けられている通信機に耳を傾けた。

二人の状態を伝えると、岩の上に立っているエミリアの方を先に救出すると言ってきた。

エミリアはもうひとつある発炎筒を先ほど投げたものとは反対の方
向へ投げた。

落ちていくと、また、鉄を引っかくような鳴き声が響いた。

レインはエミリアに指示を出した。

「エアジェットがこちらに向かっている。出来るだけ壁から離れて
片腕を伸ばすように出してほしいって。」

機械音が谷に響いている。

こちらにエアジェットが向かっているのが理解できたが、どうやって
助けるといふのだらうとエミリアは思った。

レインは指示どおり、エミリアをライトで照らした。

「エミリアを確認できた。前のほうを照らしてくれ。」

ロブの指示があつて、エミリアから前のほうにライトを向けると、
エアジェットが見えてきた。

エミリアは啞然とした。

山岳警備隊のエアジェットは翼の先を折りたためることができるが、
その折りたたんだ状態で、背面飛行をしている。

そして、ロブは足をエアジェットで固定して、逆さづりになってい
た。

エミリアは腕を伸ばすように指示された事に理解した。

エアジェットが通過する瞬間、ロブはエミリアの片腕を掴んだ。掴んだ事を確認すると、エアジェットは背面飛行のまま、ロケットエンジンで上昇していった。ロブが乗っていたエアジェットは、ジェフが操縦していた機体で、その後、カインが操縦しているエアジェットがレイン救出に向かっていた。

通信の支持で、レインはロブを乗せたエアジェットがやってきた方向にライトを照らし、距離を確認して、足元にライトをうつした。エアジェットが真下に来るのを感覚的に計って、掴んでいた岩を離し、落下した。

レインはカインが操縦する機体に移ることができ、取っ手を掴んで合図を送った。

カインの機体は翼を折り曲げた上体で水平飛行をしていて、合図とともに、機体の先を下に向けると弧を描いて、ロケット噴射をして上昇していった。

太陽が傾きかけていた。

手遅れになつたらと考えると不安になつてくるのをぬぐいきれないエミリアは、自分を責めていた。

（なぜ、あのとき、もっと強く教官の言うことに反対しなかったのだろうか。）

要塞から飛び立ってから、来た道を戻る。

砂虫が多く棲み、谷底が深い場所だと注意を受けた付近を満遍なく覗き込んだ。

かすかな光が見えて、カイン「シユタット少尉に通達し、その谷の上に着陸した。」

即座に谷底を覗き込み、フェリシアであることを確認した。

カインたちは断崖絶壁を垂直飛行して、フェリシアの位置を確認した。

エミリアは機体からロープを取り出していた。

カインたちと通信しながら、エミリアは救出方法を述べた。

「殿下が乗った機体は、岩に乗っています。バランスが崩れると落下するものと思われませう。」

「それで救出に向かうというのか。」

カインが心配して、エミリアを制止しようとしたが、ロブがさえぎった。

「エミリアのような体重が軽いものの方が良いだろう。訓練をきちんと受けて、自信があるのなら、行くといい。」

エミリアは深くうなづいて、返事をした。

ロープを機体の車輪にくくりつけて固定、それを谷に垂らした。

エミリアが降下した時、カインの機体は谷の上に着陸した。

着陸と同時にカインに通信が入った。

「ロブ、ジェフ「マックファット少尉とパジエロブルーがこちらに

向かっているとのことだ。」

「了解。シユタット少尉、背面飛行はできないかな。」

「はあく。背面飛行かよ。鷲や鷹じゃないんだから、できるわけないだろ。」

「できないのか。使えないなあ。」

「おい、使えないって……。」

ロブとカインの会話に横槍が入った。

「おい、通信スイッチ入れたまま、話をするなよ。まる聞こえだぜ。」

「ジェフか。」

「ロブ、俺は背面飛行できるが、アクロバットの出番なのかよ。」

「ああ、そうなるかもな。」

カインとロブは谷底を覗き込んで、エミリアの様子を見ていた。

カインはエミリアと、ロブはジェフと通信をしていた。

山岳警備隊のエアジェットとパジェロブルーがロブたちのいるところへ到着した。

レインが即座に機体から出てくると、エミリアの所在を聞いていた。

ロブは谷底を指差して答えた。

「ロープでしたに降りていった。」

レインは谷底を覗き込んだ。

自分もロープで降りてみると言い出した。カインは反対したが、ロブとクレアが賛同した。

クレアに言われて、予備のロープを手を持った。

ロブはジェフが操縦席から立ち上がらないうちに、離陸しろと手で合図を送った。

そして、カインにはエミリアたちの様子を報告するように言った。

クレアはパジェロブルーの通信を使って、アップルメイト大尉にフエリシアが見つかった事を報告した。

そして、大尉からは空挺が迎えに出発した事を告げられた。

ジェフの機体が離陸し、離れたところまで駆け出し、断崖絶壁を確

認して、ジェフに合図を送った。

そして、走りこんでカウントすると崖から飛び込んだ。

ジェフの機体は、ロブを背に、空への上昇すると、また、谷底へと降下していった。

ジリアンとクレアとで、谷の上から覗き込んでいた。

エミリアとレインとの通信をしていて、様子を確認していた。

そして、エミリアとレインが谷底に落ちていく様子も上から覗き込みながら通信を聞いていた。

咄嗟に、クレアは、ロープを伝って降り始めた。

二人の様子をジリアンはロブに伝えると、ロブはカインに離陸するように言った。

「僕がいくよ」

「いや、パジエロブルーじゃ、谷に降下できない。せますぎる。山岳警備隊のエアジェットなら、翼を折りたためるから、狭くてもいける。」

ジリアンは、ロブに言われて、パジエロブルーで待機をしていた。

カインが離陸すると、ロブの指示に従い、旋回していた。

ロブが、エミリアとレインが谷底に向かって落下した事を報告を受けて、背面飛行をジェフに指示した。

そして、カインには後をついてくるようにいった。

クレアは、震えるフェリシアを呼び寄せ、両手で強く抱きしめた。

フェリシアには見させないように、底のほうに覗き込むと、ちょうどエミリアを飲み込もうとする砂虫が見えて、無意識で装備していた銃を取り出し撃った。

鉄を引掻くような鳴き声とともに、遠くではあるが、口を開いたままの砂虫がのた打ち回る姿がみえた。

そして、その口の奥で犠牲となった三回生の姿も確認した。

クレアに強く抱きしめられながらも、フェリシアの震えは止まらなかった。

第十七章 青すぎる空 6

フェリシアは地上にたどり着いても、まだ、震えていて、小さい子供のようにクレアの足にしがみついていた。

（トラウマにならなければいいが。）

クレアはそう思った。

ロブに抱かれてエミリアが無事にもどってきた。

ロブの手から離れると、エミリアはレインが戻ってくるのを待っていた。

レインがカインの機体に乗って、もどってきて、機体から降りると、エミリアは即座に駆け寄り、レインに平手打ちを食らわした。

平手打ちをしたエミリアは紅潮した顔で震える手を押さえ、隠したレインは感謝こそされるはずが、平手打ちを喰らって、頭の中が真っ白になった。

「何度言ったら、わかるのかしら。自分の命を大事にしなさいって言ったでしょう。」

その言葉に、自分のおろかさを痛感したレインだったが、エミリアに対して何もいえなかった。

「一度言っただけよ。わたしは殿下をお守りする使命があると。殿下のためなら、命も惜しくはないわ。」

そのことばに、レインは反論した。

「それは命を粗末にすることにつながるでしょう。」

「違うわ。軍人は、国民を守る義務があるわ。国民は殿下の死を望まないわ。わたしの使命は殿下の命を守ることと真つ当するのよ。」
エミリアが言い放つと、ジェフがエミリアの肩に手を置き、制止した。

「レインは、軍人じゃない。一般人だ。」

エミリアは自分の思い込みに気がつき、「申し訳ありません。」とジェフに謝った。

「わたしの使命や、軍人としての義務を説く理由がありませんでした。ごめんなさい。」

レインにエミリアは頭を下げたが、顔を上げることはできなかった。涙がこぼれているのを見せるわけにいかなかったからだ。

レインに想いを伝えられない悔しさを感じつつ、自分の気持ちは隠し通さなければいけないと覚悟した。

レインはぶたれた頬を手で押さえて、パジェロブルーに向かって走った。

座席に入りたかったが、そこにはロブが立っていて、ロブはレインを強く抱きしめた。

レインはロブに抵抗したが、それでも強く抱きしめてくるので、声を押し殺してロブの胸に頭を押し付けて泣いた。

レインが前からいなくなったのを確認したかのように、エミリアは顔をあげて、目を両手で隠した。

そして、空を見上げた。

そこには、フェリシアを迎えにきた空挺が飛行していて、着陸しようとして試みていた。

フェリシアはエミリアがレインを平手打ちしていた様子を目の前で見ていた。それをきっかけに、震えが止まった。

そして、クレアの足から、手を離し、立ち上がった。エミリアが近づいてくると、必死と抱きしめた。

「フェリシア、もう大丈夫よ。」

「ええ、そうね、エミリア。」

空挺から、フェリシアの従者が現れ、フェリシアに手を伸ばしたが、拒否した。

お互い肩をだきながら、フェリシアとエミリアは空挺に乗り込んだ。パジェロブルーの前で、レインは泣き続けた。エミリアたちが乗った空挺がその場を去るまで。

太陽は、沈みかけていて、周囲は赤く染まっていた。

やるせない気持ちで漂うジリアンとクレア、そばにいてあげるのが最善だと思っているロブ、レインとエミリアの心情を読み取ってしまったジェフ、このような事件がなぜおきてしまったのだらうと不安に思っているカイン。

それぞれの想いが、交錯して、あたりは暗くなるうとしていた。

事件の真相が明らかにされないままに、フェリシアは要塞から発たなければいけなくなった。

発つまえに、フェリシアはエミリアの気持ちを確かめようと思いい、二人つきりになって話をした。

「エミリアはレインのことが好きではなかったの？」

その問いに、なかなか答えることが出来なかったが、フェリシアに胸のうちを明かしても、レインには伝わらないだらうと確信していたので、話すことにした。

「レインのことは好きよ。」

「では、なぜ、ぶったりしたの？」

エミリアはフェリシアの目を見ながら答えた。

「黒衣の民族に襲われた時、致命傷を負ったレインを腕の中で抱きかかえて、心臓が押しつぶされそうになったわ。」

素敵な笑顔をわたしに見せてくれる少年が、わたしの腕の中で息絶えようとしている状態で、自分自身がおかしくなりそうだったわ。

でも、レインは命をとりとめ、いまや元気にS A Fのクルーとしてがんばっている。」

エミリアは自分の胸に手を当てて、レインを想った。

「もう、2度とあのような思いをしたくない。そして、レインに命を落としてほしくないと思っただわ。」

アレックスの子孫だからって、過信してしまえば、いくらでも命を失ってしまう。

好きだからこそ、理解して欲しいって、思っただわ。わたしは不器用で、思いは伝えられなかった。」

エミリアが唇を噛むと、フェリシアはその唇を指でなぞった。

「わたしの所為ね。」

エミリアは首を振って、フェリシアを抱きしめた。

「あなたにも、わかってほしいの。わたしの大切な殿下は軽率に命を落としたりしない。」

あなたがこころに痛みを感じているのなら、わたしもこころに痛みを感じるわ。

一心同体になりたいと思っっているわけじゃないの。

痛みを感じることで、あなたを守り、大切にすることができの。」

「レインのことはどうするの？」

「どうもしないわ。レインはレインで、自分の心の痛みを感じて欲しい。」

痛みを感じることで、レインも、わたしも、フェリシアも、大人になっっていくのよ。」

フェリシアはこころが暖かくなっっていくのを感じて複雑に思ったが、浮かんだ言葉を口にする事によって、自分で自分に納得させた。

「レインが無闇に命を失うようなことがないようになってほしいのね。」

エミリアは深くうなづいた。

第十七章 青すぎる空 7

要塞にもどったジエフとカインは、軍によって拘束されてしまった。情報を口外させないためと、事情徴収のためだった。

クレアは自分たちが要塞にもどって、状況が一変したことを感じた。アップルメイト大尉からは、指定の場所以外は立ち入り禁止を言い渡されて、事件について事情徴収されたものの、情報は何一つ教えてもらえなかった。

事件の真相にせまる情報を知りえているはずのフェリシアは夕食前に護衛とともに発っていた。

（これはテロ行為そのものでも、なさそうだな。）

フェリシアの命を狙っていたのなら、エミリアたちが駆けつけるまえに死んでいるはずだと、クレアは考えていた。

事情徴収が済んだクレアが開放されて、診療室にいこうとした時、ロブに呼び止められた。

「クレアさん、事件の真相ってなにか判明しましたか。」

「いいや。それより、レインは？」

フェリシアを乗せた空挺が去ったあと、ジリアンはロブに言われてカインの機体に乗った。要塞についてからも、レインはロブから離れなかった。

「シヨック状態に陥って、コーデイに鎮静剤を打ってもらい、睡眠薬をもらったんだ。」

理由はエミリアのことではないらしい。」

「いったい、どういうことなんだ。」

「『砂虫の口が……』って、何度も言うんだが。その先が言えないらしい」

クレアはエミリアを襲おうとした砂虫を撃ったあと、口が上に向いていたので、おぞましいものをみたことを思い出した。

「殿下とペアを組んでいた三回生が犠牲になったことか。」

「犠牲とは？」

「口の奥に人がいたのをあたしも見たんだけどね。レイニーなら、間近でみたにちがいない。」

クレアは、エミリアのことでそっちの恐怖へスイッチがはいつてしまったのだろうかと考えた。

「無残な殺され方を目の前で見てしまったということか。」

「そうだな。加えて精神的なショックを受けたことで、ショック状態になったのかもしれないな。」

ジルより、ロブのほうがそばについてあげたほうがいいだろう。」

「ええ、そうします。ジルは……。」

「ジルは、具合がよくなったキヤスと一緒に寝てもらおうといい。」

「それは良かった。では、ジリアンに言って、キヤスのところへ。」

「それと。」

「はい？」

「S A Fは明日の午後、ここを発つ様に言われた。」

「そうですか。」

「気乗りしないか。」

「いえ。スカイロードは？」

「訓練期間を終えていないので、続けるそうだ。軍の学校だからな人が死んだくらいじゃ、もどらないだろう。」

「そうですね。わかりました。出立の準備はしておきます。」

「事件の真相は要塞^{ユーク}じゃ、教えてもらえそうないから、テオ少佐に聞くよ。」

「では、なにかわかりましたら、教えてください。」

クレアの目から合図を受けると、ロブはその場から立ち去った。

ジリアンがカスターのところへ行こうとすると、外での雨音に気が付いた。

カスターが寝泊りしている部屋にノックをして入室すると、カスターは窓を眺めていた。

「雨が降っているね。」

「うん、滅多に降らないって聞いていたけど、さすがに降るんだ。」
「さすがにって、レイニーが泣いているの？」

「泣いているって言うか・・・、泣いているんだよね。なに、言ってるんだろっ、僕。」

「ジリアンは言い様もないレインの状態をどうやって伝えようかと考えながら口にしてしまったことに気が付いた。」

「どうかしたの？」

「うん、あのね。」

「ジリアンは、今日あった出来事をカスターに話をした。」

「そうかあ。エミリアがね、レイニーを。なんか、仕方ないって言うか、しょうがないって言うか。」

「心配していたんだよね、合同訓練するって聞いたとき。レイニーがおかしくなっちゃうんじゃないかって。」

「エミリアは大丈夫なのかな。」

「大丈夫そうだったけど。皇女殿下もクレアさんにしがみついているって震えていたけど、その後、しっかりと自分で立ち上がってエミリアさんと空挺に乗り込んだんだもおの。」

「カスターは、フェリシアがレインに好意を持っていることを知らないでいる。」

「言うべきか、言わざるべきか、考えあぐねていたが、ジリアンは話を切り替えた。」

「キヤス、調子はどう？」

「うん、もう、大丈夫かな。」

「ジリアンはカスターの言葉にすこし首をかしげた。いつもハイテンションで馬鹿なことばかり口にしてきたカスターではなく、おとなしいカスターだったからだ。」

「クス。大丈夫じゃないって顔だね、ジリアン。」
「ジリアンは深くうなづいた。」

「それでも、幻覚を見なくなったよ。」

「幻覚？」

「ああ、クレアさん、コーディ、アルに触れると、それぞれに違う人物が重なるんだ。」

「それが幻覚なの？」

「ああ。クレアさんは、左腕がなく、コーディ、アルは、それぞれ小さい女の子に男の子なんだ。」

「へえ。」

「どうしても、瞬きしたり顔をたたいたりして、幻覚から目をさましたかったんだけど、できなかつた。」

「それが見えなくなつたということなの？」

「そうだよ。これでまともに接することができると、気に病むこともない。なんだか、自分がここにいてるようではない感じがしたんだ。」

でも、いまなら、はつきりと、自分はここにいるって実感がある。」

「そう、キヤスが良くなつたのなら、僕うれしいよ。元気のないキヤスなんて、つまらない。」

カスターはジリアンの頭をなでた。

「心配かけちゃつたね。もう、大丈夫だよ。」

「うん。」

「レイニーのことは心配だけど、今日はもうお休み。明日は要塞を発つらしいから。」

「うん、兄さんから聞いたよ。事件もあつたし、要塞にはいられないね。」

「嫌なこともあつたかもしれないけど、訓練はどうだった？」

「うん、良い勉強になつたよ。」

「そうか、それは良かった。」

二人は、寝る支度をして、ベッドに入った。

外はまだ、しとしとと雨が降っていた。

カスターは、レインにつきそうロブの姿を思い浮かべていた。

(いつも、泣かしていたのはロブなんだけどな。)

第十七章 青すぎる空 8

雨は、朝には止んでいた。

レインは、鎮静剤で朝まで眠ったものの、目が覚めると恐怖が襲って、ガタガタと震えていた。

その様子をロブは不憫に思っ、睡眠薬を飲ませた。

SAFから、アルバートを呼び、レインに付き添ってほしいと頼んだ。

ロブは昼までに、支度を済ませようとしていた。

カスターは、カインに挨拶しに行こうと、要塞をうろついていた。

間違っ、地上に出てしまった。周囲は昨日の晩に雨が降ったことなど微塵もないかのように乾ききった土ぼこりが一帯を覆っていた。大きな岩があっ、そこに人がいてる気配がしたので、カスターは近づいた。

岩の陰に隠れて、エミリアがいた。

カスターは最初気が付かなくて、茫然と立ち尽くしていた。

スカイブルーのスカーフを握り締めていて、エミリアは泣いていた。

「あ、邪魔したかな。」

「いえ、わたしは……。」

涙をぬぐってエミリアはカスターをみて、見覚えがあつたので尋ねた。

「あの、もしかしてSAFのクルーの方ですか。」

「ええ、そうだよ。ちよつとわけあつて、診療室にいてて病み上がりみたいなものなだけだ。」

カスターもエミリアだと最初は気が付かなかったが、スカーフをみて、思い出した。

エミリアが首に巻いているのは、グリーンのスカーフで、なぜスカイブルーのスカーフを握り締めているのだろうと考えた。

「えつと、君はエミリア上等兵だったかな。訓練はどうしたのかな

？」

「昨日、事件がありました。わたしは事件のことを口外しないために、謹慎中なのです。」

「謹慎中なのに、こんなところで。」

「アップルメイト大尉のご好意で、体術訓練を受けていたのですが、思うように体が動かなくて、訓練を受けたことにして、休養するようにと。」

「そ、そうかあ。邪魔したね。僕は道に迷ってしまって、こんなところに出てしまったんだ。」

キヨロキヨロしているカスターに対して、エミリアは沈黙していたが、顔をあげてカスターをみて、言った。

「お時間をすこしいただいただけませんか。誰にもお話ししないという条件で聞いて欲しい話があるのですが、よろしいでしょうか。」

カスターは、エミリアが話したいことは、レインのことかと思いつながら、うなづいた。

クレアは、支度をコーデイにまかせて、ジェフが何かあったときのためにと用意してくれていた秘密の電話回線でテオと連絡をとった。事件のことはテオにも報告が届いて、内容は伝わってこなかったもので、人脈でもって、真相をつかんでいた。

エミリアたちがフェリシア捜索に向かったあと、スカイロードでは、フェリシアの隊列の教官と最後尾のエアジエットのメンバーが心不全で突然死した。

原因は不明だが、健康状態はいたって良好だった。突然死する兆候はなかったし、3人がいつぺんに同じ状態になるのも不自然だった。要塞では、検死して原因を調べているが、薬物による致死ではないことは判明していた。

クレアはその内容を聞いて、白い魚を思い浮かべていた。

レインが遭遇した、人格をのつとられたホテルマンのことを。

そして、すこし、恐怖した。

（一度に3人も致死することができるといのか。）

白い魚の可能性を考慮して、犠牲になった三回生は確実に、ホテルマンのように人格をのつとられたに違いないと考えた。クレア自身の考えはテオには伝えなかった。

下手に話せば、皇帝が動き、邪魔が入ってしまうと思ったからだ。テオの情報を手に入れて、戻ろうとした時、クレアは開放されたジェフに会った。

「事件の知り得た情報を話すわけにいかないのですが、鉄鉱石窃盗団の捕獲作戦の際、突然死するものがいたことは内密になっています。」

今回の事件と関係性があるのではないかと思っています。」

「ジェフ、そういうこと要塞ユークで口にしていいのか。」

「突然死は検死報告書にはありませんから、内密といっても、僕の妄想ということ。」

「あ、そう。」

「そっち方面の情報をしらべてもいいのですが、今日発たれるんですよね。」

「ああ、すっかり、邪魔者扱いになったよ。大尉には気に掛けてもらってあげたいが、これ以上迷惑はかけられない。」

「そうですね。」

「で、ジェフもこれ以上首を突っ込むのはやめにしなさい。上に睨まれるぞ。」

「ええ、確かに。要塞ユークは中央司令部から離れていながらも、サンジョーベール將軍による皇帝派寄りと思われるみたいで、排除派から探りは入っているみたいです。」

なにかあったら、潰しに掛かろうとしているのでしょうか。」

「今回の事件と、排除派が関わっていたら、黒衣の民族カラスはそっちがパトロンになっている可能性もあるということだろうな。」

ま、この手の話はこれまでにしよう。」

「では、なにか情報が手に入りましたら、少佐のところへ入れてお

きます。そのほうが無難でしょう。」

「ま、自分の身を案じて、よろしく頼むよ。」
ふたりは周囲を気にしながら、言葉を交し、何事もなかったかのよう
に、分かれて行った。

雲ひとつない空のおかげで、地面は太陽から照りつけをもらにくら
っていた。

エミリアは空を見上げて、まぶしい太陽の日差しを手で隠して、空
を見ていた。

あまりに青すぎる空を見ながら、エミリアは、兄の事をカスターに
語った。

第十七章 青すぎる空 9

「要塞は、空があまりに青すぎる。」
それはある日記の最後の文章だった。

エミリアの亡くなった兄が書いていたという日記は人知れず、スカイロードでのルームメイトの手に渡り、エミリアの手元に届いた。エミリアの兄は小等科から寄宿舎学校へ行ったが、それは母親が亡くなったからだった。

父親は、母親のいない家庭に長男を置いていけないと思い、寄宿舎を選んだ。

自身も軍の任務で家庭にいられないからだったが。

エミリアは父方の祖母に育てられて、離れて暮す兄の事をよく知らなかった。

日記には、エミリアの知らない兄のことが書かれていた。

兄は、中等科を卒業すると、父親に反抗してスカイロードに入った。軍人としてエリートコースを歩み、父親の威光をうけて、軍の上層部に行くのを嫌がったからだ。

しかし、スカイロードを卒業して、初の任務地が山岳警備隊の要塞であるキャティナ・マウンターサ・ロッソ駐屯地に決まって、落胆したのは父親が管轄していたからだった。

ずっと寄宿生活だった兄は、世間をよく知らなかった。

知らないがゆえに、のめりこんだものがあつた。異性だった。

そして、性質の悪いことに、黒衣の民族と知らずに恋をしてしまったのだった。

周囲にばれないように、思いを寄せ、秘密裏に密会を繰り返した。相手の女は最初、邪険に扱っていた。軍にあがったばかりの新兵にしか思っていなかったからだ。

しかし、その男が要塞の將軍の息子となれば、態度も変わってくる。本気ではなかったから、尚更、利用できるものは利用しようとおも

つっていたにちがいない。

利用されていると、知らずに夢中になった兄は、女の言うがままに何でもしてしまった。

自分のしたことの重大さに気が付いた時は、鉄鉱石窃盗団の捕獲作戦で犠牲者を出したことで、もうすでに遅かった。

捕獲作戦で、一部を捕まえる事ができ、そこから、エミリアの兄が情報を流したことが知れてしまったのだった。

エミリアの兄は、自害したのだ。

日記には、最後まで、相手の女のことを思い、利用されている事を夢にも思っていないことを綴っていた。

ただ、自分の未熟さを強く嘆いただけだった。

そして、その思いをエミリアに託したのだった。

「エミリア、僕は君の事を良く知らない。君も僕の事を知らないと思う。」

僕の事を知って欲しくてこの日記を託すわけではない。

愛するということを経験せずに成長してしまった僕は、自害しなければいけないのだと思う。

君は、僕より、母より、父よりも、長く生きていて欲しい。

だから、人を愛するということを、早いうちから知っていて欲しい。空があまりに青すぎて、僕は自分の未熟さを痛感したんだ。

命を絶つても、僕は君を見守りつづけたい。」

エミリアを案じての言葉だったかもしれない。

エミリアがこの日記を手にしたのは、入学してからまもなくのことだった。

父からは、事故死としか聞かされていなかっただけにショックだったが、エミリアを思って日記が届いたことに涙した。

兄弟がいたことを実感したのは、これで最初で最後となった。

エミリアはカスターに兄の事を語って、人を愛することの難しさを口にした。

「だから、わたしは思い続けることで、わたしの気持ちを大切にしたいと思っていますのです。」

カスターは少し残念に思ったが、人を愛する態度や気持ちはそれぞれで、これが正しいっていうことはないかもしれないし、それをカスター自身がエミリアに諭すには自分が未熟であることも痛感していた。

エミリアはレインの事を口にしなかった。

口外して欲しくないというのは、兄の自害のことがあったからだっ
た。

「君はまだ、幸せかもしれない。」

「幸せ？」

「ああ、自分自身が人を好きでいるという気持ちが持てるのは幸せことだと思う。」

僕は誰かを好きでいるのかどうかさえ、わからない。

そして、ロブなんか、好きな女がいてるのに、好きだといえず、会
わないでいる。」

エミリアはカスターの話しに耳を傾けていた。

「自分の気持ちに素直になれることは素敵なことだし、幸せなこと
だと思うよ。」

話を聞かせてくれて、ありがとう。僕も素直な行動がとれるように
なりたいな。」

カスターはエミリアに微笑んで見せた。

「こちらこそ、重たい話を聞いてもらって、ありがとうございます。」

「

「重たい話だなんて。・・・そうだな、君は君の素直さに、助けら
れている。」

「素直さ？」

「うん。素直だから、まわりに助けしてくれる人が寄ってきてくれる
んだよ。」

照れながらもエミリアは笑顔になった。

「だから、自信を持って、思いはいつか通じるから。」

エミリアは深くうなづいた。

二人は、照りつく太陽から退散した。

カスターはエミリアに教わって、カインのところにとどり着いた。

カインは、カスターにいろいろ大変だろうががんばっていくようにと言った。

事件の真相を知りたいと思わない二人だが、自分たちが何かに巻き込まれていることには気が付いていた。

それは、ふたりが輸送隊として任務についた、あのときからだ。スカイエンジェルフィッシュ号通称SAFは、午後から、山岳警備隊の要塞であるキャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地を発った。離陸の際は、正気にもどったレインは、名残惜しそうに窓から要塞を眺めていたが、視界の中に小さいながらも目に焼きつく姿があった。

人気のない場所から、エミリアがスカイブルーのスカーフを降って見送っていた。

レインは涙を堪えた。

そして、空を眺めた。

エミリアがSAFを見送った後、ひとりの男性から声を掛けられた。

「アップルメイト大尉から、聞いたんだが、君がエミリアさんジ

ョベーゼさんかね。」

「はいそうです。」

「クレアさんポーターさんから頼まれてね。」

男は、白い封筒をエミリアに手渡した。

表書きはエミリアあて、裏には何も書かれていない封筒から、一枚の写真を取り出した。

それは笑顔のレインの写真だった。

第十八章 太陽に近い場所 1

要塞で学んだものに試行をこらし、ハーケンを強力な磁石に変えて、救命救助の所業はより高度な作業、迅速な動作に変化していった。飛び移るのは絶壁じゃなく、飛行している機体。

ロブとレインとで、飛行中に故障した箇所を修理して、墜落を防ぐ救助を開始した。

レインは救助に打ち込んだ。他のことは考えたくないかのようになり、夢中になって、空を飛び、体を張って機体の修理にあたった。

その姿をみていて、ジリアンは胸が痛い思いがしたが、ロブもクレアもカスターも、指し当たってレインを不憫には思っていないかった。その様子に、次第に心配しないようにしようと、ジリアンは自分に言い聞かせた。

クルーの思いは、人命救助だけでなく、人々のためになにかをしたという気持ちが強くなっていった。

時には、機体の修理だけでなく、高山に住む民族の集落から SOS があつて、救助に向かうこともあり、内容は人命に関わることはあつたが、医療には関係ない水道やガスのライフラインがトラブルを起したことで作業にあたることもあつた。

その集落でグリーンオイルの生産などを指導したり、民族に貢献するなどした。

こうして、スカイエングジェルフィッシュ号通称 SAF は、充実した慈善活動を行っていた。

レインがコーネリアスから手紙を受け取ると、ジリアンの友人プラーナと同じ学校に通っている事を知った。

プラーナからレインの学校での様子を聞き、またジリアンの話も聞いて、会ってみたいと書いてあつた。

レインは、ジリアンの唯一無二の友人であるプラーナのことを仲良

くしてあげてほしいと、手紙に書いて返事をした。

あとは、S A Fでの出来事など書いて、自分自身の充実した生活を思い返していた。

「自分自身がすごくやりたったか機体の操縦をなかなかさせてもらえないなど、最初は辛いか嫌だとか思ったこともあったけど、今は、あの時、がんばったから、今があるんだって思える。」

溶接の仕方、回線のつなぎ方、鉄板の加工など、地道な修理作業を日ごろからやっている、いざという救助の時に役に立つと、実践でわかるのようになったんだ。」

ジリアンが、後ろから覗き見をして、横槍を入れた。

「そんなことかいても、相手は喜ばないんじゃないかな。」

「ジル、勝つてに覗き込んで読むなよ。」

「コーネリアスは女の子なんだし、そんなこと書いてもさ。」

「いいんだよ。コーネリアスの知らない世界の事を書いてあげると、喜ぶんだよ。」

好奇心の旺盛な女の子なんだから。プラーナが植物のことを一所懸命勉強するのと同じだよ。」

「ち、違うと思うんだけど。ま、いいけど。」

ジリアンは、口にはしていないことを口にしてしまわないうちに、会話を切り替えようとした。

「ジョナサンって、より一層孤立化してるというか、一人ぼっちになっっていると思うんだけど、レイニーはどう思う？」

「うーん、なんかアルが言ってたけど、エンジニアがエンジンを大事にしないって。本当にエンジニアなのかって。」

「機械のことに疎かったりするって言ってたよね。それでデイゴまでも、ジョナサンのすることに口出しするようになったのかな。」

「デイゴは、兄さんに頼まれて、アルの助けをしてみたいだけだね。アルも救助に借り出されることあるし。」

「そうだね。僕たちって、なんかしてあげられることってないのかな。険悪な雰囲気にはなっってほしくないんだけど。」

「大人の領域に踏み込む必要なんてないんじゃない。」

「レイニーのいうことにはいまいち納得できないけど、今回のことには賛成しておくよ。」

「いったい、どういう意味なんだか。」

レイニーはコーネリアス宛の手紙を書き終わると、立ち上がった。

「レテシアさんにも手紙を書いたの？」

「うん、書いたよ。要塞出ですぐにさ。あんまり何度も手紙書くと話すことなくなっちゃうし。」

レインは写真を送ったことをジリアンに話してはいけないと思っていた。レイン一人だけ写ったものはジリアンに内緒だったからだ。

「レテシアさんに早く会えるといいね。」

「うん、いつか会えるよ。空を飛んでいる限り。」

クレアは、頭を抱えていた。

テオ少佐から入ってきた情報の中に妙な事柄があったからだ。それはエミリアの父、サンジョベーゼ将軍が排除派だということだった。

だとすれば、山岳警備隊の要塞であるキャティナ・マウントーサ・ロツソ駐屯地は排除派の配下ということになる。

皇女殿下が命を狙われて当然だということなのかと。

將軍の排除派だという認識には、いろいろな点があった。

民族浄化の考え方もつ皇帝に対し、民族を独立させて連合国にしていく考え方もつていたからだ。

要塞を建設した理由には、その地に住む民族が追われて、その民族特有の生き方や風習、地に根ざした知識などが失われてしまうことに失念していて、離れてしまった民族を呼び戻す目的があったからだった。

しかし、鉄鋼窃盗団の事件で駐屯地を追われる身となり、中央司令部にて隠居状態に陥った。

テオ少佐の話によると、隠居状態であるがゆえに、派手な行動は

していないが水面下では着々と人脈を広げつつあるという。

ただ、その排除派には、將軍自身が中心となつて、動かしているわけではないことも情報としてもたらされていた。

黒衣の民族とつながっているのは、將軍自身なのかと考えてはみたものの、中央司令部ほど、黒衣の民族を嫌悪している部署は他にないということも知っていた。

眉間にしわを寄せているクレアに、カスターが声を掛けた。

「そんな顔をしていると、一気にふけてしまいますよ。」

クレアはカスターを睨み返した。

「女を捨てた身だし、老けても気にならないが、体力が落ちるのは、嫌だな。」

いつになく、カスターに攻撃的な言葉は投げかけなかった。

拍子抜けをしたカスターは考えあぐねて、レインのことを口にした。

「レイニーが痛々しく思えると、ジルが嘆いていましたけどね。」

「気に病むことなんてないさといっておいたが。」

「がむしゃらにがんばっているでしょう。」

「そうだな。ま、甘酸っぱい恋愛があつた年頃には丁度いいだろう。」

「クレアさんは、全然心配じゃないんですね。」

「レイニーのことか？」

「ええ、そうです。僕自身はその現場にいてたわけじゃないんですけどね。」

「まあ、エミリアにはエミリアの理由があつたことだろう。」

「クレアさんはわかっているんですね。」

「まあね。」

「僕自身……、エミリアと話す機会があつて、レイニーへの気持ちは聞けなかつたけど、思いは感じたんですよ。」

「わたしも彼女と話す機会があつて、核心には触れることはなかつたけど、なんとなくね。」

「でも、レイニーが不憫でしょ。」

「まあ、男は叩かれて成長するんだから、ほつとけばいい。」

それでわからないようなら、レイニーもそれだけの男。」

「はあ。」

「エミリアがかわいそうだから、というか思いつめないように、処方しておいたよ。」

「何をですか。」

「レイニーとジリアンには内緒だ。」

「はい。」

「エミリアに、レイニーの写真を渡しておいたんだよ。」

「はあ、そうですね。なんかエアジェットを写真に収めるカメラマンの話を書きましたけど、その際に。」

「ああ、レテシアにあげる写真で余分に焼きまわしてもらったよ。」

「なかなか、良いところがあるじゃないですか、クレアさん。」

「だから、処方したと言っただる。」

「思いつめるかあ、確かにエミリアは繊細な女の子って感じがしましたよ。」

「繊細さを気の強さで隠している感じだった。まず、レイニーにはまだ守れる力はないな。」

「そのうち、成長しますよ。」

「痛い目にあつてからのことだろうよ。」

外の空気を吸ってくるよ。」

クレアは、抱え込んで思案していたものを考え直すのをやめて、その場から立ち去った。

眺望台に足を運び、雲の上を飛行するSAFが太陽に近いことを知った。

太陽に手をかざして、自分自身に何ができるのだろうか、問答した。
(ダンの敵は討つつもりはない。自害したのだから。)

クレアのなかですつと、こころのなかにひっかかっていた、服毒自殺した義父ダンのことを思った。

(自害するような追い詰めたのは、誰だ。そして、いったい何が起

きていたというのだ。)

まぶしすぎる太陽を見ながら、自分をみうしなってしまうような恐怖感をクレアは追い払おうとした。

第十八章 太陽に近い場所 2

「ジョナサン、今、なんて言ったんだよ！」

「だ、だから、うっかりしてしまって、グリーンオイルの生産ができていないんだ。」

エンジンルームでアルバートがジョナサンの胸倉を掴んで殴りかかろうとしていた。

そばにはデイゴがいたが、止めたりしなかった。

「そのくらいにしておけ、アル。」

腕組みをして、グリーンオイルのタンクを眺めていた。

オイルゲージは空になりかけている。

「アル、悪いが、ロブに報告して、供給できるようにしてもらおうんだ。今は海上を飛行しているから、当分は供給場所がないと思うんだがな。」

アルはジョナサンの胸倉を離して、仕方なく、エンジンルームから出て行った。

「ジョナサン、生産担当のレイニーやジルが空挺救助に負われていてなかなかできないからというので、代わりに自分がすると名乗りをあげたんだよな。」

「ああ、そうだよ。すまないと思っているよ。ほんと、うっかりなんだ。」

「この空挺は水陸両用じゃないんだ。海上でエンジン止めて救助をまつなんてできないことくらいわかるよな。」

「ああ、もちろんだとも。」

「オイルを切らして、水没させるつもりだったのか。」

「いや、だから、デイゴ。僕が悪かったって。」

デイゴは、ジョナサンと向き合わずに譴責し、怒りを押さえ込んだ。ただただ、ジョナサンは謝るだけだった。

アルがロブに報告すると、ロブは頭を抱えながら、策を考えた。

「アル、どれくらい飛べると思う?」

「6時間くらいかな。」

「キヤス、6時間飛行で到着できる場所があるか。」

「ないね。供給場所は当分ないからって、ジルがジヨナサンに釘を刺していたのを僕は聞いたんだけどね。」

ロブはため息をつくしかできなかった。

「ロブ、オイルを分けてもらえる空挺を探してみないか。」

カスターの提案に、かすかに思い浮かべたのは、グリーンエメラルダ号だった。

要塞が出る際には、かなり遠くまで距離をつけられたようにジェフから聞いていたからだだった。

「何もしないよりはましだな。」

「じゃ、SOS発進しておくよ。」

「事前に海上管制センターを通過した際に得た情報によると、空挺の飛行で航路の申請が出ていないとのことだった。」

「まあ、それから、二日はたっているし、進展あるかもだよ。」

ロブは腕組みをして考え込んで、アルバートに言った。

「4時間後に、ジルを起してくれないか。」

「ジルを?」

「ああ、パジエロブルーを飛ばして、SOS発進の距離を遠くに届けるようにする。あるいは空挺を探し出してもらおう。」

「ジル、ひとりだけかな。」

「ああ、ジルだけで十分だろう。レイニーの体力はかなり消耗している。」

「たしかに、操縦桿も握れないくらいに空挺救助で奮闘していたからね。」

アルバートはそういうと、エンジンルームにいてるディゴに言ってくる、操縦室を出た。

「4時間後か。二人が睡眠を取り始めて1時間もたっていないんだ

けどな。」

「仕方ないだろう。S A Fが沈没する危機がせまっているんだから。」

ジェット気流を利用して上空を飛行してきたS A Fはオイル消費削減ができた。

雲海を渡り、陽が上るまで数分までになっていたが、周囲は暗闇に包まれてS A Fの現状を表しているかのようだった。

アルバートに起されて、状況と指示を聞いたジリアンは、レインを起さないように、用意を済ませて、パジエロブルーにスタンバイした。

状況を聞きつけ、クレアがパジエロブルーのそばに来た。

「ジル、睡眠を十分取れていないから、無理はするんじゃないよ。」

「わかってますよ。でも、探し出さないと沈没しちゃうんでしょ。」

「ああ、海上だと、どんな空挺に出くわすか、かわらない。攻撃でもされようものなら、ジル、逃げることだけ考えるんだ。」

「了解です。」

ジルはヘルメットを装着し、クレアが離れたのを確認すると、操縦席のドアを閉めた。

「リーダーには、なにもひっかからない。とにかく、北の方面に向かって、S O Sを発進してくれないか。」

ヘッドセットの通信からカスターの指示を聞いて、ジリアンはリーダーを確認し、S O S通信の準備をした。

「了解。発進準備完了。」

S A Fの後方より、降着装置のタラップが降り、フックをかけられたパジエロブルーが後ろ向きに降下していく。

「発進許可。」

「パジエロブルー発進します。」

フックがはずれ、パジエロブルーはS A Fから、落ちるようにして降下するが、数秒後にはロケットエンジンが噴射され、S A Fの下

をくぐるように飛行し、角度を変え、北向きに飛んで行った。

レインは日ごろの疲労がたまり睡眠薬を服用しているので、S A F が大きく揺れても、目が覚めることはなかった。

コーデイがクレアに頼まれて、レインが寝ているそばについていた。ジリアンから、レインがよくうなされている話をクレアが聞いていたからだった。

コーデイはこれからもレインになんらかの試練が与えられるのだろうかと、不憫に思いながら、寝顔を見ていた。

まだ、健やかに眠るレインは夢をみていた。繰り返し、同じ夢をみる。

レテシアの顔がはつきりとわからない幼い頃のこと。

そして、いつも、暗雲に見舞われ、泣き叫んでいた。

夢の中では近すぎて見えないレテシアの顔、現実では会うことすらできずに顔を確認できるのは写真だけ。

悪夢をみる度に、目の前にある事象を把握するのに精一杯で、先のことなど考えることが出来ないでいる自分を自覚していくことになるのだろう。

そして、その悪夢を見なくて済む方法があることに、レインは気が付いていない。

第十八章 太陽に近い場所 3

太陽が昇り始めて、雲がなくなった状態で、どこまでもつづく、水平線。

下を眺めると、海が見え、ところどころに小島があった。

人が住んでいるかどうかはわからない。

しかし、海賊が住み着いている可能性はある。

クレアの言っていた「どんな空挺に出くわすか」の理由は、小島に住み着いた海賊のことだった。

ジリアンはリーダーにS A Fが消えたのを確認すると、S O S発進をした。

救助することはあっても、救助される身になるとは、夢にも思っていなかった。

いつでも、危険と背中合わせなのは理解していたはずで、自分たちを起こる危険性には無頓着だったのかとジリアンは考えていた。

リーダーにはうつらないのに、ジリアンの肉眼には遠方に光るものが見えた。

リーダーにうつると、その機体はものすごいスピードでこちらに向かってくるのがわかった。

（海賊？敵なの？味方なの？）

少し冷静さを失ったジリアンだったが、すぐに相手に通信を求めた。

「スカイエンジェルフィッツシュ号のパジェロブルー、操縦士はジリアン。スタンドフィールドです。応答願います。」

ガツガツ、ガツ、スピー

相手には通信が届いているのだろうか、こちらにその返答がよく聞こえてこなかった。

（スピードが出ているからなのかな。）

リーダーや通信機をみていた目線を、その機体のほうに移したジリアンは、驚愕することとなる。

先が茶色で全体が黄色の機体は、回転しながら、こちらに向かってくる。

「風車飛行だ！」

ガツガツ、ガツ、スーピー

「こちら、グリーンエメラルダ号のひまわり、操縦士はレテシア」
ハートランド少尉です。SOS発進に返答します。」

「ヤッターっ！」

ジリアンは、雑音の中で聞こえる耳慣れない女性の声に、思わず歓喜の涙が出た。

「返答ありがとうございます、ハートランド少尉。」

エアジェットのみまわりはパジェロブルーに近づくと、回転飛行をやめ、垂直飛行して上空へと向かった。

「何があったのか、報せてください。」

「あ、はい。」

ジリアンは、涙をぬぐって、答えた。

「スカイエンジェルフィッシュ号は、ただいま供給のオイルが無くなってしまい、墜落の危機に陥っています。

オイルが切れるまで、約2時間です。」

「了解、グリーンエメラルダ号と接着できるよう、手配します。こちらは海上タンカーにグリーンオイルを届ける途上です。」

「ありがとうございます。」

「グリーンエメラルダ号の所在地を報せます。そちらのスカイエンジェルフィッシュ号の位置を報せてください。」

「了解しました。」

安堵で胸をなでおろし、ジリアンは深く息を吸った。
その音が通信に漏れた。

「ジリアン、大変だったわね。もう大丈夫よ。」

レテシアの声に、ジリアンは照れ笑いを浮かべた。

「あ、はい。」

S A Fのグリーンオイルが切れてしまう前に、グリーンエメラルダ

号どれくらいまで接近できるか、計算の上、接地点を決めた。

「位置を確認しました。S A Fに報せるために、近い地点まで戻ります。」

「了解です。こちらもグリーンエメラルダ号に連絡します。この危機を乗り越えられるように、幸運を祈ります。」

「ありがとうございます。少尉。」

「レテシアでいいわよ、ジル。また、あなたに会えて嬉しいわ。」

「いえ、そういうわけには。また、後ほど。」

「了解。」

旋回して、北方向から戻っていく機体を眺めていたジリアンだったが、我に返って、自分も旋回してS A Fに報せなくてはいけなかった。

アクロバット飛行をするうえでは、操縦士はふたりいるはずだが、あの様子では、一人でしか搭乗していないとジリアンは思った。

S A Fに連絡をいれると、ロブは手で頭を打ちつけた。

「やっぱりそうか。」

海上を飛行しているのが、グリーンエメラルダ号で良かったと思っべきなのだが、ロブの内心は落ち着かなかった。

問題は山積み。それを処理してこなかったばかりに、ここでいたい思いをするはめになったのだと肝を据えるしかなかった。

ジリアンに行かせたのが良かったのかどうかと思索しながら、クレアやデイゴに報告を入れた。

「やっぱりそうか。」

クレアも同じ事を口にした。クレアはロブと違って、ジョナサンの行為がなにか計画的なものに感じていたので、「やっぱりそうか。」という言葉になった。

ジェフから聞いていた、嫉妬している話に、少しばかり気が引けている。

（会つか、会わないか。）

彼女のことだからと、言い聞かせながら、この場合はレインのこと以外で時間を割くことはないだろうと考えていた。

ただ、グリーンオイルを空にする計画なら、今までに何回も可能だったはず。なぜ、今なんだろう。

海上というのがポイントなら、いちかばちかの救出ではなく、あきらかに、なにか狙っている節があるなどジョナサンを疑ってみた。考えることが多すぎると思いながら、自分らしくないと言いつつ聞かせて、レインを起こしに行くことにした。

レインを起こしにきたのは、クレアだけでなくカスターもだった。

寝ぼけた調子に、なにかうわごとのように言う。

「ママ、ママは？」

コーデイに理由を聞いても、うなされた様子はなかったと言う。

「下手な話し方したんだじゃないだろうね、キャス。」

「いや、とんでもない。グリーンエメラルダ号が来るよって言ったんだ。」

クレアは頭を抱えた。

(ダイレクトすぎる。)

クレアは、ベッドに座り込み、レインを抱きしめた。

「君はいま、いくつかな。」

「え、僕？何歳だろう。」

レインは目を閉じて、クレアに抱きしめられながら眠ってしまった。

「だめだわ。覚醒できないのね。」

「睡眠薬の量は時間を考えて与えているからな。8時間設定だから、あと2時間は無理かもしれない。」

コーデイがレインの頭をささえ、クレアはレインを横に寝かせた。

「キャス、通信でジルの体調は大丈夫か、確認してほしい。ジルは睡眠薬を服用していないが、睡眠が足りていないのでね。」

「了解しました。」

「コーデイ、悪いが、アルに診療室に行くよう言ってほしい。」

「アルバートさんですか。」

「ああ、最近、あいつの調子も変でね。」

「わかりました。」

レインの寝顔に手を当てていたコーディは部屋を後にした。

レテシアがグリーンエメラルダ号に戻ると、艦長からタンカーに時間が遅れるとの報告をするよう指示をされ、ひまわりにひとり操縦士を乗せて、発進した。

ハートランド艦長自身は、ロブに対してなにも思っていない。ただ、幼かったレインがどれだけ成長しているのか確かめたい気持ちが強かった。

「あれから9年はたったのだろうか。あの坊主は泣き虫だったな。」艦長は、レインの幼い姿を思い浮かべていた。会いたい気持ちは確かにあるのに、レテシアの手前、その気持ちはおくびにも出さなかった。

第十八章 太陽に近い場所 4

ジリアンが、S A Fに詳細の報告を入れると、ロブから、旋回して待つよう指示された。

「キャスだけど、ジル、体調大丈夫かい？」

「うん、大丈夫。耳鳴りがしないから、体調が悪いというのはないと思う。気圧に順応できてるよ。」

「了解した。では指示に従って、飛行してくれ。」

目を閉じてジリアンは、記憶に残ったレテシアの声を反響させていた。自分自身がレインになったかのように、レテシアを感じようとしていた。

レインが持っている写真でしか、顔がわからない。会ったことがあるという人は変わらないという。

エアジェットの名のごとく、回転飛行する様子はひまわりにしか見えなかった。

驚きと感動が渦巻いて、めまいがしそうだった。

レインより先に、味わってすこし後ろめたさを感じた。

接地点を確認しあつて、グリーンエメラルダ号は速度を速めて、S A Fに接近してきた。

胃が痛くなる思いがしてきたロブにデイゴが後ろから肩を叩いた。

「まあ、そう肩肘張るなよ。相手は鬼じゃないんだから。」

「俺が怖がつているとも思っているのか。」

「強がつているとは思わないけど、さあな。どっちを怖がつているのか。」

心の中を見透かされているのは、長年の付き合いからだろうか。ロブが明らかに怖がつているのは、レテシアのほうだ。

艦長の方は怒りをぶつけられるのなら、それは耐えればいいことだけ。

レテシアには何をされても抵抗もできないし、反論もできない。

かえって失ってしまふ怖さを感じているということまではロブには理解していなかった。

もう、失っていると思っっているからかもしれないが。

クレアも悩んでいた。明らかに怖がっているのは、レテシアのことだと理解していた。

クレアのなかで、たどり着いている答えにレテシアが欠かせない。

それを確かめてしまうのが怖いのだ。

ある仮定があつて、その証拠固めが揃っていて、あとは確かめるだけだ。

レテシアがどう思っているかはすでに知っている。

（会つて確かめて、計画をしなおすのが先決だろう。）

自分らしくないと言ひ聞かせながら、前に進めないでいる自分に気がついていて、それを理解していた。

ロブと同じく、レテシアを失いたくない、完全に。

レテシアは、胸の中にいつも忍ばせておいたレインの写真を見入っていた。

操縦はもうひとりの操縦士に任せておいて、レインとの再開をお預けされたことを悲しまないように努力しようとした。

楽しみは最後に取つておくほうが良いというのが艦長の口癖。

自分はせっかちだからできないでいたと。

「そんなに急に大人にならなくていい。

ママを置いていったりしないで。

一緒に過ごせなかったけど、同じ目線で生きていきたい。

いつも、青い空を見つめてきた。

レインの目にもこの青い空が映っていると思えばこそ、生きてこれたんだもの。

そう、だから、大人にならないで。ママと一緒にいてほしい。」

会えない辛さを乗り越えて、我慢してきたのは、何のためなのだったか。

レテシアにはゆるぎない気持ちがあった。
そのため生きてきたし、がんばってきた。
誰かに褒められたいとか、慰めてほしいって思ったわけじゃない。
愛しているからこそ、その気持ちは変わらない。
それがレテシアの心情だった。

レインはうつろな目でアルバートを見ていた。
アルバートはレインの唇に自分の唇を近づけようとしていた。
レインは一気に目が覚めた。

「アル！」

クレアがレインの叫び声に振り返って、状況が飲み込めた。

「眠り姫には口付けで目が覚めるんだけど。」

レインは真つ赤な顔をし、両手でアルバートの肩を押さえこんだ。

「アル、からかうのもそれくらいにしなさいな。今度はあんたが眠りに付く番だ。」

「はあ〜い。」

レインは周囲をみてキョロキョロしていた。

「あれ、僕、自分のベッドで寝てなかったかな。」

「診療室こしちに移動させたよ。睡眠薬の量がおかしかったら、覚醒させるのに、薬を調合しないといけないのでね。」

「え、覚醒って、僕、目が覚めないでいたの？」

「まあ、こっちの都合だけだね。」

「都合？」

「ああ、S A Fにトラブルが起きて、救助を求めたんだ。そして、グリーンエメラルダ号がこっちに向かっている。」

レインはしばらく考えて、クレアの言葉を噛み砕こうとした。

「ええええええええ！」

気持ちを言葉にできないでいた。

アルバートはレインをベッドから突き飛ばした。

「痛いよ、アル。」

「今度は僕が寝る番なの。レインはどかなくちゃ。」

クレアはアルバートの睡眠薬を調合していた。

「え、クレアさん、それって、あのぉ・・・。」

「言葉にできないのなら、代わりに言っただけよ。レテシアに会えるんだ。」

レインの目から涙がこぼれた。

「まあ、いますぐじゃないんだけど。」

「え、どうしてですか。」

「グリーンエメラルダ号の行程が決まっているから、その変更連絡に行っている。もどってくるのに時間はかからないだろうけど、グリーンエメラルダ号と接着してからだいぶ後になりそうだな。」

レインはその場でへたり込んだ。

「なんか、意地悪されてるみたいだな。」

レインが床に座り込んだところへ、アルバートがベッドでレインの背後から抱きついた。

「神様がいたのなら、それはそれは、レインに嫉妬して意地悪しているんだと思う。」

レインは頬を膨らませて拗ねて見せた。

「SAFクルーに告ぐ。グリーンエメラルダ号と接着します。大きく揺れるので、何かにつかまってくてください。」

カスターのアナウンスが流れた。

「さあて、ロブと艦長の会話が見ものだな。レイン、操縦室へ行っておいで。」

「あ、はい。」

「わたしも後で行くから。」

レインはクレアの言った意味に理解しかねた。

アルバートは「おやすみなさい。」とレインに言って、クレアが調合した薬を一飲みした。

第十八章 太陽に近い場所 5

「何年ぶりかな、小僧は大きくなったか。」

グリーンエメラルダ号のハートランド艦長は、接着後そう言って、挨拶した。

「あなたにとって、ここには小僧が何人もいると思いますがね。」
デイゴがカスターのヘッドセットを奪って、返答した。

「その声はデイゴだな。体がでかいばかりの男ではなくなっただろう。」

「ええ、そうですよ。俺もようやく一児の父親になりました。」

ご無沙汰してます。ハートランド艦長。このたびの要請にこたえてくださり感謝してます。」

その言葉を述べるのは、デイゴじゃなくてロブだろうと思いつながら、SAFを見つめていた。

スカイエンジェルフィッシュ号通称SAFは、グリーンエメラルダ号に接着した。

飛行しながらグリーンオイルを生産できる機能を持ち合わせたタンカーであるグリーンエメラルダ号は、機体の前半部分にタンクがあり、後半部分に空挺部分がある。

タンク部分の横脇にSAFは接着したかたちとなり、グリーンエメラルダ号の操縦室から、SAFの操縦室が斜め前方に見えていた。

「おやじさん、操縦室に子供が入っていったが、あれがレテシアの子だね。」

グリーンエメラルダ号の操縦室には艦長のほか、クルーがいて、レテシアにとって幼馴染のような存在であるルディ・アルドラー少尉が通信士と任務についていて、艦長の事をおやじさんと呼んでいた。

「レテシアにそっくりだと聞いていたが、俺の目は曇ってないな。」

「あはは、耄碌してもおかしくないが、その様子はないだろう。」

「いやあ、耄碌したなっと思うぞ。泣き虫小僧の顔が見たいと思う。」

なんてな。」

ルディは鼻で笑った。

自分の娘のようにかわいがってきたレテシアの子であるレインに会いたいと思うのは普通だろう。

それを口にしなかったのは、レテシアのためでもあった。

一番会いたがっているのはレテシアだとわかっているからだ。

「デイゴ、後を頼む。俺は給油の準備をしてくる。」

「ああ、給油なら、僕が行くよ。」

「逃げるなよ、ロブ。ここにいて、自分の責任を果たせよ。キャスと俺が行く。」

デイゴはヘッドセットをおいて、カスターを引っ張った。

「じゃ、僕がキャスの代わりをするよ。」

レインがカスターの席に着いた。

デイゴとカスターがいなくなつてから、ロブは後方をみつて、グリーンエメラルダ号の操縦室が見えるのを確かめた。

「レイン、ヘッドセットをつけながら、あっちのほうを向いて、立っているんだ。」

ロブは、グリーンエメラルダ号の操縦室の方を指差した。

「え、どうして?」

「いいから。」

レインはロブの言う事を理解できないままに、いわれたとおりにした。

向いた方向にグリーンエメラルダ号の操縦室が見えるのを理解した。そちらから、ルディが手を振っていた。

「おお。君がレテシアの子、レインかい。」

ヘッドセットから聞こえてくる声に驚きを隠せなかったが、レインは返答した。

「ええ、そうです。レインⅡスタンドフィールドです。どなたですか。」

「俺は、グリーンエメラルダ号の通信士で少尉のルディⅡアルドラ

「だ。話はいつもいろんなとこで聞いてたけど、噂どおりだな。」
その言葉で頭によぎったのは、レテシアと瓜二つという表現だった。
「君には一度あったことがあるんだ。赤ん坊のころだけだな。」

レインはただ、苦笑いするしかできなかった。

ルデイがスイッチを入れ替えた。

「坊主、いまでもよく泣くのか。」

低い声が聞こえてきて、レインはすこし怖がって驚いて見せた。

ロブは首をかしげながら、「最初の一言はそれかよ。」と独り言をつぶやいた。

「あの、僕は確かによく泣いてましたけど、今は大丈夫ですよ。」
精一杯に言った言葉だった。

「あはは、そうだな。あれから成長しなくちゃ、意味ないな。」

坊主、わたしがグリーンエメラルダ号の艦長、ジョセフ「ハートラ」
ンドだ。」

レインは操縦室を凝視した。

白い髭を蓄えて帽子に軍服姿の老人が立っているのが見えた。

ヘッドセットのスイッチを切って、レインは思ったことを口にした。

「艦長つて、ママの……。」

「叔父さんだ。お前にとつて、大叔父にあたる。」

レインは戸惑っていたが、言わなければいけないと思い出したように
スイッチを入れて、伝えた。

「給油要請にこたえていただき、ありがとうございます、ハートラ
ンド、か、かんちょう。」

言葉を噛んでしまい、ルデイの笑い声が響いているのを、恥ずかし
い思いでレインは聞いていた。

ロブは手を額に当てて、肩を落とした。

「緊張しなくてもいいぞ、小僧。たしかにわしは鬼艦長と恐れられ
たこともあったが、今は耄碌もろろくしていると言っていい。」

赤ん坊のお前を抱きかかえて泣き止まなかったのは当然のこのよ
うに今も思っているがな。」

他愛もない親族の会話に、ロブは胸をなでおろす思いがした。今、レテシアがいないことを少しだけ安堵した。

それも一瞬のことだということがわかっていてもだ。

レインは艦長と会話をつづけながら、通信機の席にもどった。

ジリアンは、SAFとグリーンエメラルダ号のそばを旋回していた。前方にきらりと光るものをみて、リーダーを確認した。

まだ、リーダーにうつらない飛行物体に、ジリアンはレテシアが乗るひまわりだと直感した。

ただ、レインにそのことを伝えるべきかそうでないかと悩んでいたが、リーダーにうつるとレインがそれに気が付いた。

「機体が一機、こちらに向かっています。」

ロブは直感的にレテシアだとわかっていた。

ジリアンがひまわりが向かってくる方向に旋回をやめて待機していると、回転飛行しているのがわかった。

「また、やってる。」

レインもロブも自分たちがみているものを疑って、目を擦った。

その様子をグリーンエメラルダ号の操縦室でも良く見えていて、ルディは大笑いした。

「回転飛行だ！」

レインは叫んだ。

レテシアが乗る機体の様子がひまわりのように見えてレインは感動していた。

ものすごいスピードで近づいてきて、衝突するのではないかと思えるほどだった。

レインはただただ驚きと感動で思考できないくらいに制止して凝視していた。

ロブはただ驚愕して恐怖していく自分を抑えきれなくなるのを感じていた。

ひまわりを操縦しているのはレテシアで、回転飛行しながら、SAFに向かっていき、操縦室に衝突しそうな勢いだった。

寸前で操縦桿を力いっぱい引き、垂直飛行で上空を目指した。

レインは口を大きく開けて、立ち尽くしていた。

ロブは度肝を抜かれて、腰を抜かし、尻餅をついた。

ロブの間抜けな様子にレインは動じることをしなかった。

その様子がグリーンエメラルダ号の操縦室にも見えていて、ルデイは笑い転げていた。

艦長はスイッチを入れ替えて、レテシアに伝えた。

「ロブと一緒にいる少年がレインだ。」

「わかつているわよ、艦長。」

「あはは、ロブの様子って何だよ。お腹が痛い。」

「ルデイ、笑いすぎよ。」

「そうさせたのは、レテシアだろ。」

3人の会話に、ツツコミが入った。

「艦長！いい加減、じゃじゃ馬娘に危険な飛行させないようにしつぱに躡るべきじゃないのか！」

ロブがやっとの思いで立ち上がって、言えたことだった。

「まったく、それはゴメスの口癖じゃないか。」

艦長はつぶやいた。

第十八章 太陽に近い場所 6

カスターは通信機に細工をしていた。

通信している内容が空挺内に聞こえるようにしていたのだ。

レインとロボの様子が、みんなに聞こえていた。

カスターはデイゴとふたりで、パイプを取り出していた。

グリーンエメラルダ号でもパイプを持って待機している者がいた。

「よう、おめえ、デイゴか。」

「ああ、そっちはグレンか。やけに年取ったな。」

「あはは、体壊しちまったからな。」

カスターがパイプの中間地点で支えて、デイゴがパイプの口を抱えて、グリーンエメラルダ号に乗った。

グレンがもつパイプの口鉦を合わせて、グレンが片手を上げると、パイプがうねりだした。

カスターは自分がいた場所から下がって、パイプの出ている場所に行った。

そこにはカウントするものがあって、数字が拳がっていく様子を確認していた。

「なにも変わっちゃいねえな。赤ん坊が大きくなったくらいか。」

グレンが眼鏡をいじりながら、デイゴに話しかけた。

「そうだなあ。あんたたちが思っている通り、ロボは頑なに拒んでやがる。」

「ゴメスのおやっさん譲りか。口も悪かったよな。」

「艦長ほどじゃないだろう。よくレテシアのような娘が素直に育ったと思っっているくらいだ。」

「あはは、お互い様だな。まったく。」

「あの二人には、やきもきさせられちまったな。ルディなんて振り回されてばかりで、いまでも、一人身だぜ。」

「スカイロードの同級生だったジェフは、妻子持ちになったらしい

がな。」

「おお、ジェフな。まったく、男はロブだけじゃないのにな。」
カスターは影になった場所で二人の会話を聞いていた。

照りつく太陽のもと、デイゴとグレンの肌が黒々しているのを見ていて、健康そうだなと思っていた。

カスター自身、レテシアに会いたいなと思ってはいたが、果たして会って何か変わるのだろうかと思いつつ、ロブをからかうネタにか思っていないかった頃よりずいぶんと気持ちが変わってしまったことに気が付いた。

エアジェット音が近くで響くので、カスターは上を見上げたが、太陽の光でばやけていてよく見えなかった。

S A Fの真上、ひまわりが通過する時、操縦席から人が飛び出していた。

レインはヘッドセットの線を引きちぎって、グリーンエメラルダ号の方へ寄っていった。

操縦室のガラス張りにへばりついて、その様子を見ていた。

「うそだろう！」

ロブの叫び声が、S A F空挺内に響いた。

ジリアンは、旋回し、その様子をパジェロブルーの操縦席越しに見ていた。

両手を左右水平に伸ばし、T字の姿でエアジェットをジャンプして頭を下に降下するレテシアの様子を、ハートランド艦長が見えてないはずはない。

「馬鹿か。」

そのつぶやきを聞き逃さなかったルディは、レテシアをかばうような言い訳を考えようとしていた。

グリーンオイルを供給しているデイゴたちがいる上に鉄棒が張り巡らしてあり、その上にレテシアが降下していくと、左右水平から両手を合わせて、鉄棒を握り締めて一回転し、鉄棒を離して、甲板に着地した。

カスターは鉄棒に掴まるあたりから、エアジェットから人が落ちてきたのだと理解したと同時に、驚愕していた。

デイゴはレテシアが甲板にジャンプしてきたようにしか見えなかった。

「よう、レテシア。」

「あら、デイゴ。久しぶり。」

ヘルメットを取って、笑顔で手を振って挨拶をした。

グレンはレテシアが何をしたのか、わかっていた。

「また、おやつさんに怒鳴られるぞ。」

「もう、怒鳴られたりしないもの。」

「おお、そういや、レテシアはエアジェットでどこかに行っていたんだな。エアジェットから着地してきたのか。」

「そうよ。」

悪びれもなくそう言っただけのレテシアの姿をカスターは口を開けたまま、見入っていた。

短い茶髪が風になびいているが、太陽の光を浴びてキラキラと輝いているようにみえ、その様子は太陽を手中に納めて輝く女神のように思えた。

首をかしげて、カスターをみるレテシアの視線を感じて、デイゴが紹介した。

「ああ、カスター、説明の必要がない、彼女がレテシアだ。レテシア、あの男はスカイエンジェルフィッシュ号の通信士カスターⅡペ

ドロだ。」

「おい、いつまで馬鹿面ばかめんしているんだ。」

グレンが突っ込みをいれても、反応する様子もなかった。

「聞いているわよ。レインやジルの面倒をみてくれるって。息子がお世話になってます。」

その言葉にやっと我に返ったカスターは、後ろを振り返り、メーターの数字をみた。

「デイゴ、もうすぐフルだ。」

「よし、もういいだろ。グレン止めてくれ。」

「了解。」

グレンは後方をみて、給油の栓に立つクルーに合図を送って、止めさせた。

カスターはあわてて、通信機を取り出し、レインたちに降りてくるように言った。

ロブは、手元の通信機にスイッチを入れて、ジリアンに帰還するよう指示をした。

カスターの声が聞こえておらず、レインはただただ、レテシアの方をみつめるばかりで動かなかった。

「レイン、降りていくといい。レテシアが待っている。」

ロブは後ろからレインの肩を抱き、促した。

レインは振り向いて、ロブに後ろめたさを感じていたが、ロブは黙ってうなづいた。

「行っておいで。」

レインが満面の笑みを浮かべると、心が痛くなるのを感じていたが、操縦室から走り去る姿をみて、切なさをこらえた。

第十八章 太陽に近い場所 7

クレアが操縦室に向かうと同時に、レインとすれ違った。

「クレアさん、僕、下に行つてきます。ママに会いに。」

「ああ、行つておいで、後から行くから。」

「はい。」

レインの笑顔をみて、クレアはこころが満たされていくのを感じた。操縦室に入ると、グリーンエメラルダ号がみえるガラス窓を背にもたれて、うなだれているロボの姿が目に入った。

「相も変わらない様子で、何よりだな。」

「変わらないつてことが良いことなのですか、クレアさん。」

「こころが痛むか。あの頃と変わらないレテシアにあわせる顔がないのか。」

お前はちつとも成長してない。それでどうやってレインが成長できるといふんだよ。」

ロボは顔を上に向け、右腕で目頭を押さえた。

「あのさ、上級生が下級生を説教しているんじゃないんだから。」

クレアは息を深く吸った。

「レテシアに、会つて来いよ！この馬鹿野郎！！」

それでも動こうとしないロボは、左手で胸を押さえた。

「会いたくないわけじゃない。」

「じゃ、言つてやるよ！まだ、愛されている事を知りたくないんだろつ。」

自分がひどいことしたのに、レテシアは……。」

「それ、以上言わないでください、クレアさん。」

「情けないな。女の愛し方を教えなかったゴメスのおやつさんを恨むしかないのか。」

「そ、そんな言い方。」

「オンナつていう生き物は、惚れたオトコのためなら、何でもした

いって。それはどんなことでもだよ。

後悔しない、いまのうちに、会っておくんだ。これ以上は言わないから。」

クレアは操縦室の入り口に立ったまま話をしていて、後ろを振り返った。

クレアは足音を鳴らしながら、そして、壁を拳で叩き込んでいなくなった。

ロブはビクツと身構えたが、右腕を振り払って、背を滑らせて、座り込んだ。

「俺のやったことが間違っているって認めたくないんだ。オトコなんて、嫌な生き物だって、あなたが一番わかっているでしょう、クレアさん。」

ジリアンは、帰還するとき、レテシアが乗っていたひまわりを誰が操縦していたのだろうと気にしていた。

自分で操縦する分には回転飛行だと酔うことはないと思ったが、操縦しない場合の同乗ではかなり悪酔いするのではないかと思ったからだ。

いつかきつと、レインがレテシアのように回転飛行をしたいと言い出すに違いないとジリアンは考えていた。

どこまで制止することができるだろうか。自分自身が出来ないといえ、レインは諦めるだろうか。

ロブが許さないだろうと考えながら、ジリアンは、カスターたちがいるところへ向かった。

レインがカスターの横に立つと、その後ろにジリアンが間に合った。レテシアは、歓喜の気持ちを抑えこんで、屈託のない笑顔で首をかき上げて、レインを見つめていた。

「レインなのね。会いたかったわ。わたしがレテシアよ。」

両手を広げて、レインが来るのを待っていたが、レインは行かなかった。

その様子を寂しく思ったが、羽が生えたように、軽くジャンプをして、レインに近づいた。

レインの驚いている姿を確認しないままに、レテシアはレインを抱きしめた。

「もう、恥ずかしがり屋さんはパパにそっくりね。」

レテシアは涙をこらえて、唇を噛んだ。

ジリアンはレテシアの顔を真正面みえていたので、唇を噛む様子が理解できた。

レテシアはレインを抱きしめたあと、ジリアンを見つめて、レインを抱いていたのを離し、ジリアンを抱きしめた。

「ジル、こんなに大きくなって、フレッドが見たらなんて言ったでしょう。」

ジリアンはレテシアに抱きしめられるとは想像もしてなかったので、驚いていた。

レイン自身も、すぐ離されるとは思っていなかったなので、驚いていた。

レテシアはジリアンの顔を間近でみるようにしてみつめて、涙をこぼした。

その様子を見られないように、ジリアンとレインを抱き寄せて、両手で二人を抱きしめた。

顔をうつむかせて、涙をこぼしきってしまおうとしていた。

「泣いてもいいんだよ、レテシア。」

その声に聞き覚えがあつて、レテシアは顔を上げた。

そこに、クレアが立っていた。

「待ち望んだ、子の対面だろ。誰が非難するんだよ。」

「ク、クレアさん。」

目から大粒の涙がこぼれ、鼻水も出てきた。

レテシアがジリアンとレインを離して、クレアに近づこうとすると、クレアはポケットからティッシュを取り出し、レテシアの鼻を拭いた。

「いつまでも、変わらないな。大きな子供みたいだ。」

「嫌だわ、クレアさん。わたしはもう三十……。」

「それ以上は言わない。」

クレアはレテシアの口に手を当てて塞いだ。

クレアはレテシアの頬を両手で押さえ込み、接吻をした。

驚いたのはレテシアばかりでなく、周囲にいてその光景をみたものがそうだった。

「えええええ！！！」

クレアは唇をレテシアの唇から離すと、耳元にもっていき囁いた。

「わたしに何かあったら、レインとジリアンを頼むよ。ロブじゃ面倒見切れない。」

クレアがレテシアに接吻したのは、気持ちを切り替えさせて囁いた言葉を受け入れさせるためだった。

その言葉にレテシアは驚いたが、クレアの顔が笑顔なので、聞いた内容を周囲に悟られないように、レテシアは照れて見せた。

「嫌だわ、クレアさんったら。接吻はお休みの時の挨拶だけなのに。」

「そう言いながらも、レテシアはクレアの言った言葉を理解しかねていた。」

そして、思った。

（死を覚悟しているというの？なぜ？）

「じゃ、今宵の眠りが深いことを願っての挨拶としておこう、では、かわいいあたしのレテシア。」

クレアはレテシアのおでこにキスをして、去っていった。

カスターはマイクを握ったままだった。

それを見ていたレテシアは、カスターのところまで来て、マイクを取り上げた。

「ねえ、貸してちょうだい。」

たじろぐカスターを横目でウイंकをして、マイクを手にして息を深く吸い込んだ。

「こらあ、ロブ！わたしに会いに来なさいよ！」

父親が恥ずかしがり屋さんだなんて、通じないんだからあゝ。」

操縦室で聞いていたロブは上を見上げて目を閉じた。

（勘弁してくれよ。）

レインとジリアンは口をあけたまま、その様子を見ていた。

デイゴやグレンは、「やれやれ。」とつぶやいて、パイプを収納しはじめた。

「ねえ、聞いているんでしょ！ロブ、こっちにいらっしやい。」

（冗談じゃないぞ。）

「ロブったら、もう、承知しないんだから。」

会える機会にあつておかないと、後悔しちゃうわよ。」

（なに、クレアさんと同じこと言ってるんだよ。）

コーデイが操縦室の入り口に立ち、しゃがみこんでいるロブを発見した。

「下に行かないのですか、ロブさん。」

「行かないよ。」

「会いたくないのですか。」

「ああ、会いたくないね。」

「レインさんのためにも、会ったほうがいいと思うんですけど。」
「さあなあ。お互いのためだ。」

コーディは首をかしげた。

「余計なことを言っつてすみませんでした。」

ロブは手を上げて振ってみせた。

「駄々こねてないで、出て来なさい。」

レテシアの様子にジリアンは呆れはじめていた。

レインはいてもたってもいられない状態になり、レテシアのマイクを取り上げて、言った。

「え、なに？」

「もう、降りてこないよ。ママ、僕に会えただけじゃだめなの？」
真顔で言うレインの目を見ていてすこし心が痛くなった。

「はじめをつけたいだけ。ロブは、パパは、誤解しているのよ。」

「誤解で、別れてしまったの？」

レテシアは再度レインを抱きしめた。

「ごめんなさい。誤解を解くために努力するべきだったんだけど、できなくて、あなたには辛い思いをさせてしまったわ。」

「辛いことは忘れてしまったみたい。ママとの思い出がない分、いまから作ればいいかなって思うんだ。」

「ええ、だから、ロブとあなたと、できたらジリアンと4人で、これからのことを考えていきたいの。」

レインが驚いてジリアンを見ると、ジリアンは戸惑っていた。

自分自身がロブの事を父親と思えない現状、家族として一緒に過ごすことなんて、すぐには無理だと考えた。

「今は無理だよ。僕は、その、父親だと知って、まだ、父親と思っ
てないんだもの。」

「今から努力していくの。ママだって、すぐには言わない。その話を少しでもしたいのよ。」

グリーンエメラルダ号から、サイレンが鳴り響いた。

「タイムオーバーみたいだな。おやっさんがしびれを切らしたみた

いだ。」

グレンが言うと、レテシアがすこし睨んでみせた。たしかに、艦長にはロブと交渉するよう時間がほしいと頼み込んでいた。

艦長にとってはレテシアは娘のようにかわいがっていて手放したくはないが、それでは幸せになれないことは感じていた。

「仕方ないわね。」

萎れた花のように、みるみるくすんでいくレテシアの顔を見て、レインはすこし悲しくなった。

レインが場とりつくろうのに、握っていたマイクをカスターに返した。

レテシアはその様子を見て、カスターに近づき、肩を軽く抱いて、耳元に囁いた。

「ロブのことをよろしくね。そばにいられるのはあなたしかいないと思うの。」

レテシアはカスターの肩を離し、微笑んで手を振った。

カスターはレテシアが触れてきたことに感動したと同時に、思った。

(胸が、胸が、当たってる感触が……)

レテシアは、また、羽が生えたように、軽々と、飛びはねるように移動し、レインとジリアンのそれぞれの頬にキスをして、グリーンエメラルダ号へ戻っていった。

「デイゴ、ジゼルによろしく伝えてねえ。」

「ああ。」

「レイン、ジリアン、またの機会にゆっくりとお話しましょう。楽しみに待っているわあ。」

グレンに腕をとられて、名残惜しそうにレテシアはレインたちを見ていた。

その様子を合図に、グリーンエメラルダ号はSAFとの接着を解いた。

ガッシャー

次第にS A Fは離れていく。

レインは涙をこぼし始めた。

レテシアはずっと、手を振っている。

ジリアンは小さく手を振っていた。

S A Fの眺望台には、ジョナサンが立っていた。

サイレンがなったと同時にロブが操縦し、通信で、ハートランド艦長に礼を言った。

だが、艦長は無言だったので、ルデイが返事をした。

ロブはため息をついた。

カスターは、レテシアに肩を抱かれたことの余韻が体中に残っていた。

ジリアンがカスターのおかしな様子に、変な病気がまた出たのかなと思いつながら、カスターとレインになかに入るよう促した。

レインは涙を拭って、中に入っていた。

S A Fがグリーンエメラルダ号から次第に離れていくと、高度を下げていった。

レテシアはレインたちが中に入りきるまで、手を振っていた。

「いい加減にしなよ、レテシア。もういなくなっちゃったぜ。」

グレンが中にもどるよう促したが、レテシアは動こうとしなかった。S A Fが降下していくうちに、S A Fの眺望台にいるジョナサンが

レテシアの視界に入ってきた。

グレンはあきれてレテシアの腕を離し、中に入っていた。

レテシアはそばにある鉄棒を握り締めて、ジョナサンをみていた。

クレアに言われた事を話そうか話さないでおこうかと悩んでいた。

ジョナサンが口を動かしているのを見て、レテシアは唇読術でジョ

ナサンが声にしない言葉を理解した。

「気に病むなよ、機会はいくらでもある。レインのことは俺に任しておけ。」

レテシアはその言葉に安心したものの、深く考えて身震いした。

（クレアさんが、レインとジリアンを頼むって言ったのは、ロブだ

けじゃなくてS A Fのクルーにも頼めないってことなのかしら。)
死を意識しているのかと思いついてたかもしれないと安堵した
が、ジョナサンのことは信用してないのかもしれないとも考えた。
レテシアはジョナサンに疑われないように、声にしない言葉を発し
た。

「ロブのこと頼まれてほしいわ。」

レテシアは手を大きく振った。

ジョナサンは目の奥をギラギラと光らせたが、口元はニヤ着いてい
た。

その様子をレテシアはちゃんと見えていなかった。

クレアが診療室にもどると、アルバートは熟睡していた。

コーデイが操縦室から戻ってきて言った。

「クレアさんが思っていた通り、レテシアさんと同乗していたのは
白髪の女性です。」

女性というか少女です。操縦室から確認してみました。」

「ありがとう、コーデイ。」

「眺望台に行こうとしたんですけど、先客がいたので。」

「誰なんだ。」

「ジョナサンさんです。」

「そうか。」

クレアは腕組みをして考え込んだ。

これで核心がつかめた。

レテシアは何も知らない。知っていれば、反抗したに違いない。
ただ、白髪の少女も、レテシアの味方かどうかわからない。

「どうするのですか。レテシアさんに報せるのですか。」

「報せれば、あの子の命が危なくなるかもしれない。ある意味、人
質扱いかもしれないな。」

「そんな。」

「下手に動けばの話だが……。」

「下手に？」

「レインと皇女殿下を襲ったのが白髪の少女なら、レテシアと皇帝を敵に回すつもりで脅している可能性もあるが。」

「まあ。」

「うーん。」

クレアは考え込みながら、アルバートの寝姿を見ていた。

「コーディ。」

「はい？」

「もし、わたしになにかあったら……。」

「え？なにをおっしゃるんですか。」

「もしもの話。いや、君なら、冷静に行動してくれるだろう。」

「クレアさんがそうおっしゃるのなら、あなたを信じて、行動します。」

「信じてほしい、コーディ。わたしになにかあったら、身を隠して、恋人のウインディに保護してもらって欲しい。」

「ウインディ先生にですか。」

「そうだ。」

「わかりました。そのようなことが起きないように祈りますが、そうなった場合、おっしゃるとおりにします。」

「頼む。ウインディのことが心配じゃないんだ。君の身が心配だし、情報を保持してほしい。」

「承知しています。」

クレアは両手を握り締めて、口元に当てた。

（レテシアは白髪の少女に気を許しているだろう。中身なんて知りもしないだろう。）

白髪の少女がどう思っているかだが、おそらくは……。）

雲海の地平線に沈む夕日を眺望台でロブは見ていた。

太陽のようなレテシアがあまりにまぶしくて、表に出られなかった。近づきすぎると、身を焦がしてしまふ。

重力がないかのように自由自在にあやつり飛ぶ姿は、神々しくて見
つめてもらえない。
ロブは、愛し愛されて、満ち足りていた日々を思い返していた。

第十九章 雷雨の思い出 1

レインが幼い頃、スタンドフィールドドックは、ゴメスが病死してこの世を去っていたが、フレッドとロボのふたりがドックをまとめあげて活気に満ちていた。

フレッドは年配者に一目置いて接しているため、ゴメスがいてのと変わらずに、人々が作業をしていた。

食堂では賑やかな声が響いていた。

じっとしていられないレインに食事をさせようとロボが悪戦苦闘していたからだ。

キャツキャツキャツと、叫び声をあげて、ロボを振り回しながら、レインは椅子に座ろうとしない。

ロボはロボで、言うことをきかないレインに腹を立てることなく、逃げ回っているレインを捕まえようとしている事を楽しんでいるかのようだった。

「捕まえたぞ。この悪がき。」

ロボは嬉しそうにレインを抱きしめて、剃っていないあごひげをレインの頬にこすりつけた。

「パパ、痛いよお、おひげ、痛い。」

そのひげが当たる痛みも痒い程度で、抱きしめられて頼ずりされているのを嬉しがっていた。

「悪がきはお前も同じだろうが。」

フレッドが大きなあくびをして、ジリアンを抱いてあらわれた。

本来なら、マーサがジリアンの育児に携わっているのだが、マーサは朝食の支度で忙しいので、フレッドが代わりにジリアンの面倒をみていた。

ジリアンは生まれてすぐ、実母のセシリアからマーサの手に委ねられた。ゴメスがセシリアにフレッドの子を生んでもいい条件が、ゴメスとマーサの子として育てることだったからだ。

セシリアの素性を考えての結論だった。

セシリアは自分で産んだ子が人の手で育てられることに違和感はなかった。第一子を生んでも抱くことさえできなかったことより、ジリアンを生んでよかったのだとこの頃は思っていた。

ロブとレテシアの仲の良さを恨めしく思っていて、不満を抱えていた日常だったが、今はフレッドの子とはいえ、金髪で青い目の子を生んだことに満足していた。

また、レテシアが軍に入隊しホーネット隊に所属してドックにいないことがセシリアをさらに満足させていた。

ドックで家政婦のように働いているのは、行く場所がないことと、働かないものはドックにはいられないからだだったが、オンナとしての幸せを感じていてセシリアは進んで家事をしていた。

厨房では、マーサとセシリアが忙しく調理をしていたが、食堂から聞こえてくる賑やかな声を聴きながら、こころを和ませながら、幸せを噛み締めていた。

一方、レテシアは、念願のホーネット隊に所属して、最新のエアジェットを操縦できて満足はしていた。

しかし、休みの日にしかレインに会えない状態で悲嘆にくれていた。離れていても、お互いの気持ちは変わらないと、ロブと話し合って入隊を決めた。

レインを出産してしばらくエアジェットに乗れなくて、陸に上がった魚のように元気をなくしていたレテシアをみてロブがこっそりエアジェットにのせて、ドック周辺を飛行したりした。

そのことをきっかけに、ホーネット隊に入隊したいと思うようになり、ゴメスが亡くなったところにレテシアは入隊した。

しかし、入隊してから次第に入隊したこの意味を見失い、レインと離れて生活する状態に嫌気が差していた。

一方、ホーネットへの入隊は皇帝が奨めてのことだったが、メンバーたちも、依存はなかった。

なぜなら、スカイロードでの実績があり、事故が起きた後休学したものの、卒業をして、レインを出産し、入隊試験に合格していたからだ。

紅一点ながらも、臆することなく、整備も訓練も確実に正確にこなして、欠点といえば、空気が読めない天然的な行動力だけだった。

レテシアは自分の気持ちが高ーネットに向かっていることを周囲にわからないように振舞っていた。

皇帝にエアジエットのメンバーとして寵愛されていることもあって、精錬気鋭にがんばっていくしかないと考えてはいた。

いつかは結論を出す時が来るだろうと、安易に考えていたレテシアだったが、無防備だったために、妊娠していることに気が付いていなかった。

気が付いた時には、すでに3ヶ月でつわりが酷くなりかけていた。

隊長であるテオ大尉には、相談せずに退役することを告げた。

ロブとレインのところへもどり、3人で仲良く暮すことを決意したレテシアだったが、誰にも相談せず、ロブにも言わず、退役をきめたことは後に災いを招いた。

ホーネット隊のメンバーはレテシアを去るのを惜しんだし、皇帝は強く反対したが、レテシアの気持ちは変わらなかった。

レテシアがロブに言わなかったのは、驚かせようと思ったことと、喜ばせようと思ったこととからだった。

しかし、それは安易な考えで、返ってロブの考えを固執させてしまい、不幸を招いた。

それは退役が決まっていた日。

ホーネットの機体でドックに周遊してきていいという許可があった。嬉しくてレテシアは、ホーネットの機体をレインに見せたくて、予報では雷雨になるというのに、基地からドックまでエアジエットで飛行した。

ドックにたどり着くと、ロブや他のメンバーもおらず、レインが喜

び勇んで迎えに出てきたくらいだった。

「ママ、ママ、どうしたのぉ。今日はお休みの日じゃないよね。僕、嬉しいけどさ。」

「パパは？」

「あのね、お出かけしたの。フレッドおじさんとマーサおばさんと、うんとね、うんとね。」

レインは小さい指を折り曲げて、レテシアに話していた。

首をかしげて、困り顔のレテシアに、セシリアが近寄ってきた。

「あら、レテシア、今日はまた、どうしたの？軍のエアジェットだし、軍服のままじゃない。」

「セシル。ええ、隊長の許可でドックに行っていていいって。レインにホーネットの機体を見せたくて。」

何度も着岸許可を求めただけだ。」

「町で大規模な火災が起きたらしいの。男手はみなではらって、マーサはジゼルと一緒に炊き出しに出たのよ。」

わたしはお留守番なの。小さい子がいるでしょ。」

「ええ、そうね。大変なことになったわね。でも、どうしようかしら。」

レテシアの困った顔を見て、セシリアは考えて、意地悪なことを思いついて口にした。

「見せにきただけじゃないんでしょ。」

「そうねえ、できたら、レインを乗せてあげたいって思っているのだけ。」

「乗りたい、乗りたい。ママのエアジェットに乗りたいよぉ。」

レインはレテシアに抱きついてせがんだ。

「だまって連れて行ったら、怒られるから、ロブが帰るまで。雨が振りそうだし。」

「あら、待って。わたしがロブに伝えておくわよ。ロブはいつ戻ってくるかわからないし。」

エアジェットだって、停泊するわけにいかないでしょう。」

「そうね、セシルがそういつてくれるのなら、助かるわ。

じゃ、レイン、ママとお空を散歩しようか。」

「うん。」

セシリアは口元を緩ませ、ニヤリと笑った。

その様子はレテシアには見えてなかった。

丁度、そのころに、ラゴネがあらわれて、レテシアが発進するのを手伝った。

空はまだ、雲がなかった。

太陽が燦燦と照りつけて、まぶしかった。

第十九章 雷雨の思い出 1 (後書き)

第十九章の登場人物の年齢

- レイン＝スタンドフィールド (5歳)
- ジリアン＝スタンドフィールド (3歳)
- ロブ＝スタンドフィールド (20歳)
- フレッド＝スタンドフィールド (25歳)
- レテシア＝ハートランド (23歳)
- セシリア (23歳)
- デイゴ (25歳)
- マーサ (46歳)
- ラゴネ＝コンチネータ (68歳)

第十九章 雷雨の思い出 2

レインにとって、レテシアがいるのは、太陽に近い場所だった。幼いレインがレテシアとエアジェットで飛行するときは、いつも膝の上。

二人の同じ栗色の髪が絡みあうほどに、肌身にびったりとくっついていた。

レテシアが得意げに飛行すると、キャツキャツと喜ぶレイン。

愛しい我が子が喜ぶ顔、いつまでも、こうしていたいと強く願った。そんなレテシアに、暗雲が立ち込めて、行く手を阻んだ。

まるで、その後のレテシアを彷彿とさせるような天候に変わっていったが、レテシアは不安を感じていなかった。

厚い黒い雲は、次第に稲光を放った。

そして、レインは泣き始めた。

「ヨシヨシ、ママがついているから、大丈夫よ。お家に帰ろうね。」
レテシアはいつものようにレインを宥めた。

稲光とともに風雨が機体を叩きつけ、レインは叫んだ。

「キャーツ、怖いよ、ママ。」

「大丈夫よ。ママが守ってあげるから。」

レテシアはレインを強く抱きしめた。

レインは両手で耳を塞いで顔をレテシアの胸にうずめた。

我が子をホーネットの機体に乗せて飛行を楽しむ時間が短かったことをすこし、悔やんで、レテシアはドックへ帰還した。

町での火災が雷雨でおおかた鎮火したので、ロブたちは引き上げていた。

ロブがドックにもどると、レインがいないことに気が付いた。

血相を変えてレインを探すロブに、セシリアは何も知らないと言っていた。

レテシアが連れ出したことを知っているはずのラグネは、グリーンオイル製造タンクに籠こもってしまっていなかった。

そんなときに、ホーネットの機体があらわれ、勝手に着岸した。

操縦席から、レテシアが顔を出したかと思うと、レインを先に外に出した。

レインは泣きじゃくっていて、デッキに下ろされると、走り去った。

「わあ〜ん、怖いよ、怖いよ。」

走りついた先は、マーサだった。

マーサは抱きしめて、レインを宥めた。

困った顔のレテシアが機体から降り立つと、顔を真っ赤にしたロブが足早にあらわれた。

パットン

ロブがレテシアの頬を殴った音がデッキ中に響いた。

レテシアはロブに殴られたことが信じられなくて、微動だにしなかった。

マーサは気遣って、レインにレテシアとロブが見えないようにして連れ去った。

「お前は勝手に軍の機体を乗り付けて、我が子を危ない目にあわせて、どういっつもりなんだ。」

レテシアにはロブから何を言われているかもわからなかった。

ただただ、殴られた頬を手で押さえて痛みをこらえていた。

「なにか言ったらどうなんだ。自分の好きな事をするだけで飽き足らずに、レインを軍の機体にのせるなんて、勝手にすぎるだろ。」

しかも、勝手に連れ出したり、お前は何様のつもりなんだ。」

矢継ぎ早に思いつくだけの罵倒をロブはレテシアに浴びせていた。

ロブは最後に、言っではいけない事を叫んだ。

「レテシア、母親失格だ。もう、このドックに来るな！俺の前に二度と顔を出すな！」

それはどんなほかの言葉よりも、酷いと感じた。

レテシアは聞こえてきたことさえ、信じられなかった。

振り絞って、言った言葉が「どうして？」だった。

ロブは何も言わず、レテシアに背を向け、その場から足早に歩き出した。

自室茫然でレテシアは立ち尽くしていたが、ロブが吐き捨てるように言った。

「レインにお前は必要ない。二度とここへ来るな。軍へ帰れ！」

レテシアの目から涙がこぼれてきた。

言われたことで残った言葉が、「軍へ帰れ」だった。

レテシアは何も言わず、冷静を装って、操縦席に戻り、機体のエンジンをかけて、発進した。

雷雨は降り続いていた。

レテシアは声を殺して泣いた。

レインは雷雨に怯えて泣き続けていた。

デッキの隅で、一部始終をみていたセシリアは口を押さえて笑っていた。

これ以上面白いことはないくらいに。

雷雨が止んで、ドツクの空には虹がかかった。

製造タンクに掛かりきりになって、ラゴネはロブとレテシアに起きた事を聞いたのは、翌日のことだった。

セシリアが知らないはずはないことなどは口にしなかったが、レテシアがレインを連れ出した理由などを話した。

しかし、ロブは自分が誤解したことは認めなかった。

ロブは、レテシアが去ったときから、誤解かもしれないということをおもってはいたのだが、それはセシリアが口を抑えて笑っている姿を目撃していたからだった。

取り返しの付かないことをしてしまったという不安が襲い、その晩は眠れなかった。

若いレインが泣き叫ぶ声がマーサの部屋から聞こえてきても、耳を塞ぐことしかできなかった。

徹夜明けで結論に達した考えは、誤解でもこれ以上レテシアをドツク（ここ）にとどめておくことはできないということだった。

それは、ロブ自身でレテシアを束縛しておけないという思いがあったからこそだった。

だから、ラゴネから誤解だという話を聞かされても、受け入れようとはしなかった。

その後、火災で起きた患者の対応に追われていたクレアが精神状態を最悪にしながら、ロブに詰め寄った。

「誤解だというのに、お前はレテシアに謝る気持ちがないのか。」
ロブは何も言おうとしなかった。

それが一層クレアの気持ちを逆撫でさせて、クレアはロブを殴り倒した。

どんなに殴られようと、ロブは抵抗しなかった。

クレアはロブの胸倉を掴んで足のつま先が浮くくらい、持ち上げた。

「レテシアを失ったのは、お前だけじゃない。レインも、このドックにいてるみんなも、そしてあたしも。」

お前が取り戻す気持ちがなくて、レテシアは戻ってこない。謝る気持ちがないのなら、あたしもそれなりの態度に出る。」

クレアは胸倉を掴んだまま、ロブを投げた。

ロブは投げられて左肩を床に打ち付けて受身をとった。

それからしばらくは、クレアとロブの冷戦状態になった。

雷雨になると、レインが泣き叫び、レテシアを呼ぶので、ロブは強引にレテシアを忘れさせた。

レテシアを忘れたと同時に、ロブのことも忘れてしまったらしく、パパと呼んでいたのを、ジリアンと同じように兄さんと呼ぶようになった。

その後、ドックに来る空挺の乗組員などから、レテシアの噂を耳にすると、軍をやめてロックフォード・ファミリーのメンバーになったと言っていた。

軍を辞めたのは、グリーンエメラルダ号のハートランド艦長に顔向けが出来ないから。

戻る場所を失ったレテシアにとって、行くところはエアジェットが操縦できる場所しかない。

アクロバットはまだ得意ではなかったが、ホーネットのメンバーになったところから、ロックフォード・ファミリーのメンバーになれた。

ファミリーのリーダーと恋仲だと噂があったが、その後、レテシアはファミリーから姿を消した。

レテシアは紆余曲折しながらも、軍に服役し、ハートランド艦長の下に着任し、今に至った。

クレアは大きな欠伸をした。

気乗りのしない話をし終えたからだった。

雷雨に見舞われたS A Fは進路を見失っていた。

レインがレテシアの言った言葉の「誤解」の意味を知りたくて、クレアに泣いて話を聞かせてくれと懇願した。

嫌だったクレアは根負けして、話ししたのだった。

ジリアンに聞かせたくはなかったが、レテシアがジリアンと一緒に暮らしたい気持ちがあるというので、仕方なく聞かせた。

「兄さん、その、誤解をしていることはわかってるんだよね。」

「そう、でも、レテシアを引き止めておく自信がなかったんだよ、きつと。そんなこと確かめたくもないから、誰も聞かないのよ。」

「セシリアが悪いということも責めないんですね。」

ジリアンがその言葉を口にして欲しくなかったクレアだったが、返事をせずに、うなづいてみせた。

「でも、ママは、今でも。」

「ああ。オトコとオンナの関係は、複雑なものがある。第三者がどうのこうのと、言ったり忠告しても、だめな時はだめなこともある。」

「僕は、心配なのです、クレアさん。」

「ジル、何が？」

「兄さんは生き急いでる気がするのです。死にたがっているというか。」

「ああ、それはフレッドが死んだのは自分のせいだと思っているからだろう。」

クレアは眠たそうな目でジリアンを見つめて頭を撫でた。

「死なせはしないさ。あたしはここに決めてるんだ。レテシアに謝るまでは絶対死なせやしないって。」

ジリアンは笑みを浮かべた。

そして、クレアはレインの方へ向いて、真面目な顔つきになった。

レインはその様子に少し身構えた。

「これは二人だけに話しておくよ。」

レインとジリアンはクレアの次の言葉を待った。

「ハートランド艦長は、レテシアに引退してもらいたいんだ。」

「引退?!」

「ああ、もう、エアジェットを操縦して欲しくないんだ。」

「それは、ママから取り上げてしまっただけのこと?」

「まあ、陸おかにあがった魚になってしまっただろっけど……。このままじゃ、レテシアの命が持たない。」

レテシアもレテシアで、生き急いでいるみたいだ。」

クレアはため息をついた。

レインは目を丸くしてクレアを見ていた。

生き急いでいるという言葉が信じられなかったからだ。

「引退させるためには復縁を望んでいるんだ。レテシアの気持ちは変わらないことが明白だしね。」

「艦長の意思なのですね。」

ジリアンはハートランド艦長の思いを感じてクレアに念を押した。

「娘のようにかわいがっていたからな。エアジェットを操縦しているだけで幸せにはなれないことくらいわかるだろう。」

「あとは、兄さん次第ですか。」

「……。頑なに拒んでいる理由って、オトコの意地みたいなものですか。」

クレアはレインの言った言葉に研があるの、しばらく黙っていた。

「さっきも言ったけど、自信を失っているんだ。取り戻すには、口自身が変わらなければいけない。」

その後の言葉をクレアは飲み込んで口にしなかった。

(あたし自身を犠牲にしても。)

クレアはレインとジリアンを両手で抱き寄せて、耳元に囁いた。

「お前たちの命を狙っている奴が、ロブを変えさせてくれるだろう。」

二人はその言葉に寒気がした。

二人を引き離して、クレアは言った。

「オトコの意地っていうのは、案外簡単に手放すものだよ。命を他

には変えられないからね。」
稲光がS A Fを襲ったが、機体が揺れ、レインが怯えるだけだった。

「雷雨をジヨナサンが引き起こしたなんて、誰が考えるんだよ。」
クレアはいらいらしながら、操縦室の入り口に立っていた。

そばにロブがいて、下を向いて会話をしていた。

「雷雨で進行方向を見失い、雷雨が止んでも、計器類が狂っていて位置が計測できないんですよ。」

クレアは右手を額に当てて、考え込んだ。

「ま、まさか。」

顔色を変えたクレアをみて、ロブが聞き返した。

「まさかって何ですか。」

額に当てた右手を口元に持っていき、口にしたくない様子だった。

「フオンド・デル・マーレ・デリイラシオーネ、塩山脈だ。」

ロブの後ろでデイゴが立っていて、その言葉を聞いてロブが振り返った。

「磁場のまわりに塩で固められているという山脈のことか。」

「そうだ。そこが海に近いところにあるとは思えない。しかし、海上を飛行していたのは雷雨の時のことで、雷雨を逃れるために、高度を上げて、雲海に出て降下しないと、そこがどこかわからない。クレアは壁にもたれて、腕組みをして、上を見ていた。」

「計器を狂わす磁場があるところと言えば、そこしか思いつかない。そのあと、たどり着くのが……。」

「野戦病院のようなシヴェジリアンドの地ですね。」

クレアの脇から、コーデイがあらわれた。

コーデイの言葉に、クレアは天井を仰いでため息をついた。

「なにか、あるのか、クレア。」

デイゴが尋ねたが、クレアは答えようとしなかった。

「助けを求められて、そこへ行ったことがあるのですが……。」

「野戦病院って、病院施設がないってことだろう。」

「今は施設があるのですが、災害で土地を追われた人々が住み着いて、不衛生な上に、治安も悪くて、設備がうまく作動できなくて野戦病院のようになってしまっているのです。」

「クレアがため息つくようなくらい、大変な場所ということか。」

「たしかに、大変な場所かもしれませんが。軍が駐留しているのですが、女性や子供たちを守るのが精一杯の場所になっています。」

「コーデイはクレアが言いたくない事を言わせないように、デイゴやロブに説明していた。」

「クレアは体を壁から離し、操縦室の方へ向いて、カスターに指示をした。」

「財団に連絡を取って、位置確認を求めて、シヴェジリアンドの地の着陸許可を申請してくれ。」

「言い終わると、足早にその場から立ち去った。」

「はい、わかりましたって、もう、いないし。」

「ロブとデイゴはクレアが何を考えているのかを憶測し損ねて、茫然と立ち尽くした。」

「カスターは二人の姿をおかしく思いながらも、コーデイの様子を見ると、笑ってもいられなかった。」

「あの場所は今までと、環境も雰囲気もだいぶ違ってきますよ。覚悟しておいてくださいね。」

「クレアが診療室にもどって、つぶやいた。」

「よりも寄って、シヴェジリアンドの地とはね。」

「SAFは位置確認ができると、フォンド・デル・マーレ・デリイラシオーネ付近を飛行していることが判明した。」

「退避するため移動したところに、シヴェジリアンドの地があるので、そこへ着陸し、態勢を整えることにした。」

「今までだって、計画通りに飛行して進行してきたわけじゃない。」

「狂わされているのは確かだが、故意ではないにしろ、かなり不自然だ。」

クレアが通信で、話す相手は財団の理事長だったが、さじでも投げたくなりそうな感じだった。

「クレア先生。S A Fの活躍は我々グリーンオイル財団に良い利益をもたらしてくれています。」

大変なのは存じておりますが、このまま、どうか、慈善事業の一環として、医療行為を続けてください。」

しばらくして、クレアは重たい口を開いて言った。

「危険を承知して出発しているのだから、覚悟は出来ている。しかし、医療行為のほかで危険な目に合っているような状態では、続けてられない。」

「何をおっしゃりたいのか、解りかねますが。」

クレアは通信のマイクを両手で囲って、周囲に聞こえないようにした。

「ジョナサンの出生を調べて欲しいって言ったんだが、伝わっていないのか。」

「ああ。以前の調査で納得されていないとのことでしたね。」

理事長が間をおいて、返答した。

「実母につきまして、なかなか調べがつかないところがありまして、手を尽くしているところなのですよ。」

かなり身分の高い人らしいということだけをお伝えします。」

その言葉に、クレアは身震いをした。

「デューク……。」

「何かありましたか。」

「いや、何でもなし。申し訳ないが、確かなその情報をこちらに報告して欲しい。」

「クレア先生に敵対しようとしている人物がいるとは思えませんよ。」

「

「それがいるんだ。」

「ここらあたりがお有りのようですね。」

「これ以上は話せない。デューク、あなたに迷惑が掛かってしまう

かもしれないからね。」

「はあ、迷惑ですか。いいですよ。ギブ・アンド・テイクで、危険に見合うだけのメリットをもたらしてくれるならば。」

「デュークが加担しているとは、思っていないが。セシリアの病状が悪化している以上、こちらの不利なことはしないでしょね。」

「もちろんですよ。クレアさんを陥れることなんてしませんよ。コ―デイ同様、感謝してますよ。セイラのことをとても良くしていただいた。」

「医者としてなら、当たり前のことだが。」

「何か他に、情報が入りましたら、そちらに報告しますよ。軍の内部事情はクレア先生のほうが詳しいでしょう。」

「しかし、兵器に関してはそちらの方が詳しいでしょう。」

「そうですね。所望されていた赤い爆弾が仕上がったので、試し撃ちがされるかもしれません。」

クレアは脳裏に自分たちが爆弾の餌食になることを描いた。

「的になるのはごめんだよ。ぜひとも、回避したいね。」

「冗談でしょう。」

「冗談でもないさ。」

「そういうことですか、クレア先生。何をおっしゃりたいのか、解るようになりましたよ。」

二人は早々に、通信を終えた。

達した考えは、お互いのなかで結実したと感じた。

理事長のほうでは、利益を口にするのは建前で、その実、クレアにセシリアの病状悪化の原因を突き止めて欲しいと考えていたから、達した結論に頭をもたげた。

クレアのほうでは、爆弾の餌食になってもおかしくないが、狙う理由としては強引過ぎて無理だろうと考えていた。

おそらくは、S A Fは狙われない。狙ってくるとしたら・・・と考えていた。

考えただけでも、恐ろしくて、脂汗が出てきそうな感じがクレアに

はした。

「そこまで憎んでいるとは思えないのだが、なぜだろう。」

シヴェジリアンドの地、フォンド・デル・マーレ・デリイラシオーネく幻の海底を望むなだらかな平地で、そこに軍の施設がそびえ立っていた。

着陸したSAFは計器類の修理、航路修正に取り掛かっていた。人手を必要とされないレインとジリアン、アルバートの三人は、クレアとコーデイについていった。

クレアたちが向かったのは、軍の診療施設だった。

軍の診療施設は、軍の建物と離れた場所があり、砂埃の大地に、ひっそりと立っていた。

砂埃のたかたがあまりに高く、診療施設の周りに何も無いように見えていたが、次第に砂埃が止むと、そこには一面にテントが張られていた。

それは難民キャンプの住居だった。

「まあ、荒れた場所に人々が生きているということを確認するのに、うってつけだな。」

レインとジリアンは周囲の光景をみて、驚くばかりだった。

治安が悪いと聞かされていて、その様子をみて理解した。

荒れた大地に住み、食べるのさえ、事欠く日常。

軍の施設のそばにテントを張って生活しているのは、食料配布で手に入れるためだった。

施設の中に入ると、大勢子供たちがいて遊んでいたり作業していたり混雑していた。

子供たちは、突然現れた大人たちをみて、しばらくは黙視していたが、そのうち、一人が叫んだ。

「鬼婆あがもどってきたぞお。」

クレアは眉をひそめた。

「侍従もいるぞ。」

コーデイは持つてきた荷物をそこに下ろした。

「変人がいる！」

誰のことかと、レインとジリアンは自分たちを見合っていた。

大勢の子供たちの後ろから、女性が現れた。

金髪巻き毛、白衣の下に軍服をきた美女が両手を広げて近づいてきた。

「さあ、わたしのかわいい子猫ちゃん、戻ってきたのね。」

「子供たちの前で、その言い方はやめてくれないかな、ウィンディ。」

「

金髪の美女ウィンディは悪びれた顔つきでクレアにウィンクをした。

「だあれ、クレアさんのことを鬼婆あつて言ったのは。」

子供たちは一斉に当りを見回した。

10歳くらいの男の子が、手を上げた。

「ジョイス、君は口が悪い子だな。先生の大事な人の事をそんな風に言うなんて。」

ウィンディはジョイスという赤毛のそばかすだらけの男の子を抱き抱えて、前に歩み出した。

「だって、ジョイスは、先生にかまってほしくて焼きもち焼いているんだもの。」

「ジョイスはまた、クレアさんを追い出すのかしら。」

「クレアさんが泣き出すまでいたずらするんだ。」

周囲にいた女の子が口々に言い始めた。

黒髪の女の子がジリアンの髪の毛を引っ張った。

「痛い。何をするんだよ。」

「ねえ、これ、本物なの？」

「なにが。」

「金髪よ。」

「本ものだよ。偽ものって、染めてるってこと？染めてなんかないよ。」

ジリアンより少し背の低い女の子はジリアンの顔を覗き込んだ。

「ねえ、この子、青い目をしているわよ。緑色も混じっている。高級だわ。」

周囲にいた子供たちはものめずらしそうにジリアンの顔を覗き込んだ。

ジリアンのはけぞって、レインにしがみついた。

「モテモテだな。」

「こんなのモテモテなんて、言わないよ。アル。」

やせ細った、前髪の長い暗そうな男の子が近寄ってきた。

「君の青い目、すごく高く売れるんだよ、僕に頂戴。」

言われたジリアンは怯えて、レインに隠れた。

「君は、肌が白くて綺麗な顔をしているけど、栗毛だし茶色い瞳だから安ものだね。」

「安物?!」

物扱いをうけて、すこし憤慨した。

周囲の様子にすっかり吞まれて、レインとジリアンは暗くなった。

「ここって、子供の誘拐が多いわけ?」

アルバートが口になると、やせ細った男の子は、深くうなづいて見せた。

男の子の後ろから小さな女の子があらわれ、顔半分を前髪で隠していたのを手で広げると、片目がなかった。

「この子は両目をえぐられるところを片目で済んだんだ。」

レインとジリアンは叫び声を上げそうなのをこらえて口をつぐんで驚いていた。

アルバートは平然としていて、レインたちの反応も無理はないなと思っていた。

「僕もこういふ場所で生活していたことがあったんだ。まだ、マシだったっけな。」

やせ細った男の子は、アルバートの顔を覗き込んだ。

「あんな、黒衣の民族か。」

「まあ、混血だ。」

「へえ、道理で、綺麗な顔していると思った。」

「母親が民族で、父親が美形だったから。」

アルバートは何も気にしないと云った風に男の子の相手をしていた。レインとジリアンはただただ、怯えるばかりだった。

ウィンディはクレアの肩を抱き、再会を歓迎した。

「また、会えて嬉しいわ。」

「ああ。」

「再会が嬉しくない感じね。」

「そうでもないよ。予定していなかったからさ。」

「予定外の訪問で、クレアさんの感情は憤っているのかしら。」

「まあ、そんなところ。」

「今夜、慰めてあげましょうか。」

「遠慮しておくよ、あの子達がいるから。」

クレアはレインたちの方を指差した。

「あら、ロブっていう男前はつれて来なかったの？黒髪の男の子じゃないわよね。」

「あの子は、ハーフでアルバートって言うんだ。ロブは今忙しくてね。息子のレインと兄の子ジリアンを連れてきたよ。」

栗毛がレインだよ。」

「へえ、母親はレテシア少尉ね、本当そっくりね。」

肩を抱き合っているクレアとウィンディの姿をアルバートは横目で見ていた。

その視線を感じて、クレアは、早々にこの場から立ち去ろうとした。

「宿泊の部屋を提供してくれるって聞いたんだけど。」

「ああ、3階が空いてるわ。慈善団体が撤退したの。」

「根を上げたの？」

「うっん、代わりに未成年犯罪取締り警備隊が駐留することになっているの。その期間が少しあるって感じかな。」

「相変わらず、アバウトね、ウィンディ。」

「そういうところが好きなんですよ、クレア。」

ウィンディは目をつむって、唇を突き出したが、クレアはウィンディの唇に指を当てた。

「今日はお預け。」

「あら、つまらない。」

クレアが何かしらの視線を感じてみると、レインが不思議そうな顔で見ている。

その様子をみたジリアンがレインの袖を引っ張って言った。

「そんな凝視したらだめだよ、レイン。」

「え、どうして？ってというか、クレアさんって……。」

「口にしないで良いよ。そういうことだから。」

「そういうことって……。」

アルバートがレインの耳元に口元を近づけて囁いた。

「クレアさんの性癖は、同性愛者だってことだよ。」

レインは少し驚いて顔を赤くした。

その様子をクレアはみて、眉をひそめた。

クレアが周囲を見渡すとコーディの姿はなかった。

そこへ赤毛のジョイスがやって来た。

「従者なら、上に上がって行ったよ。」

「従者じゃないよ。看護師のコーディだよ。名前をちゃんと覚えな

さい、ジョイス。」

ジョイスはクレアに頭を小突かれて、舌を出した。

クレアに宿泊するのは3階だと言われて、レインたちは上に上がるうとした。

「あのお、クレアさん、他のメンバーはどこに？」

「軍の施設だよ。徹夜作業になるから、部屋での寝泊りはしないかもしれない。」

3階に上がると、そこは部屋というより、屋上のような感じで、天井が抜けていた。

壁が仕切りになり、ドアがあると言った程度だった。

クレアはいつの間にとぼやいた。

ウィンディが階下からなにやら荷物をもってあがってきた。

「ああ、ごめん。爆撃を受けちゃってね。これ、テント生地。天井に張ってね、それぐらいできるでしょ。」

「結局、根を上げたんでしょ。」

「犠牲者は出なかったわよ。」

「いても立ってももらえないでしょ。」

「ふふ。」

何がつといたげなクレアに、逃げるようにしてウィンディは降りていった。

クレアは生地を広げ始め、他の者たちと作業を始めた。

「思った以上に酷いことになってる。」

クレアはつぶやいた。

第二十章 暗闇に閃光 3

天井の抜けた部屋は砂だらけで、テント生地を下に引いて寢床を作ったほうがよさそうだった。

壁の上部に縄を張って梁にし、テント生地を吊って、部屋の中にテントを作った。

二つ分作って、一つはクレアとコーディ、一つはアルバートとレイン、ジリアンの寢床となった。

「どちらにしろ、窮屈だが、しばらくの我慢だな。」

「クレアさん、2、3日で本当に終わらせることって出来るんですか。」

アルバートが尋ねたが、クレアは眉を寄せるだけで返事をしなかった。

その様子にレインとジリアンに不安がよぎった。

（僕たち、いつまで持つだろうか。気が狂いそう。）

その後、食事の用意が出来たと、階下へ降りた。

たくさんの子供たちがテーブルのない思い思いの場所で食事をしているなか、軍服の集団がテーブルについて食事をしているところがあった。

その場所に空いているスペースがあったので、食堂で食事を受け取ると、5人はその場所の席に着いた。

軍服の集団の中にクレアの顔見知りがあった。

「クレアさん、戻ってきたんですか。」

「テリー軍曹、戻ってきたわけじゃないんだけどね。」

「そうでしょねえ。いろいろなニュースが飛び込んできましたが、ここに来るとは聞いていませんでしたので。」

「こちらとしては予想もしてなかったよ。」

クレアは顔見知りのテリー軍曹をみんなに紹介した。

「テリー軍曹、こちらがスカイエンジェルフィッシュ号のメンバー

で、アルバート、レイン、ジリアン。コーデイは紹介しなくてもいいよね。」

「ああ、もちろんですよ。わたしがこの診療施設の警備隊長・軍曹のテリー＝スライです。よろしく。」

レインたちは口々によくと挨拶を済ませた。

テリー以外の軍人は口々に「スカイエンジェルフィッシュ号だったさ。」と馬鹿にし始めたが、レインたちは気にしないようにした。

「そういえば、わたしの紹介がされてなかったわよね。」

クレアの後ろに立ったウィンディが白衣を脱いであらわれた。

「わたしが紹介しよう。我らが、白衣の天使様であられるウィンディ＝コートレイル少佐です。」

「いつの間に少佐になったの。」

クレアは顔を見上げて言った。

「この地区の医療行為が賞賛に値するといつて、わたしの身分を上げてくれたの。」

「持ち上げて何をしようというのか、上のすることは理解しかねますがね。」

テリーのおきれた様子にクレアも察しがついていた。

「ふっ、部下もいないというのに。」

「部下なら、いるわよ。」

ウィンディは周辺にいてる子供たちを指差した。

「おやおや、かわいい部下たちがたくさんいらっしやること。」

「まあ、たしかに俺たちよりは頼りがいのある少佐の部下ですね。」

テリーが鼻で笑うと、他の軍人たちもクスクスと笑い出した。ひとりの軍人が食堂に駆け込んできた。

「少佐、また、幼い子供が誘拐されそうになり、怪我をしました。治療に当たってください。」

診療室に運び込みました。」

「了解、すぐに行くわ。」

ウィンディは呆れ顔で、クレアに目配せをして、その場から足早に

去っていった。

「軍曹、誘拐犯罪はいまだに減らないの？」

「ええ、もう、いたちごっこですよ。あの手この手でなんとか若い子供を略奪しようとする。」

「3階の天井が爆撃でやられたのは？」

「誘拐で連れ去られた子供たちを奪回するという計画を実行し成功したのはいいのですが、その仕返しですよ。」

「犯罪者集団を操っているのを取り押さえることってできないのか。」

「できないですねえ。犯罪のための誘拐ではなく、脅しのための誘拐みたいなものですから。」

そういうと、テリーはクレアに耳打ちした。

「皇帝擁護派による、排除派への脅しですよ。」

そして、クレアがいった。

「身内同士の争いか。一般人というか難民を巻き添えにするなんて、言語道断だが。」

食事を終わると、クレアとコーディは診療室に向かい、ウィンディと交代して治療にあたることとなった。

レインたちは、ウィンディが食事をしている間もその場にいるように言われた。

「君たちには、明日からこの子供たちと一緒に作業をしてもらおう。」

「何の作業ですか。」

「やることが一杯あるのよ。生活していくうえで、ゴミは処理していかないといけないし、砂嵐で周辺が汚れてしまい、衛生上良くないから病気が蔓延しないように消毒しないといけないし。ほんと、いろいろあるのよ。」

「僕たちができることであれば、します。」

「そそ、働かない者は食うべからずだからね。」

ウィンディはレインに顔を近づけて、言った。

「ジョイスには気をつけてね。あなたのほうが年上だし背丈もあるから、喧嘩を売ったりしないかもしれないけど、相手にはしないでね。」

レインはウィンディの顔を間近で見ると顔を赤くしたと同時に見覚えがあるような気がした。

アルバートがレインの顔を両手で押さえ込んで自分の方へむかせた。

「何顔を赤くしているんだ、レイン。」

「ああ、いや。そのお。」

レインは返事に戸惑った。

察しの付いたジリアンが代わりに言葉にした。

「ミランダさんに似てる。」

その言葉に合点がいったとばかりにレインは目を丸くしてうなづいた。

「ああ、クレアの義父さんの初恋の人ね。」

「ええええ、そうなのお。」

レインは大きな声をだし、ジリアンは白い目でレインをにらんだ。

あわてて、レインは自分の手で口を塞いだ。

「初めて聞きますよ、ダン先生の初恋の相手がミランダさんだなんて。」

「クレアと初めて会ったとき、ミランダに似てるって言われたわ。」

得意げな顔をするウィンディを横目に、アルバートはずっとニヤ着いていた。

「アルバートって言ったわね、ハーフ君。なにか言いたいって感じね。」

「いや、クレアさんって、案外マザコンだったんだなって。」

「そうねえ、母親の愛情には飢えていたかもね。」

二人のその会話にジリアンは深くうなづいていた。

レインはただただ意味がわからなくて、困惑していた。

「ジリアン、ふたりが言ってることってわかってわかっているわけ？」

小声で囁くと、ジリアンは当然と言った。

「僕、わからないんだけど。」

「わからなくてもいいよ。理解できないかもしれないから。」
その言葉にレインはむくれた。

治療が一段落したのが、深夜になっていた。

施設では、見回りの警備隊が出ているほか、ほとんど人間が就寝にしていた。

クレアは白衣を着たまま、ライトを手にして外に出た。

しばらくすると、エアバイクがやって来て、クレアがライトを大きく振ると、その場所に停車した。

ヘルメットをとると、ロブだった。

「クレアさん、お疲れのところ、すみません。」

「いいんだけど、話がしたいって何だよ。」

「ひっかかったものがあつて。クレアさんは此処には来たくなかったんですよ。なぜですか。」

「なぜって、治安が悪くて自分たちの身を守るのに精一杯になる可能性が高いからさ。」

「軍の内部で対立している抗争の一派がここだって、知っていたからじゃないですか。」

「どこで仕入れたんだ、その情報。」

「ジェフが、心配して連絡よこしたんですよ。クレアさんが此処に来たことがあるのを知らなかつたみたいで。」

クレアは腕組みをして考え込んでいた。

あきれた顔をして、「そんな話なら、帰れよ。」と言って、ロブに背を向けた。

「そ、そんな、ク、クレアさん。」

施設に戻ろうとしたクレアはその場で立ち止まった。

施設からウィンディが出てきたからだ。

ウィンディはクレアを通り過ぎて、ロブの前に立ち止まった。

「あら、こんなところで逢引かしら。」

ロブは浮かぬ顔でウィンディをみていた。

「あなたが、男前のロブ＝スタンドフィールドね。」

そして、ウィンディは右手を差し出して握手を求めた。

「わたしはこの診療施設の責任者で少佐のウィンディ＝コートレイル。よろしくね。」

「あ、はい。ロブといいます。」

ロブがウィンディの右手に握手すると、ウィンディはここぞとばかりに強く握り返した。

ロブは声を上げそうなのをこらえて、痛みに耐えた。

その様子にクリアと何か関係あるのを理解した。

「夜這いにもしに來たわけ？」

「ウィンディ！ロブをからかうのはやめて。」

罰がわるくなつたのを感じたロブは後ずさりした。

「誤解されているようで、俺はこれでもどります。」

「あら、尻尾を巻いて逃げちゃうの？」

その言葉にクリアは振り返り、ウィンディの肩を掴んだ。

「止しなさいって言ってるの。あたしの言ってる言葉が聞こえないわけ？」

「聞こえてるわよ。」

二人の様子にロブは背を向けて、去ろうとした。

「ロブ。レテシアに謝れって言ったのに、そうしなかったんだから、話すことなんて何も無い。」

クリアにそういわれて、ロブは振り返ると寂しそうな目をしていて、そして、足早にバイクに向かい、エンジンをかけて、バイクにまたがった。

その音にかき消されるようにして、ウィンディが言った言葉はロブには聞こえなかった。

「今にも泣き出しそうな顔。」

第二十章 暗闇に閃光 4

ロブが乗ったエアバイクの姿が闇に消えた。

「ママに甘えたかったのに、それどころか叱られて泣き出しそうなこ・ど・も。」

「好き勝手言つて」とクレアはウィンディに背を向けた。

ウィンディはクレアを追いかけないようにして言った。

「話があるのよ、クレア。」

寝付けないアルバートは同じく寝付けないジリアン相手に話をしていた。

レインは寢息を立てていた。

「アル、こういうところで生活していったって、いつの話し？」

「5歳くらいだったかな。黒衣の民族が居住区を抜け出して隠れて住んでいた場所だったよ。」

見つければ強制的に居住区に行かされるし、行かされたら奴隷扱いだから、見つからないようにするのに息を潜めるようにして生きていた。」

アルバートは過去を振り返っていた。

アルバートの母親は黒衣の民族から反目して抜け出した。奴隷扱いを受けて、逃げるしかなかったのだ。

同じ民族とはいえ、身分階級を重んじる民族ゆえ、身分の低いものは奴隷として生きていくことが決められていたところだった。

うまく抜け出して、アルバートの父親と出会い、身を隠すように二人で生活し、アルバートが生まれてから転々と住居を変えてきた。

同じような境遇の人たちと隠れて住んでいた頃は身動きが付かない程度の暮らしだったが、それでも仲良く暮らせた分だけ幸せだった。見つかり、くもの子を散らすようにして、我先と逃げ惑った。犠牲者は劣り同然となり、助かったものは散り散りとなって生き延び

た。

その後、アルバートと両親は父親の親族の手管により、身分を隠して一般人と同じ生活が出来るようになった。

アルバートが自立するための職業訓練で集団生活において身分がばれるまでの幸せで、あつという間に過ぎていった。

アルバートはグリーンオイル財団の慈善事業の施設で薬漬けにされて、実験材料にされたが、お役目御免となった際には廃人寸前だった。

その時の光景が脳裏に焼きついて忘れられなかった。

あらゆる体液がコントロールを失つてとめどなく流れ出す。涙、鼻水、よだれ、耳垂れ、失禁。

自分で体を動かすこともできないままに、視覚・聴覚で脳を働かせることはできた。

瞳を動かして助けを求めた。

研究所の女医が現れて、アルバートを指差して言った。

「どうして、始末しないの？可哀相じゃない。」

言われた言葉は理解できた。自分が人間扱いされていないことを。

アルバートの姿を偶然みた理事長が、最善を尽くすよう指示を出し、アルバートは薬物中毒から開放されるまでに回復した。

刑務所への服役は表向きに取り扱いだった。理事長の支持で設計主任のバトラーを保護監察官とし、財団の保護下にした。

理事長の目的は明確ではなかった。黒衣の民族のハーフで年齢も近いところからセシリアの子を探すために役に立つかもしれないと思っていた。

アルバートがクリアに初めて会ったとき、あの人間扱いされなかった女医に似ている気がした。

「僕はまた実験台にされちゃうんだ。」

「誰がそんなと言ったんだ？」

「言わなくてもわかるよ。実験台にされるくらいなら死んだほうが良いかな。」

「生まれてきた事を後悔しているのか。」

「そうかもしれない。」

「だったら、生まれたことに感謝できる死に方をさせてあげよう。」
クレアの言葉にアルバートは背筋をこわばらせた。

「返事は？」

「ああ、わかったよ。」

恐る恐る返事をしたアルバートだったが、その様子にクレアはアルバートの左手を取った。

「何するんだ。」

「気休めだが、約束の証だ。」

クレアはアルバートの手の平にナイフで傷を付けた。

「痛い。」

片手で握り締めて血を出させた。

クレアは出てきた血を舐めた。

「契約は成立した。」

しばらくして、気休めという言葉を思い返して、アルバートがクレアの手を取って、ナイフで切ろうとした。

「私の血の契約は今はいらない。」

「どうして？」

「死を決意した時、血を流して舐めさせよう。それが合図。」

「了解したよ。」

アルバートはクレアとの血の契約のことをジリアンに話したりはしなかったが、生い立ちは語った。

ジリアンの思いは複雑だったが、アルバートに「話をしてくれてありがとう。」と言って目を閉じた。

アルバートが目を閉じると思い返した映像が浮かぶ。

身を隠した同じ境遇の人たちとの生活した日々。

そこが見つかって、暗闇の中、赤々と炎がたちのぼり、住みかが燃えつくされる光景。

不安を抱えつつ、振り返りながら、逃げていったあの日。

どの時代も、どこにいても、平和で幸せな時は長く迎えられない。
少し大人になったから、今は怯えなくなっただけ。
そんな境遇にアルバイトは少しだけ涙を流した。

「話して何なの？」

クレアがウインディの部屋に入ると、問いかけた。

ウインディは黙って、書類棚から、一通の封筒を取り出して、クレアに渡した。

「検死報告書？ダンの？」

ウインディは首を横に振った。

「キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地へ行つたと聞いたわ。

鉄鉱石窃盗団の捕獲作戦の話を知りましたよ。」

「ええ。」

「犠牲者の一人、サンジヨベール将軍の息子の検死報告書よ。」

クレアはおもむろに中から書類を取り出して目を通した。

「聞いている話と違う。」

「表向きは名誉の死・殉死ってことになってるけど、報告書を見る限りでは改ざんだわ。内臓破裂の多量出血死。」

検死官は嘘の報告を書かされても、なお、正しい検死報告書を残したがるのね。」

「自害したという話もあるんだけど、そっちの話も改ざんというより、挿話みたいなものだな。」

「挿話？」

「奇麗事を装飾するためのエッセンス。」

何を言ってるのかわからないと言ったふうに、首をかしげるウインディにクレアは抱きついた。

「こんなものを手に入れたら、命がいくつあっても足りないでしょう。」

「ええ、そうね。でも、手に入れたものじゃないの。偶然手に入つたの。思い出したからクレアに見せてあげようと思って。」

流し目でクレアを見つめて、肩を握り締められた手に自分の手を重

ねた。

「危ない橋を渡っているのはお互い様でしょう。」

「そうね、お互い身内を殺されて、改ざんされた検死報告書で公表されている……。」

「検死報告書のコレクターじゃないのに、あつちこつちから、寄せ集められてくるんだから。検死官だって人間だけど、こつちも改ざんが多いとは。」

「何のための検死かわからないか。そうかもしれないが、その裏もきちんと取るあたり、検死官らしいでしょうよ。」

クレアは手にした検死報告書を消毒液を掛けて、火をつけて燃やした。

「これで、ウィンディの危険を回避しました。」

ウィンディは薄笑いをうかべて、クレアに口付けをした。

「命を救ってくれてありがとう。」

夜が明けると、きちんと睡眠がとれたレインが起きて、二人が寝ている様子を見て、少々あきれて、ひとりで階下を下りていった。

施設の一階では、朝食が用意され、大勢の子供たちが食事を取っていた。

配給のパンと牛乳を手にとると自分たちの住居で食事を取る子供たちもいた。

そのなかでも軍人たちが食事を取っている風景は目立っていた。

コーデイがひとり黙々と食事をとる姿をみかけて、レインはそばに行った。

「おはよう、コーデイ。」

「おはようございます。レインさん。」

敬語を使用されて、いまいち、馴染めなかったレインだが、周囲が「コーデイ」と呼んで、敬語を使われても素知らぬ態度でいるのに合わせていた。

「おふたりさんは、まだ、就寝中ですか。」

「ああ、そうなんだよ。クレアさんは？」

「夜遅く寢床に入ったのに、わたしが起床したときにはもういらっ
しゃいませんでした。」

「そうなんだ。」

レインは、コーディにウィンディのことを尋ねようとした。

「あのお、コーディ。そのお、あのお、ウィンディさんって・・・。」

「

「ウィンディさんがどうかされましたか。」

「うーんっと。えっとお。」

どういおうかと考え込んでいると、背後からアルバートが先走って
言った。

「クレアさんの恋人ですか。」

「ええ、そうですよ。」

コーディは何のも悪びれもなく、言った。

「ええ?!」

レインは驚いていたが、いつの間にか起きてきたのかと顔を上に向け
アルバートの顔を見た。

「驚くまでもなく、わかるじゃないか。」

「そう、驚かれるでしょう、普通はですね。」

レインは食事の途中で食べ飽きたかのように、進まなくなった。

「アル、ジルは？」

「もうすぐ、降りてくると思う。何か、手紙書いてたかな。」

「ああ、プラーナにね。」

「ジリアンさんのお友達ですね。」

コーディが笑顔でそういうと、ウィンディがあらわれた。

「あら、ひとり足りないわね。」

「あ、おはようございます。」

「おはよう、みんな。」

挨拶を済ませると、ウィンディは今日の作業する内容を伝えた。
それは住居のなかに穴を掘ることだった。

難民キャンプにはテントだけでなく、すでにレンガで造られた家が建っていた。

穴を掘るのは下水道を作るためで、地下に大きな空洞があるのに、そこめがけて掘り進む作業だった。

ジリアンが食堂で食事を済ませたら、子供たちのリーダー格の先導で作業場に行くことになった。

作業場の住民は作業中一時的にテント暮らしをしていた。

レインが作業場の穴を覗き込んで驚いた。

「子供が入るくらいのスペースの穴なんだ。」

「そんな大きな穴を作るわけに行かないからね。」

ジリアンはその様子に首をかしげていた。

手分けして一人が一軒を担当して作業は進められた。

お昼時の休憩時に、井戸がある広場で食事を終えた3人は、周囲を観察しながらくつろいでいた。

難民キャンプは、女子供が多く、男性はまばらでいても年配者ばかりだった。

あちらこちらと子供たちは作業をしながら、遊んでいた。

掘り出された土が盛られた場所で段ボールの切れ端を尻の下に引いて滑っていた。

その仲間に入れてもらおうと、レインとジリアンがその子供たちの前に立った瞬間、ジリアンの目の前が暗くなった。

バsshャーン

高く詰まれた石の上にドラム缶が中身を吐き出して倒れていた。

吐き出された中身はジリアンの頭上に落ちてきた。

「臭い!!!」

ドラム缶の中身は肥溜めだった。

ジリアンほどではないにしろ、レインも多少肥溜めを浴びた。

周囲が笑いで包まれていた。

アルバートは大笑いしたが、ジリアンの体が小刻みに震える姿をみて、笑うのを止めた。

赤毛のジョイスが大笑いして、ドラム缶のそばに立っていた。

「あはははは、青い目が台無しだな。これで商品価値はゼロだよ。」
レインはジョイスを見上げてにらみつけた。

「ジョイス、君がやったのか！」

「へへ、これで男前があがっただろ。」

ジョイスは高く詰まれた石の上から飛んで降りてきた。

それを合図にレインは飛び掛ろうとした。

しかし、アルバートがそれを止めた。

「レイン、相手は君より、年下だし体も小さい。勝ち目がある方が相手をしたらだめなんだ。」

「でもさ！」

レインがアルバートの手を振り切ると、ジリアンがすばやく飛び出してきて、ジョイスを殴った。

「何が、商品価値がなくなっただ！僕は品物じゃない。」

レインは興奮しているジリアンの後姿をみたので身動きすることなく固唾を呑んだ。

殴られたジョイスはただニヤリと笑っていた。

薄気味悪いとジリアンが思った瞬間、誰かに似てると思った。

顔や背格好が違うので思い出せなかったが、しばらくして赤毛にそばかすだらけなので、似ているのがコリンだと気が付いた。

コリンに殴られても抵抗できなかったのは、レインやプラーナが悲しむから。

今、ここでジョイスと喧嘩をしても、誰かを意識することもない。

ジリアンは年下かもしれないジョイスにまた殴りかかった。

「なに、ニヤ着いてるんだよ！」

このとき、ジョイスは避けた。そして、周囲にいた子供たちが一斉に声をあげた。

「やれ、やれ！」

「負けるな、ジョイス！」

ジリアンとジョイスは取っ組み合いの喧嘩を始めた。

肥溜めをかぶったジリアンに、取っ組み合いをすればその肥溜めの飛び散ったものがへばりつくことは想定内の姿のジョイス。

ジリアンが少し背丈が大ききように思えるが、力加減は同等だった。最初なぐられっぱなしのジョイスも殴らない代わりに頭突きをジリアンの腹部めがけてしていた。

ジョイスは幾度となく、突進してジリアンをねじ伏せようとする。ドックが出るまでは、運動が嫌いで体力も筋肉もあまりついていなかったジリアンだったが、パジェロブルーを乗りこなすために行ってきた日々のトレーニングが成果に出ている。

喧嘩馴れしているジョイスに体当たりされてもビクともしなかった。ふたりが動き回ることによって飛び散り、異臭の範囲が広がると、野次馬が次第に二人から遠ざかっていった。

そこへ一台のトラックがクラクションを鳴らし勢いよく割って入ってきた。

荷台からホースを持ったクレアがあらわれると、ホースから大量の水が出てきた。

「肥溜めの入ったドラム缶の置き忘れがあるって聞いて、もしかと思っただらこれだよ。」

大量の水はジリアンとジョイスにめがけて放水された。

「うわあゝつ、冷たい！」

「ぎゃあゝ」

放水が終わると、ずぶぬれのふたりにコーデイがバスタオルを持ってあらわれ手渡した。

そこへウィンディがあらわれ、ふたりをバスタオルで覆うとギョツと抱きしめた。

「さあ、これで仲直り。もう、喧嘩しないの。」

ひとつのおおきなバスタオルのなかにジリアンとジョイスが包まれ

て押しつぶされていた。

ジリアンが笑顔のジョイスを感じていてなにかあると思った。

（喧嘩は、わざとなのかな。）

ジョイスの笑顔はおかしくて笑っているというより、嬉しくてしょうがない感じだった。

バスタオルから開放されたジョイスはジリアンの髪を匂った。

「まだ、臭いよ。」

ニヤけているジョイスの顔を怪訝そうな様子で見るジリアン。

「じゃ、施設に帰ってシャワー浴びよう。」

レインがジリアンの手を引いて連れて行こうとした。

「いいよ、レイニー。まだ昼からの作業が残っているんだからさ。

もちろん、ジョイスもその臭いままで作業するよね。」

一瞬で嫌な顔をしたけど、しょうがないという態度を取って、深くうなづいた。

「ジリアン、無理しなくて良いのよ。」

ウィンディの言葉に、「良いんです。」と言って、作業場に戻った。

ウィンディはジリアンの後ろを姿をみながら、ジョイスの頭を平手で殴った。

バシッ

「痛い！」

ジョイスはウィンディを見たが、ウィンディはジョイスを見ないまま、そのまま、トラックに乗り込んだ。

コーデイがすでに運転席でトラックを動かす準備をしていた。

クレアはそのまま荷台の上に乗ったままで待機していた。

レインはただうろたえているだけだったので、アルバートはレインの手を引き作業場に戻るよう促した。

「すごい歓迎の仕方だったな。」

アルバートがつぶやくと、レインは膨れ面むはをした。

レインたちが作業を終えて、施設に戻ると、施設の入り口でロブが

立ち尽くしていた。

「どうしたの？」

レインが声をかけたが、ロブは無言で答えようとしな

しかし、ロブは異臭がするのに気が付いて、レインの問いに答えた。

「クレアさんと話がしたくて待っているんだ。それよりこのにおいは何だ？」

ジリアンが無言で通り過ぎると、その異臭の元がジリアンだと理解した。

ジリアンの姿が見えなくなってから、レインはロブに成り行きを話した。

アルバートは、ジリアンの後を追った。

ジリアンがシャワー室に入ると、先にジョイスがシャワーを浴びていた。

アルバートも中に入ってシャワーを浴び始めた。

しばらく無言が続いたが、ジリアンが口火を切った。

「肥溜めをぶっつけたのは、ウィンディさんのためなんだろう、ジ

ョイス。」

ジョイスは、虚を衝かれて、ビクついていたが、しばらくして、ため息をついた。

「ジリアンたちは、よそ者だし、すぐにここからいなくなるから、しゃべってもいいかなって思うんだけど。」

「何を？」

「俺、ウィンディの子供なんだ。」

「ええ!？」

「ほう。」

ジョイスは二人に対し他には内緒にして欲しいからと、シャワー室を出した後、3階のテントへ向かい、そこで一部始終を話した。

ジョイスはウィンディの両親の養子として育った。

ウィンディが軍部の医療に従事するため入隊したときに、ジョイス

を身ごもった。父親は不明になっている。

ウィンディの父親は田舎の開業医で、ウィンディに後を継いでもらいたいと思っていたが、反抗し軍に入隊した。

父親のわからない子を産み、両親に差し出すと、軍に復帰した。

両親はジョイスを跡継ぎに育てようとしたが、ジョイスが6歳の時に、放火による事件で死亡した。

ウィンディの口から事実を知らされ、また養子としてもらわれていくことに承知できず、ウィンディについていくと言い出した。

親子であると、周囲に知られないようにすることを条件に、任務に就いた場所に難民の子や浮浪児として住み着くこととした。

ウィンディに甘えたい一心だけで悪戯をするだけでなく、親子だと悟られないためだった。

その話を聞いたジリアンは、レインや自分の素性を明かした。

「施設の前で棒立ちしていた男前は、レインのお父さんなのか。似たような話はどこにでもあるんだな。俺だけじゃないんだ。」

「事情はそれぞれ違うと思うけど、決して親子でいたくないわけじゃないと思うんだ。」

「それがわかっていいるから、親子として一緒にいらなくてもつらいよ。」

ジョイスは同じような境遇の子たちに会い、人にはなかなか言えなかったことを話せて、気持ちが悪くなっていた。

「クレアさんのことはどう思っているんだ？」

アルバートがジョイスに問いかけると、子供とは思えない悟った表情で答えた。

「ウィンディが幸せそうに嬉しそうに笑う姿を見たのは初めてだった。クレアの前だけに見せるんだ。」

ジョイスはどこか遠いところを見つめるように話す。

「俺がウィンディを笑わせることがあっても、幸せそうに笑わせることはできないんだ。俺はこれから先、ウィンディが幸せでいてくれるなら、それでいいって思う。」

アルバートがおもむろに言った。

「ジョイス、君は何歳なんだ？」

「13歳だよ。」

「ええ！！僕より年上？」

「へえ、ジリアン12歳なんだ。それにしてもはっきりしているよな。レインの方が軟弱に見えるんだけど、年上？」

ジョイスが言ったそばで、レインがテントの中に入ろうとしていて、膨れっ面むはをした。

ジリアンがあわてて、フォローをした。

「そんな風に言わないで欲しいね。レイニーは危険な目にあっても僕を守るうとしてくれるんだから。」

レインはジョイスとジリアンを二人の顔を見合った。

（いつの間に仲良くなっただらう。）

「弱いものを守るのが年長者の務めだからね。」

アルバートが口にする、レインは笑顔になった。

「ドックじゃ、当たり前のことだよね、ジル。」

「うん。」

第二十章 暗闇に閃光 7

「え、髪の色を染めているの？」

「うん。」

ジリアンはジョイスの言葉に驚いていた。

金髪のウィンディに対して、ジョイスが赤毛なのは金髪を染めているからだ。

その話を聞いてレインは、コリンを思い出していた。

コリンの場合は、黒髪を赤い髪に染めている。

ジョイスの顔を改めてみると、コリンに似ているような気がした。

黒髪を赤い髪に染めていることは内緒だったので、レインは口をつぐんだが、コリンに似ていることはその場で口にした。

「うん、僕もそう思ったんだ。なんだか余計に腹が立ってしまった。

」

「コリン？」

「うん、レイニーの同級生。」

「どろいっわけか、コリンはジルを目の敵のようにいじめるんだ。」
ふふんと鼻を鳴らして、ジョイスは納得した。

「僕が生意気なことを言うのと、レイニーが僕をよくかばってくれるからだと思うんだ。」

さつきからニヤ着いているアルバートが気になって仕方がないレインだったが、気にしないようにしていた。

4人でいっばいっばいのテントが天井から吹き込む風で大きく揺れた。

ゴオーツ

3人はテントの梁を押さえた。

ジョイスはテントから出て、3階の窓枠があつた場所に立った。

「夕日が沈む頃に上空で風が吹き込むんだ。もうすぐ、夜だよって

「いう合図に思えるんだ。」

3人がテントの梁を押さえ込むことに成功すると、ジョイスの言葉にうなづいた。

ジョイスはその場所から外を眺めていると、真下より先にあるトラックの向こう側にクレアとロブが二人立っているのが見えた。

「意外と、しつこいオトコだな！」

「何言ってるんですか、クレアさん。俺にも教えてくださいって言ってるんですよ。」

二人は言い争いをしていた。

周囲に聞こえないようにと、入り口とは反対側の裏手でトラックを背にして話をしていた。

「俺がレテシアに謝らないと、できない話っていったいどんな話なんですか。」

「だから、話をしないって言ってるんだ。」

しばらく口をつぐんで、ロブはまた、口を開いた。

「後日、レテシアに会ったら、謝りますから、話を聞かせてください。」

「後じゃ、遅いんだよ。レテシアと心を交してからじゃないと、できない話なんだよ。この分からず屋！」

歯軋りをして、悔しさを押さえ込もうとしたロブに、クレアはにらみ返した。

「レテシアの気持ちを理解できない男に話しなんて、できないんだよ。」

「レテシアに関わっていることなのですか。それは、それは……。」

口にできない言葉は、言い出せない名前。

イラつきながらロブは、指で頭をかき乱した。

「ジェフが知っている話なんでしょうね！」

「そうだ！ジェフなら知ってるというか、考えることができる。レ

テシアの事をよく理解しているからね。」

その後出てくる言葉は聞きたくなかったので、ロブはクレアに背を向けた。

「わかりました。もう聞きません。」

クレアは腕組みをして、ブーツのかかとで音を立てた。

コツコツ

「SAFの仕上がりはどうなってるんだ。」

「10日間掛かります。」

「10日だと！？計器類の取替えにそんな時間がかかるのか。」

「エンジンの圧力計がイカれてしまつて、なかなか手に入らない代物なんですよ。」

「ジヨナサンか！」

「ジヨナサンは気が付いて、話を持ってきたときには、ここに来る事を決めた後だったそうですよ。」

今度は、クレアが頭を指で搔いてみせた。

「エンジンの圧力計がイカれるなんて・・・。」

「薬剤を使ってグリーンオイルの生産する場合鉄分を多く含んでいたそうです。磁場の影響で澱が出来てしまい、圧力計を狂わせたそうですよ。」

「デイゴでも想像付かない話なんだな。」

「そうです。」

クレアに背を向けていたロブは、頭上からの気配を感じて上を見上げた。

施設の3階らしきところから、覗かれているのが見えた。覗いている二人のうち一人がレインだとわかった。

「クレアさん、これで失礼します。」

ロブが上を見上げたまま、言うと、クレアは何も言わなかった。

それを確認して、見上げるのをやめて、立ち去った。

トラックの運転席には、ふたりの会話が聞こえるようにと忍び込んだウインディがいた。

ウィンディはレテシアの事を知らなかったが、ロブやレインの会話を聞けば、どんな女性か想像はついてくる。

クレアが思い入れをしているのは、レテシアなのかと考えていた。

上から、クレアとロブの様子を見ていたレインは、ジリアンから聞いたジョイスのことを思い返した。

「ジョイス、クレアさんは君の事を知っているのかな。」

「知っていると思うよ。ウィンディがクレアの前で俺を抱きしめることにためらったりしないから。」

「そうなんだ。」

クレアが言った「お前たちの命を狙っている奴が、ロブを変えさせてくれるだろう。」ということを出した。

レインは窓枠に肘をついて、考え込んだ。

クレアがロブと言い争いをしているのは、ロブの気持ちに揺さぶりをかけているのだとわかっていて、

クレアの言ったことを聞いていなかったら、二人のことを心配してうるたえていたかもしれない。

それはジリアンと話をしていて、理解できたことでもあった。

ジョイスの言葉に、自分自身の考えの浅さを痛感した。

ロブのことも、クレアのことも、ジリアンのことも、自分の周りにいる人たちのことも、表面上のことしか理解できていない自分をすこし恥じた。

「また、なんか考えているの？レインー。考えちゃだめだよ。」

ジリアンに見透かされて、ふて腐れた。その様子に気持ちをジリアンが気づかれてしまったていることによく気が付いた。

「ごめん、考えないようにしようって思ってるんだけど・・・。」

「レインーってさ、考えないで行動してしまうところがあるのに、無駄に考えてしまうところあるよ。ま、どうせ忘れてしまうんだけどね。」

その二人の会話を聞いて、ジョイスが笑いながら自分の両手で二人

の肩を寄せた。

「おもしろいなあ、お前たち。なかなか良いコンビじゃないか。怪訝な顔で二人はジョイスを見ていた。」

3人の後ろでアルバートが立っていた。

「夕食を食べなさいって、下からお呼びが掛かったよ。」

3人は元気良く返事をした。

「ハアイ」

レインはシヴエジリアンドでの生活をエンジョイしていた。

ジリアンとジョイスとアルバートとじゃれあいや取っ組み合いなどしながら、暑さと砂埃の環境の悪さのなかでも、みんなと作業することの充実した時間がなにもにも代えがたいものに感じていたからだ。

ドックやS A Fでは大人たちと行動をともしにっていて、同じ年代同士で時間を過ごすことができるのは、学校に登校していた頃以来となった。

しかも、気持ちに羽が生えたような状態は、ロブがいないことだと気づくのに時間がかかったくらい楽しい時間を過ごした。

S A Fがシヴエジリアンドの地を離れる日が決めたので、カスターが報告しに来た。

カスターが施設に入ると、いちばん最初に目に入ったのがウィンディだった。

美女にここを奪われる想いがしたが、ミセスロックフォードのことを思い返して思いとどまった。

その様子を手に取るように理解していたアルバートがカスターの背後に近づいて耳元で囁いた。

「クレアさんの恋人だったさ。」

その言葉に驚きが隠せなかった。

「うそだろ。」

そう口にする、クレアが「誰がいったい、あたしの恋人がオトコだと決め付けたんだ。」とってそう、想いを寄せれば痛い返しがきたような感じがした。

「ロブは知っているのか。」

カスターは後ろを振り返らず、アルバートに尋ねた。

「うん、なんか、うすうすわかっていたみたいだね。」

アルバートは鼻をならすように得意げにいい、カスターの反応を待っていた。

アルバートの期待を裏切るように、冷静にカスターはレインたちを探し、見つけると笑顔でSAFが離れる日を告げた。

（うむ。無理してるわけ？）

アルバートはそう思いながら、カスターの気持ちの様子を計った。

（クレアさんに思い入れをしているのは、ロブやカスターだけじゃないからね。）

アルバートはこころのなかでつぶやいた。

ジョイスは悲しそうな顔でレインとジリアンをみていた。

「ここからいなくなっちゃうんだ。」

ふたりは「寂しい気持ちは一緒だよ。」とジョイスに言った。

「もし、良かったら、その、可能であれば、スタンドフィールドドックを訪ねてきて欲しい。そのとき、ドックにいてなくても、僕たちが育ったところだから僕たちがいるのとかわからない場所だから。」

ジリアンは改まってジョイスに言い、言葉がつまると、レインが続けた。

「僕たちがいてるように君を歓迎できるよ。君さえ良ければの話しただけ。」

ジョイスは初めて友達ができたようだと言口にして涙をためて二人を抱きしめた。

カスターは3人の様子を微笑ましく見ていた。

離れたところで、その様子を見ていたウィンディはあることをここに決めた。

その晩、レインとジリアンはジョイスが寝泊りしている家に寝ることとなり、テントではカスターがアルバートと泊まる事になった。

ジョイスの寝泊りしている家には、ジョイスのほかは何人か少年たちがいてた。

みんな親兄弟を失くして一人になってしまった者たちだった。

みんながわきあいあいと会話をして、就寝になると、建屋の外から足音がした。

足音に気づいたのは、ジリアンでレインをおもむろに起した。

二人以外の者はみな熟睡状態になっていた。

起きようとするレインをジリアンは制止した。

「みんなに迷惑が掛かるかもしれないから、寝たふりをしよう。」

「え？だって……。」

足音がやみ、ドアの鍵が壊される音がしたので、ジリアンはレインに布団をかぶせた。

物音があまりしないように、鍵は壊され、外からふたりのオトコたちが入ってきた。

（物盗りかな。金目のものはなにもなさそうなのに。）

レインがそこらでつぶやくと、ハツと思いつき、常時腰にさげていたスタンガン棒をジリアンにそっと手渡し、自らはベッドから音を立てずに転がりおちてベッドの下に潜り込んだ。

男たちは懐中電灯にスイッチをいれ、床を照らすと、少年たちが寝ている方向に向けた。

電灯に気づいて目が覚めた少年が体を起そうとすると、男たちは制止した。

その少年をどうにかしようという目的ではないらしい。

電灯で照らしたジリアンの頭をみて、男たちは「金髪の少年だ。」

と言い、顔を確かめるために掛け布団をめくった。

ジリアンはレインから手渡されたスタンガン棒にスイッチをいれて、それをオトコのみぞおちめがけて衝いた。

ビリビリビリッ

「うわああ。」

レインは自分のベッドのしたより、先にころがり込んで、もうひとりのオトコの後ろに立ち、背後から羽交い絞めにした。

その物音に気がついて、ジョイスが素早く起き上がって部屋の電気

にスイツチを入れた。

「いったい、なにが起きたんだ。」

侵入した20代のオトコがふたり、それぞれがレインとジリアンに仕留められ、その部屋で寝泊りしている少年たちが何人か起きていた。

ジリアンはさらにスタンガンでオトコのみぞおちからわき腹に移動させると、オトコは気絶した。

レインが羽交い絞めにした男はレインより背が高いため、反り返ってレインから逃れようとしたが、ジョイスがその男のみぞおちめがけて頭突きをしたので、気を失った。

その様子をみていた少年たちのひとりが叫んだ。

「失敗した！」

恐怖に怯え、その少年はすぐさま、部屋から飛び出した。

ジョイスは窓から外の様子を伺い、飛び出した少年が家から遠ざかっている様子を見て、さきに人がいないか確認した。

そして、他の少年たちに合図をした。

「急げ、ここは危ない。」

ひとりが床の戸板を持ち上げ、なかに穴があった。ひとりひとり穴の中に入っていく。

「いったい、どうしたんだ。ジョイス。」

レインが叫ぶと、ジョイスは「黙れ、静かにしろ。」と言った。

ジリアンはジョイスの尋常じゃない様子にレインへ穴に入るよう促した。

「ジョイスは？」

「ジルが穴に入ってから、入る。」

侵入した男たち以外の残っていた全員が穴に入った事を確かめて、ジョイスは自分が穴にはいると戸板を閉じた。

穴に入ると滑るようにして落下していく。

落ちた先は地下道。下水道をつくっているといいながら、そこは地下水が流れる地下道だった。

少年たちの一人が懐中電灯を手にして、ジョイスが降りてきたのを確認した。

地下道の側面に鉄のレールが敷かれていて、そこを懐中電灯で打ち鳴らした。

キーンッ

しばらくすると、地下道のおちこちから子供が降りてきた。

近くでジャンプしてきたかのように落ちてきた少年が叫んだ。

「みんなしゃがんで身を守れ、なにか来る!」

降りてきた子供たちは一斉に両手を頭にあて身をかがめた。

「なにか起きたの、ジョイス。」

「あいつは無線機を盗聴しているんだ。どこかでミサイルか何かがかつちに向けて発射されたんだ。」

何気に尋ねたレインだったが、驚愕した。

眠れないアルバートはテントから出て、窓枠に肘をつき外を眺めていた。

レインたちが寝泊りしているであろう場所をみつめていた。

就寝時間が決まっただけで暗闇につつまれていた住居に明かりが次々とつき始めるのを見て、胸騒ぎがした。

星の光がやけに輝いている空に、赤い筋が走った。

その筋はこちらに向かって飛んでいることがわかると、アルバートは身構えた。

「まさか、うそだろ。」

その言葉にカスターが目を覚ました。

「どうしたんだ、アル?」

危機感のないカスターの言葉を打ち消すように、暗闇に閃光が走り、大地に突き刺さって爆音が轟いた。

ゴゴオーッ

第二十章 暗闇に閃光 9

閃光は、レインたちがいた家を直撃した。

地下道では地響きがして、天井から小石がパラパラと落ちてきた。音がいったん止むと、「逃げ！」という叫び声がところどころでしていた。

ジョイスたちも立ち上がって、みんなが行く方向へ向かって走っていた。

レインとジリアンはわけがわからないままに、ジョイスについて行った。

起き上がったいたカスターだったが、爆音が轟いたので尻餅をついた。

「いったい、なにが起きたんだ。」

身構えたアルバートは、立ち上がり窓に手をつけて、外を見た。

閃光が落ちたであろう場所が赤く燃え上がっていた。

レインたちがいる場所ではないだろうかと考えていたが、下からトラックのクラクションが聞こえた。

「アル、キヤス、急いで下においてトラックに乗ってちょうだい。」

クレアが叫んでいた。

二人は急いでとるものもとりあえず、降りた。

そして、二人はトラックの荷台に乗せられた。

運転しているのはクレアで、助手席にはウィンディが乗っていた。

荷台には、ほかに施設にいてた軍人たちが乗っていた。

「いったい、なにが起きたんですか。」

カスターが尋ねても、なにもしゃべろうとしなかった。

「話せないようなことが起きているのですか、内部事情ですか。」

「黙れ！」

カスターの言葉に我慢できないと言った風に軍人のひとりが言ったが、他の者に「よせ。」と止められた。

張り詰めた空気がトラックの荷台に漂っていた。

アルバートが上を見上げていると、また赤い筋が飛んでくるのが見えた。

「あ！」

叫んだ瞬間、さっきまでいた施設が爆発した。

そして、荷台にいた軍人とアルバートは一斉に身構えた。

爆風が周囲を包んで、走り去るトラックにも及んだ。

身構えていなかったカスターは、爆風にまぎれた砂埃に目をやられてしまい、叫んだ。

「痛い！」

叫ぶことによつて、口の中に砂が入り、喉を詰まらせた。

「ゲホツゲホツ」

トラックの荷台は砂だらけになった。

爆音は、S A F にいてたクルーたちにも聞こえた。

軍の施設から、レインたちがいる場所をみると、赤い炎があり、そこから黒煙が立ち上っていた。

「何が起きたんだ。」

S A F のそばには軍人がいたが、ロブが尋ねても答えようとしなかった。

「黙認とは、内部のトラブルか。」

軍人に聞こえないようにつぶやくと、その言葉にデイゴが反応した。「冷静にそういう事を言うなよ。レインたちがやられてるかもしれないんだぞ。」

ロブは無言で走り出し、パジェロブルーに向かった。

デイゴもあとについていき、パジェロブルーの発進の準備を始めた。軍人は制止したが、「何が起きたか言わないのなら、現場を見に行く事を黙認するんだ！」とロブが怒鳴った。

ジヨナサンがその軍人に言った。

「パジエロブルーは武器を取り付けられていない。飛んでいっても支障はないだろう。」

ジヨナサンの言葉に軍人は発進許可を出した。

ロブはジヨナサンの言葉に一抹の不安を覚えた。

（丸腰のパジエロブルーは攻撃されても反撃できないということじゃないか。）

赤々と燃える住居の上を飛ぶパジエロブルー、ロブは操縦席から下を見ていた。

炎から逃げ惑う人たちが見えたが、子供たちの姿は見えない。

施設にいた大勢の子供たちはこの住居一帯にいてるはずなのに、ひとりもみかけなかった。

黒煙をさけて、ロブは一台の走るトラックを発見した。

トラックに乗っていた軍人は、パジエロブルーを見つけると、ウィンディに合図を送った。

ウィンディは窓から顔を出し、上を見上げた。

「なにか飛んでいるらしいわ。」

「パジエロブルーかもしれない。後ろの二人に確認させて。」

ウィンディが軍人に伝えると、カスターは見上げることすら出来ないで、アルバートが見上げた。

「パジエロブルーだ。ロブかもしれないね。」

レインたちは、地下道を抜けて、河川敷に出た。

あたりは懐中電灯を手にした子供たちで埋め尽くされていた。

河川敷の周りは森で覆われていたが、森を少し行ったところに建屋があり、そこから、子供たちは布を持ち出した。

その布をまとい、子供たちは眠りに着こうとしていた。

それはまるで最初からこの惨事が起きる事を知っていて、用意され行動するように指示されていたかのようにだった。

レインとジリアンはうろたえていたが、ジョイスたちは布を受け取らずに、建屋にあった武器を手にもった。

「見張り役なんだ。皆が寝ている間に、獣たちや侵入者に襲われないようにするために。」

しばらくすると、月明かりに影が差したので、レインは上を見上げた。

「パジエロブルーだ！」

そして、そこへトラックがやってきた。

荷台から砂だらけの軍人たちが降りてきて、運転席からクレアが出てきた。

「クレアさん！」

レインたちはクレアに飛びついた。

「無事だったな。良かった。」

クレアがレインたちを抱き寄せると、後方でカスターが言った。

「無事じゃないですよ、ゲホツゲホツ。」

パジエロブルーが降りてくる様子を見て、ジリアンはクレアに尋ねた。

「何が起きたんですか。」

クレアはしばらく黙っていた。

周囲にしている者は、クレアが次に口にする言葉を待っていた。

「赤い閃光。グリーンオイル財団研究所で開発されたレッドオイルの爆弾なのさ。」

軍人たちは、とうとう言ってしまったという感じでクレアの様子をあきれて見ていた。

「研究所が攻撃してきたのですか。」

レインが言くと、ジリアンが肘で衝いた。

「軍だろう。派閥が出来ていて、牽制けんせいし合っている話を聞いていたんだ。

シヴェジリアンドの軍の施設は、皇帝とは反する勢力に属しているので狙われた。」

「だったら、軍の施設にあるS A Fが危険じゃないですか。」
カスターが目をこすりながら、言った。

「軍の施設は狙わない。大義名分がないからね。診療所を狙ったのよ。」

ウィンデイが言うと、ジョイスが駆け寄ってきて言った。

「違う。ジリアンたちが狙われたんだ。」

周囲の人たちがジョイスの方へ一斉に向いた。

ジリアンはうつむいた。

パジェロブルーを子供たちから遠ざかって河川敷に着陸させたロブがそこにあらわれた。

「無事だったか。」

レインたちの姿をみつけて、そうだったが、命を狙われたことはまだ、知らなかった。

知ること、暗闇に赤い閃光が走るさまが、ロブのところに起きることとなった。

第二十一章 川面に映るもの 1

深い森に朝がくると、白い霧^{もや}があたりを覆い尽くし、体を休め眠りにつく子供たちを覆い隠しているかのようだった。

武器をもったジョイスたちは疲れきった体を木々にもたれて休め、見えないながらも耳の感覚であたり見張っていた。

クレアは寝息をたてるウィンディを抱きしめていた。

ロブは叱られた子供のようにひざをまげて足を両腕で抱えてうずくまっていた。

レインとジリアン、カスターとアルバート、それぞれに寄り添って眠っていた。

交代を言われて、ようやくジョイスは武器を手渡して、眠りについた。

目が覚めたウィンディはジョイスのそばに寄り、手紙を置いた。

「ほんとに、いいの？」

「ええ、あなたに任せるわ。クレア。」

トラックで移動中、ふたりは話し合った。

ウィンディはジョイスと離れる事を決意していた。

「クレア、前にも話をしたわね。ジョイスを生んだ理由。」

「ええ。」

「これからは、ジョイス自身のために生きていて欲しいの。生んだことを後悔したくないから。」

ウィンディは、強姦^{レイプ}されて、ジョイスを身ごもった。

犯人を突き止めるために、ジョイスを生んだというのが理由だった。

「一度、生んだ事を後悔したわ。育てる自信を失くした時よ。愛し
いってどうしても思えなくて・・・。」

ウィンディは育児放棄として、生後3ヶ月のジョイスに乳を与えず、餓死させようとしていたことがあった。

「小さな手をちからいっぱい、わたしの指を握って、一生懸命、

乳を欲しがった。あの時の苦しみを乗り越えて二度と死なせはしないって誓ったの。」

クレアはウィンディが言いたい事を考えあぐねていた。

それまで危険な目に合うことを承知でそばにおいていた。親子として生活できなくても、一日一度は顔を合わせて無事を確認できる生活に満足していた。

その生活を手放してまでの決断は何だったのかと。

決断させたもの、それを口にしないまま、クレアはウィンディの話聞いていた。

「あの子は、クレアを信用しているわ。あなたの言うことながら、聞いてくれると思うの。」

「悪いけど、他人の子供の面倒はそんなにたくさん見切れない。ロブ、キヤス、アル、レイン、ジリアン、この上、ジョイスまでなんて、無理よ。」

「ふふ、そうね。でも、面倒見て欲しいわけじゃないわ。あの子が自分で自分のために生きていけるように、アドバイスしてほしいの。」

「見守ることもできそうにないけど、誰かに言付けて置くことはできるわ。」

「言付けておく？」

「ええ、スタンドフィールドドックを拠点に巣立っていく分には、大丈夫だろうと思う。テレンス夫妻に見守ってくれるよう言付けておけるわ。」

「そう、そうしてもらえると、ありがたいわ。あなたが育った診療所を守っている夫妻ね。」

「で、面と向かって話すわけ？」

「ううん。手紙でも書いて、黙って去るわ。」

ウィンディはジョイスの頭にキスをすると、施設にいた軍人たちとともに、徒歩でその場を去った。

次第に霞が晴れ、朝日が木々から差ししてきた。

鳥たちの鳴き声が森のなかに響き渡り、森に住む生き物たちが活発に動き始めようとしていた。

その動きに呼応するかのようには、レインたちは眠りから覚め始めた。ロブが目を覚ますと、立ち上がり、クレアを探した。

クレアはひとりトラックの助手席で寝ていた。

ロブはその姿をみて、レインたちがなぜ狙われたのか、尋ねることを諦めた。

布をかぶって寝ていた子供たちもつぎつぎと置きだし、建屋に向かっていった。

建屋では備蓄された非常食があり、建屋に来たものから配給していた。

ロブは、コーデイがいないことに気がつき、カスターを起して、理由を聞いた。

「クレアさんに言われて、S A Fにもどり医療の消耗品搬入の作業することになっていたよ。」

しばらくして、起きていたアルバートがロブに言った。

「なにか、あったら、S A Fにフォレスト・プロフォンタへ行くよう指示していたよ。」

大きなあくびをしながら、そう伝えようと、ロブはクレアが寝ているトラックの方を見てにらんでいた。

（なに、最初からなにかあるとわかっていたのか。また、レインたちを餌に……。）

アルバートはロブが何を考えてるかわかっていたので、言った。

「なにか、あったらというのは、レインたちのことじゃなくて、施設のことだよ。」

僕たちがいた施設ぶっ飛んだんだから。」

「聞いたよ。でも、先にレインたちが襲われたのは確かだ。」

「知ってたかな、ロブ。」

「なにか？」

「あの施設の3階屋上はすでに破壊されてたんだよ。」

「え?!」

「今度は屋上だけじゃ済まないってわけだよ。」
あくびをしながら、アルバートは建屋の方をみていた。

「施設だけじゃなくて、難民たちの住居まで狙い撃ち。それは僕たちがあそこに行く前からわかっていたことなんだよ。」

レインたちのことはあわよくば、始末しようって魂胆だったかもしれないけど、稚拙だったんだ。計画性がまるでなっていない。」

アルバートは建屋を指差して、「もらってくる。」とだけ言って、二人の前からいなくなった。

カスターは両手を上げて、首をかしげた。

「クレアさんのやることに口出ししても仕方ない。信じるしかないでしょ、ロブ。」

「口出しするつもりはないし、信じてないわけじゃない。知っていること、わかっている事を教えてくれないんだ。」

「じゃ、知らなくてもいいことじゃないのかな。僕はもう、クレアさんが怖すぎて、知りたいとも思わないよ。」

カスターも大きなあくびをしたが、ロブににらまれて、中途半端にあくびをやめた。

ロブはあたりを見渡し、ウィンディと軍人がいないことに気がついた。

「ウィンディさんがいない。」

「そうだね。クレアさんは?」

「トラックで寝ている。」

「じゃ、別行動じゃないのかな。軍人もいない様子だし。」

ロブは当りをみわたし、子供たちばかりなのを不思議に思った。

「逃げてきたのは子供たちばかりじゃないか。」

「何、今頃そんなこと言ってるんだよ。」

カスターはロブを鼻で笑った。

今度はロブににらまれてもやめなかった。

第二十一章 川面に映るもの 2

ジョイスが昼前に目が覚め、ウィンデイの手紙を河川敷で読んだ。止め処なく涙がこぼれ、拭いきれない。だれそれと言われることなく、難民に混じって孤児を装い、周囲に悟られないよう努力してきたことが今無駄になったような気がした。

それにウィンデイに捨てられたという想いが強かった。そんなジョイスの後ろ姿を見守っていたクレアは、じっとしていられず、後方から声をかけた。

「ジョイス。」

クレアが名を呼んだのはわかっていたが、涙で濡れている顔で振り返ることができなかった。

立ち上がって、川に近づき、顔を洗った。

川面を眺めていると、クレアが後ろに立っているのが映っていた。話をそらせるために、ジョイスはコリンの名を持ち出した。

「クレアはコリンを知ってる？」

「ああ、知ってるけど、どうして？」

「ジルとレインに言われたんだけど、俺、コリンって奴に似てるの？」

その言葉に、クレアは愕然とした。

それまで気がつかなかった。確かに似ている。

そして、クレアは青ざめた顔になっていることに気がついて顔を両手で伏せた。

その様子に、ジョイスは心配になり、「大丈夫？どうかしたの？」と振り返って声をかけた。

「大丈夫よ。」

クレアは、ゆっくりと上を見上げて天を仰いだ。

陽は真上から照らし、まぶしかった。

（ウィンデイはジョイスの父親が誰であるか、わかったんだ。）

クレアはこころのなかでつぶやいた。

胸騒ぎがしてしかったなかつたが、手紙の内容をジョイスから聞き出すつもりはなかった。

「コリンに確かに似てる。」

クレアは座り込んでいるジョイスに合わせて、かがんだ。

「コリンに会えば、他人のようにには思えないくらい似てるって感じると思うよ。」

ジョイスはクレアの言葉の意味を理解できないままだったが、手紙の内容に少し触れた。

「ウィンディからクレアの指示に従うように言われた。それって、スタンドフィールドドックに行くようになってこと？」

「まあ、いづれ。ただし、このまま、ウィンディのようにここから姿を消すわけに行かない。」

クレアは立ち上がって、ジョイスを見下ろして言った。

「ジョイス、君は高所恐怖症だったわね。SAFで連れて行くわけにいかない。わたしの知人に言付けておくから、私の名を語った人物の指示に従ってちょうだい。」

「うん。信じていいんだよね。」

「ええ。ただし、わたしの名前はクレア・ポーターじゃないわ。」

「え?!」

「クレア・テレンスにしておいて。」

そう言って、クレアはジョイスにウィンクをした。

非難してから子供たちはすでにその場所から移動していた。

向かった先はフォレスト・プロフォンタで、そこはトランスパランスという宗教団体がコミュニティをつくり住処としている場所で家を失った子供たちを受け入れてくれるという情報があった。

夜警をしていたジョイスたちは、河川敷を去る準備をしていた。

ロブはクレアに言われて、パジェロブルーでコミュニティに向かっていた。

クレアとカスターが運転席に、アルバート、レイン、ジリアンはトラックの荷台乗り、ジョイスたちをあわせて乗せると、出発をした。徒歩の子供たちより、先に行つて、情報が間違つていないかどうか確かめる必要があつた。

白い壁で覆われたコミュニティの門を見つけると、クレアが情報の確認をした。

情報は間違つていなかったが、大勢の子供たちを受け入れることはできないと言つてきた。

責任者が出てきて、クレアと話し合い、コミュニティ建設のために住んでいた建屋があつて、そこに一時的に子供たちを受け入れる話となつた。

トランスパランスという宗教団体は、国への干渉を拒み、社会から拒絶して、コミュニティを建設して、信者たちは共同生活をしていった。

人道的主観から不幸な子供たちに援助をするという姿勢があり、とくに子供たちに信仰を強制指導することはなく、自立してコミュニティをさる者はそれなりにいた。

非難してきた子供たちは夕方には、このコミュニティに到着し、支持されたどおりに、建屋に向かい、そこで寝泊りする準備を始めた。建屋は大勢のひとたちが建設のために寝泊りしていたもので、共同トイレや風呂が完備されていた。

しばらくの間、使用されていなかったために手入れが必要だったが、当面の寝泊りするためには2段ベッドがたくさん整備されていたので困らなかつた。

安心して眠ることを確保されたことに、多くの子供たちが緊張感から開放された。

コミュニティからは、援助として食料が運ばれて、子供たちには疲れを癒す、暖かい食事が提供された。

クレアとカスターはS A Fと連絡を取るためにコミュニティの中に入った。

コミュニティの中は、みな同じ制服をした老若男女が行き交い、白い建物で埋め尽くされていた。

コミュニティの本部に案内されて、責任者から通信に関して注意を促された。

クレア自信は慣れているので、通信の際は、暗号を使った。SAFとの落ち合う時間と場所を連絡しあつて、通信を終了させた。

カスターはコミュニティの門を出たあと、クレアに尋ねた。

「子供たちだけが非難できたというのは、レインたちが作業していた下水道につながる穴を掘っていたからというのは聞いたんですけど。なぜですか。」

「大人が通れる穴を掘っている時間がなかったことと、大人が入れる穴を掘っていては、スパイに気づかれてしまうからね。」

新参者や怪しい人物には、内容を報せてなかったんだ。」

「そこまでする必要はなにも施設が一部攻撃されるまでにはなかったでしょう。」

「ああ、難民が政治戦略のために犠牲になるうることを危惧した人物がいてね。その人物はスワン村でアレックスのことが書かれた本を読んだからなんだ。」

「アレックス・スタンドフィールド？」

クレアはアレックスのことを語った。アレックスがドックを建設してそこから、グリーンオイルの配給やら始めた。オホス川周辺の町は昔、更地で、そこに多くの人が配給を求めて集まってきて住みついていた。

黒衣の民族や、グリーンオイルを買い占めて荒稼ぎしている悪徳業者らは、その住民たちを見せしめに攻撃しようと企んだ。

その時、アレックスは住居に穴を掘るよう指示した。オホス川には、地下を流れる水脈があつて、それを頼りに穴を掘らせた。

穴を使用するような惨事は免れたが、オホス川周辺の町に大火事が起きた時、住民はその穴で火事から逃れることができたということがあつた。

「その人物は死の病を患っていたので、トランスパランスの情報
確保してから、亡くなったという話をウィンディから聞いたんだ。
クレアはこのとき、一度失敗したスワン村入りを、再度挑戦しよう
と決意したのだとカスターに語った。」

第二十一章 川面に映るもの 3

寝泊りする場所を与えられて、非難した子供たちは一斉に河川敷に向かい、水浴びをし始めた。

レインたちは夜、川に入ることに抵抗があった。

この川は底が浅いのを承知しているが、夜の川は冷たくて、浴びるところの話ではなかった。

しかし、ジョイスは平然と水浴びをしていた。

「俺たち、難民キャンプでは水浴びするのに慣れてるから、冷たくても大丈夫なんだよ。」

レインたちはクレアからタオルをもらい、それを濡らした体を拭いた。

「ジョイス、夜警はしなくて済みそう。トランスパランスのメンバーで警護担当の者がこちらでも配備してくれるという話だから。」

クレアはジョイスにタオルをかけ、髪を乾かしてあげながら言った。

「それは良かった。これで今晚はゆっくり眠れる。」

「トランスパランスの幹部が災難を逃れたであろう大人たちとの連絡をとってくれるというので、落ち着いたら今後どうするか話し合ってくれる。」

ジョイスは頭を垂れされるがままの状態でクレアに言った。

「明日にはもう、レインたちやクレアはここを去るんだね。」

「ああ。しばらくは辛いかもしれないが、ここが落ち着いたら、動くといい。」

「うん。」

「これだけは言っておく。ウィンディはジョイスを見放したりしたんじゃない。生き延びて幸せになってほしくて、別れを決意したんだ。」

「うん。わかってる。ウィンディより先に命を落としてしまうようなことになったら、俺を生んだ事を後悔したくなるって、そう手紙

には書いてあった。」
頭をタオルで包まったジョイスをそのまま、抱きしめた。
「どんなに離れていても、ウィンディはジョイスを愛しているし、
幸せを願っている。それだけは忘れないでいてほしい。」
「うん。」

深い森の奥で、白い壁に覆われたコミュニティは月明かりでより一層輝いているように思えた。

レインたちは無事でいられたことに安堵感をもったものの、このまま無事でいられるかどうかの不安がよぎっていた。

寝泊りしている建屋は明かりがついているうちは賑やかだったが、就寝時間が決まっていたので、明かりが消えると、ひっそりと静まり返った。

トランスパランスの警護の者たちが建屋の周辺に配置された。

足音が響いたが、建屋のなかで眠る子供たちは疲れきっていて寝入っていた。

アルバートは眠れず、建屋の入り口で座り込んでいた。警護の者たちが素通りしていく姿を眺めていた。

アルバートはいつの間にか寝入ってしまった、朝靄あさむせがかかって冷えてきたのを感じて目が覚めた。

肩まですっぽり布が掛けられているのに気がついて、立ち上がった。顔を洗おうと、河川敷に行くと、クレアが全裸で水浴びをしていた。靄がかかっていて姿かたちはわからない。クレアの服らしきものが河川敷に置かれているから、全裸なんだとわかった。

アルバートは川に近づくことはしなかったが、そこから離れることもしなかった。

クレアは水浴びを終えて振り返り、服がある場所に誰か立っているのに気がついたが、眼鏡をかけておらず、わからなかった。

「俺だよ。」

声からアルバートだとわかると、裸のまま、近づいて行った。

動揺することもなく、服のそばまできて、濡れたまま、着こんだ。眼鏡を取り、かけると、髪をまとめあげた。

その様子を身動きすることなく、アルバートは見ていた。

「クレアさん、ご褒美はいつもらえるのかな。」

「今ではないことは確かだ。」

アルバートはそのまま、立ち尽くし、クレアはその場から立ち去った。

霧が晴れると、建屋の子供たちは一斉に置きだすと、川に向かい、顔を洗い始めた。

レインたちも同じように、顔を洗った。

レインは川面に映る自分の顔を見て、レテシアを思い出した。

（今頃、どうしているだろう。僕たちのことを知って、心配していないだろうか。）

「なんだよ、レイン。男前だからって、自分の顔に見とれているのか。」

ジョイスが背後から声をかけ、からかった。

「そんなはずないだろ。」

レインは自分の顔が映った場所に手でバシヤバシヤとかいた。

ジリアンがジョイスの肩に手をかけ、言った。

「レインは自分のソックリなお母さんを思い出していたんだ。」

ジョイス、レインはお母さんと離れて暮しているんだよ。」

その言葉に、ジョイスは罰を悪くした。

「俺は顔が似てないから、疑われることなかったけどな。似てなくて良かったかな。鏡みて思い出すこともない。」

悪びれてそういったものの、言ったことに対して悲しくなってきた。

ジリアンはジョイスの肩に置いた手を強く握った。

「強がるのはやめよう。ただ、僕たちもジョイスと同じ境遇だって言いたかっただけなんだ。」

「そうなんだ。ごめん。」

素直に謝ってジョイスはジリアンの手に自分の手を置いた。

「俺、ここが落ち着いたら、ドックへ行くよ。」

レインとジリアンは顔を見合わせた。意外だったからだ。

「僕たちと一緒にS A Fで……。」

「ああ、俺、高所恐怖症なんだ。建物にいる分にはいいけど、空飛んでいるのはだめなんだ。」

ジリアンは少し目を丸くした。

「空飛ぶのがだめなんて、それだけは気持ち理解できないや。ごめん、ジョイス。」

「はは、そうなんだ。そうだよなあ、あのピカピカ光った飛行機を乗り回しているもんな。」

「いつか、ジョイスをパジェロブルーに乗せたいなって思ったんだけど。」

「無理！」

「即答だね。」

3人は笑った。

「僕たちより先に、ドックにいるかもしれないね。僕たち、これからもS A Fに乗ってあっちこっちへ向かっていくから。」

レインはジョイスの方を向きながらも、別のところを見ているかのように言った。

「前にも言ったけど、僕たちがいなくても、ドックの人たちが歓迎してくれるから。」

「わかったよ。じゃ、今度会うときは、ドックで会おう。約束だ。」

ジョイスが右手を差し出すと、レインとジリアンも右手を出し、3人で握手をした。

第二十一章 川面に映るもの 4

河川敷にS A Fが着陸すると、レインたちはジョイスたちに別れを告げて、搭乗していった。

S A Fが離陸すると、レインとジリアンは、窓からしたを見下ろした。

一生懸命に手を振るジョイスがだんだん小さくなっていくと、ジョイスの無事を祈った。

クレアは診療室の診察台に膝を抱えて憂いでいた。

コーデイがクレアの様子をみて、いつになく落ち込んでいると感じて、音も立てずに診察室から出た。

クレアはウィンディを想った。

（はやまったことはしないでほしい。わたしたちが恨んでいる相手は復讐するような相手ではない。）

クレアが考え付いた答えに、ダンの服毒死が歯止めをかけたのだから、ウィンディにも歯止めを掛けないといけない。

全裸で絡まった二人の体、求めていた情熱がそこにはあったのだと確信できた。

自分の腕を撫でて、ウィンディの肌を思い出していた。あの肌が震えて怯えている姿は思い浮かべたくない。

しかし、ジョイスの父親の正体を知った時、どれだけの衝撃がウィンディに起きただろうか。

セシリアの遺伝子情報を教えて欲しいと言ったとき、理由を聞けば良かったのだろうか。後悔しても遅い。

朝方、川で水浴びをしたのは、後悔を振り払うため。そして、自らを清めるための儀式。

汚れきった体は洗い流せない。しかし、こころは汚れていないはず。ジョイスはテレンス夫妻にまかせよう。ウィンディも安心するだろう。

そして、自らは、罥を仕掛ける事に集中しようとしていた。

コーデイが診察室を出て、倉庫へ向かおうとしたとき、ロブに声を掛けられた。

ロブは思いつきで、コーデイにクレアへの疑問を問いかけた。

「クレアさんがなにをしようとしているか、コーデイがわかる範囲で教えてもらえないだろうか。」

「クレアさんがロブさんに教えないことを、わたしがどうして教えることができるでしょうか。」

「全部は、話せなくてもいい。少しだけでも聞かせてもらえないだろうか。」

「わたしもクレアさんと同じ気持ちで、レテシアさんを理解できないうちには、クレアさんが考えていることも理解できないと思います。」

口をつぐんだロブの姿をみて、コーデイは同情していた。

「ロブさんはいづれ、その人物と戦わなくてはいけないと思うのです。しかし、ただ単に殴り合って喧嘩するわけにはいかないのです。」

「どういうことなんだ、コーデイ。レインたちの命を狙っている人物が誰なのか知っているのか！」

「それは、あなた方だけの問題ではないのです。だからこそ、自分のプライドを捨てて、愛情を確かめる必要があるのです。でなければ、レインさん、ジリアンさんの命だけを救うなんてことはできません。しないのです。」

ロブはすこし面食らった。コーデイがそこまで知っていて、言おうとしない姿勢に。

「わ、わかったよ。コーデイがそこまで言うのなら。しかし、もう、レテシアと会う機会はないし。俺はいつたいたいどうしたらいいのか。」

「会う機会がないわけじゃないでしょう。一度目のチャンスは逃しました。このことで大きな痛手を負わないように、先手を打って

ください。」

「先手？」

「手紙を出すのです。」

「レテシアに？」

「そうですね。なにも、ストレートに書く必要はありません。話し合いをしたいただけ書けば良いことです。話し合いをするのはロブさんあなた自身です。」

青ざめてロブは考え込んだ。

「わたしがロブさんにして上げられるとしたら、そういったアドバイスしか思い当たりません。」

コーデイはそう言つて、頭を下げて、その場から立ち去った。

コーデイの後姿をただ茫然と見ていただけで、ロブは手紙を書くことへの抵抗感で頭がいっぱいになっていた。

非難してきた河川敷の川は、他の川と合流して大きな川となった。

深さは増し、森の中をうねるように流れていく。

SAFはその川にそって飛行していった。

次第に、森から平野に変わり、そして、牧草地へと変わっていった。そして、川は大きな海へと流れ着いていった。

海にまた、出戻ったことで、展望台にいたレインはレテシアと再会したことを思い出していた。

太陽にまぶしく明るい母親の姿。命を危険に晒したことで、自分の命がなくなったら、レテシアはどんなに悲しむことだろうと考え、すこし切なく思えた。

レインは自分たちの命を狙う人物がどんな人物かも知らない。クレアが知っているであろう、その人物から身を守るためにはロブが不可欠だということをジリアンと語っていた。

エミリアにもらったスカイブルーのスカーフを手にして風に晒した。手放せば、このスカーフは亡くなってしまふ。エミリアへの思いもなくなってしまうのだろうか。

風に揺られているスカーフをみて、自分自身を重ねて考えてみた。ここで手放せば、確実に海に落ちるだろう。下手をすればSAFのどこかに引つかかるかもしれない。でも、それは元のかたちのままではいられなくなるだろう。

スカーフをギュツと握り締めた。

(なにも諦める必要なんてないさ。)

そう思ったとき、母親のレテシアはきつと、ロブの事を諦めていないだろうと思えた。

だから、離れていても、ロブの事を思うことが出来るんだと。

そして、こころのなかで、ある結論に達した。

信じよう、ママも、ロブのことも、そして、自分自身も。

愛しているから、信じる事が出来ると。

第二十二章 楔を打つ 1

スカイエンジェルフィッシュ

S A F号は海岸沿いを飛行し、漁業で栄える港エスパニシーオネにあるガラフアランドランド・ドックを目指していた。

クレアの目的は、テオ少佐と落ち合うことだった。エスパニシーオネには軍の設備はないものの、軍人は配備されていた。

ガラフアランドランド・ドックはスタンドフィールドとも縁故で空挺修理工場を営んでいるが、テオⅡアラゴン少佐の機体を専属で修理しているところでもあった。

他にも、ジョナサンの行動を不審に思い、空挺全体を再点検する意向だった。

「やったあ！美味しいものが食べれるぞお。」

行き先が決まると、カスターは叫んだ。

漁業で栄える港には、鮮魚が豊富な上、空と海の運搬業が栄えていることもあいまって、食材も豊富だった。

腕自慢のシェフが集まり、思い思いの店を出していることで有名な港でもあった。

ジリアンは浮かない顔をした。先日まで難民と行動をと共に、食べ物が必要栄養分しか口にしていなかったからだ。

そのことを察して、コーデイがジリアンに言った。

「美味しいものを食べるのはエスパニシーオネの人たちにとって贅沢ではないのです。与えられた恵みを美味しくいただく姿勢があるからです。」

ジリアンさんはお肉を食べるようにしましょう。食べることで筋肉がつかますよ。」

ジリアンは深くうなづいて、納得した。

右側で水平線に夕日が沈みそうな時、左側で海岸がまばらにネオンを散りばめた状態となり、煌々と光り輝く街並みが広がり始めた。

ドックには向かうと連絡してあって、ドックの責任者シモンⅡポル

トは快くS A Fを迎え入れ、晚餐をひらきもてなした。

「久しぶりに会ったのに、まるで昨日のことのようだな。スワン村へ行くと言って黒衣の民族に襲われてブルーバードを失ったことをだ。」

「シモン、あの村は曰くつきでね。必要とされないものには近づくとさえ出来ないらしい。ロブを連れて行こうとしたのが間違いだったんですよ。」

クレアはレインたちの叔父であるラゴネⅡコンチネータの製造したワインをシモンに振舞った。

シモンはラゴネとは旧知の仲で、上機嫌で晚餐の会話を盛り上げていた。

晚餐は酒の勢いで長くなり、時間をもてあましたレインとジリアンは失礼することを謝ってから席を立った。

二人がいなくなったのを見計らって、シモンがロブに言った。

「スタンドフィールドは未来が明るいな。うらやましいよ。」

「何を言ってるんですか。シモンには後継者がいるでしょう。」

シモンは酒に酔ったことを感じて空ろな目でロブを見ていた。

「相変わらず、オンナの尻を追いかけてる馬鹿息子か。あれを後継者として認めたら、このドックが馬鹿にされる。」

「プレッシャーに負けているのでしよう。まだ若いのですから、長い目で見てあげましょう。シモン、あなたを慕って一所懸命に働いている技能者がたくさんいらっしやる。」

ロブは少し同情し、慰めたつもりだった。

「ロブ、君も痛いほど理解しているだろう。ゴメスが死に、フレッドも死んで、技能者が去っていったことを。」

私が死んだら、その者たちも去っていくに違いない。」

ロブ自身、自分の振る舞いで技能者が去っていった現状がスタンドフィールドにはあった。

「ええ、痛いほどわかります。デイゴがいなかったら、ドックは再建する余地ありませんでした。」

その言葉にデイゴが口を挟んだ。

「技能者も生活がかかっている者は見切りをつけるものですよ。我がドックには、わが身を振り返られない、自分の腕を信じ腕を磨かせてくれたところを恩返しもせず去ることなんてできない野郎どもが残ってますから。」

「そうだなあ、スタンドフィールドは、ここと違って家族ぐるみが多かったからな。ラゴネと一緒に肩身の狭い思いをしたものだ。」
シモンは一笑して弱音を吐いたことへの至らなさをかき消した。

レインとジリアンはドックのデッキに出ていた。

そこにはエアジェットの機体がいくつも並んでいた。
年老いた男性がひとり、機体を修理していた。

「こんばんわ。仕事すみません。見学してもいいですか。」

レインは男性に声を掛けた。

男性は振り返りもせず、言った。

「子供が来るところじゃない。あっちへいきな。」

レインは眉をひそめて近づこうとしたのをやめた。

ジリアンはレインの服を引っ張った。

二人は男性から、後ずさりした。

男性は修理の手を止め、しばらく考え込んだ。

「スタンドフィールドの連中が来てるって聞いたが、お前ら、スタンドフィールドの子たちか。」

そういいながら男性はようやく後ろを振り返って、二人をみた。

「レテシアにそっくりだな。お前がレインだな。」

レインは汚い軍手で指を指されて、その指先にある男性の顔を見て驚いた。

顔の半分が青く痣になっていたからだった。

ジリアンはレインの露骨な反応に、横から肘でつついた。

「あ、そうです。僕がレイン。スタンドフィールドです。ママ、いえ、お母さんを知っているんですか。」

軍の施設に到着すれば必ず聞かれたが、ガラファンランド・ドックにきて、レテシアの名を聞いたことがなかった。

「ああ、わしはチャベスⅡギャロだ。グリーンエメラルダ号にいたことがある。」

チャベスは軍手を脱ぎ、レインに握手を求めた。レインは躊躇することなく、手をさしだし、握手した。

ジリアンもついだとばかり、手を差し出すと、チャベスは眉間にしわをよせながら、ジリアンと握手した。

「僕はジリアンⅡスタンドフィールドです。あのお……。」

「ああ、フレッドの子だな。そっくりだからすぐわかるよ。フレッドのことはロブより買ったからな。残念だよ。」

そういうと、チャベスは修理場にもどり、作業を続けた。

「見たけりゃ、好きなだけ見るといい。質問は少なめにしてくれな。」

二人はかしこまって、「はい。」と返事をした。

修理されている機体をふたりはあちこちとろろしながら見ている。塗装はほとんどされていない機体で、ところどころ、泥がつき、木

々の汁が染みているような部分がところどころ見られた。

「この機体はどのようにして、使用されていたのですか。」

ジリアンが質問した。

「森林伐採を営んでいるところが、保有している森林に薬剤を巻くのに使用したんだ。この辺は海が近いので塩害があったりするんだ。」

作業の手を止めないチャベスにレインは関心していた。

「墜落したのですか。」

「ああ、そうだ。木に引つかかったんで大破を免れたんだ。」

ジリアンの質問が出るたびに、レインは自分が遅れをとっているんじゃないかと焦った。

自身はただ、機体を手で撫でて質感を確かめている振りをする。

しかできてなかった。

チャベスはレインの方をチラリと見て、二人にわからないように鼻で笑った。

次にジリアンはチャベスのところへ来て、作業する様子をじっと見ている。

レインはあわてて、ジリアンのそばにより、同じように見ている。

「エンジンは焼けちゃったんですか。」

「ああ、手入れしないものだからな。この手に気を使わない連中は壊れるまで遣いこむしか脳がないからな。」

レインはチャベスが作業している様子を見て、エンジンの焦げ具合を見ていた。

チャベスが焦げた部分を清掃してしまっているので、焦げ後の様子で機体が動かない具合が判断できなかった。

チャベスは突然手を止めた。

「フレッドが亡くなったのはそう昔のことじゃないだろうが、お前たちを教育したのはロブかい。」

二人は顔を見合わせた。

「教育というか、いろんなことを教えてもらったのは、ドックにしている人たちで……。」

「だろうな。ロブはレテシアの尻を追いかけていたから、技能が身についていないだろう。」

二人はチャベスの口の悪さに閉口した。

「相変わらずですね、チャベス。」

その声二人は驚いて振り返ると、口角をゆがませたロブが立っていた。

「おう、男前。生きてたかあ。死んだと聞いたと思ったがな。」

「悪いんですが、まだ、死ねないのでね。」

「まあ、このガキふたりを残しちゃ、死ねないわな。」
しばらく、ロブは黙っていた。

レインとジリアンは罰が悪そうに、その場から立ち去ろうとした。

「二人とも、シャワー浴びて、寝るんだ。クレアさんが街に連れて行くと言ってたから、明日の朝は早いぞ。」

「はい。」

二人はなま返事をした。

二人が去る様子をロブとチャベスは眺めていた。

「レテシアにそっくりだな。あんなに似るとまでは思わなかったな。」

「オトコなのによってやつですか。」

ロブは、近況を聞こうとチャベスに話をしに来た。

クレアから聞けない、情報がチャベスから聞けないかと思ったからだ。

チャベスから聞いた話は、レテシアのエアジェットの相棒が白髪の少女だという話だった。

「白髪の少女？」

「ああ、年のころは18歳だと聞いた。軍に所属していない。つまり、艦長の独断で乗せているらしい。」

「いつからですか。」

「さあな、去年くらいからみかけたと聞いた。」

「誰にです。」

「テオ少佐率いるエアジェット隊のメンバーだ。」

その言葉に、ロブは少し顔をゆがませた。

「ほら、お前さんも知っているだろうが、べたべたまわりついて好かれているキャサリンの嬢ちゃんだよ。」

チャベスは意地悪な笑いを浮かべた。

ロブは嫌な顔を隠そうとしなかった。

「レテシアのことをいろいろと調べているらしい話は艦長から聞いてたんでな。ちょっと探りを入れたら、嬉しがってしゃべるぞ、あの嬢ちゃんは。」

ロブは情報ほしさにキャサリンというオンナに頼み込んでいる姿を想像してみたが、有り得ないと打ち消した。

「シモンが言ってたなあ。スタンドフィールドのオトコには、女難が憑き物だつて。」
ロボの嫌な顔をみてチャベスは一笑した。

第二十二章 楔を打つ 2

夜遅くになって、クレアとアルバートがエアバイクをドックから借りて、出て行った。

明日の朝が早いと聞いたのに、何をしにどこへ向かうのだろうと、二人が出て行く様子をロブは見ていた。

そんな姿を同情していたコーデイは、声をかけた。

「シモンさんの息子さんを迎えに行ったそうですよ。」

「ダニエルか。」

「明日行く場所を案内してもらおうことになったそうで、朝が早いから連れ戻しに行くそうです。」

ロブは納得したとコーデイに背を向け片手を振り、去っていった。

クレアたちが向かったのは、歓楽街だった。

エスパニシーオネのネオン街をすこし山の手に行ったところに行くのと、女郎屋が立ち並ぶ。

利用者はさまざまだが、ほとんどが船乗りだった。

「質の良いオンナは、ここにはいない。あばずればかりだ。」

「僕は興味ないですよ。」

「そうだったね。」

クレアとアルバートはそっけない会話のやり取りをしながら、エアバイクを降りてダニエルを探していた。

クレアの顔見知りか声をかけたので、ダニエルをみかけなかったかと聞くと、一発で判明した。

妖精旅館という名前の店に入り込み、支配人に問い合わせをかけ、シモンから預かった金を手渡すと、ダニエルがいる部屋番号を教えもらった。

クレアはアルバートに受付で待っているように指示をした。

アルバートが待っていると、クレアは顔に痣をつくった瘦せたオト

コを連れてもどってきた。

「イテテ、イテテ。たまには優しくしてくださいよ、クレアさん。」
「何を寝ぼけたことを言ってるんだ。あたしとの約束破って、こんなところにしけこんでる場合じゃないんだよ。」

クレアはそのオトコの襟足を掴んで、足で横っ腹めがけて蹴りを入れた。

「イテエ〜ッ」

アルバートがその様子を見て、クスクスと笑っていた。

そのオトコはアルバートを見て、自分より弱いと外見で判断して、強気でいらんだ。

「オイ、ダニエル。アルバートはお前みたいな弱いオトコなんて、ひとひねりなんだよ。」

薄笑いをやめないアルバートはクレアの言葉に訂正を入れた。

「クレアさん、ひとひねりなんて、豪腕ない方しないでください。僕はスマートに叩き込むだけですよ。」

クレアは襟足を掴んでいたオトコをアルバートに突き出した。

「オンナみてえな面しやがって、抜かしたこと言うなよ。」

オトコの顔を薄笑いを浮かべたまま、アルバートは見ていた。

「アル、ダニエルを寝かしつけてくれないかな。」

「はいはい。」

アルバートはダニエルの突き出した顔を顔色も変えずに見たままで、膝をみぞおちに叩きつけた。

「グエツ。」

オトコはみぞおちを両手で押さえ込みかがむと、アルバートは上から両手を組んで背中に叩き込んだ。

「ウゲエ。」

ダニエルというオトコは、そのまま、床に伏せて気を失った。

ダニエルが乗ってきたエアバイクにアルバートのり、クレアは失神したダニエルを後部に乗せて乗ってきたエアバイクでドックに向かった。

翌朝、ドックの食堂で、レイン、ジリアン、コーデイ、クレア、アルバート、そして痣だらけのダニエルが集まった。

クレアに首根っこを掴まれたダニエルは、皆の前で朝の挨拶をして自己紹介した。

「おはようございます。俺はダニエル＝ボルトといいます。ドックで塗装工しています。」

クレアは深くうなづいた。

「今日は、クレアさんの言いつけにより、アニーさんのところへ行き、その後、シオルダー伐採所へ案内させていただきます。」

「ハイ、よく出来ました。」

ダニエルの首根っこを突き放し、解放したクレアは席に着いて、食事 시작했다。

みんなはクレアに続いて、朝食を食べ始めた。

「クレアさん、アニーさんって、どんな方なのですか。」

みな、痣だらけのダニエルをみて驚きはしたもののいつものようにして、レインが恐る恐る聞いてみた。

「アニーは、ダンの母親なんだ。」

「え?!」

「ダン先生にお母さんがいたのですか。」

コーデイとアルバートは黙々と食事をしていた。

「誰にでも母親はいるものだよ。ダンの母親は、薬剤師だったんだけど、森に引きこもって、薬草の調合をしたりして研究しているんだよ。」

「はあ、そうですか。」

「朝が早いうちに行っておかないとあえないからね。それと、森に行くには、エアバスで行かないと。それでこのダニエル君に案内してもらおうと思ったのさ。」

クレアはちびちびと食事をしているダニエルの肩を引き寄せ、ダニエルは怯えて返事をした。

「よろしく頼むよ。」

6人は、食事を終え、支度をすませて、エアバスに向かっていた。シモンがクレアを引き止めた。

「話がある、ちょっと。」

シモンはクレアを呼びつけて、ふたりで話せる場所へと移動した。そこは、設計室だった。

「なにか見つかったのですか、シモン。」

「いや、何も見つからない。」

怪訝な顔でクレアはシモンを見ていた。

「だが……。」

「だが？」

「何かを取り外した後がある証拠は見つかった。」

「何かを取り外した？」

シモンはクレアの言葉に深くうなづいた。

シモンは白い紙を取り出し、机の上に広げて書き始めた。

「これがパジェロブルーの翼だとする。ここにオイルタンクが収納されていて、エンジンに注がれる管があるわけだが。」

絵を描き、内容を説明していくシモン、真剣なまなざしで書かれた絵を見入るクレア。

「この管を取り出して、覗き込んだら、^{おり}澱がこびりついている箇所があったんだ。」

クレアはしばらく考え込んだ。計器類が狂ったとき、エンジンタンクに澱が溜まっていたことを思い出した。

「グリーンオイルの澱ですか。成長剤を使いすぎて、鉄分を分解してしまって澱ができてしまうという。」

「俺はそこまで知らないが、グリーンオイルの澱らしいものがこびりついているのが確認できた。しかも、下側じゃなく、横だ。」

シモンは一呼吸置いて、話を続けた。

「おまえさんも知つてのとおり、磁石で鉄粉を引き寄せるとそのかたちに媚びりつくだろう。まさにそれ、長方形の形をしていたんだ

よ。」

クレアは腕組みをして、考え込み、うーんと唸った。

「磁石だと簡単に取り外しはできる。成長剤でグリーンオイルに澱ができるなんて予測ができなかっただろうな。俺も驚いたぐらいだから。」

「このことは他に誰が？」

「チャベスと、俺ぐらいだ。他言無用にしてある。」

「察しが良くて助かるよ。」

シモンは自分が描いた紙をライターを手に取り火をつけて燃やした。

「証拠としては残らないが、確証は得た。後は、相手が動かないなら、こちらから動くしかない。」

シモンはクレアの肩に手を置いた。

「逸るなよ。命は大事にするんだ。相手は確実にお前たちの命を狙っているだろう。それがこないだの赤い閃光だったんじゃないのか。」

「クレアは目を閉じて言い返した。」

「あんなのは脅しにしかならない。そして、そんな脅しには乗らない。相手が動かないのは、正体を知られたくないから。こっちはもう正体をつかんでいるのだから。」

「俺は、説教できる立場にないから、これ以上は何も言わない。アニーも呆れてたぐらいだしな。」

シモンはクレアの肩から手を離し、設計室のドアを開いた。

「さあ、アニーに会ってくるといい。説教はいまさらしないと思うがな。」

「ああ、行ってくるよ。シモン。」

シモンの横をすり抜けていくように、クレアは設計室から出て行った。

この光景を前にもみた気がしたシモンは、考えた。

「そうか、前にもダンとここで……。」

シモンは、こころのなかでつぶやいた。

(ドックを発売ともつ、2度とクレアに会うことはないのだらう。)

第二十二章 楔を打つ 3

エアバスでドックを出ると、街に少し入り、すぐ人気のない道へと入っていった。

山道を走るエアバスは、霜が降りている所為で濡れていく。

二日酔いが抜けていないダニエルの運転で、酷く揺れる。

クレアは気にしていない風だった。

山道を抜けると、舗装されていない道になり、浅瀬の川が現れると、そこをエアバスが上流に向かって進んでいく。

周囲は黒々とした木々に囲まれていた。

「魔女でも住んでいそうだね。」

アルバートの言ったことに、ダニエルがぼやいた。

「ああ、たしかにアレは魔女だな。」

「いらぬことは言わなくていい。ダニエル。」

ダニエルは首をすくめた。

川は滝つぼに差し掛かった。

「みんな、シートベルトをしつかり掴んでくれ。」

エアバスは左に反れて、ジェット噴射で上空に向かって飛んだ。

黒い森が広がり、緩やかな傾斜山並みが続いていて、谷間をエアバスは飛んでいく。

飛行先に滑らかな崖が広がると旋回して、奥へと入り込む。

日差しが入り込まない、暗がりの谷間へと入り込んでいく。

ホバリングをして、木々が生えていない岩場へと着陸した。

エアバスから降り、岩場からも降りて森の中をいく。うっそうと生い茂る木々を掻き分け、一行はある古びた一軒家にたどり着いた。

クレアが玄関のドアをノックすると、中から声がした。

「はいな、どちらさんかね。」

「あたし。アニー。ちよつと大勢で着たけど、中に入れてもらえないかしら。」

クレアは普段使わない言葉を口にしたので、背中に虫唾が走ったように震えた。

ギツギー

古い戸が開き、中から背の低い老婆が出てきた。

「クレアかい。」

目を細長くして、クレアの背後にいてる者たちを見ていた。

「ほう、コーディも来たのかい。家が傾かないかね。」

苦笑いをしながら、コーディは「ご無沙汰してます。」と挨拶をした。

ダニエルとアルバートは家の外で待たされた。

クレアとコーディ、レインとジリアンが家の中に通された。

玄関のドアは低く、みんなかがまないと中に入れなかった。

玄関を入ると廊下があり、左手に台所、右手に書斎と古びてはいるが、整理整頓された清潔な状態の部屋が続く。

奥まで行くと、植物園のような部屋が現れた。

中は実験室のようになっていて、いたるところに植木鉢が置かれ、植物が葉を生い茂らせてお互いを主張しあって覆っているかのようになっていた。

その部屋の様子をジリアンはプラナーナが植物研究している将来の姿を思い浮かべて、感動のまなざしで眺めていた。

車輪がついた椅子に腰掛けて、老婆はため息をついた。

「はあ、いよいよ、来なすったね。」

コロコロと腰掛けた椅子を動かし、戸棚に向かうと、腰の位置の引き出しを開けて、小瓶を取り出した。

「ようやく、調べできたよ。」

元に位置にもどり、クレアの前にその小瓶を取り出した。

「ほれ。」

「ああ、ありがとう、アニー。依頼していたものを覚えていてくれたのね。」

老婆はニタニタと笑いを浮かべ、クレアは冷や汗をかく思いで口に

していた。

老婆は、レインたちのほうへ指を指した。

「あの子達は、ラゴネが言っていた、ゴメスの孫かい。」

クレアは振り返って、二人の顔を見た。

レインとジリアンは、ゴメスの孫として紹介されたのは初めてだったので、キョトンとしていた。

「ええ、そうです。こっちがレインで、こっちがジリアン。」

老婆はジリアンを指差した。

「フレッドの子かい。そっくりだね。いい子に育つといいね。」

クレアは二人に老婆を紹介した。

「こちらの婆さんが、ダンのお母さんでアニー＝ポーター。薬剤師でもあるけど、グリーンオイルの生産資格を持っているひとでもあるのよ。」

レインは少し眉をひそめた。ジリアンだけ興味をもたれたのが気になったのと、クレアの言葉遣いが妙な感じがしたからだ。

「初めまして、ジリアン＝スタンドフィールドです。」

ジリアンは挨拶をしながら、レインに肘で突いた。

「あ、初めまして、僕はレイン＝スタンドフィールドです。」

アニーは目を細めて、二人をみた。

「悪いが、わたしやロブが嫌いだね。あの子は人のいうことを聞く子じゃなかった。ゴメスに似て頑固で意地っ張りだった。」

レインはあっけに獲られた。ロブの素性を知っている人物に会ったのが珍しく思えた。

「ああ、アニーは、シモンと一緒にスタンドフィールドにいたことがあってね。ロブの小さいころをよく知っているのよ。」

「その点、フレッドはいい子じゃった。図体がでかくても威張ることもなく、誰にでも優しく振る舞い、強くて頼れる男の子じゃった。」

アニーはそういうと、目を潤ませて、着ていたエプロンのポケットからボロの布切れを取り出し目頭を拭った。

アニーは椅子をコロコロと動かし、ジリアンのそばに寄ってジリアンの手をとった。

「お前さんは良い子になる。ああ、良い子じゃとも。親思い、兄弟思いのフレッドの子じゃもの。」

ニコニコと笑顔でジリアンを見つめるアニーに対して、ジリアンは作り笑顔を返すことしか出来なかった。

怪訝な顔をするレインの側により、クレアは囁いた。

「アニーは、ハートランド艦長とは仲が悪くてね。レテシアのこともあばずれにしか思っていないの。」

好奇心目でみられることが良くあっても、最初から倦厭される扱いを受けたことがなかったレインは、ただただ、理解不能だという顔をするしかなかった。

クレアはおもむろに小瓶を手を取った。

「これが成長剤解毒剤なのね。」

「あんたが手に入れた成長剤で作ってみたけど、テオが手に入れたものとは少し違っていて、効き目が悪かったんじゃ。一応、品質改良を施したがね。」

クレアは、小瓶を見る振りをして、目を泳がせて周囲をみていた。

アニーが椅子をコロコロと動かして、動き回る様子にクレアを背後にした途端、クレアはコーディに合図を送った。

「アニーさん。みなさんにお茶でも入れて差し上げたいのですが、わたしは要領を得ませんので、台所へご一緒していただけませんか。」

しばらく黙っていたアニーは深くうなづいて、椅子から立ち上がった。

「そうじゃのう。元気の出る薬草茶でも飲んでもらおうかのう。」
アニーの歩く後ろを支えるようにコーディはついていった。

「レイン、ジリアン。コーディの後に着いて行って、リビングで待っていてなさい。」

ジリアンもようやくクレアの口ぶりが違和感を覚えて、眉をひそめ

て返事をした。

「はい。」

レインは壁にかかった写真に目が止まり、返事をしなかった。

「クレアさん、この写真。」

その写真で、レインが知るものが映っていた。それはゴメスの若い頃だった。

一緒に映っている美しい女性に目がいつていた。

「ああ、アニーがスタンドフィールドにいた頃の写真だね。この若い女性がアニーで、ああ、ゴメスの横にいるのが……。」

「誰なんですか。」

「ロザリアだと思う。」

「え?!」

レインが言葉にしなかったことをジリアンが言った。

「お祖母さん?」

「こそ、ロブとフレッドの実のお母さん。あたしも初めて見たわあ。」

「

そして、ジリアンは余計な一言を言った。

「美女と野獣……。」

レインはジリアンの頭を軽く叩いた。

「イタッ。う、ごめんなさい。」

第二十二章 楔を打つ 4

カスターはひとり、ドツクのデッキを立ち尽くしていた。

見渡す限りに、水平線が広がり、左手に街並みがちらりと見えるだけ。

エスパニシーオネの奥にある崖にそびえ立つのが、ガラファンドランド・ドツクだった。

さきほどの顛末を思い返していた。

朝起きた時は、多少頭痛がした。ワインの呑みすぎである。振舞われた晚餐の食事が美味しくて呑みすぎたのだ。

朝食が済んで、ロブとデイゴが揉めている様子に、口出しをしたら相手にされなかった。

しよげていると、ドツクのオーナー・シモンから声を掛けられた。

「おまえさんは、たしか、クルーの通信士カスターだったな。」

「ええ、そうです。なにか？」

「クレアのことはどう思っている？」

「?!。ウゲツ。」

予想外の質問に、動悸が襲って、カスターは顔を赤らめて胸を押さえた。

しばらく考え込んで、質問の意味を深読みしていた。

「変な質問だったか。ロブやデイゴじゃ、頼めないことを頼みたいのだが。」

「え?!」

「ロブたちには理解できないことかもしれないのでな。」

「理解できないこと……。死んでからのことですか。」

「なにか、言われたのか。」

「いえ、今のクレアさんは自分の体が汚れていると言っていました。だから、今度生まれ変わったらって。」

「ふむ。」

シモンはしばらく無言だった。そして、ロブとデイゴが揉めている様子を眺めていた。

「悪いが、カスター。」

「はい。」

「クレアに何かあったら、ロブたちに言う前に、俺に連絡をくれな
いか。」

「え？どうしてですか。」

「ロブたちには、知られたくないというのは、クレアの養父も同じ
事を思っていたことで、おそらくクレアもそうだと思う。」

「はい。」

「クレアはこれから、なにかしようとしているのだと思う。ダンと
同じことになるかもしれない。」

「そんな！」

声を荒げたカスターに対し、シモンはカスターの口を押さえた。

ロブとデイゴは振り返ったが、カスターは苦笑いをして、何もなし
という素振りをした。

「ダンも真相を隠し通したのは、知っているだろう。」

「はい。」

「ならば、クレアも同じことをするだろう。」

「そんな……。」

「ロブたちがそれをすれば、どんな行動を起すかわからん。それは
ダンもクレアも望んではいないことだろう。」

カスターは無言でうなづいた。

「だからだ。クレアに何かあったら、俺に連絡をほしい。アニーと
話しあって、君にもわかるように説明しよう。その時にな。」

「わかりました。必ず、説明してくださいね。」

「ああ。」

カスターが真顔でシモンと話をしている様子を、ロブは横目にしな
がら、デイゴと口論を続けていた。

「俺はもう、我慢ができないんだ。」

「ジョナサンは、よせ。」

「あいつらの命が掛かっているのなら、放っておけるわけがないだろう。」

「だから、落ち着けって言ってるんだ。それこそ相手の思う壺かもしれない。こちらが疑った動きをするのは良くない。」

「じゃ、わかっついていて、素知らぬ振りをしてるっていうのか。」

「そうだ。少しは冷静な行動をとれるように、しておくんだ。」

ロブは横目をちらつかせながら、腕組みをして、デイゴをにらんでいた。

ロブの目線の動きに多少気にしていたが、見ている方向がシモンとカスターだったので、気にしないようにした。

「クレアさんが、何も話してくれないから、おとなしくできないんだ。」

「ロブ、お前は子供じゃないんだら、拗ねるなよ。」

「拗ねてなんか・・・。」

「クレアは、お前に短気な行動を起して欲しくないのだろう。レテシアのことがあるからな。」

ロブはぐうの音も出せなかった。

真顔で立ち尽くすロブの姿をカスターはシモンが去ったあと、見た。そして、口論が終わったのを見届けて、デッキで物思いにふけっていた。

クレアは、写真を壁から取り外した。

「勝手にそんなことしていいのですか？」

レインが目を丸くして、クレアにたずねた。

「アニーに思い出話でもしてもらおう。お茶が進むよ。」

クレアはふたりに笑顔を向けて言い、写真をレインに手渡した。

二人がリビングに行くと、コーデイがお茶を入れているところだった。

「アニーさん、クレアさんがこの写真についてお話してもらいな

さいつて。」

アニーは目を細めて、レインから写真をとった。

「ああ、これかい。懐かしいのおう。」

アニーは写真を見ながら、椅子に座るよう促した。

コーデイはお茶を入れ終わると、台所へいき、もどってきて皿に盛りられたお菓子を持ってきた。

「アニーさんが用意してくださったクッキーです。いただきましょ
う。」

レインとジリアンはおそろおそろ、お茶を口にした。

苦味が口に広がったと同時に甘みを感じて、不思議な顔をしていた。

「ふふ、ハニーカモミールじゃ。風邪をひきにくくしてくれるお茶
じゃよ。」

レインはクッキーに手を伸ばした。

「いただきます。」

「あの、アニーさん。ロザリア……さんのお話を聞かせてくださ
い。」

ジリアンは、改まった顔をして、アニーにつめよるよういった。

「ロザリアかい。か弱い子じゃったな。」

ロザリアの思い出話を始めた。

第二十二章 楔を打つ 5

ロザリアはスタンドフィールドはアレックスのひ孫にあたる。二人姉妹だったため、ドックの跡継ぎにふさわしい者との結婚をしなければいけなかった。

ロザリアは誰か言われて、ゴメスと決めたわけではなかった。職人気質があっても分をわきまえ、引き下がる時は引き下がる、そこまで意地は通さなかった。

年齢がかなり年上であったが、年頃のロザリアには年の差を気にするのではなく、ドックにとって必要な人物であるかを見極めていた。二人の結婚に反対する者がいたのは、ゴメスの容姿がロザリアのような天使を思わせる愛らしい美女と不釣り合いという理由だった。

ゴメスの資質には周囲も理解していて、納得はしていた。ふたりの幸せを願わない者はドックにいなかった。

しかし、ロザリアは流行病にかかり、ロブが幼い時に早世してしまった。

アニーは、ロザリアの品の良さはドックで育った者とは思えないほどだと感嘆して話をした。

「だから、余計にロブのような子が生まれた事を悔やんだね。素直に育つことできなかったのは、ロザリアが早くに亡くなってしまったからだと……。」

アニーは目を細めて大粒の涙をこぼし、ポケットからまたボロの布切れ出して涙を拭った。

「アニー、レインはマーサのおかげで、素直な良い子に育ったよ。」先ほどの部屋から、ようやく戻ってきたクレアは、席につきながら言った。

アニーは横目でクレアを睨んだが、すぐさま、目線に戻した。

「そうかい。きっと、あのあばずれが育てなかったからだろうね。」クレアはやぶへびだと自分の言った言葉に痛い思いがした。

レインは、ジリアンに肘ですこし衝いて、小声で言った。

「アバズレって何？」

ジリアンは、返答に困った。

「え?! オトコ狂い？」

「なにそれ？」

「オトコ好き? ってことかな。」

「なんだよ、それ。」

大きな声でレインは言った後、アニーに怒って机を両手で叩いた。
バーン

「僕のお母さん、レテシアは、ロブ兄さんに一筋なのです！」

「兄さんって、まだ言っているのかい。」

レインはアニーの言葉で顔を赤くして、うつむいた。

「まだ、ちよつと受け入れできないのですよ。」

コーデイが助け舟を出した。

「アニーさんはレテシアさんをご存知なのですか。」

「ああ、もちろん。じゃじゃ馬じゃった。」

「レテシアさんをご存知でしたら、お分かりになるでしょう。一途な方だと。」

コーデイはニツコリとアニーに笑顔を向けて言い、アニーは罰を悪くした。

「すまなかつたな、レイン。自分の母親をアバズレと言われて怒らない息子なんて、いないわな。」

わたしが悪かつたよ。」

レインは顔を上げて、すこし無理に笑顔を作ってアニーに返した。

「まあ、ロブが14歳で父親になったので、驚きが隠せぬものだったのだな。」

口をつぐんで、言葉が出ないままで、レインはアニーを見ていた。

「ゴメスは大層驚いたと聞く。ロブにはロザリアの面影を抱いておつたからな。」

レインは目を丸くして、「面影?」とつぶやいた。

「そう。ロブはロザリアに似ていると周囲には言われていた。」
レインとジリアンは写真をもう一度みた。
クレアが二人に向かって言った。

「ロブの金髪やグリーンの目の色はロザリアに似たんだ。レインの茶色の目はレテシアに似たからね。でもね、その高い鼻はレテシアの鼻じゃないよ。あきらかにロブ。」

ジリアンはレインの顔をまじまじと見ていた。レテシアにそっくりだといわれるくらいだから当然だと思っていた。

「ジリアンは確かにフレッドに似て、フレッドはゴメスに似ているけど、ジリアンの青い目はセシリアの青い目と一緒よ。」

緑が混じっているのはフレッドに影響したかもしれないわね。ロザリアは鮮やかな緑の目をしていたみたい。」

セピア色になっている写真からは、細やかな色の判別はできなかった。

ロザリアが本当に天使に見えるくらい、柔らかな微笑を、写真を見ているものに向けているような気がして仕方なかった。

一通り、談話が済むと、クレアが時間だからと、席を立った。

コーデイは後片付けをしようと立ち上がったが、ジリアンが手伝うとコーデイとともに食器を持って、台所へ行った。

残ったクッキーを手に、レインとクレアは先に外にでて、アルバーとダニエルに渡した。

アニーは玄関先のドアを開けて、立っていた。

食器を洗っていたジリアンは、洗った食器を丁寧に拭くコーデイに尋ねた。

「クレアさんの言葉遣いが普段とちがうんだけど、アニーさんに気を使っているのかな。」

「クスツ。そうですね。普段と違いますね。クレアさんがアニーさんに怒鳴られたからでしょうね。」

「怒鳴られた？」

「ええ。アニーさんにとって息子さんであるダンさんの死を報せな

かったために、涙ながらに怒鳴られたそうです。」

「はあ、そういうことがあったんですね。」

「年配者に泣かれては、クレアさんも形無しですよ。クレアさんはダンさんから、アニーさんのことは聞かされていたらしいのですが、亡くなってから訪ねるまでお会いしたことがなかったそうですよ。」

ジリアンは深くうなづいた後、洗いものが済んだので、自分の手を洗い、タオルでふき取った。

コーデイは食器を元あった場所に仕舞った。

ジリアンとコーデイが後片付けを済ませて、玄関に行くと、アニーは体を震わせていた。

「どうかしたのですか、アニーさん。」

ジリアンが声を掛けたが、アニーは無言だった。

コーデイは察して、ジリアンを先に外に出るようにと促し、アニーの両肩を後ろから握りしめた。

ジリアンがクレアたちのところへたどり着いたのを確認して、コーデイはアニーに囁いた。

「ダンさんが遣り残したことを、クレアさんはやろうとしているのです。見守っていてください。」

アニーはこの時には涙をこらえた。そして、左手でコーデイの右手の上に手を重ねた。

「クレアはおまえさんの身を案じておる。クレアのような無茶なこととはしないでおくれ。」

「わかりました。」

「おまえさんにクレアを止めてくれとは言わない。無駄なことだとダンのときに思い知っている。しかし、これだけは覚えておいて欲しい。」

「はい。」

「わたしの命なんざ、気にしないで、伝えるべきものは伝えてくれ。あなたの知る限りのもので良い。時がきたら、必ず。」

「はい、了解しました。かならず。」

コーディは口をあまり開けずに小声で「さようなら。」とアニーに言った。

アニーは、言わないという態度で口をつぐんでみせた。

コーディがクレアのところへ行くと、クレアはアニーを振り返って言った。

「また、来ますよ、アニー。」

その言葉が気休めだということをアニーは理解していた。なぜなら、ダンも同じ事を言ったからだ。

レインはアニーに手を振り、ジリアンとコーディはお辞儀をした。

ダニエルは軽く会釈をした。

一行は、アニーの家をあとにして、エアバスに乗り込んだ。

第二十二章 楔を打つ 6

エアバスは、川面にしびきをたてながら、滑っているかのように飛行していた。

川は湖のようなどころへ流れ着く。エアバスは湖に浮かぶ丸太を避けるために、エッジをかけて方向転換し、岸に向かっていった。岸の側に崖があり、そこに建物があり、機械音が鳴り響き、建物のしたから、丸太が落ちて湖に浮かんだ。

エアバスはジェット噴射し、その建物の入り口あたりに並ぶ数台の荷台つきのテントウムシやらトラックと同様に着陸して並んだ。

建物の中から、屈強な男が出てきて、一行に手を振った。

「おおーい、クレア、こっちこっち。」

ジリアンは出てきた男が誰なのかと尋ねた。

「ダンの弟でフランクだよ。ここの伐採所を任されているんだ。」

「ダンを良く覚えているわけではなかったが、先ほど会ったアニーには似ている感じがしたので、なるほどと納得した。」

「ダニエルは、エアバスで待つことになった。」

一行は階段を上りきって、建物の入り口に入ると、中は大きな空間の中に木の香りが充満し、機械が休む暇もなく働き、くたびれているような音を響かせていた。

機械が何をしているのか、横目でみながら、レインたちは、フランクのあとについていった。下に降りて、ようやく機械が木々の枝を落としたり、かたちを整えて裁断していることを確認した。

鉄の扉の前にきて、観音開きに両手で開き、中に入ると、中からひんやりした冷たい風が吹きだした。

中は洞窟のようになっていた。周りは岩で固められた空洞になっていて、奥まで続いていた。

岩の間から水が滴り落ち、下には溝が彫られてあって、水がどこか

へ排水されるようになっていた。

どこかで見えたような気がして、レインが周囲をキョロキョロしているとジリアンが声をかけた。

「じいさまのワイン蔵に似ているよね。」

「ああ、そうか。」と、頷きながら、レインは呟いた。

ラゴネの手伝いをして、瓶詰めしたワインを台車に積んで、カタカタと音を響かせて、洞窟をふたりで運んだことを思い出した。

フランクが立ち止まり、等身大の鉄扉の施錠を解き、両手で押し開けると、鉄扉はギツギーツといかにも重たい音を響かせた。

皆が中に入ったのを確認して、フランクは鉄扉を閉めた。

中にはいるとレンガ造りの通路が続いた。木でできた扉がいくつかあつて、施錠されている扉の前でまたフランクは立ち止まり、施錠を解いた。

「さあ、ここが、所望していたものをそろえておいた場所だ。」

部屋の中に通されて、そこが武器庫であることがわかった。

レインは中に一度入って、あとずさりした。

アルバートはレインの肩を抱き避けて部屋の奥へと進んだ。

レインとジリアンだけが部屋の入り口で立っていて、他のものは中にある物を手にとって確認していた。

フランクがひとつひとつ手に取り、クレアに説明していた。

「これがサイレンサーだ。常時はずしておく、取り付けタイプだ。」

「フランク、頼んでおいた、帷子は？」

「チタン仕様のサポーターだろう。帷子って……。」

フランクは木箱から、いくつか、ジャラジャラと音を立てて、黒光りした塊を取り出した。

広げて見せると、かたちそのものは腰巻のような感じで、フランクはそれをアルバートに目配せして側に来させて、着用してみせた。

後方で幾つかついている紐をそれぞれ縛って、胴囲を調整していた。装着した状態で、フランクは握りこぶしでその帷子を殴って見せた。

「うっ」

アルバートには衝撃が走ったが、痛みはなかった。フランクはウエストにぶら下げていた工具類からナイフを取り出し、帷子に当てた。

「ほら、傷がつく程度だろ。中までは切られない。」
他のものを広げて、クレアとコーデイに手渡した。

紐の色が違っていて、「それぞれに合わせたものを特注したのだ。」とフランクは言った。

「今から、戦争でも行くみたい。」
レインがつぶやくと、コーデイがレインに近づいて言った。

「攻撃するためのものではないのですよ。防御するのです。」

クレアは無言で深く頷いた。そして、フランクにレインたちに用意したものを出してくれと合図を送った。

フランクは壁一面に並べられた棚の引き出しから、腕輪を取り出した。

レインたちの前にあるテーブルにふたつ、腕輪を置いた。

「結構、重たいが、慣れればどうってことないだろう。」

腕輪といっても、分厚くて手を施錠するようなものに見えた。

「これは、武器なの？」

ジリアンが言うと、レインが「武器なら、スタンガンがあるから、必要ない。」と言った。

「ちがうよ、通信機が挿入されているんだ。説明して、フランク。」
クレアに言われて、フランクは引き出しからまた、腕輪を一つ取った。

「ああ、この青いボタンが両側にあって、同時に押すことで、中のランプが光って、通信状態になる。」

ふたりはその様子を食い入るようにはじめていた。

「それが通信機であると悟られないようにしたいのだが、よい方法はないかな。」

「僕はポケットの中に入れておくよ。レインは反対側にあの時計をつけておけばいいんじゃないかな。」

「え、ああ、そうだね。」

「気のない返事をレインがすると、アルバートがニツコリと笑って、
「大丈夫。僕がついているから。」と言って、同じ腕輪を取り付けて見せた。

「その通信機は、アルと私、レインとジリアンの、4人が持っていることにするよ。コーディはわたしから離れないようにしてもらおう。」

そこにいたフランク以外ものが無言で頷いた。

レインは、腕輪をはめてみて、戦争に行くわけじゃないんだと自分に言い聞かせながら、シヴェジリアンドでの出来事をすこし思い出して身震いをした。

「大丈夫？レイン。」

ジリアンに心配掛けまいと、気丈にふるまおうと頭を左右に振ってレインは考え直した。

「大丈夫だよ、ジル。」

ジェラルミンケースを二つ、フランクから手渡されて、クレアはひとつをアルバートに渡し、一つは手に持った。

「備えあれば憂いなしだ。母さんは心配していたが、俺はクレアを信じているからな。」

フランクなりの気休めかもしれないと、クレアはこころのなかで咳いた。

フランクが明るく振舞うので、レインも考えすぎないようにしようと腹をくくった。

それぞれ、必要なものを身につけ手に持ち、部屋を出た。

洞窟から出ると、機械の音が止んでいた。工場内は休憩時間に入ったようだった。

うずたかく積まれた三角の形をした木をみつけて、ジリアンはフランクに尋ねた。

「あれは何ですか。」

「楔だよ。」

「楔？」

「ああ、木の屑で鋭角な形のものを作っておいているんだ。木を切るとき、気の根元に切り込みをいれ、そこに楔を切り込みに挟み打ち付けると、どんな大木でも、倒れてしまうんだよ。」

「へえ」

クレアは二人の会話を考え深く聞いていて呟いた。

「根が深いモノは楔を打っておかないとだめなんだな。」

第二十二章 楔を打つ 7

エアバスは街中を走っていた。

フランクを加えて、昼食をしに一行がたどり着いたのは、魚介類メインの料理店だった。

個室に案内されて、部屋に入ると、そこには、財団理事長の第六秘書セリーヌ・マルキナが待っていた。

「おひさしぶりです。みなさん。」

ダニエルは、自己紹介すると、セリーヌに言い寄ろうとしたが、冷たくあしらわれて、ふて腐れて席に着いた。

フランクも初めてだったので、挨拶を済ませ、席に着いた。

全員が席に着いたところで、セリーヌは鞆から分厚い封筒を取り出し、クレアに手渡した。

「依頼を受けて調べたものすべての書類です。後ほど、確認してください。」

「ありがとう。助かったよ。」

セリーヌの流し目がクレアにあり、アルバートは目を細くしてその様子を見ていた。

豪華な料理が用意され、テーブルの上を埋め尽くし、全員が遠慮なく食べ始めた。

レインとジリアンは興奮していた。

伐採所を発つ前に、フランクが実際に楔を打って木を切り倒すのを二人に見せたからだだった。

伐採所の近くにある大木を駐車場めがけて倒したのだ。

「こんな手のひらサイズのものを打ち込まれるだけで、あんな大きな木が倒れちゃうんだから、びっくりしちゃったよ。」

「力点の作用だよ、レイニー。」

「それぐらいわかってるよ、ジル。」

フランクはしみじみと二人の様子をみていた。そして、視線をクレ

アに向けた。

「これから、どうするんだ、クレア。」

「うん？ああ、テオ少佐と落ち合って情報交換をし、今後どうするか話しあおうと思う。」

「ロブたちとか。」

「ああ、なにか、問題でも？」

「デイゴはともかく、ロブはどうかと、シモンも言っていた。」

「うーん、そうだね。」

食しながらフランクと会話をつづけるのに、レインたちがいたので話しにくいなと考えていた。

セリー又はレインとジリアンたちが食事を終えた様子を確認して、声をかけた。

「レインさん、ジリアンさん。この店には魚を生きのまま水槽にいられたる場所があるのですよ。見に行きませんか。」

ジリアンは目を丸くして喜んだ。

「行きます。」

レインは興味が無さそうだったが、ついていくことにした。

「ダニエルも行って来なさい。」

クレアが邪魔だと言わないとして、手で払う素振りをして言い放った。

ダニエルはふて腐れて、3人の後についていった。

個室には、クレア、コーデイ、アルバート、フランクが残った。

クレアはセリー又から受け取った封筒から書類を取り出した。

他のものたちはもくもくと食事をしていた。

「実際、ダンの復讐をつもりなのか。」

フランクは単刀直入に話を切り出した。

「そのつもりはないよ、フランク。」

「犯人を突き止めたんじゃないのか。」

「まあ、だいたい。でも、それは手下がしたに過ぎない。」

「じゃ、その命令を出した親玉ってやつを始末しようとか……。」

「そんなことをダンが望んでいないことくらいはわかっているよ。」

「では、どういうことなんだ。あんなに武器をそろえてしかも……」

「知ってるはずだ。シヴェジリアンドで何が起こったのか。」

「ああ、赤い閃光だろう。命を狙われたのなら、出発式でもあっただろう。」

「あれは黒衣の民族だ。閃光は軍内部の犯行だ、あきらかに。」

「なにがいたいんだ、クレア。」

「親玉を始末しようなんて、おそらくできない。手に掛けようものなら、そこにたどり着く前にやられてしまう。」

「もし、万が一にあたしが親玉を始末することができたとしたら、それはそれでパワーバランスが崩れてしまう。」

「おい、まさか、この国の命運がかかっているって言いたいんじゃないだろうな。」

「そんな良いものじゃないよ。悪い奴を倒す、始末してしまうだけが、すべてじゃないってことさ。」

「フランクは前のめりになって、話しこんでいたが、ここで、体を起し、椅子の背にもたれてため息をついた。」

「そして、無言でもくもくと食べるコーディとアルバートの顔を交互にみていた。」

「クレアは書類に目を通し、内容を把握しようとして集中していたが、フランクの言葉には耳を傾けていた。」

「ダンの敵をとってほしいかい。」

「いや、そんなことは思っていない。」

「じゃ、犯人が誰なのか知りたいのか。」

「知ったところでなにもできないよ、俺には。」

「書類を目にして、ページをめくっていた手が止まった。」

「パラディーゾデラモンテグナ都市起きた災害は、黒衣の民族が岩を爆破したとの報告がある。これは、グリーンオイル製造工業が買収に乗り出したことで目的が明らかになったよ。」

「なにが？」

「レットオイルの製造だよ。アニーから聞いてるはず。」

「ミネラルか。」

「そう、それと高温。」

「リゾート地を買収するより、瓦礫の状態になったものを安く買い取ったほうがいいからか。」

「いや、リゾート地を手放すためだろうな。でも、このもくろみは御破算。」

「なぜだ。」

「財団が介護医療都市計画にするため、買収するからさ。」

「おい、親会社を買収するのに、慈善団体の財団が買収できるわけが。」

「おやおや、フランク知らなかったのかい。財団はグリーンオイル製造工業から独立しているんだよ。」

「研究や開発したものを元手に資金を増やしているんだ。」

「フランクは天井を見上げて目を泳がせた。」

「アルバートの手が止まり、口を挟んだ。」

「私利私欲のために人災を起し、都合の悪い事象は闇で葬りさり、パワーバランスを利用して自分たちを有利になるよう仕向ける。」

「その言葉に、フランクは目をクレアに戻してにらみつけた。」

「親玉って、グリーンオイル製造工業の社長っていうことか。」

「知ってたか、フランク。グリーンオイルを不幸な事象に影響させない、私利私欲のためにグリーンオイルを製造してはいけないうつてというのが、グリーンオイル開発者の主旨であることを。」

「もちろん、有名な話じゃないか。デミスト博士のことだろう。」

「そうだよ。」

「クレアは書類を置き、フランクに顔を近づけた。」

「社長には子供がいらないんだ。つまり、監視と責任を可能な限り永遠に請け負うための跡継ぎがいらない。」

「その場合は同族から出すのじゃないのか。」

「その同族であるデュークが財団の理事長だろ。それが反目しているんだから、操ることなんてできないんだよ。」

「それで？」

「デュークも脅されているんだ。セイラを跡継ぎにさせるわけにはいかないから、他に男子を跡継ぎにさせるようにと。でなければ、セイラを始末すると。」

アルバートが席を立てて言った。

「同族間での争いなんて、興味ない。」

「じゃ、理事長もそのうち、社長の言いなりじゃないのか。」

クレアも席から立った。

「そうでもないんだよ。逃げ道はあるんだ。だから、社長も焦っているんだよ。」

「レッドオイルの開発を急がせているのか。」

「シヴェジリアンドで赤い閃光は完成品じゃないからな。」

クレアが席を立つと、コーデイも食事を終え、席を立った。

クレアが部屋のドアノブに手を掛けて言った。

「フランク、アニーの事を頼むよ。」

フランクはなにか言おうとしたが、口をつぐんだ。

部屋にただ一人残った時に、フランクはつぶやいた。

「ダンと同じ事を言いやがった。」

第二十二章 楔を打つ 8

大きな水槽がいくつも並んでいる場所にレインたちは案内された。

「うわあ、すごい。こんな大きな魚までいるんだ。」

ジリアンより大きな魚が優雅に泳ぐ水槽が目の前にあった。

周りを見わたせば、大きな魚だけでなく、小さな魚が群をなして一緒に入れられたりしていた。

ジリアンは小さな魚をみて大きな魚を見上げたりして、不思議そうに首をかしげていた。

「セリーヌさん、この小さな魚って、大きな魚に食べられたりしないのですか。」

「定期的にエサ用の小魚をあげているみたいですよ。泳いでいる小魚を食べないようにさせているみたいです。」

ダニエルは3人とは距離を置いて壁に持たれかけていた。目線はあくまでセリーヌの足からお尻にかけてだった。

ジリアンは小さな水槽に目がいき、そこにはキラキラひかる鱗うろこをまとった魚が泳いでいた。

「すごい、これって、南の海にいてる魚でしょ。生で見たのは初めてだなあ。」

「そうです。よく、ご存知ですね。」

「うん、学校の図書館でよく図鑑をみていたんだ。」

「ジリアンさん。理事長の邸宅にいらっしやれば、珍しい魚がたくさん見られますよ。」

セリーヌの言葉に、ジリアンはすこし胸が痛くなった。

理事長のデュークから、養子にならないかと言われたことを思い起こした。

輝かせた目が一瞬にして暗い様子になり、節目がちに水槽を眺めてジリアンは言った。

「セイラは元気かな。」

「ええ、お元気ですよ。ジリアンさんに会いたがっておられました。お母様のセシリア様がお戻りになりませんので、お寂しいのです。」水槽のガラスに手のひらを合わせていたが、指を立て始めた。

（僕だって、そばにいてあげたいって思うよ。）
「いえない言葉をこころのなかでつぶやいた。」

「これって、食べられないようにされているのって、でも、いずれ食べられちゃうんでしょ、セリーヌさん。」

空気の読めないレインはあからさまに水槽を指差して、たずねた。

「食べないそうですね。ここの店主が観賞用に飼育しているのです。いずれ、このお店の入り口に展示する予定だと聞きました。」

「へえ〜。」

「レイニー、小さい魚と大きな魚がこの大きな水槽で生きているっていうのは、人間の世界と同じなんだよ。食べられないようにするためににはなにか別のことをしないとだめなんだ。」

ジリアンの意味深な物言いにレインは考えても無駄なような気がした。

「ジリアンさんの言うとおりですね。大きな海での生態系なら、食べられてしまう小魚も、この水槽でなら、人間がエサを与えるので食べられない。食べられてしまうと、生態系がくずれてしまいますからね。」

「食べられてしまうだけの小魚だけじゃ、次第にいなくなってしまうんだよね。」

優雅に泳ぐ魚たちを眺めて、レインとジリアンは自分たちの運命が誰かの手によって左右されているのかという考えがすこしよぎった。「こんなところにいたんだ。」

アルバートがやってきて、ダニエルの横に立った。ダニエルが何をしていたのか、声を掛ける前にすこし後ろで見ていたので鼻で笑った。

「食事は終わったから、ドックに帰ろう。」

ダニエルはそそくさと、その場から立ち去った。

レインたちが店の入り口に戻ると、セリーヌが立ち止まっていた。
「用件は済みましたので、ここで別れします。また、お会いしましょう。」

深々とお辞儀をするセリーヌに、みんなは礼を言った。

フランクを町のはずれで、エアバスから下ろした。

「みんな達者でな。ダニエル、シモンによく伝えてくれ。」

「はいよ。」

クレアは無言でフランクに手を振り、レインとジリアンは礼を言って別れを告げた。

ガラフアランドランド・ドックには、テオと部下ふたりが到着していた。

エアジェット3機がデッキに待機していた。

シモンと話をしている間、部下のひとりが当りをうるうるとして、誰かを探していた。

「キャサリン、ロブなら逃げ出したぞ。」

「どこへですか、シモンさん。」

「ハハ、どこって、俺が言うわけがないだろう。」

詰まらなさそうに、テオの部下であるキャサリンはSAFの方へ近づいていった。そして、もうひとりの部下もついていった。

「あれが、スカイエンジェルフィッシュ号か。趣味の悪い塗装だな。」

「そうね。嫌がらせじゃないのかしら。」

「例のエアジェットを見てみたいな。」

「ああ、そうね。レテシア少尉がデザインしたって言う機体だったわね。」

二人の背後から、チャベスが近づいた。

「嬢ちゃん、やっぱり、来たんだな。」

「嬢ちゃんっていう言い方、いい加減やめてくれないかしら。チャベス。」

声でチャベスだと判断したので、キャサリンは後ろを振り返らなかつた。

「大手造船所の会長さんの娘さんを捕まえて、お嬢さん扱いしない者はエスパニシーオネにいないからな。」

「それって、馬鹿にしてるんでしょ。」

キャサリンが振り返ってチャベスを睨んでいると、もうひとりの部下が叫んだ。

「あ、あれ、あれがあのでエアジェットか。」

ドックのデッキに立つ3人が、目にしたのは、パジエロブルーが飛行している様子だった。

「ああ、パジエロブルーか。」

「わかったわ。あれにロブが乗っているのね。ひとりなの？」

「いや、めがね男を乗せているはずだ。」

一方、エアジェットには滅多に乗らないカスターがパジエロブルーに始めて乗っていた。

足元がガラス張りとはいえ、下が見えることに恐怖して、青い顔をしていた。

ロブはキャサリンが来るのを知って、パジエロブルーに乗り込んだ。一人で飛行するつもりだったが、なぜかカスターを乗せてしまった。

「試しに乗っておいたほうがいい。」

「操縦なんて、出来ないよ。」

「もし、万が一のことがあったらだな……。」

「万が一に僕が操縦することになったら、それこそ、墜落するよ！」

「それでも、着陸できるくらいの手順を覚えておいて欲しいね！」

けんか腰のやりとりが続いて、二人はパジエロブルーで飛行することになった。

横から眺める分には、気持ちがいい。

エスパニシーオネの街並みや海岸沿い、逆を向けば、限りなく広がる水平線に海の広大さを感じて、清清しさを得られる。

しかし、下をみれば、座席に固定されているとはいえ、落下しそうな勢いの長めだった。

海岸沿いを飛行すれば、岸壁に落ちて体が砕けるところを想像してしまつて、気分が悪くなる。

そうした高揚と落ち込みで上下して、次第に平常心でいられなくなつた。

いろいろと口にしてわめいていると、ロブがぼやいた。

「キャサリンと一緒にいたほうがましだったかな。」

ロブは予定より早く切り上げて、ドックに戻ることにした。

デッキに着陸すると、キャサリンが走りこんでいてロブに飛びついた。

「ダーリン、わたし、待ちくたびれたわ。」

「誰がダーリンなんだよ！」

「あらあ、いつでも、わたしはOKなのよ。レテシア少尉と別れてからわたしを迎えに来てくれるって首を長くして待っているのに。」

ロブはキャサリンを突き飛ばした。

「キヤーツ。」

その様子を目を丸くしてみていたカスターだった。

「え?! ナニナニ。ロブに、オンナがいたの?」

「いるわけないだろうが。」

ロブは足早に立ち去ろうとした時、そこに、青い顔をしてロブの様子を見ていた者がいた。レインとジリアンだった。

(いちばん、見られたくない奴がここにいた。)

逃げるようにしてその場からいなくなつた。

突き飛ばされて尻餅をついたキャサリンを、カスターは右手を差し出した。しかし、キャサリンは無視をして、自分で立ち上がった。

飽きた顔をしたものの、レインたちの方へ向かっていった。

「お帰り、どうだった?」

茫然としていた二人はカスターの言葉が耳に入らなかった。

(この二人にも僕は無視されているのか。)

そこへチャベスがあらわれた。

「おい、大丈夫か。妙なものをみたのか。」

チャベスは視線をキャサリンに向けると、何があつたのか理解できなかった。

「おまえさんたちは、キャサリン嬢を知らないんだな。」

「ええ、どういった方ですか。」

カスターが聞き返すと、キャサリンがデッキから出て行く姿を見計らって口を開いた。

「エスパニシーオネきつての大手造船所の会長さんの娘さんで、アクロバット飛行コンテストで優勝常連だったロブに一目ぼれしてエージェントの飛行士になつたんだ。」

「ひとめぼれですか。」

「ああ。このドックに入り浸つてて、スタンドフィールドドックに何度も行った事があるんだが、レテシアのことがあつてから、軍に入隊したんだ。それから、テオ少佐の部下になった。」

「へえ。でも、ロブは無碍に扱うんですね。」

「ああ、あい変わらずだな。」

ふたりの会話が耳に入らなかつたわけでもなかつたので、ジリアンはつぶやいた。

「ロブ兄さんつて、やっぱりモテるんだ。」

「女性の話しなんて、聞いたことなかつた。」

「うん。兄さんもレテシアさん一筋なんだよ、きつと。」

レインはばかばかしく思えた。きつと考えれば考えるほど、ロブとレテシアの事を心配すればかばかしくなるんだと思つた。

キャサリンはもうひとりの部下を引き連れて、テオのところへいこうとした。

「キャシー、見たか。あれ、ロブとレテシア少尉の息子だよ。少尉にそっくりじゃないか。」

「そうね、ほんとそっくりね。」

わざとらしく強調されて言われていたので、腹を立てながら、靴音をならし手を大きく振って歩いた。

ロブがシモンの部屋に入ろうとすると、アルバートが立っていた。

「中には入れないよ。」

「俺を中に入れさせないのか。」

「そうだよ。」

舌を鳴らしたロブの後ろから、靴音を立てて近づいてくるキャサリンがきて、中に入ろうとした。

「あんた、誰？」

「わたしはキャサリン」オルブライト准尉。中にテオ少佐がいるなら、入れて頂戴。」

「だめ。」

「何ですって。」

「大事な話をしているんだよ。お嬢ちゃんは入れないの。」

顔を赤くして怒ったキャサリンはアルバートの足を力強く踏もうとしたが、交された。

「よく、お嬢ちゃんだって、わかったな、アル。」

「ああ、クレアさんからキャサリン嬢は中に入れないようにいわれたから。」

ロブは仕方なく、キャサリンともう一人の部下を連れて、デッキに戻ることにした。

「話があるんだが、キャサリン。」

「ええ？ロブから、何の話かしら。」

甘い声を出して、キャサリンはロブについていった。

キャサリンはもう一人の部下についてこないように言ったが、ロブが止めた。

デッキで、ロブは単刀直入にレテシアと一緒にいる白髪の少女のことを聞いた。

「名前をイリアっていうらしいの。」

「イリア？」

「ええ、年のころは、18歳くらいかしら。」

「どうして、それを？」

「あら、少尉がアクロバット飛行をしているなら、相棒がいるでしょ。どんな人物か気になるところでしょう。」

ロブは、感嘆の声を漏らして、自分の思量の至らなさを嘆いた。

「グリーンエメラルダ号のクルーから小耳に挟んだの。クルー自体もイリアを直接見た人は少ないらしいわよ。でも、レテシアが娘のようにかわいがっているっていうのは聞き及んでるのよ。」

自慢げに話すキャサリンと違って、だんだんと落ち込み暗くなるロブは、レテシアの身を案じた。

脳裏にはコーディに言われた手紙のことが浮かんできて、あれから何度も書いて書き直し、まだ、書き上げていなかった。

もうひとりの部下が吐いたことばに、ロブの揺れていたところに突き刺さった。

「もう、30歳過ぎたんだから、少尉もいいかげん、空を身一つで飛ぶ危ないことはやめないといけないよな。まるで、自殺行為だ。」

第二十二章 楔を打つ 9

「放せ！」

「オイ、よせ！」

デイゴがロブを羽交い絞めにして抑えていた。

「俺は、これからレテシアに会いに行くんだ！行かせろ！」

「今から、行ってどうするんだ。」

「今行く！行かないと、取り返しのつかないことになる。」

力強くロブの片腕を取り、向きを替えさせたかと思うと、思いっきり殴っていた。

ポコッ

「グハッ」

ロブが倒れていく間に、口から血が散っていった。

バタッ。

床に倒れこんであまりの勢いにバウンドした。

「もう一度言ってみろ。ロブ！」

息を切らしながら、濃厚なはずのデイゴが顔を赤くして、怒声を口ブに浴びせていた。

「取り返しのつかないことは、9年前にしているんだ。今、このときに、お前に何ができるって言うんだ！」

気を失いかけてロブはデイゴに殴られたのは何年ぶりだろうと思っていた。

「先日、グリーンエメラルダ号と合流してた時、お前は何をしていたんだ。レテシアに会わず顔もなくて、隠れていただろうが。」

視界がやけに白く見えて、デイゴの声も遠のくように思えた。

「おやおや、内輪もめですか。こそこそと調べたり、人のことを疑ったり、空気が澱んでいますね。」

デイゴに見張られていたはずのジョナサンが二人の様子をみて、つぶやいた。

(誰のおかげでこうなっただろう。)

ロブの頭の中でその言葉が繰り返されていた。

痛みを感じて、床にぶつけた頬が腫れ上がって行くのがわかった。

「黙っているよ。ジヨナサン。」

「黙ってなんか、いられないね。わたしが知っている限りのレテシアはつらいことや苦しい事を隠し持って笑顔で振舞っている人です。彼女を苦しめているのは、明らかでしょう、ロブ。スタンドフィールド。」

頭を殴られたような言葉を吐かれて、そして、「スタンドフィールド」を強調されて、気分が悪かった。

「わたしは知ってますよ、彼女の相棒の事を。」

「相棒？」とデイゴが聞き返すと、ジヨナサンは大きくうなづいた。「人見知りの激しい少女で、レテシアしか心を許していません。それはもう、わが娘のように思っ^てレテシアはかわいがってるのです。」

当然でしょうね。実子はロブに取り上げられたのですから。」

「おい、ジヨナサン。他に言い方があるだろうが。」

「ないですよ。少女も実の母親に見捨てられた口くちですから、レテシアを母親のように慕っているわけで……。」

「ジヨナサン！」

ロブが叫ぶと、そのまま立ち上がったが、立ちくらみをしながら、ジヨナサンをにらみつけた。

「知っていたんだろ。」

「何をです。」

「白髪の少女のことを。」

「ええ。知っていましたよ。レテシアから聞いていました。」

「白髪の少女が黒衣の民族の者だと知っていたんだろう。」

「いいえ、知りません。」

「嘘を言うな。知っていたはずだ。」

「何が言いたいのですか。」

「レインが遭遇したホテルマンや、皇女殿下を襲ったスカイロードの学生を操ったのが黒衣の民族の魔術師であることはわかっているんだ。」

「それでなにか。」

「白髪の少女が……。」

「はい、そこまで。」

ロブの言葉をクリアがさえぎった。

そこにいるはずもない者がそこにいるとばかりに、3人は驚きの表情でクリアをみていた。

クリアの背後からテオが出てきた。

「ロブに直接渡して欲しいといわれたのだ。」

テオは一通の手紙をロブに差し出した。

ロブは受け取って、宛名が自分であることを確かめて、裏を返すと、「レテシア＝ハートランド」と記されているの確認した。

驚きの表情で手紙を見つめるロブをみて、ジョナサンは眉をひそめた。

「ジョナサン、嫌疑は晴れた。なにも疑う物証は出てこなかった。

疑って済まなかったね。」

クリアの言葉に、ロブはすこし疑ったが手紙のことで頭が回らなかった。

デイゴはクリアに視線を送ると、クリアは口元を上にあげて深くうなづいた。

まるで、最初からそういう口裏あわせをしていたかのようだった。

「わたしへの疑いが晴れたというのは当然のことですが、これで心置きなくSAFに搭乗できるんですね。」

「これからもよろしく頼むよ。」

クリアに言われて、ジョナサンはその場を足早に去った。

デイゴはロブに声をかけた。

「手紙をここで読まないのなら、自分の部屋で読んできたらどうだ。」

「

チラリとディゴを見て、ロブは手紙を何度も裏表を返して、中身があまりに薄いことを見せ付けた。

そして、指で封を切った。

読んですぐ、ロブは笑った。

「相変わらずだな。」

周囲にいてるものは、中身が気になるところだが、言葉には出さなかつた。

恥ずかしいとばかりに顔を片手で隠すと、手紙の内容を口にした。

「レインの誕生日を親子三人で祝いたって、まだ、先の話じゃないか。」

クレアはあきれた顔をした。

（それだけ、気が急いててお前に会いたってことだよ。）

口にしなかつた言葉は、胸にしまいこんだ。言葉に出してしまえば、ロブのこころを揺らしてしまうだろうと思つたからだ。

ジヨナサンは、急いで自分の部屋に入った。

ロブに届けられた手紙はレテシアからだというのは、直感的にわかつていた。

シヴェジリアンドで起きたことはレテシアの耳にも届いていたので、レインたちの身を案じていた。無事だと知ると、安堵したものの、会いたい気持ちを寄り一層つよくなっていることも感じ取れた。

そこへ、部屋のどこからともなく機械音が鳴り響く。

ジヨナサンは、古い革の靴を取り出して中から、スピーカーと受信機みたいなものを取り出した。音はそれから出ていた。

スイッチを押してスピーカーに耳を当てた。

「オイ、定刻以外で通信してくるなと言つてあるだろう。」
「ガーガーッ」

「わ、わかつてるわよ。でも、どうなったのか、し、知りたくて。」

「何がだ。」

「レ、レテシアの手紙よ。」

「ああ、いま、届いたみたいだ。」

「どのような内容だった……の……。」

「さあな。それより、こちらも打って出たほうが良さそうだ。」

「打って出る？」

「ああ、実行しないと、レテシアがロブが動きだしそうだ。」

「そ・そういうことね。でも、動かせる人形がないんじゃないの？」

「そうだな。テオのところのキャサリンで、今晚どうかな。」

「今晚は無理だわ。抜け出せそうにないの。」

「そうか。じゃ、適当に見繕う。次の停泊が決まったら、連絡する。」

「ラジャー。」

ジョナサンは考えていた。嫌疑が晴れたというのは、嘘だろう。物証が出なかつたから、そう言ったままでのことだと。

物証を出すようなへまをするようでは、スパイとして、刺客として、役に立たないことになる。

「いよいよだな。殺すなど言われてはいるが、それも言ってもらえないだろう。」

アルバートはフランクのところまで調達した通信機の腕輪を試していた。

周波数をいじっていて偶然聞こえてきた、ジョナサンの声。相手の言葉は聞こえなかつたが検討は付いていた。

「これで、大物がしゃしゃり出てくるとは思えないけど。イリアとジョナサンだけでは、こころもとないだろう。いったいどんな人物が表舞台に立つだろうか、楽しみだな。」

アルバートは腕輪を長めのチェーンに通し、首に掛けた。そして、胸元にしまいこんだ。

手には、もうひとつ、チェーンを持っていた。アルバートは、レインたちを見つめ、通信機のテストを繰り返すよう言った。

そして、もうひとつのチェーンをジリアンに手渡し、自分のチェーンを引っ張り出して腕輪を見せた。

「こうやって首にかけて、実物は隠しておくといい。」

「うん、わかったよ、アル。」

「レインは、腕にはめておいたらいいよ。」

「うん、これのテストは、自分たちの部屋でするよ。」

「なんだか、騒がしかったみたいだけど。なにか、あったのかな、アル。」

「さあ、出発する段取りは付いたみたい。」

「整備は終わったの？」

「ああ、大丈夫みたいだよ。」

レインとジリアンは、ジョナサンの事を知らされていない。それは、レシアとつながっているジョナサンが何かしら命を狙うものとかかわっていると思わせたくないからだった。

自分たちがなぜ命を狙われているか、本当のところは知らないだろうと、アルバートは考えながら、ふたりを不憫に思った。

ジリアンはジリアンで、アルバートが最近はまともな状態であることと変わってきたと感じていた。

アルバートが嫌らしく思えたときがあったのは、振りをしていただけかもしれないと考えていた。

そこへクレアがあられて、3人に伝えた。

「明日、ジュエリーレイク目指して、出発する。」

「ジュエリーレイク？」

「ああ、今度はクルーの整備をすることになったんだ。」

「え、健康診断ってやつ？」

「ああ。ジュエリーレイクに大きな病院があるらしい。そこに停泊予定。」

アルバートは嫌な顔をした。

「また、血を抜かれちゃうんだ。嫌だな。」

クレアはアルバートの肩をポンと叩いて、言った。

「ご褒美をあげるから、我慢しなさい。」

その言葉の意味を、アルバートは理解して、真顔になった。

（とうとう、その時が来たのか。）

ジリアンは、アルバートの表情が一変したのが気になったが、そのあとすぐに小さい子供のように無邪気な笑顔になったので、気にしないようにした。

「注射は嫌なんだ。ご褒美もらえるなら、我慢する。」

ジュエリーレイクの側まで来ると、湖畔に建つ大きな白い病院が、スワン村の図書館にそっくりだった。

しかし、スワン村の湖と違って、ジュエリーレイクは太陽の光を浴びて輝いていた。

雪山に囲まれ、その雪解け水が流れ込んで澄んだ水質のジュエリーレイクは、太陽の光が湖の底まで届いているほど透明度が高かった。病院近くの飛行場でS A F号は着陸した。スカイエンジェルフィッシュ

クレアは、病院の前で立ち尽くして、スワン村でのことを思い起していた。

数日滞在していたが、スワン村に着いて間もない頃、図書館でレテシアに会ったときのこと。

その時はまだ、「白い魚」の本を手にしておらず、その存在すら知らなかった。白い魚の著者がまだスワン村にいるのではないかと思つたときにはもう遅かった。

確かに、白い魚の著者はスワン村に来てその本を書き上げ、女の子を出産していた。その女の子を行方を捜していたら、もういないことがわかった。

いなくなった時期が、レテシアがスワン村にいた時期に重なっていたことが気になっていた。

考えていたことに当てはまっていたことをいましみじみと深く考えさせられた。

（あの時は、ダンのことしか考えていなかった。レテシアがなぜ、スワン村に来ていたのか、もっと深く調べることができていたなら・・・、いやなにも変わらないだろう。）

ロブとレインを見ていた。

（レテシアがあちら側にいることで身動きがつかない。真実を知れば、あの二人はどうなるのだろう。知らせないことでレインには

まだ自由が利く。自分で考えて出した答えで正しい道を選ぶことができるだろう。)

絡まった人間関係のもつれは、本人次第で解くことができるだろう。しかし、意図的に感情を動かされて縛られたものは、なかなか解くことができないことにたどり着いていた。

無理に縛りを解こうすれば、身が切れてしまう。それとても危うくて、思うように行動できないでいた。

それはサンジヨベージェ将軍にとっても、同じことだったに違いない。息子を、そして娘のエミリアを、深い意味合いで人質にとられて身動きが着かない。

テオ・アラゴンとの話し合いでたどり着いたのは、皇帝崇拜派、皇帝廃嫡派、中間派（民族融合派）の3つが権力争いで派閥を組み、お互いを牽制しあっていることだった。

そして、その争いを操っている人物が、グリーンオイル製造工業の社長セルブラック・デ・ミストだった。

クレアが考えてたどり着いた組織がホーネットで、王族専用空挺部ホーネット隊が解散になったものを、秘密裏に行動できるように編成しなおされたものだった。

隊長だったテオは意図的にはずされていた。

そのホーネットのメンバーにレテシアが入っていて、何らかの指示によりスワン村で白髪の少女を連れ出したと推測していた。

おそらく、レテシアは組織が存続する意味を知ってはいない。なぜなら、彼女にはロブとレインを守るための手段としてホーネットに所属しているという意思があれば十分だとしていた。

クレアの中でたどり着いた考えはすべてコーデイに伝えていた。その場で背伸びをして、腹をくくった。

「矢でも鉄砲でももって来ればいい。それを大義名分にして、抹殺してやる。」

クレアが睨んだのは、ジヨナサンの背中だった。

そして、クルーは病院の中へ入っていった。

クルーは検査用に着替え、医療学園都市で受けた健康診断と同じく、検査は一泊二日で行われた。

検査はクルーだけでなく、一般の患者も含まれていて、フロアーはごった返ししていた。

レインが行くべき診察室を見失って、うろろろしているところに、どこか見覚えのある白衣の男性をみかけた。

思い出そうとしても思い出せない。医療学園都市でみかけた医者がここにいてたとしても、覚えているはずもないのに、思い出せないことに歯がゆく感じていた。

ジリアンをみつけることができ、安心して、ようやく落ち着くことができたレインの耳に、叫び声が聞こえた。

「キャッー。」

診察室の前に置かれた水槽の魚たちが次から次へと浮いていく。

そこには、怯えた看護師と、紙コップを手にしたクレアが立っていた。

病院の警備員がかけつけ、事情を聞こうとした。

コップを握りつぶして、怒りに震えていた。

違う診察室から、コーデイが現われた。クレアにそっと近づいて、囁いた。

「口にはしていませんが、わたしのコップにも異物が混入されていたと思います。」

「たぶん、これはほんの脅しだ。」

クレアは当りを見渡した。

警備員のひとりは看護師に事情をつぶさに聞こうと別室に連れて行くこととした。看護師はただただ「わたしではありません。」と叫ぶばかりだった。

クレアは他の看護師に促されて、自分の病室にもどることにした。

レインは騒ぎの中、視界に先ほどの白衣をきた男性が早足で立ち去る姿があった。

(あの男性はこの騒ぎに何か関わっているのだろうか。)
後ほど、クレアに話をしてみようと考えた。

コーディも検査を中断して病室にもどろうとした。
クレアを殺そうとするのは、セシリアの最初の子が誰なのか、知らないままになる。それは敵にとっては都合の悪いことのはずだった。

しかし、あからさまに殺そうとするのは、クレアが毒の入った検査用の液体を見抜くと最初から計画しての犯行だったとの推察がつく。次は確実に殺すと言った脅しに他ならないと。

クレアは病室に戻ると、電話を掛けた。相手は第六秘書のセリーヌだった。

「セリーヌ、悪いが、レテシアの相棒の動向を調べて欲しいんだ。」

「レテシアさんの相棒と言いますと、グリーンエメラルダ号のクルーの方ですね。」

「ああ、白髪の少女だと思うのだが、グリーンエメラルダ号を離脱、あるいは、離れる行動をとっていないかどうか。それが知りたい。」

「わかりました。出来る限りの手を尽くして、情報を得てみます。」

「よろしく頼むよ。」

白髪の少女が乗っ取りをしたら、満月の夜。昼間に操ることができたのはおそらく夜のうちから仕込みができていた可能性があるだろう。

先手を打つ必要がある。彼女を止めることはできないかもしれないが、こちら側で防ぐことも可能はず。

レインがクレアの病室に現われ、さきほどの白衣の男性の話をした。

「めがねをかけていたのか。」

「あ、はい。」

「白目を向いていたかどうかまではわからないな……。」

「あの、前みたいに、ホテルマンのようなことが……。」

クレアはレインに笑顔を向けた。

「大丈夫。心配は要らない。これがあるでしょ。」

クレアは通信機の腕輪をかざして、指を指した。

「病院じゃ使えないでしょ。」

「まあね。でも、病院で人殺しなんてしないよ。」

レインを安心させて病室から出そうとした。

「なにか、気になることがあったら、今のように何でも言ってきて。」

レインは納得がいかないような顔をして、病室から出た。

白衣の男が誰なのか、わからない以上は何も出来ないと、自分に言い聞かせてその場を離れた。

レインが検査を終え、病室にもどるまえに、ジリアンの姿が見当たらないのに気がついて病院のなかを探した。

階段の踊り場で、白衣の男性と話をしているジリアンをみかけて、声をかけようとしたが、その男性が見覚えのなる男性だったことに胸騒ぎがして、躊躇した。

ジリアンはその男性から、一枚の紙を受け取り、会話を終えた。白衣の男性は階段を下りていった。

「ジル、どうかしたのか。」
いなくなっただけから意を決して声をかけると、困った表情をジリアンはしていた。

「レイニー、どうしよう。」
ジリアンに近づいて、受け取った紙に書かれている文字を読み取った。

「『セシリアが危ない。』って、これ……。」
その時、レインは白衣の男性が誰なのかを思い出した。
(劇場でセシルをエスコートしていた理事長だ。)

どういう理由で白衣の姿で現われたのかと考え込んだ。
「誰にも言わないようにして、ここから抜け出すように言われたんだ。」

その言葉で脳裏にかすめた言葉を口にした。

「畏だ。」
不思議な顔をしてジリアンがみているので、理由を述べた。

「そうなんだ。学園の理事長が白衣の格好をするなんて、おかしいよね。」

ため息をついて、迷う必要もないのに、なぜか気になってしまいうジリアン。

「ついていく振りをして、僕が後をつけよう。危ないとわかったら、

すぐに逃げるといい。僕が助けに行く。」

レインに言われて、すこし考えてみた。セシリアの身に危険が起きたとしても、自分に関係ないとおもっているところもあるが、セイラのことを思うと胸が痛んだ。

「気になるくらいなら、行動してみようかな。」

ジリアンの言葉に、レインはうなづいて、病室にもどり服を着替えて、行動を起すことにした。

アルバートはクリアに言われた「ご褒美」を合言葉に、検査を終えると服を着替えてS A Fに向かっていた。

しなければいけないことは、前もって指示を受けていた。

検査で病室に泊まるのはクルー全員。停泊した際でもジョナサンはS A Fから離れることはなかったため、この時しかチャンスはなかった。

ロブとデイゴが見張り役として同じ病室にいる。アルバートと同室のカスターは睡眠薬で眠らせた。

S A Fの操縦室に入ると、航路のセッティングを組み始めた。指示通りのことをやり終えて、アルバートは一息ついて周囲を見渡した。三日月が白く輝き、闇夜を照らしていた。室内灯もつけずに、懐中電灯で作業をしていたので、月の光がやけにまぶしく思えた。

何気にS A Fの装備確認をしていると、パジェロブルーが格納庫にない事を知り、あわてて、外に飛び出した。

S A Fが待機している場所の周辺には見当たらなかった。

「いったい、どういうことなんだ。盗まれたというのか。」

アルバートは通信機で、クリアを呼び出した。

クリアは準備をしていた。コーディと病室が一緒だったので、これからのことを話し合っていた。

「わかった、あたしの準備が出来次第、そちらに向かう。アルのほうから、レインたちに連絡を取って欲しい。」

通信を終えると、おもむろに鞆からはさみを取り出し、髪を切り落とした。

「どうしたんですか、クレアさん。」

切り落とした髪を紙で包んでしぼり、紙袋にいれて、コーディに手渡した。

「遺言じゃなくて、遺品。」

唾をのみこみ、紙袋を受け取った。

「遺品としてではなく、ウィンディさんへの思いとして預かっておきます。無事でいてほしいからです。」

クレアは目を閉じてうなづいた。

防具を体に装着し、武器を携帯して、その上から白衣を着た。

「死ぬ時は、医者の方好をしておきたいと、ダンによく言っていた。」

「クレアさん！」

「悪いが、命拾いをして、ことに当たる気持ちはないよ。命をかけて、勝負する。」

鋭い目のクレアをみて、コーディは泣きそうな顔をした。

「太陽を打ち落とすことができなくても、影でうごめく月をいえることはできるだろう。」

クレアはそういって、病室を出て行った。

コーディは涙をこぼした後、拭って、防具を装着しはじめた。

ロブとデイゴに見張られたジヨナサンは、トイレに行きたいからと病室に出ようとした。

デイゴが着いていくと言い出し、ふたりはトイレに向かった。

男子トイレに入ったあと、困った顔をデイゴにむけて、ジヨナサンは個室に入った。

ジヨナサンが個室にはいると、そこには、白衣の男性が待っていた。目で合図をして、お互いの着ている服を脱いで交換した。

ジヨナサンが着ていた服に着替えた男が個室のトイレを出たが、デイゴは入れ替わったことに気がつかなかった。

ふたりは、病室に戻り、入れ替わった男は即座にベッドにはいり、ロブたちに背中を向けて横になった。

トイレの個室に残ったジヨナサンは、白衣をきて、二人が去ったのを確認してからトイレから出た。

廊下から外が見える窓を眺め、ジリアンが外で立っているのを確認した。そして、上から、レインが植え込みに隠れている姿も見えていた。

ジヨナサンは含み笑いをして、廊下を歩く速度を速めた。

病院の玄関前のロータリーで車を待つような振りをして、ジリアンは立っていた。

ジリアンは胸元に隠してある輪の通信機に針金を固定して、通信のスイッチを常時入れたままにした。

一台の車がジリアンの前で止まり、中から窓が開いて話しかけられていた。

「セリーヌ＝マルキナ女子の指示により、お迎えにあがりました。飛行場までお送りします。」

後部座席のドアが開き、ジリアンに乗車するよう促してきた。

その様子は、レインにも聞こえていた。すこし焦りながら、聞き入っていた。

レインのほうを振り返れば、疑われてしまう。飛行場だとわかれば、追いかけても来れるだろう。飛行場なら逃げ出すチャンスがあるはずだと考えていた。

ジリアンはその車に乗って行ってしまった。

レインはあわてて、ロータリーに現われた。

「レイン、どうかしたのか。」

後ろを振り返ると、作業着を着たジョナサンが立っていた。

ロブやデイゴと一緒にいてるはずと思いながら、不思議そうにしていた。

「今、ジリアンがそのお、グリーンオイル財団の人に言われて連れて行かれたところなんだ。心配なんだけど。」

そのロータリーにまた乗用車がやってきた。

「わたしはこれから、SAFに戻るつもりなんだ。ちょっと気になることがあるのでね。」

ジリアンが連れて行かれるのは飛行場だ。この辺だとそこしかないだろう。レインは渡りに船とばかりにジョナサンと一緒に飛行場へ

行くことにした。

ロブとデイゴの部屋で横になった男は、二人に気づかれぬように、防毒マスクを着け、懐から握りこぶし大の丸いものを取り出し、後ろめかけて投げた。

デイゴが気がついたときには遅く、丸いものは煙を吐き出しながら空を描き床に落ちた。床に落ちると勢いよく煙を吐き出した。

ロブとデイゴはその煙を吸ってしまい、倒れこんだ。デイゴが倒れると、ドスンと音がし、床が揺れた。それを合図に男は、ベッドから起き上がり、煙幕のなかに消えていった。

アルバートは一所懸命、レインの通信に呼びかけていた。

「壊れているのかな。」

ジリアンに呼びかけても、返答がない。ふたりに何かあったのかと、クレアに伝えた。

それから、アルバートはSAFが収納されている格納庫から出て飛行場を見渡した。

月明かりに照らされてより一層輝くパジェロブルーがそこにはあった。

そして、見慣れない空挺がそばにあった。

「あれでパジェロブルーを持ち出そうというわけじゃないだろうな。」

その空挺は小型でとてもパジェロブルーを収納できるしろものではなかった。

しばらくすると、車が一台、その空挺に近づいてくるのが見えた。

アルバートがその車から誰かが降りてくるのを確認しようと近づくと、後頭部を強打されて気を失い倒れた。

クレアはすでに、病院を抜け出し、徒歩だと30分かかる飛行場に向かっていた。

病院にもどると時間を無駄にしてしまう。レインたちのことなら、自分たちでなんとかするだろう。ロブやディゴがジヨナサンを見張っているのだから、心配はいらないと考えていた。

徒歩で向かうとは、自分でも間抜けだと思いきや立ちながら、早足で歩みを進めた。

車から降りたジリアンは、後ろを振り返ったが、誰かが後を追ってくる様子はなかった。

「あの、どこへ向かうのですか。」

「デミスト家のお屋敷ですよ。」

「そこには、セイラもいてるのですか。」

「ええ、もちろんですよ。」

「あの、僕一人で行ってしまったら・・・。」

「大丈夫です。きちんとこちらから、連絡させますから。」

ジリアンは腑に落ちない様子で、時間を稼ごうとした。

一台の車がこちらに向かってくるのがわかった。ジリアンを連れ出した連中が銃を取り出し、その車に発砲した。

「いきなり、何をするんですか。」

取り乱したジリアンはその場から、離れようとした。すると、男がジリアンの腕をつかみ、待機させている空挺に連れて行くとした。

「ジリアン!!!」

発砲された車からレインが降りてきて、ジリアンのいる方向へ向かうとした。

ジリアンは男から抵抗して、前のめりになったとき、空挺の後方にパジェロブルーがあるのが見えた。

男はジリアンに気を取られていて、銃が発砲できないでいた。

「レイン、パジェロブルーで逃げて。」

レインは、ジリアンの様子を見て、そちらめがけて走りこんできた。ジリアンに腕を払われて男は後方に倒れ掛かった。

ジリアンはその隙にパジェロブルーに向かって走り出した。

レインは倒れ掛かった男にドロップキックを決めて、地面にたたきつけた。

そして、パジェロブルーに向かって走った。

ジヨナサンが乗った車はSAFがある格納庫に向かった。

「予定通りだな。」

防毒マスクをつけた男はコーデイの部屋に侵入した。

足音で男の様子に気がついた。クレアから護身用の武術を教えるもらったとはいえ、いざという時は身構えさえできなかった。

作業着のポケットからナイフを取り出した男は、コーデイを切りつけようとしたり。コーデイは素早い動きができないまでも、何とか交わしつづけていた。

男の手首を取ることができ、背中に回して動きを止めようとした。手首をひねり返されて、コーデイの動きを止められた。

腹部を刺されたが、防具を身につけていたので、ナイフをはじき、男は前に倒れこんだ。それに乗じて、コーデイは全身で男に体当たりをして、床にたたきこんだ。

男はうめき声を上げたものの、床を転がり、コーデイから遠ざかった。それをチャンスにコーデイは部屋から出ようとする、男がナイフを突き立てて、突進してきた。

ナイフはコーデイの上腕を突き、男に押され壁に挟まれて奥深くまで刺さった。

「うぐっー。」

男は突き刺したナイフを抜き、腕から血が噴出した。そして、その場で座りこみ、腕を押さえた。男はコーデイの髪を掴み、壁にたたきつけた。

「ああー。」

気を失わなかったのを確認して、頭を床に叩きつけようとする。しかし、コーデイは力いっぱい後ろに反り返った。

そして、男の腕を床に叩きつけて頭で挟んだ。男は髪の毛を掴んだ手を離れた。

格闘がしばらく続いて、コーデイが足で男の胸をけりこんだことで決着がついた。

コーデイは血が出ている腕の上を布で縛り、血止めをはかった。男が失神しているのを確認して、荷物を取り部屋を出た。

男を始末することはコーデイにはできなかった。心配なのは、レインたちのことだった。部屋にいくと、レインもジリアンもいなかった。

それだけ確認すると、病院を出た。襲われたということは、レインたちも同じかもしれない。

しかし、ロブやデイゴにこのことを知らせるよりは、自分自身がいなくなっただろうが、無難だと考えた。

相手は殺すつもりがなかった。捕らえて情報を得るためだろう。病院に残れば、他のメンバーも危険な目にあわせてしまうと思ったからだった。

ジョナサンが格納庫に到着し、車から降りた。車はすぐに発進して格納庫から離れていった。

格納庫の入り口に、アルバートが倒れているのを見つけた。首元の脈をとり、生きている事を確認した。そのままにしてSAFに向かった。

SAFに乗り込むと、後ろから声をかけられた。ジョナサンは振り返らずに言った。

「どこかに潜んでいる。」

その人物は暗闇に身を隠した。

ジョナサンが操縦室に入ると、パジェロブルーが離陸するのが見えた。低空飛行を続け、病院の建物に隠れて見えなくなった。

空挺はそのまま、倒れた男をなかに入れて、車は走り去った。

「そう、そのままそのまま、順調だ。」

操縦については専門外。外の様子を確かめるだけに来た。順調に事が進んでいると確認して操縦室から出て、エンジンルームに向かった。

クレアがようやく飛行場にたどり着いた。

空挺が一機、待機しているのが妙に気になったが、S A Fがある格納庫に向かった。

格納庫の手前で車のタイヤあとが地面に残っているをみつけ、不思議に思った。

「アル、アル、聞こえるか。」

しばらくの間、呼びかけて、ようやく返事が返ってきた。

「ク、クレアさん。」

「どうかしたのか。」

「ああ、誰かに殴られて。」

「殴られただと！今どこにいる。」

「格納庫の入り口に・・・。」

クレアは足早に向かっていった。座り込んで後頭部を撫でているアルバートの姿が見えた。

アルバートに近づく前に、タイヤの後が、格納庫の入り口で止まってバックしている様子がわかった。

「車が来たのか。」

「ええ?! いや、気がつかなかった。」

アルバートに手を差し出し、立たせた。

「レインたちと連絡が取れないんだ。それと、パジエロブルーが外に・・・。」

アルバートが滑走路にあったはずのパジエロブルーがないことに気がついた。

「え?!」

「パジエロブルーがないのか。」

「ああ、S A Fの格納庫なくて、外にあるのを確認したんだ。外に出ると、あの空挺の側に車が止まって中から人が出てくるのをみていたら。」

「殴られたのか。」

「うん。」

アルバートは撫でていた手を目の前にもってきた。

「ひでえ、血が出ている。」

クレアはアルバートの腕を取った。

「中に入ろう。ご褒美をやるよ。」

アルバートはクレアに腕を取られたまま、歩みを進めた。

左腕の無い女性が右手で赤子を抱えて、自分が左腕で支えている。視線はその女性の肩越しだった。

その女性の顔は見えない。声は頭のなかに飛び込んでくる感じだった。

「額に星のような痣があるの。泣くと出てくるんだけど、こうやって寝ているときは見えてないわ。」

「興奮すると出てくるのかな。泣くってというのは顔を赤くするだろう。」

「そうねえ。この星のように、みんなを明るく照らすように輝いて欲しいわ。」

「君を明るく照らす女の子だ。星にちなんだ名前にしよう。」

「ええ、そうね。そうしましょう。」

自分が何者かもわからないのに、会話がはずんでいる。

違和感はなく、幸せな気持ちだけがこころにじわじわと広がっていきのを感じていた。

エアジェットのエンジン音が聞こえてきた。

「もう、空を飛べないのね。」

「そうだね。」

「この子が楽しげに空を飛ぶ日を見る日がわたしに来るかしら。」

その女性の頭に頬擦りをし、そしてキスをした。

「大丈夫、きつと来るよ。」

エンジン音は次第にけたたましく耳障りになり、その幸せな映像が薄くなっていく。

カスターは、近づいたり遠ざかったりするエンジン音で目が覚めた。ベッドで仰向けになっっている状態を知り、起き上がった。

寝ていたのはわかったが、ここがどこなのか、一瞬わからなかった。記憶が飛んでいるのがわかると、すぐにアルバートがいらないことに

気がついた。

部屋を飛び出し、ロブたちの部屋へ。ドアをあけると、煙が顔を撫でるようにしてあらわれる。軍にいた時に訓練をうけていたので、すぐに腕で口を押さえ、窓に向かった。

窓を開けて、煙を吐き出させると、ロブとデイゴが倒れているのがわかった。

ロブを助け起し、目覚めさせた。

「大丈夫かロブ。」

カスターが何度も呼びかけて、ロブはようやく目が覚めた。

意識が朦朧とするなか、現状を把握しようとしていた。

「ジョナサンは？・・・いるわけないか。どこへ逃げたんだ。」

「ジョナサンがしたのか？」

「ああ、おそらく。」

カスターはデイゴを起そうとした。エアジェットの音がするのに気がついたロブは、起すのを止めた。

「トラブルに巻き込みたくない。そのままにしてやってくれ。」

二人が窓から顔を出すと、パジェロブルーが飛んでいるのが見えた。病院周辺を旋回しているらしい。

部屋を出て、屋上に向かった。

病院で旋回を続けていることはジリアンが提案した。飛行場に戻るわけにいかず、敵に襲われた場合、どこへ逃げればわからなかったからだ。

しばらくして、柵の無い屋上にロブとカスターがいてることに気がついた。

レインはパニック状態で、ロブたちのことが見えていない。その様子はジリアンにもわかっていてた。

ロブが屋上から指図している様子を見て、パジェロブルーに乗り込もうとしているのが理解できた。

キャティナ・マウンターサ・ロッソ駐屯地で受けた訓練を実践して

みることにした。

パジエロブルーは低空飛行で、屋上のしたまで降下すると、屋上で走るロブに合わせ平行する。

屋上から飛び、パジエロブルーに移った。その衝撃ではじめてレインはロブの存在に気がついた。

ロブは即座にレインの操縦席のドアを開けた。

「どうするんだよ。」

「どうするって、入れ替われ。」

「え?!」

シートベルトをはずされて、ようやく理解できた。高度を保ちつつ、安定した飛行で操縦するジリアン。パニック状態からようやく醒めたレイン。

レインが外に出て、ロブが操縦席に乗る。パジエロブルーから屋上に飛び移ると、レインは振り返った。

そして、初めて、翼に何か取り付けられていることに気がついた。病院ではエンジン音で、入院患者や当直の者たちが騒ぎ始めた。

クレアとアルバートは乱れた着衣を整えていた。

白衣の下の防具を締めなおし、防具を覆い隠すように白衣のボタンをはめた。

アルバートは着衣から外した銃を手に、もう一度中身を確認して、ホルダーに入れなおした。

紅潮したアルバートの頬をクレアは両手で押さえた。

「興奮が醒めてから、おいで。待ってるよ。」

頬を抑えられたまま、深くうなづいた。頬から汗ばんだ首筋を拭うようにして、アルバートの肌を両手でなぞる。

クレアはアルバートから離れて、操縦室に向かった。

クレアの後姿をみながら、唇を指でなぞって、感触の余韻を味わっていた。

レインとカスターのジェスチャーで、ロブとジリアンはパジェロブルーの翼に何か取り付けられていることが理解できた。

病院の上を低空飛行し、二人で両翼の物体を取り外そうと飛びついたりして、取り除いた。

パジェロブルーの通信機が壊されていた。ロブはジリアンにカスターと交代するよう指図した。

理解はしたものの、パジェロブルーから降りる勇気がなかった。首を横に振るしかなかった。

困ったロブは、強硬手段をとった。

操縦桿を握っている様子を確認して、シートベルトをはずすと、後ろに反り返り、ジリアンのドアを開いた。

すぐさま、自分の席にもどり、シートベルトをすると、病院の上を低空飛行をした。機体を回転させ背面飛行する。

カスターは勅を働かせて、ジリアンに飛びついた。シートベルトを外して抱きかかえて降り立つというアクロバットをやったのけた。

もしものことを考えて、ロブはカスターに乗るよう支持をだす。カスターは嫌がった。ジリアンは咄嗟に思いついて、通信機の輪のペダントを首から外しカスターの首にかけた。

「兄さんのこと心配だから、僕たちの代わりに乗って欲しい。」

「え?!」

「これは通信機になっているんだ。押すと通信できるようになっている。クレアさんやアルとつながる。さっきからうまくつながらなかったりするんだけど。」

カスターはしぶしぶ、「了解」と言った。ロブがしたように、屋上からパジェロブルーに飛び移った。

三日月がパジェロブルーを照らす。レインとジリアンはこれでほんとうにいいのだろうかと不安気にパジェロブルーを見送った。

クリアはS A Fの操縦室にたどり着き、エンジンをかけて、発進させた。

前もってアルバートに自動飛行のプログラムを入れさせたので、そのプログラムをスタートさせるだけだった。

S A Fが動く様子を眺めながら、通信機をいじったが、誰も応答しない。

「アルさえ、つながらないのか。」

S A Fはゆっくりと格納庫から出た。月の光がまぶしく輝いていて、妖しく思えた。

クリアは思い出したように、電話をかけた。相手は第六秘書セリー又だった。

「それが、イリアさんはグリーンエメラルダ号を降りているそうです。」

「何ですって。」

「降りた場所は教えてもらえませんでした。」

「レテシアは承知しているのか。」

「よくあることらしくて、レテシアさんも心配されていないようです。」

「わかったありがとう。悪いが、コーディと連絡を蜜にしてほしい。」

「わかりました。ご無事を祈っています。」

「ありがとう。」

白い魚として動いているのか、ジョナサンの味方で動いているのかと考えていた。白い魚として動いていれば、黒衣の民族も動いているはずだ。

その線は薄いと考えていた。なぜなら、操ったホテルマンがレインを殺していないかったからだ。

それならば、ジョナサンの助っ人として動いているのだろう。ならば、向こうもその手で打ってくるはず。

S A Fの眺望台に着いたアルバートはそこで、通信機をいじった。通じたのはジリアンだった。

「あ、やっとながった。」

「誰？」

「僕、ジリアンだよ。アルなの？」

「ああ、そうだよ。無事なんだね。」

「病院の屋上で、無事だといいい難いけどね。アルはどこにいてるの？」

「S A Fにいてるよ。パジエロブルーが見あたらないんだけど。」

「ああ、さっきまでレインと僕とで飛行していたんだ。さっき、兄さんとカスターと交代したんだ。」

「へえ、そうなんだ。」

「病院の屋上でね。」

「何か、あったの？」

「うん、両翼のしたに爆弾みたいなものを取り付けられていたんだ。でも、外したよ。」

「それはよかった。クレアさんには伝えておくよ。」

「クレアさんも一緒なの？」

「うん。」

「コーディは？」

「コーディは一緒じゃない。僕たちは、用事があって、S A Fでしばらく飛行する。心配はしないで。僕たちが帰ってくるまで病院で待っていてほしい。」

「用事って……。」

自分たちが銃で襲われそうになったことと、パジエロブルーの両翼に爆弾が仕掛けられていたことを考慮して、アルバートの言葉に嘘があるような気がした。

「わかったよ。戻ってくるのを待ってるよ。」

ジリアンは通信を切って、カスターにそのことを全部報告した。

パジエロブルーは旋回して、S A Fが飛行している方向へ向かって

い
っ
た。

レインとジリアンは、病院関係者からコーデイが何者かに襲われ、行方がわからなくなっている事を告げられる。

S A Fの関係者は、病室で眠らされたデイゴしかおらず、コーデイのことはレインたちのもとに届いた。

病院関係者がコーデイの病室に防毒マスクの男が倒れているのを発見した。病室は血が飛び散っていて、当人がいない。

マスクの男は騒ぎの物音で失神から醒め、病院関係者や野次馬を掻き分け逃げていったという。

二人はコーデイの病室に行った。部屋が荒らされて、壁に血のあとがある様子に、コーデイの身を案じた。

「病院内にはいないって、どこへ行ったのだろう。」

「命を狙われていたのは、僕たちだけじゃないのか。」

「どうして、コーデイが狙われちゃうんだよ。わかんないよ。」

クレアの事を思えば、コーデイが何かを知っているかもしれない。

そう考えるのが必然だと、ジリアンは考えた。

自分たちはただの囿でほんとうの狙いはクレアかもしれないと。

そして、そのクレアは、S A Fを動かして、どこかへ向かっている。いったいどこへ行こうと言うのか。

「僕たちがパジエロブルーで危ない目にあっていたら、兄さんが僕たちを助けようとするから、クレアさんから遠ざかる。」

「なにを言ってるんだよ。ジル。」

「あいつらの本当の目的は僕たちじゃないんだ。クレアさんなんだ。」

「

「ええ?!」

このことをカスターに通信で知らせた。

「クレアさん、ひとりで問題解決しようとしなしてくれよ。」

ロブは躍起になってスピードを出した。

カスターは睡眠薬からの目覚めが悪く、胃液があがってくる感じにして抑えていた。

この気持ち悪さで、麻薬を抜く時の治療を思い返した。クレアが言ったあの言葉が頭に媚びりつく。

「悪いな。来世じゃ、ちゃんと責任とってやるよ。」
死を覚悟している言葉と感じた。

睡眠薬を飲まれたときに見た映像が甦る。
左腕のない女性がクレアなら、来世でもまた会える。しかし、何もできないままにじつとはしていられない。

クレアの無事を祈りつつ、言葉を発した。

「アルバートを道ずれにするのか。」
ロブとカスターとで、それぞれの思いが違っていた。

操縦室でひとり物思いにふけるクレアに、ジヨナサンがあらわれた。
「勝手に動き出したかと思って来てみたら、クレアさんがいるじゃないですか。動かしたのはあなたですか。」

後ろを振り返ることもなく、言葉を吐く。

「S A Fを動かすことぐらいはできるさ。ただの医者じゃないからね。」

「そう。人の命を救うはずの医者のはずが、人殺しですからね。」
「あんたは、あたしの何十倍も人を殺している奴らの片棒かっついでいるだろう。」

「いやはや、何をおっしゃるかと思えば、そんなつまらないことを考えていたのですか。」

「つまらないこと？」
「わたしを疑っていたのは、その人物たちの仲間だと思われたのですか。」

「いや。」

振り返り、三日月の光を背にジヨナサンを睨みつける。

「皇帝という太陽を手駒にして、人殺しの目算を実行しているんだ

るう。」

鼻で笑って、相手の言う事が耳に入らないという素振りを見せた。「どうして、わたしがそのようなことを。皇帝を手駒にとは、そんなことできませんよ。わたしは普通のエンジニアですよ。」
ため息をついたクレアは間をおいた。ジョナサンの様子を見計らって口を開く。

「マルティン皇帝の父ジョアンには姉がいた。その姉は嫁ぐ前に、身分の低い男の子を身ごもった。生まれた子供は養子に出された。誰が母親かわからないように引き取られるはずだった。」

ジョナサンは齒軋りをした。怒りは隠しきれない様子で、強く握った拳はいまにもクレアを襲いそうだった。

「出産に立ち会った医者がそのネタでジョアン皇帝を脅した。折りしも黒衣の民族に襲われて、娘セシリアを死んだことにした時だった。」

クレアは髪をかきあげた。髪を切り落とした部分がアシンメトリーな髪型になり、異様さが際立つ。

「ジョアン皇帝死後、マルティンが即位し、そのことを知った。現皇帝は軍隊の圧力とグリーンオイル製造会社の圧力により、立場を維持できず苦しんでいた。手足となる従者が欲しいとおもった。」

「待てよ。いま、クレアは皇帝を手駒にと言ったじゃないか、今の話だと皇帝が手駒を欲しがっているように聞こえたぞ。」

冷静さを失いつつあり、言葉遣いが悪くなる。いままでの人格が崩れていく証拠だった。

クレアはニヤリと笑った。

「皇帝は従者ほしさに、自分が手駒になっていることに気がついていないんだよ。そうだろう。落とし子さん。」

ジョナサンは顔が真っ赤になった。いちばん、聞きたくない言葉だった。

「太陽が落とせなくても、月を射ることぐらいできるんだよ。ジョナサン。」

クレアはジョナサンの顔めがけて足蹴りをした。頬を強く蹴られて、倒れこんだジョナサンは、すぐさま起き上がり身構えた。

「もともと、エンジニアなんて性格に合ってたんだろう。軍隊で訓練を受けただけでなく、人殺しの遊びまで覚えたのだろ。」
「なにもかも見透かされていてることに、ようやく気がついたが、出生の秘密がばれることぐらいはわかっていた。」

しかし、ジョナサンにはまだわかっていないことがあった。クレアが心理的に追い詰めようとしていることに。気がつかないのは相手を陥れる術がほかにあり、大丈夫だという確信があるからだだった。

「ああ、楽しかったね。レッドオイル精製に立会い、人が死んでいく様を想像するのはこの上ない。人間を実験に遣い、ぼろぼろになつていく姿も味わい深かった。」

次第に穏やかだった元の顔が保てないくらい表情は歪み、醜い顔の表情へと変化する。

「グリーンオイル製造会社の社長の言いなりになって、皇帝を操つたのはさぞやご満悦だろう。仕返しができたと思っただかい。」

「そうだなあ。レテシアの話を始めた頃には、もう、こっちの手の内に入り込んだと思ったださ。そして、ロブやレイン、ジリアンを殺したいと言いつ出したときには、こころのなかで笑いが止められず表に出てきそうだった。」

「残念だな。殺すことが出来なくて。」

薄笑いを浮かべたクレアは、また、足蹴りをした。

グエエ。

倒れたものの、すぐに起き上がってくる様子は、ゾンビみただった。声をあげたものの痛みを感じていない様子だ。

クレアは不審に思った。

「へっへっへっへっへえ。バイオグリーンオイルも研究していたのを知らなかつたか。」

「グリーンオイルを体内に獲りこんだのか。」

「ふはっはっはっ。最高に気持ちがいいよ。痛みを感じないんだか

らね。」

ブハッ。

口から血を吐いてもなお、首を左右に振って、正気を取り戻そうとするジヨナサン。

愕然としたクレアは思いもしなかった展開に、血の気の引く思いがしてきた。

汗ばんだ体に服が密着していて、気持ちが悪い。

アルバートは紅潮している顔だけでなく、火照った体を冷やすことを考えて、上半身裸になった。

背後から人の気配を感じて、振り返る余裕がないままに、背中にナイフが突き刺さった。

首筋に相手の頬がぴったりと張り付いていた。息が首筋にかかる。

「いやらしい声が聞こえて、身を潜めていたの。油断したわね。」
突き刺さったナイフが、さらに深く食い込む。

グアアアッ。

そして、思いつきりナイフを抜かれ、アルバートから離れる。血が飛び散る。

痛みをこらえて、腰をひねり、振り返る。白い髪の少女がいて、抜いたナイフの血を舐めていた。

白い髪から顔、肩にかけてアルバートの血が飛び散り、白さが血の赤さを一層際立たせていた。

刺された部分を片手で押さえ、脱いだ服を手に取り、傷口を縛った。そして、相手に攻撃を仕掛ける。

少女は攻撃を交わすだけで反撃はしなかった。

アルバートが少女の腰を抑え込むと少女は腰をひねり、片手でアルバートの傷口を拳で攻撃した。

ガアッアアッ。

少女から離れたものの、足元がふら付いて、踏ん張れず、倒れこむ。クレアから「弱点は体力がない」と言われた事を思い出した。

少女は足でアルバートをけりこんだ。

アルバートは傷口を両手で押さえることしかできなかった。

「ほら、ほら、ほら。どう？この痛みはさ。」

蹴り続きえる少女の足首を掴んだ。少女は尻餅をついた。

「いた〜い。」
アルバートが銃を手にして少女に向けた。

ジヨナサンと格闘していたクレアの前にパジエロブルーが視界に入った。

つかさず、通信機の輪のスイッチを押した。

「クレアさ〜ん、聞こえますか。アルバートは返答がないんです。」

「聞こえているよ。ジリアン。」

ジヨナサンは歪んだ顔をより一層歪ませて、笑った。

「あはははっ。見世物がやってきた。はあっはあっはあっ。」

口を開けずにはいられない。唾液が口から零れ落ちる。その様子さえ、自分ではわからないジヨナサンは常軌を逸脱して飛んだり跳ねたりした。

クレアは目を閉じて、ジリアンの次の言葉を待った。

「コーデイが何者かに襲われたみたいなんです。部屋にはいないんですけど、壁に血が飛び散っていて。クレアさんになにかあったのではないかと思って。」

「ジル、パジエロブルーに乗っているのかい。」

「いいえ。パジエロブルーに妙なものが付いて取り外しました。そして、兄さんとキャスが乗っています。」

ジヨナサンの動きが止まり、瞳孔が大きくなった。そして、ポケットから機械を取り出した。

「いいものをみせてあげよう。とっておきの空中シヨ〜だ。」

ジヨナサンが機械のスイッチを押した。

S A Fの周りを旋回していたパジエロブルーの右翼が爆発した。パジエロブルーは右側に傾き、旋回し続けた。

クレアはジヨナサンから離れ、操縦桿のある席にいき、とあるスイッチを押した。S A Fの後部の一部が開いた。

パジエロブルーは黒煙を出しながら、S A Fの格納庫に向かってつっこんだ。

うぎゃあ〜っ。

ジヨナサンは狂気の叫び声をあげつつ、両手を広げた。そして、またスイッチを押す。

S A Fの後部で爆発する音がして、大きく左右に揺れた。

ジヨナサンはスイッチを放り投げ、クレアに飛びついた。

体中の皮膚が解け始めて悪臭を放ち、クレアはジヨナサンから顔を背けた。

ジヨナサンはクレアの左肩を掴み取り、ちからいっぱい握った。があ〜っ。

痛みに絶えかねていると、ジヨナサンの爪は異様に伸びてクレアの肩に食い込んだ。

もう片方の手で右肩を押さえ、思いっきりその掴んだ左肩を握り締め、引っ張った。

うわあ〜っ。

クレアの右腕は肩から引きちぎられた。

ジヨナサンは、獲物を手に入れた類人猿のように、飛び跳ねて喜び、そして、クレアの腕をほうり投げた。

また、襲いかかろうとしたとき、ジヨナサンの頭に銃が撃ちぬかれ、前に倒れこんだ。

銃で打ち抜いたのは、白髪の少女だった。

格納庫では炎が蔓延していた。

パジェロブルーがつつこんだ際に、すぐに降り立ったロブは爆風で壁にぶち当たり気を失ってなお、炎にまみれていた。

操縦席から降りていなかったカスターはすぐさま飛び出したが、うまく着地できず、右肩から落ちてしまい脱臼した。

左手で炎に包まれたロブを救い出し、格納庫から離れた。

気を失っているロブに近くにあった消火器を浴びせて炎を吹き飛ばした。

ジリアンから通信が入り、操縦室にクレアがいるみたいだとわかつ

た。

ロブを置いて、カスターは無我夢中で操縦室に向かった。格納庫で爆発が続いていて、S A Fは何度も揺れていた。

通路の電灯が消えると、どこへ向かっていいのかわからなくなった。暗闇の中で前に進むと、カスターはなにかに躓いて、倒れた。そのとき、武器をもっていないことに気づき、ここに敵がいたらどうしようという考えがよぎった。

しかし、その躓いたものは微動だにしなかった。おそろおそろ触ると、人間のようだった。

ポケットにペンライトを入れたいた事を思い出し、取り出して点けた。

躓いた物体は、アルバートだった。

「初めまして、クレアさん。」

「はじめまして、イリア。」

「あら、名前を知っていてくれてたの。うれしいわ。」

引き継ぎられた肩を手で押さえ、冷静に受け応えた。

「レテシアより先に、あんたを見つけることができれば、ここでこうして、会うこともなかったらうね。」

「どうかしら。」

白髪の少女イリアは自分の髪についていた血を指でなぞった。

「さつき、イヤラシイ声を聞かせてもらったけど。あのときもあなたのイヤラシイ声を聴いたのよね、わたし。」

奥歯をぎりぎりとしり、痛みをこらえて、イリアをにらみつけた。

「隣の部屋だったってことかい。」

「そうよ。」

「そりゃ、良い社会勉強になっただろう。」

「そうね。売春宿なんて、あの村にはないからね。」

「そんな話をしたいわけじゃないだろう。」

「ええでも、あなたを殺しに来たわけでもないわ。」

「へえ、そうなんだ。」

イリアは持っていた銃を放り投げた。

「ジョナサンは試作段階の薬を勝手に持ち出したの。」

目を伏せて、ジョナサンの体を足で何度も蹴った。

「始末するように言われたのよねえ。それとアルバートもね。」

「え、どうして、アルを？」

「黒衣の民族の血が混じっている人間を実験して、その実験体を伸ばしにしておくことはできないからだって。」

肩を押えている手の指から血が滴り落ちてくる。大量出血で死ぬのは間違いない。

しかし、その前に知っておきたいことがあった。

「あなたに命令したのは、レテシアじゃないだろう。」

「もちろんよ。」

「だったら、あたしを殺すようにも言われたでしょう。」

イリアは首を横に振って見せた。

「あなたを殺したら、レテシアが悲しむの。ロブも、レインも、ジリアンも、殺しちゃうとレテシアが悲しむの。わたしはレテシアが悲しむ姿を見たくないわ。」

「じゃあ、いったい誰が……。」

「知ってるくせに。」

「さあ、知らないね。検討も付かない。」

イリアはイライラしながら、頭を手でかき、顔をクレアに近づけた。

「ホーネットを作ったのは誰さ。」

「以前の皇帝だろ。」

「それは軍の管轄のホーネットだろ。」

「そうだね。」

チツ

イラ付いて、冷静さが保てなくなったイリアは舌をだし、クレアの頬を舐めた。

クレアは顔色ひとつ変えなかった。

第二十三章 月を射る 9

「ふふ。レテシアがホーネットのメンバーだって知ってるでしょ。誰が引き入れたかって。」

「さあね。」

「知ってるでしょ！」
ぐあつ。

声をあらげて、クレアの左肩を手で押さえた。

「あたしをスワン村から連れ出したのはレテシア。レテシアが単独でそんな行動しないことぐらいわかるでしょ。」

「そうねえ。痛いから、肩掴むのやめて。」
チツ

肩から手を離れた。それでも、イリアはクレアの顔から自分の顔を離さなかった。

「皇帝に言われて、行動している。それはロブのため、レインのため。黒衣の民族に襲われたロブのため。」

その言葉を待っていたかのように、クレアはイリアに血まみれになった右手でイリアの顔を押し、突き放した。
うがあつ。

イリアの膝にむけて足をけりこんだ。後ろに向かって倒れこんだ。

クレアはイリアに襲い掛かるうとしたが、イリアは足を上げて、クレアの腹めがけて蹴った。

クレアが後ろに倒れて操縦席に頭を打ち付けた。

気を失わなかったが、左腕がないのでバランスを崩し、左に倒れこんで、傷口を打ち付けた。

ぐああつ。

イリアは立ち上がり、クレアをにらみつけた。

「せっかく、命だけは助けたあげようと思ったのに。これで満足した！ホーネットは皇帝が動かしているよ。ロブやレイン、ジリアン

を殺すように命じたのは皇帝だよ。」

クレアは上体を起して、操縦席にもたれかかった。

「それさえ、聴いたら、十分だ。」

「冥土の土産に、ひとつ言っただけよ。ダンを襲ったのは、ジョナサンと、皇帝の影武者さ。」

「皇帝の影武者？」

「ああ、似てないけどね。皇帝の代わりになって、皇帝自身が裏で行動しやすくしているのさ。」

「へえ、そうなんだ。」

「影武者も始末できなくて悔しくないの？」

「うん、まあね。ジョナサンはあんたが殺したんだし。」
チツ

S A Fは大きく揺れて傾き始めた。ジョナサンの遺体が勝手にすべりだして動く。

立ったままの姿勢が保てなくなり、イリアはあどすさりして、入り口の扉をつかんだ。

「ダンの敵をとれなくていいのかい。」

「敵をとるつもりはないよ。皇帝を動かしているのはジョナサンだつただろ。」

「ふっ。本気でそう思っているの？」

「ああ。社長さんが、皇帝を動かすなんて、できないからね。」

「あつ、そう。ジョナサンが落ち子さんだから、皇帝をあやつることができるってわけ。」

「いまとなれば、どうでもいいけどね。」

気が遠くなるのを感じていた。殺されないのなら、このままじわじわと死んでいくのを待つのは嫌だなと考えが浮かぶ。

「もうひとり、始末したい人間がいるだろう。」

イリアはその言葉に反応し、顔を強張らせた。

「あんたは、始末したくないんだろ。レインやジリアンだけでなく、そいつもさ。だから、最初から意にそぐわない殺しはしないん

だと。」

「黙れよ。この忌み嫌われる髪の色、そして妙な能力。仲間がいてもそれは私を利用するだけ。」

「あの子なら、あんたをそのように利用したりしないかね。」

「どうだっけいいでしょ。」

「ふっ。」

「知らないんですよ。ダンから聞いてないのでしょ。」

「ああ。そうだね。」

「いいさ、能力使って探してやる。」

イリアはフードを目深にかぶって、操縦室から出て行くこととした。扉が勝手にあくど、そこにはカスターが立っていた。

「クレアさん!?!」

イリアの姿は目に入ってなかった。

つかさず、イリアはカスターのみぞおちに拳を叩き込んだ。があっ。

前かがみに倒れこんでいく間に、イリアは横をすり抜け、操縦室から去った。

床に倒れこんで、胃液を吐き出した。

クレアは天井を仰いで目を閉じた。

「大丈夫か、カスター。」

床に手をついて、前を向こうとした。クレアの姿をみて、自分の目を疑った。左腕がないからだ。

「ク、クレアさん・・・、いったい何が。」

月の光で操縦室は明るかった。操縦席などで影になり、血が飛び散っている様子は確認できていなかった。

「ロブは?」

這う様にしてすこしずつクレアに近づいて、心臓の鼓動が早くなるのを感じていた。

「はう。あ、ロブは、パジェロブルーの爆発で倒れてました。」

クレアの姿を間近で見ると、涙がとめどなくでてきた。

「ど、どうして、こんなことに。」

「どうしてかなあ、パジェロブルーが爆発するなんてね。」

カスターは脱臼してない左腕で自分の服を引きちぎりクレアの左肩を抑えた。

「翼についでいた物体は取り除いたんですけどね。」

「それはダメだな。やっぱり、マイクロレッドオイル爆弾ができあがっていたのかなあ。」

「クレアさん、しゃべらないでください。体力が消耗してしまう。」

「もう、いいんだ。」

「なにがです。」

「ジオナサンは死んだし、もう、レインたちは狙われる必要がない。」

「」
当りを見回したが、ジオナサンの姿らしきものが見えなかった。

「ジオナサンが狙っていたのですか。いま、出て行った者は？」

「あれは、気にするな。」

「はあ。」

カスターは左腕をクレアの背中にまわそうとすると、クレアは制止した。

「やめるんだ。」

「どうしてです。」

「キヤス、右腕をつかっているのは怪我をしたんだろう。」

「脱臼したみたいです。痛い上に動かない。」

「そんな体であたしを助け出せれるわけがないだろう。」

「しかし。」

「ロブを連れて戻るんだ。」

「え?!」

「ロブとあたしの二人は無理だ。わかるだろ、それぐらい。」

「ログは・・・、生きてるかどうか。」

「死んでいても、連れて帰るんだ。」

「そんな・・・。」

右手を差し出して、カスターの肩を引き寄せ、抱きついた。

「お願いだ。このまま、あたしを置いていってくれ。」

「そんなこと、できませんよ！」

クレアは強く抱きしめた。その強さがカスターにはより一層辛く思えた。

クレアはカスターの顔を自分の顔に引き寄せて、唇にキスをした。

「?!」

驚きは隠せなかったが、クレアの唇が震えているのを感じた。

クレアはゆっくりと自分の額をカスターの肩に落とした。

「コーデイも知らないことを知っていてほしい。」

「なにをですか。」

「セシリアの最初の子供のことだ。」

「え?! 黒衣の民族の・・・。」

「ああ、そうだよ。パン屋の息子、コリンだ。」

「ええ?」

「キャス、君を危険な目にあわせるかもしれないけど、頼むよ。」

クレアはポケットから黒い玉を取り出し握り締めた。それはアニーのところから持ち出したものだった。

カスターがクレアの体を引き離すと、クレアの目が涙で潤んでいたのを見た。

「クレアさん。」

「来世でまた、会おう。」

クレアはゆっくりとまぶたを閉じた。目から涙がこぼれ、唇は紫色になっており、静かに手が落ちていく。

手の平がゆっくりと開き、黒い玉が零れ落ちていった。クレアは息を引き取った。

「クレアさ〜ん!!!!!!」

自失茫然としていた。手を強くにぎられていて、話している言葉が耳に入っていない。

「僕の軽率な行動が、こんな悲惨なできごとを招いてしまったの？ 泣きながら話すジリアン。ジリアンの言葉が遠くで聞こえている感じがして、なにを言っているのかもわからない。肩を強く抱きしめられた。

「お前たちのせいじゃない。クレアは覚悟して行動していた。お前たちがパジェロブルーに乗らなくても、同じことが起きていたんだ。」
大きな腕で囲むように抱きしめるデイゴ。肩を抱きしめるその強さがわからなくて、気が遠くなっていくな感じがした。

「レイン、大丈夫？」

悲しい顔を向けられて、ゆっくりとうなづくことしかできなかった。顔を上げると、涙がこぼれた。泣いてはいけなはずなのに。涙がとめどなく出てきた。

ジリアンが左脇から抱きしめる。

「兄さんは大丈夫。何度も死ぬような目にあってきたけど、ちゃんと元気になってもどってきたんだもの。」

「ああ、わかってるよ、ジリアン……。」
生返事をするしかなかった。力が入らない。ただ、立っているだけが精一杯だった。

どうして、クレアさんが死んで、パジェロブルーとスカイエンジエルフィッシュ号が爆破して散ってしまったのか。

クレアが息を引き取ったあと、カスターは精神状態を錯乱させて、叫び声をあげまくった。

「うわぁーっ。」

クリアを抱きしめたまま、声が枯れるくらい叫びつづけた。操縦室は赤いランプを点灯させ、緊急事態を報せた。

カスターは我に帰った。操縦席に行き、スイッチを押した。

「スカイエンジェルフィッシュ号はあと20分で完全破壊してしまします。至急非難してください。」

アナウンスが流れた。とめどなく涙が出てくるものの、これから何をすべきか思考しなくてはいけなかった。

クリアのなきがらを見て、ショックを受けた。横の髪が左右の長さがちがっていたからだ。

あきらかに切った様子に、死を覚悟していたのを知った。

自分の口でクリアの髪の毛をくわえ、片手でナイフを取り出して、髪を切った。

思いつくまま、切った髪をポケットの中に押し込んだ。

自分の唇をクリアの唇にあわせ、クリアの頬に涙をこぼした。

そして、操縦室の出入り口に立ち、クリアに別れを告げた。

「さようなら。そして、来世で会いましょう。クリアさん。」

急いで走り、救命胴衣やパラシュートの装備の場所まで来た。

装備には、メンバー分のものがあるはずなのに、残っているのは二人分だった。

深く考えている場合じゃないと、自分に言い聞かせ、二人分取り、ロブがいてる場所に向かった。

ロブは黒煙のしたにうずくまっていた。焼け焦げた臭いがするので、カスターは首もとの脈を取った。

「生きている。」

今は生きている状態かもしれないがと思いつつ、ロブに救命胴衣をつけた。パラシュートを付け、準備をととのえて炎の方に向かった。SAFの後方が下に傾き、パジェロブルの残骸が落下していく。

その残骸と同じように、カスターはロブを抱えて、落下していった。無我夢中だった。地上には雑木林が広がっていて、着地するのには丁度良かった。草木がクツションになり、無事に地上にたどり着い

た。

上を見上げると、黒煙を吐き、元の形が保てないまま、飛行するS
AFの姿が見えた。

そして、炎が噴出し、爆音と共に爆発し、木っ端微塵に破壊して、
散っていった。

ただただ、その様子を眺めていることしかできなかった。

通信機で助けを求めると、軍が救助にきた。軍人の姿を見て、緊張
の糸が切れたのかカスターはまた錯乱状態に陥り、麻酔を打たれた。

ロブは全身の3分の2を火傷して、集中治療室に入った。

レントゲン検査で肋骨が折れているのを確認され、火傷の処置と輸
血を受けた。

グリーンオイル財団理事長の第六秘書のセリーヌ＝マルキナが急遽、
対処しに、訪れた。

クレアの死を知って、多少の動揺があるものの、レインとジリアン
には気をしっかり持つようと言ってきた。

集中治療室から医者が出てくると、命の危険からは抜け出せたもの
の、火傷の治療には時間がかかり、移送するのは難しいと伝えられ
た。

「一応、移送できる状態になりましたら、軍の病院ではなくて、財
団研究所の病院に転移してもらいます。」

デイゴの口から、コーデイのことを尋ねた。セリーヌはなにか知っ
ている風だったが、重い口が開いても「搜索いたします。」とい
うだけだった。

「今後のことは、落ち着いてから、話会いましょう。」

そういうと、セリーヌは足早にレインたちの前から去っていった。
病院関係者から、促されて、自分たちの病室に戻ることにした。

デイゴは病室に戻ってから、スタンドフィールドドックとガラファ
ンドドックに連絡を入れた。

ジゼルは声を殺して泣いた。シモンはダンの実母・アニーに伝える

とだけ言った。

受話器を置いて、デイゴはため息をついた。

「レシアにロブの状況を伝えるべきなのか。」

「今までも、何も伝えはしなかった。だが、今回はグリーンエメラルダ号でレインと再会はしている。」

そんな時に、靴音を鳴らして、廊下を歩く男が現れた。

テオ少佐だった。

第二十四章 傷を癒す 2

クレアのことは、どんなことをしても止めることができなかつただろう。

デイゴとテオが話をしている、出た言葉だつた。

なにをしても、自分を犠牲にして、守る意思の強さは誰よりもあつて、他のやり方を知らない。

養父のダンがそうであつたように、クレアもまた、同じ轍を踏む。

まるでそうするべきだと諭されたみたいに、クレアは命を絶つた。

デイゴやテオではわからない心情がクレアにはあつたかもしれないが、そうする必要がない事を説き伏せる自信はふたりにはなかつた。

果たして、ロブにはできただろうか。いや、おなじことだろう。二人よりも更にクレアのこと的理解できていない。

「クレアはロブを守るような態度を示すものの、崖から突き落とすようなことも平気でやっていた。」

デイゴはつぶやいたが、そんなクレアに接してきたロブだから、身を盾にして守ることはしたかもしれないがそういうことはクレアはさせてはくれないだろう。

それをロブは知っているはず。いざとなれば、躊躇するかもしれない。

「さて、レテシアにはどう報せようかと。」

「それはオレにまかせてもらおうか。今までだって、オレのほうから伝えてきたのだ。」

「それで本当にいいのだろうか。レインの口から伝え方が……。」

「そうだなあ。もう知らない間柄でもないからな。」

天井を眺めて、しばらく、考え込んでいた。

憤りは感じない。なるべくしてそうなつたという考えが筋を通す感じだつた。

「レインの精神状態はよくないと聞いた。」

「そうですね。」

「早く報せたほうがいいから、俺から伝えておく。艦長に怒鳴られるのも嫌だからな。」

「では、おまかせします。」

「ああ。それから、カスターの精神状態がよくなったら、シモンが連絡を欲しがっていると伝えてくれ。」

「シモンが？」

「ああ、クレアの様子が知りたいらしい。」

「そうですね。アニーさんはさぞ、辛い思いをしているでしょう。」

「そうでもないらしい。」

「え？」

「シモンにしてもそうだが。死ぬ前のダンと同じ感じがしたのだという。」

「で、期が訪れたと。」

「そうということだろうな。」

レインは悪夢にうなされていた。自分が世間知らずなばかりに、なにも手を打つことが出来ない状態が痛いほどよくわかる。

逃げているのは自分自身から。助けを求めるとはいつも、ロブやクレアだった。今やその二人に助けを求めても助けてくれない。

追い詰められて、レインは夢の中で泣くことしかできなかった。悪夢から目が覚めて、泣いていた自分を悔しく思った。

ジリアンも悪夢にうなされていた。いつも閉じこもってばかりの暗がりから、光が射ってきて、それが怖いと思っていた。

逃げているのはいつも暗闇からあらわれるのではないかと思う光だった。そして、逃げ切れずに光に包まれて、その暖かさに涙していた。

そして、その暖かさは何だろうと、顔をあげると、そこにはセリーヌを抱きかかえたセシリアの姿が見えた。

笑顔だったのに、ジリアンは怖いと思った。そして、夢から醒めた。「どうして、あの人が夢に出てくる。」

セイラは納得できても、セシリアを求めていた自分が嫌だった。カスターは何度も悪夢から目が覚め、そしてまた、目が閉じてしまい、悪夢を見ることを繰り返していた。

内容は目が覚めると思い出さない。悪夢をみたという意識しかなかった。

それを繰り返すばかりで、現実にもどることさえできないでいた。

ロブは、生死をさまよう夢の世界にいた。フレッドに会ったが、突き飛ばされた。また、命を永らえたのかと残念に思っていた。

そして、いつも、母親のロザリアが手を振って、送ってくれる。今回、違っていたのは、川から引き上げてくれたのがレテシアだった。以外な感じがして、手を握ったまま、レテシアを見つめていた。悲しい顔をしたレテシアは涙をこぼしていた。

目が覚めると、全身に強烈な痛みと熱湯のようなものを感じた。うがあつ。

背中をそらすと、余計に痛みを感じる。いったいどういう状態なのだろうと考えざるを得ない。

思い出すことができたのは、パジェロブルーを操縦していてSAFの格納庫に突っ込んだところまでだった。

叫び声をあげた口が閉じない。よだれが口からこぼれる。全身に走る痛みと共に、全身がなにかに縛られている感触に気づく。包帯だ。目が両手にいき、包帯が巻かれているのがわかった。おそらく全身に包帯が巻かれたのだろうと。そしてそれが火傷によるものだとようやく理解できた。

と、なると、カスターはどうなったのだろう。そして、SAFはどうなったのだろうという考えが浮かぶ。

しかし、視界には、自分の両手と寝ているベッド、その先にある床しかなかった。

息をしようとすると、胸が痛む。それは前にもあった。だから、わ

かる。肋骨が折れていることに。

横になった姿であると知ると、自分の右ひじから下の部分で包帯が巻かれていないことに気づく。左肩には痛みを感じていて包帯の感触もある。

右を下に、炎に焼かれたということが想像できた。肋骨が折れているから、なにかにぶつかったのだろう。

しかし、そこまで考えが及んでも、自分が身動きできないことに痛烈に悔しさが湧き出てくる。

命を永らえて、そこに何がまっているのかと考えると怖くなる思いだった。

そう、クレアの死を今のロブには報せされていないために、意味不明な恐怖としばらくは戦うこととなった。

テオはデイゴから聞いたことをかいつまんで、指示を受けた皇帝に報告した。

クレアから、詳細は報告しないように頼まれていた。そのこの意味を理解できたのは、ホーネットの存在を知らされていたからだっ

た。
憧れを抱いていた皇帝に対して、信頼を裏切られた思いがしたが、真実を見極めるまでは、皇帝に情報を与えることはしないでおこうと決めた。

命令だから、すべてではないにしろ、報告する義務がある。何を知りたがっているかは、わからないが、確信に触れることは話さないことが懸命だとわかっていた。

レテシアには、クレアの事、ロブの事を詳細に報せた。無言の様子に、声を殺して泣いているのがわかった。

「クレアのことには気に病むことはない。ロブのことはレインに任せ

るしかない。デイゴ曰く、もうすこし、大人になってくれるだろう
ということだ。」
「明るい声で、レテシアは「そうですね。」と答えた。

その様子が可哀相でしかたなかったが、他に掛けてあげれる言葉がなかった。

一方、コーデイというと、傷ついた体で逃げきったのは、森の中だった。運がよくて、近くの村人に助けってもらった。そのうえ、セリーヌに報せてくれた。

セリーヌは危険性を考え、別の人間で迎えに行かせ、かくまってもらえる閑静な村の診療所に預けた。

起き上がることができるとまで、快復した際にセリーヌと連絡を取り、コーデイはクレアの死を知った。

「ウィンディさんに報せて欲しいのですが、できますでしょうか。」
セリーヌは快諾した。コーデイは安堵のためいきをもらし、ようやく涙を流すことが出来た。

「ごめんなさい、クレアさん。わたしはあなたに何もして上げられなかった。それでも、あなたは気にしないようにしようね。」

病室のテーブルに、コーデイの身の回り品が置かれていて、ビニールに入ったクレアの髪の毛があった。

それを手にとって、握り締めた。

「わたしに、セシリアさんのお子さんの事を告げずに去りましたね。そうしてもらえてありがたく思います。理事長には申し訳ないですが。」

うなされていた。ちからいっぱい目を開けたら、白い天井が見えていた。

どんな夢をみたのだろうかと思い出したくも無い。

カスターは天井をにらめつけて、脱臼した肩をさすっていた。無意識だった。

視線を感じて、そちらのほうを見る。いたのは、ジリアンだった。

「ジル、さつきからずっといたの。」

「うん。大丈夫？」

「大丈夫じゃないなんて、いえないよ。」

薄笑いをうかべて、上半身を起そうとすると、ジリアンが寄ってきて手助けした。

「ありがとう。なんだか、情けないな。こんな状態。」

「ううん。レイニーと僕が無事なのは、兄さんやキャスのおかげだよ。」

「ロブは？」

「レイニーが看病しているよ。」

「火傷、相当酷いんだったな。良くあれで生きていられたなって思うよ。」

「いまは痛みが酷くて、モルヒネを打たれているんだよ。」

「モルヒネ？」

「うん。無意識に寝返り打つと、唸ったりするから。」

「モルヒネか。中毒にならなければいいけど。」

「手とか、ベッドに縛られているんだよ。なんか、酷いって、見る方も辛い。」

無言がしばらくつづいて、脱臼で済んだ自分は幸運だと思つようにしていた。

「悪夢は落ち着いてきたと思ったけど、まだまだだな。」

「キヤスつて、クレアさんを見取ったんでしょ。それって、大変なことだと思う。」

「はあく、そうだな。正直、実感なんて、沸かない。その病室の扉が開いたら、白衣のクレアさんが現れそうぞ。」

「ジリアンが振り返ったが、ドアは開いていない。」

「外の空気を吸いに行きたいな。介助してくれる？」

「うん、もちろん。」

横向きに寝かされているロブは、言葉がうまく発することができない。そして、口もなかなか閉じることができずに、よだれがこぼれていた。

そのよだれを都度ガーゼで拭き取るレインだった。顔、頭、背中、左腕が包帯で巻かれていて、足は無事だった。

目を開けてレインに必死に何かを伝えようとしていた。レインもその様子を知っていたが何も言わなかった。

聞きたがっていることが、クレアのことだとわかっていいるからだ。

ときどき目頭が熱くなり、ロブから目をそらす。いまここで、クレアの死を伝えたら、ロブはどうなるだろう。

自責の念で治癒力が低下するんじゃないかとジリアンが教ええないようにしようと言った。

看護師が病室に入り、包帯を取り替える。それは目をそむけずに、みつづける。看病するというのはそういうことだろうと思ったからだ。

しっかりとやきつけておく。自分たちの命があるのは、ロブたちのおかげなのだからと。

睡眠薬を投与されて、眠る時間が設定されていた。そのときにレインはロブから開放される。

病室から出て、休憩室に向かおうとすると、カスターとジリアンが病院の庭で日向ぼっこしている姿がみえた。

レインは二人のところへ向かった。

病院の建物から出て、ジリアンと目があつたところで、後ろから声をかけられた。

「レイン、無事だったのね。」

振り返るとそこには、深窓の令嬢姿のコーネリアスだった。

前にあつたのは、ドレス姿だった。その前は、じゃじゃ馬娘らしいパンツスーツだった。

今、目の前にいるコーネリアスは見違えるような、落ち着いた感じの乙女だった。

「心配していたわ。スカイエンジェルフィッシュ号が事故にあつたと聞いたのよ。」

目を丸くして、レインはコーネリアスをみていた。そして、コーネリアスの後ろに執事のピエトロが立っていてお辞儀をしていた。

「ああ。僕は無事。確かに、事故にあつたけど、どうしてそれを？」

「級友で、軍事マニアがいてるの。とつても変わった子なの。軍の情報で救出劇があつたつて言うものだから。」

瞬きをしていないかのように、まっすぐとレインを見つめ、レインの次の言葉を待っていた。

「ああ。でも、僕はスカイエンジェルフィッシュ号には乗っていないくて……。」

「そうだったのね。それは幸いだったわ。」

「えっと、なぜここに？」

「父がこの病院に寄付をしているの。母が亡くなった病院でもあるのよ。」

「あ、そうなんだね。」

「事故から日にちがたっているけど、レインが無事なのに、どなたか入院されているの？」

コーネリアスの視線がレインから別のところへ移った。それがジリアンとカスターだとわかって、後ろを振り返った。

ふたりは、薄笑いを浮かべていた。その様子にすこし、恥ずかしさを感じた。

そして、レインは、コーネリアスの腕を取った。

「どこか別のところで話をしようか。僕のこと心配して来てくれたんだよね。ありがとう。」

「ええ、とつても心配したわ。でも、いいの。レインが無事だとわかったから。」

腕を引かれて、嬉しそうにコーネリアスはレインについて行った。腕を離すと、コーネリアスは、レインの腕に自分の腕をからめた。不思議そうな顔でコーネリアスをみていたが、笑顔だったのでそのまま歩いた。

「えつとお、僕の兄さんが入院しているんだ。」

「お兄さん？え、もしかして、農園であつた素敵な男性。」

レインは農園であつたことを思い出した。そう、コーネリアスは口づに憧れを抱いていたのだった。

あの時の目線が自分に向けられている事に気づいて、腕組みを離しなくなった。モジモジしていると、コーネリアスは力強く腕を引く。「どうしたの？心配いらないわよ。この病院のお医者さまにわたしのほうから、よくお願いしておくから。」

「ああ。」

嬉しそうにするコーネリアスをみて、後ろを振り返る勇気がなかった。

きつと、ふたりは変な目でみているだろうなと考えていた。

第二十四章 傷を癒す 4

病院の休息室で、レインはコーネリアスと二人きりになった。執事のピエトロは室外でじっと立っていた。

長いすに並んで座った二人だったが、コーネリアスは腕組みを離そうとしなかった。

コーネリアスと密着している感触は、恥ずかしかった。まだ、大人になりきれない少女からは差ほど胸の感触はしない。

しかし、両腕で片腕をしっかりと握り締められている様子は、居心地が悪かった。

「お兄さんの様子は酷いのかしら。」

「ああ、火傷が酷くて、包帯を全身に巻いているみたいな感じだよ。」

「まあ、それは痛々しいことね。レインも辛いでしょう。」

「うん、まあ。」

こんな時に、ふと、隣にいるのがエミリアだったらと考えた。

エミリアに密着されたら、舞い上がるだろうなあと思いつつも、そんな妄想は現実にはならないという考えに到る。

エミリアに顔をぶたれてから、彼女に対する気持ちは宙に浮いてしまっていて消えたと思っていたはずなのだが。

コーネリアスとの会話には、心此処にあらず状態で、相槌ぐらいしかしなかった。コーネリアスは気にしていない風だった。

今此処にいるのは、コーネリアスで、ほんとうはエミリアにいてほしいという気持ちかどうしても拭いきれない。

そう思うと、辛くて苦しくて、涙がこぼれた。

「どうしたの？わたし、なにか失礼なことを言ったかしら。」

「いや、なんでもないよ。」

「なんでもないわけじゃない。」

心配掛けないようにコーネリアスの顔を見ることができない。コー

ネリアスの好意は痛いほど、わかる。そして、なぜか辛い。
コーネリアスはそっと、肩に手を回し、レインを抱きしめるようにした。

「犬を助けた時のあなたはとても格好良かったわ。ほんとうに、あなたって強い人だと思ったの。」

でも、泣きたいのなら、今泣いてもいいと思うの。わたしは辛い時に泣くことができなくて、苦しんだわ。」

ジリアンと同じ年齢のコーネリアスが慰めている。ほんとうに側にいて欲しい人が側にいない辛さを口にすることはできない。

でも、涙は止まらなかった。コーネリアスの優しさが痛くて辛くて苦しかったからだ。

「ゴ、ゴメン。ホント、ゴメン。」

コーネリアスは何もいわず、黙って、レインの背中をさすった。

カスターが日向ぼっこから病室に戻ると、デイゴが中で待っていた。「もう、大丈夫なのか。」

「まだ、悪夢にはうなされているけど。ジルと外の空気を吸いにいったら、気持ちが楽になったよ。」

「ジルはどこに？」

「レイニーに訪問客が現れて、代わりにジルがロボの病室へ行ったよ。」

「そうか。訪問客とは？」

「礼儀正しいお嬢様って言う感じ。」

「はあ？」

首を傾げて考え込んだが、何を言っているのかわからなかった。しかし、危険人物でもないことは理解できた。

「キヤス。」

「なに？」

「落ち着いたなら、シモンが連絡して欲しいと伝言があったのだが。」

「

カスターは、別れ際のシモンの言葉を思い出した。

しばらくは悪夢にうなされていたので、此処に来るまでのことはすっかり忘れていた。

「ああ、そうだね。クレアさんに何かあったら、連絡欲しいっていわれたんだ。」

「やっぱり、シモンはクレアに何かあると気づいていたんだな。」

「そうかもしれないね。」

カスターはベッドに座らずに、そのまま病室を出た。

ガラファウンド・ドックのオーナー、シモンに連絡をすると出てきた言葉が「クレアの死因は何だったんだ？」だった。

「死因？」

あまりのショッキングな内容なので、シモンにどう説明しようか考えあぐねた。

「ダンの母親アニーが言うには、服毒自殺じゃないだろうか。」

「服毒？」

その言葉に耳を疑った。

それはクレアが自分で死のうとしていたことを意味する。

「自殺ということですか？」

「いや、そうではないのだが。養父のダンの死因が服毒自殺だったからだ。」

「えー!？」

その話ははじめて聞いた。黒衣の民族に殺されたのだと聞かされていたからだ。

「クレアさんは養父さんの敵をとるために、いろいろと調べたりしていたのではないのですか。」

「いや、敵をとらせないために、服毒自殺したんだと思う。」

「どうしてそれを知っているのですか。」

「アニーがクレアに聞いたのだよ。クレアはダンの死の第一発見者だからな。警察の発表の死因は他殺になっている。検死報告書は改

「ざんされたのだということだ。」

「そういうことですか。」

「アニーは、ダンと会った際、解毒剤開発に用意していた毒を持ち出したことを後で知った。今回クレアもわからないように持ち出したらしい。」

「毒を持ち出した事を知っていたのですか。」

「ああ。」

愕然とした。それはクレアが死ぬかもしれないということを知ることが知っていたことになる。

「おまえさんには悪いが、クレアが死を覚悟していたことを知っていたとしても、止めることなんて誰にもできるわけではないんだ。」

「そう、そうでしょうね。でも、クレアさんに言わずとも、防ぐことは出来たのではないでしょうか。」

「さあな。ロブのことは信用できないというか、巻き込みたくないと思っっていたみたいだからな。」

ああ、そういうことかとカスターは納得した。考え方の中心が、ロブのため。それなら、合点がいく。すこし、切ない気持ちが出てきたが、クレアならそういう行動をするだろうと受け入れることが出来た。

「死因は申し上げにくいのですが、大量出血死だと思います。」

「大量出血？」

「おそらくはいまだに姿を見せてないジョンサンと戦ったのだと思うのです。左腕が引きちぎられていたのです。」

「引き継ぎられる……。そうか、そういうことなのか。」

「なにか、ご存知なのですか。」

「いや、電話では説明できない。」

無言がしばらく続いたあと、意を決してシモンは口にした。

「テオ少佐が軍を退役した。」

「退役ですか。」

「早まった事をしたと思うのだが。いろいろと情報を知ってしまっ

たがゆえに、軍にいられないとおもったのだろう。」

「それは命の危険を考慮してのことですか。」

「まあ、軍にはいろいろとあるが、テオ少佐の命を狙うというのは、また、違うな。いろいろと裏で動く存在があっただな、お前たちの身も危険だと思う。」

「僕たちもですか。たしかにそうでしょうけど、どうしたら。」

「とりあえずは、スタンドフィールドに戻るには時間がかかってしまっただろう。まだ、近いこちらの方に来ないか。」

「ガラフアンド・ドックですか。」

「ああ、レインやジリアンもそのほうがいいだろう。」

「でも、ロボの様子が・・・。」

「こちらにグリーンオイル財団から打診があっただ。」

「何の？」

「メンバーを預かって欲しいと。ロボはグリーンオイル財団の医療施設が責任を持って預かるらしい。」

「大丈夫でしょうか。」

「心配しても仕方が無いが、ロボが何も知らないことも相手にはわかってるんじゃないかな。」

「そうですね。」

脳裏に掠めたクレアの言葉が、いま甦った。そのことは誰にも口にしてはいけないことを今、身に染みて理解した。

危険な目にあわせてしまうことを承知でクレアが言ったことは、敵が一番知りたいことで、その情報ほしさに命を狙っているのだと。

そう考えたとき、コーデイが狙われたことに合点がいった。

「わかりました。レインたちと話をしてみます。僕もそちらにいたほうがいいと思います。ドックの方が落ち着いていられるような気がするんです。」

スカイロードの訓練施設。エアジェットの機体を点検し終わって、一息ついたエミリア・サンジョーベ上等兵に教官から一言あった。「スカイエンジェルフィッシュ号が大破したとのことだ。メンバーのうちの何人かは行方不明で、生存が確認されていないらしい。」

「本当ですか、教官。」

「ああ。軍に救助の要請が入り、2名を救出したとのことだ。我々は合同訓練をしたということで、情報をいただいた。フェリシア上等兵にこのことを伝えてほしいのだが、頼めるだろうか。」

「フェリシア上等兵の件は了解しました。お聞きしたいことがあるのですが。」

「なんだ。」

「メンバーの詳細をご存知でしょうか。行方不明者が誰であるかとかは……。」

「わかっていることは、メンバーの中で医者死亡が救出された者の口から聞きだされたとのことだ。」

「ク、クレアさんが、そんな。」

あまりのショッキングな内容に、エミリアは開いた口を手で押さえただけで立ち尽くしていた。

「メンバーの少年たちは空挺には搭乗していなくて、無事だということもわかっている。しかし、救出されたのが誰でどんな状態かと言う詳細は伝わっていない。」

少年たちが無事、それはレインが無事だということ。そのことです。こし気を取り戻した。

「そう、そうですね。クレアさんとは、体術訓練で一緒にさせてもらったものですから、ショックが大きいです。」

「軍に所属している以上は、死といつも背中合わせだ。訓練中も死にゆく者たちも少なくない。しかし、スカイエンジェルフィッシ

ユ号は軍部ではないし、人命救助のための空挺だったからな。こんなことになって非情に残念に思う。」

エミリアは敬礼をすると、教官に背を向け、荷物を手に取り、足早にその場を去った。

フェリシアは特別授業の飛行訓練を受けていた。エミリアは自室にもどり、荷物を床に置くと、体をベッドに沈めた。

(あの方が亡くなられるだなんて、信じられない。)

何も言わなくてもわかってくれる。そのころの深さが内面からにじみ出ているような気がした。

レインが無事なら、それでよかったのか。自問自答して目を閉じると、レインが落ち込んでいる様子が浮かんできた。

(きつと、レインもショックを受けているに違いない。)

レインの兄や弟は無事だったのだろうか。キャティナ・マウンター・ロッソ駐屯地で兄の話を聞いてくれた人は無事だったのだろうか。

次第に不安になって、じっとしていられなくなった。隣の部屋がフェリシアの部屋で、物音が響いた。

エミリアはベッドから這い出し、部屋を出た。

カスターはディゴと相談をしていた。レインとジリアンとでガラファウンド・ドックへ行く話だった。

「オレは、ジゼルが心配しているので、スタンドフィールドドックに戻ろうと思う。」

「そうだね。誰かはスタンドフィールドにもどらないといけないよね。僕はガラファウンドに行くつもりなんだ。」

「レインたちには自分たちで決めさせるといい。」

「そうだね。」

「シモンのところにいたほうが、スタンドフィールドを巻き込まなくて済むかもしれない。あそこは、ガラファウンドほど防衛が整っていない。」

「うん、僕もそう思っていたところなんだ。」

そこへ、テオが現われたので、カスターは目を見開いて驚いていた。

「少佐、どうしてここに。」

「オレはもう、少佐ではない。」

「ほう、軍を除隊されたのですか。」

「ああ、そうだ。」

デイゴのさらりと受け流した受け応えに、カスターは反応できないままに、ただ驚くばかりだった。

「此処へ来たのは、お前たちを迎えにだ。」

「迎えに？」

「ああ、ロブの搬送が明日に決まった。お前たちをガラファンドへ連れて行く。」

「ロブの搬送って、財団の医療施設ですよ。少佐、あ、いえ、テオさんは財団に言われてこられたのですか。」

「いや、シモンに言われてた。こういうことは早いほうがいい。もたついていたのでは、いつ襲われるかわからない。」

「相変わらず性急ですね。わたしはスタンドフィールドドックにもどるつもりです。」

「そうか。そのほうが良いだろう。デイゴ、お前なら一人で大丈夫だな。」

テオがデイゴの肩に手を置くと、デイゴは深くうなづいた。

「レインたちのことは頼んだぞ、キャス。」

「あ、はい。」

「おまえは大変だったな。クレアの話はガラファンドに行ってから、話を聞こう。」

「デイゴ。レインたちに決めさせる話……。」

「そうだな、念のため、意見を聞いて欲しい。それから、テオ少佐……いや、テオさんに話を通そう。」

ガラファンド行きで、レインは承知しなかった。ジリアンはレイン

の様子を伺って答えようとしなかった。

「僕はスタンドフィールドにもどりたい。デイゴと一緒に行く。」

「ジリアンは？」

「僕は・・・、レインと一緒に戻りたい気持ちもあるけど。デイゴが言うように、防衛という意味ではガラファンドの方がいいと思う。スタンドフィールドは川に挟まれていて、侵入されにくく、空からはリーダーでキャッチできる。でも、攻撃されて反撃するための武器はほとんどない。」

ジリアンがそこまで考えていることに、内心自分の愚かさを痛感してレインは顔を青くした。

ジリアンはその様子にちらりと横目でみながら、話をつづけた。

「人命救助の訓練をいままで受けていたけど、これからは攻撃された時のために反撃できる訓練を受けたほうがいいと思う。」

ガラファンドはスタンドフィールドと違って、軍の空挺が出入りしていることもあって、危機感があって訓練のし甲斐があると思う。「テオもデイゴも、ジリアンの言葉に関心していた。レインは自分の思量の無さを知り、次第に落ち込んでいった。レインは自分のカスターはレインの様子に気がつき、両肩を抱いた。」

「大丈夫。僕も一緒だから。」

「兄さん・・・。どうなるの？」

「財団の医療施設に搬送される。責任をもって、面倒を見ると言っている。」

「一人で大丈夫なのかな。」

「そうだなあ、いつまでも、クレアが死んだことを告げないわけにもいかないしな。」

デイゴがそうつぶやくと、周囲の空気が沈んだ。

「ああ、そうだ。ジェフにまかせよう。」

「ジェフ？ああ、レテシアの同級生だったという・・・キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地の。」

「ジェフも退役した。」

「え？」

「ジェフに話をして、ロブに話をしてもらおうと思う。」

「それは強引じゃないですか。」

「いや、大丈夫だ。ジェフはクレアにも通じている。クレアの事を聞いて、退役しているから、なにか知っているのかもしれない。」

「では、これで、決まりだ。オレはスタンドフィールドにもどる。」

キヤスとレイン、ジリアンはガラファンドへ。ロブは財団の医療施設に。」

レインは腑に落ちない表情をしながら、深くうなづいた。ジリアンは心配そうにレインを見ていた。

第二十四章 傷を癒す 6

火傷の痛みから解放されたロブだったが、モルヒネの悪夢からは開放されていなかった。

壁を見つめるも、目の焦点があつていなかった。そんな日がつづいて、ようやく、レインが側にいることに気がつき、目線がレイン方へ向くようになっていた。

ただ、いまだに、口が聞けずにいた。

「僕たち、ガラフアンド・ドックに行くことになったんだ。一緒にいられなくて、ごめんなさい。」

レインの目をまっすぐ見ているロブは瞬きを一回する。その様子を見て、レインはすこし胸をなでおろした。

「本当は、スタンドフィールドに帰るべきだと思うのだけど、危険が去ったわけじゃないし。皆を巻き添えにはできないから。」

ロブの瞬きを確認して、話をつづけた。

「ガラフアンドなら、防衛ができていますし、テオ少佐、あ、テオさんがいてくれてますし。除隊したんだって。」

つぶさにロブに報告をした。クレアの話をしたくないようにと、考えながら話をしていた。

ロブはまぶたを閉じるほか、瞳を左右に動かして否定していた。意味は理解できていないけれど、話を続けていた。

最後に悲しそうな顔をして、ロブの顔の包帯を撫でた。

「ごめんなさい。僕にできることって、これからも訓練をつづけて一人前になることだよ。」

ロブがまぶたを閉じると、目から涙がこぼれた。レインはしきりに謝ったが、ロブは何度も瞳を左右に動かした。

誰もクレアの事を語らない以上、そのことが何を意味しているか、理解できないロブではなかった。

自分が不甲斐ないばかりに、クレアが命を落としてしまったのなら、

申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

しかし、責任を感じて落ち込んでいる場合ではないことぐらいはわかっているし、周囲にも理解してもらえるはずだと思えるようになっていた。

クレアが言っていた言葉が耳から離れない。

「レテシアに謝れ。」

こんなみっともない姿で謝って、許してもらえるのだろうか。いや、それは解せない。

意地を張っている場合でもないから、今は治療に専念することだけを考えようと心に決めた。

レインがそつと、ロブの涙を拭き取った。

「兄さん、いや、父さんのこの涙を一生忘れないよ。僕、強くなるから、父さんのように強くなるから。」

目頭が熱くなるばかりか胸も熱くなる。何もいえないことは辛いというより、都合が良いとさえ思った。

軍を除隊したジェフは、妻と子供を軍の施設から実家へと向かわせた。

テオからロブに同行して欲しいという依頼が来ていた。

ロブはグリーンオイル財団の医療施設に搬送されることになっていたが、そこは敢えて内部にも公表されていない施設だった。財団だけでなくメインの製造会社や軍部や国の機関でさえ、その情報を知りえていない。

ジェフにとつては好都合だった。キャティナ・マウントーサ・ロツソ駐屯地に所属していた時から、裏でサンジョベーゼ將軍の配下だった。

レテシアからのホーネットの誘いを断ったのは、もともと裏の組織に所属していたためだった。

除隊したのは、軍部にいてる理由がなくなったためで、一般人としての動きの方が身軽であると判断したためだった。

セリーヌ・マルキナと連絡を取り、治療施設に向かう途中のロブに付き添う看護師たちと合流した。

ロブがジェフの姿をみると、不思議そうな目で見ていた。

「どうして、オレがここにいるのかと思っっているんだろう。まあ、オレもこんなことになるうとは夢にも思っていなかったけどな。」
搬送される空挺のなか、看護師が付き添っているものの、ジェフは言わなければいけない話を始めた。

「ロブもわかっていると思うが、クレアさんは死んだ。」

ロブは天井を見つめるだけで、何も反応せず、ジェフの話しに耳を傾けていた。

テオから聞かされたスカイエンジェルフィッシュ号飛行中爆破事件の内容と、カスターが供述したクレアの状況を事細かに話した。

総じてわかっていないのは、クレアを襲ったのはおそらくジョナサンだろうということだが、腕を引きちぎるようなことをやってのけるようなことまでできないということだ。

ジョナサン、アルバート、クレア、スカイエンジェルフィッシュ号に搭乗していたのは3人だろうという話だが、カスターが言うにはもうひとりいたという。その人物が誰であるかはわかっていない。そこで、ジェフが手に入れた情報をロブに聞かせた。

「エメラルダグリーン号に探りを入れた人物がいることがわかったんだ。内容は、レテシアの相棒のことだ。事件当日は搭乗しておらず、どこへ行ったか不明だということだった。よくあることらしいが、誰もそのことに感知しておらず、艦長でさえ口が挟めない状態だという。」

ロブは目を見開いていた。白髪の少女がレテシアの相棒であることを知っていたからだ。

「お前は知っているのだろう。その相棒がどういう人物であるか。まぶたをゆっくりと閉じて見せた。」

「レテシアはおそらく深いところまでは知らないと思う。ジョナサンとも連絡をとっていたぐらいだから、何らかのかたちで関わって

いるとオレは推測する。しかし、下手にクレアさんのことでその少女を疑ってレテシアを責めるのは得策ではない。」

ゆっくりとまぶたを閉じた後、目を見開いてジェフをみた。

「口が聞けるようになって、レテシアと話す機会があっても、うかつにその事を話すべきではない。返ってレテシアの身に危険がせまることになるかもしれない。」

睨むようにみると、ジェフは笑った。

「クレアさんは知っていたと思うよ。だから、余計にお前に話をしなかったんだと思う。歯がゆい思いをしたと思うが、これで合点がいっただろう。」

そう、ロブの耳について離れない言葉がまた、出てくる。「レテシアに謝れ。」と。

ガラフアンドドックに到着すると、すぐに、レインの元に荷物が届いた。

差出人は、フェリシアだった。不思議に思って、中身を開けると、手紙と包みがあった。

手紙はフェリシアからのもので、中身がびっしりと書かれていた。包みが気になり、恐る恐るあけると、中から緑のスカーフが出てきた。

そして、一枚の紙切れがあった。そこには、「エミリア・サンジョベーゼ上等兵より」と書かれていた。レインの胸は熱くなった。

プライベートな荷物はほとんどスカイエンジェルフィッシュ号にあり、エミリアとレテシアのスカーフもなくなっていた。

手元には若いときのレテシアの写真しか残っておらず、フェリシアの時計ぐらいだった。

紙切れには名前以外に何も書かれていない。緑のスカーフには白いラインが二つ入っていた。それが何を意味するのかわからなかった。

ただ、何も語らない姿勢にレインを思う気持ちが伝わってくる。レ

インは思った。

「強くならなきゃ。エミリアさんの期待に応えていけるようにならなくちゃ。」

壊れそうになったところが次第に厚みをおびて修復していくように感じられた。

第二十五章 レテシア＝ハートランド 1

バシッ

レテシアがイリアの顔を平手打ちした。

イリアは睨み返したかと思うと、同じようにレテシアの顔を平手打ちした。

バシッ

驚いた顔でイリアをみたが、イリアはたじろぎもなかった。

「ぶたれる理由なんて何もないんだからね。」

顔を赤くして、叫んだ。

「私にだまって、スカイエンジェルフィッシュ号に行かないでって言ったでしょう。」

「連れて行くわけにはいかないでしょ。それとも、なに、あそこで、ロブと鉢合わせしたかったわけ？ それこそ、いままでの苦労が水の泡でしょう。」

愚の音も出なかった。

レテシアがイリアと出あったのは、スワン村だった。

解散したはずのホーネットが、皇帝の始動で隠密の機動隊としてホーネットが組織され、そのメンバーにレテシアは志願した。

志願した理由は、ロブの知りえぬところでロブの助けになりたいと思ったからだだった。

レテシアのそんな気持ちを皇帝は利用していた。そうとも知らずに、レテシアは皇帝の命令やジョナサンの指示で動いていた。

スワン村に行って、イリアを連れ出すことをジョナサンから指示された。理由は聞かされておらず、自分の行動を信用してもらったため、の命令だったから、従うしかなかった。

イリアをスワン村から連れ出す計画は、黒衣の民族のタカシから出された。このことを条件に皇帝やジョナサンは黒衣の民族タカシを利用しようとしていたのだ。

スワン村に入るのさえ困難だった黒衣の民族がイリアを求めていたのは、魔術師能力もちの白い魚だという点だった。

黒衣の民族から逃れるためにスワン村にきたイリアの母だったが、病を得てイリアを手元におくのに忍びなかったがために、素性の知らぬレテシアに託してしまった。

ジョナサンは、性格の良いレテシアを差し向けて、計画通り、イリアをスワン村から連れ出すことに成功した。

しかし、イリアが魔術師につれていかれたあと、腑に落ちなかったレテシアは、命令を無視して、魔術師からイリアを奪還してしまっ

た。

その時すでにイリアはスワン村にいた時のイリアではなくなり、洗脳された能力もちのイリアになってしまった。

責任を感じたレテシアは、その後、自分の娘のようにイリアを過保護に接し、グリーンエメラルダ号のほかのメンバーに近づけさせる事をさせなかった。

イリア自身はレテシアを気にいつていたので、汚れ仕事を引き受けることでレテシアを守ろうとしていた。

「どんな命令でS A Fに乗り込んだというの？」

「ジョナサンが試作段階の薬を持ち出したので、始末して欲しいと言われたの。」

「ジョナサン以外の人も殺したでしょう。」

「ああ、あの人は混血児だったから。ジョナサンの素性がばれてしまわないように。レテシアも知っているでしょ、ジョナサンの裏の顔を。」

レテシアは唇を噛むことしかできなかった。ジョナサンの裏の顔を知ったのは、イリアを奪還してからの話で、ジョナサンから逃れることは出来なくなっていたからだだった。

両手を顔に当て、考え込んでみたが、答えは出てこない。イリアの薄笑いが憎くて仕方なかった。

「クレアさんを見殺しにするなんて・・・。」

「見殺しにしたんじゃないわ。ジョナサンにやられてしまって、手の施しようがなかったのよ。」

イリアはレテシアの両肩を抱きしめた。

「わたしだって、レテシアの気持ちはよくわかってるわよ。クレア、ロブ、レイン、ジリアン。彼らが傷つくことをレテシアは望まないことぐらいはわかってるわよ。」

でも、時はすでに遅しかったの。クレアは死を覚悟していたんじゃないかしら。ロブでも止めることができなかったんだから。」

おそらく、イリアの言うとおりだろうと。レテシア自身、そう思い込むしかなさそうだと考えた。

「ごめんなさい、イリア。わたしの覚悟が足りなかったわ。クレアさんの死を嘆く前に、自分のするべきことを考えるべきね。うるたえていたのでは、ロブどころかレインさえ守ることができないわ。」

イリアはレテシアに笑顔を向けた。

「ひとつだけ、聞いていいかしら？」

「なにを聞きたいの？」

「レインを始末するように言われていないわね。」

「どうして、そんなこと言うの？ そんなこと誰が命令するっていうのよ。」

「ジョナサンが皇帝をそそのかして、言いかねないと思ったの。」

「どうして？ レイン殺して、何の意味があるの？」

「ロブが憎いと言ったことがあったわ。レインが生まれたことも喜んでもらえなかったもの。」

「思い過ぎしょ。それに、命令されても、わたしはそんなことをしないわ。」

「そうね、ごめんなさい。わたしどうかしてるわ。」

ため息をつくレテシアをイリアは抱きしめた。

「ロブに散々傷つけられたのに、あなたはこんなに愛している。わたしがそんなあなたの宝物をだめにしたりしないわ。」

「つらいの。クレアさんを失った悲しみをどうやったら、うずめる

ことが出来るかしら。」

「ロブにうめてほしいの？」

左右に首を振って、涙をこぼした。ロブへの愛は永遠だと心に決めていても、ロブからの愛はもう失ったものと思っっているからだ。

お互いを深い溝で引き裂いたあの日、どうしても忘れられない。

後ろを振り返ることができずに、スタンドフィールドを去った。ところが引きちぎれそうに、悲しみが悲しみを生み出し、壊れて崩れていく自分を止めようが無かった。

ロブの愛を失ったのなら死を覚悟したかったのに、できなかったのは、新しい命を宿していたと知ったからだだった。

しかし、強情なまでにひとりで生もうとしたために負担がかかり、その命は死産となった。

レテシアが死産を乗り越えて、グリーンエメラルダ号に服役した時に、ジョナサンから裏のホーネットの話が聞かされたのだった。

第二十五章 レテシア＝ハートランド 1（後書き）

登場人物

レテシア＝ハートランド（主人公の母親。グリーンエメラルダ号のメンバー。裏ホーネットのメンバー。）

イリア（黒衣の民族・魔術師・白い魚。グリーンエメラルダ号のメンバー。裏のホーネットのメンバー。）

レイン＝スタンドフィールド（主人公）

ジリア＝スタンドフィールド（主人公の従弟：主人公の弟<初期>）

ロブ＝スタンドフィールド（主人公の実父：主人公の兄<初期>）

クレア＝ポーター（スカイエンジェルフィッシュ号の医者。第二部に於て死亡）

ジヨナサン（スカイエンジェルフィッシュ号のエンジニア。第二部に於て死亡）

第二十五章 レテシア「ハートランド」 2

レテシア「ハートランド」は、物心付いたときに、両親を失っていた。兄と共に、叔父である艦長の配慮でグリーンエメラルダ号の民間乗組員になった。

幼少よりスカイロードに入るまでグリーンエメラルダ号で育ち、エアジェットの魅力に取り付かれ飛び回る日々を過ごしていた。

スカイロードに入ったのは、ホーネット隊に入隊する目的があった。ホーネット隊は最新鋭の機体を当てがわれる部隊だったので、アクロバット飛行の狂人と言われたレテシアには憧れの部隊だった。

スカイロード一回生で兄を亡くし、その悲しみを乗り越え、目的を果たすことに生き甲斐としていた。

三回生の卒業前で事故のため怪我を負い手術した後、車椅子でのリハビリ治療を乗り越えることができたのは、ロボの存在があったからだった。

目的を見失ったものの、その代わりに手に入れた愛情はかけがえないものだ実感した。

レテシアの生きていた世界がエアジェットから、ロボやレイン中心の世界になった。

「レテシアって、子供の作り方って知っていたわけ？」

ジゼルに不思議そうに言われたのは、妊娠していると告げたときだった。

「ええ？知らないわけじゃなかったけど・・・。」

「だってさ、グリーンエメラルダ号って、男の人ばかりだったでしょ。誰も女の子のこと気にしてくれる人いないとマーサが心配していたのよ。」

「たしかにそうだけど。それはお兄さんが気を使ってくれて、駐留していた際にいろいろ女の人に聞いてくれていたみたいなの。」

「変な虫がつかないようにつて注意払つてたのかな。」
「うゝん、それは艦長が指図していたかも。鬼艦長の姪っ子には近づかないようにつてスカイロードの教官が言つてた気がする。」
「へえゝそうなんだ。それは変な虫がつかなくて当然だよな。」
「うゝん、でも、クラスメートのジェフはそんなことしなくても近寄れないつて言われたけどな。アハハ。」
「あ、そう。でも、鬼艦長もまさか、年下のロボが変な虫になろうとは思ひもしなかつたでしょうね。」
「ええゝ、そんな。ロボは変な虫じゃないもの。」
「レテシアを可愛がつていた艦長にとつては、レテシアの男はだれでも変な虫なの。」
「うゝん。でも、ま、まさか、こんなことになろうとは思ひなかつたわ。」
「ど、どういうこと?」
「ええゝ、だつて、キスだけだと思つたんだもの。」
「はあゝ。」
「キスしていい?つて聞かれたから、いいよつて言つたの。そうしたら……。」
「はあゝ、それはそれは、クレアさんも詳しく聞きたいとも言わないわよね。」
「もつ、ジゼルの意地悪。」
「どこが、意地悪ですか。聞いて呆れちゃうわよ。」
一人の女性として、伴侶を得て子を産み、愛する家族と共に地上で生活する幸せを、レテシア自身それまで考えもしなかつたものを手にいれた。
しかし、スタンドフィールドでの生活は、そんな彼女にアクロバット飛行への思いを未練として生み出していった。
事故さえなければ、今頃、ホーネットの花形飛行士として、活躍して空を飛んでいたという思いが日に日に強くなつていた。

そんな思いをロブに吐露し、いつか軍隊に入隊できるようにと、懇願し約束させた。

ロブ自身はレテシアの思いを打ち消し、つぶす考えはなかった。レテシアがアクロバット飛行する姿に憧れを抱いて自分を成長させてきたのを自覚していたからだだった。

ロブの父ゴメスが、レテシアがエアジェットに乗ることに反対していたが、病死後、本格的にエアジェットの練習をし、軍隊に入隊した。

ホーネット隊に入隊できたものの、ロブやレインと離れる生活は次第にレテシアを疲弊させてしまい、軍隊を除隊しようと思いついたときには、二人に深い溝が出来てしまっていた。

そして、雷雨のできごとで、レテシアはスタンドフィールドを去った。

グリーンエメラルダ号にもどることが出来ずにレテシアはロックフォードファミリーでアクロバットショーに出て、生活するも、死産したため、体を壊した。

艦長の「もどってこい。」という手紙をもらい、レテシアはグリーンエメラルダ号にもどった。

グリーンエメラルダ号にいても、レテシアの思いは変わらなかった。それは艦長もグリーンエメラルダ号の乗組員も言わずと知っていた。

艦長自身も不憫に思っ、レテシアの妙な行動も見てみぬ振りをした。裏のホーネットに入っていたことは知らないわけではなかったが止めることはしなかった。

ただひとこと、レテシアに釘をさした。

「自己責任だ。迷惑をかけたのなら、すべて自分で責任を取れ。わしのことは老いばれだから、いまさら何も恐れない。レインが生まれた時の事を思えば、怖いものはない。」

艦長は軍隊が分裂することを情報として得ていた。どんなことが起ころうとも、レテシアが巻き込まれないとは限らない。過保護にし

たところで、自身で道を切り開くことができなければ意味が無い。自分の知らないところで、レテシアが行動することには必要性があるだろうと考えていた。生きる術を教えるのは痛い目にあわせないといけない部分があると、スタンドフィールドを去ったと知った時に思っていた。

いつまでも、レテシアをわが子のように見守ることなんてできないことくらいは、老いぼれて自覚しなければいけないと、自分にいい聞かせていた。

そうとも、知らず、レテシアは自分の生きる術は、ロブとレインにしかないと、遠く離れていても、そう考えていた。

裂けられても、思いを寄せていれば、一緒に生きていると実感できると思っていた。

クレアがこの世を去った今、瀕死の重傷から命拾いしたロブに、一刻も早く、会いたいと願ったレテシア。

クレアからレインたちはロブよりレテシアの側にいたほうがいいと言われていたことを遺言と捉えて、レテシアは表向きに行動する事を決意した。

「レテシア、それ、本気で言っているの？」

「ええ、そうよ。このグリーンエメラルダ号にレインたちを乗組員として迎えるの。」

「わたしをどうする気？」

「どうも、しないわ。もし、混血の人を殺したことが知られた場合、わたしが責任を取るわ。」

「何もかも話する気なの？」

「いいえ。私の思いを伝えるだけ。レインたちを巻き込みたくないもの。」

「そういうわけにはいかないわよ。」

「大丈夫よ。信じてちょうだい」

イリアは考えていた。クレアから聞きだすことが出来なかった、セ

シリアの最初の子のこと。レインたちから何か聞き出すことができるかもしれない。

「それに、レインたちにはあなたと接しすることで黒衣の民族、白い魚のことを理解してもらいたいと思うの。」

「ふん。そんなことできるかしら。」

「できるわよ。わたしの息子ですもの。それにジリアンのお兄さんは混血の人でしょ。」

甘い考えをもつレテシアをすこし呆れながら見ていた。その甘い考えの一端でイリア自身がこのグリーンエメラルダ号にいてレテシアと共に暮らしていることになっていて、事を知っていた。

「いいわ。レテシアを信じる。なにかあっても、あなたが責任を取る必要性はないわ。」

「どうして？」

「人殺しをしたことにかわりないはもの。そうするしか、ここにいられない。そして、レテシアが責任を取るようなことになったら、それこそレインとはもう一緒に暮らせないわ。」

落胆するレテシアにそっと、肩を撫でて宥めた。

「そんなことにならないように努力するわ、レテシア。あなたがわたしのために命がけであいつらから取り戻してくれたんだもの。」

「イリア。」

「レテシア、わたしはあなたに感謝している。人殺しをしようともわたしはあなたと一緒にいられて幸せだもの。スワン村の暮らしもあいつらと一緒にいた時も、地獄でしかなかったもの。」

イリアを抱きしめるレテシア。

二人はお互いの目的のために、力を合わせる事を約束した。

裏のホーネットからジョナサンがいなくなって、機能を停止している。皇帝から無謀な命令が下されたのなら、それを受けないことも決めた。

イリアには、レテシアに隠していることがあった。それは裏のホーネットとは別に、グリーンオイル製造会社の社長とつながっている

ことだった。

それは自分のためだけでなく、セシリアの混血児のためだった。いざとなれば、皇帝から逃れるために、そちらに逃げこもうという算段だった。

もちろん、皇帝が社長に転がされているということは承知の上のことだった。

第二十五章 レテシア「ハートランド」 3

男臭い現場。さび付いた鉄くずが転がり、潮風が肌に当たって痛い。ここは、ガラフアンド・ドック。

クレアとスカイエンジェル号を失い、スタンドフィールド・ドックにもどることなく、ここにいてるのは、自分たちの身を守るためだった。

軍隊を除隊したテオ・アラゴンに軍隊並みの訓練を受けて、レインとジリアンは夜な夜な涙をこぼしていた。

働かないものは食べてはいけないという居候扱いで、ドックで下働き同然の仕事をこなしていた。

クレアやアルバートの死を悲しんでいる時間が彼らにはなかった。

「ダニエル、僕にまわり付くのは止めてよね！」

「こんな可愛い顔して、男だつてのが信じられない。別にまわり付くぐらい、いいじゃないか。減るものじゃないし。」

「減る減らないの問題じゃないんだよ。気持ち悪いんだよ。」

レインはグリーンオイルで汚れた軍手でダニエルを遠ざけていた。

「なにやってるんだか。」

「ああ、シモンが言っただけだよ。ダニエルに夜間外出禁止令出して、禁断症状がでているんだって。」

ジリアンはレインを冷ややかな目でみていた。

「レイニーってどこ行っても、誰かにまわれ付かれてるから、見慣れた光景だけだよ。さすがにダニエルにされたら嫌だろうね。」

「見ているこつちも、嫌になるね。助けてあげないの？ジル。」

「キヤスが助けてあげれば？ダニエルが耳を傾けてくれるとは思えない。」

レイニーがオイルタンクの清掃をしている側でダニエルがうつづいていた。

ジリアンやカスターは距離を置いて、床掃除をしていた。

サイレンが鳴り響いて、休憩時間を告げる。

そこへ、老婆が少女を連れて現われた。

「アニーさん、こんにちわ。」

「元気そうだね。」

「ええ、えつとお、その子は？」

クレアの養父ダンの実母であるアニーは、レインたちに挨拶した。

少女は老婆に隠れて、はずかしそうにしていた。

「この子かい。フランクの娘だね。母親が病気になったので、しばらくうちで預かることになったんだよ。」

「へえ。」

カスターが少女に近づくと、アニーの服にしがみついて、顔を隠した。

ジリアンがカスターの服を掴んで制止した。

「これこれ、恥ずかしがってどうするんだい。ここにはたくさん男の人がいるんだよ。顔をお見せ。」

少女はアニーに促されて、顔だけ出してきた。

「恥ずかしがり屋さんだね。さ、自分で挨拶しなさい。」

「オ、オルレアといいます。よろしく。」

言葉を発すると、すぐにアニーの後ろに隠れた。

「あはは。かわいいね。オルレア、よろしく。僕はカスターって言うんだ。」

「僕は、ジリアン。」

アニーはレインを指差した。

「あそこにいてる髪が茶色の子が、レインと言っただよ。ダニエルには会ったことがあるだろう。」

オルレアは小さくうなづいた。

「ジリアン。」

「はい。」

「休憩時間で悪いんだけど、オルレアの相手をしてあげてくれないかしら。」

「ええ、いいですよ。」

「カスター、話があるんだよ。シモンのところに来てほしい。」

「あ、はい。わかりました。」

レインがアニーたちがいるほうを気にしている様子に、アニーは助け舟をだした。

「ダニエル。シモンが機械室へ行つて、調整してきて欲しいって言つてたわよ。」

ダニエルは、嫌そうな顔をして、了解と返事をして、レインから離れていった。

レインはホツとした調子で、アニーに頭を下げた。

「アニーに、オルレアの相手をして欲しいって言われたんだ。」

「オルレア、年はいくつなの？」

「5歳。」

「セイラと変わらないね。」

「そうだね。」

レインとジリアンはオルレアをつれて、グリーンオイルのタンクを案内した。

カスターが手洗いを済ませて、シモンがいる部屋に入った。

「お話つて何でしょう。」

以前に、シモンとアニーには、テオ＝アラゴンを含めて、クレアとアルバートの死を話した。

アニーは気丈に話を聞き入っていたが、心情は悔しい思いでいっぱいだった。

クレアの死後、何をすべきかということをも、話し合ってきた。

ダンの布石を得て、なお、クレアを失った。彼らがなぜ死ななければいけないかったのかということを考えなければ、浮かばれないと思つていたのである。

ダンのダイイングメッセージを確認しておいた。

「前にも話したが、服毒自殺をしたのは、犯人を特定させないため

であり、復讐して欲しくないというのが前提。」

「クレア自身もそのことは理解していたはずだ。ダンの死を無駄にさせるつもりはなかっただろう。」

シモンとアニーはある疑問点を持っていた。それはセシリアが生んだ最初の子供のことだった。

ダンの情報を求めて、アニーのところに尋ねてきたのはクレアだけじゃなかった。

「どんな情報を求めている、ダンに死に追いやったのか、クレアにはわかっていたのではないかと思うの。」

カスターは二人の話をただ聞くことしか出来なかった。

おそらく、ふたりが知りたいことは、セシリアが生んだ最初の子・コリン＝ボイドのことだろうと。

しかし、クレアが死の間際に言った言葉を思い起こせば、二人に話すべきではないことぐらい理解できる。

「キャス、君を危険な目にあわせるかもしれないけど、頼むよ。」

コーデイにも話せなかったことは、コーデイの身を案じてのこと。

カスターは唇を噛締め、クレアの重荷をいまさらながらに感じた。

「どうかしたか、カスター。」

「あ、いえ。コーデイがここにいたなら、なにか情報が得ているだろうと思って。」

「ああ、そうだね。しかし、ここに来ることによって、危険が増すかもしれない。」

「うむ。命を狙われたかどうかは知らないが、怪我をさせられたのに違いない。コーデイのほがクレアの情報が多いと思われる証拠だな。」

アニーはしばらく黙り込んで、意を決したように、口にした。

「ときに、レテシアはどうしているのだろう。」

「どうして、そのようなことを。」

「実は、クレアの死後、先日、スワン村にいたという男が訪ねてきた。」

「スワン村ですか。」

「ああ。スワン村でレテシアを見かけたと言ってたね。」

「どういうことですか。」

「そうだな。レテシアはロックフォードファミリーでちょっとした有名人だったから、軍関係者なら、知らないものはいないだろう。」

「いや、お恥ずかしい。僕は知らなかったです。」

「レテシアを目撃していて、いまさら、何を言い出すのかと思っただがね。」

「わざとその情報をながされたというのはないでしょうか。」

「そうかもしれないな。スワン村にレテシアがいたとなると、ロブはどう思うだろう。」

カスターはすこし寒気がした。以前、グリーンエメラルダ号と接触した時は、大人気なく会うのを拒否したからだ。

「そうですね、そのことをすこし調べてみましょうか。僕も気になります。」

「たしか、まだ、ロブは動けないのだな。」

「そうです。まだ、治療中で、言葉は発せるようになったようですが、自由には動けない状態です。」

「そのほうが都合だな。」

「そうだね。あの頑固者に、下手に動かれても困る。」

「おそらく、クレアさんもそのことを危惧されていかもしれませぬね。」

レインたちが昼食を求めて、食堂に來ると、一通の手紙を渡された。宛名はレインで、差出人はレテシアだった。

「ママ、いや、お母さんからだ。」

ジリアンはオルレアの相手と一緒に食事をとっていた。

手紙を読むレインの様子を見ながら、相手をしてしたが、レインが次第に険しい顔になるのがわかった。

「どうしたの？」

「ど、どうしよう。」

「なにが？」

「お母さんが僕たちをグリーンエメラルダ号に乗せたいって言うてきてる。」

「え？本当？」

「うん。それと、僕たちに会いに来る前に、兄さん、いや、父さんに会いたいわって。」

レインとジリアンは考えあぐねた。

いま、ロブに合わせてよいものだろうか。

グリーンエメラルダ号に乗船すれば、クルーの人に迷惑がかかるだろうとも考えた。

カスターがいない、今、決断する時ではないだろうが。

「うーん。時間がなさそうだけど。」

「アラゴンさんに相談してみようよ。」

「そうだね。」

レインやジリアンに慣れて、一所懸命昼食を食べているオルレアの頭を撫でたジリアンは言葉をかけた。

「好き嫌いがいいんだね。良い子だね。」

「うん。アニーお婆さんのように賢い人になるんだもの。」

「そうなんだ。」

「お婆さんは物知りなんだよ。いっぱいいっぱい知っていることがあるんだもの。」

「アニーさんのおうちにはいったことあるよ。たくさん植木鉢があったね。」

「いろんな植物があったでしょ。いま、わたしがお水の世話しているのよ。」

「偉いね。」

「当然なもの。働かないものは食べてはいけないって。」

レインとジリアンは関心した。

ジリアンは、オルレアをみて、セイラはどうしているだろうと考え

た。

第二十五章 レテシア＝ハートランド 4

のどかな田舎風景が窓から見渡せる。

顔の半分が包帯から開放されて、窓からの涼しい風が心地良さを感
じることができた。

火傷していない腕や指を動かし、リハビリを始めたロブだった。

「ロブ、レテシアが会いたいと言ってきているらしい。」

度肝を抜かれたように体をわずかに動かしたあと、深いためいきを
ついた。

「無視するわけにいかないってことかな。」

「おい、いつまで、オレを無口にさせておくんだ。話は出来るよう
になったって言うんだ。」

「あ、そうだったね。」

ジェフがため息をつくとき、相変わらずだなという素振りをしてみせ
た。

「ずっと、無口にさせたかったね。」

「おまえにとつて、そのほうが都合か。」

「だね。で、どうする?」

「レテシアのことか。」

「ああ。」

「会わないわけには行かないだろう。」

「しかし、ここに来られても困るんだよ。」

「しかも、ジェフと一緒にってたらだろ。」

「わかってるじゃないか。」

手にした書類を手で叩きながら、ジェフは話を続けた。

財団の第六秘書セリーヌ＝マルキナは単独で動いていて、レテシア
の要望には応えなければいけないと思っていた。

クレアからロブとレテシアを復縁させる話を聞かされていたからだ。
セリーヌがジェフに対して、ロブのいている部屋まで目隠しで案内

させることで会わせることで話を進めようとした。

「ジェフ。もう一度確認しておきたいのだが。」

「ホーネットのことか。」

「ああ。」

ロブがまだ口の聞けなかったときに、聞かされたホーネットのこと。皇帝が秘密裏に動かす部隊として結成されたのがホーネット。皇族直轄のホーネットは解散させたうえで、秘密組織として動かしていた。

ジェフが掴んだ情報は、そのメンバーにジヨナサン、レテシア、レテシアの相棒イリア、皇帝の影武者、黒衣の民族などがいてることだった。

「レインやジリアンが命を狙われている理由なんだが。」

「ジリアンは、セシリアの子だから。皇帝排除派が国民の目を欺くのにマルティン皇帝を退かせた後のお飾りにさせられる可能性を考えてのことだ。」

「ジリアンは引っぱり出すなんて、考えられないのだがな。」

「ホーネットに裏切り者が出たらしい。或いは……。」

「或いは？」

「皇女殿下の婚約者が妖しいという話だそうだ。」

「婚約者か。権力欲か。」

「そうだな。事情通というか情報網を駆使している人物だそうだ。」

「だそうだが。信憑性に欠けるな。」

「レインは、よくわからない。」

「わからないだと？」

「ああ、黒衣の民族がロブに対する恨みかと思われたが、レテシアの知らないところでジヨナサンが指示を受けていたという情報がある。」

「それはそれで、スカイエングェルフィツシュ号のメンバーなら何度もチャンスがあっただろう。」

「それでいて、手を出さなかったのは、理由がわからない。形成が

変更になった可能性かなという話。」

「ジェフ、お前の情報は不確かだな。」

「命を狙われているという理由は不確かだ。出発式で黒衣の民族が口走ったことは、陽動作戦かもしれないからな。」

「やっぱり、セシリアの最初の子ということか。」

「だろうなあ。この事を知っているものは、俺たちの組織でもオレしかない。だから情報を手に入れてもつながつてこないことになる。」

「話を通じさせるわけに行かない。ダン先生やクレアさんが守ったものだからな。」

二人は沈黙して、話を進めようとしなかった。

「話は変わるが、コーデイのその後はどうなったんだ。」

「ああ、快復して単独で動いているらしい。」

「らしいって、セリーヌからの情報だからか。」

「ああ、いずれ、アニー＝ポーターに会う手はずになっているということだ。」

「アニーさんか。」

ロブはおもむろに、窓を閉めてくれと頼んだ。ジェフは締め終わるとロブのほうへ振り返った。

「レテシアのことなんだが、頼みたいことがある。」

「頼みたいこと?」

「ああ、できたら、無口で通そうと思う。」

「そのほうがいいな。ということは、病状を偽らないとだめだな。」

「ああ。」

「だったら、即行、レインに言わないといけない。」

「なぜだ?」

「レテシアが、レインとジリアンをグリーンエメラルダ号にのせると行ってきたらいい。」

「なんだって?!」

「とりもどすわけじゃないらしい。クレアの遺言だと言い張ってい

たそうだ。」

「クレアさんの遺言？」

「レインは返事をしないとイケないらしいが、乗る気だそうだ。」

「そうか。」

「反対しないのか？」

「反対する理由が無い。」

「そうだな。ただし……。」

「ただし……だな。」

グリーンエメラルダ号の一室に閉じこもっていたイリア。レテシアがロブに会うため、休みを取って、空艇から降りた。

ひとりで行動できるほど、クルーたちには慣れていなかった。スカイエンジェルフィッシュ号の事件以来、ホーネットに動きがなく、イリアは大人しくしているしかなかった。

目を閉じれば、嫌なことしか思い出せない。

母親と人目を忍んでのスワン村の生活、スワン村から出て黒衣の民族から受けた白い魚としての能力覚醒、ホーネットでの汚れた仕事、黒衣の民族から聞かされた、自分と年齢が変わらない、セシリアの最初の子。自分に似た境遇ではないかと思ひ、思いを寄せる。

その子に会えば、何か変わるかもしれないという思いが強かった。まだ真実を知らないばかりに、期待を胸に膨らませることしかできないでいた。

一方、イリアをひとりグリーンエメラルダ号に残し、ロブに会うために旅立ったレテシア。

あの日あの時の自分を取り戻すべく、ありたっけの想いを詰め込んだところを抱きかかえていた。

落ち合ったセリーヌ「マルキナに目隠しされ、乗り物に乗せられた。空挺での生活が長かったため、地上での行動に慣れていなかった。胸躍る思いはしたものの、揺れる乗り物と同調するかのようには揺れていない。

「もうすぐ、目的地に着きますからね。」
「そういわれて、耳を澄ませてみた。」

かすかに聞こえる鳥の声、木の枝が揺れる音、ここがどのようなところか想像がついた。嗅げば、グリーンオイルに似た臭いがする。

「さあ、着きました。」

目隠しされたまま、手を添えられて、乗り物から下ろされた。

舗装されていない道を歩かされて、葉っぱが擦れる音が身近に感じられて、森に囲まれていることを感じていた。

建物に入り、木造の階段を一步ずつ上がらされた。

「部屋まで、目隠しなの？」

「ええ、そうです。」

階段を上りきって、廊下を横切ると、ジェフがドアの前に立っていた。セリー又向かって、唇に人差し指をたてた。

「レテシアさん、ここです。」

セリー又がドアをノックして、ドアを開いた。

レテシアを中に入れて、ドアを締め切り、セリー又は目隠しの布を解いた。

目を閉じたままのレテシアは勇気を振り絞って目を開けると、カーテンしか見えなかった。

振り返ってセリー又を見た。

「カーテンの向こうにいらっしやいます。私は下でお待ちしておりますね。」

セリー又は部屋から出て行った。

部屋から出ると、ジェフの腕を取り、下に連れて行くこととした。

「無粋ですから、聞き耳立てたりしないでください。」

「聞き耳立てるつもりは無いよ。」

「どうして、ご自分の事を知らせなかったのですか。」

「オレがロブと一緒にいることを知られるとまずいんだよ。」

「ホーネットのことですか。」

「ああ。」

「ロブさんといろいろ話していくうちに、知るようになるのではないですか。」

「まあ、そうならないように、仕込んでおいた。」

「なにをですか？」

ジェフはセリー又に耳打ちした。

カーテンの前で、動けずにいた。涙をこぼしてしまいそうで手は震えていた。

こころの中でずっと、どうしようどうしようといつと呪文のようにつぶやいていた。

時間が経って、ロブから声をかけられないことを不思議に思った。そして、ようやく勇気をだして、カーテンを開けた。

窓のほうに向いて車椅子に座すロブは、包帯で全身をくるまれている。

開いているのは目と鼻だけだった。

その姿に驚愕したレテシアは声をあげれず、両手で口を押さえた。涙が流れて震えた。

ロブの視界にレテシアが見えていた。涙を流せるつもりはなかったが、口が聞けないというか、話すことをしないという意思表示をするにはこの方法しかなかったのだと自分に言い聞かせた。

「なんて、酷い姿なの。」

堪えきれない思いがあふれてきて、レテシアはロブの後ろに回りそつと抱きしめた。両手をロブの顔を覆い、自分の右頬をロブの頭に摺り寄せた。

「話すことができないみたいだけど、何をされても怒らないでね。」
愛しいと思う気持ちがレテシアにそうさせた。ロブはただ恥ずかしくて、じっとしているのが苦痛だった。

「クレアさんが、何かあったら、レインとジリアンを頼むと。ロブじゃ面倒見切れないって。」

相変わらず、何を言いたいのかわからない話し方をすると思っていたが、わからないわけでもなかった。グリーンエメラルダ号に乗せる話は聞いていたからだ。

ロブによぎる心配事は、レテシアの相棒イリアのことだった。

ジヨナサンと通じていたのなら、レインとジリアンの身に危険が生じるかもしれない。しかし、レテシアの相棒であるというのは二人を傷つける事をしないかもしれない。

S A Fのクルーだったジヨナサンが行動を起さなかったと同じで、身近にいると行動できない可能性もあると、いろいろ考えてレテシアに抱きしめられている状況から考えをそらせようとしていた。

「グリーンエメラルダ号にレインとジリアンを乗せることは艦長からも許可がでたの。」

その言葉にロブは大きくうなづいた。

「いいのね。」

包帯だらけの右手を動かせて、レテシアの手に重ねた。

「ありがとう。」

涙を拭って、ロブから離れ、両手をロブの肩においた。

「レインがあまり立派に成長しているから、気後れしちやいそう。私のほうが子供っぽい。」

噴出しそうで口から出させず、鼻から勢いよく息が出そうになるのを堪えた。血圧が一気にあがりそうな感じになった。

「いろいろと話せなきゃいけないことがあると思うのだけど、お預けね。」

レインの成長を見届けて、ロブの快復を待って、今後のことを話したいわ。」

レテシアはロブの頭に口付けをした。こころのなかで、「愛しているわ。」と思いながら。

ロブは頭の天辺に集中してむず痒くなった。「変わらない。」とこころのなかでつぶやいた。

「短い時間だったけど、あなたに会えてよかったわ。体の様子はゼリーヌに聞いておくわ。」

レテシアはロブから後ずさりした。

「さようならは言わない。また、会いましょう。ロブ。」
カーテンを閉めると、部屋から出て行った。

「シモン、お世話になりました。」

「ジリアンは慎重な面持ちで挨拶をした。」

「6ヶ月くらいだったかな、そんなに月日が経ったように思えないな。もう、お別れとはね。寂しくなるよ。」

ガラファンランド・ドックは、スタンドフィールドと違っていた。男が多く作業も重労働なうえ、行程的にスピードがあつて、嫌でも筋力がついたと運動嫌いのジリアンでさえ実感していた。

「カスターがいてくれたおかげもあつて、兄さんのいない日々をなんとかやり過ごせた感じです。」

「そうだな。ここはスタンドフィールドとちがつて、軍の色が濃いからな。毛色の違いはカスターのアドバイスもあつて良かったな。」

「いやいや、それほどでもないです。軍隊のやりかたでこの子達に当たっていたら、体壊しちゃいますよ。」

「まあ、ひととおりのルールやしきたりっていうのがわかれば、グリーンエメラルダ号でも役に立つだろう。」

「そうですね。ほんとうにお世話になりました。」

二人は、深々とシモンにお辞儀をした。

小走りでレインがやってくると、息を切らしていた。

「お、おはようございます、シモン。お世話になりました。」

「ああ、レイン。昨日、ダニエルは大丈夫だったかな。」

「ええ、カスターの部屋で寝かせてもらったので、最後の日も何とか。」

しみじみと、シモンはレインを見ていた。

「なにか？」

「ああ、いや。ずいぶんとたくましくなったなと思って思ったのさ。」
レインは照れくさそうにして笑った。

カスターもしみじみそう思った。スカイエングジェルフィッシュ号に

いてる時も体は鍛えていたが、ガラフアンドランドでは力自慢腕自慢の男たちから手ほどきを受けていた。

マッチョ嫌い運動嫌いのダニエルから逃れるためでもあったが、顔は相変わらず童顔でレテシア似だったが、体つきは男らしくたくましくなった。

自分の体を手で撫でてレインと比べていたジリアンにカスターは頭を撫でた。

「ジルはジルらしさがあるさ。」

「わかつているさ。」

シモンは三人の手をそれぞれとって、握手を交わした。

「元気でな。」

ガラフアンドランドのデッキにはすでに、小型の空挺が待機していた。

三人がそれに乗り込むと、しばらくして、離岸した。

悲しみにくれていてやってきたころとは違って、不安は自信に、辛さは強さに変えて、旅立った。

一方ロブは、リハビリを終えて、診療所から出ることになった。

「男前が台無しだな。」

「オレをからかうなよ。」

顔と頭部の一部に火傷のあとが残り、少々グロテスクだった。

ジェフはロブの火傷の部分を片手で覆った。

「仮面でもつけるか。」

「オレは人形じゃないんだ。」

「痛々しくてレテシアにあわせられないな。また、泣くぞ。」

「また、会うのかよ。」

「もう、会わないつもりか。」

言葉につまって、歯を食いしばる。

「それより、これからどうするんだよ。」

「それが、セリーヌが自由に動けなくなったんだ。」

「セリーヌが？それと俺たちとどう関係するんだ。」
「セリーヌはクレアさんの指図で動いているところがある。コーデイが生前のクレアさんの言葉を伝令しているようなものなのだが。」
「亡霊の指図か。」
「亡霊とか言うのか。」
「俺たちの取っっちゃ亡霊だ。」
「侮るなよ。お前のことは隅から隅まで動向を計画されているんだからな。」
「さてよ、本気で言っているのか。」
「ああ。」
「冗談じゃない。それがクレアさんへの手向けとか言うなよ。」
「クレアさんがお前を信用していたら、オレを使って回りくどいことはしなかっただろうな。」
「レテシアのことが。」
「レテシア明察。」
「話しずれてないか？セリーヌは？」
「レテシアをグリーンエメラルダ号から降ろしたことがセリーヌの指示によるものだ」と皇帝が知って、財団に働きかけたらしい。」
「嫉妬か、まさか。」
「まあ、あまり、動いて欲しくなかったのだろう。」
「ジョンサンのこともあるからか。」
「いちばん、懸念していることはロブがグリーンエメラルダ号に乗ることだろう。」
「それは絶対無いな。艦長が認めない。」
「まあ、そうだな。」
「で、これから、俺たちはどうなるんだ。」
「まず、コーディとガラファンランドで落ち合うことになった。」
「シモンのところか。」
「それから、亡霊の指示を仰ぐことになる。オレはそこから別行動だ。」

「はいはい。やっとお役目御免つてわけだな。」

「野郎の子守は楽ではなかったが意外と楽しかったよ。」

「おいおい。」

二人は荷物をまとめて、診療所を後にした。

ロブは改めて、診療所の周りを眺めた。いままでは、空挺に関するいろいろな土地に立ち寄って、どこへいこうがお構い無しだった。最初はそうでもなかったが、ここはのどか過ぎて時間の流れがスロースペースなので、居心地が悪かった。

体の自由がききはじめて、居ても立てもいられなくなった。

火傷のあとを自分で手で撫でてみて、ふとつぶやいた。

「生まれ変わった気持ちで気合を入れていこうか。」

ジエフは振り返って、笑顔を向けた。

「道化師にでもなるか。」

「ああ、いいな。」

空に浮かぶ翡翠と言われたグリーンエメラルダ号。

軍艦、戦艦とちがって、その進行速度は遅い。

どっしりと構えたような装備はグリーンオイルを製造するタンクを所蔵しているからだが、隠れるように大砲も装備されている。

小型空挺から、グリーンエメラルダ号を上から見下ろして、レインたちはこれからのことに不安があったが、期待も混じっていた。

乗船して、初めてではなかったので挨拶もそこそこにして、レテシアに案内されて、自分たちの部屋を通された。

「監獄のような部屋だけど、我慢してね。」

二段ベッドが左右にある小さな部屋だった。

周りには他の男性クルーの部屋になっていて、レテシアの後ろでものめずらしそうに眺めていた。

「みんな、よろしくね。民間乗組員だから。」

レテシアは嬉しさを隠し切れなかった。

抱きしめて、手をつないで、つれまわしたい気持ちを抑えて、軍人

らしく振舞うことに専念していた。

食堂に案内された後、ジリアンの希望で、エアジェット格納庫に向かった。

そこでレテシアの機体・ひまわりで整備する少女がいた。

レテシアが嬉しそうに彼女を呼びつけると、レインたちに紹介した。

「わたしの相棒で、イリアというの。レインと同じ年頃よ。15歳になったけどね。」

レインとカスターはイリアの姿をみて、驚愕していた。

白髪のおかっぱの少女、イリア。

二人がその姿をみて、思い浮かべたのはカオル・ロックフォードだった。

第二十六章 空飛ぶ翡翠 2

カスターが靴紐を結びなおして立ち上がった瞬間に、頭上から叫び声が聞こえて見上げた。

「きゃ〜、キヤス、避けて〜。」

「え?!」

上からレテシアが飛び込んできたのだが、カスターには避ける余裕などなかった。咄嗟に頭を抱えて下に倒れ掛かった。

「うぎゃ〜っ。」

「大丈夫?」

うつ伏せになったカスターの上に、正座で座り込むレテシアはその場から避けることなくカスターの身を案じた。

「わき腹が!!」

レテシアは右膝から落ちてきて、カスターのわき腹に当たった。

「ごめんなさい。」

顔をカスターの背中にうずめてあやまると同時に鼻をひくひくと動かせた。そして、笑顔になった。

「懐かしい臭いがする。」

「おはようございます。レテシア少尉。何をやっているのですか。冷やかな目でシリアンが見ていた。」

「あ、おはよう、ジル。」

カスターは気絶したかのように見うごきしなかった。

その様子によろやく、自分が背中に乗ったままだと気がついたレテシアはその場から離れた。

冷たい目線に取り繕うこともできずに、ただ、カスターに謝ってばかりいた。

「キヤス、いい加減、死んだ振りするのはやめようよ。」

「振りじゃない。本当に死ぬほど痛かったんだ。」

「ああん、ごめんなさい。」

ああ、なんて、かわいらしい声なんだろうと思いつつも、どうしてこんな痛い思いをしているんだろうともカスターは考えた。

「でも、とつても、懐かしい臭いがしたの。なぜかしら。」

レテシアはカスターの作業服を引っ張って、臭いを嗅いだ。

「ロボの臭いかな。」

その言葉でカスターは胸が痛くなる思いがした。

(この人はロボの事を……)

そう、いえば、クレアさんがと思い出しながら、わき腹をさすり、起き上がった。

「大丈夫？」

「いえ、大丈夫じゃないです。」

「ど、どうしよう。」

「いえ、気にしなくていいです、少尉。」

ジリアンはそっけなくそういった。

「カスターとコミュニケーションとらなくてもいいですよ。」

「え、でも……どうしてロボの臭いがするの？」

カスターはすこし考えていたが、答えたのはジリアンだった。

「ロボ兄さんの作業服を着ているんだもの。」

「ええ！でも、ちゃんと洗濯しているんだよ。ずいぶんと僕が着崩したのに。」

自分で臭いを嗅いだカスターは、グリーンオイルの臭いと汗臭さに混じって何かが匂っていた。

「ああ、ロボが使っている石鹸の臭いかな。」

カスターに指をさしたレテシアは満面の笑みになった。

「そう、それよ！お母さんが好んで使用していたと言ってたわ。」

二人はハーブの利いた石鹸を使っていたことを思い出した。

「それより、どうして、上から……飛び降りてきたのですか、少尉。」

カスターが上を指すと、レテシアは満足げに上を見上げた。

「ねえ、上を見て。何が見えるかしら。」

二人が上を見上げると、ポールが立っているのがみえた。

「ポール……。」

「その先は？」

「先?・・・旗?」

「そう、旗。旗を立てていたの。」

二人の頭のなかに、エクスクラメーションマークがいくつも並んだ。白い旗が見えるでしょ。今、日光浴をしているのよ。」

満足そうに、二人をみているレテシア。ポールはタンクの向いにある手すりの上に取り付けてあったが、旗の端を紐で結ばれているだけだった。

二人はスタンドフィールドでのタンク仕様を思い出していた。

スタンドフィールドでは、サイレンが鳴る。空挺が着岸する時と、グリーンオイル製造タンクが日光浴するために扉が開く時に鳴る。

それぞれ鳴り方が違うのだが、グリーンエメラルダはサイレンが緊急用なので、旗を仕様としているのだった。

「ああ、あんなところから、飛んできたのですか。」

「ええ。でも手前にあるポールでワンクッション置いたけどね。」

タンクの側面にポールが突き刺さっている。それに一度回転させて飛び降りて来たらしい。

スカイエンジェルフィッシュ号と近接した時にも見たアクロバット飛行のことを思い返した。

あんな危ない事を日常茶飯事的にしているのかと、カスターは寒気がする思いだが、ジリアンは無関心だった。

「どうしたの?みんな上を見上げて。」

レインが声をかけて、三人ともそちらを振り向いた。

「おはよう、レイン。」

「おはようございます。少尉。」

何気に寂しく思っ、悲しい顔をするレテシアにレインは言った。

「僕は軍人じゃないけど、お母さんは軍人だからね。きちんと挨拶はしておかないと。」

それは鬼艦長から言われたことだった。

「そうね。」

カスターはレインの袖を引き、上を指して耳打ちした。

「上に旗があるのが見えるだろう。その旗の説明を受けていたんだ。」

レインは上を見上げて、それが何を意味するのか考えていた。「

」で、何なの？」

「日光浴してるのよ。みなさんには、種のある場所に案内するわね。」

そういうと、レテシアは背を向け、歩みを進めた。

「日光浴？」

「うん、タンクの扉を開けているってことだよ。」

ジリアンはレテシアのほうへ指差して、二人についていくよう促した。

レインとカスターはひそひそと、話をしながら、ジリアンと後についていった。

「本当はレテシア少尉が飛んできて、びっくりしていたんだ。」

「飛んできた？」

「上から落ちてきたと言っている。」

レインはそこから言葉にできなかった。

そして、鬼艦長と二人つきりになって、話をされたことを思い出していた。

グリーンエメラルダ号に着任してしばらくした後、レインだけがハートランド艦長に呼ばれて艦長室に入った。

「レイン」スタンドフィールドです。入室します。」

「入りましたまえ。」

「失礼します。」

艦長室は、雑然としていた。いろいろな書物が積み重ねられて、足の踏み場もないくらいだった。

机らしきものがあって、艦長が喫煙をしていて、書類に目を通していた。

「御用とは何でしょうか。」

「御用というほどでもないが。すこし話をしたいと思って、呼び出したままでだよ。」

緊張気味に、直立不動だったレインはその場で息をもらした。

「その椅子に座って、くつろいでくれ。」

周囲をみても、椅子らしきものが見えなかった。艦長が指を指す方向をみると、書類がつまれた下に椅子の足らしきものが見えた。

「書類を横に置いてくれないか。座れるだろう。」

言われたとおりにした。

ようやく座れることができて、顔を上げてみると、かなり笑顔の艦長の姿をみて、度肝を抜かれた。

「そんなに怯えなくてもいいよ。小僧。」

一瞬、しかめっ面をしたレインだがすぐに笑顔になった。

「小僧じゃないです。レインです。」

「そうだな、レイン。赤ん坊のころはよく抱いてやったが、いつも泣いておった。」

嫌そうな顔をしないようにするのが精一杯のように、拳を握り締めて耐えていた。

「話しをしたいというのは、レテシア少尉のことだよ。」

「はい。」

「私はもう、老いぼれだ。時期が来れば引退しないといけない。」
「神妙な面持ちで艦長の話を聞いていた。」

「実際、ここを去るとして、レテシアはどうするかということになるのだが。あいつのことだ、ここに残ると言い出すだろう。」

「そうでしょうね。」

「エアジェットの操縦士として居続けたいと言いだすだろう。しかし、あいつも年だ。男なら、ともかく。オンナだから30代になってまでアクロバット飛行されては身が持たないだろう。」

艦長の言いたい事を意味している先のことがわからずにいた。

「わたしはレテシアにも引退して欲しいと思っているのだ。」

「引退ですか。」

「そう。引退するために、あいつが納得するために、ぜひともレインの力が必要だ。」

「僕の力が？」

「ああ、そうだとも。」

艦長は天井を仰いだ。

「レインはスカイエンジェルフィッシュ号のクルーになる少し前に、ロブが自分の父親である事を聞かされたのだろう。」

「ええ、そうです。」

「そして、レテシアの事を聞かされたのだね。」

「はい、そうです。」

「ロブがレテシアをどう思っているかは知らないが……。」

艦長は悔しそうに天井を見つめ、間をおいた。

「レテシアは不憫なくらい、ロブを想っている。」

「え?!」

不憫という言葉に引っかかりながらも、レインは艦長の悔しそうな顔を見つめていた。

大きなタンクのなかに緑色の液体が波を打っている。日差しを浴びると、蛍光色を放ち、おさまると色が落ちる。これを繰り返して、グリーンオイルのバクテリアは繁殖する。

大きなガラスの桶が目の前に現われると、深い緑色の液体から泡出ている。グリーンオイルの種だ。

「こんなにいっぱい種があるんですね。」

ジリアンは目を見張ってガラスの桶を覗き込んだ。

暗がりの部屋にひとときわ深い緑色に発色する様は見ただこともない大きな宝石に思えた。

「貴重なグリーンオイルの種なの。これのおかげで空を飛んでも水と日光浴で繁殖できるのよ。」

レインはレテシアに歩み寄った。ジリアンも聞こえるように、話しかけた。

「お母さん。僕たちと一緒に過ごしたいって、前に会ったときに話しましたよね。」

「ええ、そうよ。」

「お父さんのことも誤解だって。」

「ええ。」

レテシアがレインを見つめて話しをすると、レインの顔は段々と真剣な顔になっていった。

「僕たちが一緒に暮らすってことだよね。」

「そうね。でも……。」

「でも、それって、グリーンエメラルダ号を降りるってことだよね。お母さんはそれができるの?」

「そ、それは。」

「僕たちはスタンドフィールドの人間だから、あのドックから離れることはできない。わかっているよね。」

「もちろんよ。ロブからあなたを引き離すつもりはないわ。でも、わたしは……。」

「この船から下りるつもりがないなら、無理な話だよ。」

「レイン……。」

冷たく突き放されて、胸が痛くなる思いがした。ジリアンとカスターはふたりの様子を見守ることしかできなかった。

「叔父さんの……ハートランド艦長が引退を考えているわ。いずれ、わたしもこの船を下りるつもりだったの。」

「まだ、引退すると決まったわけじゃないんだよね。」

「そうなの。問題解決はロブのことと……。」

「ほかになにかあるの？」

「イリアよ。」

レインは驚きが隠せなかった。ミセス・ロックフォードが同じ白髪の女性だからと言って、同じだとは限らないが、胸騒ぎがして仕方なかった。

それはカスターも同じことを考えてだった。ミセス・ロックフォードとのことは最後にクレアから「殺した。」とだけ聞かされていた。カスターが薬漬けにされたことで白い魚の存在も聞かされていた。

レインが接触したホテルマンが死んだこと、スカイロードとの合同訓練で起きた訓練生の自殺も白い魚のせいではないかということも知らされていた。

レインやジリアンには知らせられていないので、レインの露骨に嫌な顔を不思議に感じた。

「イリアはね、悪い人たちに捕まって薬漬けになっていたところを助け出したの。わたしが無断で。」

悲しそうに話をするレテシアは胸に手をあてて、自分に言い聞かせていた。

「イリアの行くところがなくて、わたしの側にいてもらっているの。できたら、彼女と一緒に……。」

「イリアは他人じゃないか。知りもしない人とドックで暮らすなん

て。」

「わかってるわ、レイン。でも、あなたたちがここでイリアと接すれば、もう知らない人ではなくなるでしょう。」

それが目的なのかとレインもジリアンも考えた。

「わたしが言うのも何だけれど、イリアはとても素直な女の子なの。お互い助け合ってここでやってきたの。どこに行っても変わらないわ。」

唇をかむレインの顔を見ているのは辛かった。あきらかに、レインよりもイリアのほうがレテシアに近い。いつも一緒だったという言葉がイリアの強みのように思えて仕方なかった。

言い出せない言葉をジリアンが口にする。

「だったら、僕たちと暮らさなくても、イリアさんと少尉と仲良く暮らせばいいじゃないですか。」

「ジリアン、それは言いすぎだよ。」

カスターが制止しても、ジリアンはやめなかった。

「ロブ兄さんとの間にある誤解は解いていたほうが良いとは思いますが、でも、それと僕たちと一緒に暮すのは別です。レインと少尉が別々で暮らして長いし、それを取り戻す時間なんて長くはありませんよ。」

「どうして?」

「どうしてって、レインは15歳になるんですよ。母親を必要としない年齢になるのですから。そうでしょう。」

遇の根もでない。レテシアにとっては、レインはいくつになっても自分の子供である。年をとっても。しかし、レイン自身はいつまでも子供のままでいいない。わかっているても意識できていないのが現状だった。

レインより年下のジリアンは正論を吐くのだから、レテシアも言葉がでなくなつた。

カスターも、レテシアが大人になりきれしていない女性であることを感じていた。

艦内でサイレンが鳴り響いた。

「空挺接近の合図だわ。出勤しなくちゃいけない。私は格納庫へ向かうわね。」

レテシアは逃げるようにして、その場からいなくなった。

いつになく熱くなっていたジリアンは次第に冷静さを取り戻して、レインを気遣った。

「ごめんね、レイニー。口出ししてしまった。」

レインは下を向いたまま、言葉を口にした。

「いいよ、僕だけのことを言ってるわけじゃないもの。言いたいことがいつも言えなくて、僕のほうこそごめん。」

あんなに求めていた母親と一緒にいられることがこんなにもむなしなものだと痛感させられるとは思ってもみなかった。

そばにいればいるほど、寂しさがいつそう募りそうなのを堪えるしかないのだろうか。

イリアを大事にしているレテシアの姿を目の前で見せ付けられるのではないかと、不安が襲ってきていた。

それはイリアも同じだった。しかし、それはレインたちに伝えるべきではないだろうと思っていた。

イリアにはイリアの目的があったからだ。レテシアがイリアを助け出して何もお咎めなしにグリーンエメラルダ号にいられるわけがなかった。

目的を条件にイリアはレテシアの側にいられるのであって、彼女こそ、グリーンエメラルダ号を降りることができないでいた。

それはレテシアの知らされていないものだった。

レインたちはタンク周りの掃除を言い付けられていた。

「イリアのことだけど。僕は養子だからすぐよくわかるんだよね。受け入れ難いのはあるかもしれないけど、しばらく様子を見たらどうかな？」

不服そうにカスターを見る二人はブラシで擦る音を立てて作業を続けていた。

「ロブ兄さん相手だとどこまで理解してくれるかだと思っただよ。」
三人は頭を垂れた。

（難しい。）
「何、三人でうな垂れているんだ。滑稽こっけいじゃないか。」

三人が声をかけてきた人物のほうへ振り返ると、ルディ＝アルドラ
ー少尉がいた。

「少尉。僕は今とても落胆しているのですよ。」
「落胆？なぜだ。」

足元が影になり、上を見上げると空挺が飛行していた。

「少尉、任務に就かなくていいのですか。」

「ああ、空挺は計器類が故障して、飛行誘導を求めてきたんだ。レテシアの出番だよ。」

「それは、フォンド・デル・マーレ・デリイラシオーネの所為ですか。」

「塩山脈、あそこは計器類を故障させる。ルートの接近しないはずだが、天候不良によって寄ってしまうらしい。」

「SAFもやられました。」

「聞いたよ。だから、シヴェジリアンドの地に行ったのだろう。」

「ええ、そうです。」

「紅い閃光の爆撃地にSAFがいたことをここじゃ、不思議なことだと口にしていたからね。」

「確かに、ルート変更を迫られてあの地に駐屯していましたが。」

「ところで、レイン、君はなぜ落胆しているのかな。」

アルドラー少尉は含み笑いをしていた。

「ハートランド少尉の様子が……。」

「母親という印象がなかったかな。」

「そ、そうですね。でも、笑顔の素敵なお母さんっていう印象はそのままです。」

「少尉は全然変わらないよ。僕はレテシア少尉とこの船で育ったんだ。ここに戻ってきて母親になっても、変わらない人なんだなあってなんとなく安心したかな。」

「ハートランド少尉は、ここではどんな女性なのですか。」

「サービス精神旺盛な人だよ。人を喜ばせるのが好きかな。まあ、鬼艦長のことは怒らせばかりいたけどね。」

レインたちは暗い顔からようやく笑い声が出た。その様子を確認するかのようアルドラー少尉はレテシアのことを話し始めた。

幼少に両親を亡くし、兄と二人でこの船で生活していた。その兄もスカイロードに入ったときに亡くしていた。

どんな辛いことでも、辛いといわず、笑顔で人々を喜ばせていた。

それがアルドラー少尉にあるレテシアの姿だった。

「正直、鬼艦長と同じく面食らったんだ。ロブとのことはね。いつまでも変わらないで欲しいと願っていただけに、10代で母親になつてしまうなんて考えもしなかった。」

「ましてや、3歳も年下のロブ＝スタンドフィールドだったからでしよ。」

カスターがクレアから聞いていた妊娠した時の話を出してきた。アルドラー少尉は深くうなづいた。

「よっぽど辛かったのだろうつて、鬼艦長は言っていたんだよ。エージェットで事故に合い、リハビリしないと元にもどれないことが。」

レインは鬼艦長のことを想っていた。

「今でも、辛いのでしょうか。」

「ロブのことか？」

レインは返事をする代わりに、うなづいて見せた。間があいて、アルドラー少尉は重たい口を開いた。

「辛いのだろうと思う。イリアの前ではロブの話をするのに、僕たちには一言も話しをしないからね。」

「イリアの前で？」

「立ち聞きしてしまったのだが、一所懸命ロブの話をするハートランド少尉がそこにはいたんだ。」

レインの耳に、あのホテルマン・ベルボーイの言葉がよぎった。

（でも、僕は、君を殺したくはないんだ。君を殺すと、悲しむ人がいて、その人が悲しむ姿を僕はみたくないから。）
口を手で押さえていたが、震えは止まらなかった。

「どうしたのかい、レイン。」

「いえ、何でもありません。」

「気分を悪くさせたかな。イリアのことはその……。」
レインはもう、言葉を発することができないでいた。

「僕たちは理解できてますよ。イリアがハートランド少尉の大切な相棒であること。」

ジリアンが察して、レインの代わりに答えたつもりだった。

「確かにそうだが。それ以上に……。」

「もう、いいです。」

投げやりなジリアンの言葉をカスターは眉間に皺を寄せた。アルドラー少尉は怪訝の顔をした。

「そんな露骨な言い方をしなくてもいいじゃないか、ジル。少尉すみません、イリアのことでは女性同士というのもあるでしょうから。」

「ああ、そうだね。」

「グリーンエメラルダ号のクルーも、みんな違和感持っているのでしょう。」

「ジリアン、やめないか。」

カスターはジリアンの肩に手を置き、強く握り締めた。

「女性ならクルーの中にも居てて、レテシアとは変わらない間柄だ。ただ、違和感があるのは、二人が仲が良いというわけじゃないんだよ。」

「どういうことですか。」

「完全シャットアウト。コミュニケーションさえ、止められている。レテシア意外誰も、彼女と会話を交わしたことがないのだ。」

三人は考えもしなかったことだけに、啞然としていた。

「イリアがここに来たいきさつはみんな知っている。軍が認めたのにも違和感がある。鬼艦長も干渉しないのには何かわけがあるのだらうとみんな思っている。」

輝く太陽が頭上にあって、熱くなり汗ばんでいたが、心地よい風が吹いてきた。

「雲が出てきますね。」

「ああ、そうだね。レテシアの居ない、旗の役目は僕の仕事だ。」
アルドラー少尉はそう笑って、袖をまくった。

レインたちは手を止めていた床掃除の作業を再開した。

レテシアのエアジェットひまわりは、誘導飛行した後、帰艦せずに別の地点に着陸した。

そこでは黒付くめの男が待っていた。

ひまわりから降りてきたのは、イリアだった。

「体よく事は運んだみたいだな。」

イリアは無言で手をだした。

「挨拶はないのか。」

「嫌いだ。」

何が嫌いなのか？と思いながら、男はポケットから赤い小瓶を取り出した。

その小瓶を取り上げようとすると男は持ち上げて交わした。イリアは睨めつけた。

「勘違いするなよ。ジョナサンが盗んだ物とは違うからな。」

「何が違うか、わたしにはわからない。」

「飲む代物ではないということだ。」

イリアは手のひらを見せて催促した。

赤い小瓶を手に取ると即座にその場から立ち去った。

男は最後まで話を聞けと言えば、「嫌いだ。」と言い返してくると思い、そのまま見おくれた。

いつもの手はず。ホーネットの指令は干渉しない。皇帝を信用しているから、出来ること。しかし、クレアの死から、レテシアのなかで揺らぎ始めている。

レテシアが溜め息をつくくと、イリアは言った。

「心配は要らないわ。」

イリアはスワン村から連れ出されて、黒衣の民族に引き渡されてしまった。レテシアはイリアの母親に黒衣の民族から逃げてきた経緯

を聞かされていたので決死の覚悟で奪還した。ジョナサンからは黒衣の民族の襲撃で拉致されたと聞かされた。

事實は違う。イリアは知っていたが、話せばレテシアを始末すると言われた。その様子から、指示は皇帝ではないことに気がついた。レテシアと接するうちに話さない方がよいだろうと思った。

レテシアといると楽しかった。同年代の女性といるみたいに気持ち がわかり合えた。

周囲には、敢えてぶっきらぼうな物言いをして別人の振りをする。ひまわりに乗って居るときだけ普通に会話した。レテシアのことは特別だという態度だった。

赤い小瓶を眺めて、イリアはジョナサンのことを思い出していた。スワン村で育った彼女は、いかがわしい実験の話をする機会があった。そのひとつがレッドオイルだ。

ジョナサンからレッドオイルの話が出たとき、それとなく相手の思惑に探りをいれて、言ってみて。

「レッドオイルをグリーンオイルに混ぜると、爆発するらしい。」
果たして、ジョナサンは試した。しかし、結果はその通りではない。噂でしかないと言い放ち、また違ったことを言ってみて。

「飲んでみると強靱な体になるかもしれない。」
本当に飲んだのは、言うてから時間が経ってからの話だった。

ジョナサンは、グリーンオイル製造会社の社長から皇帝を動かすよう指示されていた。

皇帝からも社長からも、良いように動かされているだけだと気づき始めて、裏切りをもくろんでいた。

イリアはそれを察知して利用した。
実際、ジョナサンが手に入れたレッドオイルは飲む専用で、それは黒尽くめの男から聞かされた。

手渡されたレッドオイルを何に使って、どんなものなのかは知らされていなかったが、だいたいの検討は付いていた。

なぜ、自分がグリーンエメラルダ号に乗せられているのか、そう考えれば察しがついた。

しかし、それはイリアにとって捨て駒扱いであることぐらいは理解できた。だから、知らない振りを通さなくてはいけなかった。

イリアの筋書きに大幅な修正をしなければいけなくなった。

レテシアを失わずにホーネットから抜け出す方法は、おそらくロブにしかできないだろうと考えた。

「イリア、わたしはなにか間違っている事をしているのかしら。」

「そんなことを考えては前に進めないわ。そうでしょう。」

「ええ。でも、本来わたしがしたいことが出来なくなっているような気がして仕方がないの。」

「ロブとレイン、ジリアンを守ること？彼らにわからないように動くのは難しいでしょ。黒衣の民族を根絶やしにすることが難しいのと同じだわ。」

「それは次元が違いすぎるわ、イリア。」

「そうかしら。せめて、タカシだけでも滅んでもらわないといけないわ。」

「イリアが幸せになるためにね。タカシからロブを守るために、ホーネットに入ったのだもの。」

月夜に輝くオレンジの翼は、薄暗い電灯を思わせる。

グリーンエメラルダ号がひまわりを捕らえたとき、青い光を放って着陸誘導した。

レテシアが戻った時には、レインたちは就寝していた。

物音も立てずに、レインたちの部屋に入り、レインのベッドに寄りかかった。

寝息を立てるレインの頬をなで、物思いにふけた。

「オヤスミ、わたしのかわいい坊や。」

頭に口付けをして、そのまま、立ち去った。

第二十六章 空飛ぶ翡翠 6

サイレンが鳴り響く。レベル5の戦闘態勢でグリーンエメラルダ号は緊急事態に至った。

レッドボードを先頭にした黒衣の民族のエアジェット集団が接近してきていた。

「クルーに告ぐ、黒衣の民族と思われる飛行物体が接近中。レベル5の戦闘態勢、レベル5の戦闘態勢。」

緊張感が一気に急上昇する。この空挺艦隊において、戦闘態勢は日常的になくても、奇襲を食らうことは多々あった。

ましてや、黒衣の民族の攻撃など、数あまりある。

普段隠されて見えていなかった大砲が装備される。エンジンルーム以外に配備されているクルーたちは各々に銃を装備する。

レインたちのような民間人も乗船しているので、戦闘に参加しないクルーたちもいた。

しかし、レインたちはじっとしていらなかった。

レインなどは、スタンガンステイックを持ち出して、格納庫にきた自分たちが操縦できるエアジェットがあるわけでもないのに。

レシアのエアジェットひまわりが戦闘態勢のとき、イリアは搭乗しない。ひまわり出動する様をみていて、レインは飛びつこうとした。

「少尉、僕を乗せてください。」

「だめよ。あなたは民間人なのだから。」

「アクロバット飛行なら、僕も自身があります。経験もありますから。」

「あなたを危険な目にあわせるわけにはいかないわ。」

レインはきびすを返して、エアジェットから離れていった。

レインの動向が気になっていたが、任務遂行を専念するために、ひまわりを発進させた。

ジリアンはレインのことが想定できていたので、制止しようと探し廻っていた。

カスターに声をかけて、エアジェットの格納庫に向かっていった。すでにひまわりが戦闘にでていることがわかって、安堵した。

甲板にでたレインは、すでに戦闘になっっている上空を見渡した。

回転しながら飛行するひまわりをいち早く確認して目で追う。レッドボードが視界に入ってきて、身震いがした。

SAFの出発式、黒衣の民族で白髪の男がパジェロブルーの上で交戦したことを思い返す。

あの時はまだ力もなくて、体も鍛えきれていなかった。今は違う。戦い方も身に着けた。体もこころも成長した。人質もない。

旗がたっていたポールによじ登り、両手で回転しながらタイミングを計った。レッドボードが接近したのを確認すると、飛び移った。

その様子が見えていたのはレテシアだけではなかった。司令塔にいた艦長や操縦士・通信士もみていた。

「なんて、無茶なことを。」

レッドボードの翼に飛び乗ったレインは果敢に白髪の男に向かっていった。

「おいおい、あの子のガキなのか。えらく自信家になったものだな。」

白髪の男タカシは足元を肯定させていて、操縦席に合図を送った。

レッドボードは回転した。

レインは咄嗟に片手で翼をつかみ、バランスをとって、振り落とされないようにした。回転して元の位置にもどると、遠心力を利用して体をひねり、タカシに蹴りをいれる。

蹴りは肩にあたり、タカシは面食らった。

「やりやがったな。」

レッドボードはグリーンエメラルダ号を離れていく。レテシアはハラハラしながら、レインの様子を視界にいれて交戦していた。

タカシはほかの者に合図を送り、違うエアジェットが近づいてき

て、レインを振り落とそうとした。

レインは柔軟に体を動かし交わり、ほかのエアジェットにわざと乗り移っては、タカシに接近し、スタンガンを打ちつけた。

「ウガッ。」

「ヨシッ。」

倒れるタカシをみて、喜ぶレインだったが、乗ったエアジェットが回転をして、振り落とそうとする。

油断していたが、なんとか、片手で翼をつかむことができた。しかし、翼の端だったので、そのエアジェット自体バランスを崩し、飛行困難に陥った。

急速に降下しはじめて、レインはつかんでいられなくなり、離してしまった。

落ちていくレインを必死に捕らえようとするレテシアはひまわりを垂直に飛行させる。

ゆっくり回転しながら、落ちていくレインは、ひまわりに身を寄せた。

ひまわりの取っ手部分をつかむと、その様子を確認してレテシアは機体を水平に戻した。

「チッ。」

タカシは肩や打ちつけられた背中を押さえ、悔しがった。操縦席に合図を送って、グリーンエメラルダ号の下に潜りこませた。

レインの行動にみんな釘付けになり、タカシの行方を見失っていた。タカシは体制を整えつつ、思念を送っていた。

(イリア、例の物をよこせ。)

思念を送られてきたイリアは、適当なガラスの小瓶を探し出し、グリーンオイルを少量入れ、指を切って自分の血を流し入れた。その小瓶をポケットに入れ、甲板に出てきた。その姿をカスターが見て、レインのことを聞こうとして声をかけようとしたその時だった。イリアが赤い小瓶を外に向かって、投げ込んだ。その場所から、レッドボードにのったタカシが現れ、手に赤い小瓶を持っていたのを目視した。

黒衣の民族は、レッドボードが急上昇する様子を合図にして攻撃をやめ、グリーンエメラルダ号を離れていった。

ジリアンがレインを探しに司令室に現れたときには、黒衣の民族が散在した後だった。

「はあ、はあ、レインを探していたのですが……。」

鬼艦長は制帽を目深にかぶって、席を立った。

「あのお。」

「戦闘は終わった。敵は退散して行ったのだ。自分たちの持ち場に帰りたまえ。」

鬼艦長は司令室から出て行った。

「グ、グレン少尉……。」

「度肝抜いたよ。ポールによじ登っている姿が目についたと思ったら、敵のレッドボードに飛び移るんだから。」

あきれた様子のグレン少尉に、ジリアンは驚愕していた。

「それで、レインはどうなったんですか！」

「ただいまから、帰還します。」

通信からレテシアの声が聞こえた。

グレンは後方を指した。

「最終的にひまわりが回収したよ。」

ジリアンは、その場で座り込んで安堵した。

「いつも、ああなのかい。」

「ええ、考えなしで行動してしまうので、制止しようと思って探していたのです。」

「そうか。考えなしは母親譲りかな。」

「どうでしょうか。僕たちは民間人で。ここは軍配下のタンカーですから、敵に襲われても仕方ないです。兄からは散々注意されたし、その嫌な思いもしたので、もうしなないと思ってました。」

「敵は黒衣の民族で、レッドボードがいた。」

「レッドボード？」

「レテシアの報告だと、レインは経験があると言ったそうだ。」

「SAFの出発式のとくに襲われましたが。」

「そ、それだな。レッドボードが現れた話を聞いたよ。」

「そ、そんな……。あの時は死ぬかもしれない怪我を負わされたというのに。」

「まあ、勇敢な行動は買うけど、家族にこんな心配かけさせちゃいけないね。」

「それは父親譲りですよね。」
「そういつて、ジリアンは苦笑いして見せた。グレン少尉は笑顔を向けて、手を差し出した。」

立ち上がったジリアンは司令室から外を眺めて、雲行きが怪しくなる様子を見ていた。

「雷雨になりますね。」

グレン少尉は振り返って、うなづいた。

カスターはイリアの姿を見かけると、すぐさま声をかけた。

「君はいつたい何者なんだ。」

無言でにらめつけるので、カスターはイリアの腕を取った。

「僕は見たんだ。君が投げた小瓶を敵が受け取って去っていく様子を。」

イリアは腕を振りはらうと、ポケットから何かを取り出し、すぐさ

ま、カスターの首元に触った。

カスターはチクリと痛みを感じたかと思うと、眼がくらみ、倒れこんだ。

イリアは倒れこんだカスターを軽々と抱え込んで、連れ去った。

唇になにか触れる感覚があった。目を開けてみると、見知らぬ女性がキスをしていた。

彼女の肩を握って自分から引き離れたら、全裸だった。まっすぐに見つめる女性と口を聞こうとしない自分。

「どうしたの？わたしじゃだめなの？」

すぐる様に見つめて迫っている女性をまた、引き離し、今度は立ち上がった。自分は全裸ではなかった。

すぐさま、その場から立ち去ろうとした。

むせび泣く女性の声が耳にこびり付き、怒りの感情を押さえつけて、冷静な態度で立ち去った。

両手を広げると、女性の背中を撫でた感触が残っている。

「まさか。」

あまりのショックな出来事を体験したかのように目がくらみそうに、両手で顔を覆った。

カスターは目が覚めた。まだ、うつろで頭がスッキリとしない。

目の前には上半身裸のイリアがいて、服を着ようとしていた。

さっき見た映像が現実のものなのかと、今日に見えているものは現実なのかと疑っていると、カスター自身の上半身は服を着ていても、下半身は何も履いていなかった。

「まさか。」

そう口にすると、イリアが振り向いた。

「口止め。」

その言葉に、気を失う前に何があったかを思い出した。そして、今何が起きたのか受け入れ難いものを知り得た。

「いつたい、何をしたんだ。僕に何をしたんだ。」

「麻酔を打った。そう、動揺しなくても。」

下着と服が側に置いてあったので、すぐに手に取り履いた。

「軍に在籍した時は、強姦未遂ぐらいしたでしょ。」

「あ、あれは誤解だ。」

突発的に出てきた言葉に反射神経のように返答してしまったが、そんなことまで知っていることを恐ろしく思った。

「君は、こんなことを平気で……。」

「平気。慣れてるわ。こうやって、キヤスの心の中に入ってる。」

「そ、それは、君が白い魚だって、言ってるようなものだ。」

「そうよ。体を張った甲斐があったわ。」

「なにを、なにを、知ったんだ。」

「これで、レテシアをロボの元に返すことができる。」

「え?!」

予想もしなかった言葉に、理解しようという気持ち起きなかった。

カスターは甲板に出て、風に当たり、手すりにしがみついていた。吐きそうに胸がむかつき、自分自身への嫌悪感でいっぱいだった。（どうしてこうなったのだろう。）

どこにいても同じことの繰返し。愛情を求められそして応えようとしては利用される。そして傷つくのはいつも、自分自身。クレアが今生ではなく来世でと、求めに応じなかったことは幸いだと思えた。傷つくことの最小限に留まったからだ。深い想いを感じて、クレアに会いたいと強く願い、手すりから身を乗り出した。

「パパ、大丈夫?!」

耳慣れない言葉が聞こえ、振り返ると長髪の女の子が心配そうに見ていた。自分の頬に手を当てると、濡れていたので袖で拭った。

「パパ、泣いていたの?」

女の子が近寄ってきてた。そして自分はその場でしゃがみこむ。女の子は両腕を広げ、自分の頭を抱くように覆った。

「大丈夫。パパには私がいるから。」

悲しくて切なくて胸が締め付けられる。

この気持ちは何だろうと、考えていた。

「キヤス、大丈夫?!」

気がついたら、レテシアに抱きしめられていた。

「手すりから身を乗り出してて声をかけたら、目の焦点があっけいなかったのよ。」

レテシアに笑顔を向けられて、苦笑いするしかなかった。

「もう、大丈夫ね。」

レテシアが離れていく。しかし、涙がこみ上げてきて胸が痛く、レテシアを引き寄せ抱きしめた。そして泣いて叫んだ。

「クレアさんに会いたくなっただけです。」
レテシアはカスターを抱きしめ返し、頭を撫でた。
カスターの思いの中では、さっきの幻想は治療を受けていたあの時と同じだと感じた。
不安があるから、幻想を見てしまう。レテシアに抱きしめられて初めて、今までの幻想は意味のあるものだと思えた。もう、不安にかけられることもないだろう、そう感じた。

甲板に近い、タンクのそばでカスターたちをレインは見ていた。ジリアンも気がつき、驚き慌ててそちらに向かおうとしたがレインに止められた。

「どうして？他のひとにみられたりしたら……。」
「みんな、知ってるんだ。母さんの心のなかにはいつも、父さんがいてるって。」

ジリアンがキョトンと見ていた。

「でも、キャスが。」
「キャスはクレアさんに会いたって叫んでいたよ。僕たちが思ってるよりずっと重く苦しくてつらかんだと思う。クレアさんの死を。」

そう言うとレインは作業を再開した。ジリアンはレインのことが理解できないでいた。クレアの死をつかく感じているカスターことはわかっていても、それが、そのことと今、レテシアに抱きしめられている意味がわかってはいなかった。

ベッドの中でカスターはイリアから、聞かされた話を思い返す。
イリア自身はずっとレテシアと一緒にいられると思っていなかった。最初からロブやレインの話が聞かされていて、一緒にいるのは一時的なものだと覚悟していたようだ。レテシアの命と引き換えに、数々の指令を受け、あの時のS A Fに乗り込んでいたことを聞かされた。目的はジオナサンを始末することだったが、クレアの状態を

イリアの知る限りのものが語られた。

「クレアさんは殺していない。信じて欲しい。しかし、黒衣の民族のハーフは相手の信用を失わないために殺すしかなかった。」

アルバートは信用を得るための犠牲となり、レテシアを守るためにも、イリア自身が汚れ仕事をこなしていっただけということだった。イリアの言う事をすべて信じ、受け入れることはできないと思った。少なからずとも、クレアの死にはイリアの責任もあると思えた。しかし、今ここで、イリアを責めるのは、別物だとも思っていた。クレアが望んでいないと感じていたからだった。

そして、クレアの望みは、ロブとレテシアの復縁であるということ思い出し、イリアとはその点で協力し合う必要性があると、考え始めていた。

イリアは言う。

「会った時から、レテシアはロブの話ばかりする。それが何を意味するのか、最初わからなかった。ロブに未練があるということだけでなく、人を愛することの本当の意味を教えたかったのだと思うの。あなたにはわかるかしら、カスター。」

そのレテシアの想いをイリアは感じていたからこそ、彼女を守りたいと思っていたと。そして、利用されるがままのろくでもない事象を断ち切るために、イリアはすこしずつ、動き出していると言った。不安を取り除いてくれたレテシアを想い、カスターはイリアを受け入れることにした。受け入れて着なかつた性的交渉は、情報を聞き出すための手段だったとおもうことにした。

一方、イリアの方は、手段を選んでいた。カスターを味方につけたのは、手に入れた情報がそこにあったからだだった。それはイリア自身が求めていた、レテシアのいない、自分の居場所につながるものだった。イリアが求めていたのは、セシリアが生んだ黒衣の民族との子、コリンのことだった。

エアジェットひまわりでレインたちに操縦許可が下りた。

本来、軍の規律に反する行為をしたことで罰せられるはずだった。

エアジェットがあれば、交戦できたかもしれないという仮定の下に、許可が下りた。

「これはあくまでも、レイン、君が軍人でないことを前提にした話だ。本来なら許可が下りない。命令指令に背くような部下はここではない。必要ない。君たちが交戦に参加することは望ましくない。しかし、突発的な事情が起こった場合、操縦することを許可したい意向だ。決して、襲撃してくる敵を攻撃するよう指令するものではない。」

「了解です。」

「強調して言うておく。民間人を巻き添えにするつもりは一切ない。このグリーンエメラルダ号は珍しく民間人が多い。巻き添えにしないための装備、命令系統を確立してある。そのことを肝に銘じて、勝手な行動は慎むようにしなさい。」

「もうしわけありませんでした。以後、おっしゃるとおりに従事いたします。」

肝が冷える思いだった。鬼艦長らしく、にらみを利かせてレインたちに指示を下す。

3人は艦長室を退室すると、ため息をもらした。

「きちんと話せるように思ったのは僕だけかな。」

「レインはあがり症だから、緊張しないように暗示かけたら、大丈夫なんだよ。」

「ジル、僕を子ども扱いするのはしかたないけどさ、ネタをばらして欲しくないなあ。」

「あはは。ネタか。いくら暗示かけても、練習しても、鬼艦長の前に出てきたら、頭が真っ白になりそうじゃないか。」

「うん、そうだね。でも、やっぱり、どこかで、お母さんの伯父さ

んなんだと思ってる感じがあるよ。」

「親しみがあるってことかい。」

「うん。鬼艦長だけど、レテシアお母さんのことをとて、愛しているってわかるんだ。」

ジリアンとカスターは感嘆の声を漏らした。そして、すこし安心した。レテシアがイリアと一緒にと言ったときから、二人は気が気でなかった。レインが快く思っていないことを感じていたし、自分たち自身も良い気持ちはしなかった。

カスター自身は、クレアの遺言であるロブとレテシアの復縁を進めるにあたり、イリアの協力が必要だと考えていた。イリアの本心は別のところにあるのではないかという疑心はあるものの、復縁を優先するべきだという気持ちは強かった。

ジリアン自体はイリアに対して関心がなかった。ただ、関わってはいけないという思いが強かった。

いざ、エアジェットに乗っていいとなっても、レインは尻込みしてしまった。ペアでの操縦でレテシアと一緒にになると、風車飛行をするのではないかという恐怖感が押し寄せた。風車飛行は見ている分には驚きと好奇心に満たされるが、操縦する側になると、それは体を酷使することになる。

「少尉、まさか、風車飛行しようなんて思ってたんですね。」

「え、どうして？してみたいと思わないの？」

「思わないですよ。目が回るじゃないですか。」

「目が回らないよう訓練するのよ。墜落しそうになったときに役に立つわよ。」

「墜落しないように努力します！」

「ふふふ。」

「え？」

「いやね。ロブと同じこと言っただから。」

キョトンとするレインに、レテシアは嬉しさでいっぱい笑顔を向

けて、操縦席に乗り込んだ。

「そ、そんなこと言われても……。」

嫌々ながら、仕方なくレインは操縦席に着いた。

その様子を遠くで眺めていたカスターにイリアが声をかけてきた。

「双子が操縦席に乗るみたい。」

「そんなにそっくりかい。レインは男の子だよ。」

「女装させたら、間違えられそうでしょ。」

「いいのかい？そんな普通に話しかけて。」

「ええ、もういいの。ここから去らなければいけなくなったから。」

「どういうこと？」

「グリーンエメラルダ号を落とす計画があるの。」

「え？墜落させるのか。」

「ええ。そのためにレッドオイルを手渡されたの。」

イリアはポケットから赤い小瓶を取り出し、カスターに見せた。

「レッドオイルって、このまえ……。」

「見せしめのための攻撃が起きたことは知っていますでしょ。あれは

皇帝排除派が敵対する一派に対して脅しをかけたの。」

「そんなことまで知っているのか。」

「グリーンエメラルダ号を落とすのは、皇帝排除派の計画だけど・

・。」

「けど？」

「本当に動かしているのは……。」

「誰？」

「内緒。」

「はあ?!」

すこしだけ、怒りがこみ上げてきたが、制止した。イリアのしたことは忘れていないし、許せない。これからすることも受け入れがたいことなのだろうか。

「そいつをあぶりだすのに、グリーンエメラルダ号を落とすのは不可欠なの。」

「犠牲にするのか。」

「ええ。」

「聞き捨てならない。」

「まあ、そこまで怒らないでよ。グリーンエメラルダ号もアレキサンダー号に同じく、古い機体で装備を入れ替えても限界なの。」

「そんなことになったら、レテシア少尉が悲しむだろう。」

「一時的なものよ。」

「そんな、他人がそう思おうが……。」

「復縁するためにも不可欠なのよ。」

「どうしてなんだ。」

「レテシアに帰るところは、スタンドフィールドしかないってことにしないとね。」

カスターは呆然とした。イリアの思考や発言がレインと同じものだと思えなかった。ジリアンも大人びていて生意気だと思ってはいたが、イリアはそれの上をいく。

含み笑いするイリアをみて、すこし寒気がしたとともに、クレアをすこしだけ思い出して思った。

（次に僕を利用するのはイリアなのか。）

司令室で風車飛行するひまわりをみて、ジリアンは想像していた。

「きつと、操縦席ではレインが叫びまくっているんだろうなあ。」

となりでアルドラー少尉がジリアンに相槌を打っていた。

「そうだね。通信からも叫び声しか聞こえない。レテシア少尉と操縦しているんだから、目がくらむこともないだろうに。」

「うーん、レインは操縦するより、アクロバットやっている方が体にあっている感じなのですよ。」

「はあ、ロブに似たのか。」

「さあ、それはどうでしょうか。」

「でも、レテシア少尉は楽しそうだよ。さっきから、ずっと笑っている。」

二人の後ろでハートランド艦長が咳払いした。

「遊びじゃないんだ。注意しろ、アルドラー少尉。」

「了解しました。」

太陽が空の中心で輝き、エアジェットのひまわりが回転し続ける。

グリーンエメラルダ号はタンクに日差しを当てて飛行していた。波打つ緑の液体にひまわりの翼から反射する日差しを受けて、きらめきを放つ。

レインは年甲斐もなく泣き叫び、レテシアは大笑いし続けた。アルドラー少尉の注意する通信も耳に入らず、楽しんでいるかのようだ。その様子を甲板で眺めるイリアは思っていた。

（今ある幸せを長続きさせるためにも、この空艇には落ちてもらわなくてはいけない。）

そして、イリアは司令室のほうに向いた。

（艦長、ごめんなさい。）

司令室から、レインとレテシアはエアジェットひまわりを見ていた。後方には、グレン少尉と鬼艦長が監視していた。

レテシアがレインに寄り添うので、レインは嫌そうに離れていこうとした。

「どうしたの？」

「え？いや、近すぎです。」

「いいじゃない。」

「良くないですよ。」

レテシアはレインの顔を覗き込み、様子を伺った。

「ねえ、レインは好きな女の子とかいないの？」

予期せぬ質問に、顔を赤くしてあからさまに反応した。

「少尉、そんな質問をいまずるんですか。」

「あら、顔が赤くなったわ。好きな女の子がいてるのね。」

「いえ、いてません。」

「うふふ。」

なにかうふふなのだろうと思い、レテシアを睨むことしかできなかつた。

「イリアはどう、普通の女の子なのだけね。」

「さあ、僕は近寄りたいてって思います。」

オブラートに包まないものの言い方で、すこし面食らった。

「そうね。それは周囲に対して警戒心が強いよ。怖い思いもしたしね。」

「警戒心・・・、そんな風に感じませんね。僕たちがひまわりで飛行しているとき、カスターと親しげに話しをしている姿を見えませんでした。警戒心があるように見えなかったです。」

他人行儀なしやべり方に辟易しそうな思いで、会話を続けた。

「そういうところが見えていたの？たいしたものじゃない。」

「はぐらかさないてください。イリアのことは少尉がいちばんわかってるのでしょ。何かたくらんでいるように思えて仕方ないのですよ。」

的を得た話のように思えた。知らぬはレテシアばかりなり。そういわれても仕方ないのかと、レテシアはため息つきそうな落胆した顔をした。

「イリアはいままでのお酷な生き方から開放されていないと思っているの。そのときどきで態度が変わるといっつか、違ってきているといっつか。」

あきれた顔でレテシアをみたレインに、ロブが言っていた「会えばわかる。」という言葉が繰り返し聞こえてきた。

突然振り返って言った。

「グレン少尉。ジリアンたちの様子はどうですか。」

「ああ、順調だよ。私語は一切ないけど、息がぴったりあっているかのようだよ。」

ジリアンは与えられた任務を純粋に遂行できる人間で、イリアにおいても同様だろうと思われた。

その二人とは対照的な二人がレインとレテシアだった。

レインが言わないとしていることは、この二人でのコンビはありえないということだった。

胸のうちに言い聞かせる思い。一人の女性として母親として一緒にいることができれば好きになれるかもしれない。しかし、今はハーランド少尉といち民間人で、いわば仕事の関係でもある。

大人になりきれしていない女性と、大人になりたいのになれなくて苦しむ少年との関係に、いまだ、一緒に成長したい願いでつながっていかうとしなかった。

「まだ、私たちって再スタートしたばかりなの。息がぴったり合うまでには時間がかかるかもしれないけど……。」

「時間はないと思う。無駄な時間を費やしたくない。」

レインは足早に司令室から出て行った。レテシアは悲しそうな顔で

後姿をみていた。

グレン少尉は啞然とした様子でみていたが、鬼艦長は咳払いをした。少尉はあわてて、エアジェットひまわりの帰還の指令を出した。

緑の奥深い森を抜けると、白い壁が数十キロにわたって連なる。壁の中には白くて丸い建物が数多く点在しており、ひとつの街がそこにはあった。規則正しい整然とした街並みは住んでいる人間が何者かであるかをあらわしているかのようで、待ち行く人々も同じ決まった白い服を着用していた。

街のはずれに門があり、そこで外への出入りを制限し監視し守っているようだった。

黒尽くめの男が許可を得て、門をくぐる。すぐさま、大きな白い建物のなかに入り、受付らしきところで書類を提出すると、係りのものからの指示に従い、いすにかけて待った。

しばらくしてその男を案内する白い服装の男が現れて、ふたりはその建物から出て行った。

二人が向かった先は、学校のような場所だった。そこには小さいな子供から青年ぐらいの者たちが学ぶために集まっているコミュニティーだった。

学ぶ内容、姿勢や態度は自由で、寝そべって本を読んだり、円陣を組んでトークディスカッションしたりと勉強する目的もとに好きなようにしていた。

二人はある少年を訪ねてきた。

その少年は白衣を着ていて、実験をしていた。白い服をきた男に声をかけられて振り向いた。

金髪で顔にそばかすが残る少年は、整然として答えた。

「ジョイスと名乗っていた者ですが、僕になにか御用ですか。」

「今は、レオン＝ゴールデンローブと名乗っております。」

「わたしはクレア＝ポーターさんから依頼を受けまして、あなたを迎えに来ました。」

その少年はしばらく考えた振りをして、白い服の男に目配せをした。「迎えにこられるのを待っていました。今しばらくお待ちください。用意をします。」

そういうと、少年はその場から立ち去った。

黒尽くめの男はいくら待っても、少年が戻ってこないので不審に思い、尋ねた。

「まだ、時間がかかるのでしょうか。」

白い服を着た男は、その場所に他の者がやってきたことを確認してから、口を開いた。

「あの少年はここにはもどってきませんよ。」

「いつたい、どういうことですか。」

「身に覚えのない人の名前で迎えにこられた場合は、身の安全を守ってほしいと前もって言われていましたからね。」

その言葉を合図に四方から白い服の男たちが何人が現れ、黒尽くめの男を捕らえた。

「おい、なにを言っているのだ。わたしは正式に書類を申請してジョイス、いやレオンを迎えにきたのだ。クレア⇨ポーターの依頼だといえは通じるはずなんだ。」

「それが、クレア⇨ポーターという名前ではないそうですよ。」

「何だと。」

「あなたはトラップにはまったみたいですよ。さあ、連れて行きなさい。」

「いつたい……。」

「あなたで3人目なのですよ。クレア⇨ポーターという名前で彼を迎えにきた人の数です。」

男の顔は真っ青になり、白い服を着た男たちに羽交い絞めにされて連れて行かれた。

少年は日差しの良く当たる庭に立っていた。空を見上げて、つぶやいた。

「クレアはもう、この世にいないというのに。あなたはわかってい

たのですね。僕の命を狙うものが尋ねてくることを「

第二十七章 黄金の紋章 1 (後書き)

レイン＝スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー) 15歳

ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の弟<従弟>・愛称ジル)
13歳

ロブ＝スタンドフィールド (主人公の兄<実父>) 30歳

カスター＝ペドロ (クルー。通信士。愛称キャス) 26歳

レテシア＝ハートランド (主人公の実母)

グレン (レテシアの幼馴染・グリーンエメラルダ号クルー)

ジョセフ＝ハートランド (グリーンエメラルダ号の艦長、レテシアの伯父)

クレア＝ポーター (医者、故人)

ウィンディ (クレアの恋人)

レオン＝ゴールドンローブ (ジョイスを名乗っていた。ウィンディの息子)

第二十七章 黄金の紋章 2

ジヨイスと名乗っていた少年レオンは友人に連れられて司書室に入った。友人はある本棚から一冊の本を取り出した。青いベルベツト生地で装丁されていた。机の上にその本をおき、開いた。

「僕が話していた、君にそっくりな人がここに、どう？」

「どう？と言われても……。」

レオンが開かれたページを見入ると、そこには確かに似た人物の写真が載っていた。金髪、そばかす、痩せ型の少年。しかし、その少年の頭には王冠が載っていた。目を見張って、本を閉じ、表紙を確認した。

表紙には黄金のエンブレムが付いていた。獅子が吠えている紋章である。

レオンは眉間に皺を寄せ、また先ほどのページを開き確認した。王冠をかぶった少年の生誕と逝去の日付を。

（合わないな。）

「ジョセフ・デ・ドレイファス、時の皇帝でしょ。僕が似ているのというのはなにか偶然でしょう。」

「でも、僕は君のその毅然とした態度、姿勢が普通の人と同じだと思えないんだけどよね。」

「買いかぶりすぎだよ。」

「そうかなあ。」

「前は、いたずら好きなやんちゃな頭の悪い子供だったのだから。」
レオンはページを何枚かめくった。戴冠の少年が次第に成長していく姿をみていく。威厳をもち厳かな面持ちに変化していくさまにひきつけられていく思いがしたが、もっと惹かれる写真が出てきた。
マルティン・デ・ドレイファスの少年時代の写真だった。父親の少年期に同じく、金髪・そばかす・痩せ型だった。生年月日を確認して、吐きそうになった。

「今の皇帝の少年期にもそっくりだね。」

本をあわてて閉じて、青い顔になった。レオンの頭によぎったのは、自分が命を狙われる理由。そして、今の皇帝に男子の跡継ぎがないことは知っていた。

「ま、まさか。」

「ど、どうかしたのか。」

「いや、大丈夫。」

その場を取り繕って、友人に心配かけないようにした。

レオンは不憫なことに生まれてきた理由を知っていた。知り得てなお、母親のウインデイのそばにいたいと言った。どんな境遇にさらされ様が自分の生まれてきた意味を見失わないためには母親のそばにいるしかないと思っていたようだ。シヴェジリアンドの地でレットドオイル爆弾攻撃のあと、別れたのは自身が大人になるための儀式だと捉えていた。その答えにたどり着くまでに、このトランスバランスという宗教団体のコミュニティで自分と葛藤してきた。瞑想や体力増強など、自身を強くしていくための修行や体得はうつつけだった。

逃げるばかりが身を守る術ではないだろう。もっと、堂々と生きていくために、見識は広げていくべきだと考えてきた。その時期がくるのは、クレアの使者が迎えにくることだと信じていた。

信じがたい情報に振り回されないように、今はその可能性も視野にいれることだけにしようと、友人の言葉を受け止めた。そして、よりいつそう、思いを強くした。

（クレアが導いてくれるものに乗っかっていこう。）

「レオン、君に迎えがきたら、本当にここを出て行ってしまっつのか。」

「ああ、最初からそのつもりでここにいてたんだよ。」

「先導師は君の意思を尊重してたけど、内心は君をそばにおいておきたいみたいだよ。」

「その気持ちはとてもよくわかるよ。惜しみなく教授してくれたし、

親のように叱責してくれた。ほんとうに僕が変わることはできたのは先導師のおかげだと感謝している。」

「だったら、なおさら、その恩返しに……。」

「でも、それがすべてだとは思わない。僕は最初からここにどまるつもりはなかったんだから。去るときは去る。」

「なんだか、寂しいことを言うんだね。」

「ほんと、ごめん。」

取り出した本を元に位置にもどして、ふたりは司書室をでた。すると、男性が一人立っていた。

「こんなところにいたのだね。探していたんだよ。」

「先導師、なにかあったのですか。」

「レオンに來客だ。今度は本物かもしれないな。」

「そうですか。本物だといいいのですけど。」

友人はレオンの手を取り、握手を交わした。

「今度こそ、さよならだね。」

レオンはうなづくだけだった。

そして、先導師に向かって言った。

「確認を取ってからだよ。」

グレーのマントを着た男がトランスバランスの受付を済ませ、案内されて建物の中を歩いていった。

辺りを見まわすことなく、案内する男性の後頭部みていた。

その様子をガラス張りの待ち合わせ室でみていたレオンは、何かを感じた。

（クレアが好みそうな男性だな。）

待ち合わせに入室して、レオンを紹介された男は、自己紹介した。

「ジェフ」マックファットというんだ。クレア」テレンスの依頼で迎えに来たよ。」

レオンは満面の笑みで返事をした。

「お待ちしております。旅立つ準備はできております。荷物を取

ってまいりますので、もうしばらくお待ちいただけますか。」

「ええ、もちろんだよ。」

「よろしく願います。」

手を出されて、ジェフはレオンと握手をした。そして、レオンが待合室を出て行く姿を見守っていた。ロブから聞いていた話の少年とは別人だったので、すこし戸惑った。

ジェフがレオンを迎えに来たのは、セリーヌ・マルキナの指示だった。クレアの依頼だということだったが、クレア・テレンスの名を持ち出すように言われたことに意義を唱えた。ロブがその理由を述べたので、納得した。

「テレンスという名は、クレアさんの義父さんが開いていた診療所の後を継いだ方の名だよ。」

あえて、ポーターと名乗らない理由を、その後、レオンから聞いた。そして、面食らった。

「クレアさんはそこまで考えていたのか。」

「おそらくは、ですね。」

死してなお、生きているかのように、その指図に従う自分たちが手のひらで動かされているように思えた。

そして、レオンはジェフにつぶやいた。

「おそらくは、母がなぜ強姦されたのか、理由を知っていたのだと思います。」

ジェフは不憫だと思いつつ、レオンに生い立ちを聞くことにした。

青い空から太陽の日差しが降り注ぐ。海上を飛行するグリーンエメラルダ号はより一層輝きを増して紺碧の輝きを放っていた。

キラキラした目の輝きで見つめられていることに気がついてたジリアンはその相手を避けていた。避けられていると知らない相手は、タイミングを計っていた。二人の様子があからさまに見えていたカスターは珍しそうに眺めていた。距離が縮まるとジリアンが気づいて広げていく。それは甲板で繰り広げられていて、エアジェットひまわりを操縦していたレインもその様子を不思議そうに見ていた。意を決してその相手はジリアンに声を掛けた。

「ねえ、ジル。あなたは知っているかしら。」

「何をですか、少尉。」

「レインが恋をしていることを。」

その先の言葉は出ない。呆れた顔を見られないようにすることに従事した。しかし、レテシアは執拗にジリアンの表情を確認しようとしていた。

「なにか、知っているのね。」

「いま、そのような話をしている場合ですか。」

「だって、食事時だと、レインがいるし。本人は答えてくれないし。」

「レインに聞いたのですか。」

「え、だめなの？」

「デリカシーがないのですね。」

開いた口がふさがらない思いがした。少々後悔気味に、落胆して見せた。

「レインと少しでもお話がしたくて。恋をしていら、力になりたくてね。」

「レインは女の子じゃないんですから。」

「それはそうなのだけれど。ロブとはそういうお話したりしないでしょう。」

「ジリアンが無言で甲板の掃除をしていると、二人の後方からカスターがやって来た。」

「それでもないですよ。」

「あら、キャスはなにか知っているの。」

「レインが話さないものを話すわけがないですよ。でも、ロブはロブでちゃんと父親やっていますよ。」

「レシアは少々意外だというような表情をして、考えあぐねていた。」

「エアジェットのことでは思うようにコミュニケーションが取れなかったんですね。」

「ご明察です。操縦を楽しんでくれると思っていたのに。」

「ロブ兄さんが徹底的に矯正したのです。」

「矯正？」

「ええ、エアジェットの操縦は一つ間違えれば命取りですし、楽しんで操縦しないようにと矯正したのです。」

「そんな、かわいそうに。」

「ひまわりの風車飛行は操縦能力としては高度だと思います。しかし、危険性が高いので普通にやるべきことではないでしょう。僕は少尉の飛行している様子を見て、ロブ兄さんの考えに納得しました。」

「ジリアンの言葉には正当性が含まれていて、耳に痛い思いがした。」

「おそらくは、ロブ自身がレシアに忠告しておきたかったことだろうが、できないでいたことを今、身に染みみた。」

「もし、レインの事を心配していたら。」

「何？ジル。」

「女の子にはよくモテルんですよ。女の子を好きになるということがあまりよくわからないと思います。」

「え?!」

「レシア以外にカスターも驚きが隠せなかった。ジリアンの意外な

発言は的を得ているように思えなかった。

「それは、モテ過ぎて誰を好きになっっているかわからないことかしら。」

「いえ、好きになることに罪悪感を持つてしまうのです。」

「はあ。」

カスターは感心していた。

確かに現状では誰の事を好きでいるのかはわかっている。しかし、モテ過ぎるところから、好きになってしまう相手と別の相手を傷つけてしまうことに罪悪感を持つてしまう。

「僕は学校にいてるときから、そんなレインの様子を見てきました。それはたぶん、今も変わらないでしょう。」

そういうと、レテシアたちに背を向けて、掃除を終えて立ち去った。

「ジルって、大人びたことを言う子なのね。」

「ええ。正直面食らう時もあります。」

「人を傷つけないで恋はできないわ。」

悲しそうに言うレテシアの顔をカスターは眺めていた。その言葉の裏に、ロブ以外の男性の存在があるのかと考えていた。ロブにレテシア以外の女性の存在には至らなかったからだ。

レテシアは食事時に、レインの隣に座った。レインは露骨に嫌な顔をしたが、レテシアは笑顔を向けていた。

「ここの食事はおいしいでしょう。ビッグママの料理は栄養満点で愛情がこもっているのよ。」

ジリアンやカスターはレテシアが何をこれから言おうとしているのかわかっていた。

「ええ、とてもおいしいです。ハートランド少尉。」

相変わらず、冷たいもの言いどころが折れそうになった。

食事を終える前に、レテシアはポケットから何かを取り出して、レインに見せた。

「わたしの大事なものの一つなの。」

それは黄金の獅子に蜂が重なったエンブレムだった。

「これは何ですか。」

「皇族専用空挺部隊ホーネットのワッペンなの。」

手渡された物を手のひらで見入っていて、レインは雷雨の夢を思い出していた。

「蜂を擬人化したマークなら、覚えてますよ。」

「アナペのことね。」

「アナペ？」

「ホーネットのマスコットキャラクターのことをアナペと言っていたの。ホーネットは解散してしまったのだけれどね。」

「ホーネットはパイロットにとって憧れだったのでしょうか。軍では良く知らなかったのですが、馴染みのパイロットから聞きました。」

「ええ、そう。キャスが言うように、わたしは憧れていて、ホーネットに入隊させてもらったわ。」

レテシアは、入隊したいきさつを語って聞かせた。

レテシアが皇帝と初めて会ったのは、スカイロードの入隊試験だった。

叔父の艦長のコネで入隊することは決まっていたが、試験は受けたいと言い出した。成績は普通だったものの、楽しそうに操縦し飛行している姿が愛らしく思えて、周囲を魅了した。皇帝も心を奪われていたが、皇后はすでに妊娠しており、女皇子であることも判明していた。もうすぐ生まれてくるわが子の警護にうつつけだと思いい目をかけておこうと考えていた。

スカイロード入隊直後にレテシアは兄を失い、皇帝は産後の皇后を失った。二人の距離は縮まることがなかったが、皇帝自身はひそかに想いを寄せていた。おそらくはレテシアがどの男のものにもならないと高をくくっていたのだろう。しかし、意に反してレテシアはロブと結ばれて子をもうけた。

嬉しさを満面の笑みで表現するレテシアに対して、皇帝の言葉は祝いを口にしても眉間に皺を寄せ青い顔をしていた。このとき、初めてレテシアは皇帝の気持ちに気づいたのだ。

ロブと結ばれることで誰かを傷つけることになると思ひもしなかったことと痛いほど感じていた。

「このエンブレムは皇帝からいただいたの。私が皇族専用空挺部隊ホーネットに所属していたことの証よ。」

レインはフェリシアからもらった時計を思い返した。SAFが爆破したことで失っていた。

「思い出の品は亡くしてしまっても、心の中にのこっているものですよね。」

悲しそうにつぶやくので、レテシアは不憫に思った。

「なにをなくしてしまったの？」

「思い出の品ではなくて、思い出もなにもない品物でした。僕に

は必要なかったのでしょう。」

理解不能な面持ちで見つめるレテシアの視線がつらくなり、首もと
のスカーフを手にとつて言った。

「少尉からいただいたものは大事にしますよ。」

胸のポケットに隠すように、エミリアから届いたスカーフを仕舞い
込んでいた。

「少尉が身に着けていたことを僕は覚えてました。思い出の品物で
す。」

「ありがとう。大事にしてくれていて、嬉しいわ。」

レテシアはすこしだけ心が温かくなった気がした。いくら話をして
も、なくした品物のことは聞かせてはくれないだろうと思つてあき
らめることにした。

「あ、そうだわ。スカーフで思い出したの。」

周囲はレテシアの様子に目を見張った。

「もうすぐ、スカイロードの卒業式が行われるの。卒業生代表とい
う立場でゲストとして招待されているのだけれど、あなたたちも一
緒に行かないかしら。」

「え?!」

「キャティナ・マウンターサ・ロツソ駐屯地で合同訓練を受けたの
でしょ。教官がぜひにと連絡をいただいたの。」

ジリアンはレインの顔をうかがった。レインはジリアンとカスター
が察したとおり青い顔をしていた。思い出していたのはエミリアか
ら平手打ちを食らったことだった。

「皇帝もレインの成長した様子を伺いたいとおっしゃっていたそう
なの。」

「返事はすぐにできませんが、いいでしょうか。」

「え、いいわ。でも、3日後には連絡しないといけないの。」

「それまでに決めておきます。」

レインは顔が一変していた。青い顔から何か意を決したようにはっ
きりとした口調で述べた。

ジェフとレオンはトランスバランスのコミュニティを離れ、空港に向かっていた。ジェフが軍のパイロットだと聞かされて、空挺で目的地に向かわないのか聞いてみた。

「軍も出入りするドックに向かう予定だが、そこへわざわざ君を連れて乗り込むわけにいかないんだ。誰が味方で敵なのか把握していないからだ。」

ジェフのなかでテオ・アラゴンが除隊したことでこちら側につかなかったことは知り得ている。こちら側でない場合、敵だと決め付けるわけにもいかない。そのような男ではないことを知っているからだ。

空港の一般ゲートで半分マスクをつけたグレーのマントの男が立っていた。レオンは近づいてようやくロブだと気づいた。そして、S AF 爆破の事件が凄まじいものだったと想像できた。

「君がジョイスか。ずいぶん変わったものだな。」

「ご無沙汰しました。ロブ・スタンドフィールドさん。」

「堅苦しい会話はやめておこうか。」

「そうですね。クレアが嫌がるでしょうね。」

二人は合わせるように微笑した。

「ジェフ、これからどこへ向かうのですか。」

「ガラファンド・ドックだよ。スタンドフィールド・ドックと違って軍の色が濃いところだ。そこでレインたちもしごかれたらしい。」

「シモンは俺にとって知人でもある。それに……。」

「それに？」

「クレアさんの養父ダン先生の母親が近くにいてる。グリーンオイル生産の資格を持っている人でもある。」

「顔見知りですか。」

「ああ。苦手だけどな。」

「あまりあいたくない人物みたいだな。」

「察しのとおり。忌み嫌われている。」

「コーディはそこへ向かっているらしい。クレアさんになにかあったら、そこへいくように言われていたとセリーヌが話してくれた。」

「なんだ、アンの話は聞いていたのか。」

「まあね。しかし、ロブとのことは聞いていないぞ。」

「当たり前だ。」

レオンは二人の会話に「クスツ」と笑った。ふたりは照れくさそうにして、歩みを速めた。

ロブ、ジェフとレオンの三人がガラフランド・ドックに到着すると、シモンが出迎えてくれた。

痛々しそうにロブを労わると、気を使わないようにと促した。

「そのうち、自分の顔をのっぺらぼうにしまっくんじゃないかと思ってしまうな。」

「自分の顔を忌み嫌ってですか。そんな意固地な男ではないですよ。」

「自分を痛めつけることで、何かを得ようとしているだろう。」

シモンの言葉は胸に痛かった。かける言葉は優しさが混じっている。周知の仲であればこそ、理解しあえる会話で、ロブは申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「俺は何かを得ようとしているわけではないです。」

「そうかな。」

取り繕うことができなくて困ったロブにジェフが助け舟をだし、自己紹介した。

「すまないな。客人を放っておいてしまった。私はガラフランド・ドックのオーナーだ。シモンと呼んでくれ。」

「お噂は重ね重ね。」

「こつちもだよ。ジェフ。除隊したことは残念なことだが、やり遂げたいものがあるのなら、全うしてくれ。」

「もちろんです。それから、こちらが、レオン「クレイブ」です。」

「はじめまして、レオンです。よろしくお願いします。」

「よろしく、シモンだ。君はレインやジリアンを知っているのかな。」

「

「ええ、友達です。」

「ジリアンと同じ年齢か。」

「いえ、ジリアンよりひとつ上です。」

「ここでは長居するのかな。」

レオンはジェフをチラ見したが、ジェフは首を振った。

「レオンがどれだけ滞在するのか、わからないな。俺自身は長居できない。」

ジェフは辺りを見回した。

「アラゴン少佐は？」

「除隊したからテオでいいだろう。夕方にはここに来る予定だ。」

「シモン、コーディはまだ来ていないのか。」

「いや、来てるよ。ここには寄らずに、アンのところにいる。」

「そうか。俺はコーディ次第だな。」

3人がいつせいにレオンの顔をみるた。

「あ、僕はその……。あ、そうだ！スタンドフィールドには行きたいです。」

ロブは首をかしげて、悩んだ。

「帰りたくないわけじゃないだろうな。」

ジェフの一言が耳に痛かった。

「悲しい土産をぶらさげていくのは辛いな。これが初めてじゃないだろう。」

シモンはロブの背中を叩いた。

ジェフの頭によぎったのは、ロブに兄がいたこと。自分だけが助かってもどつてくることの辛さはたとえようがないことを承知していた。

「コーディなら、クレアさんのことをいろいろ知り得ているだろう。この際何でも話をしてもらいたいものだ。」

「まあ、そう、急かして問い詰めることもないだろう。」

「そうそう、クレアさんがロブに語らなかつたことはロブ自身の痛い性格の賜物なわけだし。」

「言われなくても。しかし、何も知らないままではいられない。」
大人の会話についていけなくて、苛立ちを感じていたレオンだったが、口を挟める話題になつたことにやりと笑った。

「コーデイは僕のことも何か知り得ているのでしょね。」
レオンがここにいてることをなんとなくわかってるのはロブだけで、ジェフはマルキナの指示通りに動いたまだった。ましてや、シモンはわかっていない。

「コーデイを知っているのか。」

シモンが尋ねるとレオンはシヴェジリアンドの地のことや素性を語った。

「そうか、クレアの・・・。」

「それは俺も始めて聞いたな。」

「そこまで話す必要はないかと話さなかつたんだが。」

「僕自身はなぜ、母であるウィンディが僕の命が狙われると知っていたのかということと、離れてしまったのかということを知りたいのです。」

「テオもいろいろとSAFの情報を収穫しているらしい。その手の話は知らないかもしれないが知恵ぐらいは貸してくれるだろう。」

「クレアさんのことをまったく知らないわけじゃないですからね。」

「まあ、難しいはこれまでにしておこう。ご馳走を用意させたから、たくさん食べて休養をとってくれ。」

「ありがとうございます。では遠慮なく。」

シモンに促されて、来客用の部屋の向かおうとした。

レオンはシモンをお願いを申し出た。

「少しの間になるかもしれませんが、エアジェットのことを勉強したいのです。教えてくれますか。」

「ああ、いいよ。ここには私以外に、技術的な人間はたくさんいるから、遠慮なく質問して教えてもらおうといい。」

「ありがとうございます。」

レオンは頭を下げて、足早に去った。

「ダンに息子がいたら、あんな男の子だったろうか。」

レオンの後姿をみながら、シモンは思った。

レインは眠れない一夜を明かして、尚、茫然としていた。ジリアンとカスターはその様子を見守るしかなかった。

「もし、レインが行くと言ったら、僕たちも行くのかな。」

「ジル、僕は行かないつもりなんだ。」

「キャス、どうして？」

「おそらく、レテシアはイリアを置いていくだろう、だから。」

「いつの間に、そんなに仲良くなったんだよ。」

「仲良くなったわけじゃないよ。ただの話し相手だよ。他のメンバーとは馴染めないみたいだし。居候のみとしてはだね・・・。」

「いいよ、好きにしたらいい。どうせ、行くことになる。」

「どうしてさ。」

「ハートランド少尉がいなくて、グリーンエメラルダ号にいてる意味が僕たちにはないような気がする。」

「まあ、もつともな意見かもしれないが。しかし、不憫だな、レイン。」

「今回はかりは、言葉をかけてあげることができないよ。」

「ああ、冷静な判断の保護者としてだね。」

ふくれつつらでジリアンはカスターにパンチするしぐさをした。

その二人の様子をみていたレインがクスツと笑ったのを二人は不思議に思った。今まで見たことの無い憂いでいた笑顔の一面と清しささを備えていた。

「僕決めたよ。スカイロードの卒業式に行くよ。」

「ええ?!」

「そして、はじめをつけようと思うんだ。僕の心に。」
カスターは心の中で思った。

(こっぴやって、この子は大人になっていくんだな。)

ガラフアンド・ドックに到着したテオは遠慮なく夕食を食べ始めた。ロブたちが声をかける隙すら与えずに、豪快に食して、ひとりで勝手にしゃべりだした。

「クレアはいたるところに情報網を敷いていたみたいだ。俺みたいな情報収集にうとい人間がクレアの名を口にする面白いくらいに情報を入手できた。」

ジェフはテオに聞こえないようにぼやいた。

「ええ、そうでしょうとも。」

薄笑いを浮かべて話を聞いていた。

レオンは最初から大人の会話についていけないと知っていたので、テオと同じく、周囲のことを気にせず夕食を食べていた。

「ところで、そのガキは、何だ。」

ジェフがレオンの紹介をしたが、レオンはテオにお辞儀を少しして、すぐ食べ物に集中した。

テオも気に留めることなく話の続きを始めた。

テオはまず、ジェフに聞かせても大丈夫な情報を口にした。

「アルバートが二重スパイだったんだ。」

アルバートはグリーンオイル製造会社の手管でジョナサンの見張り役としてメンバーに加えられたとのことだった。クレア自身は気づいていたらしく、アルバートの家族を調べていた。グリーンオイル財団第六秘書のセリーヌ・マルキナに調べさせると漏れてしまうことを避けて、医療学園時代の知り合いに依頼していた。果たして、アルバートの家族である両親と以前知られていなかった幼い弟がグリーンオイル製造会社の手のものに監禁されていた。

テオはそのことを知り、軍関係者以外の強者を揃え、救い出した。

「アルバートを忍びこませた理由がもうひとつある。」

「セシリアの子のことか。」

ジエフはこのことを知らなくて、このとき初めて知った。そうして、ようやく皇帝排除派の狙いを理解できたと言口にした。

「正体がかめていない以上、知ったところでこっちとしては皇帝排除派の動きを知ったぐらいでしかないでしょう。その子をどうしようということはないと思います。」

「もちろん、それは想定範囲内だから、話せたのだから。」

つづけて、テオの口から意外な情報を知り得たと言い出した。

「宮殿のほうで妙な動きが出ている。これは俺が作った情報網から仕入れたものだ。」

「妙な動きとは？」

「皇帝に影武者がいて、ほとんど陛下自身が宮殿にいないということだ。」

皇帝に影武者がいることはクレアも知っていたとのことで、ジエフもロブも意外ではなかったが、次の言葉にはみんな驚いた。

「皇帝にご落胤がいるらしい。」

「え！？」

「ブホッ！！」

レオンは無理やり押し込んで口にしたものを吐き出した。

「ご、ごめんなさい。はしたないことをしてしまいました。」

真っ赤な顔で口を押さえて、謝り続けた。

テオとロブは気にしていない風だったが、ジエフはレオンの様子を気にかけた。

「レオン、命を狙われている理由を知りたがっていたね。」

ジエフの言葉にロブは気づき始めた。

レオンは驚いた様子を隠すことができず、背筋が凍る思いがした。

「クレアが気にかけていた少年だ。何か理由があるのだろうか。」

テオはレオンににじり寄った。

「隠しても、仕方ないですね。」

胸をなでおろすように息を整え、レオンはトランスバランスでの友人のことを話した。

「陛下がそのようなことをするわけがない。」

「もちろん、尊敬する皇帝陛下がそのような不埒なことをするわけがないですね。」

ジェフは嫌味っぽくいうので、テオはテーブルをこぶしてたたきつけた。

「おい、ジェフ、煽るなよ。」

「煽るなって、ロブ、それで制止したつもりか。」

「いえ、すみません。」

大人の会話に冷静な判断をしようとレオンは立ち上がって言った。

「コーディなら、知っているでしょう。ウィンディやクレアがそのことに気づいたとして裏づけがないと信じるわけもないでしょうから。」

「確かにそうだ。」

落ち着いて席についたテオは、レオンの顔を凝視した。

「で、その情報の内容はどのようなものだったのですか。」

ジェフから話を向けられて、テオはたじろぐレオンをみながら、飲み物を口にした。

「影武者が陛下を脅している内容を立ち聞きしたらしい。その内容についての真意は俺自身信じがたいのだが。」

「狙いは何でしょうか。」

「影武者の狙いか。」

「もし、それがグリーンオイル製造会社の手管なら、国を陥れることも可能でしょう。」

「いや、その反対かもしれない。皇帝排除派を動かし、いずれは退位させるのかもしれない。」

「フェリシア皇女を未熟なままに譲位させるということでしょうか。」

「皇帝排除派には皇女殿下の婚約者を抱きこんでいるという話がありますよ。」

「まあ、その辺はジェフから情報を得たいと思っていたんだ。」

レオンはようやく、大人の会話についてこれるようになったと思いはじめ、自分で要約していた。

皇帝、皇帝排除派、ジェフのグループ、グリーンオイル製造会社の四つ巴。レオンのなかで、目の前にいていてテオとロブはどうなのだろうと考えていた。

しばらく、沈黙がつづく、ジェフは口火を切って、話を終わらせようとした。

「自分たちの利権と強欲が絡み合っているのは目に見えるようだが、レオンのような少年たちを巻き添えにはしたくないものだ。もちろん、巻き添えにするつもりもなく、以前のレッドオイル攻撃のよくなことが起きないように組織的に動いているのがわれわれの目的です。私は明日の朝、ここを発ちます。」

「もう、これ以上は成すことはないということか。」

「ええ、そうです。」

レオンは寂しそうな顔でジェフを見ていた。

「そんな悲しそうな顔をするなよ、レオン。」

「ジェフにはエアジェットのことを教えてもらおうと思ったのです。」

「僕なんかより、的確に指導してくれる御仁が目の前にいらっしやる。」

笑いを堪えながら話すジェフをにらめつけながら、テオは「承知した。」と答えた。

「世話になった、ジェフ。」

「ああ、いろいろと気をもませてくれた。」

「どういう意味だ。」

「いや、自覚がないなら、仕方ないな。レテシアを悲しませるようなことをしないで欲しいということだよ。」

ジェフの言葉にロブは無言で応えた。

食事を終えて、ジェフが部屋に戻るレオンに声をかけた。

「夜の散歩にでもいかないか。」

「今からですか。」

「ああ、シモンに頼み込んだ。エアジェットで散歩だ。」

レオンは高所恐怖症だったが、トランスバランスのコミュニティにおいて克服していた。しかし、夜の飛行は想像にできなかった。冷や汗をかきつつ、引きつった笑顔で応えた。

「ぜひ。」一緒に緒させてください。」

第二十七章 黄金の紋章 7

ドックから飛び立つときは、周囲がライトアップされて高さが強調されているような気がしてめまいがしそうな気がした。

「大丈夫か、鳥肌がたってるじゃないか。」

「え?!」

レオンがジェフと一緒に乗ったエアジェットは一人乗り用で、ジェフの前に座るしかなかった。

「首筋に鳥肌が立っているんだよ。」

ゆっくりと深呼吸をして、自分に「落ち着け。」と言いきかせた。

トランスバランスで克服した高所恐怖症は建物の高所で、飛行の高所とはわけが違って知っていることを知った。

しかし、飛び立つと、月明かりに照らされた海しか見えず、高さあまり感じられなかった。旋回すると、海岸にちらちらと瞬くネオンが見えた。闇夜に輝く光にしか思えなかった。ジェフは低空で海上を飛行した。

「実は除隊してからの久々の飛行なんだ。これでも俺は結構緊張しているんだ。」

「え、そうなんですか。でも、落ちたりしないですよね。」

「さあ、どうかなあ。」

「そんなあ。」

わざと傾けて、翼を海につけたりした。海水がはねて操縦席のガラスに飛び散った。海上を飛行していると、船に乗っている雰囲気があった。スピードが速く、気持ちが高揚していった。

レオンは月を見上げて言った。

「僕はいつも、ウィンディという月明かりを目印に、闇夜を生きてきました。今はありません。他の月明かりを見つけることができたからです。」

「他の月明かり?」

「僕だけの目的を持った生き方がいまの僕の月明かりです。いろんな人の力を借りて輝いていて、闇夜でも道に迷うことはありません。」

「ジェフはレオンのことを不憫に思っていた自分を恥じる思いがした。自立していこうする少年の姿に微笑ましく思った。」

「ジェフ、ひとつ聞きたいことがあるのですが、いいですか。」

「なにかな、俺にわかることがあれば、答えるよ。」

「なぜ、僕は命を狙われるのでしょうか。命を奪ってなにか得ることがあるのでしょうか。」

「俺は、その、レオンの命を狙われているとは思っていない。」

「誘拐ですか。」

「そうだな、誘拐して監禁、あるいは懐柔して利用するという感じだろうか。」

「では、僕を利用するとして、何を得ようとしているのでしょうか。」

「利権かな。」

「利権ですか。自分たちを優位にするための特権ですか。」

「大人の会話を聞いていてわかっていると思うが、自分たちを優位にしようとするのはいろんな主旨でうごいている。中心的な存在は皇帝だが、その反対派、または枝葉する派閥と言った具合に多種多様にある。」

「命を狙われていると思っっている理由があります。ウィンディは僕の命を狙われていると思って、僕を遠ざけようとしていました。」

「でも、なぜ狙われているのか知らなかったと思うんだ。」

「僕が生まれてきてはまずいからじゃないですか。」

「そこには大きくなにかの働きかけがあったと仮定して、答えにたどり着くはず。」

「シヴェジリアンドの地がレッドオイルの攻撃を受けるということになったと僕は考えました。」

「たしかに一理あるかもしれないが、レッドオイルの大義名分はテ

口工作をはかる輩の征伐になっている。と言っても、君にはまだ理解できないかな。」

「そうでもないです。戦地や難民キャンプに幾度となく住み着いていましたから。」

「レッドオイル攻撃の目的が君だけではないと俺は言っておく。君が知らない事を俺がいろいろと話すのもなんか違う気がするんだ。」

「話せない内容があるのですね。わかりました。ジェフの胸のうちを察して、それ以上は聞きません。もうひとつだけ、お聞きしたいんですけど、いいですか。」

「いいよ。」

「どうして、人の命を奪うという争いが起きるのでしょうか。」

「軍人だった俺に、そういうことを聞くんだな。」

「先導師にも同じ質問をしたことがあります。でも、じっくりきませんでした。」

「俺の見解で物を言わせてもらうと、生きているからだ。」

「生きているから?」

「ああ、人は生きている。一人では生きていけないものなのだが、生きていると同じくらいに死への恐怖もある。意識できていないところで、生きることの執着心イコール死への恐怖感がある。それは他のものを排除しようとする動きにもつながると思うんだ。」

「それって、間違っていますか。」

「間違っている?他のものを排除することをかい?」

「ええ。」

「間違っている、間違っていないなんて、判断なんて必要としない。だから、人が人の命を奪うんだ。」

「なるほど、判断なんて必要としないからですか。」

「生きているという実感が無い者は命を奪わない。生きている意志をなくして人の命を奪おうとしていると主張してもそのこころの裏側には生きる意志が強いと思う。黒衣の民族と対峙して攻撃したことがあるが、人の命を奪うということは自分の命を守ることになる

のだと思っただ。」

「僕自身はいままで命を奪われることは怖いと思いませんでした。ウィンディが僕を失うのを恐れていたんだと気づきました。だから、命を奪われる理由、利用される理由を知って、もっと自分の身をまもり、ウィンディを安心させてあげたい。」

「そうだな、自分の身を守る方法は、相手を知ることだからな。」

「ありがとうございます。なんか、すっきりした感じがします。」

「これからが、本当に大変なことになると思うんだ。知ることですむことにもなると思うが、覚悟はできているんだな。」

「はい。」

ジェフは操縦桿を思いっきり引き、急速上昇した。

「うわぁっ」

レオンはジェフの腕を握り締めて、重力の強さを耐えた。ある程度上空にたどり着くと、旋回をつづけた。

「目が回ってしまいますよ、ジェフ。」

「あはは、どこに月があるか、しっかりみているよ。」

レオンは片目をあけて、月を集中してみている。回転するなかで月が一点して見えてきた。

「あ、目が回らない。」

ジェフはレオンの中に揺らぐことのない心の軸があると関心をした。いろんな辛い経験があって少年が強い人間に成長していくのだと実感した。

レオンはジェフと別れの挨拶をすると、笑顔で握手をした。ロブはジェフを抱き閉めると、「今まで、ありがとう。」といつになく、しおらしく言葉を口にした。照れくさを隠しようがないしぐさで片手で顔を覆い、みんなに手を振った。ジェフの姿が見えなくなつて、レオンの目から涙がこぼれた。

「もう、二度と会えないわけじゃないんだ、泣くなよ。」

「そうでしょうか。僕は会えない気がして仕方がないのですよ。」

「俺もそう思う。もともとつながりのある男だっただけに、概念の違うもの同士というのがあるから、会えない気がするんだ。」

レオンとロブの二人はテオの顔を見ていた。シモンはため息をつきながら、二人の肩に手をおいた。

「たしかに、動向はちがうかもしれない。敵対する者同士であつたとしても生きていれば必ず会う。お互いを引き裂くものがあつたとしても、友達であつたこと、つながりがあつたことには変わりはないだろう。」

安心感を得て、笑顔になつたとき、テオの顔には疑心の表情がにじんでいた。

「ジェフが何を考えているかわからない以上、何をしでかすかと信用できない部分がある。それはロブがなにをしでかすかわからないのとわけが違う。」

意味の理解できないレオンが不思議な顔をするのに対して、ロブは嫌な顔をするしかなかった。

「俺はジェフを信じるよ。彼らの動向に賛成するかしないかは今、示す必要がないと思うんだが。」

「そうだなあ、テオは全体を良く見えていない。見えるようになる」と自然とわかるだろう。」

「軍人でないシモンに言われるとは思わなかつたよ。」

「今は軍人じゃないだろ、テオ。」
シモンは会話を切り上げようというしぐさをしてその場から立ち去った。

深い深い森の中へエアバスが飛行していく。行き先はアニー＝ポーターのところ。

ロブはあまり気乗りがしない。アンから罵倒されると思っていないからだ。レオンも浮かない顔をしていた。覚悟はできているといっても、コーデイがどこまで話してくれるかわからないからだ。口にしたことはただの仮定でしかない。コーデイの口からウィンディが確信していることを聞くことが確信につながると思っている。しかし、コーデイ自身は第三者でしかない。クレアから聞いたとしても、クレア自身も第三者だ。ロブにそれとなく、ジエフに言われた「俺の口から話せない。」ということを聞き出そうとしたら、アニーの家についてから話そうと言われた。

アニーの家に着くと、元気な女の子が小さな玄関から出てきた。

「いらっしやいませ。どうぞ、中にお入りください。」

面を食らった一行だが、アニーの孫がいてることを聞かされたのを思い出して、納得した。

「アンはいてるかな。わたしはテオ＝アラゴンだ。」

「ええ、いますよ。中にお入りください。」

大きな体を曲げるようにして、玄関の扉をくぐり、中へ入っていた。

客間に通されると、アンが車椅子で部屋の奥でみんなを待っていた。

「ご苦労さん、待ちかねたよ。」

テーブルに両手を組んで下からのぞくように見上げていた。睨んでいる目線の先にはロブがいた。

「ご無沙汰しています。」

「ご無沙汰だな。お前さんが育てた割りに素直な良い子だったよ、レインは。」

ほめられた気がしないロブは頭を下げるしかできなかった。
にっこりと笑顔を傾けて紹介してもらうのを待っていたレオンの後
ろから声が聞こえた。

「こんにちわ。ロブさん、ご無沙汰しています。」

コーデイが部屋に入ると、レオンは後ろを振り返った。

「ジョイスさん、来ていたのですね。お元気そうで良かったです。」
あいも変わらない警護に違和感を覚えた。

「コーデイ、ご無沙汰。僕はジョイスじゃなくて、レオンという本
名を名乗っているんだ。」

「そうなんです。ではあらためて、レオンさん、ご無沙汰してま
した。」

アニーは孫のオルレアを植物の温室へ行くように言いつけて、部屋
から出した。コーデイに促されたがロブは椅子に座らなかった。

「相変わらずだね。」

両腕を組んで、壁にもたれかけていた。コーデイが改めてロブの顔
をみて悲しそうな目で見ていた。コーデイの目をそむけるようにし
て、椅子に座った。

「最初から相しておきなさい。」

レオンはロブの言っていた苦手な人というのはこういうことかと納
得していた。

「さて、どこから、話をしようか。」

口火を切ったのは、テオだった。テオが得た情報を話し始めて、誰
もが聞くだけだった。話し終わると、コーデイが話し始めた。

「アルバートさんが二重スパイだということはクレアさんは存じて
ました。そして、そのことを利用してわざと情報を流してました。」

ロブは、そうだろうと思っていたと言わんばかりにうなづいていた。

「パジェロブルーの爆発物もご存知でした。」

「レインやジリアンも囿にしたのか。」

「ええ、でも、危険を回避するために、通信機を持ってもらったの
です。」

ロブやテオは呆れ顔だった。アニーは黙って聞いていた。

「誤算だったのは、ロブさんとカスターさんがパジエロブルーで戻ってきたことでしょう。」

コーデイが続けて話しする内容は、ジヨナサンが皇帝とつながっているということアルバートが知っていてクレアにその情報を流したことだった。そのことを機に、影武者の話が出てきた。

「わたしが知っているのは、影武者はブライアン・セットコート氏です。」

その名前に覚えのなかったが、コーデイはセシリアの愛人と説明した。

「セシリアの？」

「ええ、クレアさんいわく、セシリアさんを人質としてブライアン氏につかせておいていると。実際、グリーンオイル財団の理事長からブライアン氏の元へ行つてしまわれて、戻られていません。」

影武者の話でテオが皇帝の落胤話が出てくると、クレアから聞いたというウィンディの話が出てきた。

ウィンディの強姦事件は被疑者不明で捜査不可になっている。ウィンディの辛い記憶の中にこの犯行が計画的であることが浮き彫りになった。見張り役がいたことだった。それはおそらく影武者の存在がその時からあり、手引きをしたり見張り役をしていたのはジヨナサンではないかと推察していたことだった。

テオが声を荒げて、否定しようとしたが、クレアが言った犯行理由に納得してしまった。

「レテシアさんがレインさんを出産されたことで、衝動に駆られたのではと考えられてました。クレアさんがレテシアさんからお聞きしたのです。出産報告の際の皇帝の形相を。それはもう誕生を祝う顔ではなく、この世を恨んでいるかのような怖い顔だったそうです。」

テオ自身もそのことを知っていた。皇帝がレテシアに好意を寄せていたのは、最近知ったことで、考えもしなかったが、誕生を喜んで

いない様子は今でも覚えていて、レテシアが怖がっていたのも知っていた。

レオンは黙って話を聞いていたが、頭の隅でなにか引っかかっているのを感じていてそれが何であるか理解できていなかった。

「証拠があるのだろうか。それが皇帝の犯行であるということが。」
コーデイはレオンの顔をうかがって、言葉が出ないでいた。

「ああ、僕のことなら、気にしなくていいよ。覚悟はできているから。」

深呼吸をして、コーデイは続きを話した。

「ウィンディさんがセシリアさんの遺伝子情報を求めていたのです。」

「セシリアの？」

「はい。ジリアンさんとの親子関係を証明するために手に入れたものですが、それをウィンディさんが欲しがったのです。クレアさんはすこし考えればすぐにわかることだと言っていました。」

セシリアの遺伝子情報で皇帝の情報が手に入ったも同然だった。確率的には低いがまったくの否定ではなかった。そして、その話を聞いていたレオンだったが、セシリアのことがわからないので尋ねた。セシリアの真実の素性やジリアンの出生を聞いて、ジェフの言っていたことに合点がいった。

そして、ようやく、頭の隅に引っかかったものがするりと出てきた。「そういえば、僕に似てる人がレインの知り合いにいてるって話をしていたんだけど。」

ロブはその言葉を聞いて、改めてレオンの顔を見た。レインたちが知っているレオンの姿はジョイスであったときの赤い髪だった。赤い髪のおぼかすの少年……。

「おい、まさか。」

「どうしたんだ、ロブ。」

「まさか、あの子がセシリアの最初の子だということか。」

「もうすぐなのね。とても寂しいわ。」

「そうね。軍隊に入隊それは、どこに配属されるかわからないから、離れ離れになるでしょうね。」

フェリシアはエミリアの手を取り、見つめていた。

「今までありがとう。あなたがいたから、わたし乗り越えたのだと思っの。」

「何を言っているの。フェリシア自身が努力したからこそ、乗り越えられたのよ。」

首を横に振り、涙を堪えていた。

「皇族の身の上で、過酷な訓練を受けるのは、重すぎて辛かったわ。私が男子であればこんなに苦しむこともないのにと思ってきたのですもの。」

エミリアはフェリシアを抱きしめて、頭を撫でた。

「よく耐えたわ。あなたが辛くて泣いていた日々はあなたを強くしてくれるって信じていたもの。」

「あなたが見守ってくればこそだわ。本当にありがとう。感謝しているわ。」

「感謝だなんて、わたしはあなたの友人として当たり前のことをしてきたのよ。」

二人はスカイロードの卒業を数日後に控えていた。それまでに、高度な技術を必要とした試験の数々をクリアし、それぞれが立派なパイロットとして成長を遂げていた。

「卒業式には父上がお忍びで来てくださるの。エミリアはお父様がいらっしやるのかしら。」

「ええ、来て下さるのだけど、前日に実家へ来て泊まるように言われているの。」

「まあ、それでは、最後は一緒に過ごせないのね。」

「残念だけど。」

「いいわ。教官の許可を取って、今日はパジャマパーティーでもしましょうよ。」

「いいアイデアだね。」

二人は精一杯、女の子らしさを楽しもうとしていた。

レインはスカイロードの卒業式の招待を受けることにした。その旨をレテシアに告げると、イリアが来ない事を残念に思っけて口にしていた。

「イリアにもスカイロードの良さを知って欲しかったのだけど。」
レテシアはレインの心を推し量ることが出来ないままに、溝が出来てしまっていることに気づいてもいなかった。ジリアンはただ、見守ることしか出来ないと思った。ここでレテシアに事情を話せば、こじれてしまうだろうと思ったからだ。そして、レインの覚悟はどこまで本当なのかと疑っていた。エミリアと面と向かって気持ちを断ち切ることが本当にできるのだろうか。ただ、気持ちを断ち切った振りをするだけに終わってしまうのではないかと考えていた。
一方、カスターの方はイリアが言っていた『グリーンエメラルダ号落とし』を決行するとしたら、レテシアがいない時を狙うだろうと思っけていた。止めても無駄だろう。密告したところで信じてもらえない。どうやって決行するのかもわかっていない。突きつけられた犯行の予告は、カスターを苦しめていた。

ロブには確信が持てなかった。あんまりにも突拍子もないことだったからだ。セシリアの子がコリンだという確証がどこにあるというのだろうか。ただ、レオンに似ているだけでは検証にはならない。

「その子のことを告げるつもりはないが、確証は得られない。その子には両親がいる。しかし実の親であるかどうかもわからない。」

「ロブさん、その子の名を口にしないでください。クレアさんはたどり着いていたのですが、私には一言も言いませんでした。わたし

の身を案じてのことです。クレアさんの気遣いを察してください。」「わかつている。ダンやクレアさん自身もその子のことを案じてのことだろう。」「

「しかし、複雑怪奇だね。皇族の血がそのように入り乱れているということがね。」「

アンは深いため息をついて、レオンを見ていた。

「レオン、お前さんはどう思う。」「

「僕ですか。」「

躊躇っていて、なかなかこたえられなかったが、心は決まっていた。「僕は、母であるウィンディが安心して生きていてくれればそれでいいです。息子である僕が利用されることも望んでいないでしょう。日常変わらず、無事で安穩と暮らしていく事を望んでいるでしょうから。」「

「そうだね。でも、どこにいても、変わらないだろう。」「

「ええ、そうですね。安住の地を求めないといけないでしょうね。」「

「ここにいてもかまわないが。」「

「いいえ、それはいけません。迷惑をかけてしまう。」「

「ここは、盗聴されることもない。電波が届かないからね。通信システムが通用しない。」「

「でも、人海戦術で攻められたら、逃げようがありません。」「

テオはこの地形を把握している事を知って感心した。そして、おもむろにポケットからテーブルにあるものを取り出した。

「これは何ですか。」「

「ホーネットのエンブレムだ。」「

「ホーネット?」「

「ああ、皇族専用空挺部隊だ。レインの母親レテシアも所属していた。」「

テーブルに出されたエンブレムはテオの手でレオンの手に渡された。レオンはそれを見入っていた。蜂のしたにある獅子が吠えている黄金の紋章は見たことがあった。

「この蜂の絵がホーネットのものですか。」

「そうだ。そのエンブレムはホーネットの隊員であることの証だ。」

「そうなのですか。」

「お前に託す。」

「え?」

「今まで皇帝のことは尊敬していたが、今、封印しておく。そうしないと、真実がきちんと見えてこない。」

「でも、僕の場合は……。」

「ああ、そうだ。確証がないことはわかっている。ホーネットが解散した時は除隊しようと思っていた。ホーネットは憧れだったし誇りだった。失ったのなら軍隊にいる意味がないと思っていたからだ。だが、皇帝に忠誠を誓い、使命を感じていたことが嘘になると思い、考え直した。いろんな情報が錯綜し、皇帝の信頼を得られていないことを知った上ではもう意味がないと感じて除隊した。そして、そのエンブレムを後生大事にしている自分にも嫌気が差した。しかし、誇りは捨てたくない。だから、お前に預かってもらいたい。」

エンブレムを見つめていて、テオの気持ちを受け入れるかどうか考えた。昨日会ったばかりの大人が自分の事を信じて胸を差し出すこの状況を、どう受け止めようかと思った。拒む理由などない。それはわかっていた。

「預かるだけでよろしいでしょうか。」

「もちろんだ。」

「必ずお返しします。」

「よろしく頼むよ。」

エンブレムを握り締めて、ポケットにしまいこんだ。

「レオン。」

「はい。」

「どこにいようと、そのエンブレムがある限り、生き延びて欲しい。俺もお前を守るために努力をしよう。」

「はい。」

「そして、誓ってくれ。何があるつとも、皇帝を恨まないでほしい。ウィンディが恨んでも、お前は恨まないで欲しい。」

答えに戸惑ったが、心は決まっていた。

「わかりました。そんなことをしたら、僕が生まれてきた事を否定してしまうことになるでしょう。」

「すまないな。」

「どうして、謝るのですか。」

「そうだな、他に言葉がみつからなかった。」

ゆっくりと目を閉じて、レオンは言った。

「ありがとうございます。みなさんと会えて良かったです。僕の生きる糧になるでしょう。」

第二十八章 衝動の波紋 1

エミリアが実家に到着すると、家政婦のマリアンヌが出迎えた。マリアンヌはサンジョベーゼ家で家政婦としてだけでなく住み込みで家を守っていた。

「お嬢様、お疲れになったでしょう。お父上は1時間後には到着されますので、それまでお体を休めてください。」

「ありがとうございます、マリアンヌ。」

自分の部屋に戻り、眠りにつくことなく、考えるのはレインのこと。レインの写真を見つめては何度破棄しようと思ったことが。そうすることができない自分の弱さを忌み嫌った。フェリシアに励ましの言葉をかけながら、自分自身の気持ちも諦めきれず、つながっていたいと願っていた。

父親が家に到着したというので玄関へ出迎えた。

「お帰りなさいませ。父さま。」

「ああ、息災でなによりだった。」

父親は男性をひとり連れて来ていた。

「ご無沙汰してましたね。エミリア。」

エミリアにとつて見慣れぬスーツ姿で身を包んだ婚約者のクリス。アザロが立っていた。思いもよらぬ来客に驚きを隠せなかった。

「幽霊でも見たような顔つきをするんじゃない。失礼だぞ。」

「す、すみません。」

「いえいえ、婚約者なのに、顔をみせることが出来なかった私が悪いのですから。」

クリスは端正な顔だちに優しい目つきをした好青年だった。出身は一般人だが、エミリアの兄とスカイロードで同期生だったこともあり、エミリアの父が目を掛け、婚約させた。クリスにとつては願ってもないことで將軍との縁を期に軍での昇進を狙っていた。優しいまなざしの奥には栄達を願い剛毅な思いが隠れていた。

エミリアの胸のうちは落胆で満たされていた。レインへの想いを断ち切りたかったのは、婚約者の存在があればこそだった。想い募らせたのも、好きでもない相手を婚約させられたことへの反発心でもあるかもしれないと思った。フェリシアへの言葉で「心は誰のものでもない。」という思いは自分のためでもあった。心を自由にさせてくれたのがレインの存在であつたと考えさせられ、胸が痛くなつた。

嘘はつけない。こころがそう叫ぶものの、父親に逆らうことはできなかった。

夕食を終えて、父親に促されて、クリスと二人つきりにされた。他愛もない会話が繰り返されて、エミリアにとって退屈で仕方がなかった。相槌しかうてない自分がまるで人形にでもなつたかのようにだった。

クリスは突然エミリアの手を取り、見つめた。

「エミリア、僕の気持ちは君にあるよ。変わらず。」

クリスの言葉にただ、戸惑うエミリア。ここから、何が始まるというのか。それまで避けていたクリスとの男女の付き合いが卒業と同時に進行するというのか。

一方、クリスにはエミリアの気持ちを考慮しない父親の言葉に動かされていた。家に招いたのはエミリアの父だが、目的は卒業を伴に祝うことだけではなかった。エミリアのオンナとしての卒業させるためだった。

父のサンジヨベール将軍には思惑があつた。エミリアを皇女殿下と一緒にスカイロードに行かせたのは人質扱いでもあつた。卒業を期に、組織を本格的に動かす準備を進める決断をしていた。娘の命が保障された期間を過ぎては下手に動くこともできないが、軍内でも評判の良いクリスに守らせておけば、安心だという安易な考えがそこにはあつた。そして、父親特有の欲望もそこにはあつた。娘の処女喪失は自分が選んだオトコでないと困るという思いだった。クリスにその思いをそれとなく伝えて、「強引にでも。」という言葉

付け加えて促した。エミリアの父は夕食を終えると、家政婦のマリアンヌだけ一言伝えて、荷物をまとめて家を出て行った。クリスは言われたとおりに強引に事を運ぼうとした。唇を奪い、抵抗するエミリアを客室に連れ込んだ。エミリアには拒む理由がなかった。この機会を逃してレインへの思いを断ち切ることはできないと抵抗する力を弱めた。自分の弱さが心を傷つけてしまうことを知らないまでに、婚約者のクリスに身を委ねた。

家政婦のマリアンヌが戸締りを確認するために、玄関に赴き、明かりを消そうとした瞬間に、素足で駆け降りてくるエミリアに出くわした。エミリアはナイトガウンを羽織り、胸元を両手で握り締めて唇はガタガタと震わせていた。マリアンヌが目に入らなかつたかのように、目をあわさず、一階のトイレに駆け込んで行った。トイレの扉が閉まると同時に、嗚咽する声がすこし漏れていた。マリアンヌは恐る恐る扉に手を掛けると鍵が閉まっていなかったので、開けて中を覗いた。

「お嬢様、どうかなさつたのですか。」

トイレの便器に向かって、嘔吐するエミリアの姿から、何が起きたのかと想像せずにはいられなかつた。そつと手を伸ばし、ナイトガウンをすこしめくって、下には何も着けていない裸だと知った。そして、力強くエミリアを抱きしめた。

「お嬢様、おかわいそうに。堪えてくださいね。」

「マ、マリアンヌ。」

エミリアはマリアンヌに強く抱きしめられて、千切れそうになるころを必死につなぎとめようとしていた。思いを断ち切るために、自分を汚してしまうことが、こんなに辛いことなのかと、後悔せずにはいられなかつた。しかし、もう、後戻りはできない。

「声は小さめにでも、思いつきり泣いてください。」

マリアンヌの言葉がところに暖かく感じた。枯れてしまっくらいに泣いてしまおうと思った。

第二十八章 衝動の波紋 2

レテシアはイリアと別れを惜しんでいた。

「このまま、別れてしまおうわけではないのに。」

このグリーンエメラルダ号にイリアを連れてきてから、表向きに別行動することがなかった。イリアはレテシアが知らないところで別行動をとって、グリーンエメラルダ号を離れることはあった。

「心配なのよ。日ごろ、私以外の人と接していないから。」

イリアは振り向いて、カスターの方を指差した。

「カスターが残るっていうから、大丈夫よ。」

いつのまにかカスターと親しくなっていたことに、親離れた気持ちを感じていた。レインとジリアンといつも一緒だったカスターが別行動をとるというのも、なぜか疑わしかったが、責める理由などどこにもなかった。

「なにか、わたしに隠していることでもあるの？」

「ないわ。」

問い詰めても答えてくれないだろうとは思っていた。SAFの爆破事故にイリアが関わっていたことを知らなかった自分を責めた。また、なにかしようとしているのを、どうすれば防げるといいうのだろうと考えた。

レテシアはレインたちと離れたカスターを捕まえて、頼みごとをした。

「イリアのことを気にかけてほしいの。」

「ええ、わかってますよ。心配なのでしょう。僕のできることであれば、守ります。」

「そう言ってくれると安心できるわ。ありがとう。イリアのことをよろしくね。」

「ええ、まかせてください。」

安堵の顔を向けて、嬉しそうにカスターの手をとった。

カスターのこころのうちでは、レテシアの思いには十分には応えられないだろうと思っていた。イリアが何をしようとしているか、部分的には知っているからだ。どうやって実行するか知らないが、何としてもめなければいけないし、そのことをレテシアに話してはいけないだろうと考えていた。レテシアがいなくなる機会を狙って行動するということ、レインたちがいなくなる以上、カスターも覚悟をした。

「心配かけるわけには行かないから、理由は聞かないでほしい。」
レインとジリアンに告げた言葉だった。

理由を知らない二人は、カスターがよもや命をかけてまで、阻止しようとしているとは考えなかった。クレア自身が死を覚悟していたことを知らないでいたので、考えが及ばなかったと言っている。そして、あの爆破事故の凄まじさはロブの火傷の怪我で知ったものの、事故の原因や何が本当に起きたのかも知らされていなかったために危機感がなかった。

「心配していないよ、カスター。クレアさんのことで吹っ切れたとは思ってないけど、自暴自棄になるとは思っていないから。」

ジリアンの言葉が的を得て、少し驚いた。その様子に気づくことができなくて二人は笑顔でカスターと別れた。

3人を見送ったカスターとイリアは、お互いを見合った。

「思い通りにはさせないつもりだ。」

「さあ、どうやってとめるつもりかしら。」

イリアはカスターをあざ笑うかのように言った。カスターはすでにイリアが受け取ったレッドオイルを盗みすり替えていた。イリアはそのことを知っていた。それはイリアが計算していたことだったからだ。

「邪魔をするなら、排除するまで。ほしい情報は手に入れたし、消えてもらおうかしら。」

レインは浮かぬ顔をしていた。ジリアンは理由を知っている。レ

テシアは知らないままに、やたらとレインに話しかけていた。

「卒業式には、エアジェットのアトラクションがあるの。ママも参加するんだけど、レインも一緒にどうかしら。」

「しませんよ。」

「つれないわね。即答だなんて。」

レテシアは必死にレインの顔をうかがう。レインはそれを避ける。

その様子を、笑いを堪えて見守るジリアンはレインを助けることができなくて、レインに睨まれていた。

「なにか、嫌なことでもあるのかしら。」

レインの目じりがあがったような気がした。レテシアはなにがあるのだらうと思考した。

「スカイロードの合同訓練でなにか嫌なことでもあったの？」

レインの顔色が悪くなったのを見て、レテシアは答えを言い当てたところのなかで微笑んだ。ジリアンはレインのことを正直すぎるにあきれていた。

「合同訓練で事件があったのですよ。」

ジリアンがやっと思いついて口にした。

「ええ。訓練中に生徒の方が砂虫の犠牲になってしまった。」

「あら、そうなの。それは気の毒に。さぞ、こころをいためたてでしょうね。」

「軍の訓練なら、死亡事故はつきものでしょう。」

「それはそうだけど。だってね、皇女殿下が参加されたでしょう。」

「ええ、だから、大変だったのですよ。」

「まあ、」

ジリアンは大げさに話をしてみせた。まだ青い顔しているレインから引き離すためだった。

3人を乗せた空艇は、太陽が輝く青い空の下を、スローペースで飛行していた。

レインのところは決断したものの、気持ちは重かった。このまま、別の場所に飛んでいって来てほしい思っていた。自分なりに努力

してみた。コーネリアスに手紙を書き続けても、気持ちを保つて
ることに気づくだけだった。エアジェットに乗れば、忘れることが
できたが、自分たちのエアジェット・パジェロブルーはもうない。

山脈を越えると、広大な草原が広がった。そのなかに何十キロも四方に広がる滑走路を持つ施設が現れた。距離が縮まると、色とりどりのエアジェットが待機しているのが見えた。

「うわあ、すごい。たくさんエアジェットがあるよ。」

興奮していたのはジリアンのほうで、レインはいつになく大人しかった。

「あのモスグリーンの機体がスカイロードの訓練機。シルバーの機体は卒業後の訓練生のものなの。」

レテシアの説明に耳を傾けることなく、ただ、外を眺めているだけのレイン。ここ、ここに在らずの姿をさらけ出し、ジリアンは気がでなかった。レテシアはただ、気にかけるだけで心配する素振りをするのは止めようと思った。

「キャティナ・マウンター・サ・ロツソの山岳警備隊もいると思うわよ。ジェフも来ているかしら。」

「え?!」

ジリアンとレインは驚いていた。ジェフが除隊したことをレテシアが知らないとは思ってもみなかった。ジェフが除隊してロブと一緒にいることは前もって口止めされていた。

「え、ジェフがどうかしたの?」

「いや、その。」

取り繕ってもどうせわかってしまうだろうと、ジリアンはジェフの除隊を告げた。

「え、どうして?!」

その理由は知らない。だが、心配していた「なぜ除隊を知っているのか」という問いがレテシアの口から出てこなかった。

工場の施設のようなエアジェット整備場が立ち並び、高くそびえ立

つ校舎があった。最上階は管制塔になっているが、下の階に校長室があった。フェリシアは校長室に呼び出されていた。そこに、誰が待っているかを知っていた。

コンコン

「フェリシア＝ドレイファス上等兵です。」

「入室したまえ。」

校長は机に座し、ソファには軍服を着た男性が座っていて、フェリシアに笑顔を向けていた。

「お父様。もうお着きになったのですか。」

「ああ、君の晴れ舞台を待ちきれなくてね。デモンストレーションがあつて、練習しなくてはいけないだろう。邪魔して申し訳ない。

一刻も早く、姿を見たくてね。」

呆れ顔のフェリシアに校長は座るようにと促した。

「失礼して座らせてもらいます。」

「どうぞ。では、わたくしは、お邪魔でしょうから、退室いたします。陛下、ごゆっくりなさってください。」

「気遣ってくれてありがとう。」

校長が退室すると、フェリシアはむくれた顔を父親であるマルティン＝ドレイファス皇帝に向けた。

「軍服姿とは、目立ちます。」

「いいんだ。わたしは若く見られるからね。こうしていると、ごその青年将校と間違えられるのだ。」

「おふざけがすぎますわ。皇帝の真の姿を知らない軍人を愚弄しているかのようです。」

「きついなあ、そこまで言うこともないだろう。」

久しぶりの親子の会話にしては気が置けないなど、フェリシアの成長振りを感じていた。

「ところで、なぜ婚約者のダミアン＝ブラーガ公爵を招待しなかったのだ。」

無表情になり下を向くしぐさで質問に応えたつもりのフェリシアを

みて、皇帝は仕方がないと思った。

「あの方とあまりご一緒したくありませんの。いずれ夫婦になるにしても、距離を置いておきたいくらいですもの。」

「かわいそうなことだと思う。しかし、わたしにはどうにかしてあげられない。」

フェリシアは皇帝に近づいて言った。

「わかつてますわ。お父様のお気持ち。わたくし、自分で夫なる方を選ぶことができないことぐらい。でも、今この時、スカイロードに入隊している間だけでも、わたしのところはわたしのものであって、自由にしたいのです。」

娘のまなざしに、父親として、こころの奥底を読みとろうとした。

「誰かに好意を寄せているのか。」

父親から遠ざかり、のけぞって、顔を背けた。

「いるんだね。」

「ええ、います。でも、帝位後継者一位の皇女であるわたくしにふさわしい男子はいません。叶わぬ想いと知りながら、気持ちを絶つことができないことを許してください。」

「いいだろう。今だけなら許す。そなたのこころはそなたのもの。誰が奪おうとわたしにはどうすることも出来ない。」

笑顔を傾け、フェリシアに安心感を与えようとした。

皇帝は、自分の事を思い返していた。あてがわれた后妃はそつが無く憤ましかで従順な女性であった。不満らしきものは感じさせない女性ではあったが、刺激もなかった。フェリシアという皇女を得て、初めて恋に落ちた。自由奔放に振舞うその姿に魅せられ、釘付けになった。愛情を失った后妃は次第に病を得て早世した。皇帝が衝動にかられて恋しい女性を手に入れようとした時には、ある男のものになった。どんなに悔しがっても、手に入れない。こころを鬼にして略奪することも考えてみたが、愛らしくて幼い皇女の前に、その考えを留まらせた。

「そなたが男子であったならば、辛い思いはしなかつただろうか。」

「父上、そのような有りもしない話をするのはやめてください。辛すぎます。」

その答えは否。自分が経験したことだからこそ、自分で選ぶことのできない人生を、愛しい娘がたとえ男子として生まれてこようと叶わないことを知っていた。

両手で顔をうずめて、忌まわしき出来事を思い起こしていた。影武者であるオトコにそののかされて、衝動にかられて欲望をむき出しにして犯してしまった罪を。

第二十八章 衝動の波紋 3 (後書き)

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー) 15歳

ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の従弟・愛称ジル) 13歳

ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の父) 30歳

カスター⇨ペドロ(クルー)。通信士。愛称キヤス) 26歳

テオ⇨アラゴン(空挺第五部隊隊長、少佐) 43歳

セリーヌ⇨マルキナ(デューク⇨ジュニア⇨デミスト理事長の第六秘書) 26歳

エミリア⇨サンジョベーゼ(スカイロード上官育成学校3回生。皇女殿下のルームメイト) 18歳

ビル⇨ポルスキー(スカイロード上官育成学校・教官。准曹) 34歳

ジェフ⇨マックファット(山岳警備隊パイロット。レテシアの同級生) 33歳

レテシア⇨ハートランド(元ホーネットクルー・グリーンエメラルダ号のクルー。主人公の実母) 33歳

マルティン・デ・ドレイファス(コン・ラ・ジェンタ皇国の皇帝。セシリアの実兄。) 38歳

フェリシア⇨デイドレイファス(皇帝の第一皇女。スカイロード上官育成学校・3回生。) 18歳

コーネリアス⇨アンコーナ(ワイナリー農園のオーナー・食品企業
の財閥の娘) 13歳

ピエトロ（コーネリアス付きの執事） 45歳

イリア 16歳

レオン＝ゴールデンロブ 14歳

ウィンディ＝ゴールデンロブ 33歳

第二十八章 衝動の波紋 4

レテシアたちが到着すると、教官のビル＝ポルスキーが出迎えた。

「ようこそお越しくれました。ハートランド少尉。」

「こちらこそ、お招きに預かり光栄です。ボルスキー准曹。」

「レイン、ジリアンもようこそ。事故のことは残念に思うが、案じていたので無事で何よりだ。」

「お招きいただき、ありがとうございます。」

「以前より、成長したね。君たちに会うのが楽しみになってくるね。」

照れ笑いも出来ないレインに、苦笑いするジリアン。レテシアは満面の笑みでレインの後ろに立ち、嬉しさを隠せずにした。

この複雑な関係を知らないわけでもなかったビルだった。

「デモンストレーションに参加してくださいださることでしね、少尉。」

「ええ、私でできることであればと思ひまして。」

「ジェフ＝マックファットが除隊して、今回参加してくれるのです。」

「まあ、ジェフに会えるの。素敵なことだわ。」

「ええ、お二人ですばらしい飛行技術を披露していただければ、華やかな飛行ショーになると思っています。」

「すばらしいわ。ね、レイン、ジリアン、ジェフが来てるのよ。」

ジリアンに肘鉄をくらい、ようやく正気をもどしたレインは生返事をした。

「具合でも悪いのかな。」

「いえ、ちよつと動揺がかくせなくて……、いえ、興奮しているのです。あは。」

下手な言い訳しかできないレテシアは笑ってごまかした。

「では、B棟でマックファット氏が待っていますので、打ち合わせしてください。ここの施設の案内はそこに向かわせますから。」

「了解しました。お世話になります。」
「いえ、こちらこそ。よろしくお願ひします。」
「ジリアンはビルに挨拶を済まし、気の抜けたレインを引っ張るようにレテシアのあとについて行った。」

B棟に着くと、そこにはジェフ氏以外に、エミリアが見知らぬ男性と談笑していた。

「おい、レテシア。こっちだ。」
「ジェフ。久しぶり、元気そうね。除隊したって、聞いてびっくりしたわ。」

「あはは。そうなんだ。幼い子を持つと、どうしても、自分の命が惜しくなってね。」

ジェフの目配せに気がついたのは、ジリアンで、レインは視界にも入っていなかった。

そこにはエミリアがいたからだ。しかも、見知らぬ男性と親しげにしている様子にところを奪われていた。

「マックファットさん、ご紹介していただけますか。」

見知らぬ男性が声をかけた。レテシアは男性の軍服姿をちらりと見た。

「ああ、こちらの女性が、さっき話をしていたレテシア「ハートランド少尉だ。」

「グリーンエメラルダ号エアジェット隊員のレテシア「ハートランドです。」

「こちらが、今年、士官学校を卒業した青年将校のクリス「アザロ少佐。」

「はじめまして、クリス「アザロです。お噂はかねがね聞いています。」

「まあ、恥ずかしいことばかりでしょう。」

「いえ、目を見張るエアジェット操縦で惹きつける魅力的な方だと。」

クリスはレインたちが視界にはいった。それを察してレテシアが紹介した。

「少佐、こちらはわたしの息子でレインと言います。そして、こちらが従弟のジリアンです。」

「親子ですか、道理で似ていると思いました。よろしく、レイン君。君もエアジェット飛行士かい。」

「ええ、そうです。」

「ジリアン君もそうだね。よろしく。」

レインは気が気でなかった。青年将校だと聞いて、ある考えが及ばないことはなかった。

ジェフは咳払いすると、エミリアをレテシアに紹介した。

「こちらは、少佐の婚約者で今回のスカイロード卒業生のエミリア
「サンジヨベーゼ上等兵。」

レインはめまいがしそうになった。ジリアンはレインに気合を入れるのに、背中を叩いた。

「うっ。」

「どうかしたかい。」

「いえ。」

レテシアにはレインの表情が視界に入っていなかった。

「ハートランド少尉にお会いできて光栄です。お話は校長先生からお聞きしています。」

エミリア自身は気丈に振舞っていたが、こころの内では震えていた。レインに婚約者のことを知られてしまうことはいずれ来ることだがしかし、それはレインを傷つけてしまうのではと恐れていた。

「キャティナでの合同訓練でレインとジリアンは顔見知りだったね。」

「ええ、そうです。SAFのことは残念なことになりました。訓練が生かされたと思っています。」

ジリアンは物言えぬレインの代わりに会話に努めた。レインの様子にエミリアは痛々しく思っていた。

驚きが隠せなくて、うるたえていたからだ。その様子を知らないレテシアはレインに抱きついた。

「わたしの息子ですもの。勇敢で技量があつてたくましいから、ジリアンを守つて、無事でいてくれると信じていました。」

レインの顔は赤くなつた。一気に様相が変わり、子ども扱いされたことに腹が立つていた。しかし、エミリアとエミリアの婚約者を前に、醜態をさらすわけにいかないと理性を引き出し思いとどまつた。

「しょうがないな。親子らしいこともしていないのに。」

「まあ、ひどい。そういうことを言わないで、ジェフ。」

談笑が続く中、レインとエミリアは魂がぬけたようになっていた。

外面とはうらはらにレテシアにあわせるレインはエミリアの婚約者の存在にこころを痛め、レテシアの存在をまざまざと見せ付けられてこころが苦しくなるエミリアは婚約者のクリスに笑顔を傾けていた。

ジリアンはただ二人の姿を見守るしかできなかった。

第二十八章 衝動の波紋 5

スカイロードの施設を案内すると言って、在校生が現われると、レインたちと共にB棟を離れた。レテシアとジェフは打ち合わせをしたいと言って、その場に残った。

「レインの様子がおかしいの。」

一児の母だという自覚があることに安堵感を得たジェフはため息をついた。

「ジェフは何か知っている？」

「知るわけないよ。」

知っていると言えば知っている。でも、そのことを口にするのは筋違いだとジェフは思っていた。

「機会があつたら、聞き出してもらえないかしら。」

「だめだよ。レインが何も言わないのなら、聞き出してもだめだ。

ロブともそういうことあつただろう。」

まるでレテシアの兄のように諭すものだから、何も出来ないと嘆くように不安な顔をした。

「10代の男の子じゃないか。いろいろあるだろう。」

「そうね。でも、何も相談してくれないのが寂しいの。」

「ジリアンがいてるから、大丈夫だよ。いつも一緒だ。何かとレインの事を気に掛けているし、心配要らないよ。」

「ロブにはフレッドがいたものね。」

ジェフは手にしていた書類をレテシアに渡した。

「アトラクションをするのは知ってるね。」

「ええ、恒例ですもの。」

「デモンストレーションを兼ねるらしい。」

「何のデモンストレーションなの？」

「パジェロブルーのコピーだよ。」

「パジェロブルー？レインたちが乗っていたエアジェットのことか

しら。」

「ああ、そうだよ。レテシアが原案を出したと全面的に公表するらしい。」

「何の意味があるのかしら。」

「さあね。」

書類に目を通して、ある文章に目が留まり、レテシアは奇声を発した。

「うそ！」

事態を予測していたジェフは冷静だった。

「背面ツイン飛行をするというの！」

「ああ、そうだ。俺たちが失敗したアクロバット飛行だ。」

忘れもしない、卒業間近のアトラクション訓練の時に事故をしたことだった。事故でレテシアは重症を負い、卒業を見送られた。ジェフはホーネット隊を希望していたが事故を期に山岳警備隊に変更していた。

「トラウマになってないかしら。」

「それを俺に聞くのか。きつい事を言うんだな。」

「ごめんなさい。でも、あれから、17年以上経っているけど・・・」

「大丈夫さ。あの頃のようにびびったりしない。俺自身もそういうところから卒業したいって思っていたから。」

「幼い子の父親になったからなのね。私には考えも及ばないことだったわ。」

「まあ、その辺は、男と女の違いはあるかもしれないな。びびって事故したのは俺のほうだし。」

レテシアのまなざしはまっすぐで、逸そらさないで見つめ返すのはなかなか出来ない。真剣さを相手に伝えるためには、見つめ返すしかなかった。

「話がある。」

「なあに？」

「裏のホーネットから離れるんだ。」

考えも及ばない言葉に、レテシアは動揺した。

「なにがあつたの？S A F爆破事故に関係あるの？」

「君も知っている通り、軍部は分裂しつつある。」

「ええ、聞いているわ。艦長が軍部に派閥が出来て、グリーンエメラルダ号は厄介者扱いをつけていると。そして自分の身は自分で守るように言われたわ。」

軍部のなかでは、皇帝排除派と民族解放派、皇帝側の派閥に分かれてきていた。はっきりとした境界があるわけでもなく、上層部のほうで分裂しつつあつて、下層のものにはまだ浸透していなかった。

「裏のホーネットが皇帝側だという認識は間違っていないわ。でも、わたしは……。」

「わかっている、ロブのためだろう。」

レテシアは開いた口がふさがらなかつた。全部お見通しという思いがジェフから感じ取られた。

「黒衣の民族からロブたちを守るために、裏のホーネットに着いたというのなら、それは見当違いだ。」

「どうして？」

「いま、どういう状態に追い込まれている自覚しているのか。」

深くは考えることができなかった。イリアという重荷を背負って、良いように動かされていることはうすうす気づいていた。徹底的に拒否する理由も見つけられないままに、いいなりになっていたのは事実だった。

「艦長も見て見ぬ振りをしているだけではないはずだ。」

レテシアは唇を噛締めて、心の痛みを抑えていた。

「でも、どうしたらいいの。イリアを見捨てるわけには行かないわ。」

「話は聞いている。クレアさんも何も知らないわけではなかった。」

「クレアさんが？」

「ああ、白髪の少女ことを探っていたのは確かだ。」

「そんな。」

「レテシアの事をロブより、一番心配していたんだ。気にならないわけがないだろう。」

手にした書類を丸めて、ぎゅっと握り締めた。

「ジェフは、その派閥抗争の関係で除隊したの？」

「そう言っても過言ではない。しかし、ホーネットは皇帝だけが利用しているわけではない。」

「皇帝ではないというの？」

ジェフは知っていて敢えて害の情報をレテシアの耳に入れた。皇帝の影武者がいて、それはグリーンオイル製造会社の手管ということ。ジヨナサンはその影武者にそそのかされて懐柔されていたこと。イリアにはレテシアを傷つけないことを条件に脅されていること。

「そ、そんな。」

レテシアを不安に陥れるような情報は耳に入れたくなかったが、これも彼女の身を守るため、ロブたちの身をまもるためであり、クレアの意向でもあったから、身を切る思いで話をした。

ジェフは知っていた。レテシアたちがいないグリーンエメラルダ号が危険に晒される事を。しかし、それは口にはいけないう思っていた。

第二十八章 衝動の波紋 6

ゲストルーム宿泊室に入って、すぐさまレインはベッドに沈んだ。どう言葉をかけていいのかわからず、ただ黙っているしかできないジリアン。物音も立てずに時間は過ぎ去っていった。

コンコン

「ジェフだが、入ってもいいかな。」

レインは微動だにしないで、仕方なくジリアンが返事をしてドアを開けた。

「どうぞ。」

「ありがとう。」

ジェフの視界にはベッドにうつぶせに寝ているレインの姿が入った。

「予想通りだな。」

ジェフ自身、レインを放っておくわけにもいかず、気にしてやってきた。

「顔見知りだったのですか。」

ジリアンは会話に努めようとした。

「ああ、父上のサンジョベーゼ將軍には世話になったものだからね。」

「そうですね。」

「知らないわけでもなかったが……。」

ジェフは身動きしないレインを確認して話を進めようとした。

「將軍も一人娘の父親だからな。将来を案じて取り決めた婚約だ。」

「エミリア嬢が望んだものではない。」

「それはそうでしょうけど、あまりに親しげにしていたものだから、そのお……。」

「まあ、無碍にするわけにもいかないだろう。今日は父上の將軍も凝られていることだし。」

「お父さんの將軍も来られているのですか。」

「娘の卒業を祝いたい一心だと思うが、婚約者も同席してのことだしな。」

レインの様子をちらりと確認して、ジリアンは話を始めた。

「ジェフ、アザロ少佐という方はどんな方なのですか。」

（良い子だ、ジリアン）

その言葉を待っていたジェフは、ジリアンに笑顔を傾けた。

「少佐は軍士官学校を卒業したわけだが、民間出身なんだ。皇族や貴族、軍上層部の子息しか入れないところで民間人なのだから、肩身がせまいわけなんだ。」

「後ろ盾が必要だったのですか。」

「物分りがいいね。そういう話。アザロ少佐自身もエミリア嬢に好意を抱いていたわけじゃない。」

ジリアンはしばらく考え込んで、口にした。

「それはフェリシア皇女殿下も同じことですよね。」

「そうだね。しかし、小耳挟んだ情報では、婚約者を毛嫌いしているらしい。」

「そんなことまでご存知なのですか。」

「軍内部での派閥争いがあるって、皇族の動向にも敏感なのだよ。」その先から出てくる考えは口にはいけないとわかっていた。それはジリアン自身が皇族の血を引いている事を発言してしまうからだ。そのことで命が狙われているということではないことは知っていた。黒衣の民族がセシリアを恨み、生んだ子供を犠牲にしようとしているということを知っていたからだ。

「そうだ。君たちはジョイスを知っているね。」

「ええ、トランスバランスの施設で別れましたけど。ジョイスがどうかしたのですか。」

「ジョイスというか、今は、本名のレオンを名乗っているのだが。」

「レオンですか。」

「ああ。クレアさんの意向でトランスバランスへ迎えに行ったんだ

よ。君たちに会いにスタンドフィールド・ドックへ行きたいって言ったよ。」

「ドックに戻るのはまだ先になりそうですよ。」

「また、グリーンエメラルダ号に戻るのかい。」

「ええ、僕たちと一緒にだったカスターがグリーンエメラルダ号に残ったのです。」

「ほう。」

ジエフはグリーンエメラルダ号でなにかが起こる情報は得ていたが、何が起こるかは知らないにしても創造はついていた。皇帝が動き出すことを想定して、レテシアを守りに来たのだ。しかし、それはサンジョベーゼ將軍と打ち合わせする裏の動きのためでもあった。

「レテシア少尉の相棒イリアという人がグリーンエメラルダ号に残るから、カスターも残るのだということです。」

「そうか。」

懸命な考えだとジエフは思った。クレアの意向を受け継いでいる。おそらくは第六秘書のマルキナはそこまで指示することはないだろう。

「ジエフは、卒業生代表でアトラクションするのですか。」

「そうだよ。そうだなあ、昔、事故してやり遂げることができなかったものに挑戦しようと思ってね。」

「レテシア少尉のことですか。」

ジエフは深くうなづいた。

「アトラクションには、パジエロブルーのデモンストレーションが行われる。」

「パジエロブルーですか。では、あのエアジェットに似たものが飛行するということですか。」

「ああ。その機体には皇女殿下とエミリア嬢のペアが担当する。」

「ジエフと少尉は？」

「俺はまだ、普通のエアジェットだよ。訓練生の期待を拝借するか。」

「僕たちは招待されただけで、飛行することはないですよね。」

「聞いている限りではないよ。ここはスカイロード上官士官学校だからね。グリーンオイル財団研究所なら、君たちの出番があったかもしれないが。」

「出発式みたいに、襲撃にあうこともないですよね。」

「ないと断言できるね。」

ジリアンがため息をつくとき、レインが上半身を起して起き上がっているのに気がついた。

レインはおもむろに言葉を発した。

「レオンはどこにいるのですか。」

関心を持ったのはそこかと思いつながらジェフは答えた。

「ガラファンド・ドックだ。飛行訓練を受けるらしい。」

「高所恐怖症はどうしたのだろう。」

「克服したと言ってたよ。」

「そうなんだ。」

レインの中で、ジョイスと名乗っていた頃のレオンを思い浮かべ、コリンを思い出していた。

「ジョイス、いやレオンはコリンに似てるんだよね。」

「コリン？」

「うん、僕の友達。コリンはボイドっていう子なんだ。」

ジェフはボイドという名前に覚えがあった。民族解放派で知られていた科学者で行方不明になっていた人物だ。

「父親の名をなんていうのかな。」

「ジョイスさんだよ。あ、レオンが名乗っていた名と同じだね。」

ジェフのなかで何かのパーツが組み合わさった感じがした。

第二十八章 衝動の波紋 7

頭が重い、体の動きが鈍い、その感覚が何を意味しているのかと考えているうちに、衝撃が走った。

「薬を盛られた。」

カスターが気づいたときには、もう遅い。目の前でイリアが上半身裸でいて、着替えの最中だった。

振り返ったイリアは不適な笑みを浮かべて、着替え終わるとその場からいなくなつた。

薬を飲まされて性交させられたのはこれで何度目だろう。それを避けるために、レインたちがいなくなつて、クルーたちの部屋に転々として寝かせてもらったきたが、みんな気持ち悪がつて相手にしてもらえなくなつた。アルドラー少尉だけが、部屋に寝かせてくれたのだが、どうやら鍵を開けられたらしい。

頭を抱えて現状をどう受けたらいいのかと、苦悩していた。

程なくして、グリーンエメラルダ号の常駐の女医が現れて、カスターを責め立てた。

「あなた、なんてことをしたの！」

カスターは軍の通信部にいたときに起きたトラブルを思い起こした。あの時と同じ、嵌められたのかもしれないと思つたからだ。

「ぼ、僕は……。」

まだ、口がうまく回らない。アルドラー少尉が来てくれて、事情を聞いてくれていた。カスターは立ち上がることすらできずに、意識が遠のくのを必死に堪えた。

「薬を飲んでみるみたいだよ。」

「ええ、イリアから聞いたわ。よく眠れないから薬を飲んでいると。最近睡眠薬が紛失するので犯人を探し出そうとしていたところなのよ。まさか、犯人がカスター＝ペドロだなんて。」

「違う。」と言いたいのにも、口が動かない。無理に立ち上がって、

まえのめりに倒れこんだ。

「おい、大丈夫か、キヤス。」

アルドラー少尉が支えてくれたものの、頭が割れそうに痛くて、ものが言えなかった。

「重症ね。そのような状態でイリアを乱暴したのかしら。」

「イリアを乱暴？」

「ええ、泣き叫びながら医務室に入ってきたから、事情を聞いたの。カスターに乱暴されたと。」

「そんな。昨日は僕の部屋で休んでいたのに。」

「よく聞く話なんだけど、どうして、自分の部屋で寝ないのかしら。」

「S A F号の爆破事故が夢に出てきてよく眠れないと言っていたんだ。」

「人の部屋だとよく眠れるというの？」

「それまでレインたちと一緒にだったからだろう。」

「飽きたわ。大の男が。」

「軍医なら、トラウマを抱えることぐらいわかるでしょう。」

「ええ、もちろんよ。でも、カスターは民間人になったのよ。」

筋違いの話になりそうなので、それ以上軍医としての見識を追求するのをやめた。

「イリアはどうしているんだ。」

「医務室で寝かせてるわ。話を聞けば、これが初めてではないっていうし。」

「初めてじゃない？」

「ええ、何度もあったそうよ。それで、検査をしたのよ。本当かどうか。」

検査？という言葉が耳にのこり、何度もリフレインして、カスターは意識を失った。まるでスイッチを切ったかのように。

妊娠検査をしたイリアはカスターの子を身ごもったことを意味していた。女医は艦長にこのことを報告し、意識のもどらないカスター

は独房に入れられた。カスターをかばったアルドライバー少尉が独房の見張り役をかって出た。その事情を知らないままに、カスターは眠り続けていた。

スカイロードでは、卒業式に備えて、飛行訓練を行っていた。グリーンオイル財団研究所からパジエロブルーの複合機5機が到着し、エミリアやフェリシアが飛行訓練する準備が整っていた。

エミリアは複雑な気持ちでパジエロブルーを眺めていた。SAF爆破事故でパジエロブルーを亡くしたレインの前で複合機とはいえず分と違わない機体に乗って飛行するのが辛い気がした。同じ思いをかかえていたフェリシアも複雑な思いでいた。

「エミリア、聞いたわ。アザロ少佐が来ているのね。」

「ええ。」

「どうしてなの。」

「どうしてって。父が呼び寄せたのよ。」

「レインが来るのを知っていたの？」

「フェリシア、あなたも同じでしょう。レテシア少尉が参加すると知ったときから、来るのかもしれないと考えたでしょう。」

「ええ、そうよ。それも、目の前で紹介したのでしよう。」

「ええ、辛かったわ。」

堪えることができなくて、涙がこぼれた。

「わたし……。」

フェリシアにしか聞こえないように、その言葉を口にした。フェリシアに衝撃が走って、驚きをかくせず、口を手で押さえた。

「酷い。」

フェリシアは後ろからエミリアを抱きしめた。

「私なら、耐えられないわ。アザロ少尉とレインの前で笑顔でいたと聞いたのよ。そんな辛い思いをしてまで、あなたは……。」「涙を手でぬぐって、気丈に振舞おうとした。二人の前方にレテシアとジェフが現れたからだ。」

フェリシアの抱きしめる手をとり、引き離して、促した。

「フェリシア、練習開始よ。」

レインとジリアンは飛行場から少し離れた観賞用の広場で立ち尽くしていた。見ているのは、自分たちがもう乗ることできないパジェロブルーの飛行だった。

「ラインが滑らかなになっているけど、輝くように飛行している姿はまるで、青い鳥みたいだ。」

ジリアンが空を見上げては観賞にひたっていた。レインは上を見上げることができずに、芝生を足でいじっていた。レインたちの上を低空飛行するエアジェットが通り過ぎた。轟音が二人を襲ってふたりは耳を手で押さえてしゃがみこんだ。そして、レインは初めて上を見上げた。オレンジ色の機体が通り過ぎていったのを確認した。

「かあさん、わざとやったな。」

「レインが下ばかり見ているからだよ。」

レテシアが操縦しているエアジェットは低空から急速上昇した。そして、ジェフが操縦しているエアジェットと合流して、並行しながら、背面飛行し始め、二つの機体は重なりながら飛行した。

「うわぁ、すごい。」

レインとジリアンは、レテシアがスカイロードで事故をしたという話を思い返し、この飛行がその事故を引き起こしたのだと気づいた。見ながら成功することを祈っていたが、背面二重飛行は難無くこなさていた。重なり合ったふたつの機体は回転し、ほどなく離れていった。

レインとジリアンはおもわず拍手をした。レインはロブに肩車をしてもらって、レテシアが操縦するエアジェットを眺めていた幼いころを思い出し、両手を空に広げた。

「すごい、すごい。」

レインは涙を流していた。ジリアンは空を眺めてひとこと言った。

「ここは乾燥地帯だから、レインが泣いても、雨は降らないね。」

雲ひとつない空がどこまでもつづいていて、数十機のエアジェット
が思い思いに飛行していた。

澄み渡る青い空、山脈に囲まれた荒野にスカイロードの施設が広がっていた。花火を合図に卒業式は始まった。色とりどりのエアジェットが大型空挺から発進し、地上からは一人乗り用のパジエロブルーが離陸した。ブルーの翼に透明な機体が太陽の光を浴びてより一層輝きを放ちながら、パジエロブルーは華蚊帳かに飛行した。グリーンオイル財団研究所からの提供機体なので、デモンストレーションを兼ねたアトラクションを披露した。垂直飛行、燕返し、一回転飛行をするのみだった。卒業した優秀な人材がアトラクションに華を添えた。クライマックスに入ると、レテシア操縦のオレンジのエアジェットと、ジェフ操縦のワインレッドのエアジェットが、アトラクションする。垂直飛行から燕返しはもちろんのこと、平行飛行から重なり合う背面飛行で回転を繰り返した。地上では関係者と卒業生・在校生に、保護者や家族といった観客たちが歓声をあげていた。

レテシアは感極まって涙を流していた。自分が卒業する時に披露するはずだったものが練習時に事故ってやり遂げることができなかったからだ。

「ジェフ、ありがとう。」

「何を言ってるんだか。御礼を言わなきゃいけないのは、俺のほうだ。ありがとう、レテシア。」

「これで、思い残すことは無いわ。」

その言葉に返事することができなかったジェフは、レテシアが軍を除隊するのではないかという密かな期待を抱いたからだった。

レテシアが地上を見下ろすと、観客が手を振っているのが見えた。いつものように、低空飛行をこころみ、レインの姿を一目見ようとしたが、通信部から制止の命令がきた。

「危険ですから、低空飛行はやめてください。」

レテシアは仕方なく、操縦桿を強く握り締めて、急速上昇をした。ジェフは、他のエアジェットが帰還したのを確認して、大型空挺に帰着した。

レインは観客に動じず、エミリアの関係者を探していた。あたりを見回すその姿はすこし目立っていてジリアンが辞めさせようとしたが、気にも留めていなかった。エミリアの婚約者を見つけ出すのは辛いけれど、エミリアの父親という人を人目みたいという気持ちで沸いてきていた。一際オーラひびきを放つ将校がいたのだが、若い上に位が高くはないように思えた。その人物がレインと目があって、笑顔を傾けたのでレインはすこし衝撃を受けた。目をそらして、大人しく席に着いた。

「見つかったの？」

「違う。」

先ほどまでの鳴り止まない歓声が、どよめきに変わり始めたのはそれからすぐのことだった。まわりの様子が急変し始めると、軍関係者がこぞって、退席していった。他の観客たちはその様子にどうようつするばかりだった。レインはまた、当りを見まわし、エミリアの婚約者を見つけると、その先に將軍らしき人物が足早に立ち去る姿がみえた。

（あの方がエミリアさんのお父さんだろうか。）

レインがその人物を見つめていると、ジリアンが誰かを見つけたらしく、声を掛けていた。

「アップルメイト大尉じゃないですか。ご無沙汰してます。」

「あら、ジリアン君。だったわね。」

「ええ、そうです。何かあったのですか。」

「それが……。」

山岳警備隊のアップルメイト大尉はジリアンに耳打ちするように騒ぎの内容を話した。

「そ、そんな……。」

レインがその内容を聞こうとジリアンの袖を引っ張ると、ジリアンはレインに語らずにアップルメイト大尉に小声で話した。

「あの、皇女殿下はここにいらっしやいます、皇帝陛下は、そのお。」

「無事らしいわよ。」

アップルメイト大尉は当りを見回しながら、答えた。

「皇帝は殿下を溺愛されているとのことだから、この場にいるかもしれないらしいわよ。」

「え、本当ですか。」

レインは内容が理解できていないので、イラついてジリアンの腕を引き寄せた。

「何があつたんだよ、教えてよ。」

「もう。」

ジリアンはレインに耳打ちした。

「え！？宮殿が・・・。」

大きな声を出したので、ジリアンとアップルメイト大尉から口を塞がれた。

「馬鹿！」

「馬鹿つて、言わない。」

「皇帝陛下がいるかもしれないってことなんだよ。」

「え?!」

レインは先ほど目が会った将校の事を思い返した。もしかして、そうかもしれない思いがした。なぜなら、フェリシアに似ていたからだ。振り返って先ほどの将校を見ようとしたが、その場にはもういなかった。

「わたしは山岳警備隊だし、呼び出しは掛からないと思うけど、体制的に動かないといけないから、すぐに駐屯地にもどらないといけないかもしれないわ。」

「すみません、足止めしてしまって。」

「いえ、いいのよ。また、どこかで、お会いしたときには、ゆっくり

りお話でもしましょう。」

「ええ。」

大尉が去って、あたりの観客席には人がいなくなっているのに、気がついた。

「僕たちどうしたらいいのだろう。」

「宿泊施設にもどつたらいいんじゃないかな。」

空を見上げると、大型空挺が飛行していなかった。パジエロブルーは地上に着陸していた。ジリアンはフェリシアのことを心配していた。本人が無事だとしても、自分が生まれて育った場所が攻撃されたとあれば、心を痛めているに違いないと。

ふたりが宿泊施設に到着すると、若い軍人が見つけたといわんばかりに近づいてきた。

「レイン」スタンドフィールドさんですね。」

「はい、そうです。」

「レテシア」ハートランド少尉が卒倒されたのです。診療室にいらつしゃいますから、一緒に来てもらえますか。」

「え？」

「どうしてそうだったかは、診療室にいられてから説明があると思います。ジェフ」マックファットさんがついておられますから。」
どのような症状なのだろうと、思いつつ、レインたちはその軍人について行った。

診療室に入ると、なかにジェフが座ってレテシアの様子をみていた。

「ジェフ。」

「大丈夫だよ。今は安静にしているから。」

ジェフは二人に椅子を差し出し、座るように促した。

「なにがあつたのですか。」

「冷静に聞いて欲しいんだが。」

「はい。」

レインは唾を飲み込んだ。

「宮殿が攻撃された話は聞いているかな。」

「ええ、観客の中で軍の方々が退席されるのをみて、原因を知ることができました。」

「攻撃をされたというのは、宮殿にグリーンエメラルダ号が落ちてきたからなんだ。」

「ええ!？」

ジリアンは即座にレインの口を両手で押さえた。そして、三人はレテシアの様子をみた。微動ダニしない様子を見て、ためいきをついた。

「で、メンバーは無事なんでしょうか。」

「それが……。」

ジェフがレテシアの方をちらりとみたので、察しがついた。レテシアの叔父である艦長が無事ではなかったのだと。

「カスターが残っていたのですが。」

「カスターね。無事だといいいのだがといったところかな。はっきりとはわかっていないんだが。」

「無事だといいい？」

「ああ、どういうわけだが知らないのだが、アルドラー少尉の話だと、前日から独房にいれられていたみたいなんだ。」

「独房？」

「ああ、そして、アルドラー少尉が責任をもって見張っていて、グリーンエメラルダ号の緊急事態に開放したのだが、その後消息がつかめていないらしい。」

「そんな……。」

レインはさつきから聞こうとして聞けない事を聞く覚悟を決めた。

「ハートランド艦長はどうなったのですか。」

「おそらくは、グリーンエメラルダ号とともに心中したものと。」

「その話をお母さんは聞いたのですね。」

「ああ、そうだ。」

「レテシアはどうしたんだ。」

ガラファンランドドックでロボの怒号が響き渡った。その電話はテオからグリーンエメラルダ号が宮殿に向かって落とされたことを聞かされた直後だった。ロボはジェフからスカイロードの卒業式のことを聞いていて、レインからも参加する旨を聞かされていた。カスターがグリーンエメラルダ号に残っていることも聞かされたので、気が気でなかった。電話でのレインはロボの怒号で耳を押さえて、しばらく聞こえない振りをしていた。矢継ぎ早にいろいろ質問してきたが、何を言ってきたのかわからなかった。

「お母さんはいま、意識を失って、診療室のベッドで寝ている。まだ、意識は戻っていない。」
それだけしかいえなかった。

レインの後ろでジェフがいらついていた。気になることがあったからだ。レテシアをジリアン一人にまかせてきたことを後悔し始めていた。

（この部屋から出て行かないようにと注意しておいたが、具体的に言えば良かったかな。ジリアンなら話しても大丈夫な気がしたが、）
不安がこころをよぎり、ジェフはレインの受話器を取り上げてロボにひとこと言っておきたかった。

「レテシアを向かいに来るんだ。一刻も早くだ。ロボ、お前でないのだめだ。どういうことかはわかるな。ここにあの人がいてるということなんだ。」

そういうと、足早にその場からいなくなった。

レインは受話器を持たされて、ジェフの後姿を呆然と見ていた。

ロボは受話器を握り締めていて怒りをこみ上げてくるのを感じていた。

「あの人って……。」
後ろを振り返ると、レオンが心配そうにしていた。

「レオンたちは無事なのですか。」

レオンに声をかけられて、我に返ったロブは受話器を口元にもどした。

「おい、ジェフ！」

「ジェフはもういないよ。」

「レインか。今すぐ支度をして、そちらに向かう。用意ができれば、また、連絡する。」

「ええ！！こつちに来るの？」

「ああ、カスターの生死もつかめていないが、とりあえずは……。」

「カスターは無事だと聞いたよ。詳しい話は電話ではできないよ。」

「わかった。会ったときに聞こう。」

「うん。」

「レイン、レテシアのそばについていてくれ。離れないでいてほしい。」

「わかっているよ。」

レインが言った、本当の意味でのわかっているではないことをロブは知っていた。

一方、ジェフは走るようにして病院の廊下を行くと、レテシアがいる診療室の前でひとりの軍人が立っているのが見えた。その軍人をジリアンが相手をしていた。

「申し訳ありませんが、中に入れるわけにいきません。」

「どうしてかな。私は古くからの彼女の友人なのだよ。そう言うていただければ、理解してもらえるのだが。」

「名前を名乗らない方に会わせるわけには行きません。名乗ってください。」

ジリアンは、最初会ったときから、この軍人の威圧感を感じていた。

階級大佐と知ってもなお、この人物がもつと身分の高い人だと気づいていたからだ。そこに理解しがたい畏怖のような違和感がジリアンをあわせないように仕向けていた。

「これは、これは、陛下ではありませんか。そのような戯言の軍服姿でお見えになるとは。」

ジェフは息を切らせて、言葉をかけた。

一方、青年将校の成りをしていたことをばらされた皇帝は、うるさい虫が来たといわんばかりに軽蔑したまなざしでジェフをみていた。「レテシアの旧友か、たしか、ジェフ」マックファット君だったかな。」

「名前を覚えていただき、光栄であります。なにか御用でしょうか。」

「なにかといわれても、旧知の仲であるレテシア少尉にお会いして慰めたいと申しているのに、この少年は中に入れてくれないのだよ。」

「申し訳ございません。いま、まだ、意識が回復しておりませんか。」

「いや、先ほど、意識が回復したと、スカイロード常駐の医者が言っていたものだからね。」

「本当なのか、ジリアン。」

「ええ、でも。まだ、はつきりした状態じゃなくて、また、眠りについてしまったのです。」

ジリアンは悟った。ジェフの言うことが本当なら、この軍人は皇帝陛下だと。そして、さっきから感じる威圧感はずいぶん何者かを知っていることだと。

「レテシア少尉には私のほうからも、陛下が気にかけておられたと伝えておきますから、今回はお引き取りください。」

ジェフの言葉に釈然としなかったが、無理を通せば、何事か揉め事が起きることを察し、二人を一瞥してその場を去った。

「ふう。危なかったな。」

「なにが、危ないのですか。」

「ああ、ごめん。そのことを説明するにはちょっと大人の事情を知らなきゃだめなんだ。」

「そうですか、だったら、聞かないことにします。」

物分りの良い子供でよかったなとジェフは胸をなでおろした。余計なことを口にしたくなかったからだ。

何も知らないレインが戻ってきた。

「さっき、すれ違った軍人さんがいるんだけど。」

「皇帝陛下だよ。」

「ええ！！やっぱり。」

「やっぱりって、どういうこと。」

「あ、いや、エアジェットのアトラクションのときに、視線を感じていて、なんだが、普通に軍人さんって感じがしなかったんだよ。」

ジェフは二人に室内へ入るよう促すと、中から、レテシアの声が聞こえた。

「レイン、レイン、どこにいてるの？」

レインはすぐさま、中に入り、意識をとりもどしたレテシアのそばに寄り添った。

「僕はここにいてるよ。」

「ああ、良かった。」

レテシアは、レインもいなくなつて一人ぼっちになった悪い夢を見ていたと口にした。そして、レインを抱きしめた。レインは抗うことなく、抱きしめ返した。

「大丈夫、僕がついているから。それに、父さんがこっちに来るって言うってたよ。」

「本当なの？」

「本当だよ。」

それまでのレテシアの陽気な性質が一変して、涙をうかべる弱弱しい姿になったのを感じて、レインは自分がすっかりしななければいけないと思つた。

二人の様子に気遣って、ジェフとジリアンは廊下に出た。

「ロブ兄さんがこちらに来るって本当ですか。」

「俺が向かいに来て言ったから、来るだろう。」

「ロブ兄さんは知っているのですね。」

「ああ、もちろんだ。この危機感を感じないわけじゃないだろう。」

「意気消沈しているレテシアさんを皇帝陛下はどうにかしようと思っていたのですか。」

「まあ、憶測でしかないけどね。」

ジリアンはため息をついた。大人の事情を知ってしまった感があった。

「それはグリーンエメラルダ号が落ちたことと関係ありますか。」

「いや、宮殿が攻撃されたのだから、ないと思うが。しかし、派閥争いというか権力争いにグリーンエメラルダ号は駒として使われる可能性を、艦長もレテシアも感じていただろう。」

「そうですね。」

ジリアン自身、知らないわけでもなかった。いままでのいろんな出来事が偶発的に起こったことではないことぐらいはわかるし、その背景を知り得て身を守らなければいけないことを教えられてきたからだ。

ジェフはため息をついてつぶやいた。

「レジーナ女帝が繁栄を意味していたものがまた、ひとつ、消えていったな。」

「グリーンエメラルダ号のことですか。」

「ああ、もうひとつは、アレキサンダー号だった。」

どんなに日差しがきつくても、肌を焼くだけで痛みは感じない。照りつく太陽の下、汗が滲み出し時間が経過することも感じないままに、レインは岩山の天辺にいた。

なめくじのように解けてなくなってしまういいのに。そう思いながら、数日、数時間、その場所にいてた。レインのところは空っぽになってしまった。レテシアが卒倒してから意識を回復した後に抱きしめられたのは自分を必要としていると感じて自分を取り戻していた。しかし、ロブが来ると、あっさりと二人は心を許しあい、抱き締めてあって、お互いを必要としていることを確かめてあった。その様子を目の当たりにして、張り詰めていた糸が切れて、また自失呆然の状態に陥った。ロブとレテシアは、レインのことを気にかけることができず、ジリアンが気を使って、二人からレインを遠ざけることを提案し、受け入れられた。レインとジリアンはスタンドフィールドドックに戻り、ロブとレテシアは、テオの提案でガラファンドランドドックへ行くことになった。

周囲を意識することができていなかったレインは、自分のわき腹に暖かいものを感じて、そちらのほうに意識を向けた。

「ジュニア。」

デイゴとジゼルの子がレインのそばで寝息を立てていたのだ。声をかけても起きなかつたので、しばらくそのままにしていた。

そして、自分をそのジュニアに重ねて、両親を思い起こした。

「ふたりはどうしているだろうか。」

気がかりなのは、ダンの母親アンがふたりを嫌っていることだった。叔父をうしなつたレテシアに毒氣づいたりしないだろうと思つた。

目を閉じ、ガラファンドランドドックの様子を思い描いた。一方向には海がひろがり、どこまでも水平線がつづいているように思えた。目を開け、あたりを見渡すと、山脈が地平線にひろがり、あたりは

平原に川がなだらかに流れていて、ガラファンランドツクと背景が違っていた。
気持ちの切り替えをするのに、時間がかかりすぎだと、レインはようやく重い腰をあげようとしてた。

食堂では、ジゼルとひとりの男性が忙しく昼食の支度をしていた。

「ステファノ、この鍋をかきまわっていてちょうだい。」

「了解。ボス。」

「そのボスって言い方、やめてくれないかしら。」

「はい、わかりました。ボス。」

「うん、もう。」

ステファノはジジュリアーニはディゴがSAF爆破事故から、スタンドフィールドに戻る際に拾った男だった。北方民族の血をひく人物で、黒髪に白い肌、青い目が特徴で、クリアにどことなく似ていた。性質は普段寡黙だが、ジゼルとか女性と話す時は饒舌になる。飛行士の免許をもっているところから、ディゴに拾われた。食堂でジゼルの手伝いをしているのは、ディゴの妻とはいえ、女性と一緒に仕事をしていたほうが良いと思つてのことだった。

「僕も手伝うよ、ジゼル。」

食堂にジリアンが入ってきて、ステファノは無口になった。

「ジル、ありがとう。助かるわ。パンが焼けたかどうかみてちょうだい。」

「はい。」

「レインはまた、天辺なの？」

「うん、病気だからしょうがないね。」

「失恋が病気ね。聞いて驚いたけど、まあ、顔はそのままでも、ちゃんと成長しているのね。」

「ジジュニアもちゃんと成長してるでしょ。」

「ええ、もう、目が離せないくらいに動き回っちゃって大変。今もどこにいていいのかしらと。」

「天辺にいてたよ。レインと一緒にいてて寝てた。」

「はあ？いくら、高所が大好きだからって、まだ、4歳なのよ。」

「知らないうちのぼっちゃってるんだもの。レインがいるから大丈夫だよ。」

ぶつくさいいながら料理を仕込むジゼルと、手早く鍋をかき回すステファノ、パンが焼けたのを確認して取り出すジリアン。三人でてきばきと昼食の支度が進んでいく。以前と変わらない、スタンドフイールドックの日常がそこにはあった。

サイレンが鳴り響き、スタンドフイールドックのクルーたちは食堂に集まってきた。みんなが昼食を終える頃に、精気のないレインがジュニアを連れてあらわれた。

「ママ、ご飯食べに来たよ。レインをつれてきたよ。」

「はいはい。」

デイゴとジゼルの息子ジュニアはレインたちが戻ってきた時には、悪戯盛りの子供だった。元気がないレインを捕まえては連れ回し、子分のようにして遊び相手にしていた。ジゼルは最初とがめていたが、抗うこともなくされるがままのレインの様子に何も言わなくなつた。それはジリアンも同じだった。

二人が大人しく昼食を食べ始めると、ジゼルやジリアン、ステファノもキツチンを片付け終え、自分たちも昼食を食べ始めた。

「ジゼル、今日は晩御飯要らないからね。」

「あら、そうなの。どうして？」

「プラーナが戻ってきてて、晩御飯をご馳走してもらうことになつてるんだ。」

「まあ、それはそれは。ゆっくり楽しんでくるといいわ。」

「うん、そうさせてもらう。ひとりでエアバイクに乗れるしね。」

その話をしながら、ジリアンはレインをちらりと見たが、何の反応もなかった。会話すら入ってこない状態が続き、いつになったら、元にもどるのだろうと思った。

「レイン、昼からはちゃんとじいさまの手伝いをするんだよ。僕が

いなくても大丈夫だよね。」

「ああ。」

生返事が少々気がかりではあったが、すこしは体を動かさないと、余計に塞ぎこんでしまう。ジリアンは食事を終わると、食堂を後にした。

ジリアンがいなくなると、途端にステファノは話し出す。

「プラーナって、川向いの町の女の子なのか。」

「ええ、そう。でも、今は親元を離れて中等科の学校へ寮に入って通っているの。」

「レインの失恋相手は？」

「こら、ステファノ。」

「いいじゃないか、人の話を聞いていないみたいだし。」
確かにレインの反応はなかった。黙々と昼食を食べ続けていた。

「さあ、ジリアンから何も聞いていないからわからないわ。」

「きっと、気の強い女じゃないか。年上って話はデイゴが何か言っていた。」

「ええ！わたしは聞いてないわよ。」

罰を悪くしたステファノは、話題を変えようと考え込んだ。

「レインの母親って、そっくりなんだってね。今も、あんな感じなのかな。」

「そうね、デイゴの話だとちっとも変わっていないって言ってたわ。」

「まあ、あんなに童顔でかわいらしければ、気の強い女じゃないとだめだよ。」

「こら、また、そう言う。だめよ。」

ステファノは含み笑いをして、食事を終え席をたった。

「ごちそうさま。食器は片付けるよ。」

「ありがとう。」

レインが食事を終わると、ジュニアがついていこうとした。

「だめよ。レインはこれから、じいさまのお手伝いをするのだから。」

「僕もタンク、見てみたいよ。」

「だめ。パパに言われたでしょ。危ないからって。」

「ええ!?!」

「パパに怒られなくなかったら、ママとお昼ねしよう。」

ジュニアは仕方なく、その場で立っていた。

レインはお構い無しに食堂を出て行った。

「ほんと、いつになったら、失恋って治るのかしら。」

第二十九章 青い果実？ 1（後書き）

登場人物

レイン⇨スタンドフィールド（主人公・愛称レイニー）

ジリアン⇨スタンドフィールド（主人公の従弟・愛称ジル）

ロブ⇨スタンドフィールド（主人公の父）

カスター⇨ペドロ（クルー。通信士。愛称キヤス）

ラゴネ⇨コンチネータ（レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者）

デイゴ（スタンドフィールド・ドックのクルーで板金工）

ジェイ（スタンドフィールド・ドックのクルーで塗装工）

テス（スタンドフィールド・ドックのクルーで溶接工）

ジゼル（スタンドフィールド・ドックのクルーで食堂担当。デイゴの妻）

デイゴ・ジュニア（デイゴとジゼルの息子）

ステファノ⇨ジュリアーニ（スタンドフィールドドックのクルー、

北方民族）

テオ⇨アラゴン（ガラファンドランド・ドックのクルー）

シモン（ガラファンドランド・ドックのオーナー）

アン⇨ポーター（ダン⇨ポーターの実母）

セリーヌ⇨マルキナ（デューク⇨ジュニア⇨デミスト理事長の第六秘書）

エミリア⇨サンジョベーゼ（皇女殿下のルームメイト）

ジェフ⇨マックファット（レテシアの同級生。民族解放派。）

レティシア⇨ハートランド（主人公の実母）

マルティン・デ・ドレイファス（コン・ラ・ジエンタ皇国の皇帝）

セシリアの実兄。)

フェリシア＝デ＝ドレイファス(皇帝の第一皇女。)

コーネリアス＝アンコーナ(ワイナリー農園のオーナー・食品企業
の財閥の娘)

ピエトロ(コーネリアス付きの執事)

イリア(黒衣の民族、白髪の少女)

ウィンディ＝ゴールドンローブ(軍医)

レオン＝ゴールドンローブ(ウィンディの息子)

コリン＝ボイド(レインのクラスメイト)

ジョイス＝ボイド(コリンの父親)

プラーナ(ジリアンのクラスメイト)

第二十九章 青い果実？ 2

レイン一人で、タンクにグリーンオイルの種を入れ込む。ラゴネが栓をひねって、蒸留水を注ぎ込む。グリーン液体が水と交わらずに弾けて、ガラス玉のように水の中を動き回っていた。しばらくすると、タンクの底でグリーンオイルは丸い形のまま水の中に沈んでいた。ラゴネのスイッチで、底が回転し、液体は攪拌かくはんされていた。頂点の太陽がまぶしく当りを照らし、光合成を促していた。ガラス玉はなくなり、次第に水の色が透明な緑色に変わる。日差しを浴びると、輝きを増して、落ち着いた緑色になる。時間が経つと、緑色は段々濃くなっていく。そして、蒸留水をタンクの上部まで注ぎ込んでグリーンオイルは完成されていく。

空挺が到着するサイレンが鳴り響く。レインは空を見上げて、確認した。

「金魚だ。」

赤い空挺である郵便船を通称「金魚」と呼んでいた。

「修理じゃなさそうだな。郵便物かな。」

ラゴネはそういうと、レインに休憩するように手で合図を送った。濡れたタオルを顔に当て、日に焼けた肌を冷やしていると、通信が入った。

「レイン、手紙が来てるよ。」

ステファノの声だった。

「もう、ここはいいから、上に行っている。」

「はい、じいさま。」

濡れたタオルを首に巻いて、上半身裸のまま、タンクの側から離れた。

食堂にレインが入ると、郵便船の船長のモナロマーノが冷たい飲み物を飲み干して立っていた。

「おや、レインかい。ずいぶんと、たくましくなったじゃない。」
周りを見渡しても、船長以外のクルーがいない。台所にはジゼルがいたが、ステファノがいなかった。展望台の通信室からステファノが通信したのはわかっていたが、きつとモナの相手をしたくないから、逃げたのだろうとレインは考えた。

「ご無沙汰してます、ロマーノ船長。」

モナはレインに向かって歩いてきたので、レインはあわてて、手に持っていた上着を羽織った。ボタンを留めようとすると、モナが止めた。

「ずいぶんと鍛えたのね。いい体してるわ。顔はそのままなのにね。」

モナの息から、甘い臭いがした。飲み物がグレープジュースだとわかった。

「僕に手紙が届いてると、通信が入ったものですから。」

「ええ、ステファノが持っていたわ。」

「では、展望台に行つてきますので、失礼します。」

「あら、つれないわね。もっと、お話したいわ。」

レインは足早に食堂を出ていった。

甘い臭いとともに、きつい香水の臭いが鼻についてきた。グリーンオイルの臭いを嗅いでいた後なので、余計に強調されていた。

展望台のドアを開けると、ステファノが手紙を持って、振っていた。

「女の子からだよ。」

レインの心の中で、それがエミリアの手紙でないことはわかっていった。手紙が来るとしたら、コーネリアスだろうと。

ステファノから手紙を受け取り、差出人を確認した。

「やっぱり。」

でも、いつものかわいらしい手紙ではない。型押し紙に封印がされた手紙でかしまった感じがした。

ステファノは気を使い、展望台を出ようとした。

「いいよ、僕、上にあがるから。ここにいてて。」

無言で笑顔を傾けたステファノはマイクを手にして、デイゴに指示を出した。

「点検が終わったら、合図ください。」

展望台の横にあるドアを開けると、断崖絶壁に出る。岩山の天辺にあがる階段があつて、そこへレインはのぼっていく。天辺で座り込むと、手紙の封を切った。手紙を読み終えて、ため息をついた。

「誕生会って、たくさんの人が来るのかな。なんだか気が滅入るな。」

女の子の誕生会に行ったのは初等科のころで、そこにはたくさんの子供たちがいた。友達のコリンの誕生会は、コリンの両親とレインだけだった。

「ジリアンを連れて行こう。」

手紙はコーネリアスの誕生会の招待状だった。

手紙には小さなメッセージカードが入っていた。レインはその文章を読み上げた。

「普段着で来て頂戴。友達は招待していないので、レイン一人で来てね。」

読み終えて、一抹の不安がよぎった。

ジリアンがエアバイクで、オホス川を渡ると、街並みがひろがる道を進んでいった。ひさしぶりに眺める景色に、ひとりでエアバイクに乗っている爽快感がした。以前は体も小さく体力もなかった自分がひとりでエアバイク乗っていることに優越感を感じていた。

プラーナの家に向かっていくと、コリンとボイドの店の前を通り過ぎる。店の中をチラリと見ると、コリンが中にいないのがわかった。旅立つ前のプラーナの誕生会で殴られた事を思い返していた。

「もう、殴られることなんてないだろう。」

それだけ自分自身が強くなったと、感じていたからだ。

プラーナの家の前でエアバイクを止めて、玄関前のチャイムを鳴ら

そうとしていたら、後ろから声をかけられた。

「帰ってきてたのか。」

振り返ると、コリンが白衣を着て立っていた。

「ああ、コリン。うん、帰ってきたんだよ。」

コリンの白衣は、薄汚れていたが、甘い臭いがしていた。それはケ
ーキをプラーナのところへ届けにきたことをわからせくれた。

「配達に来てたの？」

「ああ、そうだよ。注文もらったのでね。」

チャイムを鳴らそうとすると、コリンが手を掛けて止めた。

「帰ってきたのなら、レインはなぜ、俺に会いに来ないんだ。」

しばらく黙ってジリアンは重い口を開いた。

「会いたければ、会いに来るといい。レインに会えば、理由がわか
るよ。」

「大怪我でもしたのか。」

「そうなら、そういうよ。そうじゃないんだ。言葉にするより、一
目見たらわかるよ。」

「わかんないこという奴だな。はっきり言えよ。」

「友達だろ、コリン。だったら、何も聞かず、レインに会いに来れ
ばいいんだ。」

「あ、そう。相変わらずだな、お前は。」

けんか腰でも物を言うのも、同じだろうと言いたげなところを押さ
え込んで、ジリアンはチャイムを鳴らした。

プラーナに会うのは2年ぶりだった。女の子というのは、すぐに大人っぽくなるのだなとジリアンは思っていた。眼鏡をかけていたはずなのに、かけていない。いつもまとめ髪で質素な感じのプラーナがウェーブ髪にリボン巻いて、華やかにみえた。白い肌にピンク色が指していて、より一層女の子らしさを強調しているように思えた。照れくささから、目をあわすことができずにいた。

「ひさしぶりなので、ジルもどう声をかえたらいいのかわからないね。」

プラーナの父親が声をかけて会話を促したが、ただ、うつむいてうなづくことしかできなかった。それを気遣ってプラーナは学園生活を話し始めた。育った環境の違う女学生が集まっているなか、友達ができたのだと嬉しそうに話をした。勉学に励むことができるのも、ジリアンの支えがあったからこそと口にされて、ジリアンはひたすらに謙遜してみとめようとしなかった。以前のように毒気づくことができない。言いたいことも言えず、変わってしまったように思えるプラーナをみて、悲しく感じていた。プラーナと母親が台所へと用事をしに席を立ったときに、プラーナの父親がそつと、声をかけた。

「ずいぶんと垢抜けてしまって驚いたのはわたしも一緒だよ。でも、中身はぜんぜん変わっていないよ。」

「ええ、それはもう、わかってるつもりなのですが。」
プラーナの両親はジリアンのことを家族のようにかわいがってきた。スタンドフィールドドックでの居心地の悪さを感じたときから、開放されるような感覚がここにはあった。プラーナと接していて、子供のままでいられないことがなんとなくわかる気がした。

「ジルもずいぶんとたくましくなってきたじゃないか。目を見張るようだよ。きつと、プラーナも同じことを思っているよ。」

「そうですね。僕はまだ13歳だし、これからもつと鍛えていかな
いとおもっているのです。」

「スタンドフィールドドックでの作業は大変な重労働だと聞いたこ
とがある。家業というのはいろんな重荷を背負うことになるだろう
けど、ジルなら大丈夫だと思うよ。テレンス先生もそう言った。
レインとジリアンなら、将来が楽しみだね。」

ただただ、笑顔をかたむけることしかできなかった。将来はたしか
にスタンドフィールドドックを担っていく後継者にならなくては
いけないことぐらいはわかる。それが当然だと思っていたからだ。レ
インが違う考えを持っていたことに驚いたこともあったが、今改め
て、他人に言われて、抗う気持ちがでてきた。

「そうですね。僕はスタンドフィールドドックのほかに居場所なん
て考えことが無い。プラーナの将来性を考えるとうらやましいです。」

プラーナの父親はこの時まずいことを口にしてしまったと思った。
それはプラーナとは生き方が違うことを意味していたからで、ジリ
アン自身それを理解していた。プラーナとの将来を思い描くことが
できないでいたからだ。

「ジル、君には君の可能性があると思う。そこにプラーナの将来性
が重ならないなんてことはないと思うよ。もっと前向きに考えて生
きてほしいな。」

しばらく考え込んで、ジリアンは唇を噛んだ。

「はい。わかりました。」

精一杯の素直な気持ちを口にした。

ジリアンはプラーナの家で夕食を終え、別れの挨拶をして、家を出
た。エアバイクに向かうと、そこにコリンが立っていた。

「いま、お帰りかい。」

「やあ、コリン。どうしたんだよ。」

「エアバイクに乗せてもらえないか。」

「どこへいくの？」

「もちろん、レインに会いに行くんだよ。」

「ええ?!」

「会いに来てって言ったのは、おまえだろう。」

ジリアンはしびしび、エアバイクにコリンを乗せた。ヘルメットをかぶらせ、自分もかぶろうとしたときに、プラーナの2階の窓から心配そうに眺めるプラーナの姿が見えた。笑顔を向けて、手を振ると、プラーナも手を振った。

「熱々ぶりは相変わらずだな。」

「離れていてもこころが通じ合っているということだよ。やきもちやいてるわけじゃないよね。」

「まさか!」

コリンはジリアンのヘルメットをこぶしで軽く叩いた。

「冗談だよ。しっかりつかまっててよね。」

「おう。」

コリンが背中にしがみつき、両手が前にまわってきた。エンジンをいれて、アクセルを踏み、バイクを走らせた。コリンと二人でエアバイクに乗るなんてことは以前では考えられなかったことだった。

あのまま、学校生活を続けていても、二人の隔たりは縮まらなかつただろう。そう、考えると、レインとエミリアとの間にできた隔たりはいつか縮まるのだろうと思った。

薄暗い夕闇の中に街灯が明かりを放ち始めた。静まり返る街中をエアバイクは走っていった。

第二十九章 青い果実？ 4

ジリアンがスタンドフィールドトラックの岩山のふもとに到着し、エアバイクを格納しようとしたとき、足音が聞こえてきた。コリンがあわてて、バイクから降りたので、誰だかわかった。

「いま、もどってきたんだね。ジル。ふたりはいつの間に仲良くなつたんだ。」

コリンはレインを睨んでいた。挨拶もしないばかりか、生気が感じられない。いつものレインだと思えなかったからだ。

「ご挨拶だな、レイン。もどってきたのなら、連絡ぐらいくれてもいいだろう。会いにきたんだよ。」

「あ、そうなんだ。ごめん。」

レインは手に持っている封筒を握り締めていて、それがコリンの視線の先にきたことで、ポケットに隠した。

「なにがあつたんだよ。以前のお前じゃないみたいだ。」

レインはため息をついた。あたりを見渡し、ジリアンがどこへいったのかと探した。

「いろいろあつたんだよ。うまく話せないんだ。コリン、ほんとごめん。」

コリンは白衣の大きなポケットから、紙袋を取り出し、レインに差し出した。

「これ、俺が焼いたパンなんだ。焼いただけじゃないんだ。小麦粉からちゃんをつくつたんだ。明日の朝にでも食べてくれよ。」

受け取って礼を言うと、涙が出そうになった。

「なんか、何を言っているのかわからないけど、言ってもうまく話できない感じがして……。」

「いいよ。もう。話したくなければ、話さなくていい。クレアさんのことはテレンス先生から聞いた。人が亡くなったことは悲しいことだけど、クレアさんの死は多くの人が悲しんでいる。お前だけじ

「やないよ。」

「わかってるよ。それだけじゃないから。」

「だろうな。でも、あせることないよ。元気になってくれればいい。友達として力になれるなら、してやりたい気持ちはあるから。」

「ほんとありがとう。」

「いいって。店にも顔を出してくれたよ。父さんや母さんがどうしているかなって口にしていたからさ。」

「うん。」

コリンは帰ろうとしたが、どうやって帰ろうか考えてから、叫んだ。

「ジリアン！俺を川向こうまで送ってくれ。」

暗闇の奥のほうで、声がした。

「僕が行くの？」

「そうだよ、レインは元気がないから無理だよ。」

「悪い、ジル。送ってあげてくれないかな。」

「わかった。それよりレイニー、僕に用事があったんじゃないの。」

わざわざここまで来て」

「あとで話すからいいよ。」

コリンもジリアンも、ここで話せない理由があるのだろうと、考えていた。

二人はまたエアバイクにまたがり、レインを背にして、ジリアンはエンジンをかけた。

「またな、レイン。」

「うん。ありがとう、コリン。」

レインが手を振ると、コリンは右手を上げて返事をした。その様子をミラーでみて、ジリアンは安堵した。いつものレインにもどった気がしたからだ。

エアバイクは暗闇の中を突き進んだ。月は雲が隠してしまい、明るさを失っていた。エアバイクのライトが道を照らし、不安な思いに一筋の光を放っているかのようだった。ジリアンはコリンが握り締める力の強さに筋肉の付き方が少し違うと感じた。自分たちも成長

していたように、コリンも成長したのだと思った。

ジリアンがコリンを川向こうまで送ってもどり、自分の部屋に来ると、そこにレインが待っていた。

「あ、話があるんだったね。」

「うん、そうなんだけど。別に今、話しなくてもいいかなって思ったんだ。」

含みのある言い方をするんだなって思ったジリアンだが、問いただしたほうがよさそうだと思った。

「話があるなら、今、話しようよ。」

「うん、特に。今度の休みの日にエアバイクに乗っていくんだ。」

「レイン、一人で？」

「うん、そう。」

「何をしに？」

「何をしにって……。」

考え込んでレインはうそをついた。

「じい様に言われて、ぶどう園に用事しに行くんだよ。」

「へえ、そうなんだ。」

納得がいかなかったが、わかった振りをした。

「エアバイクを使うんだね。僕なら、外にでるつもりないから大丈夫だよ。」

「じゃ、おやすみ。」

「おやすみ。」

レインは手紙をポケットの上から手で押さえた。ジリアンには黙っておこうと思った。そして、通称じい様のラゴネに口裏を合わせてもらわないとだめだと考えた。

翌朝、ジゼルに頼んでコリンのパンを暖めてもらった。ほのかにハーブの効いた臭いと味がするパンだった。甘いパンじゃないのはコリンらしいなと思った。朝食を終えて、早速ラゴネのところへ向かった。

昨日、仕込んだグリーンオイルはまだ、完成していなかった。薄い緑色の液体から草の臭いがした。波打つ液体から、ほのかにしめっぱい臭いもした。数分、そうやって臭いを嗅いで眺めていると、後ろから声を掛けられた。

「両親はそうやって、リラックスをこころがけていたよ。」
振り返ると、ラゴネが笑顔で立っていた。

「おはようございます。じいさま。」

「おはようさん。昨日よりは元気そうだな。」

「ええ、いま、すこし元気になりました。お願いがあるのですが。」
「なんだね。」

レインは口裏合わせの話をしだした。困った顔をしたラゴネだが、
「承知した。」と答えた。

「おまえさんは、本当にあの二人の息子だな。」

「どうしてですか。」

「ほんとうのことをうまく話すことができないでいた。ほんとうに大切なことをなにかのしがらみで伝えることができないでいたんだよ。」

ぽかんとするレインの顔を見て、ラゴネは笑いをこらえた。レインはそれから眉をひそめた。

「ジリアンはわかっていているだろう。この時期にブドウ畑に行く用事などないことをな。」

「う、そうかな。」

「まあいい。わからない振りをするのが、あの子の優しさかもしれない。」

そういうと、高笑いをして、ラゴネは自分のいつもの居場所にもどっていった。

そして、困った顔をしたレインは、自分の不甲斐なさを痛感して、
こころを痛めていた。

「もう、子供じゃないんだもの。僕も、子供っぽい振る舞いするのはやめなくちゃいけないな。」

そうつぶやいても、結局何も成長していかないかのように感じた。
そして、コーネリアスの誕生会でとんでもないことに巻き込まれ自
分を取り戻すことになるのだが、そのことを知る由もなく、安易に
その日が来るのを待っていた。

エアバイクで、ぶどう園に到着すると、グリーンオイルの燃費で水蒸気のエネルギーで動くエアカーのお迎えが待っていた。中から使用人らしき女性があらわれた。

「レイン様ですか。」

「ええ。」

「お待ちしております。わたくし、コーネリアスお嬢様付きのメイドでマリんと申します。」

「よろしく。マリンさん。」

エアカーに乗るよう促された。

「あの、僕はどこへ連れて行かれるのですか？」

「アンコーナー家の別荘でございます。そんなに遠くございません。」

「はあ。」

納得が行かない様子だったが、レインはエアカーに乗り込んだ。マリンは助手席にのり、運転手は男性だった。軽く会釈をして、エアカーを発進させた。

どこまでも続くかのようなぶどう畑を飛び越え、山間の中を進むエアカーは森の中にひっそりとたたずむ館の広場にホバリングして、静かに降り立った。

館からは誰も出迎えずに、下ろされたレインはそのままマリんに誘導されて、館に入った。ゲストルームに通されて、マリンがポールにかけている洋服を指して言った。

「正装でお願いします。服はこちらで用意しておりますから、お着替えください。」

面倒なことになっていくのだろうとレインは訝しげに、服に手を掛けた。マリンはその様子を確認するかのようになり、会釈をすると部屋を出て行った。

レインが着替えを終えて、窓際から外を眺めると、うつすらと霜が降りてきた。

「山間は天候が変わりやすいけど、こつも変わっちゃうのかな。」
館の周りの森さえ見えなくなってしまつて、次第に不安になつてきた。

「ただの誕生日じゃないか。」

レインはプレゼントととして用意したのは、グリーンオイルで生成した香水だった。ラゴネが教えてくれた粋なものだった。グリーンオイルで生成しハーブの臭い付けをしたものをロブが愛用しているのは知っていた。この時はじめて、ロブの母親が好んで作り身につけていた事を知つた。小瓶に入れた翡翠のように輝く香水を手に取り、亡き祖母を思つた。

「きつと、喜んでくれるだろう。」

しばらく窓を眺めていたが、館から数人の人々が出て行く姿を見かけた。どういう理由があつてそのようなことになつたのか、その時には考えようともしなかつた。出て行く人々が招待された客ではないことぐらいはわかつていたが、使用人だとしても普段の服装をしていたので深く考えなかつた。

ノックする音が聞こえて、レインは部屋から出された。

レインが通されたのは、大広間で長いテーブルがあり、テーブルクロスは二人分しかセツティングされていなかった。コーネリアスはおらず、メイドのマリンがレインの椅子を引いた。

「お嬢様は支度ができ次第、こちらにお見えになります。なにかお飲み物を用意いたしましょうか。」

「キョロキョロと当りを見渡していたのを子供っぽく思いやめ、テーブルの上にある水を差して言った。」

「いえ、水がありますから、結構です。」

「かしこまりました。」

マリンは会釈をして、後ずさりし、早歩きで部屋を出て行った。落ち着かないレインは大広間の様子を眺めていた。

「他に人はいないみたいなんだな。」

外はうつすらと暗くなり、元より霜が降りているので、外の眺めなどわからなかった。

後方のドアが開く音がしたので、振り返るとドレスアップをしたコ―ネリアスが入ってきた。

「お待たせしてしまつてごめんなさい。」

ワインレッドのベルベット生地を胸元にあつらえ、腕にはシースルーのパームスリー、ウエストは締め上げているので細さを強調し、ベルベット生地にレースを合わせたマーメイドのアンダーで大人っぽく魅せるドレスだった。そして、光り輝くルビーの宝石が胸元を飾っていた。

「あ、お誕生日おめでとう。」

「ありがとう、レイン。来てくださつて嬉しいわ。」

「こちらこそ、招待してくれてありがとう。」

「楽しいひと時を一緒に過ごしてくださいね。」

その言葉にすこし衝撃を感じた。メイドのマリンがいるとはいえ、ほとんど二人つきりだ。そして、廠かでハイソサエティな雰囲気にもまれていて、しり込みしそうな勢いだった。

「いや、なんか、僕みたいなのが、こんなところにいるといいのになつて思つてしまう。」

「まあ、気後れなんてなさらなくていいのよ。レイン、あなたは立派な紳士だわ。だから、招待したの。」

とても、13歳の少女が言う言葉に思えなかった。レインよりむしろジリアンの方が口が達者な分似合っているのではないかと思うくらいだった。

「マリン、食事の用意を。」

マリンは軽く会釈をすると、部屋を出て行った。レインはしばらく茫然としていたが、思い出したかのように、ポケットから、小瓶を取り出した。

「ごめんね。こんなものしかプレゼント用意できなくて。」

立ち上がった、手を伸ばして、反対側に座ったコーネリアスに小瓶を差し出した。

「まあ、素敵な液体。何かしら。」

「香水なんだ。僕が作ったんだ。作り方は教えてもらったんだけどね。」

「ほんとうなの？レインったら、とても素敵なことができるのね。嬉しいわ。」

「気に入ってもらえるかどうかかわからないけど。」

「食事前で失礼するけど、臭いを嗅いでいいかしら。」

「ああ、もちろん。」

コーネリアスは小瓶のふたをそつとあけて、深呼吸するように目を閉じて臭いを嗅いだ。

「すてき。森の中にいるような感じがするわ。」

「そう。グリーンオイルで生成したから、グリーンノートなんだ。嫌味がない分、華やかさはないけど、リラックスできる臭いだと思うんだ。といっても、教わったばかりのことを口に行っているんだよね。」

照れ笑いしながら、レインは満足そうだった。

「レインが施したのなら、何でも素敵だと思う。すばらしいわ。」

「ありがとう。」

「いえいえ、それほどでも。」

程なくして、料理をのせたワゴンを持ってきてマリリンが部屋に入り、料理が皿に盛られて、二人の前に出された。コーネリアスが感謝の言葉を口にして食前の祈りを捧げ、二人は料理を食べ始めた。

食事を始めて、気がついた。コーネリアスにいつも付いていた執事のピエトロがいないことに。そのことを口にすると、コーネリアスは用事を出かけているとだけ言った。レインは不審に思った。コーネリアスの眉間に一瞬皺が寄ったからだだった。

「レイン様、料理が口に合いましたでしょうか。」
「うん、とっても、美味しいよ。」

ジゼルのスタミナが付く料理と違って上品な深い味わいだが、野菜を中心にした素朴な感じは変わらなかつたからだ。

「マリリンさんが作つたのですか。」

「いいえ、料理人です。」

「ほかに使用人の方がいらつしやらないように思えたんだけど。」
カチン。

コーネリアスがフォークを皿に当てた音がした。

「どうかしたの？」

「いいえ、何でもないわ。行儀が悪くてごめんなさい。」

「いや、そんなことわからないから、気にしなくていいよ。」

レインは二人の顔を交互に見た。二人とも引きつった顔をしているようにしか見えなかつた。気まずいことを口にしたんだと思つた。

「こちらこそごめん。気に障るようなことを言つたんだね。」

「いいえ、そうではありません。気になさらないように、お食事を続けてください。」

マリリンは少なくなつたレインのグラスに水を注いだ。レインは気まぐさを補うように食事を進めた。そして、マリリンは下げた皿とともにワゴンを引いて部屋をでた。コーネリアスはテーブルにうつ伏せするように前かがみなりレインに話しかけた。

「ピエトロの替わりにマリリンがこの屋敷でひとりまとめなくてはいけないから、気を張っているのよ。」

そう言っているコーネリアスの胸元が真正面に目に飛び込み、胸を寄せているので谷間らしきものが見えて目をそらした。コーネリアスはそのレインの様子を見て、笑顔を傾けた。

「そうなんだ。」

恥ずかしさから、一言しか言えなかった。

マリンがまた部屋に入ってくると、ワゴンにはワイングラスが二つとワインの瓶があった。レインはお酒を飲んだことがなかった。10代でも食事をするときはワインぐらい飲むのだろうかと考えていた。

「レイン様、ワインをお持ちしました。お酒の方は、いかがでしょうか。」

「僕は飲んだ事が無くて。」

「マリンが持ってきたワインはあのブドウ畑で取れたもので製造したワインなのよ。」

「へえ、そうなんだ。」

「わたしたちにぴったりな未成熟なワインでもあるの。」

レインはコーネリアスの言葉に啞然とするしかなかった。表現の意味が理解できていなかったからだ。ラゴネがワインの熟成とグリーンオイルの熟成は似ていると聞いたことがあったが、そのことだろうかと考えた。

「とてもフルーティな味わいです。苦味も特にありませんから、初めての方でも美味しくいただけれると思います。」

マリンは二人の前にグラスを置き、ワインを注いだ。マリンはレインの耳に小声で言った。

「乾杯の言葉をおっしゃってください。」

レインはちよつと恥ずかしさを出して、グラスを手にして言った。

「誕生日おめでとうコーネリアス。」

「ありがとう、レイン。」

満面の笑みでコーネリアスはレインを見ていた。レインは乾杯の後、グラスを口につけた。甘酸っぱいぶどうの香りが口に広がり、ジュー

「スのように思えて、量を多めに飲んだ。」

「ワインって、美味しいね。」

ほめ言葉のつもりだった。

「ええ、ママの自慢のブドウ畑ですもの。太陽をたくさん浴びて収穫されたものだとしても甘いのだ。」

レインは喜んでグラスのワインを飲み干した。そして、またマリンはレインのグラスにワインを注いだ。そのことが何回か続いて、食事を終えたころには体が思うように動かず、椅子から立ち上がると床に倒れてしまった。レインは倒れる寸前までしか記憶がなかった。

陽が沈み、夕闇が迫ってきて、ジリアンはレインの帰りが遅いことを心配し始めた。ジゼルに相談して、向かいに行くことにした。ジゼルが気を利かせて、ロボの同級生ヴァンに連絡をして、レインの居所を確認した。

「え、何ですって、まだ、もどってきていないの？」

ジゼルの話し声に気が気でなくなったジリアンはディゴに頼んでテントウムシの用意をお願いした。

「どうしたの？ジゼル。」

「ぶどう園にアンコーナ家のエアカーが迎えに来たそうだけど、まだ、もどってきてないって。エアバイクはそのままって。」

「アンコーナ家って・・・、あ、レインの手紙友達。」

「知ってるの？」

「ああ、うん。爆破事故のときにいてた病院でいろいろお世話になった人なんだよ。」

「ぶどう園のオーナーだから、有閑マダムかなにかしら。」

「いや、僕と同じ年の女の子だよ。」

「まあ。」

「ヒューっ、やるね、レイン。」

「やめてちょうだい、ステファノ。」

「ふっ。だって、15歳で父親になった子供だろう。蛙の子は蛙だ。」

つていうじゃないか。」

「そんな言い方しないでちょうだい。」

ジゼルもジリアンもステファノを睨んだ。

「おお、怖いよ、退散退散、ボス、退散するよ。」

ステファノが食堂から出て行く姿を心配そうにジゼルは眺めていた。

「まさか、レインがそんなことするわけないわよね。失恋した人に会いに行くわけないわよね。」

「うん、別のひとだよ。コーネリアスはレインに気があるみたいだけれど。」

「あら、そうなの。」

ジゼルは余計に不安になった。なぜなら、自分も同じ年頃にはやましい事を考えていたからだ。

「女の子はおませだから、ちょっと大丈夫かしら。」

「レインは大丈夫だとおもうけど、コーネリアスはどうかかな。」

電話のベルが鳴り、ジゼルが取るとそれはロボの同級生ヴァンからだった。電話を切って、ジゼルは言った。

「アンコーナ家の使用人から様子を聞いたらしいわ。そして何だかおかしいと言ってたそうよ。今からだと夜遅くなるから朝早くこっちに来てほしいって。ジリアンと一緒にいつてくれるみたい。」

「そのほうがいいかな。場所はよくわからないし、大人の方が一緒の方がいい。様子がおかしいってどういうことなの？」

「屋敷の使用人が一日暇を出されたいらしいわ。執事の方もいらつしやらないみたいなので、おかしいって言ってたわ。執事の方と連絡をちゃんと取っておくと行ってたわ。」

「そうなんだ。犯罪とかに巻き込まれて無ければいいけど。」

デイゴがテントウムシの用意ができたと言いに来た。一部始終を説明すると、デイゴは深くうなづいた。

「犯罪に巻き込まれるようなことがあったとしたら、レインなら、大丈夫だろう。心配はいらない。」

「そうだね。」

「テントウムシならエアバイクを収納できる。明日の朝のほうがい
いだろ。」

「うん、そうするよ、ディゴ。ありがとう。」

ディゴはシリアンの肩をポンと叩いた。それがなんだか、シリアン
にとって、安心感を与えてくれた。

第二十九章 青い果実？ 7

レインの部屋での臭いは、グリーンオイルの草の汁が染みたと土埃が混じったようなものだった。いま、臭うものは違う匂いだった。甘いバラのような感じだと思った瞬間にレインは目を開けた。視界には臙脂色えんじのシーツが見える。自分のベッドじゃないことに気づく。うつぶせになっていることに気がつき、掛けてある布団をすこしめくって自分が裸になっていることに気がついた。

「え?!」

上半身を起し、振り返ってみた。そこには赤い髪の少女が寝ていた。後姿なのでレインは恐る恐る顔を確認するとコーネリアスだった。布団をめくったことによりコーネリアスの白くて透き通った肌の背中があらわになった。

「うわあっ。」

声を上げた途端、人の気配に気がついて向きなおした。

「お目醒めですね、レイン様。」

コーネリアス付きの執事ピエトロだった。

「あの、あの、これは・・・。」

怯えた様子のレインにピエトロはガウンを掛けた。

「お静かに、そして、落ち着いてくださいませ。大丈夫です。」

ピエトロはレインがガウンをきちんと着れる様にほっしょ幫助した。

「私の不徳の致すところで、レイン様にはご迷惑をおかけしました。」

ピエトロは淡々とレインに話しかけた。別室に着替えを用意してあるからそちらで着替えるように言われて、レインは青い顔で恐る恐る立ち上がった。

「事情は後ほど説明いたしますので、今しばらく着替えられてお待ちください。」

ピエトロは深々とレインに頭を下げた。レインはわけもわからない

まま、唾を飲み込んで落ち着くようにと自分に言いきかせた。

「別室で待つてます。」

か細い声で言うのが精一杯だった。そして、静かに部屋を出て行った。

ゲストルームでは、ジリアンとロブの同級生ヴァンが待たされていた。

ジリアンがぶどう園に着いて挨拶もそこそこにヴァンと一緒にアンコーナ家の屋敷に向かった。ヴァンが執事のピエトロから聞いた事情は道すがら聞いた。屋敷に到着して玄関のドアをノックすると、中からメイドが出てきたが、右頬が赤く腫れ上がっていた。ゲストルームに通されて、執事のピエトロが待つていた。ヴァンには一度出て行ってもらって、ジリアンと二人だけにされ、詳細な事情を聞くこととなった。

「コーネリアス様が通学されている女学校で事件が起きました保護者が開かれ、保護者代理人として私が参加しました。1日この屋敷を空けることになり、代わりにメイドのマリンに託しました。」マリンに悪気があってやったことではないと説明をして、すべては監督不行き届きだとピエトロはジリアンに頭を下げた。

女学校でロストヴァージンの話題が持ち上がった。多くは婚約者やボーイフレンドと事を成す。コーネリアスの場合、母親の遺言で好きな異性と結婚させたいというところから婚約者はおらず、母親亡き後ふさぎ込んでいたのでボーイフレンドがいなかった。相手としてこれ幸いとレインを嘘の誕生日会で呼び出して、事を成そうと計画したとのことだった。

「私くしピエトロは、レイン様を信じております。」

「信じる？」

「はい。レイン様と友達としてお付き合いしていることについてはいままで口出したことはありません。それはレイン様がふしだらな行為をされる紳士とは思ってないからです。」

「そういうことですか。」

「性教育は学校で勉強されていらっしやるでしょうが、いざとなれば、理解できていないことでもあります。」

ジリアンは顔を真っ赤にして話を聞いた。

「とくに、女学校での噂話でろくに内容を把握していないことが多いです。こちらの見解としては何も理解していないだけで、行為には及んでいないと推測しております。」

「お酒を飲まされてもですか。」

「その辺はレイン様がまだ成熟されていないということ前提ですが、コホン。」

ピエトロは話しの内容がある程度オブラートに包んだつもりだった。「今しばらくお待ちください。レイン様がお目覚めの際、確認をしまして、お帰りいただくように致します。」

「確認って何をですか。」

「本当に行為に及ばなかったかどうかです。」

「そんなの、確認できるのですか。」

「はい。」

断言して言うピエトロに、ジリアンは知らぬ怖さを感じた。そして、おとなしく待つしかないと思っていた。ピエトロが退室すると、ヴァンが部屋に入ってきた。事情は他の使用人に聞いたらしい。時間が経つこと小1時間。ノックする音が聞こえると、レインが中に入ってきた。

「ジル！」

泣きはらしたレインを見て、ジリアンは眉間に皺を寄せるしかなかった。

「こんなことくらいで泣かなくても。」

毒を吐くとレインはふくれっつらをした。

レインの後ろにピエトロが立っていた。

「大変お待たせしまして、申し訳ありません。疑いが晴れた事を申し上げます。」

「疑い？」

「ええ、使用人がレイン様を疑って、調べないと気がすまないと申しまして。」

「どうして？」

レインが質問すると、ジリアンはレインの服を引っ張って、制止した。

そして、ヴァンが口をついた。

「使用人でお嬢様を孫のように大事に思っている人がいるのです。気持ちにはわからないわけではありません。」

「調べるって何を？」

ジリアンの制止も聞かずにレインは口にした。

「ロストヴァージンしていません。」

「ええ?!」

「おそらくは、事を成したと思い込んで眠りにつかれたのだと思います。実際にはなにもございません。ご安心ください。」

「そ、そんなものなの？」

「儀式みたいなものだよ。裸で寝ているだけで大人になった気分になったのでしよう。」

安心した表情のヴァンをみても、不に落ちないレインだったが、ジリアンに促された。

「納得してなくても、質問しなくていいよ。」

「じゃ、ジルが説明してくれるの？」

「するわけじゃないでしょ。レイニーは僕より年上じゃないか。」

ジリアンは呆れた。ヴァンは笑いを堪えていた。レインは恥ずかしさで下を向いた。

「そんな言い方しなくてもいいじゃないか。」

「みなさんにはご迷惑をおかけしました。後日、お詫びをしに参ります。今日はこのままお帰りください。」

「あの、コーネリアスには……。」

「私くしの方から、叱責いたします。はじめです。」

「なんだか、せつかくのおもてなしを台無しにしてしまった感じがして、そのお。」

「心を痛めていらっしやるのですね。申し訳ありません。レイン様はお嬢様に素敵なプレゼントである香水を下さりました。その好意を台無しにしてしまわないようにお嬢様にきちんとしてもらいます。」

「わ、わかりました。」

レインは納得した振りをした。

屋敷を発つ際、ジリアンは気になってピエトロに質問をした。

「あの、メイドさんはどうされたのですか。」

メイドのマリンがピエトロの後ろにたっているので、ピエトロは振り返った。右頬の腫れをみて、理解した。

「私くしは女性に手を上げたりしません、マリンに手を上げたのは年配の使用人です。お嬢様を孫のように思っている人です。騙された上に取り返しのつかないことになりそうだったことへの叱責のつもりだったのです。」

「そうですか。気に障ったのならごめんなさい。」

「いえ、そんなことはありません。お気をつけてお帰りくださいませ。」

ピエトロは深く頭を下げ、三人を見送った。

第二十九章 青い果実？ 8

「あはははは、あはははは」

スタンドフィールドドックの展望台に笑い声が響いた。ステファノだった。

「あははは、レイン、最高だな。」

レインは下を向くしかなかった。苦みばしった顔をして、ステファノの笑いがおさまるのを待った。

「ああ、俺、好きだな。そんなレインがさ。あはは。」

後ろから風が吹き込む感じがしたので、振り向くとジリアンが立っていた。

「レイニー、恥ずかしいから誰にもしゃべらないでって言ってなかった？」

「あ、ジル。そ、それは、そのお、ステファノに質問があつて、話すしかなくて。」

ジリアンはしばらく、二人をにらみ付けていた。

「いつの間にそんなに仲良くなったわけ？まったく。」

ジリアンは紙と鉛筆を取り出して、岩山の天辺へのドアを開けて出て行った。

レインが困った顔でステファノを見ると、お手上げだという素振りをしていた。ステファノの笑いがおさまったので、レインは質問をはじめた。

「酔っていても、反応ってしないものなの？」

恐る恐る口にしたら、笑いを堪えるステファノに対して、真剣な目で見つめると顔色を変えて返答した。

「そういうこともあるということだな。割とデリケートなんだよ、オトコって生き物は。」

納得がいかない様子で、考え込んだ。

「局所を触られても反応しないときはしないんだな、これが。」

「へえ。」

年頃だから、性教育について無関心でもなく理解していたつもりだったが、コーネリアス付きの執事ピエトロやロブの同級生ヴァンが口にしていたように、実際の体験じゃぜんぜん違うことなのだろうと思うようになった。

「好きな女性とそういうことになっても、反応しないものかな。」

ステファノは鼻で笑った。レインはふてくされた。

「それが聞きたかったんだな。」

レインの顔色をみていたが、的を得ていたようだ。

「反応しないこともあるだろう。緊張していて肩に力が入っていたり。まあ、そういうのは、お互いのコミュニケーションで成り立って雰囲気的大事ってことかな。」

「ふうん。」

ステファノは、仕方がないかなと思っていた。初めての体験が何もなかった、しかも自分の同意のもとでもないところからくるから、心配になって仕方がないのだろうと。

「失恋したって話だったよな。生きているんだったら、失恋したぐらいであきらめるなよ。」

「そう、言われても。」

「恋敵ライバルでもいるのか。」

「婚約者がいるんだ。仲良くしていたし。」

「相手から奪ってやるくらいの気持ちはもてないのか。」

「そんな、けしかけられても。」

「ふっ、なんかはつきりしない言い方だな。」

「好きなのかどうかも、わからなくて。ただ……。」

「ただ？」

「胸が苦しくなるんだ、考えると。」

「まあ、それを恋だと言って言っただけだな。」

まだ、十代だものなとステファノは納得した。

「ステファノは、どうなの？」

恐る恐る聞くレインに対して、ステファノはつぶやいた。

「そう来たか。」

ステファノはスタンドフィールドドックにきて、あまり周囲に素性を話したगरなかつた。話さないのなら、無理して聞き出すこともないとデイゴは言った。ほかの者もそれに同意した。それはロブがカスターを連れてきた時と同じだったからだ。

ステファノが話をしたのは、自分が生まれ育った村が黒衣の民族に襲われてなくなったことからだった。村人は武術を身に付けて、村を自らを守ってきた。自然災害によって村で生活できなくなり、男たちは村を出て出稼ぎにでた。身につけた武術で生計を立てていた。残った女たちは身につけた武術で村を守ったが、黒衣の民族による襲撃を受けて、若い女たちは連れ去られた。村は壊滅状態になり、出稼ぎに出た男たちは帰る場所を失った。まだ、10代だったステファノは村を出たばかりだった。

「惚れた女は、俺より図体がかくて俺より強かった。村を守るために盾となって、命を落としたと聞いた。彼女のおかげで幼い子供たちは村を脱出することができたとも聞いた。」

レインは最初に言ったステファノの言葉の意味をかみ締めた。

「惚れた女が生きているのなら、あきらめるなと俺は言いたい。」

唇をかみ締めて返答できずにいるレインに、ステファノは勘付いた。

「もしかして、惚れた女って、軍人なのか。」

レインは横を向いた。

ジリアンは岩山の天辺で紙を広げた。それは天気図の原紙だった。空を見上げ、雲の様子で判断をし、気圧の線を書き込んでいく。雲の動き、早さを見極めて、風の強さを確認する。そうやって、得意の天気図を描きこんでいった。

時に手を止めて、考え込んだ。レインのことを。いつも一緒だった。2歳違いで体の成長やら学業の違いは多少あっても、なんら変わらなかつた。いちばんの違いの点は容姿だった。レインは初等科から、

女子生徒にまわりつかれていて、女の子が騒がなかったことはなかった。それはいまも変わらないと思っていた。

「初等科の女の子たちなんて、かわいい者だったんだな。」

成長するにつれて、度が越えていくのがわかったのは、ジリアンの知らないところで、レインが女性にからまれていくことだった。車椅子の老婆、白髪の女性カオル、コーネリアスと。

「大人に成りたくないな。」

レインをスタンドフィールドドックにつれて帰ってきた時、ジリアンはそう口にした。その言葉に返して、デイゴが言った言葉を思い起こした。

「俺やフレッド、ロブはそう思ってないぞ。息子たちが成長する姿を楽しみにできるからな。」

大人の責任は自分以外のものを守る責任で、そのかわり子供が成長する姿を垣間見て生きていくことができるのだといったものをジリアンは理解できた。

プラーナのことを思い、ジリアンはプラーナの父親に諭さとされたことを考えてつぶやいた。

「将来の責任を負いたくないなんて、思いたくないな。」

ラ・ベレツツィア宮殿を失い、マルティン・デ・ドレイファス皇帝は別荘宮殿に身を置いていた。傍らには不安を押し隠そうとしている娘フェリシア皇女がいた。

「こちらにおいで。」

「お父様、なぜ所以に宮殿を破壊してしまったのですか。」

「なぜ、そのような質問を。私が壊してしまったかのようにはないか。」

フェリシアは父である皇帝にしがみついた。

「私くしが知らないでもお思いでしたか。お父様の代わりに者が成りすましてました。」

皇帝は娘の頭をなでつつ、もの思いにふけていた。

「気づかないわけがないか。」

皇帝自身が想い続けたことは、相手には気づかれなかった。それで良いと思っていた。想いが通じたとしても、結ばれないものと思っ
ているからだ。果たしてその相手は別の男性を想っていた。たった一人の男性をずっと想っていることを知っていた。それでもなお想いが募るので、遭える回数を増やしたかった。その手段が、影武者だった。

皇帝の影武者はブライアン・シーアズといい、落ちぶれた貴族の出身だった。容姿がほとんど似ていて、髪型が違うだけで使い分けをしていた。普段は上流階級のお嬢様学校の理事長をしていた。似ているというだけで皇帝に近づいてきて、内部事情を知り尽くすと、皇帝を裏から操るようになしてきた。薄々感じていて、それを逆に利用していたところもあった皇帝だったが、疎ましく思っていた。ブライアンは皇帝の弱みをにぎり、度を越してきたからだ。皇帝の弱みに付けこもうとブライアンが手始めにしたことは、皇帝が想いを

寄せていたレテシアとのことだった。レテシアに近づきやすいように、公務の身代わりをしてきた。思惑がいなくなりそうだったことがあり、それはレテシアが別の男性との間に子供をもうけたことだったが、それがまたブライアンにとって、チャンスとなった。

ブライアンは皇帝にささやき続けた。ある種、洗脳だった。恋しいレテシアを思い通りにできなかつた、そのフラストレーションをぶつける手段。そんなことを考えて行動することは馬鹿げていると理性が働くことができず、皇帝はブライアンの誘いにのってしまった。それが強姦^{レイプ}だった。

そして、ブライアンは皇帝の弱みをものにすることができた。既成事実がこの世に生み出されて、より一層皇帝を苦しめた。

ブライアンには黒幕がいた。彼ひとり、その手の情報に詳しくなかつたからだ。軍、民間、どんな情報網でも金で解決させ、手に入る人物がブライアンを手管に皇帝を動かそうとした。

皇帝は清算したかつた。その代償が輝かしい皇帝の象徴たる宮殿が破壊されようと、疎ましい人物を葬り去り、愛しいレテシアを遠ざけることで危険から守ることを望んだ。

皇帝は自身のための裏の組織ホーネットに加わっているイリアが黒衣の民族・^{たかし}敵と繋がっていると知っていて、命令をくだした。自分を滅ぼす液体になるとしらずにブライアンは未完成のレッドオイルをイリアに渡した。そのレッドオイルはブライアンの黒幕がグリーンエメラルダ号を破壊するために用意した者だったが、皇帝はブライアンが影武者となつて滞在する宮殿にむけて落とすようにと、指示していたのだった。

イリアの願いはレテシアをスタンドフィールドに引き取らすことだったが、そのためにレテシアから離れなければならなかつた。そこに乗じてブライアンの黒幕はイリアを黒衣の民族に引き渡した。皇帝がそうさせたのだった。イリアの思惑通りに行かず、皇帝やブライアンの黒幕を恨んだ。

皇帝は自ら望まないことを行動に移したことに後悔し始めた。レテシアがロブと寄りを戻したからだ。レテシアをホーネットに加えたのは、懐柔かいじゅうして安心感を得たからだだった。

「お父様、私くしに何でもお話ください。もう幼い皇女ではありません。せん。」

「そうだな。これからの重い責任を背負う覚悟ができているのなら、すべて話そう。」

フェリシアは口を硬く閉ざし、決意を固めようとした。しかし、皇帝は彼女の背中を摩り、優しい笑顔を傾けた。

「そなたはまだまだ辛い経験をこなしていない。権力とは何たるかも知り得ていないだろう。焦らずとも良い。私はまだこの国でやらなければならぬことがたくさんある。その間にしっかりと身につけるのだ。相応しい帝王になるために精進するのだ。」

「わかりました。」

娘として皇女として、まだまだ、その父親の心に助けにもならないことを痛感し、強くならなければと決意を硬くした。

湿った暗闇の部屋。腹部を強打されて、イリアは痛みに絶えていた。どれくらいそうしていたのだろう。血の気が引き、体が冷たくなつていくのがわかるくらい衰弱していく感覚を感じていた。

イリアはグリーンエメラルダ号を落とした後、脱出したものの、グリーンオイル製造会社の手の者に連れられて黒衣の民族・^{たかし} 廠に引き渡された。以前、グリーンエメラルダ号に襲撃され渡した液体が偽者であることに腹をたて、イリアは暴行を受けた。カスターとの間にできた胎児は体内で成長できずに流産となった。

「お前、妊娠していたんだな。誰の子を身ごもったかは知らないが、また、妊娠してもらおうか。」

黒衣の民族魔術師で白髪の者は隠語で白い魚と呼ばれていた。白髪の女が子を成し、その子が成長し大人になったところに魂を乗っ取るということを繰り返して永遠の命を手に入れてきたのが白い魚でもあった。

廠がイリアに言ったのは、白髪の女カオルが死んでしまったので、代わりにしようとしてのことだった。

イリアは唇を噛んで抵抗を意思表示した。廠は癪に障ったと言って、暴行をした。イリアは耐えるしかなかった。

（逃げるチャンスは必ずある。）

自分にそう言い聞かせて、逃げる行程で後の行動を考えていた。

チャンスはすぐやってきた。イリアを妊娠させるためにあてがわれた若い男と二人っきりにされたとき、その男を精神的に追い詰めて自我を破壊した。若い男を操り、監禁から逃れた。とりあえず、セシリアの子コリンのもとへ行くこうと衰弱した体で向かって行った。

途中、行き倒れてしまい、親切なものに拾われて病院に連れて行かれた。意識朦朧とするなか、身元を確認されて口にしたのは、カスター＝ペドロの名だった。

闇の中に光り輝く一筋が見えて、まぶしいながらもその光に向かって行った。光はだんだんと広がり、自分を包み込んだ。

「ここはどこ？」

目を開けてみると、そこには白い清潔な天井があった。

「ここはグリーンオイル財団研究所の病院です。」

看護師が語りかけた。

「私は……。」

「今、関係者の方をおよびしますので、お待ちくださいね。イリアさん。」

看護師はそう言って、部屋から出て行った。

自分の名を呼ばれて、はじめて素性が知られていることに不安を覚えた。逃げ出そうと体を動かそうにも力が入らなかった。点滴を打たれていた。管が腕に伸び、針が刺さっている感覚がなかった。点滴の瓶を眺め、そこに書かれている内容で栄養剤だと理解した。コンコン。

「失礼します。」

スーツ姿の女性が部屋の中に入ってきた。

「お目覚めですが、イリアさん。私、グリーンオイル財団研究所の理事長の第六秘書セリーヌマルキナといいます。」

財団研究所が自分を陥れた製造会社とは別物だということは認識していたが、まったく繋がっていないとは思っていなかった。

「財団研究所の秘書がなぜ？」

「あなたはカスター」ペドロ氏の名前を語りました。あなたを助けた人々が保護者か後見人ではないかとこちらに問い合わせがあったのです。」

「カスター？」

「ええ、ペドロ氏はいま行方不明です。判明しない今、以前所属していたスカイエンジェルフィッシュ号を管轄していましたが財団研究所がその問い合わせに応じ、責任者でもある私くしがあなたを引き

取った次第です。」

イリアは天井を仰いだ。カスターを自分で始末しなかったことをすぐに後悔したことが、ここで功を奏したのだろうか。

「あの、わたしはどうなるのでしょうか。」

セリー又はイリアの顔に近づき、小声で返事した。

「こちらにはあなたを保護することでメリットがあります。お分かりですか。」

イリアは驚きの表情でセリー又を見た。検討も付かなかったが、カスターのことで責め立てられるのではないことがわかった。

「わかりません。検討も付きません。」

セリー又はイリアから引き、手に持った書類に目を通した。

「あなたが、白い魚であることは、クレア・ポーター氏が残した資料により、確認しました。」

「それで？」

驚きの表情をみせず相槌をうつイリアに、セリー又は想定内と思いながら、チラ見をした。

「クレア・ポーター氏が明かさなかった真実とやらをご存知でしたら、あなたの身柄を保護し、安全かつ安定した生活を提供いたします。」

「クレアさんが？」

「ええ。」

「何のことを言っているのかわからないわ。」

しらを切るので、セリー又は書類を握り締める手を強く握って、音をたてた。

「では、はっきりと申し上げましょう。セシリア様が最初にお生みになったお子様のことです。」

イリアは目を閉じた。知っていると悟られなくなかったからだ。

「こちらとしては、そのお子様を財団に招き入りたいのです。」

セリー又は、目を閉じたイリアの顔に近づき、また小声で話しかけた。

「セシリア様はいま瀕死の状態で、生きているうちにそのお子様に引き合わせてあげたいというのが夫である理事長の願いなのです。」
イリアは目を見開き、セリーヌを凝視した。
「死んでいると聞かされているのでしよう。」
セリーヌはイリアが知っているかと確認して、ニヤリと笑った。

エアバスが行き交うターミナル、あらゆる場所からこの場所に集ま
つて多くの人がここから旅立つ。人込みのなかをかきわけ、無精ひ
げを生やし汚れた服で急ぐ男がいた。一瞬止まって上を見上げると、
そこには天井からぶら下がった時計があつた。手にしていた時刻表
を確認して、先を急ぐ。

一方向から、その男の姿に目をとめた者がいた。

「カスターさんじゃないかしら。」

その人物は天井からぶら下がった時計の位置からほど近いところに
バルコニー越しから眺めていた。

「誰なの？」

その人物の肩越しから少年が外を眺めた。

「カスターさんですよ。レインさんたちと一緒にいた人で、眼鏡を
掛けていた男性です。」

「ああ、眼鏡を掛けた人は確かにいたね。どこどこ？」

指を指す方向をみたが、そこにはもうその男はいなかった。

「カスターさんはいま、行方がわからなくなっているのです。この
前、墜落したグリーンエメラルダ号に乗っていた方なのです。」

状況がよくつかめない少年は後ろにさがり、テーブルの椅子につい
た。

「だったら、セリーヌさんに連絡したらいいじゃないか。」

「そうですね。」

「たしか、ロブが安否を心配していた人ですよ。」

「ええ。」

「食事を終えて、連絡してみよ。早くしないと、エアバスに間に
合わなくなるよ、コーデイ。」

「言われたとおりにします。レオンさん。」

レオンは苦笑いを浮かべて食事を続けた。コーデイは浮かぬ顔を

して、席に着いた。

1週間前の話しだった。レオンはガラファンランド・ドックでエア・ジエットの訓練をつけ、操縦できるまでになった時、スタンドフィールドドックに行きたいと言いつ出した。最初ロブとレテシアの3人で行く話があつたが、レテシアの体調がまだよくなかつたので、コーデイと二人で行くことになったのだ。レオン自身はロブたちと一緒に行くのは気が引けていたが、コーデイと行くのもなんだか落ち着かないと想っていた。クレアを思い出すからだった。

「コーデイと一緒にあ。」

「なにか不満なのか。」

「なんだかね。話し方でかみ合わない感じがしてね。」

「気にならなければ、大丈夫だよ。俺はコーデイと一緒にスタンドフィールドドックへ向かつてくれるほうが安心なんだ。」

ロブは、レオンの頭をなでながら、そう言った。クレアの意向として、レオンをテレンス夫妻に預けることと、グリーンオイル財団の理事長秘書であるセリーヌ・マルキナから聞かされていた。レオンはいやがるかもしれないが、実際その方がいいだろうと聞いたとき思った。

「コーデイはクレアさんが育つた場所に行つてみたいと言つていたからね。」

浮かない顔してレオンはロブを見ていた。ガラファンランド・ドックにレテシアが来てから、空気が変わった。歓迎されないわけではなかつたが、グリーンエメラルダ号が墜落することで宮殿が破壊されたという内容だけに、疑念がもたれないわけではなかつた。ガラファンランド・ドックはスターフィールドドックと違って、軍の空挺やエアジエットを修理する工場としての色が濃い。常連で少佐だったテオが除隊したことでも何かと不穏な空気が漂って、くわえてエアジエットの操縦士として有名なレテシアがいることでも緊張感が増えてきたようだった。

レオンは時間ができればアン＝ポーターのところへ行つたが、ロブとレテシアを毛嫌いしているアンはより一層、ドックへ行かなくなった。ガラファンランド・ドックのオーナーのシモンからアンのことを聞いたときは、その気持ちすら理解できなかったが、レテシアと接するうちにわかるようになった。体調が悪いだけで依然として変わらないレテシアはエアジェットに乗りたがり、ロブを困らせていた。ロブが苛立ちを隠せない様子にレオンは少々呆れていた。エアジェットに乗れなくなったレテシアに気兼ねして、レオンはガラファンランド・ドックを去る事にした。

食事を終えたコーデイは、セリーヌ＝マルキナに連絡を取った。そこで、意外な情報を耳にした。白髪の少女イリアを保護したということだった。

「そうですね。手に入れたかった情報が手に入ったのですね。」

「ええ。カスターさんはイリアさんに知られたことで、なにか手を打とうしているのかもしれませんが。」

「手を打つとしたら、お子さんのところへ向かっているのではないですか。」

「ええ、わたしもそう思います。」

コーデイは電話越しでレオンの顔を見ながら考えた。考えてたどりで着いた言葉を口にしなかった。

「わたしはこのまま、レオンさんと診療所へ向かいます。」

「情報ありがとうございます。旅の行程の無事をお祈りしております。」

電話を切ったあと、コーデイはため息を着いた。不審に思ったレオンは言葉をかけた。

「なにか、悪い知らせでもあったの？」

「いいえ、何でもありませんよ。」

レオンに笑顔を傾けてコーデイは荷物を手にした。レオンも荷物を手にして後についていった。そして、ふたりはエアバス乗り場に向

か
っ
た。
。

魂が抜けたような目をしたレインの姿を思い浮かべて、ロブはうなだれていた。

「また、嫌な夢でも見たの？」

傍らに横たわるレテシアが言葉をかけた。

「いや、大丈夫だ。」

ガラファンドランド・ドックでこうやってレテシアと二人で過ごしているのだろうかと罪悪がないわけでもない。体調が悪いのに、ロブにしがみついて離れないレテシアを放っておくわけにいかなかった。安心感を与えるために抱いた。それが精一杯のつぐないだろうと思った。

レテシアの冷たい肌に触れて、強く抱きしめていくと、温かみを取り戻すかのように、熱くなっていくのを感じた。この体の温もりを忘れられずに求めていたことによく気が付いた。

以前はレインを見てはレテシアを思い出し、現在はレテシアを見てはそばにいないレインを思い出す。

レテシアを迎えに行ったときのこと。レテシアの憔悴しきった様子に何をしてあげればいいのかとわからなかった。そばに近づくと、抱きついて離れなかった。レテシアを抱き締めながら見たレインの姿が目には焼きついた。魂が抜けたような目をして、放心状態だったからだ。事情はジリアンから聞いた。レインに対してもどうしているかわからなかった。ジリアンの提案を聞いて、承諾した。ほかに方法が思いつかなかった。

ガラファンドランド・ドックでは、レテシアをつれてくる前と変わらず、仕事をこなした。スタンドフィールド・ドックにいてることと違ってクルーのボスとしての役目がない分、こなせる仕事を目いっぱいした。男臭い力仕事はスタンドフィールド以上だが、体を酷使していることで不安や焦燥感から解放感を得た。

「シモンには、感謝しているよ。俺だけじゃなくてレテシアまで受け入れてくれて。」

「気兼ねなんてしなくていい。ゴメスや鬼艦長には恩がある。こんなことくらいで返せるとも思っていないからな。」

ガラフアンドランド・ドックのオーナーのシモンはレテシアを気の毒に思っていた。ロブが仕事をしている間じゅうずっと、デッキに立ち、試運転で飛行するエアジェットを眺めているのだ。

「エアジェットで空を飛びたいのだろうなあ。」

「ええ。でも、医者からバランス感覚が崩れているからと止められている。」

「アンが言っていたが、鬼艦長はレテシアをグリーンエメラルダ号から降ろさせたかったみたいだな。」

「空を飛ばないように？」

「ああ、そうみたいだ。いつまでも、空を飛ばせておくことはできないと思っていたみたいだ。」

「危険なアクロバット飛行を止めることができなかったのだろう。」

「だからと言って俺がやめさせることもできないと思っていたんだ。」

「そうだろうなあ。」

二人が会話を続けているそばに、老婆が近づいてきた。

「ロブ、元気そうだね。」

「アン。ご無沙汰しました。」

平然と返答したものの、ロブは驚きを隠せないでいた。アンがロブの事をこころよく思っていないのを知っていたからだ。

「アン、待ってたよ。いつになったら来てくれるのかと思ったよ。」

「すまないね、シモン。こっちじゃ、息子の嫁が大変なことになったんだよ。」

「大変なこと？」

「亡くなったんだ。幼い子を残してね。」

「それはご愁傷さまでした。言ってくればお手伝いでもできたのに。」

「いやいや、嫁の家族に気兼ねさせちゃ悪いからね。報せはしなかつたんだよ。」

「そうですか。」

「ロブに話があるから、シモン、悪いが部屋で待っていてくれないかね。」

「いいですよ。アン。」

仕事場でアンと二人つきりにされたロブは、会ったときに話しようと思ったことを考えていた。

「いい顔になったね、ロブ。」

「初めてだなあ、アンにほめられるなんて。」

「男前が台無しなってしまったが、悪いつき物が取れたような顔だよ。おまえさんはいつも苦みばしった顔をしている印象があったんだよ。思い通りにいかなくて人生を嘆いているような、そんな男に思ってたよ。」

的を得て、何もいえなかった。自分で起こしたトラブルや、自分でどうにもできなかった兄フレッドの死、レインやジリアンを一人前に育てていかなくはいけない責任を感じていて、自分を追い込んでいた。

「アン、あなたに話したいことがあったのだが、何を話したらいいのかわからなくなってしまった。」

「先に痛いことを言われたからかい。」

「自分自身のことをどういわれようがかまわない。話したかったのは、言いたかったことは、誰に謝っていいかわからなくて。」

アンは笑顔をロブに向けた。少しの間を得て、口にした。

「クレアのことかい。」

「そうです。」

アンは深くうなづいて、ロブの手をとった。

「誰もおまえさんを責めたりしてないよ。」

「わかつてはいるんですが……。」

ロブの目から涙がこぼれた。今まで言い出せなかった、想いの言葉が

なかなか出てこなかった。

「レテシアと再会して、抱き締めて、ようやく、たどり着いて、気づいたので。クレアさんの気持ち。」

アンは「知ってるよ。」といいながら、ロブの手をなでた。

「早いうちから、レテシアと復縁していたら、クレアさんは死なずに済んだのでしょうか。」

あふれる涙がとめどなく、子供のように泣きじゃくったロブは、アンの手を握り締めて、頭を下げた。

「気に病むことなんてない。クレアがそうしたかったら、そうしたんだ。誰も止めることなんてできなかった。私だって、クレアの死、ダンの死をとめることができたのではないかと気に病むことはいくらでもあった。でも、あの二人はそれを望んでいたことだったんだ。そうすることによって誰かを守れると信じてしまったんだ。どうにもできなかった。」

「自分の死を持って、誰かをまもることなんてできるのですか。」
真剣なロブのまなざしにアンは微笑んで言い切った。

「ないよ。そんなことはないよ。フレッドだって、そう思って命を犠牲にお前を守ったわけじゃない。そうだろう。」

クレアの義父であるダン・ポーターが服毒自殺したのを、ダンの実母アン・ポーターは知っていた。突然アンのところへ尋ねてきて、実験用の毒を持ち去ったことを知っていたからだ。クレアもまた、同じ事をしているのを知りながら、止められなかった。止めても無駄だろうと思っていた。

「ロブ、よくお聞き。クレアはお前たち二人を愛していた。だからこそ、二人が幸せになつてくれることを誰よりも望んでいたし、そのために力を尽くしたかったんだ。」

「わかつてます。」

「それがクレアの死につながっていたとは思つてはいけない。わかるかい。」

「頭でそう考えようとしても、なかなかできなくて……。」

「コーデイが私に話をしてくれたんだよ。クレアの心の闇をね。」

「クレアさんの？」

それはコーデイがクレアと二人で医療行為をするために空挺で飛び回っていたときのことだった。悪夢をみることは良くあることだった。それは人の死を直面しているの後悔の念がそうさせていたのだ。しかし、よくある悪夢とは違うものをみていると、コーデイが思ったことがあった。それはクレアが叫び声を上げて、泣いて言った言葉だった。

「あたしは汚れているんだ。」

コーデイにとって、その言葉の意味が理解できないわけでもなかったが、言葉を発する理由を知りたかった。それゆえ、アンに話したのだ。

「誰にも心の闇はある。その心の闇と戦い続けている。クレアにとつて、その闇は背けては生きていけなかったのだろう。」

「アン、そのための死だったというのですか。」

「ああ、そうだよ。お前さんたち二人の幸せを願うのためなら、それは大義名分。本当の理由はこころの闇だよ。」

ロブはアンの手を強く握り締めた。

「心の闇で死を選んだのではなく、心の輝きを放って死んだのだと思っていて欲しい。」

「何とか抜け出せそうです。」

「そうかい。ロブの事を死に急いでいるかのようにだとコーデイが心配していた。これで歯止めになってくれたらいいのだが。」

「大丈夫です。レインたちを置いて、兄さんたちのところへはいけないですよ。」

笑顔になったロブの手をアンはそっと離れた。

「レテシアもいい顔になったね。落ち着きの無い性分は変わらないようだが、それでも沈んでいるのはお前さんらしくないね。」

レテシアが二人に近づいていた。その顔は穏やかな笑顔だった。

「わたしらしくないですね。アン。」

「艦長は、地上で死にたくなかったんだよ。それだけ。思い残すこ

とはおまえさんのことだけ。艦長に安心させてあげてほしいね。」

「アン、ありがとう。」

アンはロブとレテシアが笑顔で向き合う姿をみて、安心し、その場から離れた。

「ロブ、私、あなたに話しないといけないことがたくさんあるわ。」

「わかってる。聞くつもりがなかったわけじゃないんだ。」

「つらい話もあるわ。でも、目をそむけてばかりいられなくなったの。」

「仕事を終えてから、夕食後にでも、聞こう。」

ロブは穏やかな気持ちでレテシアに部屋に戻るよう促した。しかし、その夕食後の話で穏やかでいられなくなることをある程度想定していたがそれ以上のことが起きるとは、想像もつかないでいた。

ロブは夕食前にシャワーを浴びて汗を流し、すがすがしい気持ちで食事を取っていた。このとき、初めてレテシアの様子がおかしいことに気がついた。体調の悪さは叔父の死を悼んでのことだろうと思っただけで塞ぎこんでいるのは仕方ないと思っていた。以前とは違う笑顔を傾けてきたことで、その死から解放されたのだと思っていた。夕食時はガラファンランド・ドックのクルーたちと一緒に食事をするのだが、以前とは違うレテシアにみな、安堵して話しかけていた。話しかけられて答えるレテシアの笑顔がなにか違って感じていた。安心感という単純なものだと思っただけでなくなった。そして、夕食後に言われた言葉で驚愕するのだった。

「ロブ、私、妊娠したみたいなの。」

「ええ?!」

恥ずかしそうに照れ笑いするレテシアに対して、対照的に青くなつたロブは理性をつないで取り繕うとした。

「妊娠つて、そのまだ、わかるような時期じゃないよね。」

「そうね。二週間ぐらいかしら。昨日、こっそり抜け出して病院へ行ったのよ。」

「抜け出してつて、自覚があつたのか。」

「ええ。」

紅潮する顔のレテシアが、一瞬にして顔を曇らせた。

「その前に話しておかないといけないことがあるの。」
「話し?」

ロブは唾を飲み込んだ。聞きたいことがないわけじゃない。それを口にするにはいけないことだと思っていた。

「ロブと別れる前に、私は妊娠していたの。」

ロブにとって、聞きたくない内容だった。目を閉じて、どう言葉にすればいいのかと考えたが思いつかない。

「二人目の子のために、除隊しようと思ったの。」

「どう、言ったらいいの。謝ることで済む話でないことぐらい……。」

「違うの。あなたを責めるつもりはないの。確かにあの時恨んだわ。おなかの子を大事に撫でて一人で生んでやるって思ってた。でも、その子は胎児のまま、生まれ出ることなく……。」

ロブはレテシアを引き寄せ、抱きしめた。

「いい。もう、言わなくていい。いや、言っただけで済めば、言えればいい。つらいのなら言わなくても。」

「ロブ、あの時は確かに辛かったわ。でも、あなたもレインも辛い思いをしているのだと思えば、乗り越えるしかないって思ったの。」

ロブは震えていた。レテシアはそれを感じていた。

「わたしには何も残されなかった。あなたやレインのことをずっと想うしかできなかった。そして、わたしは……。」

言葉にできない気持ちを推し量ろうとしても、おそらく出来ないだろう。ロブは申し訳ない気持ちでレテシアを強く抱きしめていた。

「わたしは解散してしまっただけのホーネットに入ったの。そうすることによって、ロブの手助けができると思っていたから。」

ロブは沈黙していた。言葉にしなくても、わかるだろうと思っていた。

「クレアさんは知っていたの。スワン村で会ったから。おそらくはイリアのことも知っていたのでしょうね。」

語りつくせない思いを抱えていた二人だが、ひとつひとつ絡まった糸を解くように、その夜は二人とも語り合った。

スタンドフィールド・ドックの司令室である展望台でステファノの笑い声が広がる。食堂から息を切らせて上がって来たジリアンはドアを開ける前に、嫌な思いを感じた。ステファノの笑いはレインの告白から始まったことがあったからだ。以前と違う状況、それはレインが父であるロブからの電話を受けていたことだ。

「いったいどういう内容で、ステファノは爆笑しているんだだろう。」
「
勇気を振り絞ってドアを開けると、レインが情けない顔でこちらを見ていた。」

「ジル。」

「どうしたの、レイニー？」

「どうしたも、こうしたも、父さんと母さんがこっちに来るっていうんだけど……。」

「あははは、はははは。」

「笑いすぎだよ、ステファノ。」

「ごめん。ほんと、ごめん。こないだの、これだからさ。」

眉間に皺を寄せたジリアンはレインの腕を引き、レインの顔を自分のそばに近づけさせた。

「この前のことと関係あるの？」

「ないよ。ステファノが勝手にそうつなげて爆笑しているだけなんだ。」

何を話しているのかわからないままに、ジリアンは口にした。

「なぜ、こっちにもどってくるか聞いたの？」

レインは深くうなづいた。そして、頭をすこし下げたまま、上目遣いにジリアンをみた。

「それがさ、母さんが……、その、そのお。」

「なに！なんだよ。」

「妊娠したんだよ。」

いまさら、小声で話すこともないので、はっきりとした口調でレインは言つてのけた。

「あははは、はははははは。」

ジリアンは開いた口がふさがらず、ステファノはまた、腹を抱えながら笑い続けた。心配してジゼルが展望台にやってきた。

「どうしたの？ 笑い声が食堂のちかくまで聞こえてきたわよ。」

「ステファノ、まさか、スピーカーを」

一瞬で青い顔になったステファノはスピーカーのスイッチを確認したが、スイッチは入れてなかった。

「だ、だいじょうぶだ。」

ジゼルが心配そうにレインを見ると、レインは泣きそうな顔になっていた。

「レテシアになにかあったの？」

ジリアンはため息をついた。

「僕の口から言わないほうがいいよね。」

「どうしたの、レイン。」

モジモジする、レインの尻をステファノは叩いた。

「俺、退散する。ごめん、ほんと、ごめん。悪気はなかったんだ。」

ステファノはジゼルに軽くウィンクすると、展望台から出て行った。

レインは下を向きながら、吐いて捨てるように言った。

「母さんが妊娠したんだよ。」

「ええ？ もう！」

「もうつって……。」

「いや、早くなって。」

ジゼルは流し目でジリアンをみた。ジリアンはジゼルからの視線をそらした。

「まあ、そこまで仲良くなっているなんて、受け入れがたい話かもしれないけど。」

ジゼルはレインを慰めようとしたが、レインは納得できない気持ち

を隠しきれずにいた。

「僕ってさ、何のために母さんから引き離されたわけ？」

「大人には大人の事情があるのでしょ。」

ジリアンはわかった風な口をきいて、レインの気持ちをなだめようとした。そんなジリアンの様子をみて、レインは我に返った。ジリアンの本当の母親はジリアンを虐待したことを思い出したのだ。ジリアンが吐いた言葉が痛く感じて、それを理由に、実母セシリアのことを受け入れていたのかと思えるようになった。

「そ、そうかもしれないけど。僕、どうしていいの？」

「なにを言ってるの。親子でちゃんとすごしたらいいじゃない。ジルのことだって、丸っきりの他人じゃないんだし、兄弟だと思って育ったんだから、遠慮しなくていいんじゃない。ねえ、ジル。」

ジゼルはジリアンに笑顔を向けた。ジリアンは苦笑いを返した。

「そうだけども、気を使われたくないね。でも、一人ぼっちにはされたくない。わかってるよね、レイン。」

ポンと肩を叩かれて、レインは泣きそうになった。レインがジリアンにスタンドフィールドックを出たいと話をしたときに、一人にされたくないといわれたことを思い起こし、それからの日々で出ることなんてなかなかできないと思い始めていたことに痛感した。

「スタンドフィールドにはほかに仲間がいっぱいいるんだから、ひとりで背負いこまなくていいわよ。レイン。ロブは頼ってくれなかったけど、あなたは違うでしょ。」

レインは照れくさそうに、うなづいて見せた。ジゼルはレインの頭をなでた。

「ジゼル、ありがとう。」

一息ついてジゼルは言った。

「じゃ、あの二人が帰ってくるんだから、大変なことになるわよお。」

レインとジリアンは顔を見合わせて、苦笑いした。

「そんな顔をしないの。ねえ、クレアさんは喜んでくれていると思

うのよ。」

「そうかな。」

「二人別れた後、クレアさんがロブを殴った話聞いてね、そこまでしなくても言ったことがあったの。」

二人は神妙な面持ちで聞き入った。

「クレアさんが言ったの。『別れたことが悔しかった。』って。そして、『二人が幸せでいることがあたしにとって幸せだった。』ってね。」

二人は納得した顔になった。

陽が沈もうとしていた。岩山の天辺にレインは寝そべって、ジリアンは階段にもたれかかっていた。

「なんだかさ、父さんに本当のことを聞かされた時が昨日のように思えるんだよね。」

「レイニーがロブ兄さんのことを父さんと言う様になったのにな?」

ジリアンは笑いをうかべて、レインをみた。

「じゃ、ジルはずっと、ロブ兄さんって呼ぶわけ。」

「そうだよ。いまさら、叔父さんなんて呼べないよ。」

ジリアンは肘をついていて、あごをささえていた。

「ほんとうに、クレアさんは喜んでくれるのかな。」

「喜んでいると思うよ。ほんとうに、父さんや母さんのことを気にしていたんだ。僕はそのことを感じていたよ。」

夕日が二人をつつんで、赤く照らしていた。

グリーンオイルを燃料に空気圧で移動するエアバスが丘の上に到着し、少年と大柄な女性が降り立った。二人はあたりを見渡し、タンデイン診療所のほうへ向かって行った。玄関まで来ると、ドアに「休診日」と書かれた札がかかっていた。

「わたしは裏に回っていますから、レオンさんはここにいてくださいね。」

「わかったよ。」

少年は荷物を置き、後ろを振り返った。川に挟まれた三日月のような岩山が見えていた。

「あれがスタンドフィールド・ドックなんだな。」

「今日は、休診日なんですよ。どなたかしら。」
洗濯物を抱えた女性が立っていた。診療所の医者の子ミランダ・テレンスだった。振り返ったレオンの姿をみて、笑顔を傾けた。

「あら、コリン、髪の色を変えたの？」

少年はしばらく考えた。レインたちが言っていた、似てる人物がいることを。

「あ、いえ、僕はコリンって人じゃないです。」

「あら、そうなの。ごめんなさい。とても似ていたものだから。」

「知っています。レインたちから聞いたことがあって、似ている人がいるって言うてましたから。」

「レインの知り合いなのね。」

「ええ、はじめまして。僕はレオン＝ゴールデンローブといいます。」

「はじめまして、わたしはミランダ＝テレンスよ。ミランダって呼んで。」

ふたりが自己紹介をしているところへ、大柄な女性がもどってきた。「ここにいらっしやっただのですね。」

ミランダは目を丸くしてみていた。

「ミランダ＝テレンスさんですか。」

「ええ、そうです。」

「わたしは、スカイエンジンフィッシュ号のクルーでコーディ＝ヴェツキアといっています。クレアさんには大変お世話になったものですから、こちらに伺いたいと思つて参りました。」

「まあ、そうなの。それなら、うちにあがってもらわないとね。」

ミランダは洗濯物を抱えながら、二人を裏口に行くよう促した。歩みを進めながら、レオンは言った。

「クレアが苦手だつて言つてた人？」

コーディが人差し指を唇にあてて、レオンに促した。

「自己紹介はもう、したんだよ。」

「そうですか。裏口が開いてなかったものですから。」

裏口のドアを開けて中に入ったミランダの後を二人はついていった。中で新聞を読みながら、くつろぐ男性がいて、ミランダは声をかけた。

「マーク、お客さんよ。クレアの知り合いですつて。」

マークは立ち上がつて、ミランダの背中越しに見えたコーディに驚いていた。

「これはまた。話には聞いていたけど。」

「コーディさん、主人のマークよ。」

「はじめまして、マークさん。コーディといいます。」

「よろしく、コーディ。で、そつちの少年は……。」

コーディの後ろからひょっこり顔を出したレオンは頭をぺこりと下げ、前に出てきた。

「クレアさんの知人の息子さんでレオンさんです。」

ミランダは少し苦笑し、マークは驚いた顔のままだった。レオンは知人の息子と紹介されたことをいささか疑問に思い、コーディの顔を見た。

「髪の色が違うだけでコリンに似てるね。」

「レインとジリアンの友達でもあるんですけど、よく言われました。」

「ほう、レインたちのね。」

ミランダに促されて、ふたりはソファに腰をかけた。

「いま、飲み物でも用意するわね。」

「あ、はい、お構いなく。用事が済んだら、スタンドフィールドへ向かうので、お気遣いなく。」

「なんだ、素っ気無いな。せっかくの休診日だし、今日はとまって行きなさい。」

「いいえ、突然連絡なしに来させてもらったのに。」

「いやいや、遠慮することはない。クレアがいつでも帰ってこれるようにしてるんだよ。」

コーデイとレオンは顔を見合わせて、切ない顔をした。

「クレアは私たちにとっても、娘みたいなものだった。お二人さんを歓迎するのは当然のことだろう。」

「しかし……。」

ミランダがトレーに飲み物を運んで持ってきた。

「遠慮なんていらぬのよ。二人暮らして寂しいものだから、お二人がいてくれたらにぎやかになっていいわ。」

「あはは。そうだな。」

。レオンは窓のほうをみて、窓の向こうに見える岩山をみていた。

「スタンドフィールドへ行くのかい。」

「ええ、レインたちに会いに行く約束したものですから。今日行くとは連絡してませんが。」

「まあ、そう、急ぐこともないだろう。無くなったりしないよ、あれは。」

遠目でレオンはながめた。シヴェジリアンドの地で起きたことを思い起こして、つぶやいた。

「無くなったりしない……。」

「どうかしたかい、レオン。」

「いえ、なんでもないです。」

マークは上半身を二人に近づけて言った。

「本音をいうと、クレアの話を知りたいんだよ。わたしたちのわがママを聞いてくれないかな。」

コーデイとレオンは笑みを浮かべた。

「いいですよ。迷惑でなければ。」

コーデイとテレンス夫妻が談笑している間に、レオンは窓際に歩み寄り、外を眺めていた。窓に手をおいて、窓枠の古さを確かめた。クレアが育った家、そう物思いにふけりながら、あまりにかけ離れた景色が広がっているので不思議に思っていた。

「どうかしたのかい。」

マークに声をかけられて、少し振り返り、また、窓を眺めた。

「環境のいいところですね。喧騒な街から離れていて、のどかです。」

「そうだね。クレアの養父ダンが好んでここに診療所を立てたんだ。街にも病院があるが、お年寄りが時間をかけてここをたずねてくるのも居心地がいいからだと思うんだ。」

「そうですね。居心地が良いですね。」

そう、レオンが理解したのは、居心地の良すぎて、クレアにとって悪さを感じていたのではないかということだった。

「クレアにとって、ここは長居したくないところだったのでしょ。」

「マークは戸惑った。クレアのことをよく知りすぎるには年齢が若いと思ったからだ。」

「あ、ごめんなさい。知ったような口をきいてしまって。」

「そうだな。」

「アン、ポーターさんのところにしばらくいたものですから、ギャップがありますよ。」

「アン、ダンのお母さんのことか。なるほど、それはそうだな。」

「知ってますか。」

「話を聞いたただけだがね。魔女のような家だと。」

レオンは噴出し、口で抑えながら、謝った。

「いや、いいんだ。ダン人は人を避けているところがあつたからな。人気の無いところを好んでいた。育つた環境かと話を聞いたときは思つたよ。」

「クレアもそうなのでしよう。」

「そうだね。」

マークは不思議そうにレオンの顔を見た。それはクレアをさんづけで呼ばない少年をはじめてみたからだ。

「あ、なにか？」

「いや、クレアと親しいんだなつて思つてね。」

「ええ、母さんはクレアの恋人だったからです。僕は幼いころから戦場や難民キャンプを転々として育つたんです。」

マークは驚きを隠さなideいた。そして、つぶやいた。

「そういうことだったのか。」

月夜に外出し、白髪の少女イリアは自分の能力を使った。その能力は深い眠りについた人物の意識の中に入り込み自我を破壊寸前までにする。そして、意識を乗っ取り、操り人形のように思い通りに動かす。

ターゲットになった女性をベッドから出て、着替えさせた。

皇帝マルティン・デ・ドレイファスは別荘宮殿の窓から月明かりを浴びて、外を眺めていた。暗闇から明度が近づいてきた。

「陛下、ご気分はいかがですか。」

皇帝は、メイドがそのようなことを聞いてくることはないので、間をおいた。

「気分を害してしまいましたか。」

「用件を先にいいたまえ、イリア。」

メイドは含み笑いをして、明かりの前にたった。白髪の少女イリアではない。

「機嫌をうかがうというのは、なにか悪い報告か。」

不適な笑みをうかべて、マルティン皇帝に近づいた。そして、ささやくように耳元で言った。

「セシリアの最初の子を捕獲する予定です。」

「どちらの側でかな。」

皇帝から距離をとって下がった。

「ふっ。口にするまでもないでしょう。」

「財団で保護されたという話は聞いている。デュークの手落ちるというのなら、それでもいいだろう。」

「なにかご不満でもおありますか。」

「不満。その子が生を受けたことが不満だ。皇族が黒衣の民族との間に子を設けたということだ。」

そして、メイドは目を閉じ、手を合わせた。

「陛下、お願いがあります。」

「何を願う。」

「私が動けば、あちらの方が邪魔をしてくるでしょう。」

「そうだな。」

「町ごと、レッドオイル爆弾で攻撃してほしいのです。」

「何だと。」

「シヴェジリアンドの地のように。」

皇帝は眉をひそめた。シヴェジリアンドの地では黒衣の民族が潜伏しているという大義名分があった。軍に対しては、皇帝に対する反勢力が徒党を組んでいるという触れ込みになっていた。

「犠牲者は出たくない。理由を述べよ。」

「セシリアの子を死んだことにするためです。」

「場所は？」

「オホス川周辺の町です。スタンドフィールド・ドックが近隣のです。」

「容認できないな。」

「どうしてですか。陛下なら造作もないことでしょう。」

「無茶なことを言うな。あの町は善良な国民が居住している。どこに爆弾を落とす理由があるのだ。」

「有ります。グリーンエメラルド号を落とした張本人が潜伏しているという理由です。」

メイドはニヤリと笑った。

「君の言うことはカスター・ペドロが犯人だということだったな。」

「ええ。あの男から情報を聞き出したのです。クレアから情報を得ていたのです。」

「では、その男もその町に潜伏しているというわけだな。」

「そうです。」

皇帝はしばらく考え込んだあと、立ち上がった。

「承知できない。」

メイドはさらに後ろに下がり、暗がりに入った。

「では、ウィンディの息子レオンを始末するということはどうでしょう。」

「私を愚弄する気か。シヴェジリアンドの地の民は難民で行政が手を焼いていた。しかし、善良な国民を犠牲にするほど、私は愚か者ではない。」

「大変失礼なことを申し上げました。申し訳ございません。」

メイドは深く頭を下げて、あとずさりして、ドアに向かっていった。ドアを開け、去り際に言った。

「レテシアはロブの子を身ごもったそうですよ。ご報告までに。」
皇帝は地団太を踏んだ。

「くそつ。」

悔やんでも仕方のないことだとわかっていても、悔しがってしまう自分を呪った。そして、乱暴に窓を閉め、頭を窓に打ち付けた。

「手元に置いてても、幸せにすることはできなかった。彼女を追い詰めてしまっただけだった。」

目の届くところにおいておきたくて、ホーネットに誘った。

「ロブとレインを危険にさらしたくなければ、情報を得ることだ。君にできることがホーネットにはある。」

誘った言葉を思い返して、我ながら哀れな男だと落胆した。皇帝が抱えたところの闇を利用してしようとする人物がてぐすね引いて待っているとも知らず、こころの闇に背を向け、ベッドの中に入って眠りについた。

レインは月明かりがまぶしいときは、部屋に閉じこもってしまっていた。あのホテルマンを思い出すからだ。まだ、満月ではないというのに、やけに月がまぶしい。ノックの音がした。

「ジリアンだけど、入ってもいい。」

「うん。いいよ。」

布団に包まって、ベッドに横たわっていたレインが上半身を起こしていた。

「あのことを思い出しちゃうの？」

「ああ。忘れて欠けていたんだけど、ドックにもどってから、やけに月夜を意識しちゃって。」

ベッドから這い上がって、ジリアンに椅子を差し出した。

「明日のこと？」

「うん。レオンを迎えに行くのは僕でいいのになって。」

「そのほうがいいかって。できるだけ、人目につかないほうがいかもしれない。コリンに似てるからってわざわざ紹介するまでもないからね。」

「でも、こんなに早くこっちに来ちゃうなんて思ってなかったよ。」

「うん。しかし、父さんたちがこっちに来るって言ったなら、間があったのが気になる。」

ジリアンはレオンの気持ちがよくわかると思った。あの二人をガラフアンドランド・ドックで目の当たりにしたのなら、一緒にすごしたくないって思うだろうと察した。

「やっぱり、嫌なのかなあ。」

「明日、あつたら、それとなく聞いておくよ。」

「そうだね。レオンはドックに来てたがってたって父さんが言うってたけど、その後どうするかを心配していたしね。」

「確か、診療所に先に行ったのはコーデイが探し物をしたいからっ

て話だよね。」

「うん、クレアさんが残したもので依頼されていたものがあるとかで。」

「その話に首を突っ込むのは、だめなんだろうね。」

「気になるの？」

「うん、ちよつとね。レインは気にならないの？キヤスのことか？」

「キヤス?! そうだよね。」

ジリアンは目を細めてレインをみた。呆れてものが言えなかった。

「そんな顔をしないでよ、ジル。」

おとぼけなのは、今に始まったわけではないことくらいわかっていて。ジリアンは行方不明のカスター＝ペドロのことを思わない日になかったから、レインを思うといらだたしかった。

「キヤスとなにか関係あるの？」

「ないと思ってるの？」

黙っていて何もいえないレインの姿をみて言った。

「呆れた。クレアさんの死を目撃したというか立ち会ったのはキヤスだよ。なにか言われていて行方をくらましているかもしれないじゃないか。」

「まあ、そうかもしれないけど。僕たちが調べたところでなにかわかるわけでもないだろう。」

「そうだけどさ。なんか、もどかしくて。」

レインはため息をついた。

「わかってているよ。いまだにクレアさんの死を受け入れることができない。なぜクレアさんが死ななければいけないのか納得できないというか。」

「死に意味なんて、求めなっているわけじゃないよ。キヤスが心配なんだ。」

「グリーンエメラルダ号から離れるときは、何も問題ないと思ったけど。」

「そういうもんだよね。僕たちが知らないことばかりあって……イリアのことだって……。」

レインは窓から差し込む月明かりに向かった。

「キヤスを置いていくべきではなかったのだろうか。」

レオン＝ゴールデンローブは悩んでいた。スタンドフィールド・ドックでレインたちと一緒にいたいと思っていたのだが、ロブとレテシアがドックにもどってくると聞いたからだ。あの二人とほかのドックのクルーと一緒に過ごす自信がなかった。顔を両手で覆って、入院用のベッドでうずくまっていた。

一方、コーデイはクレアが残っていたという遺品みたいな箱の中身を調べていた。しかし、目当てのものはない。少し考え込んでから、マークに頼んで、診療室に入らせてもらった。一通り見渡して、気になるものがあった。造花のマーガレットだった。それをまじまじと見ていて気がついた。青いベルベットの装丁の本があることに。造花が差した瓶を寄せて取り出し、中をぺらぺらとめくった。中から折りたたんだ紙が出てきた。中身を読んで確信した。

「これだわ。」

コーデイに付き添ってマークは心配そうに除きこんできた。

「何か見つかったのかい。」

「ええ。」

マークには知られなくなかった。おそらくは何も知らされていないだろうと思った。

「クレアのことなら、少しでも知りたいのだが。」

「いいえ、おそらくはダン先生のです。クレアさんの筆跡ではありません。」

「アンから、頼まれたのか。」

「そうですね。熱心に研究されていることをクレアさんも追従されていたようですから。」

マークはわかったような顔をしたが、口にはしなかった。コーデイ

が察して気を悪くするのを避けたかったからだ。半日一緒にいるだけでコーディの性格を理解できたマークはクレアの相棒にうってつけの人物だと思ったからだ。

「お手間をとらせて申し訳ありませんでした。」

「いやいや、かまわないよ。クレアを娘のように思っていたからね。時間があるのなら、クレアの話を聞かせてもらいたいね。」

「そうですね。時間がないわけじゃないですから。」

コーディは見つけ出した紙を大事にポケットに仕舞うと、台所にむかった。

「ミランダさんのお手伝いをしてきますね。ありがとうございます。」

マークは笑顔を向けた。

第三十一章 月夜の後悔 1 (後書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー) 15歳
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル) 13歳
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>) 30歳
- レテシア⇨ハートランド(主人公の実母) 33歳
- カスター⇨ペドロ(ドックのクルー、通信士。愛称キャス) 26歳
- デイゴ (ドックのクルー、板金工) 35歳
- ジゼル(ドックの料理人、デイゴの妻) 30歳
- ステファノ(ドックのクルー、北の民族) 24歳
- マーク⇨テレンス(タンデイン診療所の医者)
- ミランダ⇨テレンス(マークの妻、診療所の看護師兼医療事務員)
- レオン⇨ゴールデンローブ(ジョイスと呼ばれていた少年)
- コーディ⇨ヴェツキア(元介護士)
- イリア(白髪の少女、レテシアの元相棒)
- セリーヌ⇨マルキナ(グリーンオイル財団理事長の第六秘書)

第三十一章 月夜の後悔 2

レオンは食事中にあくびを連発していた。

「レオン、よく眠れなかったの？」

「あ、はい。洗い立ての寝具で寝るのには慣れていたはずなのですが。」

ミランダは理解できないという表情をした。察してコーディが気をきかせた。

「レオンさんは戦場や難民キャンプを転々としていたことがあったのです。」

レオンはコーディの言葉で空気を察した。

「あ、トランスパランスにいてるとき、清潔な寝具で寝るのになかなか慣れなくて苦労しました。」

マークは気のない振りをしながら、食事をつづけて、会話に入ってきた。

「眠れなかったのには、なにか悩みでもあったのかな。昨日はレオンに連絡していたね。」

レオンは下を向いた。ミランダはマークを睨んだ。

「悩みというか、これから、どうしようかと考え込んでいて・・・。」

「これからのことを考えて、どうしようと思ったんだい。」

「ガラフアンドランド・ドックで過ごして、とても楽しかったのです。できたら、スタンドフィールドドックにいたいって思っていたのですが。」

「思っていて、どうしたんだい。」

「レインの両親がドックに戻ってくるっていうから。そのお。僕、あの人たち苦手なのです。」

「正直だな。」

「マーク。そんな言い方しないでちょうだい。」

「レオンさん、どうして、苦手なのです。私はそんなことを思ったことありませんよ。」

レオンはコーデイをちらりとみた。

「ものすごく、いらつくんだよ。仲がいいのか悪いのかわからない。べたべたして気持ち悪いと思ったことさえある。おかしいかな。」
マークとミランダは顔を見合わせた。

「俺たちはレテシアを知らないの、何ともいえない。ロボのことは知っていて、正反対な女性だということは聞いたことがある。」
「私たちはついこの前、ジゼルからレインがロボの息子だって聞いて驚いていたところだったのよ。」

「そ、そうなんですか。」
食事を終えて、ミランダは真剣な顔でレオンに向かった。

「レオン、今後行く場所に迷っているのなら、ここにいてもいいのよ。」

「え？」
レオンは驚きを隠せなかった。

「ミランダ、早急すくないか。」

マークが窘めたが、ミランダはレオンに笑顔を向けて話を続けた。
「私たちには子供がいなくて、医療学園都市にいた時にはクレアのことを娘のように思って下宿させていたこともあったわ。」

レオンは目を泳がせて、ミランダの目線から逃げた。

「嫌のなら、この話はなかったことに・・・。」

「嫌ということではないのですが。いつも、人がたくさんいるところで過ごして育ったものですから、静か過ぎると落ち着かない感じがして。」

「嫌でなかったら、考えておいて。時間をかけてくれていいの。」
「では、お言葉に甘えて考えさせてください。」

コーデイは心持ち、安心した。きつと、クレアがここにレオンをきてテレンス夫妻が預かってくれることを望んでいたのだろうと思った。

外で、エンジン音が聞こえてきた。

「ジルがきたのかしら。」

「タイミングが良いな。」

「支度をしなくちゃ。ご馳走様でした。」

レオンは足早にダイニングルームを出た。

「コーディはどうするんだ。」

「ミランダさんのお手伝いで、街に買い物へ出かけます。」

「今日は診療日だから、街にはいけないし、食料が足りなくなってしまったから。」

「そうか。ご馳走様」

マークはゆっくり立ち上がって、席を立った。

レオンは鞆を背負い、ジリアンから渡されたヘルメットを被るとエアバイクにまたがった。マークが見送りにきていた。

「気をつけてな。帰るときは連絡くれるといい。」

「ええ。でも、今日は泊まりになると思います。」

「話したいこといっぱいあるものね。」

マークはテンションが高めの笑顔のジリアンをみて、少々驚いた。ジリアンがエンジンにスイッチをいれると、マークは後ろに下がった。エアバイクはホバリングをはじめ、砂埃をたて前に進んだ。ジリアンはスピードをあげ、エアバイクは診療所のある丘を降りていった。

ジリアンとレオンが乗ったエアバイクは丘を去って、街中を通り抜けた。ジリアンは交差点で止まると、後ろのレオンにむかって、指をさした。指した方向にパン屋があった。コリンがいてる店だ。店のガラス越しではコリンの姿は見えなかった。ヘルメットを被っている以上、コリンに似た人物がいるとは判断できない。ジリアンは信号が変わったのを確認して、エアバイクを走らせた。

オホス川を渡り切り、岩山のふもとにきて、エアバイクをとめた。レオンはあたりを見渡してから、上をみあげた。樹木が生い茂り崖

がある上部を覆い隠していた。

「レオン、着いたんだけど、ここから上に上がらないとだめなんだ。」

「へえ。診療所から岩山が見えたけど、ここなんだね。」

「その前に、聞きたいことがあるんだ。」

「聞きたいこと?」

「うん。ロブ兄さんが心配していたんだけど、レオンはこれからどうするの?」

「これから?」

「居場所。兄さんの話じゃ、ガラファンランド・ドックでエアジエット乗りになりたいって思っているみたいだと言ってたけど。」

レオンは笑って見せた。

「高所恐怖症を克服したといっても、そこまではないかな。」

ため息をついて、悩んでいることをズリアンに打ち明けた。そして、ミランダから言われたことも話した。

「診療所にね。」

「確かに、僕は医者の子だし、興味がないわけじゃないけど。」

「じゃ、その話の続きは夜にでもしよう。」

「うん。」

「レオンに会う前に聞きたいことがあるんだ。」

「なに?」

「ロブ兄さんとレテシアさんのことなんだけど、レインが気にしていたからさ。」

「ああ、苦手なんだよね。あの二人がいてるのが。」

「ロブ兄さんがいてるだけなら、大丈夫なの?」

「うん、レテシアさんが来るまでは大丈夫だったかな。なんだか、いらいらしちゃうんだよね。」

「それ、よくわかる。僕は身内は身内だけど、一線引いてる感じあるから、距離おけるけど。」

「幸せすぎる二人って感じがするかな。」

レオンの言葉にジリアンは理解できなかった。

「幸せだとイライラしちゃうの？」

「べたべたしてるとイライラしちゃうかな。ジリアンは？」

「空気読めてないところが、レインに通じているんだよ。」

「レテシアさんが？その辺はよくわからない。」

「そうか。ガラフアランドランド・ドックにはショックを受けてから行ってるもんね。」

ジリアンが腕組みをして考え込んでいる様子を見て、レオンは不思議に思いはじめた。

「いま、その話をしないとだめなの？」

「うん、レインが気にしていたみたいだから。」

「なぜ？」

「ドックに戻ってくる二人の話をしたら、レオンが間を空けたとかつて。」

レオンは考え込んで、マークから正直だといわれたことを思い返した。

「思っていることが周囲にわかってしまうみたいだね。僕は両親とこのことを知らないから、それで嫌なのかもしれない。」

「ふうーん。」

「テレンス夫妻のこと、きっとそうなんだろうと思う。」

ジリアンはエアバイクを押して、車庫に入れた。

「嫌な話をしていたら、ごめんね。」

「ううん、大丈夫だよ。心配しているんだろ。僕のことレインのこと。」

「うん。それに・・・。」

「それに？」

「クレアさんがレオンのことを心配してると思ったから。」

レオンは鼻で笑った。そして、何かを言おうとしたが、口をつぐんだ。しばらくの間を置いて、言った。

「ジリアン、人の心配ばかりしないで自分のことを考えるようにし

ないとだめだよ。」

「レオン＝ゴールデンローブと言います。よろしくお願いします。」
展望台でステファノに自己紹介をした。ステファノは不適な笑みを
浮かべた。

「ウインディ＝ゴールデンローブなら、名前だけは聞いたことがある。」

驚いたのはレオンだけでなく、その場にいたジリアンもだ。ステファノの素性をほとんど知らないからだった。

「そ、そんな有名人だったかな。僕の母です。」

意外だというような表情をしてステファノは自己紹介をした。

「ウインディ＝ゴールデンローブ。シヴェジリアンドの地で、その名を知らない者はいないんだろう。」

「そうですね。なぜ知っているのですか。」

「あの地に行ったことがあるけど、ウインディが着任する前の話。」

あの土地から出た者から聞いたんだ。」

「あの地を知っているのですか。」

「ああ、レッドオイル攻撃にあった後の話も知っているよ。君は逃げ延びた子供たちの一人だな。」

「ええ、そうです。トランスパランスに保護してもらいました。」

「あの学者が計画していたんだろう。」

「そこまでご存知なんですね。」

「ジャーナリストの護衛をしていた時期があったからね。」

ステファノはしみじみとそのジャーナリストの話をした。

まだ、10代だったステファノの武術を身に着けた防御力を見込んで、そのジャーナリストは護衛として雇った。世間知らずなところがあつたステファノは雇われたといえども食事と寝床を提供してもらうだけとされていた。社会に順応していくために、ジャーナリストに教示してもらわないと生きていけないと自覚していた。取材して

いく土地を転々と変え、いろんなことを学んだ。

「今は一人ですよね。そのジャーナリストとは？」

「亡くなっただんだ。パラディーゾデラモンテグナ都市を取材中に地すべりが起きて、巻き込まれたんだ。」

「あの都市にいたの？」

「ああ。」

つかさず、ジリアンが問いかけたが、ステファノの反応はあまりに薄かった。

「僕たちもいたんだよ。スカイエンジェルフィッシュ号が。」

「知っている。」

ジリアンはステファノの受け応えに不満を持ち始めた。

（知っているって、ステファノって僕たち、知らないことだらけなんだけど。）

「レインは遅いね。」

「じいさまが最近調子悪いから手間取っているのかもしれない。」話をそらされてしまったステファノは、レオンの顔をニヤニヤしながら見ていた。気になったレオンは問いかけた。

「僕になにか・・・。」

「シヴェジリアンドの地がその後どうなったか知っているか。」

「焼け野原になったのでしょ。」

「爆撃後はね。いまやあそこは、人体実験場になっているんだ。」

「ええ!？」

ジリアンとレオンは声を上げて驚いた。その後のことはあまり聞かされていなかった。逃げ延びたのは子供たちばかりで大人はいなかった。大人が犠牲になってもおかしくなかったがその事実は表に出てこなかった。

「それじゃ、犠牲になった大人たちが実験台になっているということですか。」

「おそらくはね。逃げ損ねた子供もいただろうし。」

レオンはステファノがニヤついていた理由を探ろうと、彼をにらん

で言った。

「母がその実験にかかわっていると聞いたのですか。」

「まさか。皇帝排除派や擁護派でもない彼女が軍を抜けて、行方知れずになっているというのは少々その方向性で疑うところではあるけどね。」

レオンは齒軋りを立てた。悔しさを押し隠すことができなかつたらだつた。

「ステファノ、言い方酷いよ。いまさつき会つたばかりじゃないか。」

「ああ、そうだね。ごめんよ。」

ステファノはジリアンたちに背をむけて、展望台から外を眺めた。

「俺は偽善者が嫌いだ。スカイエンジェルフィッシュ号は好きじゃないし、グリーンオイルグループなんか特に嫌いだね。」

「僕たちは、その、スカイエンジェルフィッシュ号はグリーンオイル財団の援助を受けていたけど、偽善者のつもりはない。」

レオンはジリアンをとめて、首を振つた。

「ステファノさん、あなたが得ている情報を元に、僕たちを色眼鏡でみないでください。」

レオンはジリアンを引つ張つて展望台を出ようとした。

「気分を悪くしてごめんよ。俺には納得ができないことがたくさんあつて、割り切つて生きていけないんだ。」

ステファノは後ろを振り返ることなく、そう言った。レオンは無言だつたが、ジリアンは振り返つて言った。

「ステファノ、通信作業を頼むよ。エアジェットをスタンバイしてくるから。」

「了解。」

スタンドフィールド・ドックに量産型のパジエロブルーがグリーンオイル財団から届けられていた。軽量型として塗装はダイヤモンド仕様ではなかつた。スカイエンジェルフィッシュ号で操縦していた

パジェロブルーに比べて見劣りするものの、ドックで使用する分には申し分がなかった。

「昨日、組み立てて完成したばかりなんだ。レオンって良いタイミングのときに来たね。」

ジリアンはステファノのことを拭うように明るく振舞って、翼をなでて言った。緑色で汚れきった作業を来たレオンがやって来た。

「ジョイス！じゃ、なかった。レオンだったっけ？」

悪びれて舌をだしながらレオンはレオンに近づいた。

「レオンだよ。レイン、久しぶり。」

二人は握手をして再会を喜び合った。薄汚れたレインの手をみて、レオンは自分の手が汚れていないかみた。

「手は洗っただけだけど、落ちないんだよ。」

「そうなんだ。」

「待たせてごめんね。今日は種がこぼれちゃって、作業着を着替えている時間が無くなったんだ。」

「ううん、大丈夫だよ。」

「じゃ、僕が操縦するでいいのかな。」

「いいよ。組み立て完成後の試乗はジルにまかせる。」

ジリアンはヘルメットを取り、レオンに手渡した。

「僕がのつてもいいの？」

「うん、汚れた作業着で乗るのは気が引ける。」

レインが名残おしそうに翼をなだてているように思えた。

「僕たちが乗っていたあのパジェロブルーではないのが残念なんだ。」

「パジエロブルーには、怖くて乗れないよ。」

高所恐怖症のレオンはドックにもどってきたパジエロブルーがドックのデッキに着岸すると青い顔してそう言った。しかも腹立たしくも展望台でステファノが大笑いしていたことがあったからだ。レオンはパジエロブルーのドアを開け、レオンを外に出そうとした。

「ステファノのこと、気を悪くしたらごめん。」

「レオンが謝ることじゃないよ。」

気分の悪さであり空気が読めなかったレオンだったが、ジリアンはステファノのことをよく思っておらず、レオンはその逆であることは理解できた。無言でレインの腕を取り、操縦席から出た。

「ステファノに、レオンを紹介したら、毒を吐かれたんだ。」

「毒？なに、それ。」

「気にしていないから大丈夫だよ、ジル。」

レインが考え込んでいる様子にジリアンは肩をポンとたたいた。

「もう、いいよ。考えなくても。レインが謝るとかそのまえに、僕たちのことを快く思っていないことを言ってくれたんだよ。」

「ステファノが？」

「僕たちって、ジリアンは違うだろ。」

「いや、僕たちだよ。スカイエンジェルフィッシュ号のクルーなんだから。」

首をかしげたレインは口をついていった。

「デイゴが連れて来たんだよ。スタンドフィールドのことをよく知っていたんだから、僕たちのことを快く思っていなかったのなら、ここに来ないはず。よくわからない話だね。」

「キヤスのように、アレックスに興味があったんじゃないか。」

ジリアンは手洗い場について、タオルをぬらしてくると、レオンに差し出した。

「少しは気分がよくなると思う。顔に当ててみて。」

「ありがとう。」

ジリアンはため息をついた。

「ロブ兄さんがもどってきたら、どうなるんだろう。」

「え、まさか、追い出されたりしないだろう。」

間をあけてジリアンは言葉にした。

「スタンドフィールド・ドックはどれだけ人がいなくなったと思ってるの？」

「それって、父さんのせいなの？」

呆れたという顔をジリアンがすると、レオンは笑いをこらえていた。吹き込む風を背後から感じて、三人は外を向いた。

「ここは、ガラファンランド・ドックと違うにおいがする。」

「あそこは海のそばだから、塩のにおいがするよね。」

「ここは、みずみずしい草木のにおいがする。そう、アンが住んでいるところと同じだ。」

「レオン、顔色が良くなったね。」

「ああ。助かったよ、ジル。」

ジリアンはレオンの汚れた作業着を注視していた。

「レイニー、作業着の色が変わってきているよ。」

「あ、本当だ。着替えてくるよ。じゃ、また、レオン。」

「うん。」

レオンが去っていく姿をみながら、レオンはジリアンに色が変わったことについて質問した。

「グリーンオイルは微生物で水気がなくなると死んでしまつて色が変わるんだ。死骸となって服に付着するとなかなか取れなくなるから。」

「そうなんだ。」

「取れなくなつたら異臭がしちゃうんだ。いつも洗濯しておかないとだめなんだ。」

「手の汚れは？」

「あれは体液みたいなものだから。」

「体液？」

「人間で言う汗かな。」

「ああ、なるほど。」

「死骸じゃないから、腐って異臭にはならないけど、落ちにくいんだよ。」

ジリアンはエアジェットを収納する段取りを始めた。

「なにか、手伝うよ。」

「ううん、大丈夫。力が無くてもできるようになってるから。」

手持ちぶたさのレオンをみて、ジリアンは訪ねた。

「ほんとうにもう、パジェロブルーには乗らないの？」

レオンは眉をひそめて泣きそうな顔をした。

「ああ、もう、いいよ。足元が見えちゃうとだめだ。」

苦笑しながらジリアンはクレーンのアームでエアジェットを動かした。天井に目線を向けると、昇降棒の隙間から、ステファノがのぞいているのが見えた。ジリアンは手で合図を送った。それはデッキを閉じる合図だった。

コーデイは診療所から街に出て、ミランダから言付かったパンを買いにきた。わざわざ、レオンに似ているという少年に会いに来たつもりはないが、機会を与えられたと思って確認しようとした。

「いらっしやいませ。」

声をかけたのはコリンだった。コーデイは変に思われないように、笑顔を傾けて、ポケットからメモを取り出し、コリンのほうに向かって言った。

「ミランダ・テレンスさんから言付かって、パンを買いに来たのです。」

「先生の奥さんですね。先生のお知り合いですか。」

「私は先生のご好意で泊めていただいています、コーデイといいます。」

「

「そうですね、コーデイさんですか。僕はこの店主の息子でコリンといます。」

「コリンさんですか。よろしくお願ひしますね。」

コーデイはメモをそのままコリンに渡した。そして、気づかれないようにコリンをみていた。

（髪の色は赤いから、より一層ジョイスさんと呼ばれていたレオンさんに似ているわ。）

コリンはメモをみながら、いつも買うパンとはちがうものが含まれていることに気づいた。

「くるみパンなんて、奥さんはいつも買わないのですが、コーデイさんが好きなのですか。」

勘がするどいと思ったコーデイは、考え込んで答えた。

「そうですね、コリンさんと同じ年頃の方もお世話になってまして、その人が好きなのですよ。」

「へえ、そうなのですか。男の子に人気だとは思われないんだけどな。」

コリンはそうつぶやきながら、メモがあるとおりパンをそろえてレジのそばにおいた。

「メモに書いてあったパンはこれだけです。」

コーデイはお金を差し出し、コリンは受け取ると、おつりとレシートを差し出した。

「ありがとうございます。奥さんによろしくお伝えください。」

「はい。」

コーデイがパンを抱えて、店を出ると、調理場からコリンの父親が出てきた。

「コリン、今の人は見かけない人だな。」

「うん、テレンス先生のところに泊まりにきている人なんだって。」

「テレンス先生の？」

「コーデイさんって言う人。僕と同じ年頃の子も一緒にいるって言った。」

「そうか。クレア先生が亡くなって、先生や奥さんも落ち込んでいたけど、お客さんとは珍しいな。」

「そうだね。」

しみじみとコリンが言うと、父親は思量深い顔をした。

(コリンのことで調べに来たんじゃないだろうな。)

コーデイは街で買い物しながら、街中を歩くときに目を泳がせていた。どこかに行方不明のカスター＝ペドロがいるのではないかと思っていたからだ。レオンとの道すがら、カスターを見かけたのはセシリアの最初の子に会いに行くためだと思っていた。皇帝の子かもしれないレオンに似ている子がセシリアの子である可能性はあるかもしれないことはわかっていた。しかし、それはレインの友達という認識でしかなかったが、ミランダの口からコリンの名を聞いて確信した。そして、コリンに会いにカスターが来るとも確信できた。

レオンが食堂に入ると、隣の部屋にトレーニングジムがあるのに気がついた。

「なんか、本格的にトレーニングとかするわけ？」

「うん、まあ、体鍛えないとね。」

「へえ、ジルはどうなの？」

「操縦するためには体力ないとだめだから、それなりに鍛えたけど。

レイニーほどじゃない。」

レオンはにやりと笑った。

「これから、どう？」

「え？レオンと？」

「うん。」

「まあ、いいけど。」

シヴェジリアンドの地でのジョイスと呼ばれていたレオンと取っ組み合いをしたことを思い出していた。

「肥溜め。」

そう言っつて、レオンはニヤついていた。

「ああ、思い出したくないね。」

ジリアンは、レオンに背中を向けていたが、振り返ると同時にこぶしをみぞおちに打ち付けた。

「うう。」

声を上げたものの、ダメージを受けた様子は無い。ジリアンは手加減したつもりはなかったが、腹筋が硬くなっていることに気がついた。

「うわ、ずいぶんと鍛えているじゃないか。」

「ああ、落ち着きの無い僕を先導師が体力使って発散するように言っつてくれて、いつの間にか鍛えられたよ。」

二人はそのまま、取っ組み合いを始めた。

シャワーを浴びて着替えてきたレインは二人の様子をみて、喧嘩しているものと勘違いして止めにはいるとしたが、背後に立ったステファノがレインを止めた。

「面白そうなことしているじゃないか。」

振り返ってレインがステファノをまじまじとみていた。

「そういえば、ステファノは護衛やってたんだよね。腕には自信があるんでしょ。」

「まあね。」

「じゃ、僕と取っ組み合いをしないか。」

口元をゆがめて笑うとステファノは上半身の服を脱ぎ、かかってこいといわんばかりにレインを挑発した。そこまでしなくてもいいのにといい思いをしながら、レインも服を脱いだ。

4人は軽く汗を流し、タオルを手にした。

「ステファノって、足技が得意なの？」

「まあね。」

「クレアさんも足技メインだったんだけど、北の民族はみんなそうなのかな。」

「クレアさんって、亡くなった女医さんのこと？」

「うん、そう。」

「得意技ひとそれぞれ。俺みたいに細身のやつは、力技よりスナッブ効かせて攻撃するほうが体力をつかわなくて済むからね。」

「ああ、そうか。」

「間の取り方とかレインは無駄な動きがあるな。ジリアンが至近距離で攻撃するのは無駄な動きを省くためだ。次の攻撃を予測して防御し、背中を見せても攻撃するところは後ろに目がついているかのような動きをする。」

嫌な顔をするレインに対して、苦笑するレオンはステファノに向かって、自分のほうを指差した。

「レオンは、相手の反応をうかがって攻撃する作戦をきちんとたて

ていく。攻撃と防御をしながら分析をして判断する。動きだけなくて頭の回転も速そうだな。」

「速そう、じゃなくて、速いでしょ。」

「さあ、それは俺と戦ってみてからの判断だよ。」

「遠慮しておくよ。」

ジリアンは釈然としなかった。ステファノに対して、まだ心を許せないでいるかのようだった。レインはその様子をみて、すこし気がかりに思った。

丸い月が少し欠けた状態でも、月明かりは明るかった。夕食後、展望台からジリアンとレオンが岩山の天辺に上った。

「レインを仲間はずれにしまって、大丈夫かな。」

「仕方ないもの。この場所はもう二人で上ることできないんだからだ。」

「なんか、僕たちに遠慮しているみたいなんだけど。」

「かもしれないね。ロブ兄さんやステファノのこと気にしているのかもね。」

レオンは岩山の天辺で寝そべり、ジリアンははしごにもたれたかかった。

「高所恐怖症なんて、もう大丈夫なんだろう。」

「うん、まあね。こうも、底が暗いと落ちることも創造つかない。」

レオンは大きなため息をついた。

「どうしたの？」

「うん。ミランダさんから、診療所にいていいよって言われたんだ。考えさせてほしいって言ったんだけど。」

「そうなんだ。なんか話が早いね。レオンはこれからどうするのかなって思っただけなんだ。」

「僕はにぎやかなほうが好きかな。診療所は静か過ぎて落ち着かない。」

「確かに、ドックは人数が多いけど、診療所もにぎやかなところだ。」

よ。なにも診療所にずっといなくてもいいんじゃないかな。」

「でも、ドックに来るにはオホス川を渡らなくちゃいけないし。」

「そういえば、このあたりの地域で子供たちはなりたい職業っていうのが明確になって、進路は早く決めてしまうことがあるね。」

「地域によって考え方も違うんだよね。」

レオンは指を広げて右手を月にかざし、指の間に月をながめた。

「レイニーやジルはこの仕事をするわけ？」

「うん。レイニーはエアジェットに乗っているんな土地へ行ってみたいと思ってるけど。スカイエンジェルフィッシュ号でいろんなところへ行ったから、僕はもういいかな。」

「ジルって、行動的じゃないんだね。」

「面倒くさがりなんだ。あまり動きたくない。」

「ふふ。おもしろいな。まだ、10代なのにさ。そんな爺さんみたいなこと言うなんて。」

「いいさ、何とも言うってよ。気にしないから。僕はしたいようにする。ドックにいて生活できればそれでいいよ。」

岩山を強く風が吹いた。二人ははしごの縁を強く握り締めた。

「危ないな。すこしびびったよ。」

「これぐらい大丈夫。転げ落ちたって、下には網が張ってあるし。」

「落ちたことあるの？」

「レイニーとジュニアがね。」

「ジュニアって、デイゴの子だね。」

「レオンは将来どうしたいか決めてないんだね。だったら、決めてないなりにいろいろ考えて過ごせばいいじゃないかな。」

「うん。腰を落ち着けないと決まらないだろうって、トランスバランスの先導師に言われたことがあって……。」

「あつて、なに？」

「ウィンディが医者であることに対して、尊敬していて憧れているところもあるけど、抵抗しているところもあるんだ。」

「なるほど。レイニーみたいなもんだな。」

「レイニーも？」

「うん、ドックにおいてエアジェットを乗り回したい気持ちがあったけど、ドックを出て自由にしたい気持ちも強かったんだ。」

「そうなんだ。わからなくもないけど。なんか違う。」

「違う？」

「ああ、僕に人の命を救うことができるのかなって。」

「うん、大変なことだよ。時間かけて考えてもいいんじゃない。」

「そだね。じっくり考えることにするよ。ありがと。ジル。」

「いやいや、こうやって、同じ年頃の子と話をする機会ってなかなか無いから。嬉しいよ。」

「レイニーがいるじゃないか。」

「ジリアンは苦笑いをしてみせた。」

食事を終えて、レインはデイゴに話がしたいと言った。

「なにか、心配事か。」

「うん、父さんが帰ってきたら、ステファノって大丈夫かな。」

「なに、心配いらんさ。カスターがもどってきてても、あいつのことだから何でもこなせるって。」

「うん、そうだけど。ジリアンがこころよく思っていないからさ。」

「父さんとも、うまくいけるのかなあって。」

「まあ、確かに、ステファノは人見知りをするとこはあって、なかなか、打ち解けないこともあるだろうけど。ジルはああ見えて、結構人に合わせるタイプの人間だ。状況に合わせて受け入れできると思うんだ。」

「そうかな。」

「俺としたら、人当たりの良いレインとステファノがうまくやっていけないなんてのは考えものだと思うっていたからな。」

デイゴはウィンクをして、レインの方をポンとたたいた。

「心配いらんさ。レテシアともどってくるんだ。うまくやっていけるぞ。」

「デイゴがそう言ってくれるなら。」

レオンがためいきをついて、自分に言い聞かせようとしたとき、デイゴがつぶやいた。

「カスターがちゃんと戻ってくれるいいんだが。」

レインは「ああ。」「とつぶやき、心配事は尽きないなと思った。

伸びた長髪、無精ひげ、汚れた服装、立っているだけで体力を消耗していて考えることすらできない状態、カスター「ペドロがようやく目的の場所にたどりついたときのことだった。コリンがいるパン屋を100M先に見据え、行こうか行くまいかと決めかねていた。カスターの前を通る街の人の目線にようやく気がついて、身なりをなんとかしないといけないと思った。

グリーンエメラルダ号の爆破から逃れ、軍にいたときの知り合い、学校で知り合った人、いろんな人を頼ってここまでたどり着いた。不憫に思った友人がくれたお金ではさみとかみそりを買った。小銭を握り締めて、レインたちが通っていた学校横の公衆電話にたどり着いた。かけたのは、グリーンオイル財団の第六秘書セリー又「マルキナのところだった。

「カスターさんですか。ご無事なのですね。良かったです。」

「電話をかけたのはほかでもない、レインたちがどうしているか知りたい。」

覇気の無い澀んだ声で話をするカスターの胸のうちを理解しようとセリー又は応えた。電話機にもたれてうなだれてしまったのは、力が抜けたから。聞いた話はロブとレテシアが寄りを戻したことだった。それはクレアの願いでもあったわけだから、喜ばしいはずなのに、カスターは気が抜けていく思いがした。

「どうかされましたか、カスターさん。」

「いや、大丈夫。」

「いま、どちらにいますか。」

「オホス川周辺の街だよ。」

「本当ですか。」

「スタンドフィールドにもどるかどうか、迷ってて……。」

「大変なのです。」

「なにが?!」

セリーヌが息せき切って、話をするので、カスターは耳を疑った。内容はオホス川周辺の街を開発中のレッドオイルで攻撃するという話だった。耳を疑った理由は、シヴェジリアンドの地と違って、ここは国民が普通に暮らしている場所だというのに、攻撃することだった。理由を聞いただと、セリーヌは言った。

「イリアがそこに向かっていているからです。この情報は秘密裏に手に入れたもので、攻撃するのはグリーンオイル製造会社で誤射攻撃前提です。イリアは製造会社の社長の怒りを買っています。報復の意味もあります。」

「イリアがこちらに向かっていている情報が漏れたんじゃないのか。」
「そうともいえます。ただし、イリア自身は皇帝ともつながっているんで、何ともいえません。」

カスターはどうしたらいいのかと考えた。陽はまだ落ちていない。
「いつになるかわかるのか。」
「おそらくは夜中に。」
「時間はまだありそうだな。」

「こちらとしては、理由無く街全体に避難勧告を出すことはできません。事が起きれば、後々こちらに責任を問われます。」

「わかってるよ、そんなことは。イリアと連絡は取れないのか。」
「取れません。」
「ちっ。」

シヴェジリアンドの地のことを思い起こし、アレックスの時代にこの街に作った地下道の話の思い出した。

「セリーヌ、できる限りのことはやってみるよ。スタンドフィールドは大丈夫なのだろうな。」

「距離的に無理だと思われま。発射する機体を移動させている状態ですが、時間的にスタンドフィールドを攻撃するところまでに行けないとの試算が出ています。」

カスターはセリーヌとの電話をいったん切った。学校の校舎を眺め

て、思いつくことを片っ端からやってようと腹をくくった。

陽が暮れるまえに、レオンはタンディン診療所にもどった。老婆たちが診療所を出て、バスに乗り込むところだった。

「おや、ジリアンじゃないか。大きくなっただね。」

一人の老婆の言葉に別の老婆が背中を肘でついていた。

「違うじゃないか。よく見なさいな。ジリアンじゃないよ。」

金髪というだけで、レオンはジリアンと間違われたことに苦笑いするしかなく、軽くお辞儀をして、診療所の中に入っていった。

「あら、お帰りなさい。」

「遅くなってごめんなさい。」

「いいのよ。いま、診療がおわったところなの。」

ミランダは忙しく動き回っていた。居住スペースへ向かおうとするのと、煮物のおいがした。匂いをかいでいると、ミランダが言った。

「コーデイがご馳走してくれるっていうものだから、お任せしちゃっているの。コーデイの料理は食べたことがあるの？」

「いえ。」

レオンはコーデイの料理に対して創造も着かなかった。匂いからして、悪いものでもなさそうな感じはした。台所にいつて、声をかけた。

「コーデイ、今帰ったんだ。料理つくってるって、何か手伝えることがあったら、手伝うけど。」

「お帰りなさい、レオンさん。大丈夫ですよ。疲れているでしょう、座って待っててください。」

レオンは言われたとおりにダイニングルームで待った。程なく、マークがやってきた。

「いつ戻ったんだい。」

「さつきです。遅くなってすみません。」

「いや、気にするなよ。久しぶりに会って楽しかったか。」

「ええ。にぎやかな感じが落ち着くっていうか……。」

マークの目が鋭くなっていることに気がついて、あわてて口をふさ
ごうとした。

「ここは静か過ぎて落ち着かないか。」

「いえ、昼は診療でにぎやかそうですね。はは。」

取り繕うとしているそばで、コーデイがなべを持ってあらわれ、
食事の用意がされていった。ミランダが仕事を追えて、部屋に入っ
てきて、夕食が始まった。コーデイの料理は野菜中心のものでテレ
ンス夫妻にとっては食べやすいものだったが、レオンにはすこし物
足りない感じだった。

「レオンさんは育ち盛りでしたね。肉類があまりなくてごめんなさ
い。」

「いや、いいよ。たまにはね。」

「ドックじゃ、ジゼルの勢力つく料理がでたのだろう。」

「ええ、みなさん力仕事メインですから。食べる量もすごいです
よね。」

レオンは話すねたが思いつかずに、ナイフとフォークをテーブル
に置いて、食事を終わらせた。

「もう、おわりかい。」

「ええ、結構お腹がいっぱいになりますよ。」

席を立て、食器を片付け、台所に向かうと、台所の窓からまぶし
いくらいの月明かりが差し込んできているのに気がついた。窓の外
を覗き込むと、月明かりの下、野原に人が立っているのが見えた。

髪の毛が白いので、老婆がひとり迷っているのかとレオンは思った。

「テレンス先生、誰かおばあさんが外に立っているのですが。」

「おばあさんが？」

ダイニングからみえる窓を覗き込むとすると、たしかにひとり立
つていったが、マークには老婆ではないことがわかった。

「おばあさんじゃないな。若い女性だ。」

その言葉に、コーデイは驚いた。そしてつかさず、言った。

「わたしの知り合いかもしれませぬ。みなさん、家においてくださ

い。」

そういつて、席を立ち、勝手口から外に出ようとするど、レオンが追いかけてきた。

「ひとりで大丈夫なの？僕も行くか。」

「いいえ、大丈夫ですよ。家にいててください。すぐにもどってきますから。」

そういつて、コーディは出て行つた。レオンにはすぐに戻ってくる言葉が信じられなかつた。コーディがいつになく強張つた顔をしていたからだつた。

陽が沈んだころ、学校に敷地内で髪を切り無精ひげをそり落とした。学校の明かりが完全に消えたころ、カスターは校舎に侵入した。不法侵入は何度となくやってきた。難しいことでもなかった。教職員室で懐中電灯と緊急災害マニュアルを見つけ出し持ち出した。向かった先は通信室だった。カスターの得意とするところなら、通信手段しかない。ひとりの人間が騒ぎを起こしたなら、その人物しか責任を追求されないだろう。

攻撃を止める手段がまったくないって言うのも考えものだが。皇帝の宮殿が無くなった以上、国政は不安定だし、そこが狙いどころかもしれない。

緊急災害マニュアルには、地下空洞のことが書かれていた。アレックスの時代につくった細身の大人がやっと通れるぐらいの幅しかない穴が各家庭の家から伸びて、街の郊外へと走ってたどり着ける空洞があるとのことだった。

「避難勧告の理由を考えなくては・・・。」

飛んでもない理由しかおもいつかない。こここのところ、国民は精神的にも不安定だった。シヴェジリアンドの地でのレッドオイル攻撃は軍によるものだと発表され、表向きにはテロ行為をもくろむ組織の破壊とされてきたが大多数は疑っている。シヴェジリアンドの地を知らない国民なら、いざ知らず、ジャーナリズムの浸透で多くの国民が難民キャンプとして認識されているからだ。

夕食を終え、くつろぎの時間帯にサイレンは鳴り響いた。アナウンズされた避難勧告の内容は、レッドオイルの誤射があり修正が効かないので非難するようにとのことだった。町中の人々はいつせいに避難する準備を始めた。いつ起こるかかわからないレッドオイル爆弾の投下。多くの人が嘘の避難勧告かもしれないという疑いを持って

なかった。シヴェジリアンドの地でのできごとは明日のわが身という思いが強かったからだ。しかしこの街には緊急災害マニュアルが用意されている。避難訓練を受けてきたわけじゃないが、冷静に対応して逃げ延びれるとみな、そう思っていたからだ。

タンデイン診療所からコーディィ・ヴェツキアはエアタクシーに乗って、街にたどり着いた。コーディィそのものではなく、イリアにとらわれてしまっていたのだが。コーディィが診療所からでて、イリアに塚づくくと、早業で麻酔を打たれた。意識を失い倒れこむと、イリアはコーディィの心の中に進入し、乗っ取った。イリアはコーディィの体を使い、コリンに会おうとした。乗っ取った際、コーディィの頭の中にある情報も手に入れた。興味深かったのは、レオンのことだった。

「面白いことになりそう。」

診療所に戻ると、急な用事ができたと、テレンス夫妻には街に行きたいといい、タクシーを呼んでもらった。レオンが心配そうにしていたが、カスター・ペドロが街にいるとの情報で確かめにくくからおとなしくここで待っているようにと説き伏せた。不適な笑いをうかべるコーディィに違和感があったが、まさかトラブルに巻き込まれるなんて、レオンには想像も着かなかった。

イリアであるコーディィが街にたどり着いたのは、サイレンが鳴り止み、アナウンスが終わったところだった。街路に人があふれかえり、何事が起きたのか、検討もつかなかった。人に尋ねて計画が失敗することを恐れて、まっすぐ、コリンのいるパン屋に向かった。

店に入ると、コリンがいて、目を丸くしてみていた。

「コーディィさんどうしたんですか。早く避難しないと。診療所は大丈夫ですか。」

避難？と聞き、まさかレッドオイルのことが漏れて街中で避難が始まっているとは思っていなかった。

「そうね、避難しないといけないわよね。わたしはその前にコリン

さんに話をしなければいけないと思って。」

そう言って、コーデイがコリンの腕をつかもうとすると、コリンの父親が静止した。

「こんなときに話って何ですか。」

にらめつけられてた理由がわからないわけでもなかった。イリアが調べたところ、コリンの父親ジョイスはグリーンオイル製造会社で研究者だった。突然行方不明となったが、イリアの知るところではスワン村にいたことが判明している。その後、パン職人の妻と知り合ってこの街でパン屋を営んでいた。黒衣の民族の血をひくコリンを引き取ったのは、ジョイスが以前愛した女性が黒衣の民族の脱獄者でその女性との間に子供がいたが、女性と子供との二人ともを人種差別の名の下に命を失ってしまったていて、そのときの償いにと
いう思いからきていた。

「こんなときだからこそ、コリンさんに伝えておきたいのです。」

「なに、どうしたの？とうさん。」

「いったいどういうことなのか。いや、話をしてもらいたくないが。」

イリアであるコーデイはコリンの腕を取り、大きな声で叫ぶように言った。

「あなたを生んだお母さんがいま、瀕死の状態なのです。あなたが生きていることを知らせてあげたなら、あなたの姿をみせてあげることができたなら、どんなにか救われることでしょう。」

まんざら嘘でもなかったが、イリアの目的とするところではなかった。それはコリンを連れ出す理由でしかなかった。

「いったい、何を言い出すのかと思ったら。」

「ほんと、ほんとなの？」

ジョイスは仕舞ったと思った。コリンが実の子でないことは前から言い聞かせていた。それは黒衣の民族であるという意識を持たせて、自分の身は自分で守らせるためのものだった。実子でないということを知っている以上、実の母親がいるなら、会いたいと思わな

いわけが無かった。

避難勧告を受けて、街中は逃げ惑う大人たちでごったえがえしていた。地下空洞へつながる穴には子供たちだけが降り立ち、避難進路にしたがい進んでいった。穴に入れない大人たちが街路に出て、郊外へ向かい始めたのだ。

人をかき分け、急いでコリンのいるパン屋にむかてたどり着くと、カスターは店の前で躊躇していた。店の中にコーデイがコリンの父親と言い争いをしている姿をみたからだった。

「いったい、どういうことだ。」

呆然と立ち尽くすカスターの姿が、イリアが操るコーデイの目に飛び込んできた。驚きのまなざしで見るとともに、不適な笑いを浮かべた。その不適な笑いをカスターは見逃さず、イリアが操っていると判断した。カスターが店の中に入ろうとすると、コーデイはドアに鍵をかけた。店の前でこぶしをたたきつけるカスターを指差した。

「あの男は、スタンドフィールドドックの人たちをだまし、クレアさんを殺したひとです。危険ですから、早く逃げてください。とにかく逃げないと。」

コーデイは背中ドアを押さえ込み、親子を逃げるように支持をした。

父親のジョイスは穴には入れず、外に逃げるといい、妻とコリンを穴に無理やり押し込んだ。

「父さん、俺は……。」

「わかった。あの人が言ったことが本当かどうかちゃんと確かめる必要がある。母さんと一緒に逃げ延びてくれ。お互い命があったら、落ち合おう。」

「わかったよ。父さん。」

「あなた、無事でいて。」

「ああ。お前たちもな。」

二人が穴を降りていくのを確認すると勝手口から出て行った。そ

れを見届けて、イリアはコーデイの体から抜けた。コーデイの体から力が抜けて、ぐったりとした。カスターはすぐさま、それがイリアがいなくなったことだと気がついた。店のショーウィンドウのガラスを割り、中に入って、コーデイを抱き起こした。意識がもどったコーデイに理由をつぶさに話した。

「カスターさんが無事ならそれで。」

そういつて店をでて、二人は逃げるために街中を走った。多くの人がごみのなかを一緒に走っていくと、遠くのほうから轟音が聞こえてきた。地面が地響きするようにも感じられた。コーデイとカスターに背筋が凍る思いがした。そして、一瞬にしてその思いを跳ね除けようと言葉を口にした。

「クレアさんのところへいけるかな。」

赤い閃光が放たれて、周囲が赤く染まった。街の人々の阿鼻叫喚が響き、火の海が広がり、火柱が赤く立ち上った。地下道では灯りがとまり、我先にと逃げ惑う子供や年寄りが行き交う。穴から入り込む煙や熱気が地下道に流れ込む。出口を目指して、必死になっていた。

カスターは背中にレッドオイルの液体を浴びて、体が焼けていくのを感じていた。コーデイを必死と抱きしめて痛みに絶えていた。

「発射されるのは夜中だと聞いたのに。」

「カスターさん、大丈夫ですか。夜中って何の話ですか。」

「いや、なんでもない。」

カスターはコーデイを腕から放し、倒れこんだ。

「カスターさん！」

「逃げ延びることができたなら、僕がここまでたどり着いたことを口づちたちに伝えて欲しい。」

そういうと、カスターはそのまま、息を引取った。コーデイが抱き起こすと、カスターの背中中の皮膚がめくれ上がり、コーデイの手にレッドオイルが付着して、火傷を負った。痛みに耐えたものの、周囲を見回すと、火の海で炎がコーデイを飲み込もうとしていた。

「逃げ延びることはできないかもしれないですね。」

コーデイは膝の上にカスターを乗せて、抱きかかえるように伏せた。近くにあった車が炎上し、コーデイを炎で包み込んでしまった。

スタンドフィールドドックでは、地響きがしたので周囲を警戒している。オホス川周辺の街全体が赤く火柱が立っているのを確認した。軍からの通信をキャッチしたステファノは驚愕して、デイゴを呼び出した。

「新型レッドオイルの誤射との通信があった。爆撃される前に避難

勧告の放送があつたらしい。」

「地響きにあの燃え方だ、恐ろしいことになっているとは思つ。シ
ヴェジリアンドの地と比べようもないな。」

「ああ。あの時は軍の爆撃だったが、今回はグリーンオイル製造会
社の誤射だ。何か企んでのことだろうが、検討もつかない。」

「それよりも、人命救助だな。避難勧告があつたのなら、ある程度
非難している可能性があるだろう。爆撃範囲は把握できるか。タン
デイン診療所は無事か。」

「遠赤範囲を確認したら、診療所は無事だ。」

「では、まず、診療所に行つて、テレンス先生の指示を仰ごう。」
「了解。」

ステファノはすぐに準備を開始したが、すぐに飛行できるのは、量
産型パジエロブルーとテントウムシ（小型空挺）だけだった。レイ
ンやジリアンが駆けつけてことの次第を確認すると、自分たちも救
助に向かうと言い出した。パジエロブルーにジリアンと塗装工のが
乗り、テントウムシにはデイゴとステファノが乗って発進し、レイ
ンはエアバイクで向かうこととなった。

一方、タンデイン診療所ではマークとテレンスがグリーオイル財
団の第六秘書セリーヌとマルキナの連絡を受けて、電話をかけまく
っていた。

「だめだ、どこもつながらない。」

「スタンドフィールドもつながらないの？」

「ああ。ここから見ていると岩山は無事だから、ドックの連中は大
丈夫だろう。通じないのは連中が動いている可能性がある。」

「かなり酷い地響きがしましたね。火柱が凄くたっているし。」

「想像もつかないくらい惨劇になっているだろう。軍がこんなこと
までするとは思えない。」

マークがセリーヌから聞いた情報によると行方不明のカスター

ペドロが街にいて避難勧告の放送をながしたということだった。マ
ークからはコーデイが街に向かっていることを告げた。そして、い
つ、けが人や重病人が運びこまれてもいいようにと、ミランダやレ
オンに指示をして、準備を始めた。準備をしていたレオンはふと、
窓から外がみえて、白髪の少女が立っているように見えた。確認し
ようかと思ったが、準備のほうが優先だと見てみぬふりをした。

白髪の少女イリアはコーデイの体から離れ意識を自分の体に戻し
た後、嗚咽し、ゆっくりと立ち上がっていた。両腕で自分の体を強
く抱きしめると、目からとめどなく涙が溢れた。

「こころが痛い。」

亡き母から言われた言葉を思い出していた。

「こころが痛くなったら、泣けばいい。涙が痛みを洗い流してくれ
る。」

無意識で涙が溢れ、こぼれた涙を拭った。

「この涙で汚れた私の体も洗い流してくれればいいのに。」

顔を上げて、月を仰いだ。満月だから、いつもより大きくまるく
周囲を明るく照らす。その月明かりをあびて、イリアは息を吹き返
すように体をこわばらせた。そして、診療所のほうへ向くと、背を
かがめて、様子を伺いながら前に進んだ。

「傷めたこころは元にもどせない。それでも、満たすことができた
のなら。」

満月を恨めしく思いながら走り去った。

第三十二章 生命の灯火 1

レインとジリアンは煤にまみれて放心状態すずになっていた。新型レイドオイルの爆撃を受けて街は焼け野原と化した。学校へ通学しているのかと思うくらいに反応できない。ただただ、驚愕して体が硬直しているのだと認識するしかできなかった。

「誰が、こんな、酷いことを。」

ジリアンが力を振り絞って言葉を吐くと、涙があふれ出した。となりで立ち尽くすレインは声を上げれずに涙をこぼしていた。

ドックから飛び出して、タンデイン診療所の医者マーク・テレンスの指示を仰いだ。人命救助に奔走した。火の海と化した街には一歩も踏みこめなかった。街から運良く逃げ延びた人たちをその場で手当たりしたり、すぐさま、移動を促したり、とにかく必死になって動いた。気がかりなことは、カスターとコーデイが巻き込まれたかもしれないということだった。カスターのことはグリーンオイル財団の秘書セリーヌ・マルキナから街に来ていることを知った。コーデイはレオンと一緒に診療所へ来たことを知りえていたが、爆撃の直前に街へ行ってしまったことをあとから知らされた。

2日間、街は燃え続けた。鉄筋や木材、いろんなものが燃えつくされて、異臭を放っていた。道端のところどころに白い塊があつて目に付いた。近くまでいって、それが人骨だとわかると、一步下がって恐怖に直面していることに自覚するしかなかった。人骨が折り重なっている場所があり、人々がひとかたまりになって犠牲になった様子が伺えた。その場所より視線を移したところに、キラリと光るものを目にして、近づいた。それは骨にうまっていて、見つけてくれと言わんばかりに輝きを放っていた。レインがそれを恭しく取り出そうとすると、レンズが欠けた眼鏡だった。そして、レインは叫んだ。

「カスター!!」

叫び声にジリアンは驚いてレインに駆け寄った。

「どうしたの、カスターがいたの?」

震える声で言いながら、そこにある人骨に見入った。そこには解けた金属が見えた。ジリアンは、ハツとして気づいた。

「この金属、ギブスじゃないの?」

二人は顔を見合わせて、唇を震わせた。

「コーデイなの?」

ミランダはテレンスに泣いている時間はなかった。マークと一緒に街の近くまで駆けつけて手当を続けた。救助の軍が駆けつけて人が運び出した。それから焼け野原を後にして診療所にもどった。診療所には顔見知りのお年寄りが爆撃から逃れて非難してきていた。疲れ切った体を引きずり、愛想笑いで挨拶もそこに居住スペースのトイレに逃げ込んだ。声が漏れないように両手で口を押さえて、嗚咽した。心配して付き添ってきたレオンはトイレの前で言葉を掛けようとしたが、何もいえなかった。残酷な場面に幾度となく遭遇してきた。まだ幼くて状況も把握できないままにパニックを起こしたこともあった。その時々で辛いと思いつつも乗り越えてきた。トイレの前に座り込み、こころのなかで祈った。

(ミランダさんのところが壊れませんように。)

レオンは目を閉じ、煤だらけの顔を両手で覆い、疲れている体がゆっくりと呼吸するように、瞑想に入った。そして、あの満月の夜の出来事がよみがえってきた。白髪の少女のことだ。老人だと思っていたが、マークには少女だと告げられ、コーデイが外に出て行ったこと。コーデイの安否がわからない状態で、白髪の少女のことで爆撃が起きた街へ行ってしまったと思った。瞑想から次第に意識が薄れ、寝入ってしまった。目が覚めたときには診療室のベッドに寝かされていて、うめき声が聞こえた。診療室にレッドオイルによる火傷を負った人が声を上げていたのだ。一瞬で眠気が飛び、ベ

ツドから這い上がって、診療室から出た。

医者マークは少ない時間で休憩をとっていた。診療所は老人と火傷を負った人が人でいっぱいだったので、外に出て喫煙していたのだ。吹かしているとレオンがやって来た。

「先生、休憩時間ですか。」

「ああ、あまりとれないが、体がなまっているせいで動きが鈍くなつて……。ふあゝ。」

「僕にできることがあれば……。」

「ああ、もう大丈夫だよ。野戦病院から開放されたんだ。それより、レオン。目の下に隈くまができているんだぞ。もう少し寝ておけばいいよ。」

「いえ、おちおち寝ていられなくて。」

「ああ悪いな、相部屋になってしまった。」

レオンはしばらくうつむいていた。しかし、意を決したように、口を開いた。

「コーデイが街に行ったのは、あの白髪の……。」

「その話はまた、落ち着いたら、話そうじゃないか。レインたちにカスターが街に来ていたという情報が入ったそうだから。レインたちのいるところだ。」

マークはそう言って、タバコの火を消し、レオンの肩を軽くたたいて、診療所の中に入っていった。

第三十二章 生命の灯火 1 (後書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー) 16歳
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル) 14歳
- ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>) 31歳
- レテシア⇨ハートランド(主人公の実母) 34歳
- デイゴ (ドックのクルー。板金工) 36歳
- ジゼル (デイゴの妻) 31歳
- ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者)
- コリン⇨ボイド(レインのクラスメイト)
- ジョイス⇨ボイド(コリンの父親)
- プラーナ(ジリアンのクラスメイト)
- マーク⇨テレンス(タイデイン診療所の医者)
- ミランダ⇨テレンス(マークの妻。診療所の看護師と医療事務員)
- ウィンディ⇨ゴールデンローブ(クレアの恋人・軍医)
- レオン⇨ゴールデンローブ(ウィンディの息子) 15歳
- デューク⇨ジュニア⇨デミスト(現グリーンオイル財団理事長) 40歳
- セシリア⇨デミスト(グリーンオイル財団理事長の妻。ジリアンの実母。愛称セシル) 34歳
- セイラ⇨デミスト(セシリアとデュークの娘。) 6歳
- カミーユ(セイラ付きのメイド) 23歳

第三十二章 生命の灯火 2

レインとジリアンは、両手にゆがんだバケツをかかえて、泣きながら、道を歩いていた。行き先はタンデン診療所。悲惨な状況の街からやっと出てきたのだが、バケツのなかにはそれぞれにカスターとコーデイのお骨を入れていた。泣くのをやめたいのに悔しくてなかなかできなかった。二人の遺骨を見つけたとき、悲しさとともに喜びも混じっていた。遺骨さえ見つけることができなかつたクレアのことを思えば、断然、死の意味をもつと思えたからだ。ゆがんでいたけどバケツをみつけていて、お骨を拾い上げると爆撃を受けた街の探索していた軍人に咎められた。泣いて頼んでも許してもらえず、途方にくれていると、ひとりの軍人が突然レインの顔を見て、レテシアのことを口にした。レテシアの息子だということを明かすと、許してもらえた。カスターの焼死体は上半身が骨までやけたが、下半身がやけてなかった。ズボンのポケットからジェルミンケースの名刺入れからIDカードと黒髪が数本でてきた。IDカードでカスターとペドロと判明したので、遺骨を引き取る許可が下りた。コーデイにいたっては、その場で検体保存の分骨というかたちで一部を残して、引き取ることができた。ふたりにとって、確実に身近な人物が突然亡くなったことの真実だった。どんなに辛くても受け入れなくてはいけなかつたものだったが、泣かずにはいられなかつた。

二人が診療所まであと少しというところで、一人の女性が道端で呆然と立ち尽くす姿をみた。そして声をかけた。

「あの、どうかされたのですか。」

振り返ったその女性は、レインの友達コリンとボイドの母親だった。

「コリンの、おばさん。」

「ああ、レイン。レインなの？」

「ええ。ご無事だったのですね。コリンは？」

「コリンは……。」

突然涙があふれ出し、手で口を押さえると嗚咽して泣き崩れた。

「どうしたのですか。」

レインはバケツを道端において、駆け寄った。

「コリンがどうかしたのですか。」

恐る恐る言葉にしていたが、覚悟をしたよさそうだと頭によぎらせた。

「コリンは、見知らぬ少女に連れ去られてしまったの。どうしたらいいのかわからなくなってしまつて。」

「少女？」

「ええ、白い髪の少女。」

その言葉に、レインもジリアンも驚愕した。白髪の少女といえば、知らないわけじゃない。レテシアの相棒イリアを思い浮かべた。レインの驚きの表情をみて、コリンの母親は真顔で言った。

「知っているの？あなたはなにか知っているの？」

「いや、そのお。」

「コリンは、カスター＝ペドロさんの名を口にしていたわ。」

「カスターの？」

驚きは隠せなかった。コリンとどういう関わりがあつて、名前がでてきたのか困惑していた。

「おばさん、落ち着いて詳細を聞かせてください。カスターは僕たちスタンドフィールド・ドックのクルーです。」

ジリアンは落ち着いた表情で諭すように話しかけた。そして、コリンの母親は詳細を話し始めた。

コリンと母親は地下空洞をつかつて、爆撃を逃れ、街はずれの出口にたどり着いた。混乱する人々のなかで火柱をたてる街を呆然と眺めていた。ふたりは父親のジョイスの安否を願ってやまなかった。救済に軍の空挺が降り立つと逃れた人々を安全なところへ移動させ

ようとした。移動するための空挺に乗り込む準備と順番を待つなか、コリンは爆撃が起きるまえにあった出来事を母親に語った。空挺に乗り込む直前に白髪の少女が現れ、コリンを連れ出そうとした。コリンの母親が止めようとしたのが、止められなかった。理由は実の母親が危篤状態だと知り、連れて行くということだったからだ。とりあえずエアジェットしか用意できず、コリンしか乗せられない。コリンの母親はあとで代わりの者が連れに来るという話だった。しかし、一夜明けても、その様子はなく、軍に移動するよう促されたが迎えが来るの待つと決めて動かなかった。2日過ぎてようやく、虚偽であると思いはじめて、どうしていいかわからず、診療所をめざしていたという状態だった。

話を聞いたレインに向かってコリンの母親は懇願こんがんするように話す。「レイン、あなたは知っているでしょう。あの子が私たちの実の子じゃないことを。ほかの誰かに話をしたのかしら。」

「あの。おじさんに言われて、クレアさんに。」

「あの人が、クレアさんにつて？」

「ほかには誰にも。」

ジリアン自身聞いたことも無い話だったので、目を丸くして二人の様子をみていた。その様子をレインは当然だというふう認識していた。

「どうして、あの子のことを、母親が知ったというのかしら。どうして……。だって、あの子は黒衣の民族の子ですもの。」

「ええ！」

ジリアンは驚きのあまり、声を上げた。

「黙っててほしいって言われた。話したのは友達だから、知っててほしいっていわれた。」

レインはただただ、イリアのことが気になって仕方なかった。驚いていたジリアンは真剣な面持ちで沈黙していた。

「カスターは何か知っていたのかな。クレアさんからなにか聞いてたのかな。」

「そういえば、コリンはカスターさんがクレアさんを殺したんだと、コーデイさんが言ってたと。」

「それは絶対ないです。嘘です。コーデイがそんなこと言うはずないですし。」

二人は、全力で否定した。コリンの母親の話で腑に落ちないことがいくつもあった。レインが真剣な顔で考え込んでいる様子をジリアンはみて、肘でついた。

「考えなくていいよ。」

レインが睨み返すと、気にせず、ジリアンは言った。

「おばさん、ロブ兄さんに聞けば何かわかるかもしれません。」

「ほんと？」

「僕たちはまだまだ子供で知らないことばかりです。でも、クレアさんがいろいろ考えて行動していたことぐらいはわかっています。」

ロブ兄さんなら、なにか知っているかもしれない。カスターがなぜそんなことをしたのかくらいはわかると思うのです。」

安堵の顔をみせてコリンの母親は手を合わせた。

「コリンがほんとうに実の母親に会いにいったのなら、それでいいのです。でも、それが嘘でなにか悪い人に利用されるようなことがあつたら、主人に申し訳なくて。」

レインやジリアンは、コリンの母親が口にしたことを知らないわけじゃなかった。それは黒衣の民族とのハーフであるアルバートの過去を知っていたからだだった。

第三十二章 生命の灯火 3

街はずれの丘の上にあるタンディン診療所には、軽い症状の老人たちがところせましと、休んでいた。重病患者は軍やグリーンオイル財団の医療班が医療学園都市へ連れ出していた。

医者であるマーク・テレンスはレオンの様子をみて感心していた。母親が軍医であり、家系は医者だと聞いたことを思い出し、納得していた。難民キャンプや戦場を行き来していたレオンにとって、けが人の手当てするのは苦にならず卒なくこなせた。手際の良さから、医療に対して抵抗感があるとは思えなかった。将来医者になるつもりがないとは思えず、素直に受け止めきれない姿勢を何とかしてやりたいと思っていた。

患者の手当てをひととおり終え、レオンと約束をしていた話をしようとした矢先に、レインたちがやってきた。

「先生、電話を貸していただけませんか。」

「どうしたんだ、そんな煤すすだらけで。」

「街に行ってきたんだよね。なにかあったの?」

レオンが心配そうにしているのを見て、ジリアンは涙をこぼして、震える声で答えた。

「コーデイの遺体を見つけたんだ。」

マークとレオンは驚きのあまり、耳を疑った。信じ難かったが、コーデイが爆撃前に街に行ってしまったことを思えば巻き込まれてしまっても仕方がないと覚悟はしていた。うつむくジリアンの腕にゆがんだバケツをみて、レオンは言った。

「そのなかにコーデイが?」

ジリアンはゆっくりとうなづいた。ジリアンがバケツを抱えている腕に重なるようにレオンは抱えた。

「コーデイ、どうしてこんなことになったんだよ。」

レオンがバケツを覗き込むと、金属の破片が混じっていた。それ

が骨折したものをつなぐボルトやギブスだと理解した。そして、とめどなく涙が出てきた。マークはレオンの肩に両手を添えて、移動するように促した。そして、レインに手を添えていった。

「そのお骨は？」

「カスターなんだ。父さんに報告したいんだ。」

「わかった。でも、落ち着いてからにしよう。興奮しているみたいだから、時間を置いてからにするんだ。」

レインはマークに促されて、一呼吸すると、後ろを振り返ってから、言った。

「無事に逃げた友達のコリンが連れ去られたんだ。なぜなのか、理由を知るために、父さんに連絡を。」

マークはレインの後ろにいる人物を確認した。確かにそこに、コリンの母親がいてた。

「コリンのことは、急ぎはしないわ。連絡が早く取れたといっても、すぐに何かできるとは思えないから。」

「ボイドさん、無事でよかったです。さぞ、お疲れでしょう。体を休めてからにしましょう。」

「先生、ありがとうございます。」

コリンの母親は泣くまいと唇をかんで必死にこらえた。

マークはレインたちの話を一通り聞いてから、病人搬送に付き添って行ったデイゴを呼びつけた。ロブに連絡するのはそれからしようということになった。デイゴが診療所にもどってきて、開口一番にこう言った。

「軍から情報があったのだが、レッドオイル爆撃はテロリストがグリーンオイル製造会社の施設を乗っ取ったことによるもので、今は軍が制圧に成功したとのことだ。」

一同は何もいえなかった。デイゴ自身そのことを話したところで何か変わるわけでもないことぐらいは知っていた。

「それと……。」

「それと？」

「ロブとレテシア、テオ＝アラゴンの3人がスタンドフィールドに向かっていると連絡があった。」

「こっちに向かっているの？」

「レインが驚いていると、ジリアンがつぶやいた。」

「身重なのに、こんなところに？」

「それが、ラゴネのじいさまが呼び寄せたらしい。」

「具合がまた悪くなったの？」

「いや、調子が良いときに、レテシアに会っておきたいと言ったらしい。」

レインもジリアンも理解できないとばかりに顔を見合わせた。そして、マークは事情を把握できたとばかりに言った。

「では、ロブがもどってからにしよう。いろいろと話すことがあるから、整理したほうがいい。」

とりあえずと言って、マークはディゴとふたりだけで話をしたいと言い出し、診療所を出た。

レオンはミランダの手伝いをはじめた。汚れたシートや包帯をバケツにいれ、手洗いを一緒にしていた。レインたちも手伝うことはないかと言い出したが、先にシャワーを浴びてからと言われて、シャワー室へ行った。

「はあ〜。」

「なに、ためいきついてるんだよ、レイニー。」

「だってさ、もう、あの二人が来ちゃうんだよ。」

「あの二人って他人事みたいに・・・。」

「うーん、ごめん。なんだか、離れていたから、身内に思えなくなつたやつたつていうか。」

「いろいろあつたからね。」

ふたりはグリーンオイルで出来た石鹸で体を洗った。涙は流しすぎて出なくなつたと思うくらい、もう出てこない。さっぱりした顔つきで、シャワー室を出ると、ディゴが手招きしていた。外へでる

と、夕闇が迫っていた。

「なにか、わかったことがあったの？」

眉間に皺しわを寄せて、レインがデイゴに詰め寄った。デイゴはコリンのことをレインから聞いた。そして、言った。

「ロブにカスターのことを話したら、セリーヌ＝マルキナに連絡をすると言った。そのとき、コリンの名前が出てきたんだ。」

「父さんから？」

「ああ。コリンの事情を知る前のことだから。ジリアンの言う、ロブが何か知っているかもしれないのは的を得ている。」

ふたりの頭によぎったのは、コリンが黒衣の民族との子供だということだった。それが原因で連れ去られたのなら、アルバートが受けた仕打ちがコリンにも及ぶことを恐れた。そのことをレインが口にしようとすると、ジリアンが腕をとって、止めた。

「今、話をしなくても、セリーヌさんに連絡をすると言ったのだから、何か情報を得ているかもしれない。だって、コリンの安否を気にしていたんでしょ。」

「そうかな。」

「ねえ、デイゴ。デイゴだって思うよね、ロブ兄さんから聞いたほうが確かだって。」

「コリンが爆撃前にあつた出来事で、クレアの名が出てきたのなら、思い当たるところがある。それなら、ロブの口から聞いたほうがいいだろう。」

デイゴ自身、その思い当たるところの一件を知らないわけじゃなかった。クレアが何をしようとしていたか、わかっていたからである。

「デイゴがそういうなら、父さんたちが戻ってきてから。」

「それに、テオがやってくる。軍の情報も携えてくるから、今回の爆撃は何が狙いなのか、本質を知ることが出来るだろう。」

レインとジリアンは顔を見合わせた。自分たちが狙われるのなら、スタンドフィールドが狙われるはず。街を爆撃されたのは、脅しな

のだろうか。いや、考えても無駄なのだ。レインはジリアンが首を振るのを見て、ため息をつきそつになった。

第三十二章 生命の灯火 4

早朝に小型空挺がスタンドフィールド・ドックに着岸した。降り立ったのは、テオ＝アラゴンとロブ、そしてレテシアだった。迎えに出てきたのはデイゴだけだった。

「デイゴ、久しぶりだな。元気そうだな。」

「ありきたりな挨拶だな。」

「チビたちは？」

「もうチビじゃないさ。診療所にいてる。」

テオとの挨拶を済ませて、ロブと顔を合わせたデイゴは無言でうなづいた。ロブの後ろから、小さくまとまろうとしているレテシアが顔を出した。

「ずいぶんと速い展開になって、驚いているよ。レテシア、久しぶりだな。」

「ひさしぶりね、デイゴ。」

照れくささと嬉しさでロブの背中にへばりついて動かないレテシアは、デイゴを見上げながら、腕を伸ばし握手を求めた。デイゴは応じた。

「ジゼルが会いたがっている、先に食堂に行つて来てくれないかな。じいさまもいてる。」

ロブの顔を伺うと、無言でうなづかれて、仕方なくロブから離れていった。レテシアの姿が見えなくなつてから、デイゴが口を開いた。

「ロブが危惧していたとおり、クレアからカスターはコリンのことを聞いていたらしい。」

「死に際に立ち会ったのはカスターだけだったからな。」

「セリー又からなにか、聞いたのか。」

「セシリアが危篤だという話だ。ジリアンに話をして連れて来られないかといわれた。」

「コリンを連れ出したのはその理由か。」

「そうみたいだ。ジリアンに何て話をすればいいのか。」

考え深げな顔をふたりでつき合っているのをテオはみている、二人の肩を抱き寄せた。

「レオン」ゴールデンローブがいてるんだろう。結果を話ししてもいいんじゃないか。」

内容を知らないデイゴは不思議な顔をして、ロボの顔をみた。

「話は割りと複雑というか、絡みあっている。クレアさんが気にしていたことの一端が繋がったんだ。」

「なにが？」

「レオンが現皇帝の子供だということだ。」

目が飛び出しそうなくらい驚いてみせたデイゴは、ロボの顔を指差した。

「それって、ジリアンとレオンが従兄弟同士だということか。」

「クレアさんが手に入れた遺伝子サンプルはセシリアのものでそれをレオンとウィンディとで検査したらしい。最近になって、セリーヌが手配して皇帝自身のサンプルを使って検査したんだ。」

「おいおい。」

デイゴは呆れてものが言えなかった。テオはしたり顔で言った。

「そこまでして、グリーンオイル財団が知る必要性というのに、興味湧かないか。」

ロボは深くうなづいたが、デイゴは納得していなかった。

「グリーンオイル製造会社が影武者をつかって皇帝を操っている話はレテシアから聞いた。」

「黒幕って、製造会社の社長っていつのか。」

「財団は製造会社とは決別しているが、理事長はセシリアのこともあるから、黙認できないのだろう。」

「セシリアの危篤って？」

「社長の手管で薬漬けになっていたんだ。ようやく連れ戻したときにはすでに遅かったとのことだ。」

ロブやディゴは社長の手管というのに思い出したことがあった。レインが劇場でセシリアに会ったときであった学園の理事長のことだった。不安顔のディゴにロブは言った。「セシリアはようやく正気を取り戻したらしく、亡くなったと思っていた最初の子とジリアンに謝りつつづけているらしい。」
テオは腕組みをして、話を締めくくった。
「理事長は聞くに見るに耐えないので、コリンを連れ出し、ジリアンを呼び寄せているのだ。」

食堂に入ると、突然ジゼルが飛びついて抱きしめてきた。

「おかえり、レテシア。」

目には涙をためていて、声が震えていた。

「ごめんなさい、ジゼル。心配かけてしまったみたいで。」

「いいのよ。あなたが元気だということ、いろんな方面から聞いていたんですもの。」

テーブルにお茶を手にして老人が待っていた。じいさまと呼ばれているラゴネ「コンチネータだった。」

「じいさま。ご無沙汰しました。」

「よく、戻ってきた。待っていたよ。」

目じりに皺しわを寄せて笑顔でラゴネはレテシアを招きよせた。

「ゴメスはおまえのことを気にかけていたんだよ。」

「ええ、ご心配をおかけしたと思います。」

「鬼館長に合わせる顔がないと・・・。」

「いえ、そんなことはありませんわ。」

レテシアはラゴネの手に自分の手を合わせた。

「身重なお前さんに悪いんだが。頼まれてほしい。」

「何をでしょう。わたしでできることであれば。」

「もちろん、できるとも。」

片手で胸を押さえつつ、笑顔を傾けたラゴネは、レテシアにゆっくりと語りかけた。

展望台の通信室にロブとディゴ、テオが入室すると、そこに、ステファノが待つていた。

「ロブ、紹介するよ。俺が拾ってきた奴でステファノというんだ。」
ステファノはロブの顔をまじまじとみたあと、少しお辞儀をしてみせた。

「よろしく、ロブ＝スタンドフィールドだ。話はディゴから聞いている。」

ロブが手を差し出すと、ステファノは手を出して少し握手するとすぐに引っ込めた。

「ステファノ、こちらが元、空軍の少佐だったテオ＝アラゴンだ。いまはガラフアランドランド・ドック預かりになっている。」

「よろしくな。」

ステファノは少しお辞儀をしてみせた。

「ステファノ、早速で悪いんだが、レイン、ジリアン、レオンを迎えに行つてほしいだ。」

「3人を？」

「ああ。こちらからテレンス先生には連絡しておくから。」

「そうですか。」

ステファノはディゴに目配せをした。

「ロブ。まだ、話をしていなかったんだが。」

「何を？」

「レテシアの前では話しづらかったんだ。カスターとコーディの死体というか遺骨を発見したとレインたちが。」

「何だつて？」

「レオンの話によると、コーディが爆撃前に街に行ってしまったのは白髪の少女が現れたからだという話だ。」

ロブは怒りを露あいつわにした。

「レテシアには聞かせられない話だな。」

ロブはしばらく沈黙した後、言った。

「おそろく、イリアについては財団がかかっているだろう。カスターとコーデイのことを話せば知らぬ存せぬというかもしれないが。」

第三十二章 生命の灯火 5

ステファノは食堂の台所へきて、ジゼルに昼食を頼んだ。

「レインたちを迎えに行くんだけど、軽食を4人分作ってくれないかな。」

「わかったわ。あの子達は悲惨な光景を目の当たりして、心も体も疲れているでしょう。」

食堂のほうから声がするので、ステファノはそちらに目線を移した。目に入ったのは、レインにそっくりな女性がじいさまことラゴネと話をしている様子だった。

「あの人がレインの？」

「ああ、レテシアね。」

ジゼルは手を止めて、レテシアを呼んだ。ラゴネに一言言つて、台所に向かったレテシアは大きな目をさらに大きくして、ステファノを見ていた。

「あら。」

「レテシア、この子がステファノ。デイゴがつれてきた子なの。」

「ステファノ、よろしく。レテシアハートランドよ。レテシアって呼んで。」

「ああ、よろしく。」

差し出された手にすこし躊躇して手を差し出したステファノは、レテシアを見て言った。

「ほんと、そっくりなんだね。」

「うわさに違わずね。」

ジゼルに言われて、レテシアは照れ笑いをしていた。そして、握手をしている手をステファノが離さなかつたので、不思議そうな目でステファノをみた。

「性格も母親譲りだね、きっと。ロブにはさつき会ったけど、似てないなって思ってたんだ。」

ステファノは言葉をかけながら、レテシアの手を握り指をなでるように動かしていた。

「レインは頑張り屋さんだから、ロブに似てるわよ。わたしはお調子者だから。」

ステファノはその言葉で吹きだし、手を離した。

「あははは。いや、まいったな。」

離された手を隠すように後ろにまわし、レテシアはステファノを見ていった。

「あなたは北の民族出身なの？」

笑顔から真顔に変わり、ステファノは「それがどうかしたの？」と牽制した。

「クレアさんに雰囲気似てるから。」

悲しそうな声でそうつぶやくと、ステファノは理解したというように顔を歪めた。

「よく言われたよ。そんなに似てるかな。」

レテシアは首を横に振って、笑顔をみせた。

「似てないわ。あなたは目がはつきりとして大きいもの。ただ……」

「ただ？」

「威圧感をするの。悲しみの。」

ステファノの反応をみて、予想通りだと思ったレテシアは、「ごめんなさい。」と一言言つて、ラゴネがいるところにもどった。ジゼルはその様子を支度しながら聞き入っていたが、「本音をいうなんて、珍しい。」とつぶやいた。

診療所でレインたち三人はミランダの手伝いをしていた。汚れものを洗濯し干したり、診療所内を掃除したりした。診療所の外に、仮設テントを軍がつついていき、そこでの作業も行っていた。

機械音があるのでジリアンが上を見上げると、テントウムシ（小型エアジェット）が飛行しているのが見えた。

「ステファノが来たよ、レイニー。」

手を振って上を指すジリアンの姿をみて、まぶしそくに空を見上げレインはレオンに声をかけた。レオンはすぐさま、診療所にもどり、ミランダに挨拶をした。

「迎えが来たので行って来ますね。」

「あら、もう。お昼は？」

「ドックで用意してるって言われました。お手伝いできなくてごめんなさい。」

「いいのよ。気をつけて。」

ミランダが寂しそくに言うので、レオンはミランダに近づき、肩を寄せた。

「もどつて来ますから。」

背中をさすり、少し痩せてしまったミランダの姿を感じて、レオンは胸が痛くなった。そして名残惜しそくに別れを告げた。診療所を出て、テントウムシ（小型エアジェット）に乗り込もうとしたとき、診療所からミランダがあわてて出てきた。飛び立つ寸前だったのを止めて、ドアが開いた。

「レオン、ごめんなさい。」

ミランダは小さな封筒と靴箱のような箱をレオンに差し出した。

「コーディの荷物を整理していたら、出てきたの。」

封筒には、「ロブ」スタンドフィールド様」と書かれ、箱には「クレアへ」と書かれていた。

「ロブに渡してくれるかしら。」

「わかりました。お預かりして、ロブに渡しておきます。」

テントウムシをステファノが操縦し、離陸を始めた。ミランダは笑顔でみんなを見送った。

ドックに着いた一行は、すぐさまデッキに降り立った。レインとジリアンをロブは両手で抱きかかえた。

「よく無事でいてくれた。」

その言葉には涙が混じっているように思えた。レインの気持ちはすこし複雑だった。

「カスターが……。」

震える声でジリアンが口にした。

「デイゴから聞いたよ。」

ロブは二人の頬を自分の顔に摺り寄せた。ロブの頬は火傷の傷跡があり、摺り寄せられるとその感触を味わうこととなった。ただただ、ふたりは悲しみをこらえて、されるがままになった。

ロブの目の前にレオンが立っているのがみえて、二人をようやく解放した。

「レオン、無事でよかった。」

「心配をおかけしたようで。」

「コーデイのことも聞いたよ。レオンには話しておきたいことがあるんだ。」

「僕もロブに話があります。」

レオンはミランダから手渡された封筒と箱をロブに見せた。

レインとジリアンがその様子を眺めていると、視線を感じ、振り返った。そこにはレテシアが立っていた。手招きしていたので、レインが近づくと、レテシアは「ジルも来て。」と言った。二人はレテシアに抱きしめられた。ジリアンはいままで我慢していた様子で泣き始めた。レインはその様子を見て、レテシアから離れていこうとしたが、レテシアはレインの片手を強く握り締めた。

「そばにいてちょうだい。ジルの為にも。」

左腕でジリアンを抱きしめ、右手でレインの手を握っているレテシアの姿をみて、どこか見た光景だと脳裏にかすめた。しばらくして思い出した。それは、ジリアンが実母セシリアに虐待を受け、レインが発見したときのマーサの姿だった。背中に傷を負い、それまで泣くまいと我慢していたジリアンがマーサに抱きしめられて泣いていた。マーサはレインをそばに呼び寄せ、手を握りしめて、「そばにいてちょうだい。」と言ったのだ。ジリアンの悲しみがマーサ

から伝わってきた。そして今はレテシアから別の感情が伝わってくる。二人で枯れるまで泣いたから、違う気がしていた。今は安心感で涙が溢れかえっていると気づいた。

第三十二章 生命の灯火 6

陽が沈みそうな頃、ロブは汗を拭い、言った。

「ようやく、これで終わりだな。」

レインやジリアンは泥にまみれて顔をタオルでふき取った。レオンは盛った土に水をかけた。そこには、墓が作られた。カスター「ペドロの墓だった。」

「悪いな、レオン。手伝わせてしまつて。」

「いいですよ。ドックの一員として迎え入れてくれるなら、当たり前のことをしたんです。」

「そうだな。レオンがそう言ってくれるなら、俺たちの仲間だ。」

ジリアンは悪びれもなく、レオンが手にしていたバケツを取り上げて、それをレオンに向けてぶちまけた。

「歓迎の儀式だよ。」

「あはは、やってくれたな。」

「仕返しだ!」

レオンがジリアンを追いかけて、じゃれている姿をロブは笑顔で眺めたあと、視線をカスターの墓の横に移した。

「マーサ。あなたの実の息子と仲良く迎え入れてくれ。俺にはこういうことしかできなくて。」

しみじみと話しかけるロブをみて、レインは疑問を口にした。

「コーデイはどうするの?」

「セリーヌが引き取って安置すると言っていた。遺言で決まっていたんだ。」

「遺言?」

「ああ。クレアさんと共にするとき、遺言を残していたらしい。」

「そうなんだ。」

ジリアンを捕まえたレオンは振り返って、ロブに言った。

「コーデイのお墓のことはセリーヌに聞けばいいんだね。僕、墓参

り絶対行くよ。」

「僕も。」

ロブはうなづく、ジリアンとレオンを手招きした。

「大事な話をお前たちにおきたいんだ。」

神妙な面持ちで3人は集まり、静かにロブの次の言葉を待った。

「レオンは、俺たちに関係ある人物だと判明した。」

3人の驚きは隠せなかった。3人が顔を見合わせて、どういふことかと想像した。

「まず、ジリアンの素性をレオンに説明しなくてはいけない。」

ロブが話したのは、ジリアンの出生のことだった。セシリア・デ・ミストの二番目の子として生まれたのだが、そのセシリアは現皇帝マルティン・デ・ドレイファスの実の妹であることを説明した。そのことでレオンは納得した。

「レオンは、ウィンディ＝ゴールデンロープの息子であるが、父親は不明だった。しかし、財団研究所がサンプルを手に入れて、父親が判明したんだ。」

息を飲んだのはレインだけで、想像がついたジリアンとレオンはただ静観していた。

「マルティン・デ・ドレイファス皇帝だということだった。」

「どうして？」

レインの言葉にロブは手で制止した。

「後で説明する。まあ、続きを聞いてくれ。」

次にロブはレオンから手渡されたコーデイの手紙のことを話し始めた。それはクリアからコーデイが聞いた話で、クリアの養父であるダンが命を狙われた理由でもあった。

「俺にこの手紙を託されたのは、理由があるんだ。」

話のくだりはセシリアの一番目の子のことから始まった。死んだことになっていたその子は生かされてダンが知り合いに預けることとなった。その知り合いがジョイス＝ボイドとわかった。

「ええ!!! コリンが!」

レインはジリアンの顔をみた。ジリアンも予想がつかないとばかりに困惑した顔をしていた。

「おそらく、カスターはクレアさんの死に際でコリンのことを聞いたのだと思う。そして、コリンのところで現れたのだと思う。」

コーデイのことはレオンの話から予測がついていた。レインの友達であるコリンがレオンに似ているというところでセシリアの一番最初の子ではないかと推測が着いていたからだ。

そして、ロブはレオンから手渡された箱のことを話したほうがいいのかどうか悩んだと言い、それは今後、知らないわけにはいかないだろうと決心したと言った。

「あの箱には書類が入っていて、ダン先生が死ぬこととなった原因のひとつでもある。それは俺自身、セシリアの出産を知っていたことと、セシリアの素性を突き止めるために退行催眠を行ったことを知っているからだ。」

真顔で聞き入るジリアンと、何がなんだかわからないと困惑気味のレイン。二人の対照的な様子をレオンは理解できないわけでもないとはばかりに見ていた。

「セシリアが黒衣の民族の子を生んだことは、誘拐されたことにながるわけだ。しかし退行催眠で驚いたことには、誘拐はセシリアが望んでいたことで、つまり、宮殿を出たいという願望があったからなんだ。」

運命の歯車はすでにその前から始まっていたと言っただけでよかった。

黒衣の民族が宮殿を襲う前に、セシリアは宮殿から連れ出される手はずだった。その手引きを間違えて黒衣の民族に連れ去られたのだ。その手引きをしていたのは、グリーンオイル製造会社の社長本人だった。退行催眠で得られた情報とは、セシリアがその社長にそそのかされて窮屈で退屈な宮殿から連れ出してもらえることを望んでいたことを明らかにしたことだった。クレアの養父ダンはそのことを書類に書きとめ、箱に隠して、クレアにもわからないようにしていた。ダンが襲われたのは、社長がセシリアを調べ、ダンにい

きさつをしゃべってしまったことを知ったことで、始末することと
そのことを証明するものを処分するためだった。

「どうして？と問うまでもないですね。製造会社の社長は財力・権
力を手に入れていて、あと手に入らないのは、国民に対する権威で
すよね。」

ロブは黙ってうなづいた。セシリアを思うとおりにできなかった
次の手は、皇帝を思うがままにあやつることだった。それを影武者
をつかって操り人形のようにして、足元を狂わせるために性的暴行
をさせることまでしたのだった。レオンのことは現皇帝の不安材料
となった。

「皇女殿下を溺愛している以上、レオンのことは不義であり、表ざ
たにできないことでもあるだろう。」

それまで、黙っていたジリアンは、新たな口火を切った。

「レインと僕が命を狙われていた理由は、黒衣の民族が兄さんたち
を恨んでいたからなのですよね。」

「ああ。」

「レオンが命を狙われたということとは？」

「それはないと思っている。ウィンデイがレオンに別の名を与えて
までその素性を隠していたのは、製造会社の手の者から隠すためだ。」

「皇帝が命を狙っていたとかはないですか。」

レインはジリアンの言葉でやっと思いつ出したことがあった。

「ベルボーイが言った言葉。『ジリアンと、君を、殺すように言わ
れてるんだ。』って。」

ロブはしばらく黙っていた。レオンは自分が命を狙われる理由が
わかっていたが、実の父親を強請^{ゆず}るためのものだと知ってショック
を受けていた。

「クレアさんが言っていたんだが。ベルボーイは黒衣の民族の一味
がしたことだと。」

「違う！」

ジリアンは真っ赤な顔をして、言い切った。

「あれはイリアの仕業だ。コーデイのことだって、そうだ。」

「父さん、僕たちに隠していることがまだあるのでしょうか。母さんのことを気にせず、話してよ。」

ロブはため息をついた。顔が青くなっているレオンを横目にして、白い魚の話はどう説明しようかと考えあぐねた。

第三十二章 生命の灯火 7

陽が沈み、あたりは真つ暗になりつつあった。スタンドフィールド家の墓がある丘で、ロブたちは両手を合わせ、墓に眠る親族やカスターの安らかな眠りを祈り、黙祷した。打ち明けられた話を受け入れ、それぞれに想いを胸に秘め、墓を去った。

食堂で夕食を摂る際には、和気藹々（わきあいあい）としていたレインたちだったが、夕食後のジゼルの手伝いで食器洗いをしているときは無言だった。ジゼルは状況を察して何もいわずにいた。重苦しい空気にならないように普段どおりにしていた。

普段どおりのことが、食堂の隣でも行われていた。ロブとステファノが手合わせをしていたのだ。

「護衛の仕事をしていたとか。体がなまっていないのなら、俺と手合わせでもしてみないか。」

気乗りがしなかったステファノだったが、痛々しい傷跡をみて、体でぶつかり合うのもひとつの手だということを感じながら、承諾した。

ステファノは足使いしかなかった。上半身は防御でしか動かさず、体力消耗を抑えていた。細身だからだろうとロブは相手の器量を軽くみるつもりはなかった。クレアの脚力はバネで利用した攻撃力だと知っていたから、ステファノの足での攻撃を交わし、体で受け止めないようにはしていた。紅潮する肌からほどよく汗が飛び散り、体が温まる感じがしてきた。しかし、ステファノの右足がロブのみぞおちにあたり、ロブは床に伏せた。交わしきれず、受け止められずに倒れたのだった。

「ゲホッ。」

息を切らしていたステファノは、ロブの様子を見守るしかなかった。ロブはしばらくみぞおちを両手で押さえるだけで動くことができないうでした。

「はあ、はあ、はあ。」

ステファノは、台所へ行って、水を汲んできた。心配してレインたちがやってきた。

「だ、大丈夫だ。」

一気に水を口に入れると、息を大きく吸い込んで床に座り込んだ。そして、ステファノを下から見上げて笑って見せた。

「護衛の仕事って相当仕込まれていたから自信があつたんだな。」

「そうしてないと、生きていけなかつたんだ。」

ロボの笑顔が哀れみを意味していると気づいて、レテシアの言われた言葉を思いだし、片手で口を押さえた。

「どうかしたか。」

ロボの目をそらすことしか出来ず、しばらく間をおいて、「何でもない。」と言った。そして、ロボはステファノに右手を差し出した。

「悪いな、気を使わせてしまった。」

ステファノはロボの手を取り、立ち上がらせた。

「俺の姿に誰かを重ねたとか。」

「そうだな。」

目を伏せて、ロボはクレアを思った。クレアに引きずりだされないと動くことができなかったあの頃を思い、この世にいないと知りながらもどこかで生きている気がして仕方がなかった。それはいまだにロボを動かそうと目には見えないものから引っ張られている感じがしたからだだった。

「どうかしたの？」

事情を把握していないレテシアが食堂に入ってきた。ラゴネからグリーンオイル製造の手順を教わっていて遅くなったからだだった。

「男同士の語り合い。前もよくフレッドとやってたでしょう。」

ジゼルの言葉に笑みを浮かべたレテシアは用意された夕食を取り、テーブルに着いた。レインたちが台所に戻ろうとすると、ジゼルからお手伝いは終わりと告げられた。

「レオン、上に行く?」

「いや、今日はいいよ。」

「診療所に帰るなら、送っていくけど。」

「ううん、ジルのところについていい?」

「いいよ。」

ジリアンとレオンの会話をレインは寂しそうに眺めていると、ステファノがそばによって来た。

「シャワー浴びたら、俺の部屋に来るかい。」

「行かない。」

笑いが混じっていたので、からかわれている事ぐらいわかっていた。レインが食堂のほうへ目を向けると、ロブとレテシアが会話をしていた。レインにとってふたりが仲良くしている姿を見るのは初めてで違和感があった。二人の様子に目をそむけて、レインは自分の部屋に向かっていった。

レインが自分の部屋にもどって、まず、考えたのは、ロブから聞いた白い魚の話だった。腑ふに落ちなかったのは、ロブがかばう様にベルボーイを操っていたのはイリアじゃないかもしれないということだった。ジリアンも同じように思っていたし、確信がなぜかあった。しかし、ロブがレインに言えなかったことがあった。娘を溺愛する皇帝の心変わりがあったことだ。そのことでレインが皇女フェリシアのことを変に悪く思ってしまうことを危惧した。その考えをつぶさに話す必要性はないだろうとロブは思った。その思いを知らずに、レインはレテシアとの距離を置くころと思うようになった。

レオンが先にシャワーを浴びるといって、ジリアンは部屋でひとりになった。レオンがもどる少しの間、セシリアのことを思った。白い魚の話のあと、財団秘書のセリーヌ＝マルキナからセシリアが危篤状態だから迎えをよこすという話があった。嫌だと言かないということは後悔することになるだろうといわれて、渋々承諾した。脳裏をかすめたのは、セシリアの三番目の子セイラのことだった。

初めてあつた幼い子も6歳にはなつていた。6歳ともなれば人の死を知らないわけでもないし、辛さを乗り越えていけるか心配になつた。コリンがセイラの力になってくれるかもしれないが、知らぬ振りはしたくなかつた。胸が痛む感じがして仕方なかつた。レインのために耐えた虐待を許すことができるのだろうか。

第三十二章 生命の灯火 8

小型空挺が財団の開発した避暑地に降り立った。周囲には山々が連なり、新緑が生き生きと彩を誇るかのようなみずみずしさの森が広がっていた。点在するホテルやコテージは森に山に身を隠すように建てられ、そのなかでよりいっそう古めかしさを持ち合わせながら威厳をみせつける館があった。そのそばにある草原に小型空挺は着陸したのだ。

「ようやく、到着いたしました。ながらくのご搭乗でお疲れでしょう。すぐにご案内いたします。」

グリーンオイル財団の第六秘書セリーヌ・マルキナは空挺から降りるとすぐさま、乗客を外に出した。出てきたのは、レインとジリアンで、二人は周囲を見渡して以前のリゾート地を思い出して気後れしていた。

「セリーヌさん、コリンが来てるって本当なの？」

「ええ。ロブさんからお聞きになりましたか。コリンさまのことを？」

「あ、はい。」

レインはジリアンのほうを横目でみた。

「コリンのお母さんが心配しているんですよ。」

「ええ、ロブさんからお聞きしまして、連絡だけはさせてもらいました。」

「もう、もどってこないとか？」

「それはコリンさまが決めることですわ。」

セリーヌの物言いに釈然としない思いを抱えて、レインたちは建物の中に入っていった。

外見と同じように、厳かな調度品が廊下の隅に壁に飾られて、重苦しさをより書き立てているかのような装飾だった。少しの間、休

息をとって、長い廊下を歩いた。ジリアンの視界にひとりの金髪の少年が入ってきた。パツと見ると、レオンにそっくりだった。ここにいるはずはなく、いるとしたら赤毛のそばかすらだけのコリン。しかし、そこにいるのは、金髪でカッターシャツにベルベットのベストとスラックスを着こなした少年だった。

「やっとあらわれたな。」

ジリアンは驚いていなかったが、レインは思わず言いそうになった言葉を飲み込んで口を押さえた。

「み、見違えたよ。」

「まったく、借りてきた猫みたいだよ。」

前なら、ジリアンをにらめつけたコリンだが、そこには少し大人になったコリンがいた。優しい目で潤んでいた。

「ジリアンさん、この部屋に入っていただけですか。」

セリーヌに促されて、ジリアンが入ろうとすると、レインは自分も入るのかと尋ねた。しかし、コリンがレインのを制止した。なぜなら、レインが驚愕するの姿を想像することができたからだ。セシリアがスタンドフィールドックにいてた頃、パンを買いに来たことがあり、顔見知り程度に知っていた。

「レインは止めたほうがいい。」

「どうして？」

コリンは無言で返事をして、レインの腕をとって、部屋から引き離れた。ジリアンはその様子を見て、部屋のドアをにらんだ。そこにどんな姿のセシリアがいるのか、想像できたからだ。

セリーヌがドアをノックして、中から老婆の声が出て、ドアが開かれた。レインはジリアンが部屋に張っていく姿を見守った。

部屋の中には、窓際にベッド置かれて、そこに誰か寝ているのがわかった。ベッドのそばに老婆が立っており、ジリアンのほうを向いてお辞儀をしていた。

「ご無沙汰しております。」

その老婆はセシリアがスタンドフィールドックを去るときに迎

えに来ていた。ジリアンは虐待を受けていた後でセシリアに別れを告げてはいなかったが、老婆のことはよく覚えていた。老婆はジリアンに近づき、手をとって、じっと目を見て小声で言った。

「お姿を見ても、驚かないでください。グツと堪えてください。」
老婆に強く手を握られて、気を強く持つよう促されたように思えた。

「わかりました。」

老婆が後ずさりし場所を開けると、ジリアンはおそろおそろの歩み寄った。ベッドのそばの窓は少し開けられていて、風が吹き、新緑の匂いがかすかに部屋に広がった。ゴゴツと鼻が詰まって息をすする音というか声が漏れた。ジリアンの歩みが止まった。

そこには、以前のセシリアの姿はなかった。少しふくよかな色白の淡い青い目に金髪で皇族らしい威厳を放ったプライド高き女性、それが以前のセシリアだった。今ある、セシリアはそばにしている老婆よりかなりひどい状態の浅黒い皺だらけの顔、こけた頬、くぼんだ目、縮れた白い髪や眉、青紫の唇。老婆の注意されたことを忠実に守るために、ジリアンは歯を食いしばった。

老婆はセシリアの耳元に口を持っていき、ささやいた。天井を見ている目がジリアンを見たとき、そこに生気が宿っていないと思えた。

「ジ、ジリアン、あ・い・に・き・て・く・れ・た・の。う、う・れ・し・い・わ。」

ただたどしい口調で必死にしゃべろうとするセシリアをみて、目を背けたい気持ちになった。老婆がジリアンの手を引っ張り、セシリアの顔の方へ寄せた。嫌だという気持ちがこころに脳に駆け抜けたが、抵抗できなかった。そして、老婆はジリアンの耳元にささやいた。

「ひとこと、許していると言って下さい。お願いします。」

ジリアンはギョツとして老婆を見たが、老婆は凝視したあと、瞬きををした。仕方なく、セシリアの生気のない顔を撫でて言った。

「あなたのことは・・・許していますよ。」

頭が真っ白になりそうだった。気が遠くなつて、倒れそうな想いがした。しかし、その気持ちを一扫するかのようなことがそのとき起きた。ジリアンを見ていたセシリアのくぼんだ目、まぶたがゆっくりと閉じると、涙が出てこけた頬に零こぼれていった。

「あ、あ、あ・り・が・・・・と・うう。」

動かした唇が乾燥し、ひび割れして血が滲にじんだ。老婆はガーゼでそっと涙と血を拭った。ジリアンはセシリアを凝視しながら、後ずさりした。笑顔になったセシリアの顔を見届けて、逃げるようにして部屋を出た。

廊下でレインが心配そうにしていた。ジリアンはレインを一瞬みたと、コリンをみていた。コリンはまっすぐジリアンの方へ歩み寄り、抱きしめた。抱きしめられたジリアンはコリンの背中に手を回し、ギュツと抱きしめ返し、声を押し殺して泣いた。

第三十二章 生命の灯火 9

館は深い霧に包まれていた。館の使用人は黒服で忙しく、仕事をこなしていた。冷気が古びた館の隙間から進入して、中にいる者たちを体温を奪っていくような感じさせて、暖炉を炊いても一向に温まる気配がなかった。

「まるで森の妖精が嘆きの人々をいたわっているかのようだ。」
グリーンオイル財団の理事長デューク・ジュニア・デミストは窓から外を眺めていた。黒いベロア生地のスーツを着こなしたセイラが何も知らず、そばに立ちデュークの手を握っていた。部屋にはセシリアの棺が置かれ、弔問客を迎える準備がされていた。

セイラ付きのメイドであるカミーユはセイラの姉のように母親のように世話をしてきた。幼いセイラを残してセシリアは理事長の屋敷を出て行った。女学校の理事長であり皇帝の影武者だった男がセシリアを連れ出したのだ。そのときから、セイラはセシリアの存在を忘れ、母親は死んだものと思うようになっていた。そして、エメラルダグリーン号爆破事件で影武者が死に、余命幾ばくもないセシリアは財団理事長の下に戻ってこれたのだった。セイラには変わり果てたセシリアの姿を見せることはできなかった。母親の存在さえ忘れてしまったセイラにいまさら、母親の死を告げることは必要ないだろうとの判断から、親戚が亡くなったことになっていた。

レインたちはコリンと共に、用意された喪服を来て、棺の部屋に現れた。セイラはジリアンを見るなり、駆け寄り、ハグを求めた。ジリアンは求めに応じてセイラを抱きかかえて持ち上げた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。」

「大きくなつたね、セイラ。」

不思議な顔をするコリンに、レインは事情を説明した。

「すでに認識しているのかと思った。」

「コリンは紹介されたの？」

「もちろんだよ。真つ先に紹介された。こんなかわいらしい妹がいたなんて、夢にも思わなかったよ。」

ジリアンとコリンは理事長のデュークに呼ばれてセシリアの棺のそばに来た。棺にはセシリアが眠るように横たわっていた。口に綿を詰めふっくらした顔に仕上がり、血色の良いようにメイクされていた。

「不思議なものだな。健康そのものだったこの人と知らずに会っていて、死際には息子として面会された。そして、父親の違う兄弟がここに揃って偲ぶのだから。」

ジリアンはセイラの手を強く握った。セイラは棺の中の人物が母親であることはわかっていない。コリンが言ったことも理解できていなかった。そして、ジリアンの手を強く握り返した。

「わたしは寂しくないよ。コリンお兄さんがいてるんだもの。」

ジリアンは目を見張ってコリンをみた。コリンはただ、黙って頷いた。

セシリアの葬儀は近親者だけで厳かに執り行われた。皇帝はお忍びで現れ、皇女フェリシアは自重して来なかった。レインは親族の一人として参加し、ジリアンと共に、墓に葬られるまでいた。無事葬儀が終了し、個々に散り散りと去っていく人々に霧雨が降ってきた。

ジリアンとコリンは終始一緒にいて、間にはいることが出来ず浮いた存在を感じていたレインは、いままでとこれからの違いを感じ始めていた。暗くて重たい霧が立ち込める森の中を車にのって館へもどる道すがら、レインはなにも知らずにいた今までと、知り得て前に進まなければいけないこれからのことを考えていた。亡くなった人たちの顔を思い浮かべ、死の意味を生きている証を無駄にしたいと思いに駆られた。兄弟として育ったジリアン、友達だったコリン、SAF<スカイエンジェルフィッシュ>号でたどり着いた場所で知り合ったレオン、そして自分自身とあわせて全部つながっ

ていったこと。偶然じゃなくて必然性を感じて、これからのことを考えた。それまでそんなことさえ、考えたり思ったりできなかった。レインはこれからのことを考える衝動に駆られた。

レインの思いはスタンドフィールド・ドックに戻ってから変わらなかった。ドックから去るまで背伸びしようと思死だったと気づき、知らされないままSAF号のメンバーになって、SAF号を失うまで何もできないままの自分に苛立ちを感じていた。いや、それまで何度も感じていた。考えようとしなかった。ただだった。今は違う。考えても全体を把握できるので、前に進める。

ロブとレテシアが幸せなオーラを放ち、仲良くしている姿を寂しく思っていたレインは、葬儀から戻ってきてようやくその状況を受け入れることが出来た。理由はただひとつ、レテシアに新たな生命が宿っているからだ。その命がこの世に生を受けて産声を上げた時は、何も状況を知らない。知らないままに生きていく辛さを感じるのではなく、生を受けたことを喜びで感じられるように、レインは守られなければならない存在を意識し、自覚していく強さを見につけようとしていた。

ただ闇雲につっぱして来たそれまでと違い、地に足をつけて、守っていくためにもっと強くなっていくこうと決意した。

「ひゃっはっはっはっは、はあはあっ」

オイルタンクのなかでレオンの笑い声が響いた。照りつく太陽のした、グリーンオイル製造のタンクを清掃するレインとレオン、タンクの外側で見守るステファノがいた。

「レインって、ある意味、ほんとすごいよね。」

「褒めてないって。」

「いやあ、まいった。僕にはできない芸当だよ。」

「ステファノの言い方が悪いんだよ。レオンがこんなに笑うなんて」

「いや、誰だって、笑うだろう。」

「ジリアンは笑わなかった。」

「いや、それ、笑えないからだよ。」

ステファノの背後から、杖を突いた老人が現れた。

「そういえば、ジリアンの姿が見えないな。」

「ジリアンは、両親が亡くなったプラーナのところへ会いに行ったんだ。」

「ほう、そうかい。」

眼を細めてレインを見る老人ラゴネ「コンチネータは空を見上げてまぶしそうにしていた。その様子を見て、何をしようとしているのか先が読めないとばかりにラゴネを見つめて不可解な顔つきなレインはブラシでタンクを掃除していた。

「プラーナって、寄宿学校にいたから、無事だったんだよね。」

「うん。今はお父さんの方の祖父母の家にいるんだ。」

「ジリアンには許婚がいるんだ。」

「いや、許婚じゃないよ。仲が良いだけ。」

「へえ、将来結婚するんじゃないの?」

「さあ。」

レオンはステファノのほうをみて顔色を伺った。ステファノは自身でレインは信用できないというそぶりをした。

「はい、わかりました。掃除を早く終わらせて、昼食を早く食べられるようにしよう。」

レインとレオンはすぐさま、無言でブラッシング始めた。ステファノはタンク周りの掃除を始めた。ラゴネは杖を突きながら、グリーンオイルが波打つタンクを見に行った。

ドックの食堂では、レテシアが悪戦苦闘していた。レテシアは女兒を出産し、レインが産まれてから時が経ってしまったため、初心者のように赤子をあやしていた。見るに見かねてジゼルが手助けするものの、母親として自覚が足りないと自己反省してレテシアが鬱蒼^{うつそう}としていて、手がつけられなかつたりした。だからと言って、女兒を育てる術を心得ていないロブは近寄りもしなかつたので何の手助けにもならなかつた。

女兒の名前は港エスパニシーオネにあるガラフアンドランド・ドックで生を受けたことに由来して、「シーアリア」と名づけられた。レインにとって、年齢離れた妹はかわいいはずだった。ジリアンに父親違いの妹セイラがいることで救われたように、レインにとってもシーアリアは両親をつなく手助けになるはずだった。しかし、レインもロブと同じく、近寄ろうとしなかつた。父親と兄に愛想を振りまこうと懸命に笑顔をみせるシーアリアだったが、二人にとつて泣かれることが怖くて触れてはいけない生物のように扱うしかなかった。レテシアが子育てに疲れて、シーアリアの面倒を見切れないうときは幼いながらも自分の子分ができたたと喜んでデイゴJRが相手をしていた。

ジリアンは一人で旅に出ていた。傷心のプラーナに会いに。オホス川の街を襲ったレッドオイル爆弾の惨劇で、プラーナの両親が犠牲になった。プラーナの両親以外でも、レインやジリアンの友人や

知人、多くの人が犠牲になった。手紙のやりとりで慰めるには限界があると感じて、ジリアンはプラーナに会いに行くことを決めた。
スカイネンシエルフイッシュユ
SAF号を失ってドックにもどってから、一度あつたきり。あのと
き、大人びたプラーナの姿に物怖じしたジリアンだったが、今回会
うことに躊躇してしまつたら、プラーナを失う危機を負うことにな
ると覚悟した。

見知らぬ街にたどり着き、手紙の住所を頼りにプラーナの祖父母
の家を探した。長閑な田園風景のどかが連なり、多彩な植物に囲まれた一
軒家を見つけ、玄関をノックした。

「こんにちわ。」
なかから、老婆の声がかすかに聞こえて、名乗つたが返答がなか
つた。

「プラーナに会いに来ました。」
大きな声を張り上げると、中からバタバタと足音が聞こえた。そ
して、玄関のドアが急に開いた。

「ジリアン!!」
「痛い!!」

勢いよく開いたドアがジリアンの顔を直撃した。

「まあ、ごめんなさい。大丈夫?」

ジリアンは大丈夫というすぐさを見ると、プラーナはすぐさま、
ジリアンに抱きついた。

「会いたかつたわ。会いに来てくれたのね。ありがとう。」

メガネをかけた在りし日のプラーナの姿にジリアンは胸をなでお
ろし、やさしく包み込むように抱きしめ返した。

「ごめん。もっと早く会いに来ればよかったんだけど、遅くなっ
て。」

「ううん、いいの。ジリアンがああ街で一生懸命になっていること
をほかの友達から知っていたの。ジリアンらしいって思っていたか
ら。。。」

プラーナは目に涙を潤ませて、明るく振舞っていた。手紙には落

ち込んでいることを一切書かなかった。でも、ジリアンにとってはそれは痛いほど辛い思いをしていると感じていた。もっと早く会いに行かなきゃいけないとおもって焦りを感じつつも、できなかったのは、ジリアンのなかで秘めた思いがあったからだ。それはプラーナを気づけてしまうことになりかねないとわかっていたから、辛い思いをしている今はその気持ちにさせてはいけなないと考えていた。

ジリアンを紹介されて、プラーナの祖父母がそれまでの様子と違うことは口にしなかった。ただ、暖かく見守ることしか今はできないだろうと思っていた。プラーナが気を使うことを知っていたからだ。ジリアン自身はプラーナの祖父母と接していて、亡くなった両親と変わらない様子に居心地のよさを感じていた。

ジリアンの秘めた思いは、プラーナとは一生友人でいることだった。二人がどんなに深く思いあつていても、男女の仲になつてはいけなと決めていた。それは二人の将来が重なり合わないことで、いずれ溝が出来てしまうことを知っていたからだ。プラーナは生物学者になること、ジリアンはスタンドフィールドドックでレインの補佐をすること。二人がそれぞれ別々の道を歩むことを、初等科では遠い日と思っていたが、今は違う。

プラーナは今までの思いをジリアンに打ち明けようと思つて、二人つきりで過ごしたかったが、ジリアンは拒んだ。プラーナの悲しい目つきを見るのは辛かったが、堪えて見つめ返した。ジリアンの真剣なまなざしにプラーナは悟つた。そして一言お願いをした。

「何も話はしないわ。無言のままでもいいの。朝までそばにいてほしい。」

ジリアンはプラーナの願いを受けた。リビングのソファにふたりは無言のまま朝まで座っていた。

第三十三章 青眼の姿勢 1 (後書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー) 17歳
ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル) 15歳
ロブ⇨スタンドフィールド(主人公の兄<実父>) 32歳
レテシア⇨ハートランド(主人公の実母) 35歳
シーアリア⇨スタンドフィールド(レインの妹) 0歳
デイゴ (ドックのクルー。板金工) 37歳
ステファノ (ドックのクルー、北の民族) 25歳
ジゼル (デイゴの妻) 32歳
デイゴJr (デイゴとジゼルの息子) 5歳
ラゴネ⇨コンチネータ(レインたちの叔父・グリーンオイル生産責任者)
コリン⇨デミスト(レインのクラスメイト) 17歳
プラーナ(ジリアンのクラスメイト)
マーク⇨テレンス(タイディン診療所の医者)
ミランダ⇨テレンス(マークの妻。診療所の看護師と医療事務員)
ウィンディ⇨ゴールデンローブ(軍医)
レオン⇨ゴールデンローブ(ウィンディの息子) 16歳
デューク⇨ジュニア⇨デミスト(現グリーンオイル財団理事長) 40歳
セイラ⇨デミスト(セシリアとデュークの娘。) 7歳
カミーユ(セイラ付きのメイド) 24歳
テオ⇨アラゴン(元少佐) 44歳

セリーヌ＝マルキナ（デューク＝ジュニア＝デミスト理事長の第六秘書） 28歳

イリア（白髪の少女） 18歳

エミリア＝サンジョベーゼ（空軍第5部隊少尉・皇女殿下のパートナー） 19歳

ジェフ（元山岳警備隊パイロット。レテシアの同級生） 35歳

マルティン・ド・ドレイファス（コン・ラ・ジエンタ皇国の皇帝。

セシリアの実兄。） 39歳

フェリシア＝デ＝ドレイファス（皇帝の第一皇女。空軍第五部隊少尉） 19歳

コーネリアス＝アンコーナ（ワイナリー農園のオーナー・食品企業の財閥の娘） 15歳

テントウムシ（小型空挺）でレインはレテシアとシーアリアをタ
ンディン診療所に送迎していた。操縦していたレインは落ち着いて
いたが、レテシアは落ち着きがないままにシーアリアを抱いていた。
操縦していない状態だと緊張してまともにはられない性分だった。
そうとも知らないシーアリアはスヤスヤと寝息を立てていた。診療
所の横、丘の上にホバリングして着地した。ドアを開けると物音が
して、シーアリアは目覚めた。レインは先に外へでて待機していた。
レテシアは青い顔をしてシーアリアをレインに手渡した。まだ、首
がすわっていないシーアリアを抱かされたレインは微動だにせず、
全身がかちこちに固まっていた。その様子を気づくこともできない
ままレテシアは荷物をおおざっぱにテントウムシから降ろしていた。
「ごめんね、レイン。そのまま、シーアリアを抱いて診療所に行っ
てくれないかしら。」

「ええ！嫌だよ。僕、怖い。」

「大丈夫よ。お願い。」

レインはシーアリアを見た。同じ大きな瞳でレインを見つめ、何
も恐れない笑顔を傾けていた。レインが泣きそうな顔を見ると、シ
ーアリアも泣きそうな顔をしたので、レインは顔を引き締めて、診
療所に向かって走り出した。その様子に驚くこともなく、泣くのを
やめたシーアリアは小さな両手を広げてレインの顔を触ろうとした。
「やだよ、触らないで。」

レインのなかで、早く診療所に行つてミランダに託してしまおう
と考えていた。しかし、診療所の中に入ったレインが見たミランダ
の姿に愕然とした。

「あら、いらつしやい。かわいい天使ちゃん。」

笑顔で明るい声のミランダだったが、以前の健康的な姿ではなか
った。

「こんにちわ、お世話になります。」

「そうね、3ヶ月検診だったかしら。」

「ミランダさん。」

「なあに？」

「また、痩せたんじゃないですか。」

「そうかしら。」

シーアリアを抱こうとするミランダの腕が細くて抱きかかえられないのではないかと思うくらいだった。

「それでも、体重が増えたほうなのよ。」

レインはレオンから話を聞いていた。オホス川の街の悲惨な事件から、日に日にやつれていくミランダのことを。

「いやあね。そんな病人をみるような目でみないで。」

「あ、ごめんなさい。そんなつもりは。」

ミランダに渡されたシーアリアは、嫌がって泣き出したが、すぐにレテシアが現れて、レテシアに渡った。

「ごめんなさい。突然、来てしまって。」

「いいのよ。うちはいつでもいいの。」

いつもの調子のレテシアをみて、レインは齒がゆい思いをした。ミランダの様子がおかしいことに気づかないのだろうか。レインのミランダを見る姿を夫であるマークが見ていた。

「ミランダ、シーアリアの身体検査をまかせるよ。」

「ええ。レテシア、こっちに来て。」

「あ、はい。」

ミランダとレテシアが診療室に入ったのをみて、マークはレインの肩をたいた。

「不憫だと思わないでくれ。」

「ご、ごめんなさい。」

「いや、謝らなくていい。」

マーク自身も辛い思いをしているのだろうと、レインは察した。

「野戦病院でも、ああいう状態になったことがあってね。看護師と

しては失格だと自分を責め立てるんだ。」

「野戦病院って、戦場の病院ってことですよね。」

「ああ、戦場だけでなく、災害や避難民の避難先での病院施設のな
いところでも、そう言ったんだ。」

マークは台所にレオンがいてるからと伝えて、診療室に入ってい
った。

レオンが診療所の住居スペースに入っていくと、台所で料理をし
ているレオンが目に入った。

「こんにちわ、お邪魔するよ。あれ、レオンが料理するの？」

「ああ、うん。僕が作った料理をミランダが食べてくれるから。」

レオンは将来医者になることを決心した。そのためには医療学園
都市の医療学校へ進学しないといけないのだが、まともに学校に通
えなかったレオンはその資格を取るために、マークたちに世話にな
ることにしたのだった。

「ミランダさんの体調はどうなのかな。」

「うん、だいぶ良くなったよ。最近まで寝込んでいたんだよ。マ
ークが作った料理をくちにつけてくれなくてさ。」

「それで、レオンの手料理を。」

「そうなんだ。僕はこう見えても、避難先で優秀なコックだったん
だから。」

「ああ、はいはい。」

おそらくは、ミランダがレオンに気を使わせないように、料理を
口にするようになったのだろうと思った。あの悲惨な事件がこんな
にも人のところの間に大きな溝をつくって、病にさせてしまうんだ
と、憎んだ。そのことをレオンに話すと、かえって笑いとばした。

「憎んだって、人の命はもどってこないし、ミランダの病が治るわ
けじゃない。」

「でも。」

「僕は、憎しみで怒りで行動を起こした人々が身を滅ぼした様子を
目の当たりにしたんだ。何度も。」

レオンは料理をする手を止めて、震える手を強く握り締めた。

「惨めなものだった。小さいときから、そんなものばかり見てきたせいか、憎しみや怒りなんて、何も役に立たないって思ってきたんだ。」

レオンはレインの目を見つめた。その目は真剣そのものだった。

「でも、何もしないことも罪になることを今回で知ったんだ。」

「何もしないこと？」

「ああ。」

レインの脳裏によぎったのは、クレアのことだった。子供ながらに、クレアの養父ダンの死を知っていた。大人たちが口にした言葉の中から、復讐という意味を知った。クレアがダンの復讐をしようとしているんじゃないかと。しかし、それは、知らない大人たちの思い込みでしかないとわかった。

「僕のできることは何だろうって考えていた。わかっていたことだけど、医者になることは簡単ではないし、どこかで抵抗していたから、決心に迷いがあったんだ。でも、あの悲惨な事件のことで、もう、迷っている時間なんてないと思った。」

「復讐することに意味なんてない。でも、できることはしなくちゃいけない。」

レインは自分に言い聞かせるように言葉をつぶやいた。

「怒りや憎しみはエネルギーを生み出す原動力にはなる。その使い道を間違っただけじゃないってトランスパランスでの先導師は言っていた。」

レオンはレインに笑顔を向けた。すこし拍子抜けでレインは驚いた。

「そんなことを考えたり、決心したりできたのは、レインやジリアンがいたからだ。避難所での仲間たちとは語り合えなかったことだ。あのころは、まだまだ、僕自身こともだったし。」

レインは苦笑いするしかできなかったが、レオンの決心したことの凄さを感じることができて、嬉しくなった。

「僕でできることがあれば、手伝うよ。」

「もちろんだよ。スカイエンジェルフィッシュ号の活躍は僕たちで受け継がなくちゃ。」

ラゴネは暗室でグリーンオイルの種を製造していた。レインとジリアンはその様子を食い入るように見ていた。いつかは継がせなければいけないと思っていた。それはラゴネから若い者たちへ受け継いでいくものだが、若い者はゴメスをはじめフレッドとラゴネより先に逝ってしまった。こころの奥底でロブでは間に合わないと思い、グリーンエメルダ号でグリーンオイル製造に関わっていたレテシアに伝授しようとした。しかし、産後のレテシアには限度があった。自分の寿命を感じて、先を急ぐことにした。

「このグリーンオイルに高濃度の酸素液体で培養する。タンクに仕込む種を製造するんだ。」

「はい。」

「わかつていると思うが、色の違いで種を見極めるんだ。」

ふたりは真剣なまなざしでラゴネをみて、種ができていく工程を頭にたたきこもうとしていた。今までに言われるがままに、手伝いをしていた。タンク製造がどうして必要なのか、聞かされてから手伝わされた。種がどうしてできるかなどは聞いてはいたが、目の当たりにして増えていく様子はまだ、見たことがなかった。

「じいさま。濃い緑は酸素が十分で、黄色がかかっていたら腐ってきているということだよな。」

「いや、違うぞ。黄色といっても、植物と一緒にでだな、病気になっているということなんだ。新鮮な水と酸素で回復していく。手遅れになるのは、茶色だ。わかったか。」

「はい。」

ラゴネはふたりの姿に、幼い頃のフレッドとロブの面影を重ねた。ラゴネより年下だった、フレッドとロブの父ゴメスが亡くなった時に寂しく思った。まさか、フレッドの死を受け入れなければいけないとは思ってもみなかった。そして、いま、命知らずなロブの亡骸なきから

を見るはめにはなりたくないと思った。

ラゴネはレインの頭を撫でて言った。

「お前たちふたりが中心となって、このスタンドフィールドドックを守ってほしい。」

二人は、ラゴネに心配をかけたくない一心で満面の笑顔で「はい」と答えた。

白くて丸い月が、タンデイン診療所がある丘を明るく照らしていた。レッドオイル爆弾の悲劇以来、診療所をたずねる者はスタンドフィールド・ドックの人間以外にいなかった。生存できた街の人々は他の土地に避難したり、身寄りのないものたちが施設に引き取られたりしていったからだ。静まり返った宵闇、やけに明るいう月が不気味に思えた。そう、あの夜のように。

夕食後に、マークが月明かりの様子を話すと、レオンは落ち着きをなくしてきた。こころの中では外に出たくないなと思っていた。窓から入ってくる夜風が心地よく、窓辺で呆然と立ち尽くしていたミランダの様子が変わってきた。マークは気がつかなかったが、レオンは直感的に違いを感じていた。

「ミランダ、大丈夫？」

レオンを見ようとしているミランダの視線がレオンに向いていない。

「大丈夫よ、レオン。なによ、なんともないわよ。」

レオンがマークに言って、指摘をした。マークはミランダを呼び寄せ、目を合わせようとすると、ミランダはめまいがするといって倒れかけた。

「おいおい、大丈夫じゃない。寝室で横になってないのだめだ。」

「そうね、レオンの言うとおりかもしれない。ごめんなさい、心配かけたくなって。」

マークにはいつものミランダに思えた。しかし、レオンの疑いはまだ晴れない。目線のあわない様子が気になって仕方なかった。寝

室で付き添うわけもいかず、しつこくするのは気に病んでしまうこととなるだろうからと食事の後片付けをしはじめた。

ミランダは寝室にはいると、ふたりにわからないように電話をかけた。かけた先はスタンドフィールドドックだった。繋がってとつたのは、通信担当のステファノだった。

「タンディン診療所のミランダ＝テレンスです。こんばんわ、遅くにごめんなさい。レテシアにかわってほしいの。」

「わかりました。しばらくお待ちください。」

なにも疑うことなく、ステファノはレテシアを呼び出した。レテシアは電話口に出た。

「こんばんわ、ミランダさん。検診でなにか結果が出たのかしら。」

「いいえ、検診のことではないわ。わたしがわかるかしら。今晚は満月よ。」

電話の向こうで声がするのはミランダだが、話していることである人物だと理解した。

「ええ、わかるわ。無事だったのね。」

「ええ、無事だったわ。どうしても伝えたいことがあって。」

「伝えたいこと？」

「ロブに伝えてほしいの。」

「ロブに？」

「カスターには酷いことをしてしまったわ。」

「イリア……。」

レテシアは声を詰まらせて、それ以上話せなかった。

「レテシア、わたしはあなたのことを愛しているわ。大事に思っているの。」

「ええ、わかっているわ。わたしもあなたのことを思わなかった日はないわ。」

「これだけは言える。一緒にはいられない。そして、わたしにできることをするわ。」

「なにをするの？」

「安心してちょうだい。命を粗末にするようなことはしないから。」
その後の言葉を言い出そうとして言えなかった。人の命を奪って
まで生きている自分がどこまで無事にいられるはずもないことをわ
かっていたからだ。そして、電話の向こうですすり泣くレテシアに
思いを寄せた。

「あなたが幸せならばそれでわたしも幸せ。」

「そんな・・・。」

「あなたと一緒にいられた時間は私のにとって幸せでした。」

「命を粗末にしないって言ったけど、無茶なことをするのは・・・。」

「大丈夫。大丈夫だから。いつか、シーアリアに会えることが出来たら。それがわたしの望みかな。」

電話はそれで切れてしまった。レテシアは嗚咽して崩れた。ステファノが心配してロブを呼んできた。泣き崩れてわけを話そうとしないレテシアをロブはやさしく抱きしめることしかできなかった。

電話を切ったミランダは寝室を出て、ふたりに気づかれないように診療所を出た。月明かりを浴びるようにして丘に立ち尽くしていると、レオンが気づき、ミランダを連れもどそうとした。マークに気づかれないように。

「ミランダ。」

声をかけても、返事がなかった。

「ミランダじゃないんだ。誰なんだ。」

「あなたがレオンね。ほんと、コリンにそっくり。」

ミランダがレオンの方へ振り向くと、視線はレオンを見ていなかった。

「おまえが、コーデイを。」

「目的はわかっていると思うけど。」

「コリンなのか。」

「ええそう。わたしにはしなくちゃいけないことがあって、そのために。」

「コーディヤカスターの命を奪ったのか。」

無言のミランダが下を向くと、目から涙がこぼれた。

「今は、その話をしている場合じゃないの。」

「いつたいなんだ。」

「トランスパランスの先導師に連絡をとって、パトロンを動かさない。」「

「パトロン?」

「ええ、そう。輸送で大儲けした人物よ。」

レオンは眉をひそめた。こころ当たりがあったからだ。それはトランスパランスで世話になる前に、ウィンディから世間の情報として知り得たものだった。

「グリーンオイル財団を動かすと情報が漏れてしまうの。」

「どうということなんだよ。どうして俺が指図を受けて、いうこと聞かなくちゃいけないんだ。」

「さもないと・・・。」

「さもないと?」

「母親のウィンディの身が危ないのよ。」

「何だと!」

ミランダを抱えて診療所に戻ると、マークがあわてていた。

「いま、スタンドフィールドから電話があつて、ミランダの様子が
変じゃなかつたつてあつたんだ。」

レオンは気を失つたミランダをみた。

「いま、もう大丈夫。気を失っているだけだから。」

やけに落ち着いた様子のレオンにマークは少々驚いた。マークは
ミランダを抱きかかえて寝室に寝かせると、台所で用事を済ませ
た。レオンに呼びかけた。

「何があつたか、話をしてくれるかな。」

しばらく黙つたままのレオンが口を開こうとすると、電話のベル
が鳴つた。

「もしもし、タンディン診療所です。」

マークがそれから何も言わず、受話器に耳を傾けたままの姿に、
レオンは様子が変だと察した。

「もしもし！もしもし！」

「どうしたの？マーク！」

驚愕した様子のマークが言った。

「銃声が聞こえて切れた。」

レオンが心配してウィンディの情報を手に入れようとした先は、
元空軍少佐のテオだった。「調べる。」とだけ言われて連絡が途
切れた。事情をロブに話すと、横で聴いていたステファノが知人
に連絡をとつてみると言い出した。

「財団の動きに迷いがなくなった以上、親元の製造会社が謀略に走
る可能性もある。ウィンディが狙われる理由はただひとつ。」

「皇帝の不義の証明のためにウィンディを誘拐したつて仕方がない
と思うんだ。」

「違うんだ。」

「なにが？」

「ウィンディが軍医であることで、ひとつ狙われる理由があるんだ。」

口を閉ざしていたロブが重たい口を開こうとカスターから聞いた話をしはじめた。それは試験薬で強化作用のレッドオイルを服用したジョナサンのことだった。クリアと格闘するために服用したと思われた。

「ステファノは、その薬のことを知っているのか。」

「試作段階の話をジャーナリストから聞いたんだ。実験体は怪我をし た軍人だという話だ。」

リゾート地パライディーゾデラモンテグナ都市での災害において、負傷者を死亡にして実験台に仕立てていた。最近では、宮殿事故の被害者も秘密裏で犠牲になつてしていると話ししだした。

「誘拐して始末したら、ウィンディのせいになる。」

言った後、口を自分でふさいだステファノだったが、レオンは睨み付け、ロブは呆れていた。

「輸送で儲けた男なら、心当たりがある。死体を輸送して成り上がつたんだ。」

「パトリック・クロスか。」

「知っているのか。」

「知っているも何も、死体処理屋だぜ。ロブはなぜ？」

「なぜも何も、潜りの輸送屋やっていたんだから、目をつけられて散々痛めつけられたよ。」

「なるほど。」

3人は顔を突き合わせて眉をひそめていた。

「何も、悩み必要はないんじゃないか。レオンが先導師に会ってパトリックを紹介してもらえばいいだけのこと。」

「護衛が必要だろう。少なくとも、二人はさ。」

「財団を動かせないんだから、ドックから出せば……。」

ロブはニヤリとほくそ笑んだ。

「はめたのか、俺を。」

「ま、仕方ないよな。護衛の仕事をしていくくらいなんだから。」

「まさか、手ぶらで行くわけには。」

「グリーンオイルの種を持っていく。粗悪な種しか持っていないだろうからな。」

レオンは少し感心していた。電話でロブと話をしたとき、一芝居打つからと言って、ドックに呼び出された。こういう展開になるうとは、思いつきもなかった。

「伊達にクレアさんと一緒にいたわけじゃないさ。」

「仕込まれたわけでもないでしょ。」

「口が良くまわるな、レオン。クレアさんに言いように動かされたことはいくらでもあるさ。」

「へえ、そうなんだ。」

3人の会話に入れてもらえず、離れたところから見ているしか出来なかったレインが、我慢できずにそばまで来た。

「知ってた？クレアさんが復縁させようとかんばってたのをさ。」

無論、遇のねも出ない。

「二人目の護衛って、僕じゃだめ？」

輝いた目でロブを見ているレインは、いつかのおねだり上手な赤ん坊のように、やってのけた。

「好きにしるよ。」

逃げ出すロブが振り向くと、そこにジリアンがいた。

「僕は残るからね。じいさまの教えをちゃんと受け継ぐんだから。」

「ジリアンが怒ってるぞ、レイン。」

レインは罰の悪い顔をしていた。

「レインはやる気あったわけ？じいさまが命かけて教えてくれているのに。」

ステファノとレオンは笑いを押し殺していた。

「腹がよじれそう。」

「僕も。」

レオンとレイン、ステファノの3人がトランスパランスを目指して、旅に出ることになった。レオンが心配になっていたミランダの病状は満月のよる以来、良好となり、元にもどりつつあった。勉強がはかどらないことは仕方がないとして、一刻も早く、ウインデイの情報が知りたいたいと思っていた。出発の朝、テオから連絡があり、ウインデイの無事を聞かされた。消息は危険を避けるため知らされなかった。

「まあ、無事に良かった。」

「それなら、もうパトリックに会わなくていいんじゃないか。」

ステファノは正直面倒くさかった。

「そうも行かないのだろう。」

「うーん、レイン、お前ドックから逃げ出したいんだろう。」

ステファノの流し目を受けて、目をそらすことしか出来なかったが、開き直るしかなかった。

「シーアリアが苦手なのは、父さんも同じだからね。」

「レテシアさんから逃げ出すわけにはいかないでしょ。」

レオンは腹を決めていた。パトリック・クロスに会って話をしてみようと。前々からなぜトランスパランスの多額の寄付をしているのか聞いてみたいという思いもあった。

「裏で糸を引くみたいなきはしたくないんだけど。パトリックに会って、損はしないかもしれない。」

レオンはそういって、二人に出るよう促した。

トランスパランスの施設にたどり着いた三人は、レオンの先導師に面会を求めてた。緊張した面持ちで待合室へ案内されると、ステファノはレオンだけを中にいれ、レインと二人で室外に待つと言った。ドアの前で二人は立ち、ステファノは身動きせずに目線だけ動かした。レインはただ、妙なことをするんだなと思ったただけだった。その様子にたまりかねて、口にした。

「レイン、お前には緊張感が足りないな。」

「緊張しているよ。」

「そう見えないよ。」

「外見だけみて、そう決め付けて。」

「馬鹿か。俺たちは護衛という役目で付き添ってるんだ。周囲に視線を配って異変が起きないか気をつけるんだよ。」

「そんなこと、ここでは……。」

「お前、レオンの話を聞いてなかったのか。クレアの名を語ってトランスパランスから連れ出そうとした輩やからがいたことを。」

「どこからか、情報を手に入れたのでしょ。」

「トランスパランスにスパイがいるかもしれないだろ。」

「ええ!?!」

ステファノはため息をついた。レテシアが来る前からレインの天然を知らないわけではなかったが、来てからは親譲りだと理解した。すこしだけレオンの付き添いで子守役だと思っていたが、子守が二人とは痛すぎると思っていた。それ以上だと落胆した。

「ジリアンが来たがらないわけがわかった。」

「言われてレインはふくれっ面した。」

「いいか。お前の油断ひとつでレオンが命を落とすことになるかもしれない。」

「そんなこと。」

「聞けよ。ジリアンが危ない目にあつたという経験しただろ。」

レインはくちびるを噛んだ。ステファノの言うことに間違いはない。

「身の危険を防ぐ方法をいちいち聞いたりするなよ。自分で考えて身につけていけよ。」

レインが間抜け面をしなくなったのを確認して、ステファノはリラックスしている風に装って、目線を泳がした。レオンの先導師らしき人物がひとり現れて、レインたちに会釈してノックをして中に入っていた。

「久しぶりだな、レオン。」

「ご無沙汰してます。」

「すこし見なかつたぐらいだが、ずいぶん成長したように思えるね。風格が出てきた感じだ。」

「先導師にそう思われるのなら、光栄ですが、いろいろありました。」

レオンは、レッドオイル爆弾のことを話した。先導師は顔色ひとつ変えずにただ、話を聞くだけだった。しばらくたってから、口をきき始めた。

「そう、それは大変な経験をしたんだな。ここにくるまでにいろいろとあつたが、それは母親と一緒に乗り越えてきたものだろう。」

「ええ、その母親のことで、相談がありました。」

「ふむ。」

母親ウインディの所在を知らされていないが、その身に危険がせまってくるという報せを聞かされて、動かされたことを語った。

「クロス氏か。彼のことなら、スタンドフィールドの方が詳しいんじゃないのか。」

「いろいろと、事情があるようでして。」

「うむ。私を通して、クロス氏に頼るといふのは的を得ているかもしれないな。」

先導師は、そこから、パトリック・クロスがトランスパランスの

パトロンになつた経緯を語つた。

パトリック・クロスは輸送業で財を得た成り上がりだつた。成り上がった理由はグリーンオイル製造会社の社長に自分の妹を嫁がせたことで、輸送に必要なグリーンオイルが簡単に手に入るようになったからだ。大型輸送の主流はスタンドフィルのアレキサンドリア号が担っていて、攻撃され運行できなくなつてからパトリック・クロスの大型空挺が台頭してきた。しかし、嫁いだ妹は流行り病を得て死去し、グリーンオイルの供給が途絶え始めた。製造会社が財団とトラブルになつて場所を移転することになり、供給できる量が極端に減つてしまつたためだつた。輸送業で得た人脈を駆使し、移転先になつた場所をいつでも攻撃できるような施設を建設し、脅迫まがいの交渉でグリーンオイルを手に入れた。その手口を知つたパトリックの実の娘がトランスパランスに入つてしまい、彼はトランスパランスに多額の寄付をして娘を守ろうした。今では輸送業を息子に譲り、大人しくしているらしいと先導師は口にしたが、人脈を駆使して製造会社を監視していることは今でも続けていると言つた。

先導師自身がパトリックの護衛で行動をともしたことがあつた。娘からたつての願いとして聞き入れたのだった。

「女性には弱い方だ。なにか頼みごとをするなら、女性のほうが良いんだがな。」

レオンは苦笑いしながら、首を傾けた。

「護衛をしていたときのことだ。戦争や災害救助で負傷した軍人をモルモットにしてあらぬ薬を作り出そうとしている話があつた。」

レオンは唾を飲み込み、ステファノの話を思い返した。

「死体を輸送していたという話ですね。」

「知っているのか。」

「それで軍医である母が狙われているという理由を聞いたのです。」

先導師は考えこんで無言をつづけた。レオンを静かに次の言葉を待たせた。

「仮定の話だとしても、その可能性は高いだろう。脅迫材料にされるかもしれないな。」

レオンはキツと先導師を睨んだ。その様子に覚悟ができていないかもしれないと悟った。

「敵を見間違えるのではないよ。」

「はい。」

「わかっていると思うが、誰しも、悪人として生まれ育ったわけじゃない。生きるためにはそうせざるを得なかった場合がある。」

「私利私欲でないかどうかを見極めるのですね。」

「そうだな。パトリックがパトロロンになっているのは、娘がきちんと贖罪させるためにトランスパランスに身を投じたのだ。レオンが経験したものと見えてきたことなど誠心誠意で語れば、力を貸してくれるはずだ。」

「わかりました。ありがとうございます。」

レオンは頭を下げると、先導師は静かに立ち上がった。

「トランスパランスはまだまだココロをひとつにしていない。ここを出た後も、気をつけるんだ。」

「はい。」

レオンと先導師が待合室を出た。

「連絡をとりつけるから、少し待っていなさい。」

「はい。」

先導師がいなくなるのを確認してから、レインが口出しした。

「レオン、手ごたえはあったんだ？」

ステファノはレインの横腹に肘鉄を食らわした。

「グハツ。痛い。」

そして、レオンに引っ張られて待合室の中にはいった。

「馬鹿だな。」

「まったくだ。」

わき腹を押さえ、レインは情けない顔をした。

「先導師からここを出ても気をつけるように言われたよ。」

「やっぱり、わかってたんだな。」

「確信はなかったけど、そういうことなんだな。」

「スパイがいるってこと？」

二人に睨まれて、レインは口を押さえた。

しばらくして、先導師がもどってきて、レオンにメモ書きを何も言わず手渡した。メモ書きを一度みて、すぐに上着のポケットに仕舞いこんだ。三人は別れの挨拶をしたあと、去っていく先導師に頭を下げた。

トランスパランスを出ると、森の中に道があり、そこを徒歩で抜けていこうとしていた。ステファノとレオンは気配を感じていた。二人の様子によやくレインが気がついた。どんな攻撃を仕掛けてくるのかと思いつながら、いつものように歩いていると、頭の上を鳥が数匹飛び交った。気をとられた隙に、4、5人が森の中から現れ、レオンを取り押さえようとした。ステファノは阻止すべき攻撃を仕掛け、レインもつかさず、レオンの前に立ちはだかった。ほどなくして、襲ってきた輩を組み伏せた。一人逃げ出して、残りのものを倒し、後追いされないように、木にくくりつけて、足早にそこを去った。

「トランスパランスに、情報をもらす人間がいてもおかしくない。ほとんどの人が素性を隠しているからね。先導師は隠し事がだめな方なので、僕は本名を名乗っていたんだけど。」

「まあ、パトリック・クロスと通じている人物がいるんだ。情報として、中のことを把握しようとしていてもおかしくないさ。」

「ところで、これからどうするの?」

「医療学園都市に向かう。」

「医療学園都市?」

「なぜに?」

「病気療養中らしい。」

レオンはメモ書きをポケットから取り出し、二人に見せた。なかに書かれていたのは、医療学園都市にある病院の名で、訪ねてくるように書かれていた。

「いずれ、行かなければいけないところだったし、丁度いいかな。」

「え、ほんとに、医者になるつもりかよ。」

「悪い?」

「いや、かえるの子はかえるとは限らないと思ってさ。」

「感じ悪いな、ステファノは。」

二人がじゃれあう様子をみながら、レインは二人の会話の意味をいまいち理解していなかった。そんな妙な顔をしているレインをみて、ステファノはためいきをついて、レインの頭を両手で押さえた。「お前の脳にはちゃんと詰まっているのか。」

「詰まっているよ。」

「これがチャンスさ。」

「何のチャンス？」

「弱っている人間ほど、手を差し伸べてくれやすい。」

「はあ。」

「ましてや、軍医だ。当たってみないとわからないけど、手ごたえはあるかもしれないぞ。」

レインの頭のなかには疑問符がいっぱい並んだ。レオンはただ、苦笑いするしかなかった。

グリーンオイル財団研究所の都市に似た町並みが広がる、医療学園都市。医療関係の研究所から、医療関係者を育てる学校が多数あり、病院施設もさまざまに分野で密集していた。かつて、クレアⅡポーターが医療を学んだところで、この国の8割の医者が医療学園都市で学んでいた。

3人は指定された病院にたどり着いた。受付でレオンが名を名乗り、パトリック・クロスを訪ねてきたと述べると、病室をしらされた。レオンだけが病室に入室することを許され、レインとステファノは病室の外で待った。

病室には髪の毛の長さが足元まである色白の女性が立っていて、お辞儀をした。

「お待ちしておりました。レオンⅡゴードングローブさん。」

女性の服装がトランスパランスで見かける白い服装だったので、レオンはパトリックの娘だろうと推察した。

「はじめまして、よろしくお願いします。」

「ただいま、父パトリック・クロスは就寝しておりまして、代わりに私が伺うよう仰せつかっています。わたしは娘のリリアと申しませう。」

リリアはソファに腰掛けるよう促し、テーブルに飲み物を用意して、レオンの前に座った。

「病状がよろしくないのですか。」

リリアはカーテンが締め切られている方向をちらりと見た。

「いえ、ただの仮病です。」

「仮病？」

「ええ。トランスパランスに従っている私を外に出すための口実です。病気ではないのです。」

「はあ。」

「気になさらないでね。先導師の口利きとはいえ、困っている方の手助けができることは父の贖罪ができるということですから。」

「いや、しかし、普通に困っているというわけでは……。」

「先導師からお話を聞いておりますから、遠慮なく。父ができそうなことですし。父が何をしているかはきちんと把握しているつもりです。」

少々面喰らったレオンだったが、まずは目の前にいるリリアを説得するところからの試練かもしれないと誠意ある態度でつぶさに語った。

「グリーンオイル製造会社の件で、確かにウインディ・ゴールドングローブさんについての情報を手に入れていた様子ですわ。」

「では、情報を得ようとしているのはなぜかも。」

「把握しています。おっしゃるとおり、負傷の軍人を輸送する際の横流しが狙いだそうです。」

「相当な悪巧みだな。」

「そうですね。死体を輸送するというのは目的が遺族に返すためであり、道徳理念に反するものでもありません。しかし、負傷した軍人を実験目的で輸送するのは、犯罪そのものになります。」

「そういつたことが横行している以上、研究をやめさせるためにも何か手を打たないとだめでしょう。」

「ウィンディさんを監視するだけでなく、その動きも封じるというのですか。」

「監視……、誘拐されないようするだけでは、イタチごっこになるでしょう。ウィンディは同じところにとどまっている人ではありませんし、いつも危険とは背中合わせなところへ行きたがるのですから。」

「お互い、大変手のかかる親をもったようですね。」

リリアの笑顔にすこし、ドッキリとしてレオンは下を向いた。

「いや、手のかかるとは思ったことはないですが……。」
含み笑いをした後、リリアは言った。

「そうですねえ、研究をやめさせないと、多くの犠牲者が出てしまうでしょうね。何も根拠もなく攻撃できない、大義名分すらないうえに、負傷した軍人を実験台にしていることも黙認している軍は動けないでしょう。」

「ほかの組織の動きも把握しているのですか。」

「ええ、商売がら、いろいろな組織の顔色は伺っておかないといけませんから。」

リリアは突如として立ち上がり、カーテンの向こういくと、丸い筒を持って現れ、中から図面を取り出した。

「何でしょうか。」

「空挺の設計図です。」

「空挺？」

「ええ、輸送会社ですから、自前で空挺を保有しています。」

「あ、はい。」

「このホワイトソードという名の空挺を提供します。」

「提供？」

「ええ。武器と砲弾を装備しています。研究所を破壊できるでしょう。」

「ええ！？いきなり、唐突で荒い計画ですね。」

リリアは笑顔をレオンに傾け、設計図を筒に仕舞いこんだ。

「父はアレックス・スタンドフィールドを尊敬しているのです。ロブさんとはいろいろあったみたいですが、力になりたいという気持ちがあったのです。アレキサンダー号が破壊されたときに、このホワイトソードを用意しておいたのですよ。」

「では、その話をロブの息子レインに……。」

「ロブさんに直接話もできなくて、レインさんにあわす顔もないそうです。察してください。」

レオンは苦笑いをリリアに向け、内心ではこう思っていた。

（なんだ、お互い様ってやつか。）

レオンはあらためて、医療学園都市を眺めていた。レインから聞かされていた話と同じく、最新精鋭な設備が整った街がやけに寒々と閑散としていて、人が住んでいる感じがしなかった。いずれ、ここで医療を学ぶために暮らさないといけないのかと思うと、気持ちが重くなった。

「どうしたんだよ。いつになく、暗い顔して。」

「暗い？へ、そうかい。武者震いがして、鼓舞しているっていうのに。」

ステファノがレオンの内心を察したのは、空挺の話があまりに大げさだと思えていたから。レオンはため息をついたあと、言った。

「医療学園都市で人々が暮らしている感じがしないからさ。」

「陰惨なところだからな。」

ステファノの言葉にレオンやレインも不安な面持ちで聞いた。

「昔はそうでもなかったらしいが。研究熱心なものたちが財団の研究都市へ移動したからさ。」

二人はなんとなく納得した。

「レッドオイル研究所はもつと陰惨なところかもな。」

レオンは唇を噛んで、リリアから聞いたホワイトソードの計画を思い返した。

ホワイトソードは、表向き輸送ためだけの中型空挺で、中身は重厚に武装していつでも攻撃可能な状態のものだった。しかし、今まで攻撃したことはなかった。軍ではなく一般企業で攻撃を目的に武装した空挺の保有は認められていない。軍の強化で盗賊の輩は無く、保守のための武装は必要としていなかったからだ。黒衣の民族が攻撃していたこともあったが、一般の空挺を狙うことは滅多めったになく、狙われたのはせいぜいスタンドフィールドのアレキサンダー

号ぐらいだった。

ホワイトソードは輸送目的のために、船長ほか、乗組員が数名いたが、天候のトラブルに見舞われ、故障して修理になってから、動かしていなかった。いったん、解散して再度集めなおしたら、乗組員は二人しか戻らなかった。この二人をクロス側の人間としてホワイトソードの乗組員に加わり、あとのメンバーはスタンドフィールドで編成するよう支持された。

この計画をスタンドフィールドに戻って、ロブに話すと、渋い顔をした。

「そんな計画を持ち込まれるとは、思いもしなかったな。」

傍らにはデイゴがいて、危険すぎると意見された。ロブ自身にはレオンのためにできることがあればしてあげたい気持ちがあった。ウィンディがクレアの恋人だから、力を貸さないわけにいかないと思っていた。首を傾げようとしておもむろにレテシアが視界にいたのに気づいたとき、彼女の顔を伺ったが、見る間でもなく芳しくなかった。

「乗組員と言っても・・・。」

「テオに相談してみるのはどうかなって思ってたさ。」

レオンの言葉に一同は大きくうなづいた。

話は大きく動き出した。元空軍の少佐だったテオ「アラゴンを船長に、パトリック「クロスからのふたり、通信士にステファノ、エージェット操縦士にレインとジリアン、救護班としてレオンが加わり、7人の体制となった。今回、ロブとデイゴが加わらなかったのは、スタンドフィールド・ドックを運営していく上で病気がちなラゴネにまかせておくわけにいかなかったからだ。

「まあ、テオがいてくれれば、大丈夫だろう。」

そんなロブの言葉にレテシアがレインとジリアンを加えるのに反対したが、二人はおおいに乗り気で、内心喜んだ。理由はレテシアから離れたかったからだ。

レオンは多少心配だった。診療所で勉学に励み、医療学園都市で
医学を学ばずだった。まだ、完全に回復していないミランダのこ
とも気がかりだったが、マークに説得された。

「実の母親を守るべく動き出した計画だ。レオン自身が加わらな
く後悔したりしないか。」

無論、後悔することは明白だった。勉強は空挺にいても出来る
だろうとも言われ、背中を押された気持ちになり、マークに礼を言
った。

「必ず、帰ってくるんだと言いたいが、クレアに言ったその言葉が
無駄になった。」

寂しげな顔のマークにレオンは真剣なまなざしを向けた。

「僕はかならずもどつてきます。」

マークは力強くレオンを抱きしめた。

レインとジリアンはロブとレテシアと共にレジーナ像の前にいた。
生後6ヶ月のシーアリアも一緒に、健やかな成長を祈り、レインた
ちの無事を祈った。シーアリアは屈託の無い笑顔をみんなに向け、
平和に安穩とした日々を感じさせてくれていた。

「ほんとうに行ってしまうのね。」

「母さん、心配要らないよ。僕たちはスカイエンジェルフィッシュ
号でいろんな経験をしてきたんだ。」

「グリーンエメラルダ号にいてるときに、二人の成長振りを見届け
ていたんじゃないのか。」

「ロブ、心配じゃないの?」

「心配だが。レインたちを信じよう。アレックスの子孫たちはどん
な試練にも立ち向かい乗り越えることができる。」

ロブはドックを出る前にレインたちを思い出してみた。あのころ
は過保護すぎたと、痛く感じた。そばにいて教えることはもうない
と思っていた。レテシアと一緒にいて安心させてやることで、家族
を守るということはどういうことか示すことが出来ると思った。そ

のことは口にしないままに、ロブは二人に真剣な面持ちで言った。

「レイン、ジリアン。」

「はい。」

「なに？」

「敵を見誤るなよ。」

その言葉の意味を理解するのは、二人には容易でなかった。さらに経験を得ないと理解しがたいことで、ロブ自身そのことで躊躇していた部分があることを自覚していた。今は語らないでおこう。

驚きの表情をみせたままのレインを尻目に、ジリアンが言った。

「僕たちは、僕たちで得たもので、判断していく。それは兄さんたちが体を張って示してくれたことから学んだんだ。クレアさん、カスター、コーデイ、ジョナサン、アルバート……。」

ジリアンの目に涙があふれて、それ以上いえなかった。

「大丈夫、まだまだ子供かもしれないけど、僕たちには仲間がいるから。」

ジリアンの意思を理解したうえで、レインは自分の言葉で言った。

白い羽を広げた鳥のような中型空挺ホワイトソードは、自由自在に飛行体制を変え、切り立った崖を難なく飛行できるところから、名づけられた。修理を加えられたと言っても、白いとは言いがたい黒ずんだ翼でスタンドフィールドに現われた。スタンドフィールド・ドックのメンバーに詰^なじられて、機体からは薄汚れた服装の男女二人が降りてきた。

「薄汚れたホワイトソードからそのまんまの乗組員が出てくるとはな。」

男はノースリーブのシャツで腕に刺青まがいのグリーンオイルの染みがあり、筋肉がひきしまり、体格はデイゴに負けないくらいデカかった。

女は肩より長い髪が痛んでいて整っておらず、切れ端の生地を縫い合わせたような安っぽい服装で男と間違えそうなくらい清潔感がなかった。

「おおい、テオさんという偉い方はいないのか。」

「オイオイ、見世物じゃないんだ。関係ない奴は自分の仕事しているよ。」

男も女も、口が悪そうだとみんな口々に言うと、その場から去っていった。その場からいなくなれないジリアンは眉をひそめてみていた。ジリアンと目が合った女はにやけてみせた。

「坊や、ロブかテオさんを呼んで来てくれないかな。」

「僕は坊やっていう名前じゃないんだ。ジリアンという名前がちゃんとあるんだよ。」

「それで、自己紹介しているつもり？」

ジリアンは女をにらめつけることしか出来なかった。

「はいはい。ちゃんと挨拶させてもらうよ。ジリアン君。あたしゃ、ニコラ。」

にらんだ顔つきを緩めて、ニコラの様子を伺った。ニコラは男のほうを指差した。

「あいつは、エリオ。」

エリオはにやけたままで、ジリアンをみていた。ジリアンはすこしため息をついた。

「しばらくお待ちください。」

そして、少しお辞儀をして、足早にデッキの奥へ行った。

「礼儀正しいじゃないか。」

「こつちが礼を尽くせばの話。ちゃんとしろよ、エリオ。」

二人の会話が聞こえていたジリアンはつぶやいた。

「この先が思い知らされる。」

テオはホワイトソードが到着する前に、スタンドフィールド・ドックに着いたばかりで、ロブと打ち合わせする時間が必要だった。

ジリアンが来る前にステファノから到着の連絡は着いていたので、ジリアンが来ると、食堂で待ってもらおうと指示をした。ジリアンは嫌な顔をして、返事をしたので、ロブは理由を聞いた。

「とんでも無い人たちが来た感じなんだ。」

「ジリアンが嫌がるくらいなら、相当かな。」

「そうでもないけど・・・。」

「わかった。レイン、代わりにいつてきてくれないかな。」

ロブの指示をさえぎるようにレオンが行くと言い出した。レインとジリアンは拍子抜けしたが、ウィンクするレオンをみて、反対はしなかった。

レオンの思惑は、ジリアンの言う「とんでもない人たち」が家探れ立った荒んだ人たちだと推察したからだ。そういう人たちとは、難民キャンプで慣れていたのが扱えるとおもっていた。

ニコラとエリオの前に現われたレオンは挨拶を済ませると、二人を食堂へ連れて行った。

「テオさんは、さっき到着したばかりでロブさんと打ち合わせをし

ているのですよ。」

「ロブってというのは、男前だと聞いたぜ。ニコラ惚れるなよ。」
「何いってんだよ。あたしゃ、男はコリゴリだって。」

他愛もない二人の会話がわざとらしく聞こえるレオンは、内心、気が抜けないと思った。二人を食堂に案内し、テーブルに着くよう促すと、レインが挨拶をし、飲み物は何かいいかとたずねた。ニコラはブラックを頼み、エリオはレインの顔をまじまじと見ていた。
「僕の顔になにか？」

「いや、誰かに似ていると思ってな。」

キツチンの奥で飲み物の用意をしていたジリアンは手を止めた。

「ふっ、女の子みたいな顔だから、振られた女の顔に似てるっていいんだろ、エリオ。」

「馬鹿か。男だって俺だってわかってる。だから、余計に……。」
いつものことだから、レインはもう機嫌の悪い顔をしなかった。

ただ、軍人でもない二人がレテシアを知っているかどうかという点で言おうか言わないか迷った。

「レテシア」ハートランドだ。ロックフォードファミリーにいたな。」

エリオの口から出てきたのは、一時軍を抜けていたときにいたதாகロバット飛行のプロダクションの名だった。

「そうです。僕の母はレテシア」ハートランドです。」
開き直ってそう答えた。

「へえ、マジかよ。そっくりだな。ロックフォードファミリーにいたところはファンでポスター持ってたんだ。」

エリオの嬉しそうな顔を見て、一抹の不安を持ったレインは後ろを振り返った。レオンがニヤ着いているので、すこしむかついた。その様子を見て、エリオはすこしうろたえ気味に言った。

「え、え、レテシアってココにいてるのか。」

「今はいてません。エリオさん、飲み物は何にしますか。」

「俺は甘党なんだ。砂糖たっぷりコーヒーにしてくれ。」

ニコラは二人の会話をさむように言った。

「このドックはあんたみたいなの、10代しかないのか。」

「馬鹿か。さつき、見物人が何人かいてただろう。」

「さつきから、あたしのこと馬鹿かってばかり言ってるんじゃないよ、エリオ。」

レインはふたりの間に入って、収めようとした。

「レテシアはココにいてるのか。」

「今はいません。」

「レイン、あたしたちのことは、呼び捨てでいい。さんづけとか気持ち悪いんだよ。」

レインはそれ以上何もいえなくなった。

「今はいませんって。ドックにはいてるのかあ。」

レインの後方でレオンはしきりに笑いを堪えていた。目配せで助けを求めると、ステファノが呼びにやってきた。

「打ち合わせが終わったので、展望室に来てほしいって。」

第三十四章 燕尾短し 1 (後書き)

登場人物

- レイン＝スタンドフィールド (主人公・愛称レイニー) 17歳
ジリアン＝スタンドフィールド (主人公の従弟・愛称ジル) 15歳
ロブ＝スタンドフィールド (主人公の実父) 32歳
レティシア＝ハートランド (元空軍少尉。主人公の実母) 35歳
シーアリア (主人公の妹) 生後6ヶ月
デイゴ (スタンドフィールド・ドックの板金工) 37歳
ステファノ (ドックのクルー、北の民族) 25歳
ジゼル (デイゴの妻) 32歳
デイゴ・JR (デイゴとジゼルの息子) 6歳
テオ＝アラゴン (元空挺第五部隊隊長・少佐) 45歳
セリーヌ＝マルキナ (デューク＝ジュニア＝デミスト理事長の第六秘書) 29歳
エミリア＝サンジョベーゼ (空軍少尉。皇女殿下のルームメイト) 20歳
カイン (山岳警備隊パイロット。カスターの元同僚) 38歳
ジェフ (元山岳警備隊パイロット。レティシアの同級生) 35歳
デューク＝ジュニア＝デミスト (現グリーンオイル財団理事長) 41歳
コリン＝デミスト (デュークの養子。ジリアンとセイラの父親違いの実兄) 17歳
セイラ＝デミスト (セシリアとデュークの娘) 7歳
カミーユ (セイラ付きのメイド) 24歳
マルティン・デ・ドレイファス (コン・ラ・ジェンタ皇国の皇帝。セシリアの実兄) 40歳

フェリシア＝デイドレイファス（皇帝の第一皇女。空軍少佐。）
20歳

コーネリアス＝アンコーナ（ワイナリー農園のオーナー・食品企業
の財閥の娘）15歳

ピエトロ（コーネリアス付きの執事）48歳

イリア 18歳

ニコラ（ホワイトソードの乗組員）23歳

エリオ（ホワイトソードの乗組員）26歳

「なんだ、このひよこたちは？」

大きな声でエリオは叫んだ。テオ＝アラゴンが自己紹介して、すぐのことだった。

「誰のこと？」

ステファノは自分がそのひよこに加えられているとは思わずに、口にした。

「お前と、そいつと・・・。」

「俺はひよこじゃない！」

「年端もいかない、ガキだろう。」

「俺は25歳だ！」

エリオはわざと驚いて見せた。

「へえ、あたしより年上なんだ。そうはみえないね、きれいな顔して童顔じゃない。」

ステファノはいつになくイラついていた。いつもはひとをイラつかせて楽しんでいるステファノだったので、レインたちは笑いをこらえていた。

「きみたちは美しくないな。」

テオが言ったのは、エリオとニコラの服装だった。

「キャプテン・テオは綺麗な人物じゃないとご一緒できないというわけですか。」

少し腕組みをして考えこんだ。そして、口を開いた。

「エリオ、君の腕にあるものは、刺青いれずみじゃないよな。」

「シミだ。」

「なぜ、できる。」

「エンジンオイルが飛び散ってな。」

「待ちたまえ、エンジンオイルが飛び散るとはどういうことだ。」

テオ以外の者たちも聞き捨てならない言葉を耳にして驚いていた。

「いや、修理に出す前のエンジンがポンコツでしょっちゅうオイルを飛ばしまくっていたんだ。」

「修理前というと。」

「財団が秘密裏に新しいエンジンを用意してくれた。表だって搬入するのは危険すぎるってな。」

そこにいた人間たちがいつせいに安堵で胸をなでおろした。

そして、テオはニコラをみた。ニコラは目線を感じて、服をひっぱってみせて周囲を見た。

「まあ、こんな性欲のない男どもがいるくらいなら、こんな格好しなくてもいいかな。」

「性欲ない?!なんだ、それ。」

「さあ。」

ステファノが反応した割に、ニコラはわれ関せずという態度を示した。頭をかかえつつ、ロブはジゼルかステファノの古着でよかつたら着てみないかと提案して、ニコラは承諾した。

レテシアの名を口にされて、エリオが反応した。

「やっぱり、レテシアはココにいてるのか。」

キョロキョロしているエリオにニコラは肘鉄をくらわした。

「エリオはいつになつたら、空気が読めるんだよ。」

「お前に言われたくないな。」

「レインの母親がレテシアだって言うてんだ。父親がここにもおかしくないだろう。」

そのことばによろやくエリオはショックを受けた。ディゴをにらむようにみたら、ニコラからゲンコツが頭に飛んできた。

「イタイ!」

「馬鹿野郎だな、まったく。」

「なんだよ。」

「男前のロブに決まっているだろ!しかもスタンドフィールドって名乗ってるんだからな。」

二人の会話に周囲はあ然とするしかできなかった。

「さっきの話にもどっていいかい。」

ニコラは、話をレインたちのことにもどそうとした。

「ステファノが25歳でも、こちらはどうなんだよ。メンバーに加えて大丈夫なのか。」

レインとジリアンはふてくされるしかなかったが、航空操縦士の資格を持っていることを告げた。

「レインとジリアンは副操縦士で、ステファノは通信士、レオンは救護班だ。」

テオの説明に、レオンは看護師の資格を取得したことを付け加えるように言った。

「で、エリオはエンジン技師だとして、ニコラは？」

「あたしは、操縦士だ。」

「あはは、子守にうってつけたな。」

エリオの言葉にニコラは齒軋りしてみせたが、馬鹿にされた感じがしたレインとジリアンは今後このメンバーでやっていけるのかと不安を口にした。

「大丈夫。僕がいるからさ。」

レオンは楽天的に言ったが、その言葉には目的の内容が尋常じゃないのでこれぐらいがいいとさえ、思った気持ちをこめた。

「ロボはいかないのか。」

エリオに言われて、深くうなづいた。理由はドックを守らなければいけないからだ。エリオはとなりにいたデイゴをみた。

「俺も行かない。ロボの兄貴と約束したんだ。ロボの力になるとな。」

ついで、テオは二人には妻と幼い子供がいて、危険なことに身を投じられないと付け加えた。

ホワイトソードの目的をテオは説明した。表向きは運び屋だ。それは以前からやっている業商だった。しかし、本来の目的はレッドオイル製造工場を突き止めて破壊すること。それぞれに思いをぶつ

けるように目的について語った。レインとジリアンは言わずもがな、オホス川周辺の街が破壊されたのがレッドオイルだったので、いち早く手を打ちたいと言った。レオンは自分の母親が巻き込まれる可能性が高い上、シヴェンジリアンドの地でもレッドオイル爆弾を経験していたことを話した。ステファノはジャーナリストと行動を共にした際聞きかじったレッドオイル爆弾の製造について確かめたいことがあると言い出した。自身は興味がなくて子守代わりにメンバーに加えられたと思っていたが、レオンたちと気持ちを同じくしないと悪いと思っていた。

テオは言った。

「わたしは空挺第五部隊隊長だったが、暗躍するレッドオイル製造については何も知らなかった。知り得てからというものの、行動せずにはいられなくなった。だから、軍を辞めた。」

尊敬をし憧れていた皇帝がその暗躍する輩に手を貸しているということまで知ってしまったから、自分の暗愚あんぐなことへの悔しさから決意したと。

「わが国主が道を違えたなら、忠臣は身を挺して忠告すべきだ。しかし、わたしは直属の部下でもなく、忠告できるような身でもない。幸い、サンジヨベール将軍がその機会を得ようと努力されている様子だ。私も微力ながら使命を果たしたいと思っている。」

テオの真剣な話で周囲は気を引き締める想いだが、エリオとニコラは少し違っていた。先ほどとは違いただ苦みばしった顔をしていた。

「なにか不満でもあるかな。」

水を向けられたが、しばらく無言だった。

「なにか言いたいことがあるなら。」

「きれいごと言っても、悪い奴らを殺したとして、それは臭いものにふたをすと言った具合しかならない。」

「もちろん、殺すとかが目的ではない。」

「徹底的につぶさないとだめだ。グリーンオイル製造会社を。」

ニコラの言葉にステファノは鼻で笑って見せた。

「何をさ。」

「いや、製造会社をつぶそうなら、軍が一斉に攻撃してしまえばいいだけだろう。しないのはなぜなんだ。」

「グルだからだろう。」

「馬鹿か、おまえは。大手企業だからだ。あれだけ巨大なグリーンオイル製造する会社はないんだ。」

エリオに向かってニコラは無言で歯をむき出しにして怒りを露あらわにした。

「軍を動かすのは大義名分がある。レッドオイル攻撃は、シヴェジリアンドもオホス川の街も軍要請での製造会社からの発射になっている。オホス川は誤射だったかな。レッドオイル攻撃を軍が指示したことになるから、動くことはまずない。」

「大義名分は黒衣の民族や皇帝排除の派閥集団を攻撃する。理由なんていくらでもでっち上げられる。お互いの利点を鑑みて駆け引きされている。しかし、もう、その駆け引きに多くの人間の命を犠牲にしなくていいようにしないと。」

ステファノは憎しみをこめて語った。その気持ちにはジャーナリストの死を痛む思いをこめた。

「わかった。俺たちは守らなければいけない家族とかはいない。俺たちを拾ってくれたパトリックおやっさんに命を預けたんだから、ホワイトソードで命を落としても惜しくは無い。メンバーみんなが真剣に取り組んでいくことに代わりにはないだろう、それを知ることができたなら、これ以上何も言う必要はない。キャプテン・テオに着いていくしかない。」

「よく、言ってくれた。」

テオは勢い良くパンツと手をたたき、地図を広げた。世界地図でおおよその見当がついている目的の場所やグリーンオイル製造会社の場所を説明した。

地図を広げられて、おおかたの行動予定が発表された。スタンドフィールドから目指すは北の地方。スワン村が近くにあるとされて、黒衣の民族が居住する地域近辺を通過する。北の地方にはグリーンオイルの種を運ぶ段取りだった。その地において、パトリックが手配した情報屋と打ち合わせする手はずになっている。その後、グリーンオイル製造会社の拠点などの説明があり、目ぼしいところは山深い東の地域だと説明があった。

この計画を知るものは、メンバーとパトリックのほか、財団の理事長と第六秘書セリーヌ・マルキナ、ガラフアンドランド・ドックのシモンとなっていた。一通り説明が行われ、ドックを発つ日は翌日とされた。

「打ち合わせは以上だ。解散でいいかな。」

皆は思い思いの言葉を口にし、「了解。」と返事をした。

「レオン、話がある。」

テオに言われて、レオンは展望室からひとり出された。話の内容は母親ウィンデイのことだった。

「サンジヨベーゼ將軍の部下に連れられて北の地方へ向かったという話なんだが。」

「はい。」

「將軍が命令指示書を手配してのことだから、移動中に問題なければ北の地方で会えるだろう。」

「ほんとうですか。」

レオン自身、周囲にはあまりウィンデイの話をしていなかった。テオでさえ、レオンの喜びに驚いたくらいだった。レオンのところのうちには母親に会いたい気持ちがあったのだなとテオは思い、そのあと、危惧した。

「ウィンデイの無事を確認できるのはいいが、この計画にレオンを

巻き込んでしまつて申し訳ないなと思つてな。」

「いえ、パトリックに会いたいと言ひ出したのは僕ですし、ウインデイが無事だと安心できる問題でもないです。レッドオイルの存在は人々を幸せにはできないし、そのことを知りながら、無関心でもいられない。避難所を転々としていた僕ですから、レインたちもいることだし、大丈夫ですよ。キャプテン。」

レオンの笑顔がやけに心苦しく思えたが、少年の試練への旅立ちと理解できればやめさせなくてもいいだろうと考えた。

レテシアがドックにもどり、エリオが対面を果たした。感動のあまり言葉が出てこず、ただ呆然と立ち尽くしていた。

「あ、あの。」

「しゃべらなくていい。そのまま、そのまま。」

レテシアはエリオの素性を知らないまま、言われたままに笑顔で立ち尽くしていた。そんな二人を横目にレインは嫌な顔をしながら、シーアリアを抱いていた。レテシアがもどつたとたんに手渡されたのだ。シーアリアはレインの気持ちをものともせず、一生懸命にレインの顔を撫でていた。

一方、腑に落ちない点をかかえたロブはニコラに質問を試みた。「パトリックに忠誠を誓い、命は惜しくないというが。君たちふたりはどういった関係なんだ。」

ニコラはエリオの様子をみながら、自分たちの生い立ちを語つた。ニコラは生後すぐに母を亡くし、エリオの養母に乳をもらつて育つた。二人は兄弟のようにして育つたが、10代はじめにそれぞれ親と養い親を亡くし、人身売買にあつてパトリックに引取られた。運よく二人一緒に引取られたわけだが、パトリックの計らいにより、空挺の職に就けるよう資格や技術をたたきこまれた。ホワイトソードは実際に攻撃目的のための中型空挺だったのでその乗組員になることは二人にとって極当たり前のように感じていた。身寄りの無い二人がホワイトソードの新たな任務に対しても異存なくメンバーに

加わったのも当然だと思っていると話をした。

「ホワイトソードの乗組員になるというのに、異存はないとのことだが、ほんとうにそれだけなのか。」

ロブの問いには、ニコラは無反応だったが、手ごたえはあったように思えた。

「特に、別に。」

「疑うような物言いだっただね。悪かったよ。」

「別に気にすることは無い。初対面で、疑わないほうが怖いよ。」

ホワイトソードの出発の準備が進められ、大きなガラスタンクが搬入された。出発直前に、ステファノはロブとふたりきになり、頼みごとをされた。

「ステファノ、お願いがある。」

「なんだよ。」

「レインとジリアンのことを頼む。」

「言われなくても……。」

「レインとジリアン、二人とも失うようなことがあってはならないんだ。」

ロブの言葉の意味を理解できないわけじゃない。どこまで面倒見切れないとは思いつつ、だからと言って、責任が持てないとは言えない。

「出来る限り。」

ステファノの言葉にロブは落胆した。その様子を察し、苦悶してから、口にした。

「分かっている。跡継ぎを失うわけにはいかないからな。俺は出来る限り、どちらか失いたくないし、怪我もさせたくない。最悪でも二人とも失うことは絶対にさせない。」

ステファノは力強く言い切った。ロブは安堵ですこし微笑んだ。

「申し訳ないと思っているが、頼めるのはステファノしかない。」

ステファノは無言でうなづき、ロブの前から去った。

スタンドフィールドドックをホワイトソードは旋回する。ヴェンデイシオン川と分流したオホス川に挟まれたラズラルナ島の岩山が復興を急ぐ街に影を落とす。上空から眺める街は涙なしでは見ることができなくらい悲惨で、改めてレッド爆弾の恐ろしさを思い知ってこの世からなくなること望んだ。

レインとジリアンはグリーンオイルの種が入ったタンクを点検していた。成長を遅らせたたり早めたりしないように調整することを条件にされているので、手を抜くわけにいかない。スカイエンジエルフィッシュ号と違って、技術的な専門の仕事にすこし興奮気味に気持ちであたっていた。

「シーアリアはわかってるんだね。」

ジリアンの言葉に耳を傾けながら、出発前のことを思い返していた。

出発前に、レテシアは務めて笑顔で見送ろうとしたものの、レテシアに抱かれながら雰囲気の違いをみて泣き出したシーアリア。そしてレテシアの腕から落ちそうなくらい暴れだした。その様子を目にしてレインはようやくシーアリアへの情愛を湧き出てきたことを感じた。唇を噛んで辛さを心の奥底へ押し込もうとしていると、ロブから手を払われるしぐさをされた。涙をこぼす前にシーアリアに背を向け、ホワイトソードに乗り込んだ。

「小さな手でよく僕の顔を撫で回したり、掴んでたりしていた。ほんと、まだ、小さい。」

「デイゴJRも小さい時そうだったよ。いまじゃ、ジゼルの足元を走り回って大変。次に会うときはシーアリアもそうになっているんだらうね。」

「はあ、どうなんだろう。僕のことなんか忘れて泣き出したりす

るんじゃないかな。」

すぐに違うことを考えて、レインの頭の中でエミリアを思い起こしていた。もし、こんど会うことがあったとしたら、きっと無視されるんだろうと。

「そんなことないよ。だって、レインはお兄ちゃんだよ。嬉しくしてほしいがなと思うな。」

二人はお互いの想いをよそに会話が進んでいることを知らないでいた。そして、ジリアンはセイラを思っていた。はじめて会ったとき3歳だったセイラが兄だと知らず、ジリアンに懐いていた。何も知らされていなくても直感的にわかっていることを思わせてくれた。父親は違えども同じ母親から生まれた妹の存在にジリアンはこころが暖かくなったことを感じていた。

いつになくニヤけているジリアンをみて、レインは理解できないでいた。それをジリアンは気づいて呆れた。

「セイラのことだよ。」

「ああ。そっか」

レインの思考回路が浅いところをいつも嘆いていたが、痛感した。そして次の言葉が予想がついていたので、言わせないようにしようとした。

「あ、でも……。」

「コリンとは違うからね。」

「……だね。」

その兄弟の存在を知らなかったジリアンだったが、兄弟だと知らずに会っていたうえで会えばいがみ合っていた者同士のコリンと違い、セイラとは会う前から知っていたからだ。

グリーンオイルの種は深い緑色を発色し、息をするかのように泡を立てていた。

「酸素の量が多いのかな。」

レインの言葉にジリアンは眉をひそめた。

「暗幕したほうがいいのかも。蛍光灯の光でも反応しちゃう。」

「そうだね。」

ホワイトソードを操縦するのはニコラだったが、冷や冷やしなが
らステファノは見ていた。

「なんだよ、ステファノ。なにか文句でもあるわけ。」

「いや、なに、その小さな体でよく操縦しているなって思ってたさ。」

「足は長いんだよ。」

「関係ないね。」

「文句があるなら、替わるかい。資格は持っているんだろ。」

「じゃ、誰が通信をするんだ。」

ニコラは後方を振り返った。そこにはキャプテン・テオがいた。

「キャプテンが通信なんかしたら、相手に舐められるだろ。」

「誰がやるうがかまいやしないさ。」

「いや、かまうね。」

ニコラはわざと操縦を間違えてみせて、機体を傾けさせた。

「うわっ。」

「お、いったいどうしたんだ。」

ニコラはニヤニヤしながら、操縦を元に戻したが、ステファノは
顔色ひとつ変えなかった。

「思い知らされるね。」

「どんな状態になるうが、この小さな体のニコラ様がホワイトソ
ード操っていくんだよ！」

そこでようやく、ステファノとニコラが揉めていることを知った

テオは二人の間に入った。

「私を誰だと思っっているんだ。」

「キャプテン。」

「キャプテン・テオ。」

ステファノとニコラは何を言い出すのだと言わんばかりにテオを
見ずに答えた。

「元空軍五部隊隊長だ。エアジェットの操縦士だ。」

「へえ、その巨体でねえ。」

「特別仕様の機体だった。」

これからテオの自慢話が続くのかと二人はうんざりしていた。テオはエアジェットで活躍した内容を次から次へと話し始めた。二人はただ、自分たちのやるべきことをテオの話に相槌をうちながら、やっつてのけた。

ニコラはレーダと前方を見て、なにか悪巧みを思いついたかのようだった。

「キャプテン、操縦のお手本を見せてもらえませんか。」

ステファノはそれはいい案だとばかり、二人に目配せをした。ニコラはそれを不適な笑みで返したのでステファノは訝しげレーダーを見た。前方には雲の谷間が見えていたが、レーダーには雲の中に山が隠れていることを示していた。

「良かるう。」

テオは尽かさずレーダーと前方を交互にみて、ニコラから操縦を交代した。最初のうちは何事もなく、飛行していたが、雲が流れて山肌が現われると、それを避けて機体を傾けた。しかし、傾けた方向にも山が飛び出してきて、テオは操縦桿をすばやく切り替えした。

「うわあっ。」

機体が左右に揺れ動き、声を上げたのはステファノだった。ニヤついているニコラは取っ手を握り締めて体を安定させていた。

「大丈夫ですかあ、キャプテン。」

ニコラはわざと大きな声で言っつて見せたが、顔色変えずにテオは操縦していた。

「大丈夫だ。」

しかし、このあと、ニコラも平気な顔が出来ない状態に追い込まれた。

左右をゆりかごのように揺れる機体で周囲の雲が流れていき、いくつもの切り立った山が露わになった。山肌に当たって返ると変な気流が出来て、機体はその気流で上から押さえつけられていた。

「ええ！！」

予想もしない状態にニコラが叫んだ。ステファノは青い顔をして両手で取っ手を掴んだ。テオは無表情のままに操縦したが、機体はどンドン降下していった。

「ああ、これはエアジェットと違っていたんだ。」

その言葉に、ステファノとニコラは驚愕した。そして、ニコラはこころの奥底から叫んだ。

「これじゃ、思い知らされる！！！！！！」

深い森の中にたたずむ館は朝靄あしたもやに包まれて、ゆっくりと目覚めるかのように薄明かりがともされた。メイドが廊下を行き来し、一日の始まりを告げるかのように、窓を開ける用事を済ませていく。

レースのカーテンで覆われたベッドに一組の男女が横たわっていた。男性がうめき声を上げると、女性は上半身を起こし、そっと男性の顔色をうかがう。目覚めていない様子に白い細い手を男性の頬に添える。その手の冷たさに男性は目が覚めた。

「怖い夢でも見たの？」

「いつものことだよ。」

上半身を起こし、両手で顔を覆い、先ほどまで見ていた悪夢を忘れようと努力したかった。でも、できない。何度も何度も繰り返し見る悪夢。

「俺のこころの中に入ったりするんじゃないぞ、イリア。」

「わかっているわ。」

短い白い髪、白い肌、細い上半身を男性の背中によりかけた。

「熱いわ、コリンの体。」

「イリアは冷たいな。」

白髪の少女イリアはグリーンオイル財団の保護のもと、デューク・デミストの屋敷に住んでいた。コリン・ボイドはデュークの養子となり、デュークの娘セイラが成婚し男子をもつけるまでの間、財団の後継者というかたちを取らされていた。コリンの育ての母親は、財団が引き取り、この屋敷でパン職人として働くこととなった。

「レインの映像を見たわ。」

「予知か？」

「おそろくね。とても苦しんでいて、何かを叫んでいた。」

コリンはイリアの体を払い、ベッドから離れた。

「助けを必要としているわ。」

「俺に何かできると思うか。」

「わからないわ。でも……。」

コリンはイリアに向かって怒りを露あらわにして言った。

「だからと言って、レインを操さったりするんじゃないぞ。」

「わかっているわ。」

イリアは落胆した。求めていたものはここにもないと。コリンは服を手に取り、着替えた。

「俺は自分のことで精一杯だ。セイラや母さんを守っていかないといけない。友人とはいえ、レインを助けに行ってる場合じゃない。」

イリアはココロを傷めた。コリンの心の中に自分がいないことを知ったからだ。

「イリア、レインのことが気になるなら、君はレインのことを好きなのだろう。」

思いもしない言葉がコリンの口から出て、驚いた。すぐに別の思いがよぎってきた。

「レインはとてもレテシアに似ているの。とても、なにかしてあげたくなるの。」

「確かに。」

コリンも同じ思いをしていた。初等科のときから、何かしてあげたくてもなかなかできなかった。中等科になって友達になれたことで、ずっと一緒にいてたいと思っていた。

イリアはベッドの上で身を縮めるようにし両足を両手で包み込むと、横になった。コリンに強く抱きしめられたいと思いつながら、コリンの背中を眺めた。イリアを抱いた男性は誰しもそうやって背中を向けてきた。自分の体が千切れてしまいそうな感覚になり、泣き出すのを堪えた。

ドアをノックする音がした。

「コリン様、お目覚めですか。朝食の用意が来ております。セイラ様がお待ちになっていきます。」

「すぐに行く。」

「お伝えします。」

コリンはベッドを振り返り、イリアの様子に気づいた。

「寂しいからと言って、心の中に入ってきてても、そこには何もありません。」

「言われなくても……。」

堪えていた涙がこぼれていく。コリンの冷たい物言いによりいつそうココロが傷つくのを感じているしかできなかった。

「お互い様なんだ。自分を理解してくれる人がどこかにいると求め続けて期待する、そして現実を知る。」

コリンはイリアに近づき、頬にこぼれた涙を拭った。

「強くないと、求めていたものは手に入らない。」

コリンの指がイリアの顔から離れていき、その指をイリアはつかんだ。

「わたしは弱い？」

「ああ、弱いし、もろい。」

「壊れそうなの。」

「自業自得だ。求めているものは誰かが与えてくれるものじゃない。」

イリアは目を閉じ、唇を噛んだ。コリンはイリアの手を振り払い、ベッドから遠ざかり、部屋から出て行った。

ホワイトソードのクルーは和気藹々（わきあいあい）と航路を飛行していた。お互いの素性を明かし、後ろめたさをなくそうとしていたが、ステファノだけはあいまいな物言いで誤魔化した。レオンの素性を明かされて、ニコラは大笑いをした。

「あはは、そんなまさか。だったら、あたしは慰みものに名乗りをあげるね。」

ニコラはこのとき、自分だけが女性だということを忘れていたことに気がついた。視線がニコラに集中し、一瞬でニコラは凍りついた。

「あ、悪い。冗談が過ぎた？」

笑ってみせても、凍りついた空気は変わらなかった。

「レオンが誰の子供であろうと、俺たちは変わらない。知ったところでどうこうするわけでもない。」

エリオはニコラに助け舟をだしたつもりだった。

「皇位継承権は皇女殿下が一位で、あとは先の皇帝の親族になる。表に出てこない皇位継承者がいるとなれば、レオンやジリアンもその可能性を否定できない立場ではある。」

「え？ジリアンも？」

「馬鹿か、話聞いてなかったのか。」

ステファノに言われてニコラは齒軋りをしてにらんだ。

「僕が皇位継承者として証明されればセイラも該当者になってしまふ。それはあり得ないよ。」

テオはため息をついて、みんなの顔を見渡した。

「確証はない。証拠がないわけじゃないが、皇帝がレオンのことをどのようにしようとしているかがわからないだけだ。」

「この重大さは把握しておいたほうがいい。どういう方向性で狙われるかわかっていないと身は守れない。」

ステファノの言葉にジリアンは思った。自分自身だけでなく、レインも命が狙われたことを。

「まあ、まずは、北の地方で情報を手に入れてから、作戦を練るところからだな。」

全員がなんとなく頷いて、理解したかのようだった。

突如、けたたましくサイレンが鳴り響き、ステファノはリーダーを確認しながら、通信を開始した。ニコラも自動操縦にしていた席にもどり、リーダーを確認した。リーダーにはかなり先に大型空挺が近づいてきていることを示していた。

「なんだ、これは。」

「どうした？」

ニコラがリーダーを確認して機体の詳細をつかもうとしたが理解

できずにいた。テオがそばによりレーダーを確認すると、大型空挺の周りにエアジェットが数機飛行している様子が伺えた。

「もしかしたら。」

テオは機体が飛行する並び方であるフォーメーションを読み取って、ある人物を思い浮かべた。

「キャプテン・テオ。一方的ですよ、取調べをすると行って来てます。」

「相手はいつたい……。」

「オレンジローズです。」

「やっぱり、皇女殿下を抱えた空挺か。」

第三十五章 二こころ模様 1 (後書き)

登場人物

- レイン⇨スタンドフィールド(主人公・愛称レイニー) 18歳
- ジリアン⇨スタンドフィールド(主人公の弟<従弟>・愛称ジル) 16歳
- レオン⇨ゴールドデンローブ(ホワイトソードのクルー・救護) 17歳
- ステファノ⇨ジュリアーニ(ホワイトソードのクルー・通信士) 26歳
- テオ⇨アラゴン(ホワイトソードのキャプテン) 45歳
- エリオ(ホワイトソードのクルー・エンジニア) 29歳
- ニコラ(ホワイトソードのクルー・操縦士) 25歳
- コリン⇨デミスト(レインの友人) 18歳
- イリア(白髪の少女) 19歳
- デューク⇨ジュニア⇨デミスト(現グリーンオイル財団理事長) 41歳
- セイラ⇨デミスト(セシリアとデュークの娘。) 8歳
- セリーヌ⇨マルキナ(デューク⇨ジュニア⇨デミスト理事長の第六秘書) 29歳
- エミリア⇨サンジョベーゼ(オレンジローズ・皇女殿下の直属の部下・少尉) 20歳
- ウィンディ⇨ゴールドデンローブ(軍医)
- マルティン・デ・ドレイファス(コン・ラ・ジェンタ皇国の皇帝。セシリアの実兄。) 40歳
- フェリシア⇨ドレイファス(皇帝の第一皇女。オレンジローズ副艦長) 20歳

鮮やかなライトグリーンに白いラインが入ったエアジェットとグレイのエアジェットの2機がホワイトソードに近づいてきた。それぞれの機体から一人ずつ、ホワイトソードに乗り移った。ホワイトソードの操縦室から、甲板が見える位置に、キャプテンのテオが待ち構えていて、クルーたちは様子を見守っていた。

「ご無沙汰しております。テオ、アラゴン殿。オレンジローズ空挺部隊副隊長中尉フランコ、ボルジです。」

グレイの機体から降り立った軍人はテオに直立不動で挨拶をした。「ご苦労様です。こんなところで会うことになるうとは思ってもみなかったですがね。」

フランコは後方に控えたもう一人に挨拶を促した。

「おなじくオレンジローズ空挺部隊の隊員であります、少尉エミリア、サンジョベーゼです。」

「あなたのことはよく存じ上げてます。お父上はさぞかし、自慢のご息女の活躍を喜んでいらっしやることでしょう。」

「いえいえ、とんでもありません。なにひとつ親孝行のできていない娘です。」

「謙遜を。」

オレンジ色の操縦士着用の軍服に身を包み、毅然とした態度で接する姿のエミリアをテオは目を細めてみていた。

「早速、用件を。取調べと言っても、航路許可申請の確認をさせていただきますただけです。」

エミリアは簡潔に詳細を述べると、手元にあるファイルを広げた。同じく、テオも手にしていた書類を提示し、要求どおりにした。

中尉のフランコはホワイトソードの外観を注視していた。操縦室が目に入り、質問をした。

「アラゴン殿、クルーには少年たちがいるのでしょうか。」

テオとエミリアはフランコが見上げている方向に顔を向けた。

「はい。資格を持った少年たちですよ。」

エミリアはその少年たちのなかにジリアンの姿をみて、驚いた。

「アラゴン殿、スタンドフィールドの人がいらっしやいますが、なぜですか。」

「なぜといわれても。」

エミリアは書類に目を通し、ホワイトソードがパトリック・クロス商会の所有物であることを確認した。

「スタンドフィールドがどうかしたのか、少尉。」

「あ、はい。パトリック・クロス商会の空挺でありながら、スタンドフィールドドックの人たちが乗船しているからです。」

「それはですね。ロブ「スタンドフィールドからしごいてもらおう頼まれたものですからね。」

フランコもエミリアが手にしている書類を覗き込んだ。目を通して納得した様子だった。

「アラゴン殿もどういった関係でパトリック・クロス商会とつながりをお持ちですか。」

「いえ、なに、ガラファンランド・ドックでは、クロス商会の空挺が出入りすることもありますよ。」

「それはそうですが。あまり、いい話を聞かないものですから。気をつけられたほうが。」

「ご忠告ありがとうございます。オーナーのシモンにも言われています。ドックに閉じこもっているより、こつやって、空を飛んでいるほうがわたしには気が楽なものですからね。」

「そうですか。」

二人の会話をよそに、エミリアは操縦室をずっと見ていた。見えていたのはジリアンと見知らぬ少年と黒髪の青年。エミリアはレインの姿が見当たらないのを不思議に思っていた。そんなエミリアの様子を察してテオは口を差した。

「少尉はたしか、スカイロードの訓練でスカイエンジェルフィッシ

コ号のクルーと一緒にしたね。」

エミリアはテオの言葉で我に返った。任務と関係ない思考にとらわれているのに気がついた。

「ええ、そうです。」

「気がかりなことでも、ありますか。」

「いえ、そんなことはありません。」

テオは少しいじわるなことを言ったと思い、口をつぐんだ。中尉のフランコは何を言わないとしているがわからないわけでもなかった。思い出したように言った。

「ああ、そうだね。少尉はスカイエンジェルフィッシュ号の出發式に参加して黒衣の民族にスタンドフィールドの少年たちと襲われたんだ。」

エミリアはそのときのことを思い巡らされた。銃弾を受けたレインの鼓動が弱弱しくなりただ抱きしめることしかできなかったあの時を。

「レイン君でしたら、元気ですよ。なに、レテシア「ハートランド」の息子なんですからね。」

「ほう、レテシア殿の。それは頼もしいですね。母親にそっくりな少年だと聞き及んでますよ。」

「そうです。将来が楽しみな少年のひとりです。」

ふたりは上を見上げた。そこにはレインの姿はなかったが、ほかの少年たちも将来が楽しみなのだろうと、フランコは思っていた。

「取調べは以上です。特に問題はありません。中尉、そろそろ退却いたしましょう。」

「そうだな。アラゴン殿、お手数かけしました。」

「いえいえ。お勤めご苦労様です。」

操縦室では、ニコラが操縦桿を握り締め、ステファノ、ジリアン、レオンが甲板を眺めていた。レオンが実況中継するような物言いで甲板の様子を報告していた。レインは甲板に降り立ったエミリアの

姿をみて即座に操縦室から消えていた。

「あれが、エミリアか。へえ、結構な美人じゃないか。」

「美人がどうかしたのかい。」

「いや、なんでもない。」

ニコラには関係ないとばかりに、ステファノはあしらった。

「どうして、レインはいなくなっちゃったの。」

「うん、ちよつといろいろあったからね。」

レオンの問いにジリアンはニコラを振り返り、返答を洩った。

「まあ、いいけど。なんだか、僕たちを見ているようだけど、レインを探しているんじゃないのかな。」

「レオンもそう思う?」

「うん。」

「相思相愛?」

ステファノの小声でいう言葉にニコラはニヤニヤしながら、聞いていた。だいたいの検討はついていたので、差しあたって突っ込んだことをしなくてもいいだろうと思った。

レインは部屋に閉じこもっていたが、その部屋の窓からエアジェットが去っていくのが見えた。エミリアが操縦する機体を見て、思い出したかのように荷物から、スカーフを取り出した。緑の白いラインが入ったものだった。

スカーフを握り締めていると、走馬灯のようにところのなかをエミリアへの想いが駆け抜ける。ところが苦しいのは、想いが伝わらないことへの自分の至らなさか。辛いのは、想いを伝えられない自分の弱さか。好きだと認めることさえできない自分の幼さを痛感して、苦しむだけ。人を想うことの苦痛から逃れるようとするのは、自分自身が未熟で弱くて、楽観的なものしか認めようとしなないからだろうか。

レインのこころは揺れた。もう、会うこともないと思っていたエミリアがこのホワイトソードに乗りこんだ。姿さえ見る勇気がないままに、逃げてしまった自分のこころの弱さに気づき、こんなことでは、この先やっていけないと自分に憤りを感じた。

「強くならなきゃ。でなきゃ、好きになっても思うだけで、僕自身を見てくれない。認めてくれない。」

つぶやいた言葉を自分に言い聞かせて、部屋から出た。

レインの決意とは裏腹に、クルーたちはエミリアの気持ちを探っていた。

「まあ、だいたい察しはつくよ。彼女がレインに気があるのはわかる。しかし、なにか壁がある感じがするね。」

「ほう、ステファノ男爵は何を思っただんなことをおっしゃる。」

「男爵ってなんだよ。」

「はは、知らないのかい。プレイボーイの代名詞なんだよ。」

「そんな大衆流行小説を持ち出すなんて、らしくないね。」

「らしくなくて、結構。ってか、気があるってどうしてわかるんだよ。」

「キャプテンから聞いただろう。ジリアンの姿をみて『スタンドフイールド』の名を出した。」

「それで？」

「本命レインの名を口にしたくなかった。」

「姿みてないんだから、別に……。」

「レオンも言ってたけど、レインの姿を探していたと思う。」

「ギリアンの言葉に周囲はためいきをついた。」

「女心って、わからないもんだからなあ。どうだ、ニコラ。」

「あたしに聞いてどうする。エリート空軍操縦士のお嬢様の気持ちなんてさ。」

「エミリアの気持ちを計ってどうしようという気持ちがあったわけじゃない。レインが滅入っている姿をみたくないだけだった。」

「エミリア少尉の壁ってのは、心当たりがあるんだ。」

「ギリアンの言葉にみんな集中した。」

「エミリア少尉がスカイロードでルームメイトだったフェリシア皇女殿下がレインにその……。」

「レインに？」

「高級時計をプレゼントしているんだ。」

「ええ!？」

「一斉に驚いたと同時にみんな納得した。」

「つまり、友情に遠慮しているってこと？」

「ニコラは知った口をきいたが、周囲の反応はなかった。」

「さてよ、さてよ。皇女殿下って婚約者がいてたはず。」

「ステファノは時事ネタに詳しいので思い出したように言った。」

「それなら、エミリア少尉にも婚約者いてるよ。それでへこんでるんだ、レインって。」

「はあ〜ん。」

「勝ち目のない相手か。」

「さあ、よく知らないけど……。」

「ギリアンは振り返ってテオの様子をみた。テオなら、エミリアの婚約者のことに詳しいだろうと知っていたからだ。その目線を感じてステファノは言った。」

「キャプテン、サンジョベーゼ少尉の婚約者を存じてますかあ。」
地図を拡げて見入っていたが、みんなの会話は耳に入っていた。
すこし反応をしたものの、また地図に集中して言った。

「エリート軍人だが、一般の出身で後ろ盾欲しさに婚約したんじゃないかな。將軍の肩書き欲しさだという話を耳にした。」

「ジリアンは目を細めて、憤りを感じた。」

「親馬鹿ばかり。」

「ばっかりとは？」

「皇帝も親馬鹿だと思う。」

「ジリアンに聞いたレオンも心なしか穏やかじゃなかった。」

「レインの気を引くためにブルーボードっていうダイヤモンド加工された翼のエアジェットを手配したんだ。」

「へえ、それはまた。じゃ、皇帝も容認してらってわけ？」

「さあ、レインのお母さんであるレテシアさんが皇帝のお気に入り
の操縦士だと聞いたことはあるけど。」

「ジリアンが言ったことでステファノはつかさずテオに質問した。」

「キャプテン、そうなのですかあ。レテシアさんが皇帝に気に入ら
れたという……。」

「そうだ。」

「ひゅ。」

「なんだか、入り組んだ関係だね。」

「大衆小説より、面白そうだな。」

「クルーたちがにぎやかに話をしていることに、テオは水を差した。
「人の気持ちは周囲が計れるものではない。」」

「もちろんですよ。」

「つべこべ言っても、本人同士の問題だ。もうすぐ中継ポイントの
空港に着く。準備をしなさい。」

「はあ、いい。」

「了解、キャプテン。」

クルーたちが持ち場でやるべきことをし始めると、レオンはテオ

のそばに寄った。

「なにかあるのか、レオン。」

「皇帝は皇女殿下を溺愛しているのですか。」

「そうだな、誰がみても。」

「それって、命取りになりませんか。」

「大丈夫だと思う。オレンジローズは皇女殿下を抱えての大型空挺空挺そのものが警護部隊になっている。」

「それって、どこに襲われても万全であることをアピールしているようなものですか。」

「うむ。それと、皇女殿下が副艦長として任務についているが、自身も弱い存在ではないとアピールしているらしい。」

「そうですか。」

レオン自身は、皇女殿下に対するイメージを持っていた。こちらが思っているより立場上大変なのだと思ったと同時に、その思いがエミリアにもあるとしたらと考えた。

「友情じゃなくて同情なのかな。」

「うん？なにか言ったかな、レオン。」

「いえ、何でもありません。僕も持ち場に帰ります。」

苦笑いをテオに向けて、レオンは操縦室から出た。出た際、レオンに出くわした。

「大丈夫？」

「なにが？」

「いや、急にいなくなったから、具合でも悪くなったのかと。」

「ううん、別に。」

他愛もない会話に二人はお互い何を考えているかわかっていると聞いたげだった。

「レインは皇女殿下に会ったことがあるんだよね。」

「うん、そうだけど。」

「どんな女性かな。」

「どんなって……。」

レインは正直言つて皇女殿下に気がないので、どんな女性かと問われて言葉に表せないでいた。

「ジルから聞いてない？」

レインが自身無げに聞くと、レオンは苦笑した。

「わかつたよ、ジルに聞くよ。」

レオンが去っていく後姿をみて、レインは罰が悪いなと思った。

「キャプテン。」

「何だ、ニコラ。」

「このコースでいくと、アナキャンポ空港には1時間で到着であります。けど……。」

「けど？」

「先ほどの空軍部隊も駐屯するんじゃないですかね。でかいですよ、この空港。」

「はあ、そうだなあ。」

ニコラは舌を出して、ステファノに合図した。ステファノは、リーダーをみていて、オレンジローズの大型空挺の進路方向の予測ラインを出した。

「波乱でもおきそうかな。」

「起きるだろ。」

二人の会話に嫌気が差していたジリアンはイライラをつのらせた。そんなところへレインが操縦室に入ってきた。

「ジル、交代するよ。」

言い知れぬ空気が漂って、視線を感じたレインは周囲をみて、きよとんとした。

「なにか？」

「いや、なんでもない。」

ステファノはそういつてレインの気をそらそうとしたが、テオは渴を入れるために言った。

「アナキャンポ空港に入るが、オレンジローズも駐屯する模様だ。」

相手が皇女殿下護衛の軍の部隊といえども、こちらの本質の行動を悟られないようにこころして当たるように。」

「了解！」

みんな一斉に返事したものの、レインはその後、驚愕した。

「え?! 駐屯するの?」

ステファノとニコラはレインたちと一緒に外出したい気持ちが強かったが、そうしなかった。面白がって付き添っても大人気ないと思っていたからだ。

「俺は用事があるから、別行動とらせてもらおう。」

「そうか、出発までにはもどってくるんだろうな。」

「もちろん、キャプテン。しばらくはホワイトソードで待機しているよ。」

ニコラは、必需品の購入があるからと、エリオを従え外出すると言った。テオは着陸の際、手続きの不手際があったと呼び出されたと出て行った。

そんな折、空港の司令室から通信が入った。ステファノが受信して返答すると、ニヤニヤと笑いながら言った。

「レイン、お客さんだつてさ。」

「僕に？」

「ああ、コーネリアス嬢がゲストルームで待つてるつてさ。」

「はあ?!」

コーネリアスがアンキヤスポ空港に来ていることなど知らなかった。手紙のやり取りは続いていたが、先日出したのはホワイトソードでの仕事のことを綴った手紙でそれからの返事はまだなかった。

「会いに来るつてよつぽだな。」

レインは不可解な感情しかもてなかったが、頭によぎったのは、こんなときに限つてという言葉だった。振り返るとジリアンは首を振っていた。一緒に行きたくないのだ。レオンは救護室にいて荷物物の整理をしていた。苦みばしった顔をしているレインにステファノは言った。

「レオンとゲストルームに行ってくればいい。あいつも買出しをしないとだめだと言つてたから、逃げ出したくなつたら、それを理由

に居なくなればいいさ。」

ステファノのアドバイスに安心感を得たのか、レインは顔色を良くしてた。

「ありがとう、そうするよ。」

レインが出て行った後、ジリアンはため息を付いた。

「なるようになるさ。」

「いつものことだけどね。」

ジリアンが操縦室から眺めた外の様子は、黒い雲が集まってきて周囲を暗くしていた。離着陸場は次第に点灯し、空港内も灯り始めた。

「嵐が来そうだな。」

「レインにも嵐が来るかな。」

ジリアンは大きなため息をついて、ステファノは笑いをこらえていた。

理由も知らず、ただレインからついて来て欲しいと言われて、ゲストルームまで来たレオンは、周囲を見渡し伺っていた。もしかしたら、皇女殿下に会えるかもしれないという気持ちがそこにあったからだ。

「レイン!!!」

大きな声で叫び近づいてくる少女がいた。レインは嫌な顔をしないようにと努力していて、レオンは予想も付かない展開に驚いていた。

「やあ、コーネリアス。久しぶりだね。」

「久しぶりだね、じゃないわ。頂いた手紙を読ませてもらって、きちんとお会いして忠告させてもらおうと思ったの。」

言われたことに対して疑問符しか頭に浮かんでこないレイン。レインの腕を必死とつかんだコーネリアスはレインの後方にいてる人物に気が付いた。

「ホワイトソードのクルーの人かしら。」

「ああ。レオンって言うんだ。」

「はじめまして。」

コーネリアスはレインの腕を放して、お辞儀をした。

「あ、はじめまして。」

レオンは不可解な顔のまま、少し頭を下げて挨拶をした。

「レオン。こちら、友達のコーネリアスIIアンコーナ。じいさまが作っているワインの葡萄を分けてくれるワイナリーのお嬢さんなんだ。」

「ペンフレンドのお嬢さんね。」

レオンが納得した様子に、コーネリアスは細い目で下から上へと見ていた。

「あ、レオンは看護師の資格を持って行って、救護班としてホワイトソードに……。」

「そう！そのホワイトソード！」

急に大きな声で叫び、また、レインの腕を取って、噛み付くようにコーネリアスは言った。

「パトリック・クロス商会でどうして仕事してるの？」

「どうしてって言われても……。」

レインはテオが言っていたことを思い出しながら、言葉を濁そうとした。

「パトリック・クロス商会がどうかしました？」

レオンは助け舟を出した。

「あの会社、とても怪しい会社なのよ。何をされるかわからないわ。」

「死体運びのことなら、他のところがやりたがらないから、しているだけ。」

「それだけじゃなくてよ。社長本人が人前にでないことも、怪しまれている原因なの。」

パトリックに会いに行った際、本人に会えなかったことを思い出した。

「正体不明このうえないの。あなたのような純真無垢な人がそんなところで働いてはだめなの。」

純真無垢という言葉にレオンは噴出しそうになり、両手で口を押さえて笑いをこらえた。レインはただ、苦笑いするだけだった。

「ねえ、分かつてるの？」

「いや、その・・・。」

レオンは必死に笑いをこらえて、レインの背中越しで、コーネリアスを説き伏せようとした。

「大丈夫。元空軍の少佐だったテオ＝アラゴンという方をキャプテンに、ホワイトソードは荷物を運んでいるだけなのだから。」

コーネリアスはキツとレオンを睨んだ。レオンは拍子抜けをくらったが、怯んだりはしなかった。

「あら、失礼。わたしはレインに質問しているの。」

「そうですね。これは失礼しました。」

レオンがその場から離れようとする、レインはレオンの腕をとった。無言で「行かないで。」と目で伝えようとしていた。

レオンがレインを見捨てようと思をそらし、前を向いたところへ、二人の軍人の姿が目に入った。一人はオーラを放ち凄然と闊歩する凛々しい姿の皇女殿下フェリシアだった。

フェリシアがゲストルームに目をやり、そこにレインがいるのが見えた。レインの腕にしがみつくと少女がいることに気づき、無意識にゲストルームに入ってしまった。

「ああ、レイン＝スタンドフィールドさんじゃなくて。久方ぶりかしら。」

女性の声に振り返ったコーネリアスは、そこに想像だにできないオーラを放つ軍人が立っているのにびっくりして、あわててレインの背中に隠れた。

「あ、ご無沙汰しています。皇女殿下。」

レインは姿勢を正し、深く頭を下げた。レオンはただただ、呆然と立ち尽くし、コーネリアスは『皇女殿下』という言葉に驚きを隠

せないでいた。

「皇女殿下つて、あの、フェリシア皇女殿下のこと？」

コーネリアスは小声でレインに耳打ちしたが、レインは聞こえてない様子だった。なぜなら、フェリシアの後方に軍服姿のエミリアが立っていたからだ。

エミリアはフェリシアに隠れるようにして立っていて、レインの視線を感じていた。レインは以前とは違うかなり大人の女性に見えるエミリアの姿に心を奪われていた。

「レイン、そちらにいらっしやるお嬢さんと、傍らにいらっしやる紳士を紹介してくださいださるかしら。」

「あ、はっはい。」

フェリシアはレインにくつついていて少女が気になるが、もっと気になる人物がいた。その人物は先日、デューク「デミストから紹介されたコリンにそっくりな少年だったからだ。

「えつとお……。」

レインの手際の悪さを察し、レオンは自ら前に出た。

「初めてお目にかかります。わたくしは、レオン「ゴールドンローブと申します。レインと同様、ホワイトソードのクルーでして、救護をしております。お見知りおきを。」

他愛もない挨拶をしてつもりだが、コーネリアスの顔色を伺ってみると驚きのまなざしを向けていることに気づき、見透かされているような気持ちになった。

「あ、悪いね。レオン。」

レインがコーネリアスを紹介しようと彼女を見ると、青い顔をしていた。

「だ、大丈夫？」

声をかけても、反応がなかった。

「殿下、こちらはコーネリアス「アンコーナというお嬢さんで、えつとお……。」

目が覚めたようにコーネリアスは両手でスカートを持ち、足を交互にくずしお辞儀をした。

「お目にかかれて光栄でございます、皇女殿下。わたくし、レオノール女学院の学生で、コーネリアス「アンコーナと申します。」

フェリシアはコーネリアスを見下みおろしながら、つぶやいた。

「ああ、ブライアン「レオノールね。」

震えるコーネリアスは顔を上げることができないでいた。

「社交界にはデビューなさったのかしら。」

「いえ、まだ。その……。」

「お相手がいらっしやらないってことかしら。」

コーネリアスは顔をあげ、キツとフェリシアをにらんで見せた。

「パートナーは自分で決めた相手でと、亡くなった母の遺言でしたから、慎重に決めようとおもっております。」

コーネリアスの物言いがフェリシアは気に入らなかった。相手をレインにしたいと言わないとしていることだと思ったからだ。

「皇女殿下、お時間がありませんので。」

エミリアがこの場から離れるようにと促したが、レインの顔色があまりよくないのを見て、フェリシアは「大丈夫。」と言って首を振って見せた。

「殿下、そちらの方は……。」

コーネリアスはレインの視線がエミリアに釘付けになっているので、問いかけた。

「わたくしの直属の部下で、エミリアはサンジョベーゼ少尉。エアジエツト操縦士よ。」

エミリアは小さくお辞儀をして挨拶をし、コーネリアスも同じようにした。フェリシアもコーネリアスもレインがエミリアに釘付けになっていることがわかっていた。フェリシアはエミリアの腕をひっぱり前に出した。困惑気味にフェリシアをみると、ウインクをされた。

「レインに言葉をかけてあげて。」

小声で耳打ちされて、仕方なく、エミリアは言葉を掛けた。

「レイン、久しぶりね。ずいぶん背が伸びて、私より高くなっちゃったわね。」

レインは頬を赤らめて、「そうですね。」と自分の手で頭上を撫でた。

「あら、背だけじゃないわ。体格も立派になって。」

フェリシアはレインの顔色がよくなってホッとした。心なしか穏やかでないのはコーネリアスで、レインの様子を見て、エミリアの存在がどのようなものか理解できた。

「体は鍛えてます。怪我をしないように。」
「でもね、危ないよう目にあわないように行動していれば、怪我はしないとおもっの。」

エミリアはレインに釘を刺したかった。レインは下を向いた。ところがギョツと締め付けられるような思いがした。フェリシアはエミリアのわき腹を抓った。

「そんな嫌味を言わなくても。」
「嫌味じゃないわ。忠告しているのよ。」

二人の小声の会話が気になっていたのは、コーネリアスだけではなく、レオンもその様子を観察していた。

（なんだ、この女の闘いみたいな会話……。恐るべしだな。）
こういった光景を目の当たりにしたのは初めてだった。レインを助けるべきか、見捨てるべきかと考えてみたが、別段レインが悪いというわけでもないの、フェリシアがここを去らないのであれば、こちらがと思った。

「レイン、悪いが、買出しの時間がなくなってしまう。ここにいるか、それとも僕の手伝いをしてくれるか。」

レインは目が覚めたように真顔になり、首を何度も振った。コーネリアスに「手紙をまた出すから。」と言葉をかけた。

「すみません。今日中に用事を済ませないとだめですから、失礼させていただきます。」

フェリシアに向かって、深くお辞儀をすると、レオンの腕を引っ張って、その場から走るようになくなった。

啞然としたコーネリアスをよそに、エミリアは同じく呆然とするフェリシアの腕を取り、立ち去ろうとした。

「失礼させていただくわ、コーネリアス嬢。レインをよろしくね。」
エミリアは笑顔を傾けて言った。コーネリアスは不可解だったが、

黙ったままでいた。

(『レインをよろしくね。』ってどういうことかしら。)

まるで元恋人が新しい恋人に声をかけたみたいだなの方に思えて、コーネリアスは唇を噛んだ。その様子をエミリアに腕をとられ振り返りつつ、確認したフェリシアは言った。

「笑顔の素敵なレインにかまう女の子ってたくさんいてそうだね。」

「殿下、わたしたちには関係ないことです。」

「そうね、恋愛したいという期間は過ぎてしまったのね。」

軍服に身を包み、自分たちが置かれている立場をわきまえ、スカイロードを卒業したときに振り切ったはずの乙女心。まだまだ、遣り残したことがあるように思えて、フェリシアは寂しく思っていた。

一方エミリアはレインの煮えきれない態度が全然変わっていないことに苛立ちを感じ、振り切った気持ちはまだこころにくすぶっていて揺れ動いている自分に怒りを覚えた。

(自分自身を傷つけたのは、相手を傷つけないためだったはずなのに。)

エリオとニコラは人気のない暗い路地へと歩みを進め、消えたり点いたりする電光看板のある店のドアを開いた。中は薄暗くて所々にオレンジ色の灯りがついた丸いテーブルがある店内で、二人は前から知った様子で奥へと進んだ。奥にはカウンターがあり、スキンヘッドのバーテンダーが二人の姿をみて、グラスを磨いていた手を止め、胸元から紙切れを差し出した。エリオは肘をカウンターにつき、紙切れを手に取った。バーテンダーは二人に赤いカクテルを用意して出した。ニコラはグラスを手に取り、カクテルをゆっくりと回し、炭酸を抜いていた。

「炭酸苦手だったかな。」

「滅多に來ないから、知らなくて当然。」

バーテンダーの言葉にそ知らぬ顔でニコラは天井を仰いだ。

(野郎どもと、用もないのに、來るわけがない。)

ニコラは視線をエリオに向けた。

「何を？」

「『準備万端。計画実行する。』それだけ。」

「あたしたちって、計画を反対していたわけじゃないけどね。」

「ニコラ、今、あのときの気持ちのまままでいてるか。」

ニコラの視線はまた天井を見て、そして目を閉じてため息をついた。

「パトリックはわかっていたんだね。あたしたちの気持ちが揺らぐの。」

「ああ。馬鹿な振りをするのは楽しくないが、騙すのはもっと楽しいやない。」

「あたしたちはうまくやっていると思うよ。でも、あの子たちを騙すのは気が引ける。」

「パトリックが危惧していたのは、やっぱりレテシアの息子のこと

だろう。」

「会ったことがなくても、レテシアを見ればわかるもんね。」
「今度はエリオがため息をついた。」

「いや、あれは演技じゃなくてほんとうに憧れていたんだ。」

「はいはい。」

ニコラはカウンターに両肘をつき両手でグラスを握り締めて、カクテルの泡がなくなったのを確かめた。

「炭酸抜けたら、爽快感が無くなるんだぜ。」

「喉越しが悪いカクテルだったわけ？」

バーテンダーは口元に笑みをうかべて言った。

「血の味がするからですよ。」

空港は豪雨になり、激しい雨音がホワイトソードに響いた。操縦室のなかに冷気が漂い始めて、ステファノは身震いをした。ジリアンは苛立ちから足を小刻みに揺すっていた。

「さつき、二人は戻ってきたから、もうすぐここに……。」

ステファノの言葉でジリアンは睨み返す。その態度にステファノは呆れた。しかし、操縦室に入ってきたのはレオンだけだった。中に入ったとたん、二人は言った。

「レインは？」

「ベッドの部屋に直行。」

ジリアンは口にしなかった。外は豪雨。レインのこころのなかも激しい雨が降っているのだと。

「じゃ、予想通りに。」

「ああ、みごとに。二人があらわれた。神様がいるなら、意地悪だね、ほんと。」

「で、三つ巴？」

「うん。」

レオンは不可解な顔をしながら、こころのなかで皇女フェリシアに会えたことを喜んでいた。

「レインにまとわりつく不運ってやつなのか。」

「ジリアンは副操縦士用の椅子に音を立てて座り込んだ。ステファノとレオンはただ驚いていた。」

「レインは優柔不断なんだよ。煮え切らないといつかなんと言っただから余計に付け込まれる。」

「まあ、無理も無い。」

「なにが？」

「ほんとうに人を好きになるといつか愛するといっつかどういっつか理解できていないからだ。」

「へえ〜。」

レオンは関心して見せたが、ジリアンはそうじゃなかった。

「ただ、傷つきたくないだけなんだ。」

「まあ、そうだな。」

「ジリアンは握りこぶしをつくって、レインへの苛立ちから冷静になろうとした。そして、思い出したかのようにつぶやいた。」

「あの二人にあったコーネリアスはどうしたの？」

「ああ、皇女殿下の威圧感に最初震えていたみたいだけど、あとは毅然とした態度とってかな。」

「威圧感？」

「ああ、なんていうかオーラが出ているって言うか。『わたしは皇女フェリシアなのよ。』って感じ。」

「ジリアンもステファノも不思議だというような顔をするしかなかった。自分で言った言葉にレオンは苦笑した。」

「ああ、なんか、言い表すことできないや。」

「コーネリアスは大丈夫かな。」

「逃げるようにして去ったから、様子はわからないけど。エミリアさんの存在もなんとなく分かったんじゃないかな。」

「ステファノはジリアンの肩をポンと叩いた。」

「なる様にしかないさ。」

「これでコーネリアスも危機感を感じるかな。そういや、どうして

レインに会いに来たんだ？」

思い出したようにレオンはコーネリアスの開口一番に言ったことを話した。そのことでステファノ自身が不可解に思っていたことがあり、その情報を手に入れようとしていたが、そのことを二人には話さなかった。

「大丈夫、キャプテン・テオがいるから。」

そう言って、ステファノは二人の肩を抱き寄せた。

ベッドにうつ伏せて泣き続けていたレインは打ちひしがれていた。想いを断ち切ろうと思っていた。叶わぬ想いだと確信していたからこそ、好きだという気持ちから目を背けていた。ただただ、はつきりしない態度でいる自分に煮え切らない思いがつのった。

（何、泣いているのだろう。そんなに弱くてどうするんだ。）

自分に叱咤しつたしたところで強くなれるはずもなく、うつ伏せから起き上がり、ベッドから出た。そして、窓に歩み寄り、外を眺めた。豪雨の様子を見て、気持ちが余計に重たくなった。

「いっそ、好きだと言って、失恋したほうがすっきりするかな。」

考えたそばから首を横に振り、うな垂れた。

「そんな勇氣無い。」

キャプテン・テオは書類提出が不良ということで呼ばれたが、実質はオレンジローズで任務についている元同僚が呼びつけたのだった。元同僚はテオにパトリック・クロスについての忠告と軍内部の派閥争いの情報を与えてくれた。パトリック・クロスについてはガラファウンドランドのシモンに言われたことと似たようなもので、派閥争いの情報は皇帝排除派にグリーンオイル製造会社が絡んでいるということだった。社交界に顔を出している皇女殿下の婚約者は皇帝排除派から一線を隔していたが、いろいろな面で資金を都合しているのはグリーンオイル製造会社だという話を持ち出し、皇帝排除派と裏で繋がっていると耳打ちした。

「皇女殿下の様子はどうなんだ。」

「至って毅然とした態度をとっているが、内心は心細いだろう。慣れ親しんだ宮殿が破壊され、皇帝の命が狙われたという事件は殿下にとっても障りがあると思われる。」

「では、サンジョベーゼ少尉が殿下のそばについているのは、心の支えのためか。」

「おそらく。皇帝排除派は快く思っていないだろう。將軍の娘だからな。」

「少尉の婚約者で少佐はどうなんだ。」

「優柔不断。使い物にならないというのが、本心だな。頭脳明晰・沈着冷静は見せ掛けで、うわべでものを言ってるのはい目瞭然だから、した者は見下しているものが多い。」

「典型的な成り上がり者か。」

「世渡り上手のな。」

「將軍はまた、なぜそのようなオトコを。」

テオのぼやきに、元同僚は手を口でふさぐように言った。

「なにか思惑があつてのことかもしれない。」

「思惑？」

「皇女殿下の婚約者は暗愚。殿下に付き従う娘を愚かなオトコに嫁がせるようにしておけば、余計なことをしてくれなくて済むかもしれない。」

「そういうことか。」

「血気盛んな若造に嫁がせると苦勞することもあるからな。」

「テオは黙ってうなづいた。脳裏によぎったのはロブ＝スタンドフイルドだったが。」

「まっ、そんなことは將軍の心のうちを読んだわけじゃないからな。」

「そうだろうとも。」

日が暮れ夕闇が迫った頃、雷雨はおさまり小雨になっていた。傘もささず手荷物ひとつもたずにステファノはホワイトソードから降りたち、空港ターミナルに向かった。腰に黒い布を巻いてロータリーの端に突っ立っていた。しばらくすると黒いオフロードのエアカーが近づいた。ドアが開いてひげの濃い男が顔を出した。

「よう、色男。ひさしぶりじゃないか。」

「あんたも好きだな。」

「俺の気をひくためにそんなことをしてるんじゃないだろ。」

ステファノは腰に巻いた布を触った。

「もちろんだ。ほしい情報を手に入れるためだ。」

「乗れよ。」

男が奥へ引つ込み、ステファノはドアに手をかけエアカーに乗り込んだ。オフロードのエアカーはロータリーを一周すると空港から離れていった。

「ほしい情報って何だ。」

「店についてからだな。というか、言われてるんだろ。俺に手を出すなって。」

「ふっ。もちろんだ。ボスが掛けに負けたんだからな。」

「あと、武器とか調達できそうなルートを教えてほしい。」

「誰をパトロンにだ。あのオンナは死んだんだろう。」

ステファノは黙ってうなづいた。髭の男はにやりと笑った。

「金の交渉はあんたのボスに会ってからだ。」

ステファノは髭の男のボスとの出会いを思い出していた。護衛の仕事で女性ジャーナリストと共に行動していた時、情報を得るためにファイティングゲームに参加しなくてはいけなくなった。力技に自信がなかったが、刃物などの武器を使わないで身体を武器に闘うということに参加し、勝ち続けた。最終的に相手にしたのが巨漢で攻撃力は無くてもその防御力はコンクリートの様に硬く頑丈だった。ステファノが得意とする足技も攻撃すると骨に響くくらいに痛みが走った。巨漢は攻撃し続ける相手が疲弊して弱りきったところへ体当たりしてKOするのが手口だった。相手はステファノが力尽きるまで微動だにしない。その様子をジャーナリストは壁にもたれかけ腕組みをしてただ見ているだけだった。ステファノ自身が未成年のころから目をかけて護衛の仕事が一人前にできるよう育てられてきた。恩返しというものじゃない、ステファノに投資してきたものが無駄じゃないと証明するためにも、このゲームに勝利しないとだめだった。最後にステファノが捨て身で思いついた技をかけることにした。巨漢の肩に乗っかり両足でヘッドロックをかけて、振り返って自身は両手を地面につき、巨漢は頭上を地面に打ち付けられてダメージをうけた。足技による力技だったが、少しだけダメージを受けた様子に、即座にエルボドロップをかけてみぞおちにダメージを与えた。念のためにかかと落としもかけ、巨漢は気を失った。ファイティングゲームに勝利し、情報を得るだけでなく、ステファノ自身を彼らのボスのテリトリーでは誰も手出ししないという約束までしたのだった。その交渉はジャーナリストがステファノへのご褒美としてみせた交渉術でもあった。ジャーナリストの愛情を受けて自身が強くなってきたことを改めて認識した。窓をずっと眺めいて、ステファノを乗せたエアカーは暗闇が続く砂漠の道突き進んでい

つ
た。

空港のゲストルームにレオンは治療箱を片手に持って現われた。そこにステファノが座って待っていた。

「お待たせ。」

ステファノが顔をあげて、レオンをみた。

「どうしたんだよ、その顔。」

頬が青く晴れ上がり、目の下に傷があった。

「だから、レオンを呼んだんだ。」

「だけど、ウインデイの名を使わなくても。」

「それは悪かったよ。ほかに思いつかなくて。」

ホワイトソードへの連絡で空港からレオンの客が来ているとあった。名前はウインデイ。そのことを聞いたジリアンはおかしいと思い、性別を確認した。男性だったが、レオンに聞くと、しばらく考えていた。ステファノがもどってきてもおかしくなかったのだからあるのだらうと思ひ、治療箱を持ってゲストルームに向かったのだ。

「しかし、用意がいいよな。それ。」

ステファノの目線の先に治療箱があった。レオンは治療箱を開け、ステファノの手当てを始めた。

「ウインデイの名を出したんだ、怪我でもして、こっちに入ってくれないんだらうと思つたのさ。」

「ご明察だな。」

「勘はよく働くんだよ。」

ステファノは目を閉じて、レオンの手当てを受けていた。終わった様子に目を開けると、レオンの後ろに誰か立っているのに気がついた。何も言わずに視線をレオンの後ろに向けていると、レオンが気がついて振り向いた。そこにはエミリアがたっていた。

「レオンさんですね。ホワイトソードに問い合わせかけると、ここ

にいらつしやるといわれたのです。」

驚いて立ち上がったレオンだが、不思議に思つて、言葉がでてこなかった。

（僕に用があると思えないのだけど。）

ステファノから肘でつつかれて、あわてて言葉を口にした。

「僕になにか用ですか。」

「唐突で申し訳ないのですが、レオンさんの素性を知りたいのです。」

開いた口がふさがらなかつた。それはステファノも同じだつた。

「それはほんとうに唐突なことですね。サンジョベーゼ少尉。」

レオンの言葉にステファノは反応した。

（彼女がエミリアか。）

「実をいうと、皇女殿下から仰せつかつたのです。」

「あ、待って。そのようにかしこまって話しされなくてもいいですよ。」

「では、レオン。あなたは皇女殿下のお知り合いに似ているそうです。」

レオンは少し考える振りをして、名を出した。

「コリンのことでしょ。」

「知っているの?」

「ええ。会ったことはないです。」

「どうして?」

「えつとお。レインの友達です、コリンって。」

「ええ?!」

「スタンドフィールドドックの近辺、オホス川周辺の街に住んでいたんだと思います。」

「あの、爆撃にあつた街ね。」

「そうです。」

ただ、驚くばかりのエミリアをよそに、レオンは治療箱を片付け始めた。

「レインとジリアンに会ったときに、似てるって言われたのですよ。」

「そう。で、あなたのご両親は？」

「僕の母はウィンディ＝ゴルデンロープで軍医をしています。父親は知りません。母の実家は病院で祖父はその院長をしていましたが、今は他界しています。」

「あなたは祖父母に育てられたということかしら。」

「そうですねえ。幼い頃、母親を知らずに育ってました。知ってから母の駐屯地についてまわったりしました。シヴェジリアンドの地を最後に母親から離れて生活するようになりました。」

「シヴェジリアンドの地も爆撃を受けた場所ね。」

「そうですね。爆撃を受ける前に、レインたちと知り合ったのです。」

エミリアは口を押さえて考え事をしていた。その様子を見て、レオンは皇女殿下フェリシアの考えていることがなにかわかり始めていた。

「唐突な質問に答えてくれてありがとう。」

「いいえ、こんなことぐらいなら。」

「それでは、これで失礼するわ。お邪魔して申し訳なかったわ。」

エミリアはレオンに手を差し出して握手で分かれようとした。

「それだけですか。」

レオンは手を出さずにいた。

「それだけとは？」

「いや、別に。」

照れくさそうに握手をして、ステファノのほうを見た。ステファノはそ知らぬ顔をした。軍服姿できびすを返すようにエミリアが去っていく姿をみて、二人はためいきをついた。

「レインはどうしてるんだ。」

「筋トレしているよ。ジリアンいわく、雨振ったあとは、激しくトレーニングするんだってさ。」

「身体を鍛えたところで、こころが強くなっていくと思っているん

「だろつな。あの弱虫め。」

「はっ。俺も、ああいう女性なら、告白したりできないかもね。」
「好みなのか。」

「まさか。任務遂行のためには恋愛沙汰はご法度といわないばかりじゃないか。」

「そんな言い方しなくてもいいぞ。隙がないといえはいい。」
「あっ、そう。」

「友情を大切にしたいと思う程度なら、たいしたことないさ。」
ステファノはゆっくりたちあがって、頬をなでてみた。

「俺は油断してしまったな。」
「殴られたこと？」

「ああ。」
「隙をみせてしまった。負け惜しみじゃないんだ。」
チラリとレオンをみて、下を向いた。

「俺のことを兄貴と呼んでなついていた子がいたんだ。別れも言わずいなくなったものだから。」

「久しぶりにあったら、いきなり殴られたんだ。」

「ああ。悪いことをしたと思ってたけど。別れを言えば、泣かれるのはわかっていたから。」

レオンは立ち尽くすステファノの背中を押した。

「ジリアンが心配しているから、早くもどろつ。」
「ああ。」

「もどつたら、根掘り葉掘り聞かれるかな。」

「エミリア嬢のことか。」
「うん。」

「ジリアンは聞かないだろう。」
「レインが知ったら？」

「ジリアンが言わないから、知らないだろう。」

レオンは納得して、深くうなづいた。ゲストルームを出て、ホワイトソードに向かっていく道すがら、オレンジローズが見えた。皇

女殿下フェリシアがレオン自身のことを知りたがっているとかわかって、なぜかうれしくなった。

（きつと、わかつているのだらう。）

日が昇る前、暗いうちに、オレンジローズは空港を離陸した。オレンジ色のライトを光らせながら、静穏で飛び去る様は、優雅に席を立つ淑女のようだった。甲板でうらめしそうに眺めていたレインは意を決したかのように、中に入り込んだ。

無言で航路を作成するニコラと、通信機をチェックするステファノで操縦室は張り詰めた空気をはなっていた。お互いがいるんな迷惑を腹にかかえて、ホワイトソードから外出した際に準備をしていた。ニコラはエリオとパトリックの命令指示通りに動くことのシミュレーションを、ステファノは何か事が起きたときに安全策として戦闘準備が即座に整う手はずをしてきた。ステファノはニコラとエリオを信用していないばかりか、彼らとは別なやつかいごとに巻き込まれるのではないかという予感があった。その隙を突かれたら、レインたちを守り抜くことができないかもしれないと思っていたからだ。

そんな二人の思惑を知らないばかりか、危機感がもてないレインだったが、出発する前に連絡が入った。それはゲストルームに手紙が届いたことだった。エミリアからの手紙だとはもはや期待していなかった。手紙を受け取りに行こうとしたが、ジリアンから止められた。

「手紙はレインだけじゃないみたいだから、僕が取りに行くよ。」

「ほかに誰が？」

「レオン。」

レインはレオンに会いにエミリアがきたことは知らない。レオンへの手紙が誰なのか、ジリアンは見当がついていた。だから、レインに行かせたくなかった。

手紙を受け取りにいくと察したとおり、レオンへの手紙はエミリアからだった。レインへの手紙はコーネリアスだった。レオンあて

の手紙を先に渡し、あとでレインに手紙を渡した。

「レオンあての手紙って、誰からだったの？」

「さあ。レオンから聞いて。」

ジリアンの言葉が腑に落ちなかったが、レオンから聞くのが筋だ
というののもっともだと思った。

レインに会って、すぐさま空港を去ったコーネリアスは、泣き続
けていた。

「悔しいわ。こんなにレインのことを心配して思っているのに、レ
インはわたしのことを見ようともしなかったわ。」

コーネリアスは彼女自身のなかで、レインの思いを強くしていた。
そして、レインが別の女性を想っている真実も知ってしまった。

「私を見ないばかりか、皇女殿下と一緒にいた女性ばかりを見てい
たわ。悲しい顔つきで。」

そばにいた執事のピエトロはなぐさめのことをかけようとはせ
ず、ただコーネリアスの話を聞いていた。

「私はあの人より、ものすごくものすごく、レインのことを想って
いるわ。大事に想っているんだから。」

ピエトロはただひたすらにうなづいていた。ハンカチを手に何度
も悔しいと口にするコーネリアスは出された食事を口にしようとし
なかった。困っていたピエトロはコーネリアスに言った。

「レイン様にお手紙を書いてはいかがですか。」

「手紙？いまさら、書いてどうするのよ。」

「お嬢様の様子を伝えなくてどうするのです。それでは相手にわか
ってもらえませんよ。」

「恨みつらみを書いてしまいたくなるから嫌だわ。」

「それでもかまいません。お嬢様の素直な気持ちをお伝えするの
です。」

コーネリアスから吐き出すだけ吐き出させないと、こころが壊れ
身体まで壊してしまうと危惧した。恨みの手紙でも書いて抜け出す

のが手段だと思っていた。

そして、コーネリアスはピエトロに言われたとおり、素直に手紙を書いた。

『悲しくて悲しくて辛いです。レインのことをとても心配しているのに、わかってもらえなかったから。』

レオンが受け取った手紙は確かにエミリアの名が書かれていた。しかし、封を切ると、中から手紙がでてきて、そこにはフェリシアの名が書かれていた。

『次回会った時には二人つきりでお話したいわ。必ず、二人つきりです。』

読んでから即座に手紙を閉じた。レオンは動揺した。

「二人つきりですか？」

冷静になろうとして、目を閉じてみた。二人つきりの意味が何をあらわしているか、わかっている。そこには皇帝の存在がないんだと。

「知りたいのだろうか。それとも、知っているのだろうか。」

皇女殿下フェリシアに初めて会い、その威厳たるものを目の当たりにして思っていた。同じ血が流れているように、同じように振舞えるわけじゃない。

「俺は俺自身。ほかの何者でもない。俺は俺の信じた、求めた道を生きるだけ。」

トランスパランスで得た自分への指標だった。

「だから、臆することなんて何もないんだ。」

手紙を白衣のポケットに仕舞いこんだ。部屋を出ると、廊下でレオンが待っていた。

「なにか用？」

「いや、手紙、誰からだったのかな。」

しばらく考えた。手紙はエミリアからだ。それを口にしたら、レオンが動揺することはわかっていた。

「皇女殿下からだよ。」

「え？」

「野暮なことは聞くなよ。」

レオンはそのまま、レインの前から立ち去った。レインは違う意味で動揺していた。

「どうして、皇女殿下から？聞くなよって……。」

あとから、ステファノに訳を聞いた。もちろんステファノはエミリアの名を口にしなかった。

「コリンってやつに似てるんだってね。」

その一言でジリアンが言った。

「皇女殿下はコリンに会ったことがあるんだね。」

ジリアンは納得した様子だったが、レインはまだ意味不明で理解できてなかった。いつものようなことをジリアンは言わなかった。

「コリンがセシリアの息子だって知ったんだ。似てるってことは親戚だと思ってもおかしくないでしょ。」

「ああ。」

拍子抜けするような言葉が返ってきて、ジリアンは呆れていた。

「僕たちの知らないところで、いろんなことが進んでいつているみたいだね。」

ここ数年で、レインとジリアンに訪れた真実というのが数々あった。受け入れ難いものから、嬉しかったことまで。これからさきも知らされていない真実が待ち受けていても、それを受け入れるしかないだろう。

「ところで、レインの手紙は？」

ピンと張り詰めた空気が漂い、レインの次の言葉をみんな待っていた。その空気を読めずに、ただ思ったことを口にする。

「コーネリアスからで、悲しませてしまった。」

「当然だな。どうしようもない偶然が重なったが、お互いそれぞれに知らなければいけないことだっただろう。」

ステファノだけでなく、みんな同じことを思っていた。

「傷つけるつもりはなかった。自分が傷つくことを怖がってばかりいたから。」

ニコラは作業を終えて、席を立った。

「だったらさ、誰かのために強くなるうって思えばいい。自分のために強くなるうなんて、所詮強くはなれないよ。コーネリアスを悲しませないために、何も好きなるうって思わなくていい。」

ニコラはレインに微笑んだ。レインは気持ちが晴れたような気がして、深くうなづいた。

「レインが誰を想おうともレイン次第。レイン次第で誰かが傷つくなら、レイン自身の想いを貫くのが、現状を受け入れることができるんだよ。」

その言葉にあとに、レインが想っている女性が優柔不断な態度を取っていることの意味を言葉にださずに飲み込んだ。そして、レインの満面の笑みをみて、頭を撫でて、操縦室から去った。

レインは仲間がいて、言葉をかけてくれる幸せを感じた。

「そだね。悩んでばかりいたら、みんなに心配かけちゃうね。」

操縦室から出たニコラは唇を噛んで、辛さをかみ締めた。

「純粹無垢な少年たちを陥れることなんて、あたしにできるのかな。」

ニコラ自身はわかっていた。傷つけることを怖がって守ってあげても、成長しないことを。育った環境が違いすぎた少年たち、そして幾日か過ごした平和で他愛もない日々、良心が痛むのを感じていた。

「レインを餌に、あいつらを釣る。たしかに、新鮮で甘くて生き生きとした餌だ。うまく喰らいついてくれるだろう。」

あいつらのことを考えると身震いがした。身体を両手で押さえて、意を決するニコラだった。

自分の部屋にもどり、レインはコーネリアスあてに手紙を書いて

いた。コーネリアスのことを思うと、いろいろあって、心配かけてばかりいたことを思い出した。

「心配されたくないとか、書けないしなあ。」

ふと思えば、自分自身がエミリアを心配しててもおかしくなかった。エミリア自身は軍人で、危険な目にあうのは必然だから、やきもきしながらエミリアを思っている自分がいってもおかしくない。

「女の子はいろいろと心配するんだろうけど。」

だとしたら、エミリアがレインを心配することってあるのだろうか。あるからこそ、キャティナ・マウントローサ・ロツソ駐屯地で殴られたんだと。

「エミリアさんは僕のことを思ってくれてる……。」

そう思えば、こころが熱くなったが、手にしていたペンを強く握り締め、気持ちを切り替えようとした。

「コーネリアスには謝らないと。そして、心配かけないように……。」

レインは強くなれるような気がしてきた。たとえば、エミリアがどう思っているようにも、自分自身がエミリアを想うことは自由なんだと。

『コーネリアスへ。心配かけてごめん。でも、安心して欲しい。僕にはジリアンがいてるし、信頼できる仲間がいてる。そして僕は強くなるから、大丈夫。レインより。』

第三十六章 黒い森 1

夢を追って行ってしまった人
愛を忘れてしまったかしら
風のうわさも聞かなくなつて
神隠しでもあつたかしら
あまりに美しすぎて
妖精が惑わしたのかしら

その道を通れば二度ともどつてこないという
疑うところを持たないままに
楽園を夢見て行ってしまった

木々がささやき 惑わす
鳥獣が鳴き 不安を煽る
愛を失くしたばかりに
こころは痛んでしまった
そして 我を見失う

「黒い森。」

テーブルの上にひと差し指でトントンと叩いて鳴らし、ステファ
ニーはつぶやいた。

「なに、それ？」

ニコラはテーブルの上でコップから滴り落ちた水滴を指でなぞつ
てもてあそんでいた。

「ステージで歌っている曲名さ。」

「へえ。」

ステファノはニコラに背を向けていた。見ている方向はステージ
のほう。ニコラの反応を背中で感じ取るうとしていたが、生返事に

違和感を覚えた。

二人がいている場所は、夕食をしながらショーが見られる店。大柄で黒い真珠と黒いドレスを身につけオペラ歌手のソロリサイタルだった。

「レジーナ女帝の悲恋物語でアレックスを思ってたものだ。」

「詳しいんだ、ステファノ。」

様子が変わるので、振り返ったが、ニコラは今にも寝そうなくらいにテーブルに顔を鎮めていた。

「酔ってるのか？」

「呑んでないし。睡眠不足だよ。」

いつになく覇気のない様子が不可解さを感じさせていたが、その心理を探ろうとは思わなかった。

「大丈夫なのか。これから、大事な打ち合わせがあるっていうのに。」

「うん。ステファノがいるから大丈夫だよ。」

あきれた顔つきで、ニコラをみていたが、視線をよそに目を閉じた。

「このステージが終わったら、黒服が呼びにくる。ついていって、話を聞くだけ。」

ニコラは自ら志願したパトリックの命令に、いまさらながら、逃げ出したいと思っていた。

「話を聞いて、案件を持ち帰って、クルーで話あうんだろ。」

「そうよ。勝手に内容を決めてくるわけにいかない。キャプテンを連れてこないでステファノをつれてきたのは、面が割れていないから。キャプテンって結構有名人だからさ。」

ステファノはテーブルを鳴らし続けた指を止めて、酒の入ったグラスを手に取り、飲み干した。

「黒い森だ。」

ステファノはその言葉を聞いたのは、自力で手に入れようと接触

した組織のボスからだった。

「人身売買の館だ。」

ボスは腰掛けたソファから身を乗り出し、ささやいた。ステファノの顔つきが変わったのを確認したかったのだ。

「グリーンオイルの社長が、名前も素性もあかさず、隠れ家で潜めるように暮らしている。素性がわからないようにするためには、そのことを口外しない者が必要だ。」

「従業員や使用人を買うつていうことなのか。」

「ああ、それと、慰みものだな。」

ステファノはため息をついた。

「こつちが知っている情報には、ストレートだと聞いている。」

「ほう。」

「もし、両刀だとしても、ステファノはタイプじゃないな。」

「へえ。どうしてそこまでわかるんだ。」

ボスは口元をゆがませて笑みを浮かべると、指を鳴らした。奥のドアから人が入ってきた。白髪に碧眼の美青年だった。

「ジンという。黒い森に出入りしている。」

ステファノは下から上に舐めるようにジンを見ていた。タイプといわれればステファノに近い。胸の広く開いたシャツを着ているのは、首筋から胸にむかって鱗のような火傷のあとを見せ付けるためだとわかって、凝視した。ジンは視られているとわかって首筋をなでた。

「売り物にされたくなくてね。」

「根性いりそうだな。」

ボスが葉巻を手にとると、ジンは肘をついて、ライターを取り出し、火をつけた。

「エレノアには世話になった。貸しはステファノにして欲しいと言われている。お前になにかあったら、エレノアに顔向けできないからな。」

「死んだって話をしなかったか。」

「聞いたさ。」

葉巻を灰皿におき、煙をゆっくり吐いた。

「黒い森にジンがいてるから、なにかあったら、コイツを使えばいい。」

ステファノはジンのほうを一瞥すると、「有難い。」と言った。

「パトリックが、いつとき、気が狂ったように、その黒い森で子供たちを買い戻していた。」

「買戻し？」

「ああ、10年以上前の話だ。あそこは子供たちを売っていたこともあったんだ。査察が入り、子供の売買はやめたらしい。」

ロブから聞いたニコラの話が頭をかすめた。

「おそらく、社長の棲家に入入りする者が顔を出していることくらいは知っているだろう。」

ステファノは大きくうなづいた。

アナキャンポ空港からとび立ち、北の民族が生息していたであろう土地の近くまできて、手に入れたのはある人物に近づいて情報を手に入れることだった。その方法を打ち合わせするために、ステファノとニコラは店にやってきた。

「この土地柄って、北の民族が多いんですよ。」

「そうでもないさ。男どもは出稼ぎに遠くまでいき、女や子供は素性を偽るために、出身地から遠くへ行くしかなかったから。」

「黒衣の民族に襲われたんだったわね。」

「ああ、生き残ったとわかれば、抹殺されると口々に言っただけは逃げ回っていたみたいだが。」

「だが？」

「いざ、外の世界に出てみるとそうでもなかったからさ。」

「いまでも、黒衣の民族を憎んだりしてるわけ？」

「愚問だ。」

「どうして？」

「恨みなんて晴らしても仕方ない。」

ニコラはステファノの目を見た。そして、ステファノの後方に黒服の男が近づいてくるのが見えて、ゆっくりと立ち上がった。ニコラの様子に振り返り、立ち上がった。

「お待たせしました。準備ができましたので、ご案内させていただきます。」

黒服の男はそういうと、右手を進行方向へと差し出した。

「いよいよだな。」

ステファノは気合を入れていたが、ニコラは泣きそうだったが、悟られないようにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3748i/>

グリーンオイルストーリー ~空の少年たち~

2011年12月3日23時51分発行